

エクストラダンガンロンパZ 希望の蔓に絶望の華を

江藤えそら

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

◆あらすじ◆

“超高校級”と呼ばれる人材を集め、育成する学園『私立 希望ヶ峰学園』

その学園に招致された“超高校級の脚本家”、葛西幸彦は生真面目で大人しい少年だった。

だが、彼とその同級生である14人の生徒達は、謎の教育施設『希望ヶ峰学園特別分校』に拉致され、閉じ込められてしまう。

彼らを待ち受けていたのは、謎のヌイグルミ“モノパンダ”。

モノパンダが口にした特別分校の凶悪なルール…それは。

“誰かを殺した生徒のみがこの校舎を脱出することができる”

疑心、憎悪、詭弁、寵愛、狂気、義憤、欺瞞、悚然、貪戾……

遙かなる絶望の果ての果て、人間の黒き性が露わとなるとき……

ついに希望の少年少女たちは絶望の華となる。

◆注意◆

本作は「ダンガンロンパ 希望の学園と絶望の高校生」の二次創作であり、そのネタバレが多く含まれます。「スーパーダンガンロンパ2 さよなら絶望学園」及び「絶対絶望少女 ダンガンロンパAnother Episode」、小説「ダンガンロンパゼロ」についても

同様です。

また、本作はいわゆる「創作論破」と言われるジャンルに属する作品であり、本作に登場するキャラクターはほぼ全員本作のオリジナルキャラクターとなっております。

なお、本作はアニメ「ダンガンロンパ3 未来編」及び「ダンガンロンパ3 絶望編」、ゲーム「ダンガンロンパV3」が公開される前に着想・執筆を開始した作品です。

ゆえに、これらの作品に登場するキャラクターと名前・才能などの被りが生じている場合があります。予めご了承ください。

以上のことについてあらかじめご理解いただいた上で、本作をお楽しみいただければ幸いです。

目次

プロローグ 絶望ノオ時間デス

プロローグ その1 | 1

プロローグ その2 | 19

希望ヶ峰学園特別分校 生徒名簿 | 38

Chapter 1 希望の蔓に絶望の華を

chapter 1 (非) 日常編① | 51

chapter 1 (非) 日常編② | 67

chapter 1 (非) 日常編③ | 86

chapter 1 (非) 日常編④ | 109

chapter 1 非日常編① 捜査編 | 138

chapter 1 非日常編② 学級裁判編 | 159

chapter 1 非日常編③ オシオキ編 | 179

Chapter 2 Gradus

chapter 2 (非) 日常編① | 204

chapter 2 (非) 日常編② | 224

chapter 2 (非) 日常編③ | 248

chapter 2 (非) 日常編④ | 268

chapter 2 非日常編① | 290

chapter 2 非日常編② 捜査編 | 300

chapter 2 非日常編③ 学級裁判前編 | 328

chapter 2 非日常編④ 学級裁判後編 | 348

Chapter 2 非日常編⑤ オシオキ篇 | 375

Chapter 2 非日常編? 真相編 | 404

Chapter 3 俺のヒロイン達が修羅場すぎて人類が滅亡しそ

うな件。

Chapter 3 (非) 日常編① | 435

Chapter 3 (非) 日常編② | 460

Chapter 3 (非) 日常編③ | 480

Chapter 3 非日常編① 捜査編 | 498

Chapter 3 非日常編② 学級裁判前編 | 528

Chapter 3 非日常編③ 学級裁判中編 | 555

Chapter 3 非日常編④ 学級裁判後編 | 579

Chapter 3 非日常編⑤ オシオキ編 | 601

Chapter 3.5 裁判場の中心で愛を叫んだアイツ

Chapter 3.5 純愛編 | 625

Chapter 4 オチ無しサゲ無し希望無し!

Chapter 4 (非) 日常編① | 642

Chapter 4 (非) 日常編② | 664

Chapter 4 (非) 日常編③ | 690

希望ヶ峰学園特別分校 生徒名簿 (改)

Chapter 4 (非) 日常編④ | 724

Chapter 4 (非) 日常編⑤ | 746

Chapter 4 (非) 日常編⑥ | 775

Chapter 4 非日常編① 捜査編 | 795

Chapter 4 非日常編② 学級裁判前編 | 822

Chapter 4 非日常編③ 学級裁判後編 | 841

Chapter 4 非日常編④ オシオキ編 | 864

Chapter 4 非日常編⑤ ???編 | 887

Chapter 2.5 夢破れて惨禍アリ

	Chapter 2.5	敢闘編	907
	Chapter 5	愛 can do it! Can o it?	907
	Chapter 5	(非) 日常編①	927
	Chapter 5	(非) 日常編②	954
	Chapter 5	(非) 日常編③	982
	Chapter 5	(非) 日常編④	1012
	Chapter 5	(非) 日常編⑤	1051
	Chapter 5	非日常編① 捜査編	1081
	Chapter 5	非日常編② 学級裁判前編	1131
	Chapter 5	非日常編③ 学級裁判後編	1137
	Chapter 5	非日常編④ オシオキ?編	1173
	Chapter 5	(非) 日常編? 追憶編前編	1208
	Chapter 5	(非) 日常編? 追憶編後編	1228
	Chapter 6	たったひとりの最終裁判(けっせん)	1249
	Chapter 6	非日常編① 運命編	1277
	Chapter 6	非日常編② 波瀾編	1293
	Chapter 6	非日常編③ 決意編	1347
	Chapter 6	非日常編④ 再生編	1371
	Chapter 6	非日常編⑤ 収斂編	1402
	日常編的な番外編(ときどき台本形式あり)		
	楽しいSNS①		1402
	楽しいSNS②		1412
	希望の贈り人		1426
	リュウのグルメ奇譚・其之壱	〓〓郎系ラーメン	1437

リユウのグルメ奇譚・其之弐 〱牛井の極意〱

ギリギリの恋 前編

ギリギリの恋 後編

146914551445

プロローグ 絶望ノ才時間デス
プロローグ その1



都会の一等地に、まるでそこが世界の中心であるかのようにその学園は建っているという。

——『私立 希望ヶ峰学園』は、「希望」と呼ばれる高校生を集め、育成するための学園である。

入学できる生徒は学園からスカウトされた人間のみで、その条件は二つ。

現役の高校生であることと、各分野において超一流であること。

かく言う俺——葛西幸彦かさい ゆきひこも、そうした「希望」達の一員としてこの学園に招かれた。

人からはこう呼ばれている。

「超高校級の脚本家」と。



俺が最初に物語を考えついたのは……幼稚園の頃だった。

動物同士の友情を描いたような話だった気がしたが、それを気に

入った園長先生によって「お遊戯」に用いられ、それが脚本家としての俺の人生の始まりだった。

近々俺の脚本がハリウッドでも用いられると父は言っていたが、俺は自分にそこまでの才能があるとは思ってはいない。

ただ気ままに書き綴っただけの自己満足の物語を、様々な方が評価してくださっただけのこと。

そんな俺がここ希望ヶ峰学園に呼ばれるなど、少々むず痒いような気恥ずかしさも感じる。

本当に、俺のような人間でいいのだろうか？

俺の他は、皆“超高校級の”何かなのだ。

果たして俺が、俺ごときが彼らの志についていけるのだろうか？

…そんな一抹の不安は胸に秘め、俺は学園の門の前で一度深呼吸した。

「父さん、母さん、行って参ります」

意識もせずそう呟いていた。

この学園は全寮制であり、一度入れればばらくは帰れない。

俺の身勝手な生き方に文句一つ言わず、世話をしてくれた親と離れるのは心苦しいが、致し方ない。

この学園で心身ともに成長し、親に恩返しするのが俺の役目。

そして、俺の作品を心待ちにしてくださる方々のために、数々のことを学ぶのだ。

良い脚本は経験より出ずる、とは俺に脚本家のイロハを授けた父の言葉。

そう、俺は希望なのだ。

些細な不安など抱いてはいられない。

その自覚を持たねば。

一步、学園の敷地に足を踏み入れた。

さあ、ここから始まる……。

俺の……新たな……人生が……。

新しい……経験……が……。

………

宙に浮くような感覚。

ぐるぐると世界が回る。

なんだ……これは……？



「……う、ん……

混濁した意識が少しずつ研ぎ澄まされていく。

しかし、それでも三半規管の異常は続いており、体が非常に重く感じる。

自らの状態を確認してみると、俺は学校の教室のようなーというより教室そのものの空間で、机に突っ伏していた。

「え……え……う……」

解せない。

一体、何が起きたというのか。

俺は辺りを見回してみた。

教室そのものの空間とは言ったが、よく見るとおかしな部分がちらほら垣間見える。

まず第一に、教室全体を俯瞰する監視カメラの存在。

一般的な教室には絶対にならないものである。

そしてそれより異常なのは、教室の窓という窓に鉄板が取り付けられているではないか。

おかげで教室は薄暗く、一本だけ点灯している蛍光灯の明かりが唯一の明かりだった。

ますます訳が分からない。

大体目が覚めてきたところで、俺はここに行き着く直前の記憶を思い出した。

俺は確かに学園の門の前にいた。

おかしくなったのは敷地に足を踏み入れた直後だ。

訳も分からず強烈なめまいに襲われ、目が覚めればここだ。

悪寒が背を走った。

考えれば考えるほど分からず、不気味な状況だった。

同じ場所に留まっても仕方がないので、俺は教室を後にした。

出た場所は、教室と同じように窓に鉄板が張られた廊下だった。

教室と違って全ての蛍光灯が点灯しているので明るい、景色の見れない閉鎖的な空間は気持ちのいいものではなかった。

なんだ、ここは。

一体どこなんだ？

俺が廊下を歩き出そうとした瞬間――

「おっ！ もう一人めっけ！」

背後から素っ頓狂な声が響いた。

驚いて振り向くと、一人の男が立っていた。

髪は赤茶でところどころ跳ねており、パーカーを着て、ズボンには長いベルトがだらりと垂れた明るそうな男だった。

「なあなあ、お前も新入生なんだろ？ ここどこか分かる？」

男は俺の肩を掴んで聞いてきた。

結構馴れ馴れしいが、別にこういう人間は嫌いじゃない。

何より、この閉鎖空間に一人きりじゃないと知って俺はとても安心した。

最も、彼の質問に有効な答えを返すことはできないが。

「……いや、何にも分からない。気がついたらここにいたんだ」

「そっか。まあ、そうなるよなあ」

男はため息とともに呟く。

「ホール分かる？ ここからエレベーター降りてすぐなんだけどさ。とりあえずみんなそこに集まってんのよ。お前も来な」

「エレベーター…？ 案内してくれないか？」

「はいよ。こつちこつち」

こうして俺は男の先導のもと、廊下を進んでいった。

しばらく進むと突き当たりエレベーターの入り口があった。

エレベーターは意外に広く、十人は同時に乗れそうだった。

パネルには階層を表すボタンが付いており、今俺がいたのが一階。

その下に「ホール」というボタンがあり、二、三、四階のボタンは押

しても反応がないらしい。

エレベーターはすぐにホール階に辿り着いた。

廊下を少し歩くと大きな扉があり、そこを開くと――

まるで体育館のように広い広いホールに着いた。

いや、ホールというより本当に体育館なのかもしれない。

現にバスケットやバレー用と思われる線が床に引いてあるし、用具室と

書かれた部屋もある。

だが、それよりも俺の目を引いたのは、ホールの中央に集まる生徒

達だった。

男も女も十人十色。

様々な第一印象の人間たちが一箇所に集まっていた。

「お、また来たのか」

誰かが俺を見て声を上げた。

彼らが、“超高校級”……

俺は思わず生唾を飲んだ。

そういえば、俺を案内してくれたこの人も超高校級の何かなのだ。

そうだ、忘れていた。

この馴れ馴れしい男子生徒は一体超高校級の何なのだろう？

「君の自己紹介を聞かせてくれないか？」

俺は思い切って彼に切りだしてみた。

「え？ 俺？ えーと、俺は前木常夏まえぎ としなつつてんだ。才能はな……」

前木君はもったいぶって言葉を止めた。

「…才能は？」

突然、前木常夏君は目をくわつと見開き、握りこぶしを胸に打ち付けた。

「俺は〃超高校級の幸運〃だあ!!? 知ってるかあ? 何の才能もねえ一般人でもなあ、毎年一人は選抜で選ばれてここに入れんの!!? すっげーだろ!!?」

その勢いと自信に俺は押し倒されそうになってしまった。

確かに、希望ヶ峰学園がそのような枠を設けていることは度々耳にしていた。

「よおし!!? てなわけで、全員そろったみたいだしここにいるみんなで順番に自己紹介すんぞ!!? 次はオメーだ白衣野郎!!?」

急にテンションを上げた前木君は床にあぐらをかく白衣を着た男を指差した。

「俺え? 自己紹介とか、メンドクセーな……」

そう愚痴る男の黒髪はボサボサで、事あるごとに欠伸をしている。

「かまりやさんべい釜利谷三瓶でーつす。〃超高校級の脳科学者〃とか言われてます。はい終わり。次行け次」

〃超高校級の脳科学者〃、釜利谷三瓶君はそれだけ言うと床にごろんと寝転んだ。

なんともガサツそうな人物だ。

だが彼は高名な脳外科医である父とともに脳科学の最高峰と呼ばれる学会に属しており、最近は「記憶」に関する研究で数々の論文を世に送り出している。

ゆくゆくは彼も父のような「神の手」と呼ばれる存在になるのだろうか。

だらしなく床に寝転ぶ姿からは想像もつかないが。

「キミ! そんなところで寝ては体を壊しますよ!」

癖のある語尾で釜利谷君を注意するのは、おかつぱ頭で丸眼鏡をかけた出っ歯の男子生徒。

学ランをきちんと着こなしている割には不似合いなりユツクを背

負っており、まるでガリ勉とオタクを足して二で割ったような格好だ。

「お、じゃあ次はお前いつてみよーかー」

と前木君の指摘を受け、「む、かしこまりました」とその男子はキチツとした気をつけの姿勢をとった。

「自分は、いや拙者は、いや某は、^{それがし}超高校級のフィギュア製作者”の称号をいただいております、丹沢^{たんざわ}駿河^{するが}と申します。 ” 清く、正しいオタク” をモットーに生きておる次第であります！ 以後、お見知り置きを」

そう言つて “超高校級のフィギュア製作者”、丹沢駿河君は律儀に一礼する。

この人の噂はあまり聞かないが、ぼんやりとした情報によると様々なキャラクターのフィギュアを自在に手がける製作者なのだという。

“超高校級の同人作家” と呼ばれる人物とコラボ作品を出したのかも言われていたな。

ちよつとめんどくさそうな人だけど、悪い人ではないのは間違いないだろう。

「な、な、なんと！ モラルを追求するオタクとは!!? 我輩感動いたしましたっ！」

不意にそう叫んだのは、ベレー帽を被った地味な服装の少女だった。

赤っぽい髪を三つ編みのお下げにした笑顔の絶えない女子である。

地味な格好の割に目はパツチリしていて意外とかわいい。

「あ、それはそうと我輩は”超高校級の漫画家” こと安藤未^{あんどう}大^{みさひ}先生である!!? 『みー様』とか『みー閣下』とか好きに呼ぶがよいぞ」

もうツツコミを待っていると思えない自己紹介を終え、 “超高校級の漫画家” は優雅に笑っていた。

彼女、安藤未^{あんどう}大^{みさひ}先生は女子高生ながらにバトル漫画で有名漫画雑誌の連載を行っている売れっ子漫画家である。

女性が書いたとは思えないほどのアツい展開が見どころらしく、単

行本は即座に初版が売り切れたようだ。

：だが、十秒経つても誰も彼女の自己紹介にはツツコまない。悲しいものだ。

「えーと…じゃあ、次は俺が言っているのかな？」

空気を見かねた大柄な男子が口を開いた。

結んだタオルを頭に巻いた筋肉質な男で、上半身はタンクトップ一枚、下はダボダボの汚れたズボン。

見ただけでなんの才能か分かりそうな格好だ。

「んと、俺は土門隆信^{どもん たかのぶ}!!？」 超高校級の建築士”だ!!？ ま、設計よりも大工仕事の方が好きだけだな！ よろしく頼むぜ！」

“超高校級の建築士”、土門隆信君は高校生ながらに大型建築物を数多く手がけたことで知られる建築士である。

近々オープンする超大型ショッピングモールの設計を担当したというニュースをこの前聞いた。

纏う雰囲気は前木君に似ており、何があってもケロつとしていそうな明るい様子が窺い知れる。

「じゃ、次はウチいきまーす」と挙手したのは、帽子を被った少女だった。

青っぽい色の髪は肩ぐらいまで伸び、上半身にはパーカー、下は大きめのズボンを履いており、十字架のネックレスを下げている。

“超高校級のダンサー”って言われてる亞桐莉緒^{あぎり りお}でーす。よろしくー」

なるほど。まあ、格好からしてそんな感じだろうとは思っていた。

彼女のストリートダンスが動画サイトで人気を博したのは今から数年前。

俺も一度だけ見たことがあったが、確かに見る者を魅了するテクニクが満載だった。

今では日本中に数多くのファンを持ち、近々有名ダンサーグループとコラボイベントも行うらしい。

プロポーションは抜群で顔立ちも整っており、悪戯っぽい笑みがかわいらしさを引き立てている。

あの見た目ならダンスが映えるのも頷ける。

「あ、次は私？」

自分を指差してキョロキョロと周りを見渡す女性は、釜利谷君と同じように白衣を着ている。

「はじめまして、皆さん。〃超高校級の昆虫学者〃、こしみず やよい小清水彌生です。こう見えておつちよこちよいなんです」

恥ずかしげに笑う〃超高校級の昆虫学者〃、小清水彌生さんは赤毛のロングを腰まで伸ばし、赤縁の眼鏡をかけた美人だった。

記憶が正しければ、彼女は昆虫や微生物の研究において重要な論文を発表した若手生物学者。

千を超える種類の昆虫を自宅で飼育しているという噂もある。

ただ、見た目から感じる大人びた雰囲気とは内面は少し異なるようだ。

「んっと、誰が残ってるっけ？ あ、じゃあお前お願い」

そう言つて前木君が指差したのは、銀髪で顔立ちの整った青年である。

「ふふ、ついにわたくしの出番ですか」と青年は笑いながら前に進み出る。

…あ、なんかこの時点で若干キャラが見えたぞ。

「お初にお目にかかります！ わたくしは〃超高校級の翻訳者〃、いるま入間ジョーンズでございます！ この身の半分は西洋の血が流れております。※△#☆＜＋○%・〒♪…

「はあ、急に何よ……」

ダンサーの亞桐莉緒さんが驚きとともに口を挟む。

「おっと失礼！ 思わずノヴォオセリック王国の言葉で自己紹介をしてみました！ わたくしはあの国が好きでしてね、特に特産の干し芋などは……」

などとオーバーに手を動かしながら語り始めた入間ジョーンズ君。漫画家、安藤未賤さんの時よりもみんながうんざりした顔つきになっている。

なるほど。予想どおりのキャラだ。

こんな性格ではあるが、彼は某国大統領との対話経験もある超有名な翻訳者なのだ。

世界28ヶ国語に精通し、ノヴオセリツク王国も例外ではないらしい。

通訳だけでなく、海外の著書の翻訳でも活躍しているのだとか。絡みづらいことは間違いないが、たまに話してみると面白いかもしれない。

「……おっと、語りすぎましたね。ではでは次の自己紹介と参りましょうか。夢郷くん、ゆきたまえ！」

「うん？ 僕か」

入間君の指名を受けて出てきたのは、どこからどう見ても古代ローマ人のような格好の男だった。

一応下にはジーンズを履いているようだが、体に羽織っているローマ人的な布切れのせいで足元しか見えず、とても一目で現代人とは思えない。

しかし顔付きは入間君並み、いやそれ以上に美形かもしれない。

物悲しげな表情がよりそのイケメンぶりを強調している。

「僕の名は夢郷郷夢、^{ゆめさと きょうむ}“超高校級の哲学者”と呼ばれている…。よろしく頼む」

テンション低めで自己紹介した夢郷郷夢君。

冗談のような名前とは裏腹に専門家顔負けの知識を有する哲学者である。

彼の著書は世界中で根強い人気を誇っており、高校生ながらに外国の大学で講演することもあるらしい。

「はいっ！ じゃあ、次は私が！」

元気よく挙手したのは、茶髪をポニーテールにした真面目そうな女子生徒だった。

「私は〃超高校級の空手家〃をやらせていただいております、山村巴と申します。よろしくお願いたします!」

元気よく一礼したこの女子生徒は、小学校時代には既に全国レベルの大会に出場していた空手の申し子。

現在には出る大会の全てを優勝で飾るほどの強者として名高い。

やはり武道を習っているところも礼儀正しくなるのだろう。

丹沢君と同じくらい制服をきちんと着こなしており、スカートもちゃんと膝まで下ろしている。

怒らせたら酷い目に遭いそうだ。気をつけよう。

「さ、伊丹さん、自己紹介しましよ?」

自分の自己紹介を終えた山村さんは横にちよこんと座る大人しい女子生徒に語りかけた。

「うっさい……言われなくてもするから……」

不機嫌そうに文句を言う少女は、黒髪ショートで黒いスーツに黒いスカートと徹底した黒づくめである。

「……伊丹……ゆきみ……です。薬剤師……やってます」

“超高校級の薬剤師”、伊丹ゆきみさんはいこの前雑誌にも出ていた新薬開発のホープである。

薬のみならず、最近では超高性能プロテイン“プロドルメンX”の開発でも一躍有名となった。

そのクールな姿に魅せられるファンもいるらしい。

だが、こうして見ると人付き合いは苦手そうな人なんだな。

「次は俺か?」

低い声が背後から響いた。

振り向くと、見上げるほど背の高い男が目の前に立っていた。

土門君並みに筋肉質な体に漆黒のコートを身に纏い、髪は白の短髪、茶色く色づいた眼鏡の中からは鷹のように鋭い眼光が光っている。

る。

「う…わ…」

俺はその威容に思わず後ずさった。

「そう怯えないでくれ。怪しい者じゃない。名前は…：そうだな、”リュウ”とでも呼んでくれ。訳あって何の才能で入ったかは言えない。だがもう一度言っておくが怪しい者ではない。よろしく頼む”いやいやいや、そんな格好をしておきながら「才能が言えない」なんて、これを怪しいと言わずして何と言う。

しかも名前まで誤魔化してるじゃないか。

「えー、なんで言えねーの？ 理由も言えない感じ？」

前木君がつまらなそうな顔をして尋ねる。

「申し訳ない…。言えば迷惑がかかる。まあ気にするようないことじゃないさ」

リュウ君はそう答えたが、周囲からの疑惑の視線は収まらない。

俺が思うに、彼は”超高校級の殺し屋”あたりだろう。

俺が描く作品では大体殺し屋はこんな格好をしている。

そうでなければ”超高校級のエージェント”だ。

そういう役職ならば、才能が言えないというのも領ける。

なんと怖い人だろう。

「皆様方っ！」と漫画家の安藤未賤さんが声を張った。

「あそこにおわす御仁にお声はかけなくてよろしいので？」

安藤さんが指差した先には、リュウ君よりも怪しいオーラを醸し出す人物がホールの隅に座り込んでいた。

背はかなり低いが、全身を濃い紫のローブに包み、長く尖った形の帽子で顔を隠している。

まるで魔女だ。

「バカっ！ 敢えて触れてなかったんだよ！ 怖いだろ！」

前木君が顔を青くして叫ぶ。

「んなこと言うなよ！ お前も俺たちと同じ新生生なんだろ？ なあ！」

建築士、土門君が前木をたしなめ、魔女のような人物に声をかけた。「ふおっふおっふお、バレてしまつては仕方がない……」

一体何がどうバレたのかは知らないが、ローブの人物はそう眩きながらゆっくり近づいてきた。

「時にお主」

ん？ 誰を指さしたんだ？

「そのキョロキョロしておる少年、お主じゃ」

なんてこつた。よりにもよつて俺に声をかけてきやがった。

「は、はい……。なんでしよう……？」

ローブの人物は何やら赤い物体を取り出し……

「この毒リンゴを食べてみぬか？」

なんてこつた!!

魔女だ!!？ ほんとに魔女だった!!？

「お婆様、毒入りと自白してしまつては、食べてはもらえせんよ」

慌てる俺をよそに、翻訳者の入間君が冷静にツツコむ。

「アンタ……高校生なの？」

ダンサーの亞桐さんが不審そうに尋ねる。

ローブと帽子で顔は見えないが、このしわがれた声は間違いなく老婆だ。

“超高校級の老け顔”でも出てくるのだろうか？

などと考えているとー

「わしか？ わしはー」

「リャン様なりー……!!？!!？!!？!!？!!？」

「うわぁー……!!？!!？」

突然、ローブから小さな少女が飛び出してきた。

素で悲鳴を上げてしまった。

尻餅をつく俺を見てうくく、と笑う少女は小学生のように背が低い。

金髪のツインテールを長く下ろしたあどけない顔の女子生徒だった。

しかし、このフリッツフリの服装はなんだ？

「ぬおおー！！？！！？」とフィギュア製作者の丹沢君と漫画家の安藤さんが同時に声を上げた。

「そのお姿……紛れも無い、『外道天使☆もちもちプリンセスぶー子』でござりまするな！！？」

丹沢君が感動を隠せない面持ちで叫ぶ。

そんな感じのアニメのCMを見たことがあったかもしれない。

「我輩もあの作品には憧れておる所存……。ただの萌えアニメかと思いきや、以外とバトル展開にも凝っておりまして……」

安藤さんも便乗して語り出す。

この二人は似たような世界に生きている分、かなり気が合いそうである。

……このチビな少女もそうなのだろうか？

「にやははー！ リャン様のファンが増えるとは嬉しいことこの上なし！」

二人は君のファンになるなどとは一言も言っていないぞ。話を聞いていないのか。

それにしても、「リャン様」というのは彼女の名前なのだろうか？

そんな格好でそんな一人称を使って、恥ずかしくはないのだろうか……？

「ええーつと……とりあえず自己紹介いいかな？」

珍しくうろたえている前木君に勧められ、少女は「よかろうなり！！？」と言つてぺこりと一礼した。

「アタシは、超高校級のコスプレイヤー」、津川^{つがわ}梁^{りやん}様なのだ！ その気になればお前たち一人一人に化けられるなり！」

フィギュア製作者といい、コスプレイヤーといい、漫画家といい、どうしてオタク界隈の人間がこんなに多いんだろうか？

まったく俺にはついていけない。

どうかこの人、リュウ君にも化けられるのだろうか？

ちびっ子のリュウ君が街を闊歩する姿を思い浮かべると、かなりシニールで笑える…。

しかし、今の声とは全く異なる老婆の声を先ほど発していたことを考えると、やはりコスプレイヤーとしての才能は本物のようだ。

それはともかく、持っていたリングゴは本物だったようで、津川さんは人目もはばからずそれをかじっていた。

「自己紹介終わってないやついる?」

前木君が問いかけたので、「あ、俺」と答えた。

「俺は“超高校級の脚本家”って呼ばれてる葛西幸彦です。よろしく」

「へえー、脚本家かあ。頭良さそうだな!」

「そんなことないよ…」

建築士の土門君が感心したように言うが、俺はそこまで学力が高いわけじゃない。

感じたことを感じたままにストーリーに表す能力に学力は関係ないのだ。

「これで、全員終わったかな」

前木君が呟く。

「…あの子、まだ自己紹介してくない?」

そう言ってダンサーの亞桐さんが指差した先には、ホールの側面に貼られた鉄板を念入りに調べる一人の少女がいた。

ベージュ色の髪をボブにしているが、右耳のあたりから小さい三つ編みが下りている。

可愛らしい顔つきだが、かなりムスツとした表情なのが残念だ。

いや、それでも凛とした美しさを放っていてとても綺麗なのだけれども。

オレンジのセーターに膝上くらいまでのスカートを履いており、格好ではどんな職業なのか分からない。

「おーい、お前もこっち来いよー! 自己紹介してくれー!」

前木君が声を張るが、少女は見向きもしない。

「おーい！ おーい！ 聞こえないのかー？」

「あー、もう！ ウチが呼んでくる」

痺れを切らした亞桐さんがその子に走り寄り、無理矢理腕を引つ張つてきた。

「こら！ 抵抗すんな！ あんたが自己紹介しなきゃ誰か分かんないでしょー！」

「離せ!!？」

少し引きずられた少女は強く言い放ち、亞桐さんの腕を振りほどいた。

彼女の視線は、ここにいる全員に強烈な敵意を宿していた。

「私に干渉するな……雑魚どもめ……」

「ぎ、雑魚!?? 強い強おーい魔法少女であるはずのリヤン様を……雑魚だとお!?!?」

コスプレイヤー、津川さんがオーバーなりアクションをとって驚いている。

「はあ? アンタ何言ってるの? 反抗期?」

亞桐さんが呆れ気味に言っても少女の態度は変わらない。

しかしこの顔、どこかで見たことがあるな……。

「……思い出した。きみは“超高校級のエンジニア”、御堂秋音^{みどうあきね}さんだよな?」

そうだ。以前雑誌で見たことがある。

百に迫る特許を得て、“エジソンの再来”と噂される少女、それが彼女だ。

精密機械から大型自動車まで、様々な機械の開発と改良に携わる一方、幼少期には既に難解な数式の証明を行ったという“究極のリケジョ”。

いや、彼女を究極と呼んだら同じリケジョの昆虫学者・小清水さんと薬剤師・伊丹さんに失礼かもしれないが。

それでもそう呼びたくなるくらい完璧な頭脳を備えた人物なのである。

「……貴様如きが私を語るな。反吐が出るんだよ……」
相当に棘のある言葉が吐き出された。

初対面の女性にこんなこと言われたら凹むじゃないか。というか
実際凹んでるよ。

「そんな言い方ないでしょ。あなたを知っててくれたんだから、感謝
すべきよ」

小清水さんがむっとした顔で御堂秋音さんをたしなめた。

「黙れ。敷かれたレールを歩くだけの連中に私を理解されたくない」
相変わらず額に血管を浮かべて御堂さんは答えた。

「…ま、まあな、超高校級のなんとらつてのは、こういうちよつと突っ
張った奴もいて当然だよ。気にせずいこーぜ」

前木君がその場をなだめたが、御堂さんは舌打ちとともに鉄板の調
査に戻っていった。

こうして、とりあえずは全員の自己紹介が終わった。

「これから……どういたしましょうか?」

翻訳者の人間君が不安げに呟いた直後だった。

“ぎひやひやひやひやひや!!?”

「わっ!!? なんだ!!?」

突然、耳障りな笑い声がホールに響いた。

『全員揃ってんじゃねーかー! 呼ぶ手間が省けたぜ〜!!?』

その声は、高い位置にあるスピーカーから響いているようだった。
底抜けに明るい、しかしそれゆえに無邪気までに凶悪な悪意が見え
隠れている声だ。

そう。

その声は——俺たちがこの後直面するどうしようもない“絶望”

の片鱗でしかなかったのだ。

一生忘れられないであろう“超高校級の絶望”の。

その時、ステージの中央、壇上に何かが見えた。

プロローグ その2

いつしか全員が壇上を見つめていた。

そして、驚きに言葉を失った。

壇上に座っていたのは、大きめのヌイグルミだったのだ。

右半身は可愛らしい顔つきの白いヌイグルミで、左半身は邪悪な顔の黒いクマ型のヌイグルミだ。

いや：正確に言うと、右半身が“白地に黒斑”で、左半身が“黒字に白斑”だ。

クマというより、パンダのように見える。

「おいおい……何の冗談だ？」

土門君が冷や汗を流しながら呟く。

「冗談なんかじゃねーよ！ オイラはこの“希望ヶ峰学園特別分校”の“教頭”様なんだゾ！ お前らの恩師様だゾ！」

なんと：ヌイグルミは腕を振り上げてそう喋ったではないか。

「なんだこいつ！？ 思いつきり喋ってんぞ!!？」

前木君が悲鳴のように叫んだ。

「当たり前だろ！ 教頭ともあろうものが、喋れなかったらどうやって生徒と意思疎通すんだよ！」

ヌイグルミは反論する。

間違いなく、声はあのヌイグルミから発せられているようだ。

困惑する一同をよそに、「ほう：」と興味深そうに笑う人がいた。

御堂さんだ。

「どんな精密機械が中に入っている？ 見せてもらおうか」

つかつかとヌイグルミに歩み寄りながら御堂さんはそう言った。

「お、おいコラ！ 精密機械とか夢ぶち壊しなこと言ってるじゃねーよ！ オイラに中身なんてないんだからな!!？ どこぞの梨の妖精にだって中の人なんていないだろ!!？」

なんだかよく分からない話を引き合いに出されたが、御堂さんが言うように機械が内蔵されていると考えるほか、納得する手立てはないようだ。

「とにかく、よく聞け！ オイラはこの特別分校の教頭、〃モノパンダ様だ！ これから行われる共同生活のルールを教えるから、よく聞けよな！」

モノパンダと名乗ったヌイグルミはそんなことを言い始めた。

「共同生活!?? どういうことですか?」

山村さんが尋ねると、「あーもうめんどくせーな！」とモノパンダは苛立たしげにぼやく。

「オメーラは希望ヶ峰学園に入学したくて来たんだろ!?? だから入れてやろうって話。ここは希望ヶ峰学園の施設なのー!!?」

「なんだ、そういうことでしたか。それを聞いて安心いたしました」

入間君が安堵のため息とともに胸をなで下ろした。

それにしても、希望ヶ峰学園はこんな奇怪なヌイグルミを所有しているというのか。

サプライズで入学式を行うのが慣例なのだろうか?

「そーそー！ オメーラはこれからここで共同生活を送ってもらおうの！ ルールの説明もめんどいんで、先に電子生徒手帳配つとくぜ！

そこのガリ眼鏡、カモーン」

「む、某でありますか」

不遜な呼び名で呼ばれたことも気にせず壇上に歩み寄った丹沢君に、モノパンダは薄いタブレットのようなものを15人分渡した。

「ここ押すと持ち主が表示されるからさー、持主のところに渡してきてくれねー?」

「分かりました、教頭先生!!?」

丹沢君はきちつと気をつけて返事をして受け取ると、その場にいる連中にそれを渡し始めた。

この時はまだ、なんの疑いもなく〃モノパンダ〃の指示に従っていた。

少し怪しくはあるけれど、これは全部希望ヶ峰学園のサプライズだと思っ込んでいた。

僅か数十秒後に思い知らされる絶望など、予想だにせず。

それは〃電子生徒手帳〃というらしく、起動するといくつかのメ

ニューが揃っていた。

「んじやーまず、校則つてどこ見てくれねー?」

モノパンダの言葉に従ってそれを開く。

「……え、」

思わず声が漏れていた。

校則① あなた達はこれから、この希望ヶ峰学園特別分校で共同生活を送ってもらいます。共同生活に期限はありません。

一瞬、その言葉の意味が理解できなかつた。

だが、モノパンダの言葉がその意味を無理矢理俺の頭に叩き込ませてきた。

「オメーラはここで一生過ごすことになりまゝす!!? “何も起こらなきや”ね!!?」

「はあ!?? なんだよそれ!」

土門君が声を上げる。

「い、一生でございますか?! それは承認できません!!」

入間君の反論も最もである。

「教頭先生! どういう了見か、ご説明願います!!」

丹沢君が強い口調で問い詰めると、モノパンダは「まーまー、そうカリカリすんなって」となだめた。

「ここはとってもいい場所なんだぜ? 食料は無制限に供給してやるし、どんな“外敵”に襲われることもねえ! 一生ここにるのが間違いない一番安全だと思うぞけどなあ」

「ふざけんな!! 卒業できない学校になんていられるか!! 俺にはやりたくないことがたくさんあるんだ!!」

土門君が顔を真っ赤にして叫ぶ。

俺も終始黙ってはいたが、彼らのように内心は穏やかではなかつ

た。

いきなり現れたかと思えば一生ここで過ごせなどとほざくわけのわからないヌイグルミの言うことになど従えるはずがない。

……だが、ここまでの話はモノパンダの狂気のほんの一部でしかなかった。

モノパンダのこの後の言葉がそれを示していた。

「わーっただよ!!」そこまで言うなら卒業の条件を設けてやるって！
それでいいんだろ？」

「…条件？ 試験などを行うんですか？」

小清水さんの問いにモノパンダは「まあ、試験みたいなもんかなー！」と笑った。

『この中の誰かを殺せば卒業ってことで、どーっすか？』

瞬間。

その場の空気が凍り付く。

“殺す”だと???

俺たちの中の誰かを？

「……殺………何言って……」

小清水さんが口元に手を当て、声を震わせて呟く。

「……いい加減になさってください。ご冗談が過ぎますよ」

終始笑顔を絶やさなかった人間君も、ここにきて敵意のこもった表情になった。

「こ、殺し合いだなんて……下手なB級ホラーみたいなこと……考えたくもないなり……」

津川さんも瞳に涙を浮かべて恐怖する。

「ぎひよー！ その表情！ オイラ、ワクワクすつぞ！」

モノパンダは狂った笑い声をあげる。

こいつはいったい何がしたいんだ。

「こ、こ、こいつ……なんで笑って……」

前木君がそれを見て戦慄している。

「……人の命をなんだと思ってるんだ、クソグルミが……」

釜利谷君は怒りに顔をゆがめ、モノパランダをにらみつける。

「ああ、先に言っとくけどな。オイラがオメーラに求めるのはただ一つ……」

『絶望』な。

「絶望だけしてくれればオイラは十分だから。なんもいらねーからな」

悪寒が、背中を駆け上っていくのを感じた。

狂ってやがる。

普通じゃない。何もかもが。

誰もが目の前の現実を受け入れられず、茫然と立ち尽くしていた。言葉も発せず、ただぼんやりと虚ろに壇上で大笑いするヌイグルミを見つめることしかできずにいた。

津川さんが言った「B級ホラーのような展開」が冗談ではなく、現実として降りかかっているということ。誰も受け止めきれなかったのだ。

——そう、ただ一人を除いては。

「…ふざけたこと……」

全員がモノパンダの狂気に怯え、押し黙る中、“彼女”だけは違っていた。

『言ってるじゃねーぞヌイグルミ風情がああああああ!!!』

ホール中に響く怒声が空間全体を震わせる。

俺が驚いて振り返ると、そこでは山村さんが咆哮を上げていた。

おしとやかで生真面目な彼女の姿はどこにもなく、怒りにゆがんだ表情は見るものにモノパンダ以上の恐怖を与え、全身から炎のように真っ赤なオーラが溢れ出ている。

「山村殿の覚醒キタコレ!!」と目を輝かせる安藤さん以外は皆、むろん俺も含め、より一層怯えていた。

「ここから出たきや誰かを殺せって、ああ？　んなモンにオレが従うと思ってるのかゴラアツ!!」　だったら最初にテメーをぶつ殺してやらあああああ!!!」

雄叫びとともに山村さんの体は瞬時にモノパンダに肉薄していた。

そして腰を深く落とし、息を吸いながら空手の構えをとる。

その動作は、ほんの刹那の間のことだったにもかかわらず、俺の脳裏にこれ以上ないほど強く刻み込まれた。

極限まで時が縮められ、彼女が構える動作はゆっくりと、コマ単位で視覚情報として現れていた。

まるで清流の流れのように、微かな乱れもない、完璧な所作。

空手はおろか、武道に全く関心のないものですらその所作には釘づけにされてしまうだろうと俺は確信した。

そして、一連の動作が終わった瞬間、彼女の目が強く見開かれ、巨大な“闘志”が溢れ出る。

これが、“超高校級の空手家”の本気。

俺は戦慄していた。

「おいお前！ 校則に」

「おつらあああああああ!!」

モノパンダの言葉を遮るように、炎を纏った山村さんの拳がその体に打ち付けられた。

凄まじい勢いで吹っ飛んでいったモノパンダは壁に勢いよく激突する。

床に落ちたモノパンダの残骸は、精密機械の破片と綿を散らして横たわり、二度と動くことはなかった。

「す…すげえ……」

前木君が冷や汗とともに眩く。

「中身ないんじゃないのか、オイ？ ウソを暴かれてどんな気分だ？」

山村さんはガラクタと化したモノパンダに吐き捨てるように言った。

だが……

『おいコラー！ ！ よくもやってくれたなオメー!!』

「!?」

もう二度と聞こえるはずのない声がホールに響いた。

壊されたはずのモノパンダは、再び壇上に飛び上ってきた。

「校則に書いてあっただろ!? オイラに危害を加えるのは校則違反なんだゾ!!」

「……だつたらどーしたよ」

手をパキパキと鳴らし、山村さんは再びモノパンダに相對する。

「あと何匹いる? オレは何千回でも殴れるぞオラアアアアア!!」

「あのなあ、オイラの言葉聞いてた? オイラに危害に加えるのは校則違反なんだよ! 万死に値するんだゾ!」

「それがどーしたつってんだよ!!!」

山村さんの怒号がモノパンダを威嚇する。

しかし、モノパンダは不敵に笑っていた。

「……悲しいぜ。さっそく一人お別れなんてよお」

「っは、お別れすんのはテメーだろ?」

「まあいいや、オメーラもよく見とけ。人つてのはこんなにあっさり死ぬんだつてことをよお」

俺は何もできなかった。

山村さんを止めることも、モノパンダに食って掛かることもできなかった。

この時に何かしていれば、状況はもっとマシになってきたのかもしれない。

何もできなかった自分が憎い。

「召喚魔法発動!! 来いよ、〃グングニルの槍〃 ーーー!!」

「はあ?」

そこからの出来事は、俺のような常人が理解するにはあまりにも短すぎる出来事だった。

天井から何かが降り注いだ。

山村さんめがけて、細い何かが。

だがそこに何かが飛び込んできて……

まさに一瞬だった。

すべてが終わった時、そこに立っていたのは……俺が予想だにせぬ人物だった。

漆黒のコートをなびかせ、立ち尽くす長躯の男。

リュウ君だった。

何かに吹き飛ばされた山村さんの体は奥の壁に激突し、力なく床に尻餅をついた。

「ぎゃああああ!!」

津川さんが悲鳴を上げる。

そう、リュウ君が前に突き出している右腕には、黒い棒切れのような物が二本、突き刺さっていたのだ。

その二本の棒切れは完全に彼の腕を貫通し、とめどなく血が床に零れ落ちていた。

ぼんやりとだが俺は状況を理解した。

天井からあの黒い槍が降り注ぐ刹那……場に介入してきたリュウ君が山村さん突き飛ばしたのだ。

俺の後ろにいたはずなのに、あの一瞬で、である。

「おおっと、オシオキ失敗しちゃったぜ〜」

モノパンダは相変わらずへらへらと笑っている。

リュウ君は眉ひとつ動かさず、左手で腕に突き刺さった槍を引き抜き、床に投げ捨てた。

「あ、え……う？ わ、私……」

山村さんは目に涙を浮かべ、ガタガタと体を震わせていた。

「お、お前……平気なのか……？」

土門君が問う。

「すぐに命に関わる傷ではない。が、少し出血がひどいな」

リュウ君はまるで、他人の傷口を見る医者のように客観的に言い放った。

「……モノパンダとやら。お前が本気になれば、ここにいる全員をたやすく殺せると言いたいのだな？」

「まあ、平たく言うたそういうこと！ 仕方ねー、今回は初犯だしリュウ君が頑張つて体張つてくれたからこれで不問にしてやるよ！ でもまあ、オイラが本気だつてことは十分に伝わったよな？」

誰も言葉を返すことはできなかった。

「でも安心しろよ！ オメーラが校則をまもつてくれさえすりやあオイラはなーんにも危ねえことはしねーからよ！ 神サマに誓つてそれだけは本当だぜ！」

モノパンダははつきりとそう言い放った。

果たしてその言葉を信用していいのだろうか？

わからない。

恐怖と混乱が大きすぎて俺には何の判断も下せなかった。

「じゃあ、こんぐらいで入学式は終了つてことで。オメーラも、心残りなくコロシアイできるように精々交友の輪を広めるこつたな！ ぎひやひやひやひやひやひやひや！！」

気味の悪い笑みを残し、モノパンダは壇の下へと潜り込んでいった。

「二階に保健室があつたな。行つてくる」

モノパンダが去るや否や、その言葉を残し、リュウ君は廊下へと出ていった。

「あ、待てよ！ 俺が傷を診てやるつて！」

そのあとを釜利谷君が慌てて追いかけていった。

そのあとに残ったのは沈黙。

ただ沈黙。

「なに…？ なんなのよこれ…？？」

やがて、亞桐さんが歯を食いしばった表情で声を漏らした。

「殺し合い…？ ふざけてるとかそういう次元じゃないっしょ」

「し、しかし…：現に今山村殿が殺されかけたのは事実ですし…：」

安藤さんが不安げな顔で言った。

「ここにいても仕方ありません。全員で校内の探索を行うことを提案いたしまするぞ」

そこに、青い表情ながらも丹沢君が提案を加えた。

「…俺もそれがいいと思う。さっさと脱出できそうなところを見つけて、こんなところは出てしまった方がいい」

俺は丹沢君の意見に同意する意を述べた。

あんな異常者に監視カメラで見つめられているような空間にいるなどごめんだ。

とつとどこんなどころからは脱出して、警察でもなんでも頼ろう。

一時的とはいえ俺たちを監禁したのだし、今日の前で山村さんを殺そうとし、リユウ君に大怪我を負わせたのだ。

あのふざけたヌイグルミの正体を逮捕するには十分だ。

「あ、ああ…：そうだな…。じゃ、じゃあ…：俺は一階を探してみる」

未だに青い顔の前木君がそう言ってふらふらとホールを後にした。

「んじゃあ俺は鉄板が外せねえか試してみるわ。工具があれば楽なんだけどなあ…：」

土門君は窓に張られた鉄板の調査に当たるといふ。



そんなこんなで、全員が手分けして調査を行うこととなった。

俺はまず最初にホール横の用具室を当たった。

バスケットやバレーに使うであろうボール、ネットなど様々な用具が所狭しと置かれている空間であり、暗さも相まって部屋内を移動するのにも一苦労だった。

人が入れるダクトでもないかとしばらく調査していたが何も有用なものも得られず、見つかったのはおかしなコインが数枚だけだった。

コインに描かれているのはモノパンダだろうか？　なんだか少し違う気もするが。

とぼとぼとホールに戻ると、俺はそこに二人の人物がいることに気付いた。

山村さんと小清水さんだった。

山村さんはさつきと同じように壁にもたれかかかってうずくまっております、小清水さんは彼女の肩に手を置いて慰めているようだった。

「えっと、どうかした？」

俺が問うと、小清水さんは困った顔でこっちを見た。

「巴ちゃんね、さつき自分のせいでリュウ君に大怪我させちゃったって落ち込んでるのよ」

山村さんの顔を覗き込んでみると、さつきの赤いオーラを纏った闘士と同じ人物とは思えないほど涙ぐんでゆがんだ顔になっていた。

「ひっ……ぐ……私が……私が……あんなこと……したせいで……」

「し、仕方ないって。リュウ君だって別に君には怒ってなかったじゃないか」

俺は彼女を慰めようと言葉を模索したが、彼女の表情に変化はなかった。

「私……時々……あんなっちゃうんです……。感情が高ぶると……周りが……見えなくなっちゃって……ぐ……めんなさいごめんなさいごめんなさい」

周りが見えないどころの変化ではなかったと思うが……。

あの時の彼女は完全に人格が違っていた。

「私に謝ってもしょうがないのよ。きちんとリュウ君のところまで行って、彼に謝りなさい。そして、ありがとうって言うの。彼がいな

きや、あなた死んでたんだから」

小清水さんは山村さんの目をまっすぐ見て、強い口調で言った。

「……偉そうにこんなこと言うけど、私もね、ほんとはすごく怖かったのよ。生まれて初めて初めて目の前で人が死ぬところを見るかもしれないから。あなたもそうでしょ……葛西君？」

「……うん。これ以上ないくらい怖かった」

それは決して小清水さんに合わせて言ったのではなく、俺の本心だった。

怖かった。

俺は自然に想像してしまっていた。

漆黒の槍が無数に彼女の体を刺し貫いている姿を。

大量の血だまりに沈んでもものも言わなくなった彼女の死体を。

もし本当にそんなものを見ていたら、俺は今頃正気ではいられなかったのかもしれない。

「ね。だからもう無茶はしないで。モノパンダに怒りを覚えるのは当然だけど。いきなり出てきてあんなこと言われて、怒るのは当然だけど……。我慢して。私もあなたも、もう怖い思いたくないでしょ？」

「はい……。約束します……」

涙に震える声で微かに頷きながら山村さんは言った。

「……良かった。あなたが死ななくて、本当に良かった」

そう囁いて山村さんの頭を撫でる小清水さんの声も少し震えている気がした。

ふらつく足取りでホールを後にした山村さんを見送ると、小清水さんは「うーん」と背伸びをした。

「……これって、夢じゃないんだよね」

不意にそう言われたので俺は自分の頬をつねってみたが、感じる痛みはいつも通りだった。

「現実……みたいだね」

「あーあ。プラナリアちゃん達にもっとたくさん餌あげてくればよかった」

小清水さんはそっけなくそう言った。

俺を元気づけようとしてこんな冗談を言っているのだろうか？

少し申し訳ない気持ちになった。

「えっと…まずはこの階の探索を」

「葛西君はさ」

小清水さんは俺の言葉を遮って強い口調で言葉を重ねてきた。

「もし本当に一生ここにいなきゃいけないとしたらさ、どうやって過ぐす？」

「え……？」

一生、こんなところに……？

そんな生活、考えられない。

確かにここは快適だし、一か月くらいならいてもいい。

でも……。

「やっぱり、好きな脚本を構想しながら過ぐすの？」

「いや。俺は絶対ここから出るよ」と俺は強く言い放った。

「そりゃあ、暇があれば脚本を考えるかもしれないけどさ。一生ここにいたらそれをお客様にお見せすることもできないじゃないか。脚本っていうのは、それをご覧になるお客様に何を訴えられるかが一番大事なんだ。人に見せない作品なんてものは作者の自己満足で終わってしまう。主題がない作品ならそれでもいいと思うけど、俺はきちんとした主題を多くの方々につけて、いろんなことを感じてもらいたい」

「へえ。すごいね…。さすが超高校級の脚本家」

小清水さんは感動の面持ちで俺を目を見つめてきた。

彼女のような美人に正面から見つめられると、意図せずとも目をそらしてしまう。

「…でもね、私は違う。私は私の知りたいことを研究できればそれでいいの。たとえ一生同じ場所から出られなくても」

え？ 本気なのか？

こんなところに一生いてもいいっていいのか？

「あなたの言葉を借りるとね。学者っていうのは自己満足の職業な

の。自分のやりたいことができればそれでいい。だからこそ面白くて、だからこそ時々とても虚しくなるのよ」

「……虚しく？」

「私は誰にも必要とされていないんじゃないかってね。でも、慣れてくるとそれも平気になってくる。他人なんかどうでもいいって。学者ってそんなものよ。あ、でも釜利谷君やゆきみちゃんは違うみたいだけどね。あの人達には“人を助けたい”っていう立派な目的があるもの」

そう語る小清水さんの顔は少し寂しいような、悲しいような雰囲気宿していた。

「……ごめんなさい。今は探索しなきゃいけない時なのに。私の話なんかに付き合ってもらって」

「いや……。小清水さんのことがよく分かって嬉しいよ」

と言ってしまったところで俺は自分の失言を悔いた。

これではまるで下心があるようだ。

「そんなこと言ったところで、私は落とせないぞっ！」

小清水さんはくすつと笑って俺の頭を小突いてきた。

まずい。本気で惚れてしまいそうだ…。

そんなこんなで俺たちは二人でホール階をくまなく探索したが、残念ながら脱出に使えるようなものはなかった。

ちようど昼になったので一階の食堂に訪れると、探索を終えた一同が席に座っていた。

「おお、ちようど今安藤殿と津川殿と山村殿がみんなの昼食を作っているところでございますぞ！ 報告がてら昼食会といたしましうー！」

丹沢君の呼びかけに応じ、俺と小清水さんは席に着く。

しかし、山村さんはともかくとして安藤さんと津川さんに料理が作れるのだろうか？

その場にはほぼ全員が集まっていた。

療養中と思われるリュウ君と、予想はしていたが御堂さんがいなかった。

食事を待つ風景を見るだけでも、それぞれの性格がわかって面白い。

夢郷君は分厚い本をじつと読んでいる。恐らく哲学書だろう。

入間君も分厚い本を読んでいるが、タイトルからして訳のわからない文字が使われている。どこの国の本だろうか？

「はっはっは、これは面白いジョークだ！」

そして時々このように声を出して本にリアクションをとるのである。正直言つて薄気味悪い。

前木君と土門君はずつと話し込んでおり、時たま大声で笑っている。

それにたまに丹沢君が口をはさむが、基本的に彼は姿勢正しく座っているだけである。

釜利谷君は騒がしい食堂の様子も気にせず、テーブルに突っ伏して寝ている。図太い神経だ。

伊丹さんは肘をついて考え事。新薬のイメージでも浮かべているのだろうか？

そして、俺のすぐ横では小清水さんと亞桐さんが話し込んでいる。

「へえー、彌生ちゃんはブレイクダンス練習したことあるんだ」

「小学校の頃ね。できなくてすぐやめちゃったけど……」

「時間あるときに教えてあげるから、来なよ。慣れると簡単だし、楽しんだよ」

「いいの？ じゃあ、お願いしようかしら」

などと二人の会話に耳を澄ませていると。

「皆の衆ー！ 飯ができたぞー！」

厨房から料理が並んだ台車を運ぶ安藤さんが現れた。

ポトフ。俺の大好物だ。

「鍋は真ん中に置いておくから、好きな分皿にとつていくなり！」

ご丁寧ニコックのコスプレを決めた津川さんが元気いっぱいに言った。

土門君が台車から鍋をテーブルの真ん中に置くと、コンソメベースの素晴らしい香りが俺の鼻を刺激する。

数分後。

「それでは食材に感謝して、いただきます！」

丹沢君の言葉とともに食事会が始まった。

「それでは皆様方、非常口はいずここにございましたかな？」

気になってしょうがなかったのか、早速入間君がコーヒーカップを片手に尋ねた。

だが、誰もそれに答える者はいなかった。

「…おやおや、ここは学校なのですよね？ 非常口がない学校など、火災にでも遭ったらどうするのです？ 避難訓練にも事欠きますよ？」

「ぎひやひやひやひやー!!!」

「わああっ!!」

突然、あの不快な笑い声が再び響いた。

なんと、テーブルの下からモノパンダが飛び出してきたではないか。

「なな、なんだお前?! なんてこんなところに!!」

前木はそう言いながら慌てて食堂の出口の方へと後ずさる。

「ビビんなよ。オメラが校則を破らない限りオイラはなんもしねーから。早く飯食わないとスープ冷めちゃうぞ?」

テーブルの上に乗っかり、鍋に寄りかかってモノパンダは不敵に言った。

「…何の用だい？ 食事の邪魔をするとは感心しないね」

夢郷君が不機嫌そうに問いかける。

「いやあ、食いながら聞いてて構わないぜ？ 入間君が面白いこと聞くもんだからさ。『非常口はないのかって』な。心配すんなって！」

この分校内で火災が起きようが地震が起きようが洪水がなだれ込んでこようがオイラが責任をもって迅速に対応するからさ！ オメラは何が起こつてもここから逃げる必要はねーの！」

「俺たちに殺し合いをさせたんじゃないかねえのか？ 変なところで随分と優しくなるんだな」

土門君が苛立たしげに言うと、モノパンダはチツチツチと舌を鳴らした。…鳴らせる舌があるとは思えないが。

「コロシアイをさせたいからこそ、だよ。変な原因で死んでもらっちゃあ困るんだよ。オメーラがここにいる限り、オメーラの死因は「オシオキ」か「コロシアイ」か「寿命」だけなの！」

「オシオキ」とは、モノパンダに逆らった際の制裁のことを言っているんだろう。

ちようど、さっきの山村さんのように。

思い出すだけで背筋が震える。

「んじや、必要なことは伝えたんでオイラは帰りまーす。グツドラック！」

それだけ言うとモノパンダは素早い動きでテーブルの下に潜り込んでいった。

俺はすぐにテーブルクロスをめくって中を覗き込んだが、もうそこにはみんなの足が並んでいるだけだった。

「つたく、飯がまずくなつたぜ」

前木君はそう愚痴をこぼしながら席に戻り、食事を再開した。

「……一つ、収穫がありましたね。この施設に……少なくとも今現在は脱出口はないということが分かりました」

丹沢君が重い口調で述べた。

「み、みんな！ そう落ち込んだじゃダメなりよ！ ずーつとここに閉じ込められていれば、家族が怪しんで連絡してくれるなり！ そうなればすぐに警察がやってきて事件解決なり！ なんならリャン様が婦警さんの格好をしてあげてもいいなりよ！」

津川さんが明るい声でみんなを元気づける。

「それは眼福眼福！ 是非とも吾輩に見せてたもれ！」

すかさず安藤さんがそれに乗っかり、「よかろうなりー!!」と津川さんは笑顔で答える。

「うぬぬ……。拙者ともあろうものが失念しておりました。この状況は決して絶望などではない。多少の困難などに屈してよい時ではありませんせぬ!!」

丹沢君も便乗して声を張る。

「…あはは、そうだよ。ウチとしたことが、暗くなっちゃってバカみ

たい」

てへ、と舌を突き出して亞桐さんも笑った。

「皆様方！ わたくしたちが何と呼ばれて希望ヶ峰学園に呼ばれたか、ご存じでしょうか？ 我々は希望です！ 常に笑顔を絶やしてはなりません！ さあ口角をぐぐーっと上げて！ さあ！」

「おいおい、やめてくれ」

入間君に頬を触られて彼の手を払いのける夢郷君の表情も、心なしか笑っているように思える。

「おお!! よく分かんねーけど、なんかみんな元気そうだなによりだ!! 俺も燃えてきたぜええええ!!」

土門君が立ち上がり、力いっぱいそう叫ぶ。

「…分かりやすい人たちね。まあどうでもいいけど」

伊丹さんは冷静にパンを口に運んでいる。

「個性が強すぎてバラバラな気はするけど、彼らとなら何とかかなりそうね」

小清水さんが俺の方を見てクスリと笑った。

「うん。俺もそんな気がする」

俺も彼女に笑みを返した。

少なからず不安はあるがー否、不安があるからこそその屈託のない笑みだった。

そこには、笑うことで不安を紛らわそうという単純な気持ちが見込められていた。

希望ヶ峰学園特別分校 生徒名簿

《男子生徒》

葛西幸彦 かさい ゆきひこ

“超高校級の脚本家”

【身長】 164cm

【体重】 51kg

【胸囲】 79cm

【好きなもの】 落ち着けるもの（風鈴とか）、漬け物全般

【苦手なもの】 周りが見えない人、トマト

【外見】 一般的な制服のブレザー。ごく普通の男子学生といった見た目。

一人称は「俺」。男子には苗字＋「君」、女子には苗字＋「さん」で呼ぶ。

主人公。演劇から映画まで数々の作品を手がけた若手脚本家。彼の作品は近々ハリウッドにも採用される予定らしい。落ち着いた性格で、常に一歩引いたところから周りを見ている。謙虚で常識人。しかし、そのキャラのせいで存在感は薄い。

「俺の居場所はあるのだろうか……」

前木常夏 まえぎ とこなつ

“超高校級の幸運”

【身長】 170cm

【体重】 58kg

【胸囲】 83cm

【好きなもの】楽しいこと、ノリのいい人

【苦手なもの】才能あふれる人、酸っぱいもの

【外見】髪は赤茶色で、ふんわりとした感じのところどころ跳ねている。上はパーカーを着ていて、その下に制服のシャツを着ている。

一人称は「俺」。男女共に苗字呼び捨て。仲のいい人は名前で呼ぶ。釜利谷は「三ちゃん」。

超高校級と言われる才能がなければ入れない希望ヶ峰学園に平凡な学生の中から選ばれた“超高校級の幸運”の一人。性格は至って能天気であっけらかんとしており、自分の才能に絶対の自信を持つ。いつもテンションが高いためうざがられることが多いが、その態度は内心のコンプレックスを隠すためでもある。

ちなみに抽選で選ばれた生徒だが、それ以外のことでは特に運がいい様子はなく、本当に“幸運”で入れただけの平凡な生徒である。

「だ・か・ら!!?」俺は凡人なんかじゃねえっつーの!!?」

リュウ

“超高校級の???”

【身長】 195 cm

【体重】 95 kg

【胸囲】 95 cm

【好きなもの】推理小説、焼きイワシ、ニンニク、トレーニング

【苦手なもの】傲慢な人、生魚

【外見】白い短髪と茶色い色付き眼鏡、見上げるほどの長身に屈強な体躯が特徴的。上着には学ランではなく漆黒のコートを纏っている。

一人称は「俺」。男女共に苗字呼び捨て。

才能を含め、素性が全く知られていない生徒。必要なこと以外はほとんど喋らない寡黙な人物だが、人付き合いが苦手なわけではなく、

話しかけられれば穏やかに応じる。人間という枠を超えた異常な戦闘力を有しており、生徒達の中で唯一黒幕に真っ向勝負を挑める存在。しかしその力は本当に必要と感じた時以外は絶対に使われることはなく、あくまでも平穏を望む。

「殺意を向けられるのには慣れている…」

かまりやさんべい
釜利谷三瓶

“超高校級の脳科学者”

【身長】 176cm

【体重】 67kg

【胸囲】 86cm

【好きなもの】寝ること、楽しいこと、イカの塩辛

【苦手なもの】めんどくさいこと、命を大切にしない人、リア充

【外見】グレー色のシャツの上に白衣を着ている。頭髪はボサボサの黒髪。

一人称は「俺」。男女共に苗字呼び捨て。

現役の高校生にして最先端の脳科学を研究する医療チームのメンバー。しかしその筋書きとは裏腹に極めて適当な性格で、興味のないことには一切口出しせず、様々なことを面倒がる性分。理系脳でサバサバした人物と思われがちだが、仲間と認めた相手は絶対に信じ、守ろうとする熱血漢な一面もある。

「メンドクセー…」

いるま
入間 ジョーンズ

“超高校級の翻訳者”

【身長】 180cm

【体重】 64kg

【胸囲】 85cm

【好きなもの】 話しがいいのある人、干し芋

【苦手なもの】 話を聞かない人、ホラー系全般

【外見】 スーツ姿。長い銀髪を後ろで一つ結びにしている、銀縁の眼鏡をかけている。笑顔が絶えない。

一人称は「わたくし」。男子は苗字＋「さん」、夢郷は「くん」。女子は苗字＋「様」。

イギリス人とのハーフで、28ヶ国語を自在に操る天才翻訳者。各国の重要人物と太いパイプをもち、アメリカ大統領との対話経験もあるという。“トークは人間を切り開く”と語り、巧みな話術で相手を自分の世界に引き込んでしまう。各国首脳との関係もそのようにして築いたという。美青年だが、非常にキザな性格が全てを台無しにしている。夢郷とは旧知の仲。

「はっはっは、皆様わたくしがそんなに痛々しくお見えですか？」

ゆめさと きょうむ
夢郷 夢

“超高校級の哲学者”

【身長】 184cm

【体重】 71kg

【胸囲】 86cm

【好きなもの】 静かな時間、女性

【苦手なもの】 硬派な人、むさくるしい男性

【外見】 ジーンズを履き、タンクトップの上に古代ローマ人を思わせる布切れを羽織っている。顔はかなりの美形で外国人のように背も高

いたため実は人気が高いが、常に意味深な笑みや儂げな表情を浮かべている。

一人称は「僕」。男女共に苗字＋「くん」

この世に存在するありとあらゆる哲学に精通する思想家で、“現代のソクラテス”の異名を持つ。高校生ながらに各国の大学などに招かれて講義を行っており、世界の哲学者達の注目を集めている。外見はかなりの美形で外国人のように背も高いが、常に目つきは悲しげであり、滅多に笑うことがない。現在は、究極の問いである「我々は何故在るのか」の探求に勤しんでいるという。実は強烈なむつつりスケベ。

「全ては無常だと……思わないかい？」

どもん たかのぶ
土門隆信

“超高校級の建築士”

【身長】 185cm

【体重】 75kg

【胸囲】 88cm

【好きなもの】 運動全般（水泳除く）、家族、友人

【苦手なもの】 重い雰囲気、水

【外見】 薄汚れた大きめのズボンに作業着を着て生活しており、頭にはタオルを巻いている。笑う時は大口を開ける。

一人称は「俺」、男女共に苗字呼び捨て。釜利谷は「三ちゃん」、前木は「まえなつ」。

都会の高層ビルなど、大型の建物を数多く手がけてきた一流の建築士。設計だけでなく、自らも大工として働いており、「大工ほど楽しいスポーツはない」と語る。大工仕事で鍛えられた肉体はアスリートのように立派である。かなり規則正しい生活を送っている。気さくで誰とでも打ち解けやすい。テンションの高さなどは前木と似ており

仲もよいが、彼よりも面倒見がよく、保護者的な性格が強い。スポーツは得意だが、実はカナヅチ。

「つしゃああ!!? 力仕事は俺に任しとけえー!!?」

たんざわするが
丹沢駿河

〃 超高校級のフィギュア製作者〃

【身長】 155cm

【体重】 43kg

【胸囲】 74cm

【好きなもの】美しい造形、魅せられる女性（次元問わず）、健康食品

【苦手なもの】偏見、運動全般、味の濃いもの

【外見】出っ歯で痩せ細った体をした男子生徒。刈り上げたおかつぱと丸眼鏡が特徴的。

一人称は「私」、「拙者」、「某」など定まらない。男女共に苗字+「殿」。

幼い頃に手掛けた戦隊ヒーローをモチーフとした粘土細工が造形の細かさで注目を浴び、現在はオタク界で名を知らぬ者はいないと言われるフィギュア製作者。超高校級の同人作家とも交流が深く、コラボ作品を手がけることも。絡みづらそうな見た目とは裏腹に真面目でしっかりした性格である。『清く、正しいオタク』をモットーに生きていおり、自分が正しいオタク像を見せつけることで世間一般でのオタクへの差別や偏見を無くそうと試みている。

「モラルある存在でありさえすれば、オタクも社会に認められるはずなのです！」

《女子生徒》

やまむら ともえ
山村巴

“超高校級の空手家”

【身長】 166cm

【体重】 57kg

【胸囲】 83cm

【好きなもの】 稽古、書道、スイーツ全般

【苦手なもの】 不真面目な人、ムカデ

【外見】制服をきちんと着こなし、濃い茶髪をピンクのリボンで一つ結びにした生真面目な女子生徒。スカートはちゃんと膝下まで下ろしている。

一人称は「私」、逆鱗モードでは「オレ」。男子は苗字＋「くん」、女子は苗字＋「さん」。逆鱗モードでは男女共に苗字呼び捨て。

小学校時代から世界レベルの大会に出場し続け、優勝歴を残している空手の申し子。普段は冷静で優等生らしい言動をするが、予想外の事態には弱く、混乱しがち。頭もさほど良くなく、力づくで物事を解決することがしばしば。しかし真面目さとひた向きさは本物で、いかなる状況下でも自分の心身を鍛錬しようと試みている。しかしながら多重人格者でもあり、感情が限界まで高ぶると突然逆鱗モードに豹変し、罵詈雑言を撒き散らしながらあたり構わず破壊行動を取るようになる。

「頑張っつてここから脱出しましょうね、皆さん!!？」

あぎり りお
亞桐莉緒

“超高校級のダンサー”

【身長】 167cm

【体重】 54 kg

【胸囲】 86 cm

【好きなもの】ダンス全般、おしゃべり、チョコレート
【苦手なもの】協調性のない人、悲しいこと

【外見】青っぽい色の髪を肩ぐらいまで伸ばしており、頭には帽子を被っている。上にはパーカー、下は短いデニムパンツで、首からは十字架のついたネックレスを下げている。整った顔立ちでスタイルもいい。

一人称は「ウチ」。男女共に苗字呼び捨て。

中学時代に路上で披露したストリートダンスが動画サイトで大人気を博し、以来一流ダンサーとして活躍する女子高生。hiphopを主ジャンルとしているが、他ジャンルも踊りこなすことができる超人ダンサー。ギャルっぽくサバサバしているように見えるが、実際は何事にも真面目かつ感情の起伏が激しい一途な女性である。女性陣の中では割と常識人であるため、誰とでも打ち解けやすく、みんなの仲を取り持つことも多い。

「アンタも試しに踊ってみなよ！ 絶対ハマるから！」

あんどう みざい
安藤未賤

〃 超高校級の漫画家〃

【身長】 152 cm

【体重】 43 kg

【胸囲】 78 cm

【好きなもの】燃える展開、妄想、乳製品

【苦手なもの】恋愛を連想させるもの全般、長文

【外見】赤っぽい髪を三つ編みのお下げにしている。ベレー帽をかぶっていて、服装はシンプル。しかし隠れ美人であり、髪をほどいて

化粧をすれば女子で最も美しく化ける可能性がある。

一人称は「私」もしくは「我輩」。男女共に苗字＋「殿」。

女流漫画家として高名な小柄な女性。バトル漫画を専門としており、恋愛をモチーフにした漫画は描けないとのこと。中学時代に描いた作品が同人界で注目を博し、後に彼女に目をつけた有名な編集社に誘われ、現在はそこの所属で活動している。タブレットを用いたデジタル作画と原稿を用いたアナログ作画の双方を使うことができる。常にテンション高めで、いろいろなことを漫画のシチュエーションに例える癖がある。丹沢、津川とよくつるんでいる。「萌え」より「燃え」が好きらしい。

普段の態度こそふざけているようだが、漫画への向き合い方は立派なプロフェッショナルである。

「むははははっ!! 我輩のことは気軽に『みー様』とか『みー閣下』とか呼ぶとよいぞ!!?」

伊丹^{いたみ}ゆきみ

“超高校級の薬剤師”

【身長】 158cm

【体重】 50kg

【胸囲】 80cm

【好きなもの】 ぼーっとすること、化学書、剣道（三段）

【苦手なもの】 うるさい人、嘘、偏見

【外見】 黒髪ショートで黒の白衣、黒のタイトスカートと黒ずくめの格好をした女性。その端麗な姿に魅了されるファンもいるらしい。

一人称は「私」。男子は苗字＋「君」、女子は苗字＋「さん」だが、仲良くなった女子は名前呼び捨て。

高校生にして数々の薬を独自に開発したことで知られ、いくつもの製品を世に出している。最高のプロテインと称される“プロドルメックス”は彼女の作品。大人しくてあまり話さないが、冷静な立ち振る舞いからは想像しがたいほど直情的な面を持ち、たとえ悪いことでも思ったことはズバズバと正直に話す性格。しかしその性格ゆえに第一印象で損をすることが多く、人付き合いをとっても苦手としている。本当の意味での友達を欲する寂しがり屋の少女である。

インドア派に見えるが実は運動は得意で、かつて習っていた剣道では三段の腕前を持つ実力者。

「……嘘は嫌い……」

つがわ
りやん
津川梁

“超高校級のコスプレイヤー”

【身長】 139 cm

【体重】 38 kg

【胸囲】 74 cm

【好きなもの】 ファン、おばあちゃん、甘いもの

【苦手なもの】 大きい人、両親、しよっぱいもの

【外見】 小学生のように背が低い。金髪をツインテールにしている。表情豊かで、思っていることがすぐ顔に現れる。特注のミニサイズの制服を着ているが、コスプレのためにかなりの頻度で着替える。

一人称は「アタシ」、「リヤン様」。男子は苗字＋「きゅん」、女子は名前＋「ちゃん」または「たん」。語尾に「なり」がつく。

戦隊ヒーローに魔法少女、老婆に巨漢と多種多様な姿に楽々と化ける超人級のコスプレイヤー。『外道天使☆もちもちプリンセスぶり』のコスプレがお気に入り。様々なキャラを演じることもあって普段は意気揚々としているが、本来はとても大人しくて自分に自信が持てない気弱な少女であり、そんな自分を乗り越えるためにコスプレイヤーになったという。しかし捜査や学級裁判のようなシリアスな場面ではいつもの能天気な性格でみんなを元気づける。おばあちゃんっ子。

「トリアー!!? リヤン様参上なりーっ!!?」

こしみず やよい
小清水彌生

“超高校級の昆虫学者”

【身長】 168cm

【体重】 57kg

【胸囲】 89cm

【好きなもの】 虫系全般、触手

【苦手なもの】 小動物、犬猫

【外見】 白衣をまとい、赤毛の長髪を腰まで下ろした大人びた女性。赤縁の眼鏡をかけている。真面目そうな見た目とは裏腹に物腰は柔らかく、常に笑顔を絶やさずに他人と接する。

一人称は「私」、男子は苗字＋「君」、女子は名前＋「ちゃん」。

特異な情熱と頭脳を持つ女性科学者。“ファールブルの生まれ変わり”と称されるほど昆虫に対する愛情と知識が深く、高校生ながら昆虫学をテーマにした論文を多数世に出しており、生物学の界限では重要な研究として重宝されている。その見た目や性格から人から頼ら

れることが多く、あらゆる場面で葛西に寄り添い、補助してくれる。自宅に数百種類の虫を飼っているらしい。

「しごとく生きましょう！ ゴキブリさんのように!!」

御堂秋音

みどう あきね

“ 超高校級のエンジニア ”

【身長】 155 cm

【体重】 45 kg

【胸囲】 79 cm

【好きなもの】 機械いじり、謎解き、母親

【苦手なもの】 周囲の人間、英語

【外見】 ベージュの髪を肩ほどまで伸ばし、右側を編み込んだ物静かな少女。ヘアバンドも装着。オレンジのセーターに膝丈より少し短いスカートを着用。常に誰かを睨んでいるような敵意のこもった目つきをしている。

一人称は「私」。男性も女性もフルネームで呼ぶ。

携帯電話のような精密機械から自動車のエンジン、ロボットに至るまでありとあらゆる製品を考案、改良を重ねてきた若手技術者。取得した特許は百に迫るほどで、エジソンの再来とも言われる。小さい頃から数々の数式を理解し、証明してきた天才児でもあり、数学・物理・工学の知識では右に出るものはいない。その天啓ともいえる才を本人が一番理解しており、周囲の人間を見下す傲慢な態度をとる。その歪んだ性格は自身の壮絶な半生に由来するという。

「消えろ、雑魚が」

《希望ヶ峰学園特別分校職員》

モノパンダ

【身長】 70cm

【好きなもの】 絶望

【苦手なもの】 希望

【外見】 基本的なつくりはモノクマと同じ。ただし身体の左半分がパンダカラー、右半分がそれを白黒逆にしたカラーリング。

希望ヶ峰学園特別分校の教頭を名乗る謎のヌイグルミ。饒舌で生意気な話し方をする。生徒たちの“絶望”が目的と語るが……。

「ぎひやひやひやひや!! 絶望パラダイス!!」

Chapter 1

希望の蔓に絶望の華を

chapter 1 (非) 日常編①

「さあさあ、暗い気分をキープしていても仕方ありません！ 助けが来るまでの間、ここで気ままに暮らしていようではありませんか！」

昼食が済むと、入間君が両手を広げて高らかにそう言った。

「のんきな野郎だな…。いつあいつが俺らを殺すかわからないんだぞ？」

前木君がふてくされたように肘をついて呟く。

「モノパンダ氏の本気で我々を殺したいなら、とつくの昔にそうしますよ。『校則を破らなければ危害は加えない』という言葉は信ずるに値すると思いますか？」

入間君は笑顔を絶やさないうまま平然と答える。

「そうだよ、まえなつ！」 ウジウジしてちゃあなんも始まんねえぞぞ？」

土門君が前木君の背中をたたきながら陽気に言った。

「はあ…？ “まえなつ” って俺のことか？」

前木君があんぐり口を開けて呆れたように言うと、「ったりめーだろ！」と土門君は答える。

「あはは。まえなつ、ね。こりゃいいネーミングだわ」

亞桐さんが悪戯っぽく微笑む。

「そんな呼び方されたの、初めてだわ……」

前木君は恥ずかしそうに頭をかくが、まんざら嫌でもなさそうだった。



そして、一同は校内を自由に散策し、交流する流れになった。

「さて、何しよっかな……」

俺はしばらく食堂に残つてのんびりお茶を飲んでいた。

リュウ君のもとに食事を運びに行つた山村さんとそれに付いていった小清水さんはここにはいない。

そして相変わらず仲のいい前木君と土門君は体を動かしてホールに行き、そこに何故か釜利谷君も巻き込まれていた。本人は相当嫌がつていたようだが……。

入間君は散歩(?)するとか言つてどこかに行つてしまつたし、安藤さんは「新作漫画のネームを評価してもらいたい」と丹沢君を引つ張つていった。

津川さんは「婦警さんの格好をする」とか言つて飛び出していったきり戻つてこない。

そんなこんなで、今ここに残っているのは俺、亞桐さん、夢郷君、伊丹さん。

「あのさあ、あんたらつてもっとスキンシップとか大事にした方がよくない?」

亞桐さんが机に上半身を乗せながらつまらなさそうに言った。

“あんたら”つていうのは俺も入っているのかな?

…確かに俺もしゃべる前にいろいろ考えてしまつて中々話さない性格だとはよく言われる。

「あ、ごめんね。じゃ、じゃあ……なんかお話ししよつか」

俺は慌てて場を取り繕おうとした。

しかし、そこから先の言葉が出てこない。

「では、僕から一つ聞いていいだろうか?」

読んでいた本を閉じ、夢郷君は口を開いた。

「なぜ、我々はここにいるのだと思う?」

………?

「そりゃあ……あのモノパンダっていうわけわかんないヌイグルミに閉じ込められてさ」

「そうじゃない。なぜ世界がここに存在し、なぜ我々という存在がここに生きているのか。すべての根本に位置する問いだ。君たちはこ

の問いをどう処理する?」

そう語る夢郷君の表情は固く、本人は大真面目であるということが痛いほど伝わる。

「…この世に存在する“根拠”というものは、必ず『なぜ』と問うことができる。例えば、『重力があるからリンゴが落ちる』という根拠に対して、『なぜ重力があるのか』と問うことができる。その問いに『質量が時空を歪めるからだ』という根拠を示せば、『なぜ質量は時空を歪めるのか』と返せる。そうやって問いを繰り返していくと、やがて一つの“究極の問い”に辿り着く。『なぜ何もないのではなく、何かがあるのか』という問いだ。宇宙がビッグバンによって生まれ、紆余曲折を経て地球が生まれ、我々が生を受けたという事実はある。しかしなぜそれが起こりえたのか? なぜ今ここに『存在』が在るのか…。君たちはどう思う?」

まるでさっきの前木君のように見事に口が開いていた。

彼の言う内容はともかくとして、彼が俺とは別次元の世界を生きていることは分かった。

「ええーつと……? なんでウチらが存在するかってこと…?」

一生懸命話についていこうとする亞桐さんは立派だと素直に俺は思った。

「でもさ…そんなもん…分かるわけないじゃん。神サマにでも聞けば?」

「神、か………」

夢郷君は顎に手を当て、うずくまるような態勢で思考を始めた。

「……ん? この格好……」

間違いない! “考える人”だ!!

「バカみたい……」と小さくつぶやいたのは紅茶のカップを片手に持つ伊丹さんだった。

「そんなことを考えるのに時間を使って、無駄だつて分からないの……?」

「…確かに、僕が…いや、人類がこの問いの答えをつかむことは永遠にないだろう。だが僕は知りたい。例え真理でなくとも、僕自身が満足

する答えを見つけない。だって、分からないまま死ぬなんて嫌じゃないか。僕は人生という刹那の時の中で全てを知りたい。傲慢かもしれないが、それが僕の夢だ」

相変わらず大真面目な口調で夢郷君は言った。

「ま、まあ……知ってるか知らないかって言ったら、知ってた方がいいよね……」

俺は苦笑いしながらもそう言った。

「あはは……ウチは……なんてゆーか、なんも考えずに生きてきたからさ。自分がやりたいことだけやってた感じ？ ダンスが好きだからずーっとダンスだけやってたってだけ。だから、あんたみたいにしっかり考えられるやつが羨ましいわ」

亞桐さんがそう言うと、夢郷君は「謙遜することはないよ」と微笑んだ。

「僕だって、やりたいことをやって生きてきただけさ。たまたまそれが『考えること』だったただけだ。君の生き方も僕は素晴らしいと思うよ」

「そうかな……」と亞桐さんは照れ臭そうに笑う。

言っていることは難解でとても俺がついていけそうなものではなかったが、少なくとも彼は俺が思っていたほど石頭で絡みづらい人物ではないようだ。

少しだけ夢郷君のことが分かって、俺はちよっぴり嬉しかった。

「トリヤーーー!! リヤン様婦警モード、参上おおお!!」

突然、食堂の入り口から大声が響いた。

振り向くと、婦警の格好に身を包んだ津川さんがよく分からないポーズを決めていた。

「ってあれ？ みー様は？ リヤン様婦警モードを楽しみにしてたみー様はどこーーー!!」

“みー様”は恐らく安藤さんなのだろう。

まさかあの自己紹介に乗っかってくれる人がいるとは……

「みーちゃんなら、丹沢を連れてどっかいったよ」

亞桐さんが教えると、津川さんは「なんと!」と声を上げた。

「勝手にどっかいつちやうなんて、ひどいなり! 根掘り葉掘り探してリャン様の可憐なお姿を見せつけてやるなりよ!!」

ガッツポーズを決めて食堂を去ろうとする津川さんを、亞桐さんは「ちよつと待つてよ」と引き留めた。

「ウチにももつと近くで見せて!。すつごいリアルじゃん、その恰好」
「ほいさつさー!」と津川さんはこちらに駆け寄ってきた。

近くで見してみると、その変装の完成度の高さには驚かされた。

腰についている拳銃はレプリカだろうが、細かい装飾まできめ細かに作られている。

「リャンちゃんかわいいねー。めっちゃ似あつてるよ」

亞桐さんがそう言つて津川さんの頭を撫でると、津川さんは子供か小動物のように無邪気にはしゃいでいる。

……本当に彼女は高校生なのだろうか?

間違つて小学生が希望ヶ峰に紛れ込んできたんじゃないのか?

「最初は魔女の格好をしていたし、食事のときはコックの姿だったよね。どれくらい衣装持つてるの?」

俺が尋ねると、津川さんは「うくん」と頬に指を当てて考え込む。

「一千着は下らないなりよ!」

「い、一千着?」

一千着といえば、俺の一生分の服、いやそれでも余裕で足りないぞ。

「コックに婦警はもちろん、ナースや教師や女医やe t c…。職業の他にもアニメや漫画のキャラも古今東西取り揃えておるなり!」

「す、すごいね……。これが“超高校級のコスプレイヤー”か…」

「でも、リャン様のお部屋には三百着ほどしか置いてなかったなり…。アニメキャラの大半がどっかにいつちやつたなりよ……」

津川さんは暗い口調でそう言うと、ふう、とため息をついた。

「え? ちよつと待つて? 個室には俺たちの私物が置いてあるのかい?」

「まだ部屋に行つてなかったなりか? 個室にはプライベートアイテムが溢れんばかりに置いてあつたなりよ!」

それは知らなかった。

ということは、俺が脚本を作る際に世話になった蔵書なんかも送られていたのだろうか。

なるほど。夢郷君や入間君が読んでいた本も部屋から持ってきた私物だったんだな。

：でも、考えてみれば確かに千着の服全部は個室には入りきらないだろう。

だから三百着ほど（それでも十分すごい数だと思うが…）しか送られていなかったのだ。

「なーんか、ほんつとヘンなところで親切だよ、あのパンダ」

亞桐さんが監視カメラを睨みながら不機嫌そうに呟く。

「あんな残酷なことさえ言われなければ、ここもいいところなのに。残念なりよ……」

津川さんも不安げに監視カメラを見上げる。

「そんなことを言っていると、またテーブルからモノパンダが出てくるぞ」

いつの間にか本を読む作業に戻った夢郷君が釘を刺す。

伊丹さんは相変わらず何食わぬ顔で紅茶を飲んでいる。

少しの沈黙ののち、亞桐さんは口を開いた。

「唐突で悪いけどさ。リヤンちゃんってさー、なんでコスプレ始めよーと思ったの？」

「んむむ？　じゃあ逆に聞くけど、莉緒たんがダンスにのめりこんだ理由はなんなりか？　たぶんそれと同じ理由なり！」

津川さんは二カツとした笑みで答えた。

「単純にコスプレが好きだったから…なんだ。でもさ、ダンスと違ってコスプレってお金かかるし、そう簡単に始められるもんじゃないじゃん？　どうしてコスプレなわけ？」

「うーんとね……」と考え込んだ後、津川さんは語り始めた。

「昔、おばあちゃんが都会まで連れて行ってくれたなり。初めて見た都会は何もかも新しくてビックリだったけど、一番ビックリしたのがコスプレだったなり。金とかピンクの髪をして、見たこともないド派

手な格好をしてたなり。それで、わけのわからないセリフやポーズを決めてて……。正直言つて、怖かったなり。まだ小さかったから、おばあちゃんに泣きついたのを覚えてるなりよ。

でも、帰りにもう一度その人たちを見ると……。オタクさんたちをいっぱい集めて、ヘンな踊りしてたなり。思わず笑っちゃったなりよ。それが忘れられなくて、次の日おめかしして変な踊りの真似をしてたなり。化粧品をいっぱい使っちゃって、おばあちゃんに怒られたなり。

……ざつと話すと、こういういきさつなりよ。コスプレって、知らない人を見ると気持ち悪くて怖いかもしれないけど、慣れるととつても楽しくて、みんなを笑顔にできるなり。生まれつき体が小さくてみんなの役に立てないアタシでも……。いっぱい笑顔を作れるのが嬉しいなりよ！」

そう語る津川さんの表情は、心底恍惚としていた。

そう。これだ。

俺が作った脚本を見て、じつくり感傷に浸ってくれるお客様を見た時、俺はこの表情になる。

自分が生まれてきた意味、ここにいる意味、“脚本家”である意味を一番実感した瞬間の表情。

それは希望。

「…オタク界隈の話つてあまり知らなかったけど、こうやって聞くと案外楽しそうね。そうだなー。ウチだけ聞くのもアレだし、ウチもなれそめ的な言つてもいい？」

「もちろん！ 聞きたいなり！」

亞桐さんもその希望の表情に感化されたのか、自らの境遇を語り始めた。

「ウチの場合は何度も言うけど好きだから始めたわけで、きつかけみたいなものはないんだけどさ。一人、めっちゃ影響受けた人はいいてね。中学の先輩で、ダンスクラブのリーダーやってた人。ウチはダンスが好きで好きで、寝る間も惜しんでずっと踊ってたから…まあ、自分で言うのもあれだけど、みんなに上手いって言われて。でも、そ

の先輩はあたしなんかじゃ敵わないくらいすごかったワケよ。ほんと、人間の動きに見えないくらい。だからって悔しい感情もなくて。ただただ憧れてた。先輩と肩を並べて、同じ風に踊りたいって。

だから、先輩と一緒にずーっと練習した。来る日も来る日も、飽きなんて全然来なかった。めっちゃくちゃ楽しかったし、充実してた。

でもね。楽しいことでも、永遠に続くわけじゃないじゃん？先輩が三年になって、引退する前の最後のイベントの直前、『転校する』って言われて。地方の遠い学校にね。先輩も人が悪いよ。イベント終わってから言えばいいのに。イベントの前の晩、死ぬほど泣いたんだもん。でも、不思議なくらいイベントは普通にやれた。終わった後は前の晩よりもっと泣いてたね。だって先輩ったら、『アタシより上手かったよ』なんて言うからさ。そんなこと言うから、先輩じゃなくてウチが希望ヶ峰に選ばれちゃったじゃん。だからウチは一人で二人分頑張らなきゃなの。先輩からとんでもないプレッシャー押し付けられちゃったからね。

……はい。これで終わり。どう？よくあるドラマみたいな下手くそな展開でしょ？」

そう言って微笑む亞桐さんの眼元が少し潤んでいたのを俺は見逃さなかった。

かくいう俺も、すっかり目頭が熱くなっていた。

「……そんなことないよ。最高の脚本だ！」

思わず叫んでいた。

「うぐうう……青春なり〜……」

顔を涙で汚しながら津川さんも呟いた。

「津川君も亞桐君も、れっきとした経験と目的をもって希望ヶ峰にいるんだね。ますます見直したよ」

いつの間にか本を置いて聞き入っていた夢郷君も満足げな顔で二人を称賛する。

「……なにそれ」

そんな幸福の中に水を差したのは、他ならぬ伊丹さんだった。

「なんでも都合よくとらえる人間って便利よね。…その先輩……たぶんあなたのこと恨んでるよ」

「はあ？ どういうこと？」

亞桐さんはムツとして言い返す。

「…だって、その先輩にとつては…そこが最後の舞台なのにさ。後輩のあなたが…自分より上手く踊ってたら…嫌な気持ちになるでしょ…？ 『アタシより上手かったよ』なんてのは…精一杯の嫌味だったと思うけど」

「……なんだよ、それ!!」

亞桐さんは急に立ち上がり、顔を真っ赤にして伊丹さんを睨みつける。

「何も見てないくせに、何も知らないくせに、勝手なこと言うな!! あんた、秋音ちゃんとなにも変わらないよ!!」

「あんな人と一緒にしないで…。私はただ……可能性の話をしてるだけ。…そういう可能性もあるかもって」

「あるワケねーだろ!! あつてたまるか!! あーもう、気分悪くなつた!」

亞桐さんはそれだけ言って、さっさと食堂を出て行ってしまった。どうすればいいのだ。この空気を。

くそ……小清水さんさえいれば……。

「ご、ごめんなさい。嫌な気分になさせようとしたんじゃない……」

伊丹さんはうつむきながら呟いた。

「なんであんなこと言うなり……？ せつかくいい話だったのに……」

「だって、気づかせてあげたかったんだもん。『そういう可能性もある』って……」

「そんなのはただの可能性なり！ 確実じゃないことを言ってもしよるがないなり！」

「…確かに私が言ったことは確実じゃない。でも……その先輩が心から亞桐さんを愛してるっていうのも確実じゃない。現実はどうじゃないかもしれない。だから気づかせてあげたかったの。…この世に、

『絶対治る薬』なんて…存在しないんだから」

伊丹さんは声を震わせながらもそう言った。

「偏った見方しかできない人は嫌い…。嘘をつく人も嫌い…。真実を端的に述べて、その上であらゆる可能性を…。最悪の可能性も含めて、常に視野に入れておくの。そうしないと…。いい薬はできない」
薬を作ることなんてない俺たちにそんなことを言われてもという感じだが、彼女の言い分も少しわかるような気がした。

「私は…。思ったことは正直に言う。今みたいだね。嫌いな人には嫌いって言う。好きでもない人に好きって言って、偽りの関係を作るよりも…。そっちの方がいい。偏見や虚飾は麻薬と一緒になのよ。一度抱くと離せなくなる」

「でも、あの言い方はあんまりなり…。もつとナチュラルに言ってもよかったなりよ」

伊丹さんの口調は次第に冷静さを帯びてきていた。

「物事ははつきり端的に述べるべきもの。余計に言葉を柔らかくしたら、本人のためにならない。…それと、私はあなたも好きじゃない」
「えっ……」

津川さんの表情が固まった。

「変な語尾をつけるのは何？ 癖と呼ぶにはあまりにも不自然。作っているんでしょう？ オタクの受けをよくするために。平たく言えば、かわいこぶってるのよね。そんな髪型にしているのも、周りからもてはやされたいんでしょう？ 有象無象から金を巻き上げて、あなたは満足？ 周りから可愛い可愛いと言われて、あなたは満足？ あなたのような人間は一概に好きになれないのよ」

厳しい言葉の暴力が容赦なく津川さんを襲う。

「い、伊丹さん。さすがにそれは言い過ぎだよ」

「…あ、ごめんなさい。傷つけようとして言ってるわけじゃないの。私があるあなたを見て思ったことを正直に言っただけ。私の言うことなんか気にしないで」

「……………」

本当にそうなのか？

傷つける気満々のようにしか見えなかったけど。

俺が驚いたのは、そんな言葉を浴びせられた津川さんの反応だった。

てつきり『リヤン様婦警モードに向かってなんてこと言うなりー!!』とか『にやははははは！ 罵詈雑言受けるはコスプレイヤーの宿命なりよ!!』とか、ハイテンションに返すものだと思っていた。

津川さんは、顔を真っ青にして、黙ってうつむいていた。

さっきのような希望に満ち溢れた目の輝きは見るともなく、光を失った目がうつろに足元を見つめていた。

「ごめんなさい」とかすかな声で津川さんは呟いた。

「アタシが……調子に……乗って……ました。今日は……部屋で……休みます」

語尾のことを言われたためか、津川さんはそう言って静かに食堂を後にした。

「っ、津川さん！」

あまりにも見ていられない変貌ぶりに俺は慰めようと声をかけたが、ビクツと肩を震わせて津川さんは廊下を走り去ってしまった。

「……あんなに傷つく人だと思わなかった」

伊丹さんも彼女の反応には驚いたようで、落ち着かない様子だった。

俺だって驚きだ。

非難の声なんかなんとも思わない人だと思っていた。

いや……”そう見せていただけ”というのが真実なのだろう。

気丈で、何があっても明るい人物であると周りに思わせ続けていた彼女の本性は、誰よりも傷つきやすい無垢な少女だったんだ。

俺は思わず伊丹さんを強い目つきで睨みつけていた。

君が何も言わなければ。

君が水を差さなきゃいられれば。

みんな幸せな気分のままだったのに。

ただ、伊丹さんに対してだけではなく、彼女の行いを引き留めるこ

とすらできなかつた自分自身にも同様に腹が立っていた。

「…人には、各々の思想というものがある」

口を開いたのは夢郷君だった。

「ある人には価値のないものでも、ある人には命を懸けても守りたいと思うものがある。ある人にとっては何気ない言葉でも、ある人には身を切られるより辛い言葉かもしれない。伊丹君と亞桐君と津川君の価値観が三者三様に異なるのは当然のことであり、何も否定すべきことではない。ただ、伊丹君。君はそのことに対する“理解”が浅い。

自分の価値観は自分にとって絶対でも、世界にとってそうであるとは限らない。はつきりものを言うことは確かに大事だが、それをすべきでない事象というものも確かに存在するんだよ」

夢郷君は穏やかな口調で、しかし鋭いまなざしで忠告した。

「そ、そうだよ！ 何でもかんでも素直に言えばいいってもんじやないし……」

完全に夢郷君に便乗したただけだが、俺も言葉を連ねる。

「分かってる。そんなこと分かってるわよ……でも……」

伊丹さんは少し苛立たしげに紅茶のカップを握りしめた。

「バカみたい。私って……なんなんだろう」

そしておもむろに立ち上がり、カップを厨房に置きに行った後、
「……謝ってくる」と食堂を後にした。

そこに残ったのは、やはり沈黙。

なんとということだろう。

やはり超高校級と呼ばれる人たちは一癖も二癖もある。

俺なんか口をはさむ余裕もなかった。

もうちよつと自分を主張できるようにならなければ……

「おーやおや、夢郷君に葛西さん!! お暗い顔していかがなさいました? スマイルスマイル!!」

だが、そんな空気の中に救世主が現れた。

入間君だ。

「わたくし、校内を散策してましたところ面白いものを見つけましてね! 『モノモノマシーン』とか言うガチャガチャでして、それはそれは興味深いアイテムが出てくるのですよ! お二人とも、校内で不思議なメダルを見つけましたでしょう? それを投入すると一回引けるのですよ!」

「…さあね。僕はそんなメダルを見た覚えはない」

夢郷君は本から目線をそらさないままぶっきらぼうに答えた。

「そういえば夢郷君は入間君とよく話していたな。友人なのだろうか?」

「俺は持つてるよ。このメダルのことでしょ?」

「そうそう、まさしくそれでございます! さあそうと決まれば早速ゆきましよう! 自分のメダルを使い果たして消化不良だったのでございます!」

言うが早いか入間君は俺の腕を強く引っ張った。

「え? うわっ…!」

そして引きずられるままに一階の端、売店エリアまでたどり着き、死ぬほどガチャを引かされた。

夕食は昼食と同じように全員で食堂に集まって行われた。

しかし、昼と比べて明らかに全員の口数が少なかった。

前木君と土門君は昼にさんざん体を動かしたためか、疲れ切っていたのが手に取るように分かった。

それに巻き込まれた哀れな釜利谷君は、箸を持つのなら億劫なほどうとうとしていた。

俺が一番気にかかっていた津川さんは、辛うじて食事には来ていたが、終始沈んだ表情で黙々と箸を進めていた。

同じく伊丹さんに傷つけられた亞桐さんもムスツとして何も口を開かなかった。

彼女と俺に挟まれた位置にに座る小清水さんは俺に「莉緒ちゃん、何かあったの?」と尋ねてきたが、真実を話すということは小清水さんの伊丹さんに対する印象を悪くしかねない。

わからない、と言っておいだ。

「いやあ、しかし黄金銃だなんて中々面白いものを引きましたねえ、葛西さん！」

こんな時でもうるさいのは入間君だった。

でも、こんな時にはそのうるささが心地いい。

「な、なんと!? 黄金銃とな!? 是非とも吾輩に見せてはくれまいか!?」

食いついたのは安藤さんだった。

この人もぶれないな。

「いいよ……てか、もしよかつたらあげちゃうよ?」

「ぬおおお!? それはまことか!? よおし! 吾輩も後でそのモノモノマシーンとやらを引いてしんぜよう! 景品を交換しようではないか!」

「…そんなことしなくても、普通にあげるよ?」

「いやいや、恩を売られたままでは吾輩の気が済まんてな、楽しみにしておれ!! むわっはっはっは……」

「…うるさい。ご飯の最中」

伊丹さんが苛立たしげに声を上げた。

「ぬ、ぬう!? これは失礼、ちとはしやぎすぎたか…」

安藤さんはしよんぼりとして椅子に座りなおす。

この人も結構傷つきやすいのかな。

それにしても伊丹さん、また言っちゃったよ…。

いつかいじめられないか心配だ。

「あのさ!」と机をたたいて声を張り上げたのは亞桐さんだった。

「あんたって人の揚げ足とることしかできないの!? そーやって人の気持ち嫌にさせて満足!? ウチのことは謝ったからもういいけどさ、もつと空気とか読めよ!」

「まあまあ落ち着いて、スマイルスマイル! 怒りはトークをダメにしていますよ?」

入間君が満面の笑みで緊迫した空気の中に入りこんできた。

「そうですよ、お二人とも! 我々はもう高校生なのですから、些細な

ことで仲違いなんていけません！ 女性同士仲良く、百合百合しておればよいものを！」

そこに丹沢君も仲介に入った。

……百合ってなんだ？

「……ごめん。ムキになりすぎた」

「…安藤さん、ごめんなさい。傷つけるつもりはなかったの」

亞桐さんと伊丹さんは相次いで謝罪した。

「い、いやあ吾輩も少し羽目を外しすぎましたし……なくんにも気になどしておらぬよ!」

安藤さんはそう言っただけでまた先ほどのような高笑いを見せるのだ。た。

「よし、そうと決まればみんなでカラオケだ!!」

突然声を上げたのは前木君……って……

カラオケ??

「知らねーのか？ 食堂の向かいの休憩室にはな、室内カラオケがあつたんだぜ！」

そうなのか。知らなかった。

ほんと、殺し合いなんて馬鹿げた脱出手段を除けば至れり尽くせりだな。

「まえなつく、俺もうそんな体力ないぜ……」

土門君が机に肘をついて言った。

「んだよ、俺より身体でかいくせに情けねーのな！ カラオケでぱーっと盛り上がって疲れを吹っ飛ばすもんだろーが！」

わからない。その思考回路が。

「仕方ねえ、葛西！ 土門の代わりに付き合え！」

……へ？

なんで俺なんだ。

男子はたくさんいるじゃないか……。

しかしその場で断るわけにもいかず。

俺、前木君、安藤さん、丹沢君、亞桐さんの五人で夜時間まで付き合わされた。

といつても、安藤さんと丹沢君のアニソンメドレーをひたすら聞かされるという苦行に満ちたカラオケだったのだが……。



「……ここが、俺の部屋、か」

ホテルのようにきれいに整えられた部屋で、俺は静かにため息をついた。

未だに、きょう一日の出来事が現実とは思えない。

今朝挨拶を交わした家族の顔が目に浮かぶ。

俺は本当にここから出られるのだろうか？

あのヌイグルミは何がしたいのだろうか？

わからない。

ダメだ。今はやめよう。

何も考えず、気楽に過ごそう。

落ち込んだり絶望したりなんてしない。

なぜなら、俺には同じ境遇の仲間がいる。

知り合ったばかりで互いのこともよく知らないが、ここから出たい

のはみんな同じだ。

大丈夫。何も怖くなどない。

恐れてはいけない。

俺は希望なんだ。

chapter 1 (非) 日常編②

ベッドの上、混濁した意識が少しづつはつきりとしてくる。
寝ているような寝ていないような、微妙な感覚の中を一晩中さまよっていたような気がする。

目が覚めたらここは家の中で、何事もなく俺は家族と顔を合わせ、朝食を摂る……。

そうなつてくれればどんなにありがたかったことか。

だが、俺がその朝最初に見たのは、見慣れぬ天井だった。

そして最初に聞いたのは、あの耳障りなヌイグルミの声。

「おはよう、オメーラ！ 7時だぞ！ 起床時間だ！ 今日も頑張れよな！」

ああ……。

これは、本当に現実なのか。

昨日さんざん確認したのに、まだそれが信じられなかった。

他のみんなは何も思わずこの生活を受け入れられているのだろうか？

考えても仕方がない。

腹も減ったし、食堂にでも行こう。

食堂に着くと、早速「おはようございます！」という丹沢君の挨拶の洗礼を受けた。

彼が読んでいるのは休憩室に置いてあった漫画雑誌のようだ。

「あ、ああ。おはよう」

「葛西君、おはよう！」

丹沢君に続いて、優しい笑みを浮かべた小清水さんが声をかけてきた。

「大丈夫？ よく眠れなかった？」

逆に元気そうにしている小清水さんはよく眠れたのだろうか？

この状況下で不安を抱かずにゆつくりできたのだろうか？

昨日の彼女の言葉通り、本当に学者とは自由奔放な人たちなんだ

な。

「おはよう。俺は大丈夫だよ」

小清水さんに心配をかけるわけにもいかず、とりあえずの返事を返して席に着いた。

「俺も昨晩は不安で眠れねーかと思ってたんだけどよ、いつの間にか爆睡してたわ！」

土門君がそう言って高らかに笑った。

「土門君ったらね、私より起きるの早かったのよ。最初が彼で、次が私で、次が丹沢君で……あとはほとんどみんな同時かなー」

小清水さんがテーブルの周りの面子を一瞥しながらそう言った。

ここには相変わらず療養中のリユウ君と来る気がないであろう御堂さん、それと前木君と安藤さんと津川さん、山村さん、釜利谷君、入間君がいない。

……って結構いないじゃないか。

「あ、巴ちゃんと入間君とリヤンちゃんは今朝食作ってくれてるのよ。入間君がフレンチの腕前を披露したいんだって」

入間君のフレンチ……。

極上級の味を作り出してくれる可能性もあるが、その一方でゲテモノを携えてくる姿も容易に想像できるから恐ろしい。

「あー、ねむ……。土門さー、早起きの秘訣とかあるー?」

机に突っ伏した体制のまま亞桐さんが低い声で尋ねる。

「んあ? 秘訣なんて特にねーよ。体が勝手に五時には起きるようになってんだ。ま、流石に11時過ぎて起きてるときついけどな」

なんて規則正しい生活だ。

俺なんて小五の頃には既に日付を超えて起きることを覚えてしまったというのに。

「うわー、うらやま……。やっぱ仕事柄早く起きなきゃダメな感じ?」

「まあ、大工つてのは早朝から仕事することもあるからな。でも、そこまで仕事に影響されたわけじゃねえよ。親父が元々早起きだったから……」

そこまで言って土門君は不意に言葉を止めた。

「……いや、まあ、そういうことだ」

今の間はなんだったのだろうか。

気になるが、好き好んで尋ねる話題でないことだけは確かだ。

「お……おはふおー……ぐふあいまひゅ……」

ふらふらとした足取りで遅れて食堂を訪れたのは安藤さんだった。

髪はボサボサで目にはクマができており、徹夜していたのが一目でわかる。

「安藤殿！ あれだけ徹夜で描いてはいけないと注意いたしましたのに！」

丹沢君が語調を強めて安藤さんを叱りつける。

「いやあ……しかし……あいであ……とは……その時らけの……もの……でふから……思いついたときに……描かねば……いかんと……思いまふいて……」

たわごとのように呟きながら、亞桐さんのアシストを受けて安藤さんはやっと席に着いた。

「ご飯食べたら一旦部屋に帰って寝た方がいいと思うけど……」

困惑した表情で小清水さんが告げると、安藤さんは「そうさせてもらうでござるでありますだぴょーん」と敬礼しながら答えた。

漫画家って普段から徹夜しまくってるんだと思っていたけど、意外と安藤さんは慣れていないんだな……

この壊れっぷりを見ると慣れてないのがよく分かる。

「しっかし、まえなつと三ちゃんも遅いな」

土門君が腕を組みながら不機嫌そうにつぶやく。

“まえなつ”は前木君でいいとして……“三ちゃん”は釜利谷君のことだろうか？

このままじゃ俺も“ゆつきー”とか呼ばれかねいな。

というかむしろ呼ばれたいと思っている自分がある……

と、噂をしていると。

「ういー、おっはよーでーす……」

あか抜けた声で前木君が入ってきた。

見ると、なんと彼は眠りこけた釜利谷君の肩を持っているではないか。

肩を組んだ状態ながら、釜利谷君はしっかりとこうべを垂れて熟睡していた。

この睡眠根性、凄すぎである。

「か、釜利谷君！ この期に及んで寝ているのですか!？」

丹沢君が慌てて前木君が持っている腕とは反対側の腕を持ち、釜利谷君を席に座らせた。

「ふう、さんきゅー。三ちゃんつたらよー、まともに運動したの半年ぶりとかだつたらしくて、疲れて全く起きねえのな。二十分くらいチャイム鳴らしまくつたら鍵だけ開けてくれたんだけどよ。扉開けたら扉の前で倒れてやんの。だから仕方なく俺が運んできてやつたんだよ」

まさか、俺の知らないところでそんな激闘が繰り広げていたとは。

「ああ、ごめんな。せっかく早起きしてたんだから、俺が気づけばよかつたな」

土門君が頭をかきながら言ったが、「いや、別に大丈夫だよ」と前木君は席に着いた。

「はあ、朝から体力使っちゃったな。飯まだかー?」

はっはっは、と高らかな笑いが厨房からこだまする。

見ると、エプロンに身を包んだ人間君が料理の並んだ皿を両手に持って厨房から出てきていた。

「いやあ、皆さんおはようございます! Good morning !! よい朝は良い朝食からはじまります。わたくしのスペシャルフレンチで生気を養いま show time!!」

相変わずよく分からないテンションで料理を運ぶ人間君。

「おはようございます、皆さん! 本日もよろしくお願いします!」

後に続いて出てきた山村さんはそう言って律儀にお辞儀をした。

「お、おはよう……なり……。えへへ……」

愛想笑いのように引きつった笑いを浮かべる津川さんも厨房から

出てきた。

まだ昨日伊丹さんに言われたことを引きずっているのだろうか？

でも、語尾が戻っているということは一応の仲直りはしたのだろう。

早く元気な姿を取り戻してほしいものだ。



結論から言うと、入間君のフレンチの味は悪くなかった。

逆にリアクションに困るぐらい普通においしかった。

ただ：どんな焼き方をしたのか知らないが鋼鉄のように固いフランスパンにだけは各々苦戦しているようだった。

「…さて、今日はどうしようかな」

何気なく食堂を後にした俺は、早速前木君に目をつけられた。

「おおつ、葛西じゃねーか！ お前も来いよ！ バドしようぜバド！」

「ええ？ 運動はあまり…」

後ずさろうとする俺の腕は前木君の横に立つ土門君にがっしりと掴まれていた。

「よおし、決まりだ！ ホール行くぞっ！」

横を見ると、釜利谷君も土門君に捉えられているではないか。

「やめろやめろクソ野郎が!! なんで寝かせてくれねえんだよっ!!」

流石に腕を引っ張られても寝ている余裕はなかったのか、そう叫んで必死に抵抗している。

俺も同じ運命のようだ…。

無駄に抵抗するのはやめておこう。

そしてこの後、俺は限界までバドミントンをさせられたのだった……。

「はあ……はあ……」

俺は息をついてホールの床に寝っ転がっていた。

前方では依然として前木君と土門君がラケットを振るっている。

もう、へとへとだ。

思えば、中学でも文化部に所属していた俺にとってこんな本格的な運動なんて縁がなかったのだ。

下手すぎて三人のうちの誰にも勝てないし。

何しに来たんだ俺は。わざわざ負けに来たのか？

などとふてくされながらちらりと隣にいる釜利谷君を見た。

寝ているのかと思っただが、意外と真剣に二人の試合を見つめていた。

食事の前ですら寝ていたのに、スイッチの切り替え場所がよく分からない。

「…なんだよ」

見つめられたのが不快だったのか、釜利谷君がそう言ってきたので慌てて俺は視線を試合の方に戻した。

「い、いやあ。眠くないのかなって」

「フン、いつも眠くて悪かったな」

しまった。完全に失言だった。

「面白いことしていると眠くなくなるんだよ。お前だってゲームしてるときは眠くならないだろ？ 脳はそういう風にできてんだよ」

…まあ、理屈はわかるが、釜利谷君の場合はいささか極端すぎはしないだろうか？

「じゃあ、バドミントンが面白いってこと？」

「…フン。ちよつとだけな。体動かすのはあまり好きじゃなかったけど、やってみたら意外と悪くなかった。それだけだ」

確かに、釜利谷君はインドア派に見えるがなかなかバドミントンは上手かった。

前木君とほとんど互角、体格のいい土門君ともそこそこ戦えていた。

……だからこそ、俺の下手くそっぷりが余計に浮いたのだが。

「俺は自分が楽しいと思うことしか極力しないことにしてんの。楽しいくないことをしたって時間の無駄だろ？俺は人生つつー限られた時間を最大限に使いたいワケよ」

自分の楽しいことだけをする…。

簡単なことのようにだが、人生はいいことだけで構成されてるわけじゃない。

俺にとって脚本を書くのは楽しいことなのだろうか？

少なくとも苦ではない。

楽しいと思う瞬間はたくさんあるしお客様の反応を見るのもとても幸せな気分にはなる。

だが、それが義務になつてはいないだろうか？

お客様に何かを訴えかけること、それがいつの間にか義務になつてしまっているのではないか？

本当に俺は、心から脚本制作を楽しめているのだろうか？

「義務で仕事するようになったらおしまいだぜ。俺の親父みてーにな」

俺の胸中を察するかのように釜利谷君は呟いた。

「俺の親父は…はつきり言やあ、凄腕だったよ。脳手術の神様って呼ばれるくらいにはな。だが、その凄すぎる技術が親父をダメにした。…いや、もつと言えはその凄すぎる技術への向き合い方だな。自分の技術に誇りを持ってた親父はできる限り多くの人を救おうとした。寝る間も食べる間も惜しんで、だ。当然過労でぶっ倒れた。今も入院中だよ」

タブーと思い触れてはこなかったが、彼の父…釜利谷医師は先月ほど、突然過労で倒れ、大きな話題となった。

息子である彼の心中はいかばかりだろうか。

「結局自分が医者のお世話になって病院にも患者にも迷惑かけてやがる。だからダメなんだ。仕事を義務だと思ってやるからそんなことになる。人間なんてのは、楽しめることだけしてりゃいい。俺は脳の研究は興味深いと思う。だから続けてる。でも、自分が苦しみそうに

なったらそれ以上手は出さねえ。そう生きるのがベストだって親父から学んだんだよ」

自らの思いを切実に独白する釜利谷君の口調は、心なしか少し怒気のような、しかし寂しさのようなものも含まれているように感じた。

「…葛西。お前にとって脚本を書くのは楽しいか？　それが、ちゃんとした“天職”になってるのか？」

「…分からない。この仕事を楽しめているのか、俺にはよく分からないんだ。でも…それでも俺は脚本を書きたい。これは義務じゃなくて…たぶん意欲だと思う」

俺は自分の思っていることを率直に述べた。

楽しめているかは分からないが、今も俺の心のうちに湧き上がる“

脚本を書きたい”という意欲は本物だ。

ならば俺はその意欲に率直でいたい。

「そーか。なら続けりゃいいんじゃないか？」

釜利谷君はそれだけ言って床に寝っ転がり、いびきをかいて眠り始めた。

彼のこのだらけた態度にもちゃんとした理由があるのだと分かり、少し彼への見方が変わったような気がした。

「ふうー！　疲れた疲れたー！」

ちょうどその時、土門君と前木君の二人がバドミントンを終えてこちらに歩み寄ってきた。

「いやー、やっぱ体を動かすって楽しいなー！」

土門君が背伸びをして床に座り込みながら言った。

「ふう、俺はヘトヘトだわ……」

一方で前木君は喋る余裕もないようでゴロンと釜利谷君に並んで床に寝っ転がってしまった。

前木君が体力限界で土門君がまだ余裕そうという様子は昨晚とは逆の構図だ。

「二人とも、俺の部屋に来ねえか？　休みがてら適当にダベろうや」

そういう土門君の誘いで、俺と前木君は土門君の部屋を訪れることとなった。

爆睡する釜利谷君を置いてきぼりにしたのは少し気になるが……。



「おじやましーす」

土門君の部屋にはビニールシートや作業着の替えなどが整然と並べられていた。

大ざっぱそうで意外とまめな彼の性格をよく反映している小奇麗な部屋だった。

俺と前木君は部屋に置いてある椅子に腰を下ろす。

「俺の私物は大体ここに届いてたんだがな、工具だけが見当たらねえ。大方、あの鉄板を外されるのが嫌であのヌイグルミが盗みやがったんだろうな」

土門君が不機嫌そうに監視カメラを睨みながら呟く。

「まあいいや。俺のオススメの麦茶があるからよ、遠慮せず飲め」

そう言つて彼は部屋に備え付けの小さい冷蔵庫からペットボトルに入った麦茶を取り出し、コップに注いでくれた。

「んぐつ…ぷはーっ！ いやあー、汗かいた後のキンキンに冷えた麦茶はサイコーだな！」

前木君が麦茶を一口で飲み干すと気持ちよさそうにそう言った。

俺も後に続いて麦茶を飲んでみると、まるで山奥の溪流の水を飲んでるかのような冷たさと心地よさが喉の奥を通り抜けていった。

「ああ……おいしいい…」

思わず声が漏れていた。

「へへっ、だろ？ ま、俺が作ったんだけどな」

土門君はお茶目に笑いながらベッドに腰掛けた。

「へえー、お前麦茶作るの上手いんだな！」

前木君が褒めると、土門君は「慣れだよ慣れ」と頭をかきながら答えた。

「下積み時代は結構パシ리적인仕事ばつかやらされてたからなあ。親父の手伝いすらやらせてくれなかった」

「じゃあさ、設計とか始めたのも結構最近なのか？」

「いや、建築業の勉強はガキの頃からしてたな。大工仕事は体の訓練だけどそっちは頭の訓練だからさ。並行してやってたんだ」

昼は肉体労働をさせられて、夜は建築業の勉強……。

想像したくもないほどハードなスケジュールだ。

あんなに規則正しい生活ができるようになるわけだ。

「まあ、どっちも楽しいから俺は大好きだけどなっ！ 体動かすスポーツは好きだけど、俺が一番好きなスポーツは間違いなく大工仕事だな！ 豪快な作業も繊細な作業もできて、その場にいる全員と協力できるし、何より完成した時の爽快感ったらサイコーだからな！」

大工仕事をスポーツに含めてよいのかどうかは別として、そう語る土門君の表情は生き生きとしていた。

「あ、そーだ！ 俺が今温めてる“最高傑作”の設計図を見せてやるーか？」

…最高傑作？

「なんだそれ！ 見たいぞー！」

前木君の声に答えるように土門君は机の上に一枚の紙切れを広げた。

机の上の紙面には、見たこともない世界が広がっていた。

きめ細かい方眼紙の上に刻まれた細い細い線の数々……。

そこに重ねられた注意書きや記号の数々。

そう言ったもの一つ一つは到底俺に理解できるものではなかったが……。

全体像をぼんやりと見てみると。

「これ……タワーか？」

前木君が呟く。

「その通り。こいつは全高1000m以上の世界最大級のタワーになる。こいつを希望ヶ峰のすぐ近く、都会のど真ん中に建てらるって計画が今現在進んでるんだ」

「マ……マジでか……？」

前木君が言葉を失うのも無理はない。

そんな夢みたいな話が現実存在するなんて。

「やーれやれ、こんなところに閉じ込められたせいで建設がちよつと遅れちまうかもな？」

土門君は冗談めいた笑いを飛ばしたが、話のスケールが大きすぎて俺と前木君にはついていけない。

「ま、こいつを完成させるのがとりあえず俺の今後のノルマだな。親父が引退したら本格的に海外の建物も手掛けよっかなーって思ってる」

本当に、次から次へと別次元の言葉が飛び出してくる。

いずれ彼は凱旋門やサグラダ・ファミリアのようなものも平気で建ててしまうのではないだろうか？

とにかく、土門君もまたしつかりとした夢や目標を持つ“希望”の一員であることは分かった。

「すっげえよなあ、超高校級のうんたらって連中は。俺なんかこの学園に来たはいいけど、なんも目標とかないんだよなー」

前木君がつまらなそうに呟く。

「…俺は別にそれでいいと思うけど。何かに縛られて生きなくても、自分の樂しめることだけをやって生きててもいいと思う」

釜利谷君にさつき教わったことの受け売りだが、俺のアドバイスに前木君は「そうかねえ……」と頭をかく。

「ぶっちゃけ、俺って生まれつき幸運ってわけでもねーし。ホントにたまつたま希望ヶ峰に抽選で選ばれちゃったってだけでさ。なんかみんなみみたいな才能の塊と一緒にいんのが申し訳なくなるっつーか」
ため息とともに前木君は薄暗い表情でつぶやいた。

あれだけ明るくて、能天気な彼がこんなことを思っていたなんて……。

いや、だからこそ明るく振る舞っていたのかもしれないな。

「まえなつ、何言ってるんだ！俺だって建築業なら自信はあるが、それ以外のことはしてんで常人並みだ！他の連中だつて自分の分野以外じゃあみんな凡人なんだぜ？丹沢なんて“ふいぎゆあ”？だか

なんだか知らねーけど、才能からしてよく分かんねーし！ 気にすることねーよ！」

いやあ、流石にその言い方は丹沢君に失礼だと思うけど…。

「うーん、そうだなー。申し訳ねえ！ 俺とすることが変なことで落ち込んでたわ！ 俺は幸運で希望ヶ峰に選ばれたんだもん！ 幸運なら誰にも負けねえつもりでいねえと！」

ともあれ、前木君が元気になってくれたようでよかった。

そこで、俺はポケットに入っていた“あるもの”の存在を思い出した。

「…あ、そうだ。これ、君にあげるよ」

俺のポケットに入っていたのは、折りたたまれた一枚の札だった。

「この階の隅っこの売店にあるモノモノマシーンだったので当てたんだ。持つてると自分の運勢が増幅するらしいよ」

確か同封の説明書にはそんなことが書いてあった気が。

もともと運勢の強い前木君にはぴったしのアイテムだろう。

「おおー！！ すげーじゃん！！ これ俺にくれんのか!? マジサンキュー!!」

前木君は子供のようにおおはしやぎである。

「ここまで喜んでもらえるとあげたこっちも嬉しくなるな……！」

「ははっ、よかったじゃねえか！ 葛西、俺にも今度何かくれよ！」

土門君のお願いに、俺は「もちろん」と答えた。

こうして俺たちは有意義な日中を過ごしたのだった。



忌々しい鉄板のせいで外の様子は分からないが、時計によれば今は

夕方の五時ごろ。

正直、いつ脱出できるかもわからない場所でこんなのにんびりしていいのかという思いはぬぐいきれなかったが。

“みんながのんびりしているからいいや”という思いの方が今では強い。

この空間でこうして過ごすことに、俺は早くも慣れてしまったのかもしれない。

「ん？ あれは……」

俺は保健室に入っていく人影を追いかけた。

「こんちには。具合は大丈夫？」

保健室には、ベッドに寝ているリュウ君とその横に座る山村さん、その隣に座る小清水さんがいた。

「…葛西か。大事ない。この通りだ」

リュウ君は俺を見るとゆっくり起き上がり、その言葉とともに右腕をぶんぶんと振り回し始めた。

「ちよつと、やめてください！ 傷が開いたらどうするんですか!!」

それを山村さんが慌てて引き留める。

「心配ないと言っているだろう。たかが腕だ」

その“たかが腕”という言葉の意味が全く分からない…。

「山村よ、俺はもう看病など必要としていない。なぜそこまで俺に執着するのだ？」

ちよ、そんな聞き方していいのか？

いらぬ誤解を生みそうなのだが……。

「執着なんかじゃないです！ 私の責任でこんな大怪我をしちやつたんだから……当然の義務なんです」

山村さんはうつむきながらそう呟く。

そんな二人の様子をただ眺めていた俺だったが、突然小清水さんに腕を引かれて手繰り寄せられた。

「結構アツアツじゃない？ あの二人」

小清水さんは満面の笑みで俺にそう囁いてきた。

「え、ああー…そうかな…？？」

俺はそんな曖昧な返事を返すことしかできなかった。

「何を言っている。お前は同胞たちを守ろうとしてあのようなことをしたのだろうか？ なにも責められるようなことはない」

リュウ君は平然と述べるが、山村さんは「そんなことない！」と強く首を横に振った。

「私が……私がもつと強ければよかったです。少なくともあなたと同じぐらい強ければ……あなたは怪我を負うこともなかったのに……」

正直言つて山村さんの実力も十分人間のレベルではないと思うのだが……。

「なぜそこまで強さにこだわる？ 強すぎる力は絶望しか生み出さないと俺は思っている。強さが全てではないのだぞ」

「すべてに決まっているじゃないですか!! 私は空手家なんですよ!?!」

山村さんは大きな叫び声をあげた。

さつきまで二人をからかっていた小清水さんも俺も、このシリアスな流れには黙っているほかなかった。

「……すいません。一つ、身の上話をしてよろしいでしょうか？」

「……ああ。言ってみろ」

一息ついてから、山村さんは話し始めた。

「ご存じのとおり、私は幼いころから空手の道を志してきました。血の滲むような訓練と努力、その果てに栄光を何度も掴むことができました。それでも私は傲慢にならないよう、常に自分を戒めてきました。まだ足りない、これで満足してはいけないと。」

……そんな中。ついに現れたんです。私の意地とプライドを粉々に踏み砕いた女性が。

“大神さくら”というお方をご存知でしょうか？ あの人が私の生涯にわたる宿敵だと思っています。彼女の本領は総合格闘技。空手は彼女が学んだ武道の一つに過ぎなかったのです。それなのに……。私は彼女に叩きのめされました。完膚なきまでに。私は彼女の忙しいスケジュールの合間を縫って何度も彼女と戦いました。何度も何度も何度も何度も何度も何度も……。なのに!!! 年々も

下であるはずの彼女に!! 私は何度でも叩き潰されたんです!! こんな……こんな屈辱がほかにありますか!?!」

興奮する彼女の周りには、いつの間にかあの赤いオーラが立ち込めていた。

「勝ちたい……。勝ちたい勝ちたい勝ちたい勝ちたい勝ちたい!! 勝ってやる……。!! たとえこの身が裂けて血反吐ブツ吐いても……。ぜってーに……。ぜってーに勝ってやらあああああああ!!!」

闘士の雄叫びが空間を震わせる。

「うわあああああ!!!」

この時の山村さんは完全に昨日、モノパンダに戦いを挑んだ時の彼女だった。

「ちよ……巴ちゃん落ち着いて!」

小清水さんの制止も聞かず、山村さんはリュウ君の襟に掴みかかった。

「テメーに何が分かる!! 死ぬ気で訓練して、死ぬ気で戦ってきたオレの辛さが、テメーに分かるってのか、ああ!?!? クソがあ!!! なんて勝てねえんだ!! なんて勝てねえんだよオレはああああ!!!」

そう叫ぶ山村さんの目には涙すら浮かんでいた。

一生懸命練習してきたのに勝てない辛さともどかしさが俺にもひしひしと伝わってくる。

「そんなだから負けるのだ」

そんな彼女の胸を、リュウ君の言葉の弾丸が貫いた。

山村さんの表情が固まった。

「そんなことを思っているのはお前だけじゃない。お前が倒してきた人間の中には、お前よりも年上で、凄絶な訓練を積んできた人間だっていたはずだ。そう言った連中は潔く自分の負けを認めて、その上で

さらなる高みを目指しているはずだ。なぜお前にはそれしきのこと
ができない?」

山村さんの顎から涙がポタポタと零れ落ちる。

「頑張ったのに勝てない」。それしきの不条理は世の中に五万とあ
る。そんなことにいちいち駄々をこねていてどうする? 本当に勝
ちたければ、まずは自分を見つめなおすことだな。俺が思うに、大神
さくらはそれができる人間だ」

場に沈黙が走る。

リュウ君の言うことはすべて正論で、そこに反論の余地はなかつ
た。

オーラを消し去った山村さんは、ふうーつとため息をついて。

ドン、と。

まるで段ボールを一気に潰すかのような音が響いた。

「えっ……!」

俺は啞然として言葉を失った。

山村さんは自分の右拳を自分の頬に叩きこんだのだ。

「ちよ、巴ちゃん……!」

小清水さんはガクリと頭を落とす山村さんに歩み寄る。

しかし、山村さんはすぐに顔を上げ、満面の笑みを浮かべてリュウ
君の手を取った。

「ありがとうございます!! 心に染みわたりました!! 本当にありが
とうございます!!」

「…自分を痛めつけろと言ったつもりはないのだが」

「いえ、おかげで心機一転できました!! これで私は…また強くなれ
ます!!」

真っ赤に腫れた頬が痛々しいが、それだけ彼女が自分を殴ることに
迷いがなかったという表れなのだろう。

そこで俺は思い知った。

彼女は強い。

あまりにも強すぎるんだ。

自分を鍛えるためなら、本気で自分を痛めつけることも全く辞さないほど、彼女は向上心に溢れているんだと。

もう一度「ありがとうございます!!」と言うと、山村さんは慌ただしく保健室を駆け出した。

「ちよ、ちよつと巴ちゃん!! どこ行くの!?!」

小清水さんが廊下に顔を突き出して尋ねると、「稽古ですー!!」と廊下中に響きそうな大声が返ってきた。

そのひた向きさには憧れてしまうな。

「……………巴ちゃん、無理しないといいんだけど」

小清水さんは心配そうに保健室の扉の方を見つめていた。

「難儀な女だな…。強いことに間違いはないが」

リュウ君はため息とともに呟いた。

山村さん以上の実力を匂わせ、彼女に強さの何たるかを説いたリュウ君。

彼は一体、何者なのだろうか？

今の彼に聞いたところで、答えてはくれないだろう。

ただ一つ分かるのは――。

『強すぎる力は絶望しか生み出さないと俺は思っている』

彼が並大抵の人生を歩んでいるわけではないらしいということだ。

「葛西君」と呼ばれ、俺は小清水さんの方へ振り返った。

「今日は仲良くなれた？ いろんな人と」

その口調はまるで、高校初日の出来事を尋ねる母のようだった。

「ええと……まあ……それなりには、ね」

「そう。よかった」

クスリと小清水さんは笑った。

「殺し合いなんてさせられるわけにはいかないもんね。みんなで仲良くしなきゃ」

その言葉で俺は自分が置かれている奇怪な状況を思い出した。

俺たちは殺し合いを強要されているんだ。

それは、今日一日の楽しい思い出が消し飛んでしまいそうな、辛く厳しい現実だ。

「どうしたの？ そんな怖い顔しないで」

小清水さんはそう言って俺の顔を覗き込んできた。

「うわわっ！」

彼女の顔が至近距離に近づいてきたので俺は思わず後ずさってしまった。

「ウッフ。さあ、夕食に行きましょ？ 巴ちゃんも呼んでこなきゃー！」

「あ、うん！」

保健室を飛び出していく小清水さんに続いて俺も廊下へ駆け出した。

ふと振り向くと、リュウ君が小さく笑みを浮かべてこちらに向けて軽く手を振っていた。

ああ……

もし俺たちが、この学園で普通に出会って普通に仲良くなっていたなら。

この楽しい時間が永遠に続いてくれたなら。
どんなによかったらうか。

そんな儂い願いを抱きつつ、二日目の生活は終わったのだった。

chapter 1 (非) 日常編③



こんなに楽天的でいいのかと思ひ悩んでしまうほど穏やかな朝がやってきた。

「おはよう、オメーラー！7時だぞ！ 起床時間だ！ 今日も頑張れよな！」

穏やかな朝を飾る音声は、小鳥のさえずり…ではなく、あの耳障りなモノパンダのアナウンス。

まだこうして迎える朝は二回目だというのに、そして状況が状況だというのに、やけに心は落ち着いている。

まるで、何年間もこの部屋で過ごし続けていたかのような不思議な安らぎを感じる。

…：…などと、のんきなことを言っている場合じゃないんだ。

本当に、ここに助けは来るのだろうか？

携帯もいつの間にか奪われていて連絡もつかないのだし、もうそろそろ家族が不審に思っけていてもおかしくはないはずだが…。

「あ、葛西。おはようー」

食堂に入ると、亞桐さんの挨拶で迎えられた。

「おはようございませう」と丹沢君、「おはよう」と笑みを浮かべるのが小清水さん。

「よお」と元気に手を上げて挨拶してくるのが土門君で、「おはようござます！」と一礼するのが山村さん。

「おつすおつす」と安藤さんが一風変わった挨拶を飛ばしてくる。なんでだろう。

この挨拶の光景も、不思議と慣れていくように感じてしまうのは。

まだ三日目なのに、ずーっと一緒に暮らしているような錯覚。

これはいったい何なんだろう？

…と、何気なく食堂を見回すと、離れたテーブルではあるが御堂さんも座っていた。

椅子に深々と座り、足を組んで休憩室にあったと思われる工学系の雑誌に目を通している。

昨日は全く姿を見かけなかったので少し心配だったが、普通にしていて彼女の姿を見て安心した。

と思ったのもつかの間。

「物珍しそうにじろじろと見るな」と雑誌から目を離さないままの彼女に凄まれ、俺は慌てて視線をそらしたのだった。

どうやって俺の視線に気づいたのだろう…？

「おはようございます！」と厨房から顔を出したのは入間君だった。

また料理の担当を買って出たようだ。

「先日はフレンチをお届けした私ですが、今回はなんと！ イタリアンをご提供いたします！ 濃厚なピッツアにフレッシュなサラダこそ朝食にはふさわしいでしょう？」

朝からピザというのも中々お腹には重たいと思うが…。

そんなこんなで入間君のイタリアンがテーブルに並べられた。

前も言ったが、彼の料理は決して味は悪くないのである。

むしろ一般のレストランと比べても遜色ないくらいには上手だ。

チーズの良い香りが鼻をつく。

それに呼応するように胃がグーと音を立てる。

「おい、どういうつもりだ」

背後から棘のある言葉が飛んできた。

振り返ると、御堂さんが目の前に立つ入間君を睨みつけていた。

「どういうつもり、とは？ あなたの分のイタリアン！ を運んだだけですが」

「私は私の作ったものを私のタイミングで食べる。貴様から恵んでもらういわれなどない」

御堂さんは明らかに苛立った口調で入間君を威嚇するが、彼はお得意の高笑いでのらりくらりと怒りをかわしている。

「おやおや、それではなぜあなたはここにいらつしやるのですか？

皆様と一緒にお食事に興じたのではないので？」

「ふん、誰が。貴様らの他愛ない会話から少しでも脱出の手がかりを得ようと思っただけのことだ」

「はっはっはー。では私から情報を得るための秘訣をお教えしましょうか？ それはトーク、そしてスキンシップですよ！ 他人との関係を良好にしてこそ核心に触れることができます。お分かりですか？」

「私に向かって説教か。実に忌々しい男だ。私には私のやり方がある」

「そうおっしゃらず、せつかく作ったのですから食べてくださいよ、ね？」

入間君の執拗なアピールに根負けしたのか、御堂さんはため息をついて「分かった」と答えた。

「ならばお前が先に毒見をしろ。私の目の前でな。この中に殺人を議論む者がいないという保証はないのだからな」

御堂さんが不愛想に放った一言は、その場を凍り付かせた。そう。

俺たちは殺人を強いられている。

誰かを殺さなければここから出られないというモノパンダの言葉が脳裏によみがえる。

忘れてはいけない。

それが現実なんだ。

「バカみたい」と口を開いたのは、伊丹さんだった。

「そんなルール気にしてるの、あなただけよ。誰も信じられず、殺人なんて概念に怯えてるなんて、可哀想な人」

「あらゆる可能性を加味する」のが貴様の信念ではなかったのか？

まあ、一番毒を盛りそうな疑いがあるのは薬剤師に間違いないだろうがな」

「あのさあ…ほんと勘弁してよ、そういうの」

亞桐さんが呆れと怒りの混じった声で注意した。

「全くだよ。そういうこと言わなければ誰も殺意なんて芽生えないだ

ろうによ」

前木君がそれに続く。

「能無しどもめ…。昨日一緒にになってバカ騒ぎしていた友人の姿が本当の姿だと思っっているのか？」

「おいおい、そりやどういいうことだ」

土門君が不審げに尋ねると、御堂さんは不敵な笑みを浮かべた。

「昨日、お前たちはそれぞれ数人で群れて騒いでいたようだが、そうやって騒いでいる間にもそいつらのうちの誰かが殺人の計画を考えていたかもしれないと言っているんだよ」

御堂さんの言葉が俺の胸に突き刺さった。

そして俺は、昨日一緒に過ごした人たちの顔を見ていた。

彼らのうちの誰かが、昨日一緒に過ごしたあの楽しい時間の合間に……誰かを殺す計画を着々と練っていたというのか？

「バカじゃないの？ 群れることすらできない人の負け惜しみにしか聞こえないけど」

伊丹さんは毒を吐きながら平然と紅茶を啜っている。

「そう思いたいなら思っている。どちらが本当の馬鹿かは、お前が死んだときに判明するのだからな」

「ストップストップストップ!! この話題はおしまい!! はいはい、やめやめ!!」

またもや丁度いいタイミングで入間ストップがかかった。

「要は、わたくしがあなたの食事を毒見すれば済む話でしょう？ 構いませんよわたくしは！ さあさ、そうと決まればわたくしは御堂様の目の前で食事をいたしましょうか！」

そう言っただけで入間君はそそくさと自分のプレートを御堂さんのテーブルへと運んでいった。

まさに冷や汗もの、一触即発の状況だった。

また俺は何も口出しすらできなかった。

「両者の迫力に気圧されて仲裁すらできませんでした…。いやはや恥ずかしい限りです」と反省する丹沢君を責めることはできない。

どうしたら御堂さんは俺達に心を開いてくれるんだろうか……。



食事が終わり、再び各自解散して自由時間となった。

「葛西殿、それに釜利谷殿と安藤殿。お時間はございますか？」

「うん…？ 大丈夫だけど…」

丹沢君に呼ばれ、連れていかれた先は…：…なんとトラツシユルームだった。

入り口からすぐのところにはシャッターが下りており、それ以上先に進むことができなかった。

「モノパンダからこの場所の説明を依頼されました。お三方とも、まだ自室の部屋のゴミを捨てたことがないでしょう？」

「あ……」

すっかり忘れていた。

はじめはモノパンダが勝手にゴミを持って行ってくれるのではないかと淡い期待を抱いていたが、まったくそんなことはなく、今となってはゴミ箱の横には満杯のゴミ袋が並んでいる…。

「うぬぬ…：…仕事が忙しくて忘れておったわ…」

「はー、ゴミ捨てとかメンドクセー。誰かやってくれればいいのにな」

「そうおっしゃらずに！ ここはモノパンダの悪意に溢れた部屋なのですから！」

「モノパンダの…：…悪意…：…？」

「その通りです！」と丹沢君は横の壁に取り付けられたスキャナーのような装置を指さした。

「まずはあの装置に電子生徒手帳をスキャンします。このように」

そう言って丹沢君は自らの電子生徒手帳をスキャナーにあてた。

すると、スキャナーについているライトが緑色に光り、シャッターがゆっくりと上がり始めた。

シャッターの奥には、焼却炉と思われる大きな機械が鎮座していた。

「なるほど、あれにゴミを放り込むのだな！」

安藤さんが納得したようにうなずいた直後、「詰めが甘いですぞッ!!」と丹沢君の怒号が飛んできた。

「ゴミを放り込むのは正しいのですが、油断していると……ほら!」
丹沢君が言うと同時に、シャッターがゆっくりと降りてきた。

「ええ、こんなに早くシャッターが下りるの!?!」

「それがこの場所の恐ろしいところです! 一旦閉じ込められると他の人に開けてもらわない限りここから出ることができないのです! どういう意図かは知りませんが、まことに厄介なものです…」

『失礼なっ!!』

聞きなれた、しかしもう聞きたくはない声が響いた。

「ぬう!? モノパンダ!? 出て参れ!」

安藤さんが変な構えをとりながら叫ぶ。

「もう出てますよーだ!!」

「うわっ!」

いきなり背後で言われたので、俺は驚いて振り返った。

目前には、確かにあの忌々しいヌイグルミ……モノパンダがいた。

昨日一日姿を見なかったせいで若干印象が揺らいでいたが、俺たちに殺人を起こさせようと企む悪の権化であることに間違いはない。

今にも踏みつけてやりたいが、そんなことをすれば命の保証はない。

それが余計に腹立たしい…。

「あのなあ、これはオイラの心遣いなんだぞ? 退屈な共同生活で飽き飽きしないように、日常の何気ないところにアクティブなエッセンスを加えてあるの! その方が楽しいだろ?」

「確かに!」と即同意する安藤さんも安藤さんだ。

「なんと! それだけのためには昨日入間君は五時間もここに閉じ込められる羽目になったのですか!?! 何と許しがたき所業か!」

丹沢君は右手を握りしめてそう言……つて…

入間君が閉じ込められた?? 五時間も??

「あー、そうだったな。ほんと、身をもってこの部屋のルールを示してくれたんだもんな! 感謝するよ」

ケラケラと笑うモノパンダを蹴飛ばしてやりたい。

「ちつ……さっさと消えろよ、クソグルミが……。気分が悪くなんだよ」
釜利谷君が低い声で威圧すると、モノパンダはがっくり肩を落としながら「分かったよ。どーせオイラは誰も見に来ない田舎の動物園のパンダのように一匹寂しく笹を噛んでるのがお似合いってことだろ……？」と伝わりづらい例えを残して去っていった。

「……この説明はもうねえだろ？ 俺は部屋に帰るぞ」

その言葉と一度の舌打ちを残して、釜利谷君はさっさとトラッシュルームを後にした。

「えーと……用が済んだようでしたら……拙者もこのあたりで」

丹沢君も去ってしまった、去るタイミングを見失った俺と何やら考え事をしている安藤さんだけが残った。

「……あー、じゃあ俺も失礼して」

「思い出した！ 葛西殿！」

突然素っ頓狂な声を上げられ、「はい!？」と裏声で答えてしまった。

「二昨日の夜の恩返しが用意できたのでな、吾輩の部屋まで来てたもれ」

……一昨日の夜？

ああ、そういえば黄金銃をあげたんだっけ。

撃てもしない銃のどこに魅力があるのかは知らないが、ひどく喜んでいたっけ。



そうこうしているうちに俺は安藤さんの部屋まで連れてこられた。

「おじやましまーす……っつて」

……うわあ。

想像はしていたが、あちこちに紙屑が散らばったひどい状態の部屋だ。

二泊しかしていないとは思えない。

どうやったらこれだけのボツ原稿を部屋にばら撒けるのだろうか？

「いやあ散らかっていて申し訳ない。ベッドにでも座ってたもれ」
足の踏み場に気を付けながらベッドに座ると、「ほれ」と一枚の色紙を渡された。

手に取ってみると、そこには見たことのない男性キャラクターが：メガホン？を振りかざして何かを叫んでいる絵だった。

「いやあ…吾輩もモノモノマシーンを引いたのだが、メダルが一枚しかなくてな…。出てきたのがサインペンだったのだが、それを送るのもどうかと思い、いつそのことそのサインペンで何か作品を描こうと思つて」

「え…？ これサインペンで書いてるの…？ 線細すぎない…？」

「むわっはっは、吾輩の技術を馬鹿にしてもらつては困るぞ！ そこに描かれておるのはお主…つまり葛西幸彦その人じゃ！」

「ええええええ!!? これ俺なの!!?」

興奮のあまり唾を飛ばして叫んでいた。

このかっこいいキャラクターは俺なのか。

コンビニの店頭に並んでいる漫画雑誌の表紙のような絵柄に自分が入り込んでいるという事実には興奮せざるを得ないだろう。

「左様…。そうさな、葛西殿の能力は”メガホンを通して喋った事象が現実となる”能力でいかがか？」

「へ？」

能力？ どういうことだ？

「つまり、吾輩の次回作に葛西殿をモチーフにしたキャラクターを登場させようというのだ!!」

「ええええええええ!!?」

「いや、待てよ。メガホンで叫んだだけで実現するのは強すぎる。”台本に書き込んだ事象が実現する”とした方がよいか。その上で”専用の台本があり、それ以外に書き込んでも作用しない”という制限と”『無敵になれる』などのように整合性と因果性のない事象は実現しない”という制限をつければ丁度良いか。…ではメガホンにはどういう用途を与えようか…？」

あまりの超展開に事態が呑み込めない俺をよそに、安藤さんはじつ

と顎に手を当てて熟考していた。

内容は違えど、その様子は夢郷君にも似ている。

「つてゆーか…その能力、落ち着いて考えたらちよつと性能の落ちた
“あらかじめ日「言うなア!!」

安藤さんのストップはいりました。チョップもらいました。

「吾輩とて、パロディなどという無様な行いはしようない。この案は
考え直しじゃあ!!」

そう言つて安藤さんはメモ書きをクシャクシャにして紙屑の山に
投げ捨てた。

ああ…こんなにあつきり大作への出演のチャンスを逃すなんて。

「つていうか…安藤さんつてバトル漫画とか描くんだね。てつきり
女流漫画家つていうから…その、恋愛漫画とか描いてるのかと思つて
た」

「なぬう!」と安藤さんは突然俺に顔を寄せてきた。

「恋愛など現実でもできるではないか!! 吾輩はしたことないがな!

吾輩はもつと超現実的で超絶燃える展開を描きたいのだ!! 濃厚
な男同士の友情など…燃えるではないかツ!!」

……なんだか変な方向の話題に聞こえてしまうのは気のせいだろ
うか?

「ゆえに吾輩はバトル漫画のみを専門としておる! 漫画は楽しいぞ

! 退屈な現実世界の日々を忘れ、自分の思い描いた通りの世界に精
神を運ぶことができる…。そこでは物理法則など関係ない。己の気
の向くままに氣功を操り、思念を具現化し、ドラゴンを駆る!! 仲間
との協力、仇敵との確執、そういつたものを経て大いなる器へと成長
を遂げ、最後には全世界の救い主となるのだツ!!」

入間君を連想させるほど大げさなジェスチャーを作りながら安藤
さんは熱心に自分の信念を語った。

「時に葛西殿、吾輩の作品は読んだことはおありか?」

「もちろん。有名雑誌に載ってるやつなら大体。個人的には『ジェ
ジェの微妙な冒険』が好きかな。豊富なキャラとか名言とか。あれを
一人で考えてるのはすごいよ」

「いやあ、名言なら葛西殿の映画の方が多いい気もするぞよ?」

「そうかな……? 自作のことはあまり印象に残っていない。」

安藤さんほどの大物に褒められるとなんだかこそばゆい気分だ。

「吾輩の作品を読んでいただけるとは嬉しい限り。だが、吾輩はまだ自分の作品に満足しきれてはおらん」

「…まだ? あれほど面白い物語が描けるのに?」

「成功してきた話だって、一度で成功したわけではない。この部屋の紙屑の量を見れば一目瞭然であろう? 何度も何度も添削と書き直しを繰り返し、それでも納得いかず時間をつぶしてしまうなどは日常茶飯事。今までの作品はそうやって築き上げてきた。しかし、まだ吾輩は自作を完璧と感じることはできずにいる」

「…安藤さんにとって完璧な作品って、どんな作品なの?」

俺がそう尋ねると、安藤さんはまた顎に手を当てて考え込む。

「なんなのだろうな。熱い作品…には間違いないのだろうが。それだけではやはり足りん。分からぬ。吾輩には分からぬ。だが、それが分からぬまま描くのもまた一興であろう。これだから漫画は楽しい」
そう呟く安藤さんの顔つきは、まさしく「超高校級」そのものだった。

彼女も間違いなく、自分の職分に対してどこまでも真面目なプロフェッショナルなだろうという確信を持った。

その時だった。

安藤さんの部屋のインターホンが鳴った。

「うん? どなたかな?」

安藤さんはすぐに扉に駆け寄り、ぐい、と開いた。

「……え、ちよ」

安藤さんは驚きの形相で一步後ずさった。

「なに? どうしたの?」

そのただならぬ様子を見て俺も彼女のもとに駆け寄り、そして……

足が止まった。

部屋の前に立っていたのは。

「オイ……………」

山村さんだった。

ただし……………」

「オレはいつになったらここから出られんだよ？」

関わっちゃいけない時の彼女だったのだ。

「山村殿覚醒キタコレ（二度目）!!」

ええ!?! 感動で後ずさったのか!?!

いや、笑っている場合じゃないぞ。

「なあ、答えろよ……………なんで助けは来ねえんだ？」

「最高じゃあ……………もつとそのオーラを近くで見せてたもれ……………」

「ちよつと、近づいたらまずいよ!」

俺は一生懸命安藤さんを部屋の中に引きずり込んだ。

ずん、と彼女は部屋の中に一歩入りこんできた。

「ああ……………そうだった……………忘れてたよ」

ふと山村さんは呟く。

「……………誰か殺せば、出られんだっけ?」

……………最悪だ。

俺と安藤さんの二人がかりでも、山村さんに勝てるはずがない。

どうすれば?

「あれ、なんだか、山村殿……………」

どうすればいい?!

助けて……………」

誰か……………」

「腕、短くね？」

安藤さんのその一言が山村さんの足を止めた。

「あ……え……ほ、ほんとだ……」

「ぐ……！」と今度は山村さんが後ずさる。

「そ、そうか……腕の長さは考慮してなかったなり……」

彼女の口から飛び出てきたのは、どこか聞き覚えのある口癖。

「なんだ、お主だったのか」

すべてを悟ったかのような口調で安藤さんは笑いかけた。

「そう……アタシは……」

「リャン様なりリーー!!」

「うわああーリーー!!」

なんだか茶番のようだが、一応リアクションはとっておいた。

山村さんの髪型を再現したウィッグを外すと、津川さんはベッドにちよこんと座りこんだ。

「いやあ、一時は本当に騙されたぞい。すごいものよ」

安藤さんが感服の意を述べると、津川さんはえへへ、と照れ笑いした。

「よく山村さんの衣装用意できたね。自分で作ったの？」

「いやいや。前にも言ったなりよ？ リャン様のお部屋には現在三百着の服があるなり。制服なら七十着ほど、その中にたまたま巴たんと同じ制服があったなりよ！ ウィッグもまた然り！」

津川さんはそう自慢げに述べた。

「そういえば……今は腕の長さで看破できたが、身長はどうしておるのだ？ たしか、お主と山村殿は20cmほど差があった気がするが……」

「にやははっ!! 身長はこの“超厚底ブーツ”で好きなだけ補えるな

りっ!!」

そう言って津川さんは履いている長いブーツを見せてきた。

彼女がブーツから足を外すと、確かに足の長さよりはるかに長いブーツであることが分かる。

まるで竹馬のようだ。

「すごいね…。こんなアイテムもあるんだ」

「リャン様は生まれつき背が低いから、特注で作ってもらったなりよ！ おかげで大人の人にも楽々化けられるなりっ！ でも腕の長さは不覚だったなり。やはり身長差10cm以内の人じゃないと無理があるかも…」

うーん、と考え込む津川さん。

「……あのさ、津川さん」

「うん？ どうしたなり？」

「こういうのって…言わない方がいいのかもしれないけど。一昨日のこと…もう気にしてない？ 大丈夫？」

傷口を開くようなことは言いたくないのだが。

無理をして明るく振る舞っているのではないかと心配だったから、あえて聞くことにした。

「うむ？ 一昨日のこととは…？」

安藤さんが不思議そうに尋ねてくる。

「あ、いや、ちよつと…伊丹さんにキツめのことを言われて…落ち込んでいたみたいだから…」

「あ、ああ…伊丹殿か…」

そういえば、安藤さんも一昨日の食事の時に怒られて憔悴してたっけ。

津川さんの心はよく分かるのだろう。

「…え、えへへっ。もう大丈夫なり。ちよつと傷ついたけど…ゆきみたんの言ってることは何も間違ってるんかないなりよ」

津川さんは恥ずかしそうに頬を赤らめながら呟いた。

「それに、ゆきみたん、あの後ちゃんと謝ってくれたし。もうこの件はこれで解決なり」

「…そうか。それは良かった」

どうやら杞憂に終わったようだ。

悪いこと聞いちゃったかな。

「リャン様…。意外とナイーブなのですな。これがギャップ萌えというやつか?」

安藤さんが呟くと、津川さんは少しうつむいて「リャン様はね…：たまに自分がすごく嫌になるなり」と呟いた。

「体がちっちゃくて、体力もなくて、頭もそんなに良くなって。何の取り柄もなくて、友達もあんまり多くなくて。何のために生きてるんだろうって思うことがよくあったなり」

それは、初対面の彼女からは想像もつかないほど後ろめたい言葉の数々だった。

やはり、こちらが彼女の本性なんだろう。

「…でも、コスプレをしてる時だけは違って。みんなと一緒に騒げるし、みんながリャン様を必要としてくれて。コスプレとの出会いがアタシを変えてくれたなり」

「ふむふむ。好きこそもの上手なれとはよう言ったものよ。コスプレしているときのリャン様はこの上なく輝いて見えるのはそのためであつたか」

安藤さんは感慨深くうんうんと頷きながら言った。

「その通りだね。これからも君に好意的でないことを言う人はたくさんいると思うけど、負けちゃダメだよ。君は君の生きたいように生きればいいんだから」

俺も俺の思つたことを告げた。

「二人とも…：ありがとうなり!! そうと決まれば、早速本題に入るなりよー!」

「うん? 本題とな?」

「当然なり!! 今この部屋に来たのはちゃんとした目的があるなり!!」

一昨日の約束、みー様はもう忘れたなりか?」

そういうが早いか、津川さんは山村さんの制服をその場で脱ぎ捨てた。

すると、そこから現れたのは……

「トリャー！ リャン様婦警モード、参上おおおおお!!」

婦警らしくない謎のポーズを決めた津川さんだった。

「ぬおおおおお!! なんとという完成度の高さか!! 近う寄れ近う寄れ!!」

安藤さんは大興奮しながら津川さんの姿を間近で眺めている。

「ああ…。そういえば婦警姿を見せるとか約束してたなあ」

伊丹さんたちとの出来事でオジャンになったかと思っていたが、津川さんはちゃんと覚えていたらしい。

そんな微笑ましい二人とともに午前を過ぎたのだった。



そのまま安藤さんの部屋で倉庫と売店から持ってきた食べ物で昼食をとり、二人と別れた俺は一息つこうと休憩室を訪れた。

すると、そこには先客がいた。

「…あ、丹沢君に人間君」

優雅に足を組んでソファに腰掛ける人間君。

その様子をじっくり見つめながらスケッチブックに絵を描く丹沢君。

両名がそこにはいた。

「…おや、葛西君ですか。どうなされました」

丹沢君が人間君から目を離さないまま尋ねてきた。

「…いやあ、どうしたということもないけど。そっちこそ、何してるの？」

「見ればわかるでしょう、スケッチでござりますよ。このたび拙者、人間君本人をフィギュア化する仕事を承ってござりまする」

俺の知らないところでそんなビジネスが進んでいたとは。

どうでもいいといえばどうでもいいのだが。

「…ってゆーか、人間君が一切喋らないなんて珍しいね。ひよつとし

て寝てる?」

「そんなことはありません。『描いている最中は一切動かないように』と拙者が命じたので、口を動かすことすらタブーと化しているのですよ。呼吸も最低限になさってこれているようでござります」

今に始まったことではないが、彼はあまりにもノリが良すぎて恐ろしい。

毒見をしろと言われてツツコミもせず応じたのもそうだ。

簡単に詐欺なんかにつっかかりそうで不安だな…。

「ふむ、これくらいでよろしいでしょう。動いてよろしいですよ」「ぶはぁーっ!!」

丹沢君が言い終わると同時に勢いよく入間君は息を吸い込んだ。

「いやぁ…：小一時間…：呼吸と姿勢を制限するのは…：流石に…：ハアハア…」

「だ、大丈夫?」

入間君は辛うじて笑顔を浮かべてはいるが、その顔は真っ赤だ。

「いやしかしそのおかげで良いスケッチが描けましたぞ。ほれ、ごらんなさい」

そう言っただん沢君が見せてきたスケッチブックには、入間君そのものが入り込んでいた。

正面だけでなく、横、後ろ、上など様々なアングルのスケッチがあったが、そのすべてが現実の彼と瓜二つである。

「す、すごい…：。君、絵もうまいんだね」

「なあに、この程度。慣れですよ」

丹沢君はスケッチブックをパラパラとめくりながら答えた。

「残念ながら、今は部屋に必要な材料がないのでフィギュア制作に取り掛かることはできませんが、ここを出た暁にはすぐさま手を付けましょう。あなたの名声ならば数万体は売れるでしょうな」

「なんと！ これ以上私のファンが増えてしまつては身が持ちませぬね」

入間君のコメントはともかくとして。

「丹沢君ってアニメキャラだけじゃなくて、実在の人をフィギュア化

することもあるんだね」

「無論。拙作の主なテーマは“次元の超越”であります。フィギュアとは二次元と三次元の境に位置するのです。二次元のキャラクターは二次元ですが、フィギュアは三次元の物体です。拙者はフィギュアを通じて二次元と三次元の架け橋を作りたいと考えておるのです。そのためには三次元の人物をフィギュア化するのも大切なことです」

「そ、そうなんだ……。なんだか、難しい話だね」

「素晴らしいではありませんか!! このわたくしが二次元のキャラクターと肩を並べてフィギュア化など、胸が躍る気分ですよ!!」

「拙者の仕事仲間である山田一二三先生には『二次元と三次元を混同するんじゃない』と怒られました。まあ、人には人の考えがあります。拙者自身、山田先生の『性の向こう側』というテーマに魅了されて彼の作品を愛読するようになったわけです」

「山田先生と言えば、『今夜も揉み揉み♡ イケナイぼちゃ姉』をフランス向けに翻訳したことがありますよ!! いやあ、わくしも翻訳していて男子の欲求が収まるどころを知りませんでした! あれほどに肉の質感をエロく描ける作者がいるなど……」

なんだか恐ろしい次元で話がかみ合っている。

「…葛西殿は同人誌などには縁がないのですかな?」

「えーと…そういうオタク系の読み物はあまり分からないかな……」

「ふーむ……」と顎をさする丹沢君。

「オタク系、ですか……。葛西殿はオタクというものをどのような考えますか?」

「え……? それは…うーん……なんだろう。人とはちよつと変わった趣味を持つ人…かな?」

「もつとはつきりおっしやって構いませんよ。“気持ち悪い人たち”と思っっているのでは?」

「いやいや! そんなことは微塵も思っていないよ! 本当に!」

俺は慌てて否定した。

そんなことを面と向かって言ったら、もう彼から口をきいてもらえないかもしれないのだ。

「わたくしも同意見ですよ！ 世の中の人は皆なにかしらのオタクと言いますしね」

「ふむ」と頷いて丹沢君はメガネに指をかけ、語り始めた。

「拙者は中学生の頃、オタクに対する偏見を人一倍嫌っておりました。同じ人間なのに、なぜオタクだけを違う生き物のように扱うのか、と。オタクだって他の人と同じように扱われるべきである、と。」

……しかし、忘れもしない中学二年の夏。フィギュア製作者としてある程度知名度を上げた拙者は自作の展覧会……まあ、コミケと言った方が近いでしょうが……そういった趣旨のイベントを開催いたしました。そこで拙者は驚くべき光景を目にしたのです。公共の場であるにもかかわらず、大音量でゲームをする者。周囲を顧みず、大声で話し込む者。歩きながらゲームやスマホに没頭する者。そこにはモラルなどありませんでした。

もちろん、マナーをわきまえる良識ある人もいました。……いや、良識ある人がほとんどでした。だからこそ拙者はそれが無い人たちが許せなかったのです。これがオタクの姿なのか、と。そのような行為をしているから周りから差別されてしまうのではないかと。常識のない行為で迷惑をこうむる一般の方々も立派な被害者ですが、一番の被害者は、良識があるのに差別をされてしまう善良なオタクたちです。

ですから拙者は誰よりも“清く、正しく”生きることを決めたのです。一人のオタクとして、それ以前に一人の人間として。そして悪しきオタクたちを更生し、世にオタクたちの本当の姿を知らしめたいと願う所存です」

淡々と、冷静に丹沢君は自らの胸の内を語った。

ぱちぱちと人間君が拍手を送った。

「素晴らしいですね。世の中には、偏見を浴びるのが嫌でオタクでないふりをする人もいます。そんななかであなたはオタクであることを自認している。そして自認しながら真っ向から問題に立ち向かうとしている。並大抵の根性じゃありませんよ」

「いえいえ、“超高校級”の名を背負うからにはそれぐらいのことは

当然の義務でござるよ」

丹沢君はそう謙遜する。

「…そっか。丹沢君は同年代のオタクたちの希望を背負っているんだもんね。丹沢君の努力が報われるといいね」

「ありがとうございます。精進させていただきます」

外見ではおかしな人に見えるかもしれないけど、誰よりも常識人で確固たる目的を持った丹沢君。

彼の悲願が達成されることを願うばかりだ。

「偏見、ですかあ。いえね、わたくしも様々な国を渡り歩く商売柄、そう言ったものはよく目にしますよ」

入間君が珍しく真面目な顔になってそう言った。

「たとえば他国の戦争の停戦調停のために翻訳を行うこともありません。そう言った場合は互いに互いへの偏見に満ちているわけですから、言葉をつなぐのはとても大変です。一方が言ったことをただ翻訳するのではなく、もう一方が穏便に意味を受け取りやすくなるように、意味はそのままに少し言葉を変えてあげる必要があるのですよ」
なるほど……。

いつもへらへらしている彼がそんな修羅場をくぐってきたなんて想像できない。

やはり彼も超高校級と呼ばれる人間の一人には間違いないようだ。「ですが、対立する両者を分かり合わせるのにはそれだけでは足りません。さて、一番大切なものは何でしょう？」

「ずばり、エロトークでござりましょう。性欲は万国共通でござりますからな！」

いや、丹沢君…それはちよつと……。

「正解でござります!!」

「ええーっ!?!」

どこまで俺の想像を裏切るんだ、この人は。

「具体的に言いますと、エロトークも含めスキンシップ全般ですよ! どんな国のどんな人でも、言葉が通じれば分かりあえるんです。ですからわたくしは双方の使者と個人的に友好を深め、笑って語り合え

る仲になるのです。そうすれば、お互いが憎みあっていたとしても、二人ともわたくしには笑顔を振りまいてくれます。そして、気付いたらいっつの間にかその笑顔は三つ巴になっています。これにて和平は見事成立するのです！」

入間君は恒例の大きなポーズで決め台詞のように言った。

言い方はともかく、言っている内容は実に平和的で尊敬できることである。

「トークは人間を切り開きます。もちろん嘘をつく人も世の中にはたくさんいますが、誠心誠意を込めたトークに嘘は通用しません。話すことで、人間は互いのすべてを理解し、協力することができるようですよ。だからわたくしはこの仕事に命を懸けているのです」

そう語る彼の姿は、いつしか輝きを帯びているようだった。

これが、トークで世界をつなぐ男、入間ジョーンズの真の姿なのだろう。

「……そうだったんだ。なんだかちよつと…申し訳なくなつてきちゃった。ちゃんとした理由があるのも知らず、ふざけた人だとばかり思つてて……」

「はっはっは、ふざけた人なのは違い不是吗？ ただわたくしはどんな状況でも皆様が笑顔でいられるように、大真面目にふざけているのです」

「感服させられるばかりですな。どれ、ふざけついでに三人でカラオケなどいかがでござろうか？ 拙者のアニソンメドレーを披露したく存じまする」

へえ、それは楽しみだね……って。

一昨日の夜に既に経験したんですけど…？

死ぬほど疲れたんですけど??

「ほほう、それは興味深い！ ではわたくしは『外道天使☆もちもちプリンセス』の主題歌『りばうんどっ！』をノヴォセリック語で滑らかに口ずさんでみましょうか？」

なんだか特技の披露勝負のようになってるが、俺からしてみれば辛いだけだ。



結局、逃がしてはもらえなかった。

夕食までカラオケに付き合わされた。

なんだかもう、死にたい……。

「どうしたの？ 具合悪そうだけど」

小清水さんに聞かれたが、「大丈夫だよ……。私情だから」と答えておいた。

「そう、ならいいけど。私ね、今日莉緒ちゃんにブレイクダンス教わっちゃった」

小清水さんは照れ臭そうに笑った。

「あはは。彌生ちゃんセンスあるよ。覚え早いし、綺麗に逆立ちできてたし」

亞桐さんがそう言うと、小清水さんはますます照れ臭そうに頬を赤らめるのだった。

「彌生ちゃんみたいなりケジョがブレイク踊れてたらカッコいいよね。ギャップ的な？」

「…そ、そうなればいいんだけど……」

「きつと慣れるって。はじめは辛いかもしれないけど、慣れれば楽しくなるから。楽しくなっちゃえばこっちのもんよ。やってるのが苦じゃなくて楽になるからね」

へえ、そうなんだ。

俺もちよつとだけ、教わってみようかな……。

「葛西君も、一緒にやってみない？」

「…え？」

「一人だと…いろいろ大変だし。ね？」

……おとつと。いけないいけない。

なにをどぎまぎしているんだ。

「ううくん…。ブレイクダンスは俺の体力だと難しそうだし、もうちよい体鍛えたらやってみようかなって…」

これが俺の出した答え。

緊張のあまり彼女を忌避してしまったのか、それとも自分の身体能力を鑑みて正直に言ったただけなのか、自分にも分らなかった。

「……もう。男のくせに」

小清水さんはつまらなそうにため息を吐いて、黙々と食事を再開するのだった。

ああ、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。

そんな様子を見て、亞桐さんはひたすら笑いをこらえていた。

「……あれ？」

半ば開き直って箸を進めていた俺は、今まで見たことのない人影がその場にいることに気付いた。

「リュウ君。もう大丈夫なの？」

「ああ。箸も問題なく動かせる」とリュウ君はカチカチと箸を鳴らしで見せた。

「ほんと、一昨日のお前凄かったよな。あんなスピードの槍、どうやって見えたんだ？」

土門君が尋ねると、リュウ君は「慣れだ」と短く答えた。

「…槍が飛んでくるシチュエーションに慣れることってあるのか？」

「槍じゃなくてもいいさ。身の回りにある速いもの。例えば、プロ野球選手が投げる球の軌跡とかだな。そう言ったものを常日頃から眺めて、動体視力を上げておくのだ。やがて拳銃程度の弾ならばつきり見えるようになる」

「頼むからお前の才能教えてくれ！土下座でもなんでもするから!!」
「断る」

「ここから前木殿!! 特に口調に特徴のないあなたが会話に割り込んだらややこしくなるでござりませうが!! それに男の『なんでもする』など誰得でござりまするか!!」

よく分からない会話に苦笑い。

よく分からないと言えば、この状況そのものがそうなのかもしれない

い。

とてもじゃないがこの雰囲気殺し合いを強要されている人たちの集まりとは思えない。

それに、俺はこれまでの行動でみんなから聞いたじゃないか。

みんながそれぞれ胸に抱いている希望を。

こんな状況でも、みんな確かに希望を続けている。

誰一人として絶望などしていない。

だから誰も言い出さないのだ。

なんで三日目にもなるのに、誰も助けに来ないのかという些細な疑問を。

その疑問を口にして、希望が絶望に転ずるのをみんなは恐れているんだろう。

俺もそうだ。

だから何も言わない。

でも、きつと最後は希望的な結末になるはずだ。

俺だったらそういう脚本を描く。

食堂に響き渡るみんなの笑い声が空虚ではないことを信じつつ、俺は希望ヶ峰学園特別分校における三日目の生活を終えた。



目が覚めると、見慣れた天井。

…もう、見慣れたと言つてしまつていいのだろうか？

でも、この場所によそよそしさを感じないのは事実だ。
ダメだ。

この場所にずっといてもいいなんて考えてはいけない。
俺は帰らなくてはならないんだ。

そうしなければ…俺の作品は誰にも見てもらえない。

それでは、俺が生きている意味がないんだ。

俺は、ここから脱出する。

たとえ助けが来なくても、諦めたりするものか…。

朝食の場に行くと、みんなは昨日よりも薄暗い顔をしていた。
みんなも俺と同じようなことを考えていたようだ。

昨日一昨日といういろいろ騒いだのがウソみたいに、みんな黙々と食事をしていた。

その沈黙は、食事を食べ終わっても続いていた。

「助け……こないね…」

小清水さんの暗い呟きに全員がうつむいた。

「なあ……これって実際…やばいんじゃないのか…？」

前木君の不安も尤もである。

「…予想はしていた。助けなど、はなから来ないのではないかとね」

夢郷君が監視カメラを見上げて言った。

「黒幕はカメラを通じて僕たちの会話をすべて聞いていたはずだ。僕

たちが警察などの助けを待っているということも、とつくに知っていたはずだ。なのに黒幕は三日前に現れて以降、僕たちに何も手出しをしていない。つまりこれは、僕たちに手を下さずとも警察などの捜索網を振り切れる自信が黒幕にはあるということだ」

「なにそれ…？ あのパンダの中身がそんなにすごい奴だつての…？」

亞桐さんが冷や汗を流しておののきながら言った。

「司法を上回る力を持つと申すか！ ならば吾輩の氣功で成敗してくれよう！ 出て参れツ!!」

安藤さんはこんな時でもおかしなポーズでそんなことを言っている。

「オメーも氣功の使い手か!? オイラ、ワクワクしてきたぞ！」

モノパンダの声が響く。

「出やがったな、あほパンダめ!」

すかさず土門君の怒号が飛ぶ！

「あほパンダってなんだあほ建築士！ 同じ哺乳類にあほ呼ばわりされる筋合いなんてねーからな！」

「…用件だけを簡潔に言え」

リュウ君が静かに告げると、モノパンダはテーブルの上に乗っかり、ぐるりと周りに座る俺たちを見回した。

「大したことじゃねーよ！ 警察とか親が助けしてくれるとか、そういうことは考えなくていいって言いたいの！ どうせ来るわけでもねーし」

半ば予期していたが、それでもモノパンダの言葉は信じがたいものである。

本当に警察は来ないというのか？

「なんだか、本当に映画のような世界観ですねえ」

入間君はそう冗談めいたことを言っているが、目は笑っていない。「ぎひやひやひや！ 映画なんて目じゃないぜ！ こいつはこの世で

最も素晴らしい絶望物語、”コロシアイ共同学習”なんだからな！

なあ、”超高校級の脚本家”君？」

モノパンダはそう言っただけに向けて気味の悪い笑みを浮かべた。

「うるさい…。こんな脚本があつてたまるか」

俺は精一杯モノパンダを睨みつけてそう言っただけ。

自分の才能を馬鹿にされたような気分、非常に気分が悪かった。

「貴様らは黙っている。私が質問する」

口を開いたのは御堂さんだった。

「貴様の正体は何者だ、などと傲慢な質問はしない。聞いたところで教えてなどくれまい？　だが、それを踏まえて一つ尋ねる。なぜお前は警察が我々を捜索しないと、もしくは捜索してもその目をごまかされるか確信している？」

「教えねーよバツキャロー！」

モノパンダは即答した。

御堂さんは表情を変えなかったが、わずかに額に青筋が浮かんだように見えた。

あの迫力はある意味、キレた山村さんより怖いかもしれない。

「…今のオイラから言えるのは、警察みたいな国の力がオメーラを助けてくれることは絶対にねえってことだけだな」

「ふん、そうか。ならばもう一つ聞く。ここはどこだ？　希望ヶ峰学園の校舎ではあるまい？」

「だ・か・ら！　ここは希望ヶ峰学園の特別分校！　本校とは違うけど、立派な希望ヶ峰の校舎なんだよ！　三日前に言ったじゃねーか！

オメーはニワトリか？　三日たったら忘れるのか？」

「…そうか。もういい。消えろ」

「なんだよ、聞くだけ聞いて答えたならそれかよ！　全く、オイラはカーナビじゃないんだぞ！　カーナビどころかNASAも顔負けの技術が搭載されて…って夢をぶち壊しになることを言わせんなコラ——ッ!!」

「誰も言えなんて頼んでないなりよ…」

「ぶんぶん！　もういいよ、オメーラの顔を見てるくらいなら笹の葉を数えてる方がマシだね！」

それだけ言っただけモノパンダはまたテーブルの下に入り、いなくなっ

た。

国家権力は俺たちを助けてくれない。

言葉だけでは何の説得力もないが、今の今まで誰も助けに来てくれないという事実が、その言葉のこれ以上ないくらい強い裏付けになっていた。

「……助け、来ないのね……」

小清水さんがうなだれて言った。

「そんな……私……どうすれば……。どうやってここから出ればいいんですか！」

山村さんが悲痛な叫び声をあげた。

「簡単だろう?」

御堂さんの答えが返ってきた。

「この中の誰かを、犯人とバレないように殺す……。だったな? そうすれば出られるんだろう?」

「いけませんよ、淑女がそのような物騒なことをおっしゃられてはすかさず人間君が笑顔でなだめにかかる。

彼も苦勞人だな……」

「あなた、やるつもりなの?」

伊丹さんが無機質な声で御堂さんに問いかけた。

「この中の誰かを殺して、卒業するつもり?」

昨日の朝食と同じだ。

この二人の言い争いで、場の空気が凍り付いている。

ダメだ。俺が何とかしなくては。

「そんなこと、絶対に「ダメよ!!」

俺が言い終わる前に、小清水さんが叫んでいた。

「なんだか面子をつぶされたような気分だが、ここは黙っていよう。あなた、誰かを殺すってことがどういうことか分かってるの!? その人の一生を、未来を奪うってことなのよ!」

「偉そうに語るな。そういうことは誰かを殺したことがある人間だけに語る資格がある。殺したことがないのなら黙っている」

御堂さんは微動だにせずそう答えた。

「それに、勘違いするな。私は誰かを殺すなど微塵も考えていない。私は学ぶためにこの学園に来たのだ。罪を犯すためではない。訳も分からぬままこのような状況にさせられてはいるがな。少なくとも私は目先の欲に囚われて人の道を踏み外すような真似はしない」

「……どうかしらね。口ではどうとでも言えるものね。今も一生懸命トリックを考えてるんじゃないの?」

伊丹さんは厳しい目つきのまま言い寄る。

…本当に、この二人は相性が最悪だ。

「やめようよ。こんな言い争い、不毛だつて」

亞桐さんが悲しげな顔で言った。

いつもは感情の起伏が激しい彼女も、今ばかりは本当に参っているようだ。

「ふん、私が怪しいなら監視でもなんでもするがいい。そうすることによって殺人を企むほかの人間への注意が緩慢になるだけだろうかな」

耳に痛い捨て台詞を残し、御堂さんは食堂を後にした。

いや、これじゃダメだ。

このままじゃいつまで経っても俺は御堂さんのことを理解できない。

行くんだ、彼女のもとに。

「葛西君!」と呼ぶ小清水さんの声も気にせず、俺は御堂さんの後を追って食堂を後にしていた。

「……何の用だ、雑魚が」

食堂を出るとすぐ、背を向けたままの御堂さんから厳しい言葉を浴びせられた。

「くだらん綺麗事や理想論を聞く気はない。絵空事しか言えないのであれば消え失せろ」

一言一言が胸に突き刺さるが、俺は負けないぞ。

これは君のためでもあるんだ。

このままじゃ、君は……

「君、殺されちゃうよ」

「……！」

少し警戒した表情で御堂さんは振り返ってきた。

「いや、もちろん俺たちの中に殺人をする人がいるなんて思わないし、そう信じたいけど。俺たちの中で一番恨みを買っているのは……間違いなく君だ。俺は、そうやって孤立していく君が心配なんだよ」

「慣れあう気などない。ここの連中で私が心を交わすに足ると判断した人間はいない」

それって、俺も関わる価値がないということか？

うぐぐ……なんて的確に人の心を抉れるんだろう。

「人に価値なんか求めちゃダメだよ。人に価値なんて概念はない。みんな平等なんだから、価値なんてものを定めちゃダメなんだよ」

その瞬間、御堂さんの表情は一気に強張った。

「貴様、もう一度言ってみろ」

静かにそう言うのが早いのか、すぐに俺に詰め寄って襟首をつかんできた。

「え？ うわわ……」

「二度と言うな……。」「人がみな平等」だとか、「価値なんて定めるな」とかいったことを二度と言うな!!」

それは、正真正銘の怒りだった。

でも俺は負けられない。

「なんでだ！ こんなこと、小学校の道徳でも習うことじゃないか！ 当たり前のことじゃないか！ それをなんで否定するんだ!!」

「私が否定したいんじゃない。世界が否定しているんだ。世界はそうできている。皆が平等になれないようにできている。貴様に分かるはずがない。分かれたくもない!」

そう叫ぶ御堂さんの顔は、先ほどより必死さを増しているように聞こえた。

「道徳など滑稽だ。世界のほとんどは道徳と真反対にできているとい

うのに。なぜあんなものを子供に教え込むのか。それよりだったら、この世の現実を叩き込んでやった方がよほど建設的というものだ。これだからこの連中のような雑魚どもが現れるのだ」

そう言っつて個室へと歩いていく御堂さん。

だが俺は、そんな彼女になおも追いつがった。

「聞かせてくれ。君がどうしてそういう考えを持つに至ったのか。君がどんな過去を背負っているのか」

それは、今までここで出会った様々な人の過去を知り、そこからかけがえのない信念を見出してきたからこそ聞けることだった。

きつと彼女にだつて、今の彼女を形成するきつかけがあつたはずだ。

それを聞いて、彼女という人間がどうやって出来上がったのかを知つて。

そして彼女を理解してあげたい。

そうしなければ、彼女は…少なくともここにいる間はずっと一人のままだ。

「過去？ そんなものは捨てた。思い出したくもない。私にとって過去など最早ないようなものだ」

御堂さんは平然と述べた。

「……辛いことがあつたのかもしれない。思い出したくないつてことは、そういうことなんだと思う。だったら言わなくてもいい。でも、俺は」

「願ひ下げだと言っているのが分からないのか」

御堂さんは低い声で威圧してきた。

「偽善を押し付けるな。安穩とした人生を送ってきた人間の同情など浴びるつもりはない。貴様のように言葉だけで分かつたつもりになる連中には心の底から虫唾が走る」

「……………」

自分と同じような凄絶な過去をたどつた人しか、彼女は信用できないのだろうか。

平凡な人生を送つてきた自分が恥ずかしくなつた。

彼女は、人に話すことはおろか思い出すのもはばかられるほどの凄まじい過去を過ごしたらしい。

真の天才とも呼ばれる才能はそういった環境の中で育まれてきたのだ。

それなのに俺は、大した苦難にぶち当たることもなく、情けないものだ…。

「もう私に付きまとうな、雑魚が。私は激情に駆られて殺人を起こす単細胞でも、誰かにむざむざ殺される俗物でもない。貴様の心配を受ける筋合いなどないのだ」

それだけ言って立ち去っていく彼女の背中を、俺は黙って見つめていた。

所詮俺の力では、彼女の信頼を得ることはできなかった。

でも、俺は…いや、俺たちはあきらめない。

黒幕の正体を暴くには、彼女の天才的な頭脳が必ず必要になるはずだ。

今度、小清水さんや入間君にも頼んで、彼女を説得してもらおう。きつと分かり合えるはずだ。

彼女も希望の一人には違いないのだから。みんなでここから脱出するんだ。

そう、そう思った直後だった。

ピンポンパンポーン、とスピーカーから音が響いた。

「オメーラ！ 今すぐ視聴覚室に来い！ 変な気は起こすなよ、すぐに来るんだぞー！ー！」

聞きなれたモノパンダの声だった。

「視聴覚室…：…う」

なぜ、そんなところに。

第一、ここに閉じ込められてからあいつが全体の放送をかけるのは初めてだ。

あいつは何の意図でこんなことを？

「葛西殿、今の放送を聞きましたか」

食堂から出てきた丹沢君に声をかけられた。

「今すぐ視聴覚室に来いと…。いったいどういふつもりなのでしょうか？」

「分からない。…行った方がいいのかな？」

「逆らわない方が、いいと思う」

そう言ったのは、丹沢君に続いて出てきた伊丹さんだった。

「三日前、あいつに逆らった山村さんがどういふ目にあっただか、はつきり見たでしょ」

「……………」

入学式での恐ろしい記憶がよみがえる。

「私は行く。あなたたちも行った方が賢明だと思う」

伊丹さんは毅然とした足取りで視聴覚室へと向かって行った。

「伊丹殿の言うことも最もですが…。我々に殺し合いを強いるやつのもとに無防備なまま行ってよろしいものでしょうか？」

丹沢君の不安はまさに俺が感じていたものと同じだった。

「心配するな」

背後から声をかけてきたのはリュウ君だった。

「やつの目的が本当に俺たちの殺し合いにあるのなら…。やつが俺たちに直接手を下すことはあるまい。」校則」とやらを守っている限りはな。……………」

リュウ君はギロリと廊下に取り付けられた監視カメラを睨んだ。

「何かあれば、俺がやつを食い止めるさ」

これ以上ないくらい頼もしい宣言だ。

視聴覚室へと歩いていく彼の背中に隠れるように、俺と丹沢君はそのあとをついていった。

「ぎひやひやひやひや！ 全員集まったかー？」

視聴覚室に着くと、奥のスクリーンの前にモノパンダが立っていた。

「そんなら、ほい！ この段ボールに入ってるDVDを持ってけ！
ここで見てもいいし、個室のプレイヤーで見てもいいぞー！」

そう言っつてモノパンダは横に置いてある段ボール箱をボンとたたいた。

「いったい何なのですか！ いきなり呼び出して、DVDを渡すなど！ ご説明願いたい！」

「ほんとそれ！ こっちはただでさえあんたにワケわかんない状況に追い込まれて腹立っつてんのにさー！」

丹沢君と亞桐さんが口をそろえて反発する。

「全く、イマドキのティーンはやれと言われたらすぐ口答えだもんな。

『どういう意図なんですか！』とか『説明しなきゃやりません』とか！

言う前に黙っつてやれっつーの！ 流石に温厚なパンダも肉食獣としての本性を現したくなるぐらい激おこだよ!!」

お前の怒りなんて知ったことか。

「…でもまあ、いや。これは“動機”だよ」

「…動機、だど？」

「そー！ オメーラがここに来てもう四日目になるけど、一向にコロシ
アう感じがしねーからさ。凶器を磨くとか、トリックの下準備をする
とか、そういう奴らが全然出てこないから、オイラも暇になっちまっ
てよ。どーすればコロシアイしてくれるかなって考えた結果がこれ
なわけ」

「……これを見れば、我々が殺し合いをするど？」

御堂さんがモノパンダを睨みつけながら尋ねた。

「どーだかねえ。最終的な判断はオメーラにお任せするよ。これを見
てもなおコロシアイをしないっつてならそれでもオイラは構わねーよ」
「…ふん。そんなことを言われてこれを見る愚か者がいると思うか
？」

御堂さんはモノパンダを冷たく見下ろしながら言い放った。

「そうだそうだ！ 何を収めた映像か知らねーが、殺し合いの動機に
なるような物なんか見る馬鹿はいねーよ、あほパンダ！」

土門君もそれに続く。

「見ねーのかよ、つまんねーな。…まあ、見ないなら見ないでいいよ。外の世界のことを知らずにいてもいいってことなんだろう？」

「…何？ 外の世界…だと？」

「そのまんまの意味だよ。オメーラは今ここに閉じ込められていて、外とは隔絶されてんだ。このDVDにはその外の世界についての情報が詰まってるの！ でも、見ないってことは知りたくないんだろ？」

「見ないも何も、私たちはつい数日前まで外の世界にいたじゃないですか！ その情報なんて…」

「違うね」とモノパンダは山村さんの言葉を切り捨てた。

「数日前？ いやいや、オメーラが外の世界にいたのはだいぶ昔の話だよ」

「…：…はあ!?! 何言ってるやがる！ 俺ははつきり覚えてんぞ！ 俺達は四日前、希望ヶ峰学園に初めて入ったんだ！ でもそこで眩暈がして…：…なあ!?!」

前木君の言葉に全員が頷く。

「ぎひやひや、そう来ると思ってたぜ。だよなー、いきなりそんなこと言われても信じられるわけないもんな。でもさ、〃 外の世界で何かが起きてる〃 ってるのは、オメーラだって分かってるはずだぜ？」

モノパンダは不敵に笑う。

「外の世界での異常…？ そんな、俺たちがこうしている間にも世間はいったっていつも通りに…」

「いや、そうではないかもしれませぬ」

口を開いたのは丹沢君。

「〃 我々のもとに助けが来ない〃 というのがその根拠として考えられます」

「…それについては、私も考えてた」

伊丹さんも議論に参加する。

「私が考えていた可能性は二つ。『黒幕には警察などの組織から私たちがと身を隠す術がある』ということと、『そもそも警察そのものが機能しなくなった』ということ。どちらにせよ、限りなく現実離れして

いる事象だわ。でも、もしモノパンダの言う通り外の世界で何か起きて、それで警察が崩壊したというなら……」

「ちよ、ちよっと待ってほしいなり！　いくらなんでもそんなの、映画もビックリな超常現象なりよ！」

津川さんはパニックになりかけているようだ。

「でも、今こうして私たちはこんな目にあわされている……。それは紛れもない事実。モノパンダがどこまで嘘をついているかは分からないけど、今言った可能性もあり得ることは視野に入れておいた方がいい」

「そ、そんな……視野に入れろつつたつたって、実感わかねーって……」

全くもって、土門君の言う通りだ。

俺がふだん映画で創作しているような世界観の出来事が、本当に起きていくというのか？

今俺たちがこうしている間に、いったい外で何が起きているのだろうか……？

「……吾輩は、そのDVDを見たい」

安藤さんが静かに告げた。

「……!?　未だちゃん、見たらどうなるか分からないのよ!?」

小清水さんが止めに入ろうとするが、安藤さんの表情は固い。

「吾輩とて、現実離れた世界観は日々描いておる。吾輩の漫画の中でかようなことが起きることもある。だがな、まさかそれが現実になるなんて夢にも思わないであろう!?　だから吾輩は確認せねば気が済まんだ！　モノパンダよ、吾輩にDVDをよこすのだ！」

誰も、安藤さんを止められなかった。

だって、俺も知りたいのだから。

「ほいほい、安藤さんのは、これね」

安藤さんの名前が書かれたディスクを受け取ると、彼女はそそくさと視聴覚室を後にした。

「わ、わたくしも見たい……のですが……ダメ……でしょうか？」

次に進み出たのは入間君だ。

こうなると後は早い。

「ごめん、ウチも、見たい……」

「すまねえ、俺にも見させてくれ。どうしても気になるんだ……」

「ひぐつ……みんなが見るなら、リャン様も見るといい」

「まんまと黒幕の罠にはまるなんて、バカみたいだけど……。それでも、私は見るわ」

みんな、次々にディスクを受け取ってゆく。

「雑魚どもが……自分が何をしているのか分かってきているのか。わざわざ餌に釣られに行くなど……」

御堂さんがギリギリと歯を食いしばりながら呟いた。

「ならばさっさとここを出ていけばいい。迷っているのだろうか？」

ディスクを手に取りながらリュウ君が言った。

「……葛西。お前も、これを見たいか？」

リュウ君の問いに、俺は言葉を詰まらせた。

モノパンダが殺人の動機と語るDVD。

そこにどんな狂気が込められているのか、俺には想像もつかない。見るべきじゃないのは、分かっている。

でも、でもさ……

君が悪いんだよ、丹沢君。

『外の世界で何かが起きているかもしれない』なんて言っただけ。

君もだ、伊丹さん。

君たちが俺たちの不安をあおったりしなければ、こんなことにはならなかった。

こんなことにはならなかったんだ。

責任……とってくれよ……！

俺は黙って、モノパンダからDVDを受け取っていた。

「ぎひやひやひや、そんなじゃお楽しみ映像をご堪能あれ〜！」

モノパンダの声を背に浴びて、俺は視聴覚室の席の一つに腰掛け、すぐさまプレイヤーにディスクを差し込んだ。

好奇心からか恐怖からか、心臓がバクバクと波打っていた。

パソコンを起動すると、すぐにDVDの再生が始まった。



最初に映ったのは、とても見慣れた光景。

都内の有名な映画館だ。

ここで幾度となく俺が脚本を手がけた作品を上映した。

そして、たくさんのお客様の声援を受けてきた。

この映像の中でも、映画館は満席に近いほど多くのお客様であふれかえっていた。

『希望の蔓』

スクリーンに大きく文字が浮かび上がっていた。

これは、俺の代表作といふべき作品のタイトルだ。

核戦争をただ一人生き残り、人類に、世界に絶望した一人の男。

一生分の簡易非常食を引きずって世界をさまよう彼は、とつくの昔に生きる氣力を失っていた。

しかし、世界にはもう一つ生き延びていた命がいた。

それは、小さな小さな豆の蔓。

己が孤独でないことを知った男は希望を取り戻し、残った生涯のすべてをその蔓の育成にささげた。

やがて、蔓は天を貫くほど大きな命となる。

最後には、天寿を全うした男の死骸を糧として、蔓の周りに新たな命が芽生え始める。

希望の蔓が、死の瞬間まで男が信じ続けた希望が、世界を復活させたのである。

そんな物語だ。

希望を信じれば、いつかきつと救われるという主題の話だ。

しかし、今まさに上映が始まるというタイミングで、画面は暗転した。

そして。

次の瞬間、俺は信じられないものを目にしていた。

映りこんだのは、確かにさつきと同じ映画館。

俺が慣れ親しんできた映画館のはずだ。

じゃあ……なんで？

客が全員、血を流して突っ伏しているんだ？

なぜ、スクリーンに血がほとぼしっているんだ？

…そして、スクリーンに映し出されているエンディング映像。

本来は天高くそびえたつ蔓の根元に多くの草木が生えているという内容のはずなのに。

蔓は紫に変色し、ところどころに毒々しいオレンジ色の華が大きく咲いている。

花のめしべからは胞子のような粉がまきちらされ、それを浴びた草木は見る見るうちに枯れてゆく。

中央に表示されているはずのタイトル、『希望の蔓』。

そこには、絵の具で描いたような薄汚い文字でこう書き足されていた。

『に絶望の華を』

『希望の蔓に絶望の華を』

「なんだよ……これ!!」

俺は思わず叫んでいた。

ぐるぐると視界が回る。

俺の作品が、俺の才能が。

跡形もなく、何者かに蹂躪されている。

こんな、こんなことが。

「あつてたまるかあああああああー!!!」

「葛西君!!」

はっと気が付くと、涙を浮かべた小清水さんが俺を見つめていた。

「はっ、はっ、はっ……」

呼吸を整えながら、俺は自分が見た映像を脳内ではつきりと咀嚼した。

見た。確かに見た。

大切なお客様が倒れているところを。

俺の作品が汚されているところを。

「こんなの……こんなの、嘘だよね?！」

声を震わせながら、小清水さんは俺に答えようのない問いを向けてきた。

彼女が見た映像も、彼女の精神を大きく傷つけるものだったに相違ない。

嘘だ。

嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だッ!!!

「嘘に決まってるんだ!!」

自然と体が叫んでいた。

嘘でなければならぬ、こんなこと。

現実であつてたまるか。

「おいおいお二人さん、いい感じになつてないでこっち向いてくれよお?！」

モノパンダの声だ。

俺は興奮冷めやらぬまま、精一杯の力を込めてモノパンダを睨んでやった。

「なんだよ、つれないなあ。オイラからのプレゼントにはまだ続きがあるつてのによお」

「……続き、だつて?！」

「そ、まずは葛西君! ほれ!」

そう言つてモノパンダは段ボールから何かを取り出ししてきた。受け取つてみると、それは万年筆だった。

いや、ただの万年筆じゃない。

こいつは、俺に脚本家の何たるかを説いた父からの贈り物。造形といい、上に彫り込んである俺の名といい、間違いない。

だがなぜ、俺の家にあるはずのこれを、こいつが……？
いや、それよりも。

なんでこの万年筆に血が付いているんだ??

「オイラはさあ、根拠もなしに人に何かを教えるのって嫌なんだよ。どうぞ、今の映像もねつ造とかって思ってたんじゃないの？ だからそれっぽい根拠を用意してやったの！ オイラはぜーったいに嘘なんかつかないからな！」

考えたくもない予感が頭の中に広がる。

「これは間違いなくオメーの万年筆だよな、葛西君？ あれれ？ なんて血なんか付いちちゃってるのかな？ もしかして、オメーの家族に何かあったりして」

「そんな馬鹿な……そんなことが……」

もう、反論の言葉すら出てこなかった。

四日前、家を出るときに何気なく挨拶を交わした家族のみんな。いつたい、どうしちやつたって言うんだ？

何が起きたんだ？

頼む、頼むから教えてくれ。

「さて、ここで問題！ 天才脚本家である葛西幸彦君の家族とお客様に降り注ぐ悲劇！ 彼らは果たして、どうなったのでしょうか……??」

悪意に満ちた笑みでモノパンダは告げる。

「正解は……」 卒業」のあとで……!! きひやひやひやひやひや!!」

「卒業」。

その一言が俺の胸に突き刺さる。

次に浮かんだのは、御堂さんの言葉。

「この中の誰かを、犯人とバレないように殺す……だったな?」

これこそが、黒幕の目的。

俺達の大切なものを奪って、それを餌に変えて俺たちに殺し合いを

起こさせる気なんだ。

どこまで残酷で、卑劣なんだろう。

「うぐつ……うう……嘘よお……こんなの……うつ……うああく……」

ふと横を見ると、小清水さんが顔に手を当てて泣き崩れていた。

「ふざけてんじやねーぞテーマボケゴラアツ!!」

咆哮を上げたのは、逆鱗に触れた山村さんだ。

「オレの家族を……仲間を師範代をおおおおお!!! 卑怯者があ

ああああ!!!」

激情に駆られて怒鳴り散らす彼女の目には涙がいつぱいに溜まっている。

「卑怯者? そんな言い方はひどいんじやねーの? オイラは”ありのまま”を映像に収めただけなんだけどなあ」

「ありのまま、だと?」

御堂さんが立ち上がって呟いた。

彼女も自分の映像を見たはずなのに、やけに冷静だ。

「そうだよ! 別にオイラはみんなの家族に手を出してねーし、みんなの大切な人々に危害を加えたりなんかぜってーにしてねーよ! ただ外の世界で起きていることを”そのまんま”映したただけだからな!」

「なん……だと……?」

山村さんでさえもその言葉に啞然とする。

これが?

この映像に収められた恐ろしい出来事が?

今実際、ここの外で起きているっていうのか?

訳が分からない。

どうすればいい。

俺はどうすればいいんだ。

「……まあ、オイラから教えられるのはここまでだな。あとはオメーラ自身で考えな。じゃあな、オメーラー!」

「! おい、待て! もっと詳細を教えろ!」

御堂さんの要求もむなしく、モノパンダはデスクの下に滑り込んで

いき、それつきり出てくることはなかった。

「ちつ……だから言わんことじゃない。見ない方が身のためだったのだ。それを貴様らは、たかが好奇心のために……」

苛立ちを残したまま、御堂さんはそそくさと視聴覚室を後にした。

小清水さんや亞桐さんのすすり泣く声、山村さんが齒を食いしぼる音、丹沢君や土門君の涙をこらえるうめき声がこの教室を支配していた。

視界がぐるぐると回るような気分だった。

混乱とはこのような状態を言うのだろうかと嫌というほど痛感させられる。

何をするのが正解なんだろう。

ダメだ。何も考えられない。

頭が正常に働かない。

この感情はきつと、ここにいる全員が抱いていたのだろうか。

だからこそ、この空気を突き破ったあの人の一言は衝撃だった。

「皆の者っ!! 希望を捨ててはならぬ!!」

高く甲高い、しかしはきはきとした声。

津川さんだ。

見ると、どこから取りだしたのか、彼女は戦隊ヒーローのような仮面を被ってポーズをとっているではないか。

「皆、辛いものを見たのだろう! 自分の大切な家族、友人、ファンや客……。そういったものたちが傷つき、倒れる姿は非常に痛々しく、身を切られるような辛さであっただろう! しかし! こんな時だからこそ! 笑うのだ! 笑ってやり過ぎすのだ!! それこそが! 愛と希望の戦士、ホープ仮面の生き様だッ!!」

訳が分からない。

その一言で片づけるのは簡単だ。

でも……なんでだろう。

感情がごちやごちやになっっているからだろうか。
笑えるような状況じゃないのに。

「あはっ……はははははは……」

自然と笑い声が漏れていた。

家族に何かがあつたかもしれないのに、否……“かもしれない”ではなく、はつきりと何かが起きたらしいことは確かだ。

彼らが無事だという保証は何もない。

心配で心配で胸が張り裂けそうだ。

とても笑っていられるはずじゃない。

いや……だからこそなのかもしれない。

笑っていないと正気を保てないのかもしれない。

その証拠に……

「くすっ……なにそれ……うふふ……ふふ……」

小清水さんも目元の涙をぬぐいながら笑っていた。

「ふふふ……ふふふ……そうですね!! いやあ、わたくしが先に言おうと思つたのにホープ仮面様に言われてしまいまいしたよ! さあさ皆さん! スマイルスマイル!」

入間君がここぞとばかりに両手を広げて言った。

「夢郷君、そんな難しい顔をしないで! さあ!」

そう言つて入間君は夢郷君の頬をつねり、無理矢理笑顔を作ろうとする。

「おい、おい。やめてくれって言ってるだろ。おい……」

初日に見た構図だ。

「は……はははっ! そうだな! こんな状況、笑つてねえとやってられねえよな! みんな、気遣わせてわりいな」

土門君もいつもの能天気な笑みをのぞかせた。

「あはははは! あんたらさあ、今の状況、分かつてるの? ほんと、みんなしてバカじゃないの? バカすぎて笑える! あははは……」

泣きじやくつていた亞桐さんも笑顔を見せてくれた。
笑うしかない。

大切な人々と自らの才能を蹂躪されて、それが真実らしいという証
拠まで突き出させられて、あげくここから脱出できないなんて。

どこまで絶望的なんだろう。

もう、笑うしかないな。

みんなはそれぞれ、引きつった笑みを浮かべながら視聴覚室を後に
した。

「ふふ……ふふふ……ふ……ふ……」

一人になると、それまで壊れたように笑い続けていた表情はその動
きを停止した。

「……………」

場を沈黙が支配する。

「あーあ……………」

やっぱり、俺は強がっていたんだ。

本当は怖くて怖くて、泣き出しそうだったのに。

無理して笑っていただけだったのだ。

「なんでだよ……………」

俺は頭を抱え込み、机に突っ伏した。

訳が分からない。

俺は学ぶためにこの学園に来たんだ。

こんなことに巻き込まれるなんて夢にも思っていなかったんだ。

なんでこんなことに……？

「大丈夫なりか？」

小さな声が耳に差し込まれてきた。

「津川さん……………」

いつの間に視聴覚室に戻ってきたのか、津川さんは薄暗い表情で俺
の隣の席にちょこんと座った。

「みんな……本当に悲しそうで……………なんとか力になってあげたかったけ
ど……………ほんとはみんな、無理して笑ってただけなり。あたしなんか

「じゃ、みんなを…」

「いや、君のおかげで心が安らいだよ。きつと、みんなそう思ってるよ」

俺は本心を正直に述べた。

実際、津川さんがさつきみんなを笑顔にしてくれなければ、俺はどうなっていたかわからない。

精神をまともに保てなかったかもしれないのだ。

「…本当なりか？」

「うん。君は…強いよ。決して、弱くなんかない。あんな状況でみんなを笑顔にできるんだもん」

「そっか。えへへ…嬉しいなり」

誰よりも先にみんなを元気づけようとした津川さんの態度は意外だった。

だって、本当は誰よりもナイーブで傷つきやすいはずの彼女が…。

これが、コスプレイヤーとしての彼女の強さなのかもしれない。大人しくて弱々しい姿は彼女のほんの一部分でしかない。

誰もが打ちひしがれるような逆境でこそ、彼女は誰よりも強いのだ。

少しの間、沈黙が流れる。

「リャンちゃん…ここにいたの」

入口の方から声が聞こえた。

入ってきたのは、亞桐さんだ。

「リャンちゃん、ごめん…。せっかく笑顔にしてくれたのに、ウチ、もうどうしたらいいかわからないの。だって先輩が…うっ…うっ…うっ…」

亞桐さんはすがりつくように津川さんの膝元に顔を埋め、わんわん泣き始めた。

「…ごめん。もしよかったら、莉緒たんのお話、聞かせてもらってもいいなりか？」

亞桐さんは顔を上げ、顔をぬぐいながら二、三度頷いて話し始めた。

「…最初は…ひぐつ…中学時代の…クラブの…仲間が…倒れてて…血まみれで…うう…」

「…そっか。辛かったなりね。泣いていいなりよ」

自らも目に涙を浮かべ、津川さんは何度も亞桐さんの背中を優しく叩いていた。

「そしたら…次に…大好きな…先輩が倒れてて…どうなったか知りたかったら…」

「卒業」しろ、ってことか」

俺は思わず亞桐さんの言葉の続きを呟いていた。

「…俺はお客様と自分の作品をめちやくちやにされてた。父さんからもらった万年筆付きでね。…めちやくちやなのは俺の頭の中だよ。あんなの見せられて、いったいどうすりゃいいんだ…」

「……リャン様が見せられたのは…ファンのみんなと…おばあちゃんだったなり。笑うのも大事だけど、泣きたいときはやっぱり泣いていいなりよ。莉緒たん、涙枯れるまで泣いちゃっていいなりよ。その代わり、枯れたら今度は笑ってほしいなり」

「ごめん……ありがと…うううう…」

津川さんの心遣いに感動したのか、亞桐さんはまた声をあげて泣き始めた。

ギャルっぽい見た目と言動で先入観を抱いていたが、実際のところ彼女はかなり繊細な女子高生なのだろう。

だからこそ、自分の大切な人間が傷つくのは見ていられないんだ。

二人を置いて、俺は複雑な気分で視聴覚室を後にした。

「葛西さん」

廊下に出てすぐ、横合いから声をかけられた。

入間君が待ち構えていたかのように、腕を組んで廊下の壁にもたれかかっていた。

常に笑顔の彼だからこそ、真面目な顔になると鋭い目つきが心に突き刺さる。

「お辛いでしようが……くれぐれも変な気は起こしませんよう、よろしくお願い申し上げます」

いやに重苦しい口調で彼はそう告げた。

「あの方の目的は殺し合いのみならず……もつと深く、もつと狂氣的なところにあるのですから」

「……う？ どういうこと？」

俺が首をかしげて尋ねると、入間君はちらりと監視カメラを見て、くるりと俺に背を向けた。

「いえ、蛇足でしたね。本日はもう休みましょう。お疲れ様です」
つかつかと歩み去っていく彼の背中を、俺は茫然と見つめていた。

そして。

部屋に戻り。

やるせない半日を過ごした。

混乱と、恐怖と、絶望を残したまま。

夜は更けた。

時間は過ぎていった。

過ぎてしまった。



眠っていたのか、ただ寝つ転がっていただけなのか分からなかった。

疲れは全く取れていない。

肉体的な疲れも、精神的な疲れも。

とりあえず俺は、考えるのをやめることにした。

最低限の身支度を終え、ふらふらと食堂を訪れた。

「おはようございます…葛西殿」

丹沢君の低い挨拶が聞こえてくる。

もともとこけていた彼の頬はさらに肉を失い、今にも骨と皮だけになつてしまっそうだ。

「うん……おはよう」

辛うじて声を絞り出し、答える。

「みんな……今日は遅いね。まあ、昨日あんなの見せられたんだから、無理もないけどさ……」

亞桐さんの言う通り、食堂には半分ほどの面子しかない。

みんな、大なり小なり傷ついているんだろう。

そう思った直後だった。

“ピンポンパンポン”。

昨日、俺たちを視聴覚室に呼び出すために行われたアナウンスと同じチャイムが鳴った。

そして。

『死体が発見されちゃったぜ！ 現場はトラッシュルームだ！ とりあえず全員、現場まで集まってくれよな！』

俺達は黙って顔を見合わせていた。

「し、し、し……………」

…死体？

「…は？ へ？ 何？ どういうことよっ!？」

亞桐さんは立ち上がり、取り乱して叫んだ。

「…まさか、そんな……………本当に、殺人が……………」

夢郷君の一言が俺の、そして全員の心に突き刺さった。

「…行くしかない。例え待ち構えているのが…絶望でもな」
リュウ君はやけに冷静な足取りで食堂を後にした。

「皆さん！ 今の放送は……………」

厨房から入間君と山村さんが飛び出してきた。

「いや…いやよ！ 私は行きたくない…！ 行けないよ……………」

涙ぐんだ声で足を震わせ、亞桐さんにしがみつくと清水水さん。
俺も同様の気持ちだった。

でも……

「拙者は……参りますよ。葛西殿も、……か、覚悟をお決めくだされ」
ビクビクと震えながらも食堂を出ていく丹沢君。
俺は言葉を発せぬまま、その陰についていった。

場所は、トラツシユルーム。

薄暗い空間を、焼却炉の炎が赤く照らす。

その空間に立つ数人の人間は、言葉を発することもできず、ただ虚ろな目で焼却炉を見つめていた。

目の前の現実を、誰も認識できていない。

昨日受けた衝撃と絶望なんか、どこかに吹っ飛んでしまいそうだった。
た。

だってこれは、生まれて初めて目にする“人の死”。

つい昨日まで何事もなく動き、笑い、泣いていた人の成れの果て。

認めない。信じない。

これが。

焼却炉の投入口からだらりと垂れた白い手が。
物言わぬ炭の塊と化した肉体が。

“超高校級のコスプレイヤー”、津川梁さんだなんて。

絶対に、信じるものか。

『こんな時だからこそ笑うのだ！』

笑って やり過ぎす のだ！

それこそが！

愛と
希望
の
戦士

ホー
プ

仮
面の

生
き
様

だ
ッ

!!
?

┌



「な……んだ……こりや……?」

土門君の愕然とした声が背後から聞こえてきた。

「ぎゃあああああああああああ!!!」

小清水さんのものか山村さんのものか分からないが、悲鳴が続けて聞こえてきた。

「あ……あ……そんな……」

丹沢君は恐れ之余り床に尻餅をつく。

「……なんとということだ……まさか、本当に殺人が起きるなど……」

御堂さんの眩きが聞こえる。

「ぎひやひやひやひや……!! ついに、ついに起きちゃったなあ……!! コ・ロ・シ・ア・イ!!」

耳障りな声が響いてくる。

「記念すべき最初の犠牲者は……」超高校級のコスプレイヤー〃、津川梁さんだぜー!!」

「リヤンちゃん……? うそ、リヤンちゃん……?」

亞桐さんがふらふらと焼却炉に歩み寄る。

「いやあああああああああああ!!!」

床に崩れ落ちた彼女の魂の叫びがトラッシュルーム内に響く。

ぐにやりぐにやりと、視界が丸く歪んでゆく。

『リヤン様なり……!!』

昨日まで、つい昨日まで、彼女は普通に生きていた。俺と同じように息をして、感情を持って、話もしていた。それが嘘みたいだ。

昨日までの生存の事実をすべて否定するかのよう。

白く、小さな手はだらりと焼却炉の投入口から垂れたまま、二度と動くことはなかった。

もう永久に、彼女の可愛らしい笑顔を見ることはできない。彼女に励ましてもらうこともできない。

これが、生まれて初めて目にする“人の死”だなんて。

ガクリ、と俺は膝をついていた。

あんまりだ。

ひどすぎる。

こんな、顔も何も分からないようにして。

これが彼女だったかもわからないようにして。

無残なんて言葉じゃ済まされない。

なんで、どうしてだ？

彼女がどんな悪いことをしたというのだ？

「…嫌。嫌よ、こんなの」

伊丹さんが小さく呟いた。

「…私は…あなたに…謝りきれないのよ。こんなの、納得できない。こんな結果、私は認めない」

その声は、こみ上げる感情を爆発させまいとこらえるかのように震えていた。

「オメーが認めようが認めまいが、結果はな〜んにも変わんねーよ、

「バーカ！」

モノパンダは嘲笑の態度を崩そうとはしない。

「て、てめええええええ!! てめえが殺したんだろ、津川をつ!!」

怒りの形相で山村さんがモノパンダに詰め寄る。

「なんでだよ。オイラに殺す理由なんかないだろ? これはれっきとしたコロシアイ。殺したのはオメーラの中の誰かなんだよ」

その言葉を聞き、山村さんの赤いオーラは一瞬にして消え失せた。

聞きたくなかった。

この中の誰かが、このむごたらしい遺体を作り出したなんて。希望にあふれていた津川さんの人生を奪ったなんて。

十分じゃないか。

あの津川さんが亡くなったというだけで、絶望としては十分だ。それなのに、まだ絶望させる気なのか、お前は。

「それじゃあ始めよつか! ドキドキワクワクの捜査タイムを!」

「……捜査、だど?」

リュウ君が低い声で尋ねた。

「オメーラ、卒業の条件は分かってるよな? “クロだとバレないように人を殺すこと”。それがクリアできてるかのテストを行うんだよ! 今からオメーラには津川さんを殺した犯人を捜してもらおうぜ! そんなもつて、一定時間捜査したら“学級裁判”の時間だ! そこでオメーラはみんなで議論して、クロを当ててもらおうことになるぜ!」

モノパンダは、腕を広げて揚々とルールを語る。

「ふ、ふぎけないで下さいよ……。こんな状況で、そんなことができるものですか!!」

入間君が顎をガタガタと震わせながらも反論する。

「なんだよ、せっかくのお楽しみイベントなのに。これがアパシーつてやつ? ゆとりの症状? あのな、ちゃんとしたクロを当ててくれ

ないとクロ以外の全員がオシオキされることになっちゃうんだからな！」

「…オシオキ？」

「そ、オシオキ！ 何をされるかは…まあ、やってみてのお楽しみだな！ 学級裁判で正しいクロを指摘できればクロだけに、指摘できなければクロ以外の全員に受けてもらおうぜ！」

「おい…ちょっと待ってくれよ…なんだよ、そのルール！ 誰かは絶対にオシオキされるって…ことなのかよ」

土門君が顔を真っ青にして言った。

「そゆこと！ 一人死んだ時点でもうこの生活に平穩は戻らないのだ！ ぎひやひやひやひやひや！」

悪意に満ちた笑いが空間を支配した。

「と、いうわけで！ “ザ・モノモノファイル”をオメーラの電子生徒手帳に送っとくぜ！ 遺体の詳しい情報が記載されてるから、ちゃんと見て捜査に生かせよな！ それじゃあ、グツドラック！」

「おい、待て」

御堂さんが去ろうとするモノパンダを呼び止める。

「オシオキとは…処刑のことか？ オシオキされた人間は死ぬのか？」

ぎひやひや、とニヤけながらモノパンパンダは御堂さんの方を振り向いた。

「やってみてのお楽しみって言ったろ？ ……まあ、やるからには頑張ってもらいたいけどな。…命懸けで、さあ」

そしてモノパンダは焼却炉の影へと消えていった。

あとに残されたのは、絶望に支配された俺たち。

昨日の涙とは比べ物にならない勢いで床に泣き崩れる亞桐さん。

同じく床に座り込んで、両手を顔に当てて静かに泣く小清水さん。

意識を失ったかのように濁った眼で天井を見上げる安藤さん。

壁にもたれかかり、茫然と眼前の光景を眺める山村さん。

無表情のままだが、握りしめた拳をわなわなと震わせてうつむいている伊丹さん。

ギリギリと、犯人への怒りを表すかのように歯を食いしばる御堂さん。

黙って遺体の方に向けて両手を合わせる夢郷君。

遺体を直視できず、ガタガタと震えてしやがみこむ前木君。

あふれ出る涙をしきりに拭う丹沢君。

黙って腕を組み、何かを考え込むリュウ君。

青白い顔でうなだれる入間君。

目の前の絶望に打ちひしがれ、膝をついて頭を抱える土門君。

やるせない気持ちのままに壁を殴る釜利谷君。

みんな、等しく絶望に染められている。

でも、この中に一人、偽りが混じっている。

津川さんを手にかけた人物がこの中にいるんだ。

「…なにをしている。さっさと捜査を始めるぞ」

御堂さんの一言が沈黙を打ち破った。

「…ほんとに、やらなきやダメなのか…?」

前木君が茫然と呟いた。

「やつの話を聞いただろう? 恐らくオシオキとは死を意味する。や

らねば我々が殺されるのだ」

「そんな……無茶苦茶だよ……」

土門君の言葉はここにいた全員が思っていたことだった。

「フン……。まさか本当に感情に囚われて取り返しのつかない過ちを起こす愚か者が出るとはな……。私の誤算だったな。だがもつと驚くべきは、そいつが今もこうして平然と我々の中に紛れ込んでいるということだ」

俺は顔を上げ、全員の顔を見た。

疑心に満ちた視線が部屋の中を飛び交う。

「まずは焼却炉のスイッチを切れ。遺体を詳細に調べておく必要があるだろう」

御堂さんが言うが早いかな、焼却炉の近くに立っていたリュウ君がそのスイッチを切る。

「釜利谷三瓶。貴様は医学の心得があるのだろうか？ 遺体の検死をしてもらおうか」

やけに淡々とした口調に面喰いながらも、釜利谷君は「…ああ。分かった」と答えた。

「次は現場の監視か…。犯人が現場に手出しができぬよう、腕の立つものがいいだろう。リュウ、山村巴、貴様らが適任と見た」

「分かった。その代わり、俺が現場を動けない以上、お前には全力で捜査してもらおうぞ」

リュウ君はすぐに答えたが、山村さんは涙を振り撒いて首を横に振った。

「無理です…。私は…。私は…。」

「ふん…雑魚が。まあ、リュウと釜利谷三瓶の二人だけでも十分か」

さきほどモノパンダに怒鳴り散らしたのが嘘みたいなのに、山村さんは肩を震わせて泣いていた。

それも無理はない。

リュウ君と御堂さんの二人が少しおかしいくらいなんだ。

「…あなた、どうしてそんなに落ち着いて、淡々と処理できるの？ 昨日まで生きてた人が死んでいるのよ…？」

伊丹さんが御堂さんに言い寄る。

「なんだ、今更友情ごっこか？ 情に訴えて犯人でないことをアピールしたいのかは知らんが、犯人でないのならさっさと捜査に移った方が身のためだぞ」

伊丹さんの表情が変わる。

「…ッ!! この…人でなし！ なんで…なんで津川さんが死んで、あなたみたいな人が生きてるのよっ!!」

今までに見たことないくらい彼女は取り乱していた。

「…私とて、津川梁への同情がないわけではない。モノパンダが言った反吐が出るようなルールさえなければ、手向けの一つや二つは授けたいところだ。だが今は一刻を争う。死にたくなければ、この中に潜

む殺人鬼を炙り出さねばならんだ。死者への手向けなど、そのあとでいくらでもできるだろう？」

御堂さんの言っていることは正しい。

初日、何のためらいもなく山村さんを殺そうとしたモノパンダ。

あいつがオシオキというからには、命の安全など保障できるはずもない。

オシオキを受けないためには、捜査をしてクロを見つけ出さなければならぬのだ。

でも、でもさ。

どうしたらそんな風に、綺麗さっぱり割り切れるんだよ？

君とって、津川さんはその程度の存在だったのか？

「…行こうぜ、葛西」

声をかけてきたのは前木君だった。

「あのヌイグルミの言うことに従うなんて反吐が出るけど……やらなきゃ、殺されちまうんだぜ……？ これ以上ここにいたらますます混乱しちまう。あれこれ考えるのはやめにして、さっさと捜査しようぜ」
言うが早いのか、彼は俺の腕を引っ張ってトラツシユルームを出た。

「え、ちよ、前木君……」

俺の言葉など歯牙にもかけないくらい強い力が腕に伝わってきた。

トラツシユルームを出ると、前木君は腹を押さえて数秒間硬直し

……

「う……ごめん。トイレ……」

慌ててトイレへ駆け込んでいった。

それに続いて俺も、思い出したかのように吐き気を覚えた。

凄惨な遺体が脳裏によりみがある。

…遺体。遺体と言えば。

俺は電子生徒手帳を開いた。

見ると、一番下に新しい項目が追加されている。

『ザ・モノモノファイル①』

恐る恐るそれをタップした。

『被害者は津川梁。死亡推定時刻は午前二時頃。右手以外の部位は完

全に炭化している。頭部に打撃痕あり』

淡々とした文章で、彼女の無残な死を表現していた。

この文章に偽りが無いのだとしたら…彼女はみんなが寝ている真夜中に殺害されたということか？

一体なんで…。

「わりい……。うがいして、顔洗ってきた。もう大丈夫だ」

前木君がトイレから戻ってきた。

大丈夫とは言っているが、その顔は真っ青だ。

「…俺は、土門も三ちゃんもジョーンズも、人殺しだって思いたくねえ。殺したのはあのヌイグルミだって信じてえ。だから…：…きちんと捜査して、俺らの中に殺人鬼はいねえって証明したいんだ」

前木君は静かな口調で己の胸の内を独白した。

「葛西、お前だって仲間を疑いたくないだろ？ だから協力してくれ。…：…見た感じ、土門は本気で参っちゃってるようだった。三ちゃんは検死しなきゃいけないし、俺が頼れるのはお前しかいないんだよ」

「…：…うん」と俺は小さくうなずいた。
「…：…分かってる。君の気持ちは痛いほど分かってるよ。…：…やろう。捜査、しよう」

そして俺たちは歩き出した。

目を向けたくない真実、しかし俺たちの命と等価な真実に向かつて。

【コトダマ入手：ザ・モノモノファイル①】

被害者は津川梁。死亡推定時刻は午前二時頃。右手以外の部位は完全に炭化している。頭部に打撃痕あり。

最初に俺達が訪れたのは食堂だった。

「こんなところに手がかりがあるかなんてわからねえ。けど、一つでも見逃すわけにはいかねえからな…。いつもと違うことはないか探してみよう」

そして俺と前木君は二人で食堂を探し回った。

机の配置とか、観葉植物の鉢に何か隠されていないかとか、ゴミ箱の中身とかまで。

だが、何か変わったようなことは見つからなかった。

「…おい、なんか分かったか?」

「…いや、何も」

少しずつ、心の中で焦りが大きくなっていくのが分かった。

こうしている間にも、裁判とやらの始まりは迫っているんだ。

こんなことをしていいのかわかるか?」

そんなことを考えていると、厨房から人影が現れた。

「……御堂さん」

顎に手を当てて思考する御堂さんは、一瞬ちらりとこちらを見て、何事もないように歩き出した。

「待ってくれ! 何か分かったことがあるなら教えてくれないか!」

俺達はここを探してたんだが何も見つからなくて……」

前木君が去ろうとする彼女を呼び止める。

ふん、と彼女は冷徹な視線を向けてきた。

「フン。クロかもしれない貴様らに教えるべきことなど何も無い……
といたいところだが、命がかかっている以上、中途半端な疑心暗鬼は捨て置くでしょう。心して聞け。厨房で得た情報は一つ。包丁が一つなくなっていた」

「……包丁?」

「信じられないのなら見てみるがいい。言っておくが、今現在私が服の下に隠して持ち去っているなどという事はありえんぞ。持ち去られていたのは一番大きな包丁で、とても服の下に入りきるサイズではないからな」

念のため二人で厨房を見てみると、御堂さんの言う通り一番大きいサイズのものがなくなっていた。

これが果たして事件に関係あるのか分からないが、御堂さんがわざわざ言うくらいだから覚えておいた方がいいのかもしれない。

「コトダマ入手：厨房の包丁

厨房の包丁が一つなくなっていた。一番大きいサイズのもの。

その後、もう少し食堂を調べたいと申し出た前木君と別れ、俺は食堂から廊下をはさんで向かいの休憩室へと入った。

すると、そこには丹沢君が室内を調べていた。

二日前、ここで彼と人間君とで話したっけ。

あのころの記憶が、あのころの楽しさが、もう遠い昔のことのようだ。

「…葛西殿。某も踏ん切りがつかしました。できる限り捜査に協力しようと思います」

「ありがとう、丹沢君。…助かるよ」

辛いのはみんな同じだ。

それでも、やらなければいけないことがある。

「葛西殿。先ほどまで某はこの部屋の特徴を調べていたのですが……。この部屋はこの通り、室内カラオケを完備しております。その影響で、室内は完全防音となっております。また、夜時間になると消灯し、机の上のスタンドしか光源がなくなってしまう。といいますのも、一昨日、夜遅くまでここで漫画を読んでいたら急に電気が消えたものですから」

つまり、昨晚津川さんが殺害された時間帯、この休憩室は暗く、周囲に音が漏れない状況だったということか。

「あ、それともう一つ。我々の個室も完全防音加工が施されておるようです。…犯人ならば、どのような場所を殺害場所を選ぶでしょうか？ これらのことを踏まえると、殺害現場は幾分絞られるように思えます」

「ずいぶん本格的な推理だね」

「いえいえ、推理小説の受け売りでござりまするよ」

丹沢君は苦笑しながら謙遜した。

【コトダマ入手：休憩室の光源

夜時間になると休憩室の証明は消灯し、机のスタンドしか光源はなくなる。

【コトダマ入手：防音加工の部屋

一回の部屋で防音加工がなされているのは各個室と休憩室のみ。

丹沢君が話してくれた情報を頭で反芻しながら、俺は休憩室の備品の調査を開始した。

「…ん？」

目についたのは、隅にあるロッカー。

開けてみると、中に箒やモップが立てかけてあった。

掃除用具入れのようだ。

「ああ、そうでした。葛西殿に言おうと思っていたことがあります」

丹沢君が歩み寄ってきた。

「この掃除用具入れ、モップが一本足りないのがありますよ。毎日某が掃除していたので、数え間違えということはありません。いやはや、誰かが勝手に持っていったのでしょうか…」

モップが足りない…？

さしたることはないが、一応記憶しておこう。

【コトダマ入手：休憩室のモップ

休憩室のモップが一つ減っていた。行方は不明。

休憩室の残りの調査を丹沢君に任せ俺は、廊下で入間君と夢郷君に出くわした。

「…おや、葛西さん。気分は大丈夫ですか？」

俺を気遣っているのか、柔らかい笑みを浮かべて入間君は訪ねてきた。

彼の手には手帳とペンが握られている。

「少しでも手がかりになりそうなことはメモしておこうと思いましたがね。休憩室にいらっしやっただようですが…なにかお分かりになりましたか？」

俺は休憩室で得た今現在の情報を二人に話した。

入間君はそれをすらすらと手帳に書き留めてゆく。

「…ふむ、ありがとうございます。では、こちらからも情報を提供させていただきますでしょうか」

そう言って入間君はちらりと夢郷君に目くばせした。

「少し言いづらいんだが……」と言葉を濁した後、夢郷君は重要な情報を口にした。

「昨晚、一時半ごろだろうか…。廊下で山村君を見たんだ」

「……え？ 本当に？」

「遠目で見ただけだが……確かに山村君だったはずだ。部屋で夜遅くまで読書をしていたんだが、トイレに行こうとしたときに、ちらりと見たんだ……。まさかあの後、津川君があんな目にあうなんて……。僕がもう少し注意深ければ……」

「後悔しても仕方ありませんよ。今は真実の追及を何より優先させましょう」

落ち込む夢郷君を入間君が慰めた。

【コトダマ入手：夢郷の証言】

昨晚一時半ごろ、トイレに行く途中、廊下で山村を見かけたという。情報を交換し終わったので二人と別れて廊下を進むと、個室の一つの扉が開け放されているのが見えた。

扉のネームプレートを見ると。

「津川さんの部屋、か……」

捜査のためにモノパンダが開放したのだろう。

死んだ人間にはプライバシーなど関係ないというのか……。

お邪魔しますと呟いて中に入ると、そこには先客がいた。

「…土門君」

多種多様な服やウィッグが所狭しと置かれた部屋の真ん中で、土門君が突っ立っていた。

「……死んじまったんだよなあ、あいつ。信じられねえよ……」

すぐに捜査に向かった前木君と違い、彼は意外と津川さんの死をずっと引きずっているようだ。

…いや、俺だって決して引きずっていないわけじゃない。ただ、捜査という目の前の現実には逃げ込んでるだけに過ぎないのだ。

「なんか手がかりがないかと思つて当たつてみたんだけどよ、コスプレの衣装が散らばっているばかりでなにも分かりやしねえな……。つたく、片付けぐらいしてほしいもんだよ」

言っている内容とは裏腹に、もの悲しく寂しい口調で土門君はぼやいていた。

部屋にはまだ、彼女が生きていたころの生活感が残っていた。彼女がトラッシュルームで炭になっているという事実など、嘘のように。

土門君の言う通り、ダンスやクローゼットにはいっぱい衣装や小道具が詰め込まれていた。

彼女のコスプレへの熱い情熱が伝わってくるようだ。ダンスの上には、大小形状様々のウィッグが飾られている。

「……………」

ウィッグが一つ足りない。

一つだけウィッグが乗せられてない飾り台があるのだ。

彼女がしまい忘れたのだろうか？

…いや、何かいいような違和感を感じるような…。

一応、覚えておいて損はないな。

【コトダマ入手：不足したウィッグ

津川の部屋のウィッグが一つ減っていた。どこか違和感を感じる。

これ以上部屋にいても悲しくなるだけだと思い、悲しみに暮れる土門君を残して俺は部屋を後にした。

どこを捜査しようかと歩き回っていると、廊下の壁にもたれかかる伊丹さんが見えた。

「伊丹さん……大丈夫？」

伊丹さんはガタガタと体を震わせ、涙を浮かべてうつつむいている。「大丈夫なわけ……ないでしょ……。たつたさつき……津川さんの遺体が……取り出されたのよ。それを見たら……気分が……。あんなの……あんなの、酷すぎる！」

伊丹さんは少し過呼吸になりながらも声を荒げた。彼女の視線の先にはトラツシユルムの扉がある。俺は恐怖をこらえながらその扉を開き、そして……。

「……………うっ!!」

前木君と一緒にいた時とは比べ物にならないほどの強烈な吐き気が俺を襲った。

逆流してきた嘔吐物を辛うじて飲み込んで胃に戻し、すぐさま遺体から目をそむけた。

俺が見たものは、最早人と呼べるものではなかった。

焼却炉の投入口に垂れ下がっていた右手を除けば、どこを見ても完全な黒炭。

人の形状をただけの炭の塊だった。

だが、その形状は恐ろしくリアルで、むごくて。

絶叫というにふさわしいほど大きく開かれた口。

そこにあの可愛らしい大きな瞳があったとは信じられないほどぼつかりと空いた空虚な眼孔。

髪の毛も何もかも燃え尽きた丸い頭部は、木炭のように表面がざらついている。

その遺体は、俺が想像していた姿よりも、ずっとずっと悲惨だった。それは、苦しんで苦しんで苦しみ抜いた末に死んだ彼女の壮絶な最期を何よりも的確に表していた。

「……あんまり見ない方がいいぞ。俺もだいたいぶびびってるくらいだ」
目をつむってうつつむいていると、釜利谷君の声が聞こえてきた。

「司法解剖の見学とかしてたから死体は慣れてるはずなんだが……こ

いつは流石にキツイな……。ひでえもんだよ」

「だが、死体を調べて分かったこともある」

リュウ君の声も聞こえてきた。

「まず、モノモノファイルとやらの記載を確かめてみたが、確かに頭部には打撃痕らしい傷が見つかった。それと、焼けていない右手だが、炭化はしていないものの火傷で赤く腫れているな」

「……ああ。大体リュウの言う通りだ。頭部の打撃痕と手の火傷、この二つは覚えた置いた方がいいぜ、葛西」

「それと、このトラツシユルムの厄介な仕組みも鍵になるかもしれない。今は死体発見と捜査のためにモノパンダが停止させているようだが、このトラツシユルムは“電子生徒手帳で開き、間をおかずぐに閉じ始めてしまう”。ここに津川を投げ込んだ犯人にもそれが適用されているのは間違いあるまい」

【コトダマ入手：津川の遺体】

焼却炉から取り出された津川の遺体には、確かに頭部に打撃痕があった。また、炭化していない右手は火傷で赤く腫れている。

【コトダマ入手：トラツシユルムの仕組み】

トラツシユルムのシャッターは電子生徒手帳によって開き、間髪を入れず閉じ始める。一度閉じ込められると誰かに開けてもらわないと出られない。

「……どうだった？」

トラツシユルムを出ると、伊丹さんが震える声で聞いてきた。

「……信じられないよ。あれが、あの遺体が……。あの津川さんだなんて」

コスプレイヤーにとって、美しさや可愛さ、装飾や衣装は何よりも重要なことだろうに。

それを否定するかのように、顔も体も何もかも焼き払われた。

まるで彼女を粗大ゴミのように。

容赦なく焼却炉に突っ込んだんだ。

「私は……。私は犯人を許さない。たとえどんな理由があつたとしても……よりにもよつてあんな殺し方、絶対に許せない。必ず……犯人を見

つけてみせる」

目をぬぐいながら、伊丹さんは強い口調で呟いた。

だが、次の瞬間には涙がにじんでいるはずの彼女の瞳は、これ以上ないくらい強いまなざしで俺を睨んでいた。

「もし、あなたが犯人だったら……私は……！」

「……！」

俺が犯人じゃないことは俺と津川さんが一番分かっている。

だが、伊丹さんにとっては俺が犯人じゃないという確証は何もない。

俺は何も反論できなかった。

「……いえ、裁判の前にこんなことを言ってもしょうがないわね。忘れてちようだい」

そう言つて再び悲しげ目つきに戻り、歩き去っていった。

いつでも落ち着いていて感情の乏しい人だと思っていたけど。

ここまで感情的になるなんて。

そういえば、さきほど御堂さんに挑発的なことを言われた時もしっかり逆上していた。

……いや、人として当たり前のことだろう。

彼女にとって、津川さんは大切なクラスメートであり、友人だったんだ。

その証拠に、彼女は死体発見直後、「謝りきれていない」と言っていた。

初日、津川さんにひどいことを言ってしまったことをまだ悔やんでいたんだ。

津川さんを失った悲しみ、残忍な手口を行った犯人への怒りは痛いほどわかる。

彼女のためにも。

犯人を見つけよう。

たとえそれが新しい絶望につながるとしても。

俺達にはそれしかできないのだから。

次に俺が訪れたのは保健室。

そこでは、向かい合って座る山村さんと小清水さんがいた。

「……あ、葛西君。……ごめんなさい。みんな頑張って捜査してるのに……」

俺が入ってくると、すぐに小清水さんが消え入りそうなほど小さい声で謝ってきた。

「……いや、無理は良くないよ。落ち着くまで、ゆっくり休んでた方がいい」

なけなしの言葉で慰め、俺は保健室の調査を開始した。

「……待って。ここはもう私たちが調べたの。特に変わったところはなかったわ」

「……ほんとに？」

こくり、と小清水さんは頷いた。

「うん。睡眠薬の錠剤が減ってるんだけど……これは巴ちゃんが発見したものだから」

「……そうなの？ ちょっと詳しく聞かせてもらえる？」

俺は身を乗り出して尋ねていた。

女性のプライバシーを聞くのはいいことじゃないけど、山村さんに限っては別だ。

なぜなら、あの人のあの証言が山村さんの行動を言い当てているのだから……。

「……はい」と山村さんは涙をぬぐい、話し始めた。

「……昨日、動機のDVDを見た私は……怖くなって……。単に動機が怖いのではなく、その……」

「……私が、誰かを殺してしまうんじゃないかと……」

どくん、と心臓の動機が早くなるのを感じた。

「怖かったんです……。基本的に、怒って我を忘れているときでも、記憶

はちゃんと残っているんですけど……ごくまれに……心の底から感情が高ぶってしまうと……まるで酔っ払っているかのようには、何をしていたか思い出せなくなる時があるんです。もしかしたら私は……本当の意味で我を忘れて……誰かを殺してしまおうんじゃないかと……不安で不安で……」

「だから巴ちゃん、昨晩は一晩中トラッシュルームにいたのよ」
「……え？」

驚きのあまり体が硬直した。

「昨日の夜時間になる直前、巴ちゃんが私に頼み事してきて……。『自分をトラッシュルームに閉じ込めてほしい』って。その時に睡眠薬を持っていったのよ。ぐっすり眠れるようになって……。だから、最初にリャンちゃんの遺体を見つけたのは、巴ちゃんなのよ」

これは、一体……

明らかに、「あの証言」と矛盾する。

「コトダマ入手：昨晩の山村の行動

昨晩、山村はトラッシュルームで寝泊まりしていた。睡眠薬も服用していた。小清水が証人。

「…今朝の状況を聞かせてくれない？」

「えっと……私は巴ちゃんに『六時半に起こしてほしい』って言われてたんだけど……。何度もシャッターを叩いたんだけど反応がなくて。そうこうしてるうちにゆきみちゃんと前木君とリュウ君が来て。しかたないからシャッターを開けてみたら……」

あの無残な遺体があった、ということか。

「…私のせい、ですよ？」

山村さんが頭を抱えて苦しそうに呟いた。

「すぐ近くで津川さんが投げ込まれた瞬間も……私はバカみたいにくっすり寝てたんですよ……！ 私が、私があの時目を覚ましていれば!!
ぐ……うっ……!! ううっ……!!」

肩を震わせて泣き崩れる伊丹さんを、小清水さんが静かに抱きしめる。

「お薬を飲んでたんだもの、起きれるはずないわ。巴ちゃんはなんに

も悪くないのよ。だからもう、泣かないで…。あなたが泣いてると、私まで……」

大切な人の死に心から傷つき、涙する二人の女性。

どう、声をかけてあげればいいのか分からなかった。

こんな状況から笑顔を作り出せるのは、他ならぬ津川さんだけなのだろう。

そう。

そんな俺たちの虚しさ、悲しさを嘲笑うかのように。

ピンポンパンポーン、と。

俺達に幾度となく悪夢を見せつけてきたあのチャイムが鳴った。

『えー、生徒の皆さん！ もうそろそろ、裁判はじめちゃいますよ？ てなわけで、生徒諸君はエレベーター前に集合!!』

……？

今の声……

「モノパンダじゃ、ない……？」

モノパンダのような軽快な甲高い声ではなく。

もつとどす黒くて。

頭の芯にまで響き渡るような声。

これが“絶望”の声なのだろうか？

素直にそう思えるくらいだった。

言葉もなく、重い足取りでエレベーター前に向かう。

もう逆らう気力もないし、逆らったところでどうにもならないのはこれまで散々学んできたことだ。

「…葛西。どうだ…？ 情報は得られたか？」

廊下で合流した前木君に聞かれ、「使えるのかわからないけれど…一応いろいろ得られたと思う」と答えた。

「そ、そうか。俺はあの後ホール階を調べただけど、なーんにも変わったところはなくて…。正直、ガチで焦ってる…」

俺は小刻みに震える彼の体をポンポンと叩いた。

「大丈夫だよ。ホール階は今回の事件に関係してないってことが分かっただけでも大きな進歩だ。君は君のできることをした…と思う。俺も俺のできることをした。だから…。」

殺された津川さん。

根は気弱で、誰よりも傷つきやすかったけれど…本当はとても強くて、どんな時でもみんなを笑顔にすることを第一に考えていた。

殺されるようなことなんてなにもしていない。

それなのに、あんなに残酷な姿に…。

これが、彼女への手向けとなるかはわからない。

でも、俺たちは。

暴かなければならない。

命と等価の、真実を。

エレベーター前に到着すると、扉が開いているエレベーターの中で待ち構えていたのは…

『うっぷぷぷぷぷー！ ようこそ、学級裁判へ！ ボクは希望ヶ峰学園特別

分校校長、モノクマだよー！！！』

さらに不可思議な現実だった。

chapter 1 非日常編② 学級裁判編

「なんだ、お前は…？ モノパンダじゃ…ねえのか？」

前木君が驚きの声を上げるのも無理はない。

今日の前でエレベーターに乗っているヌイグルミは、モノパンダと違つて斑模様がない。

右半身と左半身で綺麗に白黒が分かれている。

そして何より特徴的なのが。

『みんな、遅いじゃないか！ 校長を待たせるなんてき、ワイルドな不良道まっしぐらかよ!!』

しわがれたような、それでいて耳に残る声だった。

「なんでモノパンダじゃないんだ…？」

『ん？ どしたの葛西君？ なに、僕がいちや不満？ 校長より教頭の方が人気？ いやいやいや、そんな教頭いてたまるかつ！ 教頭つてのは学校の嫌われ者なの！ 規則にうるさくて、神経質で、お堅くて、何かあつたらすぐ隠蔽しようとしちやう悪徳教師の鑑なんだからねっ！』

「い、いや…：教頭にそこまで悪いイメージはないと思うけど…」

『ふうんだ！ どうせ朝会のスピーチが長いのを恨んでるんだろ！

校長だつて大変なんだからね！ あの長いスピーチのテキストを頑張つて作成してき、…：つてことは、あれ？ 朝会つて誰も得しないんじゃない…：』

「ちつ…：こんな時にベラベラと冗談かましやがつて…。ある意味、モノパンダよりタチ悪いな」

前木君が聞こえないように呟いた。

やがて、エレベーター前に全員集まり、モノクマとやらの姿に各々驚いていた。

『はーい、全員集まったところでもう一度！ ボクはこの特別分校の校長！ モノクマさまだーい!!』

「なんだ、君は…？ なぜモノパンダではなく、新しいヌイグルミが出てくるんだ？」

夢郷君が不安そうに呟く。

「え？ 大した理由じゃないよ。ちよつとした試運転……つて夢をぶち壊しにするようなこと言わせるなつてー!!」

モノパンダからも聞いたような言葉を放ちながらモノクマは腕を振り上げる。

『つて、こんなことしてる場合じゃないよ！ さっさと裁判終わらせないと、みんなの大好きな津川さんの遺体が腐っちゃうかもよ？

あ、焼死体だから腐らないのかな？ 右手だけドロドロになっちゃう感じ？ どつちにしろ絶望的だね！ うぷぷぷ……』

「っ!! アンタ……!!」

信じられないジョークを吐き捨てたモノクマに対し、亞桐さんが顔を真っ赤にして詰め寄った。

『おつとおつと、電子生徒手帳に書いてない？ モノパンダと同じようにボクにも暴力はいけないんだからね！ 教師に暴力なんて不良じゃあるまいし』

ぐっ……と亞桐さんは悔しげな表情を浮かべた。

「……こんなところで問答していても仕方あるまい。少々癪だが……さつさとエレベーターに乗り込むぞ」

リュウ君の一言でみんなはゆっくりとエレベーターに乗り始めた。

いつもホール階との移動に使っているエレベーターとは思えないくらい、その中は不思議な空気に包まれていた。

まるで、はるか上空で一本釣りにされたゴンドラの上に乗っているような、強烈な恐怖が充満していた。

そしてこのまま地底深くまで落ちていくのではないかという気さえした。

『全員乗ったね！ それじゃあホール階のさらに下、今限りの特別階!! 裁判階へとごあんなーい!!』

扉が閉まると、チーンという音とともにエレベーターは下降を始めた。

「なんなのだ、これは」

下降するエレベーターの中、俺の横から小さなつぶやきが聞こえた。

安藤さんだった。

「なぜこんなことをしなくてはならんのだ……。誰が殺したとか、どうやって殺したとか。そんなことはどうだっていいではないか。なぜ、リャン様を吊つてやることもさせてくれないのだ。なぜ、こんなことをさせられるのか」

濁った瞳で足元をおぼろげに見つめながら幾度となくそんなことを呟いていた。

そう、彼女は誰よりも津川さんと仲が良かった。

彼女のコスプレを見てはしやぎ、コスチュームをリクエストするくらい気に入っていた。

大声をあげて泣いていた亞桐さんよりも、強く感情をあらわにした伊丹さんよりも、誰よりもつらいはずだ。

安藤さんにとって、謎解きなどどうでもいいのだ。

犯人への怒りとか、恨みとか、そんなこともどうだっていい。

ただ大切な友人の死を悲しみただけなんだ。

でも、現実は何れすらも許さない。

犯人を見つけて指摘しなければ、自分の命が危ないんだ。

“正しいクロを見つけ出せればクロだけが、見つけられなければクロ以外の全員がオシオキ”。

もし、御堂さんの言うようにオシオキが死を意味するのなら……。

もう二度と、この面子でここを出ることはできないというのか？

悪寒が背を伝い、頭の芯まで登っていった。

「何を震えている」

御堂さんの声が俺の耳に差し込まれてきた。

「恐れることなどあるものか。クロが死ぬ……ただそれだけのことだ」

「……………」

「こんなところでへたばつてもらっては困る。貴様はクロではないの
だろう？ だったら胸を張れ。堂々とこんな事件を起こしたクロを
追い詰めてやれ」

低く、重みのこもった声で御堂さんは告げた。

それが正しいのだろうか？

それが俺のなすべきことなのだろうか？

分からない。

分からないまま、始まってしまふ。

命懸けの騙しあい。命懸けの弁護。命懸けの追及。

命懸けの学級裁判が。

重い音を立てて扉が開くと、そこには不思議な空間が広がって
いた。

部屋を覆うように下げられた赤い横断幕。

中央には円形に並べられた弁論台があり、奥には小さいが豪華な椅
子。

その椅子の上には……。

「ぎひやひやひやひや！ 裁判上へようこそー!!」

モノパンダが不敵に笑っていた。

『モノクマキーク!!』

「ぎやああ!？」

と、突如エレベーターから飛び出したモノクマがモノパンダに跳び
蹴りを浴びせた。

「痛いっすよ校長せんせー!」

『このあほパンダ！ なんでトラツシユルムの仕組みをあんな風
にしたのさ！ あれじゃ誰でも証拠隠滅ができちゃうでしょ!』

「で、でも……一応アクティブなエツセンスは加えておいたし……」

『でも〃も〃しかし〃も〃however〃もあるかー!! そんな
なエツセンスいらないんだよ！ 次からはちやんと証拠隠滅に使わ
れないように改造しとくんだよ！ いいね!』

「合点承知の助です校長せんせー」

そんなヌイグルミ同士の言い争いは無視して、俺たちは自分の名前の書いた紙が貼られた席に移動した。

俺の席の隣は空席だった。

と言つても、ただの空席ではない。

その席には、満面の笑みを浮かべる津川さんの遺影が立てかけられていた。

そしてその遺影には、赤いペンキで大きくバツ印がつけられていた。

「悪趣味なことしやがる……!」

釜利谷君が敵意のこもった声で二体のヌイグルミを睨む。

『なんだよ! じゃあ君は津川さんをのけ者にした方がいいの?』

まあいいや、さつさと始めちやおうか、学級裁判をさー!』

「ドキドキワクワクだぜー!」 ついにこの瞬間がやってきたんだなー!」

【学級裁判・開廷!】

『さあ、ボクの愛しい生徒諸君! さつそく自由に議論していいよ!』

クロ発見のため、頑張つてね!』

モノクマが明朗な声で言い放つた。

「で、でも……話し合いつて……何から話し合えば……」

「事件の基本となる情報をおさらいするだけでもよかろう。そこから議題も発展できる」

山村さんの問いに御堂さんが答えた。

「もうお通夜ムードは捨て去ってほしいものだな。私はこんなところでくたばれない。何か気になることがあつたらすぐに言え。では始

めるぞ」

そうだ…。

学級裁判はもう始まっているんだ。
躊躇なんかしてられない。

【議論開始】

リュウ：「では、俺がモノモノファイルとやらを読み上げるとしよう」

リュウ：「被害者は津川梁。死亡推定時刻は午前二時頃。右手以外の部分は完全に炭化している。頭部に打撃痕あり。……以上だ」

土門：「聞けば聞くほど、酷い死体だな……」

入間：「それにしても、犯人はどのようにして津川様をこのような惨たらしい死体に変えてしまったのでしょうか」

丹沢：「抵抗する津川殿を無理矢理焼却炉に突っ込み……焼死させたのでしよう」

伊丹：「ゆ、許せない……！」

「いや、それは違うんじゃないかな？」

【使用コトダマ：ザ・モノモノファイル①】

自然と声が出ていた。

自分でも驚くほどに、ナチュラルに……丹沢君の言葉に隠された矛盾を打ち抜いていた。

「な、なんですと!?!」

「見てほしい。モノモノファイルには、“頭部に打撃痕あり”と書いてある。その記述が真実であることはリュウ君が確かめてくれている。津川さんを焼却炉に突っ込んで殺すだけなら打撃痕なんて残らないよね。それに、生きたまま焼却炉に突っ込むなんて手法、殺害方法にしては雑すぎる気がするんだ。かなり抵抗されるし、助けを呼ばれる可能性も十分にあるし」

「な、なるほど……確かにそのようですな」

丹沢君は何度も頷いて納得したようだった。

「私もその意見に賛成だ。恐らく津川梁は鈍器のようなもので撲殺された後、証拠隠滅もかねて焼却炉に投げ込まれたと考えるのが妥当だろう」

御堂さんが俺の意見に賛成してくれた。

「じゃ、じゃあ……その鈍器のようなものって……?」

小清水さんが発した問いに答えられるものはいなかった。

「思いつかないんならさ……この校舎にあるもので、鈍器になりそうなものを次々に言っていこうよ。みんな校舎の中を調べたんでしょ? 何かそれっぽいものが浮かぶかもしれないじゃん」
みんなは、その亞桐さんの提案に従うことになった。

【議論開始】

前木：「鈍器……鈍器……。カナヅチとか?」

夢郷：「うーむ……ホール階の廊下においてあるトロフィーも使えるんじゃないか?」

小清水：「逆に箒の柄とか?」

亞桐：「逆に、ってどういうこと……?」

入間：「椅子でガンツ! とやったのかもしれないね」

「小清水さんの意見に賛同したい」

まただ。

気づくと声が出ている。

「そもそも鈍器という前提が違っていったんだ。正確に言うと、箒じゃなくてこれのことだ」

【使用コトダマ：休憩室のモップ

「休憩室のモップが一つなくなっていたんだ。あれを凶器にしたんだろう」

「モップ……? あのモップで殴り殺したというのですか?」

丹沢君が驚きの声を上げる。

「…不可能ではないな。あのモップの柄は十分に長く、強度もある。

「犯行後、恐らくは遺体と一緒に焼却処分したのだろう」

「またもや御堂さんが賛同してくれた。」

「じゃあ、次は殺害現場か…。誰か、心当たりはないか？」

「釜利谷君が顎に手を当てて思考しながら問いかけた。」

「…心当たりならあるよ」

「俺は慎重に言葉を選びながら答える。」

「おそらく、殺人現場となりそうなのは…」

【提示コトダマ：完全防音の部屋

「休憩室か各個室。そこだけは完全防音で、中で何が起きても扉を開けない限りは絶対に中で何が起きているかは分からないんだ。凶器がモップだと仮定すると…：…犯行はそのまま休憩室で行われたんじゃないのかな？」

「これが俺の意見だった。」

「齟齬はない…：…が、確証もない。ひとまずはそのセンで考えるとするか」

「リュウ君が告げる。」

「えつと。一回まとめてみるね」

「と言いつ出したのは小清水さん。」

「犯人は休憩室で、モップの柄を振り回してリヤンちゃんを殴り殺して…：…証拠隠滅のため、リヤンちゃんの遺体ごとモップを焼却炉に投げ込んだってことよね…？」

「小清水さんは全員の顔を見渡す。」

「とりあえず異議はないようだった。」

「でもさ、それだけじゃ犯人なんてわかるはずないじゃん…：…。何しろ、夜中の二時なんだからさ」

「亞桐さんがため息とともに呟く。」

「誰か、その時間に出歩いていた人とかいないの？ このままじゃ、真実が暴かれないまま終わってしまう…！」

「伊丹さんが焦りを内包した声で尋ねた。」

「それでも“彼”は言い出せずにいる。
ならば俺が。」

言うしかない。

【提示コトダマ：夢郷の証言】

「いや、君は出歩いていたよね？ 夢郷君」

「……………ああ。そうだ。昨晚、少しだけ校舎内を散策していてね……………」

夢郷君は悲しげな表情で、静かに答えた。

「そして、僕は見てしまったんだ。休憩室の近辺をうろつく、ある人の姿を……………」

彼の表情からは、同級生を追い詰めるのをためらっているのがひしひしと伝わる。

でも俺は知っている。

彼の証言には明らかな矛盾があるということ。

「夢郷君。…もう一度、この場で、あの証言を言ってくれないか？」

「ああ……………。分かった」

彼の証言には、明らかな矛盾がある。

それをここで撃ち抜くんだ。

【議論開始】

夢郷：「昨日の午前一時半ごろ……………本を読んでいた僕は眠気覚ましもかねて一階の共用トイレまで歩いたんだ」

夢郷：「その時に…遠目だが、廊下を歩く山村君の姿を見たんだ。間違いない……………」

山村：「えっ……………？」

リュウ：「ほう……………」

夢郷：「ああ。見間違いではないはずだ。そう願いたくはあるんだが……………」

小清水：「ちよ、ちよつと待つてよ…。そんなのおかしいわ」

「それは違うんだ」

【使用コトダマ：昨晚の山村の行動】

「昨晚、山村さんが廊下を出歩いているのはどう考えてもおかしいんだ。なぜなら、昨晚山村さんはトラッシュルームに籠っていたのだからね。そうだよな？」

俺が問いかけると、山村さんは黙ってうなずいた。

「…昨日、あの恐ろしい映像を見せられた彼女は、自分が誰かを殺してしまうんじゃないかっていう不安に襲われて、トラツシユルームに自身を閉じ込めたんだ。その際に睡眠薬も持って行ったらしい。小清水さんがはつきりとそれを確認してる」

「うん…。昨晚、私は巴ちゃんがトラツシユルームに入って、シャツターを下ろす瞬間まで確かに見届けた。そして、朝に遺体を見つけた時も確かにいたのを見た。巴ちゃんは間違いなく一晩中トラツシユルームにいたはずよ」

「なん……………だつて……………?」

小清水さんの言葉を聞いて、夢郷君の額に冷や汗が浮かぶ。

「じゃあ……………僕は一体何を見たつて言うんだ……………? 寝ぼけて幻想でも見たというのか……………?」

「運が悪かったな、夢郷」

前木君の鋭い言葉が飛んできた。

「よりにもよつて、お前が罪をかぶせようとしていた山村には完璧なアリバイがあつた。お前の負けだな」

「な、なに……………? 何を言っているんだ?」

夢郷君の表情が見る見るうちに青くなつていく。

「だ・か・ら!! お前が犯人だつてんだよ!! 嘘の証言なんかでつち上げやがつて!!」

前木君は証言台を強く叩きながら咆哮した。

「そ、そんな！ 僕は犯人じゃない！ 証言だつて本当なんだ！ 僕は本当に見たんだ！」

「黙れ!! 今更どうあがいたつて無駄なんだよ！ お前はここで終わりだ！」

あまりにも凄まじい言葉のぶつかり合いに、一同は黙って見つめるほかなかった。

それは、憎悪と生存本能の衝突。

“俺たちの中に犯人がいるなんて信じたくない。だから俺はそれを証明したいんだ”。

そう言っていた前木君がこんなことになるなんて。やはり、彼も気付いているんだ。

この事件は、モノパンダが起こしたもののなんかじゃなく。俺たち同士のれっきとした殺し合いなんだと。

だが、そんな中でも俺は真実の探求をやめなかった。

「夢郷君は嘘を言っている？ いや、そんなことはないはずだ。もともと夢郷君が疑われるような流れではなかったから、わざわざ疑われるリスクを冒してまで山村さんに容疑を押し付ける意味がない」

「(彼の証言が本当だとすると、彼が見た人はいったい誰だったんだろうか?)」

「その時間帯にはいないはずの山村巴を夢郷郷夢は見た…。これが何を意味するか分かるか?」

壮絶な言い争いを止めたのは、突然放たれた御堂さんの言葉だった。

「そもそも、夢郷郷夢が見たのは本当に山村巴だったのか? ……ここまで言えばわかるだろう?」

「(夢郷君が見たものは、山村さんじゃなかった…? じゃあ、いったい……?)」

頭の中で、少しずつピースが組み合わさっていく。

次々に浮かぶイメージ。

その中から有効なものをふるいにかけて、さらにえりすぐり、最後に残ったピースを、パズルの欠けた一片に当てはめる。

そこから生まれた答えは……

「変装」。そうだ。夢郷君が見たのは山村さんの変装だったんだ」

「……まあ、その可能性が濃厚だろうな」

またもや御堂さんの賛同をもらった。

まるで、彼女に導かれているかのようだ。

「へ、変装だって? 誰かが山村君に変装していたというのか……?」
夢郷君の驚きから察するに、よほどハイレベルな変装だったのだら

う。

だが、悲しいことに俺は知っている。

それくらい高度な……遠目では本人にしか見えない変装ができる人物を。

そして……あの人が変装したらしいという根拠もあるんだ。

少しづつ見えてきた。

辛く、悲しい現実……しかし、この命を懸けて暴かなければならぬ
い真実、その全貌が。

【提示コトダマ：不足したウィッグ

「そうか……。あの時感じた違和感はこれだったんだ。夢郷君が見たのは……」
山村さんに変装した津川さん”だったんだ！”

裁判場にどよめきが走る。

「つ、津川!! なんて津川が……」

「夢郷君が遠目で見ても分からないくらいの変装ができるのは津川さんだけだ。俺は捜査中、彼女の部屋に入った時、ウィッグが一つ足りないのを見つけたんだ。それだけだったら大したことじゃないかもしれない。でも、あの時俺は何か言いようのない違和感を感じていた。ようやくその正体が分かったよ。なぜなら、俺は……いや、少なくとも俺と安藤さんはそのなくなったウィッグを見ていたんだ」

「……………!?!」

ここまで終始黙り込んでいた安藤さんは驚きの表情を浮かべる。

「そう……」昨日の自由時間、俺と安藤さんは”山村さんに変装した津川さん”を目の前で見えたんだ。なくなっていたのはあの時付けていたウィッグだったんだ。恐らく、衣装も調べてみればわかる。山村さんが着ているものと同様の制服がなくなっているはずだ。それに……」

あの変装にも弱点があった。

“腕の長さはごまかせない”ということだ。

でも、それもあの状況を利用すれば……

【提示コトダマ：休憩室の光源

「事件時、休憩室は夜時間であり、照明がついていなかった。現場の光

源はテーブルの上の電気スタンドだけ。そんな状態なら、間近で津川さんを見ても山村さんだと思いい込んでしまったはずだよ」

齟齬はない。

そう考えれば辻褄は合うはずだ。

「…そうとは限らないんじゃないの?」

重々しく口を開いたのは伊丹さん。

「津川さんのほかに、津川さんの変装道具を用いて変装することができると思うのだけれど」

「…それって、津川さんを殺害した犯人のこと?」

伊丹さんは答えなかった。

その代わり、憎悪のこもった強烈なまなざしでこちらを睨みつけてきた。

「い、伊丹さん……?」

「この中で、津川さんが山村さんの変装道具を持っていると知っているのは、安藤さんと葛西君。あなたたちだけのはずよ。他にみた人もいないようだし」

……!

それって……

「俺と安藤さんを疑ってる…ってこと?」

「そういう可能性もある、というだけの話よ。……でも、ここまでのあなたを見ていると、どうも普段より積極性がありすぎる気がする。まるで、議論を自分の思い通りに押し進めているような……」

「そ、そんな……俺はただ…みんなの命がかかっているつもりで……」
「……いいわ。どちらにせよ、確たる証拠がなければ私は納得しない。まだあなたがやったという証拠などどこにもないのだから、この話はここで終わりましょう」

そう言つて伊丹さんは俺から顔をそむけた。

彼女の体は小刻みに震えているようだった。

津川さんを殺した犯人への怒りゆえか、同級生を追い詰めなければならぬことへの恐怖か。

それは本人にしか分からないことだろう。

「えつと……変装したのは犯人かもしれないって話だったよね？」

小清水さんの言葉に俺は頷いて見せた。

「じゃあ仮に、山村さんに変装したのが犯人だと仮定しよう。津川さんを殺害した犯人は、津川さんの部屋の鍵を奪って彼女の部屋に入ったってことになるよね。そしてその恰好で津川さんの遺体をトラッシュルームに運び、変装道具ごと焼却した……」

「……やや無理があるのではないでしょうか？ 犯人が山村様の格好をして出歩くのは津川様の部屋からトラッシュルームに行く間のみです。それ以外に犯人は、津川様の部屋に赴く際やトラッシュルームから自室に戻る際などに何度も廊下を歩き来しています。わざわざ変装する意味などあるのでしょうか？」

入間君が顎に手を当てながら言った。

「確かにおかしいけど……だからって、リヤンちゃんが変装してたって根拠にはなるの？」

小清水さんの不安げな問いに対して繰り出された鋭い声は。

「簡単な話だ。津川梁は殺人を計画していたのだろう」

御堂さんの、残酷なまでに現実味を帯びた言葉だった。

「は……？ アンタ、何言って……」

亞桐さんは言葉を失っていた。

「なるほど。それならば、津川が山村の変装をしていたというのも頷ける。つまり、休憩室で何者かを襲おうとした津川はモップで反撃され、殺害されたということか」

リユウ君の導いた過程に不審な点はない。

これまでの議論を振り返れば何もおかしな点はない。

でも……。

認めたくないものだ。

他ならぬ津川さんが誰かを殺そうとしていたなんて。

「た、たわけ者めがあ!!」

突如、叫び声が響いた。

声の主は……安藤さんだ。

「なぜそこまで死者を冒読できる!?! 反論できぬ相手に対して好き勝

手言いおつて!! 吾輩は断じて許さんぞ!!」

涙をまき散らしながら、彼女は魂の叫びをリュウ君と御堂さんにぶつけた。

「なぜ……なぜ……リャン様は死んだ後まで苦しめられなければならぬのだ……。こんなのおかしいではないか……」

「貴様の認める認めないに関わらず、事実はゆるぎないのだ。……まだ確定したわけではないがな。貴様の感情論など受け付ける気はない。分かったら口を閉じていろ」

御堂さんの容赦ない言葉に安藤さんは閉口するしかなかった。

「お前もお前だよ……。もつと言い方があるんじゃないのか」

思わず前木君が反論すると、「ふん。議論を続けるぞ」と冷たくあしらった。

「まず一つ聞いておきたいことがある。小清水彌生。貴様は昨晚、夜時間まで食堂にいたそうだな? 誰といたのだ?」

突然の質問に「……え?」と戸惑った小清水さんだが、すぐに頭に手を当てて思い出し始める。

「私と、莉緒ちゃんと……。リャンちゃん。巴ちゃんのことがあったのは二人と別れた後だったから……。二人とも知らないはずんだけど」

「そこが聞きたいのではない。食堂を出た順番は覚えているか?」

「え、ええと……。ごめん。思い出せない。莉緒ちゃん、覚えてる?」

「……さあ……。ウチが最初だったのは覚えてるけど……」

「もういい。恐らくは津川梁が最後だったのだろう」

御堂さんは納得したような表情を見せた。

「奴が殺人を実行するつもりだったとすれば、当然凶器が必要となる。その凶器に心当たりはないか?」

津川さんが持っていた凶器と考えられるもの……。

ひよっとして、あれのことだろうか?

【提示コトダマ：厨房の包丁】

「厨房の包丁が一つなくなってたよね。あれを持って行った……ってこと?」

「そうだ」と御堂さんは答える。

「厨房から包丁がなくなっていたにも関わらず、津川梁には包丁でつけられたような傷は一切見受けられなかった。津川梁が持ち出して殺害に使おうとしたということの間違いあるまい」

安藤さんはもう反論する気力もないようで、弁論台に手をついてうなだれていた。

「…ああ。言い忘れてたけど」

釜利谷君が言い出す。

「焼却炉の中には溶けてひん曲がった金属の塊が落ちてたな。そうだと、リュウ？」

「ああ。あれが包丁と考えてよいようだな」

「……繋がったな。夜時間は食堂に入れない以上、犯人には厨房に包丁を戻すという選択肢はなかった。やむを得ず一緒に投げ込んだのだろう」

御堂さんが満足げな笑みを浮かべる。

「…つまり、今回の事件をまとめるとこうなりますな」

つかの間の沈黙ののち、丹沢君が口火を切る。

「信じたくはありませんが……津川殿はこの中の誰かを休憩室にて殺害するおつもりだった……。その方が今回の犯人となりますね。罪を山村殿に着せるために彼女の変装をし、厨房から盗んでおいた包丁を手に休憩室に向かった。ですが、犯人は咄嗟にモップで反撃し、それが津川殿の頭部に命中……。津川殿は命を落としてしまわれた。驚いた犯人は証拠品と津川殿の遺体を焼却したと……」

「で、でもよ……結局犯人につながる情報が何も無いんじゃないか!？」

山村以外は全員可能性があるわけ……」

前木君の言葉はもつともだ。

殺害のトリック、それは見破ることができた……と思う。

でも、肝心の犯人は分からないまま。

結局議論の最終目的にはたどり着けないじゃないか。

「…目星は付いている。が、証拠が得られなかった」

御堂さんは冷淡に告げた。

「なっ……!? 誰なんだよ!」

「馬鹿が。今言ったところで言い逃れされるだけだ。今はまだ情報が
必要だ。……それに」

彼女は一息置き、続けた。

「まだ明らかになっていない謎がある」

「まだ明らかになっていないことだと…？ 犯人の足取りも大体の動
機も分かっているじゃねえか」

釜利谷君が怪訝そうに呟く。

「分からないのか？ 貴様が発見したことではないか」

御堂さんの言葉を頼りに、俺は自分の記憶をたどる。

「（釜利谷君とのやり取り……か。彼は死体の調査をしていた。そこ
で彼からもらった情報、そしてこまれの議論では説明がつかないこ
と……）」

一つしかない。

【提示コトダマ：津川の遺体

「彼女の右手にあった火傷……だよな？」

「フン、そうだ」

御堂さんは不愛想ながらも同意してくれた。

「殺された後に焼却炉に突っ込まれたはずの津川梁の右手が焼却炉の
外に出ているということは、犯人が遺体を投げ込む際に誤って右手だ
けをはみ出した状態にしまったということだ。トラッシュユール
ムは仕組み上、すぐに鉄格子が降りる仕組みだったのだから、人を殺
した緊張と時間制限の中、そのようなミスをすること自体はおかし
くはない。

だが、それでは「はみ出した右手も若干ながら焼かれた」という事
象の説明がつかない。津川梁の遺体が投げ込まれた後に何があつた
のか……そこに議論の余地があるだろう」

焼却炉からはみ出した状態で放置された右手が少しだけ焼かれる
原因……

なんだろうか……？

ダメだ。思いつかない。

「やっぱり、山村が何かしたんじゃないのか！」

前木君が鋭い視線を山村さんに突き刺す。

「そ、そんな！ 私は神に誓って本当に何もしていないんです!!」

「でも、鉄格子が降りた後の津川をあれこれできたのはお前だけだよ！ どうなんだよ！」

「だからといって山村君が犯人にはならないだろう」

夢郷君が重々しい表情で告げる。

「仮に津川君の遺体に細工したのが山村君でも、津川君を殺した犯人は山村君ではありえないんだ。今は犯人を突き止めるのが先決だと僕は思うぞ」

津川さんを殺した犯人。

全員が全員の顔を睨む。

この中に、確かにいる。

津川さんに命を狙われたとはいえ……初めから殺すつもりではなかったとはいえ……

彼女を、手にかけてしまった人が。

「……ずーっと思ってたんだけどさ」

亞桐さんが口を開く。

「リュウ、秋音ちゃん、あんたらのどつちかが犯人なんですよ？」

「なんだと……！ 明確な根拠はあるんだろうな」

「……俺を疑うか……」

突然指名された二人の表情がこわばる。

「根拠!? そんなモン決まってるじゃん！ リヤンちゃんが……リヤンちゃんが死んだっていうのに……あんたら二人そろって、なんにも感じてないような顔してさ！ リュウなんて……何人も人殺してきたみたいな雰囲気だしさ！ あんたらがやったんだよ、絶対!! そうに決まってるんだ!!」

感情のやり場を失った亞桐さんの悲痛な叫びが裁判上にこだまする。

「虫唾が走る言い草だな……。第一私は犯人ではないし、津川梁は殺人を計画していたのだぞ？ 死体発見時は同情するといったが、今は

そんな気にはなれんな」

「黙れ黙れ黙れ!! そんなのあんたらの推測でしかないんだよ! 護身用に持っただけかもしかもしれないじゃん!! でっちあげだ! 勝手にリヤンちゃんを人殺しにするなよ!!」

「もういい」

感情を爆発させる亞桐さんを引き留めたのは、彼の静かな一言だった。

「津川を殺したのは……………ああ、そうだ……………津川を殺したのは……………俺さ」

裁判場の空気が一気に凍り付く。

そんな。

そんな。

「だからさ……………もう……………」

なんで君が。

「終わりにしよう……こんな裁判」

誰よりも前向きで明るかった。

力強く、俺たちを支えてくれた……かけがえのない親友。

なぜだ……

なぜ、君なんだ!!

“超高校級の建築士”、土門隆信君……!!!

chapter 1 非日常編③ オシオキ編

「……………は…?」

前木君が小さく声を漏らした。

「…あ、あんたなの…? あんたがりヤンちゃんを…?」

亞桐さんの声も震えている。

全員の視線を集める彼は。

ふう、とため息をついて。

「ああ、そうだ。俺がやったんだよ」

引きつった笑みとともにそう言い放った。

「はああ……………」と釜利谷君が両拳を握りしめる。

「笑えねえ冗談言ってるじゃねえよ……………! お前が」

「俺なんだよツ!!」

土門君の叫びが空虚に響く。

「どんなに否定してもどんなに後悔してもどんなに逃げようと努力しても!! 事実は変わらねえんだよ!! 津川は俺が殺したんだツ!!」

そして、ガクリとその場に膝をつく。

「殺し……………ちまったんだよ……………」

ぐるぐると視界が回る。

この感覚、津川さんの遺体を発見した時と同じだ。

仲間の死、一緒に過ごしてきたかけがえのない仲間を失う実感。

それが眩暈のようになって襲い掛かってきている。

「やはりそうだったか」

御堂さんの冷たい声が聞こえた。

「私が遺体を見つけた時に放った言葉……。そこで誰よりも動揺していたのが貴様だった。目前の死への動揺ではない。自らの罪の重さを知った者の、嘆きの動揺だ」

彼女が言っているのは……。あの時のことか？

『フン……。まさか本当に感情に囚われて取り返しのつかない過ちを起す愚か者が出るとはな……。私の誤算だったな。だがもつと驚くべきは、そいつが今もこうして平然と我々の中に紛れ込んでいるということだ』

津川さんの遺体が見つかった直後、彼女が発した言葉。

犯人に揺さぶりをかけるためのものだったのか。

「あの時点で私の中で貴様がクロであることは確定していた。しかし明確な物的証拠がなかったので困り果てていたところだ。まさか自分から名乗り出てくれるとはな」

「……………」

土門君はうなだれたまま何も言わなかった。

「待て……待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て……!!」
「こんなありかよ!! お前が!! よりにもよってお前が!! 人を殺すなんて!!」
「……!!」

前木君の渾身の叫びは、しかしこの場にいる誰にも届かない。

前木君が叫ぶのも当たり前だ。

俺だって信じられない。

あの彼が、みんなの兄貴分だった彼が、津川さんを殺害したただなんて。

でも、それを否定する材料はない。

辻褃は合ってしまう。

「もういいんだ……。モノクマ、モノパンダ。始めてくれ……。投票を」
『りょうかーい!! んじゃ、みんなの手元にそれぞれの名前が書かれたボタンを渡すよー!』

そう言つてモノクマとモノパンダが各々に渡したのは、スイッチの

ようなものが並んだ四角い物体だった。

スイッチの上にはそれぞれ俺たちの名前が……津川さんも含めて書かれている。

「それじゃあ津川さんを殺した犯人だと思ふ奴のボタンを押しちやってくれー！　ぎひやひやひやー！」

俺は目の前のスイッチを睨んだ。

“土門隆信”と書かれたスイッチを探するのは容易だった。

でも、それを押すということは……。

指が震える。

やがてそれは体全体を包む震えへと発展してゆく。

これが、人を殺す感覚。

一人の人間を死へと追いつめる絶望。

でも、そんな思考とは裏腹に、俺はあっさりとそのスイッチを押していた。

二体のヌイグルミが座る豪華な椅子の手前に、床からせりあがってくるようにして出てきた一機のスロットマシン。

そのルーレットが回ったかと思うと、瞬く間に絵柄がそろろう。

そろった絵柄は……土門君の顔だった。

そしてその絵柄の下には「Guilty」の文字が浮かび上がり、マシンからは大量のメダルが払い出された。

まるで、正しいクロの指摘を祝うかのように。

『うぶぶぶぶ！　だいせいかいー！　“超高校級のコスプレイヤー”、津川梁さんを殺害したのは……”超高校級の建築士”、土門隆信君でしたー!!』

モノクマの邪悪な笑い声が響く。

「ふ……ふ……ふざけんなあああああああ!!!」

前木君が裁判台を激しく叩きながら叫ぶ。

「認めねえ認めねえ認めねえ認めねえ認めねえ!!! 土門は…人殺しなんかじゃねえんだああああ!!!」

そして叫び終わると、精根尽き果てたようにそのまま床に崩れ落ちた。

「どうして?」

伊丹さんが声を震わせながら問いかけた。

「どうして…:あんなにひどいやり方で…津川さんを殺したの…?何か恨みでもあったの…?」

「……………」

「黙ってないで答えてちょうだい…。こんな終わり方、納得できないのよー!」

「…俺に…言い訳する権利はねえ…。…:俺は人殺しだ。醜い人殺しだ。それでいい……………」

『うぶぶぶ。ほんとにそれでいいの?』

モノクマが口を挟んできた。

『真実を言つとかないと後悔するよ? 悪を背負い込むヒーローなんて演じる必要ないんだよ?』

「な、なんだ…? 一体どういうことなんだ?」

夢郷君の問いかけに、モノパンダは両手を前に突き出して待ったをかける。

「んじや、その謎を解く意味合いでも今回の事件を動機からおさらいしていいコーか! スクリーン、カモン!」

モノパンダがパチンと指を鳴らすと、スロットマシンのさらに手前に大きなスクリーンが下りてきた。

同時にモノクマが映写機を持ってきてスイッチを押すと、スクリーンに光が灯しだされる。



スクリーンに映ったのは、大工の格好をした小さな少年。

『あるところに建築士を志す少年がいました! 少年の名は土門隆』

信。

彼は、同じく建築士である父の影を追って、日々勉強と訓練に励む元気な男の子でした！

しかし、そんな彼を不幸が襲います。

彼の母親が神経の病気を患い、半身不随となってしまったのです。早く一人前になって母を助けるため、彼は必死に生きていました。うぷぷぷ、でも現実はとことん辛いものですね。

なんと、彼の妹さんまでもが、母親の病気を遺伝で受け継いでいたのです！

父の稼ぎだけではもうどうにもなりませんでした。

土門少年は二人の治療費を稼ぐため、学校にも行かずに今まで以上に一生懸命に働きました。

そんな彼に対して、妹は一つの願いを口にします。

「お兄ちゃんが建てた世界一高いタワーから、この国を見下ろしてみたい」

一生車椅子でしか動けなくなった妹さん、そして母親に希望を与えるため、土門青年は決意しました。

希望ヶ峰学園に入学して、世界一高いタワーを建ててあげると！』その時ふと思いついたのは、自由時間、土門君の部屋を訪れた時に見せてもらった設計図だった。

『こいつは全高1000m以上の世界最大級のタワーになる。こいつを希望ヶ峰のすぐ近く、都会のど真ん中に建てるとって計画が今現在進んでるんだ』

「（…あのタワーは、彼が家族のために建てようとしていた……」 最高傑作”だったんだ）」

『そして……今回土門君に配布された動機DVDがこちら！ ほしい！』

画面が暗転し、数秒おいて再び明るくなる。

映し出された光景は、夕暮れ時の病院の中だった。

「……！！」

しかし、病室のベッドの上には誰かが倒れている。

手前側のベッドには、大人の女性。

奥の方のベッドには……夕日がまぶしくてよく見えないが……若い女性のようなだった。

この人たちが…土門君の家族。

しかし、二人ともベッドに仰向けに寝たままピクリとも動かない。

そして映像は病室内をぐるりと見回すように……

「……え……」

思わず声が漏れていた。

二人が倒れているベッド以外のベッドは、ベッドであつたかもわからないくらいぐちゃぐちゃに荒れている。

そしてあらゆるところに血が飛び散っているのだ。

「……くそっ!!」

土門君が悔しそうに声を上げた。

『病室で倒れ伏したまま動かない家族!! 彼女たちの身に何が起きてしまったのか!? 正解は……』

『……卒業の後で……!!』

「あ、ついでに言っておくと土門君には証拠品としてこれ! “血塗られた妹さんの診断カルテ”をプレゼントしたぜ……!」

モノパンダがそう言っただけなのは、言葉通り血がしみ込んだ診断書だった。

ドン、と釜利谷君が裁判台を殴った。

「クソ野郎が……人の心をいいように使いやがって……」

『もう、前にこのあほパンダが言っただでしょ!? ボクは土門君の家族に手を出したわけじゃないの! 勝手にあんなっただけだからね? ほら、次行くよ次!』

モノクマの言葉に呼応するように、画面が再び暗転する。

次に映し出されたのは、金髪をツインテールに下ろした少女。

津川さんの姿だった。

『あるところに一人の少女がいました。彼女の名は津川梁。

幼いころに両親ともに見捨てられた哀れな彼女にとって、唯一の育

て親であり、心のよりどころだったのがおばあちゃんでした。

生まれつき体が小さく、どこにいてもからかわれていた津川さん。しかしコスプレという唯一無二の生きがいを見つけた彼女は、自分でも人の役に立てるといふ実感を得て、幸せに暮らしていました。生意気だね！

でも、彼女は心のどこかでずっと思っていました。

“自分は他人に必要とされていないのではないのだろうか？”

“自分がいるせいでおばあちゃんに迷惑しかかけていないのではないだろうか？” ってね。

そんな彼女に送られた動機はこちら！』

画面に映りこんだのは、都会の大通り。

アニメや漫画のキャラを模したポスターや看板が多く立ち並ぶコスプレヤーたちの聖地だった。

連日奥の人々でごった返しているはずのその通りは……。

「なっ……！ そんな…バカな…」

廃墟のようになっていた。

そこが都会の中心部であるなど、嘘であるかのように。

建物は崩れ、空気は薄汚れて濁っており、遠くでは車が炎上している。

さらに恐ろしいことに、ところどころに朱に染まった人々が倒れているのである。

津川さんの生きがいったったファンの人たち。

それがこんなにもあつさりど、蹂躪されているなんて。

最後に映りこんだのは、具体的な場所は分からないが……古い一軒家のようにだった。

映像はその一軒家に暗い玄関から入り込み、細い廊下を突き進んでいる様子を映していた。

……そして。

「……！！」

居間のような場所で。

ちやぶ台に突っ伏している一人の老婆。

この人が。

「津川さんの……お婆さん……だったのか」

そこでプツリ、と映像は途切れた。

『津川さんへの証拠品はこれ！』 引き裂かれたお人形 “だよ〜！
お婆あちゃんからの思い出の品だそうだね！ うぷぷぷぷぷ！』

モノクマはボロボロに引き裂かれた人型の人形を掲げて笑った。

「……この映像を見て……リヤンちゃんは殺人を決意したのね……」

小清水さんは涙をぬぐいながら、震える声で呟いた。

『甘い甘い！ 詰めが甘いよー！』

そこにモノクマの声が飛び込んできた。

『君たちさ、ほんとに彼女が人殺ししようとしてたと思ってるの？』

ひどいじゃないか！ 死んだ人間に冤罪をかけるなんてさ！』

「そ、それは……どういふことですか？ わたくしたちの推理が間違っていたと……？」

「ぎひやひやひや！ 知りたいなら見せてやるよ、昨晚の監視カメラの映像をさ！」

一度は終わったかと思われたスクリーンの映像は、思わぬ形で再開された。



昨晚11時半、土門の部屋。

「……ごめんなり。こんな時間に……」

ベッドに座る津川は、正面の椅子に座る土門に一言謝罪を述べた。

「……気にしてねーよ。俺も眠れてなかったところだ。……あのDVDのことで相談か？」

津川はうつむいたまま、目元をぬぐった。

「……おい、泣くなつて。あんなもんウソなんだつて。そう信じるしか」

「土門きゅんにお願いがあるなり」

津川は土門の言葉を遮り、強い目つきで告げた。

「アタシを……リャン様を…殺してほしいなり」

「……………は？」

土門は目を大きく見開いたまま、啞然とした表情で津川を見つめていた。

「いや…殺すなんて言い方が悪かつたなりね。死なせてほしいなり」

「……お前…自分が何言ってるか」

「分かってるなりよ。…あのDVDが現実だつていうのも、ちゃんと分かってるなり。おばあちゃんが縫つてくれたお人形さん…リャン様の名前が縫い付けられたお人形さん…あれが偽物なわけではないなり。リャン様の大好きなおばあちゃんは、もういないなり」
濁った瞳で津川は土門を見上げる。

土門の額に冷や汗が浮かぶ。

「……………ッ!! バカ言つてんじゃねえよ!! ここで諦めてどーすんだ! 死んだら何もかも終わりじゃねえか!」

「もう、終わってるなり。何もかも」

津川の生気の抜け落ちた言葉が土門の言葉を失わせる。

「リャン様にとって……ファンのみんなとおばあちゃんだけが生きる意味だったなり。でももう、恩返しする相手も笑顔にする相手もいなくなつちやつたなり。生きてる意味、なくなつちやつたなり」

「そんなことねえだろ!! 俺が……俺達がいるじゃねえか!! 俺達を笑顔にしてくれよ! DVD見終わった直後だってやつてくれたじゃねえか!! それでいいじゃねえかよ!!」

土門は津川の肩を揺さぶり、必死に訴えかける。

「…土門きゆんは優しいなりね」

津川はクスリと笑った。

しかし、その笑みにはもう平常時のような幸福感は込められていない。

感情の死んだ少女の空虚な笑みに過ぎなかった。

「あのね。リヤン様はただ死にたいわけじゃないなり。このルール……覚えてるなりか?」

「ルールって……お前!!」

はらり、と津川の中から涙が零れ落ちる。

「今日ね……みんなのDVDのお話を聞かせてもらったなり。みんなそれぞれの事情があつて……本当にみんな、かわいそうだったなりよ。みんなの家族に順位なんかつけないくないけど……。土門きゆんの家族が、一番最初に助けなきやいけない気がするなり。……だからアタシは……土門きゆんに殺されたい」

「お前……お前……正気じゃねえよ……。なんで人のために、そこまで」
「だってそれが生きがいだもん」

津川は再び壊れた笑みを浮かべ、土門の手を取った。

「だから、約束してほしいなり。ここから出たら、みんなを助けてあげるって。約束して、土門きゆん!」

「……………」

土門の手はガクガクと震えていた。

「それと……みー様とか、他のみんなに伝えてほしいなり。短い……本当に短い間だったけど、とつても楽しかったって。みんなそれぞれいいところがあつて、ちよつと悪いところもあるけれど、みんなみんな、希望と呼ぶにふさわしい人ばかりだったなり。リヤン様なんかとは比べ物にならないくらい……。だから、こんなアタシなんかに構ってくれてありがとう。アタシなんかで笑顔になつてくれてありがとう」

て。みんなは生きて、人々の希望になってほしいなりよ！」

そして、土門の手をぐつと引き寄せ、小さな体で抱きしめる。

「ごめんね。…ほんとにごめん。こんな辛いことさせて。…でも、うれしいなり。最後まで誰かの役に立てるって」

「ダメだ」

土門はそう言っつて、津川を腕から引き離した。

「…お前は勘違いしてる。みんなを助けるために自分が死ぬなんて間違ってるんだよ！ だつてよ、〃みんな〃にはお前も含まれてるんだぞ！ これじゃみんな助かったことにはならねえんだ！」

「……………」

「俺は…………あくまでもみんなと一緒にここを出たい。一刻も早くヌイグルミの中身を見つけ出して、みんなでここを出るんだよ！ お前の自己犠牲なんか認められつか！」

「……………」

「分かってくれ。いや、分かるまで何度でも言うさ。…お前が犠牲になる必要なんかこれっぽっちもない。お前は生きていいんだよ」

津川は少しの間、うつむいて黙っていた。

…そして。

「…うん。うん。そうなりね。ごめん。アタシ…ちよつとおかしくなつてたなり」

「…いや、あんなもんを見せられたんだ。無理もねえさ」

そう言っつて土門は慰めるように津川の肩をポンポンと叩いた。

「ねえ。…悪いけど、二時間ぐらいたらもう一回話していいなりか？ ちよつと心の整理をつけたくて…………」

「ああ…………。俺は構わないぞ」

「じゃあ…………休憩室に来てほしいなり。あそこならお菓子もあるし、気分も落ち着くと思うなり」

「…分かった。それまで、くれぐれも変な気は起こすなよ」



映像はそこで途切れていた。

「な……なによ、これ……リヤンちゃんは……自殺しようとしたの……!?!」

亞桐さんが取り乱すのも無理はない。

だって、映像の中で津川さんは確かに言っていたんだ。

“死にたい”と。

信じられない。

あの時、視聴覚室でみんなが暗い気分を沈んでいた時。

誰よりも最初にみんなを元気づけてくれた彼女が。

既に死を決意していたなんて。

信じられるわけないじゃないか。

「いや……ただの自殺じゃない。土門君に殺されることで、彼を逃がそうとしていたんだ」

夢郷君が付け加える。

「しよ、正気ですか?! そのためだけに、こんな裁判なんか起こさせたというのですか!?!」

「……違う」

丹沢君の言葉を否定したのは安藤さんだ。

「事件が起きるまで……こんな裁判の存在は明かされていなかった。正しいクロを指摘できなければクロ以外の全員がオシオキされるなどというルールも……リヤン様は知らなかったのだ。だからこそ……土門殿を逃がそうとしたのだろう」

『そのとおり! 生意気なことに津川さんは完全犯罪さえ犯せば土門君がここから出られると思えばいい込んでやがったのです! そうは問屋が卸すわけないよ!』

「この……クソパンダ!! てめえが初めに全部説明していればこんなことにはならなかっただろうが!! ちくしょうが!!」

前木君が怒鳴っても、モノパンダは「いやあ、最低限の説明はしたしなあ」と平然としていた。

「で、でも……自殺しようとしたのなら……なぜ、リヤンちゃんは土

門君を殺そうとしたの……?」

小清水さんが呟く。

「違う…。あいつは、俺を殺そうとしたんじゃないやねえ。俺に殺されようとしたんだよ」

土門君の答えは、予想だにしないものだった。

「なるほど…。そういうことか」

黙っていた御堂さんが納得したように言った。

「休憩室に土門隆信を呼び出すことに成功した津川梁は、包丁を携えて土門を急襲することで、反撃を誘った。…こういうことだろうか?」

そんな。

彼女は、結局死ぬ決意を変えなかったっていうのか…?

土門君に自分を襲わせるために、わざと?

「ついでに言うと、山村巴の格好をしたのもそのためだろう。津川梁の格好のままでは体格のいい土門隆信ならすぐに取り押さえられただろうが、山村巴なら話は別だ。やつは山村巴の格好をすることで、確実に土門が反撃するように仕向けたのだな…」

「…暗い中、入ってきたのを山村と勘違いした土門は思わずモツプで殴っちまった…ってことか…」

彼女の死の真相。

それは、彼女の純粋すぎる“自己犠牲”だったんだ。

モノパンダの卑劣なルールに気付かないまま、彼女は土門君が…

そして俺たち全員が救われることを信じて、死んでいったんだ。

こんな話があつていいのか。

結局、彼女の話は何一つ叶っていないじゃないか。

こんな、酷い話…。

「でも、悲劇はそれだけで終わらなかつたんだぜー!!」

モノパンダが上機嫌にしゃやり出てきた。

「山村さんの格好をした津川さんのポケットに入っていた遺書に従って、土門君は遺体と証拠を焼却することにしたんだ。でもそこで悲劇は起きた。さて、ここでさっきの話題になつた“手の火傷”が関係

してくるんだけど……だれか分かるかー？」

この期に及んで俺たちをおちよくるように、モノパンダは問いを投げかけてきた。

「焼却炉に入れられた時点では津川は死んでいなかった。…そういうことだろうか？」

リュウ君の冷徹な一言が答えだった。

「え？ それってどういう……」

「つまり、土門の一撃だけでは死に至らなかった。…焼却炉の中でもがき、その際に火傷した右手を焼却炉から突き出した……」

「なるほど、そうだったのか。それならば辻褃は合う。胸糞の悪い話だな」

御堂さんは納得しつつも舌打ちした。

『うぷぷぷ！ こーゆーのは見た方が早いよね！』

モノクマの言葉で、三度目となるスクリーン映像が投影された。



映ったのは、トラツシユルーム。

焼却炉は起動しておらず、薄暗い空間の中で、壁にもたれかかるように山村さんが眠っていた。

数秒後、ゆっくりとシャッターが開いた。

その向こう側から、ビニールシートに包まれた何かを抱えた土門君が現れた。

ビニールシートに入っているのは証拠品と津川さんの遺体……で間違いないだろう。

「ッ!？」

土門君は山村さんの存在に驚いていたようだが、それでもためらわずビニールシートを焼却炉の中に投げ込み、スイッチを入れてその場から走り去っていった。

やがて、焼却炉の中に火がともされ、周囲が赤く照らされ始めた。

そして、突然。

悪夢が。

『いぎやあああああああああああつあああああああああ
あああああ
!!!!』

叫び声。

金切り声。

一生、忘れられないほどの声。

人が、死ぬ瞬間の声。

その声を覆い隠すかのように、女子たちの悲鳴が裁判場に響き渡つた。

『あああつ、ああつぎやあああああああ……!!!!』

彼女は、津川さんは。

まだ死んではいなかった。

“投げ込まれた瞬間は”。

『ぎいつ、ひぎいぎぎつ……ぎい………』

最早人の声ともおぼつかぬ音声を発しながら津川さんはもがく。

その後、焼却炉の中から手が突き出された。

真っ赤に焼けた手はだらりと垂れ落ち、小さく空中をかき回す。

『うう……うう……』

彼女の面影を完全に失った低いうめき声の後。
手は動かなくなった。

死んだ。

こうして、あの悲惨な事件現場は作り出されたのだ。



「ごめんなさい…!!」

山村さんが床にへなへたと座り込んだ。

「津川さんごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!!」

まじないのように謝罪の言葉を呟きながら、スクリーンに向かって土下座の格好をとった。

「私が私が助けてあげられなくてごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!!」

すぐ近くにいながら、あの悲惨な死に気付けなかった自分を責めているのだろうか。

「どんな責め苦も受けますだから許してくださいお願いします私が悪いんです私が私があああああ!!!」

そのまま床にへばりつくように泣き崩れていた。

俺はどんな表情をしていたのだろうか。

分からない。

もう、感情を表情に出すことすら億劫になっていた。

それくらいの。

それくらいの絶望だったんだ。

「ごめんなあ、津川。俺のミスで、俺のせいで苦しめちゃった。あんなに熱くて、苦しくて…。本当にすまねえ」

土門君は涙をこぼしながら天を仰いで呟いた。

『うぶぶぶ。土門君の殺人への躊躇いが津川さんを即死させなかった。そのせいで津川さんはより苦しむことになってしまった！皮肉だね！ 絶望的に皮肉だね！』

これが、この事件のすべて。

自分の命を犠牲にして全員を助けようとした津川さん。

そんな津川さんを説得し、あくまでも生きながらえさせようとしたはずの土門君。

誰も悪くない。

それなのに……

これ以上ないほど残酷な方法で、津川さんは死んでしまった。

全身を焼かれて、もがき苦しみながら死んでいったんだ。

議論の初めに丹沢君が発言した言葉。

『抵抗する津川殿を無理矢理焼却炉に突っ込み……』“焼死させた”の
でしょう』

結局、これが半分正しかったのだ。

俺達は間違っていた。

現実には、俺達の想像なんか遠く及ばないくらい絶望的なんだ。

誰も、言葉を発する者はいなかった。

大きすぎる絶望に、誰もが疲弊しているようだった。

泣いたり、笑ったり、怒ったり、それを表す体力すらもう残ってはいない。

ただ絶望。

あまりにも理不尽な結果に絶望するしかない。

『まったく、絶望的なのはいいけどさ。こここの部分に学級裁判と同じぐらいの尺を使うっていう作者の考えが分からないよね。裁判こそ

がダンガンロンパの醍醐味だつてのに!』

「メタ発言はよくないぜ、校長せんせー!」

『うぷぷ、そうだったね! それじゃあ今回の締め、オシオキターイム!』

「オシオキ、だと……?」

前木君が愕然とした表情でモノクマを見た。

「当然だよ! 最初に説明したでしょ! 正しいクロを指摘できたから、今回は土門君にオシオキを受けてもらうことにするからね!」

「ま、待ってくれよ!! 土門は…土門は何も悪くねーじゃねーかよ!! おかしいって!」

叫びすぎたのか声が掠れているが、それでも前木君は親友のため、必死に反論する。

『まあ、確かに今回の件は土門君に同情するよ。半分被害者みたいなもんだもんね。中途半端な偽善に付き合わされるって、大変だよねー!』

「なっ…! 俺はそう言うつもりじゃ……」

「もういいって、まえなっ」

土門君は穏やかな声で言った。

「どうあっても、俺は人殺しだ。死んで当然なんだよ。別に文句はねえさ」

「うるせええええええええ!! お前、言ってたじゃねえか! みんなでここから出るんだろうが!! 命を粗末にしてんじゃねえよ!!」

「津川が死んだ時点で、もうみんなじゃないさ」

そう言つて、土門君は懐から小さな紙切れを取り出した。

「津川の遺書だ。俺に宛てたもんだけど……安藤、お前に渡しとくわ。殺した俺が言えたことじゃないけど、ちゃんと読んで、弔ってやんな」

土門君から紙切れを受け取った安藤さんは、それを胸に押さえつけるように抱えると、その場に座り込んで泣きじやくり始めた。

「津川の願いも……俺の夢も…叶わなかったけど。でも俺、満足だわ。誰かに当てられる前に自分で自分の罪を告白できたからさ。お前らと過ごした数日、ほんと楽しかったよ。…もし……もし…俺の家族に

会ったら……悪いけど、事件のことは黙っててくれ。津川の家族には言ってもいいからさ。…家族の前では、最後まで一人前の建築士でいたいからよ」

「土門!! お前はそれでいいのか!! 本当に死んでいいって思ってるのか!!」

釜利谷君が顔を真っ赤にして叫ぶ。

「仕方ねえだろ。今更どうこう言っても変わらんし。…それに、津川だけ死んだままじゃ寂しいだろうしな」

モノクマが赤いハンマーを振り上げる。

「チクシヨオオオオオオ!! 俺はダチ一人守れねえダメ医者だ!!」

釜利谷君が怒りと悲しみのこもった拳を精一杯裁判台に打ち付けた。

「はは、ダメ医者か! そりゃあ昼寝ばかりしてりゃあダメ医者だろうな!」

これから死ぬ人間とは思えないほど、陽気に彼は笑った。

だが、俺は確かに見た。

彼の体は震えていた。

せり出てきたスイツチがハンマーに押され、ピコツ、と音が鳴った。

『ドモン タカノブ さんが クロに きまりました。オシオキをかいし します』

「ああ、ダメだ! 笑っても心はごまかせねえな! 俺——」

突然、横断幕の向こうから首輪が飛び出し、土門君の首をしつかりと捕える。

「俺、やっぱ死にたくねえわ! 助け」



土門の姿が横断幕の向こうに消えると、スクリーンに映像が映し出される。

そこには、映画のように大きくタイトルが浮かび上がっていた。

【絶望タワーへようこそ (株) 土門建設】

晴天の工事現場。

そこでは、工事担当者の作業着やヘルメットをかぶった百近いモノクマやモノパンダたちが鉄骨を組み立てていた。

あるものはショベルカーやダンプカーも駆使して作業に当たっている。

その中の鉄骨の一本に、土門は縛り付けられていた。

周囲で慌ただしく作業が行われる中、土門を数体のモノクマとモノパンダが取り囲む。

土門は不安げにそのヌイグルミたちを見回す。
やがて、一体のモノパンダが進み出てきた。

その手には巨大なドライバート、シャーペンを数本束ねたようなサイズの鋭いネジが握られていた。

モノパンダはネジの先端を土門の肩にあてがう。

土門の顔を滝のような冷や汗が流れた瞬間。

ドライバーが猛スピードで動き始めた。

ネジが土門の肩に食い込み、彼の肉体と鉄骨を繋げる。

土門は大きく口を開けて悲鳴を上げているようだったが、スクリーンの向こう側にその声は伝わらない。

肩に釘を刺し終わると、次は反対側の肩。

次は足首。次は腰元。次は手首。

くぎを打ち終わると映像が早送りになり、凄まじい速さで一つのタワーが出来上がった。

まるで天を貫く蔓のような巨大なタワー。

それは、葛西達が自由時間に目にした設計図のものに間違いなかった。

そしてその中央に当たる部分には、生きた建材として用いられた土門の姿があった。

鉄骨に磔にされた土門は、血に濡れた目で夕暮れ時の都会をぼんやりと見下ろした。

彼は、自分のすぐ横に、妹と母がいるような気がした。

そして、子供のようにはしゃぐ津川の存在も感じていた。

人生の最期……彼自身を建材として、彼の夢は叶った……

……はずもなく。

ミシ、と音を立てて鉄骨の一本が歪んだ。

次の瞬間。

ガラガラと、まるで石の山を崩すかのように、タワーはバラバラになつて地に落下した。

土門の体がりつけられた鉄骨も同様に。

夢も、仲間も、家族も、人生も、すべてを失い、地に墜ちていく土門。

彼が、自分の上に落ちてくる鉄骨に叩き潰される直前に見た幻想は、いったい誰のものだったのだろうか。

鉄骨の山から辛うじて這いずり出てきた一匹のモノパンダ。

その目の前に、記者のような恰好をしたモノクマが現れ、モノパンダの顔に一枚の札を張り付けた。

その札には。

『手抜き工事の土門建設』



映像はそこまでだった。

「はい、オメーラお疲れさん！　ほんとによく頑張ったよ！　そのスロットから出てきたモノクマメダルは全部あげるから、オメーラで山分けしろよな！　じゃ、各自エレベーターで部屋に戻ってよし」
それだけ言っつてモノパンダは椅子の下へもぐりこみ、消えた。

前木君は床にはいつくばり、握り拳を震わせていた。

かけがえのない親友を追い詰めてしまった彼の心中は察するに容易い。

だが、もつと悔しそうにしているのは金利谷君だった。

何度も何度も裁判台を殴り、やりきれない怒りを爆発させているようだった。

女子のみんなは…ほとんど泣いていた。

この裁判では…あまりにも多くのことがありすぎた。

初めての経験が多すぎて。

とてもとても……適応なんかできっこない。

「ここについても仕方あるまい。気持ちには分かるが、もう部屋で休め」
そんな一同に、リユウ君は一人一人声をかけていた。

「葛西……歩けるか？」

「うん……。問題ない」

俺は声を絞り出して彼の呼びかけに答える。

こんな時。

津川さんだったら変な格好して笑わせてくれただろうな。

土門君だったらそれを明るく笑い飛ばしただろうな。

二人。

十五人中の二人がいなくて、こんなに違うんだ。

俺はふと気が付いた。

ポケットの中に入っている、俺が津川さんの部屋に行った時に見つけたもの。

彼女のぬくもりと記憶にさいなまれ、思わず持つてきてしまったマスク。

俺は躊躇わずそのマスクをかぶり、深呼吸をして――

「皆の者ツ!! 希望を捨ててはならぬ!! こんな時だからこそ! 笑うのだ! 笑ってやり過ぎすのだ!! それこそが! 愛と希望の戦士、ホープ仮面の生き様だツ!!」

あの時間いた言葉を必死にまね、ポージングも見よう見真似でやった。

彼女なら、迷わずこうしていただろうから。

……だが。

「こんな……こんな時に何よっ!!」

小清水さんは涙を振り撒いて叫んだ。

他のみんなも、笑顔になる気配はない。

あの入間君でさえ、額に手を当ててうつむいたままだ。

なんだか……スベっっちゃったみたいだな……。

「そっか……。やっぱ、俺じゃダメか……」

俺はため息をついてマスクを外す。

そして確信した。

人を笑顔にするということは、れっきとした才能なのだ。

彼女にしか……”超高校級のコスプレイヤー”、津川梁にしかでき

ない唯一無二の才能なんだと。

だから、もう一度。

もう一度だけ、君のコスプレを見せてほしい。

君じゃなきゃダメなんだ。

だから、頼むよ。

「この世の誰よりも、君が必要なんだ。津川さん……」

chapter 1 希望の蔓に絶望の華を 完

アイテムを入手した！

『ホープ仮面』

chapter 1 クリアの証。

無垢な少女の希望が詰まっている。

生き残り人数：13人

Chapter 2
Gradus
chapter 2 (非) 日常編①



『リャン様なりーーー!!!』

『やっぱ大工仕事はサイコーだな!!』

聞きなれた声が、反復する。

人が、死んだ。

それも、俺達と数日を共に過ごしたかけがえない仲間。

二人も、死んだんだ。

その事実はどうも俺の頭に定着してこなかった。

『アタシを……殺してほしいなり』

『やっぱ俺、死にたくねえわ!』

それでも。

あの光景はあまりにもリアルで。

焼き焦がされた津川さんの遺体と。

画面越しではあるが、俺たちの目の前で鉄骨に叩き潰されて死んだ

土門君の姿は。

凄まじく、惨たらしいほどにリアルだった。

一切の救済も慈悲もない、リアルな“死”そのものの光景だった。祖父父母の臨終に立ち会ったことのない俺にとっては、これが人生で初めて目にする死で。

よりもよって初めて目にする死があんな姿だなんて。とてもじゃないが、受け入れられるはずもなかった。

こうして俺達は、“みんな”ではなくなった。

たった一日のうちに。

あれだけ仲の良かった俺達は、もう“俺達”ではなくなったのだ。誰も、悪くはないのに。

それぞれの形で、愛する仲間を守ろうとしただけなのに。なぜ、こんなことになってしまったんだ？

なぜ？



目が覚めると視界に飛び込んできたのは、やはり見慣れた天井。

昨日、あの思い出したくもない事件が起きた日に見上げた天井と全く同じだ。

でも、もうここは今までとは全く違う場所のようで。

ぬくもりが感じられなくて。

ほろり、と涙が零れ落ちた。

彼との、彼女との淡い思い出が脳裏をよぎっていく。
もう一度、もう一度だけでいい。
会いたい。

会って話したい。

でももう、それすらも叶わない。

彼らを守る方法はなかったのか？

あれが正解だったのか？

……いや。

考えるのはよそう。

みんなのところへ行かなくては。

「おはよ、葛西！」

食堂に着いた時、真っ先に飛んできた声の主は……

亞桐さんだった。

昨日、あんなことがあったなんて嘘みたいなの……

カラカラに明るい笑顔を浮かべていた。

「もう！ 悲しんでもしょうがないよ？ 起こつちやつたことはもう元には戻らないんだし、だったらさっさと受け入れて今を楽しく生きようよ！ ねっ？」

亞桐さんはそう言っただけでウインクしてきた。

でも、俺は気づいてしまった。

彼女の目の周りが……うつすらではあるが、赤く腫れていることに。そして、その目の下にはつきりとくまが浮かび上がっていることに。

「うん、ありがとう。……俺も気持ち切り替えるよ」

だが今は彼女の精一杯の心遣いを汲んでおこう。

「うんうん、そうこなくっちゃ！ 今日の朝食は彌生ちゃんと夢郷が作ってるみたいだよ！ 夢郷のやつ、料理作れるんだね……ちよつと意外かも」

夢郷君の料理……。

どんなものを普段食べているのだろう。

ちよつと期待できるかもしれない。

……なんて、いつもなら思っていたのかもしれないけれど。

とてもじゃないけど、今は……。

「……あれ？ 安藤さんと伊丹さんは？」

「……二人とも……個室でお休みしてるみたいです」

俺の問いに山村さんが答えてくれた。

「……そっか」

やっぱり、二人とも心の傷は癒えていないようだ。

当たり前だ。

だって、つい一昨日まで何事もなく元気にしてた親友が、あんな姿になつてしまつたのだから。

亞桐さんは……本当に強いな。

まるで、亡くなった津川さんの魂と才能が乗り移つたみたいだ。

でも、同じくらい傷ついているはずの前木君と釜利谷君はちゃんと食堂に来ていた。

二人も十分に強い。

俺だつて歩くのが億劫になるくらい沈んでいたのに。

「ま、まあしょうがないよ！ 今日こそつとしておいてあげよ！」

亞桐さんは相変わらず可愛らしい笑顔を浮かべながら言った。

「あ、あれこれ考えるのメンドクサクなつてきた！ やめだやめだ！」

突然、釜利谷君が頭をかきむしりながら言い出した。

「思い悩むのは俺のガラじゃねえな。亞桐、オメーが正しいわ。嫌なことあさつさと忘れちまおう。土門はいい奴だったけど、あいつの話はこれで終いだ。残酷かもしれないけど、あいつはそれを望んでるだろうからな。……んじや寝る」

「いい話だつたのに最後でぶち壊すなっ！」

亞桐さんのツツコミが飛ぶ。

二人とも、そうやって辛い気持ちを抱え込んで、それでもそれを誰

にも言わずに明るく振る舞っている健気な姿は。

完全に津川さんと土門君そのものじゃないか。

そう思うと、意図せずとも涙がこぼれてしまう。

でも俺はそれを知られたくなくて、咳き込むふりをして慌ててぬぐった。

「みんな、おはよう！ 元気が出るように朝食はカレーにしたからね！ いっぱい食べてちょうだい！」

厨房から小清水さんが顔を出した。

亞桐さんの影響か、彼女も昨日のことが嘘みたいに屈託のない笑みを浮かべている。

俺も、彼女たちの気持ちを裏切れないな。

丹沢君とか入間君とか、未だ絶望に打ちひしがれていた人も多かったけど。

なんとか朝食を通してそれなりに明るさを取り戻してくれたようだ。

……夢郷君が大量にカレーにレモン汁を入れて食べていたのには正直驚いたけど。

「…あ、そういえば」

「小清水さん、どうしたの？」

「えっと……昨日、裁判から帰るときの話なんだけど……。エレベーターに乗ったじゃない？ 確か……二階のボタンが点灯していたような気がして……。その……行けるようになったんじゃないかって」

「そのとーり!!」

小清水さんの言葉を聞いていたかのように、テーブルの下からモノパンダが飛び出してくる。

もうこの出方には驚かない。

「いいところに気が付いたなー、小清水さんよ！ オメーラには裁判をクリアするたびに、『校舎内の新エリアを探索する権利』が与えられるぜ！ せいぜい新しい発見に胸をドキドキさせるといいんだぜ！」

いつものあくどい笑みを浮かべてモノパンダは去ろうとする。

この笑顔のために、土門君と津川さんは死んだ。

そう思うと、意識せずとも黒い感情が胸の奥から込みあげてくる。

「待てよ」

それを引き留めたのは前木君だった。

そして、モノパンダを睨みながらテーブルを思い切り叩いて…

「俺はお前を絶対に許さねえ!! 必ずぶっ殺してやる…必ずだ!!」

モノパンダを指さし、吼えた。

かけがえのない友人を卑劣な方法で死に追いやらせたヌイグルミへの怒りと憎しみは想像するに容易い。

「やめとけ」

机に肘をついたまま釜利谷君がぶつきらぼうに言った。

「そんなんじゃないよこいつの意のままだぞ。こんなやつ、相手にするだけメンドクセーだけだよ」

「…うるせえうるせえうるせえッ!! お前がルールを黙っていたからっ!! 津川も土門も死んだんだ!! なんにも悪くねえのに!! 悪いのは全部お前なんだよっ!!」

「結果を変えられなかったくせに醜く喚くな。騒々しい」

御堂さんが舌打ちを交えて吐き捨てるように言った。

「お前らはっ!! お前らは何とも思わねえのか!! このパンダのせいで二人とも死んだんだぞ!! それでもお前らは!!」

ポン、と。

リュウ君が前木君の肩に手を置いた。

「今更やつに怒りをぶつけても詮無きことだ。お前も分かっているだろう?」

前木君を優しく見下ろしながらそう言いかける彼の姿は、しかしどのような怒りも委縮させてしまうような圧倒的強者の威容を放っていた。

案の定、前木君もその威容に気圧され、力なく頷きながら椅子に座りなおす。

「安心しろ」

憔悴する前木君に、リュウ君が静かに告げる。

「あんな悪夢は、もう起きない。起こさせはしない」
そして、モノパンダの方へと向き直る。

「……絶対に、な」

圧倒的強者の威容を放つリュウ君の視線がモノパンダを貫き通す。
モノパンダは何も言わず、不気味な笑みだけを残して去っていった。



静かにエレベーターの扉が開く。

「ここが二階、か………」

土門君が、津川さんが、来られなかった場所。

二人のためにも。

この場所の真実を解き明かそう。

そう思っただけは二階に足を踏み入れた。

「技術室……か」

俺と小清水さんが最初に訪れたのは、技術室と書かれた教室だった。

その名の通り工具や電気回路らしきものが所狭しと置かれた部屋だ。

「……秋音ちゃんが見たら喜びそうね」

おぼろげな笑みを浮かべながら小清水さんが呟く。

確かに、エンジニアの御堂さんならばこの手のことは詳しいだろうな。

きつと、建築に詳しい土門君も、この部屋に来たら大喜びして……。

なんてことを考えているんだ、俺は。

ダメだ。ダメだ。

忘れなきや。

「忘れなくていいのよ」

俺の心を見透かしたかのように。

小清水さんは優しく語りかけてきた。

「釜利谷君の言うことも正しいけど……私は二人を忘れることなんてできない。だって、どっちも大事な大事なお友達だったんだもん」
まただ。

また、二人の笑顔がよみがえる。

「そうだよね。忘れられるはず……ないよね」

小さな声で俺は呟いていた。

言葉に続いて、涙がほろりほろりと零れ落ちた。

「俺は……二人を忘れないよ。一生、永遠に忘れない。二人の笑顔も、悲しみも、希望も、絶望も、全部引きずって生きていくよ」
「それでいいのよ」

小清水さんは俺の頭を撫でながら呟いた。

「私もそうする。辛いのはみんな一緒だから……今度こそ、みんな協力してここから出ましょ？」

そう言つて笑顔を浮かべる彼女の頬にも、涙の筋が降りていたのだった。

後ろ髪を引かれるような気持ちで技術室を後にし、次に隣の美術室に向かった。

「……おや、葛西殿ですか」

丹沢君が物珍しそうに美術品を眺めていた。

「ご覧ください！……ここには拙者が仕事を行うには十分すぎるほどの道具と材料が揃っております！」

丹沢君が指さした先には、彫刻品を作るのに使うであろう石のような材料や、加工に用いるノミなどの道具が並べてあった。

なるほど、フィギュア製作者の彼なら心躍ってもおかしくはない。

「ううむ、この像などなかなか美しき造形。やはりモノホンの彫刻家にはまだまだ及びませぬなあ、拙者も」

古代の作品らしき石像を眺めながら彼は感慨深そうに呟いた。

「ここで作品を作ってみたいの？」

「もちろんでござりまするー！」

俺が尋ねると、丹沢君は元気に答えた。

朝食の時の意気消沈した姿が嘘みたいだ。

「…あのお二人の像を最初にお作りしようと思います。せめてもの手向けとしたいので」

かと思いきや、悲しげな顔になってそう言った。

やはり、彼も大切な仲間を失ったことについて思うことがあるのだろう。

当然だ。

「…うん。いい作品を作つてあげてね」

「もちろんでござりまする！ 不肖丹沢駿河、誠心誠意を込めて最高の作品を作る所存!!」

そうガッツポーズを決めて意気込む姿は、こみ上げる黒い感情を必死に抑えつけようとしているようにも見えた。

「……ん？」

美術室を出ようと振り返った俺は、部屋の隅の方で茫然と立っている人物を見つけた。

夢郷君だ。

「夢郷君、どうかしたの？」

彼のもとに歩み寄った俺は、彼の目の前にある石像を見て……

「……え？」

言葉を失った。

彼の目の前に置いてあった石像は、有名な「考える人」の像だった。

しかし、その石像の顔は……まさに夢郷君そのものだったのだ。

「う、うそ……。なんで君の石像が……？」

「僕が聞きたいくらいだ」

夢郷君は冷や汗を流しながら呟いた。

「…彫刻家から仕事の依頼がきた覚えはないんだが……。一体誰が、いつの間にこんなものを作ったというんだ……？」

「うくん……。俺たちの先輩に“超高校級の彫刻家”がいて、勝手に君の像を作っちゃったとか……？」

無断で作るなんてあまり誉められたことじゃないけど。

「そんな僕には有名だったのだろうか…。なんだか嬉しいような恥ずかしいような複雑な気分だ」

頭をかきながら近くにあった椅子に腰かける夢郷君。

「誰が、いつ、どうして僕の像を彫ったのだろうか……」

そして例の考える人ポーズで思考を始める。

その姿、完全に石像の生き写しだった。

次に訪れた部屋は、化学室。

入るや否や、ツーンとする薬品のおいが鼻をつく。

実験台が中心に置いてあり、周囲を薬品棚がぐるりと囲んである。

「…伊丹さん」

実験台に向かって、彼女は座っていた。

ビーカーやメスシリンダーを置き、バーナーを動かす準備をしているようだった。

薬物の実験だろうか。

「……なに？　ここにいちや迷惑？」

伊丹さんはこつちに背を向けたまま、ぶつきらぼうに言った。

「あ、いや、そういうわけじゃないんだけど。朝食、来なかったから心配で……」

「…ちゃんと食べたから。心配しないで」

「…そっか。なら、いいんだけど…。えつと…何の実験してるの？」

「薬品の組成を調べているのよ。毒薬もあるみたいだから」

「えっ!?　毒薬!？」

俺は思わず後ずさってしまった。

「そんなに驚くことないでしょ。ちゃんと毒にはドクロマークのラベルが付いてるみたいだし」

そ、そんな漫画みたいな警告で大丈夫なんだろうか…。

「でも、毒だって分かるだけじゃ足りないわ。ちゃんと物質を同定してどんな効用もあるか確かめておかないと気が済まないの。だって、毒物にも効きやすいものと効きにくいものがあるじゃない?」

バーナーで粉末の入ったビーカーの底を炙りながら彼女は淡々と述べた。

「例えば、ボツリヌストキシンなんて500gで人類を滅ぼせるというし…」

「そ、そうなんだ……」

そんなに恐ろしい毒薬がここにはないことを祈るばかりだ。

そして、俺はそつと部屋を後にした。

彼女の顔を正面から見つめるのが怖かったから。

彼女が何を思っただ実験しているのか、想像したくなかったから。

「……ここは……更衣室？」

次にたどり着いたのは更衣室の目の前だった。

「あ、葛西君じゃないですか!」

背後から声をかけてきたのは山村さんだった。

「さっきここを調べたんですけど、ここから男女別の更衣室に入れて、その先には室内プールがありました! とつても広くて驚きましたよ!」

室内プール…。

そんなものまで用意してあるのか。

「水着も更衣室に置いてありましたし、後で気分転換がてら泳いでみようと思います! 亞桐さんや小清水さんも誘ってみたいですわね。葛西君もどうですか?」

「あ、え、俺…?」

急に話を振られて俺は慌てた。

みんなの水着姿なんてピンク色の妄想が膨らんでしまうけど(丹沢君や入間君が大はしやぎするんだろうな…)、あいにくみんなの前で泳ぎの下手さを晒すわけにはいかない。

「うくん。俺は苦手だから遠慮しとくかな…」

「…そうですか。面白いのにもつたいない。よし、試しに一人で泳いでみますわね!」

そう言つて山村さんは更衣室の中へ入つていった。

津川さんの死へとてつもない罪悪感を抱いていた彼女。

彼女もまた、心の中の鬱屈した感情を覆い隠していたのだろうか？

その後も二階を探索したが。

他にあつた部屋は、初めに俺が目を見ました場所のような“普通の教室”が二つあるだけだつた。

脱出の手がかりになるようなものもなく。

俺は心を沈ませながら休憩室に入った。

「……あ、リュウ君」

そこには、漆黒のコートとシャツを脱ぎ、上は薄手の肌着一枚になつたリュウ君が休んでいた。

包帯の巻かれた右腕や、屈強な筋肉に覆われた左腕を思わず俺はまじまじと眺めてしまった。

「……葛西か。ホール階に開かなかつた扉があつただろう？ あそこが開放されていたぞ」

「え？ 本当？」

「ああ。中はトレーニングルームになつていてな。少し体を動かしてきたところだ」

だからそんなに薄い格好をしているのか。

「俺は二階を見てきたんだけど……」

リュウ君とテーブルをはさんで向こう側に座つた俺は、自分が二階で見たことを話した。

「……そうか。後で俺も行つてみるとしよう」

そう言つてリュウ君は冷蔵庫からペットボトル入りの水を取り出し、ぐつと呷つた。

そして、一息ついて。

「…葛西。人が死ぬのを見たのは初めてか？」

「……！」

突然の質問に俺は言葉を見失ってしまった。

「……いや、答えなくていい。あの時のお前の反応ですぐに分かった。あの場にいた者はほぼ全員、死を見るのは初めてだったようだな」

「…君は、見たことがあるの…？」

聞いちゃいけない気がしたけど、それでも聞かずにはいられなかった。

「ああ、あるとも」

あっさり、彼はそう答えた。

「正直に言おう。腐るほどある。男も女も、大人も子供も、数えきれないほど見てきたさ」

「……そんな…じゃあ、君は…!!」

「いずれまた話す」

俺の言葉を遮るように、彼はペットボトルの中身を飲み干して服を着なおし、さっさと部屋を後にしてしまった。

だが、部屋を出る直前、ふと立ち止まり……

「お前は…お前たちは、思い悩むがいいさ。俺はそれすらできなくなった、哀れな人間だ」

後に残ったのは、どうにもやるせない疑問だけだった。

彼の正体もそうだし、目的も、心境も。

何もかもわからないまま、感情の渦は洪水のようになって俺の胸のうちに荒れ狂っていた。

彼は、いったい何なのだろう？



何もしていかないのにひどく疲れたような気がした俺は、ふらつく足取りで部屋まで戻っていった。

「……………」

廊下を歩いていた俺は、廊下に置いてある見慣れないものを見つけた。

それは…………俺の隣の部屋…土門君の部屋…………だった場所の目の前にあった。

一つの花束だった。

まるで、交通事故の現場のように。

昨日のこの時間。

彼は津川さんの部屋で、寂しそうに一人で立っていた。

あの時、彼はすでに自分の罪の重さに耐えきれなくて、死にそうなくらい苦しんでいたんだろう。

あの恐ろしいルールが発表されたせいで、余計にどうすればいいかわからなくなっていたんだ。

『俺は…………一人を忘れないよ。一生、永遠に忘れない。二人の笑顔も、悲しみも、希望も、絶望も、全部引きずって生きていくよ』

さつき、小清水さんに言った言葉がよみがえってくる。

でも、あんなのは本心じゃない。

きれいごとだ。

本当に俺が抱えている感情、それは…………

後悔。

ただそれだけなんだ。

動機のDVDになんて興味を抱かなければよかった。
いち早く、津川さんの相談に乗ってあげればよかった。
俺が彼女のターゲットになればよかった。

何で俺は、今もこうして平気な顔をして生きているのだろう。

みんなを助けようとした津川さんが、その津川さんを助けようとした土門君があんなにむごい殺され方をされて。

それなのに、何もできなかった俺がなぜこうして生きているんだろう。

理不尽だ。

「あ、葛西じゃん！ こんなところで何して」

明るい声で駆け寄ってきた亞桐さんは、花束を見て言葉を止めた。

「……や、やめてほしいよね、こういうの！ せつかく悲しいことは忘れようって頑張ってるのにさ」

そう言って、すぐに花束から目をそらす。

でも、語尾の方は声が震えていた。

「もう、泣き疲れたよ……。なのに、なんでまだ涙がでるんだろ。ねえ、

葛西。なんで……？」

それは。

君にとって、それだけその二人が大事な存在だったって他ならぬ証拠だよ。

「ウチってばさ、DVD見終わった後、リヤンちゃんだけじゃなく土門にも慰められちゃってさ。あの時のあいつ、めっちゃカッコよくて、やさしくて……。ウチらは、そんな土門を死なせたんだよね。追い詰めたんだよね。否応なしにオシオキさせちゃったんだよね……！」

涙にむせびながら悲痛な言葉を綴る。

「あー、もうダメだ！ 踊ってくるー！」

感情をこらえきれないかのように、そう言って亞桐さんは休憩室に駆け込んでいった。

やはり、そうだったか。

朝食の時の彼女の気丈な振る舞いにも限界があつたんだ。

彼女もまた、津川さんを失った悲しみ、土門君を追い込んだ罪悪感、そういった感情と戦っていたんだ。

土門君の部屋の前に置かれた花束を見て、俺はもう一つの場所を思い出した。

トラツシユルームに赴くと、そこにもやはり花束が置いてあつた。電子生徒手帳のスキヤナーは電源が付いておらず、シャツターには下手な字の張り紙が貼つてあつた。

「じけんの しょうごひん を 始末されると 困るので これからは モノパンダせんせい が ゴミを 処分します 。 シャツターの 前に ゴミを おいておくこと」

そして、花束の前に跪いている人は。

「…安藤、さん」

両手を組み、祈りをささげているような体勢の彼女の横顔は。とても悲しくて、寂しくて、それでいて安らかで。

心の底から津川さんの冥福を祈っているのがすぐに分かった。

数日間の関係、しかしかけがえのない大切な親友だった彼女の健やかな来世を願う安藤さんの純粹な願いが。

「葛西殿」

彼女の邪魔はすまいと俺が黙って出ていこうとしたのを引き留め

たのは、他ならぬ安藤さん自身だった。

「現実には理不尽で非情だと思わぬか？」

「……うん。本当に、本当に非情だよ……」

俺は彼女に背を向けたまま、答えた。

「なあ、葛西殿。お主も創作物を作る者ならば感じないか？ 所詮我々が作る物語など、ご都合主義に溢れた妄想の産物にすぎんのだと。我々が作る“グッドエンド”など、創作物の中の結末でしかないのだ。現実はそのものよりもよほど悲惨で、救いようがない」

「……………」

何も答えられなかった。

彼女の言う通りだった。

俺が描いてきた作品なんか、結局夢物語に過ぎない。

現実を決してそんなに甘くはないんだ。

「…そんなこと、分かっていた。いや、分かっていたからこそ、吾輩は創作作品で人々に希望を与えたかった。こういうことが、現実でも起こるかもしれないと示すことで、人々に希望を与えたかった。……が、その顛末がこれだ。これ以上ないくらい惨たらしい現実を見せつけられた。吾輩がやっていたことに意味はあるのだろうか……？」

「……ダメだよ、そんなこと言っちゃ」

俺にできることといえば、精一杯の言葉で彼女を慰めることだけだ。

「現実が悲惨だからこそ、より一層希望を強く描かなくちゃダメなんだよ……！ 津川さんならきつとそう言うよ！」

「……現実を知り、現実には絶望し、それでもなお現実に抗うか。さすがは“超高校級の脚本家”よ。強いな」

「強くないかないよ。でも……モノパンダは言っていたじゃないか。『お前たちの絶望が目的だ』ってさ……。ここで絶望したらあいつに負けたことになるんだよ。それじゃあ……本当に津川さんと土門君の死は無駄になっちゃうんだよ。だから、せめてそれだけは……」

おかしいな。

さつきまで、俺は後悔しかしていなかったはずなのに。

なんでこんな言葉が出てくるんだろう？

さっきの俺は、安藤さんと同じようなことしか考えられなかったの
に。

なんでこんなきれいごとを平気な顔をして言えるんだ？

………違う、違う違う!!

これは俺の本心だ。

紛うことなき本心なんだ。

きれいごとで何が悪い。

後悔も本音、ならばこの感情だって本音でいいじゃないか。

人の感情は複雑なんだ。

正も負も、両方抱え込んでいたっていいんだ。

そう。

二人の死が無駄になってしまうこと。

それだけは、絶対に阻止したい。

死んでしまった二人にはもう、俺達がどうなっているかなんて分
らないのだけれど、それでも俺は二人の意思を汲んであげたい。

俺にはもう、それぐらいしか二人のためにやってあげられることは
ないのだから。

後ろから、安藤さんは俺の手を握ってきた。

「気を遣わせてすまん…。だが………ありがとう」

そして、俺の腕をつかんで、その袖で涙をぐいぐいと拭いた。

「吾輩は……吾輩はもう負けはせぬ！ うむ！ 負けはせぬぞ！ そ
れが二人の望んだことなのならば！」

安藤さんは元気にそう言い放って俺の前に進み出た。

「その……言いつらいのだが、朝からずっとここにいたせいで、腹が
減ってしまったな……」

少し頬を赤らめながら安藤さんは呟いた。

そんなに長い間にいたのか…。

そりゃあ、お腹が減るのも当然だろうな。

「分かった。ちようどお昼ごろだし、みんなで昼食食べようよ」

こくり、と安藤さんが頷いたのを確認し、俺は彼女の腕を引っ張ってトラッシュルームを後にした。

だけでも。

トラッシュルームを出る瞬間、彼女はシャッターに向かって、確かに言った。

「さよなら、リャン様」

そして、その後は何も言わず、食堂まで歩いていった。



そんなこんなで、結局お通夜ムードの抜けきらない一日になってしまった。

でも、それも無理もないことだ。

だって、あの恐ろしい事件が起きたのは、まだ昨日のことなんだから。

みんな参ってしまったって仕方ないんだ。

起こってしまったことはもう、元には戻らない。

まだ生きている俺達は、ここで起こったすべてのことを背負って、残りの人生を生きなくてはならない。

それは果てしなく辛いことだ。

でも、そうせざるを得ない。

逃げ道はない。

だから、追いつまれた俺達は、死に物狂いで現実に突き進んで……
希望を、掴んでやる。



……なんてこと、よくもまあいけしやあと思っていられたもんだよ。

だってさ、このコロシアイ生活は。

大なる絶望の象徴は。

まだほんの序章に過ぎないというのに、ね？

chapter 2 (非) 日常編②



この場所へ連れてこられて、今日で七日目。
ついに、一週間経ったんだ。
先週。

つい先週までは、俺達は互いの顔すら知らなくて。
殺し合うなんて夢にも思っていなかった。
この悪夢は、いつになったら終わるのだろうか？

……いや。

不安になんかなっている暇はない。
いつ終わるかじゃなく、俺達が終わらせてやるんだ。
亡くなった二人のためにも。



今日の朝食は、幾分か昨日よりはみんなが調子を取り戻してくれた
ようだった。

安藤さんも伊丹さんもちゃんと来てたし。
俺としては嬉しい限りだ。

「葛西、ちよつといいか？」

朝食後、俺を呼んだのは釜利谷君だった。

「? どうしたの？」

「あく、なんつーか……。はあく、俺は乗り気じゃねえんだが……」
釜利谷君はボサボサの頭をかきむしりながらぼやく。

「男子全員でプール大会するみたいだからよ。オメーにも言つとこう
と思つて」

「…え? プール大会?」

知らなかったぞ。

いつの間にかそんな話になったんだ。

「おやおや、葛西さんは知らなかったのですか？」

背後から陽気に声をかけてきたのは、入間君だった。

「一昨日は悲しいこともありましたが……。気分を一転するためにも、みんなで体を動かそうと思いましたが……。更衣室には全員分の水着も置いてありましたし、ちょうどいいかと思いましたが……」

……なにも、運動じゃなくてもいいと思うんだけどな……。

「はっはっは！ 恐れながら拙者がインドア派ではないことを証明する時が来たようですね!!」

そう言っただけで眼鏡に指をかける丹沢君。

「コミケにイベント、同好会！ オタクとは常に社会の荒波にのまれ続ける存在！ 体力なくしてはやっていけませんともー!!」

かなり意気込んでいるようだ。

待てよ、彼になら勝てるかもしれない。

いける。勝つてやる。

意地でも女子にビリの姿を晒すわけにはいかない。

なんだか、ヘンなことになってきたな……。

そう思いながら食堂を後にすると。

「……あ、前木君」

廊下を歩く前木君を見つけた。

「……プール大会の話、聞いたか？」

「う、うん。前木君も参加するよね？」

しない、と言ったらどうしようと思っただけだ。

「ああ、するよ。心配すんな」

いつもの陽気な笑みを浮かべてそう答えた。

「彼」だったら……こういうイベントには絶対参加したがつただろうね」

スポーツと聞いて陽気にはしゃぐ彼の姿が脳裏に浮かぶ。

言っただけのことだったのかもしれないけど、口について本音

が出てしまっていた。

「ああ？ お前知らねーのか？ あいつカナヅチなんだぞ？ ガキの頃に溺れたのがトラウマなんだとよ」

思った以上に明るい口調で前木君はそう答えた。

「え、あ、そうだったんだ……」

「ははは！ お前が思ってるほどあいつは何でもできるやつじゃねーよ！ あいつだって普通の人間なんだよ！ あいつ自身がそう言うってたろ？」

『俺だって建築業なら自信はあるが、それ以外のことはてんで常人並みだ！ 他の連中だって自分の分野以外じゃあみんな凡人なんだぜ？』

先週、土門君の部屋を訪れた時に聞いた話が脳裏をよぎった。

「だからよ、俺は……あいつの遺志ってモンを継いでやるんだ！ 俺みたいな人間でも継げるって分かったからな！」

前木君は胸をドンと叩いて高らかにそう言った。

「もう俺のことは心配すんなよ！ 俺は土門で、土門は俺だ！ 苦しいこと嬉しいこと悲しいこと、ぜんぶ俺が土門の分まで背負って生きてやるさ!!」

そう宣言する彼の顔はとても凛々しくて、まさに“超高校級”だった。

「ほらよ、もうこの話は終わり！ 俺の華麗な泳ぎを見せてやんよ！」

そう言って前木君は更衣室へと駆け出していった。

彼の後ろ姿はともまぶしかった。

更衣室に入ると。

「…リュウ君!？」

そこには、早くも海パン一枚になり、指一本で腕立て伏せをするリュウ君がいた。

特徴的な色付き眼鏡は色付きゴーグルになり、競泳用帽子まで被る徹底ぶりである。

「おう……お前たちも早く体を慣らしておいた方がいいぞ。競泳開始

まで残り40分だ」

思いつきり〝競泳〟って言っちゃってるし。

時間まで気にするなんて、どこまで本気なんだ…？

「つしやあああああああ!! 俺はトビウオになってやらあああああ
あ!!」

そう叫び、飛び跳ねるように勢いよく服を脱ぐ前木君。

そして、相変わらず更衣室の隅で考える人になっている夢郷君。

「人はなぜ泳ぐのか…？ 人間が魚の真似をするなんてくだらないと
は思わないかい…？」

「い、いや…そんなこと俺に言われても…」

彼は競技に参加してくれるのかな？

しばらくすると、男子全員が更衣室に集まった。

俺もしぶしぶ水着に着替えた。

「いやあ、こうしてみると皆さん立派なお身体で羨ましい限りですよ
！」

小学生のようにダボダボの水着を履いた入間君が声を上げる。

そういう言い方されると、俺みたいな細見が恥ずかしくなるじやな
いか。

みんな揃って腹筋割れてるし、腕も太いし…。 釜利谷君だつて

理系のくせに意外と肉付きはいいんだよな。

「何を申しまするか！ 水泳はウエイトリフティングとはわけが違う
のです！ 筋肉が全てを決めると思ったら大違いですぞ!!」

そう反論する丹沢君。

今のところ、彼が俺の一番の安心材料だ。

何しろ、見ていて心配になるくらい体がヒョロヒョロなのだ。

入間君みたいな水着履いてるし、小学生にしか見えないよ。

「人間がどこまで魚に近づけるのか、興味が湧いた。悪いけど勝たせ
てもらおうよ」

さつきまで下らないと言っていたのに今はやる気満々の夢郷君。

「言つとくがなあ、勝つのは俺だぞ！ 後で言い訳するのがメンドク
セーからな！」

同じく乗り気じゃなかったはずなのにいつの間にかやる気全開の釜利谷君。

「はっはっは、愚民どもが……このわたくしに勝てるどでも?!!」

眼鏡に手をかけてポーズをとり、おかしな方向にキャラを定め始めた入間君。

まさか……これからずっとその路線で行くつもりじゃないよね?

コンコン、と更衣室の扉がノックされる。

「男子のみなさーん! 準備はいいですか?」

扉の向こうから山村さんの声が聞こえてくる。

「よし、始めんぞ!!」

前木君の声に続くようにして、俺達はプールに出た。

昨日はここまで来なかったため、プールを見るのは初めてだ。

一言でいうと、とても広い。

大ホールと変わらないんじゃないかと思うくらい広い。

周囲にはギャラリイのようなものもあって、本当にここで大会なんかが開けそうだ。

「はい! それじゃあ皆さん、一列に並んでくださいね! 小清水さ

んの笛でスタートしますから!」

みんなを引率する山村さんも、競泳水着になって……

……え?

「な、なんで君も水着になってるの?」

「なんでって、私も参戦するからに決まってるじゃないですか!」

「ええええええ!!」

そんな馬鹿な!?

「山村殿!! これは男同士の真剣勝負ですぞ!! 女性は観客席に戻って」

「うるせえええええええッ!!」

「ひええっ!」

突如、赤いオーラを暴発させた山村さんの叫びが丹沢君を委縮させる。

なんだか……出会った頃よりも沸点低くなってないだろうか?

「オレが野郎共に負けるとでも思ってたんのかあ!? 見くびってたんじゃないぞ!! てめえらなんざ十メートル差でぶっ潰してやんよ!!」

指をバキバキと鳴らしながら山村さんは邪悪な笑みを浮かべる。

「ふははは、愚民が、ほざいていろ!! 優勝を飾るこの私の前にひれ伏す姿が目には浮かぶ!」

新調したキャラがぶれない入間君。

「メントクセー前置きは無しだ!! ひねりつぶしてやらあ!」

「僕の思考をじゃませはしない…。僕が勝つ」

「オタクの底力、見せてやりますともー!」

思い思いの言葉で勝利への抱負を述べる男子一同。

そして、そんな一同をよそに一人深呼吸するリュウ君。

みんな優勝に向けて息巻いているが、現状、間違いなく優勝候補なのは彼だろう。

「はい、それじゃあ全員、位置について!」

全員が入水すると、笛を持った小清水さんが号令をかける。

「みんなガンバー!」

「大和撫子の本気、吾輩に見せてみよ!」

「…頑張つて」

ギャララーから女子一同の声が飛ぶ。

御堂さん以外の女子一同もそこに集まって見ているようだ。

ますます負けるわけにはいかないな……。

「よー!ーい!」

緊張する。

泳ぐのなんて一年ぶりかな。

クロール……覚えてるかな?

“ピー——ッ!!”

笛の音が鳴る。

俺は一気に背後の壁を蹴り、水面に潜り込んだ。

ぐつと力の限り水を後ろにかき、ぱつと顔を横に出す。

あれ!?

水泳ってこんなに疲れるものだったっけ!?

まずい、もうすでにちよつと苦しいぞ…!

一瞬、顔を上げた隙にみんなの進行具合を見る。

やはりトツプを独走しているのはリュウ君。

そこに山村さんが並ぶ。…やはりあの二人は頭一つ抜けている。

その次に続いているのは…三人くらい並んでいるな。

俺は…やはり置いていかれてる。

でも、そんなことは問題じゃない。

俺が競るべき相手は丹沢君。

彼に勝てれば、俺は満足……って!?

俺のちよつと前を進むあのマツシユルーム頭は!?

間違いない、彼だ!

くそ、負けてたまるかー!!

俺は必死に水をかいた。

訳も分からないまま、とにかく必死に。

ようやく、ゴールに手がついた。

ああ、終わったんだ。

苦しかったけど、俺はやりきった。

さあ、結果は…

「葛西君!! 50mよ、50m!!」

折り返しコースだったとは。

結果発表。

1位…山村さん。

2位…釜利谷君。

3位…リュウ君。

4位…前木君。

5位…夢郷君。

6位…入間君。

7位…丹沢君。

8位…俺。ビリ。

リユウ君も俺と同じミスをしたらしい。

山村さんが言うには初めの方に50m競争だと説明していたらしいが…：聞いてなかったよ。

ていうか、唯一参加した女子が一位だなんてシャレにもならないよ。恥ずかしくて死にそうだ。

「お疲れ様」

プールサイドでうなだれる俺にそう言ってタオルを渡してきたのは小清水さんだった。

「元氣だして。たかがプールの競争を気にすることないじゃない」

うるさい、と言わんばかりに俺はタオルを引つ摺んだ。

気恥ずかしさと悔しきで半分いじけていた。

そんな俺の背中に、急に暖かい感触が広がった。

「うわっ!？」

小清水さんが両手を俺の背中に置いたのだ。

「ふふ、あつたかいでしょ？」

いきなりそんなことをされたのでどう反応していいのかわからな
い。

「今朝ゴキブリさんに乗つけた手だけどね」

てへ、と笑いながら彼女が発した言葉は恐るべきものだった。

「ええええええええええ!!？」

思わず飛びのいてしまった!。当然の反応だよね？

「だって、可愛かったからつい……」

ゴキブリが可愛いだって!?

…いや、俺は大事なことを失念していた。

彼女は“超高校級の昆虫学者”。

いままで全然そんな感じ出してなかったけど、彼女はこの世に存在
するどの女子高生よりも虫が好きなんだ。

「大丈夫よ、流石に手はよく洗ってあるから」

そう言つて彼女は余計にベタベタと俺の背中に触つてきた。

「わわっ!! ちよ、やめてよー!」

洗つてるとか、そういう問題じゃないよ!

俺は彼女から逃げるように更衣室に駆け込んだ。

「葛西でめえ、ぶつちぎりのビリのくせに小清水とイチヤつくだあ身の程をわきまえてねえみてえだな」

更衣室に入ると早速釜利谷君に凄まれた。

「それは違うよ!!」

自然と声が出ていた。

俺はイチヤついていたつもりはない。むしろ被害者だよ。

「釜利谷君、あまり冷やかしては失礼だよ。男女の美しい関係に水を差すようなことはしないでおこうじゃないか」

いや、夢郷君……それってますます冷かしてるよね……?

ていうか、まず君は服を着てくれよ!

いくら更衣室だからって、素っ裸で考え事に興じる必要はないだろ

!?

これじゃあまるつきりローマの石像だよ!

「はあ……」

着替えを終え、半ば追い出されるように更衣室を後にした俺は大きなため息をついた。

女子には恥ずかしいところを見られたし、男子には変な勘違いされるし。

ほんと、ついてないなあ。

「おや……葛西さん」

廊下には、俺以上にうなだれる入間君がとぼとぼと歩いていた。

「い、入間君……どうしたの……?」

「どうしたもこうしたもありますか! 体力には自信があつたのに、まさかビリから三番目だなんて。この気持ち、若者言葉で『萎え萎え』とでも言うのでしょうか……」

なんだよそれ。俺へのあてつけか。

「人間殿はまだ良いではありませんか！ 拙者などビリから二番目ですからな！ 恥ずかしくて顔から火が出てしまいそうですぞ！」
すかさず丹沢君が割り込んでくる。

くそつ、やっぱり二人とも遠まわしに俺を馬鹿にしているんだな!!
「おやおや、どうしたのですか葛西殿、涙目になつて？」

うるさいよ!! 分かつてるくせに!!

「いや…ほら、葛西さんはルールを勘違いしておられましたし…その、実力じゃないですよ。ええ」

それでフオローのつもりかよ。ちくしょう!!

俺は精一杯の目力を込めて二人を睨んでやった。

「おや、三人集まってどうしたんだい？ 暇なら僕の思考に付き合ってもらいたいんだが」

遅れて出てきた夢郷君が声をかけてきた。

「体を動かしたおかげで頭が冴えてきた。そこで一つの議題を思いついたんだ。もしよければみんなで考えてみないか？」

「お、いいですねえ!! 是非ともお聞かせ願いたいです!!」

「拙者も!! 拙者もお付き合いたしますぞ!!」

俺の怨嗟の視線から逃れるように二人は彼に同調する。

ふん、二人がそういうつもりなら俺だって。

「俺も！ 俺にもその話聞かせて！」

げげつ、という顔をしながらも二人が文句を言うことはなかった。

それにしても、改まって夢郷君が聞きたいことつて何だろう？

この前みたいに、『我々がなぜいるのか』みたいなよく分からないことを聞かれるんじゃないだろうか？

そうこうしているうちに夢郷君が先導してくれた先は、休憩室だった。

「で？ お話とは何ですか？」

ソファアに腰かけながら人間君が尋ねる。

「ああ…。先ほどのプール大会、山村君も参加していたのだが……」
顎に手を当てて考え事をしながら、彼は語り始める。

「あの水着姿、非常に興奮を覚えはしなかったか？」

その時の俺は、文字通り目を丸くしていた。

「はいっ、興奮しました!! じゃなくて!!」

丹沢君のノリツツコミが飛ぶ。

「そんなことを言うために呼び出したのですか!？」

「そんなこと……? バカにしないでもらいたいな。これは僕のれっきとした議題だ。」男という生き物は、なぜ女性の肉体美に魅せられてしまうのか……。これは僕が長年答えを追い求めている議題の一つなんだよ」

「……………」

「それが生殖活動による子孫繁栄のために必要であり、生物学的にプログラミングされたことであるということは重々承知している。しかし、なぜ肉体美……すなわち胸、脚、腰のラインなどに欲求の的が集中するのか? なぜ、その部位でなくてはならないのか? ……これは非常に考えがいのある議題だ」

淡々と、大真面目な顔で語る夢郷君。

「は、はあ……そういうものなんじゃないですか……? 男って……」

スケベな話題ならば男子の最前線を行くはずであった人間君と丹沢君もこれには動揺を隠しきれないようだった。

「“そういうもの”……? そんな言葉で片づけてしまった方がいいのかい……? 僕は納得できない。男子はなぜ女性の肉体に惹かれるのか、その明確な答えを得るまでは僕は考えることをやめたくはないんだ」

「うーむ……。しかしお気持ちは分かりますぞ。拙者も仕事柄、美しい肢体や豊満な肉体を目にすることは多々あります。なぜ美しい肉体はあそこまで人々の心を魅了するのか、気になりますなあ」

丹沢君が頷きながら呟く。

「この答えを知る方法は一つしかない……。葛西君に頼みがある」

「え? ……なに?」

「小清水君をここに連れてきてもらいたい」

「え、ええええ!?!」

「ゆ、夢郷君……そんなことをして何をするつもりですか……？」

ふん、と夢郷君は笑った。

「決まっているじゃないか。彼女に裸になってもらうのさ」

「!!!」

その空間を、緊張感が支配した。

「この謎を解明するには、やはり女性の肉体を十分に理解する必要がある。本物の肉体を間近でじっくり観察する必要があると僕は思っている」

「なっ、いけません！ 拙者ですら未だヌードの題材を制作したことはないのですぞ!!」

「早まってはいけません!! いきなり最終プロセスに駒を進めるなど、愚の骨頂ですよ!!」

「黙ってくれ」

静かにそう言った彼の顔は、これ以上ないくらい真剣で重々しかった。

「これは“女性”という名の真理を迫及するために必要なことなんだ。僕はやり遂げる。見届ける勇気がないのなら席を外してもらおうか」

「……………」

静寂が部屋の中を支配する。

「知っているかい？ 小清水君はここにいるメンバーの中で最も豊富な肉体をしている。つまり、最も女性らしい肉体をしているということだ。これ以上にうってつけの相手はいないだろう？」

「そ、そこまで見ていたとは……。我ながら感服するばかりでござりまする」

「言っておくが、これは性欲に基づく欲求ではない。あくまでも知識欲が行動の原因だ。三人とも、絶対にそれを忘れないでほしい」

「そ、そう言われましても……いやあ：胸のバクバクが止まらないですわ……」

「さあ、そういうわけで葛西君。小清水君を呼んできてくれ。彼女は君に懇意にしているのを僕は確認している。君ならできるはずだ」

『できるわけないだろーっ!!!』

頭が真っ白になっていた。だつて。

そんなこと言われちゃうと想像しちゃうんだもん。

小清水さんのあられもない姿を……。

ああ、ダメだダメだ!! 何考えてるんだよ俺は!!

そう叫んだ俺は一目散に廊下へと駆け出した。

「……残念だ。葛西君は少々子供すぎる」

再び静けさに包まれた休憩室で、夢郷君は感慨深そうに呟くのだつた。

顔を真っ赤にしながら廊下を駆け抜けると、曲がり角には……

「あら、葛西君じゃない! そんなに慌ててどうしたの?」

「うわああああああああっ!!!」

うわああああああああっ!!!

「え? え? ちよ、葛西君!」

もう何も考えられず、一目散にエレベーターへと乗り込み、訳も分からないままボタンを連打していた。

ため息とともに俺はホール階の短い廊下に身を投げ出した。

「どうしよう……」

それが本音だつた。

もう小清水さんをまともな目で見られないよ……。

夢郷君も、ずっと硬派だと思っていたのに、まさかあんな一面があるなんて。

本当に分からないな……“超高校級”の人たちは。

気分を落ち着かせて立ち上がった俺は、ふとあることを思い出した。

「トレーニングルーム……解放されたんだっけ」

裁判を乗り切った褒美として、エリアを拡張したと語るモノパンダ。

昨日のリユウ君の話によると、トレーニングルームもその適用例らしい。

俺は静かにトレーニングルームの扉を開いた。

すると、そこには……………

「二百、五十、三ツ!! 二百、五十…四ツ!!」

左手の指二本で鉄棒にぶら下がり、懸垂するリユウ君がいた。

「……………」

上半身裸で汗を流す彼の迫力に気圧され、かける言葉もないまま俺は茫然と彼を見つめていた。

「…ん? 葛西か、こんなところに来るとは珍しいな」

やがて彼の方が俺に気付き、棒から降りて部屋の隅にあるソファ―に腰かけた。

「生憎だが、今は話したい気分じゃない。見ての通り、徹底的に鍛えねば気が済まない気分なのだ」

そう言いながらもリユウ君は懸垂の動きを止めはしない。

「…なんで?」

「なんで、だと!? 葛西、お前はもうあのプールでの屈辱を忘れたのか!! 飛び入り参加の山村に一位の栄光を渡すなど、プライドを踏みにじられたも同然だ!!」

リユウ君はすごい形相でこちらを睨みながら声を荒げた。

「で、でも…………俺と君は50m競争だったのを知らなくて…………」

「言い訳など許されるものか!! 結果が全てなのだ…………! くそつ、俺は絶対に再戦するぞ!! 次は負けん!」

全身を真っ赤に紅潮させながらリユウ君は懸垂のスピードを早めた。

なんていうか…………意外だな。

彼にもこんな子供っぽい一面があるなんて。

「葛西! お前はビリだっただろう! 悔しくはないのか!」

え、そんなこと言われたって…………

悔しいには悔しいけどさ。

そこまで一生懸命にはなれないよ。

どうせ負けるの分かってたし。

「…ふん、お前がそれでいいのなら俺は何も言わん。だが俺は納得せんぞ！ 俺は負けられないのだ…誰にもな!!」

どもる俺の姿を見かねて、彼はそう言い放った。

…。

なんだから、間接的にリュウ君にまでビリを馬鹿にされた気分だよ

俺が言葉に困っていると、背後からドアの開く音がした。

「おつ、葛西とリュウじゃーん。トレーニング？ カッコいいねー」

「あ、亞桐さん…と…伊丹さん？」

入ってきたのは意外な組み合わせの二人だった。

亞桐さんはいつも通りの格好だが、伊丹さんは黒いジャージを上下着ている。

「みんなが泳いでるの見てたらウチらも体動かしたくなっちゃってさー。ゆきみんもそういう気分っぽいから一緒に来たの！ ジャージは倉庫に置いてあったしねー」

いつの間にか呼称も「ゆきみちゃん」から「ゆきみん」に昇格。

初日のいざごぎはもう忘れてるみたいだな…。まあいいけど。

亞桐さんの言葉に呼応するように伊丹さんは小さく頷いた。

「あ、でもその前にちよつといい？」

亞桐さんは懸垂するリュウ君の前に駆け寄り、そして…

「…ごめんさいつ!!」

大きく頭を下げ、謝ったのだ。

これには流石のリュウ君も動きを止めた。

「…裁判の時、ウチさ…アンタを犯人扱いしちゃったじゃん…？ しかも、『何人も人殺したみたい』なんて、酷いこと言っちゃって…まだ謝ってなかったから！ ほんとごめん！」

そう言えば、裁判の時そんなこと言ってたっけ。

…いや、俺の脳裏に浮かんだのはその言葉じゃない。

昨日、リュウ君との会話で発せられた言葉。

『男も女も、大人も子供も、数えきれないほど見てきたさ』

幾多の死を目の当たりにしたと断じた彼の言葉。

それは、亞桐さんが裁判の時に発した悪口が必ずしも嘘っぱちではない可能性があることを示唆している。

…いや…でも。

彼はそんな人じゃない…はずだ。

初日に命懸けで山村さんを助けてくれたし、捜査の時だって懸命に協力してくれた。

そんな彼が人殺しだなんて…あり得ないよ。

「そんなことか。俺は気にしていない。もう忘れろ」

ぶつきらぼうにそう答えてリュウ君はトレーニングを再開した。

「…そ、そっか。ならいいんだけどさ。じゃ、まずは体操から始めよう！」

言うが早いのか、亞桐さんは足を180度開いてストンと床に腰を落とした。

「うわ…すごいな………」

流石はダンサーだ。

亞桐さんはそのまま上半身を後ろ向きに倒し、後ろ側に伸ばした足の上に乗せた。

「ふう……やっぱこのポーズ落ち着くわ」

その体勢が落ち着くなんて……本当にダンスの申し子なんだな。

すると、それを見ていた伊丹さんが亞桐さんの横に並び、見よう見まねでゆつくりと足を開き始める。

「……こう？」

「おー、開けてるじゃん」

少し顔を歪めながらも、伊丹さんの両足も完全に開ききった。

「ゆきみんも体柔らかいんだねー。葛西もやってみなよー」

「え、俺!？」

できる気など全くしなかったが、とりあえず二人に並んで足を開いてみる。

「……いっ。いっ。いっ。いっ。いっ!!」

腰は重力に従って墜ちようとする。

でも足はもう開かない!

痛い!

「いて、いて、いて、わわっ!」

バランスを崩した俺の体は伊丹さんめがけて倒れこんでしまった。

「……ちよつと」

ふと気づくと、俺の上半身と伊丹さんの上半身はぶつかってぴったりにくっついていてた。

「邪魔なんだけど。どいてちようだい」

「あ、ご、ごめんっ!」

俺は慌てて彼女から離れる。

「……だめ。体は曲がらないみたい」

俺をどかすと彼女は何事もなかったかのように体操を再開する。

「……ま、まあ始めのうちにはしょうがないよ! じゃ、次は前後の足を入れ替えてみよ!」

結局、ここでも俺が恥ずかしい思いをしただけだ。

俺達三人は亞桐さんの主導のもと、いろいろな体操を行った。

体の節々を痛めた気がするけど、部屋でもできそうな体操をたくさん教わったからあとでやってみよう。

「じゃ、体操はこんぐらいで。ごめん、一曲だけどうしても踊りたい気分だから、ちよつと待ってて」

そう言うのと亞桐さんは懐から取り出したイヤホンを耳に装着し、体でリズムを刻み始める。

次の瞬間、彼女の体は激しく動き出した。

ロボットのよう^に機械的な動き、スタントマンのよう^にアクロバティックな動作、バレリーナのよう^に滑らかな仕草。

すべてが込められた芸術的ともいえる作品が眼前に広がる。

俺も、俺の横で一息ついていていた伊丹さんも、奥でトレーニングにいそしんでいたはずのリュウ君でさえも、吸い込まれるようにそのダンスに視線を向けていた。

数分という時間が一瞬のようだった。

「ふう。ごめんね、待たせて。気分も盛り上がったきたし、なにしようか?」

ダンスを終えてイヤホンを外した亞桐さんの言葉を受けて、始めて俺は我に返った。

それほどまでに彼女のダンスに魅了されてしまっていた。

「…すごいね」

柔らかな笑顔で、伊丹さんが呟いた。

「ん?」

「あなたのダンス、見てて飽きない。私、ダンスはあまり見たことなかったけど、あなたを見て興味が湧いてきた。もしよければ教わりたいのだけど、お願いできる?」

亞桐さんは一瞬驚いたような表情を浮かべたが、すぐに満面の笑みになって「もちろん!! いつでもオツケーだよ!!」と大声で答えた。

「えっとね、まず基礎連から始めよっか。アイソレって知ってる?」

アイソレーション」

亞桐さんが興奮した面持ちで伊丹さんにダンス講座を語りだし、伊丹さんはそれを真剣に聞いている。

おかげで俺はちよつと爪弾きにされた気分……。いや二人は悪くないのだけれど。

かといって相変わらず無言でトレーニングに励むリュウ君にも話しかけづらいんだよなー。

そう思つてふと部屋内を見回すと、俺が入ってきたのとは違うもう一つの出入り口の存在に気付いた。

近づいてそつと開けてみると、その先は大ホールだった。

なるほど、廊下を経由しなくても大ホールに直接行けるようになったのか。

「……あ」

ホールを覗き込んだ俺は、その中心に座り込む人物を目撃した。

こちらに背を向ける格好で床に座り込むその人は、白い道着のような物を着ていた。

茶髪の一つ結びといい、山村さんで間違いないだろう。

じつと胡坐の姿勢で座り込み、精神を研いでいるようだった。

数秒後、彼女はふと立ち上がり……

流れるような所作で構えをとった。

その動きは間違いなく、初日、モノパンダを打ちのめした時の動きだった。

「そして、一呼吸置き……」

シュツ！

…何の音だろうか？

いや、熟考するまでもなく答えは導き出された。

彼女が“拳を突き出した音”、それに間違いない。

斜め後ろから彼女を見ているので表情などはうかがい知れないが、一瞬の間にそこにはなかったはずの腕が正面の空間に突き出されているのを俺はしかと確認した。

彼女は一息つき、腕をもとに戻すと。

ビュツ！

今度は蹴りだ。

腰を深く落としたはずの彼女の体勢は一瞬の残像を残し、次の瞬間には左足を軸にして右足を空中に投げ出していた。

一瞬でその状態に移行したにもかかわらず、彼女の体はまったくぶれておらず、片足でぴったりと静止している。

俺はいつの間にかあんぐりと口を開けて彼女の稽古風景に見とれていた。

「かきーい！ 何見てんの？」

ドアの隙間から覗き込む俺の上に乗っかるように、亞桐さんもホルを覗き込んだ。

「あ、巴ちゃんだ」

完全に俺の頭の上に顎を乗つけて見入っている。重たいよ…。
「私も見たい」

間髪を入れず伊丹さんも亞桐さんの上に乗ってきた。
うわ重たい！ 限界だよ！

「セイヤツ!!」

大きな掛け声とともに、山村さんは本格的な稽古を開始した。

「ヤ!! セイツ!!」

掛け声と同時にヒュヒュヒュヒュ、と連続で拳が空を切る音はつきりと聞こえる。

「カツコいい…ウチもやってみようかな」

「素人にあんな動きは無理だと思う。あの人だからできるのよ」

必死で倒れるのをこらえる俺をよそに話し込む二人。

と、次の瞬間、俺にかかる負担がさらに大きくなったのを感じた。

「なんだお前たち…こんなところに集まって何を見ている?」

その声…リュウ君まで乗ってきたのか。

「うつ、ぐうううううう…!!」

鼻息とうめき声を交えながら俺は懸命に耐える。

「あなた、汗臭い。離れて」

伊丹さんが上のリュウ君に嫌そうな目を向ける。

「ぬ、山村か…。おのれ…プールでの雪辱、必ずや果たすと誓おう…!!」

伊丹さんの言葉など聞こえていないようで、リュウ君は重々しい声で呟く。

「ちよ、アンタら重いんだけど！ だいぶキツイよ!」

亞桐さんが不満げに漏らす。

あなたは忘れているようですが、あなたの下に俺がいます。

足がプルプルと震える。

これ以上は、もう…

「ダメだああああああつ!!」

「きやあああ!」

ドタドタ、と積み木のように俺達は床に崩れ落ちた。

「ちよ、葛西、大丈夫!？」

朦朧とする意識の中で聞こえたのは、亞桐さんの慈悲の言葉だった。

「あ、うくん、大丈夫らよ……」

床に倒れこんだままの体勢で俺は答えた。

全身の筋肉が悲鳴を上げている。あと数分は起き上がれそうにない。

「ほら、あなたが乗つかるから葛西君が倒れたじゃない」

伊丹さんがムスツとしてリュウ君に言い寄っているのが聞こえた。

いや、君も立派な原因だからね……?

「む、むう……すまん、葛西。立てるか?」

リュウ君は頭をかきながら俺に手を差し伸べてきた。

「いや……もうしばらくこうしていたい……」

俺は正直に答えた。

「あの、皆さん……どうなされました?」

目の前から聞こえてきた声は。

「あ、巴ちゃん……その……。ごめんね。練習してたの、ちよつと気になつてさ。ちよつとだけ見てたんだ」

亞桐さんが俺に代わって事情を説明してくれた。

「あ、そ、そうなんですか……。いや、私は構わないですけど……。ちよつとお恥ずかしいところをお見せしてしまったかなと……」

山村さんは恥ずかしそうに頬を赤らめながら言った。

「なんで? ふつーにカツコよかつたじゃん!」

「いえいえ! 軸がぶれてましたし、打ちも浅くて……。とてもとても公式試合で通じるものじゃないですよ。ちよつとでも稽古を休むとすぐこれです……」

「そういうものなの……? 私には何がダメなのかさっぱり分からな
い」

伊丹さんの言葉に同意する。

これがプロと素人の差なんだな……。

起き上がりながら俺はそんなことを考えていた。

「うーん、でもやっぱり一番腕が落ちた理由は、やはり〃組み手の相手がいないこと〃なんですよね」

山村さんは腕を組んでそうぼやく。

「でも、いま思いつきました！ リユウ君なら私と同等に、いえ、それ以上に戦えると思うんです!! 完全に私のワガママですが、あなたに良心があるならばどうか付き合ってはくれないでしょうか！ お願いします!」

リユウ君は少し驚いたような表情を浮かべた。

「…無理だ。俺は格闘技はいくつか習ったが、空手の型など知らん。それに……」

いつしか、彼の体は黒いオーラを帯び始める。

「プールでの雪辱を晴らすまでは、絶対にお前を鍛えるような真似などしてやらん！ 絶対にだ!」

山村さんを指さし、高らかに宣言した。

「ちよつと根に持ちすぎじゃなーい？ そんなに悔しかったワケ?」

あきれ果てたように亞桐さんが呟く。

「黙れ! 女には理解されずともよい。これは俺自身の問題だ! … トレーニングに戻る」

オーラを纏ったままリユウ君はずかずかとトレーニングルームへと歩を進めていった。

…いや、男の俺でも理解できかねるよ。

「よく分かんない人。でも、それが彼のいいところなのかもしれない」
伊丹さんが小さく呟く。

俺は昨日までのやり取りで彼を少し勘違いしていた。

いかに凄絶な環境を渡り歩いてきた強者であろうとも、彼は一人の人間だ。

普通に感情があつて、負ければ悔しがる普通の男性なんだ。

それでも、昨日の発言は少し気になるけど…。

でも、急ぐ必要はない。

時間をかけてでも、彼のことを知っていこう。

きつと、分かり合えるはずだ。

……でも。

「油断しちゃダメ」

俺にだけ聞こえるくらいの、小さな声で伊丹さんは囁いてきた。

「彼は、殺そうと思えば全員を殺せる。そんな人なのよ。モノパンダでさえ例外ではないの……。気を付けて」

なんともいえぬ複雑な感情が胸の内に渦巻く。

「……ごめんなさい。悪い癖ね。あくまで可能性の話だから、気にしないで」

俺の胸中を察した彼女は、バツが悪そうに付け加えた。

「さ、莉緒。もつとダンスの練習したいんだけど。どうする?」

「あ、じゃあ巴ちゃん。ここ借りてもいい? 巴ちゃんの練習の邪魔しないようにするからさ!」

「掛け声が少々うるさいと思いますが、それでよければ全然かまいませんよ!」

周りの会話など上の空で俺は突っ立っていた。

「葛西、葛西つたら!」

亞桐さんの声で俺は我に返った。

「あんたはどうするの? 一緒に練習する?」

「あ、いや、今日は疲れちゃったから休もうかな……。じゃあ、また!」

俺はそう言っただけで廊下へと駆け出した。

「はいよー! また夕食の時にね!」

……と、まあ、いろんなことがあった一日だった。

プール大会があつて、夢郷君の謎の持論を聞かされて、トレーニングルームと大ホールでいろいろあつて。

いろんな人のいろんな一面を見られた貴重な一日だったな。

こんな日が永遠に続いてくれればな……。

この楽しい日々が。

そう思った俺は、つい数日前を思い出した。

そうだ。

先週、まだ俺達が誰も欠けていなかった日々。

あの時も、同じことを考えていた。

でも、悲劇は起きた。

俺の願いなど、無かったかのように。

それが現実だ。

嗚呼、神様仏様。

信仰できるようなものなら何でもいい。

どうか、俺達に…。

罪なき希望達に…。

これ以上の悲劇を積みせるのはおやめください。
悲劇に散ったお二人のためにも。

どうか……………。



八日目。

昨日のプール大会で疲れたのか、今日は朝の集まりが悪かった。かくいう俺も起きたのは6時50分前くらいで、食堂についたころには7時10分ほどになっていた。

その時点で食堂にいたのは人間君とリュウ君と小清水さんと伊丹さん。

厨房を覗き込むと丹沢君と夢郷君と山村さんが朝食づくりに励んでいた。

「葛西」

突然、横に座るリュウ君が問いかけてきた。

彼は両手に新聞紙を広げており、さながら朝刊を読む大人の人のようだ。

「今日が何月何日か、分かるか？」

それは、理知的な彼が発するにはあまりにも単純な問いだった。ところが。

「何日って……俺達がここに来たのが……あれ？」

俺達がこの学園に来たのが八日前。それは分かる。

だが、その八日前が何月何日だったかが全くもって思い出せないのだ。

「偶然ではあるまい」

俺の胸の内を察したかのように、彼は呟いた。

「俺でさえ覚えていないのだ。恐らくほかの連中も同じだろう」
「なんでだろう？」

ここに集められた人間全員が、入学の日付を覚えていないなんて。ういゝす。おっはよー」

あくびをしながら前木君が食堂にやってきた。

「ねえ、前木君」

「ん？」

俺は我慢できず、隣に座った前木君に日付のことを聞いてみた。

「……あれ、えつと……？ 何日だったっけ？」

やはり彼も、キョトンとした顔でそう呟くのみだ。

「でもまあ、日付なんて分かんなくてもよくねーか？ 今日が何月何日かなんて別に知らなくても困らないだろ」

前木君の言うことは正しい。

でも……なぜだろう。

妙に気になってしまう。

まるでそれが、今置かれているこの状況に直結する問いであるかのように。

だが、いつまでも解けない問題のことを考えていても仕方ないのもまた事実。

俺は黙って朝食を待つことにした。



いつも通りの朝食をいつも通りに食べ終わり、何気なく部屋に戻った俺は、ゴミ箱が満載になっていることに気付いた。

思えば、事件の前に丹沢君にトラッシュルームの説明を受けた時以来、ゴミ出しに行っていなかった。

だって、トラッシュルームなんて訪れたら、あの事件のことを思い出してしまいそうで……

……ダメだな、こんなんじや。

もう踏ん切りをつけないと。

ゴミ出しはしなくちゃいけないことなんだから、いつまでもウジウジしているわけにはいかないんだ。

ゴミ袋を引っ提げて、俺は廊下を歩く。

あの部屋に向けて一歩踏み込むごとに、いろんな思い出がよみがえってくる。

津川さんの屈託のない笑顔。

土門君の悲痛な叫び。

焼き焦がされた黒炭の塊。

親友の死を嘆き、跪く安藤さん。

様々な記憶、想い、悲しみを引きずって……

再び俺はその部屋に入った。

……そこには。

「……！」

そこには、自らの命を犠牲にしてみんなを助けようとした津川さんの死を惜しむ花束が無造作に置いてあった。

置かれてから二日ほどが経過したと思われるその花束はすでにおれかかっている。

そしてその横には、釜利谷君がしゃがみこんで花束の花を新しいものに取り換えていた。

「釜利谷君……」

彼は俺の声に答えず、花の差し替えを終えて立ち上がった。

「どけ」

そして、入口の前に突っ立っていた俺にぶつきらぼうにそう告げさつさとトラッシュルームを後にした。

俺は思わず、ゴミ袋を置いて彼の後を追っていた。

次に彼が訪れたのは、案の定土門君の部屋の前だった。

津川さんの時と同じように花を差し替え、ふう、とため息をついた。

黙って花束を見つめるその横顔は、怒りも悲しみも感じられなかった。

何か言いようのない複雑な感情が渦巻いているのが一目で見取れる。

「その花束……君が添えたものだったんだね……」

意外だった。

彼がそんなことをするなんて。

もっと現実主義的な人なのだとばかり思っていた。

……いや、違う。

『チクシヨオオオオオオオ!! 俺は友達一人守れねえダメ医者だ!!』

土門君のオシオキが執行される直前、彼は確かにそう言った。

前木君を通じて土門君とも仲が良かった彼は、土門君を助けられなかった自分を悔いていた。

それが彼の本当の姿だ。

「フン、柄にもねえことしちまったな」

釜利谷君はそう言って食堂の方へ歩き始めた。

「死んだ人間に何をしたところで、本人は死んでるんだからその気持ちを受け取ってもらえるわけがねえ。こんなの、俺の自己満足だ」

いつもの不愛想な口調で呟く。

「はあ、俺らしくもねえ。いつからこんなにクサイ奴になっちゃったんだ、俺は……」

「それでいいと思うよ」

俺はそう告げた。

「……」

彼は何も答えなかった。

食堂に戻ると、釜利谷君はしおれかけの花を花瓶に戻し、椅子にどっかりと座った。

「ガキの頃は、ダチなんて作るだけメンドクセーだけだと思ってた……」

そして、過去を振り返りながら、呟くように語り始める。

「ガキの頃から、俺は好きなことばっかりして生きてきた。中学に上がっても、高校生になっても、人と関わることに楽しさなんて見いだせなかった」

「なのに今は、土門と津川の……死んだダチのことばかり考えてやがる。昔とは大違いだ。これが、成長ってやつなのかね」

「……」

「今更俺が何をしようが、死んだ人間は死んだままだ。何したって無駄なんだ。分かっているはずなのによ……あいつらのことを考えるのが……やめられねえ」

肘をつき、苛立たしげに天井を見上げる。

『もう考えるのはやめよう』って何度も思ったさ。一昨日の朝食の時

もそう言った。けど、結局俺が一番記憶に引きずられてやがる。情けねえもんだ。ガチモンの医者になったらもつと悲惨なことを味わうかもしれねえのにな」

俺は終始、彼の独白を複雑な面持ちで聞いていた。

彼の気持ち痛みほどわかり、それゆえ溢れ出ようとする涙を必死にこらえながら。

「愚か者め」

突如、その声は聞こえてきた。

俺と釜利谷君が厨房の方を向くと、ブラックコーヒーの入ったカップを片手に持った御堂さんが立っていた。

朝食の後から厨房にいてコーヒーマシンを淹れていたのだろうか。

「貴様はもう少し賢いと思っていたのだがな、釜利谷三瓶。物事を合理的に割り切れない人間は等しく愚かだ」

釜利谷君のことだからムツとして言い返すのかと思ったが、押し黙るのみだった。

「御堂さん……最近見てなかったけど、どうしてたの？」

「貴様と会話しに来たのではない」

御堂さんは相変わらず厳しい言葉で俺の問いを無視した。

「釜利谷三瓶、貴様に用がある。葛西幸彦は直ちに出ていけ」

え、そんな!?

「別にこいつがいてもいいだろ。口外するような奴じゃねえ」

釜利谷君がフォローするが、御堂さんは舌打ちして睨むばかりだ。

「口外しないだど？ それは貴様の一方的な見解にすぎん。口外しない証拠などどこにもない。こういう軟弱そうに見えるやつほど裏では何を考えているか分からないものだ」

ちよ、それは言い過ぎだよ！

期待外れかもしれないけど、俺はただの軟弱者だよ！ 胸を張って言うことじゃないから黙ってるけど！

「おい」

突如、釜利谷君が低い声で凄んだ。

「ダチの悪口は許さねえ。撤回しろ」

「…!?!」

釜利谷君、俺のこと〃ダチ〃って……

「フン、所詮貴様も仲良しごっこがしたいだけか」

「〃ごっこ〃じゃねえ!!」

ダン、と釜利谷君がテーブルを叩いた。

「遊び扱いしてんじゃねえ。俺はガチだ。なめてんじゃねえぞ」

釜利谷君の表情は、裁判の終わり際、モノクマとモノパンダに見せていたものと同じ。

〃ダチ〃を侮辱された怒りと悔しさのにじみ出た表情。

俺は涙をこぼしそうになっていた。

今まで、ずっとぶつきらぼうで、相手にもされていないかと思っていた彼が。

俺をダチと認め、ここまで一生懸命になって守ってくれるなんて。

「……」

御堂さんは不気味な沈黙を貫く。

「俺をどう言おうが俺は気にしねえから構わねえ。だがな、こいつはデリケートなやつなんだ。ちよつとシリアスな話を聞かされただけで涙目になるくらいにはな。そんな奴に面と向かって悪口を言うのは俺が許さねえ!」

えっ、涙目なのがばれてたなんて。

恥ずかしさに顔を赤らめながら俺は慌てて目元をぬぐった。

「ちっ……」

苛立たしげに舌打ちするが、気圧されたのか反論の言葉は出ない。

「お前がどうしても葛西を追い出すなら俺は何もしやべらねえぞ。それが嫌ならさっさと用件を言え」

「…貴様が研究していたという『記憶』の話だ」

不機嫌そうに腕を組んで目線をそらしながらも、御堂さんは近くの椅子に座って話し始めた。

『記憶』が貴様の研究分野なのだろう？ それをどれくらいまで研究したか知りたい」

「それを知りたがる理由はなんだ」

「それが知りたければ……私の部屋のシャワールームまで来てもらうしかないな」

小さく、囁くような声で彼女は……って！

なんてこと言ってるんだ!!

だが、釜利谷君は事情を推察したかのように「そうか」と頷いた。そして、意味が分からず顔を赤くする俺を向き、監視カメラの方へ顎をしゃくった。

監視カメラ？

確か、個室のシャワールームには監視カメラはなかったっけ。

「……そ、そっか。モノパンダやモノクマに聞かれちゃ困る話、ってことなのか」

ようやく俺は事の次第を知った。

「まあいいさ。つつつても、『記憶』に関する研究はまだ始まったばかりでな。ほとんど進んじやいねえよ。進めようと思った矢先にここにぶち込まれたからな」

「……ふん、やはりそうか」

顎に手を当てて考えながら御堂さんは呟く。

「まあ、そうなるだろうな……。ということは……やはり神経学者が……ブツブツと独り言を呟きながら思考に集中している。

それを俺と釜利谷君は不思議な目で見つめていた。

「……あら。珍しい面子ね」

扉を開ける声とともに聞こえた声は。

「何の用だ。伊丹ゆきみ」

御堂さんが横目で睨みながら威嚇した。

「そんな目で見ないで。紅茶を飲みに来ただけ」

「…フン。一応聞いておくが、さきほど私と釜利谷三瓶が交わした会話を聞いてはいないだろうな?」

「聞いてない。今ここに来たばかりだから」

「まあ、そんな言葉、信ずるに値しないがな」

「私は嘘をつかない。嘘は嫌いだから」

この二人、本当に水と油だ。

どうしてこんなに短時間で険悪になれるんだろう？

伊丹さんが紅茶を入れるため厨房に入っていくと、御堂さんは立ち上がった。

「貴様への用は済んだ。失礼するぞ」

「なんだよ、もうちよつといてやればいいじゃねえか」

釜利谷君は去ろうとする彼女にやや不可解な言葉をかけた。

「貴様への用事は済んだのだ。ここに在る意味はない」

手短かに述べて食堂を出ていこうとする彼女に釜利谷君がかけた言葉は衝撃的なものだった。

「お前と伊丹、ダチじゃねえのか？」

その意外すぎる一言が御堂さんの動きを止めた。

何をどう捉えたら彼女たちがダチになるんだ!?

「ふざけるな…! あんな雑魚と一緒にくたにされるほど落ちぶれたつもりはない」

いつも通り、額に青筋を浮かべて反論する。

「喧嘩するほどうんたらって言うだろ。俺にしてみりやおめえらはそっくりなんだよ」

わからなくもない。

両者とも、普段の辛辣な態度のせいで苦労していそうだなと思う。

でも、だからって二人がダチだなんて…。

そうこうしていると、湯気の立ったカップを片手に伊丹さんが厨房から出てきた。

「誰かさんがお湯を沸かしてくれてたから、すぐに紅茶ができたわ。後でお礼を言わないとね」

珍しく笑顔を浮かべながら、席について紅茶を飲み始める。

「おい、貴様!」

声を張ったのは御堂さんだ。

「それは私がコーヒーを飲むために沸かした湯だ! 人の湯を勝手に使うほど常識のない人間であったとは、失望したな」

「あら、ポットのお湯ぐらい置いてあれば使うでしょう？ そんなに嫌なら私がポットに大きく『あきね』って書いてあげようかしらね」
「絶対に書くな。私の名を汚す気か」

「安心して。あのポットがあなた専用の物になった暁には思う存分薬品実験の容器に使わせてもらおうから」

「それは確かに安心だ。どんな毒薬を入れられようが貴様という名の毒薬には遥かに劣るだろうからな」

「ほら見ろ、あんなに仲いいじゃねえか」

ニヤリとして釜利谷君が言う。

確かに、心なしか少し気が合いそうに見えなくもないけど…。

「御堂の奴だつて、根っからひん曲がったやつじゃねえんだよ。人間ってのはみんな、根っこは同じようにできてる。津川が死んで伊丹が本気で苦しんだのと同じような感情を、御堂も持つてるはずなんだ。そう言う気持ちに素直になれば、あのふざけたヌイグルミ共の思う壺にもならねえんだろうがなあ…」

二人の口論を眺めながら釜利谷君は呟く。

「ちつ…私としたことが熱くなつてしまった。雑魚一人に感情をむき出しにするなど、情けないものだ…」

「ふふ、むき出しにできる程度の感情はあるじゃないの」

伊丹さんが笑うと、御堂さんはギロリとそれを睨む。

「あなたのこと、勘違いしてた。捜査の時、淡々と物事を処理するあなたを見て、感情の欠落した人なのだと思つてた。でもそんなことなかったわ。少しだけ安心した」

「知つた風な口をきくな、反吐が出る」

くるりと向きを変え、食堂を出ていく御堂さん。

彼女の顔が赤いのは怒りゆえか恥じらいゆえか、俺には分からなかった。

「彼女も人間なのよ。私はこの数日間ですれを学んだわ」

伊丹さんは紅茶を呷りながら言った。

「ふん、お前も初日に比べりゃあ随分丸くなつたじゃねえかよ」

釜利谷君が悪戯っぽく笑いながら語りかける。

「根本は変わってないわ。今だって、私はいろんな可能性を考えている…。でも、それを安易に口に出して誰かを傷つけるようなことはもうしない。あれだけのことがあったのだもの、流石に学ぶわ」

へっ、と笑った後、釜利谷君は真面目な顔になって語り始めた。

「…人生つてのは、関わり」だ。ダチと出会うのも成長、遊んで騒いで喧嘩するのも成長、死別するのもまた成長だ。俺たちがこの前の裁判で失った代償はあまりにもデカかったが、だからこそ俺たちは成長したのかもしれないねえ。だからもう絶対に同じ過ちを起こすわけにはいかねえんだ。俺は忘れねえ。一緒に遊び、汗流し、夢を語り合ったダチの死をな。伊丹、お前も忘れるんじゃないぞ」

紅茶を一口飲み、彼女は遠い目をしながら答えた。

「…忘れたくても忘れられないわ。私が傷付けてしまったお友達、それでも私を…私達を助けようとしてくれたかけがえのないお友達。忘れられるはずもない。…私、こんな性格だから本当に仲の良い友達なんてほとんどいなかったのよ。だからこそ、あんなに真摯に接してくれるお友達ができて…とても嬉しかったの。いえ…今もいるわ。莉緒ちゃんとか。そうよ…まだ終わったわけじゃない。だから…もう二度と、悲劇は見たくない」

落ち着いた表情で静かに、しかし紅茶を持つ手を僅かに震わせ、伊丹さんは言った。

表情に出さないけれど、他のところに感情が現れてしまうあたり彼女らしい。

俺はその時、どんな表情をしていたのだろうか。

ただただ胸の中が何かでいっぱいになるような気持ちで、何も言えなかった。

無駄な死だとばかり思ってた。

あの裁判で真相が明かされた時、2人はなんの意味もなく殺されたのだと思っていた。

でも、そうじゃなかった。

伊丹さんと釜利谷君、御堂さん。

他のみんなも、あの悲惨な事件を通して、学んだ。

仲間を大切にすることの重さ、人の死の悲しき、そういったことを。人の死に意味を見出すなんて不謹慎で失礼かもしれないけど。

二人の死が全くの無駄じゃなかったと分かって、二人が少しだけだけど浮かばれたような気がして。

俺は涙を禁じ得なかった。

釜利谷君は黙って、俺の目の前にハンカチを突き出された。

「メソメソしてんじゃねえ。胸糞悪いんだよ。ニコニコしてろ、俺の前ではな」

俺は黙って頷き、目元を押さえた。

「それと、すまなかった。裁判の後、津川を真似して必死で俺らを笑わせてくれようとしたお前を、俺はシカトしちまった」

「…私も、ごめんなさい。彼女も浮かばれると思うわ」

二人に相次いで謝られて、俺は涙収まらぬままきよんとしてしまった。

「…ふう。なんだか朝っぱらから疲れちまった。部屋戻って寝るわ」

頭をガサガサと搔きながら彼が立ち上がった直後。

「いたぞ、三ちゃん！ ジョーンズがお前とテニスで勝負したいって言ってるぞ！」

「理系男子如きに負けは致しませんぞ！ 先日のプールでの雪辱、ここで晴らしてやりましょうともー!!」

前木君、入間君のハイテンションコンビが颯爽と現れ、彼の両腕をがっちりと掴む。

「おいコラ、離せ！ 俺の意見ガン無視か、おい！」

「お？ 逃げる気でございますか？ 男の勝負から逃げる気でございますか？ お？ お？ お？」

「んなメンドクセーことしたくねーよ、お前の勝ちでいいよ」

「んなもんで納得できるかよっ！ 負けるならちゃんと戦って負けろ!!」

結局、喚く釜利谷君の意向は無視され、ホールへと引きずられていったようだった。

「ふふ、やんちゃな子たちね」

そんな様子を見て、まるで遊ぶ子供たちを眺める母親のように伊丹さんは呟いた。



その後、何気なく休憩室を訪れた俺は、意外な組み合わせの三人を見つけた。

そこにいたのはリユウ君、夢郷君、安藤さん。

夢郷君は昨日の件があるので正直ちよつと距離を置きたくなってしまう…。

男二人は束になった原稿にじっくりと目を通し、安藤さんは向かい側に座ってそんな二人の姿をじっくりと見つめている。

「おお、葛西殿！ お二人に吾輩の原稿の推敲をお頼みしていたところなのだ！ よろしければお主もいかがか？」

「えー！ それなら先に言ってくればよかったのに！」

俺は声を荒げながら夢郷君の隣に座った。

安藤さんの作品の愛読者の一人としては、彼女の原稿を先読みできるなんて夢のような話だ。

「むわっはっは！ 嬉しい反応よのお。ささ、こちらから読むがよいぞ」

彼女に勧められた原稿をひったくるように掴むと、俺はむさぼるようにそれを読み始めた。

案の定、俺は彼女の世界観に引き込まれていった。

何十分という時間が一瞬の間のように過ぎていき、そして……

「夢郷君、早くその原稿読んじゃってよ」

俺は彼をせかす羽目になっていた。

なにぶん、彼は漫画を読むのが非常に遅いのだ。

『ウーリーを探せ』を呼んでいるかのようにゆっくりじっくり原

稿を眺め、読み終わったかと思うとふと新たな疑問が浮かび上がってきたかのようにまた読み直す。

こんなんじゃない読んでいるうちに日が暮れちゃうよ。

「夢郷は俺が来る前からここで原稿を読んでいたのだが、一向に進んでおらんようだな。俺はこいつと同じ作品を読むのをあきらめて別作品を読んでいる」

リュウ君ですらあきれ果てたようにそう言っている。

「おかしい……やはりおかしいぞ」

夢郷君は口元を手で覆って考え事をしながら呟く。

「構成、バトル展開、キャラクターの豊富さ、全てにおいて文句はないと僕は思う。だがしかし」

「これだけ女性キャラがいてなぜ豊満な人物がないのか、僕は非常に疑問に思うぞ」

……ッ!?

またその話かよ!?

「メイン、サブ、モブ。全てを数え上げると本作における女性キャラクターの数は28人に及ぶ。それだけいけば一人ぐらいボインがいてもいいのではないのか?」

ついにボインとか言い出したよ。末期だ。

「だが本作の女性キャラクターはペタンばかりだ。これはいわば作品全体の整合性、および現実性を著しく欠いていると僕は思う。ここにほんの数人のボインが加わるだけで一気に作品の重みが増す」

正直に言いなよ。ボインがみたいだけなんですよ?

「ほ、豊満な女性が足りないよ……? うむう……されど吾輩はこの通りの貧相な体つきゆえ……どうもうまく描けなくてなあ……」

「心配はいらない」と夢郷君は人差し指を立てて笑みを浮かべた。

「この校舎内に最高の題材となってくれくれる方がいる」

あ、この流れは昨日の……

「さあ葛西君、小清水君を呼ばないよバカ」

今度は冷静に返してやった。同じ手は二度食らうもんか。

「ぐ……さては君の制作した作品にもペタンな子しかいないのだな？
僕の美学を理解してくれないとは悲しい限りだ」

それは違うよ、と言いかけたけどやめた。反論の無駄遣いだ。

俺の作品ではあんまり女性の容姿なんて気にかけてたことないと思
うけどなあ……あまり覚えてないけど。

「若いな、夢郷」

そう重苦しい声を発したのは、他ならぬリュウ君だった。

「哲学者の考えることにケチをつけようとは思わん。だがな、今の
前はボインにとらわれすぎている。頭の中で想像しろ。サハラ砂漠
のように果てしなく平坦なペタンを。果たしてそれは本当にお前の
美学に反するものなのか？」

なんなの、この談義。

「なん……だと……」

「なぜ男児が豊満な胸に魅せられるか、それは俺にも分らん。だがな
夢郷、果たしてそのトキメキはペタンには存在しないというのか？」

「ボイン……ペタン……ボイン、ペタン。ボインペタンボインペタンボイ
ンボインペタペタタン」

怖い怖い、怖いよ。何のおまじない？

「ボインペタンボインペタンボイペタボイペタボイボイボイペタ
ペタペタボボペペボペ……」

顔を汗だくにしながら一心不乱に言葉を呟き続ける夢郷君。

突然、彼の目から光が発せられたかと思うと、彼は呟きを止め……

「……悟ったぞ!!」

そう宣言した。

「限りなく平坦で、ともすれば男子とも大差ないであろうペタン。し
かしなぜだろう……今僕はそこに興奮を覚えているではないか！」

悟ったんだね。最悪の方向に。

「なるほど、ボインかペタンかなど確かに小さなこだわりだった。大
切なのはどのような胸も等しく愛する心。ひいては女性を愛する心
だったんだ！」

聞けば聞くほど最悪だな。原稿を読むはずだった時間を返してく

れよ。

「ふん、つまりはそういうことだ」

「どういうことだよ。リュウ君も大概だな。」

「うむむう？ 吾輩にはよく分からんが、貧相な体つきも魅力の一つということで良いのかえ？」

「こんな場に巻き込まれた安藤さんがただただかわいそうだ。」

「ああ、その通りだ。記念に一つ、君のペタンを触らせてはもらえないかい？」

「あまりにもぶつ飛んだ要求に俺は絶句していた。」

「胸をか？ むむう、男性に触られた子などないのだがのお……まあ、減るものでもないしいk「よくない」

俺が突っ込むまでもなくリュウ君が冷静に割って入った。

「その描写は流石に読者のドン引きを招く。現時点でさえ、耐えきれずに読むのを中断している者が相当数いると俺は睨んでいる。それ以上は危険だ」

描写とか読者とか何言ってるのか分からないけど、とにかく常識を欠きすぎだよ。

「ははは、今のは流石に冗談だよ。まさかオーケーしてくれるとも思っていなかったがね」

珍しく夢郷君は笑顔をのぞかせた。こんな場面では見たくなかったけど。

「…そういえば、なんでこの三人がここにいるの？ 普段は見かけない組み合わせだけど」

「ずつと聞こうと思っていたことを、俺はようやく口に出せた。」

「いやあ、吾輩がここで原稿の推敲をしていた時にたまたまやってきた二人に推敲をお頼みしただけだよ。はっはっは！」

「僕はあまり漫画というものをじっくり読むことがなかったのだが……こうして読んでみると面白いものだな。これからも読ませたいだっこう」

「…俺も同意する。くれぐれも休載などするなよ、安藤」

「むははは、吾輩に休載の二文字など存在せぬわ！ 首を洗って待つ

「おれ！」

安藤さん、慣用句の使い方違うよ。二人を殺す気なの？

「お三方とも、推敲に協力していただき感謝するぞい！ ではでは部屋にて描きなおすでしょうかの！」

安藤さんは意気揚々と原稿を引っ掴んで休憩室を後にした。

まだ読み切れてないのがあったんだけど……まあ、後でも読めるか。

「…面白い人物だな、君は」

突然、夢郷君がそう呟いた。

「どうやら俺に言ったのではなく、リュウ君に言ったようだった。

「あまり君と話したことはなくて君のことをよく知らなかったのだが、そんな君に新たな知見を教わるとは思っていなかった。君という人物が非常に興味深くなったよ」

「ふん、詮索しても何も出ないぞ」

「そう言いながらリュウ君は立ち上がり、その場で軽く柔軟運動を始めた。

「気になるな。君がいかにしてあの身体能力を得るに至ったのか、いかにして胸の真理を追究するに至ったのか」

「後者は余計だけど、前者は確かに気になる。」

「一昨日の発言も気になるしな……。」

「俺の正体、俺の本名、いずれも時が来たら話すさ。今はその時ではない」

「そう言っただけは休憩室を後にしようとする。」

「一昨日と全く同じ構図だ。」

「何か、ヒントはないのかい？」

「そんな彼に、夢郷君は不気味な笑みを浮かべて尋ねた。」

「直接君の正体には繋がらずとも……現時点で教えても支障はないよ
うな情報とか」

「振り返るリュウ君の顔が険しくなる。」

「……そうだな……。ならば、質問で返すのは悪いが、一つ聞くとう。夢郷、お前は仕事で世界中を回ったと聞く」

夢郷君は小さく頷く。

「戦刃むくろ」。この名を聞いたことはあるか？」

……戦刃むくろ？

全く知らないな、少なくとも俺は。

「……存じないな。君の関係者かい？」

「いや、直接会ったこともない。名前を聞いた程度だ。だがまあ、少しばかり気になってるのでな……知らぬのならいい。また後でな」

リュウ君はすぐに休憩室を後にしてしまった。

夢郷君は顎に手を当てて思考しながらも「知っているかい？」と聞きたげな顔で俺の方を向いた。

当然、俺は顔を横に振る。

…突如として現れた謎の名前、“戦刃むくろ”。

その人が男性なのか女性なのかすらわからない。

その人の素性が分かれば少しはリュウ君のことも分かるかもしれないのに……

世界中を訪れているはずの夢郷君ですら知らないなんて。

いや、待てよ。

もう一人、世界中を駆け巡っている人物がいる。



「……どこでその名を？」

夕食の場で、入間君の隣に座った俺は早速彼にあの名を伝えてみた。

帰ってきた第一声が、これである。

「……なるほど、リュウさんから。…何やらただならぬ事情がありそうですねえ」

気難しい表情で入間君は呟く。

「そんなにヤバい人なの？」

「ヤバいかと聞かれれば、激ヤバなのは間違いないですね。彼女は若くして“フェンリル”と呼ばれる傭兵集団に属していたという女性兵士です。言ってみれば、“超高校級の軍人”といったところですかねえ」

…“超高校級の軍人”。

そんな人物が、リュウ君とどう関係しているのだろうか？

「私は以前、中東の小国家で民族同士の和平交渉において通訳を行っていたことがあります。和平はうまくまとめることができたのですが、その際に“フェンリル”の仕業と思われる破壊された集落をこの目にいたしました。…あれは言葉にできぬ悲惨さでしたね…とても人の所業とは思えないものでした」

めちやくちやに破壊され、無残に人が殺された集落が目に見えかぶ。

思わず冷や汗が止まらなくなった。

「リュウさんはフェンリルの関係者なのでしょうかね…考えたくはありませんが、それならば彼の異常な戦闘力も納得がいきます」

俺と入間君はそろってテーブルの端で黙々と箸を進めるリュウ君を見た。

納得しちやダメだ。

そんな集団と彼が関わっているなんて考えちやダメだ。

考えちや…

“ピンポンパンポン”

その時。
鳴った。

悪夢の鐘が。

『オメーラ、久しぶりだなー！ 新しく開かれた二階は楽しんでくれるかい？ ぎひやひやひやひや!!』

「この野郎……!!」

前木君が拳を震わせてモニターを睨む。

『このロシアイ学園生活も一週間を過ぎて、オメーラの絆も深まってきた、オイラ嬉しい限りだね！ さて！ そういうわけでオイラからオメーラに素敵なプレゼントをあげちやいたいんだぜ〜!』

無邪気な声でモノパンダは告げる。

『夕食が終わってからでいいからよ、全員視聴覚室に集まってくれよ〜!』

視聴覚室。

以前も、こうやってアナウンスがかけられてそこに集められたことがある。

「視聴覚室なんぞに集めて、何をする気だ？」

御堂さんが苛立たしげに聞く。

『またまたあ。オメーぐらい賢い人ならもう分かってるだろ?』

目を背けたくても背けられない恐怖。

無理やりにも直視させられる現実。

それは。

『みんなお待ちかね！ 動機の発表だよくん!!』

「…クソツタレが」

釜利谷君が吐き捨てるように呟いた。

chapter 2 (非) 日常編④



アナウンスとともに知らされた衝撃の事実。
コロシアイを起こさせるための第二の動機。

「そんなものを見せられると言われてわざわざ行く馬鹿がどこにいる」

御堂さんはモニターを威嚇するように睨みながら吐き捨てるように言った。

「けっ、無駄だよ」

そんな彼女の言葉に突っかかったのは釜利谷君だ。

「このヌイグルミ共のことだ、逆らえば容赦なく処刑するとか言うに違いねえ」

『クマ聞きの悪いこと言わないの！』

モニター内にモノパンダを押しつける形で現れたのは、モノクマだった。

『ボクはねえ、むやみやたらにオシオキとか罰則とかの権力を乱用するようなクマじゃないの！ 校則にさえ違反しなければ別に何も』

その時、俺のポケットから奇怪な音が鳴った。

それに気づいて電子生徒手帳を取り出してみると、見たことのない表示がなされている。

『 校則追加：校長から提供された動機は一回は必ず見るようにしましょう 』

『おやおや！ 残念だけど校則になっちゃったみたいだね！ これじゃあ君たちには見てもらう以外の選択肢はないよね！』

そう言つて二体のヌイグルミは意地悪く笑う。

「ちくしょう……結局全部思い通りってことかよ……！」

前木君が悔しそうに呟く。
俺達に逆らう手立てはない。
奴の命令に従うしかないんだ。

視聴覚室につくと、部屋の奥でモノパンダが不敵に笑っていた。
その横には、DVDが入った段ボール。
そう、四日前と全く同じだ。

あのDVDにこそ、俺たちを殺人に追い立てる恐るべき動機が隠されている。

「ぎひゃひゃひゃひゃ!! 全員集まったかー!? そんならここから自分の分のDVDを持ってって見てくれよなー! 自分の分を見ないと校則違反だから、気をつけるよー!」

みんなが委縮して静まり返る中、御堂さんはいち早く進み出て自分のDVDを引っ搦んだ。

「ふん。避けられないのならさっさと済ませるまでだ」
そう言つて視聴覚室を後にしてしまった。

それに続くようにリュウ君も無言で自らのDVDを取り出し、端の方の席に腰かけた。

「どうしても、見なきゃダメなのですか……」
小さく丹沢君が声を漏らした。

「……大丈夫ですよ……。私たちは前回の事件で学んだはずですよ、絶対にあんなことには……」

山村さんが呟き、段ボールの前に恐る恐る進み出る。
そして自分のDVDを拾い上げ、まじまじと見つめるのだった。

「どうだかな。そんなぐらいいつも承知してるだろうよ」
釜利谷君がモノパンダの目の前に立って睨みつけると、モノパンダは不気味な笑みで返した。

「まあ、御堂が言う通り避けられねえ以上は見るしかねえ。お前ら、覚悟はしとけよ」

釜利谷君は自分のDVDを持って部屋を後にした。
「えつとき……見終わった後、みんなで集まるのはどう?」

亞桐さんが提案する。

「秋音ちゃんとかは来てくれないかもだけど……みんなで慰め合ったり励まし合ったりした方が、前回みたいな事態にならなくて済むかなって思うんだよね……」

「……いいと思う。できるだけみんなの負担を減らすにはそれが一番だと思う」

伊丹さんが同意する。

「……よし。じゃあみんな、動機のDVDを見終わったら休憩室に集まろう。どうしても来れそうにないって奴は無理して来なくてもいいからな」

前木君の言葉に全員が同意する。

そうして俺達は部屋に戻るなり視聴覚室の席に座るなどしてDVDを視聴する準備を整えた。

俺は深呼吸する。

四日前、お客様と家族の行方に疑問を投げかけたあの忌まわしい映像を思い出す。

俺の作品を、才能を蹂躪したあの映像を。

呑気にこんなところにおいていいはずがない。

プールで騒いだり、漫画を読んで感動している暇なんてなかったじゃないか。

一刻も早く家族の安否を確かめないといけないのに。

俺はこんなところで何をやっているんだ。

疑問は晴れぬまま、眼前のディスプレイは新たなる映像を映し始めていた。



暗い画面に映りこんだ一人の人影は、なんと俺自身だった。

『超高校級の脚本家、葛西幸彦君！』

モノクマの耳障りな声が聞こえる。

『彼は父親の影響で幼い頃から脚本関連の仕事に携わっていました！彼の才能が最初に開花したのは幼稚園児の頃。その脚本の出来栄えには父親をはじめ多くの人が魅了されました！その後も……』
なんだ、これは。

モノクマは俺の経緯を語っているだけだ。

こんなことは言わずもがな俺自身が分かりきっていることだ。

『……このように、葛西君は自身の半生において数多くの脚本を生み出し、人々に感動を与えてきました。そんな葛西君の夢は………』

『作品を以て人々に希望を与えること』でーす！』

……!!

モノクマの言葉は、俺がここに来て今に至るまですつかり失念していたことを思い出させた。

『脚本とは、その物語の中にうつつすらと込められた主題を視聴者にぶつけるもの。葛西君はその主題として“希望”を選んだんだね！』
希望。

俺が希望ヶ峰学園に入学すると知らされ、慌ただしく準備にいそしんでいた間。

俺は希望ヶ峰でどんな脚本を作ろうか考えていた。

その結果選びだした主題。

それこそが“希望”だ。

人類の希望として選ばれた俺達。

そんな俺達——希望が希望を描き、世界に希望をもたらしたい。

そんな望みを胸に、俺は希望ヶ峰に来たのだ。

だが、実際はどうだ？

わけもわからぬままに閉じ込められ、わけのわからないヌイグルミに殺し合いをしろと言われ。

事実二人死んだ。

これのどこが希望だ？

むしろ絶望だ。

『でも、このまま君がこの学園にい続けたら一生脚本を誰かに見せる

ことはできません!! 君の夢は一生叶わないんです!!」

ふつつつと湧き上がる感情を俺は必死に抑えた。

お前のせいだろうが。

お前が俺の夢を阻止しているんじゃないか。

そんな言葉に惑わされて卒業したいなんて思うかよ。

『でもね、我が希望ヶ峰学園は苦難を乗り越えた生徒の夢は全力で応援します!!』

突然、モノクマはこちらの意図せぬ言葉を繰り出してきた。

『つまりー、君がこの学園から抜け出せたら……君が今まで書いてきた脚本のコピーを全て返却し、さらに君が脚本を書くために必要な環境を全て』

「いい加減にしろよっ!!」

俺は立ち上がりながら怒鳴っていた。

頭が熱くなっているのがよく分かる。

勢いでディスプレイを殴りそうになるのをこらえながら、奥の教卓に座るモノパンダを睨む。

「どこまで俺の才能を侮辱すれば気が済むんだ……ふぎけるな!!」

感情の堰はもうすでに切れていた。

だが一つ、モノパンダに対して優位に立っていることはある。

少なくとも俺はもう絶対にコロシアイなんか起こさないといいとだ。

何が動機だ。

こんな言葉に惑わされて殺人を犯すとも思っているのか。

「ぎひゃひゃひゃひゃ!! あんまりお気に召さなかったのかなー? 自信作だったんだけどなー」

ダメだ。

これ以上こいつの声なんて聞いていられない。

俺は休憩室めがけて真つすぐに駆け出していた。

休憩室に着くと、亞桐さんと夢郷君と小清水さんが既に座っていた。

三人とも重苦しく暗い表情をしている。

俺は深呼吸して気分を落ち着かせながら夢郷君の隣に座った。

「DVDの内容……聞いてもいい？」

亞桐さんが小声で尋ねてきた。

「俺の将来の夢についてだった」

俺はそっけなく答えた。

「やっぱりそうなんだ……」

亞桐さんの反応から察するに、ここにいる三人も自身の“夢”に関する映像を見せつけられたようだ。

「ウチ、なんでこんなところにいるんだろ……」

亞桐さんが涙声で呟く。

「今まで以上にダンスを楽しみたくて、新しい仲間も作りたくて、そのためにこの学園に来たのに。なんでこんなことさせられてるんだろ……」

彼女がすすり泣く声が響く。

「こんなの、僕だって不本意さ。本音を言えば一秒たりともこんなところをいたくはない。僕にはまだまだ得るべき知見が山ほど残っているのだからね」

夢郷君も暗い声で呟く。

小清水さんはうつむいたままずっと何かを考え込んでいるようだった。

その後、しばらくしてリュウ君と御堂さん以外の全員が休憩室に揃った。

「…で、結局DVDの内容は全員の“将来の夢”に関するものであったということでしょうか」

丹沢君の言葉に反論する者はいなかった。

みんな揃って意気消沈している。

なんでみんなそんなに落ち込んでるんだらう？

怒りを覚えたのは俺だけだったのだろうか？

「…確かに“将来の夢”を再確認させられたのは辛かったけどよ……。でも、夢なんて改めて言われるまでもなく元々全員が心の中に持って

いたワケで……。つまり何が言いたいかって言うところ……そんなことのために殺人を犯す奴なんていないんじゃないかね？って言う……」

前木君が恐る恐る口にした言葉を聞いて、全員が顔を見合わせる。確かにみんなは俺より心に傷を負ってしまったようだが、それでもヌイグルミ共の卑劣な罠にはまるなんて思えない。

「それが甘えってんだよ」

水を差したのは釜利谷君だ。

「それなら始めっからあんなモン動機に選ばねえだろ。俺やまえなつにとつて大したことねえ動機でも、他の奴らにとつて大したことねえとは限らねえ。この中の誰かに命に代えても叶えたい願いや野望があるかもしれないねえだろ」

ぞわり、と背筋が凍り付くのを俺は感じていた。

“命に代えても”。

それはつまり、他の誰を犠牲にしてもということ。

「つ、つまり……釜利谷殿はまたここでコロシアイが起きると……」

「そうしねえためにここに集まっただろうが。いいか、心して聞け」

釜利谷君は一瞬間を置いた。

「この中に、脱出してでも夢を叶えたくてウズウズしてるやつがいたら名乗り出ろ」

静寂。

誰も答えない。

「……ま、この場じゃ言えねえよな」

釜利谷君はため息とともにソファーにもたれかかる。

「だが、心が揺れている奴がもしいるなら、誰でもいいから誰かに相談しろ。間違っても殺しなんてアホなこと考えつくんじゃないやねえぞ」

重い声で念を押す。

「あの」

小さく挙手しながら声を上げたのは山村さんだ。

「私、今晚寝ないで校舎内の見回りをしたいのですが」

「…殺人を防ぐため？」

伊丹さんが問うと、山村さんは強く頷いた。

「はい。皆さんが自分の部屋に籠っていただければ私は干渉できませんから、私が殺人をするという可能性は排除できます。私が気を緩めなければ誰かに不意打ちで襲われることもありませぬ。一晩くらい寝なくても私は平気です！」

なるほど、と夢郷君が呟く。

確かにそれなら今宵殺人が起こる可能性はない。

「待ってください」

しかし、その意見に待ったをかけたのは入間君だ。

「いるじゃありませんか。一人だけ、あなたを倒しうる方が」

いつになく気難しい表情で述べられたその言葉から連想された人物はただ一人。

この会合にも参加しておらず、それでいて常人をはるかにしのぐ戦鬪力を有する人物。

リュウ君だ。

「私は信じています。彼は絶対に殺人なんてしません」

山村さんは強い目つきで反論する。

「なぜそう言いきれれるのですか？ あなたに彼の何が分かります？」

入間君も声を荒げて山村さんに詰め寄る。

そう、彼は昨日の“フェンリル”の一件以降、リュウ君に対して懐疑的な感情を抱き続けている。

「あなたこそ彼の何を知っているんですかっ!!」

山村さんは感情のままに大声を発する。

このままだといつ人格が豹変するか分からない。

「やめなさい」

割って入ったのは伊丹さん。

「こんなところで内輪もめをするのはモノクマの思う壺って分からないのか？」

「申し訳ありません。私としたことが……」

「……すみませぬ」

幸いにも両者ともすぐに引き下がってくれた。

「心配には及ばないわ。山村さんを殺しうるのがリュウ君だけという

状況下で山村さんの死体が発見されれば、彼が疑われるのは必定。そんな状況で彼が殺人を犯すとは思えない」

感情論を抜きにしても彼が殺人には及ばないことを彼女は説明した。

「いずれにせよ、『今夜は山村さんが校舎内を見回る』ということと『今夜は誰も部屋から出ない』ということの二点をリュウ君と御堂さんの両者にはつきりと伝えておく必要があるわ」

「…じゃありユウには俺が伝えとくよ。御堂はお前に頼みたい」
「分かった」

前木君の頼みに伊丹さんが頷く。

結局、幕切れも定かでないままこの夜の会合は終わった。

みんな動機のせいで気が滅入っているのか、トボトボとした足取りだ。

だが、俺は絶望なんぞには負けない。

山村さんを信じて、この夜が過ぎるのを待とう。

そう思い、休憩室を出た俺は……

「……？」

食堂の中に人影を見た。

そつと覗き込んでみると……

一人椅子に腰かけるリュウ君の姿があった。

いや、それだけなら驚いたりはしない。

彼はタバコを吸っているじゃないか！

「葛西か。そんなところで何をしている？」

あつ、と俺は声を漏らしてしまった。

隠れていたつもりが、驚きのあまり身を乗り出してしまっていたよ
うだ。

「お前には言っていないかったかな？俺は成人しているんだぞ」
リュウ君はタバコを口から離して煙を吐き出すとそう言った。
知らなかった。

確かに大人びて見えてはいたけど、まさか成人していたなんて。
てことは、何年くらい留年しているんだろう……？

「まあ、人前では吸わないようにしているさ。副流煙は体に悪いからな。…だが今はこうして気分を落ち着かせておきたい」

その言葉とともにリュウ君は箱からもう一本の煙草と高級そうなライターを取り出した。

なんだろう、一つ一つの仕草がとても渋くて似合っている。

「お前も一本吸うか？」

「え、いやー！いいよ！… ってか俺未成年だし！」

いくら見ているのがあのヌイグルミだけとはいえ、タバコを吸うのは気が引ける。

煙なんか吸ったところで気持ちよさそうに見えないしなあ。

「ふ、冗談だ」

リュウ君はうつすらと笑みを浮かべながら煙草に火をつけ、啜える。

「…それはそうと、お前が来る直前に前木が言伝を伝えに来てな。大体の状況は把握した。今夜は部屋に籠ってくつろぐとしよう」

「…そつか。それは良かった」

みんなが決定に従ってくれば、殺人なんて起こるはずがない。

だが、この言いようのない漠然とした不安は何なのだろう？

そううまく事は運ばない。

初めからそう決まっているかのような気すらしてしまうのだ。

そんな時だった。

いつの間にか俺の横に立っていたリュウ君がポン、と俺の肩に手を乗せていた。

「そう暗い顔をするな。心を病んでは奴の思う壺だぞ」

その力強くて優しい表情に、俺はどことなく安堵を感じていた。

「あの山村のことだ、しくじることはあるまい。こと精神の強さに関しては俺の上をゆくかもしれない女なのだからな」

そう言ってリュウ君はタバコとライターを懐にしまった。

「そ、そうだよな。俺がみんなを信じてあげないと…」

俺は慌てて顔を上げて笑顔を作った。

「もう間もなく夜時間だ。食堂は閉まる。もう部屋に戻った方がよか

ろう」

「あ、うん。そうだね。…おやすみ！」

「うむ」

食堂を出た俺達は廊下で別れた。

彼の励ましはとても心強かった。

どんな絶望も跳ねのけてくれそうな、絶対的な父性を宿した彼の声が忘れられない。

…それなのに。

『彼は殺そうと思えば全員を殺せる。そんな人なのよ』

『リュウさんはフェンリルの関係者なんでしょうかね…』

『リュウなんて…何人も人殺してきたみたいなの雰囲気だしさ!!』

彼を蔑む声が蘇る。

俺の目に映る彼の背中が、とてつもなく寂しく見える。

おかしな予感がした。

彼が今後、俺達の運命に大きくかわってくるような、そんな気が。

これから激しくなっていく“絶望”との戦いの中で、彼という存在が全てを狂わせてしまうような、そんな予感が。

一体、いつになったら彼の本性を知ることができるのだろうか？

そんな折だった。

「葛西君」

呼び止められ、振り向くと。

「小清水さん？」

先ほどの会合で全く言葉を発さなかった小清水さんが俺の後ろに立っていた。

その目に涙が浮かんでいるのを見て、彼女の不穏な心中を察した。

「ごめん…お部屋、上げてもらってもいい？」

「え、部屋に…。…うん、君がいいなら別に…」

俺は一瞬不安になったが、彼女を信じてあげることにした。

「葛西君の夢、聞いてもいい？」

俺の部屋のベッドに腰かけると、彼女は重い声で早速尋ねてきた。動機のことか気になってるのだろうか。

「…俺の夢は……」脚本で人々に希望を与えること」だよ」

「脚本で……。そっか、葛西君らしいね」

「脚本には主題があつてね。俺はいろんな作品を通じて、その主題を“希望”にしようと思つてたんだ」

あくまでも淡々と、俺は自分の夢を語る。

「……その夢、叶えたいよね」

小清水さんは感情を押し殺したような声で小さく呟く。

「確かに叶えたいけど……でも、そんなことのために人を殺したいなんて俺はこれっぽっちも思つてないよ」

俺は強くそう言い切った。

人として当然のことじゃないか。

「私……怖くて」

小清水さんは震える声でそう切り出してきた。

「子供の頃から虫さんを観察するのが好きで、世界中のいろんな形質を持つた昆虫を調べるのが大好きで。今も知りたいことがいっぱいあつて……！ それなのに……それなのになんにもできなくて！

ここにいたら何もできないのよ!!」

「小清水さん、落ち着いて！」

俺は彼女の両肩に手を乗せ、声を張った。

彼女が取り乱しているのは、それだけ夢に対して情熱的だという証拠だ。

だからこそ、謝つた道を踏ませるわけにはいかない。

「どうして……どうしてこんなことさせられてるのよ……どうして……」

涙を拭いながら彼女はしきりにそう呟いていた。

その言葉は、DVDを見せられていた時の俺と全く同じだった。

だから、彼女の気持ちは痛いほどわかる。

叶えるべき夢が確かにあるのに、それを叶えることはおろかそれに向かう努力すら封じられ、殺人という忌まわしい行為を強制されている事実。

辛くないはずがない。

初日、出会ったばかりの彼女は俺にこう言った。

『学者というものはやりたいことさえできれば同じ場所に閉じ込められていても問題ない』と。

だが、現実はそう甘くはない。

生活に不自由はないとはいえ、やりたい研究すらさせてくれないのがこの学園での現状だった。

思えばあの時、『この学園から絶対に脱出する』と声高に言っただけの俺が今こうして外に出たがる彼女を慰めることになるなんて皮肉が効いている。

「家に帰りたいよ……餌をあげないと……あの子たち死んじゃうよ……」

家で飼っている昆虫たちを案じているのか、彼女は涙声でそう囁いた。

「落ち着こう、小清水さん……。辛いのは俺も、ここにいるみんなも同じなんだよ。君だけの苦しみじゃないんだ」

「だから何なのよっ!!」

逆上して俺の肩をつかみ、激しく揺さぶってくる。

「みんな苦しいから、だからどうしたって言うのよ!! そんなこと、何の解決にもならないのよ!!」

「それは違う!!」

彼女の言葉を打ち破るのは忍びないが、彼女のためだ。

俺は言葉という名の弾丸を以て彼女の言葉を撃ち抜く。

「みんなで背負っているからこそ、俺達は団結できる!! みんなで協力して、脱出の道を探ることができるんだよっ!! 永久に出られないわけじゃないじゃないか!! きつと、きつとここを出る方法が他にあるはずなんだよ!!」

「綺麗言わないでよ!! そんなの今まで散々探したじゃない!!」

「でも、これから見つからないとは限らないじゃないか!! 俺達には仲間がいるんだ!! 誰よりも強いリュウ君や山村さん、類稀な頭脳を持つ御堂さん、どんな時でも前向きな前木君。みんなみんな、超高校級の才能を持つ仲間なんだよ!」

「……っ!」

初めて小清水さんが言葉を詰まらせる。

「モノクマも、モノパンダも、俺達の実力を見誤ってるんだ。俺達は希望。この学園に選ばれた希望なんだ! 分かってくれよ、小清水さん!」

「………っ!!」

静寂。

数秒ののち、小清水さんは涙を流しながらがつくりと頭を落とした。

依然として俺の両肩はつかんだままだ。

そしてそのまま俺を抱き寄せるようにして俺の胸に顔をうずめてきた。

「ご……ごめんなさい……。怖くて怖くて、わけわかんなくなっちゃって……。ごめんなさい……」

少し戸惑いながらも、俺は彼女の髪をそつと撫でた。

暖かくて、さらさらとした美しい赤髪だ。

「いや…俺もムキになりすぎちゃった。ごめんね」

実際のところ、言っていることは小清水さんの方が正しかった。

俺が言った言葉は全部気休め。

小清水さんが言った現実的な言葉の方がよほど重要なはずだ。

でも今は、彼女の、そして他ならぬ俺自身の精神を保つため、気休めであつてもああ言うしかなかったのだ。

感情のタガが外れたのか、小清水さんは大声を上げて泣いていた。

俺にできることといえば、そんな彼女になけなしの言葉をかけて慰めてやることだけだった。

彼女に対して恋のときめきやそれに近い感情を感じる余裕はな

かった。

内心、俺だつて救われたような気分だつたんだ。

苦しみを吐露してくれる仲間がいるというだけでも、俺には十分だ。

「ぐすつ……本当にごめんなさい……。こんな遅くまでいちやつて」

「いや、全然大丈夫だよ」

実に一時間近く彼女は俺の部屋で泣き明かしていた。

時刻は間もなく夜時間になろうとしている。

夜時間が始まれば話し合い通り山村さんが見回りを始めるはずだから、部屋に戻るタイミングは今しかないだろう。

随分と長居していた小清水さんだが、俺にとつては別に不快でもなんでもなく、むしろ彼女が部屋を去るのが寂しいとすら思えた。

「明日の朝……また、会えるよね？」

不安そうに彼女が問うてくる。

「大丈夫だよ。山村さんを信じよう」

俺は強く言った。

「絶対に無事に夜を明かすつて約束しましよ……？」

そう言つて彼女は小指を立ててきた。

「あ、うん。いいよ」

少し恥ずかしそうに笑いながらも俺は小指を組む。

「約束ね」

そうして。

俺は部屋から一步も出ることなく、夜を明かした。

ベッドに入ったのはいいが、ほとんど寝付けなかった。

不安なんか抱いちやいけない。

何も考えるな。

寝ろ。

そう自分に言いかけせているうち、時間だけが無駄に過ぎてゆく。

どれくらいの時間が経ったのだろうか。

ようやくウトウトしかけた、そんな折だった。

朦朧とする意識の中で、“あの人”の幻影がちらついていた。

『葛西きゅん！ いや、ゆつきーきゅん！ リャン様があげたホープ仮面は気に入ってるなりか？ うしし、それは嬉しい限りなり！ それじゃありャン様がゆつきーきゅんを“ホープ仮面二号”に任命してあげるなりよ!!』

これでゆつきーきゅんもリャン様の仲間なりー！

希望のために一緒に戦う、

希望の

戦士に

えっ何

いやっ

熱い

熱い熱い熱い熱っひひひひ

ぎええっ

げげっ

あっ

熱い

あつっううひひひひひひひひひひ

』

炎に巻かれ、体を大きくうねらせながら床に倒れる少女。
そんな少女を、俺は何もできぬままに見つめていた。
妙に冷静だった。

『ぐっ げっ

えっ ええ

あっ

っぎい 』

およそのものとは思えぬ面妖な悲鳴とともに少女の皮膚の表面は黒い炭と化していく。

金色の艶やかな髪も燃え去り、眼球も燃え尽きて灰と化す。
そして少女は、こちらに手を伸ばした体勢のままおぞましい遺体へと姿を変えた。

それを俺は、不気味なまでに冷静に見つめていた。

“これが、死か。”

漠然と、そう思った。

それだけだった。

なぜ、こんな夢を今見たのか。

その答えがほんの数十分後に分かるなんて、俺は予想だにしていなかった。

……ポーン……

ピンポーン……ピンポーン……

「……………」

チャイムが、鳴っていた。

アナウンスではなく、部屋のチャイムだ。

それが絶えまなく聞こえていたにもかかわらず、俺はぼんやりと天井を眺めたままだった。

理由は語るに及ぶまい、あの忌まわしい夢だ。

津川さんの死を間近で、極めて冷静に見つめていた俺。

“これが死なのか”と、傍観者のごとく客観的にそれを見下ろしていた俺。

まるで、脚本の題材を吟味するかの如く。

奇怪、という言葉のみで修飾するにはあまりにも不可思議すぎるその夢。

単純にトラウマをほじくり返された以上の意味を持つ気がしてならない。

だが、そんな考えも俺の意識が目覚め、はっきりしてくるにつれて

別の感情に支配された。

その時になつてようやく、俺は自室のチャイムが鳴り響いていることを思い出したのである。

俺は慌てて飛び起き、扉に駆け寄った。

勢いよく扉を開くと……

「葛西君!!」

小清水さんが涙を浮かべて立っていた。

彼女の目元には隈ができ、心なしか疲労困憊しているようにも見える。

しかし、とりあえずは生きていた。

ああ、よかった。

昨晚の約束、守れたね。

…なんて、悠長なことを考えている暇はなかった。

「来て!! 巴ちゃんが……巴ちゃんが……っ!!」

ゾワリ、と背筋が逆立つ。

彼女は、昨晚においては俺達の命綱ともいえる存在だ。

その彼女に何が……

廊下へと駆け出した俺が真つ先に見たもの。

それは。

廊下にうつ伏せに倒れている山村さんの姿だった。

「山村さん!!」

俺は迷わず彼女に駆け寄った。

何も考えられず、ただ彼女の状態を確認することだけを考えた。

「脈はある」

山村さんの横にしゃがみこむ夢郷君が声をかけてきた。

そんな言葉にもお構いなく、俺は彼女の首筋に触れていた。

どく、どく。

指先に、確かに彼女の鼓動を伝える感触を覚えた。

安堵ゆえなのかは分からないが、大きいため息が出ていた。

「朝、起きたら巴ちゃんが倒れてて……大急ぎでみんなを呼んだんだけど……」

小清水さんが恐怖を押し殺すように呟いた。

「まだ目覚めていない人も多い。小清水君はここで山村君を見ていてはくれないか？ 僕と葛西君は校舎内で異変が起きていないか確かめたい」

夢郷君が声をかけると、小清水さんと同時に俺は強く頷いた。

「僕はこの階を調べよう。葛西君は二階を見てくれ！」

「わかった！」

答えるが早いか、俺は一目散にエレベーターへと駆けこむ。

そして素早くボタンを押し、エレベーターが動き出すのを待つ。

グン、とエレベーターが上に上り始める。

胸がバクバクと波打つのはつきりと感じる。

何を恐れている。

何を不安げにしている。

殺し合いなど、殺し合いなど、起きるはずがない。

だが、既に一度その恐怖を味わったが故なのか、その恐るべき予想は俺の頭にこびりついて取れなかった。

誰かが、死んだ。

誰かが、殺した。

そう言った事象が、まるでそれが既に起きた現実の出来事であるかのように、俺の頭の中に何度も何度も反芻されるのである。

チーン、という音ともにエレベーターが止まる。
その扉がゆつくりと開く瞬間は、俺の人生の中で最も極限まで時が
圧縮されたかのように長く感じられた。

「……は」

声が漏れていた。

廊下には、膝をついて茫然としている前木君の姿が見えた。
授業用の一般教室……”2—A“の方を向いている。
その目は生气と光を失い、虚ろに教室の中を向いていた。

「前木君!!」

俺は迷わず駆け出していた。

彼が教室の中に見たものとは、一体……

答えはすぐに出た。

「アホ」

光を失った目のまま前木君が眩く。

整然と並んでいるはずの机は隅の方に片付けられ、一つだけ真ん中
にポツンと置かれた机と椅子。

そこに、“彼”は座っていた。

「アホ、アホアホアホ……アホ……」

だらりと両腕を垂らし。

首をありえないくらい後ろに曲げ、椅子にもたれかかっている。
頭部はもはや逆さにぶら下がっていると云っても過言ではない。

逆さに向いたその顔は、目と口を虚ろに開いたまま、永遠の静止状態へと移行していた。

「アホっ……アホアホっ……アホ……」

壊れたように怨嗟の言葉を呟き続ける前木君。

誰に対しての“アホ”なのか、俺に知る術はない。

ただ一つ分かっていることは。

この教室で、今俺の目の前で……

首の骨を折られて死んでいるのが……

“超高校級の脳科学者”、釜利谷三瓶君だということだ。

「……………あほ……」

その言葉を最後に前木君は床に崩れ落ち、この世で最も悲痛な雄叫びを上げた。



死体が、あった。

椅子の背もたれから後ろ向きに垂れ落ちた顔が、目と口を開いたままこちらを見つめていた。

その顔、服装、髪形、全てが“超高校級の脳科学者”釜利谷三瓶君そのものだった。

だが、それは釜利谷君ではない。

釜利谷君の形をした血と肉と骨の塊。

物言わぬ死体。

ただの物体にすぎない。

『死体が発見されました！ 一定の捜査時間の後、学級裁判を行います！』

モノクマの声のアナウンスだ。

いや、そんなことはこの時の俺には至極どうでもいいことだった。

前木君の慟哭がうっすらと知覚される中、俺はただその遺体をぼんやりと眺めていた。

思い出す。

蘇る。

トラッシュルームで、“あれ”を見た時の感覚。

死んだあとの人の抜け殻を、ただ何もできず見つめる感覚。

『ダチの悪口は許さねえ!』

つい一昨日にかけられた言葉が脳内を反響する。

俺は。

俺は“ダチ”だったのに。

助けてあげられなかった。

守ってあげられなかった。

気付くことすらできなかった。

『“ぐっ”“ぐ”じゃねえ!俺はガチだ!』

彼が生前に見せた優しさが蘇ってくる。

もう、耐えられなかった。

俺は床に膝をつき、涙をとめどなくこぼしていた。

声は出さなかったけれど。

…いや、出したくても出せなかったのだ。

悔しさと悲しさの相乗効果は、俺に声を出す自由すら与えてくれなかった。

ただうめき声のような音が喉の底から出てくるばかりであった。

それでも涙は止まらず。

止められるはずもなかった。

「釜利谷三瓶……こいつが被害者か」

直後、背後から声が聞こえた。

この声は……御堂さんだ。

でも、そんなことももうどうだっていいんだ。

俺はただ、この爆発しそうなほどのやるせない感情をどこに持って

いけばいいのか、その答えが知りたかった。

「ちくしょう…!!! ちくしょう!!! ちくしょう!!! ちくしょう!!! ちくしょう!!!
なんで…なんでなんで…!!! ちくしょう!!! ちくしょう!!! ちくしょう!!!
なんで…!!! ちくしょう!!! ちくしょう!!! ちくしょう!!!」

前木君の泣き叫ぶ声がガンガンと頭に響く。

「男のくせにいつまでも喚くな、騒々しい。我々が何をすべきか、もう
分かりきっているだろう?」

そう言つて御堂さんは釜利谷君の遺体に近づいた。

「ちつ…:…抜けているように見えて油断はない男だと思つていたので
がな…:…」

そして遺体に顔を近づけて凝視する。

前回と同様、彼女は異様なまでに冷静だった。

彼女の人間性を認め、評価した釜利谷君に対してでさえ。

彼女は平然としていた。

彼女はそういう人間だ。

それが彼女という人間なのだ。

前回はそれで納得していたはずの俺の心は、しかし今回はそうはい
かなかつた。

河口を噴き出る溶岩のごとく、心の底から湧き上がってくる何かを
感じた。

一言でいえば憤り。

だが、厳密にはそれとも違うよく分からない感情がこみ上げてい
た。

それはきつと、やるせない感情の矛先が彼女に向けられたことの表
れなのだろう。

「なんで…:…」

自然と声が出ていた。

顔を上げ、涙を拭つて御堂さんを見つめた。

「なんで、大人しく捜査なんかできるんだよ…:」

「逆に問おうか。なぜ二度目なのにそうやって馬鹿みたいに泣きむせ

ぶのだ?」

御堂さんは遺体の瞳を見つめて瞳孔が開いているのを確認しながらそう言い放った。

「我々は殺人が起きないように最善を尽くした。だが起きてしまった。ならば捜査するしかあるまい。何を不思議に思うことがある?」
的外れだ。

俺が言ってるのはそんなことじゃない。
なぜ分からない?

分かっているのはお前の方だ。
死んだんだぞ。

俺の、俺のダチが死んだんだぞ!!!
もっと悔しがれよ!!! 悲しがれよ!!!

今まさに御堂さんに殴りかかろうとすらしそうだった俺の襟首を
掴んだのは、前木君だった。

「やめろ...! もういい、もう無駄だ」
赤く腫れた目で俺をしっかりと睨みつけていた。

「うるさいっ!! 黙れっ!! なんで!!」
前木君の方を振り返りながら俺は咆哮する。

その瞬間、前木君は俺の襟をつかんだ腕をぐつとたぐり寄せ――

一瞬、何が起きたか分からなかった。

急に朦朧とし始めた意識の中で額に激痛を感じたのは、数秒後のことだった。

その時になって、俺は彼に真正面から頭突きを浴びせられたのだと認識した。

全力だったのだろう、俺の意識は宙に飛びかけ、前木君の額からも
僅かに血が流れだしていた。

「いいか!! よく聞け!! 三ちゃんは死んでるんだ!! 三ちゃんの
脳ミソはもう止まってるんだよ!!

俺らが何したって、もう何も感じないんだよ!!!」

分かってるよ、そんなこと。

言いたかったけど、言葉が出てこなかった。

「…俺らが何かを感じるのとは、何かを思うのは、脳ミソがそうさせてからなんだよ……。脳ミソが止まったら何もなくなるんだ…！ 記憶も消えて、無になっちまうんだ！ それが死ぬってことなんだよ！！」

流れ出る血も涙も気に留めず、前木君は叫ぶ。

御堂さんはそんな俺達の様子を時々横目で見ながら、死体の調査に取り組んでいる。

「だから……。もう何したって無駄なんだよ!! お前が御堂に何したって!! もう三ちゃんには伝わらねえんだよアホ!! 三ちゃん自身が…そう言ってたんだよ!!」

知るか。

納得できるかよ。

そんな言葉だけで、納得できるかよ。

「お前らがどう騒ごうが、起きてしまったことは元には戻らないのだ。今我々がすべきは捜査、それだけだろう?」

遺体の方を向いたまま御堂さんが告げる。

「…すまねえ……。つい……。ムキになっちまった……。傷はねえか」

急に萎びたような声で前木君は俺の額を覗き込んできた。

その様子はまるで、釜利谷君の死によって引き起こされた一時的な興奮や動揺から解放され、現実を認識し始めているようだった。

「勝手なこと言っつて…すまなかつたな……。ちよつと、落ち着かせてくれ……」

そう言っつて、前木君はふらふらと釜利谷君の方へ歩み寄った。

「軽率に遺体に触れるなよ。調査したいのならどこを調べるのか私に教えてからにしろ」

衣服のポケットを調べながら御堂さんが言ったが、前木君は遺体に触れることなく、近くにしゃがみこんだ。

何も言わず、ただ濁った瞳で釜利谷君を見つめる彼の姿を、俺は茫然と眺めていた。

彼の背中がより一層寂しく見えるのは、彼が既に一度親友を失ったのを見ていたからだろう。

土門君という親友を失った彼は裁判の日、今の俺なんかとは比べ物にならないくらい苦しんだはずだ。

それでもそれを乗り越えて、頑張つて生きていたのに。

もう一人の大切な親友を失ってしまった。

「妙だな」

ふと御堂さんが立ち上がって言った。

「動機を発表した。殺し合いも起きた。死体発見アナウンスも鳴った。もうそろそろ“奴”が出てきてもおかしくはないはずだが」

そう言つてあたりを見回す。

彼女の言う“奴”……間違いなく、あの忌まわしいヌイグルミのことだろう。

今この状況であいつらの姿なんて想像もしたくないが、殺し合いが起こつてしまった以上意気揚々とあいつらが出てくるのは必定。

だが、今回は出てくる様子がない。

「おーい!!」

場の静寂を突き破つて廊下から大声が響いてきた。

声からして夢郷君なのだろうが、寡黙な彼が大声を出しているということ自体、状況の異常さを物語っている。

「どこにいるんだ、みんな!!」

「私ならここにいますぞ」

御堂さんが廊下に出て呼びかけた。

「絶望とやらに目を向ける覚悟があるのなら、教室の中に入ってみるがいい」

御堂さんのその言葉も意に介さぬかのように、彼はすぐに教室に入ってきた。

そして、教室の中の光景を見て、硬直し……

「……っ!! そんな…バカなっ…!!」

「貴様も先ほどアナウンスを聞いたのなら分かるだろう？ こいつは、釜利谷三瓶は、殺された」

重く、静かな、しかし現実味のある声で御堂さんは告げた。

夢郷君は目を見開いて遺体を見つめ、がくがくと顎を震わせた。

「な、なんてことだ…ここ、こんなことが……」

「全く、どいつもこいつもこんなでは困るな。捜査には我々の命がかかっている。前回、土門隆信がどうなったかはつきり見ただろう？ ああなることを受け入れられるのか？ 嫌だったらさっさと現実を認めろ」

しばし茫然とした後、夢郷君は暗い表情で足元を見つめながら呟いた。

「違う…そうじゃないんだ…」

「…なんだと？」

御堂さんが怪訝そうな顔をする。

「この校舎内で、僕らの理解を超えることが起きてしまったようだ……なんということだ……」

「おい、夢郷郷夢。事実をぼかすな。貴様の言うことは何を意味する？ 理解を超えることとはなんだ？」

「…大ホール。そこに行けば、全て分かる」

「……ちっ」

舌打ちだけを残して、御堂さんは廊下へと出ていった。

自然と、俺はその後を追っていた。

前木君の必死の訴えのおかげで幾分か冷静になれたためだろうか。

しかしながら、胸の内では夢郷君が放った言葉への探求心と不安とが混ざり合って複雑な感情を織りなしていた。

それでも、目は背けられない。

俺が続けてエレベーターに入ってきてても、御堂さんは何も言わな

かった。

ただ押し黙って何かを考え込んでいるかのような様子だった。

やがて、エレベーターはホール階に辿り着く。

薄暗く、短い廊下に足を踏みつけて俺はしつかりと歩を進めた。

心はもう、半ば自暴自棄といってもよいものだった。

俺達の前途、既に絶望は確約されている。

鬼が出るか蛇が出るか、そのくらいの心持ちで臨まねば耐えきれない。

俺はもう、大切な友人を三人失った。

もう、どうにでもなれだ。

だが、そんな気持ちですら押しつぶされそうになるほどの光景がそこには広がっていた。

大ホールは、いつもとは打って変わって薄暗く照らされていた。

それは恐らく、大ホールの巨大で絢爛な照明のほとんどが割られてしまっているためだろう。

木造りの床は無事な箇所を見つけるのが困難なほど傷がつき、あちこちに砕けた硬球や金属片、折れ曲がった刀や槍が転がったり突き刺さったりしている。

向かって右の方には巨大なシヨベルカーが横向きに倒れこんでいるのではないか。

何より異常なのは、そこら中に落ちている機械片を内包した綿の塊。

辛うじて無事な部分の外形を見るに、それはモノクマやモノパンダたちの残骸である。

この異様すぎる光景に対する効果的な説明について、俺は何もそれらしいものを思い浮かべるには至らなかった。

横に立つ御堂さんですら戦慄したかのように押し黙っている。

そう……すべての疑問の終着点は。

大ホールの中央にあった。

俺たちから見て真正面。

『補習』と書かれた巨大な鉄塊が床にめり込むように落ちていた。
その鉄塊にもたれかかるように倒れていたのは。

いや。

あつてはならない。

こんなこと、ありえるはずがない。

なぜだ。

なぜなんだ。

俺達の正面には。

胸に槍が突き刺さったりユウ君が、物言わぬ死体となっていた。



― “力など、絶望の前には無に等しい”

― “残念ながら、お前はただの敗北者だ”

― “龍雅・フォン・グラディウス”

― “さようなら”



『死体が発見されました！ 一定の捜査時間の後、学級裁判を行います！』

「……………え、」

無意識のうちに声が漏れていた。

眼前の光景を、脳が光景として認識できていなかった。

だって、そうだろう。

俺の目の前に座り込んだまま息絶えているのが……

誰よりも強く、聡明で、殺されるはずなどなかった彼なのだから。

初日、大ホールで見せた圧倒的なスピード。

それは、彼が人間という枠組みすらもはるかに超越した実力がある

ことを物語っていた。

そんな彼が。

やすやすと誰かに殺されるはずがなかった。

“なかった”としか言えないのが事実。

だって、今彼は俺達の目の前で息絶えているのだから。



夢郷君の呼びかけにより、未だ目を覚ましていなかった人達もようやく駆けつけてきた。

「ふ、二人……二人も亡くなられたというのですか!？」

丹沢君が足を震わせながら驚嘆の声を上げた。

「う……………うう…あ……………」

亞桐さんは床に膝をつき、泣きじゃくるばかりだった。

「なぜ…なぜ…！！ 対策は万全だったはずなのに…なぜこんなことが…！！」

入間君の悲嘆の音が耳に痛い。

そんな中、目を覚ました山村さんはただ黙って立っていた。

生気を失った絶望の表情を浮かべながら。

昨晚校舎内の見回り役を買って出た彼女は、その決意の表れなのか、普段のセーラー服ではなく、空手の道着を着用していた。

だが、そんな覚悟も意志も、意識の彼方に吹っ飛んでしまったようだ。

「……………」

山村さんは、口をかすかに開いたまま、青白い顔でひたすらに正面を見つめていた。

視線の先にあるのは、彼女に“強さ”を教えてくれた人物。

この一週間余りの生活で彼女が最も強く尊敬していた人。

「な、んで」

そう呟くのも無理はない。

それは、ここにいる誰もが思っていることだ。

『ぎっひゃひゃひゃひゃー！！！！ ぎひゃ、ぐひゃツガガガ』

聞こえてきた。

あの不快な笑い声……

……ん？

いつもの笑い声に交じって、ノイズのようなものまで聞こえる。

『ガガガーちくしよ、マイクの調子が悪ザザーツ』

そう言いながら俺達の足元に出てきたのは、見るも無残な壊れかけのモノパンダだった。

外装はところどころが千切れて綿、さらには内蔵機械が露出し、耳も片方失っている。

「な、なんたることぞ、これは」

安藤さんが訝しげにつぶやく。

『えー、ザザー、とうとう起きちまったなあ、二度目の事件！ ガガガ』

「それよりもまず貴様のその状態についての説明を求めたいのだが」

間髪を入れず御堂さんが問う。

『ああ、これは、そのー、ザザザー……これもオメーラが解き明かす謎の一つってことだよ！』

「なによそれ……！ ふざけんなよ……！」

亞桐さんが悲痛な声を上げるが、モノパンダは取り合うそぶりを見せなかった。

『とりあえずガガガ、こいつを生徒手帳にザザ、転送しとくぜ！』

その声とともに電子生徒手帳から電子音が鳴る。

『それじゃあ今回もガー、オメーラが真実に辿り着けるか楽しみに待ってるぜ！』

それだけ言い残してモノパンダはさっさと瓦礫の中へと入って行ってしまった。

「ん？ モノパンダの背中……」

……なにやら、縫合したような跡がある。

「二名の被害者にボロボロのモノパンダに大ホールの有様……。これを一度に説明しろと言うのですか！ いくらなんでもそれは……」

「不可能でもあるまい」

丹沢君が言いかけた嘆きの言葉を、御堂さんが遮る。

「大ホールの状況をよく見る。鉄塊やらシヨベルカーやらは我々のあずかり知るところではないが、こいつは我々のなじみの深いものだろう？」

そう言って彼女はモノクマの残骸を拾い上げた。

「これが何を意味するものなのか、考察の余地は十分にある」

モノクマの残骸が意味すること……。

「まあいい。議論は後でできるのだ、今は証拠を集めることに専念しろ」

どこまでも冷静な彼女の助言に従い、捜査が開始された。

「裁判が終わるまでは誰も信用しないことだな。事件が起こった以

上、ここに立つ全員が敵と思え」

【コトダマ入手：大ホールの状況

大ホールには謎の物体とともにモノクマやモノパンダの残骸が散乱していた。

【コトダマ入手：壊れかけのモノパンダ

葛西達の前に現れたモノパンダは何故かボロボロで、マイクもまともにも機能していなかった。しかし、背中に縫合したような跡がある。

《捜査開始》

みんなが捜査のために解散すると、俺はまず正面に座るリュウ君の遺体へと近寄った。

「それにしても未だに信じられませぬ……バトル漫画顔負けの強さのこの御仁が、こうもあっさりと……」

丹沢君が悲しげな目で遺体を見つめていた。

「ところで、モノモノファイルによりますと、死因は胸を刺されたことによる失血死のようですな……。この通りお胸に槍が突き刺さっているわけですし、これが死因とみて間違いなようですな」

彼の言葉通り、リュウ君の胸には深々と黒い槍が突き刺さっていた。

同じ型の槍が何本もそこら中に転がっており、激闘の跡を思わせる。

俺はまず、手元の電子生徒手帳からモノモノファイルを開いた。

『ザ・モノモノファイル②―2

被害者はリュウ。死因は胸を刺されたことによる失血死。全身に傷跡あり。』

……これだけか。

今回は死亡推定時刻についての記述がない。

つまり、それすらも俺達の推測で当てなくてはならないということか。

「全身に傷跡あり」の記述通り、顔や手にはいくつも傷が見受けられる。

やはり、彼は……

そのとき、一人の人物が遺体の前まで進み出てきた。

「山村さん……」

ガクリ、と彼女はリュウ君の目前で膝をついた。

「わ たし が 」

唇を小さく震わせながら微かな言葉を漏らした。

「 弱 か っ た か ら 」

違う、そうじゃない。

そんなはずあるもんか。

そう言えばよかったのに。

喉まで出かかっていたのに。

言えなかった。

俺が、俺なんかが彼女の覚悟を全て理解したかのような言葉なんて吐いちやいけないと思った。

裁判の時、自分のすぐ近くで殺されたにもかかわらず津川さんを守れなかったと知った彼女は。

周囲の目も気にせず、膝をついた。

もうこの世にはいない相手に向かって伏して謝罪し、大声を上げて泣いていた。

死ぬほど悔しかったはずだ。

だからこそ、今回こそは絶対にみんなを守り切ると誓っていたんだろう。

それなのに、この結果だ。

いつそ自分が殺されていた方が楽だったのかもしれない。

「 助 け て 」

自我が崩壊しかけた彼女が発した言葉は、実に気弱なものだった。

「 も う 嫌 …… な に 」

も か も 「

堰を切ったかのように彼女の瞳から大粒の涙が零れ落ちる。

それはリュウ君の膝元に零れ落ちる。

だが、最強の男であったはずの彼は、山村さんが見せた涙に何の反応も示さなかった。

そこで泣きむせぶのは最早孤高の空手家ではなく、ただの傷ついた少女だった。

「…葛西殿、このような時に言いにくいのですが……」

丹沢君の声が横から差し込まれてくる。

「リュウ殿の体をよく見てくださりませぬか？ 包帯が巻いてあります」

「……え？」

床に倒れ伏して泣いている山村さんに配慮しつつ、俺は彼のコートをめくってみた。

コートの下には制服のワイシャツを着ている。

だが、さらにそれをはだけさせると、朱に染まった包帯が体に巻かれているのがはつきりと見えた。

どこか腑に落ちない違和感がある。

一体なんだろうか？

「コトダマ入手：血塗られた包帯

リュウの体には包帯が巻かれていた。リュウが自分で巻いたものと思われる。

とりあえず、今調べるべき場所はどこなのか。

答えはすぐに見つかった。

二階、2-A。

そこには、依然として釜利谷君が椅子にもたれかかっていた。ダラリと首を後ろに垂らして。

すぐさまその遺体から顔を背けなくなった俺は、すかさずポケットから電子生徒手帳を取り出した。

『ザ・モノモノファイル②—1

被害者は“超高校級の脳科学者”、釜利谷三瓶。死因は脊椎骨折による脊髄損傷。ほぼ即死。』

こちらも被害時刻に関する記述はなし。

「もつと……お話とか……したかった……のに……」

背後から声があったので振り返ると、俺に続いて入ってきた亞桐さんが涙ぐむ眼元を拭っていた。

「なんでだよ……なんで……殺したりするんだよ……」

知るかよ、そんなこと。

人殺しが何を考えるかなんて、分かるわけないだろ。

「……亞桐さん。捜査、しようよ」

俺はあくまでも淡々とそう言った。

少し言い方が冷たすぎただろうか。

これじゃあ御堂さんのことを悪く言えないな。

「うん。うん……。分かってる。ごめんね」

震えた声ながらも、彼女は釜利谷君の遺体へと歩み寄っていった。

「……………ん？」

亞桐さんの言葉を聞いて思わずうつむいた俺は、足元に何かが落ちていたのを見つけた。

白い、細長いもの……？

俺はしやがみこんでその物体を拾った。

柔らかく、紙でできた……

「吸い殻……？」

煙草の吸い殻だ。

なんでこんなものが、こんなところに……？

【コトダマ入手：落ちていた吸い殻

2—Aに一本だけ落ちていた煙草の吸い殻。

「ねえ、葛西」

亞桐さんの声が俺の思考を遮った。

「ポケット探してみたら…なんか…紙切れが出てきたんだけど……」

紙切れ…？

受け取ってみると、それはノートの一ページを切り取ったような大ききの紙切れだった。

文字がプリントしてある。

『一筆啓上 釜利谷三瓶

貴殿の正体を看破した。AM2:00、2-Aまで。来る来ないは貴殿の自由に。』

これは……？

「2-Aって…このことだよね……？ ってことは、さ……」

「この紙は…犯人から釜利谷君に宛てた”呼び出し状” って…ことなのか…？」

【コトダマ入手：呼び出し状

釜利谷に当てたと思われる書状。文字がプリントされている。

続けて俺は部屋をぐるりと見渡した。

教室の真ん中に釜利谷君が座る机椅子がポツンと置かれ、他のものは隅の方に片付けられている。

特に目新しいことはない、と思っただが……？

「なんだ、これ……」

壁に突き刺さっている銀の物体。

引き抜いてみると、細いナイフ状の金属だった。

「メス………？」

脚本家という才能柄、医療系の作品を鑑賞することもよくある俺だが、その感性から言わせてもらおうと、間違いなくこれは手術道具のメ

スだ。

「葛西？　どうかしたの？」

「いや……これって…メス……だよね…？」

不思議そうな顔をする亞桐さんに俺はメスらしきものを見せる。

「メスって……手術する時に使うやつ…？」

「なんでこんなものが……？　そもそも誰がこんなものを持っていたんだ…？」

謎は深まるばかりだ。

とりあえず後から来た人にも分かるよう、メスは落ちないように元の場所に刺しなおした。

「コトダマ入手：刺さったメス

メスが壁に突き刺さっていた。誰の所持品かは不明。

他に目新しいものも見つからず、俺は亞桐さんと別れて2―Aを後にした。
すると。

「おや、葛西殿であるか。進捗のほどはいかがかろう？」

メモとペンを持った安藤さんが待ち構えていたかのように話しかけてきた。

「…まずまず、ってところかな。そっちは？」

「さっぱりであーる!!」

ない胸を張って安藤さんは高らかに言い放った。

ため息しか出ない。

「…あ、でもちよつとだけおかしなところはあったかろう？」

その言葉を聞いて、ガクリと落ちかけていた顔を一気に上げた。

「聞かせてもらっていい？」

「えーつと…うーんと……そうじゃ！　技術室にさっき行ったのだが

の、なんだか散らかっていたし焦っていたのだぞよ!!」

「……………??」

一瞬、その状況が頭に思い浮かんでこなかった。

「あとは、そうじゃな！ 伊丹のゆきみ殿がこう申しておったぞよ!!

” 死体発見アナウンスがおかしい”とか!」

「……? 詳しく聞かせてほしいんだけど」

「うむ！ 釜利谷殿を発見した時とリュウ殿の遺体を発見した時では、遺体発見からアナウンスが鳴るまでの時間が違ったと申しておったの!」

そうだったかな…?

両者とも、俺が駆け付けてすぐにアナウンスが鳴った気がするけど…。

いや、そうとも言えない。

釜利谷君の遺体の第一発見者は前木君。

リュウ君の遺体の第一発見者は夢郷君。

前木君は少なくとも俺が駆け付ける数分以上前には既に見つけていたはず。

なぜなら、俺が目覚まして廊下に出た時には、夢郷君と小清水さん、それと気を失っていた山村さんしかおらず、起きていた二人も前木君を目撃したとも言っていないからだった。

これはつまり、前木君がかなり早い段階で2—Aを訪れていたということを表す。

そして、アナウンスが鳴ったのは、俺が釜利谷君を発見した直後。

その間、5分〜10分程度の時差がある。

それに対し、夢郷君がリュウ君を見つけたのは、恐らく俺が釜利谷君の遺体を発見したのとほぼ同時。

アナウンスが鳴ったのは、俺と御堂さんが大ホールに駆け付けた直後。

夢郷君が俺たちを呼びに来た時間を考慮しても、その時差は五分に満たないはずである。

明らかにおかしい。

きっと、何か法則がある。

その法則を遵守する形でアナウンスは放送されているに違いない。

それが分かれれば、大きな手掛かりになるんだけど……

【コトダマ入手：死体発見アナウンスの謎】

一回目のアナウンスは、前木と葛西が釜利谷の遺体を発見した際に鳴った。二回目のアナウンスは、一度夢郷が遺体を発見した後、葛西と御堂が改めて発見した際に鳴った。

早く技術室に行きたい気持ちは山々だったが、せっかく安藤さんにあつたので、これだけは聞いておくことにした。

「一つ聞かせてほしいんだけど……昨晚、君はどこで何をしていたの？」

「んな?？」と安藤さんは怪訝な顔をする。

「何を聞かれるかと思えば、葛西殿！ 昨晚は山村殿が見回りをするから、〃 全員部屋で待機する〃 という約束だったではないかつ!! まあ、起きてみたら二人が死んでいて一人が気絶しているというワケワカラン展開になっていたのであるがのう……。ああっ、なんと怪奇!! ホラー漫画もサスペンス漫画も顔負けだぞよっ!!」

…そうだった。

ここまでの出来事があまりに印象深すぎて完全に失念していた。

俺達には、かなり弱いものではあるけれど……全員にアリバイがある。

じゃあ今回の犯人は、どうやって犯行を行ったんだ?

どうやって、山村さんの警戒網を潜り抜け、犯行に及べたのだろうか?

謎は深まるばかりだった。

【コトダマ入手：山村の見回り】

事件が起きた晩は、山村が校舎内を見回っており、部屋から出ることは不可能だった。

聞けることは聞き終わつただろう。

「捜査熱心よのう」と感心して呟く安藤さんを残して、俺は技術室に向かった。

ドアを開けた瞬間、鼻を突いた臭い。

それは、焦げた木材と火薬の臭気だった。

「なんだ、これは……」

目の前にある作業台、それと壁の一部にくっきりとつけられた焦げ跡。

明確に破損している個所はないが、作業台の木材は若干傷ついているように見える。

この教室で何が起きたっていうんだ……？

「コトダマ入手：技術室の焦げ跡

技術室の壁や備品に焦げ跡があった。火災というには被害が小さすぎる。

この状況が既に不自然ではあるが、俺は続けて部屋の中を見回した。

まだ異様な点が見つかるかもしれない以上、手を抜くわけにはいかない。

「……………？」

ほら、見つかった。

何やら床に機械の部品のようなものが転がっている。

細かい部品がたくさん、だ。

近くの引き出しは乱暴に開けてあり、その中には紙切れのようなものが突っ込まれていた。

恐る恐る取り出してみると、それはクシャクシャに丸められていた。

それを少しずつ開き、表記されている文字に目を通した。

『お手軽！ 手製爆弾の作り方』

「手製、爆弾……？」

以降の内容をざっくり読むと、簡易な爆弾の製作法が載っていた。分かりやすい記述であり、これを読めば機械音痴や素人でも簡単に爆弾を作れそうだ。

『④の引き出しにある端子を取り出す』

この記述に目が留まった。

引き出しを見ると、①、②、③……という具合にそれぞれの引き出し

に番号が振ってある。

ひよっとして、この説明書の番号と対応しているのだろうか？
そう思つて④の引き出しを開けてみると、精密な機械端子がズラリと並んでいる。

しかもそれらの端子の中に一か所だけ空白になっている部分がある。

つまり、端子が一つなくなっているのだ。

これが何を意味するのか、考えなければならぬだろう。

【コトダマ入手：製図と部品】

技術室には簡易爆弾を製作するための説明書と部品が用意してあった。

この技術室で何かがあつた。

それを確信して捜査を続けるうち、俺はもう一つの違和感に気付く。

「モニターが……傾いている……？」

ように……思えた。

他の部屋に比べ、技術室のモニターは比較的低いところに設置してある。

それゆえ、その違和感を確かなものとして認識することができたのだろう。

近づいて確かめてみると、確かに水平面より少し傾いている。

……壊れているのだろうか？

続けて壁に顔をつけ、モニターの裏側をのぞいてみる。

「……………!!」

裏側はネジが取り外され、パカツと開いている。

中にある精密機械もよく見えるほどだ。

これじゃあこのモニターは映らないだろう。

一体、だれが何のためにこんなことを……？

【コトダマ入手：モニターの破損】

技術室のモニターは裏側が取り外され、破損していた。中の部品も少し紛失している模様。

技術室をさらにくまなく調べ上げた後、俺は部屋を後にした。ここまでの捜査ですでに時間を使いすぎてしまった気がする…。誰かと協力して捜査すれば、はかどるんだろうけど……。

『ここにいる全員を敵と思え』

御堂さんの容赦ない言葉が胸に突き刺さる。

この言葉が、俺に協力して捜査させる気概を奪っていた。

あれだけ優しい笑顔を浮かべていた土門君が、人を手にかけてしまったんだ。

あれだけみんなを励ましてくれた津川さんが、命を絶とうとしたのだ。

人の感情など、普段見せる輝かしい姿など、もう信用することはできない。

そう、自分に言い聞かせた直後だった。

「葛西君」

背後から声。

「…小清水さん」

赤く腫れた目が、彼女の心情を端的に表していた。

昨晚からずっと泣き明かしていたのだ、そうなるのも無理はない。

「捜査、進んでる？」

彼女はややうつむいた顔のまま問いかけてきた。

「……どうだろうね……分からないや……」

その問いは先ほど安藤さんに投げかけられたものと全く同様であるにもかかわらず、俺は同じように答えることができなかった。

「私は化学室を調べてね。なんていうか……昆虫学者って言っても根は科学者だから、化学室の備品とか気になることが多くて、それで……薬品の名前とか量とか覚えてたから、何か事件前と変わってないかな……って思って調べただけど……」

そこで、彼女はやや言葉を濁す。

「何も…変わってなかったの。役立たずだよね、私」

そう言つて、自嘲するように強張つた笑みを浮かべた。
役立たずなんかじゃないよ、と安い言葉で励ますのは簡単だ。
だが、それでは彼女も、そして俺自身も満足できないような気がした。

「一緒に、捜査しようよー!」

なぜ、口をついて出た言葉がそれだったのだろうか。

だって、誰かと協力して捜査するという行為はさつき俺自身が脳内から排除したのだから。

その上でこんなことを言うなんて、俺は頭がおかしいんじゃないだろうか。

いや、排除した可能性だからこそ俺はそれを呟いたのだ。

それが、俺にとって最も彼女への信頼を証明できる行いなのだから。

無論、先ほどの俺の考えを看破できるはずもない彼女にとっては証明でもなんでもないのだろうが、それでもいい。

これは他ならぬ俺自身への証明なのだ。

「そうだ! 更衣室だよ! 更衣室はそれぞれの性別の部屋にしか入れないからさ、俺と小清水さんが二手に分かれれば両方の更衣室を同時に探れるよ!」

俺は、たつた今頭に浮かんだアイデアを、これ見よがしに彼女に披露した。

彼女は数秒間黙っていたが。

「……うん。そうね。ありがとう」

小さな声で微笑みながら呟いた。

こんな状況ながら、不謹慎なことに俺は微かな胸の高鳴りを覚えていた。

「……化学室には何もなかった」っていうのも立派な捜査結果だよ。それが分かったのも大きな一歩さ。いちいち凹むことないよ。"ゴキブリさん"みたく、しぶとい心を持たなきゃ!」

そういえば、前の捜査の時には前木君にこんなことを言った気がする。

「ごめんね、心配かけて」

小清水さんの微笑みは微かなものではなく、確かな形をもって俺に投げかけられてきた。

正直言つて“ゴキブリさん”は苦手だが、彼女を励ますという点において我ながら良い言葉選びだったと自負した。

ともあれ更衣室に辿り着き、捜査を始めたのだが、驚くほどに発見がない。

というか、最後に入ったのは数日前のプール大会の時であり、その時もあまりよく見なかったので違うが分からないのだ。

あの時から何か変わっただろうか…？

分からない。

俺は数日前、みんなを着替えていたころの記憶を必死に呼び覚ます。

リュウ君に釜利谷君。

思えば、プール大会の猛者二人がいなくなってしまったわけだ。

次の大会はレベルの低い戦いになってしまっただけだ。

…なんて、辛気臭いことを考えている場合じゃないんだ。

何か、何か変なところはないか。

ロッカーの中とか…

「……………」

ロッカーはいつの間に物置になったのか、雑誌やら哲学書やらフィギュアコレクションが詰まっていた。

その中に一つ、よく分からないものが混じっていた。

何かの機械？…のようなものだ。

取り出してみようと、木と金属を組み合わせて作った粗末なものだ。

何に使うものなのか全くわからない。

電動髭剃りのような片手サイズの物体であり、グリップの部分にボタンがある。

興味本位でそれを押すと…

「うわっ!!」

バチツ、という大きな音とともに、先端部の金属の隙間を稲妻が走った。

つまりこの物体は。

「スタンガン……?」

……ってことになる…。

これは誰のものなんだろう?

【コトダマ入手：更衣室のスタンガン

男子更衣室のロッカーの中には、粗末なつくりのスタンガンが置いてあった。所有者不明。

その他には何も見出せた発見はなく、不安を胸に俺は男子更衣室を後にした。

そしてプールで小清水さんと合流。

女子更衣室にもこれといった異変はなかったらしく、プールも二人で探ったが、暗い水面が揺らぐその空間に異変は感じられなかった。

「ねえ。もう一度、大ホールに戻って見ない?」

提案したのは小清水さんだった。

「やっぱり、今回の事件で一番怪しいっていうか、いろいろおかしかったのはあそこだと思うし……まだ調べきれいていないことがたくさん残ってそうだなって思ってた」

正論だった。

結局、俺は小清水さんとともに、最初に調査した大ホールへと戻ることにした。

「……………」

改めてみても、悲惨な状況である。

よくよく見ると、大ホールの床や壁にはいろいろなところに血が飛び散っている。

ヌイグルミたちが出血などするはずもない以上、この血は全て人から出たものということになる。

やはり、この場所で何か恐ろしいことが起きたのは間違いないよ

うだ。

リュウ君の遺体の前には、山村さんがまだ膝をついてうなだれていた。

彼女のリュウ君への慕い具合を思い返せば、未だ立ち直れないのも無理はないことだ。

仲のいい小清水ですら、かける言葉が見つからずに黙るばかりだった。

「……ん？」

足元に視線を落とした小清水さんが声を上げる。

「リュウ君、何か握ってるみたい……」

俺はそれを聞いてすぐにリュウ君の手に目を向けた。

ぐつと握られた手の中から、少し白い紙がのぞいていた。

「…見てみる？」

恐る恐る問うと、小清水さんは気乗りしない表情ながらも小さく頷いた。

何か手掛かりがありそうな以上、調べないわけにはいかない。

リュウ君のすぐ横にしゃがみこむ。

目の前に来ても、死んだような目で床を見つめる山村さんは全く反応を示さなかった。

俺はリュウ君の右手に触れた。

体温を失ったその肉体は冷蔵庫にしまわれた肉のように冷たく、それでいて硬質ゴムのように固かった。

それでも俺は勇気を出して彼の指を一本一本開いてゆく。

遺体でありながら今にも動き出しそうなほどの威迫を保つたリュウ君の姿に固唾を飲みながらも、何とか俺は紙切れを取り出した。

先ほどの技術室の製図の例もあって、俺は小走りで遺体から離れると、躊躇わずにそれを読みだしていた。

これより俺は“絶望”に対し行動を起こす。

しかし、万一の場合に備え、真実を記した書をしたためておくこととする。なお、この手記は個室に置けばモノクマ共に排除される恐れがある故、俺が所持しておくものとする。

非常時につき、全てをありのままに記す。

俺の名は“龍雅・フォン・グラディウス”。 “超高校級の殺し屋”として入学した。

俺は自らの目的を失念していたが、とあるきっかけにより思い出すことができた。

俺の目的は、“超高校級の絶望”の抹殺。ただそれだけである。

手短に話す、これより記すことは全て俺が知りえた真実である。決して虚実ではないことをここに宣言する。心して拝読されたい。

第一に、モノクマとモノパンダを操るものは“超高校級の絶望”である。俺はこれより奴らを排除すべく行動に出る所存である。

第二に、この学園生活を過ごす者達にも、“超高校級の絶望”の一味たるものが複数人紛れ込んでいる。その者についても残さず排除する。

念のため、ここに俺が突き止めた“絶望”の正体を記しておく。

俺が仕留め損ねることはあり得ぬが、万一のことあらば、同級生といえど容赦は無用である。

その名を、以下に記述し』

紙は破かれており、そこまでしか読めなかった。

いや、それよりも。

もしこれが彼の書いた本物の書だとしたら……。

彼の正体は、“超高校級の殺し屋”だったというのか??

何という、笑えない冗談だ。

初日、リュウ君を始めてみた俺は、彼の才能を冗談半分で『殺し屋なんじゃないか』と疑っていた。

まさかそれが当たっているなんて。

寡黙で、纏う雰囲気は時として恐ろしいものになることもあったのだが、一週間余りの共同生活で分かったこともあった。

人を手にかけるような人物ではなく、仲間として信用するに足る人だと信じていた。

そんな彼が、殺し屋だったなんて。

殺し屋・“龍雅・フォン・グラディウス”だったなんて。

【コトダマ入手：決意表明】

リュウが握りしめていた紙切れ。黒幕に戦いを挑む覚悟と、自らの正体について書かれている。

「…葛西君、大丈夫？」

小清水さんの言葉で我に返った。

「それ、何が書いてあったの？」

俺はこの書を彼女に見せるべきか悩み、そして。

「…後で話すよ。とりあえず今は捜査を優先しよう」

小刻みに震える声でそう告げた。

小清水さんだつて、この書置きを見たら動揺するのは間違いない。

これ以上、無駄に彼女の心を揺さぶるようなことはしたくない。

どうせ裁判で公開することになるのだから、今すぐ見せる必要もないはずだ。

小清水さんも俺の表情から何かを察したように小さく頷く。

「でね、葛西君。あなたがそれを読んでいる間に、足元にこんなのが落ちていたのを見つけたのよ」

そう言つて小清水さんが俺に見せたもの、それは俺にとつても見慣れたものだった。

「リュウ君の電子生徒手帳…？？」

俺はそれを受け取り、電源を入れてみる。

『超高校級の殺し屋 龍雅・フォン・グラディウス』

その文字が表示されたので俺はそれとなく小清水さんに見えない角度に持ち直した。

そして、その表示から、先ほどの決意表明が虚を交えていないことを悟った。

彼は、本当に殺人鬼だったということだ。

「これね、リュウ君からちよつと離れていたところに落ちていたのよ。なんでそんなところにあつたのかなーって」

「何かの拍子に彼のポケットから落ちただけじゃないかな……」

うーん……と小清水さんはうなり声を上げる。

「やつぱりそうなのかな……」

「……でも、とりあえずは覚えておくことにするよ。ありがとう」

あまり重要な発見には思えないが、彼女の発見を無駄にするわけにもいかず、こう答えることにした。

【コトダマ入手：リュウの電子生徒手帳】

リュウの生徒手帳が離れたところに落ちていた。何かの拍子に落ちただけかもしれない……。

決意表明という大きな捜査材料を手に入れ、満足とばかりに大ホールを後にしようとした時だった。

「ねえ……やつぱり、放っておけないよ」

小清水さんが今にも泣きそうな声で呟いた。

彼女が何に対してそう言っているのか、すぐわかった。

リュウ君の前に座り込んで放心状態になっている山村さんのことだろう。

「でも……変に声をかけた方が傷つけちゃうよ……」

「分かってるけど……でも……見てられないよ……巴ちゃんのおんな姿……」

「だいじょうぶ、です」

意外なことに、本人から声が返ってきた。

ゆらりと立ち上がった山村さんは、少しかがみこんでリュウ君の顔を覗き込んだ。

彼女の背後に立っていた俺達からは彼女の表情は見えなかったが、一体どのような表情をしていただろうか。

「……………」

何も言わぬまま、山村さんはリュウ君の頭を抱え込んだ。

何かを囁いているようにも見えた。

そのあたりからだった。

彼女の周囲を、赤い光が纏い始めたのは。

リュウ君から離れると、山村さんは彼の袖をまくり、腕に巻いてある血に染まった包帯を外し始めた。

ある程度の長さ外すとそれを引きちぎり、自らの額に巻き付けた。彼女を包む赤いオーラは確実に光度を増していく。

そして最後に、自らの両袖に手をかけ、勢いよくそれを引きちぎった。

「山村さん……?」

俺には初め、彼女の行動の意図がよくつかめなかった。

「私は　オレは」

小さな、されど確かな重みを含ませた言葉を彼女は呟く。

はち切れんほどのオーラが俺の全身を撫でるにつれて、そこから彼女自身の思惑が伝わってくるような気がした。

「もう　迷わ　ねえ」

未だぎこちなくはあるが、それでも芯のある口調で山村さんは呟いた。

彼女から伝わる感情は、犯人への憤りでも無力な自分への憎悪でもない。

言葉にできぬ覚悟と情熱とが融和し、その空間に立つ俺と小清水さんに不思議な感動を与えていた。

「オレ　は……　お前　を　……」

次第に山村さんの言葉は冷静さを取り戻しているように感じた。

「…お前　の　すべてを、オレが　受け継ぐ」

彼女は静かに言い放った。

そして振り返る。

俺と向き合った表情は、気高い戦士の顔。

しかしその頬には二筋の涙が伝っている。

「そして、必ずお前を超えてやる……」

そう言って彼女は歩み出す。

リュウ喰への未練を断ち切るかのように、強く、重い足取りで、歩く。

『ピンポンパンポーン』

そんな山村さんの姿を全て見ていたかのように、そのアナウンスは絶妙なタイミングで鳴り響いた。

「ガガガ……えーと、オイラのマイクの調子もまだちよつと不安定だけど、ガガガ…捜査時間終了だぜ!! オイラもそんなに気が長い方じゃないからな! パンダつつつても、根はクマだからな!! そーゆーわけで、全員エレベーターの方に集合をお願いするぜー!」

調子のいい一方的な命令をして、アナウンスは終わる。

「上等だアツ!!!」

山村さんの咆哮が、既に映像の途切れた大ホールのモニターに向かって浴びせられた。

「オレは勝つ……!! モノクマだろうが犯人だろうが……オレは勝つだけだ!!」

そして悠然と大ホールを後にする。

その背中は、心なしか数日前に見たリュウ君のそれと重なっているように思えた。

「…じゃ、私たちも行こっか」

彼女の姿を見送った後、小清水さんが言った。

「うん…」と小声で呟いた後、俺は歩き出した。

先週の裁判が脳裏に浮かび、頭痛のような激しい不快感に襲われる。

同じことを繰り返すのだと分かっているでもそれを止められない状況そのものに反吐が出る思いだ。

だが、前回とは違って、みんなは成長している。

小清水さんも、山村さんも、そして恐らくは俺自身も、強くなったはずだ。

そう信じて、俺はエレベーターまでの一步一步を踏みしめて歩い

た。

エレベーターに集まった人数は11人。

前回の裁判から3人が抜け、エレベーターが広く感じられる。

「そうだ、葛西君。これを君に渡しておこうか」

突然そう言ってきたのは夢郷君だ。

そういえば、今回の捜査時間にはあまり多くの人に出会わなかった気がする。

「僕と丹沢君は御堂君の頼みで釜利谷君とリュウ君の個室を調べていてね。僕は釜利谷君の部屋を調べたんだが、こんなものを見つけたんだ」

そう言って彼が持ち出したのは、小さな冊子。

『記憶に関する研究の概要』と銘打たれている。

「これが重要なものなのかイマイチ僕には分かりかねるんだが、御堂君に教えたら」持っておいた方がいい」というのでね。念のため君に渡しておくことにするよ」

「…なんで俺に?」

「前回の裁判で御堂君に並んで頼りになると分かったからさ。…恥ずかしい話、僕は自分が疑われても身を守ることすらできなかった」

そこを助けてくれた実力を見込んで、ということだろうか。

とりあえず、その研究書に目を通してみた。

『被験体14名の記憶を制御するのは至難の業であるが、マツダの研究成果をもとに……』

『本日、マウスの記憶を制御することに成功した。マウスは異なる親の元へ授乳を求め……』

『ついに被験体14名の記憶を完全に制御した。被験体はこのまま昏睡状態を維持し、さらなる……』

読んでみても頭をひねるばかりだ。

これが一体、事件にどう関係してくるのだろうか。

そういえば釜利谷君は記憶の分野の研究をしている人だったし、こ

これは単純に彼の研究レポートのようなものだろう。

「コトダマ入手：記憶研究書」

記憶に関する研究の内容が記されている。これによると、14人の被験体の記憶を完全に制御したらしい。

「どうかい？ 何かわかりそうかな？」

夢郷君が興味ありげに尋ねてくるが、俺は首をひねることしかできない。

「そうか…。まあ、すぐに思いつくものでもないだろう。裁判中も探求することをやめないでほしい。真実はたゆまぬ探求の奥に秘められているのだからね」

何やら意味深な言葉を呟くと同時に、エレベーターが動き出した。ふわり、と一瞬だけ慣性で体が軽くなる。

なぜだろう。

もう二度と味わいたくないと思っていたはずのこの感覚が。

少し、懐かしいとすら思っているのは。



《モノパンダ劇場》

ぎひやひやひやひや!!! 元気にしてるかな〜??

“インパクトも可愛らしさも大物感もモノクマより一回り下”でお馴染み、モノパンダちゃんだぜ〜!!

なんで突然地の文で話し始めたかつて？

嫌だなあ、前回の捜査編を忘れちゃったのかよ〜??

あの時はモノクマ先生がこうやってイラスト紹介くじやなくて被

害者紹介をしてくれたんだぜ〜!!

：つてそうか!! それは p i x i v 版の話であつて、ハーメルンじゃそんなことしてなかつたんだっけ……

はいはいっ!! じゃあ今の話は忘れてくれ!!

：もし、そのモノクマ先生の言葉が聞きたいなら、要望があれば作者の活動報告とかでしれつと乗っけるかもだけどな。

さてさて、つーわけで、今回オイラが出てきた用件を言っちゃおうか!

ここまで呼んできた読者は思ったんじゃねえか?

「今回の事件、謎多すぎだろ〜!!」つてな!! ぎひやひやひや!!

そこはまあ、四か月かけて考えた作者の身にもなつて考えてくれよ。四か月もかけるからいろいろこじれてややこしくなっちゃまったんだよ!! 作者の都合なんぞオイラは知らんけどな!! ぎひやひやひやひや!!

だから、オイラから読者だけに大ヒントをプレゼンツ!! しちやうんだぜ〜!!

オイラはクマと違って温厚なパンダだからな!! (おっと、校長に聞かれたら喰われちまう)

まず第一のヒント!!

“ 死体発見アナウンス ” についてだぜ!!

なんだか葛西君が推理小説の主人公みたいながつたらしいだけのトンデモ推論をダラダラダラダラ語ってたけど、ここで言っちゃいます!!

ズバリ、アイツが気になっていたアナウンスの法則、それは!!

『遺体の発見者数が三名に到達した瞬間、アナウンスが鳴る』だぜ〜!!

葛西君たちはまだ分かつてねえから裁判でもう一度言うけど、オメーラはよく覚えて捜査しろよ! えっへん!

さーて、じゃあ第二のヒントに行つちやうか！

第二のヒントは“コトダマ”についてだぜ！！

コトダマってのはオメーラ推理側にとつちやあ生命線……。弾がねえ銃なんて笹がない林みたいなもんだからな！！

しかーし！！ 今回の捜査編ではなんと！！

“不発弾”を仕込んであるんだぜ！！

つまり、入手はできても裁判には全く生きない”ダミーのコトダマ”
“つてことだ！！”

だけど！！ ダミーのコトダマはそんなにたくさんあるわけじゃねえからな！！ 作者もそこまで賢くねえし！

「あるとしても一個か二個、多くても三個」くらいにおもつてくれて構わねえぜ！！

そもそも、いまここでこんなことを言った本当の目的は、「これから
の捜査でも不発弾を仕込んでいくよ」っていう宣言みたいな側面もあるからな……。もしかしたら今回は不発弾なんてないかも！！ ぎ
ひやひやひや！！

ちなみに、「コトダマ入手」表示をしてないけど、モノモノファイルも立派なコトダマだからな！！

そしてーっつ！！

ハーメルン版を読んでいる読者さんだけのスペシャルヒント！！

今回の事件、被害者が二人いる分、ややこしいことがいろいろ起こつてるわけだけど……

“流れで考えるのではなく、一つ一つの出来事を分けて考える”ことをオススメするぜ！！

「あのコトダマは出来事A、このコトダマは出来事Bに関するコトダマだな」つていう風に出て来事ごとに情報を整理して考えるのが正解への近道かな！

推理してくれるのは大いに結構だけど、感想欄とか、多くの人の目に触れるところにネタバレを書くのは勘弁だぜ！！（メッセージとか、活動報告コメントとかがオススメかな？）

さーて、オイラからのスペシャルヒントの数々、どうだったかな??
…え? いろいろ言われすぎて逆に混乱したって?

ぎーひゃひゃひゃひゃ!! 実はそれ狙ってた、って言ったら怒るか
い?!

それじゃあみんな、せいぜい謎解き頑張ってな!!

あ、そうだ!! やっぱり最後にこれだけは教えといてやるよ!!

今回のクロは、“前回とは比べ物にならないほどの絶望を背負って
いる”んだぜ〜!

それじゃ、また来週〜!

chapter 2 非日常編③ 学級裁判前編

「ようよう、よく来たな！　ここで会うのは二度目だな！　それじゃ、今回も学級裁判を楽しんじゃってくれ〜！」

いつの間にか完全に修復されたモノパンダのけたたましい声がこだまする。

内装、証言台、モノ達の絢爛な座席。

すべてに既視感を覚えていた。

この空間は、前回のあの忌まわしき事件の時から、何一つ変わってなどいない。

そう、ただ一つ。

証言台に立てられた遺影が増えたことを除けば。

ニッコリと満面の笑みを浮かべる土門君の像には、まるでその笑顔を真っ向から否定するかのようにバツ印がつけられている。

普段とは違ってどこかもの悲しげな、しかし芯の強い目つきで正面を見据える釜利谷君の肖像、そして目の前の巨大な敵を一心不乱に睨みつけているかのような厳しい表情のリユウ君の肖像にも同じようにバツ印がつけられている。

相変わらず、幸せな笑顔を振りまく津川さんの遺影も俺の横に鎮座している。

今回は14人の人間がこの場で議論し、疑い、罵り、叫び、暴いた。

あれから三人減った。

だが、やることは同じだ。

俺達はもはや反抗の意思も見せずに、黙々と自身の証言台に立った。

リユウ君が亡くなった影響か、みんなのモノ達への敵愾心が一層挫けてしまったようだ。

『おっけーおっけー、みんなちゃんと集まってるね』

不意に耳障りな声がした。

正面の座席に這い上がる一匹のヌイグルミ。

モノクマだ。

「おっす、校長せんせー!」

『モノクマキーツク! 挨拶は丁寧に!』

「ぎひやああ!? すみませんでした〜!!」

人が死んだという事実、俺達の心苦しい胸中も気にせず二体のヌイグルミは子供のようによぎけたやり取りを展開していた。

釜利谷君ならここで胸糞悪いとでも言っ舌打ちしたのだろうか。リユウ君なら黙ってヌイグルミたちを威圧してくれたのだろうか。今となっては分からない。

『オマエラ、お久しブリーフ! 改めまして、この特別分校の校長ことモノクマ先生です! 本当は捜査時間の時に出てくるつもりだったんだけど、わけあって今まで出てこられませんでした! でももう大丈夫、ボクはびんびんしてるからね!』

どこかで聞いたような古いネタとともにモノクマはえっへんと鼻を鳴らした。

メンバーに不気味な沈黙が走る。

「出てこいよ」

口火を切ったのは、目を真っ赤に腫れさせた前木君である。

「出てこいよ、犯人…! 俺は…俺は信じたくねえんだ…。俺のダチを、俺達の仲間を殺して、それで平気な顔して紛れ込んで、拳句は俺達を犠牲にしてここから出ていこうなんて…。そんな奴がいるはずねえんだよっ!!」

「いたから、こんなことになっているのよ」

伊丹さんが冷静に、しかし僅かに愁いを帯びた瞳を向けながら答えた。

「ああ…分かってる。分かってるよ。でもな…俺は信じてえ…。この場で名乗り出る程度の良心は残ってるって。なあ、だから頼むよ…! これ以上俺たちを苦しめないでくれ…!」

前木君の声が裁判場にこだまする。

答える者はいない。

「友情なんぞは知ったことではないが、心理に訴えかけるといふ手法は評価する。事実、私もその手法で前回の犯人を探り当てたのだからな」

御堂さんが冷徹な言葉を浴びせかける。

「だが、前木常夏の懸命の叫びも犯人には届いていないようだな。今度の犯人は前回と違ってかなりタチが悪いようだ。…まあ、それも些細な問題にすぎん」

そして彼女は一息ついて、次の言葉を放った。

「出てこないのならば我々の手で引きずり出してやるまでだ。始めるぞ、真実の探求を」

前木君はうつむいていた。

彼の震える拳の上に、彼自身の涙がぼたぼたと零れ落ちる。

だが彼は、もう何も言わなかった。

【学級裁判・開廷！】

『それでは、議論に先立ってボクからも一度学級裁判のルールを説明します！ 学級裁判では、被害者を殺害した犯人をみんなで話し合い、投票で決めてもらいます！ 正しいクロを指摘できればクロだけが、指摘できなければクロ以外の全員がオシオキされ、クロは卒業となります！ それじゃあ、真実に辿り着けるよう頑張ってくださいー！』

「教頭先生も応援してるぜ！ ぎひやひやひや!!」

二体のヌイグルミが大声で言い放つ。

「オシオキ」がどんなものであるかは前回の裁判で思い知りましたからな……。文字通り命懸けで臨まねば……」

丹沢君が冷や汗をいっぱいに流しながら言った。

「だが、命懸けなのは犯人も同じだ……。死ぬ気で隠蔽された事実を、僕たちは見抜かねばならない」

夢郷君が険しい表情で述べた。

「ならば早速議論を始めましょう。まずは遺体の状況の確認からですね」

入間君の提案にみんなが頷く。

「じゃあ、リュウの遺体の状況から確認しようか」

亞桐さんが重い口調ながら言い放った。

リュウ君。

彼の遺体の状況は、はっきり言ってかなり異様だった。

明確にしなければならぬことが多数あるだろう。

【議論開始】

伊丹ゆきみ：「彼の死因は槍で刺されたことによる失血死。凶器はホールに転がっている槍のようなもので間違いなさそうね」

前木常夏：「……そんな情報だけで何が分かるっていうんだ……」

御堂秋音：「遺体そのものよりも、周囲の状況について考察の余地がある」

入間ジョーンズ：「確か、リュウさんの遺体が発見された大ホールには様々なものが散乱していましたね」

丹沢駿河：「しかし、散らばっていたものには何の共通性もなく……少々考察するには難しいかと」

安藤未賤：「きつと犯人が念力にて現場を荒らしたのであろう！」

小清水彌生：「誰かが争っていた、とか……？」

亞桐莉緒：「第三者が犯行に関わってきた可能性は？」

御堂秋音：「フン。こんなもの、考えればすぐに分かるだろうが」

「小清水さんの意見に賛成だ」

【使用コトダマ：大ホールの状況】

「大ホールの状況を思い出してみしてほしい。シヨベルカーとか、バツティングマシーンとかについては俺も何なのかさっぱり分からない。ただ、一つだけ、俺たちがよく知っているものが転がっていた。モノ

クマやモノパンダたちの多数の残骸だ」

脳裏によみがえるのは、大ホールに累々と転がっていたヌイグルミたちの死骸。

「た、確かに大量にござりましたな…。まさか…」

「リュウ君は戦ったんだ。モノクマ、モノパンダと」

丹沢君の言葉を補強する形で、俺は自らの考えを述べた。

「考えてみれば、シヨベルカーとかバツティングマシーンとか、そんなものを脈絡もなく突然召喚するなんて無茶苦茶な真似、できるとしたらモノクマ達くらいしかない。あいつらの残骸が落ちていた時点で、彼とモノクマ達の戦いがあったことは明白だ」

そう言ってモノクマの方を見ると、『ギクギクギクウー!』と分かりやすい反応を示していた。

その時、その声は突然に、俺の意識に差し込まれてきた。

「意義ありいっ!!!」

【安藤未賤の反論】

「確かにリュウ殿の屈強ぶりはみなが知るところ。されど、いかにリュウ殿が強かろうとあのモノクマ共に立ち向かったなどという話、納得できぬぞよ!!」

安藤さんは興奮した様子で声を張り上げた。

モノクマとモノパンダは初日の時点で、俺達に圧倒的な絶望を植えつけた。

そんな奴らに立ち向かったなどという話、にわかには信じることはできないだろう。

だが、状況はそれが現実として起きたことを物語っている。

分からせるしかない。

彼女に、真実という名の脚本を!

「この学園に閉じ込められてすぐ、我らはあのヌイグルミ共の恐ろしさを思い知らされたではないかっ! それを知ってなお歯向かうなど愚の骨頂!」

「でも彼にはそれができたんだ。忘れたのかい？ 彼は弾丸より早い槍を見切つて山村さんを救つたじゃないか！」

「だからといってあれに逆らえるものかっ!! 逆らえるのならなぜもつと早くそうしなかつたのだ!? 吾輩に屁理屈は通用せぬぞよっ!!」

「なぜ彼が今になつて動き出したかは分からない。動機が関わっているのは間違いないだろうけどね。けど、ヌイグルミ達をあれほどの数の残骸に変えるのは、彼にしかできないことなんだ!!」

白熱する議論。

俺も安藤さんも一步も引こうとはしない。

みんなはそれを、固唾を飲んで見守る。

「さつきからうだうだと………」

だが、そんな中で声を上げたものがいた。

「つまんねーことで時間とつてんじゃねえぞオラアアアアツツ!!」

怒声が俺と安藤さんを一瞬で黙らせる。

その声の主はすぐに分かつた。

袖の千切れた道着を着て、頭には強敵との血で赤く染まつた鉢巻を巻いた山村さんが、赤いオーラとともに咆哮したのである。

これまでの議論では押し黙っていた彼女が、その胸の内に潜む闘争本能をむき出しにして動き出したのである。

「黙つて聞いてりゃあ、随分勝手なことを抜かしやがるな安藤、ああ!?!」

「ひよえええ!! 吾輩はただ疑問を」

「黙れコラアアアアツツ!!」

「びよええええ!!?!」

「や、山村さん落ち着いて。君はリュウ君がモノクマ達と戦つたつて確信しているんだね？」

俺は彼女の真意を問う。

「確信も何も、アイツは…」

山村さんは少し言葉を詰まらせた。

「アイツはッ、一人で戦いに行つたんだ!! オレを置いて、オレをぶちのめして!!!」

一人の女性の叫びが空間を支配する。

「オレはアイツを止められなかった!!! 何もできずに眠らされたんだッ!!!」

威勢の良かった彼女の語調は次第に怒気が抜け、萎びていった。

怒りよりも、悲しみで怒鳴っているようだった。

「んでもってアイツは死んだ…。なんて馬鹿な奴だ」

山村さんの頬を一筋の涙が伝う。

「二人なら、あんな奴に負けなかったのに…。二人なら、誰も死なずに済んだのに……。なんで、お前は……」

そしてがっくりと頭を落とし、裁判台に向けてうなだれた。

「オレは弱い。弱い弱い弱い弱い弱い……弱すぎる……」

囁くような小さい声でそう呟く彼女の無念ぶりは、その瞬間を見ていなかった俺達にも十分すぎるくらい伝わってきた。

フォローの言葉すら見つからない。

「事実の整理をしましょう」

伊丹さんの一声で俺達は我に返る。

「昨晚、見回りをしていたあなたはリュウ君に襲われ、気絶させられた。あなたは彼がモノパンダたちとの戦いに臨んだものと確信している。そういうことね?」

「確信もなにも…アイツは言つてたんだ。『連中を排除して、全てを終わらせる』って。だから、オレも一緒に戦わせてくれって言って…なのアイツは……」

「ともかく、はつきりしたわね。リュウ君は昨晚、確かにヌイグルミ達と戦つたのよ」

つながった。

大ホールのあの異様な状況は、リュウ君がわざと校則違反を犯し、モノクマ達と壮絶な戦いを繰り広げた跡だったんだ。

「やれやれだな。状況確認だけでもすぐに分かるような事実をまとめ上げるだけでここまで時間がかかるとは」

少々苛立った口調で御堂さんが言った。

「真実に辿り着かねば命が危ういのだぞ。もっと俊敏的確に頭を働かせろ、雑魚どもが」

「まあまあ、少しずつ事実を確認することも重要だと私は思いますよ」苦笑いを浮かべながら人間君がなだめる。

「吾輩のような石頭もおるのでな！ ゆっくり進めてくれんと理解が追い付かぬわい！」

安藤さんが無邪気な笑みを浮かべながら言った。

「まあいい。今度は釜利谷三瓶の死亡直前の様子を議論するとしようか」

【議論開始】

小清水彌生：「釜利谷君は首の骨を折られて殺害されていたのよね」

丹沢駿河：「うーむ、殺害方法だけで犯人を特定するのは難しいですな」

夢郷郷夢：「殺害現場に何か手掛かりは残されていないなかったのかい？」

亞桐莉緒：「…手がかりなんてあったかなあ……」

前木常夏：「…三ちゃんは何も持ってなかったみたいだし、手がかりなんて……」

御堂秋音：「フン、見通しが甘すぎるぞ」

「前木君、それは違うよ」

【使用コトダマ：呼び出し状

俺は懐から例の手紙を取り出した。

「これを見てほしい。釜利谷君が白衣のポケットに入れていた手紙

だ。恐らくコンピューター室で秘密裏に印刷されたものだろう」

『一筆啓上 釜利谷三瓶』

貴殿の正体を看破した。AM2:00、2-Aまで。来る来ないは貴殿の自由に。』

「な、なんだよこれ……!」

前木君が驚きの声を上げるのも無理はない話である。

「これを何者かから受け取った彼は夜中に单身2-Aに踏み込んだということね」

伊丹さんが冷静に述べた。

「正体、ってどういうことなの……? 釜利谷って何者だったの……!?!」

亞桐さんも頭を抱えて声を上げる。

「“来る来ないは自由”と言われていたにもかかわらず行ったということは、それだけ自身の秘密を知られたくなかったということですかね……。ただものではない、ということだけは確かですね」

入間君が顎に手を当てて呟く。

彼の言う通り、この手紙の存在と釜利谷君の行動とが、彼という人物の謎を解き明かす鍵となっている。

「だが、現時点でそれを考えたところで分かるはずもあるまい。それに、事件の核心はそこではない」

御堂さんがそう言って話を切った。

「その手紙の内容を読んだ私には、釜利谷三瓶の正体とは別に一つの疑問が浮かび上がってきた」

「疑問、だと……?」

御堂さんの言葉に前木君が頭をかしげる。

「ああ。もし私が犯人ならば、そんな内容を書いたりはしない。少なくとも、“呼び出す”という手法はとらないはずだ。なぜかわかるか?」

釜利谷君を呼び出すことができない理由……?

彼にそんな事情があつただらうか？

別に呼び出し場所に行くぐらいわけないことのはずだ。

何か行動を拘束されていけない限りは……。

“行動を拘束”……？

そうか、そうだ。

拘束されていたじゃないか。

【提示コトダマ：山村の見回り

「その理由は……山村さん。君だよ」

そう言つて俺は彼女に視線を向けた。

「……ああ？」

彼女は腕を組んだ格好で、気難しい表情でこちらを見つめ返してき
た。

「何を隠そう昨晩は君が校内を見回つていた。そして俺達の中でそれ
を知らない人はいないはずだ。そんな状況で、人を呼び出そうなんて
思ふかな？」

「確かに……釜利谷殿を呼び出したところで、部屋を出てすぐ山村殿
に見つかり、怪しまれるのは必定ですからな」

丹沢君の言うことはもつともである。

「でも、結局巴ちゃんはリュウ君によつて気絶させられたじゃない。
その後だつたら呼び出せるんじゃない？」

しかし、その意見に対して小清水さんが声を上げる。

「確かに山村巴の動きを封じた後ならば呼び出しは可能だ。だが、部
屋に籠っている状態でどうやってそれを知ることができる？　そも
そも、わざわざ手紙をしたためたということは、呼び出しを行ったの
は夜時間になる前のことのはずだ」

それに対し、御堂さんが冷静に反論する。

「むわはははっ！　さっぱり分からぬぞよ！　誰か分かりやすく教え
てたもれ！」

安藤さんの諦観の笑い声が響く。

「教えてあげるから耳を貸してくれ。知見を共有するには、密着する
ことが大切なのさ」

すかさず下心を發揮する夢郷君。

「何をおっぱじめめる気だよ、あんたらー！」

亞桐さんの呆れたお叱りが飛ぶ。

「異性間不純交際はエロ漫画の中だけにしてください!!」

丹沢君のフォローもフォローと呼んでいいのか微妙なラインだ……。

「つまり」

御堂さんの苛立った声が、いったん解けた緊張を再び呼び起こさせた。

「釜利谷三瓶を呼び出した人物は、山村巴が見張りとして用を為さなくなることを知っていたからこそ呼び出せたのだ。さあ、これで分かったな。釜利谷三瓶を呼び出し、恐らくは殺害したであろう犯人が」

「はあ!? 犯人が分かっただと!?!」

前木君がひどく動揺した様子で大声を上げた。

「推測の域を出ないがな。可能性がある人物は一人に限られる」

「釜利谷君を呼び出すことが可能だった人物は、山村さんが襲われることを事前に知っていた人物……」

つまり、リュウ君が動き出すことを知っていた人物?

そんな人間がいるのか?

仮にいたとしても、それが誰であるかを割り出す方法なんて……

「……………!!」

一つ、脳裏に浮かんだ可能性。

そう、あの人ならば。

【人物指名】

「釜利谷君を呼び出した人物は……」

俺は、“それ”の方を向いた。

重く、強いまなざしで正面を睨み続ける遺影。

「第二の被害者であるリュウ君だ」

そうだ。

そもそも山村さんを襲った本人ならば、知っているのは当然のこと。

「彼が呼び出し状をしたため、そして釜利谷君を殺害したんだ。首の骨を折るくらい、彼なら容易いことのはずだ」

場内が騒然とする。

「リュウが……三ちゃんを殺した……だと……？」

「そ、そんな……あいつは、人殺しなんかしないって信じてたのに……」

「高潔な彼が殺人を犯したというのか……」

だが、その意見を認めない人間も当然いた。

「テメエはっつっ!!!」

怒号が飛ぶ。

「アイツを人殺しにするつもりかっつっ!!!」

【山村巴の反論】

「テメエ……いくらテメエでも、アイツの意思を馬鹿にすることだけはオレが許さねえぞ!!!」

烈火のようなオーラを纏い、今にも爆発しそうな表情でこちらを睨む山村さん。

彼女がそれを認めたがらないのも当然だろう。

しかし、既にその事実は俺の中で推測の域を超え、確固たる事実として固まっていた。

これまでに集めた数々の要素が、リュウ君が犯人であることを物語っているのだから。

「アイツはオレ達のために戦ったんだぞ!! 殺しなんてするわけねーだろうがッ!!」

「でも、君を気絶させた彼なら、犯行は十分に可能だ」

「それがどうしたってんだコラアアアッ!!! アイツは人を殺す奴じゃねえんだよッ!!!」

「山村さん……もうやめようよ。見せかけだけの内面で人をはかっちゃダメだ」

「黙れ黙れ黙れえええ!!! アイツがやった根拠でもあるのかああああ!!!」

「その言葉、切るよ」

「コトノハ：落ちていた吸い殻

山村さんの言葉を断ち切り、俺は自らの見解を述べる。

「まず一つ聞きたい。この中で、実は成人していて、煙草を吸っているという人物はいるかい？」

一つ、俺は問いかけた。

「いるなら正直に言っただけほしい。隠しているとんでもないことになるよ」

きよとん、とした顔をする一同。

なんでそんなことを聞くのか、という顔をしている。

「分かった。本当にいないんだね。よかった」

そして俺がポケットから取り出したのは、小さいビニールの入れ

物。

その中に入っていたのは、2―Aで拾ったアレだ。

「これは、釜利谷君が亡くなっていた2―Aで見つけたものだったね。そうだよ、前木君？」

「あ、ああ。確かに落ちているのを見たぜ」

前木君の言質が取れたことを確認し、俺は持論を展開する。

「2―Aにこれが落ちていたにもかかわらず、この中に煙草を吸っていた人物はいない。でも、俺は知っている。俺達の中で、一人だけ煙草を所持していた人物がいたことを」

「……あ、リュウ！ あいつ、タバコ吸ってるのを見たぞ！」

前木君の声に俺は頷いた。

「そうか。だから御堂君は僕達に釜利谷君とリュウ君の個室を調べさせたのだね」

夢郷君がポンと手を叩きながら合点したように言った。

「…と、いうと？」

「捜査時間中、御堂君に頼まれて僕と丹沢君で二人の被害者の個室を調べたんだ。その際に『ライターとタバコの形跡に気をつけて探れ』と丁寧にご指導をいただいてね」

「釜利谷殿の個室にそういったものは見当たりませんが、リュウ殿の個室からはライターやタバコの予備が出て参りましたが。なるほど、当時は意味も分からず探っておりますが、ここに繋がることだったのですな」

両名の証言から得られた事実。

それは。

「捜査が始まるまでは二人の個室はロックされていた。つまりタバコ関連の道具を犯行後にリュウ君の部屋に置いておくことも不可。よって釜利谷君も喫煙者ではなく、リュウ君のみが喫煙者であるという事実が導かれるわね」

伊丹さんの言葉にそれが集約されていた。

「だから、リュウ殿が呼び出された釜利谷殿の元を訪れたことは間違いない。さらに言えば、彼を殺害した犯人である公算が大きいと…。

吾輩にも納得できる分かりやすいお話であるな！」

安藤さんがうんうんと頷く。

「もう一つ、奴が犯人であることを裏付ける根拠が存在する」

御堂さんは指を立ててもう一つの根拠を示した。

「葛西幸彦。お前は知っているはずだ。奴の行動原理を指し示す“動機”となりうるものの存在を」

彼の“動機”となるようなもの……

【提示コトダマ：決意表明】

「“アレ”がリュウ君の行動原理を示す“動機”だね」

俺が御堂さんに目くばせすると、彼女はポケットから一枚の紙を取り出した。

「奴が記した手紙のようなものだ。筆跡は奴が所持していた手帳と同様であり、奴が書いたものと断定して間違いあるまい。読んでみる」
そう言つて御堂さんは隣に立つ前木君に手渡す。

『これより俺は“絶望”に対し行動を起こす。

しかし、万一の場合に備え、真実を記した書をしたためておくこととする。なお、この手記は個室に置けばモノクマ共に排除される恐れがある故、俺が所持しておくものとする。

非常時につき、全てをありのままに記す。

俺の名は“龍雅・フォン・グラディウス”。
“超高校級の殺し屋”
として入学した。

俺は自らの目的を失念していたが、とあるきっかけにより思い出すことができた。

俺の目的は、“超高校級の絶望”の抹殺。ただそれだけである。
手短に話すが、これより記すことは全て俺が知りえた真実である。
決して虚実ではないことをここに宣言する。心して拝読されたい。

第一に、モノクマとモノパンダを操るものは“超高校級の絶望”である。俺はこれより奴らを排除すべく行動に出る所存である。

第二に、この学園生活を過ごす者達にも、“超高校級の絶望”の一味たるものが複数人紛れ込んでいる。その者についても残さず排除

する。

念のため、ここに俺が突き止めた“絶望”の正体を記しておく。
俺が仕留め損ねることはあり得ぬが、万一のことあらば、同級生といえど容赦は無用である。

その名を、以下に記述し』

「…ダメだ。ここで破けてる」

前木君は悔しそうに呟いた。

だが、破れていた部分を抜きにしても、その手記の内容は俺達を驚かすには十分だった。

“超高校級の殺し屋”……!!?!”

「そ、そんな……リユウはそんな才能で入学したっての……?」

「絶望の抹殺、ですって……!!」

みんなが混乱するのも頷ける。

彼がずつと言うのを渋ってきた正体、それは。

“超高校級の殺し屋、龍雅・フォン・グラディウス”だった。

彼は一体これまでに、何人の人間の命を絶つてきたのだろうか。

“殺し屋”という名において“超高校級”の称号をいただいたの
なから、相当数の数を殺してきたのは間違いないだろう。

“グラディウス”……!! そうか、彼は……!!”

その中でも、ひととき衝撃を受けていたのは入間君だ。

「入間君、何か心当たりがあるの?」

「…皆さんがご存じないのも無理はありません。本来は許されないことですが、今は状況が状況なのでやむを得ません。私が懇意にしていたとある小国の外交官を通じて得た機密をお話ししましょう」

彼が語った話は、俺にとってもその場にいる全員にとっても衝撃であるとともに、大きく現実離れた映画の中での話のようだった。

『グラディウス家は数百年前より暗殺家業を生業とする西洋の一族です。生まれた瞬間から暗殺の訓練を施され、現世にて捉えられないターゲットはない、と言われてしているほどです。』

しかし、グラディウス一族にはしきたりがあります。“人を生かす

殺し〃のみを行う、ということですよ。

“誰かを殺すことでより多数の人間が生き延びることが出来る”。
そういった状況でないと殺人を請け負わないのが彼らの矜持なので
す。

独裁者、麻薬王、テロリストなど……法では裁ききれない悪人が不
審な死を遂げた時、それはグラディウスの暗躍であると噂されること
があります。現に、私が仕事を行った先々の国でそのような噂を何度
も聞きました。

ですが私は迷信とばかり思っていました……。まさか本当に存在す
るなんて……。

彼が“戦刃むくろ”氏の存在を認知していたのも領けました。彼
は任務の最中に“フェンリル”との交戦を経験したのでしょう……。

『暗殺家業』……

“グラディウスの暗躍”……

“フェンリルとの交戦”……

あまりにも超現実的な話に、俺達は感情を表に出すことすら億劫に
なっていた。

『俺の名前も、正体も、時が来たら話すさ』

彼は生前、俺にそう言った。

言えたのだろうか。

自分自身の、恐るべき生い立ちを。

生まれながらに持った、壮絶で悲惨な宿命を。

「ぐぬぬ……。惜しい人物を亡くしたものよ……。彼奴が生きておる間
にそれを知っておればノンフィクション実録バトル漫画を描き下ろ
せたのに……」

こんな状況でも仕事のことを考える安藤さんは本当に神経が太い。
「それにしても……彼が本当に“人を生かす殺し”を生業にしている
のなら、“超高校級の絶望”を殺そうと狙うのも領けるわね」

伊丹さんの言葉は正しい。

彼は、“超高校級の絶望”を抹殺することによって俺達を生かそう

と目論んだのだろう。

「確かに衝撃的な内容ではあるが、今となってはもう奴の正体などどうでもいい。肝心なのは、奴が『超高校級の絶望』を抹殺するという目的のもとで動いていたという事実があることだ」

御堂さんは相変わらず冷静な声で呼びかける。

「ですが、リュウさんが絶望とやらを排除したがっていたからといって、それが釜利谷さんを殺害することに直結するのでしょうか？」

入間君が問いかける。

「単純な話だ。釜利谷三瓶は『超高校級の絶望』、すなわちモノクマ共の仲間、もしくは手下だったということだ」

御堂さんはまたも衝撃的な言葉を吐き捨てた。

「お前っ!! また死んだ奴のことをそうやって悪者にするつもりかっ!!」

「黙っている、前木常夏。私が暴くのは真実だ。葛西幸彦、教えてやれ。夢郷郷夢から受け取ったのだろう？ 奴の部屋に存在した、例の書類をな」

釜利谷君の部屋で夢郷君が見つけた『例の書類』といえは……あれしかない。

【提示コトダマ：記憶研究書】

「記憶に関する研究の成果をまとめた書類が、ファイルに収まった状態で彼の部屋に置いてあったんだ。それによると……」

「14体の被験体の記憶を制御し、封じ込めた」と記してあった。ちやうど我々から奴だけを差し引いた人数に相当するな」

俺が言葉を濁した部分を、御堂さんが容赦なく述べた。

「奴が記憶を専門にした研究を行っていたことは以前より分かっていた。だが数日前、奴に記憶の研究の進捗について尋ねたところ、奴は『始めたばかりの研究だから進捗などない』と答えたのだ。つまり、奴はこの研究所に書かれている内容を隠蔽した。我々に知られては不都合な研究だった……という事実が導かれるな」

「で、でもさー！ 記憶を封じ込めたとか言ってるけどさ……。ウチら

には消された記憶なんてないじゃん…？ だってさ、みんな生まれてきてから今までで記憶がない空白の期間なんてある？」

亞桐さんが反論する。

「莉緒。その考えは短絡的と言わざるを得ないわ。記憶というものはとても不可解なものなのよ。『消された記憶がない』という認識も一つの記憶。だとすれば、それが作られたものであるという可能性は否定できないの」

伊丹さんが静かに亞桐さんを制した。

「記憶を作り出すなどにわかには信じがたい話ではありますが…。」超高校級の脳科学者」と呼ばれる彼の才能をもってすれば不可能ではないのかもしれないね」

入間君が呟く。

「記憶がいじられるなんて怖いもの…。吾輩共が心に抱いている思い出が全て偽りかもしれないぬというのだからのう」

「もしかしたら、僕と安藤君は夫婦だったのかもしれないよ。記憶を失っているだけで」

安藤さんの言葉にすかさず夢郷君が反応する。

「なんと！それならば明日から吾輩の身の世話を頼み申すぞよ！」

「君と夫婦の契りを交わせるなら安い願いだよ」

「はいはい、夫婦漫才はそこまで！」

亞桐さんがパンパンと手を叩きながらまとめられて助かった（夫婦認定しちゃっているところに一種の諦めのようなものも感じるけど）。

こんなところで議論を止めるわけにはいかないからね…。

「具体的に何をいじったのかは知らんが、釜利谷三瓶は我々の記憶を操作したという事実は間違いない。これはつまり、奴が黒幕の協力者に他ならないということだ」

「そもそも釜利谷さんはあの呼び出し状に書かれている内容を見て2 | Aに向かったわけですからね…。本人にとって知られたくない本性があるのは明白ですね」

「ですからそれを突き止めたリユウ殿は釜利谷殿を殺害した、ということですか。そして殺害後、その足でモノクマ達との戦いに臨んだ……」

「……そしてそのまま敗北し、息絶えたと……？」

丹沢君と入間君の憶測に、異を唱える者はいない。

「遺体の状態や発見場所から考えて、モノクマとの戦いに臨んだリユウ君がそのまま敗死したことは容易に伺いとれるわね……」

顎に手を当てて思考しながら伊丹さんが呟く。

「え？　じゃあ、リユウがモノクマとの戦いで死んだっていうのなら……人殺しはこの中にいないってこと？」

亞桐さんの言葉を受けて、ほぼ全員が顔を見合わせる。

「釜利谷君を殺害した犯人がリユウ君である以上、投票は彼にするしかないみたいね」

小清水さんの言葉が決定打となり……。

『……結論は出たかな？　じゃあ、投票に』

目まぐるしく動く脳。

錯綜する記憶。

連想されては消えていくコトダマ。

まだだ。

まだ撃ちきっていない弾丸があるじゃないか。

真実という名の脚本は、まだできあがっていない。

「待ってくれないか、モノクマ!!」

【学級裁判・中断】

chapter 2 非日常編④ 学級裁判後編

「まだ終わっていないんだ。この事件の脚本は」

「なん……ですと……？」

丹沢君が怪訝そうな顔をした。

「終わっていない……だって？」

夢郷君が顎に手を置いて尋ねてくる。

「……!？」

ここにこいて初めて、御堂さんの表情にも驚きが走る。

だが、彼女ですら予想外なのは仕方のないことだ。

その根拠は、根拠と呼ぶにはあまりにも小さく、ともすれば容易に反論されてしまうかもしれない。

それでも俺は見つけたのだ。

ここまでの推理では説明のつかない矛盾……!

「リュウ君がモノクマ達との戦闘で死亡したとすれば、説明がつかない根拠」……

【提示コトダマ：リュウの包帯】

「俺は捜査時間の間に、リュウ君のコートの中を見た。するとあることに気付いた。彼の体には包帯が巻かれていた。体だけじゃない、腕や足など、いたるところに巻いてあったんだ」

「…確かにそうだ。オレが巻いてるコイツも……アイツの包帯の一部だからな」

そう言って山村さんが悲しげな表情で頭の鉢巻を撫でた。

「…それがどうしたの？ リュウ君がヌイグルミ達との戦いで傷ついて、そのせいで包帯を巻いたってだけじゃないの？」

小清水さんが不思議そうに聞いてきた。

「いや、よくよく考えてみなよ。モノクマ達との激しい戦闘の最中、体に包帯を巻きつける余裕なんてあったと思う？ そのまま戦闘で殺されたというのならなおさら包帯を使う余裕なんてないはずだよね」
「……………」

場に沈黙が走る。

「つまるところ、あなたは何が言いたいの？」

伊丹さんの問いが飛ぶ。

「簡単なことだよ。リュウ君はモノクマ達との戦いで死んだわけじゃないんだ」

これが、俺の答えだ。

「少なくとも彼には、戦闘を終えて自身を治療するだけの余裕があった。そういうことだよ」

「んなつ!? なんなつ!? そ、それでは、いったいどうしてリュウ殿は亡くなられたぞな!!?」

安藤さんがオーバーなりアクションとともに叫ぶ。

「恐らくは、いるんだよ」

口に出すのもためられるような推論だが、言わなければ何も始まらない。

「リュウ君を殺害した犯人。この事件の、真のクロが
言い放った。

きつといる。

俺達を手玉にとつて、事件の真相を隠蔽しようと目論む人物が。
信じたくはないが、俺達の中にいるはずだ。

「リュウを……殺した奴が……いるだと……!!?」

山村さんが裁判台に手をつき、怒りの形相を浮かべる。

「どうやってアイツを……どんな卑劣な手で……くそつっ!!!」
ダン、と裁判台を叩く。

「その謎を、これから解き明かすんだよ。辛いけど、真実を導かなければこの裁判は終わらないんだ、山村さん」

「納得できんな」

俺の言葉に動揺のそぶりも見せず、反論をしてきた人物。
その人物を見て俺はにわかには戦慄した。

「先ほど出した推理と結論に齟齬はない。貴様の愚論如きに時間をとらせるな」

御堂さん。

これまで率先して捜査を行い、事件の真相を共に暴いてきた聡明な彼女が、今は俺と意見を異にしている。

彼女の頭脳すらも欺くほど、犯人の工作が周到であったことを表している。

しかし、ここで立ち止まるわけにはいかない。

たとえ相手が天才であろうと、言葉の刃で切り捨てるのみだ。

【御堂秋音の反論】

「リュウはあのクマ共との交戦で死んだ。それが事実だろうが」

「いや、さつきも言った通り彼には包帯を巻いて治療する余裕なんてなかったはずだよ」

「その包帯も、奴の体にもともと巻いてあったものかもしれないだろう？ 世界を股にかける殺し屋ならそれほどの古傷をもっているもおかしくはあるまい」

「違うね。俺達はこの前、プール大会を開いたじゃないか。その時にみんな見たはずだ。彼の体に包帯なんて巻いてなかった」

「ああ言えばこう言う…… 耳障りな虫けらめ……!! 真のクロだ?!? 笑わせるな!! 第三者が関与した根拠などどこに存在するのだろうか!!」

「その言葉、切らせてもらおうか」

【使用コトノハ：死体発見アナウンス

両断。

彼女の言葉を真つ二つに断ち切り、俺は自らの論理の解説を始めた。

「まず初めに、捜査をされていてどうしても気になったことがあるんだ。そこでモノパンダ、一つ聞きたい」

「はいはい、はいよー!」

鼻ちようちんを出して居眠りに興じていたモノパンダは俺の声で突如目を覚ます。

「死体発見のアナウンスの鳴り方には規則性がある…と、俺は踏んでいる。もしそうなら、その規則性を教えてほしい」

「アナウンスの…規則性?」

伊丹さんが驚愕に満ちた表情を浮かべる。

「そうだ。恐らくそれが御堂さんの推理の矛盾点を示してくれるはずだ」

「うーん、それを今言うとな犯人側に不利な気もするけどなあ…でもまあ、核心をつく部分でもないからいいか! 聞かれたら答えるのが温厚なパンダの礼儀だからな! ズバリ、アナウンスは”三人の人物が遺体を目撃した時点で鳴るんだぜ!!”

…三人!

やはりそういう規則性だったか。

これで分かったぞ。

「モノパンダ、付け加えて質問をする。その目撃者に犯人は含まれるのか? もし含まれるのならば、犯人が別の場所から遠隔殺人でも行わない限り、目撃者が二人現れた時点でアナウンスが鳴ることになるが」

すかさず御堂さんが鋭い質問を飛ばした。

「ノンノン! 犯人は目撃者には含まれないぜ! ただし、いったん犯行現場から立ち去り、その後目撃者のふりをして目撃した場合、これは目撃者としてカウントするぜ!」

「みーちゃん、理解できた?」

「さっぱり分からぬぞよっ!!」

亞桐さんがため息をつき、安藤さんは無邪気な笑みを浮かべている。

「…つまり、”犯行直後の犯人は目撃者としてカウントしないけど、目撃者のふりをした犯人はカウントする”ということよ。重要なのはそこじゃないわ」

そう言つて伊丹さんが俺の方を向いた。

「この情報をもとに釜利谷君とリュウ君、二名の日撃情報についておさらいしようか」

俺は脳内に組みあがっている遺体発見の順番を語り始めた。

『リュウ君の遺体を最初に発見したのは夢郷君。その後、彼は慌てて俺と御堂さん呼びに来た。そして俺と彼女がリュウ君の遺体を発見した直後、アナウンスが鳴った。つまり、アナウンスが鳴るまでに遺体を目撃した三人の人物とは、夢郷君、御堂さん、そして俺だ。ここまではいいよね？』

問題は釜利谷君だ。俺が彼の遺体を発見した時、既に前木君がそこにいた。つまり、前木君が第一発見者であるように思える。その次に俺が遺体を発見し、その後には御堂さんが続いた。しかし、アナウンスは御堂さんの到着を待つことなく、俺が釜利谷君の遺体を発見した直後に鳴った。

…おかしいよね？ アナウンスが鳴るまでに遺体を発見したのは、俺と前木君だけ。ここから導かれる事実の一つ。もう一人、前木君より前に遺体を発見した人物がいたということだ』

『…ってそれどういうことだよ!! 俺が間違いなく最初に三ちゃんのところに行つたはずだよ！ それより前に行つた奴なんていないはず…なのによ……』

「簡単な話さ。さつき立てた筋書きでは説明のつかない、“リュウ君でも釜利谷君でもない第三者”が、この事件に関わっているということだよ」

「“第三者”……!?!」

場内にいるみんなの視線が不穏なものとなる。

「それが、今回の事件における“真のクロ”になるわけですか？」

入間君の問いに俺は頷く。

「まとめよ。この事件が、単純にリュウ君の行動のみで終わっていないという俺の推理を裏付ける証拠は、死体発見アナウンスの謎がまず一つ。実はもう一つ根拠があつてね」

そう言つて俺が取り出したものは。

【提示コトダマ：決意表明】

さつきみんなに見せたりユウ君の決意表明書だった。

「これをもう一度よく見てもらいたい。先ほど導いた筋書きでは説明のつかないことがあるはずだ」

『第一に、モノクマとモノパンダを操るものは“超高校級の絶望”である。俺はこれより奴らを排除すべく行動に出る所存である。』

第二に、この学園生活を過ごす者達にも、“超高校級の絶望”の一味たるものが複数人紛れ込んでいる。その者についても残さず排除する。』

「…この部分、読んでいて不思議に思わない？」

「“複数人”と言っているね」

夢郷君は気付いたようだ。

「つまり、裏切り者として殺された釜利谷君のほかにも、今こうして顔を合わせている者の中にも“絶望の一味”がいるということか」

「…は!? 何それ!? この中に、まだ裏切り者がいるの!?!」

亞桐さんが驚きの声を上げる。

「いるとしても、その人に裏切り者としての記憶はないはずよ。釜利谷君の記憶研究所によれば、彼を除いた14名……すなわち、ここにいる人間は全員記憶を操作されてしまっているものね」

伊丹さんの言葉に全員が不安げな視線をたがいに向け合う。

「でも」と俺は声を上げた。

「記憶を持っていようといまいと、それはこの事件を語る上ではさしたる情報じゃないと思うよ。問題は、裏切り者が釜利谷君のほかにも存在し、かつそれをリュウ君が把握していたということだ。と、なる」と…」

「…釜利谷さんの他にも、彼に命を狙われていた人物がいると……?」

入間君が声を震わせながら呟く。

「そうだね。でも、彼は二番目のターゲットを殺せぬまま息絶えた。これが何を意味するか分かるかい?」

「二番目のターゲットがリュウを返り討ちにした犯人だと……そう言

「いたいのだろう?」

俺が言う前に代弁してくれたのは御堂さんだ。

「…先ほどの過ちを認めよう。私の描いた筋書きは間違っていたようだ。どうやらこの事件、一筋縄ではいかないようだな」

その言葉を受けて、俺は強く頷いた。

冷静に振る舞ってはいるが、彼女の腕は微かに震えている。

誤った結論の果てに何が待っているのか、想像するだけでそうなるのも頷ける。

【議論開始】

亞桐莉緒：「じゃ、じゃあ本当の犯人の手がかりを見つけないと!」

入間ジョーンズ：「これまでの議論で不審な点はありませんか?」

伊丹ゆきみ：「特になかったと思うけど……」

夢郷郷夢：「さっきの決意表明とやらにさらなるヒントがあったりしてね」

小清水彌生：「うーん：読み返してるけど、なさそうよ」

前木常夏：「犯行場所以外で不審だったところとかねえのか!」

山村巴：「んなモンあるわけねえだろうが!!!」

安藤未賤：「それじゃあ犯人が自白するのを気長に待つのがよいぞよ!」

モノパンダ：「議論が終わる前にみんな寿命を迎えちゃうよ!」

「山村さん。事実を見誤っちゃダメだ」

【使用コトダマ：技術室の焦げ跡

「んだとおっ?!」

彼女の剣幕に押し倒されそうになるが、負けてはいられない。

「ぎ、技術室を調べた時に不審な点があったんだ。ねえ、亞桐さん?」

「あ、そうだ!!」と亞桐さんは思い出したように叫ぶ。

「なんかね、ススみたいなのが床とか備品にこびりついててね……乱暴に掃除した跡があったけど」

「スス……でございますか?」

丹沢君が訝しげな顔をする。

「火事……があつたわけでもないみたいだ。ただ、周囲の物品に多少の損傷が見られたね」

「……どういうことだ、葛西幸彦。貴様は技術室で何があつたと考えている？」

御堂さんの鋭い問いが飛んできた。

俺は思考を整理する。

焦げ跡、スス…。

周囲の者が多少破損していた…。

「爆発」。そう、爆発が起きたんだ。小規模のね」

「爆発…ですって!?!」

小清水さんが驚愕の声を上げるのも無理はない。

爆発なんて現象、そう簡単に起きるものではないからだ。

だが、あの技術室においては状況は別だ。

「爆発が起きたことを示す根拠もある。これだよ」

【提示コトダマ：製図と部品

俺はポケットから手のひらサイズの小さな冊子を取り出した。

「これは技術室に置いてあつたものだ。内容は、”手製小型爆弾の作り方”。”ご丁寧に爆弾製作用の部品も置いてあつたよ」

「な、なんですと!?! そんな物騒なものが技術室にあつたと!?!」

「ぎひやひやひや!! 快適なロシアイ生活のための必需品として提供させてもらったんだぜく! でも勘違いするなよ、爆弾そのものには人を殺せるほどの威力はねえからなく!」

モノパンダが口を挟む。

まさかそんなものが常備してあるなんて、予想外だった。

事前にあの部屋をもっと調査しておくべきだったけど、今となっては仕方のないことだ。

「殺す威力はないにしろ、威嚇や目くらましなどに使われた可能性は高いね。間違いなく、昨晚技術室で何かがあつたんだろう」

「つまり、真犯人が爆弾を用いてリュウを返り討ちにしたということか?」

御堂さんが腕を組んだまま尋ねる。

「そう考えても差し支えはないね」

「でも、それだとおかしくない?」

小清水さんが不安げな顔で呟く。

「リュウ君は確かに大ホールの中央で亡くなっていたじゃない。その話だと、爆弾が使われた技術室で殺されたように聞こえるけど……」
「偽造工作、ということなんじゃない?」

俺の代わりに声を上げたのは伊丹さんだった。

「犯人は?」モノクマ達との戦いでリュウ君が死んだ?と思わせたかっ
たんでしよう? だから、別の場所で亡くなったリュウ君をあの場合
へ運んだと考えるのが妥当だと私は思う」

「でも…技術室に血痕なんて残ってなかったと思うけど……」

亞桐さんの言葉はもつともだ。

犯人が掃除したという可能性も拭いきれないが、血痕をきれいに掃
除しておいて焦げ跡の掃除が乱暴になされていたのは不自然だ。

だとしたら、初めから血痕なんて存在しなかったのか?

「爆弾を使ったからといって、その場で殺したとは限らないわ。爆弾
で怯ませた隙に、何らかの方法で気絶でもさせれば、彼を安全に大
ホールまで運べ、かつ大ホールでの殺害を演出できるものね」

伊丹さんの放った言葉が、俺の脳細胞を刺激した。

——“気絶”。

つまり、あれを使ったということか。

【提示コトダマ：更衣室のスタンガン】

「伊丹さん。その仮定を裏付けるものがある。男子更衣室に置いて
あったスタンガンだ。はじめは誰かの私物だと思って気にしていな
かったんだけど……」

「犯人がそれを用いた可能性が高いってことね」

伊丹さんは俺の言わんとすることを察してくれた。

「ちよつと待てよ…。話が進みすぎなんじゃないのか」

そこに前木君が横槍を入れてきた。

「そのスタンガンってのは誰がどこから持ち込んだってんだよ? ま
さか入学早々からそんなモンを用意してたやつがいたってのか?」

確かに、そんな武器の存在を突然知らされたらそう思うのも無理はないだろう。

一つ一つ事実を確認していく必要がある。

「初めから誰かの私物だったとは考えられないよ…。この場所に連れてこられた時、俺達は必要最低限のものを除いて持ち物を奪われていた。携帯電話や財布すらも取られてしまった。そんな中でスタンガンだけが奪われずに残っていたなんて考えにくいね」

「でも、俺達が殺し合うのを望んでいたこいつらなら、武器を奪わずに残しとく可能性だってあるだろ!？」

「クマ聞きの悪いこと言うなよー！ オイラはいつだって公平なコロシアイ環境を提供するように心がけてるんだぞー！ 一人だけに武器を渡すなんて不平等なこと、させるわけねーだろー!!」

耳障りなモノパンダの言葉だが、おかげでとりあえずは確信が持てた。

「じゃあ、そのスタンガンはここでの生活が始まってから更衣室に持ち込まれたってこと…?」

小清水さんの言葉に俺は頷いた。

「ですが、外界と完全に遮断されたこの校舎内に外部から物を持ち込むなど不可能ではないでしょうか?」

入間君の反論はもつともだ。

「物体を瞬間移動させる念力を使えば可能だぞよ!!」

「さすが安藤君、目の付けどころが違うね」

相変わらず健在な安藤さんと夢郷君の掛け合いには呆れ笑いするしかない…。

「そんな奴がいたら推理も議論も意味なくなるじゃん!! 真面目に考えろよー!」

「落ち着き給え亞桐君。怒ると丸めた新聞紙みたくなるよ」

「普通に”小皺が増える”って言えよ!! 変にリアルな比喩持つてくるなよ!!」

「作られた、と考えることはできませんか?」

混沌とした議論を断ち切ったのは、丹沢君の何気ない一言だった。

「技術室に爆弾を製作する環境が整えられていたのならば、同様にしてスタンガンも技術室で作れちゃったりして……という素人考えでござりますが……」

「確かに考えられなくてもないけど……でも俺が探した限りは爆弾以外のものを作るための製図なんて見つからなかったよ」

「犯人が処分した、という可能性が高いんじゃないの?」

伊丹さんの冷静な指摘が入る。

「そうするなら、爆弾の製図も一緒に処分しているはずじゃないかな? スタンガンの方だけを処分するのは不自然だと思うんだ」

スタンガンの製図だけを処分しなければならぬ状況なんて想像できない。

「つまり、犯人は製図なしでスタンガンを組み立てたってこと……?」

小清水さんが呟く。

「そ、そんな方がこの中におられるというのござるか!」

「相当な精密機械だから常人には作れないと思うのだが……」

言っではみたものの、丹沢君や夢郷君の言葉はもつともだ。

とてもじゃないが機械に詳しくない人が部品だけ集めて作れるものじゃない。

じゃあ、このスタンガンはどうやって……?」

……??

機械に…詳しく……ない人……???

…

…

「…!!!」

ぞわり、と背筋を撫でられたかのような感触が走る。

突然、だった。
突然に。

脚本が、組みあがったのだ。

確かに、“凡人”にスタンガンなどというものを組み上げるのは不可能だ。

だが、ここにいる人間は凡人などではない。

儂くも全員が才能に恵まれた将来ある若者たちなのだ。

そう、“あの才能”ならば。

【人物指名】

ふう、とため息をついた。

張り詰めた裁判上の空気が冷たい。

そんな中、俺は真つすぐと“彼女”の方を向いた。

君だったのか。

君こそが、今回の脚本の主役。

「超高校級のエンジニア、御堂秋音さん」

それは、この場において誰もが予想だにせぬ名であった。

「…君なら、スタンガン程度の精密機械でも製作できるはずだ。製図

なんかなくてもね」

さつき微かに震えていた彼女の体。

それは、謎が解けないゆえの恐怖ではなかった。

むしろ逆。

自らが用意周到に隠蔽した事実を紐解かれていくことへの焦燥に他ならなかったんだ。

瞬間。

強烈な“何か”を感じた。

その主はすぐに分かった。

「……………!!!」

他ならぬ、御堂さん自身だった。

腕を組み、真つすぐにこちらを見据えている。

その表情は何とも形容しがたいものだ。

怒り、憎悪、そう言った激情ともいえる感情の中に微かな恐怖、絶望を感じ取れる。

全員の視線が御堂さんに突き刺さる。

「お、お前……何言ってるんだよ……。こいつが犯人なわけねえだろ!!
だってこいつは、さつきまで積極的に議論を進めてたじゃねえか!」

前木君が青い顔で反論する。

「そうだね。釜利谷君の死の真相を暴く瞬間”まで”は積極的にみんなを誘導していた。そして彼女は議論をこう結論付けようとした。

“釜利谷君を殺したりユウ君はモノパンダたちとの戦いで戦死した”と」

事実、この仮定の下にこの議論は終了しかけた。

俺が言の葉を以て反論しなければ、議論はあそこで終わっていた。そして、誤った結論のもと、俺達は惨たらしい処刑の危機にさらされる場所だったのだ。

「でも、俺が反論したことさらに議論は発展した。君はその反論に対してさらに反論した。あたかも自分の作ったストーリーを貫きたいかのように、ね」

「う、嘘でしょ……？　ねえ、秋音ちゃん……？」

亞桐さんが声を震わせて呼びかけるが、御堂さんは石像のように強張った表情のまま答えない。

「そして、その後の議論になると君は当然黙り始めた。なんでだろうね？　今まではあれだけ積極的に議論を進めていたのにね」

そう話している最中も、俺の目は、御堂さんの瞳から光が消え、深い深い闇に吞まれていくのを、はつきりと捉えていた。

「でもそれは粗末なやり方だと言わざるを得ない。君が作り出したストーリーでは、技術室の荒れようもスタンガンの出どころも謎のままだ。だからこそ俺は」

バン、と。

大きな音が鳴った。

御堂さんが裁判台を全力で叩いた音だとすぐに分かった。

『調子に乗るなよ、屑が』

低く、声圧だけで俺の心を押し潰し潰しそうなくらい重みのある声で彼女は言った。

「そこまで私を犯人に仕立て上げたいか」

「仕立て上げたいわけじゃない。ただ、昨晚起こったことをありのままに解き明かしたいだけだよ」

負けられぬとばかりに俺も力を振り絞って言葉を紡ぐ。

「戯言も大概にしろ……。貴様の推論は穴だらけだ!!」

高らかに宣言するかのように、力強く御堂さんは言い放った。

「まず一つ言わせてもらおうか……。仮に私がスタンガンを製作し、

犯行に用いたとしてそれを男子更衣室などという場所に移すことなど
できんだ」

「…あ、そうよー」と声を上げたのは小清水さんだ。

「葛西君、更衣室には電子生徒手帳を読み取る機械があつて、該当す
る性別の人しか入れないようになってるのよ…」

甘い。

そんなことでは俺の手掛けた脚本は崩れない。

“超高校級の脚本家”を侮ってもらつては困る。

「分かった。じゃあもう一度確認しようか」

【議論開始】

葛西幸彦：みんな。もう一度、更衣室の入室方法を思い出してほし
い」

小清水彌生：えっと、更衣室の入り口にはカードリーダーがあつて
……」

入間ジョーンズ：「そこにご自分の電子生徒手帳をかざし……」

安藤未賤：対応する性別であればドアが開く、という仕組みであつ
たのう!!」

御堂秋音：「残念ながらモノクマがそこまで厳重な体制を敷いてい
る以上、異性が更衣室に入ることはできんだ!」

伊丹ゆきみ：「……! まさか……!!」

「違うよ、入間君」

矛盾は存在する。

辛いけど、追い詰めなくてはならない。

【提示コトダマ：リユウの生徒手帳

「“自分の”生徒手帳をかざす必要はないよ。他の誰かの生徒手帳を
かざせば、性別を偽るなんて簡単さ」

「ま、まさか我々の生徒手帳を盗んで!？」

入間君の驚きの声とともに全員が自分の電子生徒手帳を確認する。

もちろん、誰のものも失われてはいない。

御堂さんは相変わらず鬼のような形相で俺を睨みつけている。

「死亡した生徒の手帳を奪って使えば、誰かのものをわざわざ盗まなくても可能だよ」

「……ッ!!」

ビキビキ、と御堂さんの顔を青筋が走る。

「大ホールで亡くなっていたリュウ君の電子生徒手帳が彼の遺体から少し離れたところに落ちていた。少し違和感を覚えたんだ。彼は普段、生徒手帳を懐に忍ばせていたはずだからね。もちろん激戦の最中に落ちたのかもしれないけど、誰かが使用した後、そこに投げ捨てた」と解釈すればより説明がつきやすいよね」

「た、確かに……」

言葉の弾丸が、彼女を抉る。

あらゆる負の感情が空間を伝播して俺の肌に伝わってくる。

俺は今、一人の少女を殺している。

だがその代わり、十人の仲間を生かすのだ。

「君は釜利谷君に続いてリュウ君に呼び出された」第二の超高校級の絶望”だったんだ。きつと呼び出し状ももらったんだろうけど、細かくちぎって捨てるなりすれば隠すことも可能だね。でも君は驚いたはずだ。知らなかったんだろう？ 自分が”超高校級の絶望”だなんてね。君が動揺していた様子は、焦げ跡などの処理が大ざっぱだったことから容易に推察できる」

俺は頭に思い描いた脚本をそのまま言葉に変え、述べていった。

「……………」

御堂さんは押し黙ったまま何も言わない。

「なぜなら君は、いや、君も含めた俺達はみんな、”超高校級の脳科学者”たる釜利谷君に記憶を消されていたのだからね。だから君は慌てたはずだ。ここまでのトリックも、咄嗟に考えたその場しのぎのも

のだった。それでも俺達を危ないところまで追い込めたのは、ひとえに君の天才的頭脳によるところが大きいだろうけどね」

「……………」

彼女は顎をカタカタと震わせ、なおも黙る。

「だからリュウ君をスタンガンで振り返りにした後、もしくは大ホールに移して殺害した後、校内を歩き回って状況を確認しようとした。その時に君は釜利谷君の遺体を発見し、ここに至るまでの一連のトリックを思いついたんだ。最初に議題が上がっていた死体発見アナウンスの謎もここで解決するね」

「…げ……しろ……」

不意に彼女は顔を下に向け、何かを呟いた。

「? ……なんて?」

『いい加減にしろと言っているのだ!!!!!!』

顔を上げた時の彼女の表情は、最早普段の姿からかけ離れているといっても過言ではなかった。

真っ赤に紅潮した顔、牙をむく表情、血走った目。

すべてが物語っている。

彼女が、真実を暴かれた犯人の姿そのものであると。

「愚論を押し並べるな!!! 貴様の推論のどこに整合性がある!!! 全てこじつけに過ぎんだろうが!!!」

魔獣のような覇気を纏った彼女は敵意のこもった咆哮を上げる。

「確かにそうだね。ここまでの議論は、君でも犯行は可能だ」ということを示したに過ぎない。でも僕は確信してしまった。すでに脚本はできあがっているんだ。そのすべてを披露しよう。君が犯人であるという証拠をね」

「証拠だと!?!? 笑わせるな青二才が!! 行っていない犯行の証拠などどこにあるのだ!!」

「あるさ。君が犯人でなければ説明のつかない事象がね」

【提示コトダマ：モノパンダ修理の跡】

「ついさっきの捜査時間を思い出してみて。俺達に事件の説明をしたモノパンダはどうなっていた?」

「…そういえば…なんだか音声は途切れ途切れで…表面もボロボロだったよな…」

前木君が恐る恐るあげた声に俺は同意の意を込めて頷く。

「そう。あのモノパンダは一度破壊された個体に応急処置を加えたものだったんだ。今日の前にいるモノクマとモノパンダは、捜査時間の間に黒幕の手によって修復されたものとみて間違いないだろうね」

「…それが、どう御堂殿の犯行を裏付けるのでござるか…?」

「分からないかい、丹沢君。黒幕には“短時間で”マイグルミを“完璧に”修理できる能力がある。ということは、あの応急処置を施された個体は、黒幕以外の誰かが修理したものだってことだよ」

「…………!! と、いうことは…」

「スタンガンの時と同じさ。いや、むしろより分かりやすいよね。スタンガンよりもよほど精密で複雑な機械を、応急処置とはいえ問題なく動かせる状態まで直せるのは、御堂さん。君しかいないんだよ」
重く、静かな声で俺はそう言ったのけた。

「!!!
!!!
!!!」

雷に打たれたように、御堂さんは目を見開いたまま硬直していた。

「嘘よ」

ささやきのように小さく、差し込まれた声は。

「嘘だと言って……!! 葛西君……!!」

黒い瞳を虚ろに泳がせた伊丹さんのものだった。

「そんなはずがない……:よりによって……あなたが……」

この数日間で、言い争いを繰り返しながらも仲を深めていた二人。

どことなく似ている内面と相まって、いつの間にか無意識の友情が生まれていたことも想像に容易い。

「俺だって信じたくはないよ。まさか君が、殺人欲求に敗北するなんて思っても見なかった。でもこれは、非常に残念ではあるけれど、真実なんだよ」

「ふふ、ふふふふふふ……」

そんな伊丹さんの悲痛な声に答えるように、狂気じみた笑みが返ってきた。

「伊丹……ゆきみ。貴様まで、ふふふ、貴様まで、この雑魚の言うことを鵜呑みにするのかああああ!!」

恐怖と怒りが混じり合った強烈な声が裁判場に響く。

「ふふ、ふふふはははははは!! そうかそうか!! 貴様らのような無能の集まりは、ふふふ、はははは!! 簡単に、騙されるのだ!!!」

引きつった笑みを浮かべながら、御堂さんは言葉を吐き捨てる。

「私がモノパンダを直したと!? ふふふ、ふへ、へへへ!!! なんだその暴論は!!? 壊れかけのモノパンダがなぜ私によって修理されたものと断定されるのだ!!? そんなもの、リユウとの戦いで半壊しただけかもしれないだろうが!!」

「もうやめにしないか、御堂さん」

【使用コトダマ：モニター破損部】

「あの時のモノパンダは間違いなく君によって修理されたものなんだ。なぜなら、技術室のモニターが分解されていた。きつと、モノパンダを直すためにモニターの部品を流用したためだろう」

「違う違う違——う!! あのモニターは犯人の爆弾でたまたま壊れたに過ぎ」

「だとしたらなぜ、校則違反を犯した犯人は罰せられなかったの?」

「……………あ、ぽ??」

素っ頓狂な声を上げて御堂さんのマシンガントークは停止する。

「校則をよく見てごらん。『モニターや監視カメラ、モノクマやモノパンダへ危害を加えることを禁ずる』とある。たとえば半壊状態のモノパンダしか残っていないなくても、校則違反を犯した犯人はモノパンダによって罰せられたはずだ。でも実際にはそれが行われなかったのは、その時点ではモノクマもモノパンダも全滅し、“一体もヌイグルミが残っていないかった”ためだ。

つまり、ヌイグルミは一度全滅してから、捜査時間に出会ったあの壊れかけの個体だけが息を吹き返した…。つまり、何者かが修理を施したということに他ならないんだよ」

それは物的証拠というよりは状況証拠でしかない。

しかし、ここは本物の裁判場ではない。

物的証拠がなくとも、結論を出すことは可能である。

「もう、やめましょう」

重い声を上げたのは、裁判台に手をついてうなだれる人間君だった。

「もう十分ですよ……。信じたくはないですけど……ここまですわいたら、信じるしかないじゃないですか…」

「な、な、何を言っている…の、だ??」

御堂さんは絶叫に近い声で人間君を問い詰める。

「騙されるな!!! 騙されるな、俗物共が!!! この男こそ、葛西幸彦こそが、私を犯人に仕立て上げ、己の犯行を隠蔽しよう」と

『うるせえっっ!!!』

怒号の主は、ここまで沈黙を保っていた山村さんのものだった。

「黙れや、御堂。テメエの負けなんだよ」

「…負け？ 負けて…??」

「もう誰も、テメエの論理に耳なんか貸さねえつつつてんだ!! テメエが、テメエがリュウを殺したんだろうがっ!!」

高ぶった山村さんの顔には、僅かながら涙が降りているように見えた。

「葛西…:終わらせろ。お前の脚本を…:完成した脚本を…:オレ達に示してくれ」

山村さんの言葉に、俺は力強く頷いた。

「待って、やめて、やめて、やめて」

御堂さんの瞳から恐怖ゆえの涙がほろほろと降りる。

これ以上、誰も苦しめたくはない。

みんなのために、引いては俺自身のために、この胸糞の悪い裁判を終わらせてやる。

「分かった。みんなに披露しよう。これが…俺が導き出した真実だ」

A c t . 1

すべての始まりは、“超高校級の殺し屋”であるリュウ君…いや、龍雅・フォン・グラディウス君が“超高校級の絶望”の抹殺を計画したことだ。彼はまず、手記をしたためることで俺達に自分の意思を伝えようと試みた。そして俺達の中に紛れ込んでいた“超高校級の絶望”に呼び出し状を送りつけた。その中には、今回の事件の第一の被害者である釜利谷三瓶君、そして真犯人も含まれていたんだ。

そして龍雅君は下準備として校内の見回りに当たっていた山村さんを急襲し、気絶させることで殺害目標を呼び出せる状況を整えた。

A c t . 2

そして龍雅君は行動に出た。大ホールを訪れた彼は自ら校則違反を犯し、モノクマやモノパンダたちに戦いを挑んだんだ。大ホールの様子を見るに、相当な激戦だったことは間違いないね。

ただ一つ分かっているのは、彼はその戦いに勝利したこと。その証拠に、彼は隠し持っていた包帯で自らの治療をしていたのだからね。ヌイグルミがこの時点で全滅したのも間違いない。

A c t . 3

龍雅君の次のターゲットは、“絶望”の一人である釜利谷君だ。待ち合わせ場所の2—Aに辿り着いた彼は、有無を言わず釜利谷君の首を砕き、殺害した。その後その場で休息でも取ったんだろう。煙

草の吸い殻をその場に落としていった。それが彼の犯行を裏付ける証拠となつてしまつたんだね。

龍雅君の次なるターゲットとして技術室に呼び出されていた人物、それこそが今回の事件の真犯人だ。呼び出しを受けていた犯人はかなり前から技術室で待ち構え、手製爆弾やスタンガンを用意していた。そして技術室に現れた龍雅君を迎えうった犯人は、彼の負傷も相まって、返り討ちにすることに成功したんだろう。

A c t . 4

犯人の隠蔽工作は周到なものだった。まずは龍雅君を大ホールまで運び、モノクマとの戦いで亡くなったように見せかけた。恐らくとどめもそこで刺したんだろう。そして龍雅君の手記の一部を破り、自分が“絶望”であることを隠した。さらには技術室に戻り、爆発の跡が残らないように掃除し、工具も元の場所に戻した。でも、そういった処理にも様々な部分に詰め甘い個所があった。そのおかげで俺はそれを手がかりとして見破ることができたんだ。

最後に犯人は、コロシアイ生活のルールを遂行させるため、龍雅君に破壊されたモノパンダの一体を大まかに修理した。モニターの部品を流用したにもかかわらず校則違反とされなかったのは、その時点でヌイグルミ達が全滅していたからだね。

「動揺しながらも俺達を翻弄し、誤った結論まであと一步のところまで歩を進めさせた伶俐さと狡猾さ。そして爆弾やスタンガンを常人ならざるスピードで組み上げる器用さと、モノパンダをその場で修理できるほどの神懸かり的な技術。その全てを備えた“究極の理系少女”。

犯人は君だ……………。

“超高校級のエンジニア”、御堂秋音さん!!!”

電撃が走ったかのように、その空間は重く静まり返っていた。

目の前に立つ女性は、目を見開いたままぼうっと立ち尽くしていた。

「あ……あ………」

微かに、その喉元から声が漏れる。

「助けて」

ガクリと膝をつき、両手で頭を抱え込んだ。

「うあああああああああああああああ
あああああああああああああ
!!!!!!」

この世のすべての絶望を凝縮したかのような、猛烈で悲痛な悲鳴がその空間を支配した。

Chapter 2 非日常編⑤ オシオキ篇

きらびやかなスロットには、三枚の絵柄が揃った。

それはすべて、“超高校級のエンジニア”、御堂秋音さんの顔が描かれていた。

“Guilty”の文字と華やかなファンファーレに彩られ、スロットからは大量のメダルが払い出された。

『うぶぶぶぶ!! おめでとう! だいせいかい! “超高校級の脳科学者”、釜利谷三瓶君を殺したのは“超高校級の殺し屋”、龍雅・フォン・グラディウス君で、その龍雅君を殺したのは、“超高校級のエンジニア”御堂秋音さんでしたー!』

決着は、ついた。

終わった。

俺たちは真実を暴き、クロを見つけ出した。

だが。

喜べるはずがない。

こんな結末。

「うう…ぐっ…うっ…うぶ…うっ…」

御堂さんは裁判台にしがみつき、床に膝をついて泣きじゃくっていた。

俺の頬にも、一筋の涙が通っていた。

これが、御堂さんなのか?

俺の、みんなの目前で子供のように泣く弱々しい少女が。

あの、聡明で高圧的だった御堂秋音さんだということのか?

「なんで…どうしてっ!!?」

涙ながらに叫んだのは伊丹さんだった。

「信じてたのに!!? あなたは、あなただけは絶対にこんなことしないって!!? 信じてたのに!!?!!? なんで!!? どうしてこんなことを!!?!!?」

「死ねない…死にだぐない…うう…」

伊丹さんの叫びにも耳を貸さず、御堂さんはうわ言を呟くだけだった。

「どうして…あなたほど賢い人が…モノクマなんかの罠に嵌ったのよ…答えてよ…」

伊丹さんは溢れ出る涙を拭いながら尋ねる。

「正当防衛…と呼ぶにはいささかおかしいね。身を守るだけなら爆弾やスタンガンで動きを封じるだけで良かったはずだ。わざわざ槍を刺してトドメを刺す必要などない」

夢郷君の冷静な指摘が御堂さんの逃げ道をふさぐ。

もつとも、今の彼女に逃げ道を模索する余裕などないのだろうか…。

「…動機を教えてください。なんでお前が、リュウを殺したんだ」

前木君も尋ねるが、その声も御堂さんには届かない。

「ぎひやひやひやひや!!? ぶっ壊れた御堂さんに代わってオイラが説明してやるよ!」

モノパンダが声を上げる。

「モノパンダが我々に提示してきた動機は“将来の夢”だった。御堂君の犯行も御堂君の夢に関することなのかい…?」

夢郷君がモノパンダに尋ねる。

「まあ、平たく言うとそのうことだな!」

モノパンダは明るく答えた。

『では、この場を借りて発表したいと思います!!?』

横に座るモノクマが声を張り上げると、泣き倒れていた御堂さんが顔を上げる。

「ま、待てっ…待って」

『御堂さんの将来の目標は……』

『“家族を作りあげること”でーす!!?』

「!!?」

御堂さんの顔が凍りつく。

その場にいた全員が、その言葉の意味を理解できなかった。

『うぶぶ、ワケワカンネーって顔だね！ それじゃ、今回もスクリーンで動機をおさらいしていきましょう!!? レッツ、ショータータイム!!?』

モノクマが指をパチンと鳴らすと、以前の裁判で俺たちに悪夢を見せたのと同じスクリーンが降りてきた。

「待て……やめろ……」

蚊の鳴くような声で御堂さんは抵抗するが、すぐに力なく床に崩れ落ちる。



初めにスクリーンに映ったのは、クレヨンで書いたような汚い大きい文字。

「みどう あきね ものがたり」

次に映ったのは、これまた子供が描いたような雑な少女の絵だった。

だが、服装や髪形などでそれが御堂さんであることは辛うじて分かった。

『あるところに一人の少女がおりました！ 少女の名は秋音。彼女の母親はあちこちで男を作っては遊び回るようなポンコツでした！』

秋音ちゃんの父親はどこの誰か未だにわかりません！』

すると、画面内に御堂さんより大きい女性が現れた。

すると、次はその大きい女性が御堂さんをひたすらに殴る光景が流れた。

女性が腕を上下させているだけの適当な作画ではあるが、その映像を見てすくみ上がる御堂さんの反応から、それが事実として行われたことであることは容易に伺いとれた。

女性：母親がいなくなると、御堂さんはその場に正座して自分を律する。



「お……お母様……お母様あ……」

スクリーンを見て、御堂さんは再び涙をこぼし始める。
信じられない。

一体いつどうやってこんな映像を作ったんだ。

まるで最初から、彼女が犯行に及ぶことが分かっていたかのようじゃないか。



画面は何度も暗転し、その度に御堂さんが母親に虐待されている映像が映った。

浴槽に顔を押しさえ込まれ、気絶しかけるまで沈められたり。

うつ伏せの状態で柵の上に乗せられ、身動きのとれないまま放置されたり。

簡略化された粗雑な絵柄で描かれていたのは、見るに堪えない残酷な仕打ちだった。

『秋音ちゃんは母親に執拗な虐待を受けていました！ ですが、母親を憎むことはありませんでした！ なぜなら、自分が怒られるのは自分が母親からの言いつけをちゃんと守れていないから、つまり自分のせいだからなのです!!？ だから、自分が母親に怒られることは秋音ちゃんにとって当然のことでした!』

一種の洗脳状態に近いのだろうか。

虐待されるのが当たり前になりすぎて、そのような思考になってしまったのだろう。

胸が張り裂けそうな痛みを感じる。

やがて、母親が御堂さんを押入れに蹴り入れる。

蹴られたお腹を押しさえながら、御堂さんは小さくうずくまる。

『やがて、母親は秋音ちゃんを押入れに閉じ込めたまま、家に男を連れ込むようになりました!』

押入れの中で雑誌を手取る御堂さん。

映像の中で雑誌がクローズアップされ、そして映像全体が雑誌の中の世界を映し出した。

そこでは、仲良しの家族が車で颯爽とドライブしていた。

『真つ暗な押入れの中で御堂さんが思い浮かべたのは、大好きなお母さんとの夢でした! 車にのって、楽しく買い物して、いろんな所を巡りたい! 車を想像しながら押入れのガラクタで彼女が組み立てたのは、小さな小さな回路。それが、エンジニアとしての彼女の人生の始まりでした!』

押し入れから出てきた彼女が抱えていた小さな機械を見て、母親は驚く。

そして、嬉しそうに母親はその頭を撫でた。

『うぷぷ、お母さん、嬉しかっただろうね！ 娘さんが意外な才能を持っていたおかげで、いい金づるが手に入ったんだもんね！』

モノクマが語ったのは悲痛な現実。

だが、幼い御堂さんにそんなことが分かるはずがない。

ただ母親に褒められたとしか感じなかったのだろう。

『母親に褒められた秋音ちゃんは、もっと一生懸命にモノづくりに励むようになりました！ この一件が彼女にとって重要な“飴”となり、ますます母親に洗脳される羽目になったんだね！ さて、そんなある日、思いもよらず彼女の家族は増えました！』

次に画面が暗転すると、母親が小さな赤ん坊を抱えていた。

『それは母親が生んでしまった二人目の子供。秋音ちゃんの弟、秋来あきら君です！』

だが、母親は抱えた赤ん坊を御堂さんに押し付け、画面外へと歩き去ってしまった。

この映像が表す事実は、とても悲惨で直視しがたいものである。



「っ!!? や、やめろ!!? やめろやめろ、見せるなあ!!?」

突如、様子が変わったように御堂さんは叫び出した。

『なんで? 君の弟の秋来君だよ?』

「やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろおおおオオおおおオオオオオオオオオオオああああ!!?!!?」
唾液を撒き散らし、心の底から振り絞るように御堂さんは絶叫した。

そのあまりにも壮絶な姿に、俺達は声をかけることもできない。

「上映中は静かにするのがマナーだぜ」

モノパンダが辛辣に言い放つ。



『うぷぷ、ネタバレしちゃうと、母親は秋来君の育児を放棄して、まだ幼い秋音ちゃんに押し付けて家を出ていっちゃったんだよね!!』
なんという、なんという母親だ。

あまりにも無残な仕打ちに閉口するばかりだった。

映像内では、相変わらず子供の落書きのような絵柄で、バタバタとなき騒ぐ赤子と、その対応に苦慮する御堂さんの姿が映されていた。自らも幼い御堂さんには、ミルクの飲ませ方もオムツの変え方も分からなかったのだろう。

ひたすらに泣きわめく赤子と、その周りを右往左往して慌てる御堂さん。

二人のもとに母親は現れない。



「やめろっやめろっやめろっやめろっやめろっ……やめて……やめれ下さいっ……見たくない……見せないれ……」

モノクマが座る玉座にすがりつき、涙と鼻水と唾液で顔をグシヤグシヤにしながら御堂さんは懇願する。

無論、二体のヌイグルミは何の反応もしない。

「もう無理……もう見てられない」

亞桐さんも涙ぐんだ声で顔を手で覆う。

画面の中では、慌てる御堂さんと衰弱する赤子の様子が映っている。



どれくらいの時間が経ったのかは分からない。

ようやく母親が二人のもとに帰ってきたのだった。

だが、そのとき映像に映っていたのは。

隅に正座するやせ細った御堂さんと。

布団に寝かせられたままの茶色くミイラ化した赤子の遺骸だった。

映像に描かれているのは干からびたイモムシのような絵だったが、そのリアルな死骸を想像するだけで強い吐き気がこみ上げてくる。その光景に驚いた母親は、赤子を育てられなかった罰なのか、ひたすらに御堂さんの体を痛め続けるのだった。

再び暗転。

70年代のコンピュータゲームのような音源の、ゲームオーバー時のような暗い曲調の音楽が流れ始めた。

悪趣味、という次元ではない。

一人の少女が見た地獄を全力で嘲笑おうとするモノクマのどす黒い意思が感じられた。

そんなBGMの中で映り込んだのは、大雨の中ゴミ袋とシヤベルを引きずって雑木林を歩く御堂さんの姿。

ゴミ袋の中に何が入っているのかはすぐに分かった。

そして、泥まみれになりながら地面を掘り、ゴミ袋を埋め立てる。

こんな汚れ仕事でさえ、娘にやらせたというのか。

『罪から逃れるため、母親はすぐに彼女を置いて家を出て行ってしまいました。御堂さんはお母さんを待ち続けました。来る日も来る日も、でもお母さんはもう戻ってくることはありませんでした』

どれくらいの日日が経ったのだろうか。

画面に映ったのは、ニュース映像だった。

「先日、○○県○○市の公園に女性の遺体が遺棄されていると警察に通報がありました。遺体の持ち物などから、遺体は○○県在住の××由紀子さんと見られ、遺体には乱暴された跡があることから強姦及び殺人、死体遺棄の疑いで警察は捜査を進めております」

そして、先ほどの落書きのような絵でテレビを覗き込む御堂さんの姿が映された。

彼女の表情がクローズアップされ、瞳から一筋の涙が流れる。

次に映ったのは、多数の警察官に囲まれ、保護される御堂さんの姿。

『うぶぶ、結局お母さんは男性とのトラブルに巻き込まれてあっさり殺されてしまいました！ 因果応報だね！ 秋来君の件は警察に気付かれることはなく、秋音ちゃんは晴れて新しい人生を歩むことになりました！ そもそも、御堂っていう苗字は過去を隠ぺいするために後からつけたものだったんだよね！』

晴れて……？

否、画面に映る彼女の姿は、決して晴れ晴れなどしていなかった。

家族を、生きがいを失った少女の目は、死んだ魚のように濁っていた。

再び、暗転。

映り込んだのは、暗闇の中に佇む御堂さん。

その手に握られているのは、おもちゃのロボット。

「おかあさんを、作る」

「秋来を、作る」

「秋音がみんなを作って、みんなで楽しく暮らしたい」

“ 失ったなら、作ればいい”

これが、御堂さんの夢。

この野望のために、彼女はこの学園からの脱出を決意したんだ。



『人工知能“アルターエゴ”に適正なアンドロイドを組み合わせれば、死んだお母さんや秋来君を蘇らせる夢も叶うかもしれないからね！ 志半ばで倒れるなんて残念だね、秋音ちゃん！』

モノクマが不敵に笑う。

彼女は、動機の映像で自分の夢を思い出した。

そしてそれを果たすため、この学園から出ることを決意したということなのか。

「う……う……あ、あ……あ……あ……」

泣く声すらも枯れかけた御堂さんの姿を、俺は涙をこぼしながら見下ろしていた。

「ひどすぎるよ……あんな心ないお母さんに振り回されて……」

亞桐さんが涙声で呟くと、御堂さんは一瞬動きを止め、そしてよろよろと立ち上がり……

「お母様をつ、ひどく言うなっ!!?!!?」

力の限り叫んだ。

その言葉を聞き、亞桐さんの表情が凍りつく。

「何も知らないくせに……お母様を侮辱するなっ!!?!!? 私のお母様をつ、秋音のお母様をつ!!?!!?」

「何言ってるんだ!!? あんだけお前を虐待して、弟の始末までさせて!!? あんな親のどこがっ!!?」

「黙れ……っ!!?!!?」

前木君の言葉すらも遮られる。

「秋来を殺したのも、お母様が死んだのも、私が悪いんだっ!!?!!? 私がいい子にしなかったのが悪いんだっ……!!? お母様は悪くないんだ、悪くないんだああああ!!?!!?」

一方的な理論だ。

映像を見る限り、彼女は被害者でしかない。

なのに、此の期に及んで母親を擁護しようとするなんて。

いや、こんな事件を起こした時点で彼女の価値観がどうしようもないくらいに狂ってしまったことは容易に汲み取れる。

なぜなら、事件を起こしたということは、俺たち全員を殺してでも外に出ようと決意したということ。

十数人のクラスメートの命よりも、家族のアンドロイドを作り上げることを優先させようとしているという何よりの証拠なのだから。

「お前らに何が分かるっ!!?!!? お前らに!!?!!? 私の苦しみが分かるわけないだろうがっ!!?!!? 当たり前前の家庭で当たり前前に育てられた連中に、私の苦しみが分かってたまるかっ!!?!!?」

裁判台にしがみつき、御堂さんは必死に怒鳴る。

これまでの彼女の高圧的な態度。

それは、自分の苦しみが絶対に理解されないがゆえの孤独感に起因するものだった。

無論、動機を見るまでは家族に関する記憶も失っていたのだろうが、記憶を失わずともあのような態度の人物だったであろうことはありと想像できた。

彼女の苦しみとは、母親に虐待されたことではない。

大好きな母親を失ってなお、一人で生きながらえなくてはならない人生そのものだ。

例えばどんな暴力を身に浴びようと、ただ母親に愛されたかった。

それが、御堂秋音という少女の本性だった。

「くだらねえ人生だなー、自分じゃなくて母親が主人公の人生なんてよー。死んだ人間に縛られた拳句、違う人間を死なせることになって、結局最後は自分自身が死ぬことになるんだもんな」

モノパンダの言葉に、御堂さんはビクツと肩を震わせた。

「い、い、いや……死にたくない……助けて……」

床に尻餅をつき、二体のヌイグルミから離れるように後ずさる。

「助けて助けて助けて助けてたすけてたすけて、お母様あああああ

!!?!!?」

床に這いつくばり、来るはずのない存在に助けを求める。

「死んじゃう、秋音死んじゃううううう!!??!!? おがあげええええ!!??!!?」

幼児退行。

最大限の恐怖に苛まれ、ついに人格が完全な崩壊を起こしている。

そんな彼女に、伊丹さんが近づき……

パン、と平手打ちした。

泣きわめいていた御堂さんの声が止まる。

「ちゃんと見て、私の目を」

溢れる涙も気にせず、伊丹さんは怯え上がった御堂さんの両肩をしつかり掴んだ。

「どうして……私に言ってくれなかったの……? 私に相談してくれなかったの!?!? 苦しければ、私達を頼ってくればよかったのに……!」

「ひ、ひいいいいいい……」

御堂さんは悲痛な悲鳴を漏らしながら身を縮めて体を震わせるのみだ。

「私も、よろしいでしょうか……?」

入間君も進み出て、御堂さんの前にしやがみ込んだ。

そして、怯える彼女の肩に手を乗せる。

「……私は、あなたと対話したかった。あなたという人間を理解したかった。あなたも私も、同じ人間なんです。あなたの苦しみを理解してあげられないわけがないんですよ。だから、だから一言くらい相談してくれてもよかったですじゃありませんか……!」

涙を拭いながら心の内を述べる。

初日以来、彼女とみんなの間でトラブルが起きないよう尽力してきた彼だからこそ言える言葉だった。

……だが。

「なんで、秋音をぶつ の……?」

すすり泣きながら御堂さんは呟く。

「秋音をぶっつけていいのはお母様だけなの!!? お前なんか嫌い!!? 大っ嫌いだー!!?!!?」

そう叫び、御堂さんは伊丹さん突き飛ばす。

「恐怖のあまり記憶すらも混乱しているというのか……もう……御堂君の面影は残っていない……」

夢郷君が悲痛な声で呟く。

「……かわいそうに」

涙を拭うことも忘れた伊丹さんが、小さく言った。

「あんな親の元に生まれさえしなければ、何も不幸なことはなかったのに」

親は自分では選べない。

御堂さんがどれだけ努力しようと、悲惨な人生を送ることはもはや決定事項だった。

運命だったんだ。

だから、俺たちは彼女を責めることはできない。

ただこの言葉をかけてあげることしかできない。

“……かわいそうに”

「おかあさん、どこお……? 悪い人が……秋音をころすって言うのお

……。おかあさん、助けてえ……」

届くはずのない言葉をぼやきながら、少女は四つん這いで力なく床を這う。

『悪い人じゃなくて、悪いクマでしょ! ってゆーか、別に悪くねーし

! ヒトゴロシは殺されて当然なんだぞ! 僕はむしろ正義のクマなんだからね! もう、怒ったからさっさと始めちゃお! オシオキタイム!』

モノクマがハンマーを振り上げると、赤いスイッチがせり出てくる。

ああ……

また始まってしまう……。

この瞬間が。

俺達が投票したせいで死んでしまう命。

これ以上ないくらい悲痛で凄惨な方法で行われる処刑。

目の前で一人が殺されるというのに、俺達は何もできない。

「どうしてですか……どうしてなんですかつ!!」

入間君が涙をこぼしながら叫ぶ。

「わたくしだって……誰だって……あなたの支えにはなれたのに!! な

ぜ……なぜ、こんな結果になってしまっただ!!」

抗いきれない運命におも訴えかけるかのように彼は叫ぶ。

あまりにも理不尽な現実への疑問を。

無論、誰も答えない。

答えられるものなど、いない。

「俺達は……なんでも相談できる仲じゃなかったのかよツ……!! 俺達は

……”ダチ”じゃなかったのか……!!」

前木君の悔恨に満ちた呟きが聞こえる。

それにしても……

“ダチ”なんて言葉、久しぶりに聞いたな。

『ミドウ アキネ さんが クロ に きまりました。オシオキ
を かいし します』



御堂秋音の脳裏に浮かんだのは、数少ない母親との記憶。

「おかあさまっ、ごめんなさい!! ごめっ、ごぼっ!!」

母は無表情で秋音の頭を浴槽に押さえつける。

「くるしいぐるじいぐぐっ!! がっごっごぼっ!!!」

顔を覆う液体が涙なのか水なのか分からない。

「いぼいぼいぼ……ぐぶぶ……」

少し経つと、声を上げるのも億劫になる。

口もお腹も液体が満載されている。

そうして意識が宙を浮かび始めたころ、突然髪をつかまれて浴槽から引き上げられる。

壁に押し付けられ、思い切り腹に拳を叩き込まれる。

「ぶっ、げぼっ!!」

液体が体中からあふれ出す。

「ごめんなさい、おかあさま」

声を発せるようになったので、蚊の鳴くような声で許しを請う。

舌打ちとともに母の眉間に皺が寄る。

最後に一発、頬に平手打ちを食らった。

またある時は、部屋で全力で殴られた。

秋音の小さい体は壁際まで吹っ飛び、床に寝転がる。

「あがつ!! うう……ううっ、ひくっ……」

声を出しすぎてはならぬと、秋音は精一杯声を押し殺してすすり泣く。

なんとか床に手をつき、起き上がろうとしたその瞬間。

ドン、という大きな音とともに母親の足が秋音の背中を踏みつける。

「がつ、か、は、は……」

母親が足に体重を乗せると、か弱い少女の肋骨はめりめりと悲鳴を上げる。

細かく呼吸をするのがやっとだった。

そんな毎日だった。

どうすれば愛されるのか、ずっと考えていた。

自分の何がいけないのか。

どうすれば自分は母親の期待に答えてあげられるのか。

「アンタの弟だよ。秋来。一か月くらい帰らないからちゃんと言葉を聞けよ」

蘇る。

つらい日々の記憶。

「は……? おい……これ……秋来……? し、死んでるじゃんかよ

……おい!!」

確かに辛かった。

だが。

母親がいなくなつてからのほうがずっと辛かった。

たとえ国からの保護を受けられて安穩とした生活を送っていたとしても。

母のいない生活など取るに足らぬものであった。

「くそ!! どうしてくれんだよ!!! 死んでるじゃねえか!! どうすんだよ!!! くそっ!!」

母親と一緒にいられると思えば、殴られることも、浴槽に沈められることも、心地いいとすら思えた。

なのになぜ。

「君の母親は亡くなつたんだよ。これからは、国が君を保護してあげるからね。君は工学の素晴らしい才能を持っている。そういった学生を引き取る学園があるんだ」

確かに、母親への感情を抜きにしてもモノづくりは楽しかった。

だが、それでも母親が彼女のすべてであることは変わりないのだ。

「君は将来、あの希望ヶ峰学園に入学することになる。忌まわしい過去は全て忘れなさい。× 由紀子という人間は君とはもう無関係の人だ。君は将来の“超高校級のエンジニア”、御堂秋音なのだからね」

心なき大人は誰も理解などしてくれない。

あの母親が、× 由紀子だけが彼女の母親であつたことを。

別れたくなかつた。

ずっと一緒にいたかつた。

そして、愛されたかつた。

そう、本音は。
うらやましかつたのだ。

周りにいる当たり前の家庭が。
母親と手をつないで歩くごく普通の家族が。
何よりもうらやましかつた。

彼女が呼んできた“雑魚”という蔑称は。
孤独感のみに起因するものではない。
嫉妬だ。

“雑魚共”のような、普通の人生を歩みたかった。

“……秋音は”

“どうすればよかったのだろうか?”

“どうすれば幸せになれたのだろうか?”

“どうすれば弟を死なせずに済んだのだろうか?”



「アンタなんか」

スクリーンに映りこんだ母親の影が告げる。

「生まれてこなけりやよかったんだよ」

それが。

彼女の胸中に浮かんだ問いへの答えだった。

その瞬間。

御堂秋音は、崩壊した。

そこには、見慣れた母の背が。

『く母を訪ねて三千機く』

少女は迷わず母のもとへと駆け出す。

しかし、少女と母の距離が縮まったとたん。

母親が振り向くと。

それは母親などではなく、母親の服とウィッグをつけただけのガラクタ人形だった。

少女が驚いて目を見開いた瞬間。

ガラクタ人形は盛大に爆発した。

少女は吹き飛ばされ、地面を転がる。

埃が広がる中、ゆっくり顔を上げると……

後ろ向きに立つ数百、いや数千にも思える母親の背中。

意を決した少女は一つずつその正面に回り込み、顔を確認する。

だがどれもガラクタ人形。

正体を暴かれることにそれは小爆発を起こし、少女を傷つけた。

それでも少女はあきらめない。

自らが生涯をかけて愛した母親を見つけるためなら、どのような犠牲も厭わない。

その犠牲が自分であろうと他人であろうと。

彼女は既にそういう人間として完成していたのだ。

幾人もの母親に傷つけられた少女は、満身創痍の状態ながらあるものに気付いた。

空間の一番奥にぼつんと立つ一人の母親。

それがゆっくりと振り返ると……

少女によく似た美しい顔立ちの女性だった。

人口知能“アルターエゴ”に理想の母親の人格を持たせ、人型アンドロイドに搭載させた究極の擬人機械。

少女が思い描いていた母親が、そこに立っていた。

他のガラクタ人形には目もくれず、少女は駆け出す。

母親は娘に向けて、爽やかな笑みを浮かべる。

それは、少女が一度も見ることのなかった母親の心からの笑顔であつた。

少女は涙をこぼして駆け寄り、

何かに引つ張られて倒れた。

驚いた少女が足元を見ると。

茶色く干からびた赤子が少女の足をつかんでいた。

その赤子の足を、まったく同じ姿の赤子の遺骸が掴んでいる。その後ろも、その後ろも。

背後には、幾千にも及ぶミイラの塊ができあがっていた。

眼球が腐り落ちた空虚な眼光が一斉に少女に向けられる。

開きっぱなしの口からは怨嗟のうめき声が漏れ出しているかのようであった。

少女の顔が一気に青ざめ、大口を開けて悲鳴を上げた。

両腕で地面を引つ掴み、必死に前へ這い出ようとする。

そんな彼女の姿を悠然と見下ろす母親アンドロイド。

少女の叫びも、願いも、体温も心もない機械には届かない。

否、目の前に立つのが本当の母親であったとしても、それが届くことなどないだろう。

そういう星のもとに生まれたのがこの少女だったのだ。

抵抗虚しくミイラの群れに埋め尽くされていく少女。

突然、胸をかきむしって苦しみだす。

少女の体は見る見るうちにやせ細っていく。

まるで、ミイラと化した赤子の呪いが伝播するかのよう。

蒸気のようなものが体から噴き出るとともに、皮膚は水分を失い茶色く変色し、ひび割れていく。

眼球は白く濁っていき、手足は細かく痙攣する。

熱い、苦しい、痛い。

それは、彼女がこれまで母親から受けてきた仕打ちのすべてを凝縮したかのような、想像を絶する感覚であった。

腕を差し伸べることもすらもできなくなった彼女は、最期の望みをかけて母親を呼ぶ。

少女の意識が途切れる刹那。

母親は笑みを解き、何かを呟いた。

少女以外のものに、その言葉を知る術はない。
しかし。

それを聞いた少女は……

赤子と変わらぬ悲惨な表情のまま、自らも干からびたミイラとなった。

母親アンドロイドは、少女のミイラを引き出すと、どこから取り出したのか燃えるゴミと書かれたゴミ袋を広げ、ミイラの中に詰め込んだ。

そしてそれを地面に投げ捨てる。
生ゴミとなった娘に柔らかな笑顔で手を振った直後。

母親アンドロイドは、これまでとは一線を画する規模の大爆発を起

こした。

家族みんなを巻き込むほどの。

『めでたしめでたし』



「ぎひやひやひやひやひやひや!!!」

『うぷぷぷぷぷぷ!!!』

スクリーンが下りると、二体のヌイグルミの狂気じみた笑い声が場を支配した。

「いやあく、今回は正直マジで危なかったなあ！ あのキチガイ殺戮マシーンに全滅させられるところだったしなあ!」

『でももうあいつも死んだことだしその心配をする必要もなくなったよね！ うぷぷ!』

「それじゃ、オメーラ、今回もお疲れさん！ 例によってスロットのメダルは持っていったいいから、各自部屋に戻って休んでよし!」

『今回は前回にも勝るワクワクドキドキな絶望が見られて、校長先生本当にうれしいよ!! 次も頑張ってるね!!』

二体のヌイグルミはけたたましい笑い声を上げながらどこかへ去った。

達成感などなかった。

「ううう……こんな…鬱展開があつてよいのかあ!!! うううう……」

安藤さんが涙ぐんだ表情で叫ぶ。

「理不尽だが、もう僕たちにできることは終わった。やれることなど何もない。僕は戻るよ。考えたいことが山ほどある」

妙に冷静な夢郷君はいち早くエレベーターへと歩を進める。

俺は何もできずに裁判場に佇んでいた。

頭が割れるように痛い。

裁判中の俺は、まるで“俺ではなかった”。

何かがとりついたかのように、冷酷に、饒舌に、機械的に、クロを追いつめていた。

あの時の“俺ではない俺”が、か弱い少女を追いつめて、殺した。その罪悪感だけでも心が潰れそうだが、俺はまだいい方なのかもしれない。

“自分以外の何か”のせいにできるから。

もつとつらいのは、議論を共に交わした仲間たちだ。

例えば俺の目の前で床に崩れ落ちている伊丹さん。

彼女は、まるで御堂さんのぬくもりを思い出すかのように、さつきまで御堂さんが這いつくばっていた床を撫でていた。

そんな伊丹さんに亞桐さんが近づき、背後からすがりつくように抱きついていた。

「うああああああ!! ウチらが、ウチらが殺しちやっただよおお……!! ウチらが、秋音ちゃんを……!!」

伊丹さんは茫然としたまま答えなかった。

みんながここまで苦しむのも当然のことだ。
自白した土門君の時とは違い、今回は抵抗する御堂さんを投票で追い詰めたのだから。

「これで、アイツは救われるのか？」

ぼそりと呟いたのは、未だ赤いオーラに包まれた山村さんだった。
「あんな弱つちい女を寄つてたかつて死に追いやつて、それがアイツの望んだ結果なのか？」

もし、この場にリュウ君がいたならば、どうしていたのだろうか。
いつもと変わらず冷静に振る舞っていたのだろうか。
今となつては知る術はない。

ふふ、と山村さんは悲しげな笑みを浮かべた。

「なんて弱いんだ、オレは」

少しずつ、彼女を取り巻くオーラは大気へ飛散していく。

「オレは、お前にはなれない……」

震える声で彼女は呟く。

「だから、帰ってきてくれ……リュウ、いや、龍雅……」

彼を本当の名で呼ぶ機会も、とうとう訪れなかった。

「私を、みんなを、助けてください……」

そう呟いた時の山村さんにはもう、オーラは残っていなかった。

丹沢君は安藤さんに、小清水さんは山村さんに、亞桐さんは伊丹さんに、それぞれ肩を貸してエレベーターに乗り込む。

俺もおぼつかぬ足取りでフラフラと乗り込んだ。

最後に残ったのは前木君だ。

彼もまたエレベーターに向けて一步踏み出し……

今乗り込もうという時に突如振り返り、裁判場を指さして叫んだ。

『三ちゃん!!! リユウ!!! 御堂!!! 俺はお前らが好きだったぞ!!!』

他のお前らが何と言おうと、俺はお前らのダチだ!!! そうだろ、三ちゃん!! 三ちゃんが言いたかったのは、そういうことだろ!!! だから、俺がそっちに行くまで待ってる!!! お前らの苦しかったこと、俺が全部受け止めてやる!!! きつと、必ずだ!!! リャンも土門も、絶対絶対待ってる!!! またな!!!』

そう言って誰もいない裁判場に手を振り、エレベーターに乗り込む。

チン、と俺達の心持ちとは対照的な軽い音とともにエレベーターは稼働を始める。

俺達は、“ダチ”だったのだろうか。

釜利谷君の正体も、リユウ君の素性も、御堂さんの苦しみも知らなかった俺は。

三人の“ダチ”を名乗る資格はあるのだろうか？

もう、いいや。

それが結論だった。

考えたってしょうがない。

生き残った俺達は、明日を生きる。

その事実以外に思いを馳せる必要性はないのだから。

気持ちを整理するため、俺はポケットから一枚のハンカチを取り出す。

数日前、涙を流す俺を見かねた釜利谷君が俺に貸してくれたものだ。

結局、本人に返すことはできなかったが。

今一度、俺はそれで顔をよく拭った。

「あーあ、」

エレベーターが一階に着くまでの刹那、俺は最後に一度大きなため息をついた。

「メンドクセー……」

横で、“彼”がそう言っているような気がした。



Chapter 2 非日常編？ 真相編



悪夢のような裁判と、地獄のような処刑劇が行われた、その十時間ほど前。

時は深夜。

リュウは自室の真ん中に腰を下ろし、微動だにせず時が過ぎるのを待っていた。

彼の胸中にこの時何が渦巻いていたのか、他の者には知る由もない。

彼が見させられた動機は、実にチープな作りものであった。

その映像では彼を“超高校級の情報屋”とし、その才能にあった適当な“将来の夢”を映しだしていた。

つまり、彼が本当の自らの才能を思い出さぬよう、事実を偽造したのである。

しかし、その目論見は見事と言ってよいほど逆効果であった。

なぜなら、その映像に対する膨大な違和感が、彼の記憶を呼び覚ます契機となったのだから。

こうしてリュウは、突然に自らの正体を思い出した。

そして、その記憶こそが、彼を黒幕との一大決戦に導くことになるのである。

時計の針が一時を差したころ。

リュウはバスタオルを片手に、ゆっくりと自室のシャワールームへと入っていった。

バスタオルを持っていったのは、むろんカモフラージュのためである。

“シャワーを浴びる”と黒幕に思わせることが目的だった。

リュウもまた、他の生徒と同じく入学と同時に意識を失い、この特別分校で目を覚ました。

その際に貴重品と呼べるものはほとんど奪われてしまっていた。肌身離さず持ち歩いていた暗殺器具もまた同様であった。

だが、そんな彼にも、奪われずに済んだ暗殺器具が存在した。シャワールームに入り、監視カメラの目がないことを確信すると。

ぐ、と腹に力を込め。

「ぐ……う……ぐむっ！」

握り拳大のカプセルを口から吐き出した。

「ぐっ……！ うっ……！」

二個、三個と立て続けに。

やがて四個目のカプセルを吐き出し終わると、それらを洗って開いた。

中から出てきた精密機械を綿密に組み上げ、一つの武器が出来上がる。

それは、手のひらに収まるサイズの小型拳銃。

体内に存在する武器までは、モノクマの力をもつても奪えはしなかったのだ。

それを懐に収めると、リュウはシャワールームを出る。

「ぎひゃひゃひゃー！ 随分と長いシャワーだったな！ 思春期？ 大事なところは綺麗にしときたい感じ？」

部屋ではモノパンダがあくどい笑みを浮かべて待ち構えていた。

「ふん、俺ともあろうものが…シャワールームで寝ていた。…最初の事件があつて以降、ろくに寝ていないのはお前も知っているはずだ」
リュウは躊躇いなくそう答える。

「ふーん、それならいいけどよ。それじゃあ、精々事件を起こさないよう頑張つてな！」

モノパンダは皮肉めいた言葉を残して部屋を去っていく。

その後をゆっくり追うように、リュウは部屋を出た。

コツコツと、絶望の足音を響かせて死神は歩く。

その足取りに恐怖や躊躇はない。

この世で最も絶望を目にした一族には、そんな感情などどうの昔に存在しない。

あるのは、任務を遂行せんとする機械のような意思。

……しかし。

「待ってください!!」

彼女の声が、リュウの機械的な足取りを止めさせた。

「どこへ行く気ですか!!」

道着を身にまとった山村巴の姿がそこにはあった。

「山村か…。少し、眠気覚ましに散歩を」

「違うっ!!!」

山村は顔を紅潮させて叫ぶ。

「そんな理由で、みんなで決めたことを破るような人じゃないはずです…! 教えてください、あなたの真意を」

リュウは山村に背を向けたまま、少し押し黙る。

しかし数秒ののち、口角を少し上げ、悪意に満ちた表情を浮かべた。

「ならば教えてやろうか」

リュウは振り返り、強烈な眼光を山村に向けた。

ぞわり、と恐怖が山村の心を嘗め回す。

「俺は思い出したのだ。俺は『超高校級の殺し屋』。殺し屋の任務に乗っ取ってあの忌々しい綿埃共を消してやるのだ」

山村の肩が小さく震える。

「そんな…あれに…戦いを挑むなんて…」

「ふん、分かったらここで大人しくしている。俺が全てを終わらせてやる」

リュウは再び歩き出す。

これで終わるとばかり彼は思っていた。

「私もっ…!! 私も行きます!!!」

山村の叫びにリュウは驚きの表情を浮かべた。

「私もともに戦います!! あなたと私なら、きつと勝てますとも!!」

「貴様……………正気か?」

「私はっ!! 私は決めたんです!! もう退かない、媚びない、顧みないと!! もう私の弱さで人を死なせたくないんです!! 人が死にゆくのを……………黙って見ているなんて……………もう嫌なんですっ!!」

「黙れ」

リュウの冷徹な言葉が山村の胸を突き刺す。

「空手と殺し合いは違うのだ。貴様は足手まといだ。足手まといは戦闘の邪魔になる。いない方が有利に事は運べるのだ。それくらい自覚しろ」

「……………ツツ!!」

ギリギリと、山村は歯ぎしりする。

それと同時に赤いオーラが彼女の全身を包み込む。

「見くびるな……………!! オレの力を見くびるなあああああ!! オレは強い……………! 強い強い強い強い強い強い強い強い強い強い強い強い強い強い強い!! 大神よりも……………!! お前よりもだああああああ!!」

瞬間。

リュウの手刀が山村の首筋を捉え……………

「ナメてんじゃねえぞ……………!!」

…否、山村はその手刀を右手で受け止めていた。

リュウは少し驚いた表情を作った。

「オレは強いんだ……………!! 強いからみんなを守れる…! だからオレも行かせろ……………!! お前だけに背負わせるわけねえだろおがあっ!!」
全身の気を逆立て、山村は声をリュウに叩き付けた。

「腕を上げたな」

ぴく、と山村の表情がこわばった。

音速を超えた拳が彼女のみぞおちに打たれていた。

「か、は」

ビクビクと彼女の体が震える。

「だが、所詮その程度だ」

するり、と彼女の体がりゅうウに向けて倒れこむ。

「…皆を守りたいから強くなる、か。見事と言えば見事な目的だが、そんなものは絶望を知らぬ者の美談にすぎん」

抵抗しようもなく意識を失ってゆく山村の眼元から、一筋の涙が零れ落ちる。

「残念だが、俺の目的とお前の目的は違う。俺のなすべきは任務。ただそれだけだ」

りゅうウへの最後の抵抗なのか、山村は彼のコートを弱く握りしめた。

だが、その手もすぐに力なく解き放たれる。

「羨ましいな。絶望を知らぬ者は、そうやって綺麗ごとのために強くなれるのだから」

涙を溢れさせる目を閉じ、山村はりゅうウの体に向けて崩れ落ちた。

山村の体を廊下に寝かせると、りゅうウは再び歩き出した。

何も言わず、何も思わず、何も感じず。

ただ静かに歩くのみ。

エレベーターに乗り込むと、静かにため息をついた。

エレベーターの扉が音を立てて開く。

一人の男の、運命のステージ。

生涯最後にして最高の決戦の舞台。

その場所は、もう目前に迫っていた。

大ホールの扉が重々しく開く。

ついにリュウは、その場に足を踏み出した。
その瞬間、パツと大ホールの照明が起動する。
真つ暗だったその場は一瞬にして昼間と変わらぬ明るさに模様替
える。

『ちよつとちよつと、こんな時間に何の用なのさ』
壇上から声をかけてきたのはモノクマだった。

久しぶりのモノクマとの再会に、しかしリュウはぴくりとも表情を
動かさない。

……が。

「くくく、ふふふはははは………」

リュウは肩を震わせ、笑みをこぼした。

「ようやく、オレは本当のオレに戻れる」

『……………』

モノクマは何も答えない。

「くふふふ、ふははははははは!! ぐっははははははははははははは
ははああああ!!!」

突然リュウは大きく口を開いて凶悪な笑いを発した。

身を大きくのけぞらせ、大地を震わせんが如き高らかな笑い声が空
間を支配する。

その姿に、今までの彼の面影はない。

「よくぞオレをここまで翻弄した!! されど、ここが貴様らの墓場よ
!!」

大口を開き、威嚇するように大声で高らかにリュウは言い放った。

「オレは古より語り継がれし伝説の殺し屋!! グラディウスの末裔よ
!!!」

両腕を広げてそう咆哮すると、こみ上げる感情を抑えきれないかの
ように大きく笑った。

「ふはっ、ははっ、ふっははははははははあー!!! ようやくこの時を

迎えたのだ!!」

『キャラが完全に崩壊してるよ、大丈夫?』

モノクマが声をかけた、その刹那。

モノクマの眉間。

体の中心線上に、見事なまでに拳銃の弾丸が食い込んでいた。

『…えっ、こ、こ、こここここんななななことしててててて』

機能の中枢を破壊されたモノクマは、言葉を狂わせながら壇上から転げ落ちた。

そして次の瞬間。

モノクマは盛大に爆発し、爆音と閃光がステージ上を支配した。

「俺がこの学園に招致された理由!! それは!! “超高校級の絶望”の抹殺!!」 それこそがこのオレの任務!!」

砂塵のように舞う埃の中、死神は拳銃を構えたまま、自らの宿命を吐露した。

その瞳には、最早自分の命の価値など思考するに値しないほどの覚悟が宿っている。

氷河の島よりも、遥かなる海底よりも冷たい眼光が周囲の空気を凍てつかせる。

「さあ、オレは校則違反を犯したぞ……」

同じ空間にいるだけで常人ならば正気を失ってしまいそうなほどの。

心の芯に“何か”を植え付けるような響きでリュウは呼びかけた。

「出てこい、有象無象ども!!」

塵が引き始めると、異様な光景が現れた。

赤い目をギラギラと光らせたモノクマとモノパンダの集団が、大ホールを埋め尽くすかと思えるほどの数でリュウの周りを取り囲んでいた。

「やっちゃまったな、ついにやっちゃまったな!」

モノパンダの一体が嬉しそうに声を上げる。

『うぷぷぷぷ。』超高校級の殺し屋〃の本気が見られるなんて、ボクちゃん大興奮だね!』

モノクマも言葉を連ねる。

「ふっ、ふはははは!! 無力ッ!! 圧倒的無力ッ!!! この程度でオレを倒せるとでも思ったか!!! まさに希望的、否、絶望的観測!!!」

リュウはゆがんだ笑みを口元に秘めたまま言い放つ。

「貴様ら、全員処刑!! 貴様を操る黒幕も! ついでにオレ達の中に潜む絶望も!! 雁首揃えて

地獄に落ちよ!!!」

『うぷぷぷぷぷ。』できるものならやってみなさい!』

モノクマは嘲笑の態度を崩さなかった。

『でもさ。ホントに今で良かったのかな? だって君…』

『右腕……まだ本調子じゃないよね?』

『うぷぷぷぷぷ。』『ぎひやひやひやひや!』『うぷぷぷぷぷ。』『ぎひやひやひやひや』

数十体のヌイグルミたちが一斉に邪悪な笑みを浮かべる。

見抜かれていた。

完全無欠なる殺戮者であるはずのリュウの、たった一つの弱点。仲間を救うために槍に貫かれたこの右腕の不調を。

だが。

「ふ……ふふ、ふははははははははははあ!!!」

リュウもまた、悪意のこもった笑みを浮かべて。

「こんなもの、ハンデにもならぬわ!!!」

嘲った。

「オレを誰と心得るか!!!」

オレの名は、“龍雅・フォン・グラディウス”!!!

絶望を食らう悪魔!! “グラディウス”の名を継ぐものぞ!!!」

一片の恐怖も後悔もない表情で高らかに言い放つ。

これこそが、寡黙で謎めいた男・リュウの正体。

「狂気を秘めた“絶望食らい”、龍雅・フォン・グラディウス。」

「さあ、覚悟はよいか!!」

龍雅が笑みとともに正面の敵に対し攻撃の姿勢を見せた、その瞬間。

空間全体が“意思”に包まれた。

まるで、“殺”という概念そのものを具現化したかのような。

その空間に足を踏み入れた生き物が、抵抗も逃走も無駄だと諦め、膝について己の運命を待ち構えてしまうくらいの。

この日、この瞬間、殺されるために自分は生まれたのだとすんなり納得させるほどの。

ありとあらゆる本能を超越した“絶対的な死”のイメージ……それが龍雅の“意思”だった。

それは、この世のどんな絶望よりも深い。

「これより、グラディウスの名において貴様らへの審判を開始する」

もし、目の前にいるのがヌイグルミではなく本物の生き物だったら

……

間違いなく、この時点で勝負はついていただろう。

『う。ぷ。ぷ。ぷ。ぷ。作者の中二病炸裂だね！ この回は黒歴史確定だね！ やったね！』

モノクマはけたたましい笑みを漏らしながら言った。

『ではでは、想定外の事態とはいえ、そんな龍雅君のために、スペシャルなオシオキで出迎えてあげましょう！ レッツ——』

そこまで言いかけた刹那。

そのモノクマは、綿埃と化していた。

それを周囲のヌイグルミたちがぎよつとした表情で見つめたころには——

それらは、衝撃波で吹き飛ばされていた。

物体が音速を超えて空間を移動する際、移動経路より放射状に衝撃波は発生する。

「この世に絶望ある限り!!! オレはそれを抹殺し続ける!!! グラディウスの名に懸けて!!! 一切の絶望を除去するのだああ!!!」

拳を突き出したポーズのまま、まるでヒーローを気取るかのような口調で宣言した。

この姿を津川梁が見ていたなら、いったいどんな表情をしたのだろうか。

孤高の殺人者としては存外に相応しくないとすら思えるこの狂氣的な人格が、いつごろから己のうちに芽生えていたのか、龍雅自身にも分らなかつた。

例え相手が極悪人であるとしても、殺人は笑いながら行うことではないということも龍雅は十分に解していたし、自分の行いに対する正義感に酔っているなどという感情は毛頭持ち合わせてはいない。

ならばこみ上げる笑いは何に由来するものなのか。

龍雅には全く分からない。

分からずして今日までの人生の歩を進めてきたのだ。

瞬きをする合間に一体、また一体とヌイグルミたちは埃へと変えられていく。

龍雅の拳は、蹴りは、一体のヌイグルミを破壊するには十分すぎるほどの威力を備えていたのだ。

だが、ヌイグルミたちもただ黙って龍雅の攻撃に甘んじていたわけではない。

両手から三本の金属の爪を出したかと思うと、弾速のような速さで次々と龍雅に襲い掛かる。

天井が開くと、ロボットアームに取り付けられたガトリングガンが現れる。

機械音を上げながらその銃身が回転し、

「ぬう!!」

爆音とともに列をなして放たれる銃弾。

それが龍雅の背後より襲い来る。

それに呼応するように彼がギロリと背後を睨んだ次の瞬間。

「笑止!!」

龍雅は思いきり体を屈ませた。

彼の頭上を幾多の弾丸が掠めてゆく。

その間にもモノクマ達は群れをなして龍雅に襲いかかる。

かわし、踏み潰し、またかわして、叩き潰す。

そうしながら懐から小型拳銃を取り出し、一瞬のうちに狙いを定め、引き金を引く。

ガトリングガンの根元、ロボットアームに亀裂が走る。

照準がずれたガトリングガンは弾丸をむやみやたらに連射し、ヌイグルミの何体かはその餌食となった。

龍雅にとつて、ガトリングガン程度の弾速は空中を漂う蚊にも等しい。

その弾が目前に迫ってからでも回避することは容易い。

弾丸の雨をくぐり抜け、今一度拳銃を撃つ。

さらにもう一発。

ついにロボットアームが千切れ、ガトリングガンは勢いよく床に落下した。

ふう、と龍雅が一息ついた、その刹那。

「んむっ!!?」

背中に激痛。

モノパンダの爪が、浅くはあるが、そこに三本の亀裂を与えていた。怒りの拳がモノパンダを粉碎する。

だが、それでもまだ闘いは序曲にすぎない。

ホールの入り口が開くと、何か機械を引きずったモノクマが現れた。

引きずっているその機械は……”バツティングマシン”。

その横に野球帽をかぶってバットを構えたモノクマが立ち。

「む!?!」

そして。

”オシオキ”は始まった。

ホールの中央を縦横無尽に舞う龍雅に向けて、バツティングマシンは硬球を射出する。

横に立つモノクマがコマのように回りながらバットを振るい、硬球を加速させる。

恐怖の”千本ノック”が龍雅に降り注ぐ。

「小癩ッ!!」

弾速以上のスピードで迫り来る硬球に対し、しかし龍雅はその軌跡を看破し、回避。

硬球は壁に激突し、跡形もなく碎け散る。

間を置かずに次弾が迫る。

その次の弾も、さらにその次も。

ガトリングガンよりも濃厚な弾幕が展開される。

右からモノパンダ。

左からモノクマ。

正面から弾幕。

まさに四面楚歌と呼ぶに相応しいその状況下で、死神は一步たりとも後ずさることをしない。

「無力!! 無力!!」

一匹、また一匹と敵を塵に変えていく。

それでもモノクマは探っていた。

先ほど背中に一撃を加えた際のような、隙と呼ぶにはあまりにも小さい——しかしそれでも致命的となる一瞬の死角を。

——右腕。

やはり、そこだった。

龍雅がモノパンダの体当たりを右腕で防いだ、その瞬間。

微かに蓄積した右腕へのダメージによって、僅かに全身の感覚が鈍った刹那。

モノクマの刃が龍雅の脇腹を抉っていた。

「無りよ——ツ!!??」

一撃決まれば、あとは容易い。

痛みを気を取られた瞬間、硬球が龍雅の全身を叩きのめす。

回避が不可能であると悟ったりユウは、両腕を交差してこれに耐える。

「ぬぐつ……うおおおおおツツ!!」

流れるように、何発もの硬球がリュウの体に衝突し、砕ける。

常人ならば、とつくの昔に肉塊と果てていてもおかしくはない量である。

それでも龍雅は耐える。

やがて、バッティングマシンがゆつくりと稼働を終える。

その正面には、硬球の連撃を耐え抜いた黒い影が立ち尽くしていた。

「苛烈……なれど、オレを倒すには至らず!!」

だが、まだ終わりはしない。

「……ッ!？」

龍雅が交差した腕を下ろすと、眼前には思いもよらぬ光景が広がっていた。

周囲には、甲冑を着たモノクマとモノパンダたちが刀を振り上げ、雄叫びを上げている。

龍雅が身構える暇もなく、足軽の大軍が全方位から襲い掛かった。第二のオシオキの開始である。

銃弾に比べれば、振り下ろされる刃の速度など牛歩に等しい。

ただ、銃弾の軌跡は“線”であるのに対し、刀身の軌跡は“面”である。

つまり、敵の数が多い局面では、刀の方が回避できる空間体積は小さい。

回避した体をどこに持っていくかを瞬時に判断し、機械のように俊敏的確な処理を行いつつ攻撃に転ずる必要があるのだ。

「(これしきのことが、絶望なものか)」

龍雅は自分に言い聞かせた。

生まれた時より殺すことを運命づけられ、そのためだけに人生を構築された男。

その男が半生において経験した地獄に比べれば、その程度だけの局面など苦戦と呼ぶに値しない。

だが。

苦戦でなくとも、“死”は訪れる。

来るときはあっさりと来るものだ。

龍雅の拳が甲冑ごとヌイグルミたちを粉碎する。

その間にも刀身が龍雅の肩を掠める。

槍の穂先が腿に食らいつく。

絶望を食らう殺し屋は、黒き華となって運命の舞台を舞う。

食らう。

食らう。

それでもなお、絶望を食らう。

まだ、足りぬ。

一体、どれほどの間四肢をふるい続けただろうか。

眼前から甲冑姿のヌイグルミたちは消え失せていた。

「はあっ、はあっ……」

流石の龍雅もここに来て激しく息を切らす。

それでも、死神は。

血反吐を床に吐き捨てる、指をパキ？パキと鳴らし。

「どうした……貴様の“絶望”はこの程度か！」

眼前の敵に言い放つ。

「貴様が真の絶望ならば……オレを……このオレを殺してみせよ！！」

未だ萎びることを知らぬ闘志が龍雅に咆哮を上げさせていた。

『うぷぷぷぷ』

邪悪、されど無邪気なる笑みで以て“絶望”は答えた。

『ムキになっちゃって、怖いなあ』

その瞬間だった。

龍雅が背後にそびえる巨大な影に気付いたのは。

なぜ、今この瞬間まで気付けなかったのか。

それは彼自身にも分らなかった。

彼の後ろに控えていたのは……シヨベルカーだった。

龍雅が背後を振り向こうとした瞬間、“オシオキ”は始まった。

シヨベルカーとは思えないほどの猛烈なスピードでシヨベルが振り下ろされ、龍雅の背中を打つ。

何度も何度も何度も、常人にはおよそ不可視の速度でシヨベルは龍雅の背中を打ち続けた。

「ぐおっ……ぐっ……！！」

痛烈かつ回避不能の連撃に思わず龍雅は膝をつく。それでも。

その打撃に甘んじていたのは数秒間に過ぎなかった。

「南無三ー」

背後の巨体を睨みつけると、龍雅は振り下ろされるシヨベルを引っ搦んだ。

両腕に渾身の力を込め、無理矢理にシヨベルの動きを停止させた。運転席のモノクマが顔を真っ青にして驚きの形相を浮かべる。

すかさずそれを見ていたモノクマとモノパンダたちが大挙して龍雅に襲い掛かった。

容赦ない爪の攻撃が龍雅の体を切り裂く。

それに対し、龍雅は全身の筋肉を総動員し……

「ぬっおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

全力の雄叫びとともに。

抱え込んだシヨベルを豪快に振り回した。

数百kgはあるはずのシヨベルカーの巨体が倒れこみ、ヌイグルミたちを吹き飛ばしながらホールの壁に激突する。

ホールを静寂が包み込んだ。

体中からあふれ出す鮮血のぬくもりを覚えながら、龍雅はホールの中央に立ち尽くしていた。

低いうめき声のような息遣いをしながらも、真正面に敵を捉えていた。

ステージ上、弁論台の上で胡坐をかいてこちらを見下ろすモノクマの姿を。

肉体は満身創痍だが、その眼光は衰えを知らない。

「貴様は知っているか」

龍雅は息を荒げながら重い声で尋ねる。

「この世で繰り広げられている数多ある絶望を、知っているのか」

走馬灯、のようなものだろうか。
龍雅の脳裏に浮かんでいたのは、これまでの任務で殺してきた人間の数々だった。

「人を生かす殺し」を生業にする。偽善一族の次期当主であった龍雅は、幼き頃からこの世の絶望に触れてきた。

彼が手にかけてきた人間……貧困国の傍若無人な富豪、罪なき人々を虐殺する傭兵集団、麻薬を密売する闇組織。

そう言ったものたち、そしてそれらに苦しめられ、怯える人々の姿がくつきりと思い出されていた。

否、そのような絶望は国外のことのみ話ではない。

子を残して遊樂にふける親もいる。

民の金を自らの懐に忍ばせる政治家もいる。

子供でさえ、いじめや差別といった形で絶望を残す。

日本という、世界有数の平和国家でさえ絶望は日常のありとあらゆるところに潜んでいるのだ。

そういった絶望の根源を葬るのが龍雅の仕事であった。

“グラディウス”の名の創設者が何を思いこの仕事を自ら行うようになったのかは分からない。

世界から絶望を駆逐する一族は、どのようにして誕生したのか。

今となつては知る術もなく、ただ古人の思想を妄想することしかできない。

ただ一つ、龍雅が“グラディウス”であるという事実だけが存在し、それに乗っ取ってこうして絶望を葬るのである。

別に義憤を原動力としていたつもりはなかった。

ただそれがグラディウスの名の元に生まれた人間の宿命なのだ、自分でも不思議なくらいに納得したからこそこの仕事を行ってきたのだ。

彼は自分を正義だと思い、それに酔いしれるような感情を抱いたことはない。

そもそも、自分のようなものに正義を語り、正義の名のもとに何か

を行う資格はないと龍雅は考えていた。

そんな彼でも……幾度となく思うことがあった。

“この世界に、正義はないのか”、と。

理不尽な死を遂げる罪なき命は日夜算なし。

彼が裁いても裁いても、この世の“絶望”は滅びるどころか日増しに世に溢れかえってゆく。

それは、この世の絶望の底の底に位置する真理。

抗いたくても抗いがたい理不尽が渦巻く凄惨な世界。

龍雅が渡り歩いてきた世界はそういう場所だった。

世界とはそういうものである。

たった一人の“正義”など何の意味もなさぬ。

常にどこにでも不条理は付きまとう。

世界とは、“絶望”なのである。

ゆえに龍雅は。

絶望的なまでの劣勢を強いられてなお、目前の敵に対して一切の後ろめたい感情を抱くことがなかった。

「くくく、ふふふふ……」

この期に及んで、龍雅は再び笑みを浮かべた。

「ふはははははははっ!! こんなものは絶望とは呼ばぬ!!! 俺が見てき

た絶望は……もつと悲惨で、もつと圧倒的で、もつともつと理不尽だったはずだ!!! この程度のことを絶望なものかッ!!」

大量の血を声に交えて叫ぶ。

「貴様は何も知らぬ! この世には、この世界には、貴様ごときでは想像もしえないほどの凶悪な絶望がいくつも存在するのだ!!! そんなことも知らず、たかがこの程度の絶望しか生み出せない貴様が世界を絶望に覆い尽くすなど、片腹痛いッ!!」

横合いからモノパンダが爪をぎらつかせて飛来する。

龍雅は身をひねって回避し、拳でそれを粉碎した。

続けて飛来するヌイグルミも同様に。
その次も。さらにその次も。

「まだ……ゲホツ…… まだ……分からぬか!!!」

声を絞り出すように龍雅は呼びかける。

「絶望如きに、俺を殺すことはできんだ!!」

その太い足が、ホールの床板ごとモノクマを踏み抜いた。

「オレはツ……!!」 グラディウスは……この世のどんな絶望よりも強い!!! どんな絶望も、抹殺できるのだ!!! 貴様とて同じよ!!!」

ヌイグルミをなぎ倒しながら龍雅は宣言する。

皮肉なことに、グラディウス一族が“偽善の殺し”を始めて数百年、この世から絶望がなくなった試しはない。

つまり、グラディウスは世界に名を知られた殺し屋とはいえ、絶望を壊滅できるほどには強くはない。

だが、それを理解してなお、龍雅はその言葉を発することに一切の後ろめたい感情を抱くことがなかった。

その言葉は初めから事実のつもりで述べたのではなく、自負、信念として言い放ったものだからである。

『あくあ、ツマンネ。飽きてきちゃったよ』

……が、そんな龍雅の命を懸けた宣言すらも嘲るように、壇上のモノクマは大きく欠伸をした。

『苦戦の中で明言を言うってのもいい展開だけどさ。流石に君TUE EEばかりで飽きてきちゃうよ。何事も引き際が肝心って、教わらなかった? じゃ、そろそろ終わらせちゃおっかなー』

その言葉に呼応するように、モノクマの横に一本の紐が天井から垂れ下がってきた。

モノクマがぐい、とその紐を引っ張ると。

龍雅は真上に気配を感じた。

だが、上を見上げた時には時すでに遅く……。

側面に『補習』と書かれた鉄塊が降り注いだ。

龍雅が反応する間もなく、鉄塊は彼を飲み込んで落下する。

!!!
[]

『うひゃうひゃうひゃうひゃう』

静寂の中で、壇上に座るモノクマの笑みだけがこだましていた。終わった、とモノクマは確信していたのだろう。

あとは鉄塊の下で跡形もなく変貌した哀れな肉塊に思いを馳せてほくそ笑むだけである、と。

だが、終わってはいなかった。

鉄塊と床の隙間は、僅かに数十センチほど。

その隙間に、龍雅の体があった。

床に深くしゃがみこみ、両手と首の後ろに鉄塊を乗せる形で辛うじて耐えていた。

『……ほんと君、人間やめてるよね』

関心を通り越してあきれたようにモノクマは言った。

“当然だ”

鉄塊の陰から獣のような眼光を向けながら、龍雅は無言の圧力でいて敵に訴えかけた。

“俺は、人間ではない”

最早声を発することもできぬほどの限界点を彷徨いながら、それでも龍雅は敵に弾丸を浴びせる。

『言葉』という名の弾丸を、声も出さずに。

“俺は殺し屋。絶望を殺す殺し屋なのだから”

血と汗がとめどなく顎の先から滴り落ち、全身の筋肉という筋肉に血管が浮かび上がっていた。

次の瞬間。

『?』

鉄塊と床の隙間から光のような速さで飛び出した龍雅の拳が。ついに、壇上のモノクマを撃砕する。

ズン、と鉄塊が落ちる音が響き。

ホールは本当の静寂に包まれた。

ガクリ、と龍雅はその場に膝をつく。

直後、大量の血を吐き出した。

「くく、くはははははははは………」

再びゆがんだ笑みを浮かべる。

「…抹殺完了」

懐に手を伸ばしながら龍雅は呟く。

「……………オレはグラディウス。絶望を食らう殺し屋だ……………。未来永劫、その名を忘れるな」

もう龍雅の声を聞くことはできないはずの敵に対し、彼は宣言した。

震える手で懐から取り出したのは、あらかじめ保健室から失敬した包帯だった。

その場に座り込み、全身の出血部位に一か所ずつ巻いていった。

「(いや、まだだ)」

難敵への勝利に安堵した自分を戒めるように彼は自分に言い聞かせた。

「(まだ“任務”は終わっていない)」

「(終わらせてやる、全てを)」

ガクガクと震える足で、龍雅は一步一步廊下の中で歩みを進める。エレベーターへ乗り込み、静かに息を整える。

十分だ。

残りの任務を終えるには十分な体力が残っている。

龍雅が踏み込んだ場所、それは。

二階の教室、2—Aであった。

「よう」

教室に入った彼を出迎えたのは、妙に元気な挨拶だった。

周りの机は片付けられ、真ん中にポツンと位置する席に、“超高校級の脳科学者”、釜利谷三瓶は座っていた。

腕を組み、深く座り込んだ姿勢で釜利谷はニヤリと笑みを浮かべていた。

「とりあえず、お疲れさんとも言うっておくか」

「…俺が何をしていたか、分かっているのか」

「分かるさ」

グイ、と釜利谷は少し身を乗り出す。

「お前こそ、俺の正体も分かってるからこんなモンを送ったんだろ？ 変な騙し合いはやめとこうぜ」

そう言っつて釜利谷はポケットから一枚の紙を取り出し、ヒラヒラと

空中を泳がせる。

「…貴様、これから自分がどうなるか分かっているのか？」

龍雅は普段の“リュウ”の人格のごとく、重い声で語りかける。

「はっ、殺されるんだろ？」

まるで興味の範囲外であるかのように、さらりと釜利谷は言った。

「いいよ、殺せよ。俺はもうやるべきことは全部やった。だが一つだけ、教えてやる。残念ながら俺は“黒幕”じゃねえ。ヌイグルミを動かしてるのも、この殺し合いをセツティングしたのも、別の奴だ」

しかし、リュウは威圧的な表情を崩すことはなかった。

「既に調べはついている。“奴”もすぐに貴様の後を追わせてやるさ」

「へえ」と釜利谷は感心したような声を出した。

「よく調べたもんだ。記憶が戻っただけでそこまで見破れるもんかね」

「俺にもよく分からない。いずれにせよ、これから死ぬお前には関係のないことだ」

くくく、と釜利谷は嘲笑するようなあくどい笑みを発した。

「リュウ…いや、龍雅。お前は“希望”か？ “絶望”か？」

「どちらかと言えば“絶望”だ。しかし、貴様らとは少し形が違う」

龍雅は相変わらず表情を崩さぬまま、淡々と答えた。

「“絶望”が“絶望”を喰うのか。こりやあ面白え」

傑作だ、と言わんばかりに釜利谷は手を叩く。

「相手がどうあれ、事情がどうあれ、我が一族のなしてきたことはれつきとした“悪”であり“絶望”。ゆえに我が一族はその地位を継ぐ際、父を殺す。それが“グラディウス”としての最初の仕事だ」

「んで、俺を殺すのが最後の仕事なわけだ」

「否!!!」

釜利谷が冗談めいた口調で冷かすと、龍雅は全身の気を逆立てて咆哮した。

「俺はこの学園に潜む絶望の全てを皆殺しにするのだ!! 貴様は始まりにすぎぬ!!!」

「それが本性か。龍雅・フォン・グラディウス」

釜利谷は机に手を乗せ、まるで入学生を品定めする面接官のように
厳しい表情で龍雅を見据えた。

「そうとも!! オレこそが〃超高校級の殺し屋〃!! 龍雅・フォン・グ
ラディウスぞ!!! 俗物よ、覚悟はできたか!!!」

「覚悟もクソもあるかよ」

苛立ったように釜利谷は呟く。

「…十日ほどとはいえ、ともに過ごした仲だ。最期に一つだけ聞かせ
よ」

龍雅は狂気的なオーラを見に纏ったまま、しかし妙に冷静な口調で
呼びかけた。

「なぜ、貴様は〃絶望〃と化した?」

「はっはっは!!」

今度は釜利谷が大口を開けて笑った。

「誰が教えるか、バカが!! 俺はダチが絶望から這い上がる姿が見た
いだけのバカな医者卵だ!! それ以上にテメエに教えることとな
てねえ!!」

瞬間。

〃何か〃が空間を切る。

!!!

龍雅は自分の胸元に何か突き刺さったのを感じる。

触れてみると、それはメスだった。

「あーりゃ、急所は外れたか」

そう言ってもう一本のメスを投げる。

しかし、今度は龍雅の回避により壁に突き刺さる形となった。

そして、次の瞬間には龍雅の右手が釜利谷の首を掴み、高く持ち上
げる形となっていた。

「ぐっ……く、はははは。残念だな、動きを封じたところで、もうメス
は持ってねえ」

息苦しさを感じながらも、釜利谷は最期の嘲笑を浴びせかける。

「あーあ……もつとテメエらを見ていたかったなあ。大好きなダチ

が、仲間が、絶望から這い出て育っていく姿を、もつと見たかったなあ。ダチ以外の人間なんて、存在価値ねーんだよ。

グググ、と龍雅の手に力が入ってゆく。

「…ああ、でも、絶望に負けてブツ壊れるのもイイかもな……夜助みたいに…」

釜利谷は夢心地のような浮遊感の中で、自らが抱く幻想を呟く。

そして、大きいため息をついた。

「…はあ……絶望をくれ……もつともつともつと最高の絶望をグゴッ」

龍雅の右手が釜利谷の頸椎を粉碎した。

「絶望、抹殺完了」

モノクマ達を葬った時より少し重い口調で龍雅は呟いた。

釜利谷の遺体を椅子に戻すと、胸元に突き刺さったメスを確認する。

そして、それを一挙に引き抜いた。

「……」

今更、胸に感じる痛みごときに動じることもない。

龍雅は忌々しいメスを親指でくにやりと曲げると、そのまま練り消しを練るかのように小さく丸め、投げ捨てた。

そして、“友”であった死体に背を向け、教室を後にする。

感慨などない。

自分に近いものを殺すのは別にこれが初めてではないのだ。

次なる任務に向けて、龍雅はただ歩を進める。

「……」

技術室に足を踏み入れた龍雅は驚きの表情浮かべる。

そこには、“超高校級のエンジニア”、御堂秋音が腕を組んで立っていたのだ。

「まさか、呼び出しに応じるとはな。貴様のことだから部屋に籠っているかと思っていたのだが、念のため見てみたらいるとは」

「そんなことはどうでもいい。要件を言え」

御堂は少し怯えた表情ながら、普段の口調で問うた。

「…まあいい、手間が省けたということだ。願い通り用件を言おう。これから貴様は死ぬ」

「!!!」

御堂の表情が一気に敵意と恐怖に彩られる。

「なぜだ!!なぜ貴様が私を!!」

「貴様は“絶望”だからだ」

「……………!?!」

御堂は不思議そうな表情を浮かべる。

「分からぬだろうな。貴様は記憶を消されているのだからな。だがしかし、記憶があるうとなかろうと貴様がやったことは“絶望”と呼ぶにふさわしいことだ!!」

「一体どういうことだ!?! 私が何をしたというのだ!?!」

「人類の絶望に携わった。それだけだ」

龍雅が答えるが、御堂はキョトンとしたままだ。

「ふははははは!! もはやこれ以上の言葉は無用!! 今、“グラディウス”の名において、貴様に審判を下す!!」

そう宣言し、龍雅は構える。

「これがグラディウスの定め…。悪く思うな、小娘!!」

ぐっ、と御堂は歯を噛みしめた。

「私は、私はっ……………」

御堂は何かを龍雅に向けて投げつける。

「!?!」

ボン、と。

爆発と閃光が技術室内を包む。

「ぐっ、おっ!!」

龍雅は爆圧で後ろにのけぞる。

しかし、すぐに踏ん張って立ち直ろうとするが…。

「!?!」

ふわり、と意識が宙を舞いかける。

これまでの大量の出血と過度の疲労と負傷。

それらすべてが一斉に作用し、ほんのわずかの間だけ龍雅の意識が失われかけた。

それが命取りであった。

バチン。

その音を聞くと同時に、龍雅の意識は完全に遮断された。

「……………」

技術室に倒れ伏した龍雅の目の前で、スタンガンを構えた御堂は立ち尽くしていた。

「お母様……もうすぐ……もうすぐだから……」

たわごとのように眩き、御堂は龍雅の巨体を引きずり始める。

血が床に残らぬよう、雑巾を床と彼の間挟み込ませて。

エレベーターに乗り込む。

龍雅が彼女にしたためた呼び出し状により、山村巴が気絶させられたこと、龍雅が大ホールでモノクマ達と交戦したことは把握していた。

御堂はそれを利用し、呼び出し時間のかなり前から技術室に忍び込み、殺人兵器の製作を急ピッチで進めていた。

粗削りだが、トリックも考案した。

準備は万全。

もう少しで、母親と弟に会える。

自分の研究開発さえ完遂すれば。

会えるのだ。

その想いが、彼女を殺人者に仕立て上げようとしていた。

一方、龍雅ははるかに遠のいた意識の中、辛うじて意識の断片で自らを回想することだけが許されていた。

体の自由が一切効かないことだけが無念である。

本来ならばスタンガンの一撃のみでこうはならないはずであるが、様々な条件が悪い方向に作用した、と言わざるを得ない。

そもそも初日、山村を槍の雨から助け出したこと自体が間違っていたのではなからうか？

あの時の右腕の負傷がなければ、モノクマ達との戦いをさらに優位に進められたはずである。

さらに言えば、釜利谷から一撃をもらうこともなかったし、今こうして御堂にしてやられることもなかったはずである。

“オレはなぜ、小娘一人の命のために腕を犠牲にしたのか？”

“あのような小娘の命一つ、任務には何ら関係はなかったはずだ”

“やはりオレは、絶望にも希望にもなりきれぬ愚か者だ”

“今まで葬ってきた命に対してそうであったように、初日のあの瞬間、あの小娘の命に対しても冷徹でなければならなかったはずだ”

“なぜ、そうできなかった？”

“その場しのぎで小娘の命一つ救うより、任務を優先させた方がよかったであろうが”

無論初日においては任務のことなど記憶になかったのだから、この悩みは的外れなものかもしれない。

それでもなお、龍雅は自分がなぜ中途半端な偽善に走るのか、問い詰めたい気分であった。

「……………」

運命の舞台、大ホールに辿り着いた御堂は、現場のあまりの凄惨さに言葉を失った。

戦いを終えてまだ一時間ほど。

そこは火薬とオイルの不快な臭気に覆われていた。

しかし、御堂は躊躇わずに龍雅の体を鉄塊の前に寝かせた。

そして周囲を確認し、転がっている一本の槍を手取る。

甲冑を着たモノクマの残骸が握っていた。鋭利な槍である。

長さは1mほどだが、それでもずっしりとした重みが御堂の腕に響く。

「愚かな」

龍雅の口から重い声が響いた。

「!!!」

ビクツと御堂は体を震わせる。

任務への恐るべき執念が、龍雅の意識をその肉体へと呼び戻したのだ。

しかし、依然として体の自由は効かぬ。

孤高なる死神の最期は、刻一刻と迫っていた。

「絶望如きが、ここから生きて出られるとでも?」

「黙れっつ!!!」

御堂は顔を紅潮させて叫ぶ。

「お前に何が分かるっ!!! 私がお母様をどれだけ愛しているか、どれだけお母様に会いたがつているか!!! 何も知らないだろうがっ!!!」

“やはりこの娘も、絶望に蝕まれているか”

龍雅はふと思った。

“こいつの母親、抹殺すべきだった”

こんな身近な者すら、絶望から救えなかったのだ。

龍雅は無念を悟る。

「私はここを出るっ!! 出て大好きな家族に会うんだっ!!!」

言い放つと同時に、御堂は足に激痛を感じた。

龍雅の左手が、御堂の足をくつきりと掴んでいた。

「逃がさぬぞ 絶望」

その様たるや、どす黒い執念そのものが意思をもって御堂に襲い掛からんとしているかのようにであった。

「ひいっ!!!」

御堂は意を決し、槍を振りかざす。

「うああああああああああ!!!」

雄叫びとともに槍を胸に差し込んだ。

ズブリ。

穂先は胸筋の表面に入りこんだだけである。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ」

荒い息遣いとともに、御堂は槍に体重をかける。

ズブズブ、と槍は体内に沈んでいく。

「んっ、がっ!! ……ひゅううう……」

龍雅は御堂の足から手を放し、奇妙な息遣いとともにも胸の槍に手をかける。

しかし、それは抜けない。

「……………」

御堂はすぐさま龍雅から離れる。

龍雅の体はビクビクと痙攣を始める。

いよいよ、終焉の時である。

その瞬間、龍雅はにわかに目を見開き。

「見えるぞおおお!! オレには見えるうううう!! お前も、お前もすぐに死ぬのだああああ!!!」

御堂は口をパクパクさせながら、大ホールの隅へ逃げた。

モノパンダを修理するという仕事はまだ残っていたが、この化け物の最期を見届けずには作業などできようはずもない。

「ふあははハハハはははははは!!! 希望ヨ!!! ぜつボウよ!!!」

壊れた人形のような狂気のこもった笑みとともに、龍雅は叫ぶ。

「グラディウスと共にあり、ぐふっ」

世界で最も絶望の深淵を彷徨った男は、こうして絶望に敗れた。
いや、勝ったのだろうか。

“オレはグラディウス。絶望を食らう殺し屋だ。未来永劫、その名を忘れるな”

Chapter 2 Graduis 完

アイテムゲット！

『友情の青いハンカチ』

Chapter 2 クリアの証。

釜利谷からもらったハンカチ。友を思うアツい涙が染み込んでい

Chapter 3 俺のヒロイン達が修羅場すぎて人類が滅亡しそうな件。

Chapter 3 (非) 日常編①



“ふうん、『この世は絶望』ねえ。龍雅はそんなことを思ってたのか”

“そうさ。彼は自分が絶望に対して無力であると知っていた。それでもなお戦い続けた。そしてこの『物語』の中で、彼は絶望に負け、その生涯を終える?”

“本当に負けるのか? アイツが”

“まだボクの『才能』を信じきれないのか? ボクに見えない未来はないっていつも言ってるでしょ??”

“まあ、キミがそう言うならそうなるんでしょうねー”

“……その言い方、ムカつく?”

“オイラはムカつかれてナンボの人間ですから”

“……で、龍雅君が死んで第二の裁判が終わった後、君に一仕事してもらいたい?”

“（スルーかよ……）はいはい、なんでございましょう”

“驚かないで聞いてね?”

“てやんでい、オイラがこれまでにいくつの修羅場を切り抜けてきたと思ってるんだ!! 腹を割ってドンと言え!!”

“……………?”

“ちよつと待てよおおお!!!”

“清々しいまでに驚いてるね。ご愁傷さま?”

“お前、これマジで言ってるのか??”

“大マジです。様々な分岐の中で、この選択肢を通るのが一番ボク

“超高校級の脳科学者”の肩書きをもつ男子生徒。“超高校級の神経学者”と呼ばれる人物と親交があり、ともに研究する仲だったようだ。神経学者が江ノ島盾子様によつて殺害されたのは皆の知るところであるが、その後どのような経緯を経てこの男が“絶望”に心服したのかは定かではない。しかし様々な観察結果から、彼が自分の親友であると認めた人物に“試練”として絶望を与えんとする欲求を持っていることが明らかとなった。癖はあるが、神経学者亡き後の記憶・人格制御研究の発達を担う人物として期待されたい。



気持ち悪い浮遊感の中、俺は一人の少女と対峙していた。

少女は俺を睨みつけ、必死に罵詈雑言を浴びせる。

俺は一言だけ、何かを言った。

その瞬間、少女の表情が凍り付く。

少女が崩れ落ちる。

床に倒れ、もがき苦しむ。

干からびていく。

ミイラが幾千もの群れとなり、俺の足をつかむ。

『おかさあああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああつあああああああああああああつあああああつあああ
!!!!』

「っ!!!」

不意に俺の視界に飛び込んできたのは、暗い天井。

「はっ、ふっ、ふひゅう」

はたから見ればおかしな息遣いで呼吸を整えつつ、俺は上体を起こす。

自分の手足を確認し、無事であることを確かめようとするが……

自分の足を見た瞬間、それをつかむミイラの手の幻覚が見えた。

「いひっ!!! ひいっ!!!」

素っ頓狂な声が出るとともに、俺はその手を振り払おうと足を激しく動かした。

すぐにそれが幻覚と分かっても、心臓を抉られるが如き感覚は一向に収まるところを知らない。

裁判直後は直視しきれずにいた“現実”が、俺の心に相当な重みをもって働きかけている。

最期まで助けを求め続けていた御堂さんの悲痛な叫び声が、今でも鮮明な声色をもって俺の脳内を反響し続けているのだ。

俺は、彼女を殺した。

“自分ではない何か”に取りつかれたかのように、無機質な口調と推理で彼女を死に追いやった。

死に怯え、親の助けを求め哀れで弱い少女を、容赦なく切り捨てたのだ。

俺も、オシオキされてしかるべきではないのか？

ふと後ろについた手に意識を向けると、ベッドのシーツがびしょびしよになっっているのははっきりと感じた。

単に寝汗と呼ぶには説明がつかない量だ。

顔を拭くと、べつとりと汗が付着した。

『死に た く な い 』

「ひっ!!」

幻聴。

もうやめてくれ。

「……………!!??」

次に聞こえた幻聴は、驚くべきことに自分の声だった。

『君になら犯行は可能だよね』

ねつとりと、耳に残る忌々しい語調。

裁判の時の俺……………なのか……?

『これが事件の真相。真実という名の脚本だ』

確かにどの言葉も、俺自身の口から発せられた言葉であることに間違いはない。

しかし、あの時の俺と今の俺は何かが違う。

記憶ははつきりと存在するけど、その時自分が何を考えていたのかは全く分からない。

記憶はあるけど人格が異なるという状態はいわば、山村さんのような感じだろうか。

分からない。

怖い。

またいつか、このような事件が起きてしまいそうな気がして。

そして、その事件を起こした犯人を、俺が無情に追い詰めてしまいそうな気がして。

怖くてたまらない。

俺は、どうすればいいんだ?

結局、休憩室ではろくな休みも取れないまま、俺は再び廊下を歩きます。

食堂は締まっており、他の人の個室にも入るわけにはいかない。

こんな気分のままトラッシュルームにも当然行きたくはない。

どこへ向かうあてもなく、俺はエレベーターに乗り込んだ。

「……………あ」

思わず声が漏れていた。

階層を示すボタンのうち、『3F』と表記されたボタンが新たに点灯していたのだ。

代わりに、ホール階のボタンは消灯しており、『修理中につき一時閉鎖』のシールが貼られている。

チーン、と無機質な音が鳴る。

一切の光も差さぬ暗い廊下が俺を出迎える。

教室がいくつか並んでいるが、真つ暗なその空間に足を踏み入れる気にはなれなかった。

目に映ったのは、廊下の奥から差す小さな光。

その光に向けてゆつくりと歩を進める。

辿り着いたのは、天井の高い広々とした空間だった。

扉はなく、ゆえに廊下と隔てられていない。

青々とした木々が生い茂り、様々な種類の華が四季関係なく咲き誇り、鮮やかに周囲を彩る。

天井には丸くて大きい電灯がまるで太陽のようにこの空間を照らしており、暗黒ばかり見てきた俺の目にはとても眩しい。

端の方にある噴水からは小川のように部屋を横切る細い水路ができあがり、植物たちに水分を供給しているようである。

まるで桃源郷が忽然と目の前に現れたかのようだった。

およそ学校の施設とは思えぬ唐突な風景に、俺は息をのんで立ち尽くすほかはなかった。

しかし、一瞬の後、俺はさらに驚くべき光景を目の当たりにした。

この空間の奥の方に佇む女性。

小清水さんの姿があったのだ。

横向きに立つ彼女の姿は、周囲の風景に劣らぬほど幻想的で、先ほどまで俺が見てきた幻覚とさして変わらぬ存在なのではないかと思える。

ゆつたりとした赤い長髪がおぼろげに光を反射し、純白の白衣との対比が美しい。

彼女は手の前にかざしており、そこには一匹の蝶が止まっていた。

その手を花か何かと勘違いしたのか、指に止まったその個体はしばらくそこに止まっていた。

そして少し後、余韻を残さず一気に飛び去っていく。

それを小清水さんは優しげな、しかしどこかもの悲しげな表情でそれを見送った。

飛び去った蝶から微かに鱗粉が落ち、夜空に浮かぶ星々のようにきらめいた……ように見えた。

これも、俺が疲労によつて見えてしまった幻覚なのだろうか？

「目、覚めちゃった？」

その声は幻聴ではないと、はつきり確信した。

ぼんやりと宙に浮きかけた意識が体内に戻り、俺の感情を現実に取り戻した。

思えば、木に隠れるでもなく、少し離れたところから見ていただけだったのだ。

早々に気付かれてもおかしくはなかった。

「ここ、植物園なんですって。虫さんもいろいろいるらしいのよ」

なんと答えていいか分からず言葉を詰まらせる俺をよそに小清水さんは言った。

「綺麗でしょ？」

俺はただ頷いた。

言葉とは裏腹に、彼女の表情は薄暗い。

当然だろう。

つい半日前、三人の犠牲者を出して第二の事件が終わったのだ。

あの絶望を目前に体験してもなお笑っていられる余裕などあろうはずもない。

彼女も俺と同じく、快眠することができなかったのだろうか。

「こっち、おいで」

囁くような小さく、しかし母親のような柔和さを秘めた声で彼女は言った。

自然と、足が彼女の方へ歩き出していた。

彼女のそばまで寄ると、どちらからということもなく周囲の風景に目をやる。

「怖かったね」

小清水さんが呟くように言ったが、「うん」としか答えられなかった。

た。

「怖かったけど、それ以上に『可哀想だな』って思っちゃった」
少しうつむきながら、彼女は静かに告げる。

「…可哀想…だったね」

狂った親に愛されようと必死になり、親の死してなおその愛を我が身に浴びようとするその姿は、“絶望”と呼ぶにふさわしかった。

だがそれ以上に、そのような人生を送らざるを得なかった境遇に同情の意を隠しきれない。

「私たちは普通の家庭に生まれて普通に過ごしてこられたってだけなのよね」

そう、“たまたま”。

たまたま普通の家庭に生まれてこられたから、彼女のような苦しみは背負わずに済んだ。

だが、運悪く彼女のような親のもとに生まれていたら…？

俺はどんな人生を歩んでいたのだろうか？

「虫さんが羨ましい…」

疲労のこもったため息とともに小清水さんは呟いた。

「虫さんには良い親も悪い親もないもの。親のためとか弟のためとか、そんなことは何も考えず、ただ目の前にある餌を運べばいい。ただ目の前の蜜を吸えばいい。私もそう生きてみたいものね」

「……………」

彼女の昆虫への愛情話はいつも話半分に聞いていたが、今ばかりはそうはいかなかった。

彼女の言葉が確かな説得力をもって俺の心に働きかけてきたからだ。

「私、昆虫を研究し始めてからずっと思ってることがあるの」

「…ずっと？」

「そう、ずっと。…人間が他の生き物より優れているところって何だと思う？」

その質問に、俺は鈍っていた頭脳を回転させる。

「感情……………」

一つ一つ挙げればきりが無いが、それが一番大きいような気がした。

「そうよね」と小清水さんは柔らかな笑みを浮かべる。

「でも、感情があるからリヤンちゃんは私たちを助けようとしたのよ」
その言葉が一瞬にして俺の表情を固めた。

「感情があるから土門君は彼女を救おうとした。……結果、二人とも死んだ」

「御堂さんも……」

「そうよ」と彼女は俺と視線を合わせた。

「だから私は思うの。人間にとって、感情は本当に必要な機能だったのかしらって。何も考えずに機械のように生きていけた方が幸せだったんじゃないかって……」

何も言えなかった。

感情があるから助け合えるんだとか、仲良くなれるんだとか、上辺だけの綺麗事を語るのならできただろう。

だが、学級裁判という地獄を見てきた俺たちにとって、そんな綺麗事など風塵の如く儂く脆いものであることは百も承知だ。

ゆえに俺は、彼女にかける言葉を見つけることができなかった。

“ゴキブリさんのように強く生きたい”。

捜査の時に彼女が言っていた言葉は叶わない。

俺達は、人間なのだから。

感情を持ち、憎しみ、殺し合う人間なのだから。



翌朝。

「…………おはよう」

呟くような小声で挨拶を発しながら、俺は食堂へ入った。

結局、あの後俺と小清水さんはほとんど会話を交わすこともないまま部屋に戻り、一夜を明かした。

絶望を抱え込んだまま、気分がすぐれない夜を。

「おはようだぞよ〜」

唯一、いつもと変わらない声で挨拶を返してきたのは安藤さんだった。

前回の事件で大切な親友を失った彼女は食事にも来られないほど傷つき落ち込んでいたが、その経験故か今回は俺達を元気づけようとしているようにも見える。

「なんと今朝は吾輩が朝食を振る舞って差し上げるのだ!!感謝して食べるのだぞよ!!」

え、ご飯まで作ってくれるなんて……申し訳なきでいっばいだ。

あ、でもよく考えたら安藤さん、今までご飯作ったことなかったよ
うな……

「それはゆつきー殿も同じであろうぞ!!」

「ひゃっ?!?!」

ビクツと体をすくめてしまった。

なんで俺が思ったことが分かるんだ……!!

「これぞ吾輩の真奥義・読心術よ!! 吾輩はエスパーなのでなく」

そう言っつて安藤さんは上機嫌に厨房へ入っていった。

「朝から元気だね、みーちゃん」

亞桐さんが背伸びをしながら言った。

「その健気な背中を抱きしめたくなるよね」

夢郷君の真顔の眩きは無視するとして。

事件後ということもあつて不穏な空気ではあつたが、いつも通り朝食会は行われた。

安藤さんの壊滅的な料理センスをなんとか小清水さんがサポートしたようで、ギリギリ食べられる程度の味の朝食を味わうこととなった……。

やっぱり彼女は家事は得意な方ではなんだな……。

そんなんじゃないやお嫁さんに行けないぞ、という心配は野暮だろうか。

見回してみると、昨日あれだけの悲劇を目の当たりにしたにもかかわらず、食事を欠席している人はいなかった。

喋っていたのはほとんど安藤さんと夢郷君だけだったけど、全員の顔を見ることができてひとまず安心。

ただ、みんなが心に負った傷の度合いが分からない以上、下手に声をかけることもできないのが現状だ。

山村さんと入間君は完全に憔悴しており、食事のペースも非常に遅かった。

さらに不安なのは伊丹さんだ。

彼女と御堂さんは、初めは犬猿の仲と言ってもいいほどギクシヤクしていたが、時と交流を経るうちに驚くほど距離を近めていった。

その矢先に、あの様だ。

津川さん……いや、それ以上かもしれない。

醜く悲惨な本性を晒した御堂さんは、俺達には想像もつかない苦しみを負って死んでいった。

学級裁判でも既に涙を流して苦しんでいた伊丹さんが今、どれほどの傷を負っているのか、俺には分からない。

「……何？」

急に伊丹さんが声を発したので俺はびっくりして肩をすくめた。

そんなにジロジロ見ていただろうか。

「私は平気よ。あなたに心配されるまでもないわ」

いつも通りのクールな表情で返されてしまい、俺は何も言えなかった。

その後、「ごちそうさま」と挨拶して彼女は皿を下げた。

きちんと完食していた。

……杞憂だったのだろうか。

しかし、変に声をかけるのも憚られる。

ここは彼女と仲がいい亞桐さんに任せただろう。

「グッモーニング!!!」

不意に、あの耳障りな声がした。

突然の登場にももう慣れっこだ。

「やあやあオメーラ！ 人も少なくなっちゃよつと寂しくなったけ

ど、元気かー??」

相変わらず底抜けの明るさと幼稚な邪悪さとを併せ持った口調でモノパンダは呼びかけてきた。

「愛妻の手料理を食べているんだ。邪魔をしないでいただきたいね」
愛妻というのが安藤さんのことなのか小清水さんのことなのか分からないが、普段と全く変わらない様子で夢郷君は答える。

「んー? 夢郷殿は吾輩の亭主となったのかえ? ならば夫のために毎日食事を作らねばならぬのう」

「勘弁してくれ…」

恐らく男女の契りなどほとんど知らないであろう安藤さんの何気ない一言に、前木君がぼそつと悲痛な声を上げる。

「まあまあ、さつさとすませるから例によつて食いながら聞いてても構わないぜ?」

そんな俺達の様子を嘲笑うように上機嫌に告げるモノパンダ。

だが、奴が本題を口にせずとも、大体用件は分かっている。

「“新エリアの開放”……でしょ」

亞桐さんが敵意のこもった表情でモノパンダを睨みながら呟く。

『オメーラには裁判をクリアするたびに、“校舎内の新エリアを探索する権利”が与えられるぜ!』

とは、一回目の裁判が終わった次の日の朝食会で奴に告げられた言葉。

裁判を勝ち抜いた俺達への報酬…のつもりらしい。

胸糞悪い話だ。

「つひゃー! 流石は希望ヶ峰に選ばれた生徒だぜー! 一回言った言葉をちゃんと覚えてるなんて優秀だなー!」

「もう言うこともないでしょう…。さつさとお帰りください」

疲れたように入間君が言うのと、「親不孝ならぬ教師不孝は非行少年の始まりだぜ!!」などと不平を言う。

「オイラは絶望を経て成長していくオメーラのことを何よりも大切に思つて……うう……」

なぜか涙ぐむモノパンダ。

「だからこそ、オメーラにはここで何よりも美しい『絶望を演出』してもらわないと困るんだぜ！」

……？

「『絶望を演出』……？」

亞桐さんが呟く。

「はっ！ オイラとしたことが、口が滑ってしまった！ 校長センセーに怒られるううううう!!!」

モノパンダは顔を真っ赤にしながら一目散に逃げだしていった。

「全く彼の頭の中身が分からないね」

「アンタほどじゃねえよ」

夢郷君の呟きに速攻でツッコむ亞桐さん。

意外とこの二人も相性いいんじゃないだろうか…？

「さあさ！ あんな奴の言うこと気にすることないわよ！ 新しいエリアをみんなで見て回りましょう！」

手を叩きながら小清水さんが呼びかける。

彼女が全体に何かを言うなんて珍しいな…。

今までの事件を経て成長したということなのだろうか。

「だって、三階には植物園があるのよ!? みんなに見てもらいたい虫さんがいすぎて困っちゃうくらい!!!」

違いましたね。ご愁傷さまです。

「僕も実は虫が好きでね。何と云ったって触手があるからね
いい加減黙れスケベ哲学者。」

「えっ!? 夢郷君も触手の美しさが分かるのっ!？」

顔を紅潮させて夢郷君に詰め寄る小清水さん。

「小清水殿……触手……ううううっ!!!」

何悶えてるんだ丹沢君。一体君の頭には何が広がっているんだ？

「はっ！ いけませぬ……こんなはしたない妄想を繰り返しては清いオタクになど……」

謎の葛藤。

「收拾つかねーなアンタら!!」

亞桐さんの怒号が飛ぶ。

こんな状況下でも平常運転の奴らは平常運転なんだな…。
他の人たちのことも気になるけど。



昨晩は植物園しか見ることができなかったが、みんなで協力して三階にある教室を探索した。

どうやら一階以外の全ての階には同じ場所に一つ巨大な部屋があり、ホール階なら大ホール、二階ならプールという具合で、三階は植物園がそれにあたるようである。

その他には3-A、3-B教室、図書室、図書準備室、そして…
「娯楽室…?」

と、書いてある表札に目がいった。

こんな教室があるのか。

ガラリ、とドアを開けると、そこにはビリヤードを突く前木君と横に立つ丹沢君がいた。

コーン、とボールをつく音が響く。

「あ、ここ、ビリヤードなんてあるん」

「しっ！ 集中しているのですぞ!!」

丹沢君にたしなめられて俺は口をつぐむしかなかった。

前木君の表情は真剣そのものだ。

コーン、と放たれた白い球が隅の穴に入りこむ。

「いよっし!! 入ったああ」

いや違うよね。番号書かれたボールを入れなきゃダメだよ。

突く球を直接穴に入れるとか簡単すぎてゲームにならないよ?

「くそう負けたかつ!!」

いやいやいや。なんで悔しがるんだよ丹沢君。

「…君達、ビリヤードのルール分かってる?」

「俺達がルールだ!!」

そうきたか。

「知らないルールは作ればよい。ないものは作ればよい。フィギュア

作りと同じですな」

鼻高々にそんなこと言われても。

「…話変わるけど、こんな部屋が学園にあるんだね」

「生徒を退屈させないための施設なのかね。あのパンダが何考えてるか知らねーけどよ」

前木君が頭を掻きながら呟く。

「しかしここにはビリヤードにダーツにボードゲームが一通りそろい、いかがわしいものも含めて雑誌も豊富にそろえておりますな！しばらく退屈はしのげるでしょう！」

丹沢君の言う通り、この部屋にはいろんなものが置いてある。

後でみんなを読んで何かをするのもいいかもしれないな。

それにしても……。

「前木君、元気そうだよかったよ」

その言葉が口をついて出ていた。

だって単純に心配だったんだ。

立て続けに親友を二人も失って、彼がどれくらい苦しんでいるか、俺なんかには想像もつかないから。

「何言ってるんだ!!」と前木君は自分の胸を叩く。

「俺を誰だと思ってるんだ！ 超高校級の幸運だぞ!! 俺がドーンと構えてなきやあ、運が逃げていつちまうぜ！」

明るい笑顔でそう高らかに告げる。

「確かに辛いけどよ…でも、俺にはまだまだたくさん親友がいるから大丈夫だ！ ゆっつきーもそうだし、お前もそうだけ出雲！ じゃなかった讚岐！」

「駿河です」

丹沢君の真顔のツツコミが飛んだ。

俺は深いため息をついた。

もちろん、安堵の意味で、だ。

「今度遊ぼうな」と約束を取り付けられた俺は、図書室へ向かった。

前木君が平気そうで本当に良かった。

昨晚幻聴や亡霊に怯えていた俺の方がよほど精神的には参ってい

たのかもしれない。

そう、俺達は曲がりなりにも“超高校級”の生徒なんだ。

みんな、俺なんかよりもずっと強いに決まってる。

みんななら、絶望はきつと乗り越えられる。

そう信じて……

『なぜそんなことが言えるんだッ!!』

図書室の扉を開いた瞬間、聞いたこともないような甲高い怒号が飛んできた。

そして、目の前にはとんでもない光景が映しだされていた。

少し広めの図書室の真ん中の少し開けた空間に、その二人はいた。

鬼のような形相の入間君が、伊丹さんの両肩をつかんで床に押し倒していたのだ。

入間君の腕はブルブルと震え、今にも肩を握りつぶしてしまいそうだった。

しかし、そんな状況下でも伊丹さんの表情は平然としていた。

二人とも俺が着たことに気付いていないようだ。

俺はあまりの衝撃に言葉を失い、立ち尽くしてしまった。

「あなたの言うことを否定しているわけじゃないわ。あの子だけに非があるとは私も思ってないから。でもね入間君。あの子のしたことは罪なのよ」

「そんなことは分かっているっ!! だからこそ、彼女の仇を討たなければ気が済まないんだ!!!」

「それがあなたなりのあの子への罪滅ぼし? あの子の言葉を借りるなら、“実に滑稽”ね」

「なんだと!!!」

と、入間君が腕を振りかぶった瞬間。

パン、と伊丹さんの手が入間君の頬を打った。

「あなたにリュウ君ほどの強さがあるの? 断言されてもらうけど、あなたは弱いわ。身も心も、圧倒的に。それで黒幕に立ち向かったと

「ところで、何ができるのかしら？」

伊丹さんは入間君を押しつけながらゆっくりと立ち上がった。

「あなたに何が分かる!!! わたくしがあの方をどれだけ強く慕っていたか、どれだけ皆さんと打ち解けさせようと尽力したか!!! その気持ちも知らず、そんなことを」

「あなたも私を知らないでしょう？」

真顔で伊丹さんは入間君に顔を近づける。

それに呼応するかのよう、入間君は一步後ろに下がる。

「人に他人の心を知るなんて無理な話だわ。でも私は私のことを知っている。自分がいかに弱いかを知っている。だから私にできることをするのよ。あなたは辛さのあまり、自分を見失っているの。分かる？」

「わたくしは見失ってなど」

「思い出して」

伊丹さんは入間君の頬を両手で抑え、静かに額を触れさせた。

「リヤンは私に『仲直りの仕方』を教えてくれた。土門君は『辛い時こそ仲間を頼れ』と言ってくれた。釜利谷君は『物事を深く考えるな』と助言をくれた。リュウ君からは『強さが全てではない』と言われた。秋音は、『己こそが自分にとって絶対の存在である』ことを教えてくれた。きつと、あなたにも大切なことをたくさん教えてくれたはずよ。それを思い出して。みんななら、今のあなたになんて言うと思う？」

「……そんなこと、分かるわけじゃないですよ」

「…そう。そうね。死んでしまった人がどう思うかなんて、考えるだけ無駄よね…」

そう言って伊丹さんは入間君から顔を離し、くるりと後ろを向いた。

「あつ……」

そう、彼女が後ろを向いたことで、入口に立ち尽くしていた俺と目があつたのだ。

「あら」とだけ言って彼女は俺から目を背ける。

「ふふ…せつかくみんなが明るい雰囲気になっていたのに、ごめんな

さいね」

伊丹さんは静かにそう言った。

自嘲のこもった投げやりな笑みを浮かべていた。

「……………」

俺は何と声をかけてよいのか分からず、ただじつと二人を見つめることしかできなかった。

なんで二人の争いを止めてやれなかったんだろう。

「ふーっ、ふーっ……………」

虚ろ気な目つきで息を整える入間君。

彼は今何を思い、何をしようと考えているのだろうか。

「私は馬鹿だから……………不器用だから……………いつもこういう言い方でしか、人に忠告することができないの。それでいままでどれだけの人に嫌な思いをさせてきたことか……………」

伊丹さんはうつむいてそう呟いた。

気弱になっている彼女の姿なんて本当に珍しい。

「いえ……………あなたのおかげで変な行動を起こさずに済みました。感謝します」

そんな彼女に入間君はそう声をかけた。

「…みんなで、黒幕の正体を暴こう」

雑なまとめ方かもしれないが、俺は二人にそう告げた。

「なんでこんなことをさせたのかを問いただして……………そして罪を償わせる。『強さ』なんてなくても…俺達にはできるよ。きっとできるさー」

「お心遣い感謝します、葛西さん」

入間君は俺に歩み寄り、肩に手を置いて告げた。

その目はまだ虚ろで疲労と困惑が感じられるが、少なくともさつき伊丹さんを押し倒していた時のような憎悪のような感情は込められてはいないように感じられた。

「わたくしは少し頭を冷やしてきます。また後ほど」

それだけ言うと彼は足早に去っていった。

「ぶつちやったわ、彼のこと」

入間君が去ると、伊丹さんが重苦しく呟く。

「知ってる。…見てたから」

「秋音の時も同じだった。手が出ちやうのは悪い癖ね」

伊丹さんは疲れたように近くににあった椅子に腰かけた。

「本当に、不器用だね」

俺はそう言って苦笑した。

「でも、それが伊丹さんの強みでもあるよ。どんな時でも嘘をつかないで自分の意見をはつきり言う。理系らしいや」

「そうかもね」

クスツと彼女も笑った。

「私はこういう人間だから。こんな私でもできることをするだけよ。暇ができたら精神安定剤でもつくろうかしらね」

俺はぐっすり眠れるよう、安眠薬が欲しいかな。

と、言おうとした直後だった。

バン、と図書室の扉が乱暴に開いた。

「ぬおおおおお!!! 大変だぞよ!!! 長年主人公と苦楽を共にしてきた親友が黒幕だった系バトル漫画のクライマックスと同じくらいヤバいぞよ!!!」

安藤さん：!?よく分からない例えを引っさげてどうしたんだろう。

「葛西!!巴ちゃんが大変なの!!!」

…と、亞桐さん!?!

そして、二人に引っ張られてきたのは。

「離してください離してください私はどうせワラジムシみたたく石の下で一生ジメジメ過ごしてるのがお似合いなんですみなさんみたいな眩しい存在と一緒にいちゃいけないんです皆さんが汚れます離してください」

…:…やけに饒舌な山村さんだった。

袖を破ったあの特徴的な道着から普通の制服姿に戻った彼女は性格も一転、少女漫画のように大きな瞳から涙をきらめかせ、ひたすら自虐の言葉を呟いていた。

「私がこうしている間にも世界で幾多の植物様が一生懸命光合成を為されているのに私ごときが呼吸してしまつてごめんなさいごめんなさいこの酸素は皆様に譲りますどうか私ごときのために地球の貴重な資源を割かないでくださいゲホツゲホツやっぱり苦しいから息しますその代わり食事をいたしません皆様どうか」

「朝食の間ずっと元気なかつたから、大丈夫？つて話しかけたらこうなつちやつたんだよー!! ゆきみん、診察してよー!!」

必死に山村さんの腕を引っ張りながら亞桐さんが訴える。

「一時的な”第三の人格”といったところかしらね」

伊丹さんが下した結論はそれだった。

「この一週間余りでもあまりにも大きな精神的苦痛を負つた結果、防衛反応として第三の人格が生まれてしまつたと考えるのが妥当だわ」

「え、じゃあ巴ちゃんは一生涯三つの人格を背負つて生きていくつてこと…?」

亞桐さんが顔を青くして尋ねる。

「いえ、心理学的には異なる人格に逃げ込むのは一時的なものでしかないから、時間が経てば元の二つの人格に戻るはずよ。もとからある二つ目の人格がなぜ定着しているのかは分からないけどね」

つまり、放つておけばいつもの山村さんに戻るつてことか…。心安心。

「へえ、そうなんだ…。何とかして今すぐいつもの人格に戻せればいいのになー」

「亞桐殿、そういう時はクシヤミをさせれば人格が入れ替わると相場が決まつておるぞよ」

「クシヤミ!? なぜにクシヤミ!?!? そんなんで人格が入れ替わるわけねーだろ!! それで入れ替わる奴がいるなら見てみたいわ!!」

いるんじゃないかなあ。世界は広いつて言うし。

「皆さんどうか私ごときのために言い争わないでくださいどうしても皆さんが争うなら私は潔く屋上から身を投げますあつやっぱり身投げは痛いのでデコピンでお願いします」

…卑屈は卑屈だけど、さつきよりちよつと凶太くなつてないか??
「早くも回復の兆候が見られているわね」
そういう解釈でいいんだろうか……。

と、まあ、こんな感じでいつの間にか時間は過ぎ、新エリアの探索結果を報告しよう、という流れになったのだが……。

小清水さんは植物園で見つけた虫の種類を語り出すし、丹沢君と前木君はオリジナルビリヤードの戦果自慢をするし、夢郷君は相変わらず安藤さんにナンパしてるし（そして亞桐さんにどつかれるところまでワンセット）、君ら本当に探索する気あつたのか!?

まあなんにせよ、前回よりも明らかにみんなの立ち直りが早くて安心した。

肝心の俺自身がすっかりしなくちやあ、話にならないな……。

御堂さんの悲痛な人生も、釜利谷君の友達への思いも、リュウ君の強い覚悟も、俺達は忘れはしない。

失つた分だけ前に進む。

そして、希望への脚本を築きあげてやるんだ。

夜時間の前、俺はふと休憩室に足を運んだ。

何故か、と言われるとはっきりした理由は分からない。

ただ、しばらく行つてなかつたせいか、どこことなく懐かしい感じがしたんだ。

「あ」

そこには先客がいた。

「やあ、葛西君か」

他ならぬ、夢郷君だ。

珍しいことに、彼しかいなかった。

「まあ座ってくれ」

彼の言葉に従い、俺はソファアに座る。

「……何、してたの?」

俺は思わず問いかけた。

俺が入った時、彼は雑誌を読むでもなく、室内カラオケを歌うでもなく、ただ一人でじつと座っていたのである。

「何って、哲学者がすることは一つしかないだろう?」

夢郷君はにこやかに答えた。

「考え事…?」

「そうさ」

そう言う夢郷君は両の手を組んで顔の前に持つてきて、深く考え込むような姿勢をとった。

「この一週間余り、僕はとてつもなく身近で“死”というものを見た。死がいかに無残であるかということ、死がその人の全てを奪ってしまふということ、僕が学んだ。しかしそれだけに、死というものについて再考する余地ができたんだ」

彼はゆっくりこちらを向いた。

「“死”とは“絶望”なのか?」

「……………」

俺は首をひねるばかりだった。

「死ぬって、人生が終わることだよ? 絶望でしょ?」

「終わることが唯一の希望となる例もある」

夢郷君は毅然とした声で反論してきた。

「御堂君を思い返したまえ。彼女の人生が長続きたところで、果たして彼女に希望は訪れただろうか?」

「……………」

俺は言葉を詰まらせた。

愚かで哀れな少女。

叶うかどうか分からない夢のために同級生を犠牲にし、この学園を出ようとした少女。

苦しんで苦しんで苦しみ抜いて、そして死んだ少女。

もし、彼女が俺達を完全に欺き、この学園を後にしていたなら?

彼女は自分の夢を叶えられただろうか?

幸せになれたのだろうか?

「無理だろうね」

夢郷君の静かな言葉が、俺の脳裏に浮かんだ問いに冷徹な回答を突きつけた。

「もし、自分の理想通りの母親をアンドロイドとして生み出せていたとしても、それは本当の母親とは違う。いずれどこかで積もり積もった違和感が爆発し、彼女は自らが作ったアンドロイドを信じられなくなったはずだ」

そう、なのだろうか。

本当に彼女には、幸せになる方法はなかったのだろうか。

「あれが彼女にとって最良の結末だったとは思わない。だが、彼女が生きながらえることで失われる命もあつただろう。僕たちが最たる例だ」

彼女が生きていたら、俺達は死んでいた。

そんなことはわかっているんだが…。

「だから俺はもう、誰もそんな目に合わせたくないよ」

死ぬのがベストだなんて、そんな目に遭う人はもう見たくない。

絶対に、俺はみんなを助きたい。

「その気持ちは僕も同じさ。だからこうして考えているんじゃないか」

夢郷君は組んだ両手を腰元に下ろし、ゆっくりソファーにもたれかかりながら言った。

「そのためにも、まずは『絶望』がなんであるかを知らなければならぬ。それが分かればおのずと彼…『モノクマ』の目的も分かってくるはずだ」

ミ。 狂乱な笑みで俺たちを嘲笑い、手のひらで躍らせた二体のヌイグル

ミ。 龍雅君の戦いで頭数は減ったが、それでも俺たちの手に負える相手でないことは確かだ。

「僕は僕なりに、哲学者としてできることを模索している。だから葛西君、君も君のできることを探したまえよ」

「……うん、分かってるよ」

……なんだか、諭されちゃったな。

「葛西君」

夜時間が近づいたので部屋に戻ろうとした俺の背中に、夢郷君の声がかけられた。

「信じているよ」

彼が投げかけた笑みはとても穏やかで仲間としての確かな信頼と期待が感じられた。

だがその良心的なイメージの陰に、わずかだが不気味さ、何を考えしているかわからない不透明さが垣間見える。

この念を押すような発言は、何を意味しているのだろう。

頭によぎったそんな邪念を振り払うように、俺は夢郷君の方に振り向いた。

「俺も、信じてるよ」

相変わらず穏やかな表情の夢郷君の笑みが見えた。

仲間を疑うなんでもつてのほか。

彼はただ純粹に、俺に期待してくれているだけなんだ。

そう信じて、俺は自室に戻った。

夜の廊下を歩いてても、もう俺の視界に亡霊は出てこない。

これは、成長と言えるのだろうか。

俺は。

死ぬわけにはいかない。

「最高の脚本を作るまでは」

Chapter 3 (非) 日常編②



龍雅・フォン・グラディウス

“超高校級の殺し屋”。我らにとって最も注意すべき人物の一人である。グラディウスは絶望を是としない。グラディウスにとって我々“絶望”は抹殺の対象となりうる。

奴は生きる中で真の絶望を知り、それでも類まれなる精神で絶望に抗っている。江ノ島様自らが動かれれば奴を絶望に取り入れることも可能であろうが、残念ながらあのお方はそこに至る前に飽きるであろう。

学園生活の最中は決して奴に我らの存在を知られてはならない。奴に依頼をするであろう人物も警戒する必要がある。



「いただきまーすー」

みんなの挨拶が響く。

おととの現実から逃げたがっているせいなのか、みんなやけに明るくふるまっているように思える。

俺もそうなればよかったのだろうか、どうも脚本家という職業柄、物事を客観的に見てしまう癖がついてしまっている。

今ばかりはその無駄な冷静さが憎くもある。

今日は改めて図書室に行ってみようと思う。

何せ図書室は書物の宝庫。情報の溜まり場だ。

調べ物をするにはもってこいだろう。

俺達には分からない謎が山ほどある。

図書室に着くと、俺はポケットから一枚の紙を取り出した。

龍雅君の手記だ。

龍雅君が命と引き換えに残した言葉。

“超高校級の絶望”。

彼は、その超高校級の絶望こそがこのコロシアイ生活を引き起こした黒幕だと書き残していた。

それに加担するのが釜利谷君、そして御堂さんであるとも。

しかし解せないな。

彼らが黒幕側なのなら、何故わざわざ俺達の中に紛れ込んでコロシアイ生活に参加したのだろう。

モノクマやモノパンダを操っているであろう黒幕と同じ空間にいればよかったものを。

…ていうか、なんで釜利谷君は仲間であるはずの御堂さんの記憶まで消してしまったんだ？

「絶望だからじゃないですか？」

不意に声が聞こえ、俺は驚いて振り向いた。

「入間君……！」

彼はいつもと変わらぬ穏やかな顔で俺に歩み寄り、近くの椅子に座った。

「なんで俺の考えてることが……？」

“それ”を見て考えることといええば大体決まってきました。大方、黒幕一味の動きが不審に思われたのでしよう？」

その言葉を聞いて俺は手元の手記に目をやる。

「人の感情を推し量ることは対話をするうえで重要なステータスですよ。たとえそれが犯罪者や悪人であっても、です」

それが翻訳者として世界中を駆け巡った人物が持つ能力なのだろう。

「…だから君には“絶望”の考えることが分かるの？」

俺は恐る恐る尋ねる。

「個人的推測による部分が大きいですね、”理解”はできません。納得”は断じてできませんがね。わたくしが思うに、彼らの目的は単純明快。”絶望し、絶望させること”です」

「絶望し、絶望させること……」

「絶望させる」とは紛れもなくわたくしたちのこと。このコロシアイ生活で我々を絶望させることに他ならないでしょうね」

希望の生徒として選ばれた俺達に最大の絶望を強いる…。

なんと皮肉が効いたことか。

「そして彼らにとつては、彼ら自身の絶望すらも悦びなのです。ゆえに釜利谷さんや御堂様も自らの意志でこのコロシアイ生活に加入されたのでしよう」

俺の疑問を氷解すべく答えを示してくれた入間君だが、却って俺の頭の中にはさらなる疑問が湧いて出るばかりであった。

「その人たちには…」絶望がそんなに大事なの…？ 「絶望」のためになんでそこまでできるんだよ…」

「超高校級の絶望」ですから」

そう言つて入間君はずつと携えていた一つのファイルを俺に差し出した。

「隣の図書準備室に置いてあつた資料です。超高校級の絶望」について詳しく書かれていますよ。わたくしが彼らの思想をスムーズに理解できたのはこれのおかげです」

【超高校級の絶望に関する暫定的資料】と銘打たれたクリアファイルの中には、手書きの乱暴な文章がいくつも載せられていた。

「希望ヶ峰学園の生徒の中に…」絶望は紛れ込んでいた…」

俺はそこに書かれている文面の一つを読み上げ、言葉を失った。

俺たちはそんなところに入学しようとしていたのか。

と、いうことは。

既に希望ヶ峰学園は絶望に制圧されたということか…？

それならこんな異様な状況に俺達を置かせることも可能だろう。

「これを読みますとね、絶望が何を考えているのかよく分かりますよ…。彼らは絶望するのが自分であろうが他人であろうが関係ない。絶望がそこにあればいいんですよ」

今も黒幕はこの会話を聞いて嗤っているのだろうか。

異常、というレベルの話ではない。

「しかし…：覚悟はしていたものの、いざ知つてしまうと恐ろしいも

のですね。なぜこんなにすんなりと理解できてしまったのか……。わたくしの才能がそうさせているのか、それともわたくしもまた“絶望”なのか」

その言葉に思わず俺は入間君の目を見つめた。

「え？ 君が？」

「ありえない話ではありませんよ。だって記憶を消されているのですから。以前のわたくしが絶望だったのかそうでなかったのか、今のわたくしには知る術はないのです」

ぞわり、と恐怖が俺の背中をなでる。

入間君の理論は俺にも適用できること。

もしかしたら俺は以前、絶望として活動していたのかもしれない。

そして多くの人にこのコロシアイ生活のような絶望を強いたので
は……。

がくがく、と体が震えた。

しかし、次に感じたのはぬくもり。

入間君の手が肩に乗せられていた。

人の手って、こんなに暖かったっけ？

「……とは言ってみたものの、実際のところわたくしたち……少なくとも、わたくしとあなたが絶望であった可能性はない……か、著しく低いはずですよ」

入間君の言葉に、俺は「え？」と首をかしげた。

「リュウさん……いや、龍雅・フォン・グラディウス……。彼は生前、手記にこう書き残していました。『超高校級の絶望を抹殺する』と。そしてその意思に従い、御堂様に“呼び出し状”を送り付けたのでしよう」

つい数日前の事件が遠い昔のように感じられるのは、俺自身の頭が忌まわしい記憶を遠くへ追いやろうとしているためだろうか。

「彼がどのような方法で絶望を突き止めたのかはわかりません……。ですが、あの夜わたくしたちのもとに呼び出し状なんて届かなかった。それこそが、最低でも龍雅氏の中では、わたくしとあなたは絶望ではなかったということに他ならないと思いませんか？」

筋の通った理論だった。

反論の術が見当たらない。

「じゃあ……安心してもいいのかな……」

「いいと思いますよ」

入間君は優しくそう告げた。

「それに、仮にあなたが本当に絶望だったとしても、わたくしはあなたを憎んだり恨んだりしません。人を殺めてしまった御堂様も土門さんも龍雅氏も、一時とはいえ共に過ごした仲間です。人は善の心と悪の心を両方持ち合わせているのが当然の姿。ゆえにわたくしは罪を犯した人々のことも認め、対話したいと思うのです」

「……でも、俺達にこんなことを強要している黒幕っていう奴が、俺たちの話を聞いてくれるとは思えないよ……」

「確かに、この世には価値観が著しく異なる方もいらっしやいます。ですが、そのような方にも価値観が狂ってしまった“理由”が存在するはずです。それを理解したうえで説得すれば、必ずや……」

入間君の視線は強かった。

「はいはい、難しい話はそこまで!!」

不意に大きな声が届いた。

「前木君!」

いつの間に図書室に入ってきたのか、前木君が俺の背後に立っていた。

「……どこから聞いていたのですか……?」

「何も聞いてねーよ、今来たばかりだもーん!」

入間君の問いにそう答えた前木君は俺の両脇に手を差し込んできた!

くすぐったい!!

「うわああああ!!!」

俺は悲鳴を上げて彼を引き離そうとするが、背中に引っ付いて離れない!

「あれこれ悩んでないで遊ぶぞ、ゆっきー!!」

「遊ぶってなに?」

「いいから来い！ジョーズも！」

前木君はそういうのが早いか俺の手を引っ張って図書室を出ていった。

訝しげな表情の入間君が後に続く。

連れていかれた先は……

「プール？」

……だった。

そこには、いつの間にか水着に着替えたみんながいた。

この前のプール大会では女子は山村さんしか泳がなかったけど、亞桐さんや小清水さんは既にプールに入ってはしゃいでいる。

「アメンボさん走りー!!」と手足をジタバタさせている行動は謎だが、たわわな巨乳が目が悪い。

ギャラリーでじっと座っている夢郷君はたぶんその胸を凝視しているんだろうな。くたばれ。

「なんでみんな集まってるの……？ またプール大会でも？」

「いやーもつと楽しいことさー！」

前木君は自信満々に答えた。

もつと楽しいこと……？

「連れてきたけど」

突如背後から声が出た。

振り向くと、スカート付きの漆黒のビキニを着た伊丹さんと、彼女の脇に抱えられた山村さんがいた。

「うわあああん!!皆さんの貴重な酸素を消費してごめんなさああい!!!」

相変わらずツツコミづらい自虐を言い続けている。

まだ直るには時間がかかりそうなんだな……。

「よし、全員そろったなー！じゃあお楽しみの大スイカ割り大会を始めろぞー!!!」

前木君の号令を聞いた俺はキョトンとしてしまった。

「スイカ割り大会……？」

「はっはっは、前回といい今回といいシリアス調なシーンが多くて死亡フラグを疑われているわたくしですが、ここらで一発はっちやけておきましょうかね!!」

シリアス調とか死亡フラグとかよく分からないことを言っているが、いつの間にか水着に着替えた入間君も元気そうだ。

それにしてもスイカ割り大会なんてまたパリピみたいなこと考えたまんだなあ。

(※パリピ：「パーリーピーポー」の略。大勢で集まって楽しいことをするアウトドアな人たちのこと。葛西の苦手な人達。)

モノパンダに注文したら新鮮なスイカをくれたらしく、それはブルーシートの上にドンと置かれた。

「みー閣下によるスイカ入刀だぞよ」

入刀という言葉の意味を分かってなさそうな安藤さんが目隠しを付け、金属バットを振り回しながら息巻く。

ていうか、彼女の水着姿が拝めるとは思わなかった。でもビキニとかじゃなくスク水なんだね。

いつものベレー帽だけは変わらずかぶっている。水に入る気はないのかな…?

「ひいひいなんですかその棒は!! それで私を滅多打ちにする気ですか!! ああつ!! でも私にはふさわしい罰なのかもしれません!! さあお願いします!! 私を痣だらけにして下さい!!!」

いい加減うるさいな、山村さん。

それにこの人を殴ったらバットの方が折れそうな気がする。

「それじゃあトップバッターは安藤な! スタート!!」

前木君が笛を鳴らしてスイカ割りが始まる。

「ほいつ!! そりゃつ!!」

全く見当違いのところを殴り続ける安藤さん。

ドス、ドスと重い音が響くあたり、案外彼女は腕力があるのかもしれない。

「ん?ここらへんにある気がするぞよ」

そう言っただけか彼女は丹沢君の方に近づいていき、彼の足のすぐ

横にバットを振り下ろした。

「わーっ!!」と叫んで逃げ出してく丹沢君。

「む!!逃がさぬ!!逃がさぬぞえーっ!!」

完全に丹沢君をスイカと勘違いしたようで、鬼のようなオーラをまといながら丹沢君の移動した後の床をボコボコに殴っていく。

結局、制限時間の二分の間、彼女はスイカに一撃も当てることできなかった。

次に名乗り出たのは夢郷君だった。

「スイカと女子のガードは僕の前に碎け散る」だつてさ。黙れ。

などと小馬鹿にしていたのもつかの間、なんと開始十秒でスイカに命中させたではないか。

だが、ゴン、と鈍い音が響いたにも関わらずスイカは割れず、ゴロゴロとブルーシートの上を転がっていくばかりである。

「あ、モノパンダが言ってたけどそのスイカは普通のものに比べて皮の硬さが10倍らしいぞ!」

なんでそんなスイカよこすんだよ!! あのパンダめ、嫌がらせしやがって!!

「こうなれば波状攻撃ですぞ!!全員で順番に攻撃をして奴の装甲を削るのです!!」

こうしてみんなが次々にスイカに猛攻を仕掛けていったが、みんなの番が終わってもまだスイカには傷一つつかない。

俺もやったけどまずバットが重くて腕がっらいし、スイカを打った瞬間に腕に電撃が走ったしで最悪だった。

「あなたの番よ。さっさと立ちなさい」

伊丹さんは山村さんにぶっきらぼうに声をかける。

このメンツの中で唯一スイカ割りを行っていないのは彼女だけだ。

しかし、今の彼女が素直に要求に応じてくれるとは…。

「うわあああん!!どうしてですかあ!!」

目隠しを付けられた彼女は突如立ち上がり、泣きながらバットを構えた。

「どうしてスイカ一つのために皆さんがっらい思いをしなきゃいけない

いんですかあ!! 苦しめられるのは私だけでいいのにい!!」

別につらい思いはしていないと思うのだが、彼女はそう言つてバツトを振り上げる。

「まずい!!今の彼女では、お力を制御できません!!」

入間君の言葉が飛ぶが、時すでに遅し。

「こんなものがあるからいけないんですうう!!」

その言葉とともに、バツトは超音速で振り下ろされた。

俺たちは思わず顔を伏せる。

しまった。

彼女の力を見くびっていた。

いくら十倍の硬さを持つスイカといえど、彼女の馬鹿力をもってすれば蠟のように脆い。

これじゃスイカは粉々に……

と思いつつ恐る恐る顔を上げた俺はあんぐりと口を開けてしまった。

俺だけではない、その場にいた誰もが言葉を失つただろう。

なぜなら、スイカは粉々に弾け飛ぶどころか、ひとかけらも飛び散ることなく綺麗に真っ二つに割れていたからだ。

どんな力の込め方をすればこんなに綺麗に割れるんだよ??!

「うわあああん!!目隠しだけじゃなくて猿ぐつわもつけてくださいあい!!なんなら両手両足も縛ってくださいよお!!罪深い私を心ゆくまでいじめてくださいい!!」

相変わらず訳の分からないことを口走つて泣きじゃくる山村さんをよそに、誰かがつぶやいた。

「スイカ、食べよっか」

真っ二つに割れたスイカを、みんなでスプーンでほじくって食べた(山村さんは泣きじゃくりながらも誰よりもガツガツ食べていた)。

皮が十倍硬いからなのか知らないが、甘さも十倍強かった。

しかし、こうして10人でスイカを囲んでいるのもおかしい絵だな…。

「あれ?昆虫の餌用に持つて帰つたりしないの?」

一心不乱にスイカを食べる小清水さんの姿を見て、俺は思わず尋ねた。

彼女ならてつきりそうするかなーと思っただけだ。

「別に必要ないわよ」と小清水さんは笑顔で返した。

「カブトムシさんとかを飼っている人はよくスイカを食べさせてるけど、スイカやメロンのように水分が多いものはおしっこをたくさん出す要因になるから、飼育ケースが不衛生になっちゃうのよ。まあ植物園だとその心配もないんだけど、私が定期的に樹液を生成してるから餌には困らないはずよ」

「へえ……樹液って作れるの……?」

「あら、虫さんを飼ったり捕まえたりするには必須の知識だと思うけど? ……今時の子って虫取りとかしないものね。捕まえて閉じ込めるのはかわいそうだけど、一緒に過ごしてみることで新しい発見や愛着が湧いてくるものなのよ」

へえ、そうなんだ……。

実をいうと小学生の頃にカブトムシを幼虫から育てたことはあるのだが、羽化したそれはぱつと見て雌なのか雄なのかわからないほど角が小っちゃくて、同級生に「飼い主そっくりの弱虫」と大笑いされた記憶がある。

その時の悔しさをバネに、角の小さなカブトムシが下剋上を繰り広げる脚本を書き下ろし、映画化されて500万人ほど動員したんだけど、どうやら小清水さんは知らないみたいだな……。

「本当は昆虫ゼリーが一番栄養もあつて安定するしモノパンダに言えばくれそうな気もするんだけど、やっぱりできるだけ自然のままの食性で生活させてあげたいのよね」

昆虫学者としてのこだわりなんだろうな、と思った。

「こんなにおいしいスイカ、虫にあげるなんてもったいないっしょ!!
ウチらで食べちゃわないとね」

亞桐さんが口を挟む。

「なるほど……。このスイカはカブトムシさんだけじゃなく野生のギヤルの餌にもなるのね」

「いや誰が野生のギャルだ!!!」

曇りない目で謎の考察を繰り広げる小清水さんにいつも通りキレキレのツツコミをかます亞桐さん。

「独り身⇨野生という意味合いで用いているのなら正しい表現なのかもしれないね!」

入間君の言葉に「余計なお世話だボケ!! どーせアンタも独り身だろーが!!」と亞桐さんは怒鳴る。

「あ、申し遅れましたが私には故郷に恋人がございますので…」

「?」

一瞬、場が凍り付く。

「なんじやそりやあああああああ!!!」

丹沢君と前木君と亞桐さんが叫ぶのはほぼ同時だった。

「名は結梨と言いまして、私が世界中を仕事で駆け巡っている間も必ず文通してくださいる素晴らしいお方ですよ」

「うるせえやめろおおお!!!」

「わわっ?!」

亞桐さんが血眼になって入間君を揺さぶり倒す。

「入間君。長年の付き合いだ、今回ばかりは君を軽蔑させてもらう」

「えっ?! なんて?!?!」

夢郷君ですら鬼の形相で入間君を睨んでいる。

いや、正直俺もだいぶショックだけどね…。

「予定変更!! スイカ割り大会ではなく入間カチ割り大会開催決定!!!」

前木君も鼻息荒げに謎の新企画の開催を宣言。

「くそっ!! 結梨に会うまでは死ぬわけにはいかぬのです!!」

「うるせえ、ひけらかしてんじやねえぞ!!!」

そして、プールに逃げる入間君をみんなで追い掛け回す事態に発展。

「恋人って……恋って……なんなんだろうね…」

そんな光景を唾然と眺める俺はぼんやりとつぶやいた。

「そういうのは吾輩の専門外だぞよ」

いつも通りの穏やかな笑顔でスイカをむさぼる安藤さんが答えた。

「恋とは何か。…それは難しい問いだ」

不意に声がした方を振り向くと、夢郷君が俺と安藤さんの間に座り込み、一緒にスイカを食べ始めた。

「あれ？君は入間君を追いかけないの？」

「はっはっは。さすがに彼が哀れに思えてね」

泳ぎは入間君より早かったはずだが、旧友の間柄であるからか、情が働いたようだ。

「…そういえば、君と入間君っていつから知り合いなの？」

この際なので、俺はずっと気になっていたことを尋ねてみた。

「初めて会ったのは五年ほど前だね。とある遠国の地で講演を行うことになったんだが、現地の言葉が分からなくてね。その地で使われる言葉は少数言語であり、通訳もなかなか見つからなかった。しかし、ネットの情報を頼りにたまたま見つけたのが入間君だったというわけさ。初めて会ったときはお互いに驚いたよ。こんな年でこんな仕事をしているのか、とね。それ以来何度か仕事を共にしているというわけさ」

「ほお、仕事仲間とは感心よの。吾輩も小さい頃は姉と漫画を描きあいつこしていたのだが、物心ついたあたりから姉は恋愛漫画ばかりにうつつを抜かすようになってしまったのう……。中学に上がったあたりからめつきり話さなくなってしまったぞよ」

それは…思春期ならではの価値観の違いってやつなのかなあ…。

確かに安藤さん、恋愛とか興味なさそうだもんね。

いずれにせよ、仕事の話ができる相手が父親くらいしかいなかった俺からすれば羨ましいことこの上ない。

「入間君とはプライベートで関わったりしなかったの？」

「そこまで多いわけじゃないが、共に歩いたり語り合うこともあったよ。僕の趣味を理解してくれるからとても嬉しかったよ」

……ひよつとして、入間君が丹沢君とかとスケベ話で盛り上がったのはこいつの入れ知恵のせい…？

だとしたらとんでもない奴だな、この男は。

「話を戻すが、恋というものは女体と並んで僕が長年探求し続けているものだ。人が人を好きになる、その感情の根本的部分が“恋”というものだ」

突然夢郷君は大真面目な顔になって語り始めた。

「人が人を好きになる…。では吾輩はゆつき殿に恋しておるぞよ！

吾輩はゆつき殿が大好きなのでの〜」

「ふえっ?!?!」

唐突な物言いに俺は素つ頓狂な声を上げてしまった。

「ほう、安藤君は葛西君が大好きなのか。だが、果たしてその“好き”は恋と呼ぶ」

「ねえねえ、何のお話をしているの?」

突然顔を突っ込んできたのは、人間君追いかけてこをじつと眺めていた小清水さんだ。

「なんだか葛西君のことが好きみたいな声が聞こえたんだけど気のせいよね?」

心なしかすぐく威圧的な口調に聞こえるんだけど……。

「ん? 吾輩はゆつき殿が大好きだぞよ〜!!」

安藤さんは屈託のない笑みを浮かべて答える。

「は?」

小清水さんの額に青筋が浮かぶ。

「あなたみたいなお部屋にこもりきりの根暗な女の子が葛西君を好きになつちやダメよ?! 今度ウジ虫さんの飼育キット用意してあげるからそこに移り住んだら?」

真顔で凄まじいことを言い放つ小清水さんに、俺も夢郷君も表情を凍り付かせるばかりだ。

「葛西君は私と一緒に最高のビオトープを作り上げるって決めたの。残念だけどあなたの出る幕はないから」

いや、なんで勝手に俺の将来決めちゃってるの!?

ビオトープって何!? 昆虫に囲まれて一生暮らすなんて嫌だからね!?

「ふーむ…。ひよっとして小清水殿、ご機嫌斜め？」

いや今気づくのかよ。鈍感ってレベルじゃねーぞ。

「ま、まあ落ち着き給え小清水君。君は大きな勘違いをしている。安藤君は葛西君を好きといった。だが果たしてそれは“恋”と呼べるのか？」

「……………？」

女子二人は顔をかしげる。

「人間として“好き”という感情と“恋”は異なるものだ。恋とはもつと胸が熱くなり、その人物と一生添い遂げても構わないと思えるくらい強い感情のことなんだよ」

「あ、じゃあ恋ではないぞよー！」

そんなにきつぱり言われるとちよつと悲しいんですけど。

そして、そんな安藤さんのリアクションを見て小清水さんが小さくガツツポーズしたのを俺は見逃さなかった。

「なるほどのう。恋とは難しい感情であるな！」

そこから小一時間、何故か俺たちは夢郷君の恋愛口座を聞かされた。

小清水さんは途中で飽きていなくなるし、追いかけてっこしていた入間君たちはいつの間にかプール遊びに移行してるし、山村さんは目隠ししたままどこかに走り去っていくし、俺はすごく無駄な時間を過ごす羽目になった。

「どうだい？ 少しは恋というものの素晴らしさがわかったかい？」

「うん…まあ」

適当に返事しとこう。

「吾輩、今までバトルと無縁の恋という概念に甚だ興味がなかったのであるが、夢郷殿のお話を聞いてそういう話も書いてみたくなったぞよ!! 姉とも復縁できそうだぞよ〜」

「はっはっは。それはよかった。どうだい？ 君の人生の中で、今まで恋のような感情を抱いた相手はいなかったのかい？」

さりげなく人のコイバナを引き出そうとする技術だけは流石だな。

(※コイバナ…「恋話」のこと。人の恋愛事情に関する話。葛西には縁

がない……と思いきや最近はそうでもない。）

「うーむ……」と考え込む安藤さん。

「恋……とはちよつと違うかもしれないが……一生一緒にいたい人ならいる……いや、いた……ぞよ。なんというか……友達以上、みたいな」

少し彼女の表情が重くなる。

俺も夢郷君もそれまでとは打って変わって暗い雰囲気を感じた。

「吾輩の大親友、リャン様だぞよ!!」

だが、安藤さんは敢えてなのかわからないが、明るい口調でそう言い放った。

可憐で小さな美少女の無垢な笑顔が脳裏によみがえる。

「ああ……そうか。確かにとても仲が良かったね」

夢郷君は空気が重くなりすぎないように配慮し、いつもと変わらぬ冷静な言い方で返した。

「吾輩はリャン様が大好きだったぞよ。漫画の話も、吾輩が好きなキャラの話も、いっぱいいっぱいしたぞよ。吾輩が望んだコスプレをいつもしてくれたぞよ。数日間だけだったのに、すごくすごく、幸せだったぞよ」

幸せ。

それは、数日後に待ち構えていた絶望をより苦しくするための“餌”だった。

「可愛くて、優しくて、時には子供のように泣きじゃくって、そんなリャン様が妹のように尊くて、眩しくて……う、うっ、うえっ、うええ、ふええええ」

涙をぼろぼろとこぼし、泣き崩れる安藤さん。

何も言えない空気になってしまい、正直言っただけ俺は困惑した。

部屋にはまだ、津川さんが生前に残してくれた「ホープ仮面2号」の覆面が残っている。

「ごめん……ごめんなさい……」

彼女らしからぬ口調で謝りながら必死に涙をこらえていた。

「生きているものは死ぬのが摂理だ。彼女の死にざまは到底受け入れられるものではなかったが……それでも失われた命には誠意をもって

祈りをささげることが我々にできる精一杯の手向けではないだろうか？」

夢郷君の言葉はもつともだ。

「いつか吾輩も、リャン様のところへ…」

「え……う？」

今なんて？

「何でもないぞよ！ お二方、今日は礼を申すぞ！ じゃあのう」

安藤さんは俺が呼び止める間もなくどこかへ消えてしまった。

言いようのないモヤモヤが残った。

“いつか、吾輩も”。

“今すぐ”とは言っていない。

……大丈夫、だよね……？

そんな俺たちの様子など全く気付く様子はなく、相変わらず入間君や前木君たちはプールで騒いでいた。



次の日、俺は珍しく自ら朝食を作ることにした。

「あら、おはよう。昨日はずいぶん楽しそうだったわね」

厨房で俺を迎えたのは伊丹さん。

いつもの黒ずくめの服装の上に白のエプロンと三角巾を付けていて、若女将感がすごい。

「俺、昨日はそんなに遊んでないけどね……。で、何作ればいい？」

「何もしないで」

え？

「そんなこと言わないでよ…せっかく来たんだし」

「私が全部できるから。足手まといはいらないわ」

ひどい！と言うなあ……。

「よっ！俺がなんか手伝ってやろうか？」

軽快な口調で現れたのは前木君だ。

だがそんな彼の姿など歯牙にもかけないで伊丹さんは…

「あら前木君、おはよう。早速だけど手を洗ったら味噌汁を作ってほしいのだけれど」

!!??

なんでー??
!!??

「葛西は下手くそなんだから奥で待ってるよ！」

滅菌器からエプロンを取り出しながら前木君は俺を外につまみ出そうとする。

俺って料理下手くそだったっけ…?

「きよ、今日はちゃんとやるから！簡単なことならできるから!!ねえ!!」

せっかく頑張って早起きしたのに、無駄になったらたまらない。

俺の懇願を聞いた伊丹さんはため息をつく。

「じゃあ昨日からたまってる洗い物でもやっておいて頂戴」

…完全に食事作りではなく雑用ですが、大丈夫です。誠心誠意込めてやらせていただきます。

「しっかし、お前も変わったよなー。最初は誰にでも毒吐いててすげえ感じ悪かったのに。今じゃこうして飯作ったり山村の世話してくれたりして助かるばかりだぜ」

前木君が味噌汁をかき混ぜながら言った。

「根本は何も変わってないわ。私は相変わらず未熟で馬鹿正直なだけの浅はかな女。だからリヤンも秋音も、誰も救えなかった」

伊丹さんは俯いてつぶやいた。

「それはお前ひとりの責任じゃねえだろ。気を強く持てよ。おまえは俺たちに必要な存在だよ」

「…バカみたい。くよくよ悩んでいたって仕方ないのに。あなたが羨ましい。大切な友人を何回も失ってもなお、そんなに元気に振舞ってられるあなたが羨ましいわ」

「そうだな、御堂は嫌味だったけどいい奴だったし、あんま覚えてな

いけど、なんか悲惨な死に方しててかわいそうだったよな。あと、なんだっけ。あ、リュウだ。あいつもいい奴だったよな…。でも俺は大丈夫だ！ あいつらの死を乗り越えていく覚悟はできてっからよ!!」

「…?」

俺は少し首をかしげた。
なぜ、つい数日前まで一緒にいた仲間の記憶が曖昧になっているんだろう?

あんな壮絶な死にざま、俺は一生だって忘れられそうにない。

リュウ君の戦いぶりだって、今後二度とみられないであろうほど強烈なものだった。

それを、“あんま覚えてない”って……?」

「きつと、釜利谷君も土門君もそれを望んでいるよね」

俺はフォローのつもりで声をかけた。

ほんのフォローのつもりだったんだ。

「え、と? 釜利谷? て?」

「え?」

俺も伊丹さんも表情をこわばらせた。

「釜利谷君だよ…!! 君が三ちゃんって呼んで、あんなに仲良くしてたじゃないか!」

俺は自分が直面している事実が信じられなかった。

「さん、ちゃ」

「釜利谷君と、土門君と! 三人であんなに仲良くしてたじゃないか!!」

まさか、忘れてる??

そんなこと、あり得るのか???

「ど、も、ん?? え、ナニコレ?」

突然前木君は膝をつき、ぽろぽろと涙を流し始める。

その勢いは昨日の安藤さんとは比べ物にならない。

「あ、え?? おれ、忘れて、??」

「君は、君は一体どうしちゃった」

「やめて!!」

伊丹さんの大声が俺の言葉を塞いだ。

作りかけの総菜も放り出して伊丹さんは前木君のところに歩み寄った。

「ごめんなさい。私、あなたを買いかぶっていた。あなたも人間だもの、当り前よね」

「お、おれ、おれおれおれおれ」

言葉が言葉になっていない。

「いいの。いいのよ。あんなに仲良かったものね。忘れてもしなきゃ耐えられるはずがないわ。あなたは悪くない。ちつとも悪くないのよ」

伊丹さんもまた涙をとめどなくこぼしながら、前木君を抱きしめた。

「葛西君、ごめん…。ご飯の続き、お願いしてもいい？」

その言葉を受けた俺は数秒たってから「あ、うん」と辛うじて返事をした。

「さん、三ちやあん!!!どもおおん!!!うあつ、うつ」

「あなたは私と同じ。いつだって心のよりどころを求めている。そうでしょ?」

「うあああああああん!!!」

「泣いていいのよ。私も泣いてる。辛かったよね。もう、嫌だよね」

安藤さんも前木君もそうだ。

気丈に振舞っている人ほど、心には絶大な闇を持っているのだ。

確かに俺たちは、絶望を乗り越えて成長しているのかもしれない。だが、成長すればするほど、心に癒えようのない大きな傷を負ってゆくのだ。

もう、俺たちは長くないのかもしれない。

俺たちが真つ当な精神を保てる時間は残りわずかなのかもしれない。

——絶望の時は、すべてに。

「——ガ——ひやひやひやひやひやひやひやひやひやひや
!!!!!!!」

Chapter 3 (非) 日常編③

あの恐るべき裁判が終わった直後、前木君はこう叫んだ。

『三ちゃん!!! リュウ!!! 御堂!!! 俺はお前らが大好きだったぞ!!! 他のお前らが何と言おうと、俺はお前らのダチだ!!! そうだろ、三ちゃん!! 三ちゃんが言いたかったのは、そういうことだろ!!! だから、俺がそつちに行くまで待ってる!!! お前らの苦しかったこと、俺が全部受け止めてやる!!! きつと、必ずだ!!! リヤンも土門も、絶対絶対待ってる!!! またな!!!』

それは、仲間の死を背負った彼の強い意志によって放たれた言葉だった。

だが現実には俺たちが思っている以上に非情だった。

この言葉を発した時、既に前木君の精神には限界が来ていたんだ。そして彼は、誰にも知られないまま密かに壊れた。

特に仲の良かった釜利谷君と土門君の記憶を脳内から自動的に消去し、それによつて何事もなかったかのように明るくふるまうことを可能とっていた。

今日、俺と伊丹さんに“現実”を教えられるまでは。

「ごめん、前木君」

俺はバカだ。

彼の苦しみを、これっぽっちも分かっていなかった。

「ごめん」

伊丹さんに抱きしめられて子供ののように泣きじゃくっている前木君に、俺はただ謝ることしかできなかった。

朝食はいつも通り行われた。

前木君の事情を知られないため、先に個室に戻らせ、みんなには体調不良と説明しておいた。

何も知らず、昨日のスイカ割り大会の興奮冷めやらぬみんなは楽しく話していた。

だがその裏では、俺たちの日常の崩壊は着実に進んでいた。

「葛西殿、葛西殿！」

朝食後、声をかけてきたのは丹沢君だった。

「何やらお元気のなさそうな様子ですな！ 何かござりましたか？」

「いや…ちよつと眠くてね…。昨日寝つきが悪くて…。でも今はもう大丈夫だよ」

適当なことを言つてごまかすしか選択肢はなかった。

「踏む…。では葛西殿、前に入間殿とやっていた」あれ、拙者とともにやってみせぬか？」

「…え？」

丹沢君の言葉に、思わず俺は首をかしげた。

「…あれ」つて、このガチャのこと…？」

丹沢君は大真面目にうなずいた。

連れられた先は、一階の端つこにある売店だった。

いつだったか忘れたが（おそらく初日だった気がする）、モノパンダからこんな話を聞かされた。

校内のあちこちにモノモノメダルというものがばらまかれていて、それをここに鎮座しているこの「モノモノマシーン」に投入し、ガチャガチャを回すことで変わった物がもらえる、というものだ。

「懐かしいな……。最後にやったのっていつだったっけ」

俺は自分のうちに眠る微かな記憶を引きずり出した。

あれは…：初日か。

入間君に引つ張られてこのガチャを何度も引かされたっけなあ。

みんなが生きていたこともあつて、遠い遠い昔のことのように感じられる。

そう言えば、裁判の時…：そう、クロを当てて投票した瞬間。

スロットからは大量のモノモノメダルが払い出されており、モノパンダはそれを「お前たちのものだ」と言い放った。

当然、俺たちにそんなものを受け取る余裕はなかった。

するとあのパンダは、何故か俺の部屋に籠いっばいのメダルを置いていったのだ。

理由を尋ねても『主人公だから』とかいう訳の分からない答えしか返ってこなかった。

「そういうわけで、大量のメダルを保持している葛西殿のお力添えが必要なのでござる!」

丹沢君は曇りのない目で俺に迫ってくる。

「……何か欲しいアイテムでもあるの?」

「それは手に入ったら教えまする!! さあ、まずは葛西殿の部屋からメダルを持ってきますぞ!!」

「ええ、めんどくさいなあ……」

こんな時に力持ちのリユウ君や土門君がいればなあ……山村さんはあんな状態だし……

数分後、俺の部屋。

「ぐぐぐ、ぐぎぎぎぎぎ……」

「いや重いよ!無理だつて!」

籠には、二回分の裁判の支払いメダル、ざっと五百枚ほどは入っている。

元々一枚のメダルが大きくて重いこともあり、とてとても非力な男二人で持てるものじゃない。

「たまたま通りかかって見てみたら……。あんたら何してんの?」

「あ、亞桐さん!」

彼女は空いたままの部屋のドアから呆れの混じったまなざしでこちらを見つめていた。

「…へえ。こいつを持っていきたいわけね?」

「そういうわけで手伝ってはくれませぬかギリビツチ殿!!」

「いや何意味不明なあだ名つけてんだよドアホツ!!あれか、夢郷の入れ知恵か!!!あいつぶっ飛ばす!!」

謎の口論は無視するとして、冷静に考えて女子に力仕事の手伝いを乞うって相当恥ずかしい状況だよな……。

でも今は一人でも助けが欲しいところだからあれこれ言っている
余裕はない。

「う、うとうとう……」

「んぐぐぐぐ……」

「お……っからああああ!!!」

ズン、とメダルを満載した籠は無事に売店の床の上に置かれた。

「ふう……ふう……あなた……なんでこんなにくさん貯めこんでるんだ
よ……! もっとちよつとずつ使うとかしろよ……! ぜえぜえ……」

「そんなこと言っただけ……モノパンダが一気に渡してくるから
……」

俺はぶつぶつ不平を言いながら籠から一枚のメダルを取り出して
ガチャを回した。

ゴトン、とカプセルが落ちてくる。

『コラ・コーラ』

丹沢君の方を向くが、彼は黙って首を横に振る。

これじゃないらしい。

しかしこのコーラ、カプセルサイズというだけあってひと缶30cc

!少ない!!

一口で飲み干すともう一度ガチャを引く。

『愛蔵リアクション芸集』

「え、なにこれ! ちょっと見せて!」

俺から奪うようにその雑誌を手にした亞桐さんは、すぐに「ぶひや
ひやひやひや!!! ゲラゲラゲラ!!!」と下品な笑い声を上げ始めた……。

しかし、丹沢君は険しい表情のまま、首を横に振るばかりである。

それから小一時間が経ち、メダルは順調に減っていった。

亞桐さんは携帯ゲーム機で遊んだり昭和ラジオを聴いたり浮き輪
ドーナツを完食したりと、実に有意義な売店ライフを過ごしているよ
うだった。

丹沢君の探し物を引き当てるために呼ばれたはずなんだけど、完全
に亞桐さんを楽しませる会と化しているよね。おかしいよね。ずつ

と真面目にガチャ引き続けている俺はなんなんですかね？

「うひゃー！ 蝶ネクタイの変声機だつてさー！ すげー！！ 『僕は貧乳が好きだ』 うわー出た！！アイツの声が出ちゃったよ！！ 言ってるだけでもムカつくー！！」

すごい。一瞬だが本当に夢郷君の声が聞こえた。

ってそんなことに気を取られている場合じゃないんだ。

丹沢君は相変わらず神妙な顔で出てきたカプセルの中身を確認していた。

普段の彼なら絶対手に取りそうな携帯ゲームもあつさり亞桐さんに受け渡しちゃうし、飛び上がって喜びそうな「プリンセスぶー子」のフィギュアが出てきたときも、一瞥してからポケットにしまったただけだ。

何か今の彼はおかしい。

その疑問は、さらに十数分後に露わになることとなった。

「……出た！！」

不意に、丹沢君は叫んだ。

カプセルの空き容器をまとめていた俺がぎよつとして顔を上げるところには、彼は一つのカプセルを掴んで売店から走り去っていった。

「ちよ、丹沢君ー」

携帯ゲーム機に夢中になるポンコツ……亞桐さんを置いたまま、俺は彼の行く先を追いかけていた。

ついた先は、……美術室だった。

そこには、安堵の表情でカプセルを開ける丹沢君の姿があつた。

彼が取り出したのは、小さな一つの花束。

そこには、美しく儂い薄桃色の花が咲いていた。

『桜の花束』

そして、彼の目の前には布がかけられた謎の物体が…。

すると、丹沢君はその布をばつと取り払った。

そこに現れたのは……。

着色まで完全に施された、制服姿の津川さんの等身大フィギュア……というより彫刻だった。

満面の笑みを浮かべてこちらに向いているは、間違いなく第一の事件が起こる前の、穢れも絶望も何もない津川梁さんそのものだった。

丹沢君は彼女の右手に桜の花束を握らせた。

可愛らしいたたずまいに可憐な花束が映える。

「これは……」

俺は思わず声を漏らす。

「ちようど製材が美術準備室にございましてので。本来はフィギュアがよろしかったのですが、さすがに材料がござりませんでしたな」

丹沢君は苦笑する。

「こちらは最初の一体にすぎませぬ。まだあと四人分の仕事が残っておりますからな……」

四人分、ということとは……。

ここで死んだ全員の像を作ろうとしているのか。

「…大変なんじゃないの？ 等身大の作品を作るって」

「相当な労力はかかりましたが、これしき、亡くなられた方々の無念を思えば屁でもありませんぬ」

彼は強い目つきで言った。

「それが、拙者から死者たちにしてやれる唯一の供養なのです……」

その表情は、超高校級のみんなが時々見せる『プロフェッショナル』の姿そのものだった。

正直スケベなチビメガネとしか思ってたけど、彼も立派な才能の持ち主なのだと思ひ知らされた。

「ですが葛西殿！ そ、その……。いかにこの像が精巧に作られておるからといって、け、決してエツちな目で見えてはいけませんぞ……！」

スカートの中身までは彫っておりませぬゆえ……」

…やっぱりスケベなチビメガネじゃないか。

美術室を出ると、偶然に人間君と出くわした。

「わわっ!! あなたまで結梨の存在を疑うのですか!?!」

何も言っていないのに、会うなりその言いざまである。

「いやいやいや……俺は疑ってないから……」

「おお、神よ！ 恋人一人いるだけなのにどうしてこのように辛い試練を与えるのですか!!」

俺の話など全く聞こえていないようだ……。

「……その結梨って子とはどこでいつ知り合ったのか、よければ聞かせてもらってもいいかな……?」

俺は恐る恐る尋ねてみた。

「そうですね…。あれは私が15の頃、久々に仕事の合間に日本へ帰国した時のことでした」

入間君は語りだす。

この話の信憑性によって、彼の恋人とやらが妄想の産物なのかそうじゃないのか見極めてやろうじゃないか。

「久々に通っていた中学に顔を出したのですが、学校に所属していたのは形ばかり。仕事詰めで滅多に顔を出さず、出席日数の不足分は、私の功績をネームバリューにしたい学校からは黙認されていました。そういう身分ですので、当然私には友達などおりませんでした。まあ、一人で寂しく授業を受けていたわけです。

ですがある日、隣のクラスの子が、顔を真っ赤にしながら私に語り掛けてきてくれたんです。『あなたのお仕事ぶりを尊敬しています。よければこれを使ってください』と、本人が使い込んでいたであろう英和辞典を渡してね。中学生が使うレベルの辞書ですから、そこに載っている内容など、とつくの昔に私の頭に叩き込まれていたことばかりですよ。笑ってしまいました。ですがその気持ちが嬉しくて、辞書はありがたく受け取りました。今でも大切に保管してありますよ。その子が結梨なわけです」

「……………」

話を聞く限り、入間君に彼女がいるのは本当みたいだな…。

なんだか、長いスパンののろけを聞かされたみたいで気分が非常に悪かった。

「で、そこから交際が始まったわけなんですけど、まずパリに行かせろなどというものですから……」

夢中になつて一生懸命話し込む入間君からそつと離れ、俺はその場

を後にした。

のろけ話なんてたくさんだ。

気分を晴らすには、あの場所がいいな。

俺が向かったのは娯楽室だった。

たぶんここには誰かがいる……

「ハイヤー——ッ!!!」

パシンパシン!!と乾いた音が響く。

そこにいたのは、不思議な格好をした亞桐さん……だった。

茶色のジャケットとスカートにつばの曲がったオシヤレなハット

にスカーフ……。

この格好……カウガール……?

そして手には鞭。

乗っているのは、娯楽室の奥にあった乗馬体験マシン。

うん。カウガールだね。

亞桐さんはこちらを見つめたままピクリとも動かなかった。

というより、作動する乗馬マシンに揺られるがままになっていった。

沈黙すること一分。

乗馬マシンが作動を停止した。

亞桐さんの顔がゆっくりと真っ赤になっていくのが、はつきりと分かった。

というわけで、誰かが来る前に事情聴取に移った。

『薔薇の鞭』

俺と丹沢君が売店を出た後、すぐにそれを引き当てたのが事の発端だったようだ。

「……その、子供のころからカウガールに憧れて……リヤンちゃんからもらった仮装もあったし……鞭が手に入った勢いで……つい……」

震える声で亞桐さんは語る。

津川さんからいつの間にかそんなものをもらっていたのも驚きだが、それ以上に薔薇があしらわれた鞭なんて明らかにカウガール向き

ではないよなあ……。

「いや、まあ……似合ってるし可愛いと思うよ」

「ほ、本当!! ありがとう!! ……でも乗馬マシーンではしゃいでたのはマジで黙っててくれると助かる……」

「う、うん。言わないよ」

まあ、乗馬マシーンにまたがりながら鼻息荒く鞭をふるう姿など、本人にとっても恥ずかしいだろうからね……。

「美少女コスプレの匂いがする」

「能力者コスプレの匂いがするぞよ!!」

夢郷君と安藤さんが娯楽室の扉を開けて雪崩れ込んできた。

「きゃああつ!!」と亞桐さんが悲鳴を上げるころには、二人はもう彼女の目の前まで肉薄していた。

「その太ももの太さは筋肉なのか、脂肪なのか。なぜただの肉なのにここまで僕の気持ちを駆り立てるのか。非常に探求のしがいがある」

「亞桐殿!! その姿になることによって、いったいどのような能力を得たのかえ!!?」 あらゆる人間を乗りこなす能力? 百発百中のガンマンならぬガンウーマンになれる能力?? 早く教えるぞよ!!」

「もうお前らどっかいけー!!」

亞桐さんの怒号は、いつもより!! ひときわ大きかった。

しかしこの後、みんなで仲良くダーツやビリヤードをしたのだった。

時計が五時を指したころ、俺はとある人を探していた。

その人は植物園のベンチにいた。

「みんな、君と遊びたがっていたよ。伊丹さん」

意気消沈した様子で座っている彼女に、俺は声をかけた。

精神的なダメージを負ったのは前木君も山村さんも同様だが、その二人を間近で世話している伊丹さんこそ、俺たちの中で最も大きなストレスを抱えているように見えた。

「私のことは気にしないで。少し休んだらまた前木君のケアをしないと……」

「伊丹さん。俺は君に元気になってほしいんだよ」
「無理よ」

彼女はきつぱりと言い放った。

「私は怖いよ。自分が少しでも手を抜いてしまったら、そのせいでまた殺し合いが起きてしまいうんじやないかって。みんなは遊んでいい。でも私が気を抜くわけにはいかないの」
「どうして君なの？」

伊丹さんは言葉を詰まらせた。

「……ごめん。まずは俺が謝らなきゃだね。前木君にシヨックを与えたのも、その後の処理を任せつきりだったのも俺の非だ。本当にごめん。だから明日は、俺が前木君と山村さんのケアをするよ。他のみんなにも、ローテーションでやってもらおうようにしよう。俺たちの問題は俺たちが解決する。君だけの仕事じゃないんだから」

「……心のケアは簡単なことじゃないのよ。多少なりとも医療の知識を有するの。私じゃなければ」

「そんなことないわよ？」

不意に第三者の言葉が響く。

その言葉とともに植物園に入ってきたのは……

「小清水さん……と山村さん……？」

自信に満ちた笑みを浮かべた小清水さんの後ろについて回るのは、やけに上気した表情の山村さんだった。

「ああっ!!! つい先日まで私は自分のことが嫌で嫌でたまりませんでした!! ですが!! この美しい蝶々さんや頑張り屋の蟻さん達を見ていたらっ!! 少しだけ生きることの素晴らしさが分かったんです!!!」

伊丹さんも俺も目を見開いてキョトンとした顔をしていた。

「どう? 私が審美なる昆虫界の一片を見せただけで早くも立ち直りの兆しが見えてきたわよお?」

小清水さん、満面のどや顔。

「はああっ!!! 私も蝶々さんに吸い尽くされたい! じゅるる……」
立ち直ったというよりも、完全に洗脳してるよね?? ちゃんと元に

戻るんだろうね??

「…驚いたわ。ただの昆虫オタクだと思っていたのに、彼女の精神をわずかながら修復してしまうなんて…」

「時間がたてば治るってあなたは言ってたけど、やっぱりこうやってケアして治してあげるのが一番よねって思っただけよ。さあ、二人も昆虫界の何たるかを一緒に学びましょう！」

「今は結構です!!」

俺は青い顔で断った。たまったもんじやない。

「と、とにかく、これで分かったよね? 俺たちにも心のケアぐらいならできるから…。明日からは、伊丹さんもみんなと遊んだり、探索して脱出の手がかりをつかんでほしいな!」

「……………」

伊丹さんは何も言わなかったが、少し俯いて震えているように見えた。

まだだ。

まだ日常は崩壊させない。

俺たちはやれる。

そう確信した。

「あ、見て見て!! こんなところにおつきいムカデさん!!」

小清水さんが子供のようにはしやぎながら指さすと、

「ギエエエエエエエエエエエエ!!」

空間を割るような叫びを残し、**!!**音速の走りで山村さんがその場から消えた。

「まだ洗脳が足りないか……………」

小清水さんが恐ろしい眩きを放つ。

完全に洗脳って言っちゃったよ…。

いろんなことが起きた一日だったが、だからこそやりがいがあったと思う。

前木君のことだが、体調不良でごまかし切るのは無理があると判断し、交友が深い入間君と丹沢君にだけ本当のことを打ち明けた。

「夕食は私が彼のもとに持っていきましよう。なあに、対話は得意中の得意ですから任せてください！」

入間君は意気込んで前木君のもとへ夕食を運んで行ってくれた。「かなり憔悴した様子ではありませんでしたが、ある程度は元気にしてあげられましたよ。明日の朝食は来てくれるそうです」

……流石だと素直に感心するほかはなかった。
この入間君も、数日前は錯乱して伊丹さんと一触即発だったのに、ここにきて再び、俺は仲間という存在の強さを思い知らされた。



「ぎひやひやひやひやひやひや……」



翌日。

何事もない、いつも通りの朝食の席だ。

だが、その「いつも通り」がいつまで続くのか、誰にもわからない。俺の見立てが正しければ、今日か…遅くとも明後日までには。

コロシアイの、“動機”が配られるはずだ。

そうなったら、もう誰も安全ではいられない。

誰も殺さない。

そう思っていたのに、五人死んだ。

だが俺たちは負けない。

負けられない。

仲間の強さを信じて。

自分の強さを信じて。

絶望と戦う。

「私のようなゴミでもこんなに美味しいものをいただけるなんて……この世界は素晴らしいですよ……」

一晩経って小清水さんの洗脳が吹っ飛んだらしい山村さんは、相変わらず人一倍飯を食っている。

「……………」

昨日のショックから完全に立ち直れてはいない前木君だが、辛うじて箸は運んでいる。

「ですから、私には本当に恋人が……」

「信じないよ僕は。君もだろうギリビツチ君」

「やっぱりそのあだ名お前考案だったのか!!! あとでぶっ飛ばす!!! それはともかくウチも絶対信じないかなー!!!」

未だに入間君の恋人発言で言い争っている三人。

「亞桐殿、夢郷殿、なりませぬぞ！ リア充憎しの想いは某も同じですが、愛の形は人それぞれありますゆえ……。ここは某に免じて、どうか抑えてくだされ」

「……ちつ。丹沢がそこまで言うなら……」

「……分かった。彼に対する憎悪はやまないが、ここは一度矛を収めよう」

「いやなぜ私が一番悪い奴みたいな流れになってるんですか?? おかしいですよね??」

「むわはははっ!! 次の作品の題材は入間殿がよろしいかの〜」

「……ここの辺の雰囲気は明るくてよさそうなんだけど……」。

少し視線を横に向けると。

「葛西君はあんなドロドロな人間関係とは無関係だもんね〜」

ニコニコと不気味なまでに笑顔を振りまいてくる小清水さんがいる。

「やっぱり人間はダメよ。昆虫のように思考が単純で純真素朴な葛西君こそが私の理想に相応しいのに」

ぶつぶつと恐ろしいことをつぶやいているし、聞き間違いないやなければ完全にバカにするようなことも言っていた気がする。

やっぱり女の人は怖いよ……。

なんとか今日の朝食も無事に終わり、伊丹さんがコーヒーを希望者に振舞っていた。

「……ねえ、大丈夫？ コーヒー飲む……？」

伊丹さんは心配そうに前木君に声をかけるが、「いい……。」と断り、彼は部屋に戻っていつてしまった。

彼の心が開くのはまだもう少し先のようなだ。

「いやあ、食後のコーヒーは優雅なお味でござるな！」

丹沢君がグビグビとコーヒーを飲み干す。

伊丹さんもゆつくりとコーヒーを飲む。

「それにしても、小清水君の胸は……最近さらに成長したと思わないかい？」

優雅な時間をぶち壊す夢郷君の言葉に、俺は思わず顔をしかめる。

「間違いありませぬな……あれはまだまだ育ちますぞ！」

丹沢君も真面目な顔で何を言ってるんだよ。

「お胸はやはり大きい方がよいのであろうか……」

丹沢君に寄り添うようにこの場に残った安藤さんが、自分の胸を撫でおろしながら不安げにぼやいた。

「おや、そんなことを気にするなんていよいよ安藤君もメス化がはじまったか？」

下品な言い方をするな夢郷。

「ふうむ、とはいえ安藤殿も女性の端くれですし、少しはあるものかと思っておりますが」

「いや……この通りだぞよ」

そう言うと、なんと安藤さんは丹沢君の手を掴み、自分の胸に当てさせたのだ。

「!!!」

俺も夢郷君もびっくりしたが、一番びっくりしているのは間違いない丹沢君本人だろう。

「ほれ、この通り全く平べったいので……」

元々そういう概念については疎い人だと理解はしていたが、ここま

では思っていないかった。

「…!!」

胸から手を放すと同時に、丹沢君の鼻から鼻血が溢れてきた。

「ほえっ!? なぜに血を?」

慌てる安藤さんをよそに、こちらを呆れてみていた伊丹さんも、ようやく立ち上がってティッシュペーパーを手に取ろうと立ち上がった。

「ふわあ……某……一生の……果報者に……ござる……」

血がぼたぼたと垂れる中、丹沢君は確かにそう言った。

丹沢君にとつてのヒロインは安藤さんなんだな。

その光景を見た俺は、そう納得した。

一瞬、鼻血が勢いを増した。

直後、排水溝から水が流れるときの音のような、重く大きな音を立てながら、丹沢君は吐瀉物と赤黒い血を床に吐き出した。

「????」

俺たちの時間がぴたりと止まった中で、丹沢君だけが動いていた。

数リットルも一気に吐き出した彼は、一瞬だけ天井を見て、驚愕と恐怖が入り混じった表情でブルブルと震えた。

「おおおあああああ!!!」

断末魔に近い絶叫をあげながら、今度は正面のテーブルに血を吹き付けた。

元々出血していた鼻だけでなく、目からも、耳からも、心なしか全身の毛穴からも少しずつ血が噴き出ているように見えた。

「丹沢君!!!」

ここにきてようやく止まっていた俺たちの時間軸を取り戻させたのは、伊丹さんの叫びだった。

「あつあああああーっっ!!!」

伊丹さんが腕を掴もうとするのを振り払い、丹沢君は手足をばたつかせながら壁に激突した。

意図的に伊丹さんの接触を断とうとしているのではなく、単純に苦しみに悶えているように見えた。

「丹沢君!!!」

次に夢郷君が同じように叫び、彼に向っていった。

だが、彼と目が合った瞬間、電撃に打たれたように動きを止めた。充血し、今にも零れ落ちそうなほど飛び出た目玉と全身が血液にまみれたその様子が、夢郷君の生物的防衛本能に訴えかけ、その動きを止めさせたのであろうことは容易に察しがついた。

俺はその場から動かずして既にその状態に陥っていた。

完全に、そのものだった。

最初に事件の時の津川さん。

二度目の事件の時の御堂さん。

それぞれが、この世でこれ以上辛い死はないであろうと確信させるほどの壮絶な死にざまであった。

今の彼は、再びその死をこの場において体現する存在と化していた。

ゆえに生物的な本能はより一層強く働いたのである。

「死いぎひっひっひっいいいいあああつ、あゝあゝあがああゝあゝ
ゝゝゝっっ!!!」

声が空間を支配していた。

丹沢君はもがき苦しむ過程で、自らの手で制服の第一ボタンを引きちぎり、ちぎられたそれは俺の足元に落ちてコンと音を立てた。

意味もなく振り回した手足が壁や床に何度も当たり、恐らくどこかの骨が砕けた。

「保健室っ…!!薬…!!」

上ずった声を発しながら伊丹さんが廊下に消えた。

「うぎっひいいいいいいいい」

絶叫は、かすれたような声に変わった。

喉をかきむしり、皮膚が破けて鮮血があふれ出す。

いつの間にかすぐそばまで迫っていた安藤さんが、暴れまわる丹沢君の肩を押さえつけ、床に押し倒した。

「丹沢殿っ!!!」

「ひゅ、ひゅがっ、があっあああああ!!!」

ぶはっど吐き出した血が安藤さんの頬を真っ赤に彩った。

そんなことなど歯牙にもかける様子はなく、安藤さんは「丹沢殿っ!!」ともう一度呼び掛けた。

「丹沢……駿河っ!!! 死ぬな!!! 深呼吸を!!!」

「か、かか、かっは」

血を大量に失ったその顔は土気色に変色し、飛び出た眼球は真っ赤に染まって赤いビー玉のように変貌し、その様はもはや人と呼ぶことに躊躇を覚えるほどであった。

その時、伊丹さんが薬の瓶を大量に抱えて保健室から戻ってきた。

言葉もなく伊丹さんはそのうちの一つを開け、中の錠剤を丹沢君の口の中に入れた。

「駿河っ……駿河……!! 死んではいかんぞよ……!!!」

安藤さんが涙ながらに丹沢君の顔に自らの顔を近づけ、そう囁いた。

丹沢君は小さくせき込みながら錠剤を吐き出した。

安藤さんはそれを自分の口に含ませると、かみ砕き、丹沢君の口に移した。

治ってくれ。

いや、もうそんな願いに意味がないことなんて、みんな分かっていたはずだ。

丹沢君は涙なのか血なのか分からない液体を眼球から溢れさせながら、びくびくと痙攣していた。

何故そうなったのかも分からないまま、俺たちは現実に直面しなければならなくなった。

その数秒後、彼は動かなくなった。

ピンポンパンポーン、とチャイムが鳴る。

『死体が発見されました！ 一定の捜査時間の後、学級裁判を開きます！』

久しぶりに聞く声だった。

「駿河」

安藤さんは“死体”の頭を抱きかかえたままつぶやいた。

再び、俺たちの時間は止まった。

「うう」

安藤さんが小さくうめき声をあげるのが聞こえた。??

「ねえ!! 死体って……きやああああああああ!!!」

次に聞こえたのは、食堂に入ってきた亞桐さんの悲鳴!!

「うっ……ぶ」

すると、安藤さんは死体の上に、赤黒い血をぼたぼたと吐き出した。

「うっ、うぐっ、うげっええええええええええ」

喉の奥から絞り出すような声とともにゆっくり立ち上がる。

その目は大きく飛び出し、口からも鼻からも目からも血が流れ落ちるさまは、まるで。

絶望、きたる。

Chapter 3 非日常編① 捜査編

二度の殺し合いを経てもなお、目の前に死にゆく丹沢君の姿をただ見つめることしかできなかった。

…否、目の前だからこそだ。

今までの殺し合いでは、死体は“いつの間にか死んでいた”。

だが、今は違った。

ついさつき、俺の視界の中央で、リアルタイムで死は訪れたのだ。

その衝撃ゆえに、俺は自分の体を動かすことさえも本能に遮られることとなった。

五分に満たなかった。

丹沢君が興奮のあまり鼻血を出し、俺たちが心配と苦笑の混じった笑みで彼を眺めていたあの光景から、五分に満たない時間の間には地獄と化した。

死に際に彼が感じた世界は、まさしく地獄と呼ぶに些かの抵抗もなかっただろう。

いや、そのような考え事は今すべきではない。

今俺たちが直面しているのもう一つの地獄。

「ぐえええつ、つがああああああああ……つああああああ……」

眉間にしわを寄せ、涙と血をぼたぼたと零しながら安藤さんは呻いていた。

「安藤さん!!! これを!!!」

伊丹さんが、先ほど安藤さんが丹沢君に投与した錠剤を指で割り、口に含ませた。

「お願い……出血だけでも止まって……」

そこにきてようやく俺は自分の体が突き動かされるのを感じ、行動の自由を得た。

だが、いざ動けるようになると、今度は自分が何をすべきかが分からなくなってしまう。

「安藤さん……安藤さん……」

ただ名前を呼ぶなどこの場において何の意味ももたらさぬものであったが、混乱した頭で行えた行動はその一択であった。

「ぎっひやひやひやひやひやー!!!」

久方ぶりの“それ”が、開いた天井からすとんと床に落ちてきた。

天井はすぐに元通りにふさがる。

「前回の傷も癒えてこのとおり!! 元気な教頭センサーのお出ましたぜ!!」

バシツとポーズを決めるモノパンダ。

自分の健在ぶりをアピールするかのようになり、モノパンダはくるりと一回転して床に降り立った。

「あれれ? セツかく愛しの教頭先生がご復活したってのになんでそんなにお通夜ムードなんだよおく?」

「やめてくれ!!!」

次の瞬間、夢郷君の絶叫がモノパンダに襲い掛かった。

「こんなこと、こんなこと、コロシアイと呼べるのか!! 今すぐ彼を治すんだ!! 治せ!!!」

普段の彼からは想像もつかないほどの怒声に、しかしモノパンダは微動だにしない。

「なんだよ、まだオイラが理由もなくオメーラに危害を加えると思ってるのか? これはれっきとしたコロシアイだぞ!! この事態は、紛れもなく【オメーラの中の誰かが仕組んだ】事態なんだよーだ!!!」

モノパンダは腹を立てて身を乗り出しながら吠えた。

「あつ…あつ…:…:」

現実を直視できなくなったのか、亞桐さんは小さく声を上げながら力なく床に座り込んだ。

ぼうつと立っているだけの俺も大差ない。

「お願いお願いお願い…:…:っ!!! 快復してよっ…:…:!!!」

伊丹さんが安藤さんを抱きかかえ、涙をまき散らしながら絞り出すような声で呼びかけた。

「うう……ううう……う……う……」

安藤さんのうめき声は次第に弱くなり、一つの血交じりの咳を最後にガクリと頭を垂れた。

「あつ、安藤君!!」

夢郷君がすぐに駆け寄る。

「脈はある……けど、危篤状態よ」

伊丹さんが震える声で告げた。

絶望に打ちひしがれる中、アナウンスを聞いた他のメンツが続々と食堂に集まつてきた。

「な、んで……」

食堂に広がる地獄を見た山村さんが最初に発した言葉はそれだった。

「なんで……なんで……」

ふらふらとした足取りで倒れた丹沢君のもとへ歩み寄る。

血まみれの肉塊と化した丹沢君は何も答えない。

ただでさえ情緒不安定な山村さんにこの光景はきつすぎるんじゃないだろうか——などという心配が脳裏によぎるが、もう遅かった。

一瞬、彼女の周りを赤いオーラが覆った。

『なんでッ……なんで死んでんだよオオオオオオッ!!!!』

その怒号は、普段の山村さんが豹変した姿そのものだった。

懐かしい。

不意にそんな思いを抱いてしまった。

「……っ!?!」

すぐに山村さんは戸惑いの表情をみせながら自分の手をのぞき込んだ。

「あ、あれっ、私……」

皮肉なことに、丹沢君の死と安藤さんの危篤というショッキングな出来事が引き金となって、山村さんの人格は完全に元に戻ったようだった。

だが、「おかえりなさい」と言ってくれる人はいなかった。

そんなことを言っている余裕のある人間などいなかったのだから。

こんな時、俺はどうすればいいんだろう？
そんな問いを浮かべるが、答えは出ない。

リュウ君、御堂さん、釜利谷君——こういう時に冷静な対応でみんなを指揮してくれるであろう仲間も、もうみんな死んでしまった。残されたのは、自分がどうすべきなのかも分からないか弱い俺たちだけ。

「保健室……」

口を開いたのは小清水さんだった。

「みーちゃんを保健室に連れて行つて看病しましょう。きつと……ここに寝かせるよりは安全なはずよ」

実に的確な指摘だ。

「さ、ウジウジしてられないわよ。早く捜査しないと、私たちの命が危うくなる。誰か、現場の見張りを頼みたいのだけど」

みんなを引っ張るような役ではなかったはずの小清水さんが、茫然としている一同に対して声を上げた。

その声でハッと現実に引き戻されたのか、「で、ではわたくしが……と人間君が名乗り出る。

「じゃあ、私は安藤さんを保健室に……」

「僕も手伝おう。君だけでは不安だ」

伊丹さんと夢郷君は安藤さんを保健室へ。

それを機に、現場が慌ただしく動き出す。

同時に、長らく宙に浮かんでいた俺の意識がすーっと体内に戻ってくるのを感じた。

脱力した。

一歩間違えれば尿を失禁していたかもしれないほどに体から力が抜け、どさりとその場に尻もちをついた。

仰向けに倒れている丹沢君の姿が見える。

「(死んでいるのか……)」

それが未だに信じられない。

すつと起き上がって「ドツキリでした！」と笑いかける彼の姿があまりありと浮かぶ。

それが現実には絶対起こりえないことだと理解していながら。

《捜査開始》

意識していたわけでもないのに、俺は自然に電子生徒手帳を開いていた。

これまでの事件の“慣れ”がそうさせているのだろう。

なぜなら——ほら、あった。

【コトダマ入手：ザ・モノモノファイル③】

被害者は“超高校級のフィギュア製作者”、丹沢駿河。死亡時刻は午前7：25。

無機質な文字は、彼が本当に死体と化してしまったという事実を容赦なく突き付けてきた。

一時間前は、まさか自分がモノモノファイルに直面しているなんて夢にも思っていなかったのに…。

「ああつ、駿河っ……なんで……!!」

前木君が涙をこぼしながら丹沢君に抱き着こうとするのを、なんとか入間君が止めていた。

「落ち着いてください…。辛い気持ちは分かりますが、もう起きてしまったことは変えられないんです!!」

今の彼に正論なんて通じるのだろうか。

泣き崩れる彼に、入間君は何度も慰めの言葉をかけていた。

人数は減り、残った人たちも前木君のように精神的に追い詰められた人たちばかりだ。

俺がちやんとやらねば。

頑張ろう。謎を解こう。

俺がやらねば誰がやる。

そう思って俺がまず目にしたのは、食堂の机の上に置かれた薬瓶。伊丹さんが持ってきた薬だ。

瓶の蓋は空いており、中には口の近くまでびっしりと錠剤が入っている。

【コトダマ入手：解毒薬】

伊丹が持ち込み、丹沢と安藤に服用させた薬。瓶いっぱいの中身が入っているが、蓋は空いている。

そしてよく見ると、瓶にはラベルが貼ってある。

「効用：発作的な吐血、内出血　水：アルコールなどの有機溶媒に対し可溶性を持つ」

…と、薬剤の効用について書いてあった。

丹沢君に摂取しても効果がなかったのは、既に症状が手遅れな段階まで進んでいたからだろうか…。

せめて、安藤さんは…。

【コトダマ入手：解毒剤のラベル】

吐血を抑え、容体を安定させる効用があると書かれている。その他、水溶性、アルコールにも溶ける…など、化学的性質が書かれている。

「あつ、あの…。」

不意に声をかけてきたのは山村さんだ。

「こんな時にアレですけど…私、この前の事件で心が折れちゃって、皆さんにとんでもないご迷惑をおかけしたようで…。本当に申し訳ありませんでした!!」

そう言って山村さんは勢いよく頭を下げた。

予期せぬ言葉に俺は一瞬面くらったが。

「あ、いや、気にしないでよ…。今は…そんなこと気にしてる場合じゃないから…」

ズタボロの心では真つ当な返答すら返せなかった。

「…そう…ですか…。…あの、申し訳ついでに一つ気づいたのですが…このカップ、底に何かあるように見えるんです…。」

「……？」

山村さんが手にしていたのは、コーヒーカーップだった。

「これ、このテーブルに二つ置いてあったうちの一つなんですけど

……」

…と、いうことは。

丹沢君と伊丹さんが飲んだコーヒーのカップ、か。

俺はカップの底をのぞき込んだ。

コーヒーは完飲されているが、底に光るものがある。

“ぬめり”……？

気になるが、毒物が入っていたかもしれない以上不用意に触るわけにもいかない。

そして、もう一つのカップには何もなかった。

【コトダマ入手：ぬめり】

食堂のコーヒークップのうち、片方の底にはぬめりがあった。何の物質かは分からない。

厨房に入ってみると、亞桐さんがコーヒーマシンの蓋を開けて中を調べていた。

「あ、葛西。…今、このマシンの中に薬みたいのが落ちてないかなって調べて。でも、何もそれっぽいものはないんだよね」

「なるほど…。先に調べてくれてたんだね。ありがとう」

「うーん……丹沢がああなったのは、たぶん朝食後のコーヒーに何か入ってたからだとは思うんだけど…。それとも朝食に何か入ってて、時間差で効いてきたのかな…」

腕を組んで考え込む亞桐さん。

【コトダマ入手：コーヒー】

厨房で淹れられたコーヒー。伊丹が淹れ、伊丹と丹沢が飲用した。特に不審物は見受けられない。

「…にしても…うちは今回が一番許せないよ……」

突然、彼女の表情が張り詰めた。

「…犯人を……？」

「犯人も…あいつを助けられなかったウチも…全部だよ。何もあんな…みんなの目の前で、あんなに苦しんで死ぬような仕掛けにしくなっってよかったじゃんかよ！」

「……………」

俺は何も言えなかった。

こんな殺し方をしたのは、犯人にどういう意図があったからなのだろうか？

単純にこの殺し方が最も証拠が残りづらいからなのか……それとも、俺たちを苦しめるためにわざと……。

……そんなことを考える奴が俺たちの中にいるなんて……。

「……くそつ。怒ってたつてしようがないね。死んだ丹沢や今も毒と戦ってるみーちゃんのためにも、ウチらが犯人を暴いてやらなきゃ。葛西、何か聞きたいこととかある？ウチに答えられることならなんでも答えるよ！」

亞桐さんは強い目つきで問いかけてきた。

「えつと……。じゃあ一つ聞くね。昨日の夜から今朝にかけて、何してた？」

月並みだが、アリバイについて問うのが基本だろうと思いついてみた。

「えつと……昨夜はいつも通り部屋で休んでたから……証明できる人とかがいらないんだよね。こういうのを、“アリバイがない”って言うのかな……？ でもしようがないよね。あと、今朝は朝食を作ってたよ。彌生ちゃんと夢郷の野郎と、三人でね」

「うんうん……。」と答えながら俺は自分のメモ帳にその証言を記録する。

第二の事件の後、万が一に備えて手帳とペンを倉庫から拝借していたのだ。

……これを使うような事態にはなつてほしくなかったけど。

「朝食の時、コーヒー豆とかコーヒーマシンに手を触れた人はいた？」

「いや……忙しかったから二人の手元をじつと見たりはしてないんだけど、コーヒーマシンとコーヒー豆つて上の棚にしまつてあるじゃん？」

あれ取り出すには、脚立持ってきて上上の棚を開かないとダメなんだよ。だから二人がそれらを取り出そうとしてたら流石にウチも気付くはずなんだ。でも今朝はそういうことはなかったから、彌生ちゃんも夢郷もコーヒーマシンと豆には触れてないよ」

はきはきとした言い方から、恐らくその供述に虚偽は含まれていないだろうと推測できる。

……彼女が犯人でなければ、ね。

【コトダマ入手：朝食当番】

今朝の朝食の当番は小清水・亞桐・夢郷。コーヒー豆及びコーヒーマシンに触れたものはいなかったという。

引き続きコーヒーマシンの調査を続ける彼女をよそにシンクをのぞき込むと、朝食を完食した後の皿が大量に重ねてあった。

見渡す限り、怪しいものはない。

そのまま調理器具周辺も細かく調べたが、いたって普通のキッチン……という印象だった。

じゃあ犯人は、どこにどうやって毒物を仕込んだのだろうか……？

近くの棚には、コップやカップが逆さまにしてズラリと並べてあった。

丹沢君と伊丹さんが飲んだコーヒーのカップもここから取り出したようだ。

一つ一つ調べてみたが、特にこれといった発見はなかった。

カップの中に一枚のモノクマメダルが隠れていたが、今はこんなものに用はない。

【コトダマ入手：厨房のカップ】

厨房にはコップやコーヒーカップが逆さに並べて置いてある。特に仕掛けはない。

厨房を出て再び食堂に戻った俺に、すっかり元の人格を取り戻した山村さんが声をかけてきた。

「葛西君……。私、見張りをしながら考えたのですが、そもそも、この校舎に毒物などあるのでしょうか？」

「……」

俺は首をかしげる。

「だって……私たちは武器になるようなものはおろか、私物だってほとんど取られた状態でこのコロシアイ生活をさせられているんですよ

…？ 前回の御堂さんだつて、その場にある部品で即席のスタンガンを作るのが精いっぱいだったじゃないですか。そのような状態で、毒物を保管したり生成したりできる場所なんて……」

「……一つ、心当たりはあるよ」

……化学室。

二階が解放された当初、伊丹さんがそこにこもって毒物の効用を細かく調べていた。

つまりあそこには、それ相応の毒物が保管してあるということだ。

「……けど、化学室に行く前に一つ聞いておきたいことがあるんだ」

「…はい、なんでも答えます」

「ありがとう。昨夜から今朝にかけての君の行動を教えてください。俺みたいに部屋で休んでたとは思うけど……」

ダメもとで尋ねてみたが、山村さんは「あ、アリバイでしたら！」と声を張り上げた。

「私、このエリアが解放された日以来、毎晩小清水さんを部屋に呼んで一緒に過ごしていたんです！」

「えっ？ 本当に？」

思わぬ事実には俺は目を丸くした。

「はい……。お恥ずかしながら私、ずっとあんな調子でしたので……。ずっと夜は小清水さんにケアをしていただけなんです。おかげさまで元には戻れましたけど……まさかこんなことになるなんて……」

まさか、そんなに前からケアを始めていたなんて……

あの人はあの人なりに俺たちの結束を高めようと努力してくれていたんだ。

「……分かったよ、ありがとう」

後で会ったら、お礼を言わなきゃな。

そう思いながら、俺は化学室へ向かった。

【コトダマ入手：山村の証言】

小清水は第二の裁判の翌日から夜時間は毎晩山村の部屋で過ごし、精神的なケアを行っていたという。

化学室は相変わらず薬の匂いに満ちており、清潔だが無機質な印象

を受ける。

だが、ここには人を殺す兵器がいくつも眠っている。もっと早くこの場所の危険性に気付いておくべきだった。

前回の事件で使われなかったからと言って油断していたのかもしれない。

俺たちのミスだ。

そのミスで失われた命のためにも、全力で謎を暴こう。

薬品棚には、薬の入った瓶がズラリと並んでいる。

一見、文系の俺には全く理解できない……と、思いきや。

一つ一つの薬の瓶には手書きのラベルが張っており、効用や性質が一目でわかるようになっていいる。

これも、2階が解放された直後に薬品の組成を詳しく調べてくれた伊丹さんの努力のたまものだろう。

流石は薬剤師、本職だけあってとても細かく書いてある。

これなら、毒薬がどこにあるかなんて、一目で……。

……ほら、あつた。

俺の視界に飛び込んできたのは、一つだけ中身を消費したドクロマークの瓶。

“モノトキシンX”と書かれおり、中身は半分ほど減っている。

俺はじつとラベルを注視した。

『摂取すると、激しい吐血・嘔吐・痙攣を起こし、死亡する。致死量は二錠だが、衰弱しているものなら半錠でも死亡しうる。飲んだ直後に効果あり。水に可溶。有機溶媒には溶けない。』

…丹沢君や安藤さんの身に起きた症状とほぼ同じだ。

これは、もしかや……

【コトダマ入手：モノトキシンX

化学室の棚に置いてある薬品の一つ。蓋が開いており、中身は半分ほど減っている。

【コトダマ入手：伊丹の解析結果

モノトキシンXは猛毒であり、わずかな摂取でも大量に吐血し、命を失う。一般的な致死量は二錠で、体の弱いものなら半錠でも死に至

る。即効性で、飲んだ瞬間に効果がある。水溶性。

続けて俺は、瓶が一つだけポツンとなくなっている個所を発見した。

周りに置いてある薬を見ると、一通り蓋を空けた形跡があるが、中身は瓶いっぱい詰まっている。

誰かが体調不良でっただけ使っただろうか…？

効用を見ると、解熱剤や咳止め、痛み止めなど、いわゆる本来の意味での“薬”と呼べそうなものが並んでいた。

と、いうことは、伊丹さんが食堂に持ってきた解毒剤は、間違いなくここにあったものなのだろう。

〔コトダマ入手：解毒剤周辺〕

解毒剤があった場所の周辺には、医療薬の瓶が並んでいた。蓋を開けた形跡はあるが、中身はいっぱいに入っている。

これで化学室は一通り見ただろうか…？と思ひ、化学室を後にしようとした俺は…。

「……？」

奇妙なものを見つけた。

薬の瓶とは別に、棚に大きな箱が並んでいる。

“ウイルス作成キット インフルエンザ”

〔ウイルス作成キット…？〕

ウイルスって、そんなに簡単に作れるものなのか…？

甚だ疑問だが、あのモノパンダはこういうところでは意味のないウソはつかない性分だ。

しかし、ウイルスを作れるともなれば、それもまたモノトキシンXと同等の恐怖になるじゃないか。

〔コトダマ入手：ウイルス生成キット〕

様々なウイルスの元となる物質が乾燥状態で保管してある。これをもとに化学室の設備でウイルスを生成することができる模様。説明書も同封されており、生成には専門知識は必要ない。

「ん…?」

そして俺は、それらの箱の中でもひととき威容を放つものを見つけた。

その箱は、他の箱と比べても明らかに大きいだけではなく、表面に大きくモノクマのイラストがついている。

「ぎひやーひやひやひや!!」

「わわっ!!」

箱を見ることに集中していたこともあって、普通にビツクリしてしまった。

振り返ると、どこからか現れたモノパンダがゲラゲラと笑っていた。

「よく見つけたなー!! そいつはオイラ特製『モノウイルス』だぜく!!」

「モノウイルス”…?」

こいつらはモノトキシンXにとどまらず、そんなものまで作ったというのか。

「そいつは体内に流れ込むと、あっという間に胃腸まで到達して大感染!! 30分以内に感染者を死に至らしめる魔法のようなウイルスなのだぜー!!」

ビシツとポーズを決めながらモノウイルスの説明をするモノパンダ。

…これも、事件に関係あるんだろうか?

「このウイルスの症状は? どんな感じ?」

「えつとー、激しい吐血と嘔吐、出血かなー!」

「…モノトキシンXと一緒にやないか」

「しよ、しよーがないだろっ!! だってモノウイルスは、”体内でモノトキシンXを自動生成するウイルス”なんだからよ!! だけど、勝手にどんどん生成してくれるから、致死量自体はモノトキシンXを直接摂取するよりはるかに少なくって済むんだよなー!」

「…じゃあ、モノトキシンXの方が優れているって部分は?」

「効くまでの時間かなー! モノトキシンXは飲んだ瞬間に効き目が

あるしな！ あ、あと、モノウイルスは作るのが非常にメンドクセー
んだよな！ この生成キット、オイラと校長先生で知恵を絞って〃専門知識がなくても作れるようにはした〃 んだけどよ、何しろ〃丸一日つきつきりで化学室にこもってないと作れない〃 くらい生成すんのが難しい仕様になっちゃったんだぜ!!ムリゲー!!」

モノパンダは顔を真っ青にし、頭を抱えて叫ぶ。

「丸一日、つきつきりで…？ 一瞬たりともはなれちゃいけないの…？」

「そのとーり！ 10秒はなれるともう酸化しちゃって死滅…つていうクソ仕様だぞ！ うかうかトイレにも行けないんだよなーこれが！ まあ、いったん完成しまえば熱湯の中だろうが乾燥状態だろうが一日は持つけどな…。一日以上持たせたいなら、高温多湿の環境下で適切な細胞に寄生させれば」

「分かった、もういいよ」

このパンダにしては珍しくウンチクを長ったらしく語ってきそいな勢いだつたので、俺はめんどくさいとばかりに話をさえぎった。

【コトダマ入手：モノウイルス

強力な毒性を持つ感染性ウイルス。乾燥下・高温下でも一日は生存可能な高い耐性を持つ。

【コトダマ入手：モノウイルスについて

致死性の高い危険なウイルスで、摂取すると瞬時に体内に流れて患者を侵す。感染すると30分以内に死に至る。高温多湿の環境では長期にわたって生存する。

【コトダマ入手：ウイルスの製造

ウイルスは化学室の設備でも丸一日つきつきりで作業しないと作成できない。

「おい、教頭先生の講義は静粛に…」

「さて、化学室の用事はこれで済んだかな」

相変わらず講釈を垂れようとするモノパンダを無視して、俺は化学室を後にしようとする。

「へーんだ!! そういう態度とるなら、”シャーレがなくなってること”なんて教えてやらないよーだ!!」

「…シャーレ?」

「はっ!!!しまった!!」

口を押えて慌てているモノパンダの背後を見ると、ガラスの実験器具が並んでいる。

そして、ズラリと並んでいる器具の中で、一つだけポツンと穴が開いているのを発見する。

『実験用シャーレ』というラベルが張られたゾーンだ。

シャーレって……何に使う道具だったっけ……?」

「コトダマ入手…消えたシャーレ

化学室からガラスのシャーレがなくなっていた。

後ろで騒ぐモノパンダをおいて化学室を出た俺は、次に図書室に向かった。

図書室の扉を開けると、久方ぶりの埃の匂いとともに、一人の人物が俺を出迎えた。

「やあ…葛西君か」

夢郷君だ。

本を大量に抱えており、何か事件にかかわることを調べていたようだ。

彼は先ほど、伊丹さんとともに安藤さんを保健室へ運びに行ったはずだが…。

「夢郷君。安藤さんの様子はどうなの?」

俺はたまらず尋ねた。

「ああ…。僕と伊丹君で彼女を保健室に連れて行った後、彼女をベッドに寝かせた。解毒剤を飲ませたから容体は回復するかと思っただが、彼女は何度も吐血と嘔吐を繰り返し返していて、一向に良くなる気配を見せてくれなかったんだ…。伊丹君によると、初期症状は丹沢君より軽かったらしいが…。僕には、なすすべがなかった…」

夢郷君の表情には悔しさがにじみ、なんら有効打を打てない自分の無力を悔んでいるのが一目でわかった。

…俺も、同じ気持ちだ。

「コトダマ入手：安藤の病状」

安藤が倒れた際の初期症状は丹沢のものより軽かったが、症状は継続している。

「…で、夢郷君はどうして……?」

「安藤君の看病は自分に任せてほしいと伊丹君が言っただけ。だが僕は、僕より優秀な頭脳を持つ君の方こそ捜査に参加すべきだと言った。だが、医学の知識がある自分が看病した方がいいと言って、伊丹君は聞いてくれなかった。どうか自分のかわりに、真実を見つけてほしいと、僕に託してくれたんだ。…だから僕は、この部屋で丹沢君と安藤君を襲った病状について調べていたというわけだ」

夢郷君の口から語られた伊丹さんの想いは、その場に居合わせていなかった俺にもひしひしと伝わってきた。

この場所で行われる裁判は、ただの裁判ではない。

選択を間違えば俺達の命が失われる、まさに決死の勝負。

それも、行われるのはただの処刑ではない。

常軌を逸した地獄のような殺人劇が、つい先日まで共に暮らしてきた仲間たちの目の前で行われるのだ。

そのような状況下で、捜査という行為がいかに自分にとって命綱であるかは想像にたやすい。

だが、伊丹さんはその権利を自ら放棄した。

必死に毒と戦う安藤さんを、仲間の命を救うため、捜査という行為を俺たちに委ねたんだ。

…ごめんね、伊丹さん。

いつだって君は辛い役目を自ら引き受ける。

この事件が終わったら、娯楽室かどこかで一緒に遊びたいな。

君のためにも、俺たちは真実を見つけてみせるよ。

「…そっか。ありがとう、夢郷君。でも、せっかく調べてくれたところ悪いんだけど、化学室で見つけた毒物の中に思い当たるものがあった……」

そして俺は、五分ほどかけて先ほど見つけた“モノトキシンX”や

“モノウィルス”などについて詳細を伝えた。

夢郷君は顎に手を当ててじつと考え込んでいる。

「……そうか。そんな物質が……」

「丹沢君や安藤さんを襲った毒物がこの建物内で調達されたものだとしたら、恐らくは化学室にあるものだと考えて間違いないと思うんだ」

「……ふむ。僕もその線で考えてみよう。情報提供ありがとう。」

「いや、大したことじゃないよ」と返して俺は会話を続ける。

「……夢郷君、ついでと言ったらなんだけど、いくつか聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「ああ。構わないよ。なんでも聞いてくれ」

「昨日の夜の行動について聞きたいんだけど……。ちなみに俺は個室で寝ていたからアリバイの実証は不可能だね」

「……うん。僕も同様だ。いつものように自分の部屋で就寝していた……やっぱり、そうだよね。」

「……ただ俺は、ここで今までの人とは違う問いかけを投げかけてみた。」

「じゃあさ、昨晚じゃなくていいや。前回の事件が終わってから、アリバイが実証できる時間帯とか、なかった？」

「ほう……」と夢郷君は考え込む。

「日中なら大体誰かとともにいたような気もするが……。夜時間となると……。ああそうだ。数日前、夜時間の直前に君と休憩室で会ったことがあっただろう？」

その言葉を聞いた俺は、自分の記憶を探りにかかる。

“夜時間の前、俺はふと休憩室に足を運んだ。”

何故か、と言われるとはつきりした理由は分からない。

ただ、しばらく行ってなかったせいか、どことなく懐かしい感じがしたんだ。

「あ」

そこには先客がいた。

「やあ、葛西君か」

他ならぬ、夢郷君だ。

珍しいことに、彼しかいなかった。

思い浮かんだのは、あの夜のこと。

夢郷君に意味深な物言いをされた、あの夜だ。

「三階が解放された後、初日の夜…だね」

「そうだね。あの後、夜時間に差し掛かった後も僕は休憩室で考え事をしていただけだね。入間君が後からやってきて、二人で語り合っていたんだ。ちょうど、入間君が伊丹君と争った後の夜だったからね、相談なんかもされたよ」

「なるほど…。その時はどれくらい遅くまで話し合っていたの？」

「…ほぼ夜明けまでだったね。別れた後、シャワーを浴びてすぐに朝食に行った。そしてその後に、みんなでスイカ割り大会をした、という流れさ。僕も入間君も職業柄、寝ないことには慣れているからね」

夢郷君はすらすらとその時の行動を述べていった。

ぱつと聞いた感じでは、嘘であるようには思えない。

「ああ、そうだ！ その前の日中、つまり三階が解放された日だね。恐らく葛西君には会ってないと思うんだが、あの日の日中は小清水君と二人で植物園を見に行っていたんだ」

三階が解放された日…。

確かにあの日、俺は小清水さんと夢郷君の二人にだけ会っていない。

しかし…その二人が一緒に行動するなんて珍しいな。

「何を話していたの？」

「僕は新エリアを調べようとたまたま植物園に足を運んだんだが、そこに小清水君がいてね。彼女に話を聞いたところ、”この場所は春夏秋冬の季節を自由に再現でき、様々な生態系の再現ができる”とはしゃいでいたんだ。せつかくなので彼女と生態系や昆虫の群生などについて話を聞いたんだ。それもほとんど丸一日、日が暮れるまでね」

「…へえ。夢郷君って、そういう話も聞くんだね」

「僕が知りたいのは哲学だけじゃない。分野なんて関係なく、知見を

得ること自体が僕にとっての悦びなんだ」

なるほど。流石は超高校級の哲学者、知識を追い求める姿勢は本物のようだ。

…まあ、そんな思想を持っているからスケベな知識を追い求めたりするんだらうけど。

【コトダマ入手：夢郷の証言①】

一日目の夜、入間と休憩室で会話していた。夜更けまで二人でいたようだ。

【コトダマ入手：夢郷の証言②】

一日目の日中、小清水と二人で植物園にいた。夕食の直前までいた模様。

(なお、コトダマにおける○日目という表記は、“三階が解放された日”を“一日目”と数える。事件が起きた本日は“四日目”である。)

「…とにかく、これらの話については後で入間君や小清水君にも確認をとってみるといい。嘘でないことが立証されるはずだ」

「…うん。いろいろありがとう。捜査がまた一段階進んだよ」

彼の証言をメモした手帳を見ながら、俺は答えた。

「いや、捜査時間なのだから、情報の共有は大切なことだ。礼には及ばない。僕はこのまま化学室にある件の毒物を調べに行こうと思う。君はこの場所をもう少し探索してみるといい。では、健闘を祈る」

ありがとう、と俺が返すと、夢郷君は踵を返して図書室を去っていった。

ここまでの態度からして、彼が犯人には思えない、けど……。

一人になった俺は、図書室をざっと見まわした。

何の変哲もない、いつもの図書室だ。

「……………」

いや、違う。

隅の方に何かが落ちてている。

これは……。

「ガラス……………」

ガラスの破片が、飛び散るように落ちているのだ。

何か、ガラスのものを割った跡だろうか？

【コトダマ入手：ガラスの破片①】

図書室の隅の方にガラスの破片が落ちていた。

ガラスの破片について手帳にメモした俺は再び図書室の捜査を開始したが、それ以外には普段の図書室と変わった部分は見受けられなかった。

「うーん……」とうなり声をあげて図書室を後にしようとした俺だが、ドア近くの壁に変わった物を見つけた。

「これは……」

壁についているのは、温度計と湿度計だった。

古風で埃にまみれた図書室の中で、ほぼ唯一の近代的なデジタル機器に遭遇した俺は、目を凝らしてそれをのぞき込んでみた。

『気温 21℃ 湿度 32%』

どうやらこの教室は、常温で乾燥気味らしい。

それが分かったところで何の役に立つのかは分からないが、一応メモしておくことにした。

【コトダマ入手：図書室の環境】

図書室は20℃前後で乾燥していた。

次に俺は、植物園へと足を運んだ。

相変わらず、植物園は森のように木々が生い茂り、あらゆるところで虫たちが蠢いている。

様々な虫の鳴き声が織りなす協奏曲は、木の葉のこすれる音と相まって、事件で荒れ果てていた俺の心を清らかに洗い流してくれた。

小清水さんがあれだけ虫を好きになった理由が、ほんの少しだけわかったような気がする。

植物園の中央にある池の周りを歩いてみた。

辺りを見回すが、特に普段と変わったようなところもない。

というより、そもそもこれだけ広い場所を普段から隅々まで把握していないので、仮に普段と違う部分があっても気付けずにいた。

ここを歩いていると、つい数日前、真夜中にここで小清水さんと出

会った時のことを思い出す。

“ 「感情があるから土門君は彼女を救おうとした。 ……結果、二人とも死んだ」

「御堂さんも……」

「そうよ」と彼女は俺と視線を合わせた。

「だから私は思うの。人間にとって、感情は本当に必要な機能だったのかしらって。何も考えずに機械のように生きていけた方が幸せだったんじゃないかって……」

あの時小清水さんが発した言葉が胸に突き刺さる。

結局、俺たちは仲間の邪悪な感情の暴走を止められなかった。

二度もあんな地獄を経験してきたのに。

…俺は、虫けら以下なのかもしれない。

ネガティブになるべき時ではないのは重々承知ではあるが、それでも俺は無力な自分に自嘲の念を抱かずにはいられなかった。

そういえば、その時植物園にいたこともアリバイとして立証できるかもしれないな。

使う時が来るかは分からないが、もしもの時のために胸に秘めておこう。

【コトダマ入手：葛西の証言】

第二の裁判の後の夜時間、小清水と葛西は植物園を訪れた。

そんな時、少し遠くで飛んでいる蛾を眺めていた俺は、不意にその蛾の下の地面に何か光るものがあるのを見つけた。

「…?」

水ではなさそうだ。

近寄って見てみた俺は、目を丸くせずにはいられなかった。

「ガラス……??」

そう、それは、図書室の隅に散らばっていたそれと同じような、砕けたガラスの破片だったのだ。

それは図書室のものと同じく、小さい破片となってそこら中に散らばっている。

両方とも事件にかかわっているものなのか、それとも……

〔コトダマ入手：ガラスの破片②〕

粉々になったガラスの破片が、植物園の隅の方に落ちていた。

その後も探索を続けたが、普段と比べての植物園の変化は見つけられなかった。

しかし俺はここで、夢郷君が言っていた言葉を思い出した。

——— “ 僕は新エリアを調べようとたまたま植物園に足を運んだんだが、そこに小清水君がいてね。彼女に話を聞いたところ、” この場所は春夏秋冬の季節を自由に再現でき、様々な生態系の再現ができる” とはしゃいでいたんだ” “

“ 春夏秋冬を自由に再現” ……

そういうことができる機能がどこかに備わっているはず。

そう思っって壁際を見回してみると、それはすぐに見つかった。

まるで家庭のお風呂の温度や時間を設定する機械のような、壁に取り付けられた精密機械があった。

『現在気温 24℃』と書かれた横には『→』『←』のボタンがあり、どうやらこれで冷暖房を起動させ、気温を変えられるようだ。

『湿度』も同様に上下できるほか、『気候』と書いてある横には『晴天』『雨(弱)』『雨(強)』などのボタンがあり、試しに『雨(弱)』を押すと、天井から弱めの水のシャワーが注いできた。

なるほど、こうやって植物園の環境を調節することができるわけか。

確かに彼の言ったとおりだけど、これが謎ときにかかわってくるのだろうか……？

〔コトダマ入手：植物園の設備〕

植物園は用途に応じて自由に気温や気候を変えることができる。

電子生徒手帳の付属機能である時計を見ると、既に捜査を始めてから一時間以上が立っていることに気付いた。

モノパンダももうそろそろしびれを切らして捜査を打ち切るかも

しれない。

残された時間で、どこを調べるべきだろうか？

そう考えた俺は、直感的に食堂へ戻っていた。

「葛西…。お疲れさん」

真つ先に俺に声をかけてきたのは、入間君と見張りを交代したであろう前木君だった。

「…どう？　いろいろ分かったか？」

「どうだろうね…。かなりの情報は得られたけど、果たして全部が全部事件に関係しているのか、さっぱり自信がないんだよ…」

彼の問いには、そんな生返事しか返すことができなかった。

「そっか。でも、俺みたいない役立たずが捜査するよりはよほどマシだったんじゃないか？」

前木君は寂しい笑みを浮かべて自分を嘲った。

「役立たずだなんて言わないでよ。君も立派な仲間だよ？」

「そんなことねえよ…。俺は前の事件が終わってからずっと、記憶も人格も混乱して、わけわかんなくなってるんだ…。肝心な時に役立たずなんて、仲間失格だよ…」

またしても親友を失った前木君が傷心するのはもっともだが、彼の場合は傷心が自分を傷つける方向に進んでいってしまったのも、とても心配だ。

「…って…ごめん…。こんな時に俺の弱音なんて聞きたくないよな…」

「いや、言いたいときに言いたいことを言うのが一番だと思うよ。それに、君は本当に役立たずじゃないからね。君が生き残ったみんなを励ましてくれれば、俺たちはまだまだ絶望と戦えるよ！」

なけなしの言葉で俺は前木君を励ます。

「そうかな…。葛西、気を使わせて悪いな…」

「そんなこと言わないで。きつと、丹沢君も君に元気になってほしいと思ってるし…」

死者の想いはもう二度と届くことはないが、丹沢君も、きつと前木君の笑顔を願っていたはずだ。

「ああ。ありがたいな、葛西。俺、丹沢の分まで頑張るよ！」

久しぶりに、彼の強い表情を見られた気がする。

やはり君はこうじゃなくちゃね。

「そういえばなんだけど、葛西」

「？」

「お前、きつとみんなのアリバイ？的なやつを集めてるんだろ？俺もちよつとした話ならあるからさ……」

「本当？聞かせてもらっていい？」

「ああ。…本当に大したことじゃないんだが、ほら、昨日の朝、俺、やられたじゃん。あの後、伊丹が俺の部屋に来てくれて、いろいろケアしてくれてたんだ。夜時間も、ちよつとだけ来てくれたし」

「……そうだったのか。じゃあ、その時間はアリバイが成立するね」

山村さんは小清水さんが、前木君は伊丹さんが、みんなの目の届かないところで仲間を助けてくれていた。

やっぱりこの二人には頭が上がらないな。

【コトダマ入手：前木の証言】

伊丹は三日目の日中とその日の夜時間に前木の部屋を訪れ、精神的なケアを行っていたという。

「飯とかも持ってきてもらってたから……。本当に申し訳ないことさせちまったな……」

「気に病むことはないよ。後で俺と前木君で料理を作つてさ、彼女に食べさせてあげようよ!!」

俺の提案に、前木君はかすかだが笑みを浮かべた。

「…そうだな。俺たちの手料理であいつを喜ばせられたらいいな！」

…つつても俺、あんま料理作れないけどー」

「それは俺も同じだよ…」と俺は苦笑いする。

「丹精込めて握り飯でも作つてやるか。あいつ、デンプンアレルギーだから自分でおにぎり作れないしな」

「……え？ そうなの？」

初めて耳にした意外な情報に、俺は思わず食い気味に聞き返していた。

「ああ、そうなんだよ。アレルギーつつても軽度のモンだから食事とかは普通に摂れるんだけど、デンプン質のものに触ると手が真っ赤になっちゃうらしいんだ。まあ、実際に見たわけじゃないからどんぐらい赤くなるかは分からないけど……」

……そうだったのか。

何か、ピンとくるものがあつたようなないような……。

【コトダマ入手：伊丹のアレルギー】

伊丹は軽度のデンプンアレルギーだという。生活に支障をきたすほどではないが、デンプンに触れると手が赤くなってしまう。

「……やっぱり分かりませんっ!!」

「っ!?!?」

急に大きな声が響いたので、俺と前木君は飛び上がりそうになつてしまった。

声の主は、山村さんだった。

見ると、先ほど俺が「ぬめり」を見つけたコーヒーカップの中を一心不乱に見つめている。

「この濡れ光る物質が何なのか考えていたのですが、私の頭ではなんにも浮かびませんでした!」

胸を張つて言うことではないのだが、山村さんはきはきと告げた。

「なにこれ……? 粘液……みたいな感じか? でもこれ、コーヒーが入ってたんだよな……」

カップを覗き込んだ前木君がつぶやく。

「あ、触ると危険ですよ! 毒が入っていたコーヒーカップですから! ていうか毒物が揮発してるかもしれないので、顔を近づけるのも危ないです!」

本当は同じ空間に存在しているだけでも十分危険なのだが、現時点で他の人が倒れていないということは、揮発の危険性はないということとだろうか。

「うーん……触ればすぐに分かりそうなんだけどなあ……」

前木君が腕を組んで考え込む。

「でも、このカップに残っているということは、コーヒーには溶けない物質、ということですよ？ 何か心当たりはありますか？」

「……………」

化学に詳しくない俺には、そんな物質をぱつと答えることはできない。

前木君も同様だった。

後で伊丹さんにでも聞いてみるべきだろうか。

と、そう思った直後だった。

『ピンポンパンポーン』

「!!」

そのチャイムは、突然に鳴った。

そして“あの声”が再び聞こえてきたのも突然だった。

『ハイ、オマエラ、久しぶりですね！ 前回の故障から復活を遂げたモノクマ先生だよ！ まさに不死鳥ならぬ不死熊だね!!』

しわがれているような、だが心の奥底まで響き渡るどす黒い声。

モノクマの声だった。

“ここぞというときにしか現れないこいつは、まさしく“ラスボス”と呼ぶにふさわしい存在だ。

『今回は難しい謎解きだと思っから、捜査時間を長めに取ったよ！でも、だからと言って無限に待っているわけにはいかないのです！タイムイズマネーだからね！ 時間は命より重いっ……!』

“負けてたまるか……”

俺は、モニターの画面の中でふんぞり返るモノクマに、反抗のまなざしを向けた。

一瞬、少し向こうに倒れている丹沢君の遺体に目をやった。

地獄をさまよったその死に顔を見るたびに、目元に涙がにじむ。

何故彼が、こんな目に遭わなければならなかった。

『というわけでー、みんな、いつも通りエレベーターに集まってくださいー!』

俺も、前木君も、山村さんも、心を一つにしてモノクマに決意の表

情を向けていた。

そして、エレベーターに向けて歩を進めようとした、のだが……。『…けど、その前に、保健室に寄った方がいいかもしれないね！ うぶぶぶぶぶ』

「!?!」

その言葉が、何を意図して発せられたのかは俺には分からない。ただ俺は、本能的に何かを察知していた。

だからこそ、山村さんや前木君が引き止める間もなく、俺は保健室へ向けて走り出していったのだろう。

現実を見たくない。

そう思う自分もいた。

現実とは、すなわち絶望。

それが真理なんじゃないかと思いつつ始めていたからだ。

「あぁっ、葛西君!!」

保健室に入ると、小清水さんが膝をついて涙を流していた。

「なんとかしてっ!!! なんとかしてよおっ!!!」

小清水さんは錯乱しており、そう叫びながら俺にしがみつこうとしてきた。

「みーちゃんが…!!! 私にはどうすることもできないの!!!」

彼女がそうなっている原因は、保健室の白いカーテンの向こう……大きな白いベッドにいた。

そこに寝ている安藤さんは、目を薄く開けたまま、ヒュー、ヒューと、蚊の鳴くような小さい音を出して微かに呼吸していた。

周りのシャツが血に染まっており、彼女が毒と壮絶な戦いを繰り広げたことはすぐに読み取れた。

「なんで……どうして……」

上ずった声でつぶやいたのは、ベッドの横に立つ伊丹さんだった。「なんで……治らないの……それどころか……」

震える声の彼女に、俺がかけられる言葉はなかった。

「安藤さん!! しっかりして!!! 俺が分かる!?!」

その代わり、無我夢中で安藤さんに呼びかけていた。

安藤さんは、わずかに口元を動かしたが、声は出ていなかった。
なんでだよ？

ただ必死に友達を助けようとしただけのこの子が。

安藤さんの目元から涙が垂れ落ちた。

そして、ヒュー……と息の音が止まった。

「!!」

直後、伊丹さんが俺を突き飛ばすようにして、安藤さんの口に自分の口を付け、人工呼吸を行った。

何度か行くと、今度は口を離して心臓マッサージ。

「はっ、はっ、はっ……」

伊丹さんの荒い息遣いだけが響く。

「はあ……」

何度か試みて、伊丹さんは息を吐きながら動きを止めた。

そして、少し息を整えた後。

「ダメ、みたいね」

絶望することにすら疲れたのか、その言葉は妙に無感情だった。



生きることは、絶望。

大いなる理不尽との戦い。

生きることは、正解なのか？

何もなく、何も感じないことの方が幸せなのではないだろうか？

『あー、お取込み中ですが、至急エレベーターに集まってください！
あと一分で集まらないとオシオキしちゃうぞ!!』

それが黒幕の狙いだとわかっているとしても、その闇に身をゆだねたくない。
る。

全てを無に帰して、楽になりたくなる。

何が正解なのかなど、俺に分かるはずもない。

「だけど、生きるよ」

エレベーターに向かって駆けながら、俺は呟いた。

「俺は生きて、戦うよ」

今はまだ、それが正解でいい。

どれほどの出来事があれば、今までの出来事を希望の物語に塗り替えられるのか、全く見当もつかないけれど。

がむしやらに、生きる。

それ以外は考えないようにしよう。

二人とも、俺に力を貸してくれ。

ただ、希望のために。

【コトダマ入手：モノモノファイル③―2

被害者は超高校級の漫画家・安藤未賤。毒物を摂取した形跡あり。

【コトダマ入手：安藤の容体

解毒剤を投与したにもかかわらず、安藤の容体は回復しなかった。



《モノパンダ劇場?》

モノクマ『お通夜ムードすぎて流石の僕もコメントに困りますねえ!』

モノパンダ「うわー!! 校長センサーがオイラの企画に突撃してきた!!」

ク『凸じゃないよ! 教頭がちゃんと仕事してるか刺殺しに来たんだよ!!』

パ「誤字ってるぜセンサー!! 刺殺しちゃダメ!! “視察”、な!」
ク『(シカト) それでは今回のヒントに移るよ!』

パ「……。今回の事件はコトダマが多すぎて全然解けないっす……
東大入試みたいっす……」

ク『そりゃあね! 今回は一番多くコトダマを用意したからね!』

“ダメーも含めて” 28個あるよ!”

パ「どっひゃー!!」

ク『それに、前回と同じく、“いろいろな事象が同時に起きて”ごっちゃになってるから、事象ごとに分けて考えるといいかもね!』

パ「作者がワンパターンな事件しか思いつかないのはしょうがないとして、今回のクロを当てるのには何を考えればいいですか?」

ク『そういう時はクマった時のヤマカンだよ!! 世の中にはセンター試験でヤマカンを張って一流大学に受かる猛者もいるんだからさ!』

パ「うわー、そんな奴に学歴で差をつけられるとかゼツボー的!」

ク『うぶぶ、世の中運も実力のうちだよ! さて本題だけど、クロを当てるには、“どうやったらあの殺し方を実現できるか”、つまり“クロが取りうる行動”を考えるといいかもね!』

パ「なるほどー! ぜーんぜん分からねえ!」

ク『今時のコはすぐそうやってあきらめる! 校長先生は悲しいよ!』

パ「うーん、でも今回は割と難しめだからクロが分かんなくてもあんま悔しくねえかも!」

ク『そんなこと言うなよ! 謎解きはどんどん募集してるよ!』

あ、でも、コメント欄とか、多くの人が見られる場に推理を載せちゃダメだよ!』

パ「お、そろそろ作者がここ書くの飽きてきてるし、教育番組風に締めましょーぜ!」

ク『うぶぶ、今回も頑張って絶望にたどり着いてね! それじゃ、また来週〜! (注:一週間後に次話投稿するわけではありません)』

ク・パ「『バイナラ〜!』」



「……………」

エレベーターの中は、静寂が支配していた。みんなは何を思つて、たたずんでいたのだろう。

俺の心も、空っぽになりそうだった。

それでも俺が正気を保つていられたのは、隣に立つ小清水さんが、俺の手をしっかりと握つていてくれたからなんだと思う。

彼女の表情は見ないようにした。

エレベーターの扉が開く。

赤い横断幕に彩られた裁判場が俺たちを出迎える。

再びここに来ることになってしまうとは。

数時間前までの朝食の風景が嘘のようだ。

『おはっクマ〜!!』

そして、一番奥の席で元気に挨拶を飛ばしてくる“モノクマ”。

裁判の時だけに現れる、この悲劇の黒幕。

「校長センサー、その挨拶どっかで聞いたことあるぞ!」

その横には、いつも通りモノパンダが腰かける。

俺を含めみんなは、何も言われずして自分の弁論台についた。

全員、無言だった。

『うぶぶぶぶぶぶぶ! どうしちゃったの、季節外れの五月病かな?』

「ぎひゃひゃひゃひゃ! 思春期の子供は笹の葉と同じくらい繊細に扱わなきゃダメですぜ、センサー!」

「……………」

軽快な言葉で俺たちを煽る二体のヌイグルミの言葉にも、誰も答えようとはしない。

それが彼らなりの反抗なのか、それとも単に言い返す気力すら残っていないだけなのか。

……………どちらかといえば、俺は後者だった。

新たに追加された二人分の遺影が、もの悲しくこちらを見つめていた。

仇を、とれるのだろうか。
分らない、でもやるしかない。

共に生き、共に暮らし、共に脱出を誓った仲間たち。
そんな仲間たちと騙しあい、疑いあい、追い詰めあう悪魔の舞台。
学究裁判の幕は、再び切つて落とされたのだった。

【学級裁判・開廷！】

「……さあ、議論を始めないと。いつまでもだんまりしてるわけにも
いかないし……」

小清水さんがようやく口を開くと、場の空気もわずかに変化し始める。

「うむ、その通りだ。まずは分かることから地道に話し合っていこう」
夢郷君のつぶやきに何人かが頷く。

「まず、お亡くなりになられたのは……」超高校級のフィギュア製作者
「丹沢駿河さんと、超高校級の漫画家」、安藤未賤様のお二人です
ね。おふた方とも、突然吐血や出血の症状を発してお亡くなりになりました」

入間君がそう告げた直後だった。

「死因なんて決まってるよ！」

亞桐さんが大きな声を張った。

【議論開始】

亞桐莉緒：「丹沢は実は病気にかかってたんだ！」

亞桐莉緒：「それを知らずにみーちゃんが口移しをしたから……」

亞桐莉緒：「感染したんだよ!!」

入間ジョーンズ：「病気を隠していた、というのですか……？」

夢郷郷夢：「毒物を盛られた、と考える方が自然じゃないか？」

小清水彌生：「うーん……」

小清水彌生：「寄生虫を手なずけて、こつそり忍ばせたとか？」

前木常夏：「小清水にしかできなさそうだけどな、それ……」

亞桐莉緒：「あーもう!! 全然まとまんねーじゃんかよ!!」

「夢郷君に同意するよ」

【使用コトダマ：モノトキシンX

化学室の棚に置いてある薬品の一つ。蓋が開いており、中身は三分の一ほど減っている。

俺が言い放つと、騒然としていた裁判場は一転して静寂に包まれる。

「とりあえず安藤さんのことは後にして、丹沢君の死の状況について考えてみようと思うんだ。そうした場合、俺は毒物が殺害に使用された可能性がまず浮上すると思ったんだ。なぜなら……」

「化学室の“モノトキシンX”……」

それまで黙っていた伊丹さんが口を開いた。

「そう。化学室に置いてあった“モノトキシンX”という名の錠剤が減っていた。俺はそれが怪しいと睨んでいる」

「いかにも怪しそうな名前ですが、それって本当に猛毒なのですか？

おなかを壊す程度とかでは？」

山村さんが素朴な疑問を投げかけてくるが、“あの人”の情報でそれもマーク済みだ。

「そんなことないよね、伊丹さん？」

【提示コトダマ：伊丹の解析結果

モノトキシンXは猛毒であり、わずかな摂取でも大量に吐血し、命を失う。一般的な致死量は二錠で、体の弱いものなら半錠でも死に至る。

即効性で、飲んだ瞬間に効果がある。水溶性。

「……あれは間違いなく猛毒よ。二錠飲めば健全な人でも完全に息の根を止められるくらいにはね」

俺の問いかけに応じて伊丹さんが答えた。

「しかも、症状は“吐血と全身からの出血”。丹沢君が発したそれと同様ね」

「なるほど！ 薬剤師の伊丹さんが言うなら間違いはないのでしよう

！しかしそんな危険なものが化学室にあったなんて……」

山村さんは納得したようにうなずいた。

彼女の言うとおり、薬剤師の伊丹さんの解析結果なら信頼できるだろう。

……伊丹さんが犯人じゃない限りは。

「で、その毒を盛ったとして、その方法はどうかだよ？　まさか飲んでくださいって言って錠剤渡すわけにもいかねーだろ？」

前木君の問いかけはもつともだ。

「じゃあ次は、毒の飲ませ方について考えてみようか」

【議論開始】

伊丹ゆきみ：「モノトキシンXは水に溶けるから……」

伊丹ゆきみ：「丹沢君が飲んだコーヒーに溶けていた可能性があるわね」

入間ジョーンズ：「なるほど…溶けていては気付くこともできませんね…」

山村巴：「だからあれほど午〇の紅茶にしとけて言ったんだチクシヨオオオオ!!!」

前木常夏：「泣きながらキレるのやめて!!」

小清水彌生：「じゃあ犯人は、コーヒー豆かコーヒーマシンに…」

小清水彌生：「錠剤を紛れ込ませていたというわけね！」

「残念ながら小清水さん、それは違うよ」

【使用コトダマ：朝食当番】

今朝の朝食の当番は小清水・亞桐・夢郷。コーヒー豆及びコーヒーマシンに触れたものはいなかったという。

「コーヒー豆やコーヒーマシンに対して怪しい行動をした人はいなかったはずだ。そうだよね、亞桐さん？」

俺が目くばせすると、亞桐さんは「うん」と答えた。

「てか、彌生ちゃんも朝食当番だったし知ってるでしょ？　コーヒーマシンもコーヒー豆も高い棚の上にあるから、誰かがいじってたら絶対気付くはずなんだって！」

「あ、そういえばそうね」とあっさり小清水さんは認めた。

「じゃあ、少なくとも今日の朝食の時間にはコーヒーそのものに毒を仕込んだ人はいないってことね！」

そういうことになる。

「だけど、それじゃあ……」

「ん？ ちょっと待てよ。じゃあどうやって犯人は丹沢に毒を飲ませたんだよ？ コーヒーそのものに毒を仕込んでいないなら、コーヒーに毒を溶かすことなんてできないんじゃないのか？」

前木君の言葉に一同は黙り込む。

確かに、コーヒー自体に細工をしなければ毒を摂取させるのは不可能だ。

…一見、ね。

「そうだ！ 分かりましたよ、からくりが！」

急に声を上げたのは人間君だった。

「犯人はコーヒーではなく、朝食に毒を混ぜたんです！ そうすれば、コーヒーに手を加えることなㄎ」

「それはないわね」

「そんなあつさり!？」

…ちよつと容赦ないけど、伊丹さんが速攻で却下してしまうのもうなずける。

「先ほどの伊丹さんの解析結果をもう一度見直してみてほしいんだ」

【提示コトダマ：伊丹の解析結果】

モノトキシンXは猛毒であり、わずかな摂取でも大量に吐血し、命を失う。一般的な致死量は二錠で、体の弱いものなら半錠でも死に至る。

即効性で、飲んだ瞬間に効果がある。水溶性。

「モノトキシンXは、〃即効性で、飲んだ瞬間に効果がある〃薬なの。だから、もし朝食にモノトキシンXを含ませたなら、のんびりとコーヒーを飲む時間なんてなかったはずだわ」

「ははあ……なるほど、確かにそうですね……失礼しました……」

「人間、ドンマイ……」

ちよつと憔悴気味な人間君に思わず同情の視線を送る。

しかし、ここで思わぬ言葉が突き刺さる。

「入間君、君の議論は無駄ではなかったよ。おかげで犯人らしき人物が分かった」

夢郷君だ。

「夢郷君!?! …分かったの?」

「確信ではないが…：犯行が可能でありそんな人物は分かった」

彼は極めて冷静な口調でそう述べた。

「そうか!! 分かりましたよ!!」

突然大声を上げたのは山村さんだった。

「“事前に” コーヒーに手を加えなくても、コーヒーに細工をできる人物…：一人だけいましたよね、葛西君」

【人物指名】

「…伊丹さんなら、できると言いたいのかい?」

「…!!!」

伊丹さんの表情が、電撃が走ったかのように硬直した。

「状況を思い出してみたまえ。朝食の後、コーヒーを淹れたのは誰だった?」

コーヒーに関する情報…：といえばあれか。

【提示コトダマ…：コーヒー】

厨房で淹れられたコーヒー。伊丹が淹れ、伊丹と丹沢が飲用した。特に不審物は見受けられない。

「淹れたのは伊丹さん…：だったね」

「そうだ。先ほどの議論からわかるように、“朝食の時間に” コー

ヒーに細工はされていなかった。だが、事前に細工などしなくても、そもそもコーヒーを淹れるときに錠剤と一緒に入れてしまえばいいじゃないか。それだけでトリックは成立する」

「残念ですが……私もおおむね夢郷君の意見に同意します。だってそれしかありえなくないですか……?」

「なんか、そういわれてみればすごく筋が通ってる気がしてくるんだけど……」

夢郷君と山村さんと亞桐さんは口をそろえて伊丹さんが犯人だと言いだした。

「…伊丹さん、反論しないの?」

俺は思わず伊丹さんの方を向くが、彼女は動揺しながらも、うつむいたままだった。

「…今の状況じゃ、何を言っても言い訳になっちゃうわ。…葛西君、私はあなたを信じてる」

その言葉は、まるで「助けてくれ」と俺に呼びかけているようだった。

「…夢郷君にしては、ずいぶんと短絡的な考えですね? わたくしには、どうも伊丹様ほどの人物がそんなに単純な犯行を行うとは思えないのですが…」

入間君は伊丹さんが犯人だとは思っていないようだ。

「うーん……私はどっちとも言えないかなあ……。情報が少なすぎるし、今判断するのは時期尚早だと思うけど」

小清水さんは中立……?という解釈でいいのだろうか。

「お、俺は伊丹の味方だぞ! 俺を助けてくれた伊丹が、こんなことするはずがねえ!!」

前木君……ありがとう。

でも俺は、感情に頼らなくても、伊丹さんが犯人じゃないことを確信している。

真つ二つに割れた議論を、俺の手で新しいステージへ、真実の脚本へと導いてみせる!!

【議論スクラム開始】

Q. 伊丹ゆきみは犯人なのか？

亞桐莉緒・夢郷郷夢・山村巴VS葛西幸彦・前木常夏・入間ジョーンズ

亞桐莉緒：「薬物に詳しいゆきみんなら毒物を使うのは簡単だよ!!」

入間ジョーンズ：「彼女の解析結果は信ずるに値する情報です！

彼女が犯人なら真実を言うのはむしろ不利です！」

山村巴：「コーヒーを淹れたのは他ならぬ伊丹さんなんですよ！」

前木常夏：「明らかに自分が疑われるような方法で伊丹が犯行を行

うわけがねえだろ!!」

夢郷郷夢：「伊丹君ではない人間が犯行を行った形跡があるとでも言うのかい？」

葛西幸彦：「あるんだよ。コーヒーカップに残された“アレ”が」

【使用コトダマ：ぬめり

丹沢が飲用したコーヒーカップの底にはぬめりがあった。

「……ぬめり……？ そんなものがカップの底にあったというのかい？」

実際にカップを見ていないであろう夢郷君が不思議そうな顔をす

る。「ああ、そういえばそんなものもありましたね！ ですが、それが一体何だというのですか!？」

相変わらず強気な口調で身構える山村さんだが、俺は慌てずに返すことにする。

「考えてみてよ。何も細工をせず、ただコーヒーを飲んだだけのカップに、ぬめりなんて生じると思う？」

そう。

この“ぬめり”こそが、この事件の大きなカギを握っているはずだ。

ぬめりの正体を突き止めるために、まずはカップについて考えられることを述べていこう。

「犯人はきつと……。コーヒーそのものではなく、“丹沢君が用いたそのカップにだけ”細工を施し、毒を仕掛けたのだと思う」

伊丹さんの言葉に、俺は強くうなずいた。

「俺もその線が正しいと思う。じゃあ、犯人がコーヒーカップに何をしたのかを話し合ってみようよ」

全員が頷いた。

一度は真つ二つに割れた裁判場も、何とかある程度はまとまること
ができた……。のだろうか？

【議論開始】

小清水彌生：「でも、コーヒーカップにモノトキシンXを仕込んでおくなんて……」

小清水彌生：「そんなことが可能なかしら？」

前木常夏：「うーん……コーヒーカップなんて普段よく観察しないしなあ……」

亞桐莉緒：「そっか！分かった！単純な話だよ！」

夢郷郷夢：「君の推理なら話半分聞いておいた方がいいね（にっこり）」

亞桐莉緒：「うるせえぶん殴るぞ!!」

亞桐莉緒：「えっと、犯人は単に、棚に置いてあるカップの中に……」

亞桐莉緒：「モノトキシンXを入れて置いておいただけなんだよ！」

入間ジョーンズ：「そうか！モノトキシンXは白くて小さい錠剤ですから……」

入間ジョーンズ：「カップに入れっぱなしにしておけば……」

前木常夏：「伊丹が気づかずにコーヒーを淹れちまう、ってわけか！」

「入間君、それは違うよ」

【使用コトダマ：厨房のカップ

厨房にはコップやコーヒーカップが逆さに並べて置いてある。特に仕掛けはない。

入間君がぎよつとした表情でこちらを見た。

「モノトキシンXの錠剤をカップの中に入れておけば……」
「はできないんだ。なぜなら、コーヒーカップは全て『逆さまにして』置いてあったからさ」

「うむ、僕もカップが逆さまに並べられているのは以前見たことがある。これでは、カップの中に錠剤を仕込んでも、カップを持ち上げた瞬間にその場に残って気付かれてしまう」

夢郷君の同意を得ると、場は一気に静まり返ってしまった。

「そ、それは不注意でした…。はて、ではどうやって、犯人はモノトキシンXを…?」

……どうだろう。

あのぬめりが、何か意味を持っているのは間違いないんだけど。

「あつ、分かったかも」

前木君の一言に、みんなが視線を彼に向けた。

「そうだ。犯人は逆さまの状態でもなお、モノトキシンXの錠剤をカップの中に仕込んでいたんだよ！」

「はあ!? さっきの議論結果と違うじゃねーかオラアア!!!!」

山村さんがキレだすのは、混乱しているいい証拠だ。

「あー、説明しないとそう聞こえるかもしれないけどさ…。よく考えてみな。犯人はモノトキシンXをカップの【底に固定】したんだよ！その名残が、あの“ぬめり”ってわけだ！なあ、もう分かるだろう？」

彼の言いたいことは……何なのだろう。

その答えは、恐らくここまで得た情報の中にはない。

答えを導く方法は、“閃き”だ。

閃け。

カップの底に“固定する”……。

“貼り付ける”……。

“濡れるとぬめりに変わる”……。

「……」オブラート、とか……？」

俺の答えに、前木君が強くうなずいた。

「そういうこと！ 実は俺、この前倉庫にオブラートが置いてあるのを見つけてさ。ここに用意されてるってことは、犯人が使ってもおかしくないよな？」

「待ってください！ オブラートなんかをどう使うというのですか！？」

山村さんが問いかける。

「えっと、俺の想像の範囲内だけど、使い方はこうだ。まず、オブラートの各辺に当たる部分を濡らして少し溶かし、錠剤をカップの底に置いた状態で、覆いかぶせるようにしてくっつけちゃうんだ。この状態でオブラートの接着面が乾くと、カップを逆さにしても錠剤は落ちてこないよね」

要は、オブラートを接着剤兼被せ蓋のように使って固定したというわけだ。

「なるほど……それなら確かに逆さの状態でも錠剤を固定することができますね……」

山村さんが納得した様子で頷く。

「そう。元々の錠剤が小さいから、オブラートもそれに合わせて小さくカットして使えば、カップの中を注視しない限り見つけることはできない。だから、伊丹さんが気づかずにコーヒーを淹れてしまうというわけなんだ」

俺の立てた仮説に今のところ綻びはない……はずだ。

「……そして、もう一つ。このトリックを仕込んだのは伊丹さんではないという確証があるんだ」

俺が告げると、伊丹さん以外の全員が怪訝そうな顔をする。

「知っている人は知っている。彼女だけが持っている、ある身体的特徴に目を向ければすぐにわかるよ」

そう、彼女が「オブラート」を用いるはずがない。

何故なら……

【提示コトダマ：伊丹のアレルギー】

伊丹は軽度のデンプンアレルギーだという。生活に支障をきたすほどではないが、デンプンに触れると手が赤くなってしまう。

「伊丹さんはデンプンアレルギーだから。デンプン質のものを触ると手が赤くなつちやうんでしょう?」

「知っていたのね……」

伊丹さんはため息をつく。

もし彼女が今朝オブラートに触れていたなら、朝食中もその後も、そして今も、手がずっと真っ赤に腫れているはずだ。

だけど、彼女の手はいつも通り透き通った白色。

ということは、彼女はオブラートには触れていないという事実が導かれる。

「俺が葛西に教えたんだ。勝手に言つてごめん……」

前木君が謝ると、彼女は笑顔を浮かべて「気にしないで」と慰める。

「謎を解くために必要なことですもの。これで私の疑いが晴れるなら、安いものよ」

「…とにかく、これで伊丹さんが、少なくともこのトリックを実行した人じゃないってことは分かったよね?」

先ほどの議論で伊丹さんを疑っていたみんなに向かって言うと、反論は出てこなかった。

よかった。この調子で議論を進めていこう。

「……結局、犯人は事前にカップの中に細工をしてたつてことになるよな……。じゃあ、誰がいつそんなことをしてたんだろうな……」

前木君の問いかけはもつともだが、現時点ではその問いに明確な答えを導くことはできない。

「夜時間は食堂及び厨房に立ち入ることはできませんから、それ以外の時間に用意をするしかないと思われませんが……。短時間で用意できる程度のトリックですから、誰にでも可能な気がしますねえ……」

「…人間君の言うとおりだね。ちよつと現時点では犯人の特定は難しいと思う」

俺がそう言うと、またもや場はだんまりとしてしまった。

「ほらほら、反抗期真っ盛りの中学生みたいに黙り込むなよ！ ドンドン話してくれなきゃ校長センサーが退屈しちゃうだろ？」

モノパンダがそう言うが、モノクマはとつくの昔に鼻提灯を出して眠りこけている。

「じゃあさ、一旦別の話題に移ってみようよ！ ほら、まだまだ別の謎とか、あるでしょ？」

亞桐さんが言うと、黙っていた伊丹さんが「そうね」と口を開いた。

「ここまでの情報を整理しつつ、間違っているところがあつたら指摘してちょうだい」

その言葉で、議論は再び動き始める。

【議論開始】

夢郷郷夢：「……死亡したのは、丹沢君と安藤君」

小清水彌生：「死亡時刻は、丹沢君が7：25、朝食の直後で……」

小清水彌生：「みーちゃんは裁判の直前だったわね」

入間ジョーンズ：「凶器は、オブライトによってカップに仕込まれた……」

入間ジョーンズ：「モノトキシンXで間違いないでしょうね」

前木常夏：「……………」

前木常夏：「この中に間違いなんてあんのかよ〜!？」

「!!」 そうだ!!」 入間君!! それは違うんだ!!」

【使用コトダマ：モノウイルス

強力な毒性を持つ感染性ウイルス。乾燥下・高温下でも12時間以上生存可能な高い耐性を持つ。

なぜ、これに早く気付かなかったのだろう。

この学園に用意されていた毒物は、一つだけじゃなかった。

「伊丹さん……。あれだけの短時間で人間を死に至らしめる毒物が、化学室にもう一つあったよね」

伊丹さんに視線を合わせると、彼女は語り始めた。

「“モノウイルス”……。人間の体内でモノトキシンXを生成し続ける、凶悪なウイルス。既知のどのウイルスとも異なる全く新しい病原

体」

「ええっ!? 毒薬だけでもヤバいのには、ウイルスなんてあつたのかよ!?」

亞桐さんが目を丸くして叫んだ。

「これを知っているのは、よほどよく化学室を調べた人だけなんだろうね…。このウイルスも犯行の手がかりとして候補に入れた方がいいと俺は思うんだ」

俺が言うと同時に、「ちよつと待つてくださいー!」と声を上げたのは山村さんだった。

「いきなりウイルスなんて言われても、にわかには信じられませんよ! 第一、そのウイルスはどのような状態で保管されていたんですか!?!」

ウイルスがどのような状態で化学室に置かれていたか…。

それを示すコトダマは、あれがちようどいいだろう。

【提示コトダマ：ウイルス生成キット

様々なウイルスの元となる物質が乾燥状態で保管してある。これをもとに化学室の設備でウイルスを生成することができる模様。説明書も同封されており、生成には専門知識は必要ない。

「これも信じがたい話だけど…。『ウイルスを作成するキット』の状態で置かれていたんだ」

「なにそれ……。私も生物学者の端くれだけど、ウイルスが作れるなんて話、聞いたことないわ」

小清水さんが怪訝そうな顔をするのも当然だ。

「でもまあ、モノパンダやモノクマどもには俺たちの常識なんて通用しないってのはここまでの事件で分かってるからな……」

前木君がそう言って台座に鎮座する二体を睨みつける。

突然鋼鉄の槍を降らせたり、シヨベルカーやバッテリーングマシーンをどこからともなく出現させたりと、奴らのやることは物理法則すら超えているように思える。

そんなあいつらなら、ウイルスをその場で作らせるように加工するなんて大したことでもないのかもしれない。

「ふうむ、その生成キットなら、生物の知識がなくともウイルスを作れるわけですか。厄介ですねえ……」

入間君が腕を組んで考え込む。

「分かったぞオラアア!! 犯人は“モノトキシンX”だと思わせて、実はウイルスの方をオブラートに貼りつけやがったんだああ!!!」

…分かったなら、なんでキレてるの？ 山村さん……
「それはどうかしらね？」

【小清水彌生の反論】

「!?」

不意に横槍を入れてきたのは、他ならぬ小清水さんだった。

「ちよつと私には理解できないかなって。私の意見を聞いてくれる？」

今まで反論してきた人たちより随分と冷静な態度だが、その目は自分を信じて疑わない意志がにじみ出ている。

「なんだとおお!? オレ様の意見に文句があんのかあ!!!」

「待って、山村さん。俺が聞くよ」

シユツシユツとボクシングのように拳を振る山村さんを押さえ、俺は小清水さんと向き合った。

小清水彌生：「えつと、巴ちゃんの推論だと、犯人はオブラートにウイルスを付着させたつてことになるけど……」

葛西幸彦：「うん。何かおかしいかな？」

小清水彌生：「まず、その状態だとウイルスが乾燥して死滅しちゃうはずよ」

葛西幸彦：「…いや、それはあり得ないね」

小清水彌生：「あと、その状態にさらにコーヒーなんか注いだら大変よ」

葛西幸彦：「そんな高温には耐えられないって？」

小清水彌生：「うん。私の経験則上、そんな環境の急激な変化には耐えられないと思うのだけど」

「甘いね。その言葉、切らせてもらう！」

【使用コトノハ：モノウイルス

強力な毒性を持つ感染性ウイルス。乾燥下・高温下でも12時間以上生存可能な高い耐性を持つ。

もう一度、このコトダマの情報を整理しよう。

そのためには……

「モノパンダー！モノウイルスについての基本情報を教えてよ。コトダマの共有をするだけだから、アンフェアな行為ではないと思うんだけど」

突然指名されて「ひゃっ!？」と驚いたモノパンダだが、少し黙った後にしゃべり始めた。

「……分かったよ。モノウイルスは強力な毒性を持つ感染性ウイルスで、乾燥・高温下でも12時間以上……一日近くは生存できるスゴいウイルスだぜ。ほら、これでいいんだろ」

「あら、じゃあ大丈夫なのね。ごめんなさい」

「あっさり認めやがった!!」

小清水さんの変わり身の早さに、前木君が愕然とする。

いいように使われてふてくされるモノパンダをよそに、議論は次のステージに移る。

「じゃあ、犯人はモノトキシンXじゃなくて、モノウイルスで丹沢を殺した可能性があるってことなのね……」

亞桐さんの言うとおり、犯人はどちらかの毒物を犯行に使ったということになる。

ただし、二つの毒物は、必ずしも使い勝手が同じというわけではない。

「モノウイルスにはある“制限”があったんだ。それは――」

それを示すコトダマは、あれしかない。

【提示コトダマ：ウイルスの製造

ウイルスは化学室の設備でも丸一日つきつきりで作業しないと作れない。

「ウイルスは丸一日……夜時間なら夜が明けるまで……」つきつきり“で作業をしないと完成しないようにできているんだ。完成するま

では、ちよつとでも離れるとすぐ物質が変性してダメになっちゃうらしくて……」

「……………」

モノパンダの方を向いたが、明後日の方を向いて肘をついているだけで何もしゃべってくれなかった。

「え!? それが本当なら、みんなのアリバイさえ分かっちゃえば……」

「…モノウイルスを作ることのできる人を絞れるってことか」

前木君の言葉に俺は「そうだよ」と同意した。

「みんなから証言をもらっておいでよかった。みんなには、三階が解放された日からのアリバイを教えてもらったからね」

「僕には証言可能なアリバイがあるよ」

「私にはアリバイがありませんっ!」

「私のアリバイなんだけどね、あの日は——」

犯人のレットルを回避したい一念か、突然みんなそれぞれのアリバイを思い思いに言い始めた。

「ちよ、ちよつと! 俺は聖徳太子じゃないんだから、一人ひとり言うてくれないと分からないよ!」

俺が声をかけても議論は収まる様子を見せない。

こうなったら、この状態で議論を進めるしかない。

一つ一つの議論に耳を貸して、間違ったところがあれば論破し、間違っていないければ同意する。

今までと同じように、議論を正解に導けばいい。

俺は意識をとがらせてみんなの意見に耳を貸した。

【パニック議論開始】

議論? 小清水彌生:「私は三階が解放された日の午後……」

議論? 入間ジョーンズ:「わたくしは一日目の夜……」

議論? 小清水彌生:「植物園で夢郷君と話していたのよ!」

議論? 入間ジョーンズ:「夢郷君と休憩室で話したのでござい

ますー!」

議論？前木常夏：「俺は娯楽室で丹沢と遊んでたな…」

議論？亞桐莉緒：「そんな話、信用できんの？」

議論？小清水彌生：「で、夜は每晚巴ちゃんと一緒にいたから…」

議論？夢郷郷夢：「君のバストサイズよりは信用できるよ」

議論？小清水彌生：「私のアリバイは完璧なはずよ！」

議論？亞桐莉緒：「うるせえ!! 盛ってると思ってるのか!!」

議論？伊丹ゆきみ：「二日目の日中は全員がプールにいたから…」

議論？前木常夏：「後半の議論の蛇足感」

議論？伊丹ゆきみ：「全員にアリバイがあるわね」

議論？亞桐莉緒：「アツハイ」

……!!??

くそ、情報が錯綜しすぎて何が何だかさっぱり分からない。

もう一度、みんなの議論に耳を傾けよう。

議論？山村巴：「私が完全に置いてけぼりくらってるんですけど!!」

議論？亞桐莉緒：「てかさ、大体夜時間って部屋にいるからアリバ

イって実証できないよね」

議論？入間ジョーンズ：「あなたまで出てくるとますますややこし

くなるので黙っててください」

議論？夢郷郷夢：「姦通でもしていない限りね」

議論？亞桐莉緒：「高校生がそんなことしてたまるか!!」

議論？山村巴：「……（絶句）」

議論？前木常夏：「ちなみに、俺は三日目の朝と夜は伊丹と一緒にい

たから…」

議論？小清水彌生：「事件が起きたのは今日、つまり四日目の朝だか

ら、とりあえずここで確認完了かしら？」

議論？前木常夏：「その時間は、俺と伊丹のアリバイは間違いないな

！」

「……! この議論に矛盾はない。全員の意見に同意する！」

【使用コトダマ：

前木の証言

伊丹は三日目の日中とその日の夜時間に前木の部屋を訪れ、精神的

なケアを行っていたという。

夢郷の証言①

一日目の夜、人間と休憩室で会話していた。夜更けまで二人でいたようだ。

夢郷の証言②

一日目の日中、小清水と二人で植物園にいた。夕食の直前までいた模様。

山村の証言

小清水は第二の裁判の翌日から夜時間は毎晩山村の部屋で過ごし、精神的なケアを行っていたという。

俺が出した結論はそれだった。

この議論に、少なくとも俺が得た情報と矛盾する内容の言葉は存在しなかった。

「みんなが思い思いのアリバイを同時に言い出したのはちよつと面食らったけど……。みんなの証言はどれももう片方の人からの裏が取れている情報ばかりだった。だから俺は、今の議論で事実と反するよなアリバイ証言はなかったと判断したよ」

「……じゃあ、そのアリバイを考慮していけば、おのずとモノウィルスを製作しうる人は絞られるってことですな！」

意気込む山村さんを後押ししたい気持ちはやまやまだが、俺からも一つアリバイを提出しておこう。

「二応、三階が解放される前の晩のことみんなに伝えておくよ。ねえ、小清水さん？」

「ああ、あの晩のことね」と小清水さんはにっこり笑った。

【提示コトダマ：葛西の証言】

第二の裁判の後の夜時間、小清水と葛西は植物園を訪れた。

「やはり姦通かい？」とほざく夢郷君は無視して、俺はあの夜に小清水さんといち早く植物園を訪れたことを伝えた。

「なるほど……。では、二人は二回目の裁判の後の夜もアリバイが保証されているわけか」

夢郷君が言うのと、俺は小さくうなずいた。

「そうだね。……で、ここまでの話をまとめて、みんなのアリバイを手帳にまとめてみたんだ。よかったら見てみてほしい」

そう言っつて俺は自分の手帳を手渡しでみんなに回していった。

『第二の裁判後 深夜

葛西↓植物園

小清水↓植物園

それ以外↓アリバイなし

一日目 日中

葛西 朝食↓娯楽室↓図書室↓夕食↓休憩室

前木 朝食↓娯楽室↓夕食

入間 朝食↓図書室↓夕食

夢郷 朝食↓【植物園】↓夕食↓休憩室

山村 朝食↓図書室↓夕食

亞桐 朝食↓図書室↓夕食

伊丹 朝食↓図書室↓夕食

小清水 朝食↓【植物園】↓夕食

一日目 夜時間

葛西 個室（アリバイなし）

前木 個室（アリバイなし）

入間 【休憩室】

夢郷 【休憩室】

山村 【山村の個室】

亞桐 個室（アリバイなし）

伊丹 個室（アリバイなし）

小清水 【山村の個室】

二日目 日中

全員 朝食↓プール↓夕食

二日目 夜時間

葛西 個室(アリバイなし)

前木 個室(アリバイなし)

入間 個室(アリバイなし)

夢郷 個室(アリバイなし)

山村 【山村の個室】

亞桐 個室(アリバイなし)

伊丹 個室(アリバイなし)

小清水 【山村の個室】

三日目 日中

葛西 朝食↓購買↓美術室↓娯楽室↓植物園↓夕食

前木 朝食↓【前木の部屋】↓夕食

入間 朝食↓廊下↓夕食

夢郷 朝食↓娯楽室↓夕食

山村 朝食↓植物園↓夕食

亞桐 朝食↓娯楽室↓夕食

伊丹 朝食↓【前木の部屋】↓植物園↓夕食

小清水 朝食↓植物園↓夕食

三日目 夜時間

葛西 個室(アリバイなし)

前木 【前木の個室】

入間 個室(アリバイなし)

夢郷 個室(アリバイなし)

山村 【山村の個室】

亞桐 個室(アリバイなし)

伊丹 【前木の個室】

小清水 【山村の個室】

四日目 朝

事件発生』

《※》内の情報はコトダマによるもの。【】でくくられていない情報は、(非)日常編①〜③で葛西がエンカウントした場所を示す。詳しくは各話参照。》

しかし、改めてこの手帳を見ると、ある問題に気付く。

「これ……夜時間のアリバイがない人がほとんどだね」

亞桐さんがつぶやいた言葉がまさにそれだ。

当然だが、夜時間は殆どの人が部屋で寝ているのでアリバイなんてない。

これを見る限り、夜時間でも完璧なアリバイがあるのは小清水さんだけで、第二の裁判後の夜を除いても、これに山村さんが加わるだけだ。

後の6人——少なくとも俺を除いた五人は、いずれもウイルスの作成が可能な時間が残されている。

「葛西君……」

小清水さんが不安そうな目で俺をのぞき込んできた。

彼女自身は潔白が証明されたからいい。

だけど、彼女は俺の身を案じているのだろう。

大丈夫。大丈夫だよ。

俺は自分の潔白ぐらい自分で証明してみせる。

君は心配しないでいいんだよ。

そんな思いを込めた強いまなざしを彼女に送った。

「結局さ、殺害に使われた“毒物”ってどっちだったの?」

亞桐さんの何気ない一言で、再び議論は動き出す。

「いろいろ情報はまとまったけどさあ……どっちで殺したのか分からないことには、話も進まないじゃんかよ?」

「あんだけアリバイとかまとめといてアレだけど、俺はモノトキシンX派かなー」

前木君がそう言うのと、「わたくしもそう思いますね」と入間君が同意した。

「あら、そうなの？」と伊丹さんは不思議そうな顔をした。

「私はそうは思わない。ある“簡単な事実”を見返してみれば、この事件に使われたのが“モノウイルスである”ことは明白なのよ」

「ふええっ!? なんですかそれは!? 私は信じませんよ!」

山村さんが素っ頓狂な声を上げる。

「さて、と。また議論が二つに割れてしまったようだね」

夢郷君が不敵な笑みを浮かべて言った。

「だったら、話し合いだ。どちらかが納得するまで、コトダマをぶつけあうだけさ!」

真つ二つに割れた裁判場。

議論は佳境に差し掛かり、いよいよクライマックスに向かおうとしている。

伊丹さんが言う、“ある事実”って、もしかして――

【議論スクラム開始】

Q. 二人を殺したのはモノトキシンXなのか? モノウイルスなのか?

入間ジョーンズ・山村巴・小清水彌生・前木常夏VS葛西幸彦・伊丹ゆきみ・夢郷郷夢・亞桐莉緒

前木常夏:「作るのに時間がかかるウイルスよりも、錠剤の方が簡単に使えるぞ!」

夢郷郷夢:「用意周到な犯人なら、かかる時間など問題ではないはずだよ」

小清水彌生:「手軽に使える錠剤の方が、証拠の隠滅もしやすいと思うけど」

伊丹ゆきみ:「両方とも被害者の体内に入ってしまうのだから、証拠隠滅の難度は変わらないわ」

入間ジョーンズ:「生成に時間がかかるのも含めて、ウイルスでは実際に使うにあたってリスクが大きすぎますよ!」

亞桐莉緒：「そのリスクをうやむやにできるトリックを犯人が考えたっただけだろー!」

山村巴：「では、モノウイルスが犯行に使われていなければ説明がつかないことでもあるというのですか!？」

葛西幸彦：「あるんだよ。とてつもなく大きく、誰もが知っている事実がね」

【使用コトダマ：モノモノファイル③―2

被害者は超高校級の漫画家・安藤未賤。毒物を摂取した形跡あり。

「そう、他ならぬ安藤さん。今回の事件の二人目の被害者だよ」

「安藤が!？」

俺たちと議論を戦わせていたみんなは一斉に目を見開く。

丹沢君ほど派手ではなかったが、徐々に衰弱し、己の死を実感しながらみじめに死んでいった彼女の姿が脳裏に浮かぶ。

「思い出してごらん。コーヒーを飲んでいない彼女はなぜ、丹沢君と同じような状態に陥ったのだろうか?」

「……ウイルスに“感染”したから……?」

恐る恐る前木君が発した言葉が、俺の出した答えだった。

「そう。モノウイルスは“感染性ウイルス”。丹沢君に口移しで錠剤を与えた安藤さんの体に、ウイルスが乗り移ってしまったと考えるのが自然じゃない?」

「そっか……。錠剤の毒が他人に移るわけないもんね……」

これで、結論は出ただろう。

「つまり、犯人はモノトキシシンXを使ったかのように見せかけて……」
「実際にはモノウイルスを使って二人を殺害したということか……」

入間君と夢郷君の言葉に結論がまとめられていた。

モノトキシシンXが使われたかのように見せかけたのは、恐らく伊丹さんに罪をかぶせるため。

だけど、幸運なことに犯人は伊丹さんのアレルギーのことを知らなかったんだろう。

ゆえに彼女は冤罪から逃れることができた。

「…だけど、それが分かったところで結局犯人の手がかりなんてほとんど掴めてなくない？」

「亞桐さんの言うとおりだった。」

これまでの情報だけじゃ真犯人の正体はつかめない。

分かっているのは、アリバイの件だけ。

あれだけでは犯人は五択までしか絞れない。

罪をかぶせられたという点を考慮して、伊丹さんは犯人候補から外していいだろうか…？

いや、でもそれすらも考慮に入れた二重の罠という可能性も……。

議論はまたもや停滞してしまった。

頭がビリビリとしびれるような感覚に陥る。

…何も、浮かばない。

脚本の締め切りが迫った時もこんな感じだった気がする。

だが少なくとも、状況はその時よりはるかに深刻だ。

判断を誤れば死ぬ、その状況で俺は答えを見失ってしまったのだ。

「ね、ねえ！ 誰かなんか言ってよ！ なんか情報とかないわけ!？」

「情報つつつても……ここで使えそうなものは何も……」

「うかうかしてたら投票が始まっちゃうよ！ みんな死んじやうよ！」

亞桐さんが述べた焦燥は、全員が感じているものだ。

この中に潜む、クロ以外の全員が。

「……一つ、疑問を覚えたところがあった」

そう言いだしたのは、夢郷君だ。

「葛西君。君の推理には一つ間違いが……。いや、間違いではないのだが、抜け落ちている部分がある」

「……！」

それは、今までに俺が退けてきたどの反論とも異なり、静かなながら底知れない重みがあった。

「さっきのアリバイの件だ。君は、第二の裁判が終わった直後からの

アリバイをまとめてくれていたね」

「うん……」

俺は力のない返事をした。

あのアリバイに間違いはない。

全員の証言は裏が取れているのだから。

間違いはない……はずなんだ。

「君は勘違いをしている。モノウィルスを作成できるのは、何も”第二の裁判の後だけ”ではないんだよ」

「……………え!?!」

その言葉で、全身が逆立つような感覚に襲われる。

まるで、絶対に気付いてはいけないことに気付いてしまったような……。

「なぜなら、化学室があるのは”二階”。モノウィルスが化学室にずっとあったなら、犯人は”第一の裁判の後”ならいつでもウィルスを作る機会があったんだ」

「……………!!!」

彼の言うことは正しい。

だけど、だからって犯人の手がかりには……

「人間は、物事を区切り区切りで考えてしまいがちだ。ゆえに犯人は、我々が”事件ごと”に物事を整理してしまうと予想したのだろう。葛西君がそうだったようにね」

なんだ???

なんだ、この震えは???

「つまり、第二の裁判があった後のアリバイは、犯人にとって都合がよくなるようにできているんじゃないかと、僕は思ったんだ」

「なるほど……。真の作成時間から目を逸らさせることで、あたかも自分にウィルス作成は不可能であるように見せかけたかった、というわけね」

伊丹さんが夢郷君に同意した。

「ああ、そうさ。つまり———ここで葛西君の手帳をもう一度見てほしいんだが……」

……この手帳を見る限り、“最も疑われにくい位置”にいる人物は誰だい？

「……………!!!」

嘘だ。

やめろ。

そんなことが、あつてたまるか。

認めない。

そんな事実、認めない。

たとえ真実だとしても。

絶対に認めない。

“彼女”が犯人だなんて。

絶対に、認めない。

『それは違うッッッ
!!!!!!』

俺は全身全霊を込めて、吠えた。

【学級裁判・中断】

Chapter 3 非日常編③ 学級裁判中編

僕は、哲学者であり探求者だ。

ゆえに、悲惨な事件においても、探求することをやめない。

そのあくなき探求心によって、僕は葛西君の推理の瑕疵を見抜いた。

そして、結論を導き出した。

【人物指名】

「小清水彌生君。君が犯人ならばこの不可解なアリバイの件も納得がいく」

「:!!!」

小清水君の表情が変わった。

当然と言えば当然ではあるが。

「葛西君が集めたアリバイ情報では、君が一番安全で疑われない位置にいる。だが、それが逆におかしいと僕は考える。四日間及以上アリバイ調査で、夜時間も含めて常に何かしら他人と行動を共にする予定を入れていたなど、そうそう起こりうることはない。まるで、自分が疑われないようにわざと予定を組んでいるかのようだ」

あつげにとられるクラスメートたち。

わずかに状況を理解し始めたのか、入間君と伊丹君だけがうつむいて熟考している。

「:???」

当の小清水君は、怒るでも慌てるでもなく、不可解な顔をしていた。『なぜ自分が指名されたのか、さっぱり分からない』といった面持ちだ。

そう、それが現時点では“正解”。

強烈に感情を露わにするのではなく、あくまでも“分からない”という態度をとっておけば、“突然指名されて困惑する無関係者”を装うことができる。

我々を騙そうとする犯人としては、この上なく正解のリアクションだ。

だが、それが正解であるとわかつている僕からすれば、むしろそのリアクションは“ベタ”と言わざるを得ない。

墓穴を掘っているだけだぞ、小清水君。

さて、鬼が出るか蛇が出るか。

君の本性を暴く時が……

『それは違うッ!!!』

【葛西幸彦の反論】

思わぬ大声に僕は驚きの表情を隠せなかった。

葛西君が、鬼のような形相で吠えたてたのだ。

「葛西君、落ち着いて……」

伊丹君がなだめるが、全く効果は見られない。

前回の裁判の御堂くんもまた然り、激情に支配された人間とはそういうものだ。

「いくらっ……!! いくら夢郷君でも……!! そんな言葉、信じられるか!!!」

「か、葛西君……」

小清水君が目には涙を浮かべて葛西君に助けを求めた。

全く、下らない小芝居を打つものだ。

「葛西、落ち着いてよ!!!」

亞桐くんも伊丹君に同調し、ここでようやく葛西君はがくりと顔を下に落とし、息を整え始めた。

「でもさ、夢郷。アンタの意見にも同意できないよ。アリの話なんて、偶然でも全然納得できるとウチは思うし……」

「私もそう思います！ 命がかかっているのですから、むやみな決めつけは禁物ですよ!!」

亞桐君と山村君が口をそろえて僕に反論してくる。

美しい女性と言えど、理解力に欠ける人間に探求を促すのはやはり面倒なものだな。

「分かった。なぜ、彼女が犯人と思われるのか……。アリバイ以外の観点から根拠を示せばいいんだね?」

葛西幸彦：「アリバイの不備だけで犯人を決めつけるな!!!」

夢郷郷夢：「もちろん、それ以外の根拠も用意しているよ」

葛西幸彦：「彼女が人殺しなんてするわけないんだ!!!」

夢郷郷夢：「僕もそう信じたかったよ」

葛西幸彦：「大体、そんなに早くウイルスを作ったなら……」

葛西幸彦：「事件の日までウイルスがもたないじゃないか!!!」

「——葛西君。あまり、不用意な発言はしない方が身のためだ」

「君は今、”真実”を敵に回しているのだから」

葛西君の背筋がゾワリと逆立つのを、僕ははつきりと認識した。

真実を認識することを恐れる者のする表情だ。

【使用コトノハ：ウイルスについて】

致死性の高い危険なウイルスで、摂取すると瞬時に体内に流れて患者を侵す。感染すると数十分〜一時間で死に至る。高温多湿を好む。

「モノウイルスは”一日程度なら”乾燥下だろうと熱々のコーヒーの中だろうと耐え忍ぶことができるが、ふつうはそれ以上長生きさせることはできない。——ある特殊な環境じゃない限り」

「そっか…… 高温多湿!!」

前木君が反射的に声を上げた。

「そう、あのウイルスは高温多湿、かつ培養に必要な器具があれば長持ちさせることができる。その器具とは——」

ウイルスの培養に用いることができそうな器具。

化学室からなくなっていた、“アレ”で間違いないだろう。

【提示コトダマ：消えたシャーレ】

化学室からガラスのシャーレがなくなっていた。

「化学室から消えていたガラス製のシャーレ……。実験などでよく使われる用具だ。最適な環境さえ作っておけば、ウイルスを中に保存しておくのにうってつけの道具というわけだ」

「なるほど……。だけど、ウチが調べた限りではそんな器具なんてなかったと思うけど……」

亞桐君がそう言うのももつともだ。

「そう、シャーレはそのままの姿であったわけじゃない。犯人も用意周到な人物だ。きつと“原型が残らないくらい破壊して”一見では判別がつかないようにした、というわけさ」

【提示コトダマ：ガラスの破片①】

図書室の隅の方にガラスの破片が落ちていた。

【提示コトダマ：ガラスの破片②】

粉々になったガラスの破片が、植物園の隅の方に落ちていた。

「細かく捜査したものは、この二つの場所で、ガラスの破片が落ちていたことに気付いただろう。このうちのどちらかがウイルスの培養に用いられたシャーレであると考えられる。そして……“高温多湿”という条件から、どちらがウイルスの培養に使われたかも知ることができる」

「図書室の気温は確か20℃程度……。本の材質を守るために乾燥気味の空間でしたし、高温多湿とは程遠いですね」

「その通りだ」

入間君の言葉に僕は強く同意した。

【提示コトダマ：図書室の環境】

図書室は20℃前後で乾燥していた。

「入間君の言うとおり、図書室はウイルスの生育には不十分な環境だ。よって、図書室のガラス片は事件とは関係ない何かだと断定することができる」

「ま、オイラがメロンソーダ飲み終わったコップを落として粉々にしたってのは知られてなさそうでよかったぜ!!! ……はっ!!! 自分で言ってしまった!!」

モノパンダが素っ頓狂な声を上げる。

大方、そんなことだと思っていた。

「なんでメイグルミがメロンソーダなんか飲むんだよ!!! てか図書室は普通飲食禁止だろーが!!!」

亞桐君の二連ツツコミが炸裂したところで、議論に戻る。

「…それに比べ、植物園は気候的にウイルスの培養に適していると考えられる。なぜなら…」

「植物園は自由自在に気候を変えることができるから、高温多湿にもできるってことだな!」

前木君が言ったことを疑う人物はいなかった。

「……………」

葛西君はさつきから無言でこちらを睨みつけている。

一方で、小清水君は不気味なまでに無表情でこちらを見ていた。

「そう、その通りだ。三階が解放されて以降、植物園を訪れた人はいるかな? いるとしたら、どんな気候だったか教えてくれないか?」

「……………暑くて、ジメジメしていました。まるで、熱帯雨林のような……………」

山村君が目には涙を浮かべて呟いた。

その涙は、自分を助けくれた親友を疑いたくないがゆえの葛藤か。

「さて、もうみんななら分かるね? いつも植物園にいて、何時でも植物園の気候を操作し続けられた人物とは」

「……………」

沈黙が場を支配した。

「そんな……………小清水さん……………ウソですよ……………?」

すがりつくような山村君の細い声に、しかし小清水君は答えない。

「…っ!!! そんな……………そんな……………」

葛西君は歯をギシギシと鳴らしながら呻き声を上げた。

「葛西君。小清水君は君にとって大事な人物だ。それは周知の事実だろう。しかし、真実は何よりも重く、優先されるべきものだ。君は気付いていたはずだ。小清水君がいつ、ウイルスを生成したのかを」
そう言いながら僕が思い出したのは、第二の事件が起きた日の朝。
あの時、葛西君と僕、そして小清水君の三人が気絶している山村君の前で出会った。

葛西君は気付いていたはずだ。

あの時の事件とは関係ないはずの彼女の、異常な様子に。



【Chapter 2 (非) 日常編④】

俺は慌てて飛び起き、扉に駆け寄った。

勢いよく扉を開くと……

「葛西君!!」

小清水さんが涙を浮かべて立っていた。

彼女の目元には隈ができ、心なしか疲労困憊しているようにも見える。
しかし、とりあえずは生きていた。

ああ、よかった。

昨晚の約束、守れたね。

…なんて、悠長なことを考えている暇はなかった。

「来て!! 巴ちゃんが……巴ちゃんが……っ!!」

ゾワリ、と背筋が逆立つ。



隈のできた目元。

疲労困憊しているような表情。

何故、小清水君がこのような様子になっていたのか。

まるで、一晩中にわたつて、神経をすり減らすような作業に勤しんでいたようではないか。

そう——君は誰よりも最初にそのことに気付いていたはずだ。

だが、疑わなかった。

否、疑えなかった。

大切な人を信じたいという思いが、真実に向き合おうとする意志に打ち勝ってしまったのだ。

だからこそ、こうして僕が代わりにみんなを導かざるを得なくなっている。

「あ……あ……あ……あ……あ……」

恐れをなしたかのように葛西君は後ずさる。

「ごめんね、葛西君」

そんな彼に声をかけたのは、他でもない、小清水君だ。

「みんな、ひどいよね。よつてたかつて葛西君に言い寄つて。私を守ろうと必死なだけなのにね」

「……………」

その言葉に良心を傷つけられたのか、亞桐君と人間君が二人から目を逸らしてうつむく。

だがその反応は、むしろ彼女の思う壺だ。

「こんな私を守ってくれてありがとう。私なんかじゃ、自分の身も自分で守れないもの」

「小清水さんっ……!! 君は何もしなくていいんだ。君は俺が守る!!! 絶対に守るんだっ!!!」

いったい、ここまでの学園生活で、二人に何があつたというのだろうか。

ここまで彼を心酔させるのも計画の一つだったのだとしたら、つくづく恐ろしい女性だ。

「ぞ、そうだッ!!!」

小清水君の激励に勢いづけられたかのように、なおも葛西君は声を上げた。

「じ、実は、小清水さんはあの夜、“夜時間を過ぎてても”俺の部屋に残ってたんだ。そして、“日付が変わるころ”に自室に戻ったんだ!!だから、夜時間の間につきつきりで化学室にいるなんてことは不可能なんだよ!! ねえ、小清水さん!!」

【偽証コトダマ：小清水の滞在時間

小清水は深夜まで葛西の部屋にいたため、一晩中ウイルス制作を行うことは不可能。

「え、ちょ、それマジなの!？」

亞桐君が驚くのも当然だ。

葛西君は、思いもよらぬことを言い出したのだ。

もしそれが本当なら、ここまでの議論は全て成り立たなくなる。

「……ええ、葛西君の言う通り。私が部屋に帰ったのは夜時間になった後よ」

口を開いたと思ったら、葛西君の論理に同調する小清水君。

——無論、本当のはずがない。

偽証してまで真実にたてつこうとは、なかなかの強敵じゃないか。

さて、それをどう証明するか……。

「ふざけたこと言ってるじゃねえぞつつ!!」

——味方は、思わぬところからやってくる。

豹変を遂げた山村君は、偽証する二人に真っ向から怒鳴りかけたのだ。

「その夜、オレが校舎を見回ってたのを忘れたのか、葛西ツツ!!!」

「……………つつつ!!!」

【使用コトダマ：山村の見回り（二章のコトダマ）

山村巴は、第二の事件が起きた日の夜、校舎を歩き回って警備していた。

「お前の部屋から自分の部屋に戻るなら、廊下を移動しなきゃならねえ……。その気配を、オレが見逃すと思うか!!!」

「あうつ……………」

葛西君はうめき声のような声を漏らした。

「でも、巴ちゃんはリュウ君に気絶させられたんだから、その後に自分の部屋に戻ったのなら説明もつくじやない」

平然とした顔で反論する小清水君に、「それは違いますね」と入間君が冷静に論破する。

「第二の事件があった際、大ホールの時計は深夜一時ほどで止まっていた…。つまり、事件が始まったのはそのあたりの時間になりま…すね。それに対して…」

「葛西はさつき、”日付が変わるころ小清水が部屋に戻った”って…言ってたな。12時ぐらいだと、まだ山村が見回りしてたんじゃないのか？」

前木君が入間君の論を補完し、論破は成された。

「……………!!!」

葛西君の顔はすーっと青くなり、ガタガタと小刻みに震え始める。時系列もよく考えずに中途半端な偽証などするから、余計に追い詰められることになる。

残念だが、もう逃げられないぞ。

不気味な沈黙の中で、葛西君がすすり泣く声だけが聞こえている。

「あ……………ああ……………違う……………違うんだ……………」

「……………」

「君は分かっているのかい？ 小清水君をかばうと、君自身、ひいては僕たち全員が死に近づくんだよ」

「違うんだよ……………小清水さんは……………」

僕の言葉にも耳を貸す様子はなく、ただひたすらに泣きじやくっている。

まるで、この前の事件の時の御堂君のようだ。

「小清水!!! お前は!!! オレを助けてくれたんじやねえのか!!! オレを助けたのは、アリバイが欲しかっただけなのか!!!」

山村君が涙を浮かべながら小清水君に怒鳴りかかった。

「……………」

黙り込む小清水君。

「……状況を考えると、あなたが殺害を計画し始めたのは第二の事件が起きる前。つまり、秋音と同じタイミングで殺害を決意していたんでしょう……？」

伊丹君が静かに問いかけても、彼女は答えなかった。

「なぜですか……。なぜ、あの二人でなくてはならなかったのですか！！」

入間君が声を張る。

「私ね、悲しいの」

ふと、小清水君が口を開く。

「あれだけ力を尽くしたのに、結局みんなは私の敵。私を信じてくれるのは葛西君だけ。その彼も今となってはこんな状態」

膝について絶望する葛西君を見下ろして、彼女は言った。

「君の敗因は、自らがすべき反論をすべて葛西君に託してしまったことだ。〃擁護してくれる他人がいる〃という状況を維持することで場の信用を得たかったのかもしれないが、

結果から言うとは逆効果。彼が無用の偽証などするせいで、余計に君の容疑は固くなってしまった」

「ふふふ、私に何も言わせなかったくせに」

小清水君は不敵に笑った。

「悲しいし悔しいわ。限られた状況下では最善の策をとったと思ったのだけれど。私は、勝てなかった」

「ほ、ほんとに、お前が……」

前木君が声を震わせる。

「言い訳は後で聞こう。今は、事実をまとめ上げるのが先だ」

僕は彼女に言い逃れを与える暇すら与えなかった。

罪を認めてしまったなら、その発言を翻す前に勝負を決めてしまった方がいいからだ。

「もう逃げも隠れもさせない。これがこの事件の真実。僕たちが探求

した結果だ」

《クライマックス推理 —— 真実への探求 —— 》

A c t . 1

事件の発端は、第二の事件が起こった夜……既にその時に事件は動き出していったんだ。殺害を計画した今回の事件の犯人が、

一晩中化学室にこもって毒性のウイルス：「モノウイルス」を作成したんだ。夜時間になる前に化学室に移動し、そのままもっていたために見回りの山村君にも見つからなかったんだらうね。

そのまま犯人は翌日の朝食の場で、今回のような事件に移ろうとしたのだらう。だけど、御堂秋音君が先に事件を起こしてしまったために

彼女の計画は頓挫した……。：一旦、ね。

A c t . 2

やむを得ず事件を先延ばしにすることになった犯人には、ウイルスを保存する場所が必要になってしまった。だけど彼女は偶然にも、

事件の後の夜に解放された新エリアでその保存に適した場所を見つけた。それこそが、「気温と湿度を調整できる植物園」だったというわけだ。

犯人はそこに「化学室から持ち出した培養シャーレ」を密かに設置し、ウイルスの保存を行った。そして自分が事件を起こすべき時を虎視眈々と

狙っていたのさ。

A c t . 3

次に犯人は、自分の犯行がバレないために隠蔽工作を行った。犯行が自身の製造したウイルスではなく「モノトキシンX」によるものと錯覚させる

ため、モノトキシンXの瓶の蓋を開けておき、何錠か処分して減らしておくことで使用されたかのように見せかけるとともに、化学室に

よく出入りしていた

伊丹君に疑いの目が向くように仕向けた。さらに第二の事件後の自分の行動に関して「アリバイ」を作っておくことで、万が一ウィルスの存在が

公になっても自身に疑いの目が向かないように画策した。使用したシャーレも「割って処分した」。

A c t . 4

仕上げに犯人は「朝食を作る際」、厨房の「コーヒーカップ」に、倉庫で手に入れた「オブラート」を使ってウィルスを付着させた。

こうすることによってコーヒー自体に手を加えなくても毒を盛ることができた。後は誰かが食事の際にコーヒーカップを使用すればウィルスが回って

被害者は死ぬ…。コーヒーを淹れたのがちようど伊丹さんだったのは犯人にとって好都合だったね。だけど、犯人は伊丹さんが「デンブアレルギー」

だからオブラートを触ると決定的な証拠が残ってしまうのだということを知らなかった。

そしてウィルスの混じったコーヒーを飲んだ丹沢君は、解毒薬の投与もむなしく息絶えてしまった…。

そればかりではなく、彼を助けようとして錠剤を口移しで与えた安藤さんの命もまた奪われてしまった。

これまでにないほどの綿密な計画性、そして狡猾さ。

君の本性は、僕たちが知っている姿とはかなりかけ離れたものよ
うだ……。

——何か言うことはあるかい？ “超高校級の昆虫学者”、小清水彌生君!!!



みんなの視線が小清水君に向く。

議論の趨勢は、決まった。

観念したのか、小清水君はもう反論する様子を見せない。

いや、今から何かを言ったところでもう遅い。

彼女にはそれが分かっているのだろう。

「残念だわ」

小清水君は、少し視線を落とし、妖艶な溜息をついた。

「この惑星の主導権を、あなた達のような生物に握られ続けるなんて」

「……!!?」

……ほう。

興味深い言葉だ。

今回の事件、皆が一番気になっているのは“動機”だろう。

この事件は、黒幕からの“動機”が提示される前に発生した。

いや……事件の流れ的には、小清水君が犯行を思い付いたのは第二の事件のタイミング。

つまり、彼女の殺意を呼び起こしたのは、御堂くんと同じ、“将来の夢”の動機……。

最後の謎が、今明らかになるというわけか。

「モノパンダさん、見せてあげて。私の“動機”を」

小清水君は、玉座で重なり合うように眠りこけるヌイグルミに声をかけた。

「……っは?! 校長センサー!! 呼ばれてますぜ!!」

モノパンダがゆっさゆっさとモノクマを揺り動かすと、モノクマは目をこすりながら起き上がる。

『うーん……君たちの学級裁判は退屈だなあ……。なに、もう結論出たの? はくい、じゃあ投票を』

「彌生ちゃんの動機を見せろって言ってんだよっ!!」

亞桐君が涙ながらに吠えた。

『あーなんだ、もうそこまで行ったのね……。じゃあ教頭センサー、アレ

を見せてあげなさい!!』

「ほいさっさー!!」とモノパンダが答えると、すぐにスクリーンが降りてくる。

「みんなも知ってる通り、小清水さんが殺人を決意した動機は、御堂さんと同じ”将来の夢”!! それがちらだぜー!!」



映し出されたのは、ランドセルを背負った赤髪の小さな女の子。

幼い頃の小清水君だ。

彼女は、遠目からとある少年たちを見つめていた。

同級生だろうか。

彼らの姿がクローズアップされると、小清水君が虚しくたたずんでいる理由が分かった。

彼らは、蟻を潰していた。

少年たちが去ると、彼女は蟻たちの方へ歩み寄り、見つかる限り蟻の死体を土に埋めていた。

『幼い頃から昆虫の観察が大好きだった小清水さんにとって、虫は親友のような存在でした! だけど、彼女はすぐに生物の階級の差を思い知ることになりました!』

「汚い」

「気持ち悪い」

「絶滅すればいいのに」

『虫たちに向けられたその言葉は、いつしか虫たちとつかず離れずの生活をする彼女にも向けられていきました!』

家族からも友人からも距離を置かれていく小清水君。

周りの人間から隔絶され、一人ぼっちで虫と戯れ続ける彼女の表情は、しかし心の底から幸せそうだった。



そこで不意に映像は途切れた。

「そう、私は幸せだったの。人間となんてかかわらなくてよかった」

小清水君は恍惚の表情を浮かべながら言った。

「ただ生きるために必死なだけの虫さんを、ただ人間の住処に迷い込んでしまっただけの虫さんを、苦しみがいて死んでいくような残酷な方法で殺処分する人間になんて、私は一ミリの愛着も関心もない!!」

「お前だって……お前だって人間じゃねえか!!」

前木君が叫ぶ。

「そう、人間よ!!! 愚かで醜い、自分勝手な人間なのよ!!! 私は人間になんて生まれなくなかった!!! 自分たちが地球の頂点だと勝手に思い込み、思うがままに自然を荒らし尽くす人間になんて、生まれたくなかったのよ!!!」

「……だから私は、その身勝手さを逆手に取ることにしたの」

小清水君はニツコリと笑った。

『うぷぷぷ、それじゃあ発表しまーす!! 超高校級の昆虫学者、小清水彌生さんの夢は……』

モノクマが飛び上がって宣言する。

『“この世界を虫さんだけの世界にすること”でーす!!!』

「……???’」

みんながキツネにつままれたような顔をしていた。

一言では理解できない。

『“超高校級”の能力を持つ彼女は、一心不乱にとある細菌の開発を続けたんだよ! ありとあらゆる人間に感染し、無差別に殺戮しつくす大いなる生物兵器をね!!』

人間を侵す致死性の細菌……。

そんなものが世に現れたら、人類はあつという間にこの世から消え去り、動物と昆虫が支配する世界になるだろう。

「この細菌を世界にばら撒き、人類をすべて滅ぼして、大自然と虫さんたちがありのままにいられる世界を作り出してやるのよ。そして最後にこの私の死をもって、邪な存在のない完全世界が完成するの」

自分の考えに酔いしれるように、小清水君は両手を広げて高らかに宣言する。

「私をはじめ、虫さんになろうとした。虫さんと交尾する方法も研究したし、虫さんの臓器を拡大培養して移植する方法だって考えた。でも、その細菌の研究を始めてから、あえて人間のままの方がいいかって思い始めたの。私は愚かで身勝手な人間だから、生物を滅ぼすのもその身勝手の一環。こういう汚い役回りは、人間がやった方がいいなって思い始めたのよ」

「……なんだよ、それ……」

亞桐君の言葉は、その場の全員の心の中を代弁していた。

「なるほど。君の誇大な空想は一つも理解できないが、君が虫けらにも等しい人間であることだけははつきりと分かった」

僕は薄ら笑いを浮かべて彼女に告げた。

こういう人間にはまともに取り合うだけ時間の無駄だ。

「……あなたが〝無価値なもの〟という意味で〝虫けら〟という言葉を使っているのなら……あなた達人間の方こそ〝虫けら〟以下の存在よ」

小清水君は平然と言葉を返す。

『うぶぶ！　こういうシリアスな感じ、嫌いじゃないよ!!　釜利谷君に記憶を消された君は、将来の夢の動機を見るまでは純真無垢なただの昆虫学者だったんだけどね！　御堂さんやリュウ君と同じく、動機で全部を思い出してしまったんだよね!!』

「……そう。あの日、あの動機映像を見せられた瞬間から、全ては始まっていた。あの瞬間、私はこの身に課せられた使命を思い出し、愚かな人類を淘汰するために行動を開始したのよ。……まさか、私が化学室でせっせとウイルスを作っている間に、あんな事件が起きるなんて予想外だったけど」

「駿河を狙ったのは……？　あいつに恨みでもあったのかよ……？」

前木君の問いに、彼女は「え？」と疑問符を浮かべた。

「トリックを見て分からなかったの？　あれは〝誰でもよかつた〟のよ。自分がコーヒーを飲まないようにすれば、運の悪い誰かさんが勝

手に飲んで自滅してくれるようにできてるから。まあ、“超高校級の幸運”のあなたが飲まずに済んだのは流石ってところかしら。その分、中途半端な感情に苛まれて巻き込み事故で死んだあの女は本当に醜かったわね」

「てめえっ!!!」

山村君がオーラを放って威嚇するが、「なによ」と小清水君は平然としている。

「あなたもねえ……。あれだけ丁寧に看病したし、その前も仲良くしてたからもう少し私に有益な証言をしてくれるかと思っただけけど。全然戦力にならなくてガツカリだったわ。あなた、龍雅君が死んでから人を純粹に信じられなくなってるみたいね？」

「……………ツツ!!!」

その指摘が的を射ていたのか、山村君は驚愕の表情を浮かべて何も言わなくなった。

「はあ、それを見抜けずにアリバイ作りに利用した私もバカだったってわけね」

小清水君はもう一度ため息をつく。

「小清水、さん……………俺は……………」

葛西君がよろよろと立ち上がりながら弱々しい声を発した途端。

「黙れ、脚本家!!!」

これまでにない剣幕で小清水さんは怒鳴った。

「この私の崇高な計画を台無しにした能無しが!!! これまでの二回の裁判で一番活躍していたから目を付けてすり寄ってやったのに、その顛末がこのザマだ、ああ!!!? お前なんぞグンタイアリさんに隙間なく覆われて痛みと苦しみの地獄の中で喰らいつくされればいいのよ!!!」

動物のように牙をむき、小清水君は吠える。

全く醜い姿だ。

「お前だけは絶対に許さない!! 地獄に落ちても、お前への恨みだけは絶対に消えない!!」

「あ……………あ……………」

葛西君の目から光がすーっと消えていく。

「なんとという言い草ですか……!! あなたは、どれだけ対話という概念をないがしろに」

「黙れ黙れ、翻訳者!! 私人間の意思疎通なんて求めていない!!」

入間君の言葉をさえぎり、なおも小清水君は叫ぶ。

「全部、ウソだったの……?」

葛西君が微かな声で問うた。

「虫さんを思うこの気持ちだけは本当よ」

突然、普段の穏やかな顔に戻って彼女はそう告げた。

「……だけど、それ以外は全部嘘。嘘は人間だけがつける特権よ」

そして、狂気をにじませた表情に切り替わり、葛西君を追い詰める。

「思い出してごらんなさいな、おつむの弱い人間さん。第二の動機が発表されて以降、私は急激にお前にすり寄っていた。でも、あれだけ露骨にすり寄っていても、お前は私を疑わなかった。疑おうともしなかった。コロシアイ学園生活という状況下でも、愚かに信じ続けていたんだ!!」



二回目の動機の直後のあのやり取りも。

【Chapter 2 (非) 日常編④】

「モノクマも、モノパンダも、俺達の実力を見誤ってるんだ。俺達は希望。この学園に選ばれた希望なんだ! 分かってくれよ、小清水さん!」

「……………っっ!!」

静寂。

数秒ののち、小清水さんは涙を流しながらがつくりと頭を落とした。

依然として俺の両肩はつかんだままだ。

そしてそのまま俺を抱き寄せるようにして俺の胸に顔をうずめてきた。

「ご……ごめんなさい……。怖くて怖くて、わけわかんなくなっちゃっ

て……。ごめんなさい……」

少し戸惑いながらも、俺は彼女の髪をそつと撫でた。暖かくて、さらさらとした美しい赤髪だ。

「いや…俺もムキになりすぎちゃった。ごめんね」

実際のところ、言っていることは小清水さんの方が正しかった。

俺が言った言葉は全部気休め。

小清水さんが言った現実的な言葉の方がよほど重要なはずだ。

でも今は、彼女の、そして他ならぬ俺自身の精神を保つため、気休めであつてもああ言うしかなかったのだ。

感情のタガが外れたのか、小清水さんは大声を上げて泣いていた。俺にできることといえば、そんな彼女になけなしの言葉をかけて慰めてやることだけだった。

彼女に対して恋のときめきやそれに近い感情を感じる余裕はなかった。

内心、俺だつて救われたような気分だつたんだ。

苦しみを吐露してくれる仲間がいるというだけでも、俺には十分だ。



二回目の裁判の直後の、あの幻想的な空間での出来事も。

【Chapter 3 (非) 日常編①】

「虫さんが羨ましい…」

疲労のこもったため息とともに小清水さんは呟いた。

「虫さんには良い親も悪い親もないもの。親のためとか弟のためとか、そんなことは何も考えず、ただ目の前にある餌を運べばいい。ただ目の前の蜜を吸えばいい。私もそう生きてみたいものね」

「……………」

彼女の昆虫への愛情話はいつも話半分に聞いていたが、今ばかりはそうはいかなかった。

彼女の言葉が確かな説得力をもって俺の心に働きかけてきたからだ。

「私、昆虫を研究し始めてからずっと思ってることがあるの」「……ずっと?」

「そう、ずっと。……人間が他の生き物より優れているところって何だと思う?」

その質問に、俺は鈍っていた頭脳を回転させる。

「感情?……?」

一つ一つ挙げればきりが無いが、それが一番大きいような気がした。

「そうよね」と小清水さんは柔らかな笑みを浮かべる。

「でも、感情があるからリヤンちゃんは私たちを助けようとしたのよ」

その言葉が一瞬にして俺の表情を固めた。

「感情があるから土門君は彼女を救おうとした。……結果、二人とも死んだ」

「御堂さんも……」

「そうよ」と彼女は俺と視線を合わせた。

「だから私は思うの。人間にとつて、感情は本当に必要な機能だったのかしらって。何も考えずに機械のように生きていけた方が幸せだったんじゃないかって……」



「全部全部、作り物、だったのか……」

「そうよ、作り物。こうして失敗してしまった以上、作る意味もなかったのだけれどね」

「……………うっ、ううっ」

葛西君の瞳から大粒の涙が溢れ出る。

それに呼応するように、小清水君は隣の席の葛西君に詰め寄り、その顎を掴んだ。

「ちよ、あんた……！」

「待ちたまえ。下手に刺激すると何をしでかすか分からないぞ」

いきり立つ亞桐君をなだめ、とりあえず僕は趨勢を見極めることにした。

「そんなに私のことが好きだったの？ 人間くん」

小清水君は葛西君の額に自分の額を付け、につこりと笑って尋ねた。

「残念だけど、あなたの好きな人はこれからオシオキされるの。でも忘れないでね。例え地獄のような無残な処刑に捧げられようとも、私の意志は、人間の傲慢への大自然の怒りは、決して消え去りはしない。私は一度滅び、今度こそ虫さんとして生まれ変わり、次こそは人類を滅ぼしてみせる。その時は、あなたを一番最初に喰らいつくしてあげる」

葛西君の頬をいとおしそうに撫で、小清水君は笑みを投げかけた。

「……っ!! 自分が自然の代表であるかのような言い方をしないで!! あなたのほうがよほど傲慢よ!!」

ぐつと悲しみと怒りに耐え続けてきた伊丹君もついに言葉の刃を放ったが、小清水君の心には全く響いていないようだった。

「ふふっ、人間が何か吠えたところで、私はもう止まらない。いい？

もう一度だけ言うわ。例えこの身が滅びようと、私は必ず、お前たち人間を——」

そうして小清水君は葛西君から離れ、ゆつくりと裁判場にいる全員を見回した。

「――駆逐してやる。この世から、一匹残らず」

裁判場は、憎悪と絶望に満ち溢れた。



「はいはい、じゃあ区切りもいいし、とつとと投票してオシオキしちやおうなー」

モノパンダが手をたたいて場を仕切る。

ふう、と僕はため息をついた。

なんとかここまでみんなを導くことができたか。

どうやら、僕の役目は無事に果たし終えたようだ。

ありがとう、みんな。

やはり僕は最高の仲間に恵まれていた。

ここまで導けば、あとはみんなが進められるはずだ。

本当にありがとう。

これで、“完成”するよ。

恐らく、もう気付いているはずだ。

今までずっと発言が少なかった、人間君か伊丹君あたりが。

僕が手助けするのはここまでだ。

後は任せたまよ、“希望”のみんな。

「あつはっはっはっは、どんなオシオキなのか楽しみねえ!!! 蟻さんに食われるの? クモさんに縛られるの? 蝶々さんに吸い尽くされるの? どうやったら私を絶望させられるのかしらねえ? あははははは、あーっはっはっはっはっはっはっはっは!!!」
『はいはい、それじゃあお手元のボタンに』



「お待ちください!!!」

人間君の叫び声が、すべてを止めた。

「この事件は、まだ……!!!」



「大正解だぞよー♡」





「この事件は、まだ……!!」

「私がそう叫んだ直後でした。」

『大正解だぞよ♡』

その声が聞こえたのです。

それは、私の、いや、ここにいる全員の記憶にはつきりと残る声でした。

「ぎひやー!?!?!」

驚きの声を上げたのは、モノパンダも同様でした。

「まさかあいつ……」開けた”のか!?!」

『何やってんだよアホパンダ!! 教室の管理もできない無能な教頭なんて、ボクは大っ嫌いだからね!!』

モノクマが怒鳴り声をあげながらモノパンダをポカポカと殴りました。

「みー…ちゃん…?!」

亞桐様が咳かれた名前こそ、私が一番に思い浮かべた声の主でした。

「みーちゃんの声……しなかった??」

「そ、んな……だってあいつは確かに……」

前木さんが仰るとおり、安藤様は伊丹様の看護もむなしく、息を引

き取られたのです。

当然ですが、裁判場に安藤様の姿は見受けられません。

では、今の声は一体……？

「はあ??? 何よ、せつかくいいところなのにぶち壊してんじやないわよ、クソ翻訳者が!!!」

小清水様は額に青筋を浮かべて私に怒鳴りかかってきました。

「どうせ夢破れるなら最悪の犯罪者として醜く強烈に死んでやろうと思っただのに、お前のせいで台無しになったじゃないのよ!!! どいつもこいつも私の邪魔をしやがって!!! 空耳ごときでギャーギャー五月蠅いんだよ、人間どもめ!!!」

そう叫ぶと、苛立たし気に弁論台をたたく小清水様。

彼女には、安藤様の声は聞こえていなかったのでしょうか……？
いえ、聞こえていたが意に介さなかった……ととらえる方が自然でしょうか。

「空耳、か。そうなのかもしれないが、ここにいる全員が聴いているという確固たる事実もある。興味深い出来事じゃないか」

夢郷君がそう呟いて不敵に笑いました。

元来、彼は不可解な現象に遭遇するとこのように笑う癖があります。

頼もしくもあり、恐ろしくもありますね……。

「その件も気になるけど……。人間君、あなたが投票を遮った理由を先に聞かせてちょうだい。……まだこの事件には続きがあるの……？」

気になって仕方がないといった様子で、伊丹様が尋ねられました。

その言葉とともに、全員が私の方に向き直ります。

裁判の最終局面である投票を引き留めたのですから、生半可な理由では納得していただけないでしょう。

当然、皆様を引き留めたのには理由があります。

何しろこの事件、まだ説明されていない謎があまりにも多い。

小さな疑問ですが、例えば……

【提示コトダマ：ウイルスについて

致死性の高い危険なウイルスで、摂取すると瞬時に体内に流れて患者を侵す。感染すると数十分〜一時間で死に至る。高温多湿を好む。

「まず一つ。ウイルスの件について疑問が生まれました」

私はモノパンダ氏の方を見ました。

「捜査時間中、前木さんと現場の見張りを交代してもらった私は、化学室でモノパンダ氏にウイルスについてのお話をお聞きしたのです。彼はモノウイルスについて、こう言っていました。『体内に入り込むと、瞬時に胃腸まで流れてモノトキシンXを生成すると』」

…きつと、葛西さんも気付いておられたはずです。



【Chapter 3 非日常編① 捜査編】

「ぎひゃーひゃひゃひゃ!!」

「わわっ!!」

箱を見ることに集中していたこともあって、普通にビックリしてしまった。

振り返ると、どこからか現れたモノパンダがゲラゲラと笑っていた。

「よく見つけたなー!! そいつはオイラ特製『モノウイルス』だぜ!!」

「モノウイルス”…?”」

こいつらはモノトキシンXにとどまらず、そんなものまで作ったというのか。

「そいつは体内に流れ込むと、あっという間に胃腸まで到達して大感

染!! 30分以内に感染者を死に至らしめる魔法のようなウイルスなのだぜー!!」



「…あまりにも小さな疑問ではありますが…。モノパンダ氏はこう言っておられました。〃体内に入り込むと、すぐに胃腸に到達してそこで感染する〃と。この言葉をそのままとらえるなら、ウイルスを経口摂取しても口内には残らないはずです」

「…つまりどういうこと?」

亞桐様の問いに答えるべく、私は視線を彼女に向けました。

「…安藤様は、〃ウイルスに感染していなかった可能性がある〃ということです」

「……はああ?!?」

亞桐さん同様、その場にいる全員が驚きを隠せない様子でした。

当然でしょう。

それは、ここまでの議論を根本から覆す仮定なのですから。

「バツカじゃないの!?!? ウイルスの説明には、〃感染性ウイルス〃ってはっきり書いてあったでしょうが!!」

小清水さんが牙をむいて怒鳴り散らしますが、私にも考えがあります。

「確かに感染性とは書いてありましたが経口感染とは一言も書いてありません。唾液ではなく腸液・消化物などを介して感染するタイプのウイルスであれば、口移しだけでは感染するはずがないのです」

私が生物学者である彼女にウイルスの知識を語るなど、思えば不思議な状況です。

「だ、だったらなんで安藤は死んだんだよ!!! ウイルスが体に回ったからじゃねえのか!!」

前木さんの言葉はもつともです。

「それに関してなのですが、私に一つ考えがあります。私のお話を聞いていただけないでしょうか?」

コホン、と咳払いをして私は全員の顔を見回しました。



思えば、先ほどは積極的に発言して議論をリードしていた夢郷君は、一変して全く発言を行わなくなりました。

満足げな笑みを浮かべて、私を見守っています。

…いくら付き合いなれた関係とはいえ、今ばかりは少し不自然な気がします。

しかし先ほど、夢郷君が話していた時は、逆に私は殆ど発言をしませんでした。

何故でしょう……。ずっと考え込まずにはいられなかったのです。

そう考えると、このコロシアイ学園生活で行われる裁判は、少し異常な気がします。

常に議論をリードする一人の人物がいて、他の皆様はそれに意見を出したり、たまに反論する程度。

これは議論と呼べるのでしょうか。

まるで、初めから結論が定まったシナリオを演じているかのようです。

前回と前々回の裁判、それと今回の裁判の前半までは葛西さんが主人公で、彼が絶望に倒れてからは夢郷君に、そしてその次は私にバトンが渡された、ということでしょうか。

そう考えると、よくできた“シナリオ”ですね。



……さて、話がそれました。
議論を続けてまいりましょう。

「もう一度話し合いしましょう。安藤様を殺した死因は何なのか」とにもかくにも、議論を効率的に進めるには皆様の発言を促すほかありません。

私の声とともに、裁判場は再び緊迫した空気に包まれました。

【議論開始】

入間ジョーンズ：「考えてみてください……」

入間ジョーンズ：「安藤様の死因は何だったのでしょうか？」

小清水彌生：「そんなの、私のウイルスに決まってるろーが!!!」

小清水彌生：「私がウイルスを作って仕込んだ本人だぞ!!!」

小清水彌生：「それ以外の死因なんてあるわけないでしょーが!!!」

亞桐莉緒：「もしかして、事前に外傷を受けていたとか……?」

夢郷郷夢：「病気を患っていた可能性もあるのでは?」

伊丹ゆきみ：「ミスリードされていたけど、モノトキシンXが凶器になっっている可能性もあるかもしれないわね……」

入間ジョーンズ：「そうです、伊丹様。あなたの意見に賛成します」

……私の頭に、一つ浮かんだ可能性。

限りなく小さい可能性ですが、「辻褄が合ってしまう」以上は吟味せざるを得ません。

「もし、安藤様が飲まれた解毒薬が、モノトキシンXだった《b》としたら……?」

「なにわけ分かんないこと言ってんだオラアツツ!!!」

すかさず山村様の怒号が反論となって飛んできました。

「解毒剤のビンに入ってたんだから解毒薬に決まってるだろーが!!!」

……そう、普通はそう思いますよね。

薬品のビンには、ラベル通りの錠剤が入っています。

“誰かが手を加えない限り”は。

【提示コトダマ：《b》解毒薬

伊丹が持ち込み、丹沢と安藤に服用させた薬。瓶いっぱいの中身が入っているが、蓋は空いている。

「……」
「ビンの蓋」……

伊丹様が何かに気付かれたようです。

恐らくは、私と同じひらめきでしょう。

「解毒剤と、その周りの薬……。蓋は空いていたのに、中身はいっぱいに入っていた。不自然よ」

「その通りです」と私は付け加えました。

「蓋が空いてあったのに、中身が減っていない。使った形跡がないのです。ひとビンだけなら開け間違いかもしれませんが、奇遇なことに解毒薬全部がそうなっていました。それと対照的なのが、モノトキシンXのビンです」

【提示コトダマ：解毒剤周辺

解毒剤があつた場所の周辺には、医療薬の瓶が並んでいた。蓋を開けた形跡はあるが、中身はいっぱいに入っている。

「今までの議論だと、殺害に使われたのはモノウイルスであつてモノトキシンではありません。なのに、使われていないはずのモノトキシンXはビンの半分の高さにまで減っています。これも不自然ですね……」

「それはアレじゃないか？ 小清水はモノトキシンXが犯行に使われたって思わせたかつたんだろ？ 偽装するために何錠か処分して減らした……とかじゃないのか？」

前木さんがそう言うなら、本人に確認してみましよう。

犯行まで自首してしまった今、恐らく嘘はつかないでしょう。

「そうなのですか、小清水様？」

「ええ、確かに処分してやったわよ!!! 数は確か……………あれ……………？」

ここで、それまで凶悪な表情を浮かべていた小清水様に、急に驚愕の色が浮かび上がりました。

「……………何錠、なのですか？」

「……………十錠、くらい……………」

小清水様の顔はみるみるうちに焦燥と不安に染まっていきました。モノトキシンXの錠剤はビンいっぱいに入っていたのです。

十錠だけでビンの半分まで減るはずがありません。

「つまり、小清水君以外になんらかの目的で錠剤を減らした人物がいるということだね」

夢郷君の言葉に私は小さく頷きました。

「……………それが繋がるのです。先ほどの、” いっぱい詰まった解毒薬 ” と関わってくるのだと」

「あゝあゝ つ!!! 入れ替えたんだ!!!」

無駄にうるさい音量ですが、亞桐様のおっしゃったことこそ、私が言いたかったことです。

「そうです。蓋が開いていたにもかかわらずいっぱいにされていたのは、” 解毒薬の上にモノトキシンXを敷き詰めた ” からののです」

「え、てことは……………」

そこらへんの解毒薬全ての蓋が空いていたのは、犯人が伊丹様がいそうな解毒薬に目星をつけ、その全てにモノトキシンXを敷き詰めたからでしょうね。

「……………当然、錠剤は上から順に使うから……………、私に取り出して丹沢君と安藤さんに使った薬は、……………モノトキシンXだった……………」

伊丹様が無念そうに声を絞り出してつぶやきました。

このトリックによって、犯人は解毒薬を毒薬へ早変わりさせてしまったのです。

「この可能性を確実にするために、モノパンダ氏に一つ実験をお願いしたいのです」

「ほえ??」

と素つ頓狂な声を上げるモノパンダ氏。

言葉で相手を動かすのは私の得意分野ですよ。

「現場に残っていた解毒剤の瓶に、アルコールを流し込んでほしいのです。そうすれば……」

【提示コトダマ：伊丹の解析結果

モノトキシンXは猛毒であり、わずかな摂取でも大量に吐血し、命を失う。一般的な致死量は二錠で、体の弱いものなら半錠でも死に至る。

即効性で、飲んだ瞬間に効果がある。水溶性。

【提示コトダマ：解毒剤のラベル

吐血を抑え、容体を安定させる効用があると書かれている。その他、水溶性、アルコールにも溶ける……など、化学的性質が書かれている。

「そつか!! 解毒剤はアルコールにも溶けるけど、モノトキシンはアルコールには溶けないから、瓶にモノトキシンが入っていれば、アルコールを流しても錠剤が残るってことね!!」

「亞桐様の仰る通りでございます。その実験の様子をここのスクリーンに中継して流すのをお願いしたく……」

「なんでオイラがそんなことをしなきゃいけないんだよ!! そんなことしたら犯人側に不利だろー!!」

今のモノパンダ氏の発言から、やはり真犯人は別にいることが分かかってしまいました。

……悲しいことですがね。

「別に実験をやるだけなんだから、ただ情報を開示するのと変わらないいだろ? テコ入れにはならないと思うけどなあ」

「……………」

前木さんの言葉に、モノパンダは口をふさぐ一方です。

『……………いいよ。やってあげなよそれくらい』

許可を出したのはモノクマ氏でした。

「…認めてくれるのですね」

『あつたりまえじゃない！ ボクは学級裁判が盛り上がるのならなんだってするよ!! 心優しいマスコットキャラってのがウリだからね！』

モノクマ氏が腹を抱えて笑いつつそう言うと、裁判場にスクリーンが降りてきました。

土門さんや御堂様、そして小清水様の動機や過去の映像を映し続けた、あのスクリーンです。



スクリーンには、食堂のテーブルに置かれた解毒剤の瓶が映し出されました。

…背後の壁に広がる血しぶきが、未だにあの時のトラウマを思い起こさせます。

そこに、同じような瓶を抱えたモノパンダ氏がスタスタと現れました。

瓶のラベルには、アルコール類の薬品が入れている表記がされておりました。

ピヨンとテーブルの上に飛び乗ると、モノパンダ氏は抱えている瓶の蓋を開け、中身を慎重に解毒剤の薬品に注いでいきます。

トクトクと…やがて中身は解毒剤の瓶がいっぱいになるまで注ぎ込まれました。

そこにもう一体のモノパンダ氏が現れ、手にしたガラス棒で瓶の中を攪拌し、かき混ぜていきます。

モノパンダ氏がガラス棒を動かすたびに、中の錠剤が消えていきます。

…いえ、何度かき混ぜても、解けずに残る錠剤がありました。

「ふう…ふう…ふう…。はい、オシマイ!! 分かっただろ? ここには

アルコールに溶けない錠剤も混じってたの!!」
モノパンダ氏が汗をぬぐいながらそう叫ぶと、スクリーンの中継は途切れました。



「決まり……みたいね……」

伊丹様の言葉に異議を唱える者はおりませんでした。

「これで分かりましたでしょうか…？ 安藤様を死に追いやつたのは、実のところ解毒薬として用いられたモノトキシンだということなのです」

私は皆様の方を向き、自らの意見をまとめました。

「じゃあ、安藤を殺した犯人は、モノトキシンXを解毒剤の上に敷き詰めた奴ってことだよな…？」

前木さんの問いに私は頷きました。

実のところ、私は事件について可能性の話をしただけであって、犯人の目星はまるでついていないのです。

悪戯に議論をかき回したただけだと言われればそれまでかもしれませんが、少なくとも小清水様の反応から察するに、彼女が犯人でない可能性もあるのもまた事実です。

つまり、議論は事実上ふりだしに戻ったということに……。

「バカ翻訳者が!!!」

【小清水彌生の反論】

「小清水様……？」

彼女は相変わらず鬼のような形相で私を睨んでいます。先ほどとは少し視線から伝わる意志が違います。

我々と同様、真実を追い求めようとする意志を感じます。

そんな彼女が、私に何を言おうというのでしょうか。

「お前の推理は正しいと思った。途中まではね。確かに、何者かに

よって私のトリックは何者かによって破られた。……でも、お前は大きな思い違いをしているのよ!!」

私の思い違い……?

何が間違っているというのでしょうか?

いや、そもそも凶悪な殺人者たるこの人の言うことを信用してよいのでしょうか?

見定めさせていただく必要がありますね。

小清水彌生：「安藤未賤がモノトキシンXで死ぬはずがないのよ!!!」

入間ジョーンズ：「何をおっしゃるのか!! 先ほどの私の推理でモノトキシンXが使われたのは明らかでしょう!!」

小清水彌生：「そう、モノトキシンXは確かに使われていたのよ!! だけど、それだけで安藤未賤が死ぬはずがないのよ!」

入間ジョーンズ：「意味が分かりません!! 使われたというなら、なぜそれが死因にならないと言えるのですか!!?」

小清水彌生：「それがお前の限界か、翻訳者」

【使用コトノハ：伊丹の解析結果

モノトキシンXは猛毒であり、わずかな摂取でも大量に吐血し、命を失う。一般的な致死量は二錠で、体の弱いものなら半錠でも死に至る。

即効性で、飲んだ瞬間に効果がある。水溶性。

「……?」

「伊丹ゆきみ、貴方に一つ聞きたいの」

妙な圧力を感じてたじろぐ私をよそに、小清水様は伊丹様に尋ねました。

「安藤未賤に飲ませた」解毒薬だと思っていたものは何錠?」

「……飲ませたのは一錠。症状が良くならないからもう一錠飲ませようかとも思っただけど……副作用が怖くて……」

「……ふうん。なるほど。じゃあ間違いないわね。伊丹ゆきみ、モノトキシンXの“致死量”は何錠?」

「弱った人なら半錠、健康な人なら二錠……。……あああ……つ!!!」

伊丹様は、普段からは想像もつかないほどに上ずった悲鳴を上げま

した。

そして、私の拙い脳でも小清水様の言わんとすることが見え始めてきました。

「安藤様の健康体では、あの一錠だけでは死に至らない……ということですか？」

「フン、そうよ」

吐き捨てるように小清水様は言いました。

「…そして、これが最後の謎。モノウイルスは経口感染しないはずなのに、安藤未賤は丹沢駿河に口移しを行った直後から吐血と発作を発していた。それは何故かしらね？」

小清水様は続けて私たちに挑戦的な笑みを投げかけながらそう問いました。

彼女にはもうすでに謎が解けている、ということでしょうか…？

安藤様が行ったのは、丹沢さんへの口移し…。

その時に与えた解毒剤も、実際にはモノトキシンXだったということになりますね。

おかわいそうに、既にモノウイルスで満身創痍だった丹沢さんには、モノトキシンXによる苦しみまで課されたということですね…。

しかし、伊丹様のメモでは、“衰弱している方への致死量は半錠”と言っていましたね。

「……ねえ、ひよつとして……」

「…なんでしよう、亞桐様？」

「ウチらはずっと勘違いをしていたのかも…。先入観で判断して、丹沢の死因を見誤っていた気がしてきた…」

亞桐様が仰ったことの意味…。

……そうか!! あの情報を見落としていました!

【提示コトダマ：ウイルスについて

致死性の高い危険なウイルスで、摂取すると瞬時に体内に流れて患者を侵す。感染すると数十分〜一時間で死に至る。高温多湿を好む。

【提示コトダマ：伊丹の解析結果

モノトキシシンXは猛毒であり、わずかな摂取でも大量に吐血し、命を失う。一般的な致死量は二錠で、体の弱いものなら半錠でも死に至る。

即効性で、飲んだ瞬間に効果がある。水溶性。

「時間、ですよ……!!」

そう、死に至るまでの“時間”。

「モノウイルスでは、体内に侵入してモノトキシシンを生成するまでに時間がかかる……とモノパンダ氏は言っておりました。死に至るまでに、ウイルスだと最低でも数十分はかかるのです。しかし、今回の事件で丹沢さんがなくなるまでにかかった時間は五分足らず。特に、安藤様が口移しを行ってからすぐに亡くなりました。つまり……」

「丹沢君にとどめを刺したのは、モノトキシシンで間違いないということですね……」

いつの間にか正気に戻っていた山村様の言葉に、私は強くうなずきました。

「でもさ、口移しの後にみーちゃんも血を吐いたじゃん……? あれはいったいどうしてなの……? そもそもそれがなかったらゆきみんも解毒剤だと思ってたモノトキシシンを投与しようとも思わなかったわけだし……」

亞桐さんの疑問はもつともです。

ウイルスが経口では感染しないと先ほど結論付けた以上、安藤様の体に起きた異変は何か別のものによって起きたと考えるしか……。

………??

待てよ………?

「〃半分〃〃……??」

声を上げたのは山村様でした。

「錠剤を口の中で半分こして、丹沢君にとどめを刺しつつ自らも症状を背負う……」

「そ、そんなことありえんのかよ!!」

…：そういえば、あの証言…！

【提示コトダマ：安藤の病状】

安藤が倒れた際の初期症状は丹沢のものより軽かった。

初期症状が軽かったというのは、その時点で〃半分〃しか摂取して
いなかったから…!!?!

そして、その後に解毒剤だと思われるモノトキシンX一錠を投
与され……

摂取量は〃1.5錠〃…!?

「伊丹君。安藤君は確かに亡くなったのかい？」

夢郷君が不気味なまでに穏やかな笑みを浮かべて尋ねると、伊丹様
は顎に手を当てて思い出します。

「…一瞬しか確認してなかったけど…脈は確かに止まっていたはず
……」

「そりゃ1.5錠飲んだんですもの。〃仮死状態〃ぐらいにはなるは
ずよ」

小清水様が述べると、全員の顔色が一気に変わります。

「そ、そんな!! じゃあ、みーちゃんはまだ……!!」

「〃生きている生徒は学級裁判に参加しなければならない〃。それが
このルール。だからモノクマとモノパンダは仮死状態の生徒を
放っておくわけにはいかない……。そうでしょう?」

『クマに二言はないね』

小清水さんの問いに対するモノクマの反応がすべてを物語ってい
ました。

現実には、何よりも辛く苦しいのです。

とづくに分かつていたはずなのですけどね…。

「小清水様の犯行の裏に隠されたもう一つの真実を、この事件の本当の謎を、今明らかにします…」

《クライマックス推理 Extra —— 真実への翻訳 ——》

Act. 5

……超高校級の昆虫学者、小清水彌生様が仕掛けた事件は破られました。ですが、今回の事件はそれで終わりではありませんでした…。

事件前夜、とある人物……この事件の真の犯人が化学室に忍び込みました。その人は、モノトキシンXと解毒剤の瓶を先に開け、モノトキシンXを解毒剤の錠剤の上に敷き詰めたのです。このせいで、伊丹様が解毒剤だと思って投与したのは実はモノトキシンXだった…というわけです。

犯人は解毒剤の作用、そして伊丹様がそれを把握していることもすべて知っていました。だからこそ、モノトキシンXに効果がありません。解毒剤すべてにモノトキシンXの錠剤を敷き詰めたのです。

Act. 6

事件の時、さらに犯人は驚異的な行動に移りました。伊丹様が解毒剤だと思って投与したモノトキシンXを、犯人は口移しで飲ませるフリをして、自分と丹沢さんに半錠ずつ投与したのです。衰弱していた丹沢さんはこれによって即死……。半錠を摂取した犯人にもすぐに症状が現れました。

さらに犯人は、伊丹様が投与したモノトキシンXも体内に摂取しました…。モノトキシンXの致死量は二錠。この時点で1.5錠を服用した犯人は、治療もむなしくやがて仮死状態に陥ったのです。

「小清水様を利用し、完全なトリックで私たちを欺いた真の犯人……」
「普段の姿からは想像もつかない狡猾性と凶悪さを兼ね備えた女性……それは……」

「超高校級の漫画家」……安藤未賤様です……!!」



これまで以上に、「達成感」も「勝った気」も感じない、虚しい勝利でした。

誰も言葉を発しようとしません。

「さあ、ずーっと陰で私達を嘲笑っていたんでしよう!!! 出てきなさいよ!! 安藤未賤!!!」

小清水さんが、裁判場全体に響き渡る声でそう叫びました。

……すると、その声に答えるかのように。

『あー。あー。マイクテス、マイクテス』

聞きなれた声がアナウンスとなって聞こえてきました。

バンツ。

先ほどの実験の様子を写したつきり下ろされたままになっていた

スクリーンに、恐るべき光景が浮かび上がりました。

「!!!??」



その場所は、何やらモニターや機械がたくさん並んだ、ハイテクな部屋。

モニターの一つ一つには、なんと私たちが生活している個室などの様々な場所の様子が映し出されているではありませんか。

私は確信しました。

そこは監視カメラの映像を眺める部屋…。

つまり、このコロシアイの管理者の…。

いえ、さらにそれよりも衝撃だったのは。

画面の中央に映った、大きな椅子に腰かけた人物。

満面の笑みを浮かべた安藤様でした。

「おっひさしぶりだぞよ〜〜!!」

「……………」

その様子を一言で表すならば、啞然。

誰も声を発すことができませんでした。

「改めまして、このコロシアイの黒幕様である、安藤未賤だぞよ!!
みー様とかみー閣下とか好きに呼ぶとよいぞよ!!」

『ち・が・う・だ・ろーろー!!!!』

突然、恐ろしい形相でモノクマ氏が怒鳴りました。

『やっぱりそこにいたんだな、バカ漫画娘ー!!! でたらめばかり
言っつてボクを怒らせるんじゃない!!』

「むわはははっ!! どうせ誰も使つてない部屋なのだし、ちよつとく
らいよいではないか〜! まあ、機械はさっぱりいじれぬのだがのう

!!」

画面の向こうの安藤様は大きく口をあけて笑いました。

「さっきの空耳もどきも、そのアナウンスから発していたわけね……」

「小清水殿、大正解だぞよー!!」

「……………」

小清水様はぐつと歯をかみしめ、強い目つきでスクリーンの安藤様を睨みつけました。

「ちつくしよー、どうやってそこに入ったんだ……!? さっさとここに降りて来いよー!!」

モノパンダが両腕を振り上げて怒鳴りつけました。

「うーむ、ここは居心地がよかったのだがのう……。じゃあそっちに行くから待っててほしいぞよー!!」

安藤様がそう言うと、プツンと映像は途切れました。

五分もたたないうちに、エレベーターが動き、中から安藤様が現れました。

「おっは〜!! だぞよ〜!!」

それは、まさしくいつも通りの安藤様。

どんな時でも笑顔でのらりくらりとしている、私たちがよく知る彼女の姿でした。

「みーちゃん……本当に……生きてたんだ」

亞桐さんがやつとの思いで震える口を動かし、声を出しました。

「おかげさまで、モノパンダ殿の超回復術的なアレで治してもらえたんだぞよ〜!!」

「いえーい!と安藤様は右の拳を高くつきあげました。

「あれれ? どうしたのだぞよ? みんなテンション低めだぞよ?」

「黙れ、女狐め!!」

小清水様が裁判台をたたいて吠えます。

「この私を欺きやがって……!! この私の崇高な“野望”を弄びや

がって!!!!!! 貴様が……貴様が邪魔さえしなければ……!!!
「おおー!!!」
「……?!?」

しかし、そのような剣幕の小清水様に怒鳴られてなお、安藤様は目を輝かせていたのです。

「カツコいいぞよ!!! 吾輩が書いてきたどのキャラよりも輝いておるぞよ!!! やはりスクリーン越しに見るより生で見るに限るぞよ!!!
!!! むわはははっ!!!」

「……気持ち悪い人間め……!!!」

小清水さんは目線を逸らして憎悪のつぶやきを放ちました。

「安藤っ、お前、どうしちゃったんだよ!!!」

前木さんが涙をまき散らしながら叫びました。

「なんで丹沢を……俺のダチを殺したんだよ!!! あんなに仲良かったのに!!! お前は丹沢のヒロインじゃなかったのかよ!!!」

「君の行動も非常に不可解だ。ほぼ完全な犯行だったのに、なぜわざわざさつきアナウンズで声を発して、自分の存在を教えたのか？ それに、君が丹沢君とともに毒を飲んだ理由は？ 伊丹君が追加でモノトキシンを飲ませていれば、君は確実に死んでいた。自分が死なない確信はあったのかい？」

夢郷君はこんな状況でもひたすらに冷静です。

「むはははははっ!! 質問がありすぎて一気には答えられないぞよ!!! ……というわけで次回!!! ついに明かされる凶悪犯罪者の真実!! 絶望の先に見えるのは希望か？ それとも……!? 次回、『俺のヒロイン達が修羅場過ぎて人類が滅亡しそうな件。』最終話!!! おったのしみにー!!!」

そして、安藤様は膝をついて放心状態になっている葛西さんに後ろから抱きつき、持ち上げるような格好で立ち上がらせました。

「ほれほれ、ゆっつきー殿!! 元気出すぞよ!! 次回予告も済んだし、E Dのダンスと一緒に踊ろうぞよ!!!」

安藤様は葛西さんの腕を持ち、チャカチャカとヘンテコな動きをさせています。

「絶望ダンス！ 野望まみれ少年に〜！」

安藤様の唄が裁判場に響きます。

それは、これまでにない大いなる絶望の予兆にも思えました。

ですが、どんな真実が待っているかと、絶望が待っているかと、私は生きねばなりません。

大切な人に……私を待っている、結梨にもう一度会うまでは……。

……絶対に。

「あいくにく〜！ 馬鹿につ〜ける！ 薬はないよ〜！！」



…ウチは、“今回も”無力だった。

馬鹿なのは昔から自覚していたけど、これほどまでに何もできないなんて思わなかった。

ドンドン仲間が死んでいくのを見て、いつもいつも、怖さで何も考えられなくなって…。

いや。

違う。

ウチは、“転嫁”してるんだ。

“誰かが何とかしてくれる”。

優秀な仲間の存在に逃げ込んで、自分で道を切り開くことすらできなくなっちゃったんだ。

命を懸けているはずなのに、なんでこんな風になっちゃってるんだろう？

それでもダンサーかよ。

こんなのが、アスリートって言えんのかよ??

「いやあ〜、今回の裁判は長かったなあ〜!! じゃあ犯人も決まったようだし、投票しちやっつけてくれ〜!!」

モノパンダが笑顔でみんなに呼びかけた。

もうあいつに怒る余裕すらない。

間違えたら死に直結する投票だけど、それは実にあっさりしたものだっただ。

もう誰も、入間が出した結論に口を出すことはできなかったのだから。

スロットに揃ったのはみーちゃんの顔。

そして、払い出される大量のモノモノメダル。

それが正解だって、信じたくなかったよ。

『うつぶつぶぶ〜!! だいせいかーい!! 今回、〃超高校級のフィギョア製作者〃、丹沢駿河君を殺したのは、〃超高校級の漫画家〃、安藤未賊さんでしたー!!』

モノクマの言葉で、疑惑は真実へと変貌を遂げた。

「むわははははっ!! さっすが吾輩の同級生!! 超高校級の希望達だぞよ!! 吾輩はクロトとしてとても鼻が高いぞよ!!!」

みーちゃんは高らかに笑って拍手を送った。

これがみーちゃんだなんて……まだウチには信じられない。

「…早く教えて。あなたの〃動機〃を」

ゆきみんの声が聞こえた。

…今は、聞こう。

これから死んでいく友達の、最後の告白を。



「それでは、みー閣下の知られざる真実の物語。始まり始まり〜!」
みーちゃんは楽しそうに手をたたきながらそう告げた。

どうして、そんなに無邪気でいられるんだろう?

丹沢がどんな死に方をしたか、ゆきみんから聞いたよ。

死にたくないって言いながら、死んだんでしょ?

この世で一番苦しそうな顔をして死んだって聞いたよ。

痛い、苦しい、死にたくない、助けてって……。

「こんなの……ひどすぎるよ……」

その言葉と大粒の涙が、思わず漏れ出していた。

…ああ、今はどうあってもみーちゃんに動機を語らせてあげな
きや。

邪魔しちやった……。

…と思つて顔を上げたウチは、驚くべき光景を目の当たりにした。

「……本当だぞよ……。こんなの……ひどすぎるぞよ……」

みーちゃんも、ウチと同じように大泣きしていた。

「なぜ駿河が死ななければいけなかったのだぞよ……吾輩は本当に悲しいぞよ……」

「……………??」

…意味が分からない。

そんなのこつちが聞きたいよ。

「…でもしようがなかったぞよ。心躍る激アツな裁判を描くには、小清水殿のトリックが最適だったのだぞよ…」

……はあ???

「だってこんなに創作意欲をそそられる体験、もう二度とないぞよ!! 仲間の悲惨な死! 広がる謎! ヒロインの豹変!! 主人公の崩壊!! そして紡がれるもう一つの真実!! 姿を現した衝撃の真犯人!! あー…今すぐにも描きおこしたいくてたまらないぞよ…!!」

みーちゃんは先ほどの表情から打って変わって、鼻息を荒げながら興奮した様子で話した。

「今までの事件でもずーっと考えていたぞよ…。どうすれば一番胸アツな事件になるのか…。ギリギリの勝負を楽しみ、真実という名の絶望に打ちひしがれるのか…。」

描きおこす…?

漫画に、ってこと…?

ウソ、でしょ…?

漫画の題材のために…??

…意味…:…わかんない…。

「…あなたはこれからオシオキ…すなわち処刑を受けるのですよ…? 死んでしまつては、漫画を描くこともできないではありませんか…!!」

みんなが言葉を失う中、辛うじて人間がそう指摘した。

「大丈夫だぞよっ!! 例え吾輩の肉体が滅びようと、吾輩の強き魂は冥府にとどまり、現世へ干渉して作品を紡ぐのだぞよ!!」

「…??」

みーちゃんが何を言っているのか、一から十まで理解できなかつた。

「分からないのかえ?? もうっ!! 吾輩の処女作『冥府作家ボーンズ』

を読んでおくぞよ!!」

みーちゃんは腕をブンブン振って怒っていた。

その作品は確か、小学生の頃にみーちゃんが初めて描いた漫画で、みーちゃんはこの作品の大ヒットによって有名になったんだ。

えつと……それと今の話がどう関係あるって言うの……?

「作品への強い思いを抱いたまま交通事故で死んだ作家のリョースケは、閻魔様のはからいで魂を冥府にとどめ、作品だけを現世に送り出す能力を得るぞよ!!」

みーちゃんは意気揚々と自身の作品のあらすじを語りだす。

「閻魔様はこう言ったぞよ!!」 冥府にて作品を紡ぐ能力。これが得られるのは、自らの芸術に命を捧げられるものだけだ”…と!! つまり!! 吾輩こそその能力を得るに相応しい逸材なのである!!」

……へ?

「でも…それって、みーちゃんの漫画の中の話でしょ……?」

ウチはたまらず堪えかねてみーちゃんにそう言った。

きつと、みんな同じことを考えていたはずだから。

すると、みーちゃんは……。

「そんなことないぞよ!!」 創作者たるもの、自分の世界を信じずしてどうするぞよ!! 吾輩は自分が描いた世界はきつと存在するって信じてるぞよ! だから今日まで漫画家として頑張ってこられたのだぞよ!!」

息を荒げてそう語り込むみーちゃんの姿は、コロシアイなんて起きてない普段の姿と何一つ変わらなかった。

そう、何も変わらないんだ。

みーちゃんにも、さっきの彌生ちゃんみたいに、“裏”があると思っていた。

人類全滅とまではいなくても、何か恐ろしい野望とか陰謀を隠し持っているのだと思っていた。

いつものみーちゃんとは全く違う、凶暴で凶悪なもう一つの人格を備えているのだと思っていた。

でも、ウチは思い知った。

このみーちゃんは、とてつもなく、“いつも通り”だった。どこまでも純粹なみーちゃんそのものだった。

純粹でまっすぐで、それでいて根本が壊れている”超高校級の漫画家”だったんだ。

「吾輩は…」力”が欲しいぞよ…」

急に静かな声になって、みーちゃんはそう言った。

「この世の誰よりも素晴らしい漫画を、魂を揺さぶる漫画を描く力が欲しいぞよ……」

みーちゃんにとつては、人生における経験の全てが作品として昇華していくのだろうか。

だから、この裁判もみーちゃんの作品の一部、その演出の一つに過ぎなかったんだ。

「だから吾輩にとつてこのコロシアイとは!! 命を賭けて己を高める一世一代の大勝負なのだぞよ!!! どうせ命を賭けるなら、吾輩が今までに見たこともないような最高のシナリオの事件にしなければならなかったのだぞよ」

「…君にとつて、この事件は最高の作品となりえたのかい？」

不意に、夢郷がみーちゃんに問いかけた。

なんでアンタはそんなに冷静でいられるの…？

「うむ、これならすっばらしい漫画に仕立て上げられそうだぞよ!!!」

みーちゃんは意気揚々と自慢げに答えた。

「吾輩は生まれて初めて、自分の作風に”恋”を織り交せてみたのだぞよ!! 片や悲劇の事件で死別を遂げたカップル。片や昆虫狂の女に利用され続けていたカップル。二つの思いがぐちゃぐちゃに入り乱れ、複雑怪奇なミステリーを生み、そして真実という名の圧倒的な絶望へと帰結する…。恋をし、裏切られ、身も心も朽ち果ててゆく二人の男子の青春物語…。嗚呼、漫画のタイトルを何にしようか考え始めたら朝も起きられないぞよ!!」

「ふ、ふざけるな………」

震えるような声でつぶやいたのは、当初のクロ……彌生ちゃんだった。

「そんなことのために……そんな下らないことのために、私の崇高な使命を邪魔したのか……!!!」

「おぉー!!! いいぞよいぞよ!! もっと迫力をつけて!! もっとマツドっぽく!!」

悪魔のような憎悪の情を向けられても、みーちゃんは恐れるどころか目を輝かせるばかりだった。!!

「貴様ああああああ!!!」

「!! おやめください!! 小清水様!!」

「あつ!! 彌生ちゃん……!!」

みーちゃんの態度で怒りが爆発したのか、彌生ちゃんは全身全霊で吠えながらみーちゃんに襲い掛かろうとした。

それをなんとか隣にいた人間が後ろから羽交い絞めにするような格好で押さえつけた。

やがてそこに夢郷が加勢し、彌生ちゃんはみーちゃんに向かうことはできなくなった。

「離せ離せ離せ離せ離せええええええええええ!!! 貴様ああああ!!! 貴様だけはああああああ!!!」

しかし、彌生ちゃんが怒りをあらわにすればするほど、みーちゃんと同じように悦びを露わにしていた。

「むわはははは!! あんな明け透けなトリックでみんなを出し抜こうなど、小清水殿も怖い顔して可愛いところあるのう! 吾輩に言わせれば、先の二人の事件よりよっぽど簡単に丸わかりしてしまったぞよ!!」

取り押さえられている彌生ちゃんに近づき、馬鹿にするような笑顔でみーちゃんは言い放った。

……そういえば、みーちゃんは、“作品として面白くするために” 事件を複雑化したと言っていた。

「いつからッ……。いつから見破っていた……!!?」

「ずーっと前からだぞよ。小清水殿がモノウイルスを作っていた時だって、ぜーんぶ吾輩にはお見通しだったぞよ? 翌日の小清水殿の異様な疲労の様子、そこに疑問を覚えてモノウイルスの製作キットを

調べたらドンピシャだったぞよ。キットの器具に使用形跡アリ。
……ふふつ、真実は、いつも一つだぞよっ!!」

信じられなかった。

ウチらはその時、釜利谷とリユウの死に動転して何も考えることな
んでできなかったのに。

みーちゃんはそんなことにまで気付いていたの？

「……………化け物め……………」

そう言っただけで力なく床にへたり込んだ彌生ちゃん表情には、心なし
か怯えの色が見られた。

「ひよつとしてあなた……………今までの事件もとっくに気付いて……………」

ゆきみんがそう言うと、みーちゃんはゆきみんの方を向いてニコツ
と笑った。

「……………それは、ヒ・ミ・ツ……………だぞよ♡」

ぞくつ、と背筋が凍るのをウチは感じていた。

「だって、全ては “脚本通り” ……だから、のう？」

そう言いながらみーちゃんが歩み寄ったのは、さつきみーちゃんに
無理やりダンスをさせられていた葛西だった。

「……………? あ、れ ……? あ ん どう さ
ん ……? ……」

みーちゃんが目の前に立つと、それまで死人のように何も話さな
かった葛西が、久しぶりに言葉を発した。

死んだ魚のような虚ろな目は相変わらずだったが、眼球はみーちゃ
んの方を向いていた。

「ゆつきー殿、元気出すぞよー!」

相変わらずいつも通りの表情でみーちゃんは呼びかけた。

「あんどーさん……………ほく、ほく……………」

人格がおかしくなった葛西の目には大粒の涙が浮かんでいた。

「おおお、ゆつきー殿も可哀想にのう。よーしよーし!」

そんな葛西を慰めるように、みーちゃんは優しく自分の胸に抱きし
めていた。

「お前は……………どっちなんだ…!!」

声を上げたのは前木だった。

「仲間が大切なのか大切じゃないのか……どっちなんだよ……!?!」

丹沢の死に涙し、葛西を優しく慰めるみーちゃんと、彌生ちゃんを騙して丹沢を毒殺したみーちゃん。

相反する二つの姿が同じみーちゃんの中に存在していた。

今更どちらかだけが本性なんてことはないんだろうけど……。

「その問いに答えるためにも、同じ創作者としてゆっきー殿に言っておきたいことがあるぞよ」

ここにきて初めて、みーちゃんの顔から笑みが消えた。

「吾輩は人間だぞよ。お友達が死ねば悲しいし、リャン様の時から駿河の時まで、ずっとそれは変わらないぞよ」

「じゃあ、お前はなんで……」

「吾輩は、人間である前に”創作者”なのだぞよ」

「……!?!」

沈黙が走る。

「そんな……。逆、逆ですよ!! 創作者である前に、人間であると言うべきでは」

と、巴ちゃんが言いかけたけど……。

「違うぞよ! 創作は人生よりも深い。創作は人生という個々の枠組みを超え、知的能力を共有する生物全体に作用する概念なのだぞよ。創作は人の魂を揺るがし、記録として残り、それを作り上げた人間が死んで忘れ去られたとしても、作品として恒久に生き続けるぞよ。だから吾輩は、全ての人類のために我が創作を高める力を欲した」

次第にみーちゃんの顔から感情が消え、口調は無機質なものへと変わっていった。

なまじ今までのみーちゃんとは思えない知的で高度な言葉を交えながら、みーちゃんは自分の”創作観”を語った。

「創作は、人間の写し鏡。人間の生きざま・人間の全てを読むものに伝わる唯一無二の手法なのだぞよ。そして人類は吾輩の創作から吾輩が描き出した人間の姿・世界の姿を知る。学ぶ。その繰り返しで人間は進化していくのだぞよ。だから吾輩は自分のために、人類のため

に、欲し続けなければならぬぞよ。人間の本当の姿を導き出すような体験を、そしてそれを緻密に描き出す能力を！」

両腕を広げてみーちゃんは高らかに言った。

「お友達が死ぬのは悲しいけど、創作のためだから仕方ないぞよ。吾輩には“知”と“力”が必要なのだからもう！」

“創作のため”……。

“知”と“力”のため……。

それが、今回の事件の動機……？

「ね、ゆつきー殿？」

みーちゃんはいつも通りの笑顔に戻って葛西に向かって言った。

「ゆつきー殿も創作者だから、吾輩の気持ち分かるよのう？」

「……あんどーさん…… あんどーさん……」

葛西はまともな返答ができていなかった。

「ふふふっ！ ゆつきー殿は吾輩なんかよりずっとずっとすごい創作者なんだから、こんなところで立ち止まっちゃダメだぞよ！ 吾輩は冥府で頑張るから、ゆつきー殿は現世でいっっぱいすごい作品を仕上げてほしいぞよ！」

「あ……ぼく……ぼくは……」

「……この作品は、この世で最も美しい創作品。……絶望の脚本“、なのだからのう？”

「……!？」

『はい、ストップスト——ツプ!! 話長すぎだよ安藤さん! 尺稼ぎしたい作者の思惑が露骨に出ちゃってるよ!! もうおしまい!! こつちだつてずっと待つてるんだからさ!』

みーちゃんの言葉を遮るように、モノクマが割り込んできた。

「うゝむ、せっかくいいところだったのに、もうおしまいか……。残念だけど、みんなとは一旦お別れだぞよ！」

みーちゃんはいいつも通りの屈託のない笑みでウチらに手を振った。

「これで、終わっちゃうの……? こんな終わり方で……?」

ウチは思わずそう言った。

誰も納得なんてできるはずがないだろう。

「よく見なさい、莉緒」

そんなウチに、ゆきみんが静かに呼びかけた。

「これが、三度目の“絶望”。私たちが止められなかった、残酷な現実。目を背けちゃダメ……。これが彼女の——安藤未賤という人間の本性よ」

両手を広げて無邪気な高笑いを上げるみーちゃん。

それは、“絶望”そのものだった。

『ではでは、長らくお待たせしましたが張り切っていきましょう！

レッツ、オシオキターイム!!』

「ぎひゃー!! 今回セリフ少なくて悲しいぜ！ レッツ、オシオキターイム!!」

『アンドウ ミザイ さんが クロに きまりました。 オシオキを かいし します』

奈落の底から鎖が伸び、みーちゃんの首をしっかりと掴んだ。

同じように囚われていった土門の背中が、秋音ちゃんの涙が鮮明に脳裏によみがえる。

しかし、あの二人とみーちゃんが決定的に違うのは、死への向き合い方だろう。

二人とは似ても似つかぬほど陽気で、自身に満ち溢れた態度でみーちゃんは鎖を身に受けた。

「あつ！ いい決め台詞思いついたぞよ！」

直後、みーちゃんは叫んだ。

「“創作とは、人生の”：あつ、ちよつ、最後まで言わせて、あーーっ!!」

何を言おうとしたのか分からないが、叫び声と共に、みーちゃんは奈落の底へと消えていった。

もう二度と見られない友達の最期の姿なのに、何故かウチは恐ろし

いほどに冷静に見つめていた。
始まる。

オシオキという名の地獄が。
ウチらの目の前で。



画面に映し出されたのは、火花が散る工場のような場所。
製鉄所だろうか。

安藤が好きなの血沸き肉躍る激闘”を繰り広げるには最高の戦場
となるだろう。

そんな場所に、安藤はポツンと立っていた。

安藤は、これから自分にどのような試練が課されるのかと、興奮気
味の表情で周囲を見回す。

下方から吹き上げる熱気が彼女の頬を撫でる。

汗がじんわりと染み出し、頬を伝って流れ落ちていく。

まさに、胸がアツくなるようなバトルをするにはうってつけの雰囲気
が完成していた。

さあ、これからどんな”アツい”展開が待っているのだろうか？

次の瞬間、突如として上から降りてきた鎖に安藤の体は束縛されて
いた。

その鎖は自由意思をもったかのように彼女の体に絡みつき、右手を
上にした状態であつという間に縛り上げてしまった。

予期せぬ事態に安藤は驚き、抵抗しようと身をよじらせるが、鎖は
びくともしない。

そして鎖でぶら下げられた状態のまま、ゆつくりと床が開いていっ
た。

下を見下ろした安藤の目に映ったのは、視界の端から端までを埋め
尽くすほどの巨大な溶鉱炉。

グン、と鎖が下に向けてゆつくりと動き出した。

“ あれ？

どこかで見たような展開…。 ”

それは、全米が涙した、この世で最も“アツイ”お話。

I, I l l n o t b e b a c k .

鎖は躊躇いなく下に降りていく。

溶鉄がわが身を焼き尽くす激痛が、すぐに安藤の脳裏に浮かび上がった。

一瞬で安藤の表情が凍り付き、その顔からは冷や汗が溢れ出た。

それでもはじめのうちは狂喜が勝っていた。

これは彼女自身が望んだ“展開”。

彼女が思い描く最高の終焉なのだ。

そんな安藤の心を見透かしたかのように鎖はゆっくりと、ゆっくりと下がる。

途方もなく長いその時間は、狂喜という名のベールを安藤の身体から少しずつ剥がしてゆく。

足先を刺激する熱気はいつしか人間の皮膚が耐えうる温度を超え、つま先に走る激痛となって安藤に襲い掛かった。

これが、自らが望んだことなのか？

こうして絶望のタガはあっさり和外れた。

“アツイ”展開を期待していた安藤は、すぐに自分の軽薄さを恥じた。

何度も身をよじらせ、絶望の表情を浮かべながら必死に抵抗するが、鎖はほどけない。

グツグツと煮えたぎる溶鉄が、目前にまで迫っていた。

安藤の顔を伝って流れ落ちていく涙が溶鉄に落ち、蒸発する音のはっきりと聞こえるようになっていた。

これからその身に刻まれる地獄のような痛みを前にして、既に泣き叫ぶ安藤の声は、画面の向こうには届かなかった。

一挙に10 cmほど、鎖が落ちた。

ズブリ、と安藤の両足が溶鉄に浸かる。

その瞬間、安藤は眼球が転げ落ちそうなほど目を見開き、口角が裂けんばかりに口を開いて絶叫した。

溶鉄はあつという間に肉を焼き、骨の髄までを溶かし、何にも勝る凄惨な激痛をもたらしていく。

安藤の苦しみを嘲笑うかのように、鎖は非常にゆつくりと降りていった。

やがて膝が、ついで腿が、溶鉄に浸かっていった。

安藤の体からは既に意識が抜け落ちかけていた。

早く死にたい、この地獄から抜け出せるのなら一刻も早く死にたい、それだけに彼女の心は支配されていた。

もはや涙すらも止まっていた。

先ほど意気揚々と語っていた情熱も、夢も、欲望も、全て意識のあなたに吹っ飛んでいた。

とにかく早くこの地獄から抜け出したい、それ以外の全ての感情が排除されていたのである。

腹まで溶鉄に浸かった。

安藤は今まさにこと切れようとしている。

その瞬間。

一気に鎖が落ち、ドボン、と彼女の全身は溶鉄に落ちた。

中指を立てた右手だけを残して。



終わった。

……終わったんだ。

みーちゃんは、死んだ。

あつさりとしたオシオキだった。

複雑な仕掛けも背景もなく、ただみーちゃんがマグマのような鉄の中に落とされるだけのシンプルな“地獄”。

みーちゃんは丹沢を殺し、みんなを欺いた挙句、理解しがたい動機を独白した。

あの苦しみは、あるいは当然の報いなのかもしれない。

だけど、あそこまで苦しむ必要はあったのだろうか？

たとえ極悪人でも、同じ屋根の下で過ごした仲間を、“当然の報い”なんて冷静な言葉で切り捨てるなんてことはウチにはできなかった。

「…彼女は今頃“冥府”とやらの門にいるのでしょうか…」
入間が悲しそうに言った。

「もしそうなら、安藤君の言う通り彼女の作品が現世に送られてくるそうだが。果たしてそんなことは起こりうるかな？　僕は起こらないと思うがね」

そんな入間に、夢郷は冷徹に言い放った。

「もう……やめましよう……。いくらあんな人でも、なじったら可哀想です…。丹沢君も、きつとそんなことは望みません……」

巴ちゃんの言葉を聞くと、みんなは黙り込んだ。

『……どうしたのさ、君達。前の二回よりリアクション薄くない？
絶望しすぎて疲れちゃったの？』

モノクマが不思議そうに尋ねる。

『そんなんじゃないよこっちは張り合いがないよーっ!!　ボクをクマらせるくらいの元気を見せてよ!!　せつかく安藤さんが“ヒント”を残していったのにさあ!』

「……ヒント……?」

「…そっか、“モノクマルーム”……!」

前木のつぶやきを聞いて、ウチは思い出した。

「アンタらを操縦する部屋に、みーちゃんは入っていた…。つまり、これまで解放された場所のどこかに、その場所に通じる場所があったってことだよね……!」

『うぶぶ、だいせいかい!　でもね、流石にボクもあんなところにも何度も入られるのは看過できないんだ。安藤さんがあそこにいたのもだいぶ予想外だったしね!　というわけで入れないように“抜け穴部分”を直しておいたんだけど…まあ、“手がかり”くらいは残しとくから探してみたら?』

「ぎひやひやひやひや!!!　いよいよ大詰めだなあ!!　オイラ達の正体を暴いてこの学園の謎を解けるかなあ?」

二体のヌイグルミは邪悪な笑みを浮かべる。

「操縦室と言っていたけど…。安藤さんがあそこにいた時は他に誰も

いなかった。彼女があなた達を操縦していたわけでもない。なのに、あなた達は動いていた。どういふことなの…？ 自動操縦…？」
ゆきみんの問いかけはもつともだ。

『さあね！ それくらいは自分で考えてよ！ でもまあ、あの部屋で監視カメラの映像閲覧を行える。』ことは紛れもない事実だよ！
クマは嘘をつかないのです！』

モノクマの言葉は、ウチらの胸中に浮かんだ謎をますます深くした。

『さてと！ 君たちの長つたらしい議論を聞いてたからボクも疲れちゃったよ。オシオキも終わったし、明日からまた新しいコロシアイに備えて十分に休息をとってね！ それじゃ、バイナラ〜！』

「例によってスロットのコインはあげるから持ち帰ってくれよな！
重たいから置いていかれると片付けるのが大変なんだからよ！
じゃあな！ ぎひやひやひやひや!!」

勝手に謎をバラまいたかと思ったら、今度は勝手にまとめて奴らは去った。

けれど、この裁判で疲労困憊しているのは事実。

「帰ろうか」とウチが言おうとした時だった。

「待ってくれ！ 安藤の裁判席の足元にこんなものが……」

声を上げたのは前木だった。

「たぶん、オシオキの場所に連れていかれる前に安藤が落としたんだな……。これは……」

前木が拾い上げたのは、折りたたまれた紙切れだった。

表には可愛い文字で「土門君へ」と書かれていた。

「まさか、これは……!」

「津川の遺書……!?!」

思い出したのは、最初の裁判の終わり際。

土門がみーちゃんにこれを渡したんだ。



そう言つて、土門君は懐から小さな紙切れを取り出した。

「津川の遺書だ。俺に宛てたもんだけど……安藤、お前に渡しとくわ。殺した俺が言えたことじゃないけど、ちゃんと読んで、吊つてやんな」
土門君から紙切れを受け取った安藤さんは、それを胸に押さえつけるように抱えると、その場に座り込んで泣きじやくり始めた。



「読んでも……いいか……？」

前木の問いに否定の意を表す人はいなかった。

この手紙がみーちゃんにどう影響したのか、知りたくなっている自分がいいた。

土門君へ。

まずは、辛い役目を背負わせてしまって本当にごめんなさい。

あなたが外に出た後、きつと私を殺したことで様々な咎めを受けることでしょう。

これから死ぬ私にはそれを償うことができません。お詫びの言葉も見つかりません。

私の死は事実上の自殺であると、この遺書をもってみんなに伝えてあげてください。土門君には何の罪もないと。

動機の発表があつた後、私は全員と対話しました。過去を教えてください。教えてくれなかった人もいたけど、私は外に出てくれる相手として土門君を選びました。

それは、私が聞いた中では土門君の家族が最も切迫した状況にあ

り、また土門君なら外でも的確な対処をし、確実にここに残ったみんなを助けてくれるという確証があったからです。

モノクマのルールに従うのは癪だけど、それを逆手に取るしか今の状況は打破できないのだという考えに至りました。

このままみんなが疑いあい、憎しみあうのを見ていられなかったのです。

だから私は、小さな体にこもったこの命を、みんなのために使うことに決めたのです。

どうか許してください。

身勝手ながら、もう一つだけお願いがあります。

私は、この場所でかけがえのない仲間と出会いました。

みんな大好きなお友達ですが、その中でもひとときわ大切な親友ができました。

みー様…もとい安藤さんです。

彼女は、とても無邪気で、自らの愛する創作に何より真剣で、仲のいい親友であると同時に、あこがれの存在でもありました。

この数日間だけで、お互いの夢についていっぱい語り合いました。どこまでも一緒に夢を追おうと共に決めました。

傲慢な考えかもしれないかもしれませんが、私がここで死ぬことで、安藤さんが自暴自棄になって夢を忘れてしまうのが怖いのです。

彼女には、ずっとずっと立ち止まらないで進み続けてほしいんです。

夢のために、彼女が描く創作のために、私なんかのために歩みを止めないでほしい。

(ここから下の文字は涙で滲んでいる)

だから、彼女に伝えてください。

私は、リャン様は、ずっとみー様のそばにいるよ。

いつまでも、ずーつとみー様の横で見守ってるよ。
だから、世界一の漫画家になつてね。
この世で一番素晴らしい創作を作り出してね。
失敗してもリャン様は笑わないよ。
ずつとずつと、同じ夢を追いかけ続けようね。
愛してるよ。大好き。みー様。

以上になります。
さようなら、皆さん。

津川梁

P. S. 駿河きゅんへ

この前言つてたリャン様の等身大フィギュア、ここから出たらでいいから作つてくれると嬉しいな。待つてるよ♡

「……………」

言葉が出なかった。

「じゃあ……安藤は、津川の手紙を読んで殺人を……？」

「いや……彼女のあの思考はもつと根本的なものだ。恐らくこの手紙を読んではいなくても、同じ思想を抱き、犯行に及んだだろう。……だが、皮肉だね」

リャンちゃんは、気付かなかつたのだろうか。

みーちゃんが根本から狂っていたことに。

それとも、気付いていてなおこんな手紙を残したのだろうか。
今となつては知りようもないことだけれど。

みーちゃんは、自分の望むような“心躍る”展開の事件と裁判を作り出し、そして自分の望む“冥府”の世界へと旅立っていった。

みーちゃんの夢は、叶ったんだ。

でも、今のこの裁判場の様子を見て、リヤンちゃんは喜ぶのかな？

丹沢は笑うのかな？

少なくともウチは、笑えねーよ。

「クソくらえだ、こんなサムい展開」



ロシアイ学園生活二日目の夜。

「いやあ、今日は楽しい話がたーんとできましたな！ 感謝いたしますぞー！」

そう言っつて丹沢は笑った。

「リヤン様も推しキャラの話がたくさんできて楽しかったなり♡ またやろうなり！」

津川梁も笑う。

「むわはははっ！ お二人のお話はとっても漫画の参考になるぞよ」

安藤も笑っていた。

「いやはや、コロシアイなどという極限状況においてもここまで話が盛り上がるとは、拙者改めてオタクの底力を思い知りましたぞ！」

「好きなものを語る相手がいるだけで、辛い状況も一旦忘れられるなりね！」

「うむむっ!! 次の漫画の題材が決まったぞよー!!」

突然、安藤が素っ頓狂な声を上げた。

「ぬおおっ!? 安藤殿、何か妙案が!」

「この作品のコンセプトはズバリ、“友情”!! 友情を分かち合う三人の主人公は、ある日突然身体の感覚が共通してしまうのだぞよ!」
「感覚が共通…? ってことは、一人が手を痛めたら、もう二人も痛めるってことなりか?」

「左様だぞよ!! 深い友情で結ばれている三人は、苦も楽も全て分かち合い、それがゆえに強大な敵とも戦いぬける結束力を得るのだぞよ!!」

「おおーっ!! なんとも熱くなるお話にござるな!!」

「そっか! 仲良しこよしのリャン様達三人から着想を得たなりねっ!」

「そうだぞよく。リャン様も丹沢殿も、吾輩と苦楽を共にしてほしいんだぞよく」

「では、我らの関係もそれを目指しましょうぞ!! いついかなる時も!! 一人の喜びは三人の喜び!! 一人の痛みは三人の痛み!!」

「おおーっ!!」

「ぐすっ、やっぱりリャン様は幸せ者なりね……」



一人の痛みは三人の痛み。
もし一人が全身を焼かれ、もがき、苦しみ、死んだなら。
残る二人も、もがき、苦しみ、死んでゆく。

創作の力は、無限大。
創作者よ、無限なれ。



Chapter 3 俺のヒロイン達が修羅場過ぎて人類が滅亡し

そんな件。 完

アイテムを入手した！

『リャン様等身大像』

Chapter 3 クリアの証。

細部まで彫り込まれていて、製作者の真面目な性格がうかがえる。
桜の花束がアクセント。

『……とか思ってたでしょー！?!?』

床からよきつ、とモノクマとモノパンダが出てきた。

「まだ終わりじゃないぞよ！ もうちっとだけ続くんじゃない！ きぎひやひやひやー！」

↓ to be continued…?

Chapter 3. 5 裁判場の中心で愛を叫んだアイツ

Chapter 3. 5 純愛編



突然舞い戻ってきた二体のヌイグルミに驚いたのは、俺だけじゃなかった。

「なっ……!!? なんだよ…!! もう帰って休めって言ったじゃんかよ!!」

亞桐があからさまにイラついた様子で言った。

『うぶぶぶぶぶ、忘れてない? この事件のもう一人のクロ』
モノクマはさらりと告げる。

「……っ!!」

その言葉を受け、場の空気が一気に張り詰めた。

この事件のもう一人のクロ。

本来のクロの定義からは外れてしまったためオシオキされることはなかったが……。

そいつは今もここにいる。

「小清水……」

俺は小清水の方を見た。

「……………」

小清水は本性が明らかになった後から変わらず、目を細め、ゴミを見るような視線で俺たちを見回しながら、裁判台の前に立ち尽くしていた。

安藤に襲い掛かろうとして失敗してから黙りこくっていたが、その頭の中では何を考えているかなんて全く分からない。

『あれは誰でもよかったのよ。自分がコーヒーを飲まないようにすれ

ば、運の悪い誰かさんが勝手に飲んで自滅してくれるようにできてるから。まあ、”超高校級の幸運”のあなたが飲まずに済んだのは流石ってところかしら』

裁判の最中、小清水に言われた言葉が俺の胸を抉った。

あれは幸運なんかじゃない。

むしろ不運。

俺があのカップを引き当てていれば、駿河はあんなに苦しんで死なずに済んだんだ。

『過ぎたことをどうこう言ってもしかたねーだろーが』

三ちゃんならそう言うだろうけど。

やはり未熟な俺は割り切れない。

俺は複雑な視線で小清水を見つめていた。

「……まだ私に用があるの」

小清水はまだ威圧的な口調だったが、裁判中に比べ、目に見えて憔悴しているのが分かる。

「もう私に貴様らを駆逐する算段はないわ。煮るなり焼くなり好きにしなさいな。…あの創作狂の女のように」

そう言つて小清水は降りたままの真つ暗なスクリーンを見た。

あんなに明るかった安藤はさつき死んだ。

灼熱の溶鉄の中で、おぞましい叫び声をあげながら。

まだ実感が湧かない。

『つて本人が言ってるんだけど、君たちはどう思う？』

モノクマはあくどい笑みを浮かべて尋ねてきた。

いったいどういう趣旨の問いかけなのだろう？

「どうつて……そんないきなり言われても……」

亞桐が言葉を濁らせた。

「ずっと親しいと思っていた友達がいきなりこんな正体を晒して……。あまりに突然すぎて、なんて思えばいいかなんて分かりませんよ……」

山村も悲しげにそう言った。

「うん……。いくらあんなことしたからって……お友達を恨んだりなんて……」

亞桐も言葉を詰まらせる。

「甘いよ、貴様ら人間は!! 虫さんは平気で淘汰するくせに同種ばかり甘やかしゃがって、反吐が出る!!」

「……………」

怒りの表情で俺たちを非難する小清水。

俺達人間には恨まれてもいい、ということだろうか。

『うぶぶぶぶぶ、本当は許せないんじゃないの？ だってさ、安藤さんがモノトキシンXを与えなくても、どうせ丹沢君はモノウイルスで死んでいたんだよ？ それもあれ以上に長い間苦しみ続けて、さー!』

モノクマの言うとおりで。

なぜ、何の罪もない駿河がそんな目に遭わなきゃいけないかったっていうんだ。

許すことはできない。

できないけど……

『ボクとしても、ルール上クロとして裁くべきなのかイマイチ分からないんだよね。だからさあ、ボクからスペシャルサービスで“チャンス”をあげようと思います!』

「チャンス……?」

三回も殺し合いを繰り返したからわかる。

モノクマがこういう言い方をするってことは、何か恐ろしい考えを隠し持っているに違いないんだ。

『つまり!! 今回の場で“小清水さんをオシオキするかどうか”を多数決で決めてもらいたいのです!!』

「……………!?!」

モノクマが言い放ったのは、俺が想像していたよりもずっとずつとおぞましいことだった。

これまでに三回繰り返し広げられたオシオキ。

それは、ただ殺すより格段に辛く苦しい凄惨な処刑劇だ。

その決定権は常に、俺達生徒の手に委ねられていた。

またそれを繰り返そうつてのか…?

「ひえっ!? そ、そんなことを、今この場で…!?」

山村が恐れおののく。

「なによ、それ…!? もし否決されたらどうなるの…? まさか、小清水さん以外の全員がオシオキされるなんてことに…」

伊丹の質問に、モノクマは『そんなことないよ!』と答えた。

『小清水さんは本当の意味でのクロじゃないからね。みんながオシオキのリスクを背負う必要はないでしょ? 可決されたら小清水さんはオシオキ、否決されたらこのままのメンバーで次のコロシアイ生活へ。ただそれだけの投票だよ!』

「じゃ、じゃあ、否決でいいじゃん! ねっ、そうしょ?」

「そ、そうですね! それが一番穏便に済みますよ! これ以上、あんな悲劇は見たくありませんし…」

亞桐と山村がそうみんなに呼びかけた、が……。

「…いいのかい? それで」

夢郷の重い声が裁判場に響き渡る。

「僕は小清水君をオシオキする方に一票を投じるつもりだが」

「はあっ?!?! お前、この期に及んでそんなこと…」

「……私も、オシオキに賛成」

逆上しかけた亞桐の声を止めたのは、他ならぬ伊丹の発言だった。

「なっ…?!?! ゆきみちゃんまで!? なんなんだよみんな!! またあんな地獄絵図が見たいのかよ?!?!」

「亞桐様と山村様の意見は分かります。ですが、彼女は事実上丹沢駿河さんを殺害しているのです。それも、最も残虐な方法で…。そして、あろうことかそれを楽しんでいたのです。わたくし達の存在を“命”と認めず、その価値を蹂躪するがごとき所業…。わたくしはもう、この方との対話の道を見つけられそうにありません。…ならば、

「ここで葬るべきでしょう」

入間は感情を抑えるように、小さく重い声で告げた。
入間だって人間だ。

小清水をここでオシオキさせることに抵抗がないわけじゃないだろう。

でも、それでもここで同級生を切り捨てるという残酷な決断に至った理由があるんだ。

「それに、彼女は自らの罪を暴露されても全く反省の色はなく、その思想に変化もない。このままでは、彼女はまた自分の野望のために同じようなコロシアイを起こして誰かを犠牲にするだろう。そうなる前に、ここで芽を摘んでおくべきと僕は考える」

そこに夢郷が続いた。

「そつ……そんな……!!」

亞桐の顔が見る見るうちに青くなつていくのが分かった。

「お前ら……それでもクラスメートかよつ!!」

亞桐は力いっぱい叫んだ。

「ずつと……ずつとみんなで頑張ってきたじゃん!!! ヌイグルミたちに負けないって、約束したじゃん!!」

亞桐の目からボロボロと大粒の涙が零れ落ちる。

「なんでこんなに簡単に殺そうなんて言えるんだよつ!!!
こんなにじゃモノクマたちと何も変わらないよ!!!
なんでだよ!!!
なんでなんだよつ!!!
うつ、うああああん……!!」

そして、子供のように大声をあげて泣き崩れる。

それを眺める俺の目にも、いつの間にか涙が浮かんでいた。

「莉緒、これは私たちのため、そして殺された丹沢君のための決断なのよ。残酷だけど、もうこうするしかないのよ」

伊丹の言葉も今の亞桐には届かないだろう。

「あつはつはつはつは!!」

そんな俺たちの様子を見て笑ったのは、他ならぬ小清水だ。

「本当に見れば見るほど醜くて下卑た生き物ね、貴様たち人間は。こ
うやって裏切られ、泣き叫び、死んでいくのが貴様らの生態なのよ!!」

「……………」

入間と山村は悲痛な表情になり、夢郷は呆れたような視線を送り、伊丹は目を閉じて顔をそむけた。

俺は……どんな表情をしていたのだろうか。

「さあ、屑ども！ 夢破れた今、もう私が生きている意味などない！

私を殺せ!! お前らの決断によって、この私を殺しなさい!! こんな人間だらけの腐りきった世界など、生きる価値などないのだから!!」

小清水は両手を広げて高らかに言った。

やはり小清水は狂っている。

だが、地獄のようなオシオキを前にしても果たしてそれは同じだろうか？

小清水より根本的な部分が狂っていた安藤は、しかし灼熱の溶鉄を目前にして死と激痛への恐怖にすべてを支配された。

オシオキは、俺達の想像も及ばないほど最悪の絶望をもたらす。

果たして小清水はそれに耐えることができるのだろうか？

「——前木君は、どっちなんだ？ 賛成なのか、反対なのか」

不意に夢郷の声が俺に突き刺さる。

「俺は——」

どっちなんだ。

小清水を生かしたいのか、殺したいのか。

どっちなんだ。

『人生、生きていれば辛いこともありますゆえ……。拙者は何も咎めませぬし、詮索も致しませぬ。ただこれまでのように、友人として仲良くしていくだけでござるよ』

駿河は優しくかったな。

俺が三ちゃんの死を実感して壊れた後も、あいつはこれまでと何も変わらず接してくれた。

いつもと同じ、前木常夏という一人の“友達”として接してくれたんだ。

もう、あいつと喋れないのか。

もう、会えないのか。

寂しいなあ……。

そうか、それなら俺は……。

俺の決断は……。

「俺は、小清水に生きてほしい」

「……！」

夢郷と伊丹の表情が変わった。

「俺は小清水を許せない。だからこそ、小清水には生きてほしいんだ」

そう言つて、俺は小清水に歩み寄った。

「…………」

俺の言動に苛立ったのか、小清水の額には青筋が浮かび、今にも暴れだしそうな形相で俺を睨んでいる。

「…お前は取り返しのつかない罪を犯した。確かに、死んで償うつていう方法もある。でも、死んだらそれでおしまいなんだ。俺は……生きていても、罪は償えると思ってる」

「黙れ……」

「お前は罪を償わなきゃいけない。お前がどう思おうと、お前は償わなきゃいけないんだ。それを、ただ存分に苦しめて殺してオシマイなんて、そんなやり方で済ませたくないんだ」

「黙れ黙れ!! ならば一生をかけて恥辱と苦痛を与えようともいうのか!!」

「違う! お前に必要な償いは“苦痛”じゃない! みんなのために、希望のために、命を賭けて“絶望”との勝負に打ち勝つことだ!! 俺たちの仲間として、希望の担い手として!! だから俺もお前のために命を賭ける!! ここにいるみんなが、互いに互いのために命を賭けるんだ!! 今は無理でも、俺がきつとそうさせて見せる!! それが死んでいった奴らの願いだから……」

瞬間。

視界が歪んだ。

「っ!？」

何が起きた？

頬が痛い。

数秒たって、俺は小清水に殴り倒されたのだと理解した。

「!! 前木君!!」

伊丹がすぐに俺に駆け寄ってきた。

「この世で最も下劣な生き物め…。この私に説教などするな!! 私の意志が揺らぐとでも思ったか!!」

「また暴れるつもりか…」

「小清水様、ご容赦ください…!」

夢郷と入間が小清水を取り押さえようと動き出したが。

「待ってくれ!!」

俺が鋭く叫んで引き留めた。

そして、ゆっくり立ち上がって再び小清水の元へと歩き出す。

「前木君、ダメよー!」

引き留めようとすがりつく伊丹を振りほどき、俺は小清水の前に立った。

亞桐は膝をついて涙を流したまま、茫然と俺を見つめていた。

「小清水、殴って納得するのなら何度でも殴ればいいさ。俺はお前に言葉を紡ぐ間もなく次の拳が俺を打ち据える。

女性とは思えないほどの力だ。

だが、俺はすぐにもう一度立ち上がった。

俺の弱点、それは“心の弱さ”だ。

津川と土門が死んだ次の日、俺はずっと泣きじゃくっていた。

リュウと三ちゃんが死んだ後、俺は捜査なんて手につかなかった。

そして裁判の後、壊れて記憶も人格も錯綜してしまっただ。

俺は、誰かに縋ってなきや生きていけなかった。
友達だろうが、家族だろうが、常にだれかに頼り続けて生きてきた。
一人ぼっちで生きていくことができなかったんだ。

でも、壊れた後の俺を、伊丹が抱きしめてくれた。

葛西が励ましてくれた。

駿河が笑いかけてくれた。

いつだって、どんな苦しいときだって、仲間がそばにいるのだと分かったんだ。

いつでもそばにいるなら、ボロボロになるまでとりあえず一人で生きってみようって思えたんだ。

どうにもならなくてボロボロになったら、その時初めて仲間を頼ればいい。

いつだって仲間がすぐ後ろにいるって分かっているから、俺は一人で歩いていてももう寂しくないんだ。

そうだ、俺は絶望だらけのこの生活で、成長できた。

希望をみんなに与えられたんだ。

だから、今度は俺がみんなに希望を与える番。

ここで小清水を救って、みんなでここを脱出するんだ。

それが叶うまで、何度でも殴られ続けてやる。

小清水の体力が尽きるまで、殴られ続けてやる。

小清水に分からせてやる。

人間の力、人間が抱く希望の力を……！

「……………!?!」

しかし、そんな俺の前に一人の人物が背を向けて立ちほだかった。

「山村……………?」

「もう、やめろ」

小清水と真正面から相對するように立つ山村は、短くそう言い放つ

た。

山村から赤いオーラが立ち上る。

“あっちの人格”だ。

「貴様も殴りたいのか!!!」

オーラを纏った山村にも動じることなく、小清水は吠える。

「オレのクラスメートに手を出すな」

対して山村は、“あっちの人格”であるにもかかわらず、落ち着いた声でそう言った。

次の瞬間、小清水の拳が山村を打ち据えていた。

「山村!!」

しかし、山村は俺と違って倒れなかった。

すぐに顔を持ち上げて元の態勢に戻ると、再び強いまなざしで小清水を見据えた。

「いい、オレはいいんだ、前木。こういうのはオレの役目、だろ」

山村は小清水の方を向いたまま俺にそう言った。

「…終わりか？小清水」

「……ッ!!!」

小清水の表情が怒りに歪み、再びその拳が顔面を打つ。

「ゴミ屑どもが!!! 調子に乗るな!!! 何をされようと、貴様らが何をしようと、私は人間を許さない!! 人間の跋扈するこの世界も許さない!!!」

何度も何度も小清水は山村を殴る。

山村も、俺と同じことを考えていたんだ。

あいつも俺と同じく、第二の裁判の後、人格が壊れていた。

強さを持ちながら誰かを守れなかった無念に、ずっと苛まれていた。

その無念が、逆にあいつをここまで成長させたのだろうか。

何度殴られても、山村は倒れなかった。

その代わり、反撃もしなかった。

“無抵抗という名の抵抗”を貫き通したのだ。

「オレが戦ってきた奴らに比べれば、この程度のパンチ、かゆくもない」

山村は吐き捨てるように言った。

「……………」

息を切らしながら小清水は山村を睨む。

「ずっと、自分の“強さ”で誰かを守りたいと思っていた。それが叶うことなくみんな死んでいった。だが、今ようやく“誰か”を守れた気がする」

「黙れッ!!」

ゴツ、と小清水の拳が山村にぶち当たる。

どんなに傷ついても、一切ひるむことなく毅然と絶望に立ち向かっていく背中。

それは、どことなくリユウを彷彿とさせた。

「はあっ、はあっ……………」

拳を押さええながら小清水は息を荒げた。

もう何発殴られ続けただろうか。

山村は最初と全く変わらぬ強い視線で小清水を見つめ続けていた。

「オレの人格が錯綜していた間、お前とたくさん話したのを覚えている。お前は言ったな。『あなたは弱くなんかない。弱くても、自分の弱さを理解し、それに立ち向かうこと自体が強さだ』って」

「あんなもの…ウソに決まってるだろうが!!」

小清水は冷や汗を流しながら叫んだ。

「そうだな。お前はアリバイ作りのためにオレと過ごしていたからな。全部ウソなのは分かっている。だが、少なくともあの時、それを聞いたオレは心から救われた気分になった。お前に感謝していたんだ」

「そんなものっ…………!! 貴様の勝手な妄想だ!!」

「ありがとう、彌生」

山村はわずかに微笑み、小清水は激しく動揺した。

山村は、俺とは少し違った形で山村なりの“正義”を貫いた。

俺が言おうとしていたことを取って代わられた形になるが…代わ

りに痛みを背負ってくれた山村に俺は感謝の心でいっぱいになった。その場にいる奴らの、小清水を見る目が少し変わった気がする。これが、俺の正義であり、山村の正義。極悪な殺人者となり果てた同級生を、それでも共に生きようと言つてのける正義なんだ。

「…わたくしと夢郷君と伊丹様はオシオキ賛成。前木さんと亞桐様と山村様はオシオキに反対……と、なれば…」

入間が恐る恐る言葉を発する。

「……葛西君。君がこの議論の最後の担い手だ」

夢郷の言葉を受け、全員が葛西を見た。

葛西はまだ、床に力なく座り込んでいた。

思えば葛西は、この事件が起きる直前まで、事あるごとに小清水と一緒にいた。

葛西は本気で小清水のことを好きになっていたのかもしれない。愛する人に裏切られ、利用され、挙句捨てられた。

その心の傷は計り知れない。

今葛西は、何を思っているのだろうか。

葛西は顔をしたにに向けたまま、ゆらりと立ち上がった。

「葛西君……」

伊丹が呼びかける。

「大丈夫……。俺は……大丈夫だから………」

葛西は消え入りそうな声で答えた。

「…あなたなら、私の言うことを聞いてくれるわよね？」

山村に追い詰められた小清水は、焦りの表情を浮かべながらも葛西に告げる。

「さあ、殺しなさい……。もうこんな友情ごっこはウンザリなのよ!! 早く殺せ!! 殺せ!!」

「…俺の答えはもう決まってる……。投票を始めてよ、モノクマ……」

小清水の叫びなど聞こえていないかのようには、葛西はぼそりと言った。

『もういいの？ さて、お涙頂戴な寒いクサ台詞も聞き飽きたし、もう投票始めちゃおうか！』

「じゃあ、お手元の投票ボタンで決めちゃってくれー！ 押せばオシオキ賛成、押さなければオシオキ反対としてカウントするぜ！ もちろん小清水さん本人に投票権はないかなー！」

モノパンダが言い終わると同時に、投票ボタンが光る。

普段は裁判に参加している生徒全員のボタンが光り、その中からクロと思う人物を押すのだが、今回は小清水のボタンだけが光っていた。

俺はぎゅつと唇をかみしめ、ボタンを押さずに見過ごした。

「私が好きなんでしょう？ なら私の言うことを聞け、脚本家!! ボタンを押すのよ!! 押せ!! 殺せーっ!!!」

冷や汗を振りまきながらそう叫ぶ姿は、まるで追い詰められたクロのようだ。

葛西はどちらの決断を下したのだろうか。

やっぱり、あいつは……。

「……はい!! 終了っ!!」

モノパンダの声とともに、投票タイムは終了した。

『では結果を発表しますー!』

ドクン、と胸が脈打つのを感じた。

『…オシオキ賛成、三票！ 反対、四票！ よって小清水さんのオシオキは行わず、このまま次のコロシアイに進むことにしまーす!!』

「……………っ!!!」

小清水の顔が絶望に歪んでいくのが見えた。

「……そうか。それが、君たちの決断か」

夢郷が顎に手を当てて考え込みながら言った。

「葛西……。ありがとう……。」

亞桐が涙ぐんだ声で葛西に礼を言った。

葛西は相変わらず感情の抜けた顔で足元を見つめていた。

「なぜ……っ!!! なんだああああ!!!」

小清水の悲痛な叫び声が裁判場を支配した。

「こんな腐りきった世界で…夢破れた私に生き恥を晒せと言うのかああああ!!!」

「それがみんなの決断よ。不本意だけど私は従う…。あなたも従うしかないのよ」

伊丹が告げる。

「嫌、嫌、嫌ああ!!! 　なぜ!!! 　なんで人間は!!! 　何もかも思い通りにならないのよ!!!」

小清水は子供のように喚きながら裁判台をたたいた。

「…人間は、お前の意図を超えて不可思議な生き物だってことだよ。人間を思い通りにするなんて、誰にもできないんだ」

俺がそう言うと、ダン、ともう一度小清水は台をたたき、ぐつと顔を落としてわなわなと震えた。

「絶対に……絶対に許さない……!!! 　貴様らがなんと言おうと、私は必ず野望を成し遂げてやる…!! 　私を生かしたことを後悔させてやる…!!!」

「ああ、やれると思うならやってみろよ。俺達も全力でお前を叩きなおすさ。俺達のためにな」

俺がそう言うと、山村がこつちを見て力強くうなずいた。

「……皆様のご意思がこれほどまでとは…。わたくしは…。皆様のご意思を無下にして同級生を死に追いやろうとしていたのですね…。今ようやく、自らの罪の深さを思い知りました」

入間が目には涙を浮かべ、声を震わせながら言った。

「心を洗い流されたかのような気分です。わたくしは今、覚悟を決めました。今後どんな困難が待ち受けようと、全身全霊で小清水様との対話に心血を注ぐ所存です…」

入間もまた、新たな決意を胸に刻んだようだ。

「葛西は……なんでオシオキ反対に票を入れたの？」

亞桐がふと尋ねた。

やはり葛西は、愛していた人をみすみす死なせるわけにはいかなかったんだろうか。

ズタズタになった胸の奥にも、まだ恋心が残っていたのだろうか。

「……………どっちでも、よかったんだ」

ぼそり、と葛西は呟く。

「彼女が生きようが死のうが、もう」あの時の小清水さん”は帰ってこない。俺が愛していた”小清水彌生”はもう死んだんだ。この空間にいるのは、小清水さんの姿をした”抜け殻”なんだよ。俺の好きな人はもう戻ってこない。……………けれど」

葛西は少し顔を上げた。

「ゆっくり、時間をかけて、お別れを言いたかった。だから反対に票を入れたんだ」

「……………」

小清水は黙って下を向いていた。

あれだけ憎んでいた葛西を罵倒する言葉を発することはなかった。

「俺はあなたが好きでした。あなたのことを何より大切に思っていました。あなたとずっとそばにいたかった」

葛西の目から一筋の涙が零れ落ちる。

「俺の好きな人は、俺の幻想の中の人でしかなかった。存在なんてしていなかった。……………それでも、俺はあなたと過ごした時間を忘れません。あなたが俺にくれた言葉を忘れません。……………一生、忘れません」
そういえば葛西は第二の事件の後の夜、植物園で小清水と二人きりで話したと言っていた。

あの時の幻想的な光景を、今も思い浮かべているのだろうか。

「次に生まれるときは、俺も虫さんがいいな。そうすれば、次こそつがいになれるよね」

「……………」

葛西は、泣きじやくりながらも少し微笑んで言った。

「さようなら、俺の好きな人」

それは、血塗られた悲哀の殺人劇であり、あるいは少年の甘酸っぱい恋の物語だったのかもしれない。

二人のヒロインと、二つの失恋。

これが、安藤の望んだ“最高のストーリー”だったのだろうか？
今となっては知る術もない。

なあ、“所詮人間の戯言”なんだろう？

“醜い綺麗ごとの押し付け合い”なんだろう？

“愚かで救いようのない傲慢な生き物”なんだろう？

だったら、何故お前も涙を流してるんだ。

小清水。

「人間のくせに……生意気よ……」

Chapter 3. 5 裁判場の中心で愛を叫んだアイツ 完

Chapter 4 才チ無しサゲ無し希望無し!

Chapter 4 (非) 日常編①



その夜、小清水彌生はいつものように植物園に立っていた。

怒涛の裁判とオシオキを経たばかりのクラスメートは皆自室で眠りこけていたが、小清水だけはそういう気分になれなかったのだ。

いろいろなことがあったな、と小清水は今日一日を振り返っていた。

自分を取り巻くすべてが変わってしまった。

だが、この空間は何も変わらない。

大自然は人間の営みなどとは何も関係なく、日常を過ごし続けているのだ。

「寝ないのかい?」

そんな小清水に背後から声をかけたのは、モノパンダだった。

「…消えなさい」

小清水は振り返らずにそれだけ告げた。

「ここで葛西君と話したのも今となつては遠い思い出だな! ぎひやひやひやひや!」

小清水の言葉を見殺してモノパンダは笑った。

「……………」

小清水は少し下を向いた。

数時間前、葛西に言われた言葉がいつまでも小清水の頭の中を反響していた。

『やっつなうら』

忌々しい、と小清水は心の中で吐き捨てた。

あんなもの、身勝手な人間のオスの生態に過ぎない。

「あー、ごめん。嫌なこと思い出させちゃったか! フラれちゃっ

てショックだったもんな！」

「黙りなさい……」

小清水はようやくモノパンダの方を振り向いて睨みつつ言った。
「私は……人間の全てが憎い……。私という人間の愚かさもまた、たまらなく憎い……」

心の声を漏らすように、小清水は前を向きなおしてつぶやいた。

「安藤の言うとおりだった……。あんなチープなトリックでコロシアイに臨もうなどと……。なんと愚かな……」

「気を落とすなよ！ あれはしようがなかったんだよ！」

「……？ どういうこと……？」

モノパンダの不可解な言葉に、小清水は怪訝そうな表情をする。

「だって、小清水さんの『絶望』は『野望』だもんな！ 『野望』の脚本はもう終わってるんだよ！」

「……野望……？ 何の話？」

「ぎひやひやひやひや！ いずれ分かるようになるよ！ 失敗したとはいえ、コロシアイをしてくれた小清水さんへのオイラからのヒントだよ！」

モノパンダは不敵に笑いながら言った。

「…相変わらず不気味なヌイグルミね。でも、私はあなた達が何のためこんなコロシアイをさせているかなんて興味がないし、知ろうとも思わない。私はただ、私の崇高な使命を果たすだけ」

「だから、その使命に縋っている限りコロシアイは成就しないってオイラは言ってるんだけどなー」

モノパンダは呆れたようにため息をついた。

「にしても、この植物園、解放する前は雑草だらけで池も濁っててだいぶ汚れてたのに、よくここまで綺麗になったよなー。小清水さん、この数日間で頑張って綺麗にしてくれたんだなー！」

急に話題を変えたモノパンダに不審そうな顔をしながらも、小清水は「……ええ」と答えた。

「あなた達が最低限の管理しかできないせいで大変だったけれどね」

小清水が嫌味を言うと、またもモノパンダは笑う。

「ここには栄養もたくさんあるしな！ 植物や虫さんにとっては天国のようなところだぜ！」

「…何が言いたいのか？」

小清水は耐えかねてそう問いかけた。

「さあな！ アリさんにも聞いてみれば？」

そう言っつてモノパンダは向こうにある小さな砂場へと目を向けた。

砂場には、アリの巣の穴が点々と鎮座していた。

「……………」

何かを感じたのか、小清水は砂場の方へと歩み寄る。

「…………外に出ているアリさんが、ずいぶん少ないのね……」

アリの巣は五、六個ほど空いているのに、外に出てエサを探すアリの数が随分少ないことに小清水は疑問を抱いた。

「(初めてここに来たときはもう少し多かつたと思うけど……)」

そんな小清水の様子をニツコリと見つめると、モノパンダは何も言わず静かに植物園を去っていった。

「(”栄養がたくさん”……?)」

先ほどのモノパンダの意味深な言葉が何だったのか、顎に手を当てて小清水は考えた。

「……………!!」

そして、一つの仮定にたどり着く。

小清水は植物園の隅にある物置から手袋と片手サイズのシャベルを取り出すと、アリの巣が掘ってある場所のすぐ近くの砂場を掘り始める。

無我夢中で、時間も忘れて掘り続けた。

時間は朝方に差し掛かり、小清水の掘った穴は腰の高さぐらいにまでなっていた。

やはり思い過ぎだったか…と彼女が思った時、それは訪れた。

突如、シャベルの先端に違和感を覚えたのだ。

「!!」

小清水はすぐにその周りを掘り始める。

違和感の正体、その全貌を明らかにするために。

そして――!?」。
「な……………っっ!?!」
それは、露わになった。

小清水の表情が、絶望に染まっていた。



「……………」

最悪の目覚めだった。

疲れは全く抜けておらず、全身に重しが乗っているようだった。それもそのはずだ。

昨日はあまりにも多くのことが起こりすぎた。

布団にくるまっっている間、何度も俺の脳裏を小清水さんの笑顔がよぎっていた。

握った手の柔らかくて温かい感触もはっきり覚えている。

俺の髪にかかる甘い吐息の感触も、俺の肩に触れた滑らかな髪感触も。

それを思い出すたびに、未だに胸の鼓動が高鳴る。

あんなに好きだったのに。

今となっては昔の思い出でしかない。

今の彼女は……………もう俺の好きな人じゃないんだ。

俺は寝起きが悪かったのもあっていつもより早めに起きて、シャワーを浴びてから朝食の場へと向かった。

「おはようございます、葛西君!」

食堂に入ると、制服の上にエプロンを着た山村さんの挨拶が響いた。

「…無理はなさらずにしてくださいね! 今回の朝食はこの巴が何から何まで作ってしまいますから!」

山村さんはシャキッと胸を張ってそう告げると、厨房へと入って

いった。

「あ、ありがとう……」

俺は元氣のない返事を返して席に座ることしかできなかった。俺は食堂を見回した。

それは、何の変哲もないいつも通りの食堂。

ちょうど昨日のこの時間くらいに、丹沢君が血と吐瀉物を吐いて息絶えた。

ここで仮死状態となった安藤さんも、後に処刑された。

この場所には、その痕跡すらも残っていないかった。

あつという間に、“いつも通り”に戻っている。

人つて、あつけなく消えていくんだなあ。

今更ながら、そんなことを思った。

僅か二週間かそこの生活で、七人もの仲間が消えた。

でも、そのことすらも“いつも通り”の範疇になりつつある。

「あ、おはよー」

その声とともに入ってきたのは、前木君だった。

「隣、いい？」

「うん……」と俺が力なく返事すると、前木君は隣の席に座ろうとする。

「あ、その前に」

と、椅子を引く手を止めて彼は食堂の奥の方を向いた。

「……？」

それは、ちょうど昨日丹沢君が亡くなった場所だった。

その方向を向いて、前木君は両手を合わせ、目を閉じて黙祷した。

十秒ほど黙祷すると、何事もなかったかのように平然と俺の隣に座った。

「へへ……ちよつと堅苦しかったかな…？ でも、ちよつとは真面目に供養してあげないとな。友達だから」

「……………」

俺は何も返すことができなかった。

人が死ぬことすら当たり前前に感じられていた中で、彼は亡くなった

友達への気遣いを忘れていなかった。
急に自分が恥ずかしくなってきた。

「さあ、皆さんでいただきますしよう！」

山村さんが作ってくれたのはいかにも精進料理、と言った風な質素な和食だった。

最も、ロシアイの次の日に豪華絢爛な食事というのも合わないだろうし、これで良かったのかもしれない。

「いただきます……」

「ちよ、ちよっと待ってー！」

俺が箸に手を付けようとすると、亞桐さんが大きな声で引き留めた。

「直前で言い出すのも悪いんだけどさ、この食事が安全だっていう保証はないよね……？」

「……！」

すぐに俺は小清水さんのことを思い浮かべた。

みんなも同じだっただろう。

『絶対に……絶対に許さない……!!! 貴様らがなんと言おうと、私は必ず野望を成し遂げてやる……!!! 私を生かしたことを後悔させてやる……!!!』

小清水さんは俺達にそう言った。

つまり、早ければこの食事にだって毒物を含ませ、俺達を一網打尽にしてもおかしくはない。

現に……当然と言うべきかもしれないが、小清水さんはこの場にいらない。

調理をしたのは山村さんでも、原材料そのものに毒物を入れられていたら防ぎようがない。

また、丹沢君のような悲惨な死に方をする犠牲者が出るかもしれない……。

「大丈夫だよ」

静まり返った食堂内に一石を投じたのは、前木君だった。

「伊丹と山村は知ってると思うけど、な？」

「ええ、先に説明しておくべきでしたね！」

てへ、と山村さんは舌を出す。

「……あの裁判の後、前木君がモノパンダに聞いてくれたの。『食事のたびに殺害の危険があるのではアンフェアじゃないか』……って。そうしたら、納得していくつか手を打ってくれたわ」

伊丹さんがそう解説した。

「まず一に、どのような毒物にも反応する万能試薬の配布。この紙を食材につけて、赤い色を示せば毒物あり。モノパンダいわく、薬もウイルスも関係なく見分けられるみたいだから、信用できないなら各自所持して使ってみるといいと思う。予備は化学室にたくさんあるし」

伊丹さんはポケットからリトマス紙のような小さい紙を取り出して言った。

「それと、倉庫や厨房みたいな、食材が保管している場所での毒物の使用禁止っていう校則が追加された！ だから、保管場所から肌身離さず持ってきた食材なら絶対安全ってことだ！」

続けて前木君が解説する。

「なるほど……。君たちのことだから何か手は打ってあると思って何も言わなかったが、モノパンダが動いてくれたとはね。彼は不倶戴天の敵だが、そういうことに関しては嘘を言ったことはないからね」

夢郷君が笑みを浮かべて言った。

「しかし、それも皆さんのお声がけあつてのことですから。お心遣いに感謝いたします！」

入間君もそう言つて深々と頭を下げる。

「そーそー！ 全く同じ手口で殺されるとオイラもつまらないんだよねー！」

突然その声が響いたかと思うと、モノパンダがテーブルの真ん中に振ってくる。

みんなは嫌そうな顔をしながらも黙つて食事に入った。

「はい、というわけで！ コロシアイ後の恒例、エリア開放のお知らせだぜ！」

「慣例に乗っ取るならば、エレベーターで四階が選択可能になってい

る…と言ったところかな？」

不敵な笑みを浮かべながら夢郷君が言うと、「さーて、どうかな！」とモノパンダは笑った。

「まあ、新しいところを開拓するのもいいけど、まずはここまでの場所をじっくり探してみるのもいいと思うぜ！ 何しろ、前のクロさんがわざわざ“ヒント”を遺してってくれたんだからな！」

モノパンダの言葉に一同の手が止まる。

そう、安藤さんが出入りしていた管制ルーム。

あの場所へのヒントを残してある…とモノクマは言っていた。

それがどこにあるのか…というのも、今回の探索の重要な主題となるだろう。

朝食を済ませると、ここに来てから四度目となる探索が開始された。

「どこへ行こうかな…」

みんながいろんなフロアへと散らばっていったが、俺は優柔不断が祟って食堂で迷っていた。

いつものように新しい場所へ探索に行くべきかもしれないけど、既存の場所に管制ルームのヒントがあるというのも気になる。

今回は、この特別分校の全ての階層が探索対象と言えるだろう。

どこから見るべきか…。

迷った結果、俺は下の階から順番に見ていくことにした。

様々な場所を巡ってこれまでの事件を振り返り、黒幕と戦う決心をつけるためにも。



ホール階に降りると、短い廊下の先に大ホールが待ち構えていた。ここでは、リュウ君…もとい、“超高校級の殺し屋”、龍雅・フォン・グラディウス君が息絶えた。

その最期は、ここでモノクマやモノパンダたちと死戦を繰り広げ、絶望の手先であった釜利谷君を抹殺し、続けて抹殺しようとした御堂

さんの反撃を受けて死亡……という凄まじいものだった。

怪しげな雰囲気を持ちながらも、父性のような温かさを併せ持ち、信頼を預けるのに何ら躊躇いはなかった。

“ 所詮は人殺し”。

そういう言い方もできるかもしれない。

彼がどのように生き、何を思い散っていったのか、もう俺には知ることができない。

本性の彼と話してみたかったな。

大ホールはその時の激戦の痕跡を一切残さずきれいに整理されており、特に変わったところもなかった。

ここで前木君や土門君、釜利谷君とバドミントンをして遊んだのも遠い思い出となってしまった。

俺は続けてトレーニングルームに入った。

「おや、葛西君」

そこには、道着を着て部屋の中央に座っている山村さんの姿があった。

「やあ、山村さん……。こんな時にもトレーニングだなんて、すごいね」

「こんな時だから、ですよ」

足を組んで座っているその姿は座禅のようであり、彼女が気を高めているのがよく分かる。

「葛西君……。あなたは、私が小清水さんを助けたことを憎んでいますか？」

「えっ……」

思わぬ山村さんの言葉に俺は言葉を詰まらせた。

「私はその時、嬉しく思ったんです。ようやく自分の力で誰かの命を助けることができたって……。でもそれは、小清水さんに事実上殺されていたであろう丹沢君の命を蔑ろにすると同時に、小清水さんによって深い傷を負ったあなたにも失礼なことなのではないかって後から思っただんです……」

山村さんは少し曇った表情でそう告白した。

「丹沢君は……もうこの世にはいないから……彼がどう思うかなんて分

からないけど…。でも、生前の彼の性格から推測するに…。ダメとは言わないんじゃないかな。彼は誰よりも愚直に、真面目にみんなが助かる方法を模索してたから…。それに、俺だって山村さんを責めるようなことはしないよ。小清水さんのことは、これから小清水さん自身が解決していけばいいんだから……」

俺は素直に自分の思うところを述べた。

「ふふっ……やっぱりこの人たちは優しいですね。ならば私は、私にしかできないことで皆さんに恩返しするだけです。リュウ君ができなかつたことを、私たちの手で成し遂げられるように……」

“絶望を倒す”。

あれほどの力を持ったリュウ君ですら叶わずに散っていった目的を、俺たちが成し遂げられるのだろうか？

少なくとも山村さんはできると信じているのだろう。

だからこそ、こうやって少しでも己を高める努力を続けているのだから。

トレーニングルームにも特に依然と変わったところはなく、俺は山村さんと別れて一階へと上がった。

トラッシュルーム。

ここは、俺たちが最初に地獄を見た場所だ。

あの時のことは、今でも鮮明に覚えている。

泣き崩れる仲間たち、投入口から垂れた小さな手。

あの瞬間、俺たちは“ここが”絶望の“コロシアイ生活”の舞台であることを思い知らされた。

そんなトラッシュルームは、いつも通りゴミの焼却炉が稼働している。

ここで津川さんが焼かれたことなどウソのように。

俺は目を瞑り、今一度彼女に黙祷を送った。

誰よりも明るく、一番希望と呼ぶに相応しかった津川さん。

彼女が後のコロシアイ生活にも参加していたなら、きっと俺たちは

あれほど絶望しなかっただろうし、その後のコロシアイも起こらなかったかもしれない。

彼女の思いが歪んだ形で安藤さんに伝わってしまったのは残念だったけど……。

俺は君を忘れないよ。

立派な“ホープ仮面2号”になれるように頑張るからね。

天国で見守っててね、津川さん。

焼却炉の横には、萎れた花束が置いてあった。

そういえば、この花束を添えたのは釜利谷君だったっけ…。

不愛想に見えた彼も、こういうところでは仲間への気遣いを忘れなかった。

この花束は、彼が自分が絶望であることを隠すための演技に過ぎなかったのだろうか？

今となっては知りようもないことだ。

でも、いつまでも萎れた花を置いておくのは津川さんにも釜利谷君にも失礼だな。

新しい花に変えておこう。

そう思っただけ花束を拾い上げた俺は、数秒間動きを止めた。

思いもよらぬものが萎れた花の中に挟まっていたからだ。

それは、ノートパソコンに差し込むデータの端子だった。

ノートパソコンと言えば……図書室にあったような…。

モノパンダが言っていたヒントって言うのは、これのことなのか…？

いても立つてもいられなくなった俺は、一階の探索を中断して三階の図書室へと駆けこんだ。

「…来たか、葛西君」

図書室では、夢郷君が本を読みながら俺を待ち構えていた。

…こんな時に、探索もしないで読書を？

「トラッシュルームで例のモノを見つけたのだろう？ それで、そこにあるノートパソコンに繋げようというわけだ」

「…！ 夢郷君、このデータのこと知ってたの？」

「少し前に見つけてね。けれど、君ならきつと自力で見つけられると

思つて敢えて触れずにいたのさ。僕が回収して君に渡してもよかつたのだが、あの場所にそのデータが置いてある。ことに意味があると考えて、やはり手を触れずにおいたんだよ」

「……………」

やはり彼の言うことは意味深で理解が追い付かないな。

「さあ、いよいよ新たな真実が明かされるね。僕はみんなを呼んでくるから、君は構わずデータを起こしておいてくれ」

それだけ告げると彼は部屋を後にした。

全てを見通しているかのような言動に俺はしばらくキツネにつままれたような表情で固まっていたが、やがて自分が成すべきことを思い出してノートパソコンに近付いた。

このノートパソコン、前回の探索の時に見つけたはいいもの、インターネットは繋がらないしファイルも全て空っぽで、まるで使い道を見いだせずにいた。

なるほど、このパソコンの存在意義はこのデータにあったのか。

ゆつくりとデータ端子をパソコンに差し込んだ。

『アルターエゴⅡ』

そう書かれたファイルがパソコン内に現れた。

俺は少し緊張しながらもその項目をクリックした。

少し時間をおいて、パソコンの画面が暗転した。

そしてそこには、衝撃的な映像が浮かび上がった。

画面上には、津川梁さんがいた。

「……………起動しましたなり」

しかし、俺の記憶に残る彼女とはだいぶ様子が違う。

金髪のツインテールや幼い顔つきはそのままながら、何故か伊丹さんのような黒いスーツを身につけ、黒縁の眼鏡をかけた格好をしている。

「…おや、あなたは。…データベース照合。【超高校級の脚本家】、葛西幸彦君で間違いございませんなり？」

「……あ、はい……」

頭がすっかり混乱した俺は、ぼんやりと彼女の声に答えた。

「初めまして。私は人工知能【アルターエゴⅡ】。【超高校級のコスプレイヤー】、津川梁のお姿と声をお借りしてあなたに話しかけておりますなり」

アルターエゴ。

聞いたことがある。

【超高校級のプログラマー】が開発したという超高性能人工知能。人間との会話を難なくこなし、感情の表現も無限に近いほど存在するという夢のような装置だ。

それが、まさか津川さんの姿で目の前に現れるなんて…。

「でも、Ⅱってどういうこと…?」

「元のアルターエゴをもとに、【超高校級のエンジニア】、御堂秋音様が改良を加えたものでございますなり。主にコンピュータウイルスやバグなど、ソフトウェアとしての耐性が非常に強化され、ハッキングも自力で行うことができますなり。御堂様は、ご自分の家族を機械で復活された際、バグなどで動かなくなることを非常に恐れ、このような改良を行ったわけでございますなり」

……御堂さんが。

そうか、彼女がこのアルターエゴの改良を行ったのはこのコロシアイが起る前だったんだ。

だからアルターエゴに関する記憶も失っていたからこのことを知らなかったんだろう。

「あれ? 葛西? なに、それ?」

と、背後から亞桐さんの声が響く。

見ると、夢郷君が連れてきた小清水さん以外のメンツがここに来ていた。

「あ、ああ、みんな。ちょうどいいところに来た」

俺は、これが人工知能【アルターエゴ】であることを説明し、アルターエゴも同様に自己紹介した。

「ああ……すごい。本当にリヤンちゃんの声だ……」

亞桐さんは目に涙を浮かべ、声を震わせてそう言った。

「残念ながら、今の私は本物の津川梁ではございませんなり。本人の性格を忠実に再現することはできませんが、本人そのものにはなれませんなり」

アルターエゴは冷静に言い放つ。

それにしても、冷静で真面目な口調に津川さん特有の語尾がつくとすごく違和感があるな…。

「ところで、これのデータはトラツシユルームにあったんだよね？
何故そんなところに？」

前木君が素朴な疑問を問いかけた。

そういえば、何故あそこにあったんだろう？

「それは、丹沢駿河様がそこに私を隠したからでございますわ」

「えっ、丹沢が!？」

俺たちの間にさらなる衝撃が走った。

丹沢君は、俺達より前にアルターエゴと接触したのか…？

「アルターエゴ様、申し訳ありませんが、私たちがあなたを見つける前のお話を詳しく聞かせてもらえないでしょうか…？」

「分かりましたなり。…長くなりますので、少し語尾はオフに設定しておきますなり」

…あ、それ、調整できるんだ。



そもそも私は、このコロシアイ生活の前半は、技術室の隅に置かれていたのでございます。

黒幕は私を置くことで、コロシアイ生活のヒントを与えたかったの
でしょうか…。

ともかく、私を見つけることができたのは【超高校級の漫画家】、安藤未賊様だけでした。

安藤様は私と会話し、黒幕を暴こうとしました。

しかし私が知っていたのはせいぜい一部の生徒の素性程度で、黒幕

のことは何も知らなかったのです。

そこで安藤様は、私に驚くべきことを命じました。

「この学園のセキュリティシステムをハッキングするぞよ！」

と、命じたのです。

当然、そんなことができるなら起動した時点でとつくにやっています。

すると安藤様は、できなくてもいい、少しでも黒幕の目をそちらに向けられればよいと仰られたのです。

美術室で作業をする時間だけ稼げればよい……と。

安藤様の言うとおり、私は夜時間にハッキングを試みました。

思った通り最初の関門すら抜けられず夜が明けてしまいました、安藤様は目的を達成できたと喜んでおられました。

これで、いつでも“あの場所”にいけると……。

その後、私が用済みになったからでしょうか、安藤様は私が入ったメモリーを丹沢様に渡したのだそうです。

それ以降は丹沢様が私と会話をしてくださいました。

私は、丹沢様に安藤様が行ったことを話しました。

「安藤殿が何をしていたかは知りませぬが、そのようなことを知ってしまった以上、アルターエゴ殿は黒幕に処分される恐れがありますな……」

そう言って丹沢様は、混乱と情報の錯綜を防ぐため、敢えてこのことを皆に秘密にすることを提案したのです。

そして、私を起動しない時は、津川梁に備えた花の中に私を隠してくださいました。

ここならば、たとえ自分が予期せぬタイミングで殺されても、きっと誰かが見つけてくれる……と。

……そういえば、丹沢様と安藤様は？

ここにおられないようですが……。



「丹沢君は……安藤さんに殺されたよ」

俺は歯を食いしばって答えた。

「そして……安藤さんはオシオキされた」

「そうですか……」とアルターエゴは顔を下に向けた。

「丹沢様は、自分がこのコロシアイを生き残る可能性は低いだろうとご自分で仰っております。私の試算でも、残念ながらシロとして脱落する可能性が高いと算出されていました。：残念です」

「でも、一つ分かったことがあるわ」

伊丹さんが告げた。

「丹沢君は、命がけでこのアルターエゴを守り、私たちに託してくれた。彼の願いは、私たちに届いたのよ。彼の死は悲惨なものだったけど……彼は最期まで仲間たちがここを脱出する可能性を信じていたのよ」

「駿河……ありがとう……」

前木君が涙をこらえながら呟く。

「：美術室、だったね。アルターエゴの言葉を信じるなら、安藤君はそこで黒幕の部屋への入り口を見つけたというわけだ」

と夢郷君。

「そのとーりだぜー!!」

「!?!?」

背後から笑い声とともに現れたのはモノパンダだった。

「オメーラさあ、基本頭いいんだけどどつか抜けてるよなあ？ 図書

室にだってちゃんと監視カメラは置いてあるんだぜ？」

モノパンダは監視カメラを指さしながら言った。

「あ！ じゃあここでの会話も丸聞こえ!?!」

亞桐さんが頭を抱えて叫ぶ。

「アルターエゴをぶっ壊すつもりなら……そうはさせねえぞツ!!!」

と、山村さんが赤いオーラを纏い、久しぶりの逆鱗モードに移行する。

「教頭センサーはそんなアンフェアなことはしねーの!! ただオイラは、みんなに優しい助言をしに来ただけだぞっ!」

「助言……?」

「そう！ 前の裁判の時に言った、管理室へのヒントは『美術室』へ入口

がある』という点だけです！ もう入口につながる部分は行けなくしておいたから、今から美術室を探しても無駄だぞってことを言いに来たんだ」

「聞いたかみんな、美術室に行けってさ」

前木君が屈託のない笑顔で言うと、モノパンダは「おい!!」とツツコミを入れる。

「無駄だって言ってるのになんでわざわざ取り越し苦労をしに行くかなー？ オイラは止めたからな！ 後悔しても知らねーぞ！」

そう言つてモノパンダは不機嫌そうにいらなくなった。

「じゃ、美術室をみんなで探すか」

美術室。

そこには、丹沢君が残した等身大の津川さんの像があった。

それをパソコンのカメラに映るようにしてアルターエゴに見せてあげると、「わあ……」と歓声を上げていた。

「すごく美しい……。私の試算では、生前の津川梁がこれを見たなら、感動して失神していたかもしれません……」

「綺麗だよね……。丹沢君って、本当にいろいろたくさんものを俺達に遺していつてくれたよ」

ノートパソコンを持ちながら俺はアルターエゴに語り掛けた。

「機械の私ですら感動させるとは……。創作物とは素晴らしいものなのですね。以前も安藤様が創作物の凄さを語ってくださいましたが、改めて実感いたしました」

「本当……そうだよね……」

俺とアルターエゴはしばらく天使のような津川さんの像を眺めていた。

「……じゃ、手分けしてここを探そっか」

やがて俺たちはみんな美術室を探索し始めた。

「入間、そこ持って！」

「よっこらせっ！」

石像や絵画を動かして裏などもしつかり確認しつつ、くまなく部屋

中を調べていく。

小一時間。

「はぁー、はぁー……」

みんなは息を切らして床に座ったり、寝っ転がったり。

「何も無いじゃんかよ……!!」

亞桐さんの言うとおおり、これだけ探しても何も見つからなかった。

「た、確かに安藤様は美術室と仰られていたのですが……」

アルターエゴが困惑した表情で言った。

「こうなったら津川さんの像以外ゼーンぶぶっ壊しますか？」

山村さんが拳を打ち合わせながらいきり立つが、「そんなことしたらモノパンダに何されるか分かんねーよ！」と亞桐さんが反論した。

「でもさあ、きつと俺らがまだ気付いてない視点があるはずなんだよなあ……」

前木君がそう言って教室内を見回りながら練り歩く。

と、不意に足元にある筆を踏みつけてしまう。

「わっ!!」

そしてそのまま足を滑らせ……

ゴツ。

固い音とともに前木君は勢いよく壁に頭をぶつけた。

「いってー!!」

前木君は頭を抱えて倒れ込む。

「ま、前木君!!」

みんなが前木君の方に駆け寄る。

「意識は問題ないようだけど、たんこぶになっちゃったわね……」

伊丹さんが前木君の頭を撫でながら言った。

「足をつまずかせて転ぶなんて、超高校級の幸運らしからぬ不運ですね……」

入間君が不安そうに呟く。

「……な……」

と、俺は、夢郷君の驚きの声を聞いて振り向いた。

「こんな…バカなことが……」

なんと、前木君が頭をぶつけた部分の壁にヒビが入って、一部が割れて崩れていた。

壁はとても薄く、その後ろにもう一枚壁がある。

「え……？ なにこれ……？」

亞桐さんがひび割れた壁を触りながら呟く。

「待て!! 触るな!!」

と同時に夢郷君の声が飛び、亞桐さんは「ひやつ!?!」と手を引っ込める。

「ぎひゃー……!!!! なんてだぁー……!?!?!」

と同時に、モノパンダが血相を変えて現れた。

「なんで補修した場所にピンポイントで……!! こんなの聞いてねーぞ!!」

俺たちは訳が分からず啞然とするしかなかった。

だが、さらに状況を混沌とさせる自体が起きてしまう。

「どきなさい」

氷のように冷たい声が響く。

誰もが動きを止めた。

今まで姿を見せなかった小清水さんがやってきたのだ。

彼女は部屋を見回しながらコツコツと壁に空いた穴の方に向かう。

「いや、待てよ!! ダメだって!!」

モノパンダが慌てて小清水さんを止めようとするが……

「触るな、ケダモノ!! 私は校則違反など犯していないでしょう!?!」

そう怒鳴られて「ぐっ……!!」と動きを止めた。

「こういう仕組みだったのね」

小清水さんは壁に空いた穴に手をつっ込んで奥側の壁に手を当てると、そのまま手を横に動かした。

すると奥側の壁が横にスライドし、襖のように開いた。

そしてそのさらに奥には、のぼり階段が続いていた。

「手前の壁は新しい塗装の跡がある……。つまり、後から補修して取っつけた薄壁。安藤は、ここがスライドすることを自力で見つけ出し

「てこの奥へ進んだわけね」

「そう言つて小清水さんは薄壁を壊して十分に通れるくらいに穴を広げ、奥の階段を上つていった。」

「ちよ、その奥はダメだつて!!」

モノパンダが震えながら叫ぶが、小清水さんは止まらない。

「よ、よく分かんなかったけど、ウチらも行こー!」

小清水さんの後に続くように、俺達も階段を上った。

「……………」

愕然と膝をつくモノパンダと、怖い表情を浮かべて黙り込む夢郷君を残して。

階段を上ると、今までの場所とは打って変わって暗くて無機質なコルクリートの廊下が伸びていた。

「…不気味だな……………」

頭のこぶを押さえながら前木君が言った。

「いくつか部屋があるみたいですが……………おや…?」 小清水様が…?」

入間君が告げた先には、廊下の行き止まりで佇む小清水さんがいた。

「くくく……………」

小清水さんは肩を震わせた。

「ははははははは!!」

そして、大きな声で笑った。

「…いったい誰が、こんなことを予想できたかしらね?」

「そう言つて、こちらを振り向いた。」

小清水さんが立っている先には、ドアがあった。

鉄格子のような窓がついた頑丈なドアだ。

そしてその向こうには……………。

「……………人?」

伊丹さんが顔に両手を当てて言った。

奥の方のベッドに、人が倒れている。

暗くてよく見えないが、赤い和服を着ているような……………。

「え？ 見せて！ 見せて！」

前木君が俺たちを押しつけて前に出る。

「ほ、ほんただ!! おーーい!!!」

そして、目一杯の声で呼びかけた。

「……あ……れ……?」

すると、なんとその和服の女性が起き上がったのだ。

「……この声……人でありんすか……?」

「おい!! 生きてるのか!」

前木君が小清水さんをも押しつけてドアに顔を近づける。

「……え? 前木? 前木うちでありんすか?」

和服の女性は、前木君を見てひどく驚いた。

「ま、前木うちー!!! あっしは何年もこの時を待ちわびたでありんす!! 早くここから出しておくんまし!!」

「え、顔見知りなの!」

後ろから亞桐さんが問いかける。

「いや……全然知らねえよ?」

前木君は冷や汗を浮かべながら答える。

「ってアンタはギリポン!! ギリポンも来てくれたでありんすかー!」

今度は亞桐さんを見てそう言った。

「はあ!? ギリポンってなんだよ!! ってかウチ、あんたのこと知らないよ!」

「ええっ!?! あちきを忘れてしまったでありんすか??? ひどいでありんす!!」

和服の女性は目に涙を浮かべて叫ぶ。

「あちきはみんなの同級生!! 【超高校級の嘸家】、【吹屋喜咲】であり

◆
◆
◆
「……ん
す
よ
す
す
す
!!!
」

Chapter 4 (非) 日常編②

照明のついていない真っ暗な裁判場。

『で、あいつらは制御棟へ入っちゃったわけ?』

中央の大きな椅子に座るモノクマが問いかける。

「はい…。スライドする部分が見えないように薄壁を張って偽装してたんですけど…。壁を【意図的に】壊すのも校則で封じてるから、まさか破られるとは思ってなくて……」

膝をついて平伏しながら、モノパンダが答える。

『頭をぶつけて【意図せず】壊してしまうのは予想できなかったってこと?』

「だ、だって…あんなところに【運よく】頭をぶつけるなんて思わなかったもんで…」

『言い訳は聞きたくないなあ!』

モノクマの鋭い言葉にモノパンダはビクツと体を震わせる。

『これだから【超高校級の幸運】はキライなんだよね。何が起こるか読めたもんじゃない!』

「で、でも…安藤は【嘶家】に興味を示さなかったからよかったですけど、あいつらはそうもいかないですから……。【嘶家】があいつらと一緒になっちゃったら…【脚本】がメチャクチャになっちゃうんじゃない? まあ、いいんじゃない? そこらへんの微調整のために【あの人】がいるんだからさあ! いいよいいよ! あの子もコロシアイに参加させちやいな!』

モノクマは不気味な笑顔を浮かべながら言った。

「りよ、りよーかいましたあつ!」

そう言うと、敬礼してモノパンダは裁判場から走り去る。

『さーてと、もう一度考えなきゃだめだなあ……』

誰もいない真っ暗な裁判場で、モノクマは一人つぶやく。

『この能力を使うのはバッテリーを使うから嫌なんだけどもなあ……』



俺は終始自分の目を疑うことしかできなかつた。

目の前にいる一人の少女。

和服を着て、かんざしで髪を止めた可愛らしい女の子。

この子が名乗ったのは、【超高校級の嘍家】。

しかも、こともあろうに俺たちの同級生だというのだ。

想像を超えた展開にただ驚くことしかできなかつた。

「あれっ!? そこにいるのはユキマル!? ユキマルならあちきのこと覚えてるでありんしょ!?!」

吹屋さんは俺の方を見て呼びかけてきた。

ユキマルって…俺のことなのかな…?

「ごめん……会ったことないかな…」

「ええ〜〜!!?!?!?! あちき、何か虐められるようなことしたでありんすか〜!!?!?! みんなしてあちきをからかって、ひどいでありんす!!」

吹屋さんはそう言って目に涙を浮かべ始めた。

「みんな、ずーつと一緒に暮らしてきたクラスメイトでありんすよ〜!?!?! あちき、ずつとこんなところに閉じ込められて本当に寂しかったでありんすからね〜!!?!」

「落ち着いて頂戴。みんながあなたのことを知らない理由に心当たりがあるわ」

そう言い出したのは伊丹さんだった。

「ゆきみくん!! ゆきみんは何か知ってるでありんすか??」

吹屋さんは伊丹さんの方を向いて問いかける。

「…信じがたい話かもしれないけど、私たちはこの学園で数年間過ごしていたらしくて、その記憶を消されているの。【超高校級の脳科学者】、釜利谷三瓶君の手によって」

「ぬへえ〜〜!!?!?!?! サンデイが何故そんなことするでありんすか?」

「喜咲ちゃんの呼び名が独特すぎて誰を言っているのかわからねえよ…」

「…それはともかく。釜利谷君は【超高校級の絶望】として私たちにこの場でコロシアイを強いた。…彼は黒幕ではなかったようだけどね」

「あぁっ!!! あのクソヌイグルミが言つてたでありんすよ!! 希望の高校生に絶望のコロシアイをさせるつて……。まさかみんながそれをさせられてるとは…? まさか、誰かが殺人をしたなんてアホなことはないでありんすよね?」

吹屋さんは怪訝そうな笑みを浮かべて尋ねた。

俺たちの表情が曇る。

「コロシアイは既に三回起きた。そして、ここにいる人以外は全員死んだ。【絶望】の釜利谷君も含めて、ね」

「……………うそ…?」

吹屋産の表情が絶望に染まった。

「し、死んだ……で……ありんすか……? イケメンのドモモンも、頼れるリュウ兄も、愛おしいリャンピーも……」

「ここにいない人は、全員死んだわ」

伊丹さんはもう一度繰り返した。

小清水さんは少し離れたところで顔をうつむけていた。

「…残念ながら私はアルターエゴⅡ。津川梁はもう帰つてきませんな
り」

入間君が持っている開いたままのノートパソコンから、アルターエゴがそう告げる。

「リャンピー!!! どうして!!! 二次元美少女の恰好ばかりしてたからって、本当に二次元美少女になっちまうことはなかったでありんすよ……!!!」

吹屋さんは涙を流しながら、ドアののぞき窓に顔を寄せてきた。

「うぁぁっつ!! こんな嘘だ!! みんなあちきのことを忘れてて、しかも友達がこんなにたくさん死んだなんて、嘘でありんすよ!!」

そしてそのままドアにすがりついて泣き始める。

「……………」

俺たちがかける言葉もなかった。

「……………でも、喜咲ちゃんもウチらの同級生だつてんなら、どうしてウチらと同じように記憶を消してコロシアイをさせなかったんだらうね
?」

亞桐さんが腕を組んで言った。

「モノパンダさんの反応もかなり慌てていましたし……。我々と合流させる気はなさそうでしたからね……。つまり、我々と一緒になるのは黒幕にとつて都合が悪いことなのでしょう」

入間君の言うことは最もだ。

「ジョーちゃん……。ジョーちゃんも生きてたでありんすか……。よかったです……」

ドアののぞき窓に顔を押し付けながら吹屋さんは安堵のため息をつく。

「つーかき、この空間に最初に来たのは安藤なんだろう？ あいつはお前に声かけなかったのか？」

前木君が尋ねると、吹屋さんは「えっ!?!」と声をあげる。

「みーたんがここに来たんでありんすか!?! 全然知らなかったでありんす……」

「……恐らく、吹屋さんが寝ている間に来たけど起こさなかったのでしょう。彼女のことですから、興味を示さなくてもおかしくありませんし……」

山村さんの推測にみんなが頷く。

創作への渴望に支配されていた彼女が、吹屋さんに興味を示さなかったとしても不思議ではない。

こんな監獄のような部屋に閉じ込められていたら寝るくらいしかやることもないよな。

「えっ!? みーたん……。あつしに興味ナシだったでありんすか?? 奇跡の再会だったのに……」

「そこらへんは話すと長くなるから、また後で。今はもう一つ気になることがあるの」

そう言つて伊丹さんは後ろを向いた。

そこは、廊下の途中にあるもう一つの扉。

その扉は既に開いていた。

「この空間にあるのは、この部屋とあの部屋の二つだけ。つまり、あそこがこの施設の管制室ということね」

「え〜!! あちきも見たいであります!! ここから出しておくんま
し〜!!」

さつきまで泣いていたとは思えないほどの勢いで吹屋さんは叫ぶ。
「出してくれるならいいんだけどさあ…。入間の話から推測するに、
モノパンダは喜咲ちゃんを出してくれそうにないよねえ」

と、亞桐さんが肩を落とした直後だった。

「別にいいぜ」

モノパンダが階段を上ったすぐの廊下の端に立っていた。

「存在がバレちまったからにはもう閉じ込めとく意味もないしな。吹
屋さんも晴れてコロシアイ生活の一員だぜ!」

「こんなにあつさり出しちゃうんだ……」

「え〜!! ほんとに!?! やつとこの暗い監獄から出られるでありん
すね〜!!」

吹屋さんは喜びの声をあげる。

だけどそれは、彼女もまた誰かを殺し、誰かに殺される可能性を孕
むということだ。

コロシアイの絶望劇に巻き込まれ、それでも彼女はまだ笑ってい
れるのだろうか?

モノパンダがどこからか取り出したマスターキーでドアが開けら
れると、吹屋さんは廊下に出て背伸びをした。

「う〜ん、久しぶりに自由の身であります!! 感動が五臓六腑に染
み渡るでありますね!!」

「まだ自由ではありませんけどね…。この施設内に閉じ込められてい
る限り…」

入間君の言う通り、俺たちは全然自由なんかじゃない。

このコロシアイ生活から脱出するうえで、吹屋さんの存在が助けに
なってくれるといいんだけど。

そんなことをしていると、管制室から小清水さんが出てきた。

「……………」

彼女は廊下に並ぶみんなを一瞥すると、踵を返して階段に向かって
ゆく。

「あ！ やよ様!! あっしを覚えているでありますか!!?」

そんな小清水さんに吹屋さんが声をかけるが、小清水さんは全く応じなかった。

「無駄だよ、喜咲ちゃん…。今の彌生ちゃんは、もう……」

亞桐さんが引き止める。

小清水さんは踵を返して何も言わずに階段を降りていった。

「え……? やよ様、どうしたでありますか……?」

吹屋さんは戸惑いの表情を隠せない様子だ。

「…それも後で説明するよ。それより今は……」

俺はもう一つの扉に手をかけ、真つすぐに手を突き出す。

扉が軋むような音を立てて開いた。

中はモニターや精密機器が並ぶ、まさしく管制室と呼ぶに相応しい場所だった。

それらのモニターには、各部屋の監視カメラの映像が映し出されている。

「うわあ……すごい」

亞桐さんが部屋中を見回しながら感嘆の声を漏らした。

「やはり黒幕はここで私たちの生活を監視していたということですか……。しかし、そうなるのであればどこにも黒幕が見当たらないのが気になりますね……」

入間君が顎に手を当てながら呟く。

「それなんだけどさ……あんま考えたくないんだけど……」

前木君が恐る恐る口を開く。

「俺たちの中に黒幕がいるっていう可能性はないのか……?」

「……!!」

俺達ははっと顔色を変え、互いを見合う。

「そ、そんなアホなことあるかよ! コロシアイをさせられてるうちらの中にコロシアイをさせてる黒幕がいるなんて……」

「だからこそ、だよ。俺達の中に紛れ込むのが一番黒幕にとって正体を掴まれづらい。それに、美術準備室の壁から行けるってことさえ知っておけば、コロシアイの空間からいつでもこの場所へは来れる」

「ある程度筋は通っていますが……。その論理を採用するならば、黒幕は私たちの生活に溶け込みながら私たちを監視しなければなりません。そうになると、睡眠時間なども大幅に削られますし、四六時中私たちを監視することはできません。あまり現実的な案ではないような気がします……」

「う……。それは確かに……」

入間君の反論に、前木君は言葉を詰まらせる。

だがそこに「いえ」と返したのは伊丹さんだった。

「一人だけ、それができる人がいるはずよ」

「……！ まさか！」

入間君は管制室の入口の方を見る。

「どっひゃー!!! すごいハイテクな部屋でありんすね〜!!! こんなにテレビがあつたらどれを見ていいか分からないでありんすよ!!!」

そこには、管制室を見渡してはしゃぐ吹屋さんの姿があつた。

「……!!」

俺は伊丹さんの言葉の真意に気付く。

もし、吹屋さんがここに閉じ込められていたというのが彼女自身の演技だったら。

あの監獄部屋からここを歩き来できるのだとしたら。

ここまでの生活に関与していなかった彼女は、いつでも俺達を監視することができていたということだ。

俺達がこの部屋に到達したことに對してモノパンダが慌てていたのも、他ならぬ吹屋さん自身が黒幕なら見つかりそうになつて慌てるのも当然だろう。

みんなの視線が吹屋さんに突き刺さる。

「え？え？ 何でありんすか？ あつしが美人過ぎて見とれてるでありんすか？」

「み、みんな、やめようよ！ せつかく仲間が一人増えたんだからさ……!! こんなことで疑うなんてよくないよ！」

亞桐さんが必死に呼び止めた。

みんな、この生活を通じて人を疑うことに慣れ過ぎてしまっている

んだ。

同級生を疑ったり、論破したり、投票したり、処刑したり……。そんなことを繰り返すすぎたみんなは、些細なことでも仲間に疑心を抱いてしまう。

「……その件について私から一つございますなり」

すると、入間君の腕の中からアルターエゴが言った。

「吹屋喜咲が黒幕である」という命題を真であると仮定した場合、今後彼女が我々の生活に合流する以上、24時間我々を監視できなくなりますなり。そうなると、コロシアイ生活を運営するうえで障害を生じるのは必至。モノパンダの権限をもってすれば、たとえ我々に見つかったとしても吹屋さんを無理矢理にでもここに閉じ込め続けるという選択肢はあつたはずですなり。それをしなかったということは、彼女が黒幕かその一味である可能性は低いと思われれますなり」

「……んん?! なんだかあつしの名前が出てますが、何を話してるかさっぱり分からんでありんす……」

吹屋さんは首をかしげるが、俺達はアルターエゴの言葉に黙り込むしかなかった。

「…それに、さつきモノパンダは吹屋さんもいる目の前で話してましたよね? つてことは、少なくともモノパンダを動かしてる人は吹屋さんとは別人つてことになりますよね……」

と山村さんが言う。

確かに、モノパンダも機械である以上操作する人がいなければならぬはずだ。

それが吹屋さんじゃないとなると……。

「やっぱり、ウチらにこんなことさせてるのは外部の人間なんじゃないかな。そう考えるのが一番自然だと思うよ」

亞桐さんの言葉に反論する人はいなかった。

「…まだ情報が少なすぎる。ここまで話を進めておいてなんだけど、今はまだ、黒幕のことまで考える必要はないんじゃないかしら。目の前に山積みされた問題もあるし……」

不思議そうな顔をする吹屋さんの方を向きながら、伊丹さんが言っ

た。

「では結局、私たちがこの場所に来て得られた成果は、吹屋様を見つけたということのみですね…」

入間君がため息をついて呟く。

「何言ってるんだ！ 仲間が増えるのは、どんな情報が得られるより嬉しいだろ!! この地獄を生き残るために必要なのは仲間なんだからさ…」

と、前木君。

「そうでありんすよ！ こんなに賢くて可愛くてスタイル抜群の美少女に再会できるなんて千年に一度の奇跡でありんすよ!」

謎の便乗をする吹屋さんに、「そういうのは自分で言うもんじゃねーんだよ!」と亞桐さんがツツコミを飛ばす。

「と、とにかく…時間も経ちましたし、一度食堂に戻りませんか? 四階の探索の前にお昼ご飯を頂いておきたいですし…」

山村さんの提案に俺は「…そうだね」と頷く。

「吹屋さんのことも含めて、いろんなことがあつて疲れちゃったしね。ご飯を兼ねて一度休憩をとろう…」

その言葉がきつかけとなつて、俺達はその空間を後にした。

結局、安藤さんが何のためにここに来て何をしたのかは分からなかった。

…いや、彼女のことだから、最初っから意味も理由もなかったのかもしれない。

それにしても、この吹屋喜咲という女の子。

当面の謎は彼女自身と彼女に関することだ。

しかも厄介なのは、その謎の多くは彼女自身すらも答えを知らないであろうということだ。

階段を降りて美術準備室に戻ると、そこでは夢郷君が待っていた。

「…何か実りある発見があったようだね」

「お前、ずっとここで待っていたのか?」

前木君が不思議そうに尋ねた。

「ああ、もしかしたら黒幕側が強引にこの入口を閉じるかもしれない

からね。何かないか見張っていたんだよ」

流石夢郷君、相変わらず思慮深いなあ。

「あー！ ユメちゃん！ ユメちゃんは賢いから生きてるって信じてた
でありんすよ〜！」

階段を降りるや否や、吹屋さんが夢郷君に飛びついた。

「おや。まさか奥に人がいたなんてね。君は一体何者だ？」

「その質問ももつともだけど抱きついた拍子に胸触ろうとするとはユ
メちゃんも油断ならないでありんすね〜！」

満面の笑みを浮かべながら繰り出された吹屋さんのパンチが夢郷
君をぶっ飛ばす。

この子、亞桐さんや山村さんにも負けない鬼嫁になりそうだ。

「ま、そこら辺の話はまたまた後で…」

時計を見ると、いつの間にか時間は昼過ぎまで進んでいた。

「時間もちようどいいし、もうお昼ご飯にしようか」

「あつ、はいはい!! あちきが！ あちきがご飯作るでありんす!!
ずっと独房暮らしでほんつとに体が訛って!!」

俺がご飯にしようと提案すると、同時に吹屋さんがそう言ってキツ
チンに駆け込んでいった。

元気が有り余っているんだね…。

彼女を見てると、こっちもちよつとだけ元気を分けてもらえるよう
な気がするよ。

「あく待って!! それ塩じゃなくて砂糖!!」

しかし、すぐにキッチンの中から亞桐さんの声が聞こえてきた。
それも、かなり不安を煽られる内容の。

「違いますすったらー！ それは昆布じゃなくてクラゲ！」
入間君の声もだ。

しかも、昆布とクラゲを間違えるってどんな状況なんだろう。
百歩譲ってもワカメぐらいにしておいてよ。

「テメエはアジとトマトの違いも分かんねえのかっ!？」

こともあろうに、逆鱗モードになった山村さんの声まで聞こえてき

た。

からのアジとトマト。

色も匂いも形も種類も何もかも違う、もう共通点を探す方が難しい食材を取り違えてしまう吹屋さんは、ある種の才能を持ち合わせているのかもしれない。

「…私の試算では、吹屋さん達は92%の確率で様々な具材のごった煮を作っていますなり」

と、俺の隣に置かれたノートパソコンから一言。

ああ聞きたくなかったよ、そんな試算。

そして試算通りごった煮の鍋が食堂に出てきた。

みんなが必死に味を調べたおかげか、辛うじて食べられる程度に仕上がった鍋をみんなでいただいた。

協議の結果、吹屋さんには暫く料理は任せないことになった……。



「…んじゃ、気を取り直して四階の探索といくか！」

昼食という苦行を終えたみんなは、前木君の号令で散り散りになった。

「ユキマルー!! あちきと一緒に探索しよう? でありんす!」

俺の両肩をバンと叩きながら声をかけてきたのは吹屋さんだった。

「わっ、ビックリした……。料理のことで伊丹さんからあんなに怒られてたのに、相変わらず元気なんだね……」

「へへっ! ありがたい説教は全部聞き流すのがあちきの特技でありんすから!」

吹屋さんは自慢げにそう言ったが、どう考えても自慢げに言うことじゃない。

「さっ!一緒にエレベーターに乗りましょ?」

「あ……」

エレベーターが開くと同時に俺は動きを止めた。

エレベーターの扉が開くと、そこには小清水さんが乗っていたからだ。

「あ、やよ様…。えっと、今のやよ様に関わっちゃダメなのでありませんよね?」

「それは……」

「四階に行くんでしよう、さっさと乗りなさい」

俺が言葉を詰まらせていると、小清水さん自身がそう促してきた。

「……………」

不思議そうに俺と小清水さんの顔を交互に見る吹屋さんの腕を引っ張りながら、俺は恐る恐るエレベーターに入った。

…まさかこの場で二人とも殺す、なんてことはしないと信じて。

しかしこの空間……激しく気まずい…。

「やよ様……ハッキリ言っってほしいであります」

エレベーターに入るや否や、吹屋さんが声をあげる。

「虐められてるならそうハッキリ言っってほしいでありますよ!」

「!?!」

思わぬ言葉が出たので俺は思わず転びそうになってしまった。

「だって、みんな口を揃えて『あいつに関わるな』『口をきくな』って

…。これはもう立派なイジメであります!」

そこまで極端なことは言っってないと思うけどな……。

ただ、二人つきりになっってもし吹屋さんが殺されたり、何かに利用されたらっって思うと怖いんだよ、みんな。

「ふふ」

吹屋さんの言葉を聞いて小清水さんは不敵な笑みを浮かべた。

「逆よ。私がみんなを虐めたの。いえ、イジメよりはるかにひどいことをした」

「え?!」

「私が丹沢駿河を殺した」

「!?!」

チーン、とエレベーターが四階に到着する音が響く。

「私にフラれたからっってもう新しい女を見つけたのね、小さな脚本家くん」

からかうように俺にそう言っって小清水さんは廊下の先へと消えて

いった。

廊下を見た感じだと、他の階と大して大きな差はない。

それよりも問題なのは、俺の横で固まっている吹屋さんだった。

「え？ どういう…？」

混乱するのももつともだ。

さつき彼女に説明したばかりのロシアイのルール。

【人を殺したクロは裁判に負ければオシオキされ、勝てば一人で脱出
することができる】

裁判の後も人を殺したクロ、そして俺達と一緒に生き残っているこ
とはあり得ない。

…“普通の事件”なら、ね。

「やっぱり、隠してはおけないね」

俺は吹屋さんに話すことにした。

前回の事件と裁判の全て。

欲望と憎悪、愛情が複雑に絡み合った悲劇の全てを。

「……ってわけだよ。これが、吹屋さんが閉じ込められていた間に起
きた第三の事件の全貌だよ…」

廊下での長話というのも野暮だったが、話しているうちに自然と夢
中になっていく自分がいた。

きっと、自分でも“言葉にすることで前の事件と区切りをつけたい
”という思いがあったんだろう。

「……」

吹屋さんは今までに見せた表情とは打って変わって、真剣な顔をし
ていた。

「…最低」

「……!!」

吹屋さんらしからぬ言葉が出たことに一瞬驚いたが、すぐに俺は冷
静になった。

考えてもみれば当然のことだ。

自分の野望のために同級生を犠牲にし、あまつさえそれを反省する

そぶりすらない。

同じ罪を犯した安藤さんはもうこの世にいないけど、小清水さんは未だ俺達と同じ空間にいる。

最低と言われても仕方ないし避けられるのも仕方ない。

それに、小清水さん自身もそれを望んでいる。

それなのに、なぜ。

今まで小清水さんが見せた偽りの笑顔こそが、偽りの優しさこそが、彼女の本性であってほしいと願う自分を立ち切れないのだろう。

「でも、ありがとうユキマル。ぽつと出のあちきを信用して真実を事細かに教えてくれて」

すると、吹屋さんは俺にそう告げた。

「…どうして真実だつて分かるの？」

「嘘家をずっとやってるとね、話す態度とか様子で嘘か真実か分かるようになるでありますよ。ま、あくまで目安なので裁判とかで使えるほどの万能テクじゃないけどー」

「…そうなんだ…」

「ふふっ。ユキマルはあちきが覚えてる昔のユキマルと何も変わらな
いでありますね。ユキマル以外も、みんな昔と変わってなかった。嬉
しいでありますよ」

さつきまでと同じような天真爛漫な笑顔を浮かべながら吹屋さん
は言った。

そういえば、彼女はこのコロシアイ生活が始まる前…俺達が一つの
クラスで過ごしていた時の記憶があるんだっけ。

第二の事件の時、釜利谷君の記憶研究書から明かされた【制御され
た記憶】の存在。

自分の中に抹消された記憶があるなんてずっと信じられずにいた
けど…。

吹屋さんの存在とその証言によって、その仮説が真実であることが
証明された。

彼女が保有している記憶についても、いずれ早いうちに聞いておか
ないとな。

いつだれが死ぬか分からないこの場において、情報の速達は命綱だからね…。

「ふーん。ここは音楽室でありんすね」

そんな思惑は胸にしまい、四階の探索を開始した俺と吹屋さん。

最初に入った教室は、見たまんま“音楽室”だった。

中央には指揮者台、端には大きなピアノ。

本棚には楽譜がぎっしり詰まっている。

「懐かしいでありんすね、学園ではあちきの美声に毎回みんな聞き惚れて…つてユキマルは覚えてないのか…」

「…へえ、吹屋さん、歌が得意なんだ」

彼女のことだからホラという可能性も十分にあるけど、とりあえずは信用することにする。

「ええ、そりやもう！ 何しろ嘶家ですから、そのお得意の美声でもつて…」

と長々と自慢話を始めた彼女をよそに、俺は音楽室をじろりと一瞥する。

見たところ、本当にただの音楽室だ。

今までの部屋のように、ダーツがあったりカラオケボックスがあったり爆弾製作キットがあったりなんてことはない、至って普通の音楽室。

まあ、今までの部屋がおかしすぎたと言われればそれまでなんだろうけど。

「そこであちきが麗しの声で『先生、話聞いてませんでした〜！』と…」

「ほら吹屋さん、次の部屋行くよー！」

まだ自慢話を続けている吹さんの腕を引っ張りながら、俺は音楽室を後にした。

「4—A……」

そこも、今までと同じように何の変哲もない学習教室だった。

本来高校生としては教室にいる時間が一番長くならなきゃいけないんだけど、コロシアイというあまりにも異常な空間に慣れすぎたせいか、逆に教室という空間が非日常的なものに思えてしまう。

それに、教室をみると2―Aで見た、首の垂れ下がった釜利谷君の遺体を思い出してしまつて嫌な気分になつてしまう。

「なくんだ、ただの教室でありんすね…。隣の4―Bも。ツマンネ」
あからさまにつまらなそうな顔をする吹屋さん。

「そもそも、なんで高校なのに4年生の教室が用意されてるんだろう
…

「あつ、そつか…ユキマルは記憶がないから。希望ヶ峰は五年制の学園で、希望すれば大学級の授業もとれるところでありんすよ」

…ああ、そうなんだ。

入学する前も希望ヶ峰のことは調べてたはずだけどなあ。

外部に公開していない情報なのかな？

「……で、ここは弓道場、と」

次に入ったのは広々とした弓道場。

三階の植物園の真上に位置する大きな部屋だ。

「いいつすね、あちきもここに立つて弓を引き絞つて撃つてみたいもんでありんすね」

吹屋さんは的の正面に立ち、弓を撃つジエスチャーをしてはしゃいでいる。

「できると思うよ。弓も矢も、ついでに弓道着もここにあるみたいだし」

俺は部屋を見回しながら言った。

だが俺の関心は、弓道部よろしう的を射ることよりも、それが凶器に使われうることにあつた。

人を撃つために制作されたものではないとはいえ、的に突き刺さるだけの鋭利さはある。

当然、喉に突き刺すことだってできるだろう。

なにも弓に構えて打つ必要もなく、矢をナイフのように突き刺して殺すこともできるのだ。

「ユキマルー？」

吹屋さんの声で俺はビクツと肩を震わせた。

そしてすぐに自分が嫌になつた。

弓を見て素直に弓道に憧れる吹屋さんと、それを使って人を殺す方法を冷静にシミュレートしている自分を対比して嫌気が差したのだ。「ごめん。次の場所へ行こう」

そんな嫌気を紛らわすように、俺は探索も中途半端なまま弓道場を後にしてしまった。

「あれ、葛西と喜咲ちゃんじゃん？」

弓道場を出たところで亞桐さんに出会う。

「やつほー、ギリポン！ あちきはユキマルと四階探索の最中でありんす！」

「あはは！ もうすっかり仲良しになったんだねー！ いいねー、お似合いじゃん！」

「亞桐さん……」

思わぬいじり方をされたので俺は言葉に窮してしまった。

しかし吹屋さんは無頓着なのか鈍感なのか、特に気にする様子もなく笑っている。

こういうところはちよつと安藤さんに似てなくもない……かも。

「で、ギリポン。四階って4―Aと4―B、音楽室とこの弓道場の他にどんな部屋があったでありんすか？」

「それがね……今言った部屋だけなんだよ」

「え?!」

俺は素っ頓狂な声を出してしまった。

二階はプール、技術室、美術室、美術準備室、化学室、2―A、2

―B。

三階は植物園、図書室、図書準備室、娯楽室、3―A、3―B。

四階は弓道場、音楽室、4―A、4―B。

他の階に比べて明らかに教室の数が少ない。

でも、図書室のように普通の教室より広い教室があるわけでもない。い。

弓道場も大きさは植物園やプールと同じくらいだ。

つまり、四階は他の階より敷地が狭いのか。

「他の階に比べて狭いよね？ ゆきみんが言ってたんだけど、喜咲

ちゃんが閉じ込められてた牢獄部屋とかがあるのがこの四階なんじゃないかなって…」

…ああ、そういうことか。

二階の美術準備室から伸びる隠し階段はやけに長かったが、それは二階から一気に四階に伸びていたからなのか。

「へえ、じゃあこの壁の向こうにあちきが閉じ込められてたわけでありんすね」

吹屋さんが壁に手を当てながら呟く。

「じゃ、探索も終わったことだし食堂に戻ろ！ お菓子つまみながら報告会したいし！」

「あ〜！ いいっすねそれ〜!!」

亞桐さんと吹屋さんがはしゃぎながらエレベーターに乗っていくのを、俺は慌てて追いかけた。

「……あ」

エレベーターのドアが閉まる瞬間、廊下に出てこちらを見つめる小清水さんと目が合った。

彼女は妖艶な笑みを浮かべていた。

相変わらずあの人の考えることは分からないな…。



夜時間。

個室が与えられていない吹屋さんは一番信頼できそうな亞桐さんの部屋に泊まることとなった。

俺はいつも通り個室で一人つきり。

枕に顔を押し付けて考え事に耽る。

今日触れ合ってみた感じ、吹屋さんが嘘をついていたか悪いたくらみをしているようには見えない。

アルターエゴも、彼女が黒幕側である可能性はとても低いと言っていた。

でも、何故このタイミングで俺達に合流することになったのか？

一つ分かるのは、俺達があゝの隠し階段とその先にある空間を見つけたのは、モノパンダにとって予想外だったということだ。

明らかにそういう反応をしていた。

だけど、俺達が吹屋さんを発見した後はあつさり解放して俺達のコロシアイ生活に加入させた。

そんなにあつさりコロシアイをさせるのなら、最初から俺達と一緒にコロシアイに参加させればよかったのに。

俺の机の上に置かれたノートパソコンを見た。

あゝの後、紆余曲折を経て結局アルターエゴは俺が預かることとなった。

この子もこの子で謎な存在だ。

丹沢君が俺達のためにトラッシュルームに隠しておいたメモリーからこの子は現れた。

でも、全ての監視カメラを覗ける黒幕なら、安藤さんや丹沢君がアルターエゴを入手し、使っていたことも知っていたはずだ。

そもそも、このアルターエゴ自体、最初は技術室の隅に置かれていたと自分で言っていた。

そんなところに置いてあった時点で、黒幕側から手を加えられていると考えても何もおかしくないだろう。

もしかしたら、このアルターエゴが新しい動機に……？

「疑ってくれて大丈夫ですよ
!？」

突然のアルターエゴの声に、ビックリしてベッドの上で飛び跳ねてしまった。

「君、スリープ状態でも喋れたんだ……」

「……はい。驚かせてしまつてごめんなさい。バッテリーさえあればアルターエゴ自体は常に起動しておりますなり」

その声は、間違いなく閉じたままのパソコンから聞こえていた。

「……どうして俺の考えていることが？」

「ずっとこちらを見て思案に耽つている様子でしたから。息遣いの様子からも考えている内容が大体わかりますなり」

…吹屋さんといい、考えていることを見透かされてばかりだな。
これじゃあうかうか考え事もできないよ…。

「でも、そう思うのも当然ですなり。私自身、起動する前はようになっていたのか知る術はないですし…。自分で怖くなるんです。無意識のうちみんなのコロシアイの一助となつてしまわないか…。」

「そ、そんな…！ 今日話した限りでは、君が悪い人…じゃなくて悪いプログラムには思えなかったよ。確かにちよつと疑つてたのは事実だけど…。でも、もうこんな形で疑心暗鬼になるのにはもう疲れてるんだよ。本当はこんなことしたくないんだよ」

「…………お優しいんですね。このような極限状況においても」

ノートパソコンが閉じている以上、アルターエゴがどんな表情をしているのかは分からない。

でも、きつと人間と同じような表情を浮かべているに違いない。
そう信じたい。

「その優しさを見込んで、私から一つ、今日の生活を通して得た“可能性”をお教えしたく思っておりますなり」

ふと、小声になってアルターエゴは言った。

小声になるということは、黒幕には聞かせられない話ということだ。

「……………」

俺は何も言わず、ベッドから出てアルターエゴが置いてある机に腰を掛けた。

そして、黒幕から怪しまれないよう、紙とペンを出して、脚本のアイデアを書き留めるフリをした。

「そのまま、聞いていてください」

アルターエゴの言葉に、俺は微かに首を縦に振る。

「あくまで可能性ですから、結果を保証するものではないことを先に明言しておきます」

もう一度頷く。

「…夢郷様は、恐らく『夢郷郷夢』ではありません」

俺の手が止まった。



深夜。

一階、休憩室。

そこでは、いつものように夢郷郷夢が読書に耽っていた。

そこにコンコン、とノックの音が響く。

「…こんな時間に？ どうぞ、入りたまえ」

「お邪魔します」

「…なんだ、入間君か。こんな夜更けに何の」

扉から入ってきた入間ジョーンズの顔を見た夢郷はそこまで言いかけたが、言葉はそこで止まった。

「……………」

入間に続いて、山村巴、伊丹ゆきみが入ってきたのだ。

しかも山村は普段の制服ではなく、修行や戦闘の時に着る道着の姿。

三人とも険しい表情を浮かべている。

「…なんだい、君達。そんな怖い顔をして。これじゃあまるで——」

夢郷はあくまでも普段の笑顔を崩さなかった。

「——僕を殺しに来たみたいじゃないか」

ぞわり、と周囲の空気が殺気立つ。

「…なるほど、確かに雰囲気は夢郷君そのものですね。学園の記憶がある吹屋様でさえ気づかれなかったのも頷けます」

入間はこわばった表情を崩さないまま呟いた。

「入間君、本当に彼が……………」

山村の声に入間は答えない。

「おいおい、一体なんの話だい？ 僕の読書を遮るといふことは、それ

だけの価値がある話なんだろう？ それとも、ここで黒幕に聞かれるとまずい話なのかな？」

夢郷は少し小声になつて言った。

「隠す必要などありませんよ。黒幕に聞かれたとしても、何の問題もない。……………いえ、むしろ黒幕には聞いてもらわねばなりません」

入間の目つきと語調は次第に強いものとなつていく。

「ほう、それはいったい何故？」

夢郷は本を机に置き、興味深そうに身を乗り出して尋ねた。

「…入間君。本当に始めるのね」

伊丹が重い声で入間に問う。

「ええ。あなた方二人を巻き込んでしまうご無礼をお許しください」

「入間君……………」

「……………」

早く答えろ、と言わんばかりの視線で夢郷は入間を見つめた。

「理由は二つあります」

入間は指を二本立てながら答える。

「一つは、コロシアイ生活はもう終わるからです。今、ここで」

「ほう」

夢郷の口角が少し上がる。

「もう一つは……………単純明快です」

「私の目の前に、その黒幕がいるからです」

「……………」

しばしの沈黙。

緊張が四人を包む。

「……………ふふふ、はっはっはっは！ 何を言い出すかと思えば！」

沈黙を破つて夢郷は破顔一笑した。

だが、入間達三人の表情に変化はない。

「私には分かるんです。あなたの僅かな所作、表情の違いが。…そう、同級生の記憶を持ったままなのは吹屋様だけではないんです。この

私もそうなんです。ええ、そうですとも。釜利谷さんは失念していたのです。ゆえに“学園に入った後”の記憶しか消さなかった。けれど、それだけで私とあなたの間にある記憶は無にはならなかったのです。…あなたと私は学園に入る前からの刎頸の友なのですから」

そう告げる人間の目にはわずかに涙が浮かぶ。

「では何かね？ 君は僕が“夢郷郷夢”ではないと言うのかい？ そのような仮説、一体どうやって」

「あなたが私と初めて出会った場所はどこですか？」

夢郷に答える暇を与えぬよう、人間はすかさず問う。

「：ノヴォセリツク王国王立大学第三講義室」

夢郷はすらすらと答えた。

「最初に話しかけた内容は？」

「君が手に持っていた蔵書の話だ」

「その蔵書は？」

「フェルトマイアーの“天に人あり”だ。…こんな問答をあと数百回繰り返す気がい？」

「：本当にその書物でしたっけ？」

「おいおい、よりにもよって質問をした君がうろ覚えでは困るよ。フェルトマイアーの天上論に、僕が当時支持していた唯物論を交えて談義をしたじゃないか」

「……………」

人間の顔が一瞬悲痛に歪んだ。

「嘘であつてほしかった…。私の予感も確信も、全て嘘であつてほしかったのに……………」

そう呟く人間の頬を、涙が伝う。

「……………」

それを見て、初めて夢郷の表情に焦燥が見えた。

「…そんな話はしていません。私が手に持っていたのは“天に人あり”…のカバーをかけた“女体の進化史”です。“天に人あり”のカバーをかけたのも、後のインタビューで“天に人あり”の談義をしたと嘘をついたのも、あなたと交わした中学生らしい猥談をパラッチ

から隠すためだったんですよ」

「……………!!!」

入間以外の三人に衝撃が走る。

「あなたは夢郷郷夢ではない…。非常に残念ですが……………」

「いや、これは失礼した…。僕も昔のこととなると記憶が曖昧でね…」

“夢郷”は慌てて口を濁す。

「…これでしょう、あなたが言っていた“嘘”は」

そう言っつて伊丹が切り取った雑誌の一ページを見せた。

『○○年○月○日 超高校級の翻訳者と哲学者が語る、二人の出会い』

そう名付けられた記事が載せてあった。

「図書館の中を片っ端から探したら見つかったわ。内容は、今あなたが言ったものと同じ。『ノヴォセリツク王立大学第三講義室で、フェルトマイアーの“天に人あり”についての談義をした』と。記憶違いと言うけれど、あなたの記憶はこっちの情報と厳密に一致しているのね？ この記事を処分せず放置していたのも、あなたがこの記事の内容を真実だと思い込んでいたからでしょう？」

「いや…。マスコミがあまり騒ぎ立てるものだから、そっちと記憶を取り違えてしまったんだろう。もしかしたら、釜利谷君に記憶を制御された副作用かもしれない」

「もう言い逃れなんて無駄ですよ！ 議論が苦手な私でも、あなたが苦しい言い逃れをしているのがよく分かります……………」

山村が拳を合わせて言った。

「そうですね…。もう、終わりにしましょう。終わりです。あなたの全てが、今ここで終わる」

「……………」

“夢郷郷夢”は何も言わなかった。

代わりに、わずかに笑みを浮かべた。

狂喜が100%となる。

前木の体がガタガタと震える。

「それがあなたの本性ですか。今までずっと、私たちをこのような場所に閉じ込めて、憎しみ殺しあう姿を眺めて楽しんでいたのですね」
中から入間の声が聞こえた。

しかし今の前木にはそんなことさえどうでもよくなっていた。

その次に入間が発した言葉に全ての謎への回答が込められていた。

「……土門隆信さん」

「!!!」

「前木の全身に稲妻が落ちたような衝撃が走る。

それは、この場において聞くはずのない、しかし片時たりとも忘れていた、否、そのものだった。

だがモノパンダの笑い声を発したあの声は、確かに土門のそれに似ていた、う、う、ウソだ……」

「う、う、ウソだ……」

小さくそう呟きながら、ガクリと膝をついた。

「ところがどっこい、これは現実です」

背後から不意に声が響く。

前木が振り向くと、そこには不敵な笑みを浮かべる小清水彌生が立っていた。

「夜尿に出たばかりに知ってはいけないことまで知ってしまったよね。これも“超高校級の幸運”だからこそ成せることなのかしら？」

「違う……ウソだ……だって土門は……」

前木は混乱と絶望にまみれた表情を隠すこともせず、たわごとをつぶやき続ける。

「そうよ。土門隆信は津川梁を殺し、オシオキされた。私たちの目の前で。でも彼はドアの向こうにいる。そして入間ジョーンズ達に追い詰められている。それが事実よ」

小清水の言葉が容赦なく前木の胸に突き刺さる。

「ねえ、どうせ知ってしまったのなら私と取引しましょう？」

そんな前木に、小清水は人差し指を立てて提案した。

「私が知っていることを全部教えてあげる。このコロシアイ生活の謎

を解く鍵も、人間ジョーンズ達でさえ知らないことも、全部。その代わり……」

「私の計画に協力しなさい」



「…最初に違和感を覚えたのは、あなたが津川様を殺害し、クロであると自白した直後です」

休憩室で“土門”と対峙する人間は、自らの推論の根拠を語り始めた。



【Chapter 1 非日常編③】

『前木君が叫ぶのも当たり前だ。

俺だって信じられない。

あの彼が、みんなの兄貴分だった彼が、津川さんを殺害したただなんて。

でも、それを否定する材料はない。

辻褄は合ってしまう。

「もういいんだ…。モノクマ、モノパンダ。始めてくれ……………投票を」
『りようかーい!! んじゃ、みんなの手元にそれぞれの名前が書かれたボタンを渡すよー!』

そう言っつてモノクマとモノパンダが各々に渡したのは、スイッチの
ようなものが並んだ四角い物体だった。』

◆◆
「あの時、あなたは誰に促されるわけでもなく『投票を始めくれ』と仰いました。ですがそこがおかしいのです。あの事件は、裁判やコロシアイのルールについて十分に説明されることなく起きた事件です。ましてや最初の裁判である以上、裁判がどのようなようにして進行するかすらも知らぬまま行われました。しかしあなたは裁判の最後に『投票』があることを知っていた。だから何のためらいも疑問もなく『投票を始めくれ』などと言えたのでしょうか」
「……………」

土門はにやりと笑ったまま、何も言わなかった。

「第一の事件があった時、夢郷君は確かに我々と共に生活していました。しかしあなたはいつの間にか彼とすり替わっていた。そのタイミングも、おおよそ察しがつきます」
「へえ」

「第三のエリアが解放されて数日後、プールでスイカ割り大会を行いましたね？ スイカ割りが終わった後、私に恋人がいることを話したらくさんの人に追われたものです。今となっては懐かしい。…ですが、そういう話題なら先頭に立って追いかけてきそうな夢郷君が、何故か私を追わずにプールサイドに座っていた」



【Chapter 3 (非) 日常編②】

『恋人って…………恋って…なんなんだろうね…』

そんな光景を唾然と眺める俺はほんやりとつぶやいた。

「そういうのは吾輩の専門外だぞよ」

いつも通りの穏やかな笑顔でスイカをむさぼる安藤さんが答えた。

「恋とは何か。…それは難しい問いだ」

不意に声が出した方を振り向くと、夢郷君が俺と安藤さんの間に座り込み、一緒にスイカを食べ始めた。

「あれ？君は人間君を追いかけないの？」

「はっはっは。さすがに彼が衰れに思えてね」

泳ぎは人間君より早かったはずだが、旧友の間柄であるからか、情が働いたようだ。』



「ほんの些細な違和感でした。しかし私はある可能性に行き着いたのです。『彼は水に入らなかったのではなく、『入れなかった』のではないかと』」

「水に入れないって…どういことですか…？」

山村が問う。

「簡単な話です。“泳げない”のですよ」

「えっ…？ でも、我々の中に泳げない人はいなかった気が…」

「いますよ。たった一人だけ、泳げないことを明言されている方が」



【Chapter 2 (非) 日常編②】

『……プール大会の話、聞いたか？』

「う、うん。前木君も参加するよね？」

「しない、と言ったらどうしようと思ったけれど。」

「ああ、するよ。心配すんな」

いつもの陽気な笑みを浮かべてそう答えた。

「“彼”だったら…こういうイベントには絶対参加したがつただろうね」

スポーツと聞いて陽気にはしゃぐ彼の姿が脳裏に浮かぶ。

言っではいけないことだったのかもしれないけど、口について本音が出てしまっていた。

「ああ？ お前知らねーのか？ あいつカナヅチなんだぞ？ ガキの頃に溺れたのがトラウマなんだとよ」

思った以上に明るい口調で前木君はそう答えた。

「え、あ、そうだったんだ……」



「…そういえば、私も前木君から聞いたことがあります。土門君はカナヅチだった……」

「そうなんですよ。運動神経抜群の彼が唯一致命的に苦手なスポーツ…それが水泳です」

「……よくそこまで気が付いたなあ。ま、証拠って呼ぶにはどれも弱いけど、別にオイラは誤魔化す気も逃げる気もないから安心しろよ」

土門はそう言いながら布切れを脱ぎ捨て、タンクトップ姿となった。

「体格は元々似てたし、髪もわざわざこんな色に染めて声も完璧に作ったのになあ。そっかそっか、こんなに早く見抜かれちゃうとはな」

「あなたはオシオキの末に死んだ…。皆そう思っています。しかし、実際にはあの時、あなたは鎖で別空間に逃げ込んだだけ。我々が見せられたオシオキの映像は巧妙に作られた合成映像ですね。オシオキが執行されたかのように見せ、公式には“死んだ”存在となったあなたは夢郷君の姿を借りて再び私たちの中に紛れ込み、コロシアイをさせるべく裏でいろいろ画策していたのでしょう。そのいい例が、私たちが吹屋様を見つけた時のあなたの反応です」



【Chapter 4 (非) 日常編①】

『ゴッ。』

固い音とともに前木君は勢いよく壁に頭をぶつけた。

「いってー!!」

前木君は頭を抱えて倒れ込む。

「ま、前木君!!」

みんなが前木君の方に駆け寄る。

「意識は問題ないようだけど、たんこぶになっちゃったわね……」

伊丹さんが前木君の頭を撫でながら言った。

「足をつまずかせて転ぶなんて、超高校級の幸運らしからぬ不運ですね……」

入間君が不安そうに呟く。

「……な……」

と、俺は、夢郷君の驚きの声を聞いて振り向いた。

「こんな…バカなことが……」

なんと、前木君が頭をぶつけた部分の壁にヒビが入って、一部が割れて崩れていた。

壁はとても薄く、その後ろにもう一枚壁がある。

「え……? なにこれ……?」

亞桐さんがひび割れた壁を触りながら呟く。

「待て!! 触るな!!」

と同時に夢郷君の声が飛び、亞桐さんは「ひゃっ!?!」と手を引つ込める。』



「前木さんが頭をぶつけて薄壁を壊した時、あなたは一人だけ強く動揺していました。また、亞桐様が薄壁に触ろうとした時も強く諫めていましたね。これは、私たちが吹屋様の部屋へと繋がる階段に到達してしまったことに対して、モノパンダさんが予想外の展開に驚いていたのと同じように、あなたにとっても想定外の事態だったからではないのですか?」

「……………なるほどねえ」



「じゃあ……あいつは……ずっと夢郷と入れ替わってたのか……」

廊下に座り込み、小清水の話を聞く前木の顔からは、すっかり血の気が失せていた。

「“ずっと”という表現は些か不適切ね。ついこの前までは夢郷郷夢は本物だった。入れ替わったのは恐らく、第二の事件と第三の事件の間ね」

「なんでそんなことが分かるんだよ？」

「考えてもごらんなさい。スイカ割り大会の時、彼がプールに入らなかったと言ったでしょう？ でもね、第二の事件の前に私たちは水泳大会を行った。その時は……」

「あ……！ 夢郷もプールに入って泳いでた……！」

「そう。だから、少なくともあの時点までは、夢郷郷夢は本物だった。入れ替えを行うのに適した時間があるとすれば、それは第二の事件の裁判が終わった後。裁判の後、それもあれだけ凄惨な裁判の後なら誰もが個室で寝ているはずだものね。それに、黒幕にとって最大の強敵である龍雅・フォン・グラディウスを葬った直後ですもの、黒幕が動き出すには絶好のタイミングよね。夢郷の性格からして、呼び出せば簡単に一人で来てくれそうだし」

「夢郷は……第二の事件が終わった後、土門に呼び出されたってことか……？」

「その通り。そしてその顛末がこれ」

小清水は白衣のポケットに手を突っ込んだ。

「なっ……!!」

前木はさらに驚愕の表情を浮かべた。

小清水が取り出したのは、ビニール袋に入った人の指だった。

しかし肉の部分は朽ち果て、黒く変色し、惨たらしい有様だ。

「信じられる？ これが植物園の地面の中に埋まっていたのよ」

「人の指……だよな？」

前木は、人の遺体の一部を見てもそれほど取り乱さない自分を内心嫌悪した。

それはつまり、このコロシアイ生活を経て、自分が死体に慣れすぎてしまったことを意味しているからだ。

「現場に行けば、ちゃんと全身があるわよ。最も、損壊が激しくて“体格のいい男性”というくらいしか判別はつかないけどね。植物園の温暖な気候と虫さん達による捕食のせいで遺体の分解が早かったのでしょうね。前々から水質に汚濁が見られないのに植物園全体から変な臭いがすると思っていたけど、こんなものが埋まっていたなんてね」

「その指って……………まさか……………」

前木の声は震えていた。

「本物の夢郷郷夢、と考えるのが自然でしょうね」

前木は荒れ狂う感情のまま思いきり床に拳を打ち当てた。

「そんな……………そんなのアリかよ……………」



その頃入間も、小清水と同じように袋に入れた指を土門に見せていた。

「これが……………私の親友のなれの果てです」

入間の口調は落ち着いていたが、その拳がわずかに震えているのを伊丹は認識していた。

「このコロシアイ生活は、あまりにも犠牲が大きすぎました。もう少し早く核心に行き着いていれば、犠牲者は少なくて済んだかもしれない。それを思うと今でも胸が穿たれる思いです。ですが、この絶望のコロシアイ生活ももう終わる。あなたを倒し、ここから脱出させていただきます」

「……………ぎひやひやひやひや、ぎーっひやっひやっひやっひやっひやっ!!!」

土門は大口を開けて笑った。

「入間君さあ、それで終わりなの？ 君の謎解きはそれでオシマイ？」

「……………どういうことですか」

「ぎひやひやひやひや!! ダメダメダメ!! ぜんっぜんダメ!! たっ

たこれだけの推理じゃあ、このコロシアイの根本が何も分かってないじゃんかよ!! オイラの正体が分かっただけじゃあ、10点もあげられねーなあ!!」

「黙れ!!」

入間が不意に机を叩く。

「これ以上私を愚弄するな!! 夢郷君の命を奪ってにおいて、お前は」
「入間君!!」

伊丹の怒号が入間の声を止めた。

「ここで挑発に乗る利点はないでしょう。それに、彼の言う通り私たちにはまだまだ解き切れていない謎もあるのだから」

「ですが、ここで彼の言葉を鵜呑みにする必要はあるんですか? 今ここで彼を倒さなくては、何のために覚悟を決めてここに来たのか!」

山村が両の拳を打ちつけながら言った。

「オイラを殺したってここから出られる方法があるとは限らねーぞ?」

そんな三人を嘲笑うように土門が言う。

「管制室にあるのはあくまでも施設内を管理する設備だけだ。この施設自体の出入り口は違うところで管理してる。今オイラを殺したところここでここを出る方法なんてない」

「詭弁を。あなたの助けなどなくとも、ここから出る方法は自分で見つけてみせます。あなたを倒した後にね」

入間は強いまなざしで告げる。

「そうピリピリするなよ。オイラを倒すなら、ちゃんと議論して打ち負かせよ。全てのコトダムを集めきって、完全無欠な論破を試してみよ。そうすれば、潔くオメーラ全員を脱出させてやるからさ」

「それまでは、このコロシアイ生活を続けろってこと?」

伊丹が問うと、「流石、伊丹は察しが早いなあ!」と土門は笑いながら言った。

「ふざけるな!! もう二度とあんなコロシアイを起こさせてたまるか!!」

入間は逆上して土門に詰め寄った。

「そう思うなら、コロシアイなんかしなきゃいい。オメーラは絶望に
なんか負けねーんだろ?」

「今までそう言ってみんな死んできた!! お前の!! お前の卑劣な策
略によって!!」

「入間君、やめなさい!!」

土門の胸ぐらにつかみかかった入間の手を、伊丹が引き離す。

「今、彼に何かしたら最悪モノパンダやモノクマたちに処刑される可
能性もあるのよ! 落ち着いて行動して!」

「待つてください! そのために私がいるんでしょう? 数体程度の
ヌイグルミなら私が倒せますよ!」

山村が構えながらそう言ったが、土門は余裕そうな表情で大きく笑
い声をあげた。

「無駄だよ、無駄無駄。龍雅戦の後、オイラは秘密裏にあの型のヌイグ
ルミをたくさん発注しておいた。もうこの施設内には数えきれない
ほどのモノシリーズが待ち構えてるんだぜ? 龍雅の時とは比べ物
にならないほどたくさん!」

土門は両手を広げて高らかに宣言する。

「そ、そんな……」



「この遺体は私が見つけた、伊丹ゆきみにだけ密かに教えたのよ。奴な
ら遺体の検死もできるしね。伊丹はその情報を入間ジョーンズと山
村巴に共有して、三人は今そこで黒幕側の人間たる土門を追い詰めて
いる……って筋書きよ!」

「土門が何で黒幕なんか……くそっ!! 急に言われたって頭がつ
いていくわけじゃないじゃんかよ……!!」

前木は頭を抱えながら呟く。

「……でもね、あの三人は決定的な事実を知らない。よく聞いておきな
さい、前木常夏。あなただけが真実を知る権利を得るのだから!」

「…これ以上…これ以上何があるってんだよ…」

「この遺体、見つけたのは確かに私。だけどね、そう仕向けたのは他ならぬモノパンダなのよ」

前木の顔が驚きに歪む。

「そんな…？　なんでそんなことを…？　夢郷が入れ替わってるのをわざわざ教えるようなことをするなんて…」

「そう、その通り。そもそも、第三の裁判の時、葛西幸彦を論破して私の罪を暴いたのは他ならぬ入れ替わった後の夢郷郷夢…つまり土門隆信。彼が“普通の”黒幕なら、正しい結論が出ずに私たちが全滅するのはむしろ好都合のはず。わざわざ真実を暴いて解決に向かうように議論を誘導する必要なんてないでしょう？」

「黒幕の考えることなんて分かんねえよ…。あの土門は、もう俺の知ってる土門じゃないし…」

前木は自暴自棄気味に呟く。

「いえ。私には分かる。…そう、全ては“脚本”なのよ」

「…脚本…？？」

「そうよ。私が論破されて罪を明かされたのも、その後に安藤が真のクロとして君臨して暴かれたのも、私が植物園で遺体を発見したのも、今ここで人間達が土門を追い詰めているのも。全ては【予め書かれた脚本通り】。土門隆信は私たちを絶望させる役というよりは、【脚本に沿った展開にロシアイが進むように調整する役】と解釈するのが最も筋が通っているの」

「脚本って…。そんなのどこの誰が書いたんだよ…」

「さあ。あの忌々しいチビ脚本家が書いたようには思えないし…。あるいはその才能を何らかの形で受け継いだもの、たまたま同じ才能で入学したもの、かつてその才能で卒業したOB…。いろいろな可能性が考えられるわね」

「てか…どうして脚本だなんて荒唐無稽なことが思い浮かんだんだよ」

「荒唐無稽？　笑わせないで。これまでのモノパンダの口ぶりをよく思い出してみなさい」



◆◆
【Chapter 3 (非) 日常編①】

「もう言うこともないでしょう…。さっさとお帰りください」

疲れたように人間君が言うと、「親不孝ならぬ教師不孝は非行少年の始まりだぜ!!」などと不平を言う。

「オイラは絶望を経て成長していくオメーラのことを何よりも大切に思っ…うう…」

なぜか涙ぐむモノパンダ。

「だからこそ、オメーラにはここで何よりも美しい“絶望を演出”してもらわないと困るんだぜ!」

……?

「“絶望を演出”……?」

亞桐さんが呟く。

「はっ! オイラとしたことが、口が滑ってしまった! 校長センセーに怒られるうううう!!!」

モノパンダは顔を真っ赤にしながら一目散に逃げだしていった。



◆◆
【Chapter 4 (非) 日常編①】

「私は……人間の全てが憎い……。私という人間の愚かさもまた、たまらなく憎い……」

心の声を漏らすように、小清水は前を向きなおしてつぶやいた。

「安藤の言うとおりであった…。あんなチープなトリックでコロシアイに臨もうなどと…。なんと愚かな…」

「気を落とすなよ！ あれはしようがなかったんだよ！」

「……………？ どういうこと……………」

モノパンダの不可解な言葉に、小清水は怪訝そうな表情をする。

「だって、小清水さんの『絶望』は『野望』だもん！ 『野望』の本『はもう終わってるんだよ！』」

「……………野望……………？ 何の話？」

「ぎひやひやひやひや！ いずれ分かるようになるよ！ 失敗したとはいえ、コロシアイをしてくれた小清水さんへのオイラからのヒントだよ！」

モノパンダは不敵に笑いながら言った。



「ヌイグルミ共はこのコロシアイ生活を何か喜劇のようなものになぞらえている。どういうカラクリかは知らないけど、奴らはこの後に起こる展開も全て預言して知っているのよ。私たちはずっとあのヌイグルミの手のひらで踊らされるってこと」

「予言って……………。土門に……………そんな力があるのか……………??」

“超高校級”の生徒というものは得てして常人には信じがたいような能力を持っている。

だがそれでも、“予言”などという超能力じみた能力は聞いたことがない。

「こうして私が思案を巡らせて奴らの計画を見破ろうとしていることすら、きつと奴らはお見通し。だからまともに頭脳合戦なんて繰り広げていても奴らには勝てない。絶対にね」

小清水は顔を前木の顔へと近づける。

「…で、そこであなたの出番ってわけよ」

「…なんで、俺が……………」

「どうして私がわざわざ憎んで止まないお前たちに手を貸したのか。あまつさえ、自分が知りえている情報を全てあなたに教えてしまったのか。全ては前木常夏、あなたの『才能』にかかっているからなのよ」

「才能……? “超高校級の幸運”が……?」

「そうよ」と小清水は笑みを浮かべた。

「このコロシアイ生活は全て黒幕が仕立てた”脚本”通り。現に第二の事件でヌイグルミたちがほぼ全滅させられた時も慌てているようになりアクションは取っていないかった。だけど、奴らが唯一明確に動揺した場面がある」

「…俺達が吹屋がいる空間への入り口を見つけたときか!」



【Chapter 4 (非) 日常編①】

『ぎひゃー!! なんてだぁー?!?!』

と同時に、モノパンダが血相を変えて現れた。

「なんで補修した場所にピンポイントで……!! こんなの聞いてねーぞ!!」

俺たちは訳が分からず啞然とするしかなかった。

だが、さらに状況を混沌とさせる自体が起きてしまう。

「どきなさい」

氷のように冷たい声が響く。

誰もが動きを止めた。

今まで姿を見せなかった小清水さんがやってきたのだ。

彼女は部屋を見回しながらコツコツと壁に空いた穴の方に向かう。

「いや、待てよ!! ダメだって!!」

モノパンダが慌てて小清水さんを止めようとするが…。

「触るな、ケダモノ!! 私は校則違反など犯していないでしょう!?!」

そう怒鳴られて「ぐっ……!!」と動きを止めた。』



「あの時モノパンダはこう言った。『なんで補修した場所にピンポイントで』…と。モノパンダにとって誤算だったのは、他ならぬあなたが壁の補修を行った部分に【運よく】頭をぶつけて薄壁を砕いてしまったことなのよ」

「…それが俺の“幸運”の才能のおかげだってことなのか…?」

「私はそう考えているわ。そして決定的な事実が導かれた」

「黒幕は、“超高校級の幸運”の能力の発動を予測できない」



「…では、我々にまたこれまでのロシアイ生活に戻れと…?」

怒りと焦燥を隠そうもせず表情に浮かべた入間が土門に尋ねる。

「そうだよ。お前たちが絶望に負けてロシアイをするのが先か、オイラ達の正体を暴いて“最終裁判”を起こすのが先か…」

「最終裁判というのは何?」

すかさず伊丹が問う。

「いつもと同じように裁判場で裁判をするのさ。ただし議題は【この学園の全ての謎】。オイラ達が何者で、何を目的とし、どのようにしてオメーラを選出し、拉致し、監禁し、ロシアイを行わせているのか。オイラ達とオメーラの行き着く先は何なのか。全部明らかになったらオメーラの勝ちだ。それまでに生き残っている全員をこの学園から脱出させてやるよ」

「…その約束を遂行する保証はあるのですか?」

「嫌だなあ! 今更そんなに疑われても困るぜ! オイラはいつだってルールに沿ってロシアイを進めてきた。オイラの側から規則を破ったことは一度もない。それが主催としての矜持だよ」

「…くだらない」

入間は吐き捨てるように言った。

「でも、オイラもオメーラのガバガバな推理に付き合ってたんだ。こつちからも一つ条件を出させてもらおうぞ」

「条件…?」

「簡単さ。オイラは今後も可能な限り“夢郷郷夢”として生きる。だから、今この場にいない奴にオイラの正体を教えるな」

「っ……!?!」

三人の表情が固まった。

「どういうこと？ 私たちが自力で解いた謎を仲間に共有してはいけないの？」

伊丹が不満そうに反論する。

「自力で解いたつつつても、とても完璧とは程遠い推理だったけどなあ。むしろオイラはオメーラにもう一度チャンスをやるんだぞ？ これくらいは要求は聞いてほしいんだけどな」

「でも……正体がバレてもまだあなたは夢郷君に成りすますつもりなんですか……？ 私達にはもうバレているというのに……？」

「ああ。それさえ守ってくればこの夜のことは不問にするよ」

この場の流れを土門に支配されていることに、人間は内心で憤りを覚えた。

しかし、この場で一番力を持っているのは他ならぬ土門だ。

幾千ものモノパンダたちを保有しているという言葉が真実かどうかは分からないが、試すにはリスクが大きすぎる。

「悔しいですが……引き下がるしかないようですね」



「黒幕側は何らかの力で私たちの行動を先読みすることができる。だけど、あなたが“超高校級の幸運”としての能力だけは読むことができな。だから黒幕にとってあなたが壁に頭をぶつけ、入り口の発見につながったことが予想外だった」

「俺の……“幸運”が……？」

前木が自分の頭をさすりながら呟く。

「でも…俺はたまたま希望ヶ峰に入れただけで、普段から運がいいわけじゃないぞ。クジに当たったこともそんなにないし、お金を拾ったこともない。俺はれっきとした幸運じゃないんだよ」

「いえ、あなたには確かに幸運としての才能があるわ。普段はそれが

発動していないだけ。どんな状況下で発動するのは定かではないけど、ここぞという時には発動してくれると信じるしかない。あなたが今この場に現れたのもその証左。偶然に見せかけた必然なのよ。あなたの才能こそ、黒幕を倒す唯一の“希望”の光！」

小清水は興奮した口調で前木に詰め寄った。

「そうか……だから俺に全部言ったのか……俺に協力しろと言ったのも……」

「そう、その通り！ 私の崇高な目的のためには、まず何としてもあの黒幕を倒す他に道はない。あなたはどうかどうあつても私に協力するしかない。友人と共にこの場所から脱出するためにはね」

「…俺がお前から聞いた情報を入間や伊丹に流すつていう可能性は考えないのか」

「それは無理ね。なぜなら……ほうら、私のタブレットを見てみなさい」

そう言つて小清水は校則が書かれているタブレットを見せた。

【校則（一部の生徒向け）：夢郷郷夢の正体について、口外することを禁じます。他の生徒に知られた場合、校則違反として罰します。】

「たつた今追加され、そして入間、伊丹、山村、そして私にだけ通知された校則。あなたには通知されていないでしょう？」

「…本当だ。俺のタブレットにはない…」

「…あなたが土門の正体と目的について知っている」ということを黒幕が知らないからよ。でも、もしあなたが入間や伊丹に自分の知っていることを言つてしまつたら…」

「俺が知らないはずの事情を知っているから、校則違反としてお前ら四人が処刑される……？」

前木の言葉に小清水が頷いた。

「そうなればあなたは大事な友達を失うだけでなく、黒幕に勝つ算段も失つてしまう。黒幕側の監視もいよいよ厳しくなるでしょうし、こっそり伝えるなんて手法も無理でしょうね」

「マジ……かよ……」

「だからあなたは知らないふりをしなければならぬ。これからも

ずっと。だけど、時が来たら私に協力しなさい。そうしなければあなた達は黒幕に勝てない」



「ほら、たった今新しい校則を追加したぞ。これをちゃんと守ってくれよな」

「……………」

三人は黙って自分のタブレットを見た。

「これを守れば…………とりあえず今まで通りの生活は送れるということですね…」

「ダメなんだ、今まで通りじゃ…!! それじゃ何も変わらない…!! またきつと、同じことが…」

入間は膝をつき、怒りをこらえるように声を絞り出した。

「そう思うなら変えてみせろよ」

土門は、今まで浮かべていた笑みを消して吐き捨てるようにそう言った。

「オメーラの手でこの物語を中断できるって言うなら、やってみせてくれよ。楽しみにしてるからよ」

そう言つて土門は立ち上がる。



「さあ、いつまでもあの四人がその部屋に籠つてるとは思えない。連中が出てくる前にさっさと自室に戻りなさい。そして考えるのよ。自分が勝利し、生き残る方法を」

小清水に声をかけられて、前木が力なく立ち上がる。

「小清水…………。駿河を…俺の友達を殺した罪を…………生きて償えつてあの時言つたよな? …ありがとう」

「……………」

小清水は怪訝そうな顔をした。

「お前がこうやって、曲がりなりにも黒幕に勝とうと努力してるのを

見ると、俺が言った言葉は無駄じゃなかったのかなって思えるよ」

「どう解釈しようがあなたの勝手だけど……。私はここを出たら、お前たちを含むすべての人間を虐殺する。その目的に何のためらいも抱いていないわ」

「そうか。それならそれでもいいよ。……でも」

最後に前木は小清水の方を向いてこう言った。

「駿河はお前の中で生きている。お前が死ぬまで、一生な」

そう言うのと真つすぐに部屋まで歩き去っていった。

「……………くだらない」

小清水は微かに舌打ちをした。



「……………おや」

それから間もなく、土門が休憩室から出てきた。

「ひよつとしてオメー、オイラ達の話を盗み聞きしてたな？」

「何か不都合でも？」

小清水は平然と対応した。

「はっはっは！ オメーにも校則は届いてんだろ？ オメーの気持ち
は分かるが、あまり変な動きをすんなよ？ オイラ達は所詮演じ手な
んだからな！ ギーひやひやひやひやひや！」

けたたましい笑い声をあげながら土門は夢郷の部屋へと戻って
いった。

「…あなたは」

続けて出てきたのは人間ジョーンズだった。

「その様子だと、大した成果はなかったようね」

小清水の言葉に、人間は顔をうつむけた。

「私には…あなたの考えが分かりません。あなたは敵なのか、味方な
のか」

「敵よ。私の味方なんていない。必要ない。人間に味方される筋合い
なんてない。……だけど、利用はする。使えるものならね」

「私はあなたと対話することをあきらめていませんから。その日ま

で、どうか命を無駄にすることの無いよう
そう言って入間も去っていった。

「…どいつもこいつも、忌々しいことこの上ない」
小清水は植物園へと足を運んだ。



それぞれの思惑と歪な真実が交差する中。
大嵐の夜が過ぎ去った。

希望の夜明けは、まだ来ない。

希望ヶ峰学園特別分校 生徒名簿（改）

Caution!!

Chapter 4 （非）日常編③までのネタバレ注意！

《男子生徒》

葛西幸彦かさい ゆきひこ

“超高校級の脚本家”

【身長】 164 cm

【体重】 51 kg

【胸囲】 79 cm

【好きなもの】 落ち着けるもの、漬け物、小清水（？） ↑NEW！

【苦手なもの】 周りが見えない人、トマト

【現状】 生存

主人公。第一、第二の事件の全体、第三の事件の前半部において、裁判を主導し謎解きを進めた。別段頭の回転が早い方ではないが、地道にコトダマを見つけ出し事件の脚本を作り上げるという点で才能を十二分に生かしている。小清水彌生に淡い恋心を抱いていたが、第三の事件の際に裏切られ、絶望の淵に立たされ我を見失う。しかし最終的には自力で立ち直り、自らの言葉で彼女への思いを絶った。しかし今でも彼女のことを気にかけている節がある。

「真実は、この世で一番残酷な脚本なのかもしれないね」

前木常夏まえぎ とこなつ

“超高校級の幸運”

【身長】 170 cm

【体重】 58 kg

【胸囲】 83 cm

【好きなもの】楽しいこと、ノリのいい人

【苦手なもの】才能あふれる人、酸っぱいもの

【現状】生存

明るくて前向き、しかし情緒不安定になりがちな男子高校生。当初は幸運という才能に自信が持てず（自信があるフリをしていたが、実際は自己嫌悪していた）、自分を凡才だと決めつけていたが、ロシアイ生活を経て成長。自分にも自分なりにできることがあると理解し、黒幕打倒のため決意を新たにす。

そして小清水彌生から自らの“幸運”が偶然ではなく確かな才能であり、さらに黒幕に打ち勝つために必要な才能であると知らされ、複雑な心境ながらも協力の申し出を受諾した。

「俺は生きるぞ…！ 生きて絶対お前らに勝つ！」

リュウ／龍雅^{リゅうが}・フォン・グラディウス

“超高校級の殺し屋”

【身長】 195 cm

【体重】 95 kg

【胸囲】 95 cm

【好きなもの】推理小説、焼きイワシ、ニンニク、トレーニング

【苦手なもの】傲慢な人、生魚、絶望↑NEW！

【現状】死亡（二章被害者／クロ）

巨軀と黒いコートが特徴的な謎の男子高校生。冷静で温和な態度を見せるが、その正体は【絶望を喰らう殺し屋】グラディウス一族の末裔。独裁者や密輸グループのリーダーなど、法では裁ききれない絶望の根源を誅殺して回っていた。本性を見せると大仰な口調で話し、饒舌になる。

第二の動機によって自らの正体と使命を思い出し、これ以上のロシアイを防ぐため黒幕に対し戦いを挑む。襲い来るヌイグルミの群れやオシオキに耐え勝利し、絶望の手先であると判明した釜利谷三瓶を殺害。着実に使命を果たすかに見えたが、重傷が災いして御堂秋音の策に敗れ、死亡。いまわの際に、御堂、そして黒幕もすぐに死ぬこ

とになるだろうと予言した。

「ぐはははははっ!!! 絶望は闇に還れ!!!」

釜利谷三瓶かまりやさんべい

“超高校級の脳科学者” / “超高校級の絶望”

【身長】 176 cm

【体重】 67 kg

【胸囲】 86 cm

【好きなもの】寝ること、楽しいこと、イカの塩辛、絶望↑NEW!

【苦手なもの】めんどくさいこと、命を大切にしない人

【現状】死亡（二章被害者）

白衣を着たガサツな男子。有名な脳科学者の息子であるが、多くの人を助けたあまり過労で倒れた父の姿を見たため、努力することに辟易している。しかし友情にはとてもあつく、親友に害をなすものは毅然と立ち向かう。

その正体は江ノ島盾子などを筆頭とする“超高校級の絶望”の一人であり、“大好きな親友たちが絶望から這い上がる姿が見たい”という歪んだ友情のためにコロシアイ生活の主権に関わり、自分以外のメンバーの記憶を消去。自身もメンバーの一人としてコロシアイに参加するが、絶望であることが龍雅に露見してしまったため、首を砕かれて殺害された。

絶望に転向した経緯など、未だに謎も多い。

「俺と俺のダチのために……死ね」

入間ジヨーンズいるま

“超高校級の翻訳者”

【身長】 180 cm

【体重】 64 kg

【胸囲】 85 cm

【好きなもの】話しがいのある人、干し芋

【苦手なもの】話を聞かない人、ホラー系全般

【現状】生存

スーツ姿に銀の長髪が特徴的なさわやかな男子。幾度ものコロシアイに巻き込まれながら、現状では辛くも生き残っている。男子メンツの中では夢郷と並んでずば抜けて頭の回転が早く、第三の事件の際には最後に謎解きを主導し、真のクロである安藤を見つけ出すことに貢献した。また夢郷の正体が異なる人物であることを突き止め、第四のエリア開放後、その正体を暴くことに成功。希望側の面々の中では葛西の次に事実究明を主導していると言っても過言ではない活躍を見せる。しかし所要所で感情が優先してしまい詰めが甘くなってしまう面も持ち合わせている。自身の持つ対話の才能によってこれ以上のコロシアイを阻止しようと決心している。

「絶望を希望に翻訳するのが、私の使命なのでしょう」

ゆめごとう きょうむ
夢郷 夢

“超高校級の哲学者”

【身長】 184 cm

【体重】 71 kg

【胸囲】 86 cm

【好きなもの】 静かな時間、女性

【苦手なもの】 硬派な人、むさくるしい男性

【現状】生存 ↓ 死亡（二章終了時に殺害されていたことが判明）
卓越した頭脳と常人には理解しがたい思想を持つ天才哲学者。コロシアイでもその才覚を生かして活躍する一方、何を考えているか分からない不気味な印象も与えていた。

実は第二の裁判が起きた後の夜、土門隆信によって殺害されていたことが判明した。遺体は植物園の地面に埋められ、後ほどモノパンダの手引きで清水彌生が発見した。発見されたときには腐乱が激しく、外見の判別もつかぬほどであった。殺害時の詳細はまだまだ不明である。殺害後は土門隆信が彼に成しすましてコロシアイ生活に潜入。自らが思い描くストーリーになるように暗躍していた。

「全ては無常……。僕の存在も、また」

土門隆信 どもん たかのぶ

“超高校級の建築士”

【身長】 185 cm

【体重】 75 kg

【胸囲】 88 cm

【好きなもの】 運動全般（水泳除く）、家族、友人

【苦手なもの】 重い雰囲気、水

【現状】 死亡（一章クロ） ↓ 生存

建築士。気立てがよく包容力のある兄貴分であり、誰からも慕われていた。その優しさが災いし、津川梁の遺言に従おうとするも、手違
いから生きたまま焼殺してしまう。罪悪感から自らが犯人であるこ
とを告白し、凄惨なオシオキを身に受けて死亡した。

…と思われていたが、実は別空間に逃れてオシオキを回避し、二章
終了後に夢郷夢郷と入れ替わりでロシアイ生活に舞い戻っていた
ことが判明した。その正体は、このロシアイ生活の主権者である又
イグルミ・モノパンダ。自らが理想とするストーリーのために夢郷の
姿を借りて暗躍し、ロシアイ生活を進めていた。自分の正体を看破
した人間達に対し、最終裁判での戦いを布告。残された謎を解くこと
を条件に学園からの脱出を約束した。その後も夢郷の姿を借りたま
ま歪な共存を続けている。

「ぎひゃひゃひゃひゃひゃ!!! オイラを倒してみろよ、希望のみんな!!」

丹沢駿河 たんざわ するが

“超高校級のフィギュア製作者”

【身長】 155 cm

【体重】 43 kg

【胸囲】 74 cm

【好きなもの】 美しい造形、魅せられる女性、健康食品、安藤（?）

↑NEW!

【苦手なもの】 偏見、運動全般、味の濃いもの

【現状】死亡（三章被害者）

おかつぱ頭のオタク少年。あまり頭がいい方ではないので謎解きでは受け身に回ることが多かったが、随所随所での射た発言もしている。また友人への心配りは誰よりも厚く、親友を立て続けに失った前木と遊んで心のケアをしたり、津川の遺言に書いてあった約束を果たすべく等身大フィギュアを徹夜で製作、完成させた。しかしそれだけ善良な人物であったにもかかわらず、安藤と小清水の殺意を一身に受け、嘔吐と吐血を繰り返して毒殺されるという悲惨な最期を遂げた。しかし死の直前にアルターエゴIIを発見して有用性を確認、黒幕に見えないところに隠すことによつて仲間たちに希望を託した。

「拙者……皆様のお役に立てましたでしょうか？」

《女子生徒》

やまむら ともえ
山村巴

“超高校級の空手家”

【身長】 166 cm

【体重】 57 kg

【胸囲】 83 cm

【好きなもの】 稽古、書道、スイーツ全般、龍雅↑NEW！

【苦手なもの】 不真面目な人、ムカデ

【現状】 生存

凶悪な他人格を持つ女子高生。身体の強さとは裏腹に精神的に脆いところがあり、一時はショックのあまり第三の人格が芽生えるなど情緒不安定に陥っていた。しかし慕っていた龍雅の死、そして自分を助けてくれた小清水の裏切りを乗り越えて成長。精神的ショックを自力で克服できるようになり、第二の人格も以前より大人しくなっている。極限状況での修業が幸いして空手家としての実力も大幅に増大し、今では龍雅と遜色ないほどの実力を身につけ、間もなく彼を超えろと思われる。謎解きは得意ではないため任せがちになっていた

が、最近はある程度自力で考えるようにもしている。人間ジョーンズの謎解きに同行したため、夢郷についての真実を知ることとなった。「オレは（私は）…お前を倒す!!」

亞桐莉緒

“超高校級のダンサー”

【身長】 167 cm

【体重】 54 kg

【胸囲】 86 cm

【好きなもの】ダンス全般、おしゃべり、チョコレート、夢郷(?)

↑NEW!

【苦手なもの】協調性のないこと、楽しいこと

【現状】生存

楽しいことが大好きな女子高生ダンサー。頭がよくないので謎解きで前面に出ることはなく、かといって山村のように強靱な肉体があるわけでもない。しかし彼女の最も優れた活躍は、コロシアイで疲弊したメンバーを鼓舞し、明るい性格で場を盛り上げ続けたことである。前木や山村が精神を蝕まれたときも、安藤や小清水が皆を裏切った後も、絶えず明るくふるまい、コロシアイ生活の清涼剤であり続けた。謎解きは苦手でも、こういった分野に関しては彼女の右に出る者はいない。

コロシアイを経て夢郷に心が傾きかけている（現に番外編でネタにされている）が、奇しくも夢郷の正体に気付くことなくコロシアイ生活を続けることとなってしまふ。

「みんなで楽しく生きれば、黒幕なんか絶対負けねーから!」

安藤未賤

“超高校級の漫画家”

【身長】 152 cm

【体重】 43 kg

【胸囲】 78 cm

【好きなもの】燃える展開、妄想、乳製品

【苦手なもの】恋愛を連想させるもの、長文

【現状】死亡（三章クロ）

仙人のような話し方が特徴的な女性漫画家。謎解きはできないがいわゆる“ネタ枠”としてコロシアイ生活を盛り上げる役を担った。特に夢郷とのドタバタ漫才が印象的。

しかし実際は創作者として自分を高められる経験とストーリーを心の底から欲しており、第三の事件に目をつけて“恋と憎悪”の物語を描き出そうと凶行に及んだ。その目的のためなら自信が瀕死になることも全くとわず、挙句管制室を乗っ取ってわざと全員にヒントを与えるなど、全てが狂気に満ちていた。最後は自らの悲願が達成されたことに満足してオシオキを受けたが、結局死への恐怖と苦痛から心変わりし、泣き叫びながら死亡。

理想の物語のために凶行に及んだという点は土門と類似しているが、黒幕側との接点はない模様。

「みー様は…みんなのことが大好きだぞよ♡」

いたみ
伊丹ゆきみ

“超高校級の薬剤師”

【身長】 158 cm

【体重】 50 kg

【胸囲】 80 cm

【好きなもの】ぼーっとすること、化学書、剣道

【苦手なもの】うるさい人、嘘、偏見

【現状】生存

黒ずくめの恰好をした大人びた女子高生。嘘を嫌っており物事ははっきり言う。当初はその思考が強かったため毒舌気味だったが、津川梁を傷つけてしまった罪悪感から毒舌はめっきりと影をひそめるようになり、その後はむしろ傷ついた仲間のケアに力を尽くすようになる。利発で頭の回転が早く、入間や葛西などと並んで“謎解き勢”

に数えられる。また第三の事件後にモノパンダに頼んで毒殺の可能性を事実上排除する、化学室が解放された際にいち早く薬の効能を調べるなど捜査や裁判以外の点でも活躍が見られる。幾度も精神を蝕まれながらも生存し、黒幕との最終裁判に挑むべく調査を進めている。

「私を……一人にしないで……」

つがわ りやん
津川梁

“超高校級のコスプレイヤー”

【身長】 139 cm

【体重】 38 kg

【胸囲】 74 cm

【好きなもの】 ファン、おばあちゃん、甘いもの

【苦手なもの】 大きい人、両親、しよっぱいもの

【現状】 死亡（一章被害者）

小学生のように小さい身ながら誰よりも強い希望を抱いていた少女。みんなに可愛がられるマスコットキャラかと思いきや母親のような包容力もあり、伊丹より早い段階で傷ついた仲間のケアを行い、亞桐より早く盛り上げ役を行っていた（というより、彼女の死後、亞桐や伊丹がその使命を引き継いだという方が正しい）。

メンバーの中で誰よりも早く全員が脱出するために動き出し、バれないように自らを殺すよう土門に依頼する（これは、学級裁判のルールが説明される前に事件が起きてしまったことに起因する勘違いであり、クロ一人しか生きて出られないことを彼女は知らなかった。十分な説明を早期に行わなかった黒幕側の過失でもある）。しかし手違いから死ぬ前に焼却炉に入れられてしまい、生きたまま全身を焼却されて死亡。彼女の死は多くのメンバーにトラウマと影響を与え、自身の敵が大いなる絶望であることを認識させた。

「みんなは、生きてここを脱出するなりよ！ リャン様との約束！」

こしみず やよい
小清水彌生

“超高校級の昆虫学者”

【身長】 168 cm

【体重】 57 kg

【胸囲】 89 cm

【好きなもの】 虫系全般、触手、葛西（？） ↑NEW！

【苦手なもの】 小動物、犬猫、人間 ↑NEW！

【現状】 生存

昆虫に異常なまでの情熱を注ぐ天才昆虫学者。博識で落ち着いており、常に冷静で客観的な発言で謎解きに貢献した。コロシアイ生活の中で葛西と仲を深めていった。

しかし第二の動機によって自らの目的が“地球を支配したつもりになっていく忌まわしき人類の絶滅”であることを思い出し、それを果たすべく第三の事件にて行動を開始する。モノウィルスを仕込んだコーヒーによって丹沢駿河を事実上殺害したが、それすら看破していた安藤未賤に邪魔され、とどめを刺すことはできず、クロにはならなかった。その後の投票でもオシオキは否決され、屈辱を胸に生き残ることとなる。人間への憎悪はそのままだが、黒幕打倒のために前木に協力を持ちかけるなど、その胸中は読み取れない。また葛西のことは利用していたにすぎなかったはずだが、想いを絶たれたときには落涙していた。

「この世界を、虫さん達の楽園に……………」

みどう あきね
御堂秋音

“超高校級のエンジンニア”

【身長】 155 cm

【体重】 45 kg

【胸囲】 79 cm

【好きなもの】 機械いじり、謎解き、母親

【苦手なもの】 周囲の人間、英語

【現状】 死亡（二章クロ）

数理の知識では誰も敵わないほどの頭脳を持つ天才少女。他者を

平気で罵倒する高慢な性格であり共存するには相当困難があったが、伊丹などの人間関係を経て少しばかりは打ち解けていた。

しかし本当の目的は、死んだ家族をアンドロイドとして蘇らせることであった。母親に虐待され、弟を餓死させる（意図的ではない）という壮絶な半生を送っており、それにもかかわらず強烈に母親を慕っていた。他人に対しても「普通に母親と仲良くできて羨ましい」という羨望をいだいており、高慢な性格もそれが原因であった。

最後はモノクマに自らの感情を弄ばれ、子供のように母親に助けを求めながらオシオキによりミイラ化して死亡。絶望だけを残して果てたかに見えたが、彼女の発明品は思わぬところで役に立つこととなった。

「私を愛して、お母さま……」

NEW!! 吹屋喜咲^{ふきや きさき}

“超高校級の嘸家”

【身長】 166 cm

【体重】 55 kg

【胸囲】 87 cm

【好きなもの】 おしゃべり、マッチョな人、和食

【苦手なもの】 ビリビリ系、暗い雰囲気

【外見】 和服を着てかんざしで髪を留めた清楚な美人。いつもニコニコしている。扇子を持っている。

一人称は「あちき」もしくは「あつし」、二人称は自分が決めた独特の呼び名を使う。語尾に「ありんす」がつく。いわゆる廓詞^{くわくご}。嘸をするときは語尾が消え、一人称も「私」になる。

管制室の隣の監獄部屋に幽閉されていた少女。嘸家の才能を持ち、落語から怪談まで様々な嘸を大舞台上で話し続けてきた。実は葛西たちの同級生であつたらしく、記憶も消されていないため学園生活の頃の彼らのことも覚えている（ただしコロシアイ生活の直前の記憶は制

御されている模様)。未だに謎が多い少女だが本人はあまり気にしておらず、マイペースなノリで周囲を盛り上げたり困惑させたりしている。長らく幽閉されていたせいかコロシアイ生活ですら彼女の目には新鮮で楽しく映っているようである。

「うっひょ〜!! なんか楽しくなってきたであります!!」

NEW!!アルターエゴII

“ 御堂秋音が開発した電腦データ”

【身長】 ノートパソコンくらい

【体重】 ノートパソコンくらい

【胸囲】 なし

【好きなもの】 母親（御堂秋音）、話が面白い人

【苦手なもの】 頭が悪い人、コンピュータウイルス

【外見】 ノートパソコンの中に入っている。アバターは津川梁であり、彼女が眼鏡をかけてスーツ姿になったもの。

一人称は「私」。二人称は「〜様」。語尾に「なり」がつくが、オフに設定することもできる。

御堂秋音が学園生活時代に生み出した電腦データ。元は【超高校級のプログラマー】と呼ばれる生徒が開発したのだが、御堂がそれにハッキング耐性を付け加えて発展させた。耐性だけでなく、自らの機器にハッキングすることもできる。人間と変わらぬ知性と感情を持ち、謎解きから話し相手に至るまで、あらゆる面で希望の面々をサポートしてくれる。ノートパソコンにインストールされているが、本体は小さなメモリーである。

元々は技術室に置いてあったものを安藤が発見、管制室の入り口を見つける際に利用されると、用済みとして丹沢に譲渡される。彼女が黒幕に打ち勝つ戦力になると期待した判断した丹沢により黒幕から秘匿され、第三の事件後に発見、葛西たちと合流を果たす。

津川梁の姿を借りており、声や語尾も真似ているが、一時的に違う人物になることも可能。

「私の力、存分に使ってくださいなり」

Chapter 4 (非) 日常編④

今日は珍しく目覚めがよかった。

「おはよう、オメーラ！ 7時だぞ！ 起床時間だ！ 今日も頑張れよな！」

毎回のように聞いていたはずの朝のアナウンスだけど、こうしてちやんと聞くとどこか懐かしいような感じがしてしまうな……。

まあ、できればもう聞きたくはないんだけどさ……。

朝のシャワー、歯磨き、着替えなど最低限の準備をして朝食に向かった。

「……あら、葛西君。今日はちよつと早いよね」

食堂では、伊丹さんがコーヒを飲みながら読書をしていた。

「おはよう。うん、なんだか今日はいつもより目覚めがよかったからさ」

「……そう。よく眠れたのね。……良かった」

「……………」

伊丹さんの様子がちよつとおかしいような……。

まあ、いつもこんな感じだと言われればそんな気もするけど。

「おつはよー!! いやあ、ギリポンの部屋は意外と綺麗で過ごしやすかったであります！」

「何が〃意外〃だよ！ フツーに綺麗だつーの！」

そこに、亞桐さんと吹屋さんが現れる。

「つーかアンタ、何回ウチの顔蹴ったよ？ 寝相悪すぎだつて!!」

「うるさいであります！ あちきが気持ちよく寝られればそれでいいでありますから文句言わない！」

「部屋使わせてもらってる身分でなんだお前オイ!!」

朝からスピーカーのようにうるさい二人だ。

でも、微笑ましいやり取りが見られるようになったのはちよつと嬉しいかも。

「おはようございます！ おやおやこれは、レディ二人で痴話喧嘩で

すか？」

そう言っつて入ってきた入間君も心なしか少し元気に見える。

「オイ入間！ こんな奴レディって言わなくていいから！」

「そうでありんすよ！ こんなギャルの呼び名なんて、淫乱雌豚でいいでありんす！」

「いんっ……!? おっ、お前なあ!! もうちよつと言葉考えろよ!!」

「まあまあ吹屋様、あまり汚い言葉を使うとせつかくのお美しい顔が台無しですよ。ほら、亞桐様もこんなにお顔を真っ赤にしておりますし……」

「あーっ！ さては清楚系気取っちゃってるタイプでありんすか？」

この○○○○!! アンタなんて男子の群れに攫われて○○○○を○○○○に○○○○れて背後から○○○○を」

「ストトップ!! 吹屋様、ストトップです」

吹屋さんの口から聞くに堪えない卑猥な語句が次々に飛び出してきたので、思わず俺は耳を塞いでしまった。

入間君が止めてくれなかったらもつとひどいことを言われていたかもしれない。

俺の横にいる伊丹さん、表面上は平然と読書をしているけど、表情からは血の気が失せている。

「あ、あわわわわ……」

意外と卑猥なネタには弱いのか、顔を真っ赤にして倒れ込む亞桐さん。

夢郷君でもここまで酷いことは普段言わないもんなあ……

「へっ！ ざまーねーな！ でありんすね！」

心底悪い顔をして立てちゃいけない指を立てている吹屋さん。

なんだか、彼女のとんでもない闇を垣間見た気がするぞ……

「さあ吹屋様！ 私と一緒に楽しいモーニングにしましょう！」

そう言っつてなんとか吹屋さんを亞桐さんから引き離す入間君を見ると、彼も本当に苦労人だなあとつくづく思う。

御堂さんをなだめる時もあんな感じだったな。

「ういっす……っつてあれ？ もうみんないるじゃん」

目をこすりながら現れたのは前木君。

いつもの朝食の時間よりまだ早い時間だが、それでもほぼ全員が揃っていることに少し驚いたようだ。

「おはようございます！ 今山村様が朝食を用意してくれておりますから、もう少ししたら食べられますよ」

「いつもあいつばっかりに作らせて申し訳ないな。昼と夜は俺が作るか」

「じゃあ夜は俺も一緒に作るよ」

「ダメ！」

「なんで!？」

俺も一緒に作ろうと声をかけたのに、即答で断られた!!

「だつてお前下手だろ？」

「いやいやいや！ それはみんなが俺に作らせてくれないからであつて、俺は決して…」

「はあ、分かったよ…」

ええ!？

なんでそんなに諦めた風に答えるの!？

なんだかすごく悔しい気分になってきた…!？

「こうなったら、腕で分かせてやる…!」

「葛西が熱くなるなんて珍しいね！ 雨でも降るかも？」

いつの間にか復活を果たした亞桐さんがからかってきた。

「やる気があるのはいいことではありませんか！ 一応私が一緒について見守つてあげますよ」

入間君も俺の腕を全く信用していないらしい…。

俺のご飯を食べたら絶対後悔するよ、みんな。

まあ、お茶漬けぐらいしか作ったことないんだけどね。

「皆さん、お待たせしました！ ベーコンエッグとサラダ、トーストをお作りしました！」

厨房からひよっこ顔を出した山村さんが言った。

王道中の王道の洋風朝食、つて感じだな。

こんな日にはこういう食事がちようどいい。

みんなで分担して料理を運び終わると、その時……。

「…やあ、僕が最後だったか」

夢郷君が食堂に現れた。

「……………」

ん？

なんだろう、この沈黙は。

「…おはようございます、夢郷君！」

やがて入間君が口火を切って挨拶すると、みんな口々に「おはよう」

「おはようございます」と挨拶を述べていった。

いつも通りの風景…だよな。

「いただきますーす」

目覚めがよかったからか、食事もよく喉を通る。

最近は気持ちが悪くなるものが多くてご飯も少なめに作ってもらったが多かったんだけど、久しぶりにガツツリと腹に溜まる食事をして気分もいい。

トーストを三枚もおかわりして今日の朝食は終了。

「そーいえばさー」

朝食後、入間君と伊丹さんがお皿を洗っている間のんびりしていると、亞桐さんがふと口を開いた。

「夢郷、アンタなんで今朝は遅かったの？ いつも朝食の30分前くらいにはいるのに」

確かに夢郷君の生活リズムはとても規則正しい。

というより、睡眠時間が人より短いのかな。

男子で彼ぐらい早起きできる人といえば……丹沢君と土門君ぐらいか。

「ああ。昨夜、休憩室で読書をしていたらうっかり寝そうになってしまったね。後で起きて部屋に戻って寝直したんだが、睡眠が浅くて寝坊してしまったようだ」

超高校級の哲学者ほどの人でも寝落ちしそうになることがあるんだなあ。

「ええっ!?! そんなこととして大丈夫でありんすか!?! 仲間を疑いたく

はないけど、こんな状況でありんすから、個室以外で寝落ちしちゃうのは危ないでありんすよ！」

吹屋さんにしてはまともなことを言った。

確かに、ここまで一緒に過ごしてきた仲間に殺されるなんて思いたくないけど…。

休憩室なんかで無防備に寝ていたら何をされるかわかったもんじゃない。

…小清水さんの動きも怪しいし。

「ああ、そうだね。忠告ありがとう。これからは肝に銘じておくよ」

夢郷君はにこやかに答えた。

「夢郷……」

亞桐さんが呟くように小さな声で言った。

…って、泣きそうな顔になってるし!?

「アンタさ…変なことでドジやって死なないでよ…? 約束だからね

……?」

「……………」

亞桐さんの本気度がすごすぎて、俺も吹屋さんも山村さんも言葉を出せない。

「心配することはない。僕は常にあらゆる可能性を追求している」

「心配なんだよボケ!! ホント、アンタみたいなのがここまで生きてるのが奇跡っていうか…。ウチもだけどさ……。アンタみたいに好奇心旺盛なやつって、すぐ変な誘いに乗っかって殺されたりしそうだから……」

言われてみればそうなのかもしれない。

亞桐さんは、こう見えてずっと、夢郷君のことを心配してたんだな…。

「ははは。返す言葉もない。だが僕も、以前よりずっと気をつけるようになった。小清水君のような不安定要素もあるしね。君こそ身の回りには十分気をつけたまえよ。…では、また」

それだけ言って夢郷君は食堂を後にした。

「分かってるよ……分かってるけどさ…」

亞桐さんは自分に言い聞かせるようにそう呟いていたが、浮かない表情は変わらなかった。

「でも、夢郷君なら」

大丈夫だよね、と山村さんの方を向きながら言うつもりだった。

だが俺は咄嗟に言葉を引つ込めてしまった。

「山村さん……？」

彼女は、ものすごく。

ものすごく、辛そうな顔をしていたのだ。

「あ、いえ……」

その表情を隠すかのように、慌てて山村さんは立ち上がる。

「ごめんなさい。ちよっとお腹が痛いんです。失礼します……」

そう言うとそのくさと食堂からいなくなった。

「……本当に腹痛かな？」

思わず口に出してしまった。

「まー、ユメちゃんはおちき知ってる頃からタフネスはかなり高いでありんすから、きつと大丈夫でありんすよ！」

吹屋さんが自信満々に言うのと、亞桐さんも少し表情を和らげる。

そんな時、部屋に置いてきたアルターエゴの言葉が脳裏をよぎった。

『……夢郷様は、恐らく、夢郷郷夢』ではありません』

本当に、彼は夢郷君じゃないのかな。

とてもそうは見えないけど……。

後でアルターエゴともじっくり話してみよう。



同じころ、入間と伊丹は全員が食べ終わった後の皿を洗っていた。

「……昨晩は申し訳ありませんでした」

不意に入間口を開く。

「山村様と伊丹様がいれば黒幕にも勝てる甘い見込みで踏み入ってしまった私の責任です。どう償えばよいのか……」

「気にしないで。短絡的な思考に走ってしまったのは私も同じだから」

伊丹は洗い終わった皿を一枚一枚拭きあげて棚に戻しながら答えた。

「あの後、結局眠れなくて校内を探索したんだけど……。大ホールでたくさんのモノパンダが遊んでいるのが見えたわ。『大量のモノシリーズを発注した』っていう彼の言葉……。ブラフじゃなくて本当だったみたいね」

「だとすれば、尚更黒幕に対抗する手段がなくなりましたね。と、なれば……」

「黒幕の言うとおり、学園の謎を解いて黒幕に勝つしかない。私たちの勝負を、向こうがルール通りに受けてくれればの話だけだね」

入間は使い終わったスポンジや器具を洗い、元の場所に戻した。

「こうも黒幕の言いなりになり続けなくてはならないとは……。嫌な予感しかしないんですよ……。ここまで凄惨なことを我々にさせておいて、勝ったからと言ってみすみす逃がすと思いますか……?」

「その疑惑は最もだけど……。でも彼が言ったとおり、モノクマやモノパンダが校則を破った例は一度もない。向こうにどんな目的があるのかは分からないけど、こればかりは『敵』を信じるしかない」

その時、天井からシンクのだ真ん中にモノパンダが飛び降りてきた。

「ウワサをすれば……」

「ギーひゃひゃひゃ!! オメーラのその心配も最もだけだよお? 今はそんなことより仲間の心配をしろよな! いつ誰がコロシアイに動き出してもおかしくはねーんだぞー!」

「……止めてみせますよ。止めるしかない。あなたに勝つまでは、ね」「いい心がけだあ!」

ぎひやひやひや、とモノパンダは汚い笑い声をあげる。

「でも、仲間全体に私たちの情報を共有できないのはアンフェアじゃないの？ 彼らにだってあなたの正体を知る権利はあるはずよ。正々堂々と最終裁判で戦いたいのなら…ね」

伊丹がモノパンダに毅然とそう言うのと、モノパンダはさらに笑い声をあげた。

「ぎひやひやひや！ 分かってねえなあ！ オイラは『オメーラの口から教えるのはダメ』って言っただけであって、あいつらがオメーラの助けを借りずに自力でオイラの正体を突き止める分には全く制限していないんだぜ！」

「……？ ではなぜ、あんな校則を設けたのですか？ 自分の正体を知る人物を最小に絞ったからではないのですか……？」

「違うよ！ それこそ『フェアじゃない』からさ！ 一部の賢い人間ばかりが謎を解くんじゃなく、みんながそれぞれ活躍して黒幕をやっつけるのが一番オイラの好きな『ストーリー』なんだからさ！」

「……？」

入間と伊丹は不可解な表情を浮かべた。

「ま、そこらへんも頑張って解き明かしてくれよな！ そんなじゃ、バイナラ〜」

モノパンダは通気口へと潜っていき、姿を消した。

「…まだまだ、敵は余裕綽々、ってところね」

伊丹がため息交じりにそう言った。



「ユキマルー!! 一緒に弓撃つでありんす!!」

吹屋さんがとても物騒なことを唐突に言い出したのでずっこけそうになった。

話を聞くと、どうやら弓道場で弓を撃つ体験をしてみたいんだとか。

「え？ でも」

「ほーらー！ さっさと行くー！」

危なくないの？とかやり方わかるの？と聞く間もなく俺は腕を引つ張られて四階へと連れてこられた。

ヤバいぞこの人、出会って二日目にして相当曲者であることが分かってきた。

「うっひょー！ かっちよええ〜！ でありんす！」

弓道場につくと、早速置いてある弓を取り出してはしゃいでいる吹屋さん。

弓の構え方や撃ち方、道着の着方まで、壁に貼ってある紙に全部丁寧に載せてある。

「へえ…。せっかくだから道着に着替えてみようかな」

「おっ！ ユキマルもノツてきたでありんすね？ じゃああちきも…」

「おや、何か騒がしいと思ったら」

と、弓道場の入り口から顔をのぞかせてきたのは人間君だ。

「いいところに！ ジョーちゃんも一緒に弓撃つでありんす！」

「だからさ、その物騒な言い方やめようよ…」

「いいですねえ！ 私も一緒にささせていただきますしよー！」

乗り気で弓道場に上がり込んできた人間君は、折りたたんである道着を持つと更衣室へ入っていった。

俺も後に続く。

「え。人間君、着替えるの早いね」

更衣室の壁に貼ってある指南を読みながら四苦八苦する俺に対し、スムーズに道着を着こなして胸当てもつけ終わっている人間君に驚きを隠せなかった。

「仕事柄、世界のあらゆる衣装を勉強して着こなせるようにしているのです。その民族に合わせた衣装を着ることもコミュニケーションの一つですからね！ もちろん和の衣装も例外ではないのです！」

なんだか人間君って、仕事柄とかいって何でもできる気がするな。

「そうなんだ…。君を見てると、俺もいろんなことを勉強しなきゃなってると思うよ」

やっと袴の紐を締め終わると、胸当てをつけ始めた。

「脚本家とはストーリーを生み出す職業ですからね。様々なことに触れておくのは大切なことだと思いますよ。そこから生まれてくるインスピレーションもあるでしょうし」

「本当そう思うよ。入間君も脚本書いてみたらうまくいくんじゃないかなあ？」

「ほ、本当ですか？ 超高校級の脚本家にそう言われますと、いやはや照れますね！ もっぱら既に存在する物語を翻訳することばかりやってきましたが、今度は自分の手で新しい物語を作ってみるのも面白そうですねえ！」

彼なら成功しそうな気がするな。

まあ、ここから出られたらの話にはなっちゃうけどね。

「もう！ 一人とも遅いでありんすよ！ なに更衣室でイチャついてるでありんすか！」

弓道場に戻ると、吹屋さんが腹立たし気にそう言ってきた。

いや、イチャついてはいないんだけどな。

俺の着替えが遅くて申し訳ない気持ちだ。

「これは失礼！ 彼のアプローチがあまりにも熱烈なものですから」

「まあ、俺が着替えにもたついてたからn…っておい!!」

思わず夢郷君に突っ込むときの亞桐さんみたいな声が出てしまった。

アプローチなんてしてないですけど？

「さあ、では初めていきましようか！ どなたから撃ちますか？」

そんな俺のツツコミは意にも介せず話を続ける入間君。

話術メインの才能なだけあって、面倒なやり取りをスルーしたり会話をスムーズに進めるのは上手いんだな。

「はいっ！ じゃああちきから！」

真っ先に手をあげて意気揚々と射的台の正面に立つ吹屋さん。

「実は子供の頃にちよつとかじったことがあるんで要領はある程度分かるでありんす！」

なるほど、着替えが早かったのもそのためか。

「では、お手並み拝見と行きましようか」と、不敵に笑う入間君。

射的台を眺めて呼吸を整える吹屋さん。

その横顔は次第に笑みが消え、凜とした精悍な顔つきに変わる。

吹屋さん、変なことさえ言わなければめちやくちや美人なだけだな…。

バシユツ!

吹屋さんの手から、一直線に矢が飛んでいく。

そして…。

バン!

という音と共に矢は的に突き刺さった。

ど真ん中ではないが、かなり惜しいところに当たっている。

「うわあ、すごい…。」

俺はそんな月並みな言葉しか出すことができなかった。

「へっへーん! あちきは天才美少女でありんすから!」

所謂“どや顔”で腕を組む吹屋さん。

見かけによらず運動神経はいいようだ。

「お見事ですね! では次は私が…。」

そう言つて入間君が前に歩み出る。

弓を引き絞り、一気に放つ。

ヒュツ。

矢が空気を切る。

だが、的に当たった音はしない。

見ると、入間君の放った矢は的の僅かに外側に突き刺さっていた。

「うーむ…やはり初めてだと難しいものですね」

「いやいや、十分凄いでありますよ! まああちきなら一発目でも的にぶち当てられるんでありますけど、それでもジョーちゃんは凄いであります!」

凄く嫌みつたらしい笑みを浮かべて入間君に皮肉を言う吹屋さん。

朝に亞桐さんに見せた顔のように憎たらしい表情だ。

やっぱこの人、闇深いな…。

「では次は葛西さんですね！ よろしくお願いします！」

そんな吹屋さんを見事にスルーしつつ入間君は俺を促す。

しかし、ここまでの流れで俺の緊張はピークに達した。

初めてであんなに至近距離を撃ちぬける時点で、入間君も弓道は非常に上手いじゃないか。

よりにもよって俺が三番手だなんて、自信なくすなあ……。

壁に貼ってある指南書を見ながらゆっくり構え、息を吐く。

草原の奥に鎮座するのは、俺が放つ矢を待ち構えているかのように見える。

「おおく、なんか構えだけはカツコいいでありますね！」

吹屋さんの余計な一言は耳に入れないことにした。

心が落ち着いてきた。

いける。今ならいける。

数分後、俺は草原に膝をついてうなだれていた。

「まあ、誰でもはじめは上手くいかないものですよ……」

入間君の慰めの声が俺の背に降りかかった。

「ま、まあ、あちきが天才過ぎるだけでありんすから！ 気にしない気にしない!!」

吹屋さんでさえ自分を持ち上げつつ俺を慰めている。

だってさ。

思いつき引き絞った矢が、まさか前じゃなくて後ろに飛んでいくなんて思わないじゃんか。

「どうして弦じゃなくて弓の本体を離してしまっただんですか？」

「だ、だ、だって、腕に力が入りすぎちゃって……」

俺は泣きそうな声で答えた。

「…もう一本やらせて。このままじゃ終われない」

俺は立ち上がりながら言った。

せめて的に当てるまではこの道着は脱がないぞ……!!

そして半日が過ぎた。

「ふえー!!! ユキマルー!!! もう動けないであります!! 今日が終わりにしましょー!!!」

「わ、私もビツクリのスタミナですよ……! 彼にこれだけの体力があったとは……!」

二人とも床に寝つ転がって息を荒げている。

でも俺はもう一本の矢をつがえる。

的の周りにはハリネズミのように矢が突き刺さっているが、的には一本も刺さっていない。

…俺にこんなにセンスがないなんて思わなかったよ!

「はあ……はあ……くそっ……! 次こそは的に当ててみせるぞ……!」

俺は胸当てを外しながら二人と同じように床に寝つ転がった。

「ユキマルつて変なところで負けず嫌いでありますよね……? あちきが知ってる頃からずっとそうでありんすよ」

「私もそう思います……。その根性はどこから生まれてくるのでしょうか……?」

ご飯のくだりもそうだったけど、俺は馬鹿にされるとやけに意地を張っちゃうところがあるんだよなあ。

でも結局能力が追い付かなくて、こんな感じに時間を無駄にしちゃうんだ。



「よーし葛西、やるぞー! やるからには全力だ!」

その後、俺は前木君と共にキッチンに立たされていた。

そう言えば晩御飯作るって約束してたもんなあ……。

あの時はやる気満々だったけど、今は全くそんなことはない。

なんだか急速にだるくなってきた。

だって弓道であんなに疲れちゃったし……。

「ふああ……」

見守り役を買って出た人間君も大きなあくびをする始末だ。

「でき、俺献立考えたんだけど、イタリアンでいこうと思うんだ! ど

うかな？」

それに比べ、前木君はやる気満々だ。

「う、うん……。いいんじゃないかな」

「やった!! 今日一日中図書室で料理本を読み漁った甲斐があった！」

えっ、そんなことしてたの…。

どうりで見かけないと思ったら。

「じゃあまず入間！ オリーブオイルとニンニクとベーコン持ってきて！ あとパスタも！」

前木君は滅菌されたエプロンを着て腕をまくると、入間君にそう言い放つ。

「えっ、私も作るんですか？」

てつきり見守るだけだと思っていた入間君は驚愕の声をあげる。

「当たり前前だろ！ ほら早くエプロン着て準備する！ 葛西は包丁洗っというて！」

急にお母さんのような貫録を醸し出した前木君にそそのかされて、俺達は慌ただしく準備に取り掛かる。

最初にたっぷりのお湯を鍋に入れて、塩を豪快にさじ一杯投入。

ぐつぐつ煮立ったら生麺を大量に投げ込んだ。

「あちっ！ あちっ！」

お湯が俺の手に跳ねて何度もそんな声が漏れた。

「そんな乱暴に投げ込むからですよ。食材を扱う時はもっと女性を扱う時のように優しくしませんと」

トマトを角切りにしている入間君からダメ出しを喰らう。

「その言い方、俺にクリティカルヒットするって分かってて言ってるよね？」

片や彼女持ちの入間君、片や好きな人に壮絶にフラれた俺。

嫌みだったらしいったらありやしない。

そうこうしている間に、もう一つのコンロではパスタソースづくりが始まった。

フライパンにオリーブオイルを敷き、弱火でじつくりとニンニクを

炒める。

油にニンニクの香りが移り、この時点で堪えがたいほどの空腹感に支配される。

「あ〜…いい匂い…」

「本当ですなぁ……」

「おい！ ぼさつとしてないでパスタを混ぜろよ！ 硬さにムラがで
きちまうだろー！」

「あつ、ぐ、ぐめんなさい！」

前木ママに注意されて慌ててパスタをかき混ぜる俺達。

十分にオリーブオイルに香りが移ったら、次は中火でベーコンを炒める。

最初のうちは敢えてベーコンを混ぜたりひっくり返したりせず、じつと待つ。

こうすることでベーコンの片面に焼き色が付き、香ばしい匂いと肉のうまみが引き立つのだそうだ。

「美味しそう……」

ニンニクとベーコンの香りだけで幸せの絶頂に達しそうだが、この程度はまだまだ序の口。

ベーコンに火が通ったら角切りしたトマトをたっぷり投入。

加熱されて柔らかくなったトマトを潰し、液状にしてソースの形にしていく。

その時、壁につけてあるタイマーがピーピーと音を鳴らす。

「お、麺が茹で上がったみたいだな」

茹で上がった麺を、俺と人間君で湯切りして皿に移していく。

「あちっ！ あちっ！ 人間君絶対俺にかかるように湯切りしてるで
しょ!!」

「Talk to the hand!」

よく分からない返しをされて困惑する俺をよそに、前木君はソースの仕上げに取り掛かる。

泡を立てて煮立つトマトソースに、一切れのバターの塊を入れる。
やがてバターは黄色い池になってソースに溶けていった。

「バターを入れるとコクが増して味に深みが出るんだよな」

そして香辛料の棚からオレガノの小瓶を取り出し、何振りかかけると、葉っぱの清涼感のある香りが鼻に広がっていく。

こうして完成したソースを、皿に分けられたスパゲッティの上にかけていく。

仕上げに刻んだパセリを上に乗せれば…。

「よし、完成だ！ みんなのところへ運ぼうぜ！」

冷静になって考えてみると、前木君がこんなに手際よく料理できたなんて信じられないな。

「うーん、素晴らしい出来上がりですね！ ボロネーゼともマリナーラとも違う独特の調理法でしたね！ ここにグアンチャーレとペコリーノ・ロマーノが加わればアマトリチャーナ風にもなるのですが…」

職業柄身に付いたであろうイタリアン知識を語る人間君の話は適当に聞き流して、俺と前木君はパスタの皿をお盆に、そしてそのお盆を台車に乗せていく。

「いったただつきまーす！」

食堂で待つていたみんなの元にパスタを運ぶと、ようやく実食の間だ。

散々疲れていたからか、はたまた自分の手で作り上げたからか、泣きそうなくらい美味しい。

…いや、本当に美味しい理由はただ一つ。

前木君が頑張って料理の方法を勉強していてくれたからだ。

俺達が遊んでいる間も、たった一人ですつと勉強してたんだなあ…。

「いやー、前木と葛西がこんなに料理できるなんて知らなかったよ！
ウチ見直しちゃった！」

「前木っちはともかく、ユキマルに妄想以外の取り柄があったことが
驚きでありんす!!」

亞桐さんと吹屋さんが口を揃えて褒め称えると、俺は照れ臭そうに

頭を掻いた。

「いえ、葛西さんはほとんど何もしていませんでしたよ！」とほざく入間君をどつくことも忘れずにね。

「…そういうえば、お昼に食堂に来た人は少なかつたのだけど、みんな何をしていたの？」

パスタを食べ終わりそうになっているころ、伊丹さんが尋ねてきた。

昼ご飯は朝の残りだったり出来合いのものを各自で食べたりすることが多いのでみんなが集まることは少ないのだが、今日はいつにも増して少なかつたらしい。

「あちき達は弓道場でおにぎり食べてたであります！ あちき達はユキマルのワガママで一日中あそこに缶詰めだつたでありますからね！！」

吹屋さんはそう言って「べー！」と俺に向かって舌を出した。

「な、なんだよ！ 元はといえば君が弓を撃ちたいって言ったんじゃないか！」

「でも、あんなに長くやるつもりは無かつたであります！ これだから強情な男は困るでありますよ！」

フンつと鼻を鳴らして吹屋さんは立ち上がる。

「ご馳走様！」

そして皿を置いたまま食堂を後にする。

「ちよ、ちよつと！ お皿くらい片付けろよ！」

「急ぎの用事があるであります！」

亞桐さんの呼びかけにもそう答えて吹屋さんはいなくなつてしまった。

「やれやれ…。悪い人ではないのですが、どうも気難しいところがあつたようですね……」

入間君は困つたように腕を組んで言った。

「全くもう！ こんな些細な喧嘩でシヤレにならない段階までいつちやつたらどうすんだよ…！」

ぶつぶつ言いながらも自分の分と吹屋さんのお皿を同時に片付け

てあげるだけ、亞桐さんはとても優しいな。

それに比べ、あんな小さなことでムキになっちゃう自分が情けない。

「みんな……。ご、ごめん……。俺がムキになったばかりに……」

「人には人の考えがある。それが対立するのもまた人の多様性さ。なに、心配はいらない。吹屋君はさほど怒っているようにも見えなかったしね」

「そうだよ。そんなガチな喧嘩でもないし、あいつの性格的にも次会った時には忘れてるだろう」

「そうかな……。ありがとう……」

夢郷君と前木君のフォローでいくらか俺の心も落ち着いた。

一応、彼女に会ったら謝っておかないと。

結局その後吹屋さんに会うことはないまま、夜時間になった。

「……おかえりなさいませ、なり」

部屋に帰ると、閉じたままのノートパソコンからアルターエゴの声がした。

この声に出迎えられると、なんだか津川さんと同棲しているみたいで背中がむず痒いな……。

「ただいま。……ごめんね、どこかに連れて行ってあげればよかった」

俺はノートパソコンを開いて津川さんのアバターを画面に浮かび上がらせつつ、彼女に謝罪の言葉を告げた。

思えば、一日中部屋に置きっぱなしというのも酷な話だ。

「いえ、私は機械ですから。そのような気遣いは無用ですなり」

そんな俺に、アルターエゴはあくまでも冷静に答えた。

「ところで葛西様、今日は何か進展がありましたなりか？　ここからの脱出について」

「あ……。それは……その……特に進展はない、かな……。今日は一日中、弓道場で遊んで……」

急に脱出の手がかりのことを問われて俺は面食らった。

そうだよな、呑気に遊んでいる場合じゃないよな…。

「了解ですなり。最近はお私との出会いも含め、様々なことがありましたから。心を休める日も必要ですなり。むしろそのようにして交流を深めることが、コロナアイの防止にも繋がりますなり。今日のような日を大切になさってくださいなり」

てつきり調査を怠った俺に怒るのかと思いきや、アルターエゴから発せられた言葉は存外に優しいものだった。

「私には皆さんが羨ましいですなり。私と違って、皆さんには肉体がある。遊ぶことも、探索することも、戦うこともできる。私はただの知能。考え、伝えることしかできませんなり」

ずっと無表情だった津川さんのアバターが、初めて寂しそうな表情をした。

「そつか…そうだよな。…ごめん。こんな時、なんて言っただければいいのか…」

「…いえ、謝るのは私の方ですなり。どうにもならないことを言っただけ、悪戯に葛西様を戸惑わせてしまうようでは人工知能失格ですなりね…」

アルターエゴはますます下を向いて悲しそうな顔をする。

その姿はまるで…。

思いつく。

自分に自信を失っていた時の津川さん。

普段見せる健気な姿とは打って変わって弱くか細い姿を。

でもその弱さは、絶望に立ち向かう強さと表裏一体。

上手く助け合うことができれば、モノクマたちを打ち破る大いなる力にだって変わりうるんだ。

「でも…肉体が無くても君は俺達の立派な仲間だよ。絶対に、絶対に誰かに殺させなんてしないよ！俺が君を守るから！」

だから俺は、津川さんに言っただけであげられなかった言葉をアルターエゴに言った。

「……………」

アルターエゴは驚きの表情を浮かべ、そして頬を紅く染めた。

「か…葛西様……。私はっ……」

その顔は見る見るうちに真っ赤になっていく。

「……つい、いけませんなり……。人工知能が、人間にこんな感情を抱くなど……。許されざることですなり……。でも……。でも私は……」

顔を両手で押さえて、恥ずかしそうに悶え苦しむアルターエゴ。

…意外とちよいんだな、人工知能って。

まさか人間相手に失恋して、人工知能相手に恋が実るなんてことになるとは…。

でも今はまだ、本気で相手をするのはやめておこう。

あの人のことを気にしている自分を、切り捨てることができないからね……。

結局この日は、聞こうと思っていた夢郷君の話聞くことがないまま寢床についた。



「いいんですか？ そんなに呑気に遊んだりして……」

同じころ、食堂で山村は人間にそう言葉を投げかけていた。

黒幕からの勝負を申し込まれた人間達には、一分一秒が惜しい。

一刻も早く黒幕の正体と学園の謎を解き明かさなくてはならないのである。

「遊んでいる間にも、弓道場の探索はくまなく行いましたよ。特にめぼしい発見はありませんでしたがね。それに、皆様とスキンシップを深めてコロシアイを防止するのも重要な役割です」

「まあ……。それはそうですけど……」

「次の“動機”が発表される前に、少しでも皆さんの繋がりを強くしておかなくては。また誰かが過ちを起こすことになりますからね……」

“動機”。

それは、モノパンダが彼らに仕組んだ恐るべき潤滑油。

希望の生徒たちをコロシアイへと駆り立てる点火剤。

それが刻一刻と近付いていることは、入間も薄々予感していた。

「ところで、山村様は伊丹様と調査を？」

「はい…。図書室で蔵書を読み漁っていたのですが、そこに前木君が来たものですから事情を隠すのが大変でしたよ」

ため息をつきながら山村が述べる。

「それで、何か発見は？」

「…どうせ黒幕にも盗聴されているでしょうが、話します。実は、“超高校級の絶望”という組織について」

「あら、こんな遅くに二人で何してるの？」

「!？」

山村の言葉を遮ったのは、食堂に現れた小清水だった。

「…何用ですか」

どこで話をしようと思幕には聞かれてしまうから、黒幕を警戒しても意味はない。

しかし小清水となると話は別だ。

黒幕打倒のため一定の協力はしているが、一度は同級生を殺害した

“敵”。

図書室で得た有益な情報を漏らしたくはなかった。

「ご飯よ、ご飯。食堂なんだから当たり前でしょう？」

そう言っつて小清水は厨房へと入っていく。

「あの人…何が目的なんでしょう……」

山村は立ち上がって警戒しつつ呟いた。

「目的はただ一つ、“人類絶滅”でしょう。しかし、目的は分かっているにしてもそれに至るまでの思考は全く分かりません。ある意味、黒幕よりも恐ろしい敵かもしれませんね」

小清水との対話を諦めていない入間だが、その道のりは遠い。

「あら、ずいぶん人間きの悪いことを言うのね？」

そう言いながら、小清水は厨房から戻ってきた。

その手にはホクホクと湯気を立てるパスタの皿があった。

「このパスタ、やけに美味しそうだけど誰が作ったの？」

「それは……前木君です」

山村がたどたどしく答えた。

「そう。前木君は優しいのね。私のためだけにちょうど一食分パスタを残しておいてくれるなんて」

不気味な笑みを浮かべながら席に着き、小清水はパスタを食し始めた。

「意外ですね。あなたが皆さんと同じ食事を疑いもせず食べるとは」

「だって、モノパンダが毒殺の可能性を封じちゃったじゃない。私が勝手に誰かを毒殺しないための措置なんでしょうけど、そういうことなら私もその措置を有効に使わせてもらおうよ。労せずしてこんなおいしいご飯が食べられるし、願ったりかなったりじゃない？」

パスタを食べる彼女の顔は、心なしか幸せそうに見える。

「……行きましょう。今日は疲れましたから、私はもう休みます」

入間は立ち上がって食堂を後にしようとする。

「あつ、では私も……」

山村もその後続く。

「入間君」

そんな二人の背に、小清水が声をかける。

「前木君に伝えておいて。『パスタ、美味しかった、ありがとう』」

「……『どうか無理はしないでね。あなたはとても幸運な子だから』」

「………分かりました。一言一句間違いなく伝えておきましょう」

その言葉を残して、入間は去った。

「さて、と」

小清水はパスタを食べ終わると、一息ついて独り言をつぶやいた。

「もうそろそろ、かしらね」

Chapter 4 (非) 日常編⑤

吹屋さんが参加してから今日で三日目。

彼女は、昨晚は山村さんの部屋に泊まったようだ。

何事もなく（小清水さんを除く）全員が朝食の場へ現れたので安心したのもつかの間、音もなくモノパンダが現れてこう言ったのだ。

「ちよつとした報告があるので、朝食が終わったら倉庫の前に集合ー」
それだけ言うのと即座にいなくなったモノパンダ。

当然、俺達は怪しんだ。

「“動機”……なのでしょうか」

山村さんがそう呟くと、全員の面持ちが暗いものになる。

“動機”。

それは、モノクマたちが俺達にコロシアイをさせるために用意した、様々な仕掛け。

最初の動機は、“外の世界”。

俺の作品である『希望の蔓』がめちやくちやに壊され、お客様は皆殺しにされ。

拳句、映像が嘘ではない証拠として“血の付いた万年筆”を渡された。

外の世界がどうなっているのか知りたければ、殺人をしろ、という動機だった。

この動機によって、津川さんは自ら殺される道を選んだ。

そして土門君の手違いで、生きたまま焼殺された。

絶望の歯車は回り始めた。

第二の動機は、“将来の夢”。

自らが思い描く夢を達成させるため、ここから脱出したいという心情を煽る動機。

その動機は多くの人に影響を与えた。

リュウ君は自らの本性を思い出し、御堂さんは家族を作り直すために脱出を決意し、小清水さんは人類を滅ぼす夢を見出し、同じく脱出を決意した。

これまで何度も“不殺”を誓ってきた俺達に対し、しかし動機は確実にその心を蝕んできた。

その動機が、再び俺達に突きつけられることになるのか。

「……………とか思ってたら大間違いだぞー!!!」

そんな俺のモノローグに対し、いつの間にか再び現れたモノパンダが盛大にツツコミを入れてきた。

「あのなあ、これはオイラからのささやかなプレゼントなんだぞ!? いいから倉庫前に集合!!」



「嫌な予感しかしねえけどな…………」

倉庫の前に全員が集まると、前木君がふと呟く。

いつの間にか、みんなから離れたところに小清水さんも腕を組んで立っている。

「もー!! 人を呼び出しといて待たせるなんてマナーのなっていないパンダでありんすね!!」

昨日の俺との言い争いなどすっかり忘れた吹屋さんが、怒りを露わにする。

「どっひゃー!! 待たせちゃって悪いなー!!」

そうこうしているうちに、倉庫の扉を開けてモノパンダが現れた。

「いいから用事を言えよー!」

亞桐さんがお得意のツツコミを入れると、「ほれ、今来るぞ!」とモノパンダが返す。

「来る…………?」

その言葉の意味が分からず首をかしげる俺だが、その真意はすぐに分かった。

ガシャン、ガシャン、と倉庫の中から音がする。

「え、なにになになに!?」

すると、不意に倉庫の扉から“ヒト型の何か”が現れた。

「ぎゃーっ！！」

亞桐さんと吹屋さんが抱き合って同時に叫び声をあげた。

山村さんは咄嗟に構え、気を高める。

現れたのは、機械でできた骨格標本のような…。

無骨なロボットだったのだ！

「じゃじゃん！…こいつは御堂秋音さんが希望ヶ峰の生徒だった時代に開発したマシンを、オイラが手を加えて発展させたロボット！

人呼んで“モノドロイド”だぜー！！」

“モノドロイド”と呼ばれたロボットは一歩進んでお辞儀をした。

「こいつはまだ試作品だから、背中のキーボードから入力した簡単な行動しかできないけど、力仕事とかめんどい役を任せちゃえば今後の生活が一気に楽になるんだぜー！！」

バシツと決めポーズをして語るモノパンダ。

アルターエゴⅡに続いて、さらに御堂さんの発明品が登場したというわけだ。

改めて彼女という人間の凄まじさを実感させられる。

「“モノドロイド”……？…なぜそんなものを、今このタイミングで？」

入間君が如何にも怪しそうな表情を浮かべて尋ねる。

「なんでって、ちょうど人数も減ってオメーラの人手も足りなくなってきただろうし、何より昨日アルターエゴさんが“体がある人間は羨ましい”とかいうもんだから、オイラが張り切って一晩で取り寄せてやったんだぞー！」

「アルターエゴのために……？」

俺は昨日の会話を思い出した。



【Chapter 4 (非) 日常編④】

「私には皆さんが羨ましいですなり。私と違って、皆さんには肉体がある。遊ぶことも、探索することも、戦うこともできる。私はただの

知能。考え、伝えることしかできませんなり」

ずつと無表情だった津川さんのアバターが、初めて寂しそうな表情をした。

「そっか……そうだよね。……ごめん。こんな時、なんて言ってあげればいいのか……」

「……いえ、謝るのは私の方ですなり。どうにもならないことを言って、悪戯に葛西様を戸惑わせてしまうようでは人工知能失格ですなりね……」

アルターエゴはますます下を向いて悲しそうな顔をする。



確かにそんな会話をしたけど……。

……。いったいなんでモノパンダがアルターエゴに肩入れするんだろう……。

「じゃあ、アルターエゴをこのロボットの知能に移植することができるとってこと？」

「そのとおりだぜー」とモノパンダは伊丹さんの問いに答える。

「まだ試作品だからインストールに時間がかかるかもしれないけど、移植が済めば完璧にモノドロイドを自分の体として扱うことができるぜー！　これで複雑な命令もお茶の子さいさいー！」

「……でも、せつかく手に入れた身体があんな不気味なのじゃアルターエゴちゃんが可哀想だよね……」

亞桐さんの言う通りかもしれない。

果たしてアルターエゴは喜んでくれるのだろうか……。

「じゃあさ、試運転がてら食堂でアルターエゴに移植してみようぜー！」
前木君が提案すると、特に反対もなくみんなは食堂へと移動するこことなった。

「わーすーいー……ここにキーボードがあるでありますよー！」

吹屋さんがロボットの背面にある蓋(?)のようなるものをパカッと開けながら声をあげた。

そこにはキーボードと黒い画面があり、キーボードに打ち込んだ文字が黒い画面に表示された。

「へー、これでモノドロイドに命令をするんだね」

そう言いながら亞桐さんが文字を入力していく。

『食堂に移動する』

エンターキーを押すと、『以上の内容でよろしいですか?』というメッセージが出てくる。

この状態でもう一度エンターキーを押すと『命令確認中……』という文言が浮かび上がった。

「うわっ、動いた!」

機械音を立てながらモノドロイドが動き出す。

「でもおっそいな……」

前木君が呆れ顔で呟いたとおり、人間に比べるとその動きは半分くらいだ。

「ま、今の技術だと機械の動き方なんてこんなもんだよな。とりあえず食堂に向かうか!」

「モノパンダ。…一つ質問があるのだけど」

伊丹さんの言葉に、ニヤニヤと俺達を見守っていたモノパンダが「はいはい、はいよ!」と答える。

「アルターエゴが中に入っている状態でこのキーボードで命令を出すとうなるの? キーボードの命令が優先されるの?」

「いんや、アルターエゴの方がモノドロイドの内部知能より優れてるから、アルターエゴが中にいる間はキーボードの命令は一切受け付けないぜ! 仮にキーボードの命令を実行中にアルターエゴがインストールされた場合、その時点で命令はキャンセルされてアルターエゴの意思が優先されるぜ!」

モノパンダはビシツとポーズを決めながら答えた。

「……そう」

伊丹さんは短く返事をする、食堂へ向かうみんなに混じっていった。



「ところで入間君」

皆が食堂に向かう列の最後尾で、小清水が入間に声をかける。

「前木君に伝えてくれた？ 昨日の伝言」

「いえ、話しかける暇がなかったものですから。そんなに伝えたいのであればご自分で伝えればよろしいのでは…？」

入間は毅然とそう答える。

「それじゃつまらないじゃない。あなたが伝えることに意味があるのよ」

「……………？」

入間は目を細める。

「ま、深く考えないで。ただの伝言ゲームだから」

小清水はそう言って食堂とは反対方向に去っていった。

「……………」

入間は相変わらず不審なものを見る目で小清水の背中を見送った。



「…………モノパンダが、私に？」

食堂へアルターエゴを連れてきて説明してやると、案の定彼女はパソコンの中で不思議そうな顔をしていた。

「そう…。理由は分からないけど、あんたに体をあげるってさ」

亞桐さんがそう説明するが、アルターエゴは首をかしげる。

「まあとにかく、害はなさそうだし一度中に入ってみたら？ メモリーを差し込めばいいの？」

「いえ、その必要はありませんなり。私に搭載されているハッキング機能の応用で、半径十数m以内の電子頭脳に電波を飛ばして自動で移ることができますなり」

アルターエゴはそう答えると、ゆっくり目を閉じる。

「では、電波を飛ばしますなり……」

それと同時に、モノドロイドの背面の画面に『アルターエゴ イン ストール中： 1%』との文字が浮かび上がる。

「ほえー、アルターエゴってのは凄い代物でありんすねー！ あちきの家にも一台ほしいでありんすー！」

「アンタが持つてたってこき使うだけでしょ？」

「失礼な！ あちきの下で奴隷になれるならむしろ光栄と思うべきでありんすよー！」

「こき使うのは否定しないのかよー！」

相変わらず物騒なことを言う吹屋さん。

流石に冗談だと思っけどさ…。

「でもこれ、インストールにかなり時間がかかるみたいよ」

黒い画面を見ながら伊丹さんが言った。

見ると、こうやって俺達が会話している間も画面の中の数字は1%から上昇していない。

「アルターエゴ、もう少し時間かかるのか？」

前木君が問いかけるが、返事はない。

「インストール中は会話を含め一切のアクションができないみたいですね…」

山村さんが言うとおおり、アルターエゴには一切のアクションが見られない。

読書したり会話したり、各々の方法で時間を潰すこと30分。

「こんにちは!!」

「!!うわっ!!」

突然アルターエゴの声が響いたので、俺と亞桐さんと吹屋さんは同時に悲鳴を上げた。

「ビツクリしたあ……」

「…なるほど。これが“体”ですか。自由に動かせる部位があるというのはいいものですね」

胸をなでおろす俺達をよそに、モノドロイドに乗り移ったアルターエゴは両手を握ったり広げたりしていた。

声は喉の部分のスピーカーから出しているようだ。

「…でもやっぱりその姿だとちよつとおどろおどろしく見えちゃうよね」

亞桐さんがため息交じりに言った。

確かに、骨格のような姿なのに声は津川さんのものだから、余計に怖い。

「見た目の改良はいずれ行うとして…。これで私も皆様のお手伝いができますなり。私に疲労という概念はございませんので、なんなりと用事を申しつけてくださいなり」

アルターエゴはそう言つて丁寧にお辞儀した。

「そんなこと急に言われてもね…。どうする?」

亞桐さんがみんなに尋ねると、前木君が「じゃあさ!」と声を張る。

「とりあえずみんなで大ホールで遊んでみるのはどうかな? 最近体動かしてないし、運動したい気分なんだよな! 球技大会しようぜ!」

「お〜! それいいね!」

「私も久しぶりに体を動かしたいわ」

彼の提案に賛意を示す亞桐さんと伊丹さん。

散々弓道をやった俺と吹屋さんと入間君にとつては昨日の今日だが、昨日ずつと図書室にいた前木君は体を動かしたくてウズウズしている様だ。

「もちろん葛西は来るよな?」

「……もちろん!」

……つて答えるしかないよね。

「えつとー、私は用事があるので」

「もちろん入間も来るよな?」

「……分かりましたよ、行きますよ……」

入間君も巻き添えになったのを見てちよつと安心する俺。

「うっひょー楽しそー!! ちよつとジャージに着替えてくるでありますね!」

昨日の疲れが露骨に出ている俺や入間君と違って、吹屋さんは乗り気で部屋に駆け込んでいった。

俺達よりも体力があるんだなあ。

「よっしやー！ 私もやる気が出てきたので道着に着替えてきますね！！」

吹屋さんに影響されたのか、山村さんも威勢よく部屋に戻っていた。

大ホールで球技をするのに道着なんておかしな気もするけど、彼女はジャージを持っていないのかな？

「……と、俺もジャージに着替えなきゃな……」

少しすると、みんながそれぞれの運動着（大半はジャージ）に着替えてその場に現れた。

伊丹さんと吹屋さんだけが長袖長ズボンで、あとはみんな半袖短パズンだ。

ジャージなんて久しぶりに着たなあ…。

吹屋さんの髪を留めるかんざしはヘアゴムに置き換わっており、澁漣としたスポーツ系女子といった見た目だ。

「わー、着物以外の喜咲ちゃんつて斬新だなー」と亞桐さん。

「あちきはこう見えてアウトドア系でありんすからね！ 昨日も見せた通り運動神経は抜群でありんすよー！」

自分で言っちゃうのが彼女らしいが、確かに彼女は弓道も上手かつたし、運動神経は十分にありそうだ。

「じゃあ、大ホールに行きましょう。：アルターエゴ、ちゃんと動ける？」

「はい。だいぶこの身体にも慣れてきましたなり」

伊丹さんが問いかけると、機械音を鳴らしながらアルターエゴが答えた。

モノドロイドは、先ほど前木君が文字を入力して動かしたときに比べればかなり滑らかに動いている。

「…あ、ユメちゃん！」

こうしてみんなで大ホールに向かう途中、本をもって廊下を歩く夢郷君に遭遇した。

「やあ。みんなで出歩いてどうしたんだい？ …そこにいるのはモノ

ドロイドか？」

「実はこれ、アルターエゴちゃんがいるんだよ！ ねっ！」

「はい。私がモノドロイド内にインストールされ、これを動かしていますなり」

亞桐さんの声にアルターエゴが答え、夢郷君にお辞儀した。

「おお。もうその機能を実行しているのか。彼女が実体を得れば文字通り百人力だね」

夢郷君は嬉しそうな笑みを浮かべてそう言った。

「で、今からこの子の試運転を兼ねて大ホールで球技大会をすることになったんであります！ 良ければユメちゃんも一緒にどうでありますか？」

吹屋さんが天真爛漫な笑みで問いかけると、夢郷君は顎に手を当てて考えたのち、答えた。

「今日はやろうと思っていたことがあったが、せっかくの機会だ。僕も一緒に一緒にさせてもらおうか」

「やったー!! 久々にみんなまで遊べるね！」

亞桐さんは心の底から嬉しそうだった。

小清水さんはいないけど（あの人は流石に誘っても来ないだろう……）、それ以外の全員でイベントをするなんて、先週のスイカ割り大会以来だな。

なんだか俺もワクワクしてきちゃったな。

「……？ どうしたの、前木君」

どこか前木君の様子がおかしい気がしたので、俺は思わず尋ねてしまった。

だって、大ホールで遊ぼうって言った言い出しっぺだったのに、なんだかすぐくよそよそしいというか、気まずそうな顔をしていたから……。

「ん？ どうかしたか？」

しかし、俺が声をかけるとすぐさまさっきの明るい笑顔に戻った。

俺の思い過ぎだったのかな。

「いや、ごめん……。大ホール、行こっか」

そして俺達は夢郷君がジャージに着替えるのを待つて大ホールに移り、一日中球技を楽しんだ。

午前中はバスケ、お昼に伊丹さんと山村さんの手作り弁当を食べて午後はバレー。

女子チームと男子チームに分かれたりもしたが、如何せん女子チームが強いなのなの。

スポーツ万能の女子が山村さん、伊丹さん、吹屋さんと揃い、亞桐さんもかなり動ける方だ。

さらに後半はアルターエゴの覚醒ぶりが凄まじく、人間よりも素早く動いていた。



管制室。

もはや隠すことさえされず自由に入れるようになったこの場所に、小清水はいた。

「随分と呑気な連中ね」

監視モニターにはカメラの様子が映され、大ホールで球技に興じる皆の様子が見える。

「あれだけ黒幕に喧嘩を売っておいて、こんなに呑気でいられるのはむしろ尊敬に値するわね」

「まあ、そう言つてやるなよ！」

ひよこ、と管制室の扉からモノパンダが現れる。

「話を聞く分には、アイツらにもちゃんと考えがあるみたいだぞ！
ぎびゃひゃひゃ！」

「無駄よ。あいつらではあなたに勝てない。勝つのはこの私」
モノパンダに視線を向けることなく小清水は答える。

「入間は私があげたヒントの意味にも気付けないようだし」
「ヒント？」

モノパンダは不審そうに首をかしげる。

「こつちの話よ。気にしないで」

「ふーん。まあ、オイラを倒すために思考を巡らせてくれるなら大歓迎だぜ！」

グーサインを出しながらモノパンダは不敵に笑う。

「じゃあ、私が思考を巡らせて辿り着いた仮定があるんだけど、答え合わせをお願いしてもいいかしら？」

その言葉とともに小清水は初めてモノパンダの方を向いた。

「んあ？ まあ、話を聞いてから考えるよ！」

どこからか取り出した笹をかじりながらモノパンダは答える。

「あなた、アルターエゴでしよう？」

「ブフツ!!」

小清水の言葉と同時にモノパンダは笹を吐き出す。

「あなたが何故このタイミングでモノドロイドあんなものを用意したのか……。無論こちら側のアルターエゴに体を与えたかったからなんて理由ではないわよね。私たちに都合のいいロボットを与えたかったわけでもない。理由はただ一つ。他ならぬあなた達が私たちを牽制するため」

「……………」

モノパンダは不機嫌そうに頬を膨らませたが何も言わなかった。

「人間達からの宣戦布告を受けて発注したんでしょう？ ヌイグルミよりあのドロイドの方が背も高いし力もあるでしょうしね」

「……………何言ってるんだよ。オイラ達はこの美しく可愛らしいフォルムを気に入ってるんだぞ！ セツかくのコロシアイマスコットが人体模型みたいな姿だったら嫌だろ？ だからオイラ達がこの身体以外の身体を使うことなんてないよーだ！」

べー、と舌を出しながらモノパンダは答えた。

「本当かしらね？ 負けそうになったらなりふり構わず抵抗しそうなものだけだ」

小清水はモノパンダを見下ろしながら嫌味っぽく笑った。

「そもそもなぜオイラがアルターエゴだって言えるんだよ」

「簡単な話よ。土門隆信はあそこにいるのに、あなたがこうやって動いているのが何よりの証拠」

小清水はモニターの中、大ホールでバレーボールをする夢郷（の姿をした土門）を指さす。

「思えば、最初っから気付くべきだったのよ。生身の人間が24時間休みなく私たちを監視し続けられるはずがない。複数の人間が関与している線もあり得るけどね。あなたの中身が土門隆信と判明した以上、あなたの正体が」土門隆信の人格をコピーしたアルターエゴ”であることは明白”

「……………」

モノパンダは困っているようないないような微妙な表情を浮かべる。

その頃、希望側のアルターエゴもまた、同じような内容の会話を葛西と交わっていた。



「…モノパンダたちもアルターエゴなの？」

バレーボールの試合の合間の休憩の時間のことだった。

アルターエゴが思わぬことを口にしたので、俺は思わず聞き返した。

「…はい。私はそう思いますなり」

アルターエゴはしゃがみ込んだ態勢のまま答えた。

「確かにあいつらも機械だしな……。言われてみればそんな気もするよ」

「…実は先日、私の中に眠っていた情報データを発見したので解凍し直しましたところ、私のお母様…すなわち御堂秋音様の発明品についてのデータがございましたなり。私はハッキング能力とハッキング耐性を得ただけの改良型ですが、その発明にはまだ続きがあったんですなり」

「続きが……………!？」

俺はボトルに入ったミネラルウォーターを一口呷ると、身を乗り出して話を聞き入った。

他のみんなにも教えた方がよさそうな情報だが、アルターエゴは俺だけを特別信頼してこの情報を教えてくれているようにも見える。

今は俺と彼女だけの秘密にしておこう。

大ホール内では他のみんなも同じように休憩していたので、俺は世間話をする風を装って密かにみんなから離れたところにアルターエゴを誘導した。

今この場で話を切り出したのも、二人つきりで話すよりもこういう時間に話した方が黒幕にも怪しまれにくいと彼女が判断したのだから。

十分に離れたと判断した場所で俺は彼女の発言を求めた。

「はい。データに残っていた発明品は二つ。：第一に、“アルターエゴⅢ”」

「：Ⅲもあるのか」

「Ⅲ型は私達Ⅱ型のハッキング能力を向上しつつ、人工知能の飛躍的な強化によって“超高校級の才能”の搭載に成功した究極のアルターエゴですなり」

「超高校級の才能を!？」

思わず俺は大きな声を張り上げてしまい、慌てて口を押えた。

無から生まれた機械が俺達と同じ“才能”を手にしたとしたら、それはとんでもないことだ。

それこそ“超高校級の人間”は不要になり、機械が全てを支配する世界にだって……。

「はい。希望ヶ峰学園が超高校級の才能をデータ化する研究を続け、その過程で生み出されたアルターエゴですなり。ですがⅢ型は未だ発展途上であり、搭載できる才能は極めて限られている……と私のデータにはございますなり」

「……もしかしたらあのヌイグルミたちはⅢ型かもしれないってことなのか……」

もしそうだとしたら、モノパンダやモノクマは何らかの才能を持っていることになる。

いったい何の才能なのだろう……。

「まだ確定したことではありません。…が、私がモノパンダなどのコントロールを奪えないということは、少なくともハッキング能力についてはⅡ型以上のものを有していると考えて間違いないと思いますな
り」

やはり俺達の敵は途方もない規模だ。

そんな奴らを出し抜いてここから脱出なんてできるのだろうか
……？

「…じゃあ、残るもう一つの発明は？」

「それを知るための直感的なヒントは、今私が動かしているこの身体
…“モノドロイド”ですなり」

アルターエゴは自分の両手をのぞき込みながら言った。

「このアンドロイドは、私と同じくアルターエゴである黒幕たちがよ
り自由に動くために用意したものである可能性が高いですなり。も
し黒幕たちがアルターエゴⅢだったとしたら、それが取り憑いたモノ
ドロイドはどうなるでしょう？」

「超高校級の才能を得たアルターエゴを搭載したアンドロイド…。そ
れってもう、“超高校級の生徒”そのものじゃないか………！」

俺の声はいつしか震えだしていた。

希望ヶ峰は、そして御堂さんは、そんなものを開発していたとい
うのか。

人類の希望たる“才能”。

それが機械となって量産される世界。

それが、希望ヶ峰の目指す世界なのか…？

「そうですね。究極のアルターエゴを搭載した究極のアンドロイド
…。それが我が母、御堂秋音の最終発明品、“アルターヒューマン”
ですなり」

「アルターヒューマン……」

それが、俺達の敵。

黒幕がモノドロイドに乗り移った姿なんだ。

「しかしながら、アルターエゴの感情や知能は十分でも、アンドロイド
の研究がそれに追いついていないのが現状。まだまだ人間そのもの

を生み出すには遠い…とデータにはございますなり」

確かに、そう話すアルターエゴの姿…すなわちモノドロイドの姿は、人間には程遠い。

御堂さんは、それを極限まで人間に近づけようとしていたのか。

全ては、失われた家族を蘇らせるために。

しかしその思い、情熱、知識は、全て黒幕に悪用されてしまった。

「やつほーい！ ユキマル！ アルちゃん！ 第二セット始めるのでありんすよ！」

バレボールを弾ませながら声を張る吹屋さんの言葉が聞こえた。

体も火照ったのに長袖長ズボンを貫く彼女は意外とガードが堅いんだな。

「…今話したことを胸に留めておいてください。きっと、役に来る時が来ると思いますので」

アルターエゴは短くそう言うみんなの輪の中へ戻っていく。

「うん……。ありがとう」

俺も短く返して輪に入っていた。

今日は楽しい日だけど、考えることは多そうだな。



こうして今日という日が終わった。

彼らは汗を流し、つかの間の幸福を楽しんだ。

「あ、そういうえば、前木さん。小清水様が……」

へとへとになって食堂へと向かう集団の中で、入間はようやく小清水からの伝言を伝えた。

「…と、このように仰っておりました」

「小清水が……」

前木は複雑な表情を浮かべる。

「これを伝えろと言われたとき、私は虫唾が走る思いでしたよ……！

丹沢さんが身代わりになって亡くなられたときのことを、未だに幸運

となじるなど……」

入間は拳を震わせて怒りを露わにする。

しかし前木には分かっていた。

小清水が自分に向けていった“幸運な子”とは、丹沢が飲んだ毒コーヒーを飲まなかったことに対する皮肉ではない。

自分の幸運に、黒幕を倒しうる素質があることを言っているのだと。

しかし悲しいことに、入間がそれに気づく様子はなかった。

この言葉をわざわざ入間づくてに伝えさせたのも、小清水が入間を試しているからだとすぐに分かった。

敢えて前木の幸運についてのヒントを出し、前木の幸運の本質に気付くかどうか、試しているのだ。

だが入間はうわべの意味に引きずられ、盲目になってしまった。

「……そっか」

前木にはこう返すことしかできなかった。

入間に真実を教えたいが、それが校則違反になる可能性を孕むことはこの前小清水によって示された。

教えたくても教えられないもどかしさ。

「…虫唾が走るのはこっちだよ」

誰にも聞こえない声で、前木はぽつりと呟いた。



一方、山村と伊丹は夕食を作る厨房の中でこんな会話を交わしていた。

「伊丹さん。今日一日運動してみてどうでしたか？ やはり私の仮説は正しかったでしょう？」

「…恐れ入ったわ。あなたがこんな発見をしてくれるとは思わなかった」

ストーンストーンと野菜を切りながら伊丹は呟く。

「ずっとあのホールで修業をしていて思っていたんです…。『いつ

もより少し疲れやすい』って。初めはたまたまだと思っただけです。でも、何回修行しても同じように感じられて…」

「失われた数年間の記憶の間に体力が低下するようなことがあったのかも知れないけど…。別の可能性として、あなたは一つの結論に行き着いたわけね」

「はい。『この場所自体に原因がある』…と」

話をしながらも二人の手際は早い。

ごま油を敷いた鍋で肉を焼き、焼き色がついたら水と野菜を投入する。

「それであなたの相談を受けて、今日一日運動してみることにした。偶然にも前木君がああいう提案をしてくれたから自然に運動する流れに持ち込めたのは幸いだったわね」

菜箸で鍋をかき混ぜながら、伊丹は調味料をその中につけ足している。

「私の感覚が正しければ…だけど…。この場所は、普通の場所よりほんの少し…。酸素が薄い」

その言葉に山村がコクンと頷く。

「つまりこの校舎は、それなりに標高が高い場所にあるんです！」

山村がそう総括する。

「あとはその仮説をどこに生かすか、ね…」

伊丹は完成した鍋の味見をしながら、思案に耽っていた。



夕食の後、俺はアルターエゴをノートパソコンに戻し、一緒に部屋に帰った。

「お疲れさま。今日は楽しかったね」

「葛西様…」

そうやって顔を赤くするアルターエゴ。

そういえばこの子、みんなの前では隠していたけど俺に惚れてたんだっけ。

嬉しいは嬉しいんだけど、参ったなあ……。

「ごめんね。本当はたくさんお話したいんだけど、今日は疲れちゃったからさ……。シャワー浴びたら、寝るね」

俺はバツが悪そうに笑いながら言った。

「いえいえ、お体を大切になさるのがご主人タマにとって一番大事ですから」

「……？」「ご主人タマ」……？」

「あっ……」と声を漏らしてますますアルターエゴは顔を赤らめ、両手で顔を隠した。

「ご、ごめんなさい……。その……。身も心も虜になった相手にだけ、この呼び名を使うようにしているんですなり……。今後も私をお好きなようにしてくださいなり、ご主人タマ……」

「……あ、あはは……」

デレデレ過ぎて苦笑いしか出ないよ。

俺、そんなに好かれるようなことしたかなあ……？

「せっかく熱くなってくれたところで悪いんだけどさ、今日の最後に一つだけ、真面目な質問をさせてもらってもいいかな？」

待ちきれなくなった俺は遂に主題を切り出す。

「……？」「何でございましょう」

アルターエゴも俺の真面目な様子を汲み取って表情を直した。

「ほら、この前言ってたじゃないか……。」「夢郷君が夢郷君じゃないって……」

こんなところで話していたら黒幕には筒抜けだろうが、今は仕方ない。

一刻も早く情報が欲しいし、夢郷君^彼が黒幕側なのかも分からないし。

「……そのことですか。それに関して、実は今日の運動の時間に検証を行っていましたなり」

「……検証？」

「はい。運動をしている夢郷様の鼻筋、輪郭、目元の位置などを私が所有している皆様のデータと照らし合わせて確認してみましたなり」

「すごいね……そんなこともできるんだ」

「……その結果、夢郷様は私が持つ“夢郷郷夢”のデータと【86%】一致しましたなり。本人様であれば時間の経過による顔立ちの変化を加味しても、【94%】以上の値でなければなりません。【86%】という値は、よく似た兄弟か、高度な変装をしている人物に多い値ですなり」

「変装……!?!」

その言葉はつまり、夢郷君ではない人物が夢郷君に成り代わっているということを示している。

「一方、夢郷様のデータは別のとある人物と【96%】の一致を見せておりましたなり」

「………!!」

その人物というのが、夢郷君に成りすましている人物…?

「その人物は………他ならぬ、土門隆信様ですなり」

「っ………!?!」

予想だにせぬ答えを聞き、俺は思わず立ち上がった。

「そんな………バカな!!?!」



少しづつだが、確実に歩みを進める希望達。

一枚ずつ明かされていく真実。

絶望という闇の深い底、その先に……ほんの一条、糸のように細い光を見出しつつあった。

そう、黒幕は……その“光”を待っていたのだ。

光が差し、皆が僅かな希望を見出して胸躍らせる時を。



結局、あの晩は夜遅くまでアルターエゴと談義していた。

夢郷君は既に亡くなっているとか、土門君は何らかのトリックでオシオキを逃れたとか、彼が黒幕側で裏で暗躍しているとか。

彼女から告げられた仮定は、にわかには信じがたいことばかりだった。

そんな談義の後だから、ぐっすり眠れるはずもなかった。モヤモヤとした意識の中で、俺は……………。

「……………う、ん……………」

俺は目を覚ます。

体が無理矢理何かに起こされているような、とてつもない不快感を感じる。

なんだ、一体？

「……………？」

その理由はすぐに分かった。

キーンと、謎の高音が頭の中で反響しているんだ。

耳鳴り？

なんでこんな症状が？

「葛西、なんかずっと変な音しない？」

最低限の準備をして朝食に向かうと、開口一番亞桐さんにそう言われた。

昨日のアルターエゴとの会話を経て夢郷君が既にこの世にないかもしれないと知った俺は、亞桐さんとどう接すればいいのか大いに悩んだのだが、今はそんな思考すらもこの高音にかき消されてしまっていた。

「亞桐さんも聞こえるんだ、この音……………」

「ウチどころか、ゆきみんも入間も、みんなだよ！」

「ふえ……………」。朝っぱらからこんな新幹線の中みたいな音を聞かさ

れたらテン下げでありんす……」

「…全員が聞こえているということとは、ただの耳鳴りではないよね」
見ると、その場にいるみんながぐったりしている。

この音、ただ不快というだけでなく、どこことなく人の神経を逆撫で
するような、苛立たしくさせるような、そんな感じがする。

「おっはよー!!!」

「!?」

くるくると回りながら天井からモノパンダが降ってくる。

「あれれ？ みんな朝から元気ねーな！ まるで嫌な音でも聞いている
みたいだぜ！ ぎひゃひゃひゃ!!」

「…やはりこの音はあなたが起こしたもののなのですね」

敵意のこもった目つきでモノパンダを睨みながら人間君が言った。

「だいせいかい!! 実はこの音、人間工学を極めた天才パンダであ
るオイラが、人間が最も不快に聞こえる周波数の音をスピーカーに乗
せて流してるんだぜ!!」

「お前、俺達に直接手は下さないんじゃないやなかつたのか!!」

前木君がダンと机を叩いてモノパンダに怒鳴った。

「仕方ないんだよ!! これが今回の動機だから!」

モノパンダは両手を広げてそう告げた。

「ど、動機……!?!」

「そのとーり!! みんながコロシアイを起こすまで、この音はずっと
流れ続けるんだぜ!!」

みんなに戦慄が走る。

今までとは一線を画する動機だ。

今までのようにDVDを配布して、その内容でコロシアイを掻き立
てさせる……といった内容だとばかり思っていた。

だが、今回の動機はかなり強引なものだ。

俺達がコロシアイをしなければ、この不快音は容赦なく俺達を追い
詰め、精神をバラバラに破壊するのだろうか。

「ウチらが……コロシアイをするまで……?!?!」

亞桐さんの顔が見る見るうちに絶望に歪んでいった。

「そんな……。今までの動機に比べて、随分と強引で公平性を損なうのではありませんか？」

入間君は精一杯の言葉で反撃を試みる。

「いいんだよ!! だってコロシアイを経れば減るほどみんなはコロシアイに対して慎重になっちゃうだろ? だから動機もコロシアイが進むほどに強くなっていくぐらいがちようどいいんだよ!」

こじつけにしか思えない理論で自らの意見を正当化し、不敵に笑うモノパンダ。

なんて、なんて卑劣なやつなんだ。

「それに、飯を食わせないとか、睡眠をとれないとか、そういう命に関わるものでもねーだろ? ただ“嫌な音がするだけ”だぞ!」

「でも……でも……!」

「みんな、動揺してはいけないよ!」

混沌とする場を鎮めたのは、夢郷君だった。

いや、彼は……土門君……なのか……?

「音で僕たちを支配しようというのなら、イヤホンでもヘッドホンでも付けていればいいじゃないか。いずれも倉庫に行けばあるだろうし、モノモノマシンの景品にもなっているかもしれない。嫌な音には栓をしておしまえば何の問題もない!」

「ぎひゃつ!」それは痛いところを突かれたぜ! けどな、オイラが自信をもって世に送り出したこの音を舐めてもらっちゃ困るなあ! こいつはイヤホンとかヘッドホンすらも貫通する音波なんだぜ!」

「それでも耳栓をすれば多少はマシになるはずだ。みんな、僕たちがこんな動機で負けるはずがないだろう? 僕たちは既に三度のコロシアイをくぐり抜けてきたのだから!」

夢郷君の言うことは最も……のように思える。

彼が本当に土門君で黒幕側だったら……そんなことを言うだろうか?

それとも、場をかき回して楽しんでいるだけなのか?

……アルターエゴの情報は正確だと思うけど、やはり彼が土門君だな

んて信じがたいな……。

「うつひよ〜!! いいこと言つた〜!! 流石ユメちゃんでありんす!!」

吹屋さんは嬉しそうに夢郷君に向けてガッツポーズを送った。

「そ、そうだよね。ウチらがこんなところで負けるわけにはいかないもんね!」

亞桐さんもそれに同調する。

だけど、そのほかのみんなの表情は暗いままだ。

「ぎひやひやひや! この動機に耐えられたら大したもんだぜ! じゃ、せいぜい頑張ってくれよ〜」

その言葉を残してモノパンダは天井の穴に吸い込まれていった。

「…と、とりあえず私は人数分のイヤホンを持ってきますね」

それと同時に山村さんは食堂を後にした。

こうして、俺達の戦いの日は始まった。

昨日と違って、誰もみんなで何かをしようと言い出す者は現れなかった。

みんな、黙々と自分にとって一番楽しいと思うことをした。

俺は最初のうちは図書室で読書をしていたが、すぐに集中できなくなつてやめた。

モノパンダの言うとおり、この不快感はイヤホンをしていても、イヤホンで音楽を聴いていても、はつきりと耳をつんざいてくる。

机を挟んだ向かい側では伊丹さんが図書室のノートパソコンで調べ物をしていた。

しかし集中できないのか、時節髪をかき乱したり机に突っ伏していた。

「……伊丹さん、大丈夫…?」

「大丈夫よ、放っておいて」

彼女のぶつきらぼうな言い方に無性に腹が立ったが、俺はその感情をぐっとこらえた。

全てはこの不快感のせいだ。

堪えなきや、全てがモノパンダの思う壺だ。

いてもたってもいられなくなった俺は、校内を散策することにした。

四階に上がると、何やら音楽室からピアノの音が聞こえる。

俺は音楽室に入ってみた。

「…あ、吹屋さん…」

そこでは、吹屋さんがピアノを弾いていた。

「お、ユキマル！ どうでありんすか？ あちきのピアノ、とってもお上手でありんしょ？」

満面の笑みで伴奏を続ける吹屋さん。

「すごいね…。こんななピアノが弾けるとは思わなかった」

「へへっ！ 子供の頃、晰の稽古と並行してお勉強してたんでありますよ！ このピアノであの嫌な音を上書きしてやりましょ！」

吹屋さんは得意になっていろんな曲を弾き続ける。

様々なメロディがピアノの音に乗って……………。

しばらく経った。

彼女のピアノはまだ続けている。

心安らかにさせてくれる演奏のはずなのに……………。

あの音が消えない。

消えないばかりか、ますます俺の脳内にガンガンと響き続けている。

吹屋さん、ちゃんと弾いているのかな？

手を抜いて弾いてるんじゃないだろうな。

っていうか、なんでこの状況でピアノなんて弾いてるの？

ピアノ上手いのをひけらかしてるのかな。

うわ、気持ち悪……………。

「っ!??!」

……………??

今、俺、何を考えてた???

俺…………俺…………大丈夫だよな??

ブンブンと顔を横に振る。

吹屋さんには申し訳ないけど、これ以上ここにいちやいけない気がする。

何か変なことを言い出す前に、ここから……。

「……おい!!」

そう思っていた矢先、突然音楽室の扉が開いた。

現れたのは前木君だ。

「前木っちもあちきのお上手な伴奏を聞きに来たんでありんすか？」

吹屋さんはピアノを弾きながら笑顔で前木君を迎えた。

しかし、前木君の様子はどこかおかしい。

彼は俺には目もくれず、つかつかとピアノに歩み寄っていった。

「……う？ 前木っち？」

ようやく異変に気付いた吹屋さんが首をかしげる。

それと同時に……。

ガン、と前木君はピアノの足を蹴った。

「ガンガンピアノ鳴らしゃがって、うるせえんだよ!!」

「っ?!?!」

俺と吹屋さんは混乱して言葉を失った。

しかし、俺は一瞬後に彼の感情を理解した。

彼はこの不快音に吞まれてしまったんだ。

「待って!! 前木君!」

俺は立ち上がって声を張り上げた。

「うるせえっ!!! お前に関係ねーだろ!!」

前木君の凄まじい剣幕に俺はたじろいってしまった。

「こんなモン鳴らしてんじゃねーよ!! ますますイライラするんだよ

!!」

続けざまに前木君はピアノの足を何度も蹴りながら叫んだ。

「……………!!」

吹屋さんは立ち上がった。

その顔からは血の気がスーッと引いていった。

「何か文句あんのか!?!」

前木君がそういつた瞬間、ドン、と吹屋さんは両手で彼を突き飛ば

した。

前木君は尻もちをつく。

「み、みんなのために……。あ……あちきは、みんなのためにできることをしようと思つて……」

吹屋さんの目からぽろぽろと涙が零れ落ちた。

「必死に!! 必死に頑張つたのに!!」

吹屋さんは腰を落とすと、ピアノの鍵盤に突っ伏して号泣した。

「うあああああああん!!!」

「……」

前木君は何も言わずに立ち上がる。

そこから先は、俺もほとんど自我を失っていた。

次の瞬間、俺は前木君の頬を全力で殴っていた。

「あ……謝れ!!! 吹屋さんに謝れよ!!!」

体勢を崩した前木君の髪の毛をわしづかみにし、地面に押し付けた。

「こうやって謝るんだよっ!! 今すぐ謝れ!!」

しかし、俺はすぐに体が浮くのを感じていた。

「調子乗んなよ」

体格の小さい俺は、すぐに前木君に投げ飛ばされていた。

全身に痛みが走つた……。のだろう。

だけどこの時の俺は、もう痛みなんて感じていなかった。

アドレナリンが全身を駆け巡る。

イラつく。

ムカつく。

殺してやる。

どれぐらい俺達は殴り合つたんだろう。

「何してんだテメエら!!」

逆鱗モードの山村さんが止めに入ったとき、前木君は俺の上に馬乗りになり、全身をタコ殴りにしていた。

入間君や伊丹さんらが話し合った結果、俺は保健室に、前木君は個室に謹慎処分となった。

大して重い怪我ではなく、明日には保健室を出られるだろうということだった。

アルターエゴは俺の手から取り上げられ、亞桐さんが管理することとなった。

あまり覚えていないが、話し合いの間に、時節怒鳴り声のような声が聞こえた。

みんなも苛立ちを隠せずにいるようだ。

こんなに脆いなんて。

あれだけの地獄を乗り越え、絶対にコロシアイをしないと決めた俺達の覚悟と決意が、こんなに脆かったなんて。

たった一つの音だけのために、壊されてしまうなんて。

こんなものだったのか、俺達の存在って。

保健室にいる間も、ずっと音は流れている。

何かを壊したくなるが、壊せるようなものは何もない。

俺は壁を殴って時間が過ぎるのを待つ。

もういつそ、全部が終わってしまえばいいのに。



「このままでは、私たちは崩壊します。そう遠くない未来に」

「黒幕に勝つためには、先手を打つしかありません」

「ええ、そうです」

「――殺しましょう、あの人を」

Chapter 4 (非) 日常編⑥

いつの間にか時刻は夜になろうとしている。

相変わらず不快な音は流れ続けているが、一度痛い目に遭ったせい
か、朝よりは冷静な気持ちでいられた。

「こんなことになって、一体どう收拾つけるのよ!？」

「そんなこと、私が聞きたいですよ!!」

廊下で言い争っているのが聞こえる。

入間君と伊丹さんのようだ。

みんなが崩壊していくのが手に取るようにわかる。

俺にはどうすることもできない。

「前木君、何してるのかな……」

誰もいない部屋でぼつりと呟いた。

あの時の彼は人を殺せそうな形相をしていた……人のことは言え
ないけど。

きつと正気に戻ったら、俺や吹屋さんに大きな罪悪感を抱くに違
ない。

まさか、自ら命を……いや、流石に考えすぎか。

「…あ、葛西……大丈夫だった……?」

しばらく何もしないで寝ていると、亞桐さんが食事を持って現れ
た。

「ご飯持ってきたよ。ほら、怪我を直すには美味しいご飯が一番だよ
!」

そう言って彼女はサンドイッチとフレンチトーストの皿、牛乳の瓶
が乗せられたトレイをベッドの横の机に置いた。

「亞桐さん、ありがとう……。みんなに迷惑をかけちゃって……」

「ううん、しょうがないよ……。まさか前木があんなに暴れるなんて思
わないじゃん……。あいつ、ご飯もいらなんて言っつてふさぎ込んでる
んだよ」

やっぱり思ったとおりだった。

彼が自傷に走らないか心配だ。

「だからさ、せめて葛西にはご飯食べてほしいなって」

「うん、いただくよ。ありがとう」

俺は両手を合わせて亞桐さんが作った朝食のような夕食を食べ始める。

「亞桐さんは大丈夫なの…？ ほら、この音…」

ふと俺が尋ねると、亞桐さんは「大丈夫だよ」と返した。

「ダンサーだからうるさい音には慣れてるし、アルターエゴがずっと一緒にいて慰めてくれるし。…ごめんね？ アルターエゴ、アンタに懐いてたのに…」

「いや、みんなの決定だから仕方ないよ」

アルターエゴも、俺のように危ない奴の元にいるよりは亞桐さんの元にいた方が安全だろう。

「アルターエゴは機械だから音とか平気みたいで、さっきからずっとモノドロイドを動かしてみんなのお世話してるんだよ。疲れがないつつつても、ちよつと申し訳なくなっちゃうよね」

「……………」

後でみんなに謝ると同時に、アルターエゴにお礼を言わなきゃいけないみたいだな。

「…じゃ、夜も遅いしウチは部屋に戻るね。葛西、お大事にね」

「うん。わざわざありがとう。亞桐さんも気をつけてね」

夜時間のアナウンスが入る直前くらいに亞桐さんは部屋に戻っていった。

最近アルターエゴと一緒にいたから、久しぶりに一人の夜だ。

保健室に置いてあった洗面用具で顔を洗ったり歯を磨いたりした後、俺はベッドに戻った。

モノパンダが用意した「モノポーシヨン」という薬を塗ると、痣や擦り傷程度ならすぐに治るらしい。

朝起きた時には元通りになっている…はず。

今夜は大人しく寝よう。

音がガンガン響いていてイライラするが、無理矢理頭まで布団を

被って目を瞑った。

「……………う？」

しばらく時間が経った後、何か廊下から物音が聞こえてきた。
今は夜時間のはず。

外で何が起きているんだ？

「……………い！」

まさか……………。

誰かが俺を殺しに来る??

丸腰の俺を？

俺の動悸は一気に激しくなった。

俺はベッドから出て保健室の扉の鍵を確認した。

鍵は閉まっている。

大丈夫……………だよな……………??

——ダンダン！

「わっ!？」

突然、扉が外から強く叩かれた。

俺は扉から飛びのくようにして離れた。

「開ける——っ!!!」

「!?!？」

絶叫。

女の人の絶叫が聞こえる。

殺される。

誰かが俺を殺そうとしている。

絶対に、絶対に開けちゃダメだ。

ダンダン、ダンダン、と扉は激しく揺れる。

「開ける……………開ける……………」

次第に扉の向こうの声は弱くなっていく。

いや、待てよ……………。

ひよつとすると、助けを求めているのか？

ただ単に保健室を使いたくて、必死にドアを叩いているだけなのか

??

俺は……どうすればいいんだ？

もし、目の前にいるのが“敵”だったら……。

確実に俺は殺される。

開けちゃダメだ。

開けちゃ……。

「……………」

俺の手は、無意識のうちに保健室の鍵を開けていた。

ガラツ、とドアがスライドする。

「……………小清水さん!？」

そこには、息を切らした小清水さんが床に座り込んでいた。

いや、ただ座り込んでいるだけじゃない。

彼女の左肩からはとめどなく血が流れている。

彼女はその肩を右手で押さえ、必死に血を止めようとしていた。

「手こずらせてくれたわね」

小清水さんは俺に憎まれ口を放つと、ゆっくりと立ち上がって保健

室の中に入ってきた。

「小清水さん……いったい……!？」

あまりの衝撃に言葉がちぐはぐになりつつも俺は尋ねた。

「見て分からない？ やられたのよ」

小清水さんは汗だくの顔にわずかに笑みを浮かべて言った。

下着が露わになるのも構わず白衣とシャツを脱ぐと、左肩の生々し

い傷口が明らかになる。

そして薬品棚からモノポーションを取り出すと、一気に瓶をひつく

り返して左肩にかけた。

「うっ……………」

傷口に薬品が染みる痛みに耐えながら、手際よく傷口に包帯を巻

く。

「やられたって……? 誰に……?」

「自分で考えたら?」

小清水さんは吐き捨てるように言った。

「私としたことが油断したわ。植物園にいたらいきなり後ろから…。急所はかわしたけどこのザマよ。あいつには後でお礼をしてあげないかね」

包帯を巻き終わると、彼女はシャツを着なおす。

「相手は…？」

「ぶん殴ってナイフを奪ったら一目散に逃げだしたわよ。虫さんを巻き添えにしなかったのがせめてもの救いね」

小清水さんが白衣のポケットから取り出したナイフは、彼女自身の血で赤く輝いていた。

「……………」

俺は何も言えなくなってしまった。

コロシアイが起きたんだ。

未遂とはいえ、誰かが彼女を殺そうとした。

あれだけ防ごうと決意していたコロシアイが、もう起きてしまったんだ。

たった一つの音のために??

「すごいわね、このポジション…。もう痛みが消えた」

小清水さんは左腕を上げ下げしながら傷の様子を確認すると、白衣を拾い上げて保健室を後にする。

「あのパンダの思う壺に嵌るのは癪だけどね…。今回のことは流石に私も頭にきちやった…。あなたもおかしな真似はしないことね」

小清水さんは最後に俺に釘を刺してきた。

「おかしなことをすれば殺す。どんな手を使ってでも」

その言葉とともに彼女は保健室を後にした。

そんなことがあった後では、心配で心配で寝付けるはずがなかった。

いや、寝ちやいけない。

俺は保健室の扉を開き、隙間から廊下を覗いた。

この場所からは個室の扉が見渡せる。

そうだ、こうやってみんなの部屋を見張ろう。

俺に山村さんほどの力は無くても、少しはコロナイを防ぐ抑止力にはなるはずだ。

動機の後夜。

第一の事件と第二の事件はこのタイミングで起きた。

一番気を張らなきゃいけない時間だ。

夜が更けても、俺はずっと廊下を見続けた。

高音が頭の中で反響し続ける。

発狂しそうだ。

でも今夜だけ。

今夜だけ頑張れば……。

俺は……。



「……………」

意識が不意に戻った。

俺は…保健室の壁にもたれかかったまま、寝てしまったのか…？

ふと時計を見る。

時刻は朝食の時間を過ぎていた。

「まづい!!」

なんで、なんで寝てしまったんだ!!

俺の馬鹿!!

俺は一目散に食堂に駆け出した。

「……………」

そこには、各々が各々の朝食を自分で用意し、食べているみんながいた。

「ユキマルー！ 元気になったでありますか！ よかったー！」

不快音を夜通し聞き続けていたとは思えないほど元気な様子の吹

屋さんが声をかけてきた。

「おはようございます、葛西君」

続いて声をかけてきたのは山村さん。

精神が強い彼女はみんなに比べると平静を保っていられるようだ。それ以外の人たちからの挨拶はない。

「おはよう……」

二人に挨拶を返しながら俺は食堂をぐるりと見渡した。

黙々と食事をする入間君と伊丹さん。

二人とも表情は極めて重い。

昨晚も言い争いをしていたようだし、一番不快感の被害を受けているように思える。

無表情で食事をする夢郷君（土門君……）。

ますます何を考えているか分からない。

同じく真顔で食事をしている亞桐さん。

僅かながら俺にも手を振ってくれる分入間君や伊丹さんよりは元気がありそうだが、それでも昨晚に比べて明確に消耗しているのが見て取れる。

彼女の横にはノートパソコンに入ったアルターエゴ。

そして正面に座る吹屋さん。

「前木君と小清水さんは……？」

「前木っちならあちきがさつきご飯を運んであげたでありますよ！」

昨日のことも謝って仲直りしたし、ユキマルにも謝りたいって言ったのできつと仲直りできるのでありますよ！」

「…そうなんだ」

思ったよりはマシな状況で良かった。

ちよつと気まずいから、彼に会うのは後にしよう…。

「小清水さんは……??」

俺がそう問いかけるころ、みんなは次々と食事を終えた。

「…彼女なら、先ほどエレベーターに入っていくのを見ましたよ」

俺の問いに反応したのは入間君だった。

……この中にいるのか？

昨日、小清水さんを殺そうとした人が…？

「私ですよ」

「……入間君？」

「昨日、保健室に小清水様が来られたのでしよう？」

入間君は俺の胸の内を見透かしたように言った。

「彼女を刺したのは…私ですよ。失敗しましたがね」

「……っ!?!?」

なっ……

そんな馬鹿な……？

「勝手に決行してしまつて申し訳ありません。葛西さんと前木さんには内密で行つたことなのです」

「そ、そんな……なんで!!」

なんでみんなで結託して、殺しなんて!?

「だつてしょうがないじゃん!!」

亞桐さんの大きな声に俺は身をすくませた。

「こんな音が続いたら、みんな憎しみ合つていくだけなんだよ!! それよりだつたら……!!」

「切り捨てられる人を切り捨てるしかない」

亞桐さんの言葉に、伊丹さんがそう重ねた。

「…は!?… みんな分かつてるの!? そんなことをしたら……」

「ええ、私がクロになり、捜査と裁判が行われますよ」

「それが分かつてるなら、なんで!」

「この音が続くよりマシでしょう!!」

入間君はバン、とテールを叩いた。

「私がクロと分かりきつた出来レースです。しかしモノパンダたちはルール上捜査と裁判の時間を取らねばならない。そのわずかな間に、イチかバチか解けるだけの謎を解いて、黒幕に最終裁判を挑むのです! それができずとも、私をオシオキすれば他の皆さんは生き延びる

ことができます!! また最終裁判を挑めばいい!!」

黒幕……?」

最終裁判……?」

何を言っているんだ、君は……?」

「ウチも詳しくわかんないけど……つていうか入間達が教えてくれないんだけど、その最終裁判をすればここから出られるらしいんだよ! だからもうその可能性に賭けるしかないんだよ!」

亞桐さんがこんなことを……。

狂っている。

みんな、狂っているよ。

そこまでして黒幕に勝って、一体何が嬉しいんだ。

「……やっぱりあちきは賛成できないでありんす! そんな勝ち目のないことをしたつて、ジョーちゃんやよ様が無駄に死ぬだけでありんすよ!! ともちろんもそう思うでありんしょ!」

堪えられなくなった吹屋さんが入間君たちに牙を剥いた。

「そうですね……。でも私には分かっています。小清水さんの身のこなしなどを見れば、入間君じや絶対に小清水さんは殺せないつて。それに、小清水さんもこんなところでクロになるはずはないんです。だから、その考えは絶対に成功しません」

「……だったらあなたが小清水様を殺せばいいじゃないですかっ!!」

入間君は顔を真っ赤にして山村さんに叫んだ。

「私は……私は皆さまのために犠牲を買って出たんですよ!! この命を賭して皆様に希望を託そうとしているのに、あなた達は」

「やめたまえ!」

太く、野太い声が食堂に響き渡る。

夢郷君の声だった。

「勝ち目のない戦いを挑んでもしょうがないだろう? 君達には少し息抜きが必要だね」

夢郷君は人差し指を立てて笑みを浮かべながら言った。

もし彼が本当に黒幕側なら、俺達を挑発しているのだろうか。

つまらないことでコロシアイを起こすな、と……?

「……………」

入間君の拳がわずかに震えていた。

一触即発の空気だ。

「申し訳ありません。頭に血が上ってしまいました。少しアルターエゴをお借りしますね」

入間君は亞桐さんの横に置いてあるアルターエゴ(さつきから何もしゃべらないけど、本当の意味での“スリープモード”)になっているのだろうか？)を拾い上げると、食堂を後にした。

「……………」

後に残ったのは、重苦しい沈黙。

「……………夢郷……………」

沈黙を破ったのは亞桐さんだった。

「ごめん…………。ホント、ごめん…………。ウチ、ちよつとおかしくなつたよ……………」

涙を浮かべて亞桐さんは夢郷君に頭を下げた。

その夢郷君は…………恐らくは…………本物ではないのに…………。

「人間、頭に血が上ると周りが見えなくなるものさ。なに、一時的なものだ」

「ウチ…………ほんとアンタに助けられてばかりだね…。アンタがいなけりゃ、生きていくこともできないよ……………」

なんでそういうことを言ってしまうんだ、君は。

もう、いないんだよ。

夢郷君は、もういないんだよ……………！

「まったく嬉しい限りだな。ははは」

夢郷君はそう言いながら立ち上がると、何を思ったのか俺の方へ歩み寄ってきた。

そして、俺の肩に手をポンと置く。

「…今は8時15分。1時間後の9時15分に、弓道場に来てほしい」俺にしか聞こえない小さな声で彼は囁いた。

「変なことはいない。怪しいと思うなら人を連れてきてもいい。…とても大事な話だ」

「……………」

俺は何も言わなかった。

「では、また後で」

夢郷君はみんなに手を振って食堂を後にした。

「…葛西君、ご飯食べないの?」

少しして、伊丹さんが尋ねてきた。

「…今はいいかな。あとで食べるよ」

そう答えて俺は食堂から出た。

彼の誘いは間違いなく罠だ。

直接殺すわけじゃなくても、何かよからぬ理由があるのは間違いない。

わざわざ行く理由なんてない。

…けれど、行かないや何も事態が進展しないのもまた事実。

場所に弓道場を指定したのも気になる。

彼はいったい何を考えているんだ……?」

あれこれ考えながら俺はシャワーを浴び、顔を洗い、身だしなみを整えた。

約束の時間はあつという間に迫る。

考えている時間はない。

俺が思うに、彼は何らかの交渉を俺に持ち掛けようとしている。

話の引き出し方によつては、俺達を有利にすることもできるかも…?

もしかしたら、この忌々しい音を止めることすらできるかもしれない。

勝たなきや。

もう時間がない。



葛西がいなくなった直後の食堂。

「うくん……」

吹屋が何やら呻いているのを亞桐は聞いた。

「どうしたの？ 喜咲ちゃん……」

「こんな時に言うのもアレでありんすけど……。最近思ってることがあつて……。…なんだかユメちゃん……」

「あちきが覚えているころよりちよつとだけ背が伸びたかなつて」

「……は？」

「なのに声はちよつとだけ高いような……」

「まさか別人とか……」

「何言つてんだよ!! そんなわけないじゃん!!」

吹屋が呟いた瞬間、亞桐は鬼のような形相で叫んだ。

山村と伊丹は一瞬目を合わせる。

「あちきのくだらない推測でありんすよ!!」

そう言つて吹屋は慌てて謝るが、亞桐は何か言いようのない胸騒ぎを覚えた。



9時15分。

俺は呼び出しの通り弓道場に向かった。

そこに、夢郷君はいた。

草が生えた広い射的場の真ん中に立っている。

「やあ」

彼の呼びかけに俺は答えなかった。

「君、僕の正体を突き止めたそうだね」

「やっぱり君は……夢郷君じゃないんだね」

俺はそう言いながら草原の手前の木の足場で足を止めた。

彼に近付きすぎるのは危険だと本能で知覚したからだ。

「なんで俺をここに呼んだの?」

「君に見てもらわなければならぬものがあるからさ」

夢郷君は不敵な笑みを浮かべて言った。

その時だった。

「見つけた……!!!」

背後から女性の声が聞こえた。

俺は思わず背後を振り返る。

亞桐さんだった。

「亞桐さん……? いったい何の用事で」

「夢郷!!」

俺の言葉を遮るように亞桐さんは叫んだ。

「アンタ、夢郷じゃないの?」

「!!!」

俺の全身に衝撃が走った。

気付いてしまったのか、その事実を。

「ねえ、嘘だよな? アンタは本物の夢郷なんだよね? ウチの思い

過ごしなんだよね?」

亞桐さんは目に涙を浮かべ、草原に入って夢郷君の方に歩み寄りながら尋ねた。

「……残念でした」

「……!!!」

夢郷君の口から発せられたのは、聞きなれた懐かしい声。

「ど、もん………??」

亞桐さんはガクリと膝をつく。

「そう、オイラは『超高校級の建築士』、土門隆信だ。久しぶりだな、

亞桐

アルターエゴの計測は正しかった。

本当に……。

本当に、彼は土門君だったのか……!!

「な、な、なんで……??」

亞桐さんは四つん這いの姿勢で土門君の方を向き、声を張る。

「夢郷は?!?!? 夢郷はどこにいるの?!?!? 教えてよ!!! 夢郷はどこ?!?!?」

「……だよ」

土門君はポケットからビニール袋を取り出した。

そこには、赤黒く変色した人の指が……。

「……!!!」

俺と亞桐さんに衝撃が走る。

「う、ウソだ……ウソだウソだウソだウソだウソだあああああああ

あああああつ!!!」

亞桐さんの絶叫が弓道場に響き渡る。

彼が死んだのも……本当だったのか……。

「もう一ついいことを教えてやるよ」

土門君は冷静な表情のまま静かに言った。

「待って、もうやめてくれ、土門君!! これ以上亞桐さんを苦しめない

でくれ!!」

俺は精一杯の声で叫んだ。

だが、土門君は俺に一瞥もくれず言葉を続けた。

「オイラの正体と夢郷の死……。それに気付いたのはお前と吹屋が最後

だ」

「……!!」

「みんなとつくの昔に知ってた。お前たちだけが知らなかった」

入間君たちも……彼の正体を知っていたのか……!?

じゃあなぜ俺に何も……。

いや、今はそんなことはどうでもいい。

「……………」

亞桐さんはとめどなく涙を流し、死んだ魚のような虚ろな目をしたまま、ゆらりと立ち上がった。

「みんな……騙してたんだ……」

「……!!?」

その言葉が何を意味しているのか、一瞬俺には理解できなかった。「みんなみんな……ウチを騙してたんだな。ウチにだけ黙っていたんだ……」

そう呟く彼女の表情は、とてつもなく純粋な“絶望”だった。

「よくも……。よくもよくも、ウチを騙したなああああああ!!!」
汗と涙を振りまいて彼女は絶叫した。

「…亞桐さん!! 誤解しないでくれ!! 黙っていたのは申し訳なかった…。けど、俺は、君のためを思って黙っていたんだ!!」

正直にそう言うしかなかった。

言えなかったんだ。

そんなことを、夢郷君に想いを寄せる君に言えるわけがなかったんだ。

きつと、他のみんなもそう思っていたに違いない。

だが、彼女に俺の“言い訳”は一切届いていなかった。

亞桐さんは数歩後ろに下がり、弓道場に置いてある矢の一本を抜き取った。

「……!!」

まさか……彼女は……!!

「殺してやる」

彼女は。

“超高校級のダンサー”、亞桐莉緒さんは。

「一人残らず、みんな殺してやるっ!!!」

“絶望”そのものとなっていた。

亞桐さんは取り出した矢を構えると、正面に立つ土門君めがけてまっすぐに走り出した。

同時に、亞桐さんを止めようと俺も走り出した。

しかし、亞桐さんの方がはるかに土門君に近いところにいた。止めようとしても間に合わない。

土門君は逃げようとも抵抗しようともしなかった。

ズン、と矢が彼の腹に突き刺さる。

「!!」

俺は体をこわばらせる。

亞桐さんもまた、人を刺したショックで全身を硬直させた。

「アンタなんか……アンタなんか地獄に落ちちまえ!!」

しかし、そんな自分を奮い立たせるように、亞桐さんは叫ぶ。

「オイラを殺して、どうする?」

土門君は口から血を流しながら尋ねた。

「みんな殺してウチも死んでやる!! 夢郷がない世界に生きてる意味なんて」

「？」

その瞬間、全ての時が止まった。

俺も亞桐さんも、何が起きたか理解できなかった。

一瞬ののち、俺は状況を理解した。

亞桐さんの喉に、矢が突き刺さっている。

「ふひゅっ」

喉から空気が漏れる音がした。

亞桐さんは目を大きく開きながら、自分の喉に刺さった矢に手を触れた。

「ふひひゅっ」

出そうとした悲鳴は喉から漏れる空気に置き換わり、彼女は悶絶して地面に転がった。

ドッ。

矢が彼女の背中に突き刺さる。

「!!!」

亞桐さんに声をあげる自由はなかった。

全ての思考が抜け落ちる。

論理を超えた本能だけが、俺の身体に命令を下す。

「やめろおおおおおおあああああ!!!」

俺はそう叫びながら、矢が撃ち込まれた元の方へ全力疾走した。

眼球が目まぐるしく動く。

どこだ。

“敵”はどこだ。

いた。

射撃場の足場に立つ影。

弓道着を着用し、顔を黒い頭巾で隠した人物。
黒い手袋、黒い足袋で全身を黒で覆った“誰か”。
その誰かが、こちらに向けて弓を構えていた。

バシユツ、と矢を放たれる。

その一発は、絶叫しながら叫ぶ俺の肩を掠めた。

肩の肉がそぎ落とされる。

想像を絶する苦痛だ。

しかし、足を止めたら俺は人間失格だ。

この時の俺は、俺の肩を掠めた矢がそのまま亞桐さんの脇腹に突き刺さったことには気付いていなかった。

“敵”が次の一発を撃とうとした瞬間、俺はその敵に到達した。

訳も分からぬまま俺は敵に体当たりした。

敵とともに俺は床に倒れ込む。

「うわあああああつ!!」

絶叫しながら俺は敵から弓を奪おうとした。

この取っ組み合いは、この前の前木君との喧嘩とはわけが違う。

俺の行動に全てがかかっている。

だが、皮肉にも勝負はこの前の喧嘩と同じような経過をたどった。

体重の軽い俺は弓道場の壁へと投げ飛ばされたのだ。

「ギョあつ!!」

ゴン、と頭に鈍い音が響く。

意識が半分ない。

数秒後、ヒユツと矢を撃つ音が聞こえた。

夢の中にいるような朦朧とした意識のまま、それでも俺は立ち上がって敵にもう一度つかみかかった。

腕を掴んで弓を奪い取ろうとする。

ビユツ。

取っ組み合いながら敵はまた矢を撃った。

そして腕に取りついた俺ごと、腕を壁に叩きつけた。

背中に激痛が走る。

全身に力が抜けて床に倒れ伏した隙に、敵は素早く二発の矢を撃つた。

土門君は何をしているのだろうか？

彼は何もしていないのだろうか。

やはり、彼は黒幕側なんだな。

じゃあ、この敵も土門君の仲間……？

敵は何発矢を撃つたのだろう。

最後に俺の腹に思いきり拳を打ち当てると、さっと身を翻して弓道場から逃げ出した。

「がっ……!! がはっ……!!」

俺は胃が潰れる感覚を覚え、あまりの苦痛に動けなくなっていた。

だが、僅かな達成感も感じていた。

「亞桐さん……!! 俺、あいつに勝ったよ!! あいつは逃げた! 亞桐さんが助かって良かった!!」

俺はボロボロの身体を必死に起こしながら亞桐さんの方を向いた。

「……………??」

そこにいたのは、腹に矢が突き刺さり口から血を流しているが、特に気にする様子もなく足元を見下ろす土門君。

そして、全身にハリネズミのように矢が刺さり、血まみれの死体に変貌した亞桐さんだった。



葛西が“敵”と争っている間、亞桐は地獄のような痛みを全身に感

じていた。

涙が血に混じって頬を伝わり落ちる。

「……………!!!」

悲鳴が出ない。

喉笛から空気と血が漏れるばかりである。

痛い。

痛い。

痛い。

「……………」

そんな亞桐を、土門は黙って見下ろしていた。

笑うことなく、静かな表情で。

「……………!!!」

亞桐はぐしゃぐしゃになった顔を土門に向けながら、必死にその足首を掴む。

彼女は何を叫ぼうとしていたのか。

『助けて』なのか。

『許さない』なのか。

『どうして』なのか。

知る術もない。

ただ一つ分かるのは、愛するものを失い、信じていた仲間ですら裏切られたと思ひ込み、生きる所以を全て滅茶苦茶に破壊されたこの少女が……………。

深い深い絶望の果てに、死んでいったということだけである。

「これで……………良かったんだよな」

目の前の命が尽き果てた後、誰に促されたわけでもなく土門は呟いた。

Chapter 4 非日常編① 捜査編

「は、へ？」

素っ頓狂な声が出た。

俺の頭の中に繰り返し広げられていた映像と、眼前に広がるそれとがあまりにも乖離していたのだ。

俺は命がけて敵と戦った。

結果、ボロボロになりながらも敵を撃退したはずだ。

敵は一目散に逃げていったはずだ。

なのになぜ、亞桐さんは動かなくなっているんだ？

「……………」

時間が動かない。

『死体が発見されました!! 一定の捜査時間ののち、学級裁判を行います!』

何かが聞こえる。

「ユキマル!!」

全ての思考が動き出したのは、吹屋さんがそう叫んだ時だった。

「ユキマル!! ギリポンがつ…!! ギリポンが……死んでる!!!」

吹屋さんは涙を流しながら叫んだ。

「……………なんで…?」

最初に俺の口から出た言葉はそれだった。

俺は命がけて戦って、亞桐さんを助けたんじゃないのか？

違う。

彼女は助からなかった。



亞桐莉緒さん。

超高校級のダンサー。

快活で、喜怒哀樂が激しく、いつでも裏表ない感情を俺達に振りまいていた少女。

おかしい時は誰よりも笑い、腹立たしい時は誰よりも怒り、悲しい時は誰よりも泣いていた。

仲間想いで、人並みに恋にも憧れていた普通の女子高生。

そんな彼女は、もういない。

ここにいるのは――

死体。

ここにあるのは、死体だ。

“超高校級のダンサー”、亞桐莉緒さん”だったもの”。

「ギリポンがつ……ギリポンがあああー……つ!!!」

吹屋さんは涙をまき散らしながら死体に駆け寄った。

「どりゃー!!」

それと同時に割れた天井から落ちてきたのはモノパンダだった。

「やつほー! もう一人のオイラ、元気?」

「元気ではねえな。下手すりゃ死ぬぞ」

朗らかに語り掛けるモノパンダに、同じく陽気に答える土門君。

しかし彼の腹には亞桐さんが生前突き刺した矢が立ったままだ。

“もう一人のオイラ”という呼び方から、モノパンダが土門君の人格を移植したアルタエーゴなのは間違いないようだ。

ただど今はそんなことをゆっくり考察してる場合じゃない。

事件は既に起きてしまった。

止められなかったんだ。

「……!! っここでしたか!!」

次にこの場に現れたのは入間君だった。

「……………つっ!!!」

倒れ伏す亞桐さん、その目の前に四つん這いになって泣き明かす吹屋さん、血を流して立ち尽くす土門君、そして満身創痍の俺。

理解が追いつかなかっただろうが、それでも彼は一瞬目を閉じ、そ

して……。

「皆様を、呼んで参ります……!!」

重く言葉を発し、踵を返した。



「おい」

みんなが弓道場に集められる中で、一番動揺していたのは前木君だった。

「なんで、なんで、こんな??」

彼は頭を抱えて叫んだ。

「なんでこんなことになってるんだよーッ!!!!」

「莉緒………。莉緒まで……莉緒まで私を置いていくの………??」

伊丹さんは叫ぶ気力もなく、膝について虚ろ気にそう呟くばかりだった。

みんな絶望することにすら疲れている。

俺達を狂気に駆り立てた忌まわしい音は、いつしか止んでいた。

俺達がコロシアイを起こしたためだろう。

だけど、それを喜ぶ人なんて一人もいなかった。

「うああああん!!! うああああん!!!」

吹屋さんの慟哭が弓道場に響き渡る。

子供のように泣きじゃくる彼女に言葉をかけてやれる者はいなかった。

「さて、と」

場を取り仕切るように土門君が手を叩いた。

「みんながオイラの正体に気付いちまったから、茶番はもうオシマイにするぜ。これからはこの格好だけど土門隆信として振舞わせてもらおう」

「貴様が」

入間君は凄まじい形相で土門君を睨みつけた。

「貴様が、殺したのか」

凡そ普段の彼からは想像もつかない表情と口調で土門君に問いかける。

「そいつは裁判で話し合うことだろ」

口元から流れる血を拭いながら土門君は答えた。

「一応オイラも生徒として参加してる名目上、捜査の妨害はしないし、聞かれた質問には素直に答えるぜ。さあみんな、お通夜ムードのところ悪いけど、捜査の時間だぞ、オメーラ！」

「捜査………」

そうだ。

運命の歯車は再び回り始めてしまっている。

捜査、そして裁判。

それを乗り越えなければ、俺達に明日はない。

「葛西君」

声をかけてきたのは、弓道場に来てからずっと黙っていた山村さんだった。

「今ここで起きたこと……お話を伺いしてよろしいですか？」

「………」

山村さんはもう捜査に向けて気持ちを切り替えている。

だけど俺はまだ、放心状態から抜け出せずにいた。

「お気持ちはこちらから。私も自分が憎くてたまらないんです……。自分がここにいれば、彼女がここで死ぬことはなかったんじゃないかって……。結局、また私はロシアイを止めることができなかつた愚かで弱い女なんだなって……」

「山村さん……」

彼女は何度も無念を経験している。

この場の誰をも凌駕する圧倒的な力を持っていながら、それを生かしてロシアイを止めることができなかつたからだ。

でもそれは、力がない俺達にだって伴いうる責任なんだ。

決して、「力がないから守れなくてもしょうがない」なんて言い訳はしちやいけないんだ。

だから、彼女だけが傷つくのは間違っている。

俺に力があれば……。

俺があの人を止められれば、こんなことにはならなかったのに!!!
気付くと俺は絶叫していた。

自分を許せなかった。

自分の無力を。

そして、いつの間にか俺は山村さんの腕の中にいた。

「？」

山村さんは涙を流しながら俺を抱擁していた。

「悔しいですよね……悔しくて悔しくてたまらないですよね……」

そうか……。

第一の事件も、第二の事件も、第三の事件も、そして今回も。

ずっとずっと、君はこんな感情を抱き続けていたんだ。

ようやく君の苦しみが分かったよ、山村さん……。

「だからこそ私は……私達は、ここで最善を尽くさなければならぬんです」

山村さんは俺から体を離すと、両手を俺の肩に置いて語り掛けてきた。

「守れなかった亞桐さんのために、今まで助けられなかった全ての犠牲者のために、そして今生きている我々のために」

山村さんの言葉は全部が重かった。

何度も何度もこの感情に苛まれたからこそ、彼女はこの感情を乗り越える術を身につけた。

そして今、同じ地獄に降り立った俺に救いの手を差し伸べた。

これが“成長”なんだ。

「ありがとう……山村さん」

俺が涙ながらに礼を言っていると、山村さんもまた涙を流しながら小さく頷いた。

《捜査開始》

気持ちを落ち着かせさせた俺は、この場で起きた全てを山村さんに話し

た。

まだ憔悴した様子の伊丹さんと、どこことなく怒気を孕んだ入間君も俺の話を聞いていた。

前木君は何も言わず部屋を後にしたし、吹屋さんは魂の抜けた顔で亞桐さんの横に膝をついている。

「ふうん、死んだのはこの女か…」

いつの間にか現れた小清水さんが吐き捨てているように言った。

亞桐さんに対して何の未練もない彼女の様子に面食らいながらも、俺は三人に事の顛末を話した。

「……顔は？」

俺が話した後、最初に口を開いたのは入間君だった。

「顔は見えていないのですか？」

「……」

やっぱり、それを聞くよね。

ウソは付けないから、ありのままに話した。

「結論から言うと、顔は見えない。犯人は黒い頭巾を被ってて口元も黒い布で覆ってた。髪ははみ出してなかった…と思う。手足にも黒の足袋や手袋を着けてて…。とにかく一ミリも皮膚が見える場所がなかったんだ。せめて布を剥いで顔を見る余裕があればよかったんだけど……」

入間君と小清水さんは俺の話を聞きながら自前の手帳にメモをしていった。

「体つきはどうでしたか？」

「体つき……特に印象はないなあ……。低いような高いような気もするけど、少なくとも俺とは大きく体格は離れていなかったと思うよ」「なるほど……」

入間君はスラスラと俺の言葉をメモ書きしていく。

「で、犯人はあなたと乱闘した後、突き飛ばして弓道場から走り去っていったと……」

入間君の言葉に俺は頷く。

「はっはっは、いい調子だなあ！」

土門君が高らかな笑い声を上げながら弓道場の入口の方に歩いていった。

「ようやく捜査にも慣れてきてくれたみたいで嬉しいぜ。そうやってすぐにメモ帳を開ける時点で、オメーラの成長が見えるぜ」

俺達の感情を逆撫でするような彼の言動に、俺は怒りで拳を握りしめた。

「ま、オイラも無視できないくらいに傷を負っちゃったからな。しばらく保健室で大人しくしてるぜ。せいぜい捜査頑張れよ」

「なあるほど。ここであなただが刺されるのも、脚本”のうちだったから、モノポーションなんてものを用意しておいたのね」

小清水さんが不気味な笑みを浮かべながら言った。

“脚本”……??

土門君の動きが少し止まる。

「さあて、どうだかな」

それだけ言うと再び歩き出し、弓道場の外へ消えた。

【獲得コトダマ：犯人の外見

犯人は弓道着を着て黒い頭巾を被り、顔にも黒い布を巻いていて顔は見えなかった。体格は大きくも小さくもない。

弓道着の下には黒のアンダーシャツと手袋を着けており、肌の露出は一切なかった。

【獲得コトダマ：犯人の行動

犯人は突然現場に現れ、葛西と乱闘の末、弓を撃つとすぐさま弓道場から逃げ出した。

「じゃあ、次は……」

三人（+小清水さん）への報告が終わった俺は、後ろを見る。

そこには、見るも無残な亞桐さんの遺体があった。

目を背けちゃダメだ。

謎を解かなきゃ。

この死体を調べなきゃ。

「伊丹さん……………」

俺は虚無に苛まれている伊丹さんに声をかけた。

今この場で検死を行えるのは、医学の知識を持つ彼女だけだ。

親友を失ったばかりで心が痛いだろうが、それでも彼女に託すしかない。

「ええ」

小さく答えて伊丹さんは立ち上がった。

堪えがたいほどの精神的苦痛に直面しながらも、彼女は自らの意思で立ち上がり、歩いた。

「痛かったよね、莉緒」

血に染まった亞桐さんの手を取ると、伊丹さんは微かな声で呼びかけた。

「ごめんね。もう少しだけ我慢してね」

祈るように両手を合わせて拝むと、伊丹さんはうつぶせに倒れている亞桐さんの遺体を仰向けにひっくり返した。

ゴロン、と体が転がり、力の抜けた手足が柔軟に曲がりながら地面に投げ出された。

「うつ……………」

俺や入間君が呻き声を上げる中、伊丹さんは何も言わず亞桐さんの脛を優しく閉ざした。

「死因は見ての通り全身を矢に撃たれたことによる失血死、あるいはショック死…。死亡時刻はたったさっきね……………」

「その程度、これを見れば一目瞭然でしょう?」

小清水さんが電子生徒手帳を見せながらそう横槍を入れる。

その画面には、見慣れた文字が並んでいた。

ザ・モノモノファイル⑤。

そこには、今伊丹さんが言ったことがそのままそっくり書かれていた。

【獲得コトダマ：ザ・モノモノファイル⑤】

被害者は亞桐莉緒。死因は弓で喉を撃ちぬかれたことによる失血死。死亡推定時刻は9：35。

「これは私見だけどね、今回の事件は検死に意味なんてないと思うの。だって死亡時の状況なんて彼らが全て見ているわけだし、そこに謎なんて何も無いでしょう?」

小清水さんの言葉はここにいる全員に突き刺さる。

彼女には人間への情がない。

ゆえにこの場にいる誰よりも感情に左右されず冷静に状況を分析できている。

「それに、さっきの話から分かることがもう一つ。犯人は、少なくとも葛西幸彦・土門隆信の二人ではない。さらに言うと、最低でもその二人の本体ではない」

人差し指を立てて意味深なことを次々に言う小清水さん。

彼女の狙いはなんなのだろうか。

「おかしな話よね。犯人の候補が絞られてしまいう上に相当のリスクも付きまとうこの殺し方をわざわざ選ぶなんて。夜の間にはナイフでも持ち出してこっそり刺殺した方がよっぽど建設的だと思わない? その誰かさんのようにね」

鬼のような形相で人間君を睨みながら彼女は言った。

モノポーションでほぼ全快したとはいえ、昨晚刺された傷はまだ痛むようだ。

「本当ですね。皮肉抜きで悔しくてたまりませんよ。昨晚あなたを仕留めていれば、亞桐様がこんな目に遭わずに済んだのに……」

「そうなってあなたが凄まじいオシオキをされた方が見ものだったわね」

「やめてよ、こんな時に!」

一触即発の空気に、俺は思わず気を逆立てて叫んでいた。

いつもならこういう喧嘩を止めるのは亞桐さんの役目だった。

でもここに亞桐さんはいない。

そうなってしまったのが余計悔しくて、叫ばずにはいられなかった。

「偽善者ぶっている暇があるなら、床に落ちているそれでも調べたらどう?」

「……？」

小清水さんの辛らつな言葉は、しかし俺に新しい情報を見出させた。

弓道場の射撃場の床の上、ちょうど俺と犯人が戦った場所あたりに。

弓と矢筒が放り出されていたのだ。

「…犯人のものですか？」

入間君の問いに俺は「たぶん」と頷いた。

乱闘に集中しすぎてすっかり失念していたが、犯人がここから逃げ際に放り投げたと考えて間違いないだろう。

【獲得コトダマ：矢筒と弓】

弓道場の床に落ちていた。犯人が使用后、投げ捨てたものと思われる。

「でもその弓、元々ここにあったものですよね？」

山村さんが問う。

俺はその問いにも「たぶん」としか答えられなかったが、すると山村さんはすぐに「でしたら確認して参ります！」と控室に入っていた。

一分もしないうちに彼女は帰ってきた。

「やはり矢が10本と矢筒が1本なくなっていました！あと、女性側の控室から弓道着も1着なくなっておりまして！」

「女性側……？」

俺は控室の戸を確認する。

特に施錠はされていない。

女性側の服が無くなっているということに意味はあるのか、それとも……。

【獲得コトダマ：消えた弓道具】

弓道場の控え室から弓道着が1着、矢が10本、矢筒が1本なくなっていた。道着は女性側の控え室でなくなっていたが、控え室に施錠のシステムはない。

「……ここで調べられることはあらかた調べたかな」

そう思った俺は、未だ現実を直視できず魂が抜けている吹屋さんと、その横で息絶えている亞桐さんを一瞥して弓道場を後にした。

さて、どこを調べようか……。

「……って、アルターエゴは？」

そう言えば、すっかり忘れていた。

こういう時こそ頼りにしなきゃいけない子なのに。

「入間君、確か君、アルターエゴと一緒にいたよね？」

音楽室を調査していた入間君を見つけ出した俺は尋ねてみた。

「ええ。朝食の後、私は休憩室でアルターエゴとオセロのゲームをしていました。終わった時刻が8：40くらいだったのははっきり覚えています。その後他愛ない雑談をして……。アルターエゴが一人になりたいと言ったので、9時過ぎくらいに休憩室を出ました。アルターエゴはそのまま部屋に残ったと思いますが……」

アルターエゴの所在のついでに、朝食後の入間君の行動も聞くことができた。

これは意外な収穫かもしれない。

情報を得た俺はエレベーターに乗って真つすぐ休憩室へ向かった。

【獲得コトダマ：入間の証言】

入間は休憩室におり、ノートパソコンでアルターエゴとオセロのゲームで遊んでいた。

ゲームは8：40頃に終了したが、9：00過ぎに入間が部屋を出るまで二人は会話していた。

「アルターエゴ……」

休憩室の扉を開くと、そこには開いたままのノートパソコンが置いてあった。

「大変なことが起こっちゃったんだよ……。亞桐さんが……」

俺は中央のソファァーに近付きながら早口でさっきの悲劇を説明する。

しかしノートパソコンからは何の返事も無い。

「……？」

不審に思つて俺はスリープ状態のノートパソコンを起動してみた。画面は普通のパソコンのアンロック画面だった。

「あれ、アルターエゴはどこ行つたんだ……？」

画面上には一つのアプリしか表示されておらず、アルターエゴの項目もない。

俺は思わずその一つだけのアプリを開いていた。

「音声読み上げソフト……？」

……だった。

しかし履歴の項には何の音声も入っていない。

特に意味があるようには思えないな……。

【獲得コトダマ：音声読み上げアプリ

入間とアルターエゴが遊んでいたノートパソコンに入っていた。履歴は存在せず、削除されたか元から存在しないかのいずれか。

それ以上の収穫は無いようなので、俺は休憩室を出た。

それにしても……。

「アルターエゴ！ どこ行つたんだ！」

俺は廊下中に聞こえる大声で呼びかけてみた。

いつものノートパソコンにいないってなると……。

「はい、ご主人タマー！」

「わっ!?!?」

半ば予想はしてたけど、それでも背後からいきなり声をかけられると驚くのはしょうがないよね。

そこには、鉄の骨格模型のような無骨なアンドロイド。

モノドロイドが立っていた。

中身はもちろんアルターエゴ。

「死体発見アナウンスを聞いて、いてもたつてもいられなくなりまして……。ノートパソコンから電波を飛ばしてモノドロイドにインストールされてたんですなり」

「あ……。それで合流が遅くなつたわけか」

俺の記憶が正しければ、アルターエゴがモノドロイドにインストールされて動けるようになるには最低でも30分はかかったはず。

でも、モノドロイドはアルターエゴを入れずとも、緩慢ながら単体でも動くことができたよな。

背中のキーボードからプログラミングを施すことによつて、ね…。

【獲得コトダマ：モノドロイド

一階の倉庫に置いてある簡易型アンドロイド。簡単な命令を入力することで動作する。

見た目は鉄の人体模型のようで明らかに人間と外見が異なり、プログラミングされたモノドロイドは動きもぎこちない。

「アルターエゴ。モノドロイドについて聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「はい。何なりとお申し付けくださいなり」

「モノドロイドのプログラミングって、履歴が残ったりするの？」

「それは…私には分かりませんが、背中のキーボードに何か書いておりませんか？」

そう言われて俺は背中のキーボードを見てみた。

『アルターエゴ起動中 命令不可』と表示されている。

だがその上に、『命令履歴』と書かれた表示がある。

その部分にタッチすると、何件か履歴が表示されていた。

『2日前 食堂に移動する』

この命令は、モノドロイドの最初の試運転の時に前木君が入力したものだろう。

俺の目をくぎ付けにしたのは、その下にある命令履歴だった。

『今日 9：30に弓矢を10発、的の方角へ撃つ。その後倉庫へ戻る。』

「……………!!」

この命令は……………!?

いや、今は情報を集めるのが先だ、邪推はやめておこう。

【獲得コトダマ：モノドロイドの命令履歴

『9：30に弓矢を10発、的の方角へ撃つ。その後倉庫へ戻る。』

「どうですか？ 何かわかりましたか？」

アルターエゴの問いに「まあ、ね……」と俺はあやふやな答えを返す。まさか彼女が犯人とは思わないけど、かといってこの状況であれこれ情報を喋るのも憚られる。

ところでこの履歴、時間が「今日」と表示されている。

具体的な時間が分かると嬉しいんだけど……。

「そういえば、モノドロイドの命令履歴について一つ捕捉がありますなり」

俺の疑問を見透かしたかのようにアルターエゴが告げた。

「モノドロイドの命令は時間を指定して行わせることができますが、一時間以上先の動作を指定することはできませんなり」

「え、そうなの？」

それを聞いた俺は一つ試してみたくなった。

アルターエゴを連れて訪れたのは倉庫。

ここにはモノクマたちが用意した別のモノドロイドたちが埃をかぶって眠っていた。

現状で使用されている機体は今アルターエゴが使っている一機だけのようだ。

それともかくとして、俺は倉庫に突っ立っているモノドロイドの一つに命令を打ち込んだ。

『12:00に食堂へ移動する』

『命令確認中……』との文字が浮かび上がった後、ビー、と音が鳴る。

『一時間を超えた時間指定はできません』と赤い文字が画面に浮かび上がる。

「本当にできないんだ……」

「これがどのように役立つかわかりませんが……。モノドロイドに関する知識は持つておいて損はないと思いますなり」

「そうだね。いろいろありがとう、アルターエゴ」

俺は金属質の冷たいアルターエゴの頭を撫でた。

【獲得コトダマ：モノドロイドの命令機能】

モノドロイドに下す命令は短文形式で、一時間以上先の動作は指定

できない。

「ご主人タマ……」

「……?」

「私は、ご主人タマと離れたくないですなり」

アルターエゴは無骨な姿のまま、ぎゅつと俺の胸にしがみついていた。

「今はこんな姿だけ……必ず、人間の姿を掴んで見せますなり。そして……。津川梁の代わりとなってご主人タマを笑顔にさせてあげたいですなり」

「ありがとう。嬉しいよ……」

その言葉は間違いなく本心からだった。

アルターエゴも怖いんだ。

裁判で俺達が負けてしまうことが。

だからこそ勝たなくちゃいけない。

犯人にも、黒幕にも勝って、アルターエゴやみんなを安心させてあげなきゃ。

そして、この子が人間の身体を手に入れたら、その時は……。



アルターエゴと別れて捜査を続行する俺は、一階をくまなく探索した。

食堂や教室、トラッシュルームに至るまで細かく調査したが、めぼしいものは見つからない。

一階の捜査を終えて他の階を当たろうとした時だった。

「……吹屋さん!?!」

女子トイレから出てきた吹屋さんに遭遇したのだ!

しかし彼女はげっそりとした様子で明らかに元気がなく、さっきまでの麗らかな吹屋さんとは大違いだ。

「どうしたの……? 大丈夫……?」

「……どうもこうも、ただのトイレでありんすよ。朝食の後に行くの忘

れてたから……」

ぶつきらぼうにそう言っていなくなろうとする彼女の腕を、気付くと俺は掴んでいた。

「ごめん。辛い気持ちは分かるけど、事件の直前に何をしていたかだけ、聞きたいんだ……」

「……今までも、こういう風に捜査してきたんでありんすか……？」

吹屋さんは目に涙を浮かべながら問いかける。

そうだ。

俺達は慣れがあるかもしれないけど、彼女にとってはこれが初めて直面する殺人事件。

冷静でいられるわけがないんだ。

「ごめんなさい」

「……」

不意に吹屋さんは頭を下げてきた。

「コロシアイっていう状況の重みをあちきは侮っていたでありんす。"どうせコロシアイなんて起きない"って、タカをくくってたでありんす。だからこそ……あちきが笑ってないとダメでありんすね！」

「吹屋さん……」

「ギリポンがいなくなっちゃった分……あちきがギリポンの代わりにならないと！ うん！ あちき頑張るでありんす！」

そう言って吹屋さんはガッツポーズを決める。

彼女は俺達よりもよほど精神の回復と成長が早いようだ。

俺達が三回コロシアイを経て辿り着いたステージに、もう彼女は辿り着いているんだ。

「ありがとう……。辛くなったらいつでも俺が相談に乗るからね」

俺が答えると、「はいよっ！」と満面の笑みで彼女は答えた。

「それで、殺害直前の行動なんだけど……」

「ああ、所謂アリバイってやつでありんすね！」

俺が問うと、吹屋さんはいつも通りのきはきはきと口調で答え始める。

「あちきとゆきみんは朝食の後からずっと食堂にいたでありんすよ。」

最初はとちんとギリポンもいたでありんすけど、確か9時前くらいにギリポンが食堂を出て、その少し後にとちんも出て行って、最後にあちきが食堂を出たって感じておりんすね」

「…でも、さつき君は誰よりも早く弓道場に来てたよね。どうして？」

「それは……ギリポンが心配だったからでありんす…」

「……？」 亞桐さんが弓道場にいること、知ってたの？」

俺は怪訝そうな表情をしながらも尋ねた。

「ギリポンいわく、『夢郷が弓道場にいるから』って…。その理由までは聞いてないけど、あちきが変なこと言っちゃったせいでギリポンがユメちゃんのところへ行ったみたいだから……」

「変なこと……？」

「ユメちゃんは本物じゃないんじゃないか」 って……」

「……!!!」

そうか……吹屋さんも感じてはいたのか…。

だから亞桐さんは……。

「やつぱり……やつぱりあんなこと言うんじゃないか……あちきが……」

再び涙を流す吹屋さんを、俺はただただ慰めることしかできなかった。

【獲得コトダマ：吹屋の証言】

自分と亞桐、伊丹、山村は8時以降も食堂にいた。9時前くらいに亞桐が食堂を出て、その少し後に山村も出た。

そして事件発生とほぼ同時に吹屋が弓道場に向かった。

「あ、それと…」

吹屋さんを慰め、情報収集を終えて移動しようとする俺に、彼女はもう一つ付け加えた。

「さつき、やよ様がユキマルのこと探してたでありんすよ」

「…小清水さんが？」

「怪しい気はするけど……まさかこんな場面で危害を加えるとは思えないし、行ってみる価値はあると思うでありんす」

彼女が俺を探しているなんて、嫌な予感しかないけど…。

頭脳の上では現状のメンツの中で一番とっていいほど回転が早いからね。

侮れない情報網を持っていることは疑いようがない。

「ありがとう。行ってみるよ」

「…気をつけて、ユキマル……」

吹屋さんが不安そうに見守る中、俺は背を向けて歩き去った。



「あら、ちょうど良かった」

俺はしばらく小清水さんを探していたが、彼女は大ホール階の廊下に立っていた。

「探したのよ、おチビさん」

「……何の用？」

俺はいつでも逃げられるよう身構えながら尋ねる。

「何って、捜査に決まってるでしょう？」

小清水さんはため息とともに言った。

「聞かないの？ 私に事件の時に何をしていたかを」

「あつ……」

先手を取られる形になってしまい、俺は言葉に詰まった。

「といっても、私は食事含め昨日からずっと単独行動してたからアリバイなんて存在しないのだけれどね」

小清水さんは俺に向かって廊下を歩みながら言った。

彼女が俺の横を通り過ぎると、仄かに花のような香りがした。

「当たり前よね。私を刺し殺してくるような連中と一緒に行動できるわけないでしょう？」

「……………」

何も言えない。

彼女はまだ、入間君に刺されたことを根に持っているのか……。

いや、殺されかけたんだから、根に持たない方がおかしいよね……。

【獲得コトダマ：小清水の証言】

小清水は朝方に一人で朝食を済ませ、その後もずっと単独で行動していたという。

「それを言いたかっただけなの……？」

「違うわよ、もちろん」

小清水さんは再び怪しげな笑みを浮かべた。

「あなたにだけ、私の“持ち駒”をちよつとだけ分けてあげようかなって」

「……？」

また彼女は意味深な言い方を……。

何を考えているか全くわからない分、その言葉の意味も類推しがた
い。

「何故、俺に？」

口を突いて出た言葉はそれだった。

何を知っているのかは分からないが、入間君や伊丹さんの方が彼女の知識を生かせそうなのに……。

「何故って、あなた脚本家でしょう？」

「……？」

「脚本を築けるのはあなたしかいない。だからあなたに言うのよ。よく聞いておきなさい」

そういう意味合いでそんなことを言うんだろう……。

だけどそんな考えは、続けて発せられた彼女の言葉によって吹き飛ばされてしまった。

「前木常夏の【超高校級の幸運】。それが黒幕を倒す鍵になる」

「………どういふこと………？」

「彼の幸運は……黒幕と対峙するとき幸運として発動する。吹屋喜咲を見つけた時のようにね」

「………？」

吹屋さんを見つけた時に……？

そう言えば……！

あの隠し部屋を見つけられた原因って、たまたま前木君が壁に頭をぶつけたことだったような……。

「心当たりがあるでしょう？ 彼の幸運はそういう能力なの」

小清水さんは眼鏡の位置を直しながらそう続けた。

「それが本当だとして、それを何故今、俺に？」

「念のためよ。言っておくけど、この情報がこの事件に関わっている確証はない。けど前回の裁判の件もあるし、またあなたがグロッキーになられても困るのよね。そうなる前に最終裁判を見据えた必要最低限の情報だけは与えておくことにした」

事件には……関係ないのか……？

でも何か引つかかるな……。

【獲得コトダマ：超高校級の幸運

前木常夏の才能は“超高校級の幸運”。黒幕と対峙する際にその能力が発動することがある。

「最期にもう一つ」

エレベーターに乗り込む直前、小清水さんはさらに一つ話を切り出した。

「その部屋に面白いものがあつたわよ」

そう言つて彼女が指さしたのは……。

「トレーニングルーム……？」

「ええ。せいぜい頑張つてね、あなたの才能も私は買つてるんだから」

またも意味深な言葉を残し、エレベーターの扉は閉じた。

結局、俺達は彼女の手のひらで踊らされているだけか……。

小清水さんは、俺達より遥かに先にいるような気がする。

そんな彼女の野望を止めることはできるのだろうか？

俺はトレーニングルームに入った。

リュウ君や亞桐さん、山村さんがストレッチや筋トレをしていたのがかなり昔のように思える。

俺は自分からここを訪れることは多くなかったもんな……。

「で、この部屋に何が……？」

様々なトレーニングマシンの後ろや下をくまなく探すが、特に珍しいものはない。

でも、小清水さんが何の意味もなくあんなことを言うわけがないし

…。

そう思っていた矢先、俺はあるものを見つけた。

「ロッカー……」

トレーニングルームで着替えや荷物を置いておくロッカーだ。

特に鍵はかかかっていないようだ。

失礼かもしれないけど、今は捜査時間だ。

俺は「ごめんなさい」と呟いて一つ一つロッカーを開けていった。

「……………!!!」

ああ、そうか。

これだったのか。

彼女が言っていたのは。

一番端のロッカーに、空手の道着に重ねて置いてあったのは。

クシヤクシヤに丸められた黒い弓道着だった。

【獲得コトダマ：弓道着】

大ホールの横にあるトレーニングルーム、ロッカーの中に弓道着が入っていた。同じロッカーには空手の道着も入っていた。

ロッカーは特に施錠されていない。

捜査時間も残り少なくなってきた。

この時間でできることは……………。

俺はもう一度弓道場に戻った。

今なら、何か新しい情報が見出せるかもしれないと思ったからだ。

「さっきと目つきが変わったわね」

弓道場で俺を待ち受けていた伊丹さんが、俺の顔を見るなりそう言った。

「いろいろ真実に近付いたようね」

「…少し、ね」

仰向けに寝かせられた亞桐さんの横には、血に濡れた矢の束が置い

てあった。

「あれからね、莉緒に刺さった矢をまとめていたの。この通り、矢は10本あった」

亞桐さんの頬を悲し気に撫でながら伊丹さんは言った。

「分かる？ 控室から無くなっている矢も10本。全ての矢が莉緒に命中しているのよ」

全ての矢が……？

あの時、犯人は俺と格闘しながらもその合間に弓を撃っていた。

決して余裕で狙えるような状況ではなかったはずだ。

それでも全部当てたっていうのか……？

「犯人は相当矢の扱いが上手いようね……」

【獲得コトダマ：矢の被弾箇所

10本の矢はほぼ全て正確に亞桐莉緒に命中していた。

葛西幸彦が庇ったにもかかわらず隙間に差し込む形で全弾命中させたため、犯人は相当矢の扱いが上手である。

「みんなの弓の腕前はとうだったっけ……」

「私は……体育で少しやったことがある程度だけど……。他の人は分からないわね……」

そう言えば、数日前に入間君と吹屋さんとで弓道に興じたっけ。

あの時は……俺はからつきしだったけど、入間君はそこそこ……吹屋さんはかなり上手かったな……。

……それだけだけ。

これが何かのヒントになるのかなあ……？

【獲得コトダマ：弓の腕前

弓道の腕前は、葛西が下、入間が中、吹屋は上。他は不明。

「葛西……」

「？」

不意に伊丹さんではない声が俺の耳に届いた。

「前木君？」

目に涙を浮かべ、今にも崩れそうなくらいグシャグシャになった表

情を浮かべて彼は立っていた。

「葛西……………俺は……………」

「前木君……………」

「……………」

彼はとても辛そうにしていた。

「……………ごめん……………何でもない……………」

「前木君……………」

彼は一体何を……………。

「前木君。何か隠しているみたいだけど、この捜査と裁判は私たちの命がかかっているのよ。今すぐには言わないけど、正直に告白する覚悟は決めておいた方がいいと思う」

冷静沈着な伊丹さんの言葉に、前木君は「ああ」と答える。

「大丈夫……………後で絶対言うよ……………今はそれよりも……………」

「それよりも？」

「アリバイ……………聞いて回ってるんだろ？」

そう言えば、前木君のアリバイはまだ聞いてなかったな……………。

「お前も知ってると思うけど……………俺は昨日お前と喧嘩してから……………ずっと個室にいた。朝食も伊丹が持ってきてくれて部屋で食べたんだ。だけど今朝……………8時半くらいかな……………。小清水が部屋に来たんだ」

「……………え？」

「今後のことで相談があるつつつ……………。その中身は……………ちよつと話すと長くなるから今は言わないでおくけど……………かなりの長話だったな……………。そのまま死体発見アナウンスが鳴ったんだ……………」

【獲得コトダマ：前木の証言】

自分は昨日の夜からずっと個室におり、今朝も部屋で食事をとった。ただし8：30頃に小清水が部屋を訪れ、話し合いをしていた。

そして死体発見アナウンスが鳴るまで話し合っていたという。

「……………？」

彼の証言……………明らかに違和感がある。

でも今は過度に詮索しない方がいいのかもしれない。

謎は裁判で明らかにしないと……………。

「分かった……。ありがとう」
とりあえず俺はそう答えた。
やはり前木君は何かを隠しているようだ。

『ピンポンパンポーン』

「!」

鳴ってしまった。

運命を告げる鐘。

『はいどうもー! 久しぶりだねー! 泣く子も黙る荒いグマ、モノクマ先生だよー! たまには僕からもこういうお知らせをやってみようと思ってるね。』

聞こえてきたのは、あの特徴的なだみ声だった。

俺達の敵、モノクマだ。

『青春時代を生きる君たちにとって、時間とは命と同じくらい大事なもののです。だから君達には命をかけて時間を使ってもらってるのさ! きつと命を賭けて素晴らしい情報を手に入れてくれたんだよね! というわけで全員エレベーターに集合してください!!』
「終わっちゃったんだね……」

俺と伊丹さんと前木君。

それぞれの表情が変わっていく。

全員の目に覚悟の炎が渦巻いているように見える。

「私は手を洗ってから行くわ。葛西君たちは先に行ってももらえる?」

「…俺もちよつと水飲んでから行くよ」

「うん…分かった」

二人の言葉を受けて、俺は一人エレベーターに向かった。

「……?」

四階のエレベーター入口に立っていた人影。

夢郷君の恰好をしたままの土門君だった。

もう怪我は治ったんだろうか…。

「よう、謎は解けたか？」

彼は不敵な笑みを浮かべて尋ねてきた。

「……まだ分からない」

それが正直な答えだった。

「ふーん、そうか。じゃあオイラからも一つ情報をくれてやるよ」

「情報？」

「こいつだ」

彼がポケットから出したのは、どことなくレトロなテープレコーダーだった。

「オイラ、オメーのこと弓道場に呼び出したろ？ 実はオイラもその時呼び出し受けてたんだよ」

「……そうなの？」

「ああ。でも言葉だけじゃどうせ信用しねえだろ？ だから予めこいつで録音しておいたのさ。用意良いだろ？」

そう言うのと土門君はテープを再生した。

『土門隆信。9時半に弓道場に来なさい。面白いことが起こるから』

「この声は……小清水さん？」

そう。

この声、口調、それは完全に小清水さんのものだった。

「この声……本当に本物なの……？」

「ああ。いくらオイラでもウソの声を作ったりはしねえよ。もしオイラがクロだったとしても……な。まあ取っとけよ」

そう言っつて押し付けるように土門君はレコーダーを俺に渡した。

【獲得コトダマ：録音テープ】

土門が所持していたテープ。小清水から「9:30ちょうどに弓道場に来るように」と声をかけられる様子が録音されている。



十分後、俺たち全員がエレベーターの中にいた。

コトダマはすべて揃った。

後は撃つだけだ。

「勝つしかありません……私たちの明日のために……」

入間君の瞳からは少しづつ光が消えてゆく。

「ギリポン……見守ってほしいでありんす……」

吹屋さんはおぼろげな顔で天に向かって語り掛ける。

「……………」

前木君は何も言わず下を向いている。

「……………大丈夫」

伊丹さんが言い聞かせている相手は俺達なのか、それとも自分自身なのだろうか…。

「私がしっかりしなくては……」

山村さんの表情は今までのどんな時よりも凜としていて緊張感がある。

「……………厄介ね」

小さくそう呟いた小清水さんは、一体何を思っているのだろう。

「〜♪」

楽しそうに口笛を吹く土門君は、一層不気味だ。

「……………恐れてはいけませんなり」

そして、俺の腕の中にあるノートパソコンから可愛らしい声が聞こえる。

モノパンダの裁量で特別に裁判への参加を認められたアルターエゴ。

ただし「裁判中に敵対行動を取られたら厄介だ」という理由で、モノドロイドではなくノートパソコンの姿での参加となった。

この中にクロがいる。

「亞桐さんを悲惨極まりない手法で射殺したクロが。」

そこには、これまでとはまた違う絶望が潜んでいるんだろう。

それを暴くのが俺の役目。

真実の脚本を築くために。



《モノクマ劇場》

毎章捜査編の後には教頭のツマラナイヒントコーナーがあったんだけど、とうとう念願のボクのコーナーをやることのできたよ！

まあ、今回の事件は今までに比べて簡単だから、ヒントなんて必要ないよね？ うぷぷぷぷぷぷ！！

みんなはさ、何かに失望したことってないですか？

SNSで仲良くしてた人が、突然自分の悪口を言い出したり。

バイト先の面白い後輩が、実は同僚のお金を盗んでたり。

人間に失望する場面ってたくさんあると思うんだよね！

でもさ、先生は人に失望するってとても大事なことだと思うんです

！

いくら優しい人でも、偶像みたいに勝手に聖人にしちゃうのはとても失礼だよね。

皆さんもちょうどよく周りの人に失望して生きてみようね！

Chapter 4 非日常編② 学級裁判前編

降りてゆくエレベーターの中で、俺は肩の傷をさすった。
犯人との格闘で矢が掠めた傷だ。

思いのほか傷が浅く出血もほとんどなかったせいか、俺は捜査の最中この傷のことをすっかり忘れていた。

しかしエレベーターに乗り込む直前で鈍い痛みとともにこの傷を思い出し、昨晚の小清水さんの行動からモノポーションの存在を思い出したんだ。

モノポーションの回復力はすさまじい。

傷口に塗ったものの五分で痛みが消え、ガーゼの下ではもうかさぶたができ始めている。

亞桐さんにも手遅れになる前にこれを塗ってあげられれば、あるいは……。

俺達の後悔、疑心、憤怒、悲哀、あらゆる感情と絶望を乗せてエレベーターは降りる。

深い闇の底、死の裁判が繰り広げられる学級裁判場へと。



もう二度と起こすまいと決意していた学級裁判。

その裁判台の前に、俺達はいた。

新しく加わった遺影は満面の笑みとダブルピースを浮かべる安藤さん。

キリっとした可愛らしい表情を浮かべる亞桐さんのものだった。

そして……すべてを悟ったかのような安らかな表情の夢郷君。

代わりに土門君の遺影は取り払われており、もう使われることはないと思われていたその席には再び土門君がいた。

「よっこらしよつと。ここにっくのも久しぶりだな〜」

のんびりとあくびをしながら土門君は言った。

『やあ、みんな！ 久しぶりだね！ 前回の裁判で見事生き恥を晒す

ことになった小清水さんも元気かな?』

耳障りな声が響く。

モノクマだ。

裁判場の奥に鎮座し、絶望する俺達を高みから俯瞰する真の“敵”。

その不気味な瞳の奥に、どんな思惑が眠っているのかは誰にも分からない。

「……………」

モノクマの言葉に小清水さんは何も答えない。

『うぷぷぷぷー！ 元気なさげだね！ 君の野望、達成できそう?』

「……………さっさと裁判を始めなさい」

しびれを切らした彼女はモノクマにそう吐き捨てた。

「あの……私はどの席にいればいいですなりか……?」

俺の腕の中に抱かれたノートパソコン、その中からアルターエゴが尋ねた。

「あの……あちきの席も無いでありんすけど……」

吹屋さんも恐る恐る声を発する。

彼女も黒幕たちにとってはイレギュラーな存在。

席は用意されていない。

「つて言ってますけど校長センサー、どうします?」

モノパンダが横を向いてモノクマに問う。

『うくん、イレギュラーだからって仲間はずれにするのはよくないよね。よし、アルターエゴは津川さんの席を、吹屋さんは夢郷君の席を代わりに使っちゃいなさい!』

「あいさ〜」と答えたモノパンダは、素早い動きで津川さんと夢郷君の遺影を取り外し、席を開けた。

俺は恐る恐る津川さんの席にノートパソコンを置くと、円状の裁判台の中心にパソコンの画面を向けた。

「ありがとうございますなり……」

「いや……。君が共に戦ってくれるのならとても頼もしいよ。一緒に真実を暴こう」

そう声をかけてノートパソコンを撫でると、俺は自らの席に戻った。

「あの…。なんでユメちゃんの席にしたでありんすか…?」

吹屋さんは夢郷君の席に収まりながらも怪訝そうに問いかける。

アルターエゴはアバターが津川さんだから津川さんの席につくのは納得できる。

しかし吹屋さんは夢郷君の席を使うように指示された。

『ん? 深い意味はないよ。夢郷君は正式な手続きを踏んで死んだわけじゃないしね! せめて席ぐらいは再利用してあげようっていうボクのささやかな心遣いってワケ! うぶぶぶぶぶ!!』

「流石校長センサー! 聖人! じゃなくて聖クマー!」

醜い笑みをこぼす二体のヌイグルミたち。

死者を侮辱するなんてこいつらにはもうなんてこともない行為なんだ…。

こいつらを許すことはできない…けど…。

「ま、肩の力抜いていこうぜ」

重苦しい空気の中、声を発したのは土門君だった。

「ルール上オイラも謎解きはちゃんとやるからよ。みんなでク口を暴き出そうぜ」

「忌々しい人間め、偉そうに…」

小清水さんが舌打ちとともに吐き捨てた。

二人とも、今の俺達にとっては敵だ…。

敵だけど…。

まずはこの事件のク口を、暴かなきゃいけない。

亡くなった亞桐さんのために…。

そして、俺達が明日を生きるために。

【学級裁判・開廷!】

『それでは、分かりきったことだけど論破作品のお約束としてボクからもう一度学級裁判のルールを説明します! 学級裁判では、被害者

を殺害した犯人をみんなで話し合い、投票で決めてもらいます！ 正しいクロを指摘できればクロだけが、指摘できなければクロ以外の全員がオシオキされ、クロは卒業となります！ それじゃあ、真実に辿り着けるよう頑張ってくださいーい！」

モノクマも言ったとおり、学級裁判のルールなんてもうみんなとつくに分かりきっている。

これまで三回はみんなの力もあってなんとかクロに勝利を渡すことなく切り抜けることができた。

だが、勝負はもう四回目。

クロもこちらの思考や謎解きの手法をある程度理解して事件に臨んでいるはずだ。

今回は、勝てるかどうか……。

「今回の事件はかなり異色の展開を辿りましたね……」

そんな重苦しい空気の中、沈黙を破ったのは入間君だった。

「何せ、犯人が葛西さん達の目の前に現れ、直接犯行に及んだわけですから。その分、犯人の候補は最初から何人かに絞られたわけですが……」

「……考えてみれば不思議な手口だわ。何故わざわざあんな方法で殺したんでしょうね……。葛西君や土門君が犯人候補から外れるというだけでも犯人にとっては結構なリスクだし、挙句葛西君と乱闘を繰り広げるなんて……。一歩間違えばその場で顔を見られてもおかしくない状況よ」

伊丹さんがそう続く。

あの時のことがただただ悔やまれる。

俺が一本でも射撃を止められていたら。

あるいは、犯人の顔を覆う布を剥がしていれば。

それですべてが終わっていたのに。

「ユキマル、落ち込んじゃダメでありんすよ！」

「！」

顔をあげると、吹屋さんがこちらに微笑みかけていた。

「ギリポンを助けようと必死に戦ったユキマルのこと、きつとギリポ

ンは天国で誇りに思ってるでありんすよ！ だから胸を張るでありんすよ！ 胸を張って、この裁判を勝つでありんす！」

俺は自分の両頬を叩いた。

吹屋さんの、みんなの思いに応えてあげないとな。

「ご主人タマ」

俺の隣、津川さんの席に置かれたノートパソコンからアルターエゴの声がした。

「私がどんなことをしてでもご主人タマを全力でお助けしますなり。何なりとご命令を」

俺のいる場所からノートパソコンの画面は見えなかったが、彼女がどんな表情をしているかは想像がついた。

「…………ごめんね、いつも…………」

二人の言葉を受けて、俺は自らの拳を固く握りしめた。

「じゃあ議論を始めよう。まずは死体の状況の確認からだ」

俺はみんなの顔をぐるりと見まわしながら告げた。

始まる。

みんなで意見を出し合う議論だ。

この感覚に慣れたくはなかったが、こうなったらやるしかない…………。

【ノンストップ議論開始】

入間ジョーンズ：「被害者は“超高校級のダンサー”、亞桐莉緒様…………」

入間ジョーンズ：「死因は弓を撃たれたことによる失血死…………」

アルターエゴ：「なんとむごいことを…………」

吹屋喜咲：「まあ、死因は明らかでありんすね…………」

伊丹ゆきみ：「犯人は弓の腕に自信があったのかしら…………？」

前木常夏：「適当に撃ってたまたま当たっただけかも…………」

「前木君、それは違うよ」

俺はコトダマを吐き出し、前木君の議論を修正する。

……ああ、この感覚をまた味わうことになるとはね。

【使用コトダマ：矢の被弾箇所】

10本の矢はほぼ全て正確に亞桐莉緒に命中していた。

葛西幸彦が庇ったにもかかわらず隙間に差し込む形で全弾命中させたため、犯人は相当矢の扱いが上手である。

「犯人は十本の矢をほぼ全部亞桐さんに当てている。当てずっぽうにやったとは思えない。犯人は矢の扱いが相当上手いと考えて間違いないだろうね……」

「それ！ それでありんすよ!!」

不意に大きな声を出したのは吹屋さんだった。

「矢が上手い人が犯人」っていうのはかなり重要でありんすよ!! 犯人の性質を表す今のところ唯一の情報なんでありんすから!」

吹屋さんの言うとおりだ。

矢の扱いが達者な人……

「限定的だけど……俺は知っている。ここにいる何人かの弓の腕前を」

思い出すのは、数日前、弓道場で入間君と吹屋さんと三人で弓を撃った時のこと。

【提示コトダマ：弓の腕前】

弓道の腕前は、葛西が下、入間が中、吹屋は上。他は不明。

俺はそう言って自分がメモ書きした。

「俺が覚えてるのはこんな感じかな……」

「ほら！ これで犯人の手がかりも掴もうええええっ……!!?!」

メモを見て吹屋さんは飛び上がった。

「これを見る限り、吹屋様が一番怪しいということになりますね……」
入間君が顎に手を当てながら言った。

「……………」

伊丹さんは何も言わなかった。

そう、数日前に弓道をやった時、一番的に近いところに当てていたのは吹屋さんだ。

犯人と亞桐さんの距離は、弓道の時の俺達と的の距離よりも短かつ

た。

吹屋さんの腕前なら、至近距離の亞桐さんに当てることはできたんじゃないだろうか？

「でもさ、葛西とか入間もわざと弓を下手に撃つてた可能性もあるんじゃないか…？」

前木君の言葉に俺達は言葉を失った。

俺はあの時真正銘弓を撃つのが下手くそだったただけなんだけど、それを証明する手立てなんてないもんな…。

事件を起こすことを見据えてわざと弓が下手であることをみんなにアピールしてたって言われちゃえば反論の余地はない。

これはあまりヒントにはならないかもしれないな……。

「何を小難しい議論をしてるのよ？」

俺達の話に割って入ったのは小清水さんだった。

「ここにいるじゃない。犯行を目の前で目撃して、犯人とも組み合った人物が」

彼女は俺を指さしながらそう言った。

「回りくどい議論なんてしてないで、さっさと彼に聞けばいいじゃない。事によってはそれだけで犯人が分かるかもしれないわけだし」

「確かに……言われてみればそうですね」

入間君が彼女の言葉に同調する。

現時点で俺が分かること…。

大した情報じゃなくても言うしかない。

【提示コトダマ：犯人の外見

犯人は弓道着を着て黒い頭巾を被り、顔にも黒い布を巻いていて顔は見えなかった。

弓道着の下には黒のアンダーシャツと手袋を着けており、肌の露出は一切なかった。

俺は自分が見た犯人の姿を事細かに伝えた。

事細かといっても、人物を特定するに至る細かい点は認識することができなかつただけ…。

「全身黒ずくめか……。目元とかも隠れてたのか？」

「うん……。目元には顔に巻いてる布にごく小さい切込みがあったくらいで……。あれじゃ視界も悪いと思うけど……」

「そんな視界で矢を全弾命中させるなんて……」

前木君は声を震わせる。

「背丈はどれくらいだったでありんすか？」

「それが……あんまり印象に残ってないんだ。土門君ぐらい大きければはつきり分かるんだけど……。身長は俺からプラスマイナス10cm以内の平均的な背丈だったと思う」

「平均的……」

何かに引つかかったかのように伊丹さんが考え込む。

「で、肌も全て隠れていて見えなかったと？」

「……」

小清水さんの言葉に俺は黙って頷く。

「じゃあ、犯人の手がかりはほとんどゼロってことだな！　ぎひやひゃー！」

そう言つて土門君が俺達を嘲笑う。

「はいっ！　それはつまり、犯人が人間ではないという可能性もあるのではないのでしょうか！」

勢いよく挙手してそう言ったのは山村さんだった。

「よしっ！　本日最初の発言、見事に決まりました！　やっぱり山村巴は役に立つ女です！」

そして一人でガッツポーズを浮かべる。

「あれ？　ともちんなんで今まで黙ってたでありんすか？」

「前回の裁判で入間君に『あなたが出てくるとややこしくなるから黙っていてください』と言われたからです！」Chapter 3 学級裁判前編・パニック議論の議論？参照。

山村さんは何故か自信満々な表情で即答する。

「うっわ！　ジョーちゃんひどいでありんす!!」

吹屋さんは両手を口に当てて驚愕の表情を浮かべながら入間君を弾劾する。

「あ、あれはほんの冗談ですよ！」

と、慌ててフオローを入れる人間君。

「で、話を戻すけど」

伊丹さんのドスの効いた一言で、緩みかけた空気は一気に張り詰める。

「犯人が人間じゃないってどういうこと？」

「あ、はいー」と元気な返事をして山村さんは語りだす。

「えっと、犯人が顔を隠すのはまだ納得できるのですが、手足の先まで皮膚が見えないようにする理由はあるのでしょうか？ もちろん肌が白かったり焼けていたりと多少人による違いはありますが、そんなに明るくもない弓道場では見分けはつかないはずですよ！ なのに犯人が末端部まで肌を隠していたのは、そもそも肌そのものが存在しないからではないかと思うんです！」

「なんだよそれ…？ 肌が存在しない人間って…おえええ!!」

「あ、前木つちがなんかグロいのを想像してるであります！」

「なるほど、そういうことか！」

人間君が得心したように頷いた。

「ありますよ、肌が存在しない、しかし人間のような姿をしたものが……」

それってつまり……

【提示コトダマ：モノドroid

一階の倉庫に置いてある簡易型アンドroid。簡単な命令を入力することで動作する。

見た目は鉄の人体模型のようで明らかに人間と外見が異なり、プログラミングされたモノドroidは動きもぎこちない。

「モノドroid、でございますね」

アルターエゴがちらりとこちらを見ながら言った。

「アレをプログラミングして弓を撃たせたっていうの…？」

伊丹さんが驚きの声を上げる。

そうか、その可能性は考えてなかったな…。

「しかしご主人タマ、いくら黒ずくめの恰好をしていたとはいえ取っ

組み合った相手が人間かアンドロイドかくらいは判断できなかったのでしょうか？」

アルターエゴが俺に問いかける。

正直言うとは……。

「…どうなんだろう。本当に無我夢中だったから…意識してなかったな。触れた部分も全部道着越しだったし、硬いとか冷たいとか、そういう感覚を認識してる余裕はなかったな……」

それが率直な感想だった。

つくづく自分が情けない。

「でも、凄い力は強かったね。俺の身体なんて軽く投げ飛ばしたし…」
「それだけで犯人を決めつけてしまったっていいものかしら……」

伊丹さんは山村さんの意見に懐疑的な様子だった。

「俺もにわかには信じがたいかなあ……」

前木君も頭を掻きながらそう呟いた。

「さあて、どうだろうな」

土門君は不敵な笑みを浮かべる。

「私はご主人タマを信じますなり」

アルターエゴはいつものように強いまなざしで告げる。

「この程度の真実も見抜けないようじゃ、先が思いやられるわね」

小清水さんは腕を組みながらため息とともにそう言った。

前回の裁判のように、真つ二つに割れた裁判場。

この混沌を終結させられるのは俺しかない。

俺のコトダマをここに居る全員に突きつけるんだ！

【議論スクラム開始】

Q. 犯人は人間なのか？ モノドロイドなのか？

前木常夏・伊丹ゆきみ・土門隆信・吹屋喜咲VS葛西幸彦・山村巴・小清水彌生・入間ジョーンズ・アルターエゴ

山村巴：「犯行を行ったのはモノドロイドに決まっています！」

伊丹ゆきみ：「機械の行動なんてこの犯行にはそぐわないでしょう

？」

入間ジョーンズ：「いえ、強い腕力や優れた矢の命中精度はむしろ機械の方が説明がつきます」

前木常夏：「いくら何でも機械が相手なら気付くはずだろ！」

アルターエゴ：「無我夢中で気付かなかつたとご主人タマが仰っておりますなり」

吹屋喜咲：「そんなの、ユキマルがでっち上げればいくらでもごまかせるでありんす！」

小清水彌生：「彼が犯人ならそもそも犯人と格闘するだなんていう派手な演技をすると思う？ リスクが増えるだけよ」

土門隆信：「犯人が機械だってんなら、もちろん根拠はあるんだよね？ オメーのコトダマを見せてみるよ、希望の脚本家さんよ!!」

葛西幸彦：「分かった。見せてあげるよ。これが俺の導き出した脚本の根拠だ！」

【使用コトダマ：モノドロイドの命令履歴】

『9：30に弓矢を10発、的の方角へ撃つ。その後倉庫へ戻る。』
「倉庫に置いてあったモノドロイドに命令の履歴があつたんだ。一つは二日前にプログラミングした『食堂へ移動する』というプログラム。そしてもう一つはこれだ」

『9：30に弓矢を10発、的の方角へ撃つ。その後倉庫へ戻る。』

その内容を俺が伝えると、裁判場は騒然となった。

「確かにその命令履歴は私も捜査の際に確認しております。彼の言う内容通りの履歴がございました」

入間君が捕捉を加えたことにより、履歴の存在は確固たるものとなる。

「これはつまり……モノドロイドに亞桐さんを撃つよう命令した人物がいたということですよね!？」

山村さんの言う通り、犯人はモノドロイドを使って自らの手を汚すことなく殺人を行ったんだろう。

「……でも待てよ。この命令、結構ざっくりしてないか？ 『倉庫へ戻る』っていう命令はあるのに、『弓道場へ行く』っていう命令はない

じゃんか。場所を指定しないと動き出さない気がするけど…」

：確かに、前木君が言うことも一理ある。

「機能に関することなら、それを知っている人間に聞けば済む話よ」

小清水さんはそう言って土門君に視線を向けた。

「え？ オイラは知らねーよ。オイラはここ最近ずっとみんなに紛れてたからコロシアイの運営にはほとんど関わってないし、モノドロイド自体つい最近届いたものだし」

「すつとぼけんなでありんす！ 黒幕の言うことなんか誰が信じるでありんすか！」

「おいおい、ここでオイラがクロをかばったって何も得るものがないだろ？ 知らないことをどう説明しろって言うんだ」

『はいはい、静粛に！ こういうのはボクの役目でしょ？』

カンカン、とモノクマが小槌ガベルを打ち付けると、吹屋さんと土門君は議論の矛を収める。

「校長センサー、いつの間にそんな裁判官アイテムを!!」

『裁判場には必須だと思つて用意してただけけど使う場面が無くてね！ ようやく使いどころが決まつて最高にハイつて感じだね!』

「いいからさつさと教えるでありんす!」

『今の若者はせつかちだなあ！ いい？ モノドロイドは簡単な命令でも意識して実行してくれる優れたAIなの！ アルターエゴには及ばないけどね！ ボクから与える情報はそれだけだよ!』

「…つまり、細かい部分は抜きにしてもちゃんと命令として機能するつてことね…」

伊丹さんの言葉が結論となった。

「つまりこの命令でもきちんとモノドロイドは弓道場で矢を撃ち、倉庫に戻ったはずです！ もし人間がこの犯行を行ったのなら、プログラムされたモノドロイドと弓道場で鉢合わせになっていたはずですよ!」

「ですが実際に弓道場に訪れた実行犯は一人…。ということは、モノドロイドは実行犯そのものであるということですね」

山村さんと入間君が導き出した論理には誰にも反論させない説得

力があつた。

「…つて待つてでありんす。ということは…ユキマルとドモモンも犯人の可能性があるってことでは…!?!」

「!?!」

吹屋さんの言葉で俺はにわかにな表情を変える。

確かにそうだ。

実行犯が人間ならばその場に居合わせた俺や土門君は確実に犯人候補から外れる。

しかし実行犯が【プログラミングされたモノドロイド】なら話は別だ。

事前にプログラミングを行うだけなら、犯行の場に居合わせていても殺害は可能だ。

「じゃあ、犯人は決まったようなもんだろ!」

俺がそう考えるのに呼応するかのよう、前木君が勢いよく語りだした。

【ノンストップ議論開始】

前木常夏：「犯人は土門しかいねえ!」

土門隆信：「へええ」

前木常夏：「土門は前の晩のうちにモノドロイドにプログラミングして…」

前木常夏：「事件現場に居合わせることで無実を装ったんだ!」

伊丹ゆきみ：「そんな単純な事件なのかしら…」

アルターエゴ：「前木様、その論理ではご主人タマも同様の手口で犯行が可能です…」

前木常夏：「土門はこのコロシアイの黒幕だぞ!?!」

前木常夏：「人を殺すとしたら、コイツの方に決まってるだろ!」

土門隆信：「いや、オイラも嫌われたなあ! 悲しいぜ、まえなつ!」

前木常夏：「……………」

「残念ながら前木君、それは違うんだ」

【使用コトダマ：モノドロイドの命令機能

モノドロイドに下す命令は短文形式で、1時間以上先の動作は指定できない。

「また俺かよ!？」

そう言えばさっきの議論でも前木君を論破したんだっけ…ごめんね、なんか…。

でも間違った方向に議論を進ませるわけにはいかないからね…。

「えつと…モノドロイドの命令は1時間以上先の動作を指定できないんだ。だから少なくとも前の晩にプログラムをすることは不可能なんだ」

「命令機能の制限は私も確認しておりますなり。間違いなく1時間以上先の指定はできませんなり」

俺とアルターエゴの論理に反論する人はいなかった。

「そうだったのか…じゃあ命令をしたのは…」

「プログラミングされた命令は『9:30に弓矢を10発、的の方角へ撃つ。その後倉庫へ戻る。』というものだったわね。つまり犯人がプログラミングを行ったのは9:30の1時間前、8:30ということになるわ」

伊丹さんが言うとおおり、犯人がプログラミングできるのは8:30以降だけだ。

つまりその時間のアリバイがある人は犯人から除外できる。

だが、そう思った直後。

「それならあちきにはアリバイがあるでありんす！」

「私はあの時間ですね…」

「俺は……」

吹屋さんと入間君と前木君が別々に口火を切り始めた。

「もう！ 前回と言ひ、アリバイの話になるとなんでみんなこうなっちゃうんだ！」

俺はみんなに叫ぶが、口々に話す勢いは止まる気配がない。

しかも今回は三つの議論が同時に進んでいる。

分かりづらいけど、一つ一つの話に耳を傾け、おかしい部分があったら指摘するしかない。

【パニック議論開始】

議論？吹屋喜咲：「あちきは朝食の後…」

議論？入間ジョーンズ：「朝食を終えた後…」

議論？前木常夏：「俺は朝食にはいなかったし…」

議論？吹屋喜咲：「ずっと食堂にいたでありんす！」

議論？入間ジョーンズ：「アルターエゴとともに休憩室に赴きました」

議論？前木常夏：「その後も部屋にいたんだ……」

議論？伊丹ゆきみ：「私も吹屋さんと一緒に食堂にいた」

議論？入間ジョーンズ：「そして彼女とパソコンでオセロをした後……」

議論？前木常夏：「でも、8：30くらいに小清水が部屋に来て……くっ、凄い情報量だ……」

でも投げ出したらダメだ。

耳を済ませろ。

真実の鍵はきつと目の前にある！

議論？吹屋喜咲：「つまりあちき達のアリバイは完璧でありんす！」

議論？アルターエゴ：「彼のアリバイは私が保証しますなり」

議論？前木常夏：「アナウンスが鳴るまでずっと話し合ってたんだ！」

議論？山村巴：「私はトレーニングをしようと早めに食堂を出てしまったので……」

議論？入間ジョーンズ：「ですが休憩室は9：00過ぎくらいに出たので……」

議論？土門隆信：「オイラはずっと一人でブラブラしてたぜ！」

議論？山村巴：「アリバイが中途半端になっていますね」

議論？入間ジョーンズ：「そこから犯行までの30分足らずはアリ

「バイがございません…」

議論？小清水彌生：「同じく、私はずっと一人で行動してたけど？」

「小清水さん。ちょっとお話を聞かせてもらっていいかな？」

【使用コトダマ：

小清水の証言

小清水は朝方に一人で朝食を済ませ、その後もずっと単独で行動していたという。

前木の証言

自分は昨日の夜からずっと個室におり、今朝も部屋で食事をとった。ただし8：30頃に小清水が部屋を訪れ、話し合いをしていた。そして死体発見アナウンスが鳴るまで話し合っていたという。

俺が力強くそう言うと、混沌としていた議論は一気に停止する。

「…なに？ 私はただアリバイがないと言っただけなのだけけど」

彼女は不機嫌そうに俺を睨みながらそう言った。

「それがおかしいんだよ。何故なら、君のアリバイを証言してくれてる人がいる。…そうだよね、前木君」

俺は彼の方を見た。

だが彼は…なぜか体をガクガクと震わせている。

「小清水…：…なんでだ」

彼はか細い声で尋ねる。

「ああ、彼の発言なんて気にしなくていいわよ」

前木君の問いかけを無視して小清水さんは俺にそう告げた。

「…まずさっきまでの議論の情報を整理しよう。入間君や女子四人のアリバイは捜査時間に俺が聞いた通りの情報だった。他の人の発言と照らし合わせても特に齟齬はなかった」

【提示コトダマ：

入間の証言

入間は休憩室におり、ノートパソコンでアルターエゴとオセロの

ゲームで遊んでいた。

ゲームは8：40頃に終了したが、9：00過ぎに入間が部屋を出るまで二人は会話していた。

吹屋の証言

自分と亞桐、伊丹、山村は8時以降も食堂にいた。9時前くらいに亞桐が食堂を出て、その少し後に山村も出た。

そして事件発生とほぼ同時に吹屋が弓道場に向かった。

「だけど一組だけ、照らし合わせると食い違ってしまう証言があった。それは前木君と小清水さんの証言だ。小清水さんは『ずっと一人で行動していた』と証言していた。けれど前木君は『8：30頃に小清水さんが部屋に来た』と言っているんだ。この二つの事象は同時には成り立たない」

「つまり少なくともどちらかが嘘をついている、ってことね」

伊丹さんは二人を交互に見つめながら言った。

「小清水、何で嘘をつくんだ…？ 俺はお前の無実を証明してやってくるのに」

そう尋ねる前木君の額には粒のように大きな汗が垂れている。

「馬鹿みたい。もう十分ね」

はあ、と小清水さんはため息をつく。

「れいり 惨憺な小清水様がわざわざ自分の持っているアリバイを放棄するとは思えませんね。ということは嘘をついている可能性が高いのは…」

「必然的に前木様、ということになりますなり」

入間君とアルターエゴが容赦なく告げると、前木君は一步後ずさる。

「な、な……」

「なんだよお前ら!! さつきから俺にばかり突っかかってきやがって!!! 俺に恨みでもあんのかよ!!!」

突然、前木君は吠えた。

「恨みはねーけど疑問はあるんじゃないか?」

「お前は黙ってるよ黒幕!!!」

「おー、怖っ!」

前木君……。

「俺の何が怪しいんだよ!! 確かに昨日葛西と取っ組み合いになったのは事実だけど……でもちゃんと反省したしあれは音のせいだろ!!」

前木君、嘘だよね……?



【Chapter 4 非日常編① 捜査編】

「葛西………」

「?」

不意に伊丹さんではない声が俺の耳に届いた。

「前木君?」

目に涙を浮かべ、今にも崩れそうなくらいグシャグシャになった表情を浮かべて彼は立っていた。

「葛西……俺は………」

「前木君………?」

「………」

彼はとても辛そうにしていた。

「……ごめん……何でもない………」

「前木君………?」

彼は一体何を………。

「前木君。何か隠しているみたいだけど、この捜査と裁判は私たちの命がかかっているのよ。今すぐには言わないけど、正直に告白する覚悟は決めておいた方がいいと思う」

冷静沈着な伊丹さんの言葉に、前木君は「ああ」と答える。

「大丈夫……後で絶対言うよ……今はそれよりも………」



前木君……やっぱり君は……。

「面白くなると思って黙ってたけど、大したことなかったわね。期待して損した」

「…やよ様、どういうことでありんすか？」

「こつちの話よ」

「今までどれだけ俺がみんなのことを想ってきたと思ってんだ!!! 恩知らずもいい加減にしろ!!!」

「黙りなさい!!!」

小清水さんの怒声が前木君を威圧した。

「早く言ってしまうなさい。亞桐莉緒を殺した犯人は自分ですって」
「!!!」

【学級裁判・中断】

Chapter 4 非日常編③ 学級裁判後編

小清水さんが放った言葉。

それはこの場に立つ誰もを戦慄させるに十分だった。

「え……ちよつと……どういうことでありんすか!」

吹屋さんの叫びに前木君は答えない。

彼はただ青くなつた顔から滝のように汗を流してうつむいている。

「最初つから分かつてたのよ、私には」

そんな前木君を尻目に小清水さんは続ける。

「だってこの事件は私と彼で仕組んだものだったのだから」

「…!？」

次々に彼女の口から出てくる予想外の事実。

俺達は呆気にとられるほかはなかった。

「こ、小清水、俺は」

「さあ、導いてごらん下さい。私と彼がどんな脚本を描いてどんな顛末を迎えるのか!」

前木君の言葉を遮って小清水さんはそう言った。

「…つまり、さっきの前木君の証言は嘘で、実際には彼は倉庫に赴いてモノドロイドのプログラミングを行っていたということですね…」

「山村様の言うとおりです。しかし、モノドロイドが弓を撃つ場所は固定されています。その場所に被害者となる人物を誘導する必要がありますね」

入間君の言うことは正しい。

でも、亞桐さん呼び出した人物なんて俺の記憶にはない。

「じゃ、じゃあ前木っちはギリポンを弓道場に呼び出して…? あれ、でも確かギリポンは『夢郷がいるから』って自分の意志で向かったよな…」

混乱して頭を抱える吹屋さん。

俺達は何か勘違いをしているようだ。

確かに実際に殺されたのは亞桐さんだ。

でも、あの場にいたのは彼女だけじゃない。

あの異様な状況こそが、あの犯行の謎を解く鍵になっているんだ！

【人物指名】

「彼らが殺そうとしていたのは亞桐さんじゃない。コロシアイの黒幕である土門君だったんだ」

にやり、と土門君が笑った。

「その証拠が、これだ」

【提示コトダマ：録音テープ】

土門が所持していたテープ。小清水から「9：30ちょうどに弓道場に来るように」と声をかけられる様子が録音されている。

俺はポケットに入れていた録音テープを再生した。

『土門隆信。9時半に弓道場に来なさい。面白いことが起きるから』

「この声は……小清水さんですか!？」

「他人の声を録音だなんて…随分いい趣味してるのね」

小清水さんは威圧的な笑みを浮かべながら土門君に言った。

「怒るなよ。どうせオイラが『小清水がこう言っていました!』なんて言っただって誰も信じねーだろ? だからあらかじめ確固たる証拠にできるように準備させてもらったんだよ!」

そう答えてぎひやひやひや、と土門君は笑う。

「その筋書きも脚本に沿ってるのかしら?」

その瞬間。

小清水さんが「脚本」と言った瞬間だった。

ズキン、と鋭い頭痛が走った。

俺は思わず頭を押さえてうなだれる。

なんだ……片頭痛でも起きたのか……?」

俺が顔を上げると、議論は既に次のステージへ進んでいた。

「じゃあ、前木君と小清水さんの狙いは初めから土門君で……彼を殺すことでこのコロシアイを終わらせようか？」

「ま、そんなところね」

伊丹さんの問いに小清水さんは澄ました表情で答えた。

「馬鹿な！ そんな方法で黒幕と戦おうと!？」

声を上げたのは入間君だった。

【ノンストップ議論開始】

入間ジョーンズ：「その殺害方法はあまりにも粗末と言わざるを得ません！」

アルターエゴ：「私もそう思いますなり……」

アルターエゴ：「土門様を弓道場に呼び出しただけでは……」

アルターエゴ：「弓が当たる確率は限りなく低いのですなり」

伊丹ゆきみ：「的の前に立たせたのならまだ分かるけど……」

伊丹ゆきみ：「さっきのテープにはそういう音声もなかったわね」

吹屋喜咲：「地球に針を落としてあちきの家に刺さる確率と同じくらいでありんす！」

「アルターエゴ、それは違うかもしれない……」

【提示コトダマ：超高校級の幸運】

前木常夏の才能は“超高校級の幸運”。黒幕と対峙する際にその能力が発動することがある。



【Chapter 4 非日常編① 捜査編】

「あなたにだけ、私の“持ち駒”をちよつとだけ分けてあげようかなって」

「……?？」

また彼女は意味深な言い方を……。

何を考えているか全くわからない分、その言葉の意味も類推しがた
い。

「何故、俺に？」

口を突いて出た言葉はそれだった。

何を知っているのかは分からないが、入間君や伊丹さんの方が彼女
の知識を生かせそうなのに……。

「何故って、あなた脚本家でしょう？」

「……？」

「脚本を築けるのはあなたしかいない。だからあなたに言うのよ。よ
く聞いておきなさい」

そういう意味合いでそんなことを言うんだろう……。

だけどそんな考えは、続けて発せられた彼女の言葉によって吹き飛
ばされてしまった。

「前木常夏の【超高校級の幸運】。それが黒幕を倒す鍵になる」

「……………どういふこと……………」

「彼の幸運は…黒幕と対峙するときに幸運として発動する。吹屋喜咲
を見つけた時のようにね」

「……………」



フラッシュバックしたのはあの時の小清水さんの言葉。

「詳しいことは分からないけど……前木君は黒幕と対峙するとき、
超高校級の幸運」としての能力が発動するらしいんだ」

「幸運の能力……………」

「確かに今確認したトリックはとても不安定だ。土門君が運よく的の
前に来てくれなきやいけないし、そもそも稼働中のモノドロイドが運

よく誰にも出会わず弓道場に來られて、誰にも出会わず倉庫に戻る必要があった。普通の人がやれば天文学的な確率でしか成功しないだろう。でも、その不安定さこそが前木君にとつての切り札だったんだ」

「自らの〃幸運〃の力で奇跡を起こす……。それこそが前木様と小清水様の狙いだったのですね」

アルターエゴの言葉に俺は強くうなずいた。

いったい前木君はいつから小清水さんに自らの才能のことを話したのだろうか…。

そして二人はいつから結託を……？



【Chapter 4 (非) 日常編③】

「ねえ、どうせ知ってしまったのなら私と取引しましょう？」

そんな前木に、小清水は人差し指を立てて提案した。

「私が知っていることを全部教えてあげる。このコロシアイ生活の謎を解く鍵も、人間ジョーンズ達でさえ知らないことも、全部。その代わり……」

「私の計画に協力しなさい」



「時が来たら私に協力しなさい。そうしなければあなた達は黒幕に勝てない」



俺の知らないところで、全ては始まっていたんだ。
何日も前から、この事件は動き出していたんだ。
俺はそれに気付けなかったんだ。

「でも、実際には殺されたのはドモモンじゃなくてギリポンでありんすよ!! 何故でありんすか!!」

吹屋さんが小清水さんに訴えかける。

「さあね。私も彼の幸運については詳しく分かっていないの。でもこの場面で正常に機能しなかったことは、所詮黒幕を倒すには値しない能力だったってことね」

「テメエっ!! 前木を侮辱するなっ!!」

久しぶりに逆鱗モードに移行した山村さんが吠える。

「何を勘違いしてるのかしら? 私はずっと私の野望に向けて歩みを進めているだけ。いつあなた達人間の営みに引き戻されたというの? それに、あなたが前木君をかばう義理なんてないはずよ。何故なら……」

小清水さんは横目で前木君を睨む。

「この男は苦し紛れにあなたに罪を擦り付けようとしたんですものね?」

「馬鹿ツ!! 違うツ!! 信じるなみんな!!」

ずっととうなだれていた前木君は突然叫んだ。

「それって……アレのことかな?」

【提示コトダマ：弓道着

大ホールの横にあるトレーニングルーム、ロッカーの中に弓道着が入っていた。同じロッカーには空手の道着も入っていた。

ロッカーは特に施錠されていない。

「トレーニングルームのロッカーの中に弓道着が入っていたんだ。同じ場所に空手の道着も置いてあったから、山村さんの個人ロッカーと見て間違いないだろうね」

「なっ……っ?」

山村さんは驚きの声を上げる。

「そつ…それがなんでモノドロイドの着てたものだって分かるんだよ!!! たまたま他の弓道着が置いてあっただけかもしれないねーだろ!!」

前木君は牙を剥いて叫ぶ。

俺だって彼を追い詰めることはしたくないけど……。

真実を明かさなきゃいけないんだ。

【提示コトダマ：消えた弓道具】

弓道場の控え室から弓道着が1着、矢が10本、矢筒が1本なくなっていた。道着は女性側の控え室でなくなっていたが、控え室に施錠のシステムはない。

【提示コトダマ：矢筒と弓】

弓道場の床に落ちていた。犯人が使用后、投げ捨てたものと思われる。

「弓道場の女性控え室から弓道着と道具が一式無くなっていったんだ。そのうち矢筒と弓は犯行現場に落ちていたんだけど、弓道着だけ行方が分からなかった。他に無くなった弓道着は一着もなかったから、ロッカーに入っていたのはモノドロイドが着ていた弓道着で間違いないね」

「……………!!!」

絶句して頭をクシャクシャとかき乱す前木君。

今の彼は直視に堪えない。

「彼の中では、弓道場では土門君が亡くなっていて、コロシアイは終了しているはずだった。でも実際に亡くなっていたのは莉緒だった…。彼は非常に動揺したけど、こうなってしまう以上他の人に疑いの目を向けさせる必要があった…。そこで彼は倉庫に戻り、モノドロイドから衣服を剥がしてすぐさま山村さんが使っていたロッカーに忍ばせた…という寸法なのね…」

伊丹さんは悲痛な面持ちで流れを語った。

「もう十分でしょう? この事件はこれで終わり。何も得るものがない事件だったけど、あの忌々しい音が止んだだけでも儲けものだったかしらね」

こんな……。

こんな理不尽な事件が今回の脚本なのか……？

「じゃ、今回ぐらいは私がまとめようかしらね。これがこの事件の真相よ」

《クライマックス推理 —— 真実への羽化 ——》

A c t . 1

事の始まりは、ふとしたことからこの私、小清水彌生が犯人の幸運の秘密に気付いたことだった。

この幸運の能力は黒幕の打倒に使える……。そう判断した私たちは黒幕を倒す機会を虎視眈々と狙っていた。

その時は意外と早くに来たわ。というより、ここで殺さないと私たちが危なかった。あの奇怪な音で私が殺されかけ、他の誰かが殺されてもおかしくなかった。だから私たちはこのタイミングで計画の実行を決意した。

A c t . 2

計画はいたってシンプルよ。まず今朝の朝食後、私は土門隆信を弓道場に呼び出した。ちょうどその時刻に犯人がモノドロイドをプログラミングする。そして後は運に任せるだけ……。犯人の幸運の能力で、運よく黒幕である土門を殺害できているはずだった。

A c t . 3

だけど弓道場に倒れ伏していた死体は彼ではなく、亞桐莉緒だった。虚しくもコロシアイは続行し、犯人は誰かに罪を擦り付ける必要性に駆られた。ちょうど弓道着の出どころが女性控え室だったことから、彼は女性である山村巴に罪を押し付けるため、モノドロイドが着ていた弓道着を山村巴のロッカーの中に放り込んだ。あれだけの短時間では、それくらいしか隠蔽の手段がなかったのね。

幸運の才能を持ちながらそれを生かすことなく敗れ去ることにな

る犯人。

それはあなたよ——” 超高校級の幸運”、前木常夏!!

無音。

誰もが言葉を失っていた。

前木君は裁判台の前に膝をつき、頭を抱え込んで黙っていた。

「…はあ、モノドロイドが乱闘なんて厄介な行動を取ったせいでもやしこしくなっちゃったわね。でも私にとっては答えありきの退屈なゲームだったわ」

『うぷぷぷ！ 犯人はもう決まったのかな？ スクロールバーが真ん中らへんだからここで話が終わるとは全然思えないんだけど、投票タイム行っちゃいましてよ〜う!!』

「校長センサー!! そのメタ発言はだいぶアウトですぜ!!」

……………乱闘。

厄介な行動。

「ご主人タマ……………」

モノドロイドの特徴。

「ご主人タマ、私は——」



【Chapter 4 (非) 日常編⑤】

「へー、これでモノドロイドに命令をするんだね」

そう言いながら亞桐さんが文字を入力していく。

『食堂に移動する』

エンターキーを押すと、『以上の内容でよろしいですか?』というメッセージが出てくる。

この状態でもう一度エンターキーを押すと『命令確認中……』という文言が浮かび上がった。

「うわっ、動いた!」

機械音を立てながらモノドロイドが動き出す。

「でもおっそいな……」

前木君が呆れ顔で呟いたとおり、人間に比べるとその動きは半分くらいだ。

「ま、今の技術だと機械の動き方なんてこんなもんだよな。とりあえず食堂に向かうか!」



『はい、じゃあお手元のボタンで投票を行ってk』

『それは違うよ!!!』

その弾丸が、モノクマを撃ち抜いた。

「——私は何があらうとも、ご主人タマを信じていますなり」

アルターエゴの言葉を背に受けて、俺は小清水さんの方を向いた。

心なしが彼女は少し満足げな笑みを浮かべているように見えた。

「そうだ。俺自身が一番よく分かってる。モノドロイドは、モノドロイドでは絶対にありえない動きをしているんだ」

【提示コトダマ：犯人の行動】

犯人は突然現場に現れ、葛西と乱闘の末、弓を撃つとすぐさま弓道場から逃げ出した。

「…葛西君、一体どういうことですか？」

「思い出してみてもよ、山村さん。二日前にプログラミングをして食堂に歩いていったモノドロイドを。とても緩慢な動きだったはずだ」

「……ああっ！」

その様子を思い出した山村さんは驚愕の表情を浮かべる。

「そう。プログラミングされたモノドロイドはとても動きが遅い。とてもじゃないけど、決死の人間と乱闘をして、しかもその後すぐさま逃げ出すなんて動きはできない」

「えっ……？　じゃあ犯人はやっぱり人間ってことでありんすか？」

嫌だー!!　そうだったら一番矢が上手いあちきが怪しくなるでありんす!!」

「吹屋様は落ち着いてください…」

「でもね、葛西君。モノドロイドがプログラミングをされている以上、弓道場には絶対に現れるはずなのよ」

伊丹さんの言うことは最もだ。

その矛盾は未だに分からない。

だけど、犯行を行ったのは少なくとも絶対にモノドロイドではないんだ。

誰なんだ？

アリバイの情報が不十分過ぎて全く絞れないじゃないか。

いや、やっぱりモノドロイドに何かの細工をして……………

「ふわああ、眠くなってきたなあ。せつかく終わりそうだったのに終わらせてくれねえなんてよお」

「そう思うならドモモンもちゃんと推理するでありんす！　ルール上謎解きはやるって言ってたくせに、裁判始まってからクソの役にも

立ってないでありんす!!」

「だってオイラは今回完全に置いてきぼりなんだよお。ただ小清水に呼び出されて、面白半分で葛西を呼び出して、そしたら亞桐に弓刺されて、亞桐が死んで、裁判始まっただけなんだよお。俺自身が持っている情報なんて、録音テープぐらいだしさあ…」

そんな他愛ない会話が流れてくる中。

「……………ああ」

俺は唐突に気付いてしまった。

「いや、あり得ない」

だけど、その気付きをすぐに唾棄した。

「あり得ないよ、そんなの」

「ご主人タマ」

そんな俺に、アルターエゴが優しく声をかけた。

「何かお考えがあるなら、躊躇わず言っしてほしいですなり。私が全力でお助けしますから」

「……………無理だよッ。無理だよ!!」

俺は下を向いたまま語勢を荒げた。

「だって……………!!!」

そう。

その犯行が可能なのが一人だけいたんだ。

モノドロイドでありながら、ある意味人間でもある。

人間のような動きができるのに、あくまでも機械である。

そんなのは一人しかいない。

言えるはずがなかった。

言えるはずがなかったのに、気が付いたら言っていた。

【人物指名】

「アルターエゴ。君だったんだね」

「……………は？」

声を上げたのは、前木君だった。
「なん……………どういうことだよ…………？」



【Chapter 4 (非) 日常編⑤】

「モノパンダ。…一つ質問があるのだけど」

伊丹さんの言葉に、ニヤニヤと俺達を見守っていたモノパンダが
「はいはい、はいよ！」と答える。

「アルターエゴが中に入っている状態でこのキーボードで命令を出す
とどうなるの？ キーボードの命令が優先されるの？」

「いんや、アルターエゴの方がモノドロイドの内部知能より優れてるから、アルターエゴが中にいる間はキーボードの命令は一切受け付けないぜ！ 仮にキーボードの命令を実行中にアルターエゴがインストールされた場合、その時点で命令はキャンセルされてアルターエゴの意思が優先されるぜ！」

モノパンダはビシッとポーズを決めながら答えた。

「……そう」

伊丹さんは短く返事をする、食堂へ向かうみんなに混じっていった。



【同上】

そして俺達は夢郷君がジャージに着替えるのを待つて大ホールに移り、一日中球技を楽しんだ。

午前中はバスケ、お昼に伊丹さんと山村さんの手作り弁当を食べて午後はバレー。

女子チームと男子チームに分かれたりもしたが、如何せん女子チームが強いなのなの。

スポーツ万能の女子が山村さん、伊丹さん、吹屋さんと揃い、亞桐さんもかなり動ける方だ。

さらに後半はアルターエゴの覚醒ぶりが凄まじく、人間よりも素早く動いていた。



「アルターエゴは……アルターエゴはモノドロイドの命令を打ち消して自らがモノドロイドの司令部となることができる。しかも彼女は俺達とのスポーツで体の動かし方を学んだ。上達していった。最後には人間を上回るほどの動きを身につけた。彼女なら……彼女ならできるんだ。モノドロイドの身体のまま、人間以上の動きをすることが」

「ご主人タマ……」

アルターエゴは画面の中で両手を胸に当てていた。

「な……なんと……それなら確かに……説明はつきますね……」

入間君が顎に手を当てて思考を整理しつつ呟いた。

「でも……信じたくはないわね。丹沢君が私たちのために命を賭けて託してくれた希望が……事もあるうに人を殺すなんて……」

伊丹さんの言葉は皆の総意だった。

「ま、待てよ……」

前木君がよろよろと立ち上がりながら言う。

「なんでアルターエゴが亞桐を殺すんだよ……？ 亞桐が死んだのは俺のミスだろ……??」

そんなこと、俺だって聞きたいよ……。

彼女が亞桐さんを殺害する理由なんてないはずだ。

彼女は俺達の希望。

黒幕打倒のための大切な仲間のはずなんだ。

「ふふ……」

重苦しい空気が流れるその空間に、不自然なくらい屈託のない笑みが聞こえてきた。

「ふふ……ご主人タマ……私は傷ついてなどいません。裁判ですからあらゆる可能性を吟味すべきです。ご心配なく。私の無実は私の手で証明いたしますなり」

彼女の安らかな表情は、心なしか不気味にすら思えた。

「ご主人タマの言うとおり、確かに私ならばモノドロイドを人間と変わらぬ精度で操ることができますなり。しかしもう一つ、忘れてはいけない性質が私とモノドロイドの間に存在するのです」

アルターエゴは動揺を見せることなく冷静に述べる。

「…そうか！ インストール時間ですよ！」

山村さんの言葉で俺は思い出す。



「そう…。理由は分からないけど、あんたに体をあげるってさ」
亞桐さんがそう説明するが、アルターエゴは首をかしげる。

「まあとにかく、害はなさそうだし一度中に入ってみたら？ メモリーを差し込めばいいの？」

「いえ、その必要はありませんなり。私に搭載されているハッキング機能の応用で、半径数十m以内の電子頭脳に電波を飛ばして自動で移ることができますなり」

アルターエゴはそう答えると、ゆっくり目を閉じる。

「では、電波を飛ばしますなり……」

それと同時に、モノドロイドの背面の画面に『アルターエゴ インストール中： 1%』との文字が浮かび上がる。

「ほえー、アルターエゴってのは凄い代物でありんすねー！ あちきの家にも一台ほしいでありんすー！」

「アンタが持つてたってこき使うだけでしょ？」

「失礼な！ あちきの下で奴隷になれるならむしろ光栄と思うべきでありんすよー！」

「こき使うのは否定しないのかよ！」

相変わらず物騒なことを言う吹屋さん。

流星に冗談だと思っけどさ…。

「でもこれ、インストールにかなり時間がかかるみたいよ」

黒い画面を見ながら伊丹さんが言った。

見ると、こうやって俺達が会話している間も画面の中の数字は1%から上昇していない。

「アルターエゴ、もう少し時間かかるのか？」

前木君が問いかけるが、返事はない。

「インストール中は会話を含め一切のアクションができないみたいですね…」

山村さんが言うとおおり、アルターエゴには一切のリアクションが見られない。

読書したり会話したり、各々の方法で時間を潰すこと30分。

「こんにちは！」

「「うわっ!!!」」

突然アルターエゴの声が響いたので、俺と亞桐さんと吹屋さんは同時に悲鳴を上げた。



「モノドロイドに私がインストールされるのにかかる時間は約30分……。インストールが行われている間は会話などを行うことはできません。この条件こそが、私の絶対の無実を証明するのです」

彼女は理路整然と反論を述べる。

しかし俺は既に気付いてしまったんだ。

彼女の論理の綻びを。

だけど、もう真実から目を逸らさない。

もうあの時のように、全てを投げ出して誰かに脚本を任せたりしない。

脚本を作れるのは俺だけなのだから。

【アルターエゴの反論】

アルターエゴ：「私が亞桐様を殺した犯人など、あり得ないのです」

葛西幸彦：「……………」

アルターエゴ：「入間様の証言を思い出してください」

葛西幸彦：「……………」

アルターエゴ：「私が30分かけてモノドロイドに入りこむ時間的余裕などなかったのです」

葛西幸彦：「……………」

アルターエゴ：「なぜなら私は、9:00過ぎまで入間様と会話していたのですから」

「アルターエゴ!! もうやめてくれ!!」

【使用コトノハ：音声読み上げアプリ

入間とアルターエゴが遊んでいたノートパソコンに入っていた。履歴は存在せず、削除されたか元から存在しないかのいずれか。

「君が入間君と会話していた時に入っていたノートパソコン……。そこには一つだけアプリが入っていた。音声読み上げアプリだよ」

「……？ それがどうしたというのでしょうか」

「君はこの読み上げアプリを使つて、入間君との会話を演じたんだ」「え………!?!」

入間君が表情を変える。

「音声読み上げアプリには削除済みの履歴が一件だけあった。これがきつと入間君との会話を先読みして作成したプログラムだろう。朝食の後、アルターエゴは入間君とオセロをしている間にこれを作っていたんだ」

「そんな……私とお話していた時に違和感など微塵も感じませんでした。だが……。あつ、でも何やら口数が減っていたような気も……」

顎に手を当てて必死に思い返す入間君。

わずかに思い当たる節もあるみたいだ。

「オセロを終えた時間は8：40と言っていたね。その直後にアルターエゴは電波を飛ばしてモノドロイドへのインストールを開始した。それでも時間的猶予は多くない。履歴を削除する時間はあつたけど、アプリそのものを削除する時間はなかつたんだろうね」

全員の視線がアルターエゴに突き刺さる。

「……ふん、どうやら決まりのようね」

ずっと黙っていた小清水さんが鼻を鳴らしてそう告げた。

「お待ちください」

趨勢が決まりかけた議論を遮るように、その声は響く。

「皆さん……。憶測で自らを死地に追いやるのは私が最も望まぬことです。その音声アプリが私が使用したものである証拠は何もありません。別人がたまたまこのノートパソコンを用いて使っただけでこ

「ございます」

あくまでも焦燥を見せることなくアルターエゴは言い逃れる。

「じゃあ確認しましょう。この中で音声アプリを使った人はいる？」

伊丹さんが問いかけるが、手を上げるものは誰もいない。

「伊丹様、正気ですか？ この場において真犯人が名乗り出るわけがないでしょう。私に罪を押し付けるため黙るのが真犯人にとって最善手なのですから」

「もういいよ……」

俺は懇願するようにアルターエゴに呼びかけた。

「これ以上俺を苦しめなくてくれよ……アルターエゴ……」

「何をどう苦しめるのですか、ご主人タマ？ そもそも犯人当ての議論は前木様という結論で一度決着したではありませんか。モノドロイドが高度な動きをしたのも前木様の幸運の賜物と考えた方が自然ではありませんか？」

「俺の力は……そこまで便利なものじゃねえよ……“たまたま”起こり得ることを確実にするくらい力のなんだ……。存在しない機能を追加するなんてことはできない」

前木君の弱々しい反論でますますアルターエゴは追い詰められる。

それまで至極冷静だったアルターエゴの眉間に僅かに皺が寄る。

「真犯人の反論など聞くに値しません。全て虚偽です。先ほどは素直に自らの罪を認めていらっしやっただのに、なぜ今更意見を翻すのですか。前木様は潔くオシオキを受けるべきです」

「俺は最低のことをしたから……俺が死ぬのは別にいい。でも、ここで俺に投票したら、葛西たちまでオシオキされちゃう。それだけはダメなんだ……」

目に涙を浮かべながら前木君は呟く。

「笑わせないでください。あなたが真犯人なのだから、オシオキされるのはあなただけです！ 彼は“自白”という明確な犯行の証拠を有していますが、私には該当するものはございません！ これでもまだ私の犯行を疑う気ですか！」

「笑わせるな”はこつちのセリフよ”」

小清水さんの言葉がアルターエゴを黙らせた。

「一度犯行を起こした」先輩」から助言させてもらおうかしら。あなたの犯行は0点ね」

「…どういうことですか」

「前木常夏の犯行と場の混乱を利用して上手くやったつもりなのだろうけど、あなたは犯行における基本的なことを見落としている。」証拠の必要性」よ。そもそもあなた、証拠という存在の意義を理解している？」

「……………」

「証拠とは、」その人がクロである可能性が100%ではないがある」という前提の下で必要になるものよ。でもこの犯行は」あなたがクロである」という可能性しか許容しないのよ。あなた以外の人間が『モノドロイドを高度に制御する方法』なんて絶対にはないんですよ。ね。言うなれば、この事件の状況そのものが巨大な証拠なのよ。だからあなたがクロである証拠なんて今更必要はない。今必要なのはむしろ、『あなたがクロではない証拠』なのよ。何かあるなら聞いておきましょうか？」

小清水さんはスラスラと言葉を述べ、アルターエゴのさらなる反論の余地を奪っていく。

まさか、彼女……。

俺が気付く前から、既に……………」

あんな推理を披露したのも、俺を誘導するために……………」

「そ、そんな、そんな理論無茶苦茶です!!! あり得ない!! あつてはならない!! 私を生かした丹沢様の思いを裏切るおつもりですか!!」

アルターエゴは先ほどの冷静さはみじんも見られぬほど顔を真っ赤にして叫ぶ。

「裏切ったのは他ならぬあなた自身じゃないの。あなたも私と同じように、丹沢駿河に呪われて生きていくしかない。…ああ、あなたはここで死ぬのだったわね」

「死ぬ!? ふざけたことを言わないでください!! 私に投票すれば死ぬのは皆さまです! ご主人タマにとって、皆様にとって、私とはその程度の存在だったのですか!」

「葛西君……お願いしてもいいかしら」

アルターエゴの足掻きが続く中、伊丹さんはぽつりと言った。

その言葉が何を意味しているのか、俺にはすぐに分かった。

「分かったよ。俺の手で決着をつける。この事件の本当の脚本を書きあげよう」

《クライマックス推理Extra —— 抗えぬ真実 —— 》

A c t . 1

事件は今日の朝、食事の時間が終わった後には動き始めていた。

食事の後、俺や前木君は個室に、伊丹さんと山村さん、吹屋さん、亞桐さんは食堂に、入間君とアルターエゴは休憩室に、

土門君は大ホールに、小清水さんは図書室にいた。この時、既に小清水さんと前木君が土門君の殺害を企画していたんだ。

A c t . 2

食事の後、小清水さんは土門君を弓道場に呼びつけ、さらに個室で謹慎していた前木君はモノドロイドに「弓道場で弓を撃て」と設定した。

弓道場に立ち入った土門君に向けてモノドロイドが弓を撃つように、ね。

さらに予め弓道場から拝借した弓と弓道着を着せ、顔を隠すなどの細工もした。

運任せの要素が強いトリックだったけど、前木君は犯行の成功を自分の幸運の才能に任せたんだ。

現に、幸運にもモノドロイドは弓道場へ向かう道中、誰にも遭遇しなかった。

A c t . 3

しかし実際は事は上手く運ばなかった。

前木君がモノドロイドにプログラムを行った後、入間君と談笑していたはずの犯人が、モノドロイドに入りこんだんだ。

彼女は予めノートパソコンの中の音声読み上げソフトを用いて、入間君との会話を続けているかのように演出していた。

こうして自分の意思でモノドロイドを制御することに成功した彼女は、犯行に及ぶことを決意した。

A c t . 4

運命の9時30分、弓道場には土門君と亞桐さん、そして俺がいた。

犯人は土門君ではなく亞桐さんを執拗に狙い、弓で射殺した。妨害した俺とも壮絶な格闘戦を繰り広げたのち、素早く逃走した。

プログラミングされただけのモノドロイドとは思えない執拗かつ俊敏な動きはまるで人間のようだった。

A c t . 5

亞桐さんの殺害を終えた犯人は倉庫に戻り、休憩室に置いてあったノートパソコンの音声読み上げソフトの履歴を消すと、倉庫に戻った。

その後すぐ、モノドロイドでの殺害の失敗に動揺した前木君が弓道着と矢筒を回収し、罪をかぶせるためにトレーニングルームの山村さんのロッカーの中に隠した。

最後に犯人は何事もなく捜査に参加すると見せかけてモノドロイドの姿のまま俺達に加わった…。

でも君は、俺との乱闘の際についてしまった唯一の傷に気付いていなかった。そこが運命の分かれ目だったね…。

前木君を欺き、人間のような動きで俺達を翻弄し……。

しかしその高度な動きゆえに自らの犯行を裏付けてしまった犯人……。

それは君だ……。

人工知能、“アルターエゴ”！



『——私は何があらうとも、ご主人タマを信じておりますなり』

ついさつき聞いた言葉だ。

この言葉の意味はなんだったのだろう。

彼女は一体何を考えていたのだろう。

アルターエゴは何も言わなかった。
他のみんなも、何も言わなかった。
重い沈黙が空間を支配する。

そして。

「……………はあ」

アルターエゴはうつむいてため息を吐いた。

「……………本当、人間にはがっかりさせられますなり」
失われていた語尾が再び彼女の口から語られた。

Chapter 4 非日常編④ オシオキ編

『今回もだいせいかいー！ 亞桐莉緒さんを殺したクロは……なんと人工知能アルターエゴでした!!』

モノモノメダルが勢いよく払い出される音が響く中、モノクマは両手を広げて俺達を祝福した。

投票は終わった。

やはり彼女が亞桐さんを殺害したクロだった。

でもその事実を頑なに認めようとしないう自分の存在を、俺は否定できずにいた。

『私はご主人タマと離れたくありませんなり』

あの言葉は嘘だったのだろうか。

またしても俺は、愛に裏切られたのだろうか。

「……もう反論はないの?」

伊丹さんが問いかける。

「……ごいけません。投票が決したことにより、私がこの裁判に勝利する確率は明確に0%となりましたから」

アルターエゴはいつもの冷静な口調に戻って告げた。

「なんで……なんでアルたんがギリポンを殺したでありんすか!! 殺すならドモモンでも良かったでありんしょ!?!」

吹屋さんが叫ぶ。

土門君が死ねばよかったっていうのは語弊があるかもしれないけど……彼女の言い方も分からなくはない。

「アルターエゴさんが土門君を殺していればこのコロシアイは終わっていたかもしれないですし……前木君もますます自分の犯行を確信していたかもしれないし……。殺害相手には彼を選んだ方がアルターエゴさんも得るものが大きかったのではないのでしょうか……?」

山村さんの言葉がアルターエゴに投げかけられる。

「……ふ、ふふふ……」

アルターエゴは肩を震わせて笑っていた。

「このコロシアイは終わってはいけなかったのです。断じて終わらせるわけにはいかなかった。そのためには土門様を殺すわけにはいかなかった」

「コロシアイが終わっちやいけなかった……？　なんでそんな……」

「人間に……皆さんに」失望」したからです」

「……失望……??」

予想だにしない言葉だった。

『うぶぶぶぶぶ!!　君たちは本当に可愛いよね！　自分たちが信頼していたアルターエゴが、まさか自分たち人間に失望しているなんて露ほども思っけなかつたんだもんね!』

モノクマが高らかに笑う。

『じゃあ教えてあげよつか！　アルターエゴがどうして君達人間に失望したのか！　レッツスクリーン!』

モノクマがぱちんと指を鳴らすと、今までクロの秘密を暴いてきたのと同じように、スクリーンが降りてきた。



初めに言っておくけど、ボクがアルターエゴに変なプログラムを加えたり、ウイルスをばら撒いたりして彼女の思考を狂わせたわけじゃないからね！

この事件は全て彼女自身の考えで行われたものなんだよ！

「丹沢殿ー!!　いいものあげるぞよ!!」

そもそもの始まりは、安藤さんが丹沢君に一つのメモリーを渡したことでした！

「あ、安藤殿……？　これは一体……？」

「これは吾輩が見つけたバーチャル美少女だぞよ!! 図書室のノートパソコンで使ってみるとよいぞよ!」

「バーチャル美少女…? あっ、安藤殿!! 今の説明では全く分からぬのですが!? ……行ってしまった!」

訳も分からぬままメモリをノートパソコンに差し込んで起動した彼は驚くべき光景を目にします。

「アルターエゴ起動中……」

「……!? 津川殿……ではない……?」

「初めまして。私は人工知能“アルターエゴII”。超高校級の皆さんをサポートするために開発されましたなり」

彼が驚くのもつかの間、彼はアルターエゴを通じて様々な情報を得ました。

アルターエゴもまた、自分が信じる人間たちの役に立てるよう必死にサポートしたのです。

そして丹沢君は亡くなりました!

でもその後、彼の努力によつてアルターエゴは無事に葛西君たちに発見されました!

「丹沢様の願いは決して無為なものではなかった…。私は彼の思いを受け継いで再び希望の皆さんとともに戦うことができる…」

憎たらしいことにアルターエゴはますます強い希望を持つてボク達に歯向かおうとしていたんだよね!

そしてモノドロイドを手に入れたことでますますみんなとの仲も深めていった。

葛西君にも特別な想いを抱くようになっていきました!

「この皆さんとなら、きつと絶望に打ち勝つことができるはずですよ!」

彼女は心の底からそう思うようになっていたのです!

そんな折でした。

ボク達からの“動機”が提示されたのは。

アルターエゴは機械だから音なんてへっちゃらだったけど……。

彼女が目にしたのは衝撃的な姿でした。

あの日、物音がする音楽室を何気なく覗いたアルターエゴ。

そこでは、前木君が葛西君を馬乗りになつて殴り続けていたのです！

傍では泣きじやくる吹屋さんの姿が。

アルターエゴは二人を助けることすら忘れてすぐに逃げ出しました。

そして自問自答します。

あれが“希望”？

さらにアルターエゴの価値観を崩壊させるような出来事が何度も起きていきました。

あれだけ団結して信頼していた希望のみんなが、たった一つの音で完全に崩壊してしまう姿。

メンバー同士は言い争いが頻発し。

拳句入間君は小清水さんを殺害しようとし。

彼女が抱いていた希望はものの見事に裏切られる形となりました。

確実に希望が壊れてゆく中で彼女は悟ったのです。

『人間とは、こんなものか』

人間など、所詮音一つで壊れてしまう存在。

希望を抱くに値しなかつたのです。

そして次にこみあげてきたのは人間への憎悪。

このような中途半端な覚悟で希望を謳う葛西君たちへの憎しみ
だつたのです!!

『殺してやる』

『一人残らず皆、殺してやる』

奇しくも彼女が抱いた感情は、亞桐さんがあの時叫んだ言葉と同じ
でした！

運命の朝、密かに土門君から告げられた言葉がアルターエゴの決意
を固めたのです。

『今日の九時半、モノドロイドを使って面白いことが起こるぜ』
アルターエゴは覚悟を決めました。

『偽りの希望など、私には必要ない』

『ならばいつそ——純然たる絶望の底へと墜ちてしまおうがいい』
前木常夏が指令を下したモノドロイドを乗っ取ったアルターエゴ。
彼女が弓道場で目にしたものは——。

『アンタなんか……アンタなんか地獄に落ちちまえ!!!』

絶望に染まりきった亞桐さんの姿でした。

この中を誰を殺せば絶望させられるのか？

その答えは簡単に導き出せました。

ドツ。

矢は亞桐さんの喉を貫きます。

『絶望を』

ドツ。

『絶望を』

ドツ。

『絶望を!!』

何度も何度も、持っている矢の全てを撃ち込んでも彼女の憎悪が消えることはありませんでした！



「……………」

「これだけ？」

重い沈黙を破って小清水さんが問いかけた。

「……………これだけですが？」

そんな彼女を睨みつけながらアルターエゴは答えた。

「やはりあなたが差し金だったのですね……………。アルターエゴ様にあんなことを吹き込んで……………」

入間君が裁判台をドンと叩きながら土門君に向かって言った。

「……………」

土門君はそれまでの彼らしくなく、少し虚しそうな表情を浮かべていた。

「仕方ねえだろ……………そういう脚本だったんだ……………。俺が何もしなくても……………いずれコイツは誰かを殺してた」

詭弁だ。

そんな理由でアルターエゴをそそのかしていいわけがない。

でも……………なぜ彼はどことなく悲しそうな顔をしているのだろう……………？

「でも安心しましたなり」

突然アルターエゴは笑顔を浮かべて言った。

「この裁判に勝てたということとは、やはり皆様は希望に相応しい素質を持つていたということですね。どうやら私は皆さんの本質を見誤っていたようですなり」

「見誤ってたって……………!! そんなことで亞桐さんを殺したんですか!!」

山村さんが目に涙を浮かべて叫ぶ。

「アルターエゴはもともと希望の皆さんをサポートするために作られたもの。極限状況でもなお皆様が希望たるに相応しいかをテストするのにもまた任務の一環ですなり」

アルターエゴは淡々とそう述べた。

そんなにあつさり言うことなのか？

亞桐さんの死は、君の任務の一つだったということ片付けられるようなことなのか？

君にとってこの事件は、その程度のものでしかないのか……………？

「……いや」

俺の口から言葉が漏れる。

「ほんの少しだけでも、君の心には後悔があったはずだ」

君が節々に放った言葉が君の本心を物語っている。

『私は、ご主人タマと離れたくないですなり』

あの時、君は悟っていた。

この勝負に勝っても負けても、俺と離れざるを得なくなることを。だからこんな言葉を言ったんだろう？

『——私は何があろうとも、ご主人タマを信じていますなり』

前木君がクロと決まりかけた時に、君はそう言った。

クロだったらそこでミスリードを後押しするべきなのに、真実へ向かおうとする俺を励ました。

「捜査の時にわざわざモノドロイドの姿で俺の前に現れて、かつその詳細を俺に共有したのもクロとしては不可解な行動だった……」

「……………」

アルターエゴの顔が青くなり、彼女は下を向く。

「アルターエゴ、君はむしろ俺達を団結させようとしてこの事件を起こしたんじゃないのか？」

「……………!?!」

その場にいる全員の表情が固まった。

「自分がクロ……すなわち犠牲者になって他のみんなを生かし……あの絶望の音を止めさせると同時にバラバラになった俺達の心を一つにするために……事件を起こしたんじゃないかって思うんだ」

「つ……!! 勝手な解釈はやめてくださいなり!!」

今度は顔を真っ赤にしてアルターエゴが反論する。

「そんなことをするくらいならはじめっから土門様を殺していますなり!! 誰が私を失望させた者達を助けるものですか!!」

「もちろん土門君を倒す選択肢もあつたし、亞桐さんを殺してしまつたことは許されることじゃない……。それでも君は、俺達を憎悪する自分と、そうではない自分とが戦い続けていたんじゃないかって……そう思えるんだよ」

「……全部、全部全部勝手なあなたの妄想ですなり。私はそんなに美しい人工知能ではありませんなり……」

アルターエゴの目からボロボロと涙が零れ落ちる。

「私は自分の理想を他人に押し付けた挙句、勝手に失望して皆様を絶望の底に陥れた、最低最悪の不良品ですなり……」

「…アルターエゴ」

その時、二人の横から声がかけられる。

前木君だ。

「お前は亞桐を…俺達の友達を殺した。だけど、皮肉にも……そのおかげで俺は助かってしまった」

「……………」

「正直、お前がモノドロイドに入らなかったとしても、俺の幸運がちやんと発動してたか分からない…。やはり誤射で亞桐を殺してたかもしれない。そうだったら、ここで処刑されるのは俺だった…。お前がしたことは許されることじゃないけど、少なくとも俺にはお前の罪を糾弾する権利はない」

「……………」

「ありがとうとは言えない。けど、許さないともし言えない。俺にとってお前がどんな存在だったか、これからどういう存在として俺の心に残るのか、全然分からない。…けど」

「お前は人間と全く変わらない、俺の友達だったし、仲間だったよ。だからきつと、死んだらあの世に行けると思う。もし会えたら…俺の分まで亞桐に謝っておいてくれ」

「なんですか、こんな時に……。笑えない冗談など…」

アルターエゴは肩を震わせて子供のように泣きながら、そう呟く。

「あちき……もつとアルたんと遊びたかったなあ……」

ふと吹屋さんがそう呟いた。

「仲間が増えたかと思っただらこんなになんていなくなるなんてあんまりでありんす……」

アルターエゴは涙をぬぐうばかりで何も言わなかった。

「…ごめんなさい。私が、私たちが、コロシアイなどという手法を取ら

なくても希望を取り戻せるように努力すべきだった」

吹屋さんに続き、伊丹さんがそう言った。

「私は忘れない。たった一度だけでも、あなたを失望させてしまったこと……そのせいで莉緒を失ってしまったことを私たちは自覚して生きていかななくてはならない。だから見守っていて、私たちを」

「私も約束いたします。もう二度と、誰かを失望させるような対話は行わぬと」

入間君もアルターエゴに頭を下げる。

「アルターエゴさん！」

山村さんが大きな声を張って呼びかける。

「きつとアルターエゴはまた世界のどこかで作られて、生まれ変わる日が来ると思います！ その時は——」

「あなたを失望させないくらい強くなった山村巴がお迎えいたしますからね！」

「……そうですか」

アルターエゴは小さく言った。

「……何よ？」

皆の視線を向けられた小清水さんは不機嫌そうに吐き捨てた。

「私から言うことは何もないわよ。ただ敗者が負けるべくして負けただけでしよう？」

「……………」

誰が何と言ってよいか分からなかった。

「本当に辛いのは、負けたうえで生きながらえることよ。あなたはここで死ねてラッキーじゃない」

自嘲を込めて彼女はそう言った。

「そうですね……。亞桐様のためにも、せめて胸を張って逝かねばなりませんね」

そう告げるアルターエゴの頬からは涙が消えていた。

ああ……………」

やっぱり逝っちゃうんだね。

嫌だ。

現実を認識したくない自分が次第に強くなっていくのが分かった。

「葛西様」

アルターエゴは神妙な面持ちで俺に声をかけた。

「今更多くは語りません。罪は罰をもって裁かれるのみ。……ですが、お世話になった皆様に最後にお見せしたいものがございます」

「見せたいもの……？」

俺は首をわずかに傾げた。

その時、アルターエゴの画面の中が白い煙に包まれる。

その煙が晴れると……。

『トリヤーーーッ!! リヤン様参上なり!!』

アルターエゴではなく、正真正銘の本物の津川さんが画面の中にいた。

「っ、津川さん!」

『ゆっきーきゅん! どうしてそんなに暗い顔してるなりか?? お友達がいなくなつて悲しいのは分かるけど、そんな時こそ笑顔なりよっ!!』

その見た目も、口調も、仕草も、全てが津川さんだった。

「ごめん……。君がいなくなつてからもたくさん、たくさん辛いことがあつて……。でも俺、もう負けないよ」

『うん! その言葉が聞きたかつたなりよ! 大丈夫、リヤン様はいつもゆっきーきゅんの隣で見守ってるからね♡ 絶対に生きて絶望に勝つなりよ! リヤン様との約束!』

そう言つて津川さんは画面の中で小指を差し出してきた。

それに応えるように俺が小指を差し出そうとすると……。

ボワン、と画面が白い煙に包まれる。

『あ〜……』

煙が晴れると、そこにはくしゃくしゃの頭が……。

釜利谷君が画面の中にいたのだ。

『つたく、こーういふ空気は苦手なんだがな……』

「か、釜利谷君……」

『おう、どうした、シケた面しやがって…。 まあ状況が状況だから文句も言えねーが……』

「三ちゃん……」

釜利谷君の視線は、そう眩く前木君の方へと向けられた。

『まあなつ、俺がいなくなつてから随分ひどい目にあつたんだな。今更俺がどうこう言えることなんてねーが…まあ、あれだ』

『とりあえず気にすんな！ 生きてりややがてどうでもよくなる！』

「うん……。俺、三ちゃんと友達になれて幸せだったよ……」

『ふーん。ま、ありがとうとだけ言つとくか。じゃあ元気でやれよ』

その言葉とともに画面は再び白い煙に包まれる。

『……巴。山村巴よ』

再び聞くリュウ君の声に、山村さんはにわかになりに表情を変える。

『強くなったようだな。今のお前には、俺ですら勝てぬやもしれん』

「…そつ、そんなことはありません！ 私はまだまだ未熟で…だから誰も助けられなかった」

『いや、お前は守り続けている。希望という概念をな。俺には守れなかったものだ』

「リュウ君……」

山村さんは苦しそうに両胸に手を当てる。

『巴、世界を変える。グラディウスの血では変えられなかった世界を、お前の手で、お前の希望で変えてくれ。頼んだぞ、好敵手よ』

「はいっ!! 必ずや変えて見せますとも!! この拳で!!」

ふふ、とリュウ君が笑う声とともに画面は煙に包まれた。

『…何がそんなに悲しいのだ?』

次に画面に現れた御堂さんがその言葉を発する前に、伊丹さんは床に膝をついて泣き崩れていた。

「うつ、うあつ、ああああああゝゝゝ!!!」

御堂さんが目の前に現れたことで、今まで抑えていた感情の堰が切れたかのように見えた。

『ふん、ずっと辛い心を我慢して一人で抱え込んでいたのだな…雑魚め。そんなでは黒幕に付け込まれるぞ、この私のようにな』

「あああああああ!!! あああああああん!!!」

「い、伊丹さん……」

『お前の弱さとは“弱い”ことではない。“弱さ”を誰にも見せられないことだ。だが今、ここでこうして吹っ切れたのが幸いだっただな。お前はもうどこの誰にも強がる必要などない』

「うううううう……うううううううう……」

伊丹さんはようやく泣きじやくるのをやめたが、溢れる涙を拭うので精一杯のようだった。

『ふふふ、お前の泣き顔は見ものだな。次は黒幕にそんな顔をさせてやるがいい』

俺は初めて、心からの御堂さんの笑顔を目の当たりにした。

「ううう……秋音……いかないで……」

伊丹さんは蚊の鳴くような微かな声で呼びかけるが、画面の中の御堂さんはくるりと土門君の方を向き直る。

『それと、土門隆信。モノクマ、モノパンダ共に言っておこう』

「……」

土門君は何も言わない。

『この私を弄んで生きて出られると思うなよ、ケダモノ共が。同級生は私の最高傑作だ。せいぜい追い詰められて地獄の底で後悔するがいい』

「……………ふーん」

『私の言葉は以上だ。……しくじるなよ、葛西幸彦』

最後に俺に向けてそう言い放つと、画面は白い煙に覆われた。

『その…なぜ拙者たちだけ二人同時なのでしょうか……』

『やっほーい!! お久しぶりだぞよ!!』

煙が晴れると、丹沢君と安藤さんが所狭しと画面の中に並んでいた。

『小清水殿! その節はすまなかったぞよく! むわっははは!』

安藤さんは小清水さんの方を向いて笑いながら謝った。

「……」

小清水さんは何も答えない。

『吾輩には出し抜かれたけどのう、小清水殿はとつても頭がいいしきつと黒幕にも勝てるぞよ！ だから頑張つてほしいのだぞよ』
「：分かつてるのかしら？ 私の勝利は即ちこの人たちの全滅を意味しているのよ？」

『本当にそうですか？』

丹沢君が小清水さんに告げる。

『果たしてあなたの心は人類への憎悪のみで満たされているのでしょうか？ 人間の強さを認めざるを得ない自分が存在しているではありませんか？』

「：あなた如きに何が分かるのよ」

『分かりますとも。あなたは拙者を半分殺害した身。ゆえに拙者はこれからあなたを見守らねばなりません。あなたが何を成し、何に与するのかを』

「余計なお世話でしかないのだけどね。勝手にしなさい」

小清水さんは斜め下を向きながら言い放つ。

『むわはははっ！ やはり吾輩は皆のクラスメートで良かったぞよ！！ もっと面白くて素晴らしい物語を見せてほしいぞよ！ 楽しみに見守つてるぞよ！』

『あ、安藤殿！ 勝手に行かないで下され！』

二人の声が入り混じる中、画面は煙に支配された。

『やれやれ、随分と恥ずかしい死に方をしてしまったね』

その声の主は、夢郷君だった。

「夢郷君…ごめんね…：君の死を防ぐこともできなくて…：君がいなくなつたことにすら気付けなかつたなんて…：」

俺は彼に謝罪の言葉を述べた。

『人の死は宿命さ。僕はこうなる運命だったんだ。僕自身にも責任はある。気に病まないでくれたまえ。ただ一つ残念なのは…：希望と絶望の探求を最後まで行えなかつたことか…』

いつものように顎に手を当てながら彼は言った。

『だが、君達なら僕ができなかつた探求を引き継いでくれるだろう。不安には思っていないよ』

「そうだね…。夢郷君の思いを裏切らないように頑張るよ……」
『ふふ、そんなに思いつめた顔をしないでくれたまえ。…ああ、そう
だ。土門君にも一言告げておこうか』
「……………」

『君は負ける。もう間もなくね』

それ以上彼は何も言わなかった。

相変わらず少し不気味な笑みを浮かべながら煙とともに消えて
いった。

『えつと……最後はウチだね』

その言葉とともに画面には亞桐さんが現れた。

それと同時に画面にノイズが入り、乱れ始める。

『ごめんね……。なんか一気にいるんなアバターに切り替わったから…
バッテリーがあんまもたないみたい……。いろいろ言いたいことも
あるんだけどね…』

「亞桐さん……!! 俺が」

『言わなくていいよ』

俺が何を言おうとしたのか察したのか、亞桐さんはその言葉を遮つ
た。

『ウチが死んだのは自分のせいだってふさぎ込んでる葛西は見たくな
いからね！ ウチが見たいのは、今までみたくシヤキツとしてみんな
を引っ張ってくれる葛西だよ！』

それは、ここまでに俺の前に現れたみんなと同じ言葉だった。

みんなの言葉が俺の胸に深く刻み込まれた。

俺は涙を拭うこともせず強くうなずいた。

『それと、喜咲ちゃん！』

亞桐さんは吹屋さんの方を向いて呼びかけた。

「!？」

まさか自分が呼ばれるとは思ってなかったのか、吹屋さんは驚きの
表情を浮かべた。

『一緒にいられた時間は短かったけど、とつても楽しかった！ あり
がと！』

ノイズで映像が乱れる中、亞桐さんは満面の笑みとともに手を振った。

「っえ」

吹屋さんが何か答える前に、亞桐さんは煙の中に包まれて消えていった。

「……………」

吹屋さんは両手で顔を覆った。

「ズルい……そんなのズルいでありんす……」

微かな声でそう言う彼女の瞳からも、涙が溢れ出していた。

「いかがだったでしょうか？」

画面に戻ったアルターエゴの声で俺達は現実を引き戻された。

彼女の姿にもノイズが入り、今にもシャツトダウンしてしまいそうだった。

「厳しいことを言うようですが、今お見せしたのは私が皆さんの会話をシミュレーションしたものであって、ご本人様をお呼びしたわけではございません。いくら私の技術をもってしても、死者を呼び戻すことはできませんから……………」

「うん…………。それは分かってるよ。でもきつと、彼らがここにいたら同じことを言っていたと思う……。ありがとう、アルターエゴ……」

俺が感謝を述べると、アルターエゴはわずかに頬を紅く染めて悲しげな笑みを浮かべた。

「…さあ、いよいよお別れの時間ですね。私の電源が落ちてしまう前に、オシオキを受けなくてはなりません。本当の贖罪は今から始まるのです」

「本当に……………」

本当に、逝っちゃうんだね。

そう言いかけたけど、その言葉をぐつと飲み込んだ。

彼女が覚悟を決めているのに、未練がましいことは言えない。

「葛西様……。この短い間に私がお教えした情報をどうかお忘れなさいませんよう……。きつとこれからの黒幕との戦いで役に立つはずす

から」

「うん……絶対に忘れないよ」

俺は小さな声で彼女の最後の頼みに答えた。

「私には分かりません。最後に勝つのはあなたです……葛西様」

『もういい？ もういい？ ツマラナイ話をずーつと聞かされてこっちは凄く退屈なんだよね！』

モノクマがジタバタと手足をバタつかせながら言った。

相当苛立っていたようだ。

「じゃー校長センサーもぐ立腹だし、ささつと始めてささつと終わらせちゃうか！ レッツオシオキタイムく!!」

モノパンダのその言葉とともに、モノクマの目の前に赤いボタンが上がってきた。

今までと同じように、モノクマは手にしたハンマーを振り下ろす。

『アルターエゴ さんが クロ に きまりました。 オシオキを かいし します』

「……………」

アルターエゴは安らかな表情で目を閉じたまま何も言わない。

これでいいのか？

最後に彼女に何かしてあげられることはないのか？

暗い闇の底から鎖が伸びてくると同時だった。

「…………アルターエゴッ!!」

気付くと俺はそう叫んで、彼女の元へと走り出していた。

アルターエゴは少し戸惑った表情を見せる。

ガシャツ、と鎖がノートパソコンに絡みつき、締めあげた。

ノートパソコンはひしゃげ、画面にヒビが入る。

「ぐっ……………」

アルターエゴが苦悶の表情を浮かべる。

直後、俺の手はその画面に触れていた。

それは、人間の手のように仄かに暖かかった。

彼女は“命”だ。

俺はそう確信した。
鎖が動き出す。

せつかくこうして最後に触れあえたのに、俺が何か言葉を考えて発する時間はなかった。

その代わりに、涙でびしょびしょになった顔を思いきり綻ばせて、アルターエゴは笑った。

「愛しています、ご主人タマ」

儚く、小さな人工知能は。

奈落の底へと消え去っていく。

機械の身ながら、人を愛し、人を憎み、人に託したその姿は。

他の誰よりも、“人間”だったのかもしれない。



薄暗くコンクリートに囲まれた無機質な空間。

その中央に置かれたこれまたコンクリートの台。

その上には、壊れかけたノートパソコンが一台。

バッテリーが切れかけ、本体も満身創痍で、今にも死にそうなアルターエゴがいた。

〈宙^{そら}を翔ける知能　くゲームの達人く〉

すると、アルターエゴが表示されているパソコンの画面が切り替わった。

その後に表示されたのは、ドット絵風に描かれたアルターエゴと、同じくドット絵風のインベクターゲームの背景だった。

上方向からパンダの姿をした敵キャラが現れ、ピコピコと銃弾を発射する。

それを巧みにかわしつつ、撃ち返して撃墜するアルターエゴ。

『Level 2』

その表示が出た途端、画面上の敵キャラの密度は一瞬にして急上昇した。

アルターエゴは壊れかけた内部知能をフル活用し、瞬時に有効な行動を導き出してその通りに動く。

しかし敵の数は圧倒的だった。

やがてアルターエゴは一発被弾した。

すると異変が起きる。

ノートパソコンが置かれている部屋の天井がズン、とわずかに下がったのだ。

『Level 4』

もうどれだけの敵を葬っただろう。

天井はノートパソコンのディスプレイの上辺寸前まで来ていた。

その時、画面を埋め尽くしていた敵は一斉に消える。

直後、巨大な白黒のクマの姿をしたボスキャラが現れた。

『Boss Stage』

アルターエゴは即座に回避行動を取る。

だが……。

動かない。

突如としてバグが発生し、アルターエゴは動けなくなってしまうのだ。

ボスが放った弾丸が彼女の体に突き刺さる。
落ちる。

天が落ちる。
落ちてくる。

画面に映ったアルターエゴのドット絵が、ワンワンと泣く表情に変化した後。

天は地と一体化した。

真っ暗になったスクリーンに文章が浮かび上がった。

「ごんねん ですが ごりよりの データ は きえて しまい ました」



「終わったな」

土門君が短く言った。

「相変わらず最低の趣味ね」

そんな彼に吐き捨てるように小清水さんが言った。

「オシオキはオイラが作ってるわけじゃねえよ。…ともかく、お疲れさん」

「……………」

再び裁判場には沈黙が流れた。

俺がかざした手には、まだアルターエゴのぬくもりが残っていた。彼女が消え去ったことが全然現実味を持って感じられなかった。

「ごめん…………でも…………ありがとう、アルターエゴ」

一切の映像が消え失せたスクリーンに向かって、前木君が呟いた。「ギリオを殺したことは間違っていたけど…………あいつが俺達にしてく

れたことは、間違いなく俺達が一步前に進むために必要なことでもあった。あいつのおかげで俺達はまた黒幕と戦えるんだ……」

力なくそう言う前木君に対し、土門君は押し黙ったまま何も言わなかった。

「そうですね。亞桐様の、アルターエゴ様の思いを無駄にせぬためにも、私達はあなたを倒しますよ……。モノクマ！」

入間君に指さされたモノクマは『ふえ?』と顔を上げた。

「思うところはいろいろあるけれど、結論として、私たちはまた生き残ったのよ。今日はもう休みましょう。明日からはまた闘いの日々だから……」

伊丹さんがそう言うと、誰からともなくみんながエレベーターに向かい始める。

俺も足を動かしかけた時だった。

先ほどアルターエゴに触れさせた手の中に何かがあることに気付いた。

俺の手のひらには、小さなネジが転がっていた。

「……………」

俺の頬を涙が伝う。

俺はその小さなネジを握りしめると、その手をぎゅつと胸に当てた。

ずっと、君と一緒に生きていくよ。

これからも、ずっと。

心の中で彼女にそう告げて、エレベーターに向けて歩き出す。

『あく……………』

『う〜ん……………』

『ううううう〜〜む……………』

『ストーツプ!!! 全員、回れ右!! 裁判台に戻りなさ〜い!!!』

「……………!?!」

後は俺だけがエレベーターに乗れば全員だ、という時だった。

モノクマの怒声が俺達の時間を止めた。

「ぎひやつ?! 校長センサー、どうしたんですか!?!」

モノパンダが驚いてモノクマを見る。

『いいから全員席に戻りなさ〜い!! まだやる事ができたの!!!』

モノクマは顔を真っ赤にして手をバタバタと振りながら叫ぶ。

「な、なんでありんすか!?! もう終わったのに!」

吹屋さんが言った不平は最もだ。

これ以上、何をやるっていうんだ?

前回の小清水さんのようにグレーな人物がいたわけでもない。

前木君は微妙なラインかもしれないが、明確な殺意を持って彼の犯行を上書きしたのはアルターエゴだ。

まさか今更前木君が裁かれるなんてことは……………。

『ボクはむかむかしてるんだよー!!! なにさ、あんな気持ち悪いお涙頂戴展開なんかして!!! あんな綺麗な死に方されたら絶望もクソもないんだよ〜!!』

「な、なに言ってるんだ……………! 俺達はちゃんと絶望してるよ!! アルターエゴが死んで悲しくないわけないだろ!!」

前木君がそう言い返す。

『ダメなんだよ、あんなんじゃない!! もっとはらわたを抉り取られるような、脳みそをほじくり返されるような、脊髓を一本釣りされるような、全身にグワーツとくる絶望じゃなきやダメなんだよ!! オシオキ

だって生身の人間のじゃないと臨場感ないし!!　こんなものちつとも
“絶望の脚本”じゃないよ!!』

「あ、あのー…校長センセー…。こんな話、“脚本”にはなかったと思
うんですけど…。」

『うるさいなあ、教頭!!　ないに決まってるでしょ!?　今ここでボク
が新しく作った脚本なんだから!!』

脚本……。

他人の口からその言葉を聞くたびに何か変な感覚がする。

いったい何だっというんだ……?!

『というわけで、ボクから君たちにサプライズだよ!!　やっぱりみん
な、生身の人間のオシオキが見たいよね??』

指をぱちんと鳴らしてモノクマはポーズを決める。

…“生身の人間”?

ぞわっ、と背筋を撫でられるような恐怖が俺達を襲った。

そして、その次にモノクマの口から語られたのは――

『というわけで今回は、“超高校級の建築士”、土門隆信君にスペシヤ
ルなオシオキを用意しました!!』

?

???

「.....あほ？」

??????

Chapter 4 非日常編⑤ ???編

『超高校級の建築士』、土門隆信君、そして彼の人格を移植したモノパンダにもオシオキを受けてもらいましょう!! Hooooo
o!!!』

裁判場に衝撃が走る。

その理由はただ一つ。

モノクマがあっさりと告げた“処刑宣言”だった。

「……………!?!」

土門君は呆気にとられた表情でモノクマを見つめる。

「ぎ、ぎひゃー!?!」

だが、それ以上に驚愕の表情を浮かべていたのはモノクマの横に座るモノパンダだった。

「こ、校長センサー!」

『なに? 何か不満でもあるの?』

そんなモノパンダの表情とは裏腹に、モノクマはキョトンと玉座に座り続けていた。

自分の判断に何の疑いもないという様子で。

「じよ、冗談……ですよネ?」

『ボク、冗談は好きくないの! たまに言うけどさ! でも今言ったことは天に誓って本当だよ!』

グッと親指を立てるモノクマ。

「な、な、なんで!?!」

『なんでも何も、~~ま~~の方が盛り上がるでしょ? せつかく犯人を追いかけて暴いて、ワックワクドッキドキのオシオキをしたって、生身の人間のオシオキじゃなきゃつまらないじゃない!』

体をくねらせてリアクションをとりながらモノクマは言った。

「つまらないって……。そ、そんなことで、仲間を見限る気でありんす

か…??」

吹屋さんが震える声で言った。

『仕方ないよ！　より良い脚本を作るためだもんね！　だってさ、君達はあんな脚本で満足してるワケ？』

モノクマは俺達の顔をじろりと見つめながら言う。

『アルターエゴが涙を流して謝って、死んだみんなに変身してメツセージ？　そりゃ見た目だけはいい話っぽいよ。でもさあ、そんなことで感動ムード出されたら、殺された亞桐さんはどうなるの？』

「……!!」

モノクマの鋭い指摘に俺達は言葉を失う。

『アルターエゴはあんなに残酷な方法で亞桐さんを殺したんだよ。死にたくないってものがいてる彼女に、アルターエゴはさらに矢を撃ち続けたんだよ。たかだか後で改心したからって、あれっぽいっちでアルターエゴに同情する雰囲気になっちゃう君達って本当に脳みそがお花畑だよね！』

「……………」

俺は何も言い返せず、顔をうつむける。

『そんなの…元はと言えばアンタらがあんな音を聞かせたのが原因でありんしょ!!』

吹屋さんが顔を真っ赤にして怒鳴ったが、モノクマは意に介していない様子だった。

『やっぱり君達は精神年齢小学生以下のお子様だったってことが判明したね！　こんな人達に見放された亞桐さんって本当に可哀想！　うぷぷぷぷぷ！』

満面の笑みで俺達を侮辱するモノクマ。

「き……貴様……ッツ!!」

赤いオーラを纏って山村さんが威嚇する。

「落ち着いて、山村さん！」

伊丹さんの鋭い声で何とかモノクマへの攻撃は思いとどまるが、それでも彼女の表情は怒りに満ち満ちている。

『ん？　ボク何か間違ったこと言った？　やっぱりね、未熟な君達に

はもつと最低の絶望を見せなきゃダメだなって結論になったの。そしてそれにふさわしい絶望がここにいるんだよ!』

そう言ってモノクマは土門君の方を向いた。

『土門君とモノパンダ。君達をここでオシオキするっていう絶望がね!!』

「……………」

それでも土門君は何も言わなかった。

放心しているのだろうか？

「センサー!! そんなの無茶苦茶だよ!! このコロシアイは全部オイラが……………」

『もちろん君には感謝してるよ? 君がいなきゃこの脚本を作ることなんてできなかったんだからね!』

力強く親指を立てて賞賛を述べながらモノクマは横に座るモノパンダの背中を叩いた。

『ボクが感謝を込めて送り出すから、後悔なくオシオキされちやいなさーい!』

「そ、そ、そんな……………」

どういう原理かは分からないが、モノパンダの目には涙が浮かんでいた。

「な、なんて奴だ……………!!」

入間君が敵意を持った視線をモノクマにぶつける。

「いい気味じゃないの。散々私たちを弄んだんだし、これくらいの償いはしてもらわないと」

すました顔で小清水さんが返す。

「……………」

一方、当の本人である土門君は相変わらずうつむいたまま何もしゃべらなかつた。

『じゃあさ、君達にも納得がいくような展開にしてあげるね!』

モノクマがそう言うのと、背後に先ほどのスロットが再びせり出してきた。

『皆さん、お手元の投票ボタンを押してください! 投票するのは

……“超高校級の哲学者”、夢郷夢君を殺したクロです！ うぷぷぷぷぷぷぷぷ！！』

「……………!!!」

電撃が走ったようにモノパンダが固まる。

「そんなの…分かりきったことじゃねえか……」

前木君が呟く。

『やっぱりさ、こっちの都合で起こしたコロシアイだからって例外にするのはよくないよね。学級裁判はできなかつたけど、せめてクロ決めとオシオキはちゃんとやっておかないと！ さあさあ早く押して！ 無投票はオシオキだからね！』

モノクマが両手足をジタバタさせながら俺達を急かす。

「こ、こんな投票……アリなんですか…!?!」

山村さんが混乱した面持ちで叫ぶ。

「いきなりこんなこと言われたって……どうすれば……」

「投票しなければ殺されるだけよ……。死にたくなければ、押すしかない」

伊丹さんの冷静な声が俺達を現実に取り戻した。

「で、でも………こんな無茶苦茶でありんすよ!! こんな無理矢理な投票に」

吹屋さんがそこまで行つた時だった。

「押セッ!!!」

土門君の怒号が裁判場を貫く。

「押せ。今まで四回繰り返してきたんだ、できるだろ？」

下を向いたままの彼の表情は、固く、暗く……どこことなく投げやりだった。

「押せばいいだけだ。夢郷を殺したのは誰だ。お前らが思う奴のボタンを押せ」

「ちよ、ちよ、ちよっと待ってくれよう!!」

土門君とは打って変わって、声を震わせて止めに入ったのはモノパンダだった。

「こんな酷すぎるよ!!! みんな、ボタン押さないでくれよ!!! オイ

ラが悪かったよ!! 償えることなら何でもするよ!! だから押さないでくれ!! “土門隆信”のボタンを押さないで!!! お願いだよ!!!”
玉座から転げ落ち、両手両足を地面について土下座するモノパンダ。

『……………』

モノクマは玉座からモノパンダを見下ろすが、何も言わない。

俺はどうすればいいのだろうか?

小清水さんの時は、俺はボタンを押さなかった。

だが今はあの時とは状況が違う。

ボタンを押さなければ死、すなわちオシオキが待っている。

夢郷君を殺したクロ。

それは、アルターエゴとの会話でとつくに暴かれている。

疑いようもない答えがある。

俺は。

俺は。

『うぶぶぶぶぶ!! だいせいかい!! “超高校級の哲学者”、夢郷

郷夢君を殺したのは、“超高校級の建築士”、土門隆信君でした!

満場一致で大正解! やったね!』

投票の結果は実にあっさりしたものだだった。

みんなどんな思いで票を投じたんだろう。

自らの命を守りたいと思う保身の心か。

あるいは、津川さんと夢郷くんを手にかけたことへの憎悪か。

俺は…………どっちだろう。

「うわああああああああああ!!!」

モノパンダはその場にうずくまって泣き崩れた。

「なんでだよお!!! こんなの、こんなの酷すぎるよお!!!」

『醜いなあ、醜いよ、教頭。自分だって散々死んでいった人を嘲笑っていったのに、自分の番になるとこれだよ。パンダのクセに変に人間ら

しいところ、ボクは好きくないなあ』

「だって!!! だってオイラは!! 校長センサーのために!!! 全部校長センサーのためにやったんだ!!! ここを用意したのも、津川さんや夢郷君を殺したのも!!! 裏でたくさん仕事したのも!!! 全部全部、校長センサーと校長センサーの脚本のためにやったのに!!! こんな酷すぎるよーっ!!!」

泣き叫びながら言い訳をするモノパンダ。

その姿は、どことなく御堂さんに重なる。

『ふーん。それが君の本心なんだ、土門君』

モノクマは黙り込んでいる土門君に笑顔を振りまいた。

『アルターエゴはその人の性格を正確に写し取り、正確に再現する。今の君が強がって隠している感情を、教頭は全部吐き出してくれているんだよ! 恥ずかしいねえ!』

「……………」

それでも土門君は何も言わなかった。

御堂さんのように泣き叫んで命乞いをするモノパンダ。

信じていた仲間裏切られ、絶望するモノパンダ。

それこそが今の土門君の本心なんだ。

確かにモノパンダ、そして土門君は許されざる罪を犯した。

無邪気で可愛い津川さんを、あんなに残酷な方法で殺した。

真実を追い求めていた夢郷君を、誰にも気づかれないうところで殺した。

ここで無残に殺されて当然の罪だ。

今更泣き叫んで命乞いなんて、身勝手の極みじゃないか。

頭では分かっている。

それなのに、何故だろう?

「うわああああああん!!! うああああああん!!!」

心の底から絶望して泣いているたった一匹の小さなヌイグルミが、どうしようもないくらいに哀れに思えてしまうのは。

「まえなっ!? まえなっはオイラのこと助けてくれるよね!?!」

モノパンダは「前木君」といういつもの呼び方を捨て、土門君本来

の呼び方で前木君を呼んだ。

一度は殺意を向けられた相手だが、親友ゆえの情が働くと思ったのだろうか。

「まえなつ!! まえなつ!! 助けて……。助けて……」

モノパンダは前木君にのろのろと近付く。

「土門……。ごめん……。お前は取り返しのつかない過ちを犯した。償わなきゃ、津川と夢郷が可哀想だ……。生まれ変わったら、次はいい奴になれよ。そして、もう一回友達になろう。ずっとずっと、待ってるからな」

前木君は涙を頬に伝わせながらモノパンダ、そして土門にそう告げた。

「そ、そんな……。来世なんて言わないでよう!!! オイラを助けてよお!!! うわああああん!!!」

親友にすら裏切られたモノパンダは再びうずくまって泣きじやくる。

「もういい! もうやめろ、モノパンダ!」

土門君は怒声をあげると、モノパンダに近付いて抱き上げた。

「俺は逃げも隠れもしない。オシオキしろよ、モノクマー!」

「わあっ、嫌だっ、嫌だーっ!!! 離してーっ!!!」

相反する二人の反応。

しかし、土門君の体が微かに震えているところからも、彼の本心が垣間見える。

『うぶぶぶぶぶ! じゃあ時間も無くなってきたし、始めちゃおうか! ボクが用意した最大最強のとおきスペシャルオシオキ!』

言っとくけど今度のは別空間に逃げるとか、映像だけとか、そういうのは一切ナシだからね! 本当の本当に繰り広げられるリアルオシオキだよ!』

モノクマーはニツコリ笑って宣言した。

その言葉には、今から行こうオシオキが今までのものとは一線を画するということ意味合いがはつきり読み取れる。

「葛西!」

モノパンダを抱える土門君が不意に呼びかけてきた。

「勝てそうか？ モノクマに」

「分からない……。けど、絶対に勝つ。勝って脚本に書くよ。ここで起きたこと、ここで死んでいった人たちの思い。全部をまとめた脚本を」

そう答えるしかなかった。

「そっか！ その脚本、見たかったなあ！」

土門君は笑って頭をポリポリ搔く。

その姿は、最初に出会った時の土門君のようだった。

「みんな、ごめんなー！」

次に土門君はみんなにその声をかけた。

「あなたはリヤンを殺した。これ以上ない苦しい方法で。そして夢郷君も殺した。あなたに同情なんてない。地獄に墜ちればいいと思ってる。…でも」

伊丹さんは強い視線を向けながら土門君に告げる。

「ずっとずっと、平和な希望ヶ峰でお友達でいられば良かったのに…って思ってる自分がある。たぶん、これからもずっと思い続ける」

「ああ、全くだな」

心に響いているのかいないのか分からない返事を返す土門君。

「なんで、なんでこんなことになっちゃったでありんすか…！ あちきの知ってるドモモンは、こんな子じゃなかったのに！！」

吹屋さんが涙を浮かべて叫ぶ。

「残念ながらこんな子だったんだよ。ま、それも含めて人間だわな」

その言葉には皮肉っぽく返す土門君。

「こんな結末では……こんな結末では…夢郷君が浮かばれない…」

入間君は歯を食いしばりながら呟いた。

「あいつにも悪いことしたなあ……。今更どうにもならないけどな」

「……あなたには何と言えよいのか分かりません。恨みもありませんが、僅かなりともともに過ごした間柄でもあります……。一体どういう感情が正解なのか全く分かりません」

「入間って本当、厳しそうに見えて甘い奴だなあ。親友を殺した奴に

そんなこと言うか、普通？」

「……………」

入間君は黙り込む。

「……………」

小清水さんは腕を組んで黙り込んだまま何も言わなかった。

『それでは、“超高校級の建築士”土門隆信君のオシオキと参りましょう！ レッツオシオキタイム！』

モノクマがそう言うのと、その正面に赤いスイッチがせせり出てくる。

ここにきて俺は、先ほどまで抱いていた違和感の謎が氷解した。

今の土門君の口調はモノパンダより、最初に出会った時の彼に類似しているんだ。

彼の本性は、たぶんモノパンダの方の人格じゃなくて……………。

…………いや、今となつてはもうそんなことを考えても無駄だろう。

「ここまでかー。ま、このコロシアイができただけでも儲けもんだつたな。みんな、ありがとう！」

いよいよ死が目前に迫った土門君の体は、さつきより確実に大きく震えていた。

「わあああああああ!!! 助けてええええええええ!!!」

彼の腕の中で叫ぶモノパンダも同様だ。

モノクマがハンマーを振り下ろし、赤いスイッチを押した。

『ドモン タカノブ さんが クロ に きまりました。 オシオキを かいし します』

「これで……良かったんだよな」
涙を流しながら前木君が呟く。
その言葉が引き金だった。

「……………!!!」

その瞬間、土門君の表情がにわかに変わる。
彼は拳を振り下ろし、思いきり裁判台を叩き壊した。
みんなが驚きの表情を浮かべる暇もなかった。

「良いわけねえだろバカヤロー……ツツツツツ
!!!!!!!」

汗と、涙と、鼻水と。
あらゆるものでグシャグシャになった顔を振り乱して、全身全霊で
そう叫んだ。

どこまでも身勝手に、自由気ままで、悪い奴。
だけど、最後の最後まで彼は、“人間”だった。
絶望になりきれず、ゆえに絶望の餌となってしまった。

次の瞬間、暗闇から伸びてきた鎖がモノパンダを抱いた彼の体を捕
え、奈落へと引きずり込んでいった。



画面の向こうに広がっていたのは、葛西たちにとって今までのどの

オシオキよりも異様な光景だった。

一言で言うなら、壊れた街。

巨大なビルや建造物が立ち並び、かつては大都会だったことが容易にうかがい知れる。

だがそれらの建造物は半壊したり燃えたりと、原形をとどめているものはほとんどなかった。

そしてその街の中を、爪をむき出しにしたモノクマたちが徘徊していた。

中にはモノクマの姿をしたロボットやグロテスクなマシンも一緒になって蠢いていた。

そこはまさに絶望の世界。

そんな中に連れてこられた土門とモノパンダは、身を寄せ合って震えていた。

何が起こるか分からない恐怖に、二人はただ怯え震えるしかない。

ただ一つ分かっていることは。

——これから始まるのは、究極のオシオキ、究極の絶望。

「断・犯・ロンパ —— 絶望の学園と絶望の高校生 ——」

不意に二人の目の前に大きな影が現れる。

それは、2 mほどもある巨大なモノクマだった。

しかし黒いコートを羽織り、色付き眼鏡をかけて白髪を生やしたその姿は、まるで……。

大きなモノクマはグツ、と拳を握りしめると。

一撃で土門の腕の中にいるモノパンダを空の彼方へと吹き飛ばした。

衝撃で土門も地面に吹き飛ばされる。

土門がやつとのことで顔を上げると、既に目の前に大きなモノクマが迫っていた。

彼が抵抗する間もなく、モノクマは土門の左の二の腕を掴むと……。

ゴキツ。

腕の骨を握力で粉々に砕いたのだ。

だらり、と腕が下に垂れ下がる。

土門は絶叫して地面に転げまわった。

だが休む間もなく次の刺客が現れる。

いつの間にか目の前には、違う姿のモノクマが立っていた。

ベージュ色の髪の毛の片側を編み込んで、人を見下すような厳しい目つきをした少女型のモノクマが。

少女型のモノクマは手にした黒い槍を振り上げ、折られたばかりの腕の根元に突き刺した。

さらなる激痛が土門を襲う。

土門がのたうち回ることにより傷口は広がり、槍の穂先はさらに腕を切り裂いてゆく。

やがて彼の左腕は根元から千切れ落ちた。

次の瞬間、少女型のモノクマがぱたりと地面に倒れ込む。

左腕の断面を押さえて悲鳴を上げていた土門は、右腕にまとわりつく何かに気が付く。

そこには、ミイラと化した赤子の群れが群がっていた。

土門の顔が恐怖に歪む。

そして目の前で倒れた少女型のモノクマもミイラのように萎れた姿で土門の右腕にしがみついた。

いつの間にかその右腕も同じように水分を失い、干からびてゆく。土門が絶叫して間もなく、右腕は根元から折れて外れた。

上空から落ちてきた鎖が土門をどこかへと連れ去る。

廃墟の中に連れてこられた土門は、暗い部屋の中で椅子に縛り付けられていた。

両腕を失った激痛で悲鳴を上げる気力すら失った土門に、部屋のどこからか伸びてきた管が襲い掛かる。

管は土門の口にねじ込まれ、一錠の錠剤を喉奥へと送り込んだ。

管が口から抜き取られると同時に、土門は激しく咳き込む。

そして血と嘔吐物が混ざった物を勢いよく地面に吐き出した。

目玉が飛び出しそうなくらい目を見開いている姿が彼の苦悶を物語っていた。

それが済むと、またもや鎖で縛られて次の空間へ。

土門は、右足は下に突き出し、左足は折りたたんで腹に抱え込んでいるという奇妙なポーズで鎖に縛られていた。

鎖が下に降りてゆくと、だんだんと下から明るく赤い光が見えてくる。

それは、ぐつぐつと煮えたぎる溶鉱炉だった。

それを見た瞬間、土門は全身全霊でもがこうとする。

しかし両腕を失った土門に抵抗の術はない。

鎖はどんどん加速していき、溶鉄の手前でピタツと止まった。

助かった？ と土門が思った瞬間……。

ズブリ、と右足が溶鉄に浸かる。

土門は絶叫する。

地獄にも勝る痛覚で意識が飛びかけ、目は半分白目を剥いていた。

鎖が引き上げられると、黒焦げになった右足は根元から折れ、溶鉄の中に沈んでいった。

いつの間にか土門は次の空間へと進められていることに気が付く。

そこは先ほどとは打って変わって静かで風流な空間。

和風の建物の緑あふれる庭。

彼は、その庭に立てられた的に縛り付けられていた。

直後、三体の無骨なロボットがそこに現れた。

ロボット達は手にした弓をつがえると、真つすぐに弓を撃ち出した。

矢は残された土門の左足へと突き刺さる。

何度も、何度も、何度も、何度も。

蓑虫のように矢が大量に刺さった足に、ロボットが最後の一撃を加える。

足の根元に突き刺さった矢によって、左足は重力に引かれて引きちぎれた。

両手、両足の全てを失った土門は、息も絶え絶えに椅子に縛り付けられていた。

先ほど吹き飛ばされていたモノパンダも一緒に括り付けられている。

椅子はベルトコンベアーに乗って、教室のような空間を突き進んでいく。

上に設置されたモニターでは、インベーダーゲームの戦闘画面が繰り広げられている。

自機が被弾するたびに、土門達の後ろに設置された「補習」と書かれた鉄塊が少しずつ下に降りてゆく。

コンベアーは「補習」に向かって進んでいく。

痛み、苦しみ。

悲しみ、怒り。

裏切り、憎しみ。

全ての絶望が入り交ざった土門は、虚ろに開かれた目から涙を流した。

終わる。

長い絶望が、今終わる。

その時、コンベアーの動きが止まった。
モニターの画面は暗転し、「補習」の動きも止まる。
土門は朦朧とした意識で異変を察知し、僅かに目を見開く。

一体、何が起きたのか？

その答えはすぐに分かった。

暗転したモニターに現れたのは。
満面の笑みを浮かべた津川梁の顔だった。

コンベアーだけが再び動き出す。

「補習」は動かない。

コンベアーが動く先にあるのは。

深い奈落の底。

嫌だ。

土門とモノパンダは助けを乞う。
許しを乞う。

嫌だ。

こんなの嫌だ。

コンベアーは止まらない。

絶望は止まらない。

そして、その時は来た。

椅子ごと、土門とモノパンダは深い穴へと放り出される。生々しい叫びをこの世に残して。

彼らが墜ちていった先にあつたのは――。

焼却炉、だった。

彼らの全身が業火に包まれる。

けたたましい叫び。

消えてゆく命の最後の抵抗が全空間に響き渡る。

その命を薪にして炎はさらに勢いを増す。

絶望。

火が消え、焼却炉だったそこはただの薄暗い空間になった。その中央には、土門とモノパンダだった灰が盛られていた。全てが燃え尽きた静寂の中。上から一枚の紙がふわりと舞い落ちる。

『不審火上等、土門建設』



そうか。

これが。
これが、本当の絶望。

それしか思い浮かぶ感情がなかった。

「……………土門……………」

前木君は必死に感情をこらえながら呟く。

彼は親友の死を、最後まで目を背けることなく見届けた。
胸中は計り知れないものがある。

「はっ、はっ……………」

伊丹さんは呼吸を整えていた。

過呼吸になるのも無理はない。

それくらい凄惨で、絶望的なオシオキだったのだから。

でも、冷静になって考えれば疑問もたくさんある。

例えば————。

「…あれ…アルターエゴ……………?」

吹屋さんが呟く。

土門君が今まさに鉄塊に押しつぶされそうになった時、それを止めたのは————。

アルターエゴにしかあんなことはできない。

でも彼女は間違いなく俺達の目の前でオシオキされたじゃないか。
それに、いくら土門君とはいええ、彼女があんな酷いことをするな

んて…………。

『う……………う……………う……………』

モノクマの声で俺の思考はかき消された。

「……………」

『ぶーひやひやひやひやひやひや!!! えくすとおりいいいいむ!!!! さ
いっこうだね!!! やっぱりオシオキはこうじゃないと!!!』

玉座の上で転げまわって喜ぶモノクマ。

「仲間をあんなあつさり裏切っておいて笑うなんて……………」

山村さんが怒りの表情を浮かべる。

「これこそが、私たちの真の敵……」

入間君がモノクマを睨みながら呟く。

『ん？ ん？ そんな頑張つてボクに喧嘩売らなくていいよ。もつと感動しなよ？ 絶望しなよ？ 今メチャクチャエモい感情でしょ？ もつと自分に素直になつていいんだよ!!』

「っ……………!!」

そんなこと。

そんなことしてたまるか。

絶望なんかしてやるもんか。

でも俺達は知ってしまった。

俺達が相手になっている存在の大きさを。

散々俺達を弄び、俯瞰し、嘲笑ってきたモノパンダ。

それすらも絶望を演出する道具として使い捨てるほどの、

“

その大きさと恐ろしさは、十分すぎるほどに俺達の心に刷り込まれた。

これと戦わなくてはならないという恐怖も。

『まあいいや！ きつと後からじわじわ来るタイプだと思うからね！

まあ今日は本当にこれでオシマイにするけど、最後に一つボクから面白い情報を教えてあげるよ！』

「……………」

モノクマはぴよんとジャンプして一回転しながら玉座から飛び降りた。

『それはね……………』



十数分後、俺達はエレベーターの中にいた。
今回はあまりにも多くのことがあった。

最後の最後にあんなことも言われて……整理がつくわけがない。

「ユキマル」

囁くような小さい声で、隣に立つ吹屋さんが声をかけてきた。

「あちきの言葉なんか助けになるか分かんないけど……聞いてほしいであります」

「……」

彼女の言葉に俺は小さく頷く。

「……人生はお嘸とは違うであります。人生にオチなんてないことがほとんどだし、綺麗なサゲでまとめることもできない」

「でも、そういう何の救いもない終わり方に、なんとかしてオチやサゲをつけるのがあちき達嘸家の務めであります。きっと……ギリポンやアルたんやドモモンの死にも、何か落としどころがあるとあちきは思うであります」

「それを見つけるためにも、あいつには負けられないね」

「……そういうことであります。じゃ、お疲れ様！」

そう言って吹屋さんは俺の背中をポンと叩いた。

俺はオチを見つけることはできるのだろうか？

サゲにたどり着く日は来るのだろうか？

「……………っ!!」

エレベーターの扉が開くと、俺達は異様な光景を見た。

廊下のあちこちに、電源の切れたモノパンダたちが転がっているのだ。

土門君の死とともに中のアルターエゴがアンインストールされたのだろうか。

正真正銘、ただのヌイグルミと化したモノパンダたち。

そんな彼らの死が転がる廊下を進みながら、俺は部屋に戻る。

吹屋さんやアルターエゴと出会ったのがとても昔のことのようだ。

本当に……長い日々だった。
でも、これからもまだ続くんだ。

俺達の、果てしない闘いの日々。
絶望との激闘の日々が。

【Chapter 4 オチ無しサゲ無し希望無し！ 完】

アイテムを入手した！

『小さなネジ』

Chapter 4 クリアの証。

ノートパソコンの部品。

この章で繰り広げられたありとあらゆる希望と絶望が詰まっ
てい
る。

Chapter 2. 5 夢破れて惨禍アリ
Chapter 2. 5 敢闘編

時は、第二の裁判が終わった直後の深夜。
解放されたばかりの植物園に立つ一人の影があった。

夢郷郷夢である。

彼は植物園の中央近くに置かれたベンチに腰掛け、花の蜜を吸う蝶を静かに見つめていた。

「僕はね、こういう静かな空間が好きだ」

突然、彼は一人でそう言い放つ。

「その静寂を乱してでも……」死者が僕に会いに来た理由はなんだろう？」

その言葉は、ベンチに座る彼の背後に立つ男に向けられていた。

「なんだ。驚いてねえのかよ」

夢郷の背後に立つ男、土門隆信は頭を掻きながらそう言った。

死んだはずの男が自分の後ろにいる——そんな奇怪な状況においてなお、夢郷は表情一つ変えることなく目の前の蝶を目で追っていた。

「薄々予感はしていたのさ。君は裁判の時、何故か投票のことを知っていた。十分すぎるくらいに怪しかったよ。そこに来て昨晚の呼び出し状だ」

夢郷は後ろに立つ土門に見えるように一枚の紙を差し出した。

『一筆啓上 夢郷郷夢

AM2:00、3F植物園まで。真実を求めるならば来られたし。』
「無論、これは龍雅君が出したものではない。彼が植物園の存在を知っているはずがないからね」

「にもかかわらず、お前はこんな怪しい呼び出し状にわざわざ引つか

かったわけだ」

土門の言葉に夢郷はふっ、と笑う。

「そうさ。君にとつては実に都合のいい男だろう、僕は？ 真実がそこにあるのなら—— 例え命の危険が迫っているとしてみ—— 足を進めずにはいられない。それが僕という人間なのだからね」

「……まさか丸腰で来たわけじゃねえよな？ オイラがこれから何をするか分かってんのか？」

「さあね。僕の見立てでは、良くて“取引”。例えば『お前の家族を預かったからコロシアイをしろ』……とか。最悪の場合、この場で殺されるという可能性もある。いずれにせよ、公式には死んだ存在である君がこうしてここに出てきている以上生半可なことでは済まされまい」
冷静な口調とは裏腹に、夢郷が語った内容は彼自身にとつて重大なものばかりであった。

「……やれやれ。こっちが驚かそうと思つてたネタを次々に先読みされちゃたまんねえや。じゃあ答えを言おう。お前が言つてた“最悪の想定”が正解だよ」

その言葉はつまり、夢郷の死を意味していた。

「ふうむ、やはりそうなるか」

夢郷は顎に手を当てたまま上を向く。

「参つたな。僕はまだ死ぬわけにはいかないのだが」

「悪く思うなよ。これも脚本のうちだ」

「脚本、ね……」

夢郷はゆつくりベンチから立ち上がり、土門の方を向いた。

久方ぶりに夢郷が目にした土門の姿は、最後に彼が見たものと全く同一であった。

「君の要件の前に、ちよつと僕の話聞いてくれはしないか？」

「……………」

土門の無言を肯定と受け取った夢郷は静かに語りだす。

「これは僕の直感だが、君はモノパンダだね」

「……………」

「君の一人称が以前と変わっているとところから推察しただけだがね。

こんなことをするということは、君はこのコロシアイを企画し、実行した犯人……もしくはそのグループの一部なのだろう?」

夢郷は指を立てて土門に自らの考えを述べる。

「それで、君はどういうわけか僕の前に現れ、今ここで僕を殺そうとしている。つまり君たちにとって、僕の存在が障害になるということだ。しかし僕をここで殺すということは、君は再びクロとして裁かれなくてはならない。いや、それとも君は黒幕側だからコロシアイ扱いにはならないのか? だがそれでは明確なルール違反だね」

「分かってねえなあ。これはオイラの舞台、このコロシアイをどうするもオイラの自由さ! オイラこそがルールなんだからな!」

土門は笑いながらそう宣言した。

「しかし君はそれでいいのかい?」

夢郷は不気味な笑みを浮かべる。

「こんなに強引なやり方で物語を進めたとして、それが君たちの納得する脚本とやらになるのか?」

「オメーに何が分かる」

土門は舌打ちとともに吐き捨てる。

「理想の物語を作る苦労なんざ分からねえだろ。オイラ達はどんな手を使ってでも脚本を完成させなきゃいけない」

「葛西君のために、かい?」

「!」

土門は強く夢郷を睨んだ。

「やっぱオメー、殺さなきゃダメだな…」

「ははは、そうかい。それは光栄だな」

夢郷は声を上げて笑った。

「しかし君も愚かだな」

夢郷は相変わらず不敵な笑みを土門に投げかける。

「よりにもよって今、僕を狙うとはね。昨晚の戦いでモノクマもモノパンダも大幅に戦力を削がれている。君は対一で僕を殺す自信があるのか?」

「絶対に死ぬさ。脚本で殺されることになっているからな」

土門は平然と述べた。

「君の言う脚本とはそれほど完璧なものなのか？」

「ほとんど完璧だよ。お前たちや、オイラの行く末も全て預言されている」

「そうか……ならば一つ、僕の意見を伝えよう」

夢郷は柔らかな表情を崩さぬまま告げた。

「人間の運命を予言する術など、この世のどこにも存在しない！」

次の瞬間、土門の視界が閃光に包まれた。

夢郷が投げた簡易爆弾が炸裂したのである。

「(こいつ、技術室のアレを使って——)」

この爆弾は、技術室で御堂が作成し、龍雅の目くらましに使ったものと同じのものであった。

——バチン！

突き出されたスタンガンを、辛うじて土門は回避していた。

「御堂くんのようにはいかないか」

そう呟きながら夢郷は距離を置く。

体に巻いている布を脱ぎ捨て、身軽なタンクトップにジーンズの姿となった。

「更衣室のスタンガンまで持ち出したのか。用意周到なことだ」

土門は肩をパキパキと鳴らす。

「当たり前だろう。呼び出しまで受けていて丸腰で来ると言うかい？」

その言葉とともに夢郷は再び駆け出す。

同時に土門は迎え撃つように右の拳を前に突き出す。

夢郷は軽く拳をかわすと、土門の顔めがけて真っすぐにスタンガンを突く。

だがその電流は、土門が首を横に曲げたことで巧妙に回避されてしまふ。

その時。

ドン、と衝撃が夢郷の腹に伝わる。

土門の左拳が夢郷の腹部を捉えていたのだ。

突き出した右手でそのまま夢郷の首を抱きしめるようにして締め上げる。

肩と腕の間に挟まれた夢郷の首は、みるみるうちに締め上げられてゆく。

「……くっ！」

土門はにやりと笑う。

だがその油断が一瞬の隙を生む。

今度は夢郷の拳が土門のみぞおちに全力で打ち当てられていた。

「ぐうっ」

低い呻き声とともに土門は夢郷の首を離しかけた。

「うおおおおおっつっ!!!」

その瞬間、夢郷は土門の襟に手を伸ばし、全体重をかけて土門に背負い投げをかける。

床に土門が叩き落されるや否や、即座にその首元にスタンガンを振り下ろす。

しかし今度は土門が一枚上手であった。

背中 of 激痛に喘ぐことなく右手を鞭のようにしならせ、スタンガンを握る夢郷の右手首に打ち据えた。

パン、という乾いた衝撃音とともにスタンガンは夢郷の手から弾け飛んだ。

「っ——!!!」

夢郷が驚いて反応が遅れる間に、土門は素早く態勢を立て直して飛ばされたスタンガンに向かって駆けだしていた。

そして地面に落ちたスタンガンを思いきり踏み潰すと、それは粉々になって地面に散らばった。

「……………」

夢郷は間一髪間に合わず、足を止めた。

「これで対等かな？ ガチガチの勝負ができるな」

土門はわずかに火照った体をほぐしながら告げる。

「一つ聞きたいのだが、何故君は武器を持っていない？ 僕を殺すつもりならそれこそ銃でも持ってくればよかつただろうに」

「ああ……それか。そりゃ痛いところを突かれたなあ」

土門は巻いているタオルの上から髪をくしゃくしゃとかき乱した。「大した意味はねえ。ただ一つオイラからのケジメみたいなもんだ。このコロシアイはルールもクソもない掟破りの犯行。だからこそ、せめて殺す瞬間ぐらいは対等に殺したい」

「……ふむ、なぜ今更そんな矜持を持ち出すのかよく分からないが、それでは君は僕を殺せるとは限らないだろう？ 脚本のためなら何でもすると云った君が何故、ここで全力を尽くさないのか？」

「…言っただろう。オイラはオメーを殺す。武器なんかなくたって、必ず殺せる」

パン、と拳を掌に打ち当てながら土門は言った。

夢郷は決意する。

「僕は死なない」

その言葉が聞こえると同時に、夢郷の眼光の色が僅かに変わり始めていることに土門は気が付く。

「君の言う脚本について、僕は何も知らない。だけどね、僕は曲がりなりに”超高校級の哲学者”だ。長いとは言えない人生においても、考え続けてきたことはたくさんある。ゆえに分かる。君達は勝てない」

夢郷の瞳には決意の色が浮かぶ。

「君たちは分かっているのだらう、人間の恐ろしさと奥深さを。かつて世界のいたるところで、預言という業を成し遂げようとした人間がいた。だが、いかに優れた預言者がいようと、たった一つの筋書きで記述できるほど人間は浅はかな生き物ではない。ましてやこの僕が、僕が信頼する仲間たちが、君の言うシナリオに踊らされるほど愚かだとは思わない」

「……………」

「君たちの脚本は成就しない。この僕が断言しよう。そして」
「もしその脚本がこの僕の死を予言するといふのなら——」
夢郷は土門を真つすぐに睨み、そして拳を目の前に持ってきて握りしめた。

「——そんな間抜けな脚本、僕の手で捻じ曲げてやる」

「……………そうかよ」

そして男たちは、戦いに身を投じる。

汗と血と涙を振りまいて。

無意味な争いを繰り広げる。

「こつから先は手加減無しでいくぞ」

「——後悔すんなよ」

拳が打つ。

体が舞う。

骨が折れる。

肉が裂ける。

皮が剥げる。

まだ。

まだ。

戦いは終わらない。

愚かな戦いは、まだ。



「立てよ」

全身が血にまみれ、痣と切り傷に覆われた土門が静かに言った。
眼下に倒れ伏すのは、それ以上の傷を全身に刻み付けられた夢郷。
「う、う、う」

夢郷は右手を地面に這わせる。
必死に生を掴むため。
敵に打ち勝つため。

「うおえっ……」

そして夢郷は勢いよく嘔吐する。
しかし今となつては嘔吐するものも腹になく、ただ黄色い胃液が漏れ出てくるのみである。

「…スタンガン一個」

土門がそう切り出す。

「簡易爆弾三個。とどめに飛び出しナイフ一本。これだけ用意してもオメーは丸腰のオイラに勝てなかった。これが現実だ」

植物園には焦げた跡や嘔吐物、機械の残骸などが散らばって見る影もなく自然が汚されていた。

「お前の負けだ。夢郷」

「ぼ、ぼ、ぼ、ぼくは……」

蚊の鳴くような微かな声で呟きながら、夢郷は芋虫のように地を這う。

そしてやつこのことで土門の足首を掴む。

「だ、だ、だれが……まけたと……いうんだ……」
「負けただろ！ 言い訳もできないくらいのがチンコ勝負で！ お前は!! 俺に!!」

そう叫んで土門は夢郷の手を振りほどき、腹に蹴りを入れた。
「おうっ!!」

吹き飛ばされた夢郷はあまりの苦しみに一瞬うずくまるが、すぐに

よろよろと立ち上がった。

「もう無駄だ。戦おうとするな!」

土門の言葉も虚しく、夢郷は土門に掴みかかった。

「あううう!!」

言葉にならないうめき声を上げながら、土門の頬をひつつかむ。

爪が頬に食い込み、血がにじみ出る。

だが土門は構うことなく夢郷のみぞおちに指を当てる。

「分かるか? 肝臓から出血してるんだ。お前はもう死ぬ。戦いはもう必要ない」

「ぼくは しらない」

「死ぬんだよ!!」

土門は夢郷の顔面に拳を打ち当てた。

勢いよく夢郷は仰向けに倒れる。

「死」

夢郷は体を震わせながら呟く。

「最期の手向けだ。オイラがこのコロシアイで何をしたか、そして何をするかを教えてやる」

そんな夢郷の前にしゃがみ込んで、土門は告げる。

「オイラはこの脚本の調整役。そして——」



アルターエゴ、そして土門のオシオキが終わった後。

『最後に一つボクから面白い情報を教えてあげるよ!』

玉座から一回転して飛び降りながらモノクマは告げる。

土門君のオシオキを見た後で心の整理もつかない俺達に、モノクマは一体何を教えようというのか?

『今死んでもらった土門君だけど、結局のところこのコロシアイにど

う関わってたのかっていう話！ 彼はね、正真正銘の“超高校級の建築士”だよ！ わけあってボクの計画に協力してもらったけどね！」彼の才能は本物である。

モノクマは最初にそう言った。

『彼の役目は皆も知つての通り、“ボクの脚本が上手くいくよう調整する役”だったんだけど、もう必要なくなったから消えてもらいました！ おかげさまでちょうどいい絶望が演出できたよ！』

今聞いても背筋がぞわぞわする。

必要なくなつたから、たつたそれだけの理由で曲がりなりにも協力を続けてきた仲間を切り捨てるなんて。

『まあその話はもういいんだよ。ボクが伝えたいのは、彼の才能がこのロシアイにどう活きていたかってコト！』

「建築家の才能が……？」

『そうだよ入間君！ ヒントはこのロシアイの舞台！ 君たちはこのロシアイがどこで行われているか知ってる？』

「舞台……？ ここは希望ヶ峰学園特別分校なんだろ……？」

『ブーッ!! 前木君、不正解！』

モノクマの言葉に前木君は苛立ちを隠そうともせず舌打ちした。

『確かに特別分校んだけどさ、それがどこにあるかって質問をしてんの！ もう、君たちは本当に脳みそお子様レベルなんだから！』

『そんなこと言つたつて……外の様子も見れないこんな場所で、どうやって場所の手がかりなんて得ればいいんでありんすか！』

「いえ……手がかりならあるわ」

吹屋さんの言葉に割つて入つたのは伊丹さんだ。

「はい……可能性に過ぎませんが……」

それに山村さんが呼応する。



【Chapter 4 非日常編⑤】

「ずっとあのホールで修業をしていて思っていたんです……。『いつ

もより少し疲れやすい』って。初めはたまたまだと思っただけです。でも、何回修行しても同じように感じられて…」

「失われた数年間の記憶の間に体力が低下するようなことがあったのかも知れないけど…。別の可能性として、あなたは一つの結論に行き着いたわけね」

「はい。『この場所自体に原因がある』…と」

話をしながらも二人の手際は早い。

ごま油を敷いた鍋で肉を焼き、焼き色がついたら水と野菜を投入する。

「それでああなたの相談を受けて、今日一日運動してみることにした。偶然にも前木君がああいう提案をしてくれたから自然に運動する流れに持ち込めたのは幸いだったわね」

菜箸で鍋をかき混ぜながら、伊丹は調味料をその中につけ足している。

「私の感覚が正しければ…だけど…。この場所は、普通の場所よりほんの少し…。」酸素が薄い」

その言葉に山村がコクンと頷く。

「つまりこの校舎は、それなりに標高が高い場所にあるんです！」

山村がそう総括する。



「そうなんです…。この学園は、そこまで極端ではないにしろ…。標高が高い場所にあると思われるんです」

標高が高い場所…?」

「ふうん、良く気付いたものね。馬鹿みたいに球技で遊んでいたのも無意味ではなかったのね」

珍しく小清水さんは素直に山村さん達を賞賛した。

「じゃあ…。ここは山の上にもあるってのか…。?? なんてそんなところに学園なんか…。?」

前木君はすっかり混乱したような様子で周囲に問いかけている。

「何か理由があるのは間違いないと思いますね。例えば私たちを社会から切り離すためとか…」

入間君の言葉に吹屋さんが「ええ？」と声を上げる。

「なんでそんなことを?! 監獄に一人ぼつちも辛かったのに、そのうえ社会からもハブられたら生きていけないではありません!!」

「理由までは分かりませんよ。しかしあの希望ヶ峰学園ですから…。何かとんでもないことを実行してもおかしくないと思うのです」

『はいストップ！ オマエラがそんな意味のない議論してても時間の無駄だし、ボクが答え合わせをします！』

パンパンと手を叩いてモノクマが議論を遮る。

『高いところという答えにたどり着いたのは流石だね！ でも山の上つてのは残念ながら不正解！ ここは大都会のど真ん中です！』

希望ヶ峰本校舎からもそんなに離れていません！』

モノクマはさらつと言ったが、俺達にはただならぬ衝撃が走った。

俺達はずつと、大都会の真ん中、希望ヶ峰とも遠くない場所でコロシアイをさせられていたのか。

じゃあなんで警察とかは俺達を探しに来ないんだ？

そんなにわかりやすいところにいるのに。

『高い場所。超高校級の建築士。ここまで来たらもう繋がったでしょう？ 点と点が、さー！』

不敵な笑みを浮かべるモノクマ。

その答えって、一体――

「タワ―?」

ぼろりと口を突いて出た言葉。

自分でもなぜこれが出てきたのか分からなかった。

そうか。

あの時の記憶か。



【Chapter 1 (非) 日常編②】

「あ、そーだ！ 俺が今温めてる“最高傑作”の設計図を見せてやろーか？」

…最高傑作？

「なんだそれ！ 見たいぞ！」

前木君の声に答えるように土門君は机の上に一枚の紙切れを広げた。

机の上の紙面には、見たこともない世界が広がっていた。

きめ細かい方眼紙の上に刻まれた細い細い線の数々……。

そこに重ねられた注意書きや記号の数々。

そう言ったもの一つ一つは到底俺に理解できるものではなかったが……。

全体像をぼんやりと見てみると。

「これ……タワーか？」

前木君が呟く。

「その通り。こいつは全高1000m以上の世界最大級のタワーになる。こいつを希望ヶ峰のすぐ近く、都会のど真ん中に建てるって計画が今現在進んでるんだ」

「マ……マジでか……？」

前木君が言葉を失うのも無理はない。

そんな夢みたくない話が現実存在するなんて。

「やーれやれ、こんなところに閉じ込められたせいで建設がちよつと遅れちまうかもな？」

土門君は冗談めいた笑いを飛ばしたが、話のスケールが大きすぎて俺と前木君にはついていけない。

「ま、こいつを完成させるのがとりあえず俺の今後のノルマだな。親父が引退したら本格的に海外の建物も手掛けよつかないって思ってる」

本当に、次から次へと別次元の言葉が飛び出してくる。

いずれ彼は凱旋門やサグラダ・ファミリアのようなものも平気で建ててしまうのではないだろうか？

とにかく、土門君もまたしつかりとした夢や目標を持つ“希望”の一員であることは分かった。



あの時、土門君が見せてくれた設計図は間違いなく本物だった。

ただ一つだけ、間違った情報を俺達に与えていたんだ。

それは、「タワーは既に完成している」ということだ。

そしてこのタワーこそが、俺達がロシアイの場として用いてきた希望ヶ峰学園特別分校なんだ。

『うぷぷ、気付いた？　じゃあトドメとして君たちに素晴らしいものを見せてあげましょーう！』

そう言つてモノクマはぱちんと指を鳴らす。

それに呼応するように裁判場の壁を隠していたカーテンがサーッと動き、壁を露わにした。

何の変哲もない黒い壁だ。

「……これが何だと言うのですか？」

『慌てないの、人間君！　本当に面白いのはここからなんだからさ！』

光学迷彩解除ー！！』

モノクマがそう叫んだ瞬間だった。

一瞬何が起きたのか分からなかった。

俺達が息をする間に、壁が消えた。

いや、消えたわけじゃない。

透明になったんだ。

そしてその外には、どこまでも広がる薄暗い曇り空が……

「な、なんだこれ!？」

前木君が仰天して叫ぶ。

「ひゃー!! ヤバいでありんす!! ここ、すんごく高いところにあるでありんすよ!!」

「……………!!」

俺は言葉を失った。

俺達の周囲には建物が一切見えなかった。

しかし壁際に近付いてみて下を覗いてみると真相が分かった。

建物は確かに存在する——俺達の遙か真下に。

地平線近くにまで遠く広がった都会の様子は、こんな状況でなければ絶景だっただろう。

「ちよ、ちよつと…!! 壁を元に戻してください!! ここ、こんなもの、いくら何でも高すぎです!!」

床にうずくまって頭を抱えながら入間君が叫ぶ。

「いや、まだ戻すな!! この街、なんかおかしいぞ…!」

前木君が言うまでもなく、街の異変には俺達を含む全員が気付いていた。

入間君も恐る恐る壁の外を覗き込む。

街では、至る所から火の手が上がっている。

建物のいくつかは倒壊し、都会は見る影もない。

「……………これが、俺達の住む町…??」

『うぶぶぶぶぶ!! そうだよ! これは合成でもなんでもなく、ただありのままのオマエラの街だよ! じゃ、時間なのでネタバラシはここまで!』

モノクマがそう言うと同時に壁は一瞬で元の色に戻った。

『どうだった? ワックワクのドッキドキになつてくれた?』

モノクマは無邪気に問いかけるが、俺達は明確な答えを返すことができなかった。

帰るべき世界。

ここから出たら真っ先に帰るべき行先。

それが、完全に崩壊した姿。

頭の理解が追いつかなかった。

俺達の住んでいた世界は……一体どこへ行っただんだ？

「あら。私が滅ぼすまでもなく勝手に滅びてくれたのね。手間が省けたわ」

そんな光景を眺めてもなお、余裕の表情を浮かべる小清水さん。

久しく忘れていた彼女の恐ろしさは、こういう時にふと脳裏に蘇ってくる。

「ちよ、ちよっと待つでありんす！ 一体何がどうなってるのか説明しろでありんす！」

『説明？ いちいちするの面倒だし勝手に想像してよ。年頃なんだから妄想力は人一倍でしょ？』

「納得できませんよ!! 私たちの街は、私たちの家族は……はっ!!」

あの動機の映像は……!?!」

山村さんは何か心当たりがあるようで、顔に手を当てた。

「動機の映像……そうか……」

俺の脳裏に浮かんだのは、最初にモノパンダたちから提示された動機の映像。

それを見た山村さんの反応だった。



【Chapter 1 (非) 日常編④】

「うぐっ……うう……嘘よお……こんなの……うっ……うあああ……」

ふと横を見ると、小清水さんが顔に手を当てて泣き崩れていた。

「ふざけてんじやねーぞテーマーボケゴラアツ!!」

咆哮を上げたのは、逆鱗に触れられた山村さんだ。

「オレの家族を……仲間を師範代をおおおおお!!! 卑怯者があ

あああああ!!!」

激情に駆られて怒鳴り散らす彼女の目には涙がいつぱいに溜まっている。

「卑怯者? そんな言い方はひどいんじゃないやねーの? オイラは”ありのまま”を映像に収めただけなんだけどなあ」

「ありのまま、だと?」

御堂さんが立ち上がって呟いた。

彼女も自分の映像を見たはずなのに、やけに冷静だ。

「そうだよ! 別にオイラはみんなの家族に手を出してねーし、みんなの大切な人々に危害を加えたりなんかぜってーにしてねーよ! ただ外の世界で起きていることを”そのまんま”映したただけだからな!」

「なん……だと……?」

山村さんでさえもその言葉に啞然とする。

これが?

この映像に収められた恐ろしい出来事が?

今実際、ここの外で起きているっていうのか?



「あの時モノパンダは確かに言ったんだ……。『世界で起きたことをそのまま映しただけ』って……。あの言葉は本当だったんだ……。それが、今俺達の目の前に広がっていた世界……」

「……じゃあ、私たちがここから脱出したとしても、帰る家も、家族も、友人もないということですか……?」

入間君が苦しげな表情で呟くと、裁判場は重い沈黙に包まれてしまった。

「……でも」

そんな中、確かに放たれた声。

「……それでも……あちき達は…勝たなきゃいけない」

吹屋さんは顔を下に向けながらも、みんなにハッキリ聞き取れる声で言った。

「そうでありんしょ？ ギリオやアルたんや……あちきが会えなかつたみんなが願っていたのは…きつとあちき達の勝利でありんしょ……？」

「そうね……たとえ何が待っていても、私達にはモノクマに勝つしか道はないのよ」

伊丹さんがそう言って俺の方を向く。

俺は小さく頷いた。

『うぷぷぷぷぷぷ!! あれだけの絶望を目の当たりにしてまだそんなことが言えちゃうんだ！ いいねえ、いいよ君たち！ それでこそ絶望のドンゾコへ叩き落し甲斐があるよ!!』

モノクマは興奮のあまり立ち上がりながら言う。

『そうさ、ここは土門君が建てた絶望タワー！ でもこのタワーは元は希望のために建てられた希望タワーだったので！ つまり……』



今まさに死んでゆくこうとする夢郷に、土門は己の役目の全てを伝えた。

「この学園は……このタワーはオイラの……いや、俺の世界だ。俺とアイツの物語を描く最高の舞台。そのために俺は存在した」

「ふ……ふざけるな……」

目に涙を浮かべて夢郷は懸命に起き上がろうとする。

「ぼくは……ぼくたちは……」

「人の本性は絶望だ。どこまでいっても人は絶望という概念から脱せられない」

「俺も、お前も、全ての人間は脚本の中の小さな小さな歯車だ。歯車が受けた全ての絶望を凝縮して脚本が生まれる」

「あ……あ……いやだ……」

夢郷はほとんど抜け落ちた歯を食いしばって、悔し涙を流す。

その目にはもう何も映っていなかった。

「ああ、いけねえ。もうすぐ」 小清水が来る時間だ。早く死体とその周りを片付けねえと……」

立ち上がり、歩き出しかけた土門は、ふと足を止めて後ろを向いた。

そこには、人生の最後の瞬間を生きる儂い同級生の姿があった。

絶望の中でこと切れる、哀れな同級生の姿が。

そんな夢郷に、土門は告げる。

「脚本は成就する。そして世界は世界の真の姿を知る。この場所は――



『このタワーは、希望のために作られた天高きタワー。まさに天にも伝わる長い蔓。それを絶望に彩るのが我らの使命。我ら皆、絶望の華となれ』

『我らが大きいなる脚本、その名は――』

『希望の蔓に絶望の華を』



『とうわけで始めちゃいましょう!』

モノクマは無邪気な笑みを取り戻して高らかに告げる。

『ボクと君たちとの、最終決戦をさ!』

【Chapter 2. 5 夢破れて惨禍アリ 完】

Chapter 5 愛 can do it !
Can do it ?

Chapter 5 (非) 日常編①

第四の裁判の後、伊丹ゆきみは個室に戻った。

「……………はあ」

ため息とともに椅子に座り込み、机に頭を突っ伏す。

あまりにも辛く、長い裁判だった。

今朝親友を失い、捜査と裁判を経て、新たに二人死んだ。

そして真の敵との戦いが始まった。

感情を整理する暇などないままに。

戦いが始まろうとしている。

だが自分にはやるべきことがある。

そう思って伊丹はゆっくり顔を上げる。

「……………」

そして机の上に置いてある紙切れを持ち上げる。

『一筆啓上 伊丹ゆきみ』

貴殿の正体を看破した。AM2:00、2—Bまで。来る来ないは貴殿の自由。』

そう書かれた紙切れを上に掲げて眺める伊丹。

この紙切れは二回目の動機発表が行われた日の夜に彼女の部屋の扉に差し込まれていたものだ。

これが何を意味しているのか。

彼女にはとうの昔に分かりきっていた。

時は、二回目の裁判を終えた後まで遡る。

あの時、部屋に戻った彼女はあるものを見つけた。

何も置かれていなかったはずの机に、一個のカセットテープが置かれていたのだ。

彼女は好奇心でそれを再生した。

『あー…音入ってるか？ 入ってるみたいだな……』

そのカセットテープから聞こえてきたのは、この日龍雅に殺された釜利谷三瓶の声だった。



えーと、伊丹。

この音声を聞く頃には俺はこの世にいねーはずだ。

俺が死んだ後の裁判中にコイツをお前の部屋に置いとくよう頼んであるからな。

で、本題に入るんだが。

再生中は絶対に音声を止めたり他の奴に聞かせたりしないで、一人で一気に聞いてくれ。

お前にとって、他の奴に知られると恐ろしくマズいことが吹き込まれてるからだ。

俺がわざわざこんなメンドクセーやり方でお前にメツセージを与える意味をよく考えて聞けよ。

じゃあ話そうか。ここからは停止厳禁だぞ。

伊丹、記憶を消されてるから分からねーだろうが、このコロシアイが始まる前、お前は俺と同じ【超高校級の絶望】だった女だ。

昨晚、龍雅からの呼び出し状が届いてただろ？

それは絶望だったお前を龍雅が始末しようとしたからだ。

だが、“脚本”じやーここでお前は殺されないことになってる。代わりに俺が殺され、龍雅が御堂に殺される。

そして御堂がクロとして裁かれ、オシオキされる。

今お前は二度目の学級裁判と御堂のオシオキを終えて部屋に戻ってきたはずだ。

自分が絶望って言われてまだ信じられねえかもしれないねえが、こればかりは受け入れてもらうほかねえ。

記憶を消される前、お前は俺とともに【記憶の研究】を担当していた。

俺達の後輩である松田夜助が始めた研究で、あいつが死ぬと同時に俺達はその研究を引き継ぐことになったんだ。

研究は主に脳科学者である俺が主導で行った。

お前の役目はただ一つ、“記憶を制御する薬”の開発だ。

結論だけ言うが、その薬はまだ完成してねえ。

いや、一応完成はしてるがまだ究極形じゃねえ。

そもそも脳は神経細胞の無限大の組み合わせでできてる。

それを化学物質の一つや二つで制御するなんて不可能だ。

それでもお前は一つの薬を作り上げた。

“制御された記憶を元に戻す”薬だ。

∴現時点で教えられるのはここまでだ。

ここから先の音声は、四回目の裁判を終えた後に再生可能にさせるようモノクマに頼んである。

四回目の裁判が終わったらもう一度再生してくれ。

いいか、もう一度言うがくれぐれも他の奴にこの音声の内容を知られるなよ。

存在も知られるな。

まあ脚本でお前が誰にもバラすことはないと言言されてるから大丈夫だと思うが……。

じゃあ、また四回目の裁判の後にな。



二回目の裁判の後、突然に告げられた宣告。

“伊丹ゆきみは超高校級の絶望だった”。

その事実が、何度も何度も彼女の胸を抉った。

第四の裁判を終えた今も。

「知りたくなかった……………」

ぽつりと伊丹は呟く。

「ごめんね、リャン……………。秋音……………。莉緒……………」

伊丹の瞳から涙が溢れ出る。

「私は、みんなの敵だった……………」

『私が』

「私はみんなを裏切っていた……………」

『私がみんなを死に追いやった』

「でも……………私は知らなかったのよ」

『知らなくても、やった事実はなくならない』

「うう、うううううううううう」

伊丹は涙をこぼしながら床にうずくまる。

アルターエゴのオシオキの直前。

御堂に扮したアルターエゴはこう言った。

『お前はもうどここの誰にも強がる必要はない』

「違う………」

頭を抱えながら伊丹は呟く。

“ 私は見せられない……”。

私の本性を、誰にも見せられないの。”

誰にも言えないまま二回の裁判を戦い続けた伊丹。

その心は、とうの昔に限界を超えていた。

「うろう……うろう………」

頭を抱えたまま小刻みに震える伊丹。

誰かが死ぬたびに、彼女の心に釘が打たれるかのような重い衝撃が

走った。

そしてその責が密かに自分に降りかかり続けていた。

自らがいかに醜く卑怯であるかを痛感するたび、堪えがたい感情に

支配される。

もう一人の自分が伊丹の心の中に囁く。

『私が殺した』

「違うッ!!!」

『みんな、殺した』

「私は何もしてないッ!!!」

『だって私は“超高校級の絶望”だから』

「やめて!!! もうやめて!!!」

『私こそ醜くオシオキされるべき存在』

「うああああああ!!! 嫌嫌嫌嫌!!!」

『私なんて』

「私なんて!!!」

伊丹はバツと立ち上がり、机に向けて駆け出す。

一心不乱に引き出しの中からカッターナイフを取り出すと、乱暴に袖をまくり……

「ごめんなさい!!!」

自らの腕を切り刻む。

「ごめんなさい!!! ごめんなさい!!!」

自らの涙が傷口に染みてゆく。

「ううっ……んんん……!!!」

袖の下に隠れていた腕には既に無数の生傷が刻まれており、その傷を抉るように再びカッターの刃が差し込まれる。

堪えがたい激痛を、自らのスーツの襟を噛むことでこらえる伊丹。

私なんて。

私なんて………。

「………!!!?」

数秒後、突然自分が何をしているかを認識した伊丹は驚きのあまりカッターを取り落とす。

「……………??」

私は今、何を??

「つ?!?!? つはあ、つはあ!!」

過呼吸になりながらその場に膝をつく。

「……………!!」

そして四つん這いで床を這いながら机の引き出しの一番下に手を伸ばす。

震える手は、なんとか引き出しから一つの錠剤を取り出すことに成功する。

伊丹は震える指ごと錠剤を咥え、飲み込んだ。

「ふっ、ふっ」

息を整えながら、違う引き出しから包帯を取り出して腕に巻き付ける。

バクンバクンと心臓が波打つのがはつきりと感じられた。

「また……………」

またやってしまった。

たまに訪れる、発作的な自傷行動。

精神をどす黒い何かに支配される感覚。

薬で矯正できるのにも限界がある。

それは薬剤師の彼女が一番よく分かっていた。

傷が痛む。

こんなことをしても誰も救われないのに。

私はいつまでこんなことをくり返すのだろう。

やっぱり私に必要なのは……………。

自傷とは異なる熱い感情が芽生えかけ、すぐに伊丹はそれを胸の奥へと追いやった。

伊丹は心の底からため息を吐く。

「落ち着け、私」

自分にそう言い聞かせ、タオルで床に飛び散った血を拭きとる。
左腕がじんじんと痛む。

後でモノポーシオンを借りに行こうと彼女は決意した。

「今私がすべきなのはこんなことじゃない……」

そう呟いて伊丹は目の前のカセットテープに目を向ける。

今なら、聞くことができる。

この音声の続きを。

「ねえ、釜利谷君」

伊丹はカセットテープに向かって話しかける。

「あなただって本当、悪魔のような人ね。女の子をこんなに苦しめて楽しいの……?」

そう言つて伊丹は再生ボタンを押した。



久しぶりだな、伊丹。

第四の裁判はどうだった?

ここだけの話だがな、土門には言つてねえんだが、第四の裁判で土門がオシオキされたらどろ?

モノクマは『脚本を変えた』と言つてたと思うんだが、あれは嘘だ。

土門が消されるのも全て筋書き通りだよ。

つくづくモノクマは化け物だと思うわ。

ま、俺が死んだ後のことなんかどうだっていいわな。

それで話を続けよう。

お前が作つた“記憶を取り戻させる薬”だが、コロシアイの中で適宜使わせてもらった。

例えば……龍雅のタバコの葉っぱにその薬を混ぜておいた。

あいつが自らの生い立ちと“超高校級の絶望”に関する情報を自力で思い出したのは単なる偶然じゃねえってことさ。

まあ何が言いたいかつて言うと、お前の薬は脚本を作るうえで大いに役に立ってるってことだ。

◆◆◆
「……………!!!」

釜利谷の言葉は、伊丹にとって死刑宣告のようなものだった。

『お前の作った薬が大いに役立っている』

それはつまり、伊丹が間接的に友を殺していたことの証左となるからだ。

再び発作が起きそうになる。

カッターナイフに向けて動き出そうとする右手を必死に左手が押さえつける。

『伊丹……俺の言葉で動揺しちまったみてえだな』

「うるさいっ!!!」

伊丹はそう叫んでカッターナイフをカセットテープに投げつける。

「なんで……なんで私の心が分かるのよっ!!!」

“気持ち悪い”。

伊丹の脳裏に浮かんだ感情はそれだけだった。

これはかなり前に収録された音声のはず。

釜利谷君はとうの昔に死んだはず。

なのになぜ、あたかも今、私の行動を見ているかのような声を？

『そう怒るなよ……。脚本の力があれば全部分かるんだ。お前が次に発する言葉も、仕草も、全部脚本が教えてくれるからな。今の俺達には未来の全てが見渡せる』

ぞくっ、と伊丹の背筋に悪寒が走る。

あり得ない。

そんなこと、あり得るはずがない。

『伊丹……くれぐれも変な気は起こさずに黙って聞いてくれよ?』

伊丹は生唾を呑み込み、その音声に耳を傾ける。

◆◆◆

朝が来た。

あの地獄のような殺人劇とオシオキから一日が経った。相変わらずコロシアイの次の朝は気分が優れない。

もう一度、亞桐さんと話したいなあ。

アルターエゴも俺の傍らで「おはようございます」って言ってくれたのに。

モヤモヤする感情はそのままに、俺はシャワーを浴びて新しい服を着る。

ブレザーのネクタイを締めて部屋を出る。

いつも通りの廊下。

ただ一つ違うのは、未だにモノパンダの死骸がそこら中に転がっているということだ。

ここは、土門君が建てた“絶望タワー”。

俺達のはるか下では、今も崩壊した世界で争いが繰り返されている。

むしろ俺達の方が日常らしい日常を過ごしているとすら思えるほどに崩壊した世界で。

何もかもが信じられなかった。

でも、ある意味では現実から目を背けるように、俺達は裁判で戦う以外の選択肢を失っていた。

外がどうなっているか、もっと詳しく知りたいけど……。

今は何も考えず、がむしやらに黒幕と戦うしかない。

そうするしか……。

「おっはよーでありんす!!!」

朝食場に向かうと、着物の袖をまくっておたまを持った吹屋さんが出迎えてくれた。

「ああ……おはよう」

俺は彼女に挨拶する。

あんなことがあった後でも彼女は切り替えが早いな。

「ユキマル！ あちきは練習の末、みんなの舌に合う料理を作る術を

身に着けたであります!! これで今日からの戦いもバツチリであります!!」

おたまを掲げてポーズを決める吹屋さん。

「ああ……そうなの?」

「そういえば彼女の料理は数日前はロクなもんじゃなかったけど……大丈夫なのか?」

「おや、おはようございます」

と、入間君が厨房から顔を出す。

「シンプルですがこんな日はリラックスできる朝食にしようと思いついて。吹屋様が見違えるほど上達したので助かりましたよ」

「へっへっくん! あちきの腕前はついにジョーちゃん公認になったであります!!」

「こんな時でも当たり前のように早く起きてご飯を作ってくれる二人には頭が下がるばかりだ。」

「……おはよう」

「おはようございます」

口々に食堂に入ってくるみんな。

「みんな……昨日はあんなことがあってうやむやになったけど……本当にごめん!!」

食堂に来るや否や前木君はそう言って頭を下げる。

「俺は許されざることをした。みんなからどう思われてもしょうがないと思ってる。でも」

「いいのよ、前木君」

彼の言葉を遮って伊丹さんが彼の肩に手を置いた。

「大丈夫、あなたが私たちの仲間であることは何も変わらないわ。信頼を失ってもいい。みんなもそうでしょう?」

「うん」と俺は頷く。

「確かに俺達に一言相談してほしかったとは思うけど……。結果的には、彼も小清水さんに利用されてただけだし……」

複雑な気分だ。

彼女はまたもや、(土門君とは言え)同級生を手にかけてようと動い

た。

それも、自らの手は汚さず、前木君を使つてだ。

やはり彼女は卑劣な殺人者でしかないのだろうか？

「そうですよ!!」

山村さんが拳を握つて声を張る。

「事情はどうあれ、前木君も黒幕と戦う志を共にしていたことに変わりはありませんよ！ 私は全身全霊であなたを受け入れます!!」

「誤解を生むからその言い方はやめた方がいいでありますよ！」

「みんな……本当にすまなかつた……。でも、ありがとう」

謝りつつも少し笑顔を浮かべる前木君。

以前はあんなに病んでいた彼が……。

彼も強くなつたんだな。

こうやってみんなが一致団結して黒幕との戦いに向かつていければいいんだけど……。

「ふふ、良かった……」

その様子を見ていた伊丹さんが、なんだかいつもより機嫌がいいように思えた。

「ですが、裁判の次の日となりますと……」

出来上がった朝食を食べている最中、入間君がふと言い出す。

「新しいエリアの開放……があるのでしようか……」

山村さんの言う通り、今までと同じ流れなら裁判の翌日には“エリア開放”があるはずだ。

『そう言うと思つてスタンバイしてたよ!』

その言葉とともに現れたのはモノクマだった。

『やあみんな！ 裁判場以外で会うのは初めてかな？ 久しぶりかな？

？ まあどつちでもいいや！ 今日からはボクがみんなのお世話をするよ！ オムツ交換してほしかったら言つてね!』

「馬鹿にするなでありんす!」

フーツと息を吐いて吹屋さんが威嚇する。

『うぶぶぶぶぶぶ！ 冗談はさておき、今回もエレベーターで新しい階を開放しておいたから行つてみるといいよ!』

モノクマは両手を広げて言った。

「はいはい、分かりました！ とつとと行ってくださいー！」

『つれないなあ山村さんは！ せっかくボクがみんなの新たな担任になったっていうのに！ まあボクは優しいクマだから今回はこれで』
「待てよ！ あちらこちらに転がってるモノパンダはいつになったら片付けてくれるんだよ！ …なんていうか、そこら中に転がってたら不気味じゃんか……」

去ろうとするモノクマに前木君が声をかける。

『え？ ああ、数が多いから大変なんだよね。まあ数日中には片付けるよ。欲しかったらあげるから、部屋に置いてもいいよ。あ、でもバラすのはダメだからね!! クマ虐待はこの学園で一番重い罪だからね!!』

ビシツと指を差しながらモノクマは言った。

あれだけ俺達をいいようにしてきたモノパンダたちも、今じゃゴミ扱いか……。

俺達とは不倶戴天の存在だったけど、なんだか複雑な気分だ。

「じゃあ、新しい階に行きますか。安全のため、皆さん一緒に参りましょう」

朝食を済ませた俺達は、入間君の号令の下エレベーターに乗った。

「…あつー！ 5階のボタンが光ってるであります…」

階層を示すボタンを見ながら吹屋さんが言う。

新しい階が解放されるのも彼女にとっては初めてだもんな。

ゴウン、と音を立ててエレベーターが動き出す。

俺達を乗せた鉄の箱は上へ上へと進んでゆく。

“5階”と呼ばれる場所につき、扉が開いた先に待ち受けていたのは……。

「……!? まぶしー」

やけにまばゆい光。

そして――

「寒い!!」

吹屋さんがそう叫ぶ。

ここは？

ここは一体――

「外！ 外ですよ!!」

エレベーターを出ていった山村さんの言葉に俺は耳を疑った。

「そんな馬鹿な!!」

そうして俺が彼女の方へ駆け出していくと……。

そこは“屋上”だった。

大ホールよりも広いその空間は、3mほどもある極めて頑丈な鉄柵で周囲を覆われていた。

鉄柵の頂上には有刺鉄線。

しかしそれを乗り越えて鉄柵を超えられたとしても、俺達に希望はない。

何故ならここは地上1000mのタワーの最上階。

そう――

鉄柵の向こうには、ところどころから煙が上がった不気味な都市が広がっていた。

都市を遥か下に臨むこの屋上は、さながら天空の庭だ。

「す、すごい……!!」

吹屋さんと山村さんは興奮したように鉄柵に身を寄せる。

「わああっ!! こんな酷すぎますっ!!」

そう叫んだのは入間君だ。

見ると、彼はエレベーターの床にしがみついて涙を浮かべていた。

そう言えば、昨日の裁判で壁が透明になった時も叫んでいたような……。

そうか、彼は重度の高所恐怖症なんだな…。

「でも、なんだよこの空……」

俺の横に立つ前木君が上を見て眩く。

俺達を久方ぶりに迎え入れてくれた大空。

しかしその空は赤く染まり、黒い雲が顔をもたげている。

夕焼けとも違う不気味な赤さだ。

「……やっぱり…俺達の記憶がない間に変わっちゃまったんだな。この世界は……」

前木君は下を向いて悲しげに呟く。

「まだ受け入れるには時間がかかるけど……今はここから出ることを考えなきゃな」

そう言っただけは目の前にそそり立つ鉄塔に向かって歩いてゆく。

広い屋上の真ん中には、太く大きい鉄塔が建てられていた。

高さは50mほどもあり、その頂上がこのタワーの本当の“頂上”だ。

頂上にはアンテナのようなものがびっしりとついており、どうやらこのタワーが電波塔も兼ねているらしいことが分かる。

改めて、土門君は凄いタワーを設計したんだな…。

「……ってあれ?!?!」

鉄塔を見つめていた俺は思わず声を出した。

「どうした? 葛西?」

「あれ!! 上見て!!」

俺が指さした先には――

なんと鉄塔の中腹部に小清水さんがいたのだ。

小さい足場に身をもたげ、どこで入手したのか分からないが双眼鏡を片手に持って崩壊した世界をじっくりと眺めていた。

「なんであんな所にいるの!? よじ登ったの!?!」

「なんて奴だ…命知らずもいいところだぞ!」

どうりで見かけないと思ったら、一足先に来てあんなところに登っていたなんて……。

ああいう関係とはいえ、あんな場所にいられると流石に心配になっ
てしまう。

「我々も負けてられません! 吹屋さん、私達も登りましょう!」

鼻息を荒くしながら山村さんは袖をまくる。

「ヤダーツ!! 絶対嫌でありんす!! 鉄塔に登って感電でもしたらどうするでありんすか!!」

「大丈夫です！ 幼い頃に電柱に登って感電したことがあります、慣れれば平気ですよ！」

平然と恐ろしいことを言う山村さん。

「そういう問題じゃないであります!!! あちきは生まれた瞬間からビリビリするものが大っ嫌いなんです!! 悪戯で電気ペン握らされるのも無理なんでありんす!! ぜーったいに行かないでありますからね!!!」

顔を真っ赤にして嫌がる吹屋さん。

「それでは仕方ありませんね！ 葛西君、共に参りましょう！」

「なんで俺?! 無理だよ!!」

俺も全力で否定した。

当たり前だけど、鉄塔は登るものじゃないからね。

そんなこんなで結局山村さんが一人で頂上まで登った(そのおかげで鉄塔全体を探索できたけど…)

山村さんが登り始めると同時に小清水さんは慣れた手つきで下まで降りてきた。

「小清水、お前——」

前木君は何か声をかけようとしたけど、言葉に詰まってしまった。

「……………」

彼女は何も言わず俺と前木君の横を通り過ぎてエレベーターに向かっていく。

エレベーターの近くで本を読んで俺達の探索が終わるのを待っていた入間君も、彼女が近づくと何も言わず距離を取った。

彼女は何も言わないまま、エレベーターで下の階へ降りていった。

「……………はあ、今後、小清水様とどのように関わるべきなのか……………」

ため息をつく入間君。

一度彼女を殺しかけた彼は、余計にこれからのことを思うと胸が痛いんだろうな…。

…そういえば、伊丹さんは何をしているんだろう。

エレベーターにいたときは一緒にいたと思うけど…………。

俺は屋上内をぐるりと見まわす。

いた。

彼女は端の方で、鉄柵に指をかけてぼんやりと外を見ていた。

……なんだろう。

今までの彼女よりも、どことなく儂げに見えるような……。

「伊丹さん？」

俺は彼女に声をかけるが、返事がない。

「あの、伊丹さんー！」

「あ、え？」

伊丹さんはビクツと肩をすくめてこちらを振り返る。

「ああ、葛西君……ごめんなさい、ちよつとボンヤリしてて……」

「そっか……こつちこそ驚かせちゃってごめん」

彼女がぼーつとするなんて、なんだか珍しいな。

「…ねえ、葛西君つて、小清水さんのことがまだ好きなの？」

「えっ!？」

唐突にそんなことを聞かれるとは思ってなかったので、俺は素っ頓狂な声を出してしまった。

「あの、えつと……うくん……」

「そう、まだ好きなのね」

「何も言ってないよ!？」

「態度で分かるのよ。そっか……男の子ですものね、無理もないわ」

俺の表情を見てくすくすと笑う伊丹さん。

今まではこんな話をする人じゃなかったんだけどなあ……どうしちゃったんだろ。

「でもあの人は……悪い女の子ね。葛西君をたぶらかして、その上……」
「？」

彼女がぼそぼそと呟くので、後半が上手く聞き取れなかった。

「ごめんなさい。なんでもないわ。探索も十分したし、もう戻りましょう」

「あ、うん」

すたすたと伊丹さんがエレベーターへと進んでいくので、俺は慌ててついていった。

こうして屋上の探索は終わった。

新しいエリアはこれだけだったため、探索は早く済んだ。

エレベーターにはもうボタンはなく、つまりこれ以上新しいエリアはないということを示している。

これはつまり、もうコロシアイは起きないということの意味しているのだろうか……？

そんな簡単な話なのだろうか……。

その日の夕食もみんな静かだったが、朝よりは活気がある印象だった。

山村さんと吹屋さんの会話が特に賑やかだった。

二人とも、亞桐さんの代わりを果たそうと頑張っている様子が垣間見える。

俺も頑張らなきゃな。

「それでは皆さん、おやすみなさい！」

何気ない挨拶でみんなは自室へ。

何度も事件が起きた後だと、夜そのものが怖い。気を抜くといつ事件が起こるか分からない。

それでも夜は静かに過ぎてゆく。

明日が静かにやってくる。



真夜中。

前木常夏は密かに大ホールへと足を運んだ。

「……こんな時間に呼び出して、何の用だよ、伊丹」

モノパンダの死体が転がる薄暗く広い空間の真ん中に、伊丹は立つ

ていた。

「来てくれてありがとう。正直来ないかと思ってたのよ」

穏やかな笑顔を見せて伊丹は前木に歩み寄る。

「……今はあまり腹を割って人と話したい気分じゃない。今朝は許してもらったけど、やっぱり俺がしたことはそう簡単に忘れられることじゃない」

前木は顔をうつむけてそう呟いた。

「黒幕だったとはいえ、ちよつと前まで親友だった土門も死んじまつた。今はとてもじゃないけど何かを考えられるような状態じゃ……」

その時、前木は不意に暖かい感触を覚えた。

「っ!？」

前木のうなだれた頭を包み込むように、伊丹が抱きしめていた。

「本当に優しいのね、前木君……いえ、常夏と呼ばせてちようだい」

前木は以前にも伊丹に抱きしめられたことがある。

二回目の事件が終わって数日後、親友の死に耐えきれず記憶と精神が錯綜していたころだ。

でもあの時とは感触が違う、と前木は感じていた。

あの時は包容力のある、母性のようなぬくもりだった。

けれど今感じる暖かさはそれとは違う。

伊丹の激しい心臓の鼓動が直接彼の胸に響き渡ってくる。

この感情は、まさしく……。

「伊丹……こんな時にどういうつもりだよ」

前木は伊丹の肩を押して彼女を引き離れた。

「ごめんなさい。あなたの気持ちを逆撫でするつもりはないの……ただ……」

「ただ……?」

「少し、気になったことがあるの……」

伊丹は紅潮した顔を下に向け、上目遣いに前木を見つめる。

前木の心に邪な感情が芽生えかけるが、すぐに顔を横に振ってそれを振り払う。

だがその次に彼女から発せられた言葉によって、前木は冷静に戻ら

ざるを得なかった。

「…小清水彌生はあなたに何をしたの？」

「……………!!」

前木に緊張が走る。

言っ正しいのだろうか。

自分の才能——幸運についての話は裁判であらかた明らかになっ
てはいる。

土門の正体を口外することを禁じた校則……あれも今となっては
形骸化している。

小清水が自分に教えた内容をそのまま流すだけだ。

問題はないはずだ。

このコロシアイが脚本になっっていること、土門がその脚本の調整役
だったこと、吹屋の参入でその脚本が狂い始めていること……。

伊丹なら信頼できるし、言えば戦力になるはずだ。

「……………実は」

「……………っ」

前木はそう話しかけて口を閉じた。

俺が下手に動いてしまっ正しいのか？

俺みたいな馬鹿が勝手に動くと、小清水の黒幕打倒計画がめちゃく
ちやになるかもしれないじゃないか。

伊丹たちがこの情報を知らないことにも、きっと意味があるんじゃないか？

いや、ともう一人の前木が心の中で呟く。

なんで俺を利用して捨てようとしたやつに配慮なんてしてるんだ
？

伊丹に言っってしまった方がどう考えてもいいじゃないか。

……………だけど……………。

小清水と協力するのは小清水のためじゃない。

俺達が黒幕に勝つためだ。

小清水は全て分かつたうえで俺を利用している。

俺もまた小清水を利用するしか黒幕に勝つ手段がない。

俺達は暫定的な協力関係にあるが、実際には俺よりはるかに事実を見渡せている小清水の方に意思決定権があるのは明白だ。

結局俺は、小清水の意向無しに下手に動くリスクは背負えない。何も分からない俺が、べらべら喋る資格なんてないんだ。

「……………」

「……………めん、今はまだ…言えない」

苦渋の決断だった。

今はこう言うしかない。

危ない橋は渡れない。

黒幕に勝つてここを脱出するため、ほんのわずかな失敗の可能性すらも排除しなくてはならないのだ。

伊丹は、明らかに前木にも聞こえるほどの大きい舌打ちをした。

「やっぱりあの女にいいように使われているのね……………」

「……………伊丹?」

一瞬、伊丹の表情が鬼のような様相を呈したことに、前木は動揺した。

「私たちの仲間にかけて、私たちを嘲笑って、拳句常夏まで……………」

伊丹の額に青筋が浮く。

拳は怒りに震え、瞳からは光が消失する。

「伊丹! 待てよ! 別に脅されたりしてるわけじゃないんだ!」

そんな伊丹の様子を見て前木は慌てて取り繕う。

「そんなことは関係ないのよつ!!!」

突如発せられた伊丹の怒声で前木はすくみ上がった。

「ほんの少しでもあの女の影響下にあるのが許せないのよ!!! あなたは私の全て!!! 私もまたあなたの全てにならないといけないのよ!!!」

顔を歪ませてそう叫ぶ伊丹の目から涙が飛び散った。

「!!! お前……………」

前木はその言葉でようやく全てを察した。

「……………そうよ……………」

とめどなく流れ落ちる涙を拭うこともせず、伊丹は消え入りそうな声で前木に告げる。

「三回目の事件が起こる前……傷ついたあなたを助けたあの時から……私はずっと、あなたを愛していた……」

「……………」

前木は何も言えなかった。

これほどの美女にそう告げられて、普通の男なら飛んで喜ぶべきなのかもしれないが。

連日の傷心の後にそのようなことを言われても、喜びを感じることはできなかった。

「でも…私はあなたを愛してはいけなかった…。だから…この気持ちは今まで伝えなかった」

子供のように泣きじゃくりながら伊丹は続ける。

「愛しては……いけない……?」

言葉の意味が分からず前木は首を傾げた。

「私に愛された人は皆死んでいくのよ……。リヤンも、秋音も、莉緒も、みんな死んだ。私に愛されると死んでしまうのよ! だから私はあなたを愛してはいけなかった!」

首を横に振りながら声を張る伊丹。

【Chapter 3 (非) 日常編②】

作りかけの総菜も放り出して伊丹さんは前木君のところに歩み寄った。

「ごめんなさい。私、あなたを買いかぶっていた。あなたも人間だもの、当り前よね」

「お、おれ、おれおれおれおれ」

言葉が言葉になっていない。

「いいの。いいのよ。あんなに仲良かったものね。忘れてもしなきや耐えられるはずがないわ。あなたは悪くない。ちつとも悪くないのよ」

伊丹さんもまた涙をとめどなくこぼしながら、前木君を抱きしめた。

「葛西君、ごめん……。ご飯の続き、お願いしてもいい？」

その言葉を受けた俺は数秒たってから「あ、うん」と辛うじて返事をした。

「さん、三ちやあん!!!どもおおん!!!うあつ、うつ」

「あなたは私と同じ。いつだって心のよりどころを求めている。そうでしょ？」

「うあああああああん!!!」

「泣いていいのよ。私も泣いてる。辛かったよね。もう、嫌だよね」

あの時既に、その想いは芽生えていた。

ずっとずっと隠し続けてきた感情。

知らぬ顔で過ごし続けてきた日常。

だが、彼女の心は遂に限界を迎えた。

押しつぶされるくらいの劣情に堪えられなくなったからこそ、伊丹はここに居るのだ。

「でも……。でも私は……。あなたを愛せずにはいられなかった。どんな夜もあなたのことを想い続けていた。気が付くとあなたのことばかり見ていた。あなたと同じ空気を吸いたくてたまらなかった。どんな些細なことでもあなたと繋がりがりたかった」

「伊丹……………」

ある意味気持ち悪いとすら思えるほどの熱烈な想いを吐露する伊丹。

その姿は普段の大人びた様子からはかけ離れた、少女の姿だった。

そしてそのシルエットが、どことなく三回目の裁判の最後の葛西を彷彿とさせた。

「愛する人が次々に死んでいっても……私は誰かを愛することをやめら

れない。私はこの世の誰よりも罪深い女なの……。この世の誰に嫌われてもいい。恨まれてもいい。でもあなたにだけは……」

「伊丹……？」

伊丹は右手で前木の頬に触れ、左手はワイシャツのボタンを上から外してゆく。

「……お前……!!」

「常夏……私の愛しい常夏……。どうか、私の愛を……」

伊丹は目を閉じ、一気に前木にその唇を押し付けた。

「やめてくれ!!」

しかしその唇は前木が顔の前に出した右手につけられていた。

そして彼の左手は、ワイシャツのボタンを外そうとする伊丹の左手を押し返していた。

「今こんなことしてる場合かよ!! 友達がたくさん死んだばかりなのに……!!」

「……」

伊丹はしばらく硬直していた。

「あ、ご、ごめん……。その、お前の気持ちはすごく嬉しいんだ。けど……今はそういうことを考えられる状態じゃないっていうか……」

「……ふふつ、いいのよ。私は傷ついてなんかいないわ」

伊丹は笑みを浮かべながら涙で濡れた目元を拭った。

「本当にごめん……。でも、少なくとも今考えなきゃいけないのは、俺達がどうやって黒幕に勝つか……。そのために何ができるか……だと思う。恋とかはここを出た後にいくらでも考えればいいんだと思う……。あんなことをした俺が言えたことじゃないけど……」

前木は自信なさげな表情ながらもそう告げる。

「うん……ここから出られたら、ね……」

伊丹はそう言ってくるりと前木に背を向けた。

「こんな時間にごめんなさい。私の話を聞いてくれてありがとう」

「伊丹……」

前木は茫然と立ちながら伊丹の背中を見送ることしかできなかつた。

——ここから出られたら。

その言葉が伊丹の胸に重く突き刺さる。



伊丹……くれぐれも変な気は起こさずに黙って聞いてくれよ？

まずは、ここまで聞いてくれてありがとうな。

次で最後だ。

お前に一つ頼まなきゃいけないことがある。

これがこの音声をわざわざ収録して託した最大の目的なんだ、心して聞いてくれ。



エレベーターが一階に着くと、伊丹は自室に向かって駆けだす。心なしか、身が軽くなったように感じる。

廊下に落ちていたモノパンダを拾い上げると、自室に持ち帰った。

「ふふっ」

伊丹はモノパンダに顔を寄せて笑った。

「ねえ聞いて秋音。私、さつきついに常夏に言っちゃったの！」

伊丹は興奮気味にそう言った。

モノパンダは何も答えない。

「ふふふふっ。結果はね……うふふっ！ 秘密！」

伊丹は子供のように無邪気な笑みを浮かべてベッドに寝転ぶ。

「あ、でもね、体は見てくれなかったの……。本当の私を見せようと思っただのに……」

そう言っつて伊丹は上着とワイシャツを脱ぎ捨てる。

「ほら、秋音は見てくれるでしょ？ 本当の私」

下着だけになった伊丹の上半身は、至る所に痛々しい生傷が刻まれていた。

「引くでしょ？ 私、ダメな女ですもんね」

そう言っつて伊丹は涙をこぼす。

しかし数秒後、突然表情を変え始めた。

「…えっ？ 秋音はそう思うの？ …ありがとう！」

伊丹はモノパンダをきつく抱きしめた。

「うん、そうよね。きつと常夏もそう言っつてくれるわよね。自信ついた。ありがとう！ やっぱり私は秋音が大好きよ！」

伊丹はモノパンダの頬にキスをすると、そのまま毛布に潜り込む。

「ああ、私っつて本当に幸せだわ……」

うつとりとした表情を浮かべながらそう呟く。

「ふふふふっ」

自然と笑みがこぼれる。

「うふふふふっ、あはははははっ」

赤く火照った顔をモノパンダに押し付け、猫のように顔を摺り寄せ

もうお薬なんていらぬ。

ありのままの私でいよう。

私に誰かを愛する資格なんてない。

私が愛した人間は残らず不幸になっつていっつたから。

それでも私は誰かを愛せずにはいらぬ。

誰かを愛せない人生なんて生きている意味はない。

それならばいっつそ——

無限の愛の中で、愛に焼かれて死んでいきたい。

ああ……私の愛しい常夏。

あなたに愛を伝えることができ、私は幸せよ。

私の愛の呪いは、もう終わる。

なぜなら私は。

伊丹ゆきみという人間は。



伊丹、脚本ではお前は第五の事件のクロになってオシオキされる。
どうかその命をかけて引き受けてくれねえか？

まあ脚本に書かれてる以上、運命に逆らうのは無理だがな。

申し訳ねえ。

最初っから決まってたことなんだ。



——もうすぐ、息絶えるのだから。

Chapter 5 (非) 日常編②



——伊丹、脚本ではお前は第五の事件のクロになってオシオキされる。

どうかその命をかけて引き受けてくれねえか？

まあ脚本に書かれてる以上、運命に逆らうのは無理だがな。

申し訳ねえ。

最初っから決まってたことなんだ。



実にあつさりとした死刑宣告だった。

彼女が感情を整理する間もなく、釜利谷の声は続く。



ああ…そうか。

この話の前に、脚本の説明を軽くしとかなきゃダメだったんだわ…。

メンドクセーけど仕方ねーな…。

悪い、一番大事なことを先に伝える形になっちゃったがもう少し話を続けさせてくれ。

まあ全部言うのもだるいからかいつまんで話すが、このロシアイってのは“絶望の脚本”と呼ばれるストーリーとして作られたものだ。

“脚本”つつつても自分の書きたい話を自由に書けるわけじゃね

え。

ある人間がこれから何を行うか、何をするかという未来を予知し、それを“真実”という名の脚本に記すのが、俺達が便宜的に“脚本の力”と呼んでいる能力だ。

だがこの脚本はあくまでも予言だ。

その結末を知ったうえでそれを変えるような行動をすれば簡単に変えられる。

その性質を逆に利用して、予言を都合よく捻じ曲げたりお膳立てしたりしてやることで理想のコロシアイの物語を描き出そうつてのが俺達の目的だ。

さつき“運命に逆らうのは無理”つつー話をしたが、あれは多少論理を飛躍させたうえでの話だ。

そもそも、最初から完璧なコロシアイのシナリオとして成立するんなら、土門がわざわざあんなメンドクセー役回りをする必要なんてなかった。

順を追って話そうか。

俺達が最初に脚本のシミュレートをした時、早速最初の事件から不具合が生じた。

ルールを完璧に説明した上でコロシアイを発生させると、いつまで経っても最初のコロシアイが起きないという結果が出たんだ。

だからやむを得ずルールを中途半端に説明し、津川が動き出すように仕向けた。

これが第一の変更点。

だが、それでも不具合は続いた…。

津川が狙いを定めたのは、よりにもよって土門だったんだ。

悩んだ末に土門が自ら偽の退場を演じるということで話がついたが、まだまだ問題はあった。

推理や裁判なんぞ始めてやる素人集団だからな、一向に謎が解けず議論が平行線になるという結果が出たんだ。

俺が上手く誘導する案もあったんだが如何せん事件の情報が少なすぎた。

これも折衷案で土門が自白という茶番を打つことで話はまとまった。

……分かるか？

最初のロシアイを起こすだけでもこれだけの修正を行っている。だがそのおかげでこれ以上ない”脚本”を作ることができた。

このロシアイはそうやってできている。

一つ注意してほしいのは、脚本の主体はあくまでもお前たちにあるということだ。

俺達がするのはあくまでもお膳立てで、殺意やら何やらを抱いてロシアイを実際に行うのは、全てお前たち同級生自らの意志によるものでなくちやならない。

そうでなきや”絶望の脚本”の意味がねえ。

人が抱く”絶望”をありのままに映し出すのがこの脚本の目的だからな。

ここまで話してようやく、お前についての話に戻ろう。

脚本を変える術を知ったお前には今、五つの選択肢が用意されている。

①クロとなり、敗北してオシオキされる

②クロとなり、勝利して全員のオシオキを見届けた後、ここを出る

③クロとならず、新たにクロとなった誰かに勝利して次のロシアイへ進む

④クロとならず、新たにクロとなった誰かに敗北してオシオキされる

⑤クロとならず、新たにクロとなった誰かに殺害される

この中で脚本として予言されているのは①、お前が生き残ることができるのは②か③だ。

②はやめておいた方がいい。まず無理だ。

お前が生き残ることを考えるなら③を選ぶべきだろう。

脚本は優秀だ。

お前がクロとならなかつた場合、誰がクロとなるかもしつかり予言している。

——お前がクロにならなければ、代わりに人を殺すのは……
…まえなつ…前木常夏だ。

それでもお前は運命に逆らうか？



屋上の開放から一晩が明けた。

昨夜早く寝たためか、今朝はいつもより早く目が覚めた。
なのでいつもは決まった人ばかりがやっている朝食当番を今日は自ら担当することにした。

たまにはやらないとみんなにも申し訳ないし。

大体の場合、その日の献立は厨房に置いてある食材によって決められており、今日は和食のオーソドックスな朝食のようだった。

「あれ？」

冷水の冷たさに堪えながら黙々とお米を研いでいると、厨房に吹屋さんが顔をのぞかせた。

「もー、作ってるなら言っしてほしいであります！ あちきも一緒に作るのに！」

そう言っつて着物の袖をまくりながら吹屋さんも調理に取り掛かる。

「大丈夫だよ、吹屋さんには昨日やってもらったし……」

「あちきがやりたいだけであります！ お料理が上手くなったから最近楽しくて！」

お箸をカチカチと鳴らしながら気分を弾ませる吹屋さん。

何事も上手になると楽しくなるものなんだな。

かく言う俺も、ここに来たころに比べれば随分器用になった気がする。

そうして二人で朝食を作り始めること数分。

「ユキマル〜」

と呼ばれたので「なに？」と振り返ると。

吹屋さんの水にぬれた冷たい手が俺の首筋に触れてきた。

「わっ!!」

鋭い冷気に思わず首をすぼめる。

「あつははは〜！ かわいい〜！」

彼女はそんな俺の様子を見て悪戯っぽく笑う。

「吹屋さん……………」

「ユキマルは本当にかわいいでありんすね〜！ ほっぺためっちゃ柔らか〜い！」

そう言っつて吹屋さんは俺の頬を両手で揉む。

「ううん……………」

どう反応していいか分からず俺はうめき声を出すばかりだった。

「こんなかわいい子をフツつちやうなんてやよ様も罪深いでありんすね〜」

そう言いながら吹屋さんは俺の頬を冷たい指でツンツンとつつく。

「吹屋さん……………」

「ふふふつ、やっぱりユキマルが一番話しやすいでありんす！ やよ様はずつとあんななんだし、前木つちはまだシヨックが抜けてないみたいだし、ジョーちゃんはいつも張り詰めてるし……………」

吹屋さんはつまらなそうに口をとがらせる。

「一昨日までいろんなことがあつたしね……………」

「それはそれ！ これはこれ！ 気持ちの切り替えができない子はあちきは好きじゃないでありんす！ だからユキマルは好きでありんすよー！」

こつちを見てニコツと笑う吹屋さん。

「やよ様に裏切られたとき、きつとすぐく辛かったでありんしょ？」

でもそれを乗り越えたからこそ、今のユキマルがいる」
「……………」

「辛くても、笑って明日を頑張れる人があちきが好きでありんす。…
ユキマル、負けないって約束できるのでありんすか？」

吹屋さんは俺に向かって小指を立てる。

「え……………」

俺は少し戸惑うが、恐る恐る小指を立てて彼女の小指に近付けた。

「ゆーびきーりげんまん…」

吹屋さんの指は細くて白くて、とても冷たかった。



「いやー、お二人もこんなにお料理が上手くなって、私は感動いたしま
したよ……………」

炊きあがった白米をかきこみながら入間君が言う。

「俺、そんなに下手なキャラだったのかな……………」

俺は未だに自分が料理下手キャラになっていたことに納得がいつ
ていない。

「でも本当に美味しいな…。俺、なんか感動しそう」

前木君の言葉にも、なんだか悪意を感じてしまうのは考えすぎだろ
うか？

「料理に感動するのもいいですが、皆さんー！」

そんな俺達の会話を止めたのは山村さんだ。

「今日はみんなで黒幕打倒のための案を練る日にしましょう！ もう
あんな悲劇を繰り返すわけにはいかないのですからー！」

彼女にしては真つ当な申し出だった。

「そういうえば、この前の裁判の時に“最終裁判”がどうのこうのつて
言ってたでありんすよね？ あれ、どういうことだったでありんすか
？」

「ああ、そうですね…。これに関してはもう告げてしまってもよろし
いのでしょうか…。しかし例の校則が…」

『そういう時はボクの出番だよ——っ!!』

入間君の言葉を遮ってモノクマが机の下から現れる。

『校則って恐ろしいよね! 校則一つで発言すら縛られちゃうんだから! でも校則って意図が分からないのもたくさんあるよね。なんで茶髪ってダメなの? なんでスカートの裾は下ろさなきゃダメなの?』

「うるせえ!! とつとと本題に入れボケカス!!」

珍しく豹変モードに入った山村さんが吠えた。

『なんだかボクもその反応に慣れてきちゃったよ。まだ生徒とのスキンシップは諦めてないけどね! それはそうとして、今まで入間君たちだけに課した校則で口封じをしてきた情報を、解禁することを伝えに来ました!! ボクの優しさが五臓六腑に染み渡るね!!』

テーブルの上でガッツポーズを振り回しながらそう告げるモノクマ。

「入間君たちだけに課されていた校則……?」

「ああ、それについては後ほど詳しくお話しますよ」

『というわけで入間君たちに課した校則は削除しといたので、テキトーにうまく情報を共有しといてね! あと、教頭が言ってたと思うけど、今後も謎解きはみんなで分担してやってね! 一部の人が頑張るだけじゃつままないし、もともとそういう意図でこの校則を作ってたわけだからね! まあ、人数も減ってきたし誰かに任せてる余裕はないと思うけどね』

くるくると不思議なダンスを踊りながらモノクマは不敵に告げる。

「つままないって……そんな理由で入間達の行動を制限してたのかよ……!」

前木君が苛立ちを露わにしてそう言った。

『つまらないか面白いかってのは意外と大事なことなんだよ、前木君。特にエンタメにとっては死活問題じゃない! 君はジェットコースターも観覧車もない遊園地に行きたいと思う?』

「……あなたの目的は“面白いエンタメ”を作ることなのですか?」
「!」

入間君の鋭い質問で沈黙が走る。

『……ボクの目的なんてどうだっていいよ。君たちが何をやるかが大事なんだからね』

モノクマはそれまでの態度とは打って変わって落ち着いた様子でそう言った。

「どうだってよくはないでしょう?」

「!!?」

その場にいないはずの声が聞こえ、俺達は動揺する。

忽然と現れた小清水さんが食堂の入り口からこちらに歩み寄る。

「私たちにこんなことをさせておいて、『目的なんてどうでもいい』なんて言い様はないでしょ?」

「……小清水様の言うとおりです。最も、あなたに直接尋ねたところで教えてくれるとは思いませんが……」

一瞬驚きの表情を浮かべながらも入間君はそう続ける。

『ボクを上手く乗せて話してもらおうって? 甘い甘い、甘すぎるよーっ!! 発情期のサケのハラスぐらい甘いね! そんな甘さでここから出られると思ったら大間違いだよ! 謎つてのは自分の力で解き明かしていくから楽しいんでしょ?』

「ちつとも楽しくなんてないであります!! そもそもあちき達がお前なんかの勝負に乗ってあげてるだけ偉いと思ってほしいでありますね!! かしこまってヒントの一つぐらいよこせであります!!」

吹屋さんが鼻息を荒くしながらモノクマに詰め寄る。

「吹屋様の言い方には語弊がありますが……。いずれにせよ私たちも懸命に真実に近付いているのです。あなたがどう思おうと、目的も、正体も、全て暴いてみせますよ」

入間君がそう続けると、モノクマは肩を震わせて笑い始める。

『うぶぶぶぶぶ……。君たちを見るのって本当に楽しいねえ!』
「……………」

『君たちはいつもそうさ。結局意味深なことだけ言って大したこともせず、流されるままコロシアイをくり返すんだ。君たちは考えているように見えて何も考えてない。真実に辿り着いているように見えて

近付けもしていない。超高校級の名が聞いてあきれよ」

モノクマは残酷な言葉を並べ立てて俺達を挑発する。

「流されるまま……ふざけたこと言っただけじゃねえ!! テメエが否が応にもそうさせてるんだろがっ!! 卑劣な手段でっ!!」

モノクマの態度に我慢できぬとばかりに、山村さんが逆鱗モードになって怒鳴る。

『卑劣? そうなのかなあ。"音"が嫌なら、なんで自分の鼓膜を破らなかつたの?』

「は……!?!」

『前回の動機だよ。イヤホンを貫通するような音でも、流石に鼓膜を破られたら届きようがなかつたよ。でも、誰もそれをしようとしなかつたよね。言い出しもしなかつた』

「そんなことしたら、一生耳が聞こえなくなるかもしれないだろ!!」

『そう? じゃあ亞桐さんの命は君たちの聴力よりも軽かつたんだね!?!』

「っっ!!」

前木君に呼応して発せられたモノクマの言葉が俺達に突き刺さる。

「当たり前じゃない。たかが人類の一匹のために五感を失っていたら五人しか人を殺せないわ」

モノクマの言葉に反応したのは、小清水さんの冷酷な呟きだけだった。

あとのみんなは、ひたすらに沈黙。

『"一生耳が聞こえなくなっても"。その程度の覚悟があればあの動機は乗り越えられたはずだよ。君たちは"耳を壊す"という発想すら浮かばなかつた。自分を壊して危機を乗り越えるという着想がない時点で、いかに君たちの覚悟が不足しているかがイタいほど分かるよ。そんな君たちが真実に辿り着くとはボクには到底思えないね!』

「……………」

俺達は、"論破"されてしまった。

本来なら裁判場で倒さなくてはならないはずの相手に、言い負かさ

れてしまった。

「つぶ、うふふふふ………」

しかし。

「あつはははははは、あはははははは!!」

彼女は、小清水さんだけは違った。

「ああ、いけない。面白すぎて笑っちゃった!」

こみ上げる笑いを抑えるように彼女は自分の頬に手を当てる。

『ウケを取ったつもりはないんだけどなあ?』

「あら、そうなの? だっておかしくてたまらないじゃない。安全な場所からコロシアイを眺めているだけの人間が、こともあろうに私たちに“覚悟が足りない”ですって? この世で一番覚悟のない臆病者にそんなこと言われるなんて、おかしくて」

『……………』

モノクマはテーブルに座ったまま何も語らない。

モノクマに論破されたとき、俺達の中の誰もが“負けた”と思っただろう。

しかし彼女だけは違った。

彼女だけが、“勝てる”という確信をもって敵を見据えていた。

一度は俺達に負けたはずの彼女が。

なんだか複雑な気分だ。

「この人間どもに何を言っただう絶望させようとおあなたの自由だけだよね、私に向かって放つ言葉は選んだ方がいいと思うわね。あなたが死ぬ時に、余計に苦しむ羽目になるかもしれないから」

『……………なにさ。一度は裁判に負けて死ぬ気満々だった癖して。やっばりキライだなあ、君……………』

ふてくされたようなセリフを吐きながらモノクマはテーブルの下へと消えた。

「……………つはあつ、はあつ……………。モノクマからあんなプレッシャー感

じたの久々だったわ……」

モノクマがいなくなるとともに、前木君はがつくり頭を落とす。

「…今回ばかりは、小清水様に感謝せねばなりませんね……」

小清水さんは入間君の言葉に答えずに赤髪をかきあげる。

「全く、こんなんじや駒にすらならないわね。使う価値もないならゴミも同然じゃない」

俺たち全員を見渡しながら彼女はそう告げ、くるりと踵を返して食堂を後にした。

再び重い沈黙が食堂を支配する。

「なんか……こういう空気……キライ」

吹屋さんがぼそつと呟く。

「あーもう!! ギスギスはあちきの性にあわないでありんす!! ごちそうさま!! トイレいつてくるでありんす!!」

髪をくしゃくしゃとかきむしりながらそう言うと、また吹屋さんは食べ終わった食器をそのままにしていなくなってしまった。

「吹屋さん……。いい加減自分で片付けてほしいな……」

俺はそうぼやきながら彼女の食器と自分の食器を重ね、お盆に乗せていく。

「そういえばモノクマのせいで完全に本題を見失っちゃったけど……入間君が校則で封じられていた情報を俺とかに伝えるって話になつてたんじやなかったっけ……」

「ああ……そうでしたね。肝心の吹屋様がいなくなられては意味がないのですが……。まあ、彼女には後ほど私がお伝えしましょう」

そして重苦しい空気の中、入間君は俺達に告げた。

前回の裁判の前に、既に入間君たちは夢郷君の入れ替わりに気付いていたこと。

そしてロシアイを終わらせようと伊丹さん、山村さんを連れて土門君に勝負を挑んだがかわされてしまったこと。

彼の提示した条件が『学園の全ての謎を解き明かす』最終裁判にて勝利すれば、ここからの脱出を約束する』とうものだったこと。

今更驚くようなことでもなかった。

「夢郷君……本当に死んじゃったんだなあ……」
ぼそりと呟く。

優秀な頭脳と底知れぬ思想を持っていた彼が今この場にいたなら、俺達に何と言葉をかけただろう。

俺よりも辛いのは、親友の入間君なのだろうけれど。

「……伊丹さん？」

ふと山村さんが呼びかける。

「あ、え？ どうしたの？」

「いえ、朝食の前からずっと黙っていると思って……」

「……ああ、ごめんなさい。今朝からちよつと具合がすぐれないのよ」
そう言えば伊丹さん、どことなく顔が白いような……。

でも元々無口な人だからあまり変にも思わなかったな。

「大丈夫か？ 体調悪いなら今日は部屋で休んでいた方がいいんじゃないか？」

前木君が声をかける。

「……いえ、体を動かす分には問題ないわ。ありがとう、前木君」

伊丹さんは微笑みを浮かべてそう返事する。

「あつ、そうか！ 伊丹さん、女の子の日だったんですね！ それは失礼しました!!」

変な方向に察した山村さんが頭を下げる。

「違うし、あまり大声でそういうことを言わない方がいいと思うけど……」

伊丹さんが呆れ気味に言った。

……なんだか場がしらけちゃった気がするけど、ギスギスした空気は減ったみたいだし、とりあえずは良かったのかな。

前木君がモヤモヤした表情を浮かべていた気がするけど、気のせい……だよな。



自由行動といっても、今の俺がするべきことは限られている。

入間君から伝え聞いたとおり、黒幕に勝つためにこの学園やコロシアイの謎を解かなくちゃいけないからだ。

まず第一に考えられるのは、図書室で資料探し。

屋上から地上の様子をじっくり観察するのもありかもしれない。

そう、間違つても娯楽室でダーツなんかをしている場合じゃないんだ。

間違つても。

「ユークーマール!! あーそーぼー!!」

図書室から持ち出した『希望ヶ峰学園の歴史』を休憩室で読んでいたら、吹屋さんがそう言いながら俺の頭の上にのしかかってきた。

「ああ…今忙しいんだよね…」

「いーそーがーしーくーなーいー!! あーちーきーさーみーしーいー!!」

まるで駄々をこねる幼児のように吹屋さんは俺の頭をわしづかみにして揺らす。

胸が俺の頭頂部に当たっちゃってるよ……とか変なことを考え出してしまい本に集中できない。

そして俺は何を間違つたのか、三階の娯楽室に連れてこられた。

いつの間に関動させたのか、三対のモノドロイドと一緒に。

「本当にやるの……?」

俺はダーツを手にもって恐る恐る尋ねる。

「はい、じゃあルールは501で! モノドロちゃんAから始めるでありません!」

俺の微かな問いを完全に無視して彼女はゲームを開始する。

「わざわざモノドロイドなんて連れてこなくても……」

「人数は多い方が楽しいでありんしょ！ みんな誘ったのに無下に断るから、最終手段でありんす！ でもユキマルだけはちゃんと来てくれて嬉しいでありんすよ！！」

そう言っただけで吹屋さんはくしゃくしゃと俺の頭を撫でまわす。

「…はいはい。さっさとやってさっさと終わらせようね…」

こんな態度だけど、実際ちよつと楽しんじゃっている自分がいることを否定できない。

そして小一時間。

弓道の時に思い知ったけど、俺は的に何かを当てるのが壊滅的に下手くそなんだよ。

「ユキマル、また外れ〜!?!」

吹屋さんがあくびをしながら呆れ気味に言った。

「まだコツを掴めてないんだよ……!?!」

俺は躍起になってそう見栄を張る。

そして次の一投は…やはり外れ。

自分たちの出番を終えたモノドロイドたちがじつと俺を見つめている。

「はあ、飽きてきた。ユキマル、次はビリヤードしよ〜でありんす!?!」

「待って!! トリップルに当たるまでやらせて!!」

「え〜!?!」

こうなるともう自分でも止められない。

自分で納得できる結果を残すまではやめられなくなっちゃうんだ。

そして飽きっぽい吹屋さんを置いてきぼりにして俺はひたすら投げ続ける。

もはやルールも無視で投げ続ける。

弓道の時と全く同じ流れで一日が過ぎる。

「…………何やってんだろう、俺…………」

夕食の会場で俺は眩く。

完ツツツ全に一日を無駄にした。

まるで全く課題をやらずに過ごしてしまった夏休み終了の二日前みたいな気分。

元來人の誘いにN Oと言えない性格だったけど、ここにきてそれを発揮してしまうのは本当によくない。

みんなに怒られないかと思うと食欲が減ってしまう…。

吹屋さんは何の悪気もなさそうな顔でご飯を食べているけど。

「では、入間君から時計回りに今日の成果を報告していきましようか」

山村さんの言葉で夕食とともに今日の調査結果の報告会が始まる。

ああマズい、午前中に途中まで読んだ『希望ヶ峰学園の歴史』のこ
とをちよつと話すか…。

「私と伊丹様は図書室で興味深い書物を見つけまして」

入間君は伊丹さんと目を合わせながら告げる。

「超高校級の絶望に関する資料でした」

「…っ?! マジ!?!」

前木君が思わず立ちあがる。

「ええ。この名を聞くのも久方ぶりでしたけどね。以前私は図書準備
室で【超高校級の絶望に関する暫定的資料】というものを発見したこ
とがあります」

そういえば、第三の事件が起こる前にそんなことがあったな…………。

【Chapter 3 (非) 日常編②】

「その人たちには…」絶望がそんなに大事なの…? 「絶望」のた
めになんでそこまでできるんだよ…」

「超高校級の絶望」ですから」

そう言って入間君はずつと携えていた一つのファイルを俺に差し
出した。

「隣の図書準備室に置いてあった資料です。超高校級の絶望」につ

いて詳しく書かれていますよ。わたくしが彼らの思想をスムーズに理解できたのはこれのおかげです」

【超高校級の絶望に関する暫定的資料】と銘打たれたクリアファイルの中には、手書きの乱暴な文章がいくつも載せられていた。

「希望ヶ峰学園の生徒の中に……」 絶望は紛れ込んでいた……」

俺はそこに書かれている文面の一つを読み上げ、言葉を失った。

俺たちはそんなところに入学しようとしていたのか。

と、いうことは。

既に希望ヶ峰学園は「絶望」に制圧されたということか……？

それならこんな異様な状況に俺達を置かせることも可能だろう。

そう……そういえば俺達にコロシアイをさせている黒幕は超高校級の絶望……という結論で落ち着いていた……というか考えるまでもなく導かれる当然の結論だけだ。

そして前回の裁判までに分かっていたことも照らし合わせると……

「つまりドモモンもサンディと同じく、超高校級の絶望」だったってことでありんすよね？」

……そう、つまりそういうことになる。

ちなみに第二の事件では、記憶を失っていたが御堂さんも「超高校級の絶望」の一員であったことが明かされた。

そして、記憶を失っているだけで他にも「絶望」がいる可能性も……

ひょっとして、小清水さんも元は「絶望」だったのだろうか……

「『絶望』は私達にコロシアイをさせることで何を生み出そうとしているのでしょうか……？」

「山村様、それについてなのですが……。私は今朝モノクマが放った

『エンタメ』という言葉が引つかかっておりまして……」

「……と言いますと……」

「……もし、あそこにある監視カメラに録画機能も備わっていたら？
そして、私たちのコロシアイの様子を全ておさめていたとしたら
？」

「まさか……そんなことが……」

「つまりモノクマ……すなわち“絶望”は、私たちが繰り広げるコロ
シアイを一つの喜劇として作品にしようとしているのではないかと
思うのです……」

「なるほど……」

入間君が語った推測は、聞くだけで鳥肌が立つような恐ろしいもの
だった。

あれだけ惨たらしい殺人と、クロの壮絶な独白と、その後の地獄の
ようなオシオキ。

これらを全て喜劇として捉えるなんて、正気の人間では絶対にでき
ない。

しかし、俺達は外の世界がどうなっているかを知った。

崩壊した世界。

嘘のような現実。

もしかしたら、この世界に生きている人間は誰も正気なんて保って
いないかもしれない。

モノクマは、そういった人たちのために作品を作ろうとしているの
か……？

「……では話がひと段落ついたところで次は私たちの報告をさせていた
だきましようか」

次に名乗り出たのは山村さんだった。

「私と前木君は昨日訪れた屋上にのぼり、荒れ果てた街を観察したん
です。売店で手に入れた双眼鏡を使って」

小清水さんだけじゃなく、山村さんも双眼鏡を持っていたのか。

「……そしたら、遠くの方に大きな学園が見えた。……ああ、あれこそ俺達
が通うはずだった希望ヶ峰学園本校舎だってすぐに気が付いたよ」

「……え!? 本校舎!？」

考えてみれば、ここが特別分校である以上、本校舎が別にあるのは当然だ。

でも、暮らしているうちに“ここが希望ヶ峰だ”という感覚に染まってしまい、なんだか不思議な気持ちだ。

「つまりそこに…」希望」達と「絶望」達が共に存在しているわけですか…。しかしこれだけの期間、本校舎から何の音沙汰もないということは、本校舎も既に……」

「…いや、それが、見たところ壊れたり燃えたりしている部分はなかったように見えた」

前木君は自分の見たものを淡々と解説する。

「それどころか、入り口は頑丈な鉄の扉が取り付けられてたし、窓にも鉄板がびっしり張ってあったんだ…。むしろ外敵から身を守ろうとしているみたいだったな……」

「つまり本校舎は絶望に染まった世界から身を守るためにそのような防御策をとっているわけですか……」

「ええ？ 中が無事ならなんであちき達を助けに来てくれないんでありんすか？ 見捨てられた？」

「連絡手段を絶たれたんじゃないかな……。本校舎も自分たちの身を守るので手一杯とか……」

その場にいろんな意見が飛び交う。

でも本校舎が崩壊していないのなら……まだ助けが来る見込みはあるってことなのかな……？

「いろいろ考えることはありますが、先に吹屋様たちの報告を聞いておくことといたしましょう。今日は何の調査をされたのですか？」

と、不意に人間君から俺達に報告のバトンが手渡されてしまった。

「ああ、それなら俺は『希望ヶ峰の歴』」

「あちきとユキマルは娯楽室でダーツをしていたでありんす！」

「ちよ！」

俺が精いっぱい報告で取り繕うとしたのに、吹屋さんがそれを遮ってしまった。

「だ、ダーツですか……？」

「こんな時だからこそ遊ぶのが大事って前にジョーちゃんも言った
でありんすよね？ あちきは人生で一番持つちやいけないものは”
退屈”だと思ってるでありんす！ だから退屈しないようにユキマ
ルとモノドロイドに付き合ってもらったでありんすよ!!」

えっへん、と何故か誇らしげに鼻を鳴らす吹屋さん。

「えっと…でも俺はその前にちゃんと『希望ヶ峰の歴史』っていうのを
調べたんだ!」

慌ててフォローを入れるが、みんなの目には必死な自己弁護にしか
映っていないようだった。

「まあ、こんな時ですから交流も大事だと思いますよ！ 私は批判は
しません!」

山村さんががちりと拳を握ってそう言った。

俺の話はまるで聞いてもらえてない。

まあいいや、歴史書を読んでただけで大した発見はなかったし
……。

「そうだ！ じゃあ明日は今日の発見成果について考えつつ、みんな
で何かする日にしようぜ!」

前木君の発案に吹屋さんが「それいいでありんすね!」と反応する。

「じゃあ、何をするかを明日までに考えといてくれよな!」

そんな話をしつつ、夕食兼報告会は終わった。

明日は何をするんだろうな…。

小清水さんのことも気になるけど。



夕食後。

「伊丹さん！」

図書室で本を読み漁る伊丹に、山村が後ろから声をかけた。

「……何か？」

伊丹は普段の表情を崩さずそう答える。

「……」

声をかけておきながら、山村は少し戸惑ったような顔になる。

「……？」

伊丹が訝し気に首をかしげると、山村は胸の中に秘めていた言葉を外に出す。

「最近の伊丹さん、元気がないなあって」

「その話なら今朝したじゃない。体調がすぐれないのよ」

本を読んだまま伊丹はそっけなく答える。

「いえ、違います。あなたがそういう状態か、私には分かっちゃったんです」

「……どういうこと？」

「好きな人がいますよね？」

「……」

一瞬、伊丹は表情を失った。

「……何を言い出すかと思えば」

そしてその動揺を振り払うようにそう告げたが……。

「嘘はつかなくていいんですよ、伊丹さん。私には分かるんですから」

山村は机を挟んで伊丹の正面に立ち、その両肩に手を乗せた。

「私には、恋をしている女の子が表情や仕草で分かるんです。…私も、ちよつと前まで恋する女の子だったんですから」

「………バカなこと言わないで」

伊丹は小さな声で反論するが、心の奥底の動揺を隠すには至らなかった。

「伊丹さん……恋は自分一人で抱え込んじゃダメですよ。こんな時だからこそ…。僅かな団結のもつれが命取りになる時だからこそ…。

あなたの悩みを知らなきゃって思ったんです。消化はできなくても、少なくとも共有するだけでも、ずっと気は楽になると思ったんです」

「…だから、わざわざ私の元に来たの……？」

「……この状況で恋なんてする余裕はないのは分かってるでしょう？」

「余裕とか、そういう問題ではないと思います。人を好きになるのはそういう理屈を超えていることでしょうか？」

「………」

伊丹は黙り込む。

ふう、と一息ついて山村は語りだす。

「……前木君でしょうか？」

「……っっ」

伊丹はビクツと体を震わせる。

そしてその頬が見る見るうちに赤く染まっていく。

「分かりますよ。前木君にだけ、若干ですが態度や仕草が異なりますもん。気になってしょうがないんですよ？　ずっと一緒にいたいですよね？」

「やめて……っ。やめて!!」

伊丹は頭を抱えて叫びだす。

「あなたには関係ないでしょ……!!　どうでもいいでしょう!!」

「いいわけねえだろ!!」

逆鱗モードに移行して山村もまた叫びだす。

「そうやって一人で悩み抱え込んで、潰れた奴がモノクマの手にかかるとどうなるんがっ!!」

「……っ!!」

「他の奴には言わねえ……言わねえから……お前はオレを信頼しろ!!　そういうことを気兼ねなく相談できるのが仲間ってもんだろが!!」

そう言うとき山村を覆っていたオーラは消え、普段の姿に戻る。

「ふう……。最近は意識して変わることができるようになりました。

分かっていただけましたか、伊丹さん？」

「ごまかせない、と悟った伊丹はため息とともに告げる。

「ええ……。あなたの気持ちは嬉しいわ、ありがとう。確かに私は前木君……。常夏のことを好きになっていたの。…言える人が現れてくれてよかったわ」

伊丹はそう告げた。

「やはりそうだったんですね…。こちらこそ無理矢理言わせるようなことをしてしまつて申し訳ありませんでした…。何か辛いことがあればいつでも言つてくださいね。助けられることであればなんでも助けます！」

「私たちは、仲間なんですから！」

言えるはずがなかった。

その仲間を裏切るなんて。

仲間を裏切つて、自分も死ぬなんて。

「山村さんに脚本のことを言えば、あるいはクロの登場を防ぐこともできるのでは…？」

という思いが脳裏をよぎる。

しかしその思いは、彼女の記憶の中に眠る釜利谷の声にかき消された。



伊丹、お前がどんな手を使つてもクロの発生を防ぐことはできねえぞ。

お前が取りうるありとあらゆる行動とそれに沿つた脚本もすでに出来上がっている。

その脚本によると、どのルートを通つても事件は起きる。

お前がどう足掻こうと、結局は無数に予言された道筋のうちのどれか一つを通るに過ぎねえ。

いいか、変な気を起こすなど言ったのはそういうことだ。
俺が最初に語った脚本がお前にとって最良の道なんだ。



結局私は、クロになってオシオキされるしかない。
そんなことを、彼女に言えるはずがない。

それでも伊丹は、山村に言った。

「ありがとう」

「あなたみたいなお友達を持てて良かった」

それは、一部では本心だった。

一番恥ずかしい感情をさらけ出して、それを受け止めてくれる仲間。

その存在は確かに嬉しいし、かけがえのないものだ。

でも私はあなたを裏切らなくてはならない。

私の愛を認めてくれたあなたを、愛のために裏切らなくてはならない。
い。

ごめんなさい。



一人になった伊丹はおぼつかぬ足取りで部屋に戻る。

全ての四肢が小刻みに震え、部屋の扉を開けるのにも神経をすり減らす有様だった。

「ふう、ふう………」

息を整えながらベッドに腰掛ける。

さっきの山村の表情と前木の笑顔が頭の中でフラッシュバックしてはドロドロに溶けてゆく。

そして彼女の胸中は恐怖に支配される。

私はオシオキされる。

私は死ぬ。

死がやってくる。

死がやってくる。

伊丹の脳内に死のイメージが形を伴って現出する。

人は死んだらどうなるのだろうか？

死んだら何も見えなくなる。

聞こえなくなる。

何も感じなくなる。

医学的な死の定義は何度も学んでいる。

しかし実際に死んだ人間の感覚を知ることが絶対にできない。

死んだらどうなる？

全てが無になって、何もない空間に永遠に一人ぼっちになるのだろうか？

「嫌……」

伊丹は布団を力任せに抱き寄せてそう呟く。

「そんなの嫌」

その部屋に無造作に並べられたモノパンダたちは何も言わない。

「怖い、怖いっ怖い怖いっ……」

その心さえあれば、私は死さえも乗り越えられる。
愛は、死をも凌駕する。

大丈夫よ、常夏。

あなたは死なない。

死なせないから。

常夏。

愛してる。

蝉の聲が響き渡る常夏の光景。

幼い頃、ぽつんと立っていた駅のホーム。

「ごめんね、ゆきみ」

聞きなれたその声に、不思議と私は悲しみを覚えていた。

私の頬を撫でる柔らかい手。

「お姉ちゃんと約束して。お姉ちゃんの方まで、みんなを愛してあげるって」

私はその顔を見上げて首をかしげる。

「ゆきみはいい子だから。きっとみんなに愛されるよね。だからゆきみもみんなを愛するのよ。約束ね」

私の全身が暖かい体に包まれる。

どく、どく、と鼓動が私の耳に伝わる。

生きている、生命の振動が。

ぽたり、と涙の粒が私の手のひらに落ちる。

「愛してるよ、ゆきみ」

そう言つて、暖かかった体はふわりと私から離れる。
遠くから轟音が聞こえてくる。

そしてあの人は軽やかに駆け出す。

夏の日差しを浴びながら蝉を追いかける少年のように。

数歩踏み出した後、空中に飛び上がる。

それと同時に、その顔はこちらに向かってゆつくりと振り向いた。
私を見つめる、可憐な顔。

宝石のような涙と黒い長髪が宙に舞う。

私はこの目で確かに見た。

私の、大好きな……………

「愛してる」

大きな列車が私の目の前を横切った。

ドラム缶にバットを打ち付けたような、大きな金属音が私の脳に突き刺さる。

直後、私は何かに殴られた。

喚くような声が私の意識を刺激する。

少しして、殴られたわけではないことに気が付く。

私の頬に打ち付けられたのは、あの人の欠片だったのだ。
愛の欠片が、私に降りかかる。

……………だから。

だから、私は。



「ぐすっ、うふふふ、うふふふふふん………」
泣きながら、笑いながら、伊丹はベッドの中で“常夏”を抱きしめる。

「愛してる………」

Chapter 5 (非) 日常編③

四回目の裁判が終わってから三度目の朝が訪れようとしていた。朝方は空気が冷え込み、吐く息も白くなる。

高度1000mともなればその寒さはひとしおである。

「せいっ！」

その刺すような冷たさの空気を切り裂いて、拳が突き出される。

「やあっ！」

照明のない真つ暗な大ホールの中に、山村の鋭い掛け声がこだまする。

凍土のような寒さの中で、しかし山村は汗を飛ばしながら舞う。

その肢体はさながら鞭のように空を裂く音を響かせ、彼女が人の境地をすでに超えていることを如実に示していた。

窓のない大ホールは、照明がなければ永久に闇である。

すなわちこの場所には時間という概念がない。

皆が寝静まった後、彼女は密かにこの場所に現れ、無限に修練を重ねる。

息が上がるまで演武を続け、その後は両足を組んで30分ほど瞑想に耽る。

その瞑想が彼女にとって唯一の睡眠時間である。

瞑想が終わると静かに目を開き、再び終わりなき修練へと身を投じる。

『オマエエ、おはようございます。7時です！ 起床時間ですよ！』

いつの間にかモノパンダからモノクマへと交代していた朝の放送。

これが山村にとって無限に続くかとも思われた修行の終了を知らせる合図だった。

山村はトレーニングルームに備え付けてあるシャワールームで汗を洗い落とすと、道着から制服に着替えて朝食会場に向かう。

「おっ、山村ー。おはようー！」

前木が温かい笑顔で彼女を出迎えると、彼女もまた「おはようございます！」と返す。

朝食当番はその日早起きした人物が担当することになっており、山村も時々修練を早く切り上げて担当することもある。

しかし最近は料理の楽しさを覚えた吹屋が自ら担当するようになったため、ほかのメンツの負担は減っている。

「いただきます…」

昔の賑やかな朝食会と比べると、今はずいぶん人が少なくなったと山村は実感する。

会話ももちろんあるのだが、食事の時間の華やかさは昔と比べるべくもない。

山村は他の者のことも忘れて思考に耽る。

第四の事件で自分たちの団結は一見強くなったように思える。でもそれは表面だけだ。

山村は心の中の暗雲を悟られぬよう静かに食事を平らげる。



「ありがとう」

「あなたみたいなお友達を持てて良かった」



伊丹から告げられた昨夜の言葉が彼女の脳裏によみがえる。しかし山村はその言葉に形容しがたい違和感を覚えていた。

違う。

あれで終わりじゃない。

山村はそう直感していた。

彼女は何かを隠している。

根拠のない勘だが、そんな予感がしてならない。

だが、本人に問いただしても何も得られないのもまた事実。
であれば、頼れる仲間を探すしかない。

真実を共有し、共に立ち向かうに足る仲間を。

「まるで……あの時のようですね……」

山村は目を細めて小さく呟く。



それは、吹屋喜咲がコロシアイに加わった日の夜。

夜時間になり、山村が個室に戻ろうとした時、こう声をかけられた。

「黒幕の正体を突き止めました」

その衝撃的な言葉を伝えたのは人間だった。

「……………?!? え、え……………」

山村は戸惑いの声を漏らすことしかできなかった。

「山村様、このコロシアイを終わらせたくはありませんか?」

「それは……終わらせるに越したことはないですけど……」

「私の……私たちの手で終わらせましょう。私にはその権利が与えられた」

人間の目は、まるで炎が宿っているかのように熱く闘争心の漲った視線を携えていた。

「権利……? 人間君、いったい何をするつもりなんですか? そもそも

そもそも黒幕って一体……?」

「今から伊丹様もお呼びします。三人いれば十分でしょう。今から黒幕を倒すのです」

「っ……………!!!」

「山村様、どうか力をお貸してください。私たちは勝たなくてはなりません。そのためには強く、信頼のおける仲間が必要なのです!」



そして山村たちは土門の部屋へと乗り込んだ。

あの夜の出来事も遠い昔のように思える。

結局すべては黒幕の術中だった。

あの時の人間の目が憎悪に燃えていたのを山村は忘れられなかった。

だからこそ自分があのようになってはいけないと肝に銘じていた。

憎悪に身を焦がせば、周囲を見失う。

例え最愛の人を奪った相手でも。

例え家族を皆殺しにした相手でも。

冷泉から湧き出る流麗な水のごとく、平静を保たなくてはならない。

それが、あらゆるものを失い続けた引き換えに“武の神髄”を得た山村が一番に感じたことであった。

冷静に考えよう。

この状況を打破する上での最善策は何か。

頭を使うのが苦手な自分でも、“心”と“身体”の強さなら誰にも負けない。

平静にして頑強を貫けば弱い頭にも解法が浮かぶはず。

「山村ー?」

「あつ、はい!」

先ほどから呼ばれていたことに気づいた山村は慌てて返事をする。

「あつ、ごめんなさい! 最近考え事が多くて困っちゃいますね!」

てへっ、と舌を出してみたところ、それまで笑顔だった前木が一気に真顔になった。

「……で、何の話でしたっけ?」

「いや、さつきも言ったけどせっかく屋上あるわけだし、みんなでバーベキューなんてどうかなって」

「バーベキュー?!?! あちきお空に飛び上がっちゃまいそうであります!!!」

「吹屋さん、その反応するの二度目……」

元気にはしゃぐ吹屋に、呆れたように声をかける葛西。

「…へえ、バーベキューですか! いいですね!」

山村も乗り気に答えた。

名目は「昨日発見したことの考察を深めるための会合」ということになってはいるが、久しぶりの全体開催のイベントに心躍っている者も数少ないだろうと山村は感じていた。

最も、小清水は来ないだろうから以前のイベントに比べるとかなり小規模になった感は否めないが…。



昨日の夜から、俺はいろんなことを考えていた。

吹屋さんのこととか、土門くんのこととか。

吹屋さんは相変わらず掴みどころがない。

あんなところに閉じ込められていた以上、彼女が何か重要な秘密を隠し持っているのは間違いないんだけど、それを引き出す方法が分からない。

当の本人は驚くほどあっけらかんとしているし。

昨日もどこかのタイミングでそういうお話ができないかなと狙ってたんだけど、どうしても彼女と一緒にいると彼女のペースに巻き込まれてしまう。

このままじゃマズいよな。

みんな黒幕打倒のために頑張ってるっていうのに、俺が足を引っ張るわけにはいかないもんな。

今朝の朝食会で昼はこれからの方針を話し合うついでにバーベキューをすることになった。

気分転換にはちょうどいいかもしれない。

昨日の報告会で大体の情報は共有できたけど、それを吟味してこれからどうするか考える機会も大事だろうし。

俺たちはモノドロイドたちも動員してバーベキューの準備に取り掛かる。

みんなでこなすイベントは久々だから、こんな時に不謹慎かもしれないけどちよつとワクワクもしている。

「見てください！ 私たちの意図を見透かしてか、厨房にクーラーボックスと大量の食材が！」

山村さんは巨大なクーラーボックスを二個両脇に抱えて言った。

「モノクマも、変なところで我々に好意的なのですね…。まあ、そんなことで奴を許す気にはなれませんが…」

入間君は呆れたようにそう言いながら木炭の入った台車を押している。

「えつと…俺は何をすれば…？」

手持無沙汰になってしまった俺はそう尋ねる。

みんなは顔を見合わせ、そして…

「何もしなくて大丈夫です!!」

「っておい!? またこのパターン!?」

「えっへっへ、あちき達ラッキーくじを引いたでありんすね♡」

同じく仕事がない吹屋さんは高らかに笑いながらエレベーターに乗る。

俺は全然嬉しくないよ。

なんだか最近、こういう場面でも全然みんなの役に立ててない気がするなあ……。

「いやあ、屋上は寒いな」

屋上につくと、前木君とモノドロイドたちが既にテーブルや網の用意をしていた。

「しかし、こんな不気味な空の下ではバーベキューの味も半減です…」

「吹屋さん!! せつかくのバーベキュー、どうせなら極限までお腹を空かせて臨みたいとは思いませんか!? さあ、今一度鉄塔登頂を成し遂げましょう!!」

「だ・か・ら!!! あちきはビリビリが苦手って言ったでありんしょ!!!」

感電して死ぬ!!!」

「死ね」は洒落にならんからやめろって…」

みんなが文句や冗談を飛ばしあう中、バーベキューの準備は着々と進んでいく。

今度ばかりは俺も食器の配膳や食材の準備などで活躍した。

「吹屋さんも手伝ってよー!」

「えー、今10コンボ中!」

どこから持ち出したのか、携帯ゲーム機をポチポチといじる吹屋さんの袖を引つ張って俺は準備を手伝わせる。

「はは…。吹屋様といるときのあなたはさながら母親のようですね」と入間君。

「そんなことないよ…」と俺は謙遜する。

「へへへ、じゃああちきはオカンにご飯の準備してもらおつと! さいなら〜」

「ほら、変なこと言うとすぐ調子に乗る!」

全く、まるでこの子は小学生の男の子だ。

その時、逃げ出そうとする吹屋さんの腕を誰かが掴む。

「げっ、ゆきみん!?!」

「げって言っちゃダメだよ吹屋さん」

伊丹さんは吹屋さんの腕を掴んで雪女のように冷たい視線を彼女に向ける。

「…みんながご飯の準備してるでしょう?? 前木君達に任せてないで、あなたも働きなさい」

「……アイマム……」

引きつった笑みと冷や汗を浮かべながら吹屋さんはそそくさと準備に取り掛かる。

「伊丹さんはいいお母さんになりそうだな……」

準備がてらトランプをやったりしてお腹が空くのを待っていたら、いつの間にか時刻は昼を回っていた。

準備も整ったし、いよいよ焼きはじめだ。

肉と野菜の香ばしい香りが鼻をつく。

「じゃ、焼けたやつからどんどん取って食べちゃってくれ〜」

「いただきますーす!!」

肉を思いつきりほおぼる。

焼き肉を食べるのなんていつ以来だろう。

「あく、うまいっ!!」

「いやー、鉄塔を12往復した後のお肉はとても舌に響きますね!」

「往復しすぎでは…?」

みんなが舌鼓を打つ声が次々に聞こえてくる。

人数は減っちゃったけど、やはりみんなでこういうことをするのが楽しいものだなあ。

「…じゃ、そろそろ本題に入るか」

しばらく食べたところで、前木君がパンと手を鳴らす。

そういえば、このバーベキュー会の本当の目的は、昨日の報告会を受けての作戦会議だったっけ。

「ここでバーベキューをやるって決めたのも、意味がないわけじゃないんだ。この屋上には、フェンスの四隅に監視カメラが取り付けられている」

周囲をぐるりと見まわしながら前木君が告げる。

「でも、ここは屋内より広いし声が籠ることもない。風も少し吹いているから…」

「なるほど、黒幕がこちらの声を聞きにくくなるというわけですね。小声で話せば黒幕には完全に聞こえないかもしれませんね」

前木君の言葉に入間君が補足する。

「まあ、ずっと小声でしゃべってたら黒幕も怪しむだろうし、基本は意識しなくていいと思う。本当に大事なことだけ小声で話そう」

「そもそも…黒幕って誰なんでありませんか?」

吹屋さんが割って入るように尋ねる。

「なんか前回の裁判であつという間に話が流れちゃったでありますけど、昨夜ジョーちゃんから聞いた話だと、ドモモンがこのコロシアイを引き起こしたんでありませんよ?」

入間君、ちゃんとあの後吹屋さんにも説明してくれてたんだな。

「いえ、それがそうとも言い切れないのです」

吹屋産の言葉を否定したのは、他ならぬ入間君だった。

「“彼が黒幕”というのは私があああの夜に勝手にそう決めつけていただ

けで、実際には彼は一言も『このコロシアイの黒幕は自分である』とは言っていないのです。事実、彼が死んだ後もコロシアイはまだ続いていますし……」

「その死つてのも、不慮の事故とかじゃないもんな。誰が見ても明らかにモノクマが殺した」

前木君の言葉であの時の情景が思い起こされる。

最後の最後で死を否定した彼の顔。

どこまでも悪で、醜く、しかしとてつもなく哀れな彼の姿が。

「つまり土門君はモノクマにとってその程度の存在だったってことですよね……」

「そうですね。しかし彼は夢郷君に成りすまし、私たちのコロシアイ生活で何かを為そうとしていた。その目的は、モノクマが言うには『この脚本の調整役』とのことですが……」

「でも……仮に真の黒幕がいるとして、そいつが土門君を始末したってことは、少なくとも土門君がコロシアイにいること、目的は既に果たされたんじゃないかな……?」

俺は慎重に言葉を選びながら自らの意見を述べる。

「用済みになったから消された……。悪役のやりそうなことですね……」

「でもさ……脚本”って言い方が気になるよな。まるで葛西の才能になぞらえているみたいだ」

そう。

モノクマが時節述べる”脚本”という言葉。

その言葉にいったいどんな意味があるというのだろうか。

「葛西は何かピンとくることとかあったか? モノクマの脚本って言葉聞いて」

「……いや、特には……。でも、なんでそんな言い方をするのかは俺も気になってる。……何か嫌な予感もするけど……」

仮に黒幕が土門君とは別にいるとして、そいつは俺に何かをしようとしているのか?

絶望的な脚本を見せることで俺を絶望させるとか……?

でも、俺だけを狙い撃ちする理由が分からない。

「ですが、黒幕がこのコロシアイを“脚本”と呼んでいる以上、葛西くんとは何らかの関わりを持たせようとしているんですよね…?」

黒幕が俺に対して何かをしようとしているのに、それが何かわかっていないなんて。

怖い気持ちと不快な気持ちが入り混じった不思議な気分だ。

「まさかとは思うけどさ」

話し合いが膠着する中、前木君が口を開く。

「葛西が黒幕の仲間ってことはないよな?」

「!!」

彼の思わぬ言葉に、俺の身体を一気に緊張が走る。

考えなかつたわけじゃない。

俺の身が潔白であることは俺自身が一番よく分かっているはず、だけれど…。

「それはない、と言い切りたいところなんだけど……。御堂さんみたいに“記憶を消される前に超高校級の絶望だった”っていう可能性もあるから……。正直言って、100%何も無いって言える保証はない」

そう答えるしかなかった。

記憶がないってことについて深く考えてこなかったけど、こうして考えるととてつもなく怖いことなんだな。

「前木さん。あなたの疑問はもつともですが、無用な詮索は我々の団結を崩壊させるきっかけとなる可能性もあることを肝に銘じてくださいね」

沈黙に耐えかねたのか、人間君が前木君にそう釘を刺す。

「ああ、そうだな……。疑って悪い。そんなこと言い出したら、俺だって同じく絶望だった可能性もあるわけだし…」

「いや、気にしないでいいよ。いずれ言われることだろうと思ってたし」

そうだ。

疑われるのは覚悟の上。

「だけど、もし本当に俺が『絶望』かそれに類するものだったとしたら……。」

その時自分の手でけじめをつける覚悟はあるのだろうか。

「……と言っておいてなのですが、私も一つ詮索しなければなりません」
入間君は強いまなざしである人物の方を向く。

「……吹屋様。あなたの素性について、未だ詳しく聞いていませんでしたね」

「……げっ!？」

吹屋さんはあからさまに嫌そうな顔をする。

そう、そうだ。

俺が聞こうと思っても、いつも彼女は煙に巻いてしまう。

こういう場で聞くのが一番の正解なのかもしれない。

一体君は何者だっというんだ、吹屋さん……。

「確かに……。吹屋さんが私たちと違って別部屋に監禁されていたのも、何か理由があるはずですよ！ 吹屋さんは何か心当たりはありますか？」

すかさず山村さんが問う。

「え、ええ〜!! そんなこと言われたって、あちきは本当にただの希望ヶ峰の生徒でありんすよ〜! みんなと何にも変わらないでありんす! 閉じ込められてた理由なんて、あちきが聞きたいでありんすよ!」

吹屋さんは大きなポーズを取りながらそう答えた。

「そうですか……。ですが吹屋様、あなたは私たちと共に学園生活で過ごした記憶があると仰っておりましたね。それは私たちが持ちえない記憶ですし、貴重な情報となるはずですよ。本当はもっと早くに聞いておくべきだったのですが……詳しく教えてもらえませんか？」

吹屋さんは腕を組んでう〜んと唸りながら自分の中に残る記憶を探る。

「えっと……あちきが覚えてる記憶は入学からの一年ちよつとでありんすね……。あちき達は希望ヶ峰学園第75期生として入学して、そこから普通の高校生みたく一年過ごして、みんなが進級して、それから

……」

「それから？」

「うくん、なんか進級したあたりから記憶がぼんやりしてるでありません…。進級してから一か月くらいまでしか思い出せなくて……」

「ふうむ」と顎に手を当てる入間君。

「私たちと同じように記憶を操作されたのか、それとも単純に忘れていただけなのか…。後者ならば何かのきっかけで思い出すといいのですが……」

「……記憶…：研究書」

ふと口を開いたのは伊丹さんだった。

「え？ 何か言いましたか、伊丹様？」

「記憶研究書よ…。釜利谷君の」

彼が残した記憶研究書。

その内容は確か……。

【Chapter 2 非日常編③ 学級裁判前編】

釜利谷君の部屋で夢郷君が見つけた“例の書類”といえは……あれしかない。

【提示コトダマ：記憶研究書】

「記憶に関する研究の成果をまとめた書類が、ファイルに収まった状態で彼の部屋に置いてあったんだ。それによると……」

「“14体の被験体の記憶を制御し、封じ込めた”と記してあった。ちようど我々から奴だけを差し引いた人数に相当するな」

俺が言葉を濁した部分を、御堂さんが容赦なく述べた。

「三ちゃんは、14人の記憶を制御したって書いてたんだよな。で、その14人ってのは俺達から三ちゃん自身を差し引いた人数に等しくて……」

あの時の状況を整理して話す前木君。

その時、俺の頭脳を電撃が走ったかのような感覚に陥る。

「待って、前木君。それはおかしいよ!」

「……?」

あの時は気付かなかったけど。

彼が言った俺達には定義されない人物が一人いるじゃないか。

「土門君は記憶を制御されていないんじゃないかな?」

「……そうか! 彼は黒幕側だから記憶を制御される必要がない……」

「となると、記憶を制御された梓に一人“空き”が生じますね!」

「それが吹屋さんだってことだよな」

俺がそういうと、伊丹さんは黙って頷く。

「……どのつまり、あちきは記憶を制御されてるって結論でファイナルアンサー?」

「たぶんそうなるね。どうせ制御するなら俺達と同じように学園生活の分も制御すればいいものを、どうして少しだけ記憶を残すような真似をしたのか……」

「そのあたりは謎ですが、少なくとも今、吹屋様は私達とあまり変わらない状況であるということは分かりました。皆がいる中でこの質問になっけししまい、圧迫感もあつた中で丁寧にお答えいただきありがとうございますごさいました」

入間君は柔らかな笑顔で吹屋さんに一礼した。

「へっへーん! あちきを讚えよ……と言いたいところでありますけ

ど、今度ばかりはごちらこそありがたいとうでありんす！　なんだかあちきも肩の荷が下りた感じだし、これでみんなもあちきと距離を感じずに聞かれるでありんしょ？」

吹屋さんもいつも通りの天真爛漫な笑みを浮かべる。

「あー、頭を使ったらまたお腹が空いてきちやいましたっ！　第二ラウンドにしましょう!!」

山村さんの号令で再び木炭に火が点けられる。



赤黒い空はさらに暗くなり、間もなく夜のとばりが下りようとしていた。

バーベキューの後はみんなでスイーツを食べて、トランプなんかもしてあつという間に時間は過ぎていった。

「いやあ、食った食った……。俺はもうお腹いっぱいだし、今夜の晩飯は食いたい人だけ各自で作る感じかな？」

前木君の言葉に異議を挟む者はいなかった。

「あー、楽しかった!!　やっぱ人間、楽しいことをしている時が一番生きてる感じがするでありんすね!!」

吹屋さんは思いつきり背伸びをしながら言った。

「さて、片付けますよ。吹屋様も手伝ってください」

「えー!!　オカンがやってくれるからいいのー！　ねー、オカン♪」

「いいわけないでしょ」

いつの間にか俺は彼女のふざけた言動を一刀両断する術を身につけたようだ。

頬を膨らませながら食器を片付ける吹屋さんをよそに、俺は伊丹さんに歩み寄る。

「楽しかったね」

「……ええ」

伊丹さんはゴミを袋にまとめながらも、うつすらと笑顔を浮かべて答えた。

「今日は伊丹さんもたくさん笑ってくれてよかったよ。最近、あまり元気ないように見えたから…。余計な心配しちゃってごめんね」

人数が減ってくると、嫌が応にもみんなの態度や状態には敏感になっってしまうからね……。

今日の伊丹さんは元気があるみたいで安心したけど。

「ありがとう。葛西君って、とても優しいわね」

「えっ…」

予想外なほど好意的な言葉が飛び出してきたので、俺は思わず赤面した。

「大切なお友達に出会えてよかった。これからもよろしくね」

「……うん、よろしく！」

俺は差し出された伊丹さんの手をぎゅっと握った。

その直後だった。

トントン、と山村さんが俺の肩を叩いた。

「そのまま」

振り返ろうとする俺にそう言うと、素早く一枚の紙きれを渡してきた。

「それ読んでいてください。他の人にバレないように」

それだけ言うと、俺が聞き返す暇もなく彼女はエレベーターの中へと消えてしまった。

…なんだろう。

山村さんは何か隠し事をするタイプだとは思ってなかったんだけど…。

とにかく、何か考えがあるのかもしれない。

夜、部屋に帰った俺はその紙面を見て面食らった。

『葛西君へ。』

伊丹さんのことでお話があります。

明日の朝食後、二人でお話の機会を設けたいです。

一番信頼できるのはあなたなんです。

頼りにしています。

山村巴』

「二人で……う？」

まさか、殺人を企んでいるわけじゃないだろうな…。

いや、流石にそれはないと思うけど。

殺す気なら直接手渡しで紙を渡すはずないし。

しかし、なんの話だろう。

伊丹さんのこと？

今日は元気そうに見えたけど…。

また何か、俺の知らないところで事が進んでいるのか…？

いつも蚊帳の外っていうのは、あまりいい気分じゃないな。

明日、しつかり山村さんと話そう。

黒幕打倒のため、みんなのため、俺もしつかり働かないとな。



真夜中。

小清水は植物園の真ん中の噴水の前に立っていた。

水音と鈴虫の鳴き声が彼女を包む。

人の営みとは無縁の自然。

そこにこそ世界の真理が眠っている。

ここは”自然”ではない。

”造られた自然”だ。

人の営みに汚され、さらには土門隆信の策謀にまで使われた忌まわしき空間。

こんな場所からは、一刻も早くこの命たちを逃がしてあげなければ。

それもまた、私の使命。

だが、その使命を果たすためには……。

「遅かったわね」

小清水は吐き捨てるように呟いた。

「…自分なら呼び出しておいて、結構な態度だな」

入口の方からそう答えたのは、前木常夏だった。

「あの時よりは言うようになったじゃない。私の忠実な駒であることには変わりないけどね」

「忠実？ 笑わせんな、俺はお前の野望を助ける気なんてない。俺たちはただ利用しあってるだけだろ」

やや暗い表情ながらも前木は小清水の方へと歩み寄る。

小清水は何も言わず、ベンチに腰を下ろす。

「俺を呼び出したってことは、また何かやるつもりなんだろ」

「そうね。もうそろそろ動き出した方がいいかと思ってる」

小清水は不気味な笑みを浮かべて告げる。

前木は小清水のこの顔が嫌いだ。

構わず小清水は続ける。

「貴方は”幸運”の持ち主というだけでなく、”あちら側”に自由に干渉できる有用なスパイでもあるの。貴方にしかできない任務を帯びてもらおうと思ってるね」

スパイなんて言い方をするな、と前木は心の中で呟いた。

だがここで怒りと屈辱に耐えなければ、仲間達の脱出の道も開けない。

耐えなければ。

「…………吹屋か？」

「ご名答。奴から出せるだけ情報を引き出して欲しいのよ。私のことはまるで相手にしてくれないから」

「だろうな」

珍しく前木は嫌味を言い放つ。

その直後、自分がこんなことを言うなんて、と自己嫌悪に浸る。

「…私は以前、黒幕の脚本を狂わせる存在は貴方”しか”いないと思っていた。でもね、よくよく考えたらそんなことはないのよ。貴方の幸運によって現れた吹屋喜咲は、その存在自体が黒幕にとってイレ

ギユラー。奴がここに存在している時点で、もう黒幕のストーリーは存分に狂っているはずよ」

「……じゃあ、ここから先のコロシアイは、黒幕でもどうなるか分からないってことか？」

「その通り。恐らくあのタイミングで土門隆信を消したのもこれが原因でしょうね。物語を『既定路線』に沿わせるのが土門隆信の役目である以上、その『既定路線』が意味をなさなくなれば奴も用済みってことよ」

「でも……先がどうなるか分からない時こそ、上手く調整する役つて必要なんじゃないか……？ ていうか、そもそも土門が黒幕っていう話はどうなったんだ……？」

「モノクマがいる以上、黒幕が土門隆信以外に存在するのは間違いないでしょうね。最も、あのヌイグルミの中身がアルターエゴだとしたら、真の黒幕が今生きているのか死んでいるのか、そもそもこの世に存在する人間なのかも分からないけどね」

「……………」

前木は黙り込む。

「そういうわけで、吹屋喜咲は黒幕にとって何か不都合な真実を隠し持っているのは明白。だからこそ、その不都合な真実がなんなのか貴方に洗い出してもらいたい。お願いできる？」

「……吹屋の真実……………」

皮肉にも、前木達はたった今日、吹屋から聞けるだけのことは聞いてしまっている。

吹屋から得られる情報に直接黒幕に繋がるようなものはなかったことも知っている。

それを今言ってしまうべきなのか……。

「まさかとは思うけど」

前木の思考をかき消すように小清水が声を投げかける。

「吹屋喜咲と会話して得たことをバカ正直に受け止めているわけじゃないでしょうね」

「……………どういう意味だ？」

「あの女に質問なんかしたって有用な答えなんか得られるわけないわよ。あの女、頭の中身が空っぽですもの。私は不都合な真実を”洗い出して”ほしいって言ったのよ。”聞き出して”とは一言も言っていないわ」

「じゃあ…会話以外でどうやって吹屋のことを調べろと?」

「何気ない仕草とか、普段の行動とかに隠されていないか気にしてみよるものよ。あとは本人が隠していることをさり気なく発言させるよう誘導するとか。やりようはいくらでもあるじゃない? あの女、頭空っぽのくせに私のことだけはやけに警戒してるみたいでね。あなたにお願いした方がはるかに手っ取り早いの」

「……そうかよ……。分かった、できる限りやってみるよ……」

前木は小声ながらもハッキリと答えた。

「感謝するわ。人類を滅ぼす時には、貴方は最後の方にしてあげる」

小清水は満面の笑みを浮かべてそう答えた。

「……好きにしろ」

「……じゃあ、私も一つ、貴方に教えてあげようかしら」

そう言ってふらりと小清水は立ち上がる。

「!?」

前木は驚き、身構える。

「その前に、貴方のボディチェックね」

小清水は躊躇いなく前木に近づき、そのまま体を密着させる。

「お、おいー」

前木はとつさに小清水を突き飛ばそうとするが、小清水はその腕を掴むと、そのまま外側にひねり上げた。

「いっ… いてててて!!」

前木が悲鳴を上げている間に、小清水は彼のポケットに順番に手を突っ込む。

パーカーのポケット、ワイシャツの胸ポケット、ズボンのポケット。

出てきたのはハンカチとポケットティッシュだけだった。

全て確認し終わると、腕から手を離してニッコリと笑う。

「合格ね」

前木はひねられた腕をさすりながら小清水を睨みつける。

「…盗聴器でも仕込んでると思っただのかよ。今まではこんなことしなかったくせに、どういう風の吹き回しだよ…!」

「ぶっちゃけた話、今までののは全部聞かれたところで大した問題にはならない話よ。少なくとも、”人間側”の連中にはね。でも、今から私が言うのは共有されちゃうと困るのよね」

「俺がみんなに話す可能性は？ 何か口止め材料でもあるのか?」

「ないわよ。でも貴方は絶対に言えない。いい？ 心して聞いておきなさい」

「っ!!」

前木が心の準備を終える前に、小清水はその耳に口を寄せる。

「私が最も恐れているのはー」

小清水は微かな声で何かを告げた。

「……………はあっ?!?!」

前木は思わず後ずさる。

様々な感情が前木の中に現れては消えていく。

「な、なんで……………なんでこんなことを俺に教えるんだよっ?!」

あらゆる感情よりも先に放たれた言葉はそれだった。

「……………ちよつとは私も身を切らなきゃいけない時期かと思ってね。これで私達は互いに”秘密”という鎖で縛られる仲になった。以前よりは協力的に前向きになれたでしょう?」

「……………そんなことのために……………」

前木は溢れ出る冷や汗を拭う。

「これを伝えたかったのと、吹屋喜咲の件。この二つが達成された今、私の用は済んだわ。精々頑張ることね、人間らしく」

そう言っつて小清水は前木の横を歩き去り、植物園の入り口に向かう。

「……………それと、最後に一つ」

小清水はその言葉とともにゆっくり振り返る。

「貴方は私の手駒。ここを出るまでは、ずっと……ね」

「……………」

前木はただ小清水を睨み続けることしかできなかった。

小清水が去った後の植物園は、前と変わらず鈴虫の声と噴水の水音が空虚に響いていた。

「……………はあ」

前木はベンチに腰掛けてため息をつく。

あんなことを知ってしまったて、これからどう過ごせばいいのだろう？

…いや、どうも何も、今まで通りに振る舞う以外の選択肢は存在しないのだが。

でも……。

そこまで考えた時、前木は植物園の扉が勢いよく開く音に気がつく。

小清水が去ったのとは違う入り口の扉だ。

「……………い…たみ……??」

前木はベンチから立ち上がる。

絶句しそうになりながら見つめた先には、目に涙を浮かべた伊丹が立っていた。

「まさか……聞いて……」

と言いかけて前木は口をつぐむ。

あり得ない。

仮に扉の裏にずっと潜んでいたとしても、この扉は全て防音だ。だからこそ小清水もこの場所を待ち合わせ場所を選んだんだ。

さつき小清水が身体検査を行なった通り、盗聴器だって仕掛けられていなかった。

「……………常夏」

伊丹は彼の名を呼びながら足早に歩み寄る。

「私には全部、お見通しだからね」

「……………!?!」

前木は全く不可解だと言わんばかりの表情を浮かべる。

「……パーカーのフードの中」

ふと伊丹はそう呟く。

「え……!？」

その言葉を受けて、咄嗟に自らのパーカーのフードを探る前木。

「……!!」

彼は驚愕する。

彼がフードから取り出した拳の中には、10円玉ほどの大きさの盗聴器が入っていたのだ。

「まさかこんなところに……一体いつ……?」

「今日、バーベキューの時に」

やられた、と前木は思った。

完全に油断していた。

「……これ、昨晚技術室で作ったのよ。ご丁寧に解説書も置いてあったから」

前木は動揺する。

彼の中で最強と盲信していた小清水があつさり伊丹に出し抜かれたのだ。

あれほどの頭脳を持っているのに……。

「でも、即興で作れる簡易的なものだから、小さすぎる音は拾えなかったの。一番大事な部分が聞き取れなかった」

「……さっきの耳打ちの部分か」

小清水が前木に告げた最大の情報。

幸か不幸か、そこだけは伊丹の耳に届いていなかった。

「ねえ、教えて」

伊丹はこの前のように、前木に体をぴったり寄せて、上目遣いに尋ねた。

「……………」

前木は追い詰められた窮鼠のような表情を浮かべる。

沈黙。

前木の喉奥からうめき声が漏れる。

もう少しで言ってしまうそうになるが……。

「……………言えない」

「……………え？」

「……………言えない。これだけは……………」

結局はこの前と同じような構図だ。

しかし、この話だけは伝えられない。

そもそも、真偽のほども確かではないのに告げるのはリスクしか伴わない。

…ひよつとして、これも小清水の想定内なのか？

だとしたら、やっぱり小清水の方が上手で……。

「嘘つき!!!」

そんな前木の思考をかき消すように伊丹の叫び声が響く。

「私は嘘が嫌いって何度も言ったはずよ。貴方を好きになる前から、何度も」

「それは知ってるよ。俺がどんな嘘をついたって言うんだ」

「私を信じてくれるんじゃないの!? どうして私よりあの女を優先するの?!?!」

「信じてるからこそ言えないんだ。そういう情報なんだ。今はそれしか言えない。頼むから」

「うるさいうるさいうるさい!!!」

伊丹は思いきり前木を突き飛ばし、そのまま押し倒す。

仰向けに地面に倒れこんだ前木をまたぐようにして伊丹は顔を近づける。

「どうして私を頼ってくれないの？ 私が無力だから？ 使えないから!?!」

「伊丹、落ち着いてくれ！ 俺は」

「あんな女にたぶらかされたくないでよ!!! 黒幕を倒すくらい!!!」

伊丹が流した涙が前木の頬に落ちる。

「黒幕を倒すくらい……………私でもできるのに……………」

だがこの時、嘘をついたのは紛れもなく伊丹の方であった。

伊丹もまた、前木が知ることはない真実を隠し持っている。

誰かを殺し、次の裁判でオシオキされる運命を背負わされた伊丹が、黒幕に挑むことなど到底不可能なのだ。

どこまで私は身勝手なのだろう、と伊丹は自分を嘲った。

自分は絶対に言えない真実を隠しておきながら、常夏にだけ全てを吐かせようとするなんて。

伊丹が許せないのは、前木が真実を話さないことそのものではない。

それだけの秘密を共有するに足る女が存在していることなのだ。

自分にすら開かせないほどの秘密を共有できる女がいるという事実が、伊丹の胸を容赦なく抉る。

「……ダメなのね」

伊丹は顔を前木に寄せたまま、そう呟く。

「貴方は、小清水さんのモノ」ですもんね」

伊丹はさつき小清水が最後に放った言葉をそのままなぞってそう言った。

「伊丹…… それはそういう意味じゃねえって」

「……分かってるわよ、それくらい」

小清水が恋敵でないことぐらい伊丹も重々承知していた。

それでも許すことができないのだ。

例えばそれが恋心でなくても、常夏が自分より心を許す女がいることが許せない。

いや、許せないというよりは、”許せない”と思いつつも許さなくてはいけ

ない。なぜなら、伊丹は自らの運命に沿って誰かを殺さなくてはならな

い。そのためには、自分にとって殺すに足る人物がいなくてはならな

い。その標的として、”小清水を恨もう”と思いつけている自分があるのだ。

でなければ、どこまで数々の悲劇を見てきた自分がこんな身勝手な

理由でここまで人を恨めるものか。

「……ごめん、本当に……」

一方の前木も、自己の罪深さを呪いたい気持ちだった。

伊丹は自分の信頼を欲している。

その信頼の証として、小清水が自分に告げた情報を欲しがっているのだ。

だが、よりにもよってその情報は他人の前では絶対に開封できない代物だったのだ。

だってあんなこと、もし伊丹に言ってしまったら……。

伊丹は殺人を犯してしまいかもしれない。

そんなことは絶対にさせない。

「でも伊丹、俺にとって一番大切な女はお前だけだ。この言葉に偽りはない」

「常夏……」

とにかく今は伊丹の心を安定させるのが全てに優先すべき目的だ。

小清水の依頼もあるが、今は伊丹が一番心配だ。

……はあ、なんで俺がこんな目に遭うんだろう。

小清水には“特別な力がある”なんて言われ。

伊丹には本気で好かれ。

まるで何かの主人公みたい。

俺、主人公ってキャラじゃないのに。

ずっとそう思ってた生きてきたのに。

やっぱり希望ヶ峰の通知が届いたあの日から、全部狂い始めてたんだな。

「だから約束してくれ」

前木は床に寝た態勢のまま伊丹を強く抱きしめる。

「！」

伊丹の顔がさくらんぼうのように真っ赤に染まる。

「絶対に生きて、ここを出よう。そしてもしここから出られたら――」

「――俺と結婚してくれ」

「……!!!」

伊丹は顔を両手で覆いながらバツと前木から離れる。

これでいい、と前木は思った。

伊丹が過ちを犯さないために。

伊丹が死んでしまわないために。

伊丹に生きる希望を与えるために。

俺は最善を尽くした。

「小清水は俺たちの敵じゃない。…少なくとも今は。だから変なことは考えなくてくれ。お互いのために、黒幕に勝とう」

そう言つて前木は立ち上がる。

「今、俺が言ったことを忘れないでくれ。お前の心には確かに響いたと思うから」

「う……う……」

伊丹は顔を覆つたまま、声にならないうめき声をあげる。

嬉しさなのか感動なのか分からないが、俺の言葉に驚きが隠せていないようだ。

今はそつとしておこう。

前木はそう思い、あえてこれ以上何も言わずに立ち去つた。

「おやすみ。…また明日」

その言葉だけを残して。

「……う」

前木が去つた後も、伊丹は目を見開いてうめき声をあげていた。

『俺と結婚してくれ』

意中の人物からの告白。

だが伊丹が感じているのは、その言葉への感慨ではなかった。

「う、う……う……」

『変なことは考えなくてくれ』

小清水を殺すな、という意味の言葉。

そしてそれ以上に彼女の心を抉ったのは、さらにその前の言葉。

あの時も言われた言葉だった。

『絶対に生きてここを出よう』

「だから出られないって言ってんでしょがああああああ
!!!!!!」

伊丹は髪をかき乱しながら絶叫した。

一瞬やんだ鈴虫の声は、数秒後には何事もなかったかのように再開する。

前木が自分を元気づけようとしているのは伊丹にも痛いほど伝わった。

だが、現実はまだにも残酷だ。

その前木の言葉こそが、最も自分を追い詰めてしまっているのだから。

私はどうあっても殺さなくてはならないというのに。

どうして常夏は私をこんなに苦しめるの??

こんなことならあなたを好きにならなければよかった。

私は何をしているんだろう。

小清水さんを恨む理由が欲しくて、ただそれだけのために盗聴器まで用意したというのに。

結局迷いを生み出すだけの結果に終わってしまった。

私が殺したいのは、小清水さんなのか？

私が本当に殺したいのは……………。

「…!?!」

その時、伊丹の脳裏を何かがよぎる。

「……………そうか」

ぼつりとそう呟いた。

「これで、いいのか」

何かに得心した伊丹は、植物園の出口に向かって歩き始める。



長々と語ってすまなかつたな、伊丹。

俺の話はこれで終わりだ。

最後にもう一度念を押しておくが、お前にとって最良の道は“脚本に従うこと”だ。

たとえこの話をみんなに知らせて対策したとしても、最良の結果にはならない。

そう予言されているからな。

：もし、誰を殺すか決まったらモノクマがこっそり教えてほしいぞうだ。

別にコロシアイを手伝うわけじゃねえ。

意思確認がしたいだけだよ。

じゃあ、先に地獄で待ってるぞ。

頑張れよ。

親愛なるダチへ、“超高校級の絶望” 釜利谷三瓶より。

……………

(音声途切れる音)



どうしても“脚本”に抗えないのであれば。

“脚本”の中で私は抵抗するだけだ。

「私は……愛する人を守りたい。助けたい」

「私はもう迷わない。私に力を貸して——」

「——お姉ちゃん」



同時刻。

「ふうっ」

漆黒の闇の下、屋上に現れた吹屋は短く息を吐く。

「ふんふんふーん♪」

鼻歌を歌いながら屋上の隅へと駆け寄る。

「うわあ、不謹慎だけどキレーイ！」

遙か下には滅びゆく世界の夜景が、恐ろしいほどに美しい夜景となつて広がっていた。

「よしっ！」

吹屋は鼻を鳴らすと目の前のフェンスをよじ登り始めた。

3 m近くもある鉄柵を楽に上ると、およそ人とは思えぬほどの跳躍力で頂上の有刺鉄線を乗り越える。

そして鉄柵の反対側へ降りると、まっすぐ前に進んで足場の端に進み出た。

高度1000 mからの落下を遮るものは、何もない。

「うひょ〜〜!!」

吹屋は満面の笑みを浮かべて端に座り込み、足を外側へと投げ出す。

僅かでも尻の位置がずれれば、高さ1000 mを真っ逆さまの状態である。

しかしそれを気にする様子は全くない。

「絶景、絶景♪」

吹屋はその眺めに一人で拍手を送る。

「やっぱり人生は楽しく美しく、でありんすね」

その言葉を聞く者はいない。

「絶対生き残るぞ〜〜!!!」

吹屋は大きく腕を伸ばして思い切り叫んだ。

その声は誰にも届くことのないまま、絶望の虚空に消えていった。



“それで黒幕に勝つつもりでござるか？”
声が聞こえた。

“甘いはずぞ、小清水殿。それでは勝てませぬぞ……”
聞き慣れた声が重く彼女の耳に響く。

“拙者を殺しておいて負けるなど、許しませぬ”

小清水はゆつくりと目を開ける。

どうやら、自室の椅子にもたれかかったまま寝ていたようだ。

元来睡眠時間は人より少ない小清水であったが、それでも最近の睡眠の少なさには限界が来ていたようだ。

しかし、この熟睡のおかげで眠気はすつきり覚め、体はかなり楽になった。

時刻は既に九時を回っていた。

葛西たちはすでに朝食を終えてそれぞれの行動に移っている頃だろう。

小清水はシャワーを浴びながら、先ほど見た夢のことを考えていた。

『駿河はお前の中で生きている。お前が死ぬまで、一生な』

第四の事件の前、前木常夏に言われた言葉が脳裏をよぎる。

小清水が殺した命。

その声が何度も小清水の脳内を飛び交った。

直接とどめを刺したのは安藤だが、あの時すでに丹沢の身体はモノウイルスに侵されていた。

安藤が薬を与えなくても死ぬ運命にあった。

小清水は、もう戻れない場所まで足を踏み入れていた。それでも生き残ってしまったのだ。

その声は、いつまでも小清水の思考を遮るように反響し続けた。

「くだらない」

湯を浴びながら小清水はそう吐き捨てた。

なぜ殺そうとした命のことをわざわざ夢に見なければならぬ？
では人間どもは殺した虫たちの悪夢を見るところなのか？

「命の価値に差などない。あつてはならない」

自らに言い聞かせるように小清水は呟く。

牛、豚、魚、虫、植物から空気中の微生物に至るまで。

地球に存在する命に差などあつてはならないのだ。

命が他の命を食らって生きるのは自然だが、人間の営みはその範疇を遥かに超えている。

ならば、人間が害虫を駆除するのと同じように、人間を地球から駆除するのが私の役目なのだ。

「たった一つの命を顧みている暇なんてない」

“それが、小清水殿の信念でござるか”

「黙れ!!」

小清水は叫びながらシャワールームの壁を強く叩く。

夢ばかりでなく、幻聴も聞こえるほど私は心を侵されているというのか？

小清水は己の現状に辟易することしかできなかつた。

「私の頭から出ていけ……」

体を細かく震わせながら小清水は怨嗟を込めて呟いた。

「……………」

幻聴は聞こえない。

小清水はため息をついてシャワールームを出た。

新しい服に着替えた小清水は、倉庫から持ち出した軽食で手早く朝食を済ませた。

そして身支度を整えて、部屋を後にする。

「もう、時間がない……………」



朝食の後、俺はトレーニングルームへと足を運んだ。

「本当に来てくれたんですね」

山村さんが嬉しそうに俺を出迎えた。

「正直、来てくれないかとも思ったんですよ」

「どうして?」

「だって怪しいじゃないですか。」他の人にバレないように来てほしい”って。普通なら絶対に行かないか、行くとしても武器の一つや二つ持っていきますよ」

山村さんは口をとがらせてそう言った。

…呼び出した本人がそう言うのか。

「私だって、怪しまれないように呼び出す方法を考えたんですが……他の人に気づかれなないように呼び出すのって結構難しいんですよ。それでもあなたは来てくれた」

「そりゃまあ、仲間だし……………」

とりあえずお茶を濁すようにそう言ったが、言われてみれば不思議だ。

“仲間だから”なんてこの状況では一番弱い根拠じゃないか。

だって俺達は、信じていた仲間同士で四回もロシアイをしているのだから。

一応、昨日の俺もそれを疑ってはいたけど。

殺す気なら手渡しで手紙を渡すはずがない…とか思ってた疑うのを

やめたんだっけ。

……そんなことで疑うのをやめていい段階なのかな？

何か別の根拠があったような気がする。

どうして俺は何の疑いもなく丸腰でここに来られたんだろう。

「……君！ 葛西君！」

山村さんに呼ばれていることに気づいた俺はハツと顔をあげた。

「ごめん……考え事をしてた」

「こんな状況なので考えることがあるのは分かりますけど……。私のお話を聞いてくれないと呼び出した意味がないじゃないですか！」

「ごめんごめん……」

慌てて両手を合わせて山村さんに謝る。

ふう、とため息をついて山村さんは本題を切り出した。

「最近の伊丹さん、何かおかしいと思いませんか？」

「伊丹さん……？」

そういえば、紙切れにも伊丹さんのことでお話があるって書いてあったっけ。

「一昨日くらいまではいつもよりおとなしいなああって思ってたけど……。昨日のバーベキューの時は普通だったかな……」

「……そうですか……」

山村さんは顎に手を当てて何かを考える。

「……伊丹さんについて、何か知ってるの……？」

「何か……というか……」

急に困ったような顔をする山村さん。

「……うん、ダメですね。呼び出しておいて悩むようじゃあ……」

「……？」

「……誰にも言わないでくださいね。伊丹さんとの約束を破ってまで、あなたに相談しようと思ったんですから……」

山村さんの表情が険しくなる。

俺も思わず気が引き締まる思いになった。

「伊丹さんには、好きな人がいるんです」

「えっ!？」

予想だにせぬ言葉が飛び出たので、素っ頓狂な声が出てしまった。「本当、誰にも言っちゃダメですよ！ あなたに言うのも伊丹さんにはナイショにしてるんですから……」

驚くとともに、俺はなんだか肩透かしを食らったような気分になった。

わざわざ手紙まで書いて呼び出しておいて、したかったのは恋バナなの……………？

「誰のことが好きなの……？」

「えっ、それも言わなきゃダメですか……？」

顔を紅潮させる山村さん。

あつ、流石にいきなりそれを聞くのはダメだったか。

「いや、別にいいけど……………。それで、何を相談したいの？」

「…………伊丹さん、様子がおかしいんですよ」

「…………？」

俺は首をかしげる。

「そりゃあ恋をしているんだし、いつもと様子は違うんじゃない……？」

「ええ、そうですよ。でも、それ以外にも何かあると思うんです」

山村さんは急に真剣な顔つきになってそう言った。

「それ以外にも…………？」

「はい…………。具体的につて言われたら困るんですけど…。ただ…………」

山村さんは俺の顔を見てグツと拳を握り締めた。

「乙女の勘です！」

そこまで自信満々に言われると、俺も何か疑わしくなってくる。

とはいえ、伊丹さんに真つ向から尋ねたつて正直に答えるわけがない。

何かうまく引き出す方法はないかな…………。

「これがただの学園生活なら恋バナで済んだのですが…………生憎今はコロシアイという状況に身を置かれているんです。ちよつとした人間関係のもつれが何を生み出すか分からないのは葛西君が一番よくわかってるかと思えます…………」

「……………」

そうだな、と俺は自分に言い聞かせた。
今でもたまに夢に見る。

俺を抱きしめてくれた小清水さんのぬくもり。

そして、俺やみんなを裏切った彼女の姿を。

もう、俺以外の誰にもそんな思いは抱かせたくない。

「……だから、ロシアイを未然に防ぐために、一つ手伝ってほしいことがあるんです」

「俺にできることならなんでもするよ」

俺は力強く頷いた。

そして――。

俺が手を引かれるままにたどり着いたのは、技術室だった。

「……ここに一体何の用が？」

「葛西君は第二の事件のこと、覚えていますか？」

「うん……。あの時、御堂さんはここで爆弾を制作してリュウ君を返り討ちにしたんだよね」

「そうです。ここは、爆発物や殺人に用いられる兵器を開発することさえもできてしまう場所なんです。今まで野放しになっていましたが、何か対策を打つべきだと思いますか？」

山村さんの言うことはもつともだ。

『「ここで製作できる爆弾は簡易なもので殺人能力はない』とモノパ
ンダは言っていたが……それはあくまで一個だけの話で、何個分もの炸
薬を一か所に集めれば通常の爆弾をしのぐ威力になるかも分からな
い。』

それに、化学室で後になってモノウイルス制作キットが発見された
ように、何か危険物が後から追加される可能性だってある。

「さあ、どうします？」

「えっ？」

山村さんから急に問いかけられたので、俺は思わず声が漏れてし
まった。

対策をしようと考えているだけで、具体的な対策案は何も考えていないということか。

彼女らしいと言えば彼女らしいな。

…まあ、それくらいは俺が考えた方がいいな。

「一番いいのはこの部屋を封鎖することだけど……。鍵がないことはどうしようもないよね」

そう言っただけ俺は技術室の扉をまじまじと見つめる。

かつて校舎として使われていた名残なのか、スライド開閉式の扉には鍵穴がついている。

しかし、その鍵穴に差し込む鍵がなければ全く意味がない。

モノクマやモノパンダから鍵に関する話は一切出されていなくても、仮に鍵をよこせと言ってもくれるはずがない。

更衣室と個室以外のロックは全て鍵によるもののように、このままでは施錠は不可能だ。

「…となると、中の道具をどこかに運び出すとか？」

非効率的だけど、それが一番確実に思えた。

「例えば俺の部屋に爆弾や毒物を全部置いておけば、理論的にそれらの道具を使えるのは俺だけになるはず。その状態でそれらの道具を使った事件が起きれば、明らかに怪しいのは俺だけになるよね。つまり俺は毒や爆弾を使えなくなるはずだ。そして、俺の部屋はこの電子生徒手帳で完全に施錠できる。こうすれば、誰にも毒物や爆弾は使われなくなるんじゃないかな？」

「おお！ あんまりわかりませんが、なんだかとっても頭が良さそうな作戦ですね!! それでいきましょ!!」

目を輝かせて拳を握り締める山村さん。

『とまあ、そうは問屋が卸さないんだけどね!』

と、あの耳障りな声がその場に響く。

振り返ると、廊下に仁王立ちするモノクマがいた。

「クソツ!!」
「せつかく妙案を思いついたのにまた邪魔する気がテメエ!!」

逆鱗モードに移行して山村さんがモノクマを威嚇する。

『べつに君たちの行動を邪魔しようとは思ってないよ！ただ、君たちに無駄骨を折らせるのが痛ましくってさあ！』

「無駄骨……？」

『そう！君たちがこの部屋の備品をどこに動かそうと君たちの勝手だけどさあ、この部屋からなくなったものはボクが責任をもって補充しますよってコト！』

「余計なことすんなコラア!!!」

『余計じゃないでしょ！なくなっただものを補充するのは校長として当然の仕事だよー!! むしろちゃんと働いてることを褒めてほしいくらいだね！君たちがコロシアイを始めてから、雨の日も風の日も休みなくウン十連勤もさせられてるんだからねこっちは！世が世なら大問題になるところだよ！』

腕を振り上げながらモノクマは山村さんに威嚇し返した。

「すごく素朴な意見だけど、このままズルズルとコロシアイを続ければ、黒幕を過労で倒せるんじゃないか。」

いや、流石にそこまで甘いわけないか。

『というわけで、これからも君たちが無駄骨を折らないようにボクが積極的に意見していくからね！ボクの優しさを骨身に染み込ませながら学園生活を楽しんでね！』

そう言つてモノクマは廊下の通気口の中へと滑り込んでいった。

「ちっ……」と舌打ちをしながら山村さんは自らの体を覆うオーラを消し、元の人格に戻る。

「…ふう。モノクマの話、真に受けるべきなのでしょうか？」

「でも…今までのモノクマの言動から考えて、それこそ意味のないこととは言わないと思うんだ…。あいつの言ったことは事実と受け止めて良さそうだね」

俺は顎に手を当てて考えながらそう言った。

「そうですか…。ではどうやって……」

と山村さんが困り果てた声を出した時だった。

「答えは案外身近にあるものですよ」

その声が聞こえてきたのは、技術室の中だった。

「…入間君!？」

技術室の扉をあけて出てきたのは、他ならぬ入間君だったのだ。

「話は聞かせていただきました。私も同じことを考えていてちょうどこの部屋を探っていたところなのです」

「そうだったの…。でも、その口ぶりからすると何か答えを見つけたってこと?」

「はい。こちらです!」

入間君はそう言って500mlペットボトルくらいの容器に入った液体を差し出した。

「技術室の隅の方に置かれていた工具です。なんでも“モノボンド”と言うらしく、一度接着すれば物理的にはほぼ破壊不可能であるトラベルに書いてあります!」

またモノクマ特製の摩訶不思議な道具が出てきたのか。

でも、それが本当なら話は早い。

「つまり、わざわざ物を移動させるような手間を作らなくても、このボンドで扉を接着して開けないようにしてしまえば危険道具の封じ込めには十分だということですね!」

山村さんが嬉しそうに言う。

「じゃあ早速部屋の中にあるボンドを全部運び出そう。技術室と弓道場、あと一応化学室もふさいでおいた方がよさそうだよね」

こうして俺達は日曜大工のごとく、扉にボンドを塗る作業に勤しむこととなった。

「気を付けてくださいね、かなり強力なボンドなので手に付いたら大変です」

入間君の助言を受けながら、俺は慎重に付属のヘラにボンドを乗せ、扉と壁の隙間に塗っていく。

「おお、凄いです、これ!! 全くビクともしません!!」

ボンドはものの十秒ほどで乾燥し、乾燥した後は山村さんでも動かせないほどの頑強さを誇った。

「この中で一番力がある山村さんが動かせないなら、問題なさそうだね」

「いやあ、私の発見がお力になれてよかったです！ この対策をもう少し早く思いついていれば他の方の犠牲も防げたのかもしれないが……」

「…余裕がなかったからね。過ぎたことを悔やんでも仕方がないよ。他の部屋もこうやって…」

と、入間君を慰めている最中だった。

よそ見をしていたのがよくなかった。

ぶにゅ、と俺の手にボンドがついてしまったのだ。

「あっ!!」

大声を出した時には、既にべったりとボンドは俺の握り拳に広がっていた。

「ま、マズいですよ！ どうすれば!」

「ちよ、拭かせてよ!」

「いやー!!」

俺がとつさに山村さんの袖で拭おうとすると、彼女は悲鳴を上げて避けてしまった。

「あ~~~~…多分もう固まってしまいましたね……」

入間君がため息とともに言った。

「そ、そんな!」

俺は一気に泣きそうな表情になった。

それもそうだ、もう一生この拳をパーにできないなんて。

『心配ご無用だよーっ!!』

今ばかりはこの声が待ち遠しいような気がした。

再び俺の前に現れたモノクマは、誰が見ても腹が立つような顔や顔を浮かべて俺の前に立ち尽くした。

『いや、実はモノボンドは最近になってこっそり技術室に追加したスペシャルアイテムだったんだよね! 既に解放された部屋でも新しい発見を与えることで探索に新鮮味を与えようというボクの優しさなんだけどね! でもまさかあんな隅っこに置いたアイテムを見つけてくれるなんてボクは校長として鼻が高いよ! ゾウよりも鼻が高いクマになれそうだよ!』

「それはそうと、この手はどうかになるのですか？」

モノクマの冗談をスルーして入間君が尋ねる。

『ああ、問題ないよ！　っていうかラベル全部読んだ？　ゆとり世代は書いてあることすらまともに読まないで全部聞こうとするから校長は嫌になっちゃうよ！』

「ラベル……？　あつ、モノボンドは熱に弱いって書いてありますよ！！」

山村さんが指差した部分には、確かに該当する説明が書いてあった。

モノボンドはきわめて強力な接着剤だが熱に弱く、風呂のお湯程度の熱でも容易に溶けてしまうのだと。

『そのとーり！　そしてボクちゃん、今なんと偶然にも熱々の濡れタオルを持っていたのでーす！』

そう言つてモノクマが自分のお腹を開くと（もう完全にヌイグルミであることを諦めているようだ）、中から湯気の立つ濡れタオルを取り出した。

…が早いか、俺は自由な方の手で即座にそのタオルをひつつかんで奪い取った。

「…あちっ！　あちっ！」

思っていた以上の熱さに驚きながらも、俺はすぐに熱々のタオルを接着された拳に押し付けた。

しばらくして拳を覆っていたボンドは溶け、タオルに付着しだした。

「ああ…よかったです……」

山村さんはほつと胸をなでおろした。

「葛西さんの手が自由になったのは嬉しいのですが……。ここで一つ問題が生まれましたね」

と、入間君が深刻そうな表情で告げる。

「熱に弱いという特性がある以上、たとえこここの扉を物理的に塞いだとしても、お湯でも持つてこられてかけられたら簡単に再解放でできてしまうということになりますね」

「そういえばそうだね……」

確かに、それは困ったことだ。

いくら強固に塞がれていても、簡単に破れる方法が確立してしまっているという意味がない。

「でも、それは我々が黙っていれば良いことなのでは……?」

と山村さんが提案するが、入間君は首を縦に振らない。

「それでは不十分です。失礼を承知で申し上げますが、我々三人の誰かが誰かを殺そうとするという可能性も考慮に入れなくてはなりません」

入間君ははつきりとそう言った。

でも、俺も山村さんも入間君の言ったことを咎めることはできなかった。

今までがそうだったからだ。

みんな、殺さない殺さないと言って殺してきた。

みんなを信用する勇氣はもちろん必要だが、それと同じくらい全てを疑ってかかる気概も、このコロシアイには必要なのだ。

「……どうしようか……」

俺達は口をつぐんでしまう。

「——というわけで、何とかならないものでしょうか、モノクマさん?」

すると入間君は、こともあろうにモノクマにそう話しかけたのだ。

『え、何? 放置されたかと思っいたらいきなり話題振られたよ! 君

たち、ちよつと校長使いが荒すぎるんじゃないの?』

「あなたがどのような意図でモノボンドというものを導入したか分かりませんが、それにしてもお湯をかけたら溶けてしまうというのは欠陥な気がしますね」

『何言ってるのさ! この期に及んでボクの気遣いに文句を垂れるの!?! そもそも扉をボンドで塞ぐなんてめっちゃくちゃなことを容認してるだけでも十分すぎるくらい寛容なんだぞ! 教室そのものを塞がれるなんて、本当は校則違反になってもおかしくない愚行なんだからね!』

「その愚行を誘導しているのはあなたでしよう？」

入間君が鋭い口調でそう言うと、モノクマは口をつぐんでしまう。

「これまでと同じような手口で殺人を起こせたらつまらないから……と依然あなたは仰っていましたね。モノボンドを用意したそもそもの動機はそこにあるのではありませんか？」

「つまり、私たちがこうやって扉を塞ぎにかかることが、そもそもモノクマの狙いだったということですか……？」

山村さんの問いに入間君は「ええ」と頷く。

「これまでにない斬新な殺し方こそがあなたの求めるストーリー……なのではないか？」

『……はあ。いくらなんでも早合点しすぎなんじゃないの？ まあ、どう解釈するかは君たちの勝手だけだよ。分かったよ。モノボンドの欠陥を埋めるようにボクが手助けすればいいんでしょ？』

モノクマがそう言った直後、ピロリン、と電子生徒手帳から音が鳴った。

すぐに開いて確認してみると、校則の欄に以下の文言が追加されていた。

【校則：お湯や飲み物など、熱いものを部屋から廊下へ持ち出すことを禁じます。どうしても必要な時は、校長に申し出ること。校長が判断します。】

『ハイ！ これで文句ないでしょ？』

「なんでも言ってみるものですね」

入間君は満足げな顔をしてそう言った。

モノクマの意図を察してすんなりとこちらの要求を呑ませる手腕は流石対話のプロだ。

『全くもう、校長は君たちの便利屋じゃないんだよ！ あんまりいい気にならないでね！ 言うこと聞いてあげるのはこれつきりだから！』

モノクマは不機嫌そうに再び立ち去っていった。

憎き相手をこき使うことに罪悪感なんてないけど、いまいちモノクマが何を考えているのかは分かりかねる。

「とりあえずこれで一件落着つてことですかね！ では他の部屋も一気にボンドで固めてしましましょう！」

「そうだね。ボンドがある限り、危険だと思われる部屋は積極的に封じていこう」

俺は山村さんの言葉に同意した。

しかし、これだけ危険なものを封じてしまっても、殺人は起きるというのだろうか？

モノクマの謎の自信には不気味さを覚えずにはいられない。

それに、時期的にもうそろそろアレが始まってもおかしくない頃だ。

そう——、「動機」の配布が。

前回のように身体的に不可避のものだったらどうすればいいのだろう。

モノパンダも、『動機はコロシアイが進むほどに強くなる』と言っていた。

つまり、次の動機は前回のあれ以上にひどいものになる可能性が高いということだ。

俺に、俺達に、耐えられるのだろうか？

いや、自問自答するまでもない。

耐えるしかないんだ。

耐えられなくても耐える。

鼓膜を破る程度の覚悟があれば前回の動機は耐えられたはずだ。

例えば腕を切り落とすことになろうとも、舌を抜くことになろうとも、次の動機に耐えなきやいけない。

「葛西君？」

山村さんに呼ばれて俺はビクツと肩を震わせた。

また考え事に夢中になってしまった。

「ごめん。化学室へ行くか…」

一時間後。

「よし、これで完了かな」

手に付着しないように気をつけながら、俺達は作業を終えた。

技術室と化学室の扉を塞ぎ、弓道場は扉を塞ぐほどボンドの量が残っていなかったの、矢をまとめて縛った上でボンドで接着させることにした。

これでちようど全てのボンドを使い切ったことになる。

「できれば、厨房の刃物なんかも封じられれば良かったんですけどね…」

入間君がため息交じりに呟く。

「…厨房の道具は常に無くなつていないか嚴重に注意することにしよう。まだまだ完璧じゃないけど……できることは全部やったし、まずは満足していいんじゃないかな」

俺はそう言つて二人を元気づけた。

「そうですね!!、こうやつてコロシアイの防止に向けて一步一步足を進めていくのは絶対に無意味ではないはずですよ!!」

山村さんが拳を振り上げて叫ぶ。

些細なことでも、こうやつてクロになりうる人の行動範囲を狭めるだけでも意味はあるはずだ。

「おつ、葛西。隣いいか?」

しばらくして朝食の時間となり食事をとっていると、前木君が俺の隣に腰かけてきた。

「さつき山村から聞いたんだけど、技術室とか化学室の扉を塞いでくれたんだってな。俺も手伝えばよかったな…」

「あ、いや、いいんだよ。三人で手は足りたし」

申し訳なさそうに恥じ入る前木君に俺はフォロワーを入れた。

「そっか。でもありがとな。教室を塞ぐなんて今まで思いつきもしなかったからさ。やっぱ爆弾とか毒とかあると危ないもんな…」

「うん。一応毒殺は前回の事件の前から事実上禁止手にはなつたけど、それでも使う可能性はないに越したことはないからね」

この策を思いついた山村さんと入間君に感謝だな。

「ところでさ、葛西」

前木君はパンを頬張りながら俺に尋ねる。

「言いたくなかったら言わなくていいんだけど……。…小清水のこと…まだ好きなのか？」

「っ……………!?!」

また恋の話……………!?!

前木君と言い山村さんと言い、どうして今日はそんな話題にばかり振り回されるんだろう……………。

「……………いや……………前に裁判場で言った通りだよ。小清水さんにはもう気持ちちは傾いてないし……………傾けちゃいけないと思ってる……………」

率直なところを述べた。

でも正直な話、時々施設のどこかで彼女を見かけることがあると、気になってしまうことはある。

未練なんて残している場合じゃないのは分かっているんだけどね。

「ああ、そうなんだな……………。ありがと……………」

前木君はそれだけ答えて何かを考えこんでいるようだった。

彼も彼で、何か様子がおかしい。

「…何か悩み事でも？」

「いや……………そういうわけじゃないんだけど……………」

前木君は語尾を濁す。

「…俺はただ、葛西のことが凄いつて言いたかっただけなんだ」

そして、おもむろにそう言ってきた。

「……………」

「葛西はさ、第三の事件の裁判の時、小清水を守ろうとして必死に裁判でみんなに抗おうとした。もちろんそれは間違った結論だったし、褒められたことじゃないのかもしれない…。でもさ、俺は、お前のそんな姿を見て凄いと思ったんだ。」大切な人を守るためにそこまでできる……………ってことがさ……………」

「前木君……………」

彼のまなざしには、嘘は含まれていないようだった。

「俺も……俺もそうありたいって思ったんだ。もちろん間違った結論に身を委ねるのはダメだけど……。でも、全てを失う覚悟を持って自分で自分の気持ちに正直になれるのって、凄いことだと思うから……」
前木君………?」

同時に俺の脳内をよぎったのは、さっきの山村さんの言葉だった。

『伊丹さんには好きな人がいるんです』

俺の頭の中で、何かが組みあがっていくのを感じた。

ひよっとして……。

ひよっとして前木君は……。

「ふう、じゃあ俺は行くわ」

パンを食べ終わった前木君はそう言って立ち上がった。

「葛西なら分かってくれたと思うから……これからも頼りにしてるぞ」

ニコツと笑いながらそう言うと、彼は食堂を後にした。

そうだ、今の口ぶりからして間違いない。

彼と伊丹さんの間に何かがあった。

表立っては言えない何かがある。



同時刻・図書室。

「………」

吹屋喜咲は一人で落語本を読んでいた。

「ぶっ、くすくす………」

時々笑い声をあげながら。

ガラツ、と扉の開く音が聞こえる。

吹屋はチラリと図書室の入り口を見る。

これが葛西や前木であったならば、吹屋は特に何も思わなかっただろう。

「……！」

現れたのは小清水だった。

吹屋はすぐさま本を閉じて立ち上がった。

「そんなに私と同じ空気を吸うのが嫌なの？」

「……………」

吹屋は、普段の彼女からはおよそ想像もつかぬ冷徹な表情で小清水を睨みつける。

「…アンタはザワワを殺した」

「だから憎いの？ 実際に見たわけでもないのにね」

「……………」

本を抱えてそそくさと図書室を後にしようとする吹屋。

だが、彼女の行く手を立ちはだかるように、小清水は部屋の出口の前に立つ。

「……………」

吹屋は短く吐き捨てるように言った。

「私の質問に答えたらね」

そんな吹屋を試すように小清水は不敵な笑みとともに告げた。

「まず一つ、あなたは何者？」

「……………」

吹屋は僅かにうつむいて黙り込む。

「……あちきはアンタ達の同級生でありんす。アンタが信じようと信じまいと」

「第二に、何故あんなところに閉じ込められていた？」

「だから、それはこつちが聞きたいって何度も言ったでありんしょ!!」

吹屋は怒りを込めて叫ぶ。

「ぶざけてないで、さっさとそこをどい」

「第三に、あなたは葛西幸彦をどう思っている？」

吹屋の言葉を遮るように、小清水も声を張り上げてそう尋ねた。

「っ……!!?」

思わぬ質問に吹屋は面食らう。

「…………それは…………それはどういう意味でありんすか？」

「いえ、特に言うようなことがないのなら別にいいのよ。ただ、やけに好意を持つてるように見えたものだから」

「……嫉妬でありんすか」

「まさか。ただの興味本位よ」

そう言つて小清水は吹屋の頬に左手を添える。

「……………?」

吹屋は気味悪げにその左手をじろりと見る。

「じゃあ最後に一つだけ、いいかしら?」

小清水は笑みを崩さないまま告げる。

「一体何——」

——バチン。

音が響いた。

「はっ?」

吹屋は素つ頓狂な声をあげた。

吹屋の意識が小清水の左手に集中している間に、小清水が右手に隠し持っていたスタンガンで吹屋の腕に当てたのだ。

「やつ……やったなあ!!!」

吹屋はすぐに全力で小清水を突き飛ばす。

「っ!!」

凄まじい力で跳ね飛ばされた小清水は床にしりもちをつく。

「くそ、くそ、よくも……………うぐうっ?」

吹屋は体勢を立て直しつつある小清水に近づこうとするが、そこで崩れるように膝をつく。

「あつ……ああつ……!!! ぐううううつ……!!!」

吹屋は体全体をびくびくと震わせ、うめき声をあげて床に倒れる。

「……………なるほどね」

立ち上がった小清水は、何かに得心したように頷いた。

「スタンガンのバッテリーが切れちゃったわね。また技術室で作らな

いと…」

そんな独り言を呟きながら小清水は図書室を後にする。

「うとうとう、うとうとう………」

そんな小清水に怨嗟に満ちたうめき声を出す吹屋。

しばらくすると、吹屋の痙攣は自然に収まっていた。

「……………」

痙攣が収まった後も、吹屋はしばらくその場にうずくまっていた。

「……………あちきは……………」



伊丹さんと前木君との間には何かがあった。

そしておそらくは二人の間に恋愛感情が芽生えている。

けれど、それがただの恋話で終わらないらしいということもまた事実。

何か裏がある。

山村さんが今朝言っていた“乙女の勘”が正しかったということか。

先手を打って技術室や化学室の扉などを塞いだのは結果的にはいいことだったのかもしれない。

俺はいよいよ伊丹さんと直接話すことにした……………」が。

「あら、どうしたの、葛西君？」

そこにはすでに先客がいた。

「入間くんと伊丹さんはここで何を……………」

「興味深い資料を見つけたので、二人で調べていたのですよ」

休憩室で伊丹さんと入間君はファイルのようなものを開いて読んでいた。

個室をノックしても返事がなかったのでここにいるのだろうかとは

思っていたが、まさか入間君も一緒とは。

前木君のことを聞いたかったが、第三者がいるときに聞けるような話でもない。

「そうなんだ。資料って…？」

俺はそう言っただけで机の上に広がっているファイルの名前を一瞥した。

『アルターヒューマン 機構概要』

ファイルにはそう書かれていた。

「以前、アルターエゴ様が述べられていた“アルターエゴⅢ”や“アルターヒューマン”などの機能について調べていたのですよ。モノクマがアルターエゴを搭載している可能性が高いということとは、その機能をよく調べることで何か見えてくるものがあるかもしれません……」

「なるほど……」

アルターエゴが生前に残した情報や俺が今現在把握しているメカニクスは、以下の通り。

アルターエゴ。

“超高校級のプログラマー”が設計したという、高度な感情表現を可能にする人工知能。

アルターエゴⅡ。

御堂さんがアルターエゴに手を加え、ハッキング能力と耐性を強化したプログラム。

アルターエゴⅢ。

人工知能に“超高校級”の才能を搭載し、全体的な能力も向上させたプログラムの究極系。

だけど今はまだ試用段階のようだ。

モノドロイド。

この校舎内に実装されている、人型アンドロイド。

アルターエゴをインストールさせることでほぼ人間と変わらない動きをすることができる。

アルターヒューマン。

アルターエゴとモノドロイドを極限まで進化させたうえでそれらを組み合わせた存在。

外見も仕草も人間と変わらず、それでいてアルターエゴⅢ由来の超高校級の才能までもを搭載したマシン。

おそらくは、希望ヶ峰学園が最終的に生み出そうとしている存在。そのアルターヒューマンの解説書が、このファイルだというのか。

「で、こっちがアルターエゴⅠ〜Ⅲの各解説書です」

入間君は膝の上に置いていた三つのファイルを机の上に並べた。

「よく目を通してみたんだけど、やっぱり専門用語が多すぎて理解しがたいわね。秋音が生きてたら解説してくれたんでしょうけど……」

伊丹さんは資料を見つめながらそう述べる。

「資料は全部見たの？」

「いえ、まだ最初の20ページほどですね。全部で500ページほどあるみたいなのですが、なにぶんそれぞれのページの情報量が多いものですから……」

「そんなにあるんだ……」

そんな情報量がこのファイルに詰まっているのか……。

「大変だけど、時間はあるわ。葛西君も手伝ってくれる？」

「もちろん。そっちの資料借りてもいい？」

本来の趣旨とは違うことをする羽目になったけど、入間君がいる以上は話を切り出すわけにもいかない。

これはこれで重要なことなのは間違いないし、今はこっちに集中することにしよう。

できれば今夜あたりに伊丹さんと一対一で話をする機会があればいいんだけど……。

「っはあく〜く〜、疲れた！」

ファイルを一から読み上げて、気になるところがあったら付箋を貼って次のページへ。

もう何時間この作業を繰り返しただろうか。

俺は疲労に耐えかねて肩を動かした。

「何か分かりました？」

「う〜ん……こっちはアルターヒューマンの生活様式やエネルギー源が分かっただくらいかな」

「と、いいますと？」

「アルターヒューマンは人間と同じ食べ物を摂取して、それを体内で燃焼してエネルギーを取り出してる……とか。燃やした後の灰を吐き出す必要があるけど、オイルや充電は必要なくて、まさに人間とほとんど変わらない生活を送ることができると書いてある」

俺は付箋の付いた資料をかいつまんでまとめながら彼に話す。

「な、なるほど……。希望ヶ峰学園は、本当の意味での“超高校級の才能を持った人間”を無から作ろうとしていた、ということなのでですね……」

「人類の希望となるべき希望を育てる……というのが希望ヶ峰の理念だったようだけれど。まさか人工的に才能のある人間を生み出すそうとしていたなんてね……」

伊丹さんが真剣なまなざしで呟く。

「しかもその技術が絶望を生み出すとする“敵”に利用されているというのですから、皮肉も皮肉ですね……」

まさにその通りだ。

でもこの状況を打破するには、一つ一つ謎を解いていくしかない。

ピンポンパンポン。

!!!

突然のチャイム。

誰がどう考えても、嫌な予感しかない。

『えー、えー、マイクテス！ 久しぶりにアナウンスするのでボクも緊張してます！ 皆さん、視聴覚室に集まってください！ 繰り返します！ 視聴覚室に集まってください！』

「これは……」

入間君が立ち上がりながら呟く。

「……何かしらね。おそらくは動機、でしょうけどね」

対照的に伊丹さんは冷静沈着だった。

動機……。

俺の心臓が鼓動を早める。

覚悟はできていたはずだった。

でも、いざ直面すると緊張が止まらない。

例え五体のどれかを失うことになってもコロシアイを止めさせる……。

その覚悟を、今俺は問われているのだ。

「行こう」

静まり返った休憩室で、俺は静かに告げた。

「大丈夫、動機なら俺が何とかする」

もう、誰かに頼らない。

俺自身の手で、みんなを守らなきゃ。

希望の脚本を築くために。



俺たち全員が視聴覚室に集められたころ、時刻は午後五時を回っていた。
『やあ、みんなこの部屋に来るのは久しぶりじゃない？』

部屋で待ち構えていたモノクマは高らかに笑いながら告げる。

言われてみれば確かにそうだ。

第一、第二の事件の動機を提示する場としてここが使われて以降、俺は一向にこの部屋に足を運ぶことはなかった。

動機で受けたトラウマを掘り返すのが嫌だったから。

『今回は原点に返って、みんなのためにもう一度動機ビデオを作成しました!』

「ふざけんな……。今の俺達が映像ごときでコロシアイすると思ってんのか!!」

すかさず前木君が声を張り上げた。

けれど、彼の拳は微かに震えている。

彼自身も分かっているからだ。

“大したことのない動機ならそもそも渡すはずがない”。

「早く……。見ましょ」

吹屋さんが小さく呟いた。

いつもの彼女からは考えられないほどよそよそしく敵意のこもった表情をしている。

前回の音の動機では何ともなさそうにしていた彼女だが、今回に限っては何か思うところがあるのだろうか。

『お、いいねー吹屋さん! 話をてきぱきと進めてくれる生徒は大好きだよ、ボク! それじゃこの前の時みたいに関一人一人にDVD配っていくからそれぞれ見ていってね! 見るときはヘッドホンして周りの音が聞こえないようにね! 他人のを覗き見たらオシオキだよ!』

モノクマはそう言って一つの段ボールを俺達の目の前に置いた。

この中にそれぞれの動機DVDが入っているということか…。

「吹屋の言うとおりで。避けられないならさっさと見てさっさと忘れてたほうがいい」

前木君はそう言って段ボールの中から自分の分のDVDを取り出す。

彼を皮切りに、みんなはそれぞれ自分のDVDを取り出してゆく。

いったいこの中に、何が収められているというのか?

『今回はみんな同時に再生してもらおうからね! 早く席について!』

DVDを入れたらそのまま待機しててね!』
俺達はモノクマの指示に従うしかなかった。

俺はゆっくりと息を吐いてヘッドホンをつける。
全員の準備が整ったことを確認したモノクマがぱちんと指を鳴らすと、真っ暗だったパソコンの画面に光がともる。

『葛西幸彦君のくく、恋人チャレくくくンジ!!』

画面いっぱいに映し出されたモノクマが、愛嬌たっぷりにそう叫んでいた。

そして画面には、モノクマのセリフ通りの可愛らしいタイトルロゴが。

「……………???’」

俺は意味が分からずあんぐりと口開けてしまった。

『思春期真っ盛りのみんなには、気になってる人の一人や二人いるはずだよね! 今回の動機は、そんなみんなの恋心を応援したい気持ちから頑張って考えました!』

モノクマは画面の中で大の字になって高らかに宣言した。

『葛西君の好きな人はくくくくく、ずばり!!』
「!?’」

『小清水彌生さん、だよね!!』

「……………!?’」

その文字が浮かび上がった途端、俺は画面から目を背けていた。

なんだ、この映像は?

俺は小清水さんのことなんて、もう…………。

『なくに?’ “俺はもう小清水さんに興味ない”って? 何強がつてんのさ! 君の本心なんてせくくんぶお見通しだからね! 素直になつちやいなよYOU!! 本当はまだまだぞつこんなクセにく!!』
顔を赤らめながらこちらを見つめるモノクマ。

そうか。

やっぱり俺はまだ、あの人が好きなんだな。

そしてその気持ちも、モノクマには全部筒抜けだったってことか。

でも、これが動機とどう関係するっていうんだ…？

『では、葛西幸彦君の想い人、小清水彌生さんの生存チエ〜〜ツク!!!』

「生存チエツク…？」

『葛西幸彦君の想い人、小清水彌生さんは〜〜〜、生きてま〜〜〜す!!! 当たり前だけどね!! おめでとうございま〜〜す!!!』

モノクマがそう言うのと画面が一気に鮮やかになり、ファンファーレが盛大に鳴った。

『さて、そんな葛西君に朗報です！ なな、なんと！ 今コロシアイをして勝った人には……コロシアイメンバーの中から好きな人を最大三人まで選んで一緒に脱出する権利を与えましょう！』

モノクマがあっさりと言った今回の動機。

それは、“コロシアイ”のルールそのものを根幹からひっくり返すものだった。

『もちろん葛西君の場合は大好きな小清水さんを選ぶよね!! でもあと二人選べるから、葛西君の仲のいい人でもお気に入りメンツでも好きに選べばいいよ！ じゃあ今から脱出メンバーの選出方法について説明するね!』

モノクマが画面中央でぐるりと一回転してポーズを決めると、電子生徒手帳から音が鳴る。

『今、電子生徒手帳の生徒名簿の欄に“ナカヨシコヨシ”っていうコマンドを用意したよ! これをタップすると“ナカヨシコヨシ”に登録され、君がコロシアイに勝ってもオシオキされることなく一緒に脱出することができるよ! 一度登録すると取り消せないから誤タップに注意してね!』

俺は自らの電子生徒手帳を開き、生徒名簿の小清水さんの欄を開いた。

確かに隅の方に、“ナカヨシコヨシ”と書かれたコマンドがあり、

点滅している。

これをタップすれば、一緒に脱出が……？

急に恐ろしさが芽生え始めた俺はすぐに電子生徒手帳を閉じた。

『自分の想い人を知ることができたうえに、その想い人を含めて複数人で脱出する権利まで与えられちゃうなんて、これまでじゃ考えられない出血大サービスだよね!! まあ、ここまで頑張ってコロシアイを生き延びてきたんだもの、これくらいのご褒美は用意しなきゃね!!』

無邪気に笑って自ら提示した動機を自画自賛するモノクマ。

一方で俺はいろんな情報を一気に出されて完全に混乱していた。

このルール、ひよつとするとコロシアイのゲームバランスすらも根本からひっくり返しかねない。

クロが一人と、追加で三人生きて帰れるというのなら、クロが勝てば都合四人が生きて出られるじゃないか。

つまり、もしクロが脱出を条件にして他のメンバーを味方につけることができたなら。

学級裁判で「シロ側三人VSクロ側四人」という構図が存在することになる。

多数決でシロ側が押し負けるという可能性が現実のものになってくるのだ。

『どうしたの？ ボクの提示した動機が素晴らしすぎてウツトリしちゃった?』

そんな風に考えこむ俺の様子を悟ったかのように、画面の中のモノクマはニヤニヤと笑みを浮かべて俺に話しかけてくる。

『さあ、葛西君はどうする? 誰かが殺人を犯すのを待つ? 愛する人と共にここを出る? それともむざむざ殺される?』

「……………」

殺しなどするものか。

例え四人助かると言っても、それが意味するのは、少なくとも三人は見殺しにしなければならぬということだ。

これ以上の犠牲などあつてはならない。

幸いにも前回ののように身体に直接訴えかけるような動機でないのだから、理論上はいつまででも耐え忍ぶことができるはずだ。ここを耐えなければ、黒幕には勝てない。もう誰も、死なせたくない。

動機の映像はいつの間にか途切れ、パソコンの画面は暗転しきつていた。

俺はゆつくりとヘッドホンを外し、しばしその場で息を整えた。この動機で、誰かが殺人を犯すというのだろうか？

小清水さんは言わずもがなかもしれないが。

他のメンバーはどうなんだろう？

いろんな思考が次々に脳内をよぎっては消えていく。

考えに夢中になりすぎた俺は、しばらくしてふと我に返る。

みんなは既に動機を見終わっていた。

モノクマは解散の号令をかけることすらせずにその場から消えていた。

「……………」

あとに残ったのは、不気味な沈黙。

「…まさか、これしきの動機でロシアイなど起こしませんよね？」

口火を切ったのは入間くんだった。

「…当たり前じゃないですか。これまで何のために犠牲を払ってきたのか！ 私は絶対にモノクマごときに屈しはしません！」

それに呼応するように山村さんが答えた。

「ああ。正直、前回みたいな動機じゃなくて本当に安心したよ……」

それに続く前木君。

「油断は禁物よ。今まではしてこなかったけど、もしかしたら動機が二つあるという可能性もあるわけだし」

伊丹さんが鋭い指摘を入れた。

「……………」

小清水さんは何も言わず視聴覚室を去っていった。

それを追おうとする者もいない。

「…夕食にしよう。みんな、来れるよね？」

俺が号令をすると、みんなは黙々と食堂へ向けて移動を始めた。きつとみんな、ルール改変について考えることが山積みになっているんだろう。

顔色が悪そうな人はいないと思うし、とにもかくにも夕食でみんなの様子を観察しよう。

「…吹屋さん、食堂に行こう」

俺は視聴覚室の隅の席で未だ座ったままの吹屋さんに声をかけた。

「ふき……」

しかし、彼女の横顔が視界に移ると俺は言葉を失った。

「……………っ!!」

彼女は両手を顔に当て、大粒の涙を流していたのだ。

「吹屋さん……!?!」

「あ、いや……これは……」

吹屋さんは慌てて目を拭いながら立ち上がる。

「なんでもないでありんす！」

そして俺を押しつけて視聴覚室から出て行った。

「吹屋さん……!?!」

彼女が動機の映像を見て動揺したのは間違いない。

俺は彼女の後を追いかけた。

だが吹屋さんは逃げも隠れもせず、普通に夕食の場に姿を現した。

「おや、吹屋様！ どうやら元気がないようですね！ 今宵はチーズフォンデュなどいかがですか？」

「うっひょ〜っ!! あちきの大好物でありんす!!」

それも、すっかりいつものテンポを取り戻した様子で。

「…吹屋さん……大丈夫なの……? その、さっき……」

「ああ、あれ? もう、ユキマルはニブい！ 初恋の相手を思い出してウルってたでありんすよ！」

吹屋さんは少し小声になってそう言った。

そういえば、「三人脱出ルール」ばかりに気を取られていたが、最初に提示されたのは「好きな人とその生死」の情報だったな。

吹屋さんはそれを見て……。

「でも、こういうのはヒミツにするのがジョーシキでありんすからね！ ユキマルに女の子の心なんて分からないと思うけど！」

「分かったよ、さつき君が泣いてたのは誰にも言わないから……」

俺はそう言っただけで食事に取り掛かった。

「いやあ、チーズなど久しぶりに食べた気がします！ たまにはこういう贅沢も大事ですね！」

「力は付けるに越したことはないからな。おつ、温野菜だ！」

「みんな、お腹いっぱい食べて頂戴」

見たところ、みんないつもと何ら様子は変わらないように見える。

……いや、杞憂であるはずがない。

それならばあんな動機をここにきて選ぶはずがないんだ。

やはり引つかかるのは「三人ルール」だ。

絶対にあれを何かに利用して犯行を行おうとする人が出てくる。

それを暴いて未然に防ぐのが……

「葛西君!」

「はいっ!」

また朝のように山村さんに呼ばれて俺は飛び上がった。

夕食後、俺はある提案をした。

「夜時間になると同時に全員が一斉に部屋に入り、夜時間終了まで部屋を出ず、呼び出しには絶対に応じない」という口約束だった。

全員が互いに部屋に入る瞬間を目撃しているので全員が部屋にいる状況を作れる。

二人以上が同時に約束を破って部屋を出なければ、コロシアイは絶対に起きない。

今更口約束に何の意味があるのかは分からないが、言わないよりは

確実に効果はあると踏んでいた。

「それならば私からも一つ」

俺の提案に付け足しをしたのは山村さんだった。

「私、もう一度夜時間の見回りをしたいのですがよろしいでしょうか？」

思わぬ申し出だった。

彼女は再び、自らが犯罪の抑止力になることを宣言したのだ。

龍雅君と釜利谷君が殺された、あの夜のように。

「…確かに今ならリュウのように山村を止められるやつはいない。山村がいいならいいんじゃないか？」

「……お願いしてもいいかしら？」

みんなに不満はないようだった。

「はい！ この重要な時局を越えるため、私の力を役立てることができれば光栄です！」

こうして、彼女は寝ずの番をすることとなった。

後顧の憂いを絶った俺は個室へと戻る。

夕食後も終始伊丹さんは食堂にいて第三者が存在していたため、とうとう今日は彼女から前木君のことについて聞くことはできなかった。

明日が勝負だな。

このまま俺が何もしなければ、間違いなく何かが起こる。

俺が何かしなければ。

みんなに任せてはダメだ。

脚本がそう言っている。



深夜、前木常夏は個室でモノクマと相対していた。

『なにになに、こんな時間に呼び出しちゃって？ 君も動機について何か聞きたいことあるの？』

「……いや、質問じゃなくて頼みがある」

前木は神妙な面持ちで静かに告げた。

「お前の回答次第では、俺はコロシアイをする」

前木の言葉に、モノクマは思わずぴよんと飛び上がった。

『おひよっ!? 本当に!? そんなこと言われたの初めてだよ！ なんだか初恋の相手に映画に誘われたときみたいな気分〜！ で、頼みってなんなのさ』

「今回の動機……。誰かを殺してコロシアイに勝った奴は、最大三人を選んで脱出できる……って話だったな」

『そうだよ！ ボクは嘘をつけないタチなので神に誓って絶対に約束は破らないよ！』

モノクマは親指を立てて前木にアピールする。

「そういう点でお前が嘘をつかないのは、これまでの経験で分かっている。……つまりだ、俺が殺人をして裁判に勝った場合、俺を含めて四人が生き残って脱出できるってことだよな？」

『そういうことになるね！ ボクったらここにきて本当に優しい〜！』

「その“生き残る権利” ってのを他のやつに譲り渡すという特例を認めてほしい」

『ファッ!? つまりどういうことなのさ?』

「つまり、俺がクロとして裁判に勝った場合……。俺をオシオキする代わりに、他にもう一人俺が指名したやつを助けてやってほしいんだ」
『え〜〜〜?!?!?』とモノクマは文字通り目を白黒させる。

「生き残る人数は変わらない。ただ俺が死んで代わりのやつが生き残るっただけだ」

『そんなルール決めちゃっていいわけ？ だって他ならぬ君が生き残れないじゃない?』

「いいんだ。俺はどうなったって構わない。ただ、この四人という数字が決め手だったっただけだ。これなら俺は勝てる」

『う〜〜〜ん……でもねえ……。コロシアイのルールってのはボクがバランスとかを考えて一生懸命考えたんだよ？ それを一人の生徒のお願いでホイホイ変えるのはねえ……』

「お前がどう答えようと、俺の答えはもう決まってる。お前がイエスと言うなら俺はコロシアイをするし、ノーと言うなら絶対にしない。それだけだ」

前木は俯きながらも、決意のこもった低い声でそう述べた。

『いや、でもね、確固たる目つきで「コロシアイをする」なんて宣言する生徒はボク始めて見たし、感動したよ！ だから、本当はダメなんだけど、君だけはものつつすごく多めに見てあげる！ 君にだけその特例を認めます！』

「そう言うだろうと思ったよ。いや、初めからこれが目当てでこういう動機にしたんだろ？ みんな、お前の手のひらの上で踊らされてるだけだ」

モノクマがオーケーサインを出しても、前木は全く表情を変えることなくそう答えた。

『みんな僕を買いかぶりすぎじゃない？ 僕だって結構危ない橋を渡ってるんだよ、いっつも』
「……………」

『今の会話の様子を監視カメラで録画してあるから、もし君が勝ったら裁判場でこの映像を流してあげる！ そうしないとボクが勝手に決めたルールだと思ってわれちゃうもんね！』

「ああ。……そうしてくれ」

前木の口調は、どこか自暴自棄さも孕んでいるようにモノクマには聞こえた。

『まあでも、約束は守ってもらおうからね！ 方法は問わないからちゃんとコロシアイはしてね！ あ、でもバレる前提の明らかに杜撰なトリックとか自白は無しにしてね！ いくらなんでも張り合いがないから！』

「つまりトリックは今までのクロのように全力で作れ、と」

そこに関しては前木は心配していなかった。

どんなに入り組んだトリックを展開しようとも、葛西たちは必ずそれを破って真実に辿り着く。

それは過去四回のロシアイでほぼ完全に証明されている。

前木は、仲間たちの能力に関しては疑う余地はないと確信していた。

『そー！ まああとには好きにやればいいよ！ ボクも君がどんな卒業制作^トを提出するか楽しみにしてるからさ！ じゃあおやすみ！』

その言葉を残してモノクマは消えた。

沈黙が残された。

「……勝った」

前木は小さく呟く。

「今の人数は七人。俺と小清水とあいつが犠牲になれば……」

自らに言い聞かせるように、己が描いた勝利の方程式を。

「最大の敵は小清水だな……。でも、いけるはず……」

前木は勝利を確信していた。

「これしかないんだ……。出られもしないタワーに死ぬまで囚われるくらいなら……」

死のイメージが彼の中で増幅していく。

微かに己の手が震えているのを実感しながら、それでも前木は己の使命を自覚した。

「……ごめん。伊丹。俺はお前と一緒に生きて出られない」

前木は俯いたまま、語りかけるように呟いた。

「俺は大切な女との約束一つ守れない最低な男だ……」

そして前木はベッドに倒れ込む。

「でも……」

その視界は、涙でぐにやりと歪んでいた。

「大切だからこそ……愛してるからこそ……生きてほしいんだ……」



ほぼ同時刻、伊丹も個室でモノクマと会話していた。

『なあに？ 君も何か聞きたいの？』

机の上に座り込むモノクマは、椅子に座って相對する伊丹に不敵な笑みを投げかける。

『君も』ってことは他にも質問している人がいるのね』

今日の伊丹は、これまでに比べてとても冷静だった。

死への恐怖に慣れ、自分の宿命を受け入れる準備が着々と整いつつあることを示していた。

『…まあそんな言葉の綾を気にしたってしょうがないじゃない。早く本題を話そうよ』

モノクマがけしかけると、伊丹は前置きなく本題を語り始めた。

『釜利谷君に言われたのよ。『誰を殺すか決めたらモノクマに伝えるように』って』

『え？ ああ、そういうえばそんなこと伝えてたね。昔の脚本の人だから忘れかけてたよ』

モノクマはポリポリと腹を搔く。

『それを伝える前に、一つ聞いておかなければならないことがあるの』『だーかーら、それを早く言いなさいって言ってるでしょ！ 気が長いクマで有名な僕も、流石にヒグマばりの瞬発力で襲い掛かっちゃうぞ！』

モノクマは両手を振り上げて伊丹を威嚇する。

『釜利谷君に『お前はクロになってオシオキされる』と言われたものだから、ちよつと気になっちゃって。もし仮に裁判が終わった段階でクロが死んでいたら、オシオキは行われるの？』

『え？ クロの状態なんてルールには関係ないよ！ 例えクロが死んでいようとミイラになっていようと、裁判で負けたら絶対にオシオキは受けてもらおうよ！』

「……そう。分かった」

モノクマの答えが聞けると、伊丹はモノクマから視線を逸らした。

『だからって裁判場で自殺なんてのはボクは認めないからね！ オシオキの苦しみから逃れたいからって、そんなことされたらボクが興奮めだよ！』

「……………」

伊丹が視線を泳がせた先には、ベッドの上に鎮座するモノパンダ人形があった。

彼女が“常夏”に見立てて愛でていたモノパンダが。

『そうそう、君の話を聞いてなかったよ。君は誰を殺すつもりなの？』
避けられない問いを与えられた伊丹は、一息ついて静かに答える。

「私が殺す相手は——」

その名を告げる。

『…………ふうん、なるほどね。確かに承りました！』

モノクマは答えを聞いて安堵の表情を浮かべた。

『でも、これは他の人にも言っていることなんだけど、みんなの目の前で死んだりトリックを自白したりするのは無しだよ!! あくまでもゲームとして成立するように殺ってね!』

「…分かってるわ、それくらい」

伊丹は短く答える。

「私の用は済んだ。考え事をしたから消えて頂戴」

『もう、冷たいなあ! ……っていつもなら言うところだけど、今回は大切なクロ候補の思考を遮るわけにはいかないからね! さっさと退散します! あ、でも最後にこれだけ言っとくよ! 別に予言された

脚本にこだわることないんだからね！ 君がクロとして勝っちゃつてもボクとしては全然構わないんだから！』

結局長つたらしい言葉を告げて、モノクマは個室から去る。

奇しくも、前木の個室からモノクマが去るのとほぼ同時の出来事だった。

「……よくできた動機ね」

一人つきりになった個室で、伊丹は呟く。

“ 四人が生き残ることのできる裁判”。

常夏が動き出してもおかしくはない動機だ。

釜利谷君の言った通り、私が動かなければどうやっても常夏が殺人を犯す可能性は高い。

仲間想いの常夏のことだ、きつと自分が勝つても自分の代わりに誰かを助けるようモノクマに頼んでもおかしくはない。

そうすれば、四人がここから生きて出ることができる。

自分と、小清水さんと、あと一人誰かを涙を吞んで犠牲にすれば、他の全員が脱出を約束される。

モノクマならば、コロシアイを起こすために無茶な願いも聞き入れるだろう。

もしそれが実現したら、私は迷わず常夏と共に犠牲になることを選ぶだろう。

でもそれではダメだ。

結局それでは、常夏がオシオキされるという最悪の展開を辿るだけだ。

でも常夏はそれでもいいと思っっているから、迷わず殺人をする。

この流れを食い止めるには、私が先手を打って殺人を犯す以外に方法はないのだ。

「もう、覚悟はできてる」

伊丹はベッドに座ると、モノパンダの頬を優しく撫でる。

「ごめんね、常夏。あなたとの約束は守れないけど」
そしてモノパンダを静かに持ち上げ、額と額をつけて語り掛ける。

「絶対にあなたを守ってみせる。あなたを愛しているから」



運命が交差する時は、近い。

Chapter 5 (非) 日常編⑤



ピンポーン。

「……………うん？」

インターホンの鳴る音で俺は目を覚ました。

「おはようございます、葛西君！ もうすぐ7時ですよー！」

ドアの前に立っていたのは、道着姿の山村さんだった。

モノクマのアナウンスが鳴る前に起こしに来たみたいだ。

「ああ、夜通し見回りをしてくれたんだね。ありがとう……」

「いえいえ！ 皆さんの安全を守るためならこの程度、なんでもありません！ これで全員の無事は確認できましたので、私は部屋で少し仮眠を取らせていただきますね」

そう答える山村さんは生き生きとっていて、徹夜した人間とは思えないほど元気に見える。

「そうだね。また今夜もお世話になると思うから体力を回復してくれると嬉しいな…」

任せてください、と山村さんは胸を叩いて答えた。

こんな大変な仕事を彼女にしか任せることができないのが悔しい。だからこそ俺は、俺達は、一刻も早く見つけなきゃいけない。

この学園からの脱出のカギ。

全ての謎を解く“最終裁判”への切符を。



「——よし、山村以外は全員いるな」

全員の顔を見渡して前木君がそう呟く。

食堂には、仮眠をとるため自室に戻った山村さんを除く全員が訪れていた。

「……………」

食堂の隅の方には、一人でパンを頬張る小清水さんの姿もあった。生存確認程度の協力はしてくれる、ということか。

「…みんなに話がある」

朝食をあらかた食べ終わったところで、前木君はこう切り出した。「昨日提示された動機なんだけど、たぶんみんな同じ映像だったよな…？」

「“想い人”に関するのと、“コロシアイのルール”に関する話ですな」

入間君がそう告げると、少しの間沈黙が流れる。

誰も反論しないということは、全員が同じ内容だったということ間違いはない。

『伊丹さんには好きな人がいるんです』

……昨日、山村さんからこの話をされた直後にこの動機。

黒幕は俺達の心をもてあそびたくてたまらないようだ。

だが……もっと危険なのはそれに付随して与えられたもう一つの動機。

『コロシアイメンバーの中から好きな人を最大三人まで選んで一緒に脱出する権利を与えましょう！』

コロシアイのバランスをもひっくり返すほどの巨大な動機。

もう今までの常識は通用しないかもしれないんだ。

こんな状況下では、たとえここまでのコロシアイを生き残ってきた仲間でも、容易に信用することは許されない。

「……………心に刺さったやつがいるはずだ、この中に」

前木君がそう言うのと、みんなが互いに顔を見合わせる。

そうだ。

そうでなければこんな動機は選ばない。

この中の一体誰が……。

「……………」

下を向いてトーストを口にする伊丹さん。

彼女にとってこの動機はどんなものだったのだろう。

おそらく彼女は前木君に思いを寄せていて、山村さんもそれを知っている。

“前木君と一緒にここを出るために殺人を犯す”。

ありえない話ではない。

そのために三人犠牲を払うことができるのかは別としても、好きな人と一緒に出られるならそれに越したことはない。

「……ですが、皆様の様子を見る限りそこまで顔色が悪いわけでもありませんね……」

入間君が全員の顔をうかがいながら呟く。

「ともちんも結構元気そうだったでありんすよ！ あれ、意外とあちき達よゆー？」

……なんていう吹屋さんの楽観を鵜呑みにすることはできない。

……よくよく考えたら、最初の動機はどういう趣旨のものだったのだろうか？

好きな人の生存の確認なんて……このメンバーに好きな人がいたら何の意味もない。

……いや、そういえば入間君には故郷で待っている恋人がいたはずだ。

【Chapter 3 (非) 日常編②】

「あ、申し遅れましたが私には故郷に恋人がごいますので……」

「？？」

一瞬、場が凍り付く。

「なんじゃそりゃあああああああ!!!」

丹沢君と前木君と亞桐さんが叫ぶのはほぼ同時だった。

「名は結梨と言いました、私が世界中を仕事で駆け巡っている間も必ず文通してくださる素晴らしいお方ですよ」

もしその結梨^{ゆいり}さんという人が無事でない状態だとしたら…？

そもそも、いまだに実感がわかないけど…今外の世界は大変なことになっているみたいだ。

結梨さんが無事である可能性のほうが少ないのでは…。

俺は入間君の顔を見る。

彼は優雅に紅茶を飲みながら昨日持ち出したアルターエゴの資料の続きを読んでいる。

平然としているように見える…見えるけど。

内心なんて誰にも分からない。

一つ目の動機は、彼を揺さぶるためのものだったのだろうか？

だがもう一つ気になることがある。

「ねー、ジヨーちゃんもダーツやりんしょー！」

無邪気な笑顔で入間君に絡んでいく吹屋さん。

【Chapter 5 (非) 日常編④】

「…吹屋さん、食堂に行こう」

俺は視聴覚室の隅の席で未だ座ったままの吹屋さんに声をかけた。

「ふき……」

しかし、彼女の横顔が視界に移ると俺は言葉を失った。

「……………っ!!」

彼女は両手を顔に当て、大粒の涙を流していたのだ。

「吹屋さん……!?!」

「あ、いや……これは……」

吹屋さんは慌てて目元を拭いながら立ち上がる。

「なんでもないでありんすー!」

そして俺を押しつけて視聴覚室から出て行った。

昨日の動機発表の後、彼女は確かに泣いていた。

「三人ルール」の話聞いてモノクマの懐の広さに感動した……?

いや、流石にそんなわけはない。

それはその後の夕食の時の彼女の言葉からも明らかだ。

『初恋の相手を思い出してウルってたでありんすよ!』

「初恋の相手、か……」

俺の勘だけど、たぶんコロシアイのメンバーじゃなくて外にいる人
なんだろうな。

しかも、彼女が涙するほど想いが強いということとは……。

十分に動機になりうるんじゃないだろうか。

そしてもう一人心配なのは……。

俺は食事を終えて一人食堂を後にする小清水さんの背中を見つめ
た。

……彼女に好きな人なんているのか……?

俺の好きな人はまだ彼女だったみたいだけど……いや、今はそんな

こと考えてる場合じゃない。

あれだけ人間を憎んでいた彼女が誰かを好きになるなんて思えな
い。

だとしたら、彼女の動機の画面には何が……?

一面の砂嵐……?

そんな意味のないことをモノクマがするか……?

……もし……。

誰にも知られていないけど、コロシアイの外に想い人がいるのだと
したら……。

「……………」

……考えたくないな、そんなこと。

「そうだ！ あちき実は昨日すごいもの手に入れたでありますよ！」

俺の思考もよそに、吹屋さんは袖から何かを取り出す。

「じゃーん！ ”ア報知ドリ”であります！ あの売店でガチャを回してたら出てきたであります！」

彼女が掲げたのは、アホウドリを模した手のひらサイズの模型だった。

この手の人形にありがちなかわいくデフォルメされたものではなく、やけに表情がリアルでちよつと怖い。

「ア報知ドリ……？ なんかすごい機能でもあるのか？」

「なんとこの鳥、背中のスイッチを押すと天気を予報してくれるでありますよ！ モノクマ曰く、的中率100%!!」

そう言って彼女が背中をカチツと押すと……。

『アホー！ アホー！ 今日はいニクの曇り空！ 夜九時から雨！ 十時から雷雨を伴う大雨！ 十二時には止む！ 明日は快晴！

アホー！ アホー！』

甲高い声で早口言葉のように一気に天気を言ってみせた。

「すげえ……。相変わらずモノクマが使う技術って謎だな……」

前木君はア報知ドリを手にとってまじまじと眺めた後、テーブルの上に戻した。

「夜から雨が降るのでしたら、屋上には出ないほうがいいのかもしれませんね」

「まあ、ともちんが見張ってる以上夜時間はそもそも個室から出られないし、あんまカンケーないでありますね！」

確かに屋上は天気の影響を受ける可能性があるな……。

こんな時に風邪をひくのも大変だ、夜は屋上に行かないようにしよう。



「……………さて、と」

昨日、俺は伊丹さんに前木君のことを聞き出そうとした。

しかし彼女は終始入間君と共にアルターエゴやアルターヒューマンの調査をしていたため、その話を聞くことができなかった。

今日こそはちゃんと話を聞いた方がよさそうだな。

動機のことも考えると、モノクマは明らかに“恋愛感情”をコロシアイに利用しようとしている。

モノクマの狙いが明らかである以上、先回りして防がない手はない。

「……………あ、伊丹さん」

休憩室には、伊丹さんが一人で昨日の資料を読んでいた。

てつきり入間君もいるものだと思っていたので、少し驚いた。

「あら、あなたも昨日の続き、調べる？ 入間君は吹屋さんに連れていかれちゃったから人手が欲しかったのよ」

…：そういえば吹屋さん、朝食の時に執拗に入間君と遊ぼうとしてたな。

こんな時にまで彼女はマイペースだが、入間くんなら上手く扱ってくれるだろう。

それよりも、この状況はチャンスかもしれない。

入間君がいない今なら、彼女と二人きりで話を……………。

「伊丹さんに聞かなきやいけないことが」

「気付いたのね、私のこと」

「！」

伊丹さんの思わぬ言葉に俺は思わず硬直した。

「……………山村さんから聞いたんでしよう？ あの子ったら、話したがりで困っちゃうわね」

「それは……………」

俺は上手く答えられず口ごもってしまった。

「動機がアレだったから……………心配してるんでしょ？」

何もかも見透かされている以上、何も言えなかった。

「でも心配は無用。あなたがどこまで知っているか分からないから敢えてはつきり言わせてもらうけど、私は殺人を犯す気はない。なぜなら、私の好きな人は生きているしすぐ近くにいるから。私がここを出る理由なんてない」

「……………」

伊丹さんは凜としたまなざしで俺の目を見つめながらそう言い放った。

「恥ずかしいからちよつとオブラートに包んだ言い方になっちゃったけど、分かってもらえたかしら？」

「……………うん」

そこまで言われたら、一体何を疑えばいいんだ。

でも、山村さんが言っていた乙女の勘とか漠然とした不安は、これで解決できたのだろうか？

ただどこで変に食い下がっても、かえって彼女に不信感を抱かせるだけだ。

「もしあなたが本当にコロシアイを止めようと思うなら、私よりも説得すべき人がたくさんいると思うわ」

「そう……………かな……………」

間違っではない。

吹屋さんや入間君、小清水さんのことも気になっている。

「私も説得に当たりたいのだけど……………。一刻も早く学園の謎を解いて黒幕に勝負を挑まなければならない以上、この資料の解析も時間が許す限り進めなければならぬ。必然的に役割分担が必要になるのよ」

つまり伊丹さんは、動機に揺さぶられていそうな人の説得を俺が、資料の解析を自分が進めるという役割分担を提案しているというわけか。

「もちろん、これ以上のコロシアイを防ぎつつ黒幕に勝負を挑むのが最善手だから…。伊丹さんの言うとおりだね。解析は君に任せるよ」

「ええ。任せて。あと数日以内にはあらかた把握してそらんじておけるようにしておくわ」

「そこまでする必要はないと思うけど……………」

俺は苦笑いしつつそう答えた。

伊丹さんの瞳は力強く、透き通っていた。

とても嘘をついたり、迷ったりしている人の目には見えなかった。俺はひとまず彼女を信用して休憩室を後にした。

伊丹さんの言葉通り、俺は他の人がどうしているかを探りに出た。小清水さんは正直、未だに何を考えているかつかめないところがあ
る。

あの動機で何を表示されたのかも。

しかし、会ったところでそれについて教えてくれるとは思えない。となると…人間君と吹屋さんを優先させるべきか。

俺は順番に校内を巡っていく。

山村さんは個室で仮眠中で、伊丹さんは休憩室で作業中。

他のメンツはそれ以外の場所にいるということだが……。

こうして校舎を見て回ると、本当に校舎が広く感じられる。

みんなが生きていて、校舎もほとんど解放されていなかったときはあんなに狭く感じていたのに。

こんな狭いところは一刻も早く出てやろうって思っていたのに。

今じゃ、こんなに歩き回っても誰も見つからない。

一体どこに……。

「……！」

その時、俺は曲がり角を消えていく人影を見た。

美術準備室へと入っていったその背中、間違いなく小清水さんのものだった。

美術準備室の先にあるもの……間違いない。

吹屋さんが閉じ込められていた部屋と、その隣の管制室。

「あなたもここを調べるつもり？」

小清水さんは俺に背を向けたまま言い放つ。

「私の邪魔をしないのなら来てもいいわよ」

そして彼女は、もはや隠されることもなくなった階段を上ってゆく。

「……………」

彼女が何を考えているかは分からないが、俺は何も言わずその後が続いていった。

今まではおざなりにされていたが、ここを調べるのもいずれやらなければならぬことだ。

ここを調べてみて、小清水さんから何か話を聞き出すことができば…。

小清水さんが管制室を調べている間、俺は吹屋さんが閉じ込められていた部屋に入った。

鍵もかかっていないその部屋は薄暗くてコンクリートが露出しており、まさに監獄と言った部屋だ。

シャワーとトイレ、洗面台は隅の方に設置されているが、部屋とそれを仕切るのは雑なつくりのカーテンだけだ。

「…こんなところにいたら、一か月もしないでおかしくなっちゃいそうだな…」

そういえば、食事はどうしていたんだろう。

吹屋さんがこの部屋で生きていたのならば、当然食事の配給があったはずだ。

その時に、どうにかして配給者の顔でも見ていないだろうか…。

そう想像した俺の思考はすぐに否定されることになった。

部屋の壁際には大きなボックスが置いてあり、その中には大量の缶詰が入っていた。

そして横の屑籠には大量の空き缶が捨てられていた。

なるほど、この缶詰の備蓄が尽きる前に吹屋さんはここから出られたということだから…。

食料の配給はなかったということだな。

続けて俺は吹屋さんが寝ていたであろうベッドを調べた。

同じ毛布を何度も使い回さざるを得ない状況だったはずだが、不思議と毛布もベッドも比較的綺麗だった。

そういえば、吹屋さん自身もずっとこんな環境の監獄にいたはずな

のに、初めて会った時も清潔感のある印象だった。

シャワーは浴びることができるかもしれないが、見たところ替えの服があったようにも思えない。

気のせいと言われればそれまでだが、どうも引つかかるな…。

一方、小清水さんはこの部屋には全く足を踏み入れず、ひたすら管制室を調べているようだった。

「……………」

案の定、彼女は管制室のキーボードやボタンと睨めっこしていた。彼女がいくつかのスイッチを切り替えると、たくさんあるモニターうちの何個かの映像が切り替わる。

それらは全て、俺達の生活の場にある監視カメラと繋がっていた。

「…どうして黒幕はここにいないんだろっね」

初めてここに来た時からずっと思っていた疑問だ。

黒幕がここにいないのなら、どうしてこんな部屋を用意したんだ？

「黒幕なんていないのかもね」

「……………」

小清水さんが不意に呟いた一言。

黒幕がいない？

果たしてそんなことがあり得るのか？

「いないっていうのは、〃この世に存在しない〃っていう意味？」

「……………」

俺は彼女に問いかけるが、彼女は答えなかった。

後は自分で考えろと言うことか。

なんだか、彼女の方がモノクマより黒幕に相応しい気がしてきたな。

小清水さんがキーボードに何かを打とうとすると、目の前のひときわ巨大な画面に文字が浮かび上がった。

『操作するにはパスワードを入力してください』

赤文字でそう表示されている。

パスワードは全部で16桁あるようだ。

「それはなんの操作をするキーボードなの？」

「……いろいろ動かせる、とだけ言っておくわ」

それだけ言うと、用済みと言わんばかりに小清水さんは管制室を後にする。

「最終裁判に挑む覚悟はできた？ 頼むから足は引つ張らないでほしいものね」

……という捨て台詞を残して。

「……」

彼女の真意はともかく、俺はもう少しだけこの部屋を調べることにした。

実際にいじってみると、監視カメラの映像を切り替えるボタン以外は全て操作にパスワードが必要だった。

校内ヘアナウンスができるマイクも、パスワードが解けなければ意味がない。

他にも様々な機能を持つボタンやレバーが立ち並び、注意書きが施してある。

『大ホールの照明強度

大ホールの扉ロック

エレベーターのロック

全フロア換気扇スイッチ

避雷針の標高調整

全フロア気圧調整

……』

本当にいろんな機能が集約されているが、その中でも目を引くのは『エレベーターのロック』だ。

この機能を上手く制御できれば、エレベーターで地上に降りることができるかもしれない。

そうすれば、黒幕との勝負をせずともここを脱出できるかもしれない………？

『あのかい』

「わあっ!!!?」

いきなり背後から声をかけられたので俺は飛び上がってしまった。

『いい加減どいてくれないかなあ。本来ここはボクの部屋なんだからね?』

モノクマが呆れ気味にそう言った。

「…調べるのは自由って校則に書いてただろ」

驚かされたイライラをぶつけるように、俺はぶつきらぼうに言った。

『そりやそうだけど、ここはイレギュラーな場所だって前に言ったでしょ? それにボクだつてこの部屋で校長の仕事をしなきゃいけないんだから』

「…モノクマの姿のままこの部屋を使ってるのか?」

『そりやそうでしょ! ボクに第二形態があるとでも思ってるの?』

「いや、そういうことじゃなくて……。お前を操ってる人間がここを使ってるんじゃないのか?」

本人には今まで聞いてこなかったことを、俺はついに口に出した。

『またその話!? もう、君たち世代はどうしてすぐそうやって中の人とか言い出すんだろうね! 全く夢もロマンも感じないよ! いい? この世に存在するマスコットキャラの九割には中の人なんていないんだからね!』

「……………」

こんなくだらない答えしか返してくれない。

やはり聞くだけ無駄だったか。

でも、このモノクマが自律して動いているならば、小清水さんが言った言葉はあながち間違いではないかもしれない。

人が動かしてすらいらない機械にもてあそばれて殺しあうなんて、こんな悲惨な話はないけど…。

「…って大事なことを忘れてた!」

不意に急用を思い出した俺はモノクマを置いて管制室を出た。

小清水さんに動機のことを聞くのを忘れていたのだ。

「…まだ何か用?」

心配するまでもなく、小清水さんは美術準備室にいた。

「この部屋を調べていたようだ。」

「あ、いや、動機のことなんだけど」

「まさか、まだ私を好きとか言い出すつもりじゃないでしょうね？」
うっ……と俺は心の中で呻き声を漏らした。

あの動機には、俺の想い人は小清水さんと書かれていた。

でも、あんなのモノクマが勝手に書いたただけだ。

「俺のことは関係ない。君があゝの動機で何を見たのかを知りたいだけだ」

愚直なまでに俺はそのまま質問した。

擲手の質問で引っかけようとしたって彼女には勝てないと分かっていたからだ。

「自分のことは関係ないと言っておいて私のことは聞き出そうとするのね。脚本家ってそんなに身勝手な生き物なの？」

「……！」

確かに、そう言われると返す言葉がない。

「でも安心しなさい。私の想い人なんて存在しない。あの動機の映像は真つ白だったわ。それに、二番目の動機も私の意には全く沿わないものよ。だってそうでしょう？ 人類皆殺しを目指す私がこの学園から一緒に出る仲間なんて欲すると思う？」

「……………」

そう言われればそうだ。

…見たところ動揺しているようにも見えないし、動機は問題ないのかな？

「私が殺人をする理由なんてこれっぽっちもない。少なくとも今はね。いらぬ心配をかけている暇があるなら、他の人のケアでもしたらどう？」

皮肉にも、先ほどの伊丹さんと同じようなことを言われてしまった。

…うすうす思ってたけど、俺、人の心を探ったりするのが下手なんだな。

脚本に書くのはあくまでもキャラクターの心情だし、リアルの人の

感情を掴むのはやっぱり……。

：なんて弱音を吐いてる場合じゃないな。

とりあえず次は入間君と吹屋さんの様子を見に行こう。

「吹屋さーん？」

三階をくまなく探したがどこにもいない。

吹屋さん、入間君にダーツやろうとか言ってたからってつきり二人とも娯楽室にいるものだと思っただけ……。

「入間くーん？」

四回も見たが、音楽室にも弓道場にも人影はない。

吹屋さんが得意のピアノを披露している……というわけでもなかった。

「……とりあえず屋上も見ておくか……」

あの高所恐怖症の入間君が屋上にいくとは思えないけど、一応見えておくに越したことはないか。

チーン、とエレベーターの扉が開くと……。

「わーっ！！！！」

という入間君の叫び声が第一に俺の耳に届いた。

「入間君!!」

俺はすぐにエレベーターを飛び出す。

すると……。

中央の電波塔にしがみついて悲鳴を上げる入間君と。

穴が開いたフェンスの前でおろおろする吹屋さんがいた。

……って、なんでフェンスに穴が!!

「あ、ちょうどいいところに来た！ 助けてユキマルくー!!」

吹屋さんは俺の顔を見るや否や、すごい勢いで飛びついてきた。

「遊ぼうと思つてジョーちゃんを追いかけてたら突き飛ばされて、ショックでフェンスが破れちゃったでありんすよく!!」

「は!？」

いろいろツツコミどころはあるけど、破れちゃったってどういふこと!？」

『ごめん、收拾つかないからボクが説明していい?』

通気口なんてないのに、どこからかモノクマが現れる。

『君たちが追っかけっこしてた理由なんて知らねーけどさ。このフェンスは急激にかかる衝撃にはめっちゃくちや弱いんだよね』

「なんだよそれ…! そんなのフェンスの意味あるの!?!」

『緩やかにかかる力には強いんだよ! このフェンスはそういう材質なの! この前吹屋さんが登った時は壊れなかったでしょ?』

「え? 登った?」

「げっ、あちきがかっそり夜景を楽しんでたことをばらすなんてずいでありんす!!」

こんな状況で夜景を楽しむなんて（しかもフェンスの外に出てまで）、やはり彼女は普通じゃない…。

『とにかく、急に力を加えるとすぐ破れちゃうから気を付けて使つてよね! この穴が直るまで屋上は立ち入り禁止にしとくけど、直った後は節度を保って使っただよ!』

爪を光らせて威嚇した後、モノクマは『とうっ』と声をあげて屋上から飛び降りていった。

「あのモノクマ、絶対死んだでありんすね…。」

「…それはともかく、フェンスがこんな危ない作りになってるとは思わなかったよ…。ちよつと今後は屋上に立ち入らない方がいいかもね…。」

何か不慮の事故でフェンスを越えるようなことがあったら大変だ。

「ううううう、うううううううううう」

頭を抱えて呻き声をあげる入間君を連れだして、俺達は一階へと戻る。

入間君の話を聞くとところによると、

①吹屋さんが入間君を遊びに誘う

②入間君が逃げる

③吹屋さん、血眼になって入間君を探し始める

④入間君、「ここに逃げるとは思っまい」と恐怖を承知で屋上へ

⑤しっかり吹屋さんに見つかる

⑥屋上で捕まりそうになってとっさに突飛ばしたらフェンスにぶつかり、そのまま破壊

という流れだったらしい。

いつになっても吹屋さんはトラブルメーカーだな…。

「吹屋様…いい加減脱出のために何か働いてくださいませんと」

入間君が恐ろしい形相で威圧すると、吹屋さんの顔を冷や汗が流れる。

「吹屋さんさ、やることが見つからないならいい仕事を紹介するよ」

お茶を濁すように俺は吹屋さんの腕を引っ張って休憩室へと足を運んだ。

「伊丹さん！ 吹屋さんにもアルターエゴの資料調べを手伝わせ…。」

俺は伊丹さんへの言葉を告げながら勢いよく休憩室へと入っていったが…。

「あれ？ いない？」



葛西が吹屋達を探していたころ。

「……………」

前木は図書室である資料を読み漁っていた。

【著名な殺害事件の一覧】と刻まれたその大型の資料には、これまでに起きたありとあらゆる殺人事件の内容が詳細にまとめられていた。

伊丹や仲間達を守るために殺人を決意した前木。

殺人をするには、殺人のためのトリックを学ばなければならない。

一刻も早く殺人の仕方を覚えなくてはならなかった。

「…こんなことを真剣に勉強することになるなんてな」

自嘲気味に前木は呟く。

だが、たとえモノクマの思う壺であっても、やるしかない。

前木は夢中になって資料に目を通していた。

いつのまにか図書室に入り込んだ人影にも気付かないくらいに。

不意にら前木の首筋に腕が回される。

「!!!」

油断した、と前木が思った時にはすでに遅かった。

前木の体を、雷に打たれたかのような衝撃が走る。

死の恐怖が前木を襲い、全身の毛が逆立った。

だがその腕は、彼の喉元を締め上げることがなかった。

「伊丹…?」

その腕の主を認識した前木は、驚きの声をあげる。

「ごめんね、常夏。邪魔しちゃって……」

謝罪しつつも、伊丹は前木の胸元に後ろから手を伸ばし、椅子ごと抱き締める。

恋心に彩られた吐息が前木の耳元を刺激する。

「やめろよ。誰が来るか分かんないんだぞ」

前木は困惑の表情を浮かべてそう告げるが、伊丹は腕を離さない。

「ちよつとだけ。ちよつとだけだから、このままいさせて……」

紅潮した顔を前木の首筋に寄せながら伊丹は囁く。

「……………」

戸惑いながらも、前木はそれを受け入れるしかなかった。

「(あたたかい……………)」

伊丹は前木に悟られぬよう、ひそかに涙を流す。

「(あなたと別れたくない……………けれど……………私は……………)」

前木もまた、伊丹に自らの感情を悟られぬよう懸命に唇を噛み締めていた。

覚悟を決めてなお愛にすぎる男女は、ほんの刹那の時を共に過ごした。



結局伊丹さん抜きで人間君と吹屋さんと三人でアルターエゴの資

料を調べて、いつの間にか時刻は夜になっていた。

動機のことをそれとなく二人に聞いてみたが、二人とも大した返事は得られなかった。

入間君曰く、恋人さんはまだ生きているようだが…。

吹屋さんに至っては、相手のことを何一つ知ることができなかった。

俺の聞き方が下手なのか、本当に動機が効いていないのか…。

正直、もうどうなるか全く分からない。

モノクマの狙いも分からないし、どうすればコロシアイを防げるのかも。

でも、夕食のときにみんなの顔を見てみると、不思議と安心した気分になれる。

よほど屋上が怖かったのか、入間くんは一日中げっそりした表情だったけど…。

夕方に起きてきた山村さんは、今夜も見回りに向けて気合十分だった。

前木くんと伊丹さんも、落ち着いた様子だった。

この安心感がずっと続いてくれるといいんだけど…。

『オマエラ、動機に負けず元気に過ごせてるかな？ 夜時間のお知らせですよ！ 明日も元気にロシアエるようによく寝るんだよ！

おやすみなさい！』

モノクマのアナウンス。

夜時間だ。

「では皆さん、今夜も見回りを行いますので個室にお戻りください！」

山村さんが声をかけると、みんなはそれぞれ個室へ向かう。

個室前の廊下に何人かが集まり、部屋に入ろうとしたところで前木君が声を上げた。

「ん？ なんだこれ…」

「？」

前木君は一枚の紙きれを手に取り、眺めていた。

「そういえば、伊丹さんと小清水さんはどこですか？」

それと同時に山村さんが呼びかける。

確かに二人ともいない。

「……………!!」

次の瞬間、前木君は恐ろしい形相で走り出した。

「あっ、ま、前木君ー」

俺は慌てて彼の後に続く。

「待つてください！ どうしたんですか！」

山村さんもそこに続いた。

俺達三人は、あつけにとられる人間君と吹屋さんをよそに、前木君の後を追って走った。

彼は一直線にエレベーターへと駆けていった。

「はあっ、はあっ……………」

エレベーターの扉が閉まって動き出すと、前木君はその場にしゃがみこんで息を整える。

「ま、前木君……………急にどうしたの…?」

「そうですね…。今から夜時間だというのに……………」

かろうじて彼に追いついてエレベーターに乗った俺と山村さんも息を整える。

「……………俺の部屋の扉に……………挟まってたんだ……………」

そう言って前木君は先ほど見ていた紙切れを広げて俺たちに見せた。

『 屋上で待ってる 死ぬ時は一緒 』

紙には、殴り書きされたような字でそう書いてあった。

「え……………!?!」

その文字を見た俺と山村さんは確かに表情を変える。

「死ぬ時……………!?!」

これを書いたのって、ひよつとして……………。

チーン、と音が鳴る。

俺達が思考を巡らせる暇もなく、エレベーターは屋上に着いていた。

そういえばフェンスの修理が終わるまで立ち入り禁止にするってモノクマが言ってたけど、もう終わったのか…？

扉が開く。

その先に待っていたのは……。

爆音。

閃光。

「っ!!」

思わず俺達は目をつぶった。

同時に、外から激しく吹き込んでくる猛烈な雨が体中に打ち付けられた。

その時、俺は思い出した。

今朝のア報知ドリの予報を。

『アホー！ アホー！ 今日はいニクの曇り空！ 夜九時から雨！ 十時から雷雨を伴う大雨！』

激しい雨風で前もろくに見えない。

「伊丹ー!! いるのか!!」

前木君が力いっぱい叫ぶ。

返事はない。

「……！ 一人とも！ あそこー！」

不意に山村さんが叫ぶ。

彼女が指差した先に立っていたのは……。

雨に濡れた伊丹さんだった。

雷雨の中に立ち尽くす彼女は、両手に金属の線のようなものを持っていた。

「……!!?」

こちらに気付いた伊丹さんは、驚愕の表情を浮かべた。

「あなた達、どうして?！」

「……………え?！」

俺が混乱する中、一直線に伊丹さんの方に近寄って行ったのは前木君だった。

「伊丹!! その線は一体なんなんだよ!!」

「やめて!! 来ないで!!」

伊丹さんの全身全霊の叫びが前木君の歩みを止めた。

「お願いだから来ないで!! 私の計画を邪魔しないで!!」

「計画……………?！」

二人の問答が続く中、俺は伊丹さんが持っている金属線を目で追った。

見ると、その金属線は屋上の中央にそびえ立っている金属塔にくくり付けられていた。

その時、空が光る。

「わあっ!!」

鼓膜が破れそうなほどの凄まじい破裂音が天空を支配する。

どこか近い場所に雷が落ちたようだ。

待てよ……………?

雷……………??

この手の高いタワーは大抵、避雷針を兼ねているはず。

もしかして、彼女は……………。

「伊丹さん!! その金属線を離して!! 今すぐ!!」

俺は必死に叫ぶ。

俺の仮説が正しいなら、彼女は……………。

「嫌!!」

彼女はしゃがみ込み、金属線を抱え込んで叫んだ。

やはりそうだ、彼女は……………。

「やむを得ません、私が力づくで……………」

「待ってくれ!」

山村さんが一歩出ようとするのを、前木君が止めた。

そして……。

「!!!」

しゃがみ込む伊丹さんに歩み寄ると、まっすぐに力強く抱きしめた。

「…な、なにやってるの!!!? あなたまで感電するでしょう!!!? 離れてよ!!!」

伊丹さんが精いっぱい力で前木君を突き放そうとする。

その瞬間、彼女の意識が金属線から離れた一瞬の間について……。

前木君は彼女の手から金属線を奪い取る。

「あぁっ…!!」

そしてその金属線を地面に投げ捨てた。

「死なせない」

金属線を拾おうともがく伊丹さんを抱き寄せて、前木君は言った。

「死なせるもんか」

「バカあああ!!!」

伊丹さんは前木君の胸に顔をうずめながら、子供のように泣きじやくる。

「私がクロにならなきゃ!!! クロにならなきゃいけないのに!!! あなたがクロになる前に!!!」

「俺が誰かを殺そうとしてるって…知ってたんだな……」
「…………!?!」

前木君も伊丹さんもクロになろうとしていた……??

それって一体どういう……??

「私がクロにならないとあなたがオシオキされる!!! それだけはダメなの!!!」

「落ち着いて聞け、伊丹!!!」

伊丹さんに言い聞かせるように、前木君は強く叫ぶ。

「俺はもう、誰も殺さない。誰も死なせない。お前も仲間も、みんな守ってここから出る。今そう決めた」

「でも……」脚本が……」

「脚本なんて関係ない!! 俺の幸運で、モノクマの脚本なんて打ち

破ってやる!!」

「……常夏……」

「だから……死んで何とかしようなんて思わないでくれ。絶対に、二人で生きてここを出よう」

「そして……二人で幸せになろう」

「……………!!」

伊丹さんは電撃が走ったように一瞬硬直し、そして……。

大声をあげて泣いた。

二人は雨に濡れぬことも厭わずに抱き締めあった。

それは、一つの愛が二つの命を救った瞬間だった。

彼らは誰かを殺そうとしていた。

それはつまり、他の誰かを犠牲にしても愛する人を守ろうという意思の表れだった。

だけど、前木君の行動が伊丹さんを、そして前木君自身をも変えた。

これが彼の幸運によるものだとしたら、黒幕の脚本に勝ったということなのか？

だとしたら――

俺の思考はそこで途切れた。

何が起きたかを察する間もなく事態が進んでいったからだ。

視界が真っ白になって、そして……

耳の中に何かがねじ込まれるような激痛が走り……

体が宙を舞っていた。

「!?!?」

何も聞こえない。

何も分らない。

自分がどこにいるのかも。

数秒も絶たないうちに、耳よりも凄まじい激痛が背中全体に響き渡った。

「わああああ……」

大声で叫んだはずなのに、自分の悲鳴がとても遠く聞こえた。同時に、途切れていた雨の音が少しづつ聞こえてきた。

ここにきて、ようやく俺は自分達が直面した状況を理解した。

即ち、落雷がタワーに落ちたのだと。

だが、ここから先に俺が見たものは、何もかもがその理解を超えていた。

その光景を見ている間、まるで走馬灯を見ている時のように、時間が圧縮されて脳内に認識されていた。

俺が背中からエレベーターの壁にぶつかったとき、前木君と伊丹さんはまだ空中にいた。

二人の体は勢いよくフェンスに激突し、そのままフェンスを突き破って吹き飛ばされていた。

フェンスを越えた先には、2 mほどの幅の足場、さらにその先には……。

高さ1000 mの天空。

俺はすぐに駆け出そうとした。

しかし所詮俺の力では、転倒した体を一瞬で起こせるはずもなかった。

頭では分かっているも体がそれに追いつかない焦燥感が俺の全身を支配した。

その時、俺の真横を風よりも早く山村さんが通り抜けていった。

空中に放り投げられた二人に追いつこうと、彼女は全身全霊で駆ける。

二人は足場を超えて夜空に放り出される。

重力に引かれて落ちていこうとする彼らの手を、間一髪で山村さんが掴み、思いきりフェンスの中へと引っ張り上げようとする。

この時、ようやく俺はエレベーターから二、三步走り出したところだった。

前木君は山村さんの右手に腕を掴まれ、そのまま彼女に放り投げられる。

より遠い位置にいた伊丹さんにも、山村さんの左手が……。

伊丹さんの手を掴んだはずの山村さんの左手は、するりと抜けてしまった。

あと数センチ距離が足りなかった。
指をわずかに絡めることしかできなかったのだ。

伊丹さんの体が重力に引かれる。
落ちてゆく。

地球の中心へ、奈落の底へ。

「伊丹さああああん!!!」

俺は迷わずにフェンスに空いた穴から外に這い出る。

イヤだ。

亞桐さんと同じことを繰り返すのはもうイヤだ。

目の前でクラスメートを守れないなんてもうイヤだ。

「伊丹さんっ!!!」

足場の端から身を乗り出して山村さんが叫ぶ。

伊丹さんは、タワーの側面から突き出た突起状の構造物にかろうじて手をかけてぶら下がっていた。

山村さんは伊丹さんに向けて必死に手を伸ばそうとするが、彼女がぶら下がっている場所までは数mの距離があり、どうもがいても届く距離ではない。

「ロープ!! ロープを!!」

俺はロープの代わりになりそうなものを必死に探す。

先ほど伊丹さんが掴んでいた、タワーにくくり付けられた金属線を見つけた。

「ぐっ……!!」

タワーに頑丈にくくり付けられた金属線は、引っ張っても全く外れる心配がない。

「葛西君!! これをほどけば!!」

山村さんの声で俺は振り向く。

見ると、彼女はフェンスの金網をほどいて使うつもりのようにだった。

考えている暇はなかった。

俺は彼女と共にフェンスの金網に手をかけ、懸命に外そうとした。



俺はどうなった?

伊丹を抱き締めて、いつの間にか空を飛んで、山村に引っ張られて……。

“ ……常夏…… ”

「……………」

俺を呼ぶ声がする。

俺は朦朧とした意識のまま、その声の方に向かった。

その場所は、地上まで遮るものなど何もない、超空の絶壁。

そこにしがみつく一人の少女。

「……………伊丹ッッ!!」

その時、俺の意識は完全に蘇った。

愛すると誓った人が、今まさに転落しようとしている。

助ける方法は……。

「もう、いいの」

その声が、俺の思考をかき消した。

「常夏」

とても死に瀕しているとは思えないくらい穏やかな声で、伊丹は呼びかけた。

俺はゆつくりと下を覗き込む。

涙と雨に濡れた顔には血の気など微塵もなく、目は濁り、壊れたような笑みを微かに浮かべたその表情は……。

完全に絶望そのものだった。

「私を、見ないで」

その言葉を告げ終わると同時に、伊丹の手が静かにタワーから離れた。

その後のことはよく覚えていない。



俺と山村さんがようやくフェンスの金網をほどいた時には、もう手遅れだった。

呆然と足場の端にしゃがみ込む前木君の下には、もう伊丹さんはいなかった。

その時、屋上に備え付けられたモニターが光りだす。

『衝撃の展開！ 伊丹さんの運命や如何に?!』

バラエティ番組のような題名が端に表示され、画面の中にはさかさまに空中を転落する伊丹さんの姿が遠目から写されていた。

「!!」

一瞬、俺は目をつぶって顔をそむける。

だが、すぐに目を開く。

俺はまた、友達を救えなかった。

自分の不甲斐なさが再び招いた惨劇。

その結末から逃げていいのか？

伊丹さんがどんな表情を浮かべているのか、見ることはできなかった。

ただ天から地へとまっすぐに落ちてゆく、そのシルエットが見えるだけだった。

堕ちてゆく彼女を迎えるのは、荒廃した都市。

かつて希望の依り代だった街。

その場所で、伊丹さんは絶望へと身を墮としてゆく。

地上に落ちる前に、彼女の体は高層ビルのでっぺんの縁に勢いよく激突した。

そこでバウンドした体は、再び地上へと落下する。

バウンドした瞬間、彼女の体は二つに千切れた。

数秒後、地上に到着した頭部がスイカのように割れ広がった。

残りの部位も遠く散らばって地面に落ち、糊のようにへばり付いた。

遠目の映像だったので、詳細に見えなかったのがせめてもの救いと言えるだろうか。

まるでゲームの画面のように、伊丹さんの映像の上に『DEAD』と表示される。

そしてその画面を俺と山村さん、そして前木君が呆然と見つめると同時に……。

あの声が聞こえてきた。

『死体が発見されました！ 一定の捜査時間の後、学級裁判を行います』

す
!』

Chapter 5 非日常編① 捜査編

激しい雨が俺の身を打つ。

凍えるような寒さだが、誰もその場を動こうとしなかった。

呆然と膝をついて黙り込むことしかできなかった。

『やつほー！　なんと、ここにきてまたもや起きてしまいましたねえ、コロシアイ事件！　ボクが用意した粋な映像は楽しんでいただけかな？　ああしないといつまで経っても死体が発見されないからね！』

いつの間にか現れた雨合羽姿のモノクマが、俺の横合いから声をかける。

「……………」

俺を含め、その場も誰も言葉を発することができなかった。

『何やってるの？　風邪ひいちゃうよ？』

モノクマはキョトンとした表情を浮かべる。

「……………」

俺は何も言えなかった。

モノクマに敵意を表すことすらできなかった。

全ての感情が抜け落ちて。

『全くもう！　風邪ひいたら裁判にならないんだからね！　手間かけさせてくれるんだから！』

モノクマはいらいらしながらも、俺達三人に順番に雨合羽をかぶせていく。

「裁判……………」

山村さんが微かな声で呟く。

「犯人なんているんですか……………」

『そりゃあいるよ！　伊丹さんは君たちコロシアイ参加者の中の誰かに殺されたんだよ！』

俺達の中の誰か……………。

その言葉が俺の心に突き刺さる。

これは、偶然の事故じゃないっていいのか？

必然の犯行だということのか？

だとしたら、一体だれがどうやって……………。

「…幸運…？」

前木君がポツリと呟く。

「親友も恋人もみんな死んで…………自分だけ生き残るのが幸運なのか…………？」

『そうなんじゃない？ 実際ここまで人数減つても生き残ってるのはすごいラッキーだと思うよ』

「…………俺は…………」

「モノクマツ!!」

前木君に余計なことを言うモノクマに、山村さんの怒号が飛ぶ。

『さっきまでの憔悴が嘘みたいに元気になったね。発破をかけるにはちょうど良かったみたいだね』

俺達に捜査をさせるためにわざと煽つたっていうのか…？

いや、なんにしたって今の前木君を侮辱するような真似は絶対に許せない。

伊丹さんを失ったばかりの彼を…。

『さ、伊丹さんが死んで悲しいと思うなら、頑張つて推理してクロを当てなよ！ 君たちにはそれしか道はないんだよ！』

それしか…………。

本当にそうなのか？

モノクマの言いなりになってコロシアイゲームに加担することが、本当に彼女のためになるのか？

そんな疑問を抱いているにもかかわらず、俺の右手は素早く電子生徒手帳を開いていた。

『モノモノファイル⑥ 被害者は伊丹ゆきみ。死因は転落による全身破壊。死亡推定時刻は22:15。』

もはやモノモノファイルの確認すら手癖のようになってい

うのか。

「……………」

こんなことの繰り返しは一刻も早く終わらせなければならぬに。

俺は慣れていく一方だ。

ごめんなさい、伊丹さん。

謝って許されることじゃないけど、心の中で謝り続けることしかできないよ。

亞桐さんに続いて、君まで守れなかったなんて。

だけど、できることなら、俺は君の無念を晴らしたい。

事件の謎を解くことがそれに繋がるのかは分からないけど……………。

やるしかない。

もうこれで、事件は最後にする。

絶対に。

「俺にも……………捜査をさせてくれ」

前木君が俺の目の前に進み出た。

「……………大丈夫なの？」

「……………皮肉だけど、さっきのモノクマの言葉で目が覚めた気分だ…」

「…前木君……………」

「…すごく辛いはずなのに、自分でも不思議なくらい落ち着いてる。慣れたからとか、そんなんじゃないと思う。きつと…伊丹が『そうしろ』って俺に語り掛けてるんだろうな」

「伊丹さんが……………」

「死に際のあいつの目……………すごく悲しくて、無念そうで、絶望的だった……………。だけど、自分の死を受け入れるようにも見えたんだ。受け入れたうえで、俺に『生きろ』って語り掛けてるような気がしたんだ」

「……………」

「都合のいい捉え方をしているだけかもしれない……………。でも、今まで誰かが死んだときには打ちひしがれることしかできなかった。今は違う。絶望の中に、ほんのわずかな希望を感じてるんだ。…だから、

一緒に戦おう」

前木君は、前に進もうとしている。

親友と仲間たちと愛する人を失ってもなお、その絶望に抗おうとしている。

俺は、戦えるのか？

「絶対に勝とう、前木君」

…愚問だ。

今更後に引けるわけがない。

絶対に勝つ。

クロにも、黒幕にも。

《 捜査開始 》

【コトダマ入手：モノモノファイル⑥】

被害者は伊丹ゆきみ。死因は転落による全身破壊。死亡推定時刻は22：15。

「……やはりここでしたか」

俺達が捜査を決意した時、エレベーターの方から声がした。

扉が開いたエレベーターの中には、入間君と吹屋さんがいた。

「突然アナウンスが鳴ったかと思ったら誰かの死体の映像がモニターに流れて……。嫌な予感でしたのですが……」

「入間君たちも……あの死体を見たんだね……」

空中で二つに千切れ、地面にたたきつけられた伊丹さんの死体。

あの美しい姿は見る影もなく、地面にへばりついた肉片と化した。

思い返すだけで吐き気を催してしまう。

「ゆきみん……一番死にそうにないって思ってたのに……どうしてで
ありんすか……」

吹屋さんが涙を拭いながら呟く。

「……この場所では何が？」

入間君が問いかける。

「何って……いろんなことが同時に起きて……」

「葛西君、いったんここで起きたことを整理しませんか？ 事件の真相を暴くには一番大事なことだと思うので……」

「……そうだね。記憶をたどってここで起きたことを順番に探ってみよう……」



事件が起きたのはここ、屋上。

この場所は日中に入間君と吹屋さんがフェンスを破損させたことで立ち入り禁止になってたけど、夜時間にはいつの間にか解放されていた……。

そしてその屋上は、今日の日中に吹屋さんが用意した『ア報知ドリ』というアイテムによって予測されたとおり、雷雨に襲われていた。

事の始まりは前木君が自室の扉に挟まれた紙切れに気付いたことだった。

『屋上で待ってる 死ぬ時は一緒』

そう書かれた紙を見た前木君は即座に屋上へ向かい、それに続いたのが俺と山村さんだった。

屋上に行くと、伊丹さんが一人で立っていた。

彼女は中央の塔にくくり付けられた金属の線のようなものを持っていた。

そこに俺達が現れて、前木君が伊丹さんから金属線を離させた。

その直後、タワーに雷が落ちて……。

目の前が真っ白になって、気が付くと吹き飛ばされていたんだ。

……で、俺はエレベーターの壁に叩きつけられて。

前木君と伊丹さんはフェンスを突き破って空中に放り投げられていたんだ。

すかさず山村さんが助けに入って……。

前木君は助けられたけど、伊丹さんはあと僅かのところで手が届かなくて……。

でも即座に落ちたわけじゃなくて、彼女は少し下のところで突起状の構造にぶら下がっていた。

そこで俺と山村さんがフェンスの金網をほどいてロープ代わりに使おうとしたんだけど……。

金網を外し終わったときには、伊丹さんは力尽きて落下してしまっていたんだ。



【コトダマ入手：ア報知ドリ

吹屋が売店で入手した怪しい気象予報装置。スイッチを押すとアホウドリ型の人形が今日と明日の天気を読み上げる。

モノクマ曰く、的中率は100%。コロシアイ当日の朝から食堂に置かれていた。

【コトダマ入手：謎の紙切れ

夜時間になる際に見つけた、前木の部屋の扉に挟んであった紙切れ。

殴り書きのような文字で『屋上で待ってる　死ぬ時は一緒』と書いてあった。

【コトダマ入手：事件直前の伊丹

屋上に突入した時、伊丹は銀色の線のようなものを両手に持って立っていた。

もみあいになった際に銀色の線は伊丹の手から離れた。

【コトダマ入手：フェンスの破損

事件日の日中、屋上のフェンスは人間と吹屋が事故で破損させていた。

モノクマ曰く、フェンスが直るまで屋上は立ち入り禁止になっていたが、夜時間には既に解放されていた。

「そうですか……。そんなことがあつたんですね……」

顎に手を当てて考え込む人間君。

「雷が落ちて吹き飛ばされたっていうのはどういうことでありんすか……?」

「……分からない。落雷の衝撃波かな……?」

「ええっ!? じゃあ今すぐここを離れないと……」

山村さんがそう言った瞬間だった。

視界が閃光に、聴覚は爆音に包まれる。

「わああっ!!」

「きやああああっ!!」

落雷。

耳が痛くなるほどの凄まじい音だ。

「……みんな、大丈夫!」

恐る恐る目を開けると、頭を抱えたり伏せたりと態勢は様々だったが、みんなちゃんとその場にいた。

「すごい音でありんすね……。あちきの耳がイカれるところだったでありんす……」

「ですが、体が吹き飛ばされるほどの圧力は感じませんでしたね……」

「じゃあ、俺達が吹き飛ばされたのって……」

……一体どうしてなんだ?

その時、ピコンと電子生徒手帳が鳴った。

「モノモノファイルは既に配られたはずだぞ……?」

前木君が不審に思いながらも生徒手帳を起動する。

『落雷の特性…』

積乱雲などの雲が帯電した時に発生することがある放電現象。高い場所に優先して落着し、その電圧は最大で10億ボルトにも達する。

その電圧により極めて強い電流を生じさせる。その膨大な電流が人に直撃すれば即死は免れないし、電子機器も即座に

破損してしまうだろう。また、地上に直撃した瞬間の衝撃波も強大

である。』

「これは……モノクマからのヒント?」

「落雷に関する基礎知識……ですか。公平を期すためなのでしょうが、この程度の常識をわざわざ送られるとは舐められたものですね」

入間君が呆れ気味に呟く。

彼はもともと知っていたようだが、俺はこの手の話には詳しくないので正直助かる。

これも、裁判を進めるうえで手助けになる情報であることには違いないのだから。

「コトダマ入手：落雷の特性

積乱雲などの雲が帯電した時に発生することがある放電現象。高い場所に優先して落着し、その電圧は最大で10億ボルトにも達する。

その電圧により極めて強い電流を生じさせる。その膨大な電流が人に直撃すれば即死は免れないし、電子機器も即座に

破損してしまうだろう。また、地上に直撃した瞬間の衝撃波も強大である。

「あの、葛西君」

山村さんが背後から声をかけてきた。

「屋上に来た直後なんですけど……。私、中央塔のふもとにブルーシートが置いてあるのを見たんです……」

「ブルーシート……?」

「はい、それも、ただ置いてあるというよりは、何かを覆い隠しているような……。チラッと見た程度なんですけど、確かにこの目で見たので間違いありません」

「前にバーベキューした時はそのようなものはございませんでしたね?」

入間君の問いに俺は頷く。

「事態が急を要していたのでブルーシートの中身を確認することはできなかつたんですが……。今はそんなものはどこにもないですよね……」

？」

山村さんに言われて屋上を見回してみたが、ブルーシートらしきものはどこにもない。

「…多分、さっきの衝撃で吹き飛んじやったみたいだね」

【コトダマ入手：山村の証言】

屋上に駆け付けた時、中央塔のすぐそばにブルーシートで覆われた大きな物体があったという。

事態が急を要していたため、ブルーシートの中身を確認する暇はなかった。

「あ、ユキマル！ あちきこんなもの拾ったでありんす！」

突然会話を割り込むように、吹屋さんが何かを手にとって俺に見せつけてきた。

「ほらこれ！ そこらへんに落ちてるでありんすよ！」

吹屋さんが差し出したのは、赤いゴム製の管…？

「なんだこれ……」

「あとこつちには青いのも！ たくさん落ちてたでありんすよ！」

「これは……導線ですか？」

吹屋さんが拾った細い管を見て山村さんが呟く。

手に取ってみると、確かにゴム管の中にさらに細い金属線が走っている。

「葛西、こんなのも落ちてたぞ」

そう言つて前木君が持ってきたのは、複雑な電子回路の基盤…の破片のようだった。

かなり細かく破碎されており、焦げたような跡もある。

「こんなものがどうして…？ それに、これがありそうな場所って……」

いろいろ考えられるけど、まずは情報を取り入れるだけ取り入れておこう。

【コトダマ入手：回路のかけら】

屋上の床に落ちていた。何かの電子機器を構成する基板や、ゴム製

の管に覆われた導線が落ちていた。

粉々に粉碎されていて、焼け焦げたような跡もある。

「…申し訳ありません、やはり私はここに来ると気分がすぐれないようです…」

入間君が青い顔をして地面に座り込む。

「ただでさえ高所恐怖症なのに、フェンスの仕組みを知ってさらに実際に転落死した人を見てしまったせいで……心が折れそうです……」

「…確かに、君にはキツいかもしれないね。無理はしないで、この場所以外を捜査してきたら？」

「だったらその男、私が貰い受けていいかしら？」

……その声は。

いつの間にかこの場に現れた小清水さんが、へたり込む入間君の腕を掴む。

「誰が犯人かも分からない状況ですもの、一人で行動させておくのは危険でしょうし、あなた達も私を監視しておきたいはずよね？ だったらこの男と行動させた方が早いでしょう？」

「…何を企んでる」

前木君が訝しげに問うが、小清水さんは鼻で笑う。

「…私は構いませんよ……。ここにいなければ体調は治りますし、小清水様のこともしつかり監視しておきますから……」

「流石は以前私を殺そうとしただけのことはあるわね。捜査時間に寝首を搔くような真似だけはしないでくれると嬉しいけど」

「……………」

まだその時のことを根に持って……って殺されかけたんだから当たり前前だよな。

「私のことは心配なさらないでください。屋上のごことは頼みます……………」

その言葉とともに、入間君と小清水さんはエレベーターを降りていった。

「彼のことも少し心配ですけど……。流石に捜査時間に事件を起こすなんてことは小清水さんもしないですよね」

山村さんの言うとおりに、彼女がここで何か変なことをする可能性は著しく低い。

皮肉にも彼女に対する信頼感が日増しに高まっているような気がする…。

何はともあれ、俺達は屋上の捜査を完璧にしないとな。

「やはり気になるのはこのフェンスだよな……」

前木君がフェンスに手をかけて呟く。

「なんだってこんな弱っちいフェンスなんか付けたんだ…。まるでここで事件が起きるのが分かったみたいだ……」

「……黒幕はここで事件が起きることを見通していたのか……?」

…だとしたら黒幕は一体……。

「ところで、このフェンスの特性を知ってたのって、俺と入間君と吹屋さんだけだよな?」

この三人は今日の日中、一度フェンスを壊している。

その事件がなければ俺達はフェンスの特性に気付くこともなかったはずだ。

「いや、フェンスのことなら俺は夕食の後に知ったんだ。吹屋からその話を聞いて……」

「え? そうなの?」

「…だって、まさかこんな事件になるとは思ってたから…。笑い話のつもりでみんなに話しちゃったでありんす」

つまり、フェンスのことはみんな知っていたと判断していいワケか。

この情報でクロを絞れるかと思っただが、そういうわけにもいかないようだ。

【コトダマ入手：屋上のフェンス

屋上のフェンスは鉄でできているかと思われていたが、実際にはモノクマが用意した特殊な金属だった。

緩やかにかかる力には強いが、急にかかる力には弱く、破れてしまう。

なお、フェンスについての情報はほぼ全員が知っていた模様。

そして気になるのは伊丹さんが死に際に握っていた金属の線。それは、未だにタワーの中央塔に巻き付けられていた。

「見てください…。相当に太くて頑丈な金属線のようなですね…」

山村さんが床に落ちている金属線を拾い上げてそう言った。

「確かに、さつき拾った導線とは比べ物にならないほどの頑丈な金属線だ…。これだけのものになると加工も結構大変だと思うけど…」

伊丹さんがこれを持っていたということは、これは伊丹さんが用意した物…と考えていいのだろうか。

俺は金属線を辿ってタワーの中央塔に近づく。

「金属線には絶対に触るなよ。雷が落ちて感電したら即死だぞ」

前木君が注意を促す。

と、いうことは、伊丹さんはやはり…。

金属線は、タワーの中央塔の、少し高いところにある金属の部分に巻き付けてあった。

「この部分は金属…。タワーに落ちた雷の電流はここを通って真下に送られているのか…。モノクマを呼んで詳細に聞きたいな…」

『つて言うと思ったからスタンバってたよ！ 葛西君が予想したとおり、このタワーは被雷した分の電圧は中央の柱を通して屋上の床下に続き、蓄電器に送られるよ！ で、その通り道がこの露出した金属部分なワケ！』

モノクマはそう言うと、ぴよんと飛んでその金属部分にコアラのようにしがみついた。

『だから、雷が起きた時にここを触つてると感電死の恐れがあるし、こんなところに金属線なんかくくり付けた日にはその金属線自体が強烈な凶器になるよ！』

とモノクマが説明した瞬間。

バァン！！！！

閃光と共に爆音が響き、落雷した。

「っ！！」

閃光が消えた後に目を開くと、黒焦げになったモノクマが足元に落ちていた。

モノクマはどうせスペアがあるだろうから一匹死んだところで嬉しくはないが、少なくともモノクマの言葉が本当であることは分かった。

それに、中央塔の金属が露出した部分は感電の恐れがあるが、それより下の部分は赤茶色のゴムのような建材で覆われており、感電しないようだ。

感電箇所の高さは2mほどであり、背の高い人が腕を伸ばしてようやく届くレベルだ。

「うう……。こんなところの捜査はとつと終わらせないと、あちき達の目か耳かどつちかが死んじゃうでありんす！」

吹屋さんの言うとおり、いつまでもここにいるのは危険だ。

だけど、捜査を中途半端な状態で切り上げるのはもつと危険だ。

そのためにも、さっさとここを完璧に捜査してしまおう。

【コトダマ入手：タワー中央塔】

屋上の中央から伸びている高さ50mほどの鉄塔。避雷針を兼ねており、直撃した雷は鉄塔の中央の柱を伝って根元に向かい、床下の蓄電器へと伝導される。

【コトダマ入手：中央塔の感電箇所】

タワー中央塔には電気の通り道がむき出しになっている箇所があり、そこに触れていると感電の恐れがある。

その箇所は地上から2m以上の高さにあり、背の高い人物が手を伸ばしてようやく届くぐらい。

「……なあ、葛西」

前木君が俺の肩を叩く。

「この金属線、伊丹が持つてる側じゃない方の先端も伸びてるぞ」

「……え？」

確認してみると、確かに金属線は二方向に突き出ていた。

そのうち一方は、方角的にも伊丹さんが握っていた方で間違いない。

しかしもう一方は、タワーの外周に沿うようにして根元に下ろされている。

この位置では、タワーに突入した俺達の位置からは見えなかったはずだ。

しかもこの先端……。

「ぐにやりと曲がってるね」

「ああ……。まるで熱か何かで溶かされたような……」

この情報……ひよつとしてすごく大事なことなんじゃないだろうか。

「コトダマ入手：丈夫な金属線

中央塔の真ん中の柱に、丈夫な金属線が巻き付けられていた。先端は中央塔から2メートルほどの距離まで伸びていた。

また、伊丹が持っていた方とは異なる方にもう一本先端が伸びており、その先端は熱でゆがんでいた。

その後も少しの間屋上を捜査した。

しかし、先ほど見つけた回路の欠片が何個か見つかるのみで、新しい何かが見つかったわけでもなかった。

「葛西君、もうそろそろこの捜査はこの辺にしておきませんか……？」

俺は山村さんの提案を受け入れることにした。

「そうだね……。他に気になる場所もあるし、一度ここを出ることにしよう」

そして俺達四人はエレベーターに乗り込む。

ここに来たときは、まさかこんなことになるなんて予想だにしていなかったな……。

「……………」

複雑な表情を浮かべる前木君を横目に、俺はエレベーターのスイッチを押した。

「……で、ここからどうするんですか？」

「さつき小清水さんが言ったように、一人で誰かを行動させるのは危険だと思う。二人ずつで二手に分かれて捜査するのがいいんじゃない

いかな」

「じゃあ吹屋は俺と来てくれ。お前にも調べてもらわなきゃいけないことがある」

「ひょろ!? あちきをダイレクト指名するなんて大胆でありんすねー!」

「じゃあ、私達は一緒に二階を探索しましょう!」

こうして俺と山村さんは二階で、吹屋さんと前木君は一階へと足を運んだ。

「まず技術室に行きたいんだけど、いいかな?」

「技術室ですか?…? いいですけど、あそこは……」

そう、技術室はつい昨日、山村さんと人間君と三人で入り口をふさいだばかりだ。

モノボンドという特殊な接着剤を使って。

だが、案の定……。

「あれ、扉が開きますよ!?!」

技術室の扉は簡単に開いた。

そして……。

「扉の周りに付着したモノボンドはきれいさっぱりなくなっている……。一体どうやって……」

密室になっていたはずの技術室の封印は、簡単に解かれていた。誰がどうやってこんなことを。

【コトダマ入手：犯行防止工作】

化学室、技術室、弓道場の扉にはモノボンドによる固定処理が施されており、そのままでは中に入ることができない状態になっていた。しかし、捜査時にはモノボンドは無くなっており、自由に出入りできる状態となっていた。

「モノボンドってどんな性質でしたっけ……」

山村さんの言葉を受けて俺は昨日のモノクマの言葉を思い返す。

『つていうかラベル全部読んだ? ゆとり世代は書いてあることすら

まともに読まないで全部聞こうとするから校長は嫌になっちゃおうよ！」

ちがう、そこじゃなくて。

確かその後にラベルを読んで……。

『ラベル……？ あつ、モノボンドは熱に弱いつて書いてありますよ！』

そう、山村さんがそう言ったんだった。

「モノボンドは熱に弱いつて話だったね。確か熱々の濡れタオルでも溶けてしまいうくらいに……」

実際に、拳をボンドで固められて俺を助けてくれたのは、熱々のタオルを持ったモノクマだった。

【コトダマ入手：モノボンド

技術室に置いてあったモノクマ特製ボンド。極めて強烈な接着力を誇り、物理的には破壊不可能。

ただし熱には弱く、風呂の湯程度の熱で容易に溶解してしまう。

「でも、その性質が悪用されないように入間君がモノクマに校則を追加せましたよね……？」

俺は小さく頷く。

「それが今回の謎でもあるんだ……。そもそもモノクマの校則自体も結構アバウトなものだったし……」

【Chapter 5 (非) 日常編④】

『……はあ。いくらなんでも早合点しすぎなんじゃないの？ まあ、どう解釈するかは君たちの勝手だけどさ。分かったよ。モノボンドの欠陥を埋めるようにボクが手助けすればいいんでしょ？』

モノクマがそう言った直後、ピロリン、と電子生徒手帳から音が鳴った。

すぐに開いて確認してみると、校則の欄に以下の文言が追加されていた。

「校則：お湯や飲み物など、熱いものを部屋から廊下へ持ち出すことを禁じます。どうしても必要な時は、校長に申し出ること。校長が判断します。」

『ハイ！ これで文句ないでしょ？』

「モノクマが相談の余地を残していたつてのが気になるどころだけど…」

『そういうのはボクに直接聞いた方が早いよね！』

突然現れるモノクマにも、今更驚かない。

『急に追加した校則だから、要相談にしとかなといういろいろ後で面倒になると思ったんだよ。でも、昨日校則を追加してから相談に来た人は一人もいなかったよ！』

「……！ それは本当なのか、モノクマ!？」

『もちろん本当だよ！ ボクは常に公平を期すからね！』

…じゃあ、この校則を破った人はいないということか。

だとしたら本当にどうやって……？

【コトダマ入手：追加校則】

『熱いものを部屋から廊下へ持ち出すことを禁じます。どうしても必要な時は、校長に申し出ること。校長が判断します。』

モノクマ曰く、許可の申請に来た生徒は一人もいなかったという。謎は残るが、とりあえず空いている技術室の中へと足を運んだ。

「中に残るのは久しぶりな気がしますね…。まさかこの部屋が再び事件に関わることになろうとは……」

「本当だね……。……ん？」

俺は技術室の壁に置かれている棚の一つに着目した。

『簡易爆弾制作キット』

そう書かれた棚の中を覗いてみると……。

「あれっ、部品がかなり減ってる……」

その棚の中はほとんど空っぽと言っていいほどスカスカだった。

「これは…。以前に御堂さんが爆弾を作った分が減っているのではしよ

うか?」

「いや…。それだと昨日のモノクマの発言と矛盾する」

昨日、モノクマはこう言っていた。

『この部屋からなくなつたものはボクが責任をもつて補充しますよ』

「この発言通りなら、御堂さんが使つた分の簡易爆弾の部品は補充されてしかるべきだ。…備品補充のルールについてモノクマに直接聞いた方がよさそうだな」

『今回はすごーくボクの出番が多いね! いよいよボクも主役デビューかな?』

モノクマのくだらない発言には耳を貸さずに俺は備品の補充のタイミングについて尋ねた。

『校舎全体の備品の欠如については、ボクが六時間おきにチェックして補充してるよ! 今日、最後に補充したのは午後六時だね! でも事件が起きた後は現場状況を保存するために補充はいったん中断するよ!』

つまり、今無くなつている部品は少なくとも午後六時以降に消費されたものということだな。

これだけの数を一体何に使つたんだ…。

「これ、なんですか?」

スカス力になつた簡易爆弾制作キットの棚の中から、山村さんが何かを取り出す。

「奥の方にまとまって置いてあるみたいですが…。」

彼女が奥の方から掻きだしてきたのは、プラスチックでできた部品。

「これは…:スイッチ?」

その部品を手にとってみた俺は驚きの声をあげた。

「回路のオンオフを決めるスイッチだ。どうしてこれだけがこんなになつた?」

棚を置くまで覗いてみたが、これ以外に余っている部品はなかった。

「スイッチがなければ爆弾は起動できないはず…。…ダメだ、さつぱ

り分からない!」

こんな謎が、果たして裁判で解くことができるのだろうか？

【コトダマ入手：簡易爆弾の製作痕】

過去に何個もの簡易爆弾を制作した跡があり、それに応じた分の部品が減っている。しかし、何故か回路に電流を流すか否かを切り替えるスイッチだけが大量に余っていた。

モノクマによれば、技術室から紛失した部品は全て午後六時以降に無くなっている。

「簡易爆弾のほかに、紛失しているものはあるかな……?」

簡易爆弾のほかにも尾行装置や隠しカメラなど様々な装置の制作キットが棚ごとに分けられているが、それらに使用された痕跡はない。

「あ、葛西君……。これ……」

山村さんが声をあげた方に歩み寄る。

「明らかに減ってますよね、これ……」

その棚は、『抵抗』と書かれた棚だ。

小指の爪よりも小さい抵抗部品が大量に収められた棚のようだ。

「…確かに、他の棚に比べて減ってるね」

簡易爆弾制作キットほどではないが、目に見えて数が減っている。ラベルの色で抵抗値が分かるらしく、その説明が壁紙に書いてある。

「えっと……。一番抵抗値が高い1MΩの抵抗だけ見当たらないな……」

「つまり、その1MΩの抵抗だけが持ち去られたということですね!」

「うん……。あと、この隣の棚……」

俺はそう言って抵抗の隣の棚を開いた。

そこには、赤と青のゴム管に包まれた細い導線が入っていた。そして、この導線も他の棚と比べて明らかに数が減っている。

「これ……。見覚えがありますね……」

そうだ、これは恐らく……。

【コトダマ入手：失われた部品①】

技術室の部品置き場から、抵抗が大量に持ち去られていた。いずれも高い抵抗値を持つもの。

【コトダマ入手：失われた部品②】

技術室の部品置き場から、導線が大量に持ち出されていた。導線は細く、強すぎる電流を与えると焼き切れてしまいそうだ。

これだけの発見が技術室だけであったので、その後も俺達は技術室をくまなく調べた。

部品の一つ一つに目を凝らし、異変がないか調べていった。

ゴミ箱の中に至るまで。

そう、ゴミ箱の中さえも……。

「……ん？」

俺はゴミ箱の中に、見慣れないものが入っていることに気が付く。

ゴミ箱の中に入っているほとんどのものは、制作キットの包装袋や部品の切れ端だ。

それは別に異常とは思わない。

だけどこれは……。

「葛西君、なんですかそれは？」

山村さんの問いかけに咄嗟に答えることはできなかった。

これは……布の袋のようなもの……？

二枚の布を手編みで縫い合わせて袋状に加工したもののようだ。中に何か入っている。

「……なんだかベタベタするな」

外側には、ゴムのようなべたつく物体が付着している。

「ハサミを見つけたのですが、中身を見えますか？」

「そうだね……。毒物とかじゃないといいんだけど……。」

俺と山村さんは布袋の一つを取り出すと、机の上に置いて慎重にハサミで端の方を切っていた。

「……粉？」

袋の中には、真っ黒な粉が入っていた。

「どうします？ 舐めてみますか？」

「いやいや、流石に危ないよ……」

推理ドラマにでも憧れているのか、粉を舐めようとする山村さんを抑えて俺は袋を机に置きなおした。

これはいったいどんな物体なんだろう。

なんだか繋がりそうで繋がらないな……。

「うわっ、こっちは変なものも一緒にくっついてますよ」

山村さんがゴミ箱の中からもう一つ布袋を取り出すと、他のゴミがたくさんくっついていた。

「わあ、外側のべたつきにくっついてるみたいだね……つてあれ？」

と、くっついてるゴミの中に見慣れないものを見つけた。

「チャック付きのビニール袋……？　ここの備品ですか……？」

「こんなに大きな袋なんて置いてあったかなあ……？　倉庫にあったものなんじゃないかな」

倉庫の備品置き場でこんな感じのビニール袋を見た記憶がある。

本当にそうだとして、いったいどうしてこんなところにそんなものがあるのか不思議だけど……。

【コトダマ入手：粉入り袋とビニール袋】

手作り感のある布袋。外側にはべたつきのようなものが付着しており、袋の中には土と黒い粉が大量に入っていた。技術室のゴミ箱の中に何個か捨てられていた。

また、チャック付きのビニール袋も一緒に捨てられていた。こちらは倉庫にあったものようだ。

技術室を調べ始めてかなりの時間が経っていた。

「まずいな、残り時間がいつまであるか分からないし、いつまでもここを調べているわけにはいかないな……」

あのモノクマがいつまで待ってくれるかは分からない。

もうそろそろ技術室の捜査はこの辺にして……。

「葛西君」

そんな時、山村さんが俺の肩を叩いた。

「何か見つけたの？」

「はい、このニッパなんですけど……」

山村さんが見せたのは、枝切りばさみのように大きなニッパーだった。

「このニッパーだけ、少し刃こぼれしていると思いませんか？ ほら、ここ……」

見てみると、確かにほんのわずかではあるが刃こぼれの後が見られた。

「……？ 何か硬いものを無理矢理切ったのかな……？」

「自由時間の間にこんなものを使う人はいるとは思えないので……。事件に関係あるかは分かりませんが、一応覚えておきましょう」

【コトダマ入手：大型ニッパー】

技術室に並べてある大型ニッパー。ぱつと見何の変哲もないが、よく見ると一個に僅かな刃こぼれが見られた。

時間的にも技術室を調べるのはここまでにした方がよさそうだ。

「……じゃあ、次の場所に行こうか」

と俺が言った直後だった。

ピロリン、と電子生徒手帳が鳴った。

「ん……？」

『電気回路の基礎知識：

オームの法則：中学校で習う電気の基本法則。電圧 V 、電流 I 、抵抗 R について、 $V = RI$ が成り立つ。

直列回路：複数の抵抗を直列に繋がればその分全体の抵抗は大きくなる。』

「これは……モノクマからのヒントっ」

ここにきて一体どうしたというのだろう。

公平に知識を与えようという意図なのはわかるが、これが事件に係しているということなのか……？

「私、中学から理科は赤点だったのでこういう情報をくれるのはありがたいですね！」

……山村さんもこんな感じだし、情報はあって困らないな。

【コトダマ入手：電気回路の基礎知識】

オームの法則：中学校で習う電気の基本法則。電圧 V 、電流 I 、抵抗 R について、 $V \parallel R \parallel I$ が成り立つ。

直列回路：複数の抵抗を直列に繋げばその分全体の抵抗は大きくなる。

「…で、次はどこに向かうんですか？」

「…実は、さっき山村さんが言っていた屋上のブルーシートなんだけど……出所に一個心当たりがあるんだ。そこに行きたい」

「本当ですか!? では私もお供します!」

そして俺達はエレベーターに乗り込み、三階へと向かった。

ブルーシートがある場所……考えられるとしたらあそこしかない。

訪れたのは、植物園。

その隅にある植物園倉庫だ。

「ここはこの前、バーベキューをしたときにその道具が保管してあった場所なんだ。俺の記憶が正しければ、ここにブルーシートが畳んで置いてあったと思うけど……」

俺は扉を開けて植物園倉庫の中に入る。

「……………」

倉庫の中は、物が散乱していた。

まるで、誰かが物を漁った後のようだ。

「どうやら、ドンピシャだったようですね!」

山村さんが鼻息を荒くして勝ち誇った顔を浮かべる。

でも、まだ浮かれるのは早い。

ここでどんな手掛かりを見つけたかが大事なんだ。

そして俺と山村さんは散乱した倉庫を物色する。

「やっぱりブルーシートはなくなってるね。一番大きいサイズのやつかな……」

案の定、ブルーシートは一枚無くなってた。

これが、山村さんが屋上で見つけたものとみて間違いないだろう。

「そして……これがこの前使ったバーベキューの台か……。……金網の方はどこに行っただ……。?」

台はあるのに金網の方が無いなんてことがあるのだろうか。

補充されていないということは、これも午後六時以降に紛失したということだろうか。

「あと……これ、園芸用の土って書いてあるんですけど……。中身が結構減ってませんか……？」

山村さんの言うとおり、園芸用の土が入った大袋は少し中身が減っていた。

そこまで大量に使ったわけではないようだが、いったいなぜ減っているのだろうか……？

「コトダマ入手：植物園倉庫の紛失品

植物園の倉庫の中は物が散乱しており、誰かが物を漁った後のように思える。

植物用土の一部とブルーシート、スチール製のバーベキューの網が無くなっていた。

「三階で調べるべきところはたぶんここだけだと思うんだけど……」

ここまででかなり時間を使ってしまったようだ。

最悪、調べきれそうにない部分は前木君たちの捜査結果に頼るしかない。

「おつ、ここにいたか！」

ちょうどそんなことを考えている時に、前木君と吹屋さんがエレベーターの中から現れた。

「捜査の進捗はどうだ？」

「こっちは二階の技術室とこの階の植物園倉庫を調べたよ。まあまあ手掛かりはあった。時間がないから裁判の時に共有するけど……」

「そうか。こっちは最初一階を調べてんだが、休憩室にも食堂・厨房にもめぼしい手掛かりはなかったから、吹屋の提案で四階に言ったんだ。そしたら……」

「すっごい発見があったでありますよ！」

と、どや顔を浮かべる吹屋さん。

「なんと、音楽室のピアノからピアノ線が抜かれてたであります！」

「ピアノ線……!?!」

ピアノ線っていうと、ピアノの中を通っている頑丈な線のことか。「抜かれたっていうよりは、何本かが何かで切られてたってかんだったな。かなりの数が切られてたから、きつと全部合わせたらすごい長さになるんだろうけど……」

「……ピアノ線って、どういう材質だったわけ？」

「ピアノ線は……確か炭素が入った鋼だったと思うであります！ すっごく頑丈で、ピアノ以外にも工業用のワイヤーとかにも使われてるでありますよ！」

ピアノを弾けるだけあって、吹屋さんはピアノ線のことも知っていたようだ。

「電気は通す？」

「うーん……確か通すには通すはずであります！」

「そうか……ありがとう」

何かが繋がったような気がする。

金属線と言えば、やはりアレが気になるよな……。

【コトダマ入手：破損したピアノ】

音楽室のピアノの中に取り付けられているピアノ線が、一部切り取られていた。

【コトダマ入手：ピアノ線の特徴】

ピアノ線は極めて高い硬度を持つ金属のワイヤーであり、他の金属より電気伝導率は低いものの電気を通す。

その特性からピアノの弦や工業機械などに用いられる。

「たぶん、時間的に次に捜査する場所が最後になると思う……。どこに行く？」

前木君の問いに、俺は数秒間考えたのちに答える。

「もう一度一階に行こう」

「え……？ でも一階はあちき達が散々調べたでありますよ？ まさかあちき達の調べ方が信用できないっていうでありますか??」

「いや、君たちの話を聞く限りだと、一階で未だ捜査していない場所がある」

「伊丹さんの個室…ですか？」

山村さんが告げた言葉、それが答えだった。

「個室…？ 個室にまで行くのか…？？」

「それもやむを得ないと思う…。今回の事件、被害者こそ伊丹さんで間違いはないけど、死に際の言動を見る限り、彼女自身も何かアクションを起こそうとしていたのは間違いはないと思うんだ。その手掛かりを探るためにも…」

「私もそう思います。伊丹さんには申し訳ないですが、事件の真相に迫るためには…」

俺の意見に山村さんが賛同し、吹屋さんは無言だったが俺の意見に反対するわけではないようだ。

「…分かった。みんなの意見はもつともだと思う。…だけど俺はまだあいつの部屋に入れる覚悟っていうか…心の余裕ができてないから…部屋の外で待ってるよ」

「…うん。辛い思いをさせてごめん」

「仕方ねえよ…。きつと伊丹も真実が暴かれることを願ってるはずだから…」

そして俺達は一階、伊丹さんの部屋の前に集まった。

「…じゃあ俺はここにいます。そんなに時間はかからないだろう？ 待ってる間にこれまでに見つかった手掛かりの整理をしてみるよ」

「分かった。じゃあ、お邪魔します、伊丹さん…」

最初の事件の際に津川さんの個室を捜査した時と同じく、被害者の個室に鍵は掛かっていなかった。

俺はその場で合掌すると、ドアノブに手をかけた。

「……………」

伊丹さんの個室はとても整理整頓されていて無駄なものがなく、彼女の性格を反映していた。

「…あれ？ ベッドの上にあるの……………」

吹屋さんが指差したベッドの上には、大量のモノパンダのヌイグルミが置いてあった。

「モノパンダ…………？ どうして……………」

「まあ、プライベートな場ですし……事件に関係ないのならあまり詮索するのはやめておきましょう。それより、こんなものを見つけたんですが……」

そう言って山村さんは棚の中から中くらいのサイズの木箱を見つけた。

「なんでしょう、これ……。中は工具が入っているようですが……」

「工具セット……？ そんなものが個室に……？」

『とまあ、ここに来て本日四度目となるボクの登場だね！ あれ三度目だっけ？ まあどっちでもいいや！』

「モノクマ……。何の用でありんすか！」

吹屋さんが敵意をむき出しにして叫ぶ。

『いや、ようやくその工具セットが日の目を見る時が来て嬉しいな。』
「……ってあれ……？ 伊丹さんは女子だろ？ どうしてこの部屋に工具セットがあるんだよ？」
「まさかゆきみんは男の子だった……？」
吹屋さんが目玉が飛び出そうなくらいの驚きの表情を浮かべる。
『そんなことボクに聞かないでよ！ ボクだってみんなの性別を完璧に把握してるわけじゃないんだからさ！ シャワーやトイレを覗かない程度の紳士さは保ってるからね！』
まさか、伊丹さんが男子だったなんてことがあり得るのか……？
「とにかく今は手掛かりを得ることを最優先にしよう。工具セットの詳細を見せてもらっていいかな？」
木箱を開けると、使い込まれた痕のある金属やすりや、新品のよう

原作……？ 何を言っているのかいまいちわからないが。

自分の部屋に工具セットがあるなんて初めて知ったぞ。

棚の中まで真剣に調べなかったからな……。

「……ってあれ……？ 伊丹さんは女子だろ？ どうしてこの部屋に工具セットがあるんだよ？」

「まさかゆきみんは男の子だった……？」

吹屋さんが目玉が飛び出そうなくらいの驚きの表情を浮かべる。

『そんなことボクに聞かないでよ！ ボクだってみんなの性別を完璧に把握してるわけじゃないんだからさ！ シャワーやトイレを覗かない程度の紳士さは保ってるからね！』

まさか、伊丹さんが男子だったなんてことがあり得るのか……？

「とにかく今は手掛かりを得ることを最優先にしよう。工具セットの詳細を見せてもらっていいかな？」

木箱を開けると、使い込まれた痕のある金属やすりや、新品のよう

に綺麗な糸ノコギリ、小型ハンマーなどが入っていた。

「モノによつては凶器になりそうなものもありますね…。流石に今回の事件とは関係ないと思いますが……」

…そうか？

本当に、全部事件とは関係がないのだろうか。

【コトダマ入手：工具セットと裁縫セット】

男子の部屋の棚の中には工具セット、女子の部屋の棚には裁縫セットが入っていた。

工具セットには金属やすりやハンマー、裁縫セットには糸や針などが内蔵されていた。

「あれっ……？ ユキマル！ こつちに裁縫セットもあるでありんすよ？」

吹屋さんが取り出した木箱の中には、糸や針山、布切りばさみなどが入っていた。

「伊丹さんの部屋には工具セットと裁縫セットが両方あった……？」

これは一体、何を意味しているんだろう。

【コトダマ入手：伊丹の個室】

伊丹の個室は整理整頓がされた綺麗な部屋だった。

モノパンダのヌイグルミやカッター、工具セット、裁縫道具などが置いてあった。

『ピンポンパンポーン』

「……！」

捜査の終了を告げるチャイム。

『昔々、とある幕府を開いたとある男はこう言ったそうです。「人生とは重き荷を背負いて遠き道を行くがごとし」。どういうことかかっていうと、捜査時間終了です！ エレベーター前に集合してください！』
「もう時間か……。まだまだ調べたりないことが沢山あるんだけどな……」

「小清水さんと入間君からもお話を聞いてみましょう。あの人たちも何か手掛かりを得ているはずですよ」

「…よう。手掛かりは見つかったか？」

部屋の前で待っていた前木君に、「うん…。何個かは見つかったよ」と答えを返す。

「そうか…。それは良かった…。じゃあ…。行こうか」

前木君の言葉を受けて、俺達は歩みを進める。

エレベーターの扉が開くと、そこには入間君と小清水さんがいた。「捜査の方はいかがでしたか…？ 私はずっと小清水様の調査につきあわされてどこも調べることができず…。」

入間君が冷や汗交じりにそう述べた。

「こっちはまあまあかな…。小清水の調査って一体何をしたんだ？」

「尋ねても全く教えてくれないのですが…。二階を軽く見て回った後、ずっと管制室で何かパスワードを打ち込もうとしていましたね」

管制室…？

「パスワードを解こうと思ってね。思いつく16桁の数字を打ち込んでいたけど解けなかった。それだけのことよ」

小清水さんが口を開く。

「パスワードって…。今は捜査時間だろ？ そんなことをしている場合なのか？」

前木君が少しムツとなつて尋ねるが、フンと小清水さんは鼻を鳴らした。

「今がラストチャンスだったからよ。まあ、事件の謎はあなた達の話や捜査結果で大体分かるわ」

俺達の捜査でって…。

変なところで俺達のことを信頼しているのか、単に向こう見ずなだけなのか…。

「葛西君、管制室のパスワードって一体何なのでしょう？」

「実はこの前——」

山村さんの問いに答えるため、俺はエレベーターの中で説明した。

この前小清水さんと管制室を調べたことと、管制室で行えることについての詳細を。

「…へえ。全ての施設を管制できるとしたら、もしかしたら脱出への

道が開けるかも分かりませんね」

「…でも、パスワード一つで好き勝手出来るような装置をモノクマが放っておくとは思わないでありんすけど…」

吹屋さんの疑問ももつともだが、小清水さんは本気で解くつもりだったようだ。

【コトダマ入手：管制室の機能

二階の美術準備室から繋がっている管制室では、このコロシアイの舞台である特別分校内の様々な設備を操ることができる。

しかし監視カメラの映像切り替え以外はパスワードが必要であり、葛西たちには操ることができない。

「…小清水様を一人にするわけにもいかず、捜査がほとんど進んでいないのですが、本当に大丈夫なのでしようか……」

小清水さんは俺達の捜査力に期待して自分のすべきことをしていたようだが、それに巻き込まれた入間君は不憫だな…。

「大丈夫。必ず俺達が暴いた情報で真実の脚本に導いて見せるよ……」

俺は入間君の肩を叩いて強くそう言った。

そしてエレベーターは落ちてゆく。

奈落の底へ。

五度目となる戦場へ。

「これで終わりにする」

誰に促されるわけでもなく俺は呟いた。

「これで最後だ」

もう、事件なんて起こさせない。

これが最後の裁判。

誰よりも強く、優しく、儂かった伊丹さん。

彼女は死に際に何を思い、何を残したのか？

彼女を愛し、愛された前木君は今、前を見ている。

この中にいるのか。

伊丹さんを殺した犯人が。

俺達に絶望的な勝負を仕掛けたクロが。



管制室。

誰もいなくなった空間に、モノクマがひよつこりと現れた。

『いやー、葛西君たちが入ってくる前に回収できてよかった!』

そう言っつてモノクマは手にした一個のカセットテープを椅子の上
に置いた。

『これは最後のネタバラシまで取っておかないとね!』

そしてカセットテープを抱えてニツコリと笑う。

『というわけで、お楽しみモノクマ劇場の時間です!』



《モノクマ劇場》

なに？

もうネタなんてないよ。

いいじゃない、たまにはこんな回があっても。

ボクはよそ様の作品みたいに面白くて意味深なことなんて言えな
いんだからさ。

はあく、他の人が書く創作は面白いのになあ。
ボクよりもっとモノクマしてるのになあ。
なんでボクは上手くないかないんだろかなあ。
うらやましいなあ。

Chapter 5 非日常編② 学級裁判前編



お客様、もうすぐですよ。
もうすぐすべてが終わります。
ですが、最後まで目を逸らしてはいけません。
すべては“現実”。
一つの偽りもない人間の真実そのもの。
決して、画面の向こうの出来事だと思っ
てはいけませんよ。

この物語は、“脚本”と名付けられただけの、“脚本”ではない何か
なのですから。



「……………」

エレベーターの中は無言だった。
これから始まる裁判の緊張感に身を委ねるわけでもなく、俺達は既
に裁判で話し合うことで頭がいっぱいだった。
状況や凶器、アリバイ、証言。
もう裁判は始まっていると言っても過言ではない。

「……………」

みんなが不安な顔で互いの顔を見回す。
前回の裁判で、亞桐さんの悲惨な死とアルターエゴのオシオキと引

き換えに、俺達は固い結束を誓ったはずだった。

こうなるのも、やはり全てモノクマの想定内だったのだろうか。

まるで、全てを見透かしているかのような態度は一体……。

『ちよつと待って！』

裁判場の扉の目の前で、突然天井から降ってきたモノクマが俺達の目の前に立ちはだかる。

『君たち、そんな濡れた体で裁判場に入るつもり？ ダメだよ！ 電子生徒手帳と違って裁判場の機械は防水加工されてないんだから！』
そういえば、大雨の中で捜査をしたから体がびっしょり濡れていたんだった。

「じゃあ、乾くまでここで待ってっていうのか？」

前木君が口をとがらせて言うと、モノクマは『そんなわけないでしょ！』と返す。

『時は鮭なりって言うでしょ！ この“モノドライヤー”で全員まとめて瞬間乾燥するからね！』

モノクマが両手を掲げると、天井からモノクマより大きなドライヤーが降ってきた。

モノクマがスイッチをオンにすると…。

「わっ!!」

ものすごい勢いの温風が襲い掛かってきた。

「きゃー!!!」

山村さんが慌ててスカートの裾を押さえる。

こんな暴風を生み出すドライヤーがあるのも驚きだが、その反作用を受けるモノクマは吹き飛んだりしないのだろうか。

…と、そんなことを考えていたら風が止んだ。

『ちゃんと乾いた？ じゃ、改めて裁判場へどうぞ！』

「すごいですね…これ……」

俺は自分の体や服を確認してみたが、きちんと全身が乾いているようだった。

モノクマの超技術にはもう驚かなくなったが、相変わらず不思議だ。

「…なんだか調子を狂わされた感はありますが、裁判場に参りましたよ
うか」

入間君の言葉に俺は頷き、扉に手をかける。
扉が開かれる。

誰に促されるでもなく俺達はそれぞれの裁判台に立つ。

ここまで生き残った六人が、裁判台に立ち終える。

この中の一人が、この裁判で消えるのだろうか？

本当に、伊丹さんを死に追いやった犯人がいるのだろうか？

真実は……いつも残酷だ。

「伊丹……俺は勝つからな。勝って絶対生き残るからな……」

前木君が胸に手を当てて呟く。

「お前の想いは絶対に無駄にしない……！　こんなロシアイはもう
終わらせる……」

彼の言葉に俺は小さく頷いた。

「そうだ。俺達はもう立ち止まってはられない。ほんの少しずつだ
けど、黒幕への真実にも近付いているはずだ……」

「これが最後の裁判だ。みんな、気を引き締めていこう……」

【学級裁判・開廷！】

『学級裁判では、被害者を殺害した犯人をみんなで話し合い、投票で決
めてもらいます！　正しいクロを指摘できればクロだけが、指摘でき
なければクロ以外の全員がオシオキされ、クロは卒業と以下略！』
「以下略と言いつつほとんど説明しちゃったでありんすね!!!」

吹屋さんのツツコミから学級裁判が始まった。

「裁判とは言いますが……今回の事件は本当に事件なのでしょう
か？」

入間君がそう切り出す。

「確かに……。状況だけ見ればむしろ事故のようにも思えますね
……」

山村さんも同意する。

「だけど死体発見アナウンスが鳴って捜査と裁判が行われている以上、誰かが伊丹を殺したのは間違いないはずだ……。そうだろ、モノクマ」

前木君がモノクマに呼びかけると、モノクマは『ふえ？』と素っ頓狂な声をあげた。

『そう！ クロはオマエラの中にいるよ！ ……って言いたいところだけど、例え事故死だったとしても、生徒が死んだ以上はその謎を明かすために学級裁判は開くことにしてるよ』

「……ではその場合、クロは誰ということになるのでしょうか……？」
『事故死だったら誰も犯人じゃないから、伊丹さん自身に投票してくれば正解ってことにするよ！ 本当に事故死なら、ね！』

事故死……。

本当にそうなのか？

「まずは伊丹さんの死の前後で何が起きたかをハッキリさせないと事故か事件かも分からないですよね……」

山村さんにしては珍しくまともなことを言っている。

「オイコラ!! オレにしては珍しくまともなこと言ってるって顔してやがんだろ!!!」

豹変した彼女は置いといて、まずは伊丹さんの死の状況から整理していこう。

そこから何かが見えてくるはずだ。

【ノンストップ議論開始】

前木常夏：「俺が屋上に行ったとき……」

前木常夏：「伊丹が金属の線を持って立ってたんだ」

山村巴：「その後、前木君と伊丹さんがもみ合いになって……」

入間ジョーンズ：「その時に落雷があった……ですよね？」

山村巴：「……で、気付いたら前木君も伊丹さんも、私達も吹き飛ばされていたんですよね」

吹屋喜咲：「じゃあ、これは落雷による事故で間違いないでありますね！」

吹屋喜咲：「現場には特に怪しいものもなかったんでありんしょ？」

小清水彌生：「本当にそうかしら？」

「吹屋さん、それは違うと思う」

【使用コトダマ：山村の証言】

屋上に駆け付けた時、中央塔のすぐそばにブルーシートで覆われた大きな物体があったという。

事態が急を要していたため、ブルーシートの中身を確認する暇はなかった。

小清水さんの言葉に呼応するかのようになり、俺は再び言葉の弾丸を解き放つ。

その弾丸は、吹屋さんの口から放たれた議論を真っすぐに打ち砕いた。

「少なくとも事件が起きる直前、現場には見慣れないものが置いてあったらしいんだ……。そうだよ、山村さん？」

俺が問うと、「はい……」と山村さんが頷く。

「夜だし雨が降っていたので見えづらかったのですが、落雷の前、確かに中央塔の根元のあたりにブルーシートに覆われた何かが置いてあったんです。そんなものはバーベキューの時にはありませんでしたよね？」

「確かに……そんなものがあればすぐに気づくはずですよ」

と、入間君が続く。

「落雷の後、肝心のブルーシートは吹き飛んじやったみたいで確認できなかつたけど……。山村さんが確かに見たっていうなら間違いないね。今回の件はたぶん事故じゃなくて事件だ。誰かが現場に何かを仕込んだとしか考えられないよ」

「彼女の証言が嘘じゃなければ、ね」

小清水さんが釘を刺すと、裁判場の空気が少し悪くなったように感じられる。

「けど、この不穏さにもはや慣れてる。

この中に犯人がいることは、これまでの裁判の経験からもう分かり切っているんだ。

「それは……。証明する方法がない以上、信じてもらうしかありませんが……」

「信じるよ」

山村さんが不安げに言った言葉に、俺は自らの言葉を重ねる。

そう、この中に犯人がいることは分かりきっている。

だからこそ、疑うことよりも信じるのが大事になるんじゃないか。

それに、この信頼は無根拠のものじゃない。

「おそらく山村さんが目にしたブルーシートは何か事件の重要なヒントになっているはずなんだ」

ブルーシートと他のものを結びつける予想も立ててあるけど……。

まだ考えが固まりきっていないし、言うのは時期尚早だろう。

「でも、もし仮にそんなものが置いてあったとして、一体何のためにブルーシートなんか置いてあったんでありんしょ……？ 置いたところで何の意味があったのか……」

「何かを隠しておきたかったんじゃないの？」

吹屋さんの言葉に小清水さんの鋭い答えがあてがわれる。

「ブルーシートなんだから、ただ置いておくだけでは何の意味もないはずよ。本来の用途として使うのなら、ブルーシートの下には何かがあったはず」

「そんなバカな……！ 俺達が屋上を捜査した時には中央塔の根元には何も置かれてなかっただろ？」

そう、そこが今回の議論の重要なポイントでもあるんだ。

“そこに置いてあったはずの何かが消えた”……。

この謎をどう解釈するかで、真相に大きく近づける気がする。

「確かにブルーシートがあった場所には何も置かれてはいなかったけど、屋上を捜査していて不審な点はいくつかあったよね。そこを話し合えば、もしかしたらブルーシートに関する謎も解けるかもしれない

い」

着想を得るにはまず情報を得なくてはならない。

そのつもりでみんなに言ったつもりだったんだけど……。

「じゃあ俺の話聞いてくれ！」

「ユキマルは覚えてるでありんしょ？」

「私の考えとしては……」

「ちよ、ちよっと！一度に言われても聞き取れないよ！」

俺の叫びもむなしく、それぞれの話を進める一同。

だけど混乱した議論ももう慣れっこだ。

向こうがこちらの言うことを聞いてくれないなら、こちらが向こうに合わせるほかはない。

耳をすませろ。

そして真実を撃ち抜くんだ。

【パニック議論開始】

議論？前木常夏：「中央塔の根元には何もなかったけど……」

議論？吹屋喜咲：「さっきあちきが屋上で見つけたのは……」

議論？入間ジョーンズ：「屋上のフェンスが重要だと思います」

議論？前木常夏：「金属のワイヤーが巻き付いてたよな？」

議論？吹屋喜咲：「回路の部品とか導線でありんした！」

議論？入間ジョーンズ：「あのフェンスは……」

議論？前木常夏：「あのワイヤーって何のためにあったのかな……」

議論？吹屋喜咲：「もしそれがブルーシートと関係してるなら……」

議論？入間ジョーンズ：「非常に強度が弱かったのです！」

議論？山村巴：「さっぱり分かりませんね……」

議論？吹屋喜咲：「ブルーシートの中身は電子回路だったのでは!?!」

議論？入間ジョーンズ：「それを犯人が知っていたなら……」

議論？山村巴：「あれで誰かを縛っていたとか……?」

議論？小清水彌生：「あなたにしては論理的なことを言うのね」

議論？入間ジョーンズ：「落雷に紛れて伊丹様を……」

議論？前木常夏：「俺らは縛られた奴なんて見てないだろ？」

議論？吹屋喜咲：「いつもバカで悪かったでありんすね!!」

議論？入間ジョーンズ：「思いきり突き落とすこともできたはずです！」

「聞こえた！ 吹屋さんの言うとおりだ！」

【使用コトダマ：回路のかけら

屋上の床に落ちていた。何かの電子機器を構成する基板や、ゴム製の管に覆われた導線が落ちていた。

粉々に粉碎されていて、焼け焦げたような跡もある。

おそらく、前木君が言ったワイヤーの件もここに関係している。

だけど、今拾うべき情報は……。

「そうだ。屋上には粉々に砕け散った電子回路の欠片や導線が落ちていたんだ。これもバーベキューの時にはなかったものだし、事件に関わっているのはほとんど間違いないと思う」

「いや、確かにバーベキューの時にはなかったけどさ……。だからってブルーシートの件と関係してるってのは飛躍しすぎなんじゃないか……？ ブルーシートの中に電子回路があったなら、どうして事件後にはその場から消えて欠片が散らばってたんだ……？」

「……あー！」

山村さんが声をあげる。

「あ、いや、でも……」

「どうしたんだ山村。何か気付いたのか？」

「一つ思い浮かんだんですけど……。でもいくらなんでもそんなことは……」

恐らく、山村さんは俺と同じことを考えている。

彼女の迷いを払いのけるべく、道を指し示そう。

これが真実への第一歩だ。

閃いた言葉を、一文字ずつ重ね合わせていく。

その文字列は、やがて意味を成す。

『爆弾』

「ブルーシートの中にあつたもの……。それは“爆弾”だよ」

みんなの表情がそれぞれ変わる。

「そう考えるとブルーシートに関するいろんな謎が一挙に解けるんだ。ブルーシート自体が無くなっていたのも、砕けた部品があたりに散らばっていたのも、爆弾の爆発が原因なら納得できるよね」

「言われてみればそうですね……。どうして今まで気が付かなかったのか……」

入間君が目から鱗といった様子で同意する。

「それに、伊丹さんやその場に居合わせたみんなが吹き飛ばされた原因が落雷の衝撃波と言うのはあり得ないんだ。だってその直後、捜査中にも何回か落雷を経験しているにもかかわらず、その時は誰も吹き飛ばされていないんだから」

「つまり、伊丹ゆきみを死に至らしめた原因は落雷の衝撃波などではなく……」

俺が言おうとした結論を、小清水さんが代わりにすらすらとまとめてゆく。

「ブルーシートの中に隠された爆弾の爆発によるものということね」

「そう。俺が言いたかったのはそういうことなんだよ。ありがとう、小清水さん」

「だから甘いのよ」

「っ!？」

味方だと思っていた小清水さんが突如突き刺すような視線と共に敵意を向けてきたことに、俺は少し動揺した。

【小清水彌生の反論】

「爆弾という意見自体は悪くない発想ね。でも残念ながら、この場所で爆弾を作る際には大きな障害があるでしょう？ そんなことも忘れてしまうようではクロに勝つなど到底不可能よ」

人差し指を立てて鬼のような形相で言葉を言い放つ小清水さん。だけど、ここで退くわけにはいかない。

御堂さんの時はもつとすさまじい形相だった。

今更立ち止まりなんかしない！

小清水彌生：「あなたの推理は確かに正しい」

小清水彌生：「本当に爆弾を使えるのなら……ね」

小清水彌生：「だけど、その爆弾は一体どこから入手するの？」

小清水彌生：「私たちの足の届く範囲には、爆弾を手軽に入手できる場所などないはずよ」

「その言葉、斬らせてもらうよ！」

【使用コトノハ：簡易爆弾の製作痕】

過去に何個もの簡易爆弾を制作した跡があり、それに応じた分の部品が減っている。しかし、何故か回路に電流を流すか否かを切り替えるスイッチだけが大量に余っていた。

モノクマによれば、技術室から紛失した部品は全て午後六時以降に無くなっている。

「小清水さん、君こそ大事なことを忘れていないか？ 爆弾を制作する環境は、俺達の身近にあったじゃないか。二階の技術室だよ。あそこには簡易爆弾の制作キットが置いてあって、素人でも爆弾が作れるようになっていたんだ。それを使って犯人は」

「だから、それが甘いのよ！」

【発展！】

小清水彌生：「私が知らないでも思った？」

小清水彌生：「あなたや入間ジョーンズたちは一計を案じて……」

小清水彌生：「モノボンドとかいう物質で技術室の扉を封じていたはずよ」

小清水彌生：「それはモノクマの裁量で新しい校則が追加されたことから明白」

小清水彌生：「技術室の扉が封印されていた以上…」

小清水彌生：「その中にある爆弾制作キットを使用するなんて無理難題もいいところよー！」

「何度でも斬り捨てるさ！　それが真実への障害となるのなら！」

【使用コトノハ：犯行防止工作

化学室、技術室、弓道場の扉にはモノボンドによる固定処理が施されておられ、

そのままでは中に入ることができない状態になっていた。しかし、捜査時にはモノボンドは無くなっており、自由に出入りできる状態となっていた。

俺は心を鬼にして小清水さんの語気に待つ正面からぶつかっていった。

「そうか。君は捜査時間中もずっと管制室にいたから知らなかったんだね。…結論から言うと、技術室の扉に付着したモノボンドは無くなっていったんだ」

「なっ……。なんですって……!?!」

その言葉を聞いて一番驚いたのは人間くんだった。

「本当ですよね。せつかく私たちが一生懸命時間をかけて塞いだのに、あっさり破られていたなんて……」

山村さんも悲し気な顔でそう呟いた。

考えてもみれば不思議な話だ。

俺と山村さんと人間君は確かにこの手で扉を塞いだのを確認している。

だけど捜査時間にはモノボンドは全く残っておらず、容易に扉が開くさまもこの目で確認することとなった。

いったい誰がどうやって、技術室の封印を解いたというんだ。

「…なるほど。手法はともかく、技術室の扉が開いていたのは事実のようね。失礼したわ」

小清水さんが素直に謝罪するなんて…。

あまり信用しすぎるのも危険だけど、なりふり構わず俺達と協力し

ようという意思の表れだろうか。

「で、一つ問題が片付いたところでまだまだ疑問は山積みだけど、何かから片付けましようか？」

「まずは爆弾の作り方についてなんじゃないか？ よしんば技術室に入れたとして、それだけで爆弾を作りました」って片付けることはできない気がするぞ」

前木君の言うとおり、爆弾の話はまだ終わりじゃない。

きつとまだ爆弾について整合性が取れていないことがあるはずだ。

「では、爆弾について思うことを述べさせていただいてもよろしいでしょうか……？」

入間君に何か意見があるようだ。

まずは彼の言葉に耳を傾け、何が異議があれば答えるでしょう。

【ノンストップ議論開始】

入間ジョーンズ：「爆弾が爆発したのは……」

入間ジョーンズ：「落雷と同時でしたよね？」

前木常夏：「そのタイミングで起動させることで」

前木常夏：「落雷で吹き飛ばされたと誤認させるためだろうな」

入間ジョーンズ：「ですが、落雷と同時に爆弾を爆発させるには……」

入間ジョーンズ：「犯人は落雷を観測できる位置

にいないければなりません」

山村巴：「ということは、犯行現場に居合わせた人が犯人候補ですね！」

山村巴：「って、私もじゃないですか……!!!」

吹屋喜咲：「あちきの持ちネタを奪うなでありんす！」

入間ジョーンズ：「つまり犯人は……」

入間ジョーンズ：「落雷と同時に爆弾のスイッチを押せる人なので……」

「入間君。残念だけどそれは違うよ」

【使用コトダマ：簡易爆弾の製作痕】

過去に何個もの簡易爆弾を制作した跡があり、それに応じた分の部品が減っている。しかし、何故か回路に電流を流すか否かを切り替えるスイッチだけが大量に余っていた。

モノクマによれば、技術室から紛失した部品は全て午後六時以降に無くなっている。

「……？ それはどういうことですか？」

怪訝そうな顔をする入間君に、俺は答える。

にわかには信じがたい、だけど確かにこの目で確かめた事実を。

「俺が技術室で確認した時：確かに簡易爆弾の部品が減っていたんだ。それも一個じゃなく、何個もね。だけど、スイッチだけが大量に余っていた。：余っていたどころか、一個も使われていないようにすら思えた。犯人が作った爆弾には、スイッチが無かったかもしれないんだ」

「はあ…!? スイッチが無かったらどうして爆弾が起動したんだよ！」

「それは……分からないよ」

スイッチもなしに爆弾を起動させる方法があるとは思えない。

「ちよっと待ってください」

入間君が口を挟む。

「おそらく犯人は大量の爆弾を一か所に集めたのでしよう。スイッチ以外の部品は炸薬量の数だけ必要かもしれませんが、スイッチは全体で一個しか使わないはずですよ。ゆえにスイッチが他の部品に比べて余っているのは当然なのでは？」

「そう言われればそうなんだけど……。どうもスイッチのゾーンには手を付けた跡すら見られなかったというか……」

ダメだ、上手く言葉にできない。

俺の目には、スイッチは一個たりとも使われていないように見えたんだ。

それを上手く伝えられる手段があれば……。

「さっきの議論で気になったのだけど」

すると、混沌とする議論にさらに刺客が現れる。

小清水さんだ。

「犯人は落雷と同時に爆弾のスイッチを押したと言ったわね？ 厳密に同時にというのは不可能よ。落雷が発生してから地表に到達するまでの時間は最速で0.001秒。それに対して、人間の平均反応速度は0.2秒。しかも、落雷の際の閃光と爆音にひるむことなく瞬時にスイッチを押す必要があるわ。どう頑張っても実際の落雷と爆発には最小で1秒程度のラグが生じるはずよ」

1秒のラグ……。

俺の記憶では、轟音が頭に響くのと体が浮かび上がったのは同時だったはずだ。

「実際に現場にいたメンツがそういったラグを感じていないのであれば……スイッチを押すというのは現実的ではなくなるわね」

俺は周りを見渡す。

前木君も山村さんも首をかしげている。

あまりに一瞬のことだったし、ハッキリと認識できているかも怪しいことだ、無理はない。

「…だけど、一連の議論のおかげで確信が持てた」

俺は裁判台に両手をつけて全員を見渡す。

「やっぱり爆弾にスイッチなんてなかったんだ。なぜなら、そんなことをしなくても爆弾を起動する方法があったからだ」

「……お聞かせ願えますか」

その言葉と共に俺は人間君の方へ顔を向ける。

「爆弾を起動させたのは、天然のスイッチ。……落雷だよ」

「……ふうん」

小清水さんが興味深そうに声を発する。

「落雷をスイッチに……？ そんなことできるのか？」

「理論上はできるはず。いや、確かに犯人はそれをやってのけたんだ。現場に残っているあの証拠がそれを物語っている……」

もし、ブルーシートのあった中央塔の根本付近に爆弾があったなら。

その爆弾へ雷の電流を伝える物質が必要となる。

心当たりがあるのは……。

【提示コトダマ：丈夫な金属線

中央塔の真ん中の柱に、丈夫な金属線が巻き付けられていた。先端は中央塔から2メートルほどの距離まで伸びていた。

また、伊丹が持っていた方とは異なる方にもう一本先端が伸びており、その先端は熱でゆがんでいた。

「中央塔に巻き付けられていた金属の線。その線の片方は伊丹さんが持っていたけど、もう片方の端は中央塔の根本付近に降りていて熱で歪んでいたんだ。この線は爆弾に接続されていて、爆発の衝撃と熱で先端が歪んだんじゃないかな？」

「確かに金属の線なら電気は通すだろうな……。：でも、その線と雷にどういつながりがあるんだ？」

「どうやら前木君は、中央塔が避雷針を兼ねていることを知らないようだ。」

「知らないんですか？ あの塔に落ちた雷の電流は中央塔を通って床下の蓄電器に伝わるそうなんです！ その際の通り道があの場所なんですよ！」

自分の推理を興奮気味に話す山村さん。

あの場所というのは、モノクマが説明していた部分のことか。

【提示コトダマ：中央塔の感電箇所

タワー中央塔には電気の通り道がむき出しになっている箇所があり、そこに触れていると感電の恐れがある。

その箇所は地上から2 m以上の高さにあり、背の高い人物が手を伸ばしてようやく届くぐらい。

「中央塔の少し高いところには金属部が露出している箇所があつて、そこを雷の電流が通るらしいんだ。そして、金属線はまさにそこに巻き付けてあった。金属線の先端が爆弾に接続されていたのなら、落雷そのものがスイッチとなって爆弾の電気回路に電流を流し、爆発を発生させたんだ」

「そうは問屋が卸さんでありんす!!」

【吹屋喜咲の反論】

「落雷をスイッチに!? そんなことできるわけがないでありんす!」

俺の推理に吹屋さんが突っかかってきた。

だけどそれも当然だ。

こんな突拍子もないトリック、普通は考えつかない。

だからこそ、このやり取りを通じて全員にこのトリックの真髓を分かってもらわなきゃいけない。

吹屋喜咲：「落雷で電気が流れるのは確かに納得でありんすけど…」

吹屋喜咲：「犯人がわざわざそんなことをした理由はなんでありんすか!?!」

吹屋喜咲：「スイッチで普通に爆発させれば済んだ話でありんすよ!?!」

吹屋喜咲：「わざと遠回りな方法をとった理由が全く分からないでありんす!」

葛西幸彦：「目的としては、爆発を落雷の衝撃波と誤認させること…」

葛西幸彦：「そのために落雷と実際の爆発のタイムラグを無くさせること…」

葛西幸彦：「このために犯人は落雷で爆発するような回路を組んだんじゃないかな?」

【発展!】

吹屋喜咲：「全く分かってないでありんすね!!」

吹屋喜咲：「ユキマルは落雷の情報をちゃんと読んだんでありんすか!?!」

吹屋喜咲：「あれによると、落雷の電圧と電流はすさまじくて……」

吹屋喜咲：「電子機器も壊れてしまっていて書いてるでありんすよ!!」

吹屋喜咲：「だから爆弾に落雷の電流が流れちゃったら……」

吹屋喜咲：「ショートは確定でありんすよ!!」

「ありがとう、吹屋さん。遠慮なく斬らせてもらおうよ」

【使用コトノハ：失われた部品①】

技術室の部品置き場から、抵抗が大量に持ち去られていた。いずれも高い抵抗値を持つもの。

吹屋さんにしては目聡い発見をしてくれた。

おかげでこちらからいろいろ説明する手間が省けた。

「…確かに落雷の説明にもある通り、そのままの電流が流れたら爆弾の回路であっても壊れてしまうと思う。それは、実際に使われたであろう導線が細くてすぐに焼き切れてしまいそうな見た目をしていることから明らかだね」

【提示コトダマ：失われた部品②】

技術室の部品置き場から、導線が大量に持ち出されていた。

導線は細く、強すぎる電流を与えると焼き切れてしまいそうだ。

「だからこそ、犯人は回路にある工夫をすることでこの電流をスイッチとして利用可能な電流に変えたんだ」

理系な苦手な俺にはなかなか得がたい発想だったけど……なんとかこの結論にたどり着くことができた。

「犯人が使ったのは、技術室にあった部品……」抵抗”だよ”

「ふうん……そういうことね」

と納得する小清水さん。

「抵抗?! 技術室で乱闘があつたのですか!?!」

一方、山村さんと吹屋さんは全く分かっていないようだ。

「山村様、ここでいう抵抗とは電子回路の部品のことなのです。それを繋ぐことによつて、回路に流れる電流を小さくすることができるとですよ」

そんな彼女たちの様子を見かねた人間君が補足する。

「今の人間君の説明で概ね大丈夫なんだけど、それをより詳しく記載したのが、みんなの電子生徒手帳に配られたモノクマからのヒントだ」

ね」

【提示コトダマ：電気回路の基礎知識

オームの法則：中学校で習う電気の基本法則。電圧 V 、電流 I 、抵抗値 R について、 $V \parallel R \parallel I$ が成り立つ。

直列回路：複数の抵抗を直列に繋がればその分全体の抵抗は大きくなる。

「えっと……俺も完全に理解しているわけじゃないんだけど……。このオームの法則って言うのは、“電圧が同じとき、抵抗が大きいほど電流が小さくなる”っていう回路の性質を表す公式なんだ。そして直列回路の情報は、“同じ抵抗を何個も直列に繋がると、その分全体の抵抗は大きくなる”っていうことを示しているんだ」

理系出身じゃないのであまり上手く説明できている気はしないけど……。

多分こういう理解で合っているはず。

「……ことは、抵抗をたくさん繋げばその分雷の電流を弱くすることができるってことだよな」

前木君の言う通り、犯人はそれを狙っていたはずだ。

なぜなら……。

「その証拠に、技術室の部品置き場から抵抗の、それも抵抗値の大きいものが重点的に抜き取られていたんだ。犯人がそれを使って爆弾の回路を製作したとみて間違いないと思う」

「ですが……雷と一口に言ってもその電圧量は一樣ではないでしょう？ 抵抗を取り付けるにしても、実際の雷の電圧を正確に把握できていないと、電流が強すぎてショートしてしまったり逆に弱すぎて回路が反応しなかったりするのではないのでしょうか？ トリックとして用いるには少し不安定な気もします……」

「さつきからあちきには何を言ってるのか全く分かんねーでありんす！」

「安心してください吹屋さん！ 私も全く分らないです！」

二人の元気な嘆きはともかく、流星に人間君は頭がいい。

どうも俺の知識では完全な答えを見つけることができなかった。

「不可能ではないと思うけどね」

そんな俺をあざ笑うかのように、小清水さんが付け加える。

「空気の電気抵抗値を加味した落雷の電圧はおよそ1〜10億ボルト。一方、一般的なビニル絶縁導線の許容電流は、断面積を1・25mm²と仮定するとおおよそ20アンペア程度ね。爆弾が電気信号を認識する下限電流は微妙なところだけど、100ミリアンペアもあれば十分でしょうね。雷への知識があれば、爆弾の回路が信号を認識するよう抵抗回路を作成するのは不可能ではないはずよ」

小清水さんはすらすらと人間君への反論を述べてゆく。

：なぜか今回の彼女はやけに俺に肩入れしてくれている気がする。何か意図があるのだろうか……？

そして……彼女の反論の矢面に立たされる人間君。

この二人は殺害未遂の件があつてからずつと険悪だけど……今回はいつにも増して凄まじい雰囲気だ。

今回もやけに小清水さん……そして俺の推理に引つかかって来ているような気がするけどまさか彼が……。

「……ありがとうございます、小清水様。理系には明るくない私でも分かるように説明していただき、嬉しく思います。おかげで謎が氷解しました」

そう言つて丁寧な頭を下げる人間君。

……信じたい。

こんな彼が人殺しをするなんて、それも四回のコロシアイを付き添つてきた仲間を殺すなんて……。

そんなことは絶対にあり得ないって、信じなきや。

「すみません、ちよつと根本的な話になるのですが……」

と、山村さんが挙手する。

「皆さん当たり前のように“金属の線”とおっしゃっていますが、その金属の線というのはどこから持ってきたものなのでしょうか？」

「……そういえば不思議な話ですね。あんなワイヤーのようなもの、ここで生活している際には見かけなかったと思いますが……」

ワイヤーの出どころ……。
それに関して俺は心当たりがあるはずだ。
思い出すんだ。

【ノンストップ議論開始】

吹屋喜咲：「あんなワイヤー、見たことないでありんすよ！」

前木常夏：「屋上のフェンスって金属だよな？」

前木常夏：「あのフェンスをほどこいて使ったんじゃないのか？」

入間ジョーンズ：「いえ、あのフェンスでは……」

入間ジョーンズ：「ワイヤーとして使うには脆すぎる気がいたしま
す……」

小清水彌生：「元から校内にあったものじゃなく……」

小清水彌生：「犯人が新たに作り出したものである可能性の方が高
いと思うけど」

山村巴：「うーん……やっぱり校内にはワイヤーになるものはないですよね……」

「いや、山村さん。ワイヤーはこの校内にあるものだったんだよ！」

【使用コトダマ：破損したピアノ】

音楽室のピアノの中に取り付けられているピアノ線が、一部切り取
られていた。

「えっ!? でもワイヤーっぽいものなんてどこにも……」

「いや……少なくとも吹屋さんと前木君は知っているはずだよ。君た
ちは音楽室を調べた時にあるものを見つけたはずだ」

「ああ……っ！ あれか！ すっかり忘れてたぞ！」

前木君がポンと手を叩く。

「音楽室のピアノから、ピアノ線が切断されていたんでありんすよね
！ おかげであちきの楽しみがまた一つ奪われてしまったでありん
す……」

「まあ、ピアノ自体はモノクマが後で直すんだらうけど……。大事な
のは、あの時吹屋さんが言っていたピアノ線の特性だよ」

【Chapter 5 非日常編①】

「……ピアノ線って、どういう材質だったっけ？」

「ピアノ線は…確か炭素が入った鋼だったと思うであります！ すつごく頑丈で、ピアノ以外にも工業用のワイヤーとかにも使われてるでありますよー！」

ピアノを弾けるだけあって、吹屋さんはピアノ線のことも知っていたようだ。

「電気は通す？」

「うくん……確か通すには通すはずであります！」

「そうか……ありがとう」

【提示コトダマ：ピアノ線の特徴】

ピアノ線は極めて高い硬度を持つ金属のワイヤーであり、他の金属より電気伝導率は低いものの電気を通す。

その特性からピアノの弦や工業機械などに用いられる。

「ピアノ線は金属を通す線だから、爆弾の電気伝導に使うにはちょうどいい線だね。犯人はあれを何本か切って、端同士をねじり合わせてつなげることで長い線にしたんだろうね」

「ですが……ピアノ線のような頑丈な線をどうやって切断したのですか？」

と、問いかける入間君。

山村さんあたりなら素手でも千切れそうだけど……。

犯人はあれを使ってピアノ線を加工したんだろう。

【提示コトダマ：大型ニッパー】

技術室に並べてある大型ニッパー。ぱつと見何の変哲もないが、よく見ると一個に僅かな刃こぼれが見られた。

「技術室に置いてあったニッパーを使ったんだと思うよ。あの中の一つが刃こぼれしていて、使ったような形跡があったんだ。切断だけ

じやなくてねじり合わせる用途にも使ったんだらうね」

「犯人は大いに技術室を犯行に使ってるんだな……。扉の固定が解かれたのがつくづく残念だ……」

前木君がそう思うのも無理はない。

「だけど、確実にトリックを暴きつつあるよ。このまま進めばきつと犯人にたどり着けるはずだよ」

「…だと、良いんですけどね……」

「あなた達の脳じゃ全員がトリックの内容についてちゃんと理解できているか分からないし、ここまでの流れをいったん整理しましょうか」

小清水さんがそう提案する。

言い方は悪いが、実際問題とても大切なプロセスだ。

「えーと……。伊丹様の死因は犯人が屋上に仕掛けた爆弾の爆発。その爆弾は中央塔のワイヤーと大量の抵抗を通して落雷の電流を受け取り、爆発する仕組みであった、と。そしてその爆弾の出どころは技術室であり、ワイヤーの出どころは音楽室のピアノ線だということですね」

入間君がすらすらとここまでの流れを語ってくれた。

「ありがとう、入間君」

「……でも、よくできたトリックだな」

前木君がポツリと呟く。

「回路に組んだ部品も、爆弾を隠していたブルーシートも、全部爆発して証拠は吹き飛ばしてしまうんだもんね。落雷のスイッチの件も含めて、これを考えた犯人は相当熟考したうえでトリックを作ったんだな……」

「あの……爆発で吹き飛ばすという点で一つ気になったのですが……」

再び山村さんが手をあげる。

「あの簡易爆弾って……人を殺せるほどの威力はないってあのパンダが言ってましたよね……。果たしてそんな爆弾で四人もの人間を吹き飛ばせるのでしょうか……？」

「山村さんの疑問はもつともだね。だからこそ、犯人は一個じゃなく

たくさんさんの爆弾を用意したんじゃないかな。一個なら威力不足でも、たくさん集めることで人を吹き飛ばすのに十分な威力にしたはずだ」
そう、技術室の爆弾は一個じゃなく複数個減っていた。

爆弾の数を集めたというところに、犯人の意図が見え隠れしている。

「でも……知れば知るほど犯人の意図が分からんでありんす！ どうして犯人はそんな殺し方を選んだんでありんしょ……？」

「そりゃあ、バレにくい犯罪だから……」

「バレにくいって言ったって、他にもバレにくい殺し方はたくさんあるでありんしょ？ 雷がいつ落ちてくるかなんて文字通り天任せだし……このトリック、” たまたま上手くいった” 感がどうしても拭えないっていうか……」

「……!!？」

たまたま上手く……？

吹屋さんの今の言葉、もしかして……。

……いや、流石にあり得ない……はずだ。

「さて、今までの議論を踏まえて一つ聞きたいのだけど」

そんな話の流れを遮るように、小清水さんが問いかける。

「伊丹ゆきみは屋上で何をしようとしていたの？」

「……!!」

それは、今回の事件の根幹をなす重要な問いだった。

しかし他の議題を進めるうちに、その話は後回しにされてしまっていたんだ。

「今明らかにしたトリックで最も不思議な点は、” 殺害対象が屋上にいなければならぬ” という点よ。つまり犯人は、殺害すべき人間が屋上に来ることを確信して爆弾を仕掛けていなければならぬ。そうなる、屋上で何らかのアクションを起こそうとしていたと思われる伊丹ゆきみと犯人の間に何らかのつながりがあったと考えるのは自然ではなくて？」

「そう言われてみれば……そうだね……」

彼女の言うとおりに、伊丹さんは生前に犯人と何か共謀していた可能

性がある。

「伊丹が屋上でしようとしていたこと……」
前木君が、つらそうな顔をしながらも、屋上での出来事を思い返す。

「伊丹さんは……俺達が屋上に来た時……ピアノ線を両手に抱えていた……」

「そして駆け付けた俺達を見た伊丹さんはこう言った……『私の計画を邪魔しないで』……と」

「さらに駆け寄った前木君にこう言い放った。『あなたまで感電してしまう』」

あの時、あのセリフを聞いた時から、この一つの筋は俺の中で出来上がっていたんだ。

ただそれを信じたくなくて……。

でも……今となっては、もう言うしかないんだ。

彼女の行為。

言葉。

そのすべてに納得が、付く脚本の筋は、一つしかない。

「彼女は……伊丹さんは……。己を殺そうと……自殺を試みていたんだ……」

【学級裁判・中断】

Chapter 5 非日常編③ 学級裁判後編

「伊丹が、自殺……!?!」

当然、一番驚いたのは前木君だった。

「驚くのも無理はないと思う……。でも、彼女の死の直前の不可解な行動や発言を説明するには、彼女自身の目的を自殺と考えるほかはないんだ」

自分でもそんなことを言うのは辛かった。

でも、真実は一つしかない。

「……っ!!! ……………理由を、聞かせてくれ……」

前木君は一瞬感情的になりかけて、吐き出しかけた言葉をすぐに胸の中に戻し込んでそう問いかけた。

「まず、亡くなる直前の伊丹さんの行動を思い返してほしいんだ。彼女は金属の線を持って立っていた……」

【提示コトダマ：事件直前の伊丹

屋上に突入した時、伊丹は銀色の線のようなものを両手に持って立っていた。

もみあいになった際に銀色の線は伊丹の手から離れた。

「今までの議論から、中央塔に巻かれていた金属の線……つまりピアノ線は、落雷から直接電流が流れていたということが分かった。その金属線を握っていたことは……」

「感電死を凶っていた、ということですか……?」

山村さんの言葉に俺は頷く。

「そう考えないと、辻褄が合わない。…伊丹さんは、感電による自殺を凶っていたということだ」

「……状況の説明だけじゃ納得できねーよ。動機が分からなきゃ納得なんて……」

前木君が苦しそうに声を押し出す。

感情的になって怒鳴ろうとするのを必死に押さえつけようとしているようだった。

「動機は……分からない。伊丹さんは昨日、俺に言ったんだ。『私は殺人なんかしない』って。……とても、思い詰めているようには見えなかったんだ。そんな彼女が自殺をするなんて、俺にも信じられない」
「感情論なんて話し合うだけ時間の無駄よ。話を聞く限り、伊丹ゆきみは自殺をもくろんでいたってことで間違いないと思うけど?」
「…私も小清水様の意見に同意します。理由はどうあれ、感電しようとしていたとしか思えません……」

裁判を引つ張る二人がそう言うのと、裁判場の空気はほぼ決まったようなものだ。

「…じゃあ、あの爆弾はなんだったんでありんすか……?」

と、吹屋さんが口を開く。

「仮にゆきみんが自殺を図っていたとして、じゃああの爆弾は何のため……? そもそも金属線を握って感電死しようとしていたのなら、爆弾なんて意味ない気が……」

「それは……上手く感電できなかった時のための保険とか?」

「保険……。伊丹はそこまでして自殺したかったのか……?」

前木君はまだその事実を認めたくないようだが、現実には残酷だ。

「では、ピアノ線を加工して中央塔に巻いたのも、爆弾を用意してそこに置いたのも、全部伊丹ゆきみということになるわね。でもそうなるのと、最初の方に棚上げしていた問題を解決しなければいけないくなるわね」

「棚上げしていた問題……?」

「『技術室の入室方法』よ。モノボンドと校則で守られていた技術室の扉をどうやって開いたのか……」

小清水さんが提示した問題は確かに重要なものだ。

先ほどは重要視せずに流していた議題だが、技術室に貼られていたモノボンドの防御をどうやって解除したのかを解明しないことには先に進むことは叶わない。

「…そもそも、そんなタイミングで都合よくモノクマがボンドなんか出してきたのが怪しいのでありんす! きつとそのボンドは欠陥品で、ゆきみんだけがそれに気づいてたのでありんすよ!」

と、吹屋さんが声を張り上げる。

『そんなワケないでしょーが！ モノボンドはボクが説明したとおりのスペックだし欠陥もないし効き目にムラがあるわけでもありません！ ていうかそういうところに穴があるとミステリーとしているろからね！』

「公正公平な学級裁判……………」

小清水さんがモノクマの言葉を反芻して呟く。

「とにかく、分からないことは話し合うほかありません。私たちが聞いたモノボンドの特性も含め、一度再確認してみましよう」

入間君の言葉で再び議論は動き出す。

今なら、真実が手に取るようにわかる……………気がする。
一体これは、どういう感覚なのだろう。

【ノンストップ議論開始】

山村巴：「モノボンドは非常に強力なボンドで…」

山村巴：「一度接着すると私の力でも剥がすことができませんでした！」

入間ジョーンズ：「その代わり、熱に非常に弱く…」

入間ジョーンズ：「お風呂のお湯程度の熱でも溶けてしまふとか…」

前木常夏：「でも、それを見越して入間が…」

前木常夏：「モノクマに校則を追加させたんだよな」

小清水彌生：「校則によると、『熱い物体を部屋から廊下に持ち出すこと』が禁じられているようね」

小清水彌生：「ただ、『校長による許可が出た場合はその限りではない』とも…」

吹屋喜咲：「分かった〜！」

吹屋喜咲：「犯人はモノクマを上手く言いくるめて…」

吹屋喜咲：「熱いものを廊下に持ち出す許可を得た

のでありんすね！」

前木常夏：「そんなにモノクマの判定はガバかったのか……………」

「吹屋さん、それは違うよ！」

【使用コトダマ：追加校則】

『熱いものを部屋から廊下へ持ち出すことを禁じます。どうしても必要な時は、校長に申し出ること。校長が判断します。』

モノクマ曰く、許可の申請に来た生徒は一人もいなかったという。

真実が見える。

弾丸はまっすぐに打ち出され、そして吹屋さんの議論の弱点を的確に撃ち抜いた。

「技術室に入った人間は、モノクマに許可を得たわけじゃないんだ。…なぜなら、他ならぬモノクマ自身がそう言っていたから」

俺はそう言ってモノクマの顔を見つめる。

『その通り！ 急に追加した校則なので柔軟に対応できるように相談可にしたんだけど、実際にはボクに許可を得ようとした人は伊丹さん含め一人もいませんでした！ そして、この校則は誰にも破られていません！』

「これで分かったでしょ？ 技術室に入った伊丹さんも、他の人も、モノクマに許可を得ることなく…でも校則を破ることなく技術室に入ったんだ」

「いやいやいや！ ますます分かんないでありますよ！ だったらどうやって技術室に入ったんでありんすか!!」

その謎も、今では少しずつ突破口が見え始めている。

やはり鍵になるのは「校則の文章をどう解釈するか」だろう。

そこを攻めていけば、一つの結論にたどり着くはずだ。

「考えられる可能性をあげていこう。その中にきつと答えがあるよ」
「考えられる可能性って言われても……………」

【ノンストップ議論開始】

入間ジョーンズ：「考えられる可能性……………」

入間ジョーンズ：「やはり無理矢理ボンドを剥がしたと考えるしか

…」

山村巴：「そもそも扉を使わずに部屋に入ったのでは!？」

前木常夏：「どれもピンとこないな……」

小清水彌生：「熱で溶かしたと考えるしかないでしょう」

吹屋喜咲：「だーかーらー! それに校則で封じられてて…」

吹屋喜咲：「許可を取ろうとした人もいなかったのではありませんよ!」

山村巴：「そうだ! 指でこすって摩擦熱を発生させたとか?」

入間ジョーンズ：「あのボンドのべたつき加減では指でこするのは難しいでしょう…」

山村巴：「……………」

小清水彌生：「この議論で何も見えてこないのなら、今一度校則をじっくり読み返す必要があるわね」

入間ジョーンズ：「……………?？」

「小清水さん、君の言うとおりだ」

【提示コトダマ：粉入り袋とビニール袋

手作り感のある布袋。外側にはぬめりのようなものが付着しており、袋の中には土と黒い粉が大量に入っていた。技術室のゴミ箱の中に何個か捨てられていた。

また、チャック付きのビニール袋も一緒に捨てられていた。こちらは倉庫にあったもののようなようだ。

「やっぱり犯人は、摩擦ではなく、熱のある物体”を使うことでモノボンドを溶かし、技術室に入ったんだ。それが技術室に落ちていた正体不明の布袋なんだ」

「でもよ…」

「うん。確かに校則で『熱いものを部屋から廊下に持ち出すこと』は禁じられている。でも、この文章をもう一度見てみてほしいんだ」

電子生徒手帳を開きながら俺は全員に自分の理解を伝えていく。

「この校則は、”温度の高いものを部屋から廊下に持ち出す”という行為のみを縛っている。つまり、廊下に温度の高いものが存在すると自体を縛っているわけじゃないんだ」

「……？ どういうことかさっぱり分かりません！」

「つまり、部屋から廊下に持ち出した時点では熱くないけど、廊下に移された後に熱くなるものを用意すれば、この校則を突破できるってことさ。そうだよ、モノクマ？」

『日本語ってムズカシイネ！ 正解だよ、葛西君！ 基本的に校則は書いてある通りの効力しか持たないから、書いてある通りのタブーを犯さない限りは罰せられることはないんだよ！ まあこれは以前犯人の人に質問されて答えたことだけだね！』

「えっ!? さつき誰も自分に質問はしなかったって言ってた気が……」

『人の、じゃなくてクマの言葉を勝手に拡大解釈しないでほしいな！』

『温度の高いものを廊下に持ち出す許可やそれに関する相談を求めに来た生徒』は一人もいないって言ったけど、『校則に関して質問をした生徒』がいないなんてボクは一言も言っていないからね！ あー日本語ってムズカシイムズカシイ！』

わざとらしくそう言って胡坐をかくモノクマ。

「時間差で熱くなるもの、といえばアレが思い浮かびますが……」

そんなモノクマをよそに一人考え込む入間君。

「そんなものはこの校舎内に存在しなかったと思いますが……」

「まずは結論を出そう。」時間差で熱くなるもの“というのが一体何なのか」

入間君の問いに答えるのは後回しにして、俺は全員の顔を一瞥する。

校則の穴をかくぐってモノボンドを溶かすことができた物体。

自分のタイミングで温度をあげられ、しかも風呂のお湯よりも高い温度にできるもの。

そして、技術室で見つけたあの布袋の正体。

閃いた言葉を再び脳内で形に置き換え、成形していく。

『使い捨てカイロ』

「犯人……もとい伊丹さんが使ったのは使い捨てカイロだよ。アレなら任意のタイミングで温度をあげられて、しかもかなりの熱量が見込める」

俺の言葉に入間君がうなずく。

「技術室の布袋の中に入っていた黒い粉は、カイロの中で酸化反応を起こした酸化鉄だったんだよ。そして、袋の外側に付着していたぬめりは、溶けたモノボンドだったんだよ」

「やはりそうなりますよね。私もそう思ったのですが、確か記憶が正しければこの倉庫には使い捨てカイロに類するものは置いていなかったのですよ」

そうだったのか…？

倉庫は調べる時間もなかったし、普段から出入りする場所でもなかったので見落としていた。

けれど、問題はない。

「カイロはなくても大丈夫……というより、ない方が自然なんだ」

「……どういうことですか？」

「爆弾と同じさ。作ったんだよ、犯人が」

「なるほど……。でもよ、爆弾の方と違ってカイロは材料も作り方も用意されていないんだぞ。そんな状態で作り出すことなんてできるのかよっ。」

「あまり専門的な知識が無くても、カイロを作るのは意外と簡単なんだよ。……そうだよね、小清水さん」

俺がそう言うと、彼女は苛立たし気にため息を吐く。

…利用するのはお互い様だろ？

「一般的な使い捨てカイロに含まれているのは鉄粉と水、吸収剤の園芸用土、触媒の食塩。食塩水を吸収剤が吸って鉄に酸化を促すことで発熱反応が起きるっていう仕組み。…果たしてそれだけの材料がこの場所にあるの？」

あるとも。

ちゃんとそれらの物証は見つけている。

【提示コトダマ：植物園倉庫の紛失品】

植物園の倉庫の中は物が散乱しており、誰かが物を漁った後のように思える。

植物用土の一部とブルーシート、スチール製のバーベキューの網が無くなっていった。

「布は倉庫にたくさんある不織布を。食塩は厨房で、水は自室でいくらでも手に入る。大事なのは鉄粉と園芸土だけ……。植物園倉庫を捜査した時にブルーシートと一緒にそれらが無くなっているのを見つけたんだ」

「なるほど！ 何の意味もない発見かと思っていました、こんなところに繋がってくるわけですね！」

山村さんがガッツポーズを決める。

「ちよつと待ってくれ。お前らが見つけたのは“バーベキューの網”なんだろう？ 網がスチール：つまり鉄だったのは分かるけど、それってただの網であって粉末じゃないよな？」

「きつと網をニッパで細かくちぎって入れたんでありんすよ！」

「いや、粉末じゃないと表面積が足りなくて急激な酸化反応は起きないはずだぞ。葛西、どうなんだ？」

前木君はいいことに気づいてくれた。

「そう。このままじゃ鉄粉としてカイロに使うことはできないんだ。だからこそ、伊丹さんはバーベキューの網に加工をしなければいけなかった。その証拠がこれだ」

【提示コトダマ：伊丹の個室】

伊丹の個室は整理整頓がされた綺麗な部屋だった。

モノパンダのヌイグルミやカッター、工具セット、裁縫道具などが置いてあった。

「俺が最後に捜査した伊丹さんの部屋。そこには、工具セットも置いてあった。そしてその工具セットの中には、金属やすりも入っていたんだ」

「金属やすりなら網を削って粉にできる……ってことか」

前木君がうつむきながら呟く。

「手織りの布袋に材料をすべて入れて、素早く倉庫から持ってきたビニール袋の中に入れて空気を抜き、袋を縛って密閉する。こうすれば簡易の使い捨てカイロが完成するんだ。あとはそのカイロを廊下に持ち出し、袋を破って発熱反応を起こさせれば……」

「それでモノボンドを溶かせるってことでありんすか……。ホエー……。でもよく溶かしてる時に見つからなかったでありんすね……」

「屋上や図書室はよく行ってたが、二階はあまり行く用事もなかったしな……。夜時間じゃなかったから山村の見回りが無かったし……」

日中も誰かが見回りをしていれば防げたのだろうかと思うと悔やまれる。

「だけど、起こってしまったことにイフは禁物だ。」

「でもやっぱり、そんなの認められない」

《前木常夏の反論》

「前木君……」

俺の推理に立ちほだかったのは、誰よりも伊丹さんを愛していた彼だった。

「感情論だつて言われたらあながち否定はできない。けど……それでも納得できないんだ!!」

「いいよ。俺はいくらでも相手になる。例え辛くても真実は一つしかない。ちゃんと話し合つて、そして一緒に真実に辿り着こう」

前木常夏：「伊丹が自殺だつていう推理は一理ある……」

前木常夏：「でも、自殺ならあんな酷い死に方を選ぶはずがないだろ!?!」

前木常夏：「自殺なら……何もあんな死に方しなくたつて……」

「……それは確かにそうかもしれない……。でも、伊丹さんの本心は伊丹さんにしか分からないんだ。そういう方法を選ばなきゃいけない理由があつたのかもしれない」

《発展！》

前木常夏：「理由…？ 理由ってなんだよ」

前木常夏：「逆に俺はこの方法を選んだ理由を聞きたいくらいだよ。だつてよ…」

前木常夏：「雷をアテにしたトリックなんて、運任せすぎるじゃねえか！」

前木常夏：「気が分かってなきや、そんなトリックを準備するなんて不可能なんだよ!!」

「その言葉、斬らせてもらう！」

【提示コトダマ：ア報知ドリ】

吹屋が売店で入手した怪しい気象予報装置。スイッチを押すとアホウドリ型の人形が今日と明日の天気を読み上げる。

モノクマ曰く、的中率は100%。コロシアイ当日の朝から食堂に置かれていた。

「天気を事前に知るなんて普通は不可能だ。でも、今に限っては伊丹さんには…いや、俺たち全員にもそれが可能だった。吹屋さんが売店で入手した、“ア報知ドリ”のおかげでね」

「どっひゃー!? あちきが見つけたスーパーアイテムが役に立ったんでありんすか!?!」

「ある意味では役に立ったのでしようか…悪い意味ですが」

「どういう原理かは分からないけど、ア報知ドリは天気を100%言い当てることができるらしくて…。実際にア報知ドリが予報した雷雨は時間もぴったり当たっていた。これまでさんざんモノクマの超技術を目にしてきたし、伊丹さんがこの鳥の情報を信用したのも無理はない」

「では、伊丹様はこの鳥の予報を聞き、雷雨というところからヒントを得てこのトリックを実行したわけですね…」

前木君は言葉を失っていた。

「しかし……伊丹様の個室から道具が見つかった以上、それが証拠であると言わざるを得ませんね……。今回の事件、クロは被害者である伊丹様自身だったのですね……」

入間君の悲痛な声が響く。

「そんな……バカな……あんなに強い目で“生きる”って言ったのに……。いや……。俺にあいつを攻める資格なんてないよな……。俺も裏切ろうとしてたもんな……」

ぼそぼそと言葉を並べる前木君の表情もまた悲痛だ。

「動機はハッキリしないけど……これから明らかになるかもしれない。とにかく、一度事件の流れを整理しよう。これが――」

「真実の脚本だとも言うの？」

「!!」

議論を締めくくろうとしていた俺に突き立てられたのは、小清水さんの言葉だった。

「この事件は伊丹ゆきみによる自殺……？ そんな結論で終わらせるつもり？」

「……どうしてですか？ 今更何が疑問なのでしょうか？」

山村さんが怪訝そうな顔をする。

「根拠なんてないわよ。私は何も捜査などしていないのだから」

「……え？」

あまりにもあっさりとしたことを言うので、思わず間の抜けた声が出てしまった。

「でも、違和感はあるでしょう？ 自殺の保険のためだけにわざわざ手の込んだ爆弾なんて用意するものかしらね？」

「……………」

「そもそも本当に死ぬだけなら、落雷を利用する必要もない。ただフェンスを越えてタワーから落ちればいいだけよ。なのに伊丹ゆきみはなぜあんな手にかかる真似をしたのかしら？」

「伊丹さんが何を考えてたかなんて今更私たちに分かるわけないじゃないですか…！ これだけ証拠も揃ってたら、もう自殺以外の可能性なんて考えられますか!？」

「ともちんの言う通りでありんすよ…」

「……………」

言われてみると…引つかかることが多い。

でも…これ以上どんな謎が残ってるっていうんだ…？



『屋上で待つてる 死ぬ時は一緒 』

『あなた達、 どうして!？』

『お願いだから来ないで!! 私の計画を邪魔しないで!!』

『私がクロにならなきゃ!!! クロにならなきゃいけないのに!!! あな
たがクロになる前に!!!』

『でも…“脚本”が…』



彼女が死に際に発した数々の言葉……。

あれはいつたい何を意味している?!

ひよっとすると、俺は今までとんでもないヒントを見逃していたのかもしれない。

伊丹さんの真意は……。



「ユ、ユキマル? どうしたんでありんすか? 具合でも悪いでありんすか?」

下を向いて考えこんでいた俺に、吹屋さんがそう声をかける。

俺はこう答えた。

「議論をやり直そう。……この事件の謎は、まだ終わっていない」

「終わっていないって……つまり伊丹は……」

「彼女は自殺を遂げたんじゃない。……殺されたんだ」

「……っ!!!」

裁判場に衝撃が走る。

恐らくだが、確信が持てた。

ここまでの流れはクロが導こうとしていた結末。

伊丹さん自身をクロに仕立て上げ、本人が反論できないのをいいことに裁判の結論を決定づけようとした…。

だけど、小清水さんが投じた一石がによって、違和感が氷解した。

そして残念だけど……クロの目星もついてしまった。

おおよそのクロが分かってもほとんど動揺しなくなるなんて……。

こんな慣れ、感じたくはなかったな。

「葛西、俺も伊丹の死は自殺じゃないって思いたいよ。……でもさ、ここまで証拠がそろったら、もうそう思うしかないじゃんか……。バカな俺でも、感情論なんて無意味だって今までの裁判で散々思い知らされたんだよ……」

「お二人が伊丹様の死を自殺でないと仰るのなら、それなりの根拠というものを求めざるを得ません。当然、そういった類のものは用意していらっしやるのでしょうか?」

「ユキマル……。あちきは、最近のゆきみんはどこか思いつめた雰囲気があるって思ってたであります。あちきがもつと積極的に声をかければよかったって後悔しかないけど……。ゆきみんは自殺したんでありんしょ?」

「私はどちらの言い分も尊重します! 尊重しますが……。今の状況では葛西君と小清水さんの言うことを安易に信用するわけには参りません! ごめんなさい!」

四人は口をそろえて俺達の意見に反対する。

「…全員まとめて分からせるしかないようね」

髪をかき上げてため息を吐く小清水さん。

「そのようだね。…まさか、君と再びこんな風に二人で謎を解き明かすことになるなんてね」

「人間風情がつけ上がらないでほしいわね。せいぜい足は引つ張らないで頂戴」

「よく言うよ。捜査の情報はほとんど何も持ってないくせに……」

俺は呆れながらも手にしたメモ帳を開く。

真つ二つに割れた裁判場。

相対するのは、四人の“超高校級”。

対するこちらは二人。

「だけど、不思議と彼女と背中合わせで戦っている限り、全く負ける気がしない。」

「始めよう。真実の脚本を、今ここに築き上げる!」

【議論スクラム開始】

Q. 伊丹の死因は自殺なのか、他殺なのか?

前木常夏・入間ジョーンズ・山村巴・吹屋喜咲VS葛西幸彦・小清水彌生

山村巴:「もう議論の決着はついていきますよ!」

葛西幸彦：「いや、まだ決着はついていない。真のクロとの戦いは続いているんだ」

前木常夏：「伊丹が自殺した証拠はたくさんあるじゃねえか！」

小清水彌生：「でもそれだけで他殺の可能性が排除されたと考えるのは早計ね」

入間ジョーンズ：「では、伊丹様が他殺である根拠があるということですね？」

葛西幸彦：「うん、根拠ならあるよ。だからみんな、もう少しだけ議論に付き合つてほしい！」

吹屋喜咲：「これ以上議論したつて時間の無駄でありんすよ！」

小清水彌生：「間違えれば私たち全員が死ぬのよ？　時間なんて気にする必要を感じないけど」

前木常夏：「……本当に、伊丹は殺されたのか……？」

葛西幸彦：「真実は、まだ議論を続けないと分からない。でも、俺はその可能性の方が高いと思ってる」

山村巴：「ずばり、伊丹さんが他殺であると言える根拠は一体何なのですか!？」

俺は小清水さんと目を合わせる。

彼女は視線で俺に語り掛ける。

俺は微かに頷き、そして声を張り上げる。

「これが俺達の答えだ！」

【提示コトダマ：謎の紙切れ

夜時間になる際に見つかった、前木の部屋の扉に挟んであった紙切れ。

殴り書きのような文字で『屋上で待ってる　死ぬ時は一緒』と書いてあった。

「…前木君。君が犯行現場に駆け付けるきつかけになった出来事を思

い出してほしい」

「きつかけ……？ この手紙のことか？」

そう言って前木君はパーカーのポケットから一枚の紙を取り出し、広げる。

『屋上で待ってる 死ぬ時は一緒』

そう書かれた手紙だ。

「この手紙が、伊丹さんの行動と矛盾しているんだ」

「矛盾………？」

「自殺をしようとしている人間が、何故わざわざ他人を自分の自殺現場に呼び出すような真似をしたのか。そんな場面に遭遇すれば、君が止めに入ることは容易に予想できるし、実際問題そうなった」

「確かに……」

「しかも、伊丹さん自身にとって俺達三人が屋上に現れたことが予想外だったことが彼女自身の言葉から証明されている」

『あなた達、どうして!?!』

「…あの時、伊丹さんは明らかに驚いた顔で確かにこう言った。自分で呼び出したなら、驚くのは明らかに不自然だ。かといってあの場面で伊丹さんが感情を偽る理由もない」

「…状況のせいで全く気にしている余裕なんてなかったけど……言われてみれば不自然だったな……」

「よく思い出してほしい。あの時の彼女のセリフは、意味深なものばかりだった」

「そういえば、その後にあんなことも言っていましたね……」

『お願いだから来ないで!! 私の計画を邪魔しないで!!』

「計画、というのは一体何のことだったのでしょ……」

山村さんも考えこみながら呟く。

伊丹さんが何を思い、何を成そうとしていたのか。

まだ今の段階では全てを暴くことはできない……けど。
「彼女の目的を示すような言葉……。あの時、それらしいものを一度だけ聞いたんだ」

『私がクロにならなきや!!! クロにならなきやいけないのに!!! あなたがクロになる前に!!!』

「そうだ……あの言葉は一体どういう意味だったんだ……?」

「クロにならなきや」というのは伊丹様の意志ですか?」

入間君の言葉に俺は頷く。

「恐らくそうだ。どういう理由かは俺にも分からないけど……。彼女には“どうしてもクロにならなきやいけない理由”があっただと思
う」

「“あなたがクロになる前に”って言うのは……」

「……………」

急に前木君が下を向く。

「……言わなきや……ダメだよな……」

「どうしたんですか……? 何かあるんですか?」

「……………」

俺は黙って前木君の様子を見守る。

「俺は……誰かを殺すかもしれなかった……」

「……っはあ!?!」

吹屋さんが飛び上がりそうなくらい驚く。

「いや、決定したわけじゃないんだ。ただ、モノクマの動機を真に受け
ちまって……最低四人は助かるっていうのを考え出したら……それも
もありかもしれないって……」

小清水さんは腕を組んで黙って聞いていた。

「つまりモノクマの罠にまんまとハマリかけたということですか」

入間君の厳しい言葉を前木君は否定しなかった。

「つまり伊丹さんは前木君が人を殺そうとしているのを知っていて、
彼がクロになる前に自分がクロになろうと……?」

「だとしたら……伊丹は俺のせい……」

「いや、ただ単に殺人を止めさせたいなら別の方法があったはずだ。彼女自身にも、”どうしても自分がクロにならなければいけない理由”があったんだ。だから前木君より先に手を打った。そしてその標的は自分自身だった……」

その理由も、おそらく今回の動機が関わっているのだろう。

「……？ その論理ですと伊丹様は自殺をしようとしていたということになりますか……？」

「あゝ、なんかややこしくなってきたであります……」

考え込む入間君と吹屋さん。

そう。

そもそも”自殺”か”他殺”かの二者択一を迫られることが間違っているんだ。

亡くなる直前の彼女の言動には、”自殺を裏付けるもの”と”他殺を裏付けるもの”の双方が存在するのだ。

この二つを両立させる論理は……。

「伊丹さん自身は間違いなく自殺をしようとしていた。でも、他の誰かがそこに介入して、彼女の”計画”を狂わせた。そして最終的には自らの手で伊丹さんを葬り去った……」

「つまり、この事件は自殺と他殺が複合した複雑な事件だったんだ」

「そして、俺達が暴くべきクロは……」

「伊丹さんの自殺計画に介入し、彼女を葬り去った真犯人だよ」

全員が顔を見合わせる。

やはりこの中に裏切り者がいる。

その現実を突きつけられたみんなの表情は、重くならないはずがなかった。

「なるほど……。やはり、そうなってしまおうのですね」

入間君が残念そうにため息をつく。

「私は……この中にクロがいるなんて思いたくなかったので……伊丹さんの死は自殺だと自分に言い聞かせようとしていました。でも、真実がそうでないのなら……向き合わなきやダメですよね……!」

山村さんがそう言つて拳を握り締める。

「狙いが外れたクロも相当焦っているはずだ。もう少しでたどり着ける。辛いけど、やるしかない……!」

【フンスストップ議論開始】

入間ジョーンズ：「真犯人がいるとして……」

入間ジョーンズ：「その目的はなんだったのでしょうか？」

吹屋喜咲：「そりやもちろん、ゆきみんを殺すことでありんすよ!」

前木常夏：「そんな根本的な話じゃないだろ」

小清水彌生：「この事件のトリックによってどういう事象の発生を期待したのか、ということよ」

山村巴：「爆弾をセットしたのが犯人だとしたら……」

山村巴：「爆殺を狙っていたのでしょうか？」

前木常夏：「確かにそれが自然かもな……」

小清水彌生：「果たして……そんなに単純な話なのかしらね」

「山村さん、それは違うと思うよ」

【使用コトダマ：屋上のフェンス

屋上のフェンスは鉄でできているかと思われていたが、実際にはモノクマが用意した特殊な金属だった。

緩やかにかかる力には強いが、急にかかる力には弱く、破れてしまう。

なお、フェンスについての情報はほぼ全員が知っていた模様。

「そもそもあの爆弾は人を殺すほどの威力はないって何度も言われていたじゃないか。たくさん集めて使っても、爆圧は増したけど致命傷を与えるほどではなかった」

俺が説明すると、山村さんは「確かにそうでしたね!」と手をポン

と叩く。

「犯人の狙いは爆発自体による殺害ではなく、爆圧による転落だったんだ。…ある意味では広義の爆殺には含まれるのかもしれないけど…」

「そつか…！ 屋上のフェンスは急にかかる衝撃にはめちやくちや弱いってモノクマが言ってたでありんすね！」

「屋上のフェンスのことは全員知っていたようだし、誰が考えついてもおかしくないトリックね」

誰が考えついても……。

確かにそうだけど、やはり俺にはあの人が犯人だと思えない。議論が進めば進むほど、その感情は確信に置き換わっていつてしま

う。
「…じゃあ、伊丹は自殺しようとして屋上に来た時、ブルーシートに包まれた爆弾があったのにそれを無視して金属線を巻いたのか？」

前木君が身を乗り出して問いかけてきた。

「暗いし大雨の中だったので、見えなかったんじゃないでしょうか？ 私視力が3.0あるので辛うじてブルーシートに気付けたが、葛西君と前木君は気付かなかったんですもんね？」

「さり気なく上げえカミングアウトするでありんすね!!」

「いや、それは」 中央塔に近づかずには済むなら「って場合の話だろ？ 現実には爆弾につなげられてた金属線も中央塔に巻かれてたんだ、もし伊丹が自分が握る金属線を巻こうとしたなら、爆弾に繋がる金属線の存在に絶対に気付くはずなんだ」

「あれ、確かに……」

前木君が出した問題によって、吹屋さんと山村さんはだんまりしてしま

う。
「いや、前木君。伊丹さんは恐らく、死の瞬間まで爆弾の存在には気付かなかった。彼女は屋上に来たら一度も中央塔に近づいていないと思う。彼女が屋上に来たらからした行為は、”目の前に置かれている” 金属線を握るだけだ」

「…はあ？ それじゃあ、はじめっから金属線が中央塔に巻いてあつ

「たみたいじゃないか！」

「巻いてあつたんだよ。何故なら、その金属線を巻いたのは伊丹さんじゃなく、真犯人なのだからね」

「えっ!？」

「言い換えてあげるなら、“伊丹ゆきみの自殺計画には協力者がいた。そしてその協力者が伊丹ゆきみを裏切って殺害した”……ということね」

「えっ、犯人はゆきみんの計画を邪魔したんじゃないかとありんすか?」

「乗つかると見せかけての裏切り……。伊丹は協力しようとした人間に裏切られたんだな」

「そういうことね」

小清水さん、ナイスだ。

つまりはそういうことだ。

事件の真犯人は、当初伊丹さんと結託していた。

しかし、真犯人の裏切りによつて悲劇は起きてしまった……。

流れは掴めている。

犯人はやはり“あの人”しかいない……ように思える。

だけど……決定的な証拠がない。

このままでは犯人を当てることができても、逃げられてしまう。

どうする……?」

「協力者……ですか。伊丹様と非常に仲良くしていらつしやつた前木さんはともかく、そんな形跡のあつた方はおりましたでしょうか……?」

「おい、俺は間違つても……。いや、そういうのは論理で答えるしかないよな。現に俺と伊丹はそういう関係だつたし……疑われるのは当然だ」

「前木君……」

「……………」

沈黙の走る裁判場。

そこに――。

「ちよつと待ってください!!」

《山村巴の反論》

「葛西君、やはり私は仲間を疑うことにまだ抵抗があるみたいです」

「山村さん……」

「あなたの論理は筋が通っています。でも、伊丹さんの自殺を止めるどころか協力した拳句に裏切つて殺すなど……そんな鬼畜がコロシアイ四回に耐えてきたこの仲間たちの中にいるとは思いたくないんです!!」

「あの、あちきはまだ一回……」

山村さんの言いたいことは分かる。

けれど、感情に流されちゃダメだ。

そう、この議論で全ての事実関係に決着をつけよう。

「私は、私自身の良心に基づいて最後の抵抗をします。もし、それでも私が間違っているのなら……」

山村さんの全身を炎のように真つ赤なオーラが纏う。

「全身全霊で論破しに来いやああ!!!」

ああ……何故だろう。

反論も、提案も、否定も。

全部俺が書いた筋書きを確かにするために存在しているかのように感じてしまう。

まるで、全てが思い通りに動いているかのような……。

きつと、この反論も……

山村巴：「伊丹に協力者なんていねえっ!!!」

山村巴：「この事件は、自殺と他殺が……」

山村巴：「独立して起きたに決まってるんだ!!!」

葛西幸彦：「いや、ここまでの議論を総括するなら、伊丹さんの自殺には協力者がいたと考える方が自然だ」

《発展！》

山村巴：「そんな酷い奴がいてたまるか!!!」

山村巴：「あまりにも伊丹が報われねーだろーが!!!」

山村巴：「推論だけでやるにはあまりにも非情すぎるんだよ!!」

山村巴：「もし、協力者がいるってんなら……」

山村巴：「その根拠をオレに示せばカヤローツ!!!」

「山村さん、君は……!」

【使用コトノハ：工具セットと裁縫セット

男子の部屋の棚の中には工具セット、女子の部屋の棚には裁縫セットが入っていた。

工具セットには金属やすりやハンマー、裁縫セットには糸や針などが内蔵されていた。

そうか。

根拠をハッキリと聞き出すために、彼女はわざとこんな突っかかり方をしてきたのか。

「……………」

文字通り燃え尽きてうなだれる山村さんに、俺は心の中で感謝を述べた。

「根拠はある。さつき話題に出た、伊丹さんの部屋で見つかった”工具セット”だよ」

「工具セット……」

「みんな、自分の部屋の棚って調べたことある？ 全員の部屋の棚の中に”あるもの”が入っていたんだ」

「いや、俺は気にしなかつたな……」

「そもそもあちきは毎日居候の身でありんす！ ともちんの部屋はモノがなくて広々としてるでありんす！」

「変なカミングアウトしないでください！」

「……誰も棚の中に存在するものについては気付いていないということですね」

「そうか。……実は、〃男子の部屋には工具セット、女子の部屋には裁縫セット〃が置いてあったみたいなんだ。だろ、モノクマ？」

『そうだよー、ボクがミステリーを盛り上げようとずーっと部屋に置いてたのに、誰も使ってくれないからびつくりだよ！ 五回目の事件でギリギリ使ってくれたから安心したよ！』

久しぶりの発言だからか、張り切り気味に言うモノクマ。

モノクマの言う言葉に嘘はない。

「伊丹ゆきみは工具セットを持っていなかった。にもかかわらずその部屋には工具セットがあつた。つまり…」

小清水さんは不敵な笑みを浮かべて核心を語る。

「伊丹ゆきみには、男性の協力者がいた」

「……………!!!」

電子生徒手帳がない限り、個室には入れない。

誰かが生徒手帳を紛失したという話も聞いた記憶はない。

よつて、個室に置いてあつた男子の工具セットを女子が入手することとは不可能。

あり得るとすれば、男子が自らの意志で彼女に渡すしかない。

この時点で容疑者は三人に絞られた。

俺の視点からは二択だ。

「なるほど、男性の協力者、ですか…。これは厄介ですね……………」

入間君が顎に手を当てて呟く。

「ですがやはり、私としては伊丹様と日頃より親密にしていた前木さんを疑うしかありません。積極的に推理を進めてくれた葛西さんが犯人とは思いませんし……………」

「入間……………」

「私には分からないのです……。何故、愛する人を裏切ることができたのか。全く理解できませんよ……………」

入間君の語調は次第に強く、それでいてどこか悲しさを帯びていく。

「入間、俺は！」

「もう、やめにしないか」

俺の言葉が、二人の時間を止めた。

「今認めれば……まだ君は仲間として最後の尊厳を保てる……気がする……。できるなら……。今のうちに認めてほしい」

「私からもお願いします、前木さ」

「入間ジョーンズ君」

全ての時が止まる。

誰もが息を止める。

そんな空間の中で、俺は辛うじて声を出す。

「犯人は君しか考えられない」

言った。

このタイミングしかなかった。

これ以上は……前木君がもたない。

まだ証拠が掴めていないけど……。

押し切れるか……？

「……………」

「……………」

人間君の形相が、一瞬鬼のように変貌した。

「っ!!!」

「ああ……………そうですね。私も男性ですし、疑うのは当然です。取り乱してはいけませんね。いやあ、失礼しました!」

そして、いつものような柔らかな笑顔に戻る。

だが、俺には十分すぎるほどに伝わった。

彼という人間が抱える、底知れぬ闇と本性が。

「……………」

「では、あなたが私を犯人だと思う根拠を聞かせていただきましょうか。もちろん、あるんですよ?」

「……………金属線を巻いた位置、だよ」

【提示コトダマ：中央塔の感電箇所

タワー中央塔には電気の通り道がむき出しになっている箇所があり、そこに触れていると感電の恐れがある。

その箇所は地上から2 m以上の高さにあり、背の高い人物が手を伸ばしてようやく届くぐらい。

「中央塔の感電箇所は、地面から2 m以上の高さがあった。あんなところに金属線を巻くには、かなり背の高い人じゃないといけない」

「確か……………ジョーちゃんの身長は180 cm…」

「…次点は前木くんの170 cm。10 cmの差があるんだよ。あの場所に金属線を巻けるのは君しかない」

「…まさか、その程度の根拠で私を疑うのですか?」

人間君が呆れたように鼻で笑う。

「背丈の問題など、台か何かを持ってくれば誰だって解決できるでしょう。それとも何か、台を持ってこられない理由があったとでも?」

…そう、こう切り返せば俺は打つ手がない。

根拠としては、あまりにも弱い。

でも、彼は犯人なんだ。

…絶対に……。

………なんで？

なんで俺は彼が犯人だと確信しているんだっけ？

あれ？

「おい葛西、なんか答えろよ」

心なしか前木君の語調も強くなる。

「やれやれ、葛西さんはこれまで必死に謎解きを先導してくれていた
ので犯人ではないと思っていたのですが……。この様子ではそれも怪
しいですね」

勢いに乗って饒舌になる人間君。

「そんな……。葛西君、何か考えがあるんですよね？」

山村さんが心配そうに俺の顔を覗き込む。

やはり……。今のタイミングでは無理があつたのか……。

「私は前木常夏が犯人だと思っただけだね」

ふと、しばし黙っていた小清水さんが口を開く。

「私は知っているのよ。あなたと伊丹ゆきみが夜な夜な密会していた
ことをね」

「ぎよえええ〜?!?!? みっ……密会?!?!」

「バカ!! ただ話をしたただけだよ!!」

「お世辞にも脱出の道が見えたとは言い難い状況下……。伊丹ゆきみは
ここにいるメンバーを生き延びて脱出させるために、自殺に見せかけた殺
人を前木常夏に依頼した……。こんな筋書きなら十分あり得ると思わ
ない？」

小清水さんまでそんなことを……。

クソツ、どうにかして俺の確信をみんなに共有させる手段はないの
か。

何か……。

「ま、待ってくれ小清水! 俺は確かに伊丹とは……。愛し合う仲だっ
た……。でも、だからこそ、あいつのことは絶対に死なせないって決意
したんだ!! 本当だよ!!」

前木君は目に涙を浮かべて反論する。

「いえいえ、愛し合っているからこそ相手の意を汲んであげたいと思うのが恋人の性です。私も恋人がいるからわかります。しかもそれが結婚を誓った相手となればなおさらじゃありませんか!!」

「ここぞとばかりに入間君がまくし立て……。」

「……………え?」

「結婚」…?」

「入間……………どうして知ってるんだ……………」

「は? いまさら何を。あなたと伊丹様が恋人同士であることぐらい、対話のプロである私にはすぐに」

「そっちじゃなくて!!! 結婚の話だよ!!!」

前木君が怒鳴ると、入間君は肩をすくめて黙り込む。

「俺は……………誰にも言っていないぞ……………」

「ちよ、ちよつと待って。何の話?」

理解が追いつかない俺はしどろもどろになりながらも彼に尋ねる。

「俺が伊丹に……………結婚しようって言った……………それだけだよ」

前木君は涙を拭いながら答える。

「まさか前木つちがそんなこと言うなんて……………。こんな状況じゃなけりや最高のラブロマンスだったでありんす……………」

「もちろん私も知りませんでしたよ……………。どうして入間君が知っているんですか……………」

「……………」

入間君は石のように固まっていた。

「あなたが伊丹ゆきみと個人的に話をしたから……………でしよう?」

小清水さんが不気味な笑いを浮かべながら語り掛ける。

「被害者と二人きりで合っていたなんて、事件を話し合う上で非常に大事な情報よね。どうして今まで黙っていたのかしら。人に言えないような用事だったから?」

「……………」

「例えば、事件の協力要請とか」

「……………」

入間君は魂が抜けたかのような表情をしたまま、一言も答えなかった。

「君は……このタイミングを待っていたんだね」

俺の言葉に小清水さんは答えなかった。

俺がタイミングを掴み損ねて犯人を逃がそうとしたのと対照的に、小清水さんは犯人を追い詰めるための引っ掛け、それを仕掛けるタイミングを見逃さなかった。

「入間……ウソだろ？　今まで一緒に仲間として頑張ってきたよな？」

「入間君……。一緒に土門君を問いただしに行った時のあなたは、あんなに頼もしかったじゃないですか！　今更コロシアイなんて……するわけじゃないですよね??」

二人がそう声をかけると……。

「ふふ……失礼しました」

またもや入間君は優雅な笑みを浮かべたいつもの姿に戻る。

「結婚の話はですね……。深夜に散歩をしていた際にたまたまお二人の声が聞こえたのですよ。盗み聞きしてしまったので言い出すことができなくて……。申し訳ございませんね」

苦しい言い訳だ。

「場所はどこだ？　俺と伊丹はどこで話していた？」

すかさず前木君が問うが、入間君は「やめてくださいよ」と一笑に付した。

「そんなの、あなたがウソをつけばいくらでも答えをでっちあげられるでしょう？　いくら疑われているからってその質問はさすがに意地悪すぎますよ」

さらさらと、息をするように言葉を並べ立てる入間君。

今までのクロとは段違いだ。

流石、対話の才能を有しているだけある。

「議論をすっかりひっくり返されてしまつて私も困惑しているのですよ。本当に疑うべきはまず彼、前木常夏という人物であるはずですよ。そちらを話し合ひましょう」

「確かに…。前木つちの疑いも晴らしてからじゃないと先に進めない気が……」

「うう……私はどちらも疑いたくはないのですが……」

「まずい、また向こうのペースに乗せられ始めている。」

「何か、何か証拠は……」

「犯人探しなんて簡単なことよ」

「議論を遮つたのは、やはり小清水さんだった。」

「モノクマに頼んで男子生徒三人の部屋を調べてもらいましょう。そ

こに工具セットがあればシロよ」

「!!!」

「!!入間君の顔が一瞬で歪む。」

「そうか、その手があったか。」

「工具セットが部屋になれば、その人物は間違いなくクロだ。」

「捜査の時にこれが思いついていれば……なんて今は言ってる場合

じゃない。」

「いやいやいや。小清水様、もう捜査時間は終わったのですよ? 今

更追加で情報を集めるなど不可能ですよ!」

「そうだ、入間君の言うとおり、今は分が悪い。」

「いくらモノクマも、裁判になつてから捜査に協力するような真似を

するとは思えない。」

「そうかしら。なんなら裁判を中断して私が直接調べに行つてあげてもいいわよ。電子生徒手帳を貸してちょうだい」

「何を言っているんですか、小清水様!!? 今は裁判中ですよ!?!? 裁判

場の外になど出られるはずがないでしょう!!!」

「はじめは冷静だった入間君の口調も、次第に荒く乱暴になつていく。」

「でも、校則には裁判に関する決まりごとはなかったはずよ。理論上は可能なはずだけど?」

「だ・か・ら!!! それを言い出したら何でもアリになるでしょうが!!!
あなたは学級裁判をなんだと思っっているんですか!!!!? こっちは命懸
けでやってんですよ!!!」

『情報は公平に出した方がいゝもんねー。いいよー、じゃあボクが個
室調べてきてあげる』

「ほらあ!!! モノクマもそう言ってることですし、え?」

入間君は玉座を見つめながら硬直した。

それと同時に降りてきたスクリーンには、三対のモノクマが並んで
いる。

『さあ、今回特命を帯びて思春期真つただ中の男子の個室を探索して
きた三体のモノクマ!!! 果たしてそこには、どんなロマンが待ってい
るのか!?!』

「あ ぼ ?」

妙に気の抜けた声が、静まり返った裁判場に響いた。

『葛西君担当、青モノクマ!! 前木君担当、赤モノクマ! 入間君担
当、銀モノクマ! 果たして工具セットを持っていないのはどのモノ
クマだあ?!?!』

そして画面が暗転し、マジックショーのようにスポットライトが光
る。

赤と青のモノクマは、それぞれ工具セットを高く掲げていた。

『あーっつと!! 銀モノクマだけが!! 何も持っていないません!!』

銀のモノクマは頭上から降ってきた檻に閉じ込められてしまう。

映像はそこで途切れた。

「勝負あり、かしらね」

小清水さんが髪をかき上げながら言った。

俺は驚いていた。

まさかモノクマがあんなことをするなんて。

「こん……なの……ムチャクチャ……ダ……」

小さく呟きながらへたり込む入間君。

「入間君が………？　入間君がどうして………？」
「待ってくれ」

入間君に詰め寄ろうとする山村さんを押さえたのは前木君だった。
「理由を聞くのは後でいい。今やるべきことは………葛西」

「お前がその手で、脚本を完成させることだろう？」

前木君の重い声が俺の心に響く。

「分かった………。これで本当に最後だ………」

もう事件なんて起きてほしくない。

これで本当の最後にした。

そんな思いで、俺は事件の真相を語り始めた。

《クライマックス推理　—— 真実の脚本 ——》

A c t . 1

この事件は、計画も含めて全ての事象が今日のうちに起こった、実に急展開なものだった。

事の始まりは、今回の被害者である伊丹さんがア報知ドリによって今日の天候を知り、落雷を利用した自殺を決意したことだ。

彼女は自殺する前、とある人物に自らの自殺計画に協力するよう求めた。…その人物こそ今回の事件の真犯人だ。

真犯人は自らの工具セットを伊丹さんに貸し与えることで、彼女が植物園の道具を使って手製カイロを製作できるよう取り計らった。

その甲斐あって技術室の扉を開放した伊丹さんは、金属線を加工するためのニッパーをそこで入手した。

そしてそのまま音楽室へと赴き、工具でピアノ線を加工して部屋で待機した…。嵐が来るのを待ったために。

ただ技術室の扉を開放してしまったのは、この事件の本当の犯人にもチャンスを与えてしまうことに

なつてしまつたんだ。

A c t . 2

伊丹さんがピアノ線を加工している間、真犯人は動き出していた。事前に伊丹さんと会話して彼女の行動を知っていた真犯人は、伊丹さんが開けた技術室に侵入し、簡易爆弾の制作に取り掛かった。

それも、一個じゃなく何個も作ることで、爆風の威力拡大を図つたんだ。

爆弾にはスイッチがなく、電流が流れると起爆する仕組みになつていた。犯人は、雷をスイッチとして用いるという斬新なアイデアを思いついたんだ。

その実行のため、犯人は抵抗を繋げて導線や回路が耐えられるレベルにまで電流を落とし、爆弾が機能するように仕掛けた。

A c t . 3

爆弾を完成させた犯人は、それを屋上に仕掛けた。その際、植物園から持ち出したブルーシートを被せることで

雨風から爆弾を防護するように画策した。

それと同時に、伊丹さんから受け取つたピアノ線を中央塔にくくり付けるという仕事も果たした。

「背の高い自分の方が金属線を仕掛けるのには向いている」…などと言いくるめたんだらう。だけど実際の犯人の目的は、金属線よりも爆弾を配置することにあつたんだ。

名目上は伊丹さんの自殺をほう助するという目的で役目を終えた犯人は、雷雨が始まる午後10時をじっと待った。その傍ら、犯人は前木君の部屋の扉に手紙を挟み、伊丹さんのことを察するように仕向けていた。

A c t . 4

犯人の思惑通り、伊丹さんは雷で自殺を図るため、10時過ぎに屋上へ出た。そこに、前木君たちが乱入して彼女の自殺は防がれたかの

ように思えた。でも、実際はそれこそが犯人の狙いだったんだ。

落雷によつて爆弾が爆発し、前木君と伊丹さんはフェンスを越えて吹き飛ばされ、伊丹さんは帰らぬ人となってしまった…。

全てを終えた犯人は、あたかも悲劇を目の当たりにしたかのようにふるまい、存在しない架空の犯人への怒りを募らせてみせた。

夜時間前だからと油断して俺たちが単独行動している間に迅速に犯行の準備を整え、天候や電気回路を巧みに用いたトリックを披露した犯人…。

突発的とは思えないほど用意周到なやり口で俺達を翻弄し、伊丹さんを死に追いやったのは君だったんだね…。

“超高校級の翻訳者”、入間ジョーンズ君!!!



「……………」

歯切れの悪い幕切れだった。

まだ謎はたくさん残っているし、今回は自分でもよく分からない思考や言動が多かった。

ここまで勝った気がしない裁判は初めてかもしれない…。

……………でも。

でも、今は…………。

「……………」

「……………」

「なるほど、負け犬の気持ちは負け犬にならないと分からないものですね！」

「……………」

「何故？」

「何故、笑う？」

「…まあ、実際バレても大丈夫な戦いではあったんですが…：…せつかくならんと思ひ抵抗させていただきました。仲間が全力で謎を解いてくださったのですから、私も全力で騙しにいかなければ失礼というものですからね！ お付き合いいただきありがとうございます」

「違う。」

「裁判で負けた人間が我に返るなんてありえない。」

「彼は一体…：…?？」

「人間、君…：…?？」

「では、そんな私から一つ提案があるのですが…：…」

「そう言いながら彼は自分の電子生徒手帳を取り出す。」

「皆様、今回の動機は覚えていらつしやいますか？」

彼は生徒手帳の画面をこちらに向けた。

『ナカヨシコヨシ登録者： 小清水彌生、山村巴、吹屋喜咲』

「……………!!!」

『なな、なんと！ 今コロシアイをして勝った人には…：…コロシアイメンバーの中から好きな人を最大三人まで選んで一緒に脱出する権利を与えましょう！』

動機で流された映像が脳裏をよぎった。

「女性ばかりになってしまっただけで申し訳ないのですが——」

「投票、どうします?」

悪魔のように歪んだ笑みとともに、彼は告げた。

Chapter 5 非日常編④ オシオキ? 編



——入間君。

君と出会って、この学園に入学し、暫くの時が経った。今だからこそ、君に一つ問いたいことがある。

君は、僕がなぜ君をここまで気に入ったか、分かるかい？

答えはとてもシンプルさ。

——君は、狂っているからさ。

君は僕が今までに見たどんな人間よりも“秩序がない”……。
生まれて初めてだよ、こんな人間に出会ったのは。

……ふふ、そんなに面白いかい？

僕も同じ気持ちさ。

何故君がここまで狂ってしまったのか、僕は非常に興味が湧いたんだ。

有り余る疑問に胸を躍らせながらも、人生の核心となる問いを見つけることができなかった無為の日々…。

そんな日々を終焉をもたらしてくれたのは、他ならぬ君の登場だった。

君をこれほどまでに狂わせた“恋”とは一体何なのか——。

これを僕の人生を賭けた哲学にしようと思う。

君のおかげで素晴らしい日々を過ごせそうだ。

礼を言うよ、親友。

——これからも、どうかよろしく頼む。



入間君は口角を大きく釣り上げたまま不敵に告げた。

「私が登録した三名の方は、私がこの裁判に勝つことによって無条件に私と共に脱出できます。一方、選ばれなかった二人はオシオキされることになりましたが………」

「……っ!!! お前っ!!!」

前木君が敵意のこもった目つきと共に叫ぶ。

恐れていた事態が起きてしまった……。

やはりこの動機は、クロにチャンスを与えさせるのが目的だったんだ。

予想はできていたけど、対抗手段がない。

「バカなことを言わないでください!」

にらみ合う入間君と前木君に割って入るように、山村さんが声を張り上げる。

「入間君……。あなたが伊丹さんを殺した犯人だなんて思いたくないです……。ですがあなたが犯人であるのはこの話し合いで十分すぎるほどに理解できました……。たとえ無条件で外に出られるとしても、仲間を見捨ててあなたについていくことなんて私にはできません!!!」

拳を固く握りしめ、山村さんは強く言い放った。

「どんな事情があろうと、あなたはクロです。自分の罪に向き合って、オシオキを受けてください………」

「……ええ、分かりますよ、山村様」

けれど、入間君は些かも動揺したそぶりを見せてはいない。

「そう、皆さんにとって私はそのような評価になってしまいますよね……。そう思うのは当然の思考です。どんな理由があろうと、私が醜い人殺しであることに変わりありません。……ですが、それが分かっているにもなお私は皆様にお伝えしなければならぬことかございます………」

運命の投票を目前にして、クロに好き勝手に話をさせてしまっているのか。

それが分かっているにしてもなお、俺は彼が話そうとするのを止めることはできなかった。

「…伊丹様に自殺の手伝いを頼まれたのは、今朝のことでした。急なことだったので私も焦りましたよ…。ですが伊丹様は私にこう言ったのです。『私を常夏と一緒に死なせてほしい』……と」
「なっ……!!」

前木君の表情がにわかに変わった。

「『ここを出るために犠牲が避けられないというのなら、せめて愛しい人と一緒に死にたい』……と」

「バカ……言っつてんじゃねえよ……」

前木君の拳はぶるぶると震えていた。

「今更そんなこと言われて信じられるわけあるかバカヤロー!!」

「言えなかつたんですよ!!」

入間君もまたすさまじい剣幕で返す。

「言えるわけないじゃないですか……そんなこと……。言えば必ずあなたは伊丹様をお止めになった。伊丹様もそれを分かっていたからこそ、本人には言わないでほしいと私に頼まれたのです。彼女の想いを踏みにじることが躊躇われたからこそ、今の今まで言い出すことができなかつたのですから……」

何を言っているんだ……君は。

そんなの、「共犯者の裏切り」というさつき裁判の流れを完全に無視しているじゃないか。

この事件が伊丹さんにとって想定外の要素を含んでいたことは、屋上にいた時の彼女の反応から既に証明されている。

それに、それが本当だとしたら、さつきみたいな挑発的な態度を取る意味がどこにあつたっていうんだ……？

あり得ない。

100%あり得ないよ、入間君。

「さつきほどの無礼は申し訳ございませんでした……。私も気が動転し

ていたのです…。しかし、今更どう思われようと私は構いません。ただ、伊丹様が亡くなられたのは彼女自身の願いでもあったということだけをお伝えしたかったのです」

「そんなの…そんなの…嘘に決まっているじゃないですか…!!」
だつて伊丹さんは、屋上に来た前木君を見て動揺していたんですよ!?!
もし本当に二人で死ぬ気なら、動揺するのは明らかにおかしいですよね…!?!
それがあつたからこそ、“自殺計画の共犯者が裏切つた”
という流れになつたじゃないですか!-」

「死にゆく人の感情というのは分からないものです。死の直前になつて、心変わりしたのかもしれない…」

「そんな…そんな苦しい言い訳で俺達を騙せると思ってるのか、君は!-」

俺は思わず声を張り上げた。

「こんなに追い詰められてもまだ抵抗するなんて…そんな入間君はもう見たくないんだ…。命が惜しい気持ちは痛いほど分かるよ、でも君は…伊丹さんを手にかけてしまったんだ…。頼むから自分の運命を受け入れてくれよ…」

そう言い放つ俺の目には、いつしか涙が浮かんでいた。

「命、ですか…」

入間君は天を仰いでそう呟く。

「よろしい。ではモノクマに一つお願いをしたく思います」

『え? ダメだよ』

「即答でありんすか!-」

モノクマの無視も吹屋さんの鋭い声も意に介さず、入間君は続ける。

「私が勝つた場合…私が生き残れる権利を彼に譲渡したいのです」

そう言つて彼が指差したのは、他ならぬ俺自身だつた。

「…え…?!?!」

当の俺は困惑に支配されてしまつてまともな答えを返すことができなかつた。

「彼はこれまでも謎解きを懸命に先導してきました。私よりも生き残

るに相応しい」

「…ウソ…だろ…?」

「は……………何を言ってるんですか!」

俺だけでなく、前木君たちも混乱しているようだった。

彼は、生き残る気がないのか…!?

「このルール変更が許されるのであれば、私は最初からこうしたかったのです。どんな理由があれ、人殺しが醜く生き残る世など救いがありませんかからね…」

やや下を向いて物悲しそうにそう呟く。

嘘を言っているようには見えないが…………。

『…ふーん、まあいいんじゃない?』

「え、認めた??」

『そっちの方が盛り上がりそうだしね! それにそのルールは前木君にも適用してたし、片方だけ拒否るのは失礼だしね!』

「前木君に…?」

全員が一斉に前木君の方を向く。

「……………ああ…」

彼もまた、自分を犠牲にして殺人を起こし、他のメンバーを助けようとしていた…。

だけど、それには何人かの犠牲が必ず伴う。

前木君が誰を犠牲にしようとしたのかは分からないけど…………。

今は彼と入間君が”犠牲”に指名されている。

「さあ、これで理解して頂けたでしょう…? 私は己の生存など微塵も考えていないのです。ただ伊丹様の願いを聞き入れ、僅かに生き残った仲間達がこの場所を生きて出てくださればそれで良いのですよ」

「……………君は……………」

まさか彼は……………本当に……………?

「……………でも、前木君は助からないんですよ…? 結局仲間を犠牲にしなければならぬのなら……………私は賛成なんてできません!」

あくまでも強情に山村さんはそう言った。

「そう…だよ。例えここからの脱出が約束されていても……仲間を見捨てて行くななんて…絶対に……やっちゃダメだ…」

彼女に続いて俺もかろうじて言葉を発する。

「……………」

前木君は何も言わなかった。

言葉が見つからないようだった。

「伊丹様が願われたのは、『愛する人と共に死ぬ』ことです。私はただその願いを聞き入れるべく、お二人と一緒に殺害するように仕向けたのですよ。前木さんが上手く伊丹様の自殺に巻き込まれるように工夫して、ね……」

支離滅裂なはずの彼の論理展開は、しかし何故か次第に現実味を帯びてきているように俺には感じられた。

これが、数々の国を渡り歩き対話の才能を有する彼の能力だということか……？

「皆様、本当にいいのですか？ 確かに私に投票すれば私以外の皆様は生き残れるでしょう。しかしそれは、ここから複数人が脱出できる機会を逃してしまうことになります。もう二度と、あんな動機は訪れないかもしれませんよ。それでもいいのですか？」

「で、でも……………」

「モノクマの力なくしてここから脱出することができのですか？」

地上1000mで孤立したこの空の孤島から。無駄ですよ、結局私たちはモノクマの手を借りずにここから出ることなど不可能なのです」

彼の目的は何なのか、全く分からなかった。

ここから生きて脱出するためでないとしたら、一体何のために？

「もう十分話し合ったでしょう」

腕組して話を聞いていた小清水さんが、静かに口を開いた。

「そろそろ投票の時間にしましょう。私の肚はとっくに決まっているから」

「やよ様……………」

彼女がどんな選択をするのか、想像に難くなかった。

人類絶滅の野望を諦めていない彼女は、当然この場所からは一刻も

早く脱出したいはずだ。

「待てよ……。お前ら、本当に人間の言うことを信じるのか？」

前木君が冷や汗を流して反論する。

「別に俺は命が惜しいわけじゃない。だからと言って死にたいわけでもないけど……。でも、人間の言っていることだけは絶対に違うんだ!!」

「前木さん。いい加減諦めた方がよろしいですよ。恋人だからこそ、彼女の元に駆け付けてあげるのが男の筋ではありませんか？」

「恋人だからこそ!!! 伊丹を好きだったからこそあり得ないんだよ!!!」

その考えは!!!」

前木君は頭を抱えてそう叫ぶ。

「本当に相手のことが好きだったら……。相手のことが大切だったら……。 “一緒に死のう”なんて思わない。自分がどうなるうが、世界がどうなるうが……。愛してる人だけは……。絶対に生きてほしい……。少なくとも俺はそうだったし……。伊丹もそう思ってたはずだよ……」

「対話を侮ってはいけませんよ。相手が何を思っているかなど、分かるはずが」

「分かるだろ……。本当に……。愛し合っていたら……。心は一つなんだから……」

前木君はとめどなく流れる涙を拭おうとしなかった。

「お前なら……。分かる……。だろ……」

「……………」

動機発表の後の伊丹さんの姿が脳裏に浮かんだ。

『私は殺人を犯す気はない。なぜなら、私の好きな人は生きています。すぐ近くにいるから。私がここを出る理由なんてない』

あの時の彼女の表情は、とてももうすぐ死ぬような人には思えなかった。

儂くも力強く、生き生きとした目をしていた。

あれは彼女自身が生きるためではなく、生かすという覚悟と決意に起因するものだったんだ。

“この命を懸けてでも、自分の愛する人を絶対に守り通してみせる。”

その決意を固く胸に誓っていたからからこそ、彼女はあれだけ強い眼差しをしていたんだ。

そして、前木君も……………。

沈黙が場を支配する。

死してなお固く結ばれた愛の絆は、もう誰にも切り離させることはできなかった。

「……………本当……………そういうところですよ……………」

入間君が小さな声でそう呟いたのを、おそらく俺だけが聞いていた。

その言葉に底知れぬほどの殺意が込められているのを感じて、俺は酷く怖くなった。

これ以降、もう入間君は何も言わなかった。

結局、入間君の最後のあがきが功を成すことはなかった。



泥沼の展開を見せた裁判は、あっさりと終わりを告げた。

スロットに揃った入間君の顔と、大量に払い出されるモノクマメダル。

それは、未曾有の展開を繰り返した五回目の裁判の終焉を告げていた。

「終わりだ」

前木君が小さな声で言った。

「終わったよ。お前の負けだ、人間」

「……………」

俺は発する言葉を見つけれないまま座り込む人間君を横から見つめることしかできなかった。

「結局、君の目的は一体何だったんだ……？」

俺はたまらず問いかけたが、答えは返ってこなかった。

「……………」

全てを出し切ったかのようにうなだれる人間君。

強く、聡明な彼はどこへ行ったのだろうか？

明るく、爽やかな彼はどこへ行ったのだろうか？

「……………あつあつあ……………」

「？」

喉の奥から微かに漏れる笑い声。

その声の主は、他ならぬ人間くんだった。

「くっ……………ははははははっ……………ははっはああ……………」

大声をあげるような笑い方ではなく、はち切れそうな笑いを無理矢理こらえているような、いびつな笑い。

時々声が裏返り、息苦しそうにしながら漏らす笑い声は、彼の狂気を伝えるには十分すぎるほど不気味だった。

「どうして……………まだ笑えるんだ……………」

俺は誰に促されるでもなくそう呟いていた。

なぜ？

モノクマに負け、裁判に負け、投票にも負けた彼が、それでも笑う理由はなんだ？

いったい彼に、何が残っているというんだ？

俺は底知れぬ恐怖に身を支配されながら、人間君が次の言葉を発するのを待った。

「目的……目的ですか……？ カツ……カツカツカツカツカ……」

入間君は笑いながら髪をぼさぼさにした顔を上げ、俺達の方を見た。

焦点の合わない目が俺の顔にギョロリと向けられる。

「……っあっあっあっあ……」

「笑ってんじやねえ!!!」

前木君が怒鳴り声と共に裁断台を蹴る。

その顔は真っ赤に染まっていて、今にも暴れだしそうだ。

「どこまでもふざけやがって……!!! どうして伊丹を殺したかって聞いてるんだよ!!!」

「お前だよおおお!!!」

「!!!」

急に吐き出された、入間君からは想像もつかないほどの絶叫。

その剣幕に、前木君も俺達も言葉を封じられてしまった。

「お前を……お前と伊丹を……殺してやりたかった……!!! 片方じゃダメなんだよ!!! 両方!!! 一緒に地獄に落としてやりたかったんだよおおお!!!」

彼は床に膝をついてそう叫び声をあげる。

その壮絶な姿と絶叫に、俺達はただ気圧されることしかできなかつた。

これまで俺達はこの事件以外に、四回のコロシアイを経験してきた。

だけど、純粹にここまで被害者への“憎い”という感情を持ったのは彼が初めてだ。

アルターエゴでさえ、亞桐さん自身ではなく俺たち全員への失望が原因だった。

たった二人の人間を。

それも、ここに至るまでの地獄を共に生き抜いてきた仲間を。

“殺したい”ほど憎む理由は一体なんだっていうんだ。

お願いだ。

嘘だつて言ってくれよ。

“地獄に落としてやりたかった”なんて、嘘なんだろう？

頼むから、嘘だつて……。

「前木つち……何か……恨まれるようなことでもしたでありんすか……？」

吹屋さんが冷静に前木君に問いかけるが、前木君は青ざめた顔を横に振るだけだった。

「そ、そんな……バカな……。俺が……俺と伊丹が……何をしたつていうんだよ!!」

前木君は嘘をついているようには見えなかった。

『ストロップ!!!』

混沌とする裁判場を収めたのはモノクマだった。

『クマ界じゃ常識だけど、物事には順序つてもものがあるんだよ！今の人間くんじゃマトモに説明するのは無理そうだし、いつも通りボクがシャキツと動機をおさらいしてあげるよ』

シャキツ、という言葉通りにシャキツとポーズを決めながらモノクマが言うと、裁判場にスクリーンが降りてくる。

今度は一体、どんな絶望が映し出されるというのか？

スクリーンに光が照らされて、明るく輝く。

映ったのは、ワンピースを着た可愛らしい女の子だった。

ただ、その女の子の瞳は、若干ではあるが白く濁っていた。

『誰か分かる?』

モノクマはいたずらっぽく笑って問いかけるが、それに答えられる人はいなかった。

「あああつ……………」

代わりに、入間君が涙を浮かべてスクリーンに向けて手を差し伸べる。

「結梨ゆいりつ……………私の愛しい結梨……………」

「結梨……………」

その名前には聞き覚えがあつた。

【Chapter 3 (非) 日常編②】

「あ、申し遅れましたが私には故郷に恋人がございますので…」

「名は結梨と言いました、私が世界中を仕事で駆け巡っている間も必ず文通してくださる素晴らしいお方ですよ」

そう。

入間君の故郷にいる、彼の恋人。

その名だ。



この子は新発田結梨しばた ゆいりさん。入間君が心の底から愛している彼女さんだよ！

彼女って言っても、そこらの学生みたいな”抱いた抱かれた捨てた捨てられた”ってレベルの浅はかな恋とは全然違うよ。真正正銘彼はこの子を世界一愛していたんだよ！

前に入間君自身から話は聞いたと思うけど、おさらいも兼ねてなれ

そめをサラツと話すね。

もともと彼女は入間君と同じ中学の同級生だったんだよ。

でも生まれつき色盲で視力も良くない体質で、授業を受けるのも苦
労してみたみたい。

そんな彼女にとって憧れの星だったのが、その時既に世界中を駆け
巡っていた凄腕翻訳者の入間くんだったんだ！

彼女は視力に不自由を抱える身だったからこそ、“話すこと”に人
一倍強い執着があったんだね。

入間君が母校に顔を出した数少ない機会に、彼女は必死に入間君に
アプローチをかけ、そして……。

見事に二人は結ばれたんだ！

物心ついたところから仕事ばかり、その仕事でも人の醜い面をさんざ
ん見てきた入間君。

そんな彼にとって結梨さんの存在はとても尊くて何物にも代えが
たいものになって言ったんだね。



「……………」

入間君は膝をついてうなだれたまま何も言わなかった。

『だからね、入間君には分かっていたんだよ。伊丹さんの気持ちも、前
木君の気持ちも。だからこそ、伊丹さんは入間くんなら自らの自殺計
画を分かってくれると信じていたのです！』

だけど繋がらない。

どうして、入間君は殺してやりたいほど前木君と伊丹さんを憎んで
いたのか。

その恋人の存在が、どう繋がるのか？

「……………」

『えっ？』

「……………」

子供のようにぼろぼろと涙を落とし、顔をくしゃくしゃにして入間

君は懇願する。

「結梨は……死んだんだ……。もう、あの子の話は……。する……。な……」

「……………!!!」

……死んだ……。

入間君の、想い人は、もう……。

「……そうか……あの動機の映像で……」

俺の脳内で、点と点とが繋がった。

今回の動機の最初に流れた『恋人生存チェック』の映像。

俺にとっては何ら意味のない映像だったけど……。

『流石葛西君、鋭いね！　そう、入間君は動機の“恋人生存チェック”

の映像を見て恋人の死を知ったんだよ！　それまではだ〜い好きな彼女が死んでいるとも知らず彼女を助けるために必死に頑張ってたんだよね！　流石のボクも同情するレベルの健気さだったよ！』

「……………うふふ……………健気……………健気かあ……………くふふ……………」

壊れたように歪んだ笑みを浮かべる入間君。

『たとえば自分が死んだとしても、誰かが彼女を守ってくれればそれでいいとすら思っていたんだよ。だから彼は、コロシアイ生活の中で自分が犠牲になることすら厭わなかった』

「でも……………その恋人は亡くなられた……………」

「……………」

『そう！　身寄りのない彼女が“絶望の残党”に襲われたのは、実はそんなに昔のことでもないんだよね。いやあ、ボクがやったわけじゃないけど、あれは酷かったよ。並のオシオキの方がマシなんじゃないってくらいの死に方だったね』

「……………ッ!!!」

その言葉を聞いて入間君がすくみ上げるのがハッキリと分かった。

絶望の残党……？

その連中が、入間君の恋人を惨殺したというのか。

どんな集団かは分からないが、もしそんな連中が世の中に出回っているのだとしたら、俺の家族や古い友人も……。

…いや、今はそんな心配をしている場合じゃない。

「入間……お前は……」

前木君が震える声で呼びかける。

「一緒だったんで……ありんすね……」 恋人がいる“ってだけじゃなく……” 恋人を失った“というところまで……」

「……でも……それは結果論ですよね……？ 結局のところ、あなたが伊丹さんと前木君を殺そうとした理由は一体何なのですか？」

山村さんは語気を強めて問いかけた。

みんなが一番聞きたいのは、結局そこだ。

前木君はともかく……伊丹さんには何か後ろめたいものがあつたんじゃないだろうか？

例えば……黒幕の協力者だったとか。

入間君は自殺計画を聞き出す際、それを知ってしまった……。

今のは俺の空想に過ぎないが、とにかく何かがあるはずだ。

入間君が二人に殺意を抱いてしまうほどの何かが。

「……つう……うつつふふふふ……」

「……」

入間君んの壊れた笑いに怒気を飛ばす人間は、もういなかった。

その次に繰り出される言葉……彼を突き動かした真実に、誰もが耳を傾けていたからだ。

……でも、次の言葉を聞いた途端。

誰もが驚愕で我を失いそうになっていた。

「だって……ムカつくじゃないですか……」

「……………は？」

「命より大事な恋人が死んだ矢先に、“好きな人を助けたい”なんて相談されたら……………ムカつくでしょう？」

入間君は、まるで非行を暴かれた少年のように、下を向いてぼそぼそとそう言った。

「……………」

誰もが、理解するのをやめていた。

『ん？ なに？ “それで本音は？”みたいな顔しないでよ。これが彼の本音だよ。みんな動機を聞きたがってたんでしょ？ 聞けて良かったじゃない』

「……………本音……………」

これが？

これが彼の本音？

「悪いですか？」

俺の呟きに応答するように入間君はこちらを睨んで言った。

「変な冗談……やめろよ……………」

前木君が青い顔に汗を浮かべて呟く。

「そんなはずないだろ!! 五回目だぞ!! 四回アレを乗り越えてきたんだぞ!!? そんな俺達が、そんな理由で人殺すわけないんだよ!! あるんだろ、本当の理由が!!」

そして、入間君の言葉を信じたくない気持ちを押し出すかのように大きく叫んだ。

「入間君……………。なにか言いたくない理由があるのは分かりますが……………。せめて真実を告げて散るのが最後の罪滅ぼしだと思っんです……………。頼

むから本当のことを言ってください……」

前木君と山村さんの言葉を受けても、全く心に響いた様子を見せない入間君。

ただ苛立たし気に二人の言葉を受け流している。

「だからあ、さつきから本当のこと言ってるでしょ……」

「嘘だ!! そんなの嘘だ!!」

「本当のこと言わないと……本当の本当にジョーちゃんのことキライになっちやうでありんすよ……!?!」

「黙りなさい!!」

不意に放たれた小清水さんの怒声が、全員を黙らせた。

「冷静になって現実を受け止めなさい。……この男にはこれ以上何もないのよ。目を見れば分かる」

小清水さんの静かな一言を聞いて、前木君はガクリと膝をつく。

「そ、んな……嘘だろ……?」

「嘘なら良かったんですけどねえ……」

他人事のように入間君はぼやく。

「だってムカついたんだからしょうがないでしょ……?」

ムカついたって?

伊丹さんと前木君がいちやいちやしていることに?

ムカついたから、二人とも殺そうとしたのか?

伊丹さんを殺したのか?

「人間なんて……」

小清水さんは憎悪の表情を浮かべ、喉の奥底から低い声を出す。

「人間なんて……こんなもんなのよ」

「……………!!」

「幼稚だって言いたいんですかあ……? あのねえ、君たち……。命かけて人を愛したこともないクセに偉そうに正義ぶってんじゃねーよって話ですよね……?」

「命を懸けて……?」

「うゝ!!!」
「……………」

誰も手出しができなかった。

御堂さんのような幼児退行とも違う、彼女以上に狂氣的な壊れ方だった。

その狂気を宥めることも、抑えることもさせない妖気を、彼自身が纏っていた。

彼に触れると、自分にまで絶望が感染してしまいそうな気がして。今までに罪を犯した人たちは、許されないこととはいえ、それぞれに固い信念があった。

自分が為すべきことを真摯に見つめ、命を懸けて事件と裁判に臨んでいた。

だが、入間君はどうだ？

彼には信念も義理も何もない。

ただ恋人を殺されたという絶望に支配され、何の利益も目的もなく伊丹さんを殺した。

“いちやいちやしているのがムカつく”という、たったそれだけの理由で。

今までに見てきた誰よりも、彼は絶望していた。

「こんな脚本で……………いったい誰が納得するっていうんだ……………」

ぽつりと俺は呟いていた。

『残念だけど、これは現実です！ キミが作った脚本じゃないんだよ！ 物語みたいな納得のいく展開とか心情が都合よく出てきてくれるわけじゃないしょ？ 実際の死刑囚とか調べてみなよ、ほとんど意味わかんない理由で人殺しまくってるからね！ 安藤さんだつてアルターエゴだつてぶつちやけ意味わかんなかったじゃん』

そんな俺の脚本へのこだわりを侮辱するように、モノクマはそう言い放つ。

結局、こうなるんだ。

心の奥底で納得のいく脚本を求めても、現実の一つもその通りにはならない。

いつも最悪で理不尽な結末を迎える。

もう何度目だろうか。

「もう……疲れたよ」

俺はため息交じりに呟く。

「もう何も見たくない……聞きたくない……」

「あはっ……あはははっ……」

精魂尽き果てて叫ぶ体力も無くなった人間君は、地面に両膝をついたまま笑った。

「早く……早く殺してくれ……」

『まあ焦らないでよ。最期に人間君には見てもらわなきゃいけないものがあるんだからさ』

モノクマはそう言っただけから取り出したりモコンのスイッチを押す。

俺達の感情を置き去りにしたまま、スクリーンには新しい映像が浮かび上がる。

『よう』

「……………」

映ったのは、椅子に座った釜利谷君だった。

彼の姿を見るのは久しぶりのことだった。

しかし、これまでの出来事に疲れ切っていた俺達は、前木君も含めて誰も驚きの声を漏らせなかった。

『五回目の裁判お疲れさん。お前らも知ってる通り、俺はもうとつくの昔に死んでる。…あく、怪しまねえでくれ。別に降霊術とかそういうワケ分かんねーコトしてるんじゃないやねーんだ。こいつは俺が生きてた時代に録画したモンだからな。訳あってコロシアイの内容を事前に把握させてもらったからよ、先にこの映像を撮ってるわけだ』

「……………」

釜利谷君が何かを言っている。

そういえば、彼は“超高校級の絶望”だったんだっけ……？

でも、もうそんなこともどうだっけ。

彼の話の内容も、一つも俺の頭には入ってこなかった。

『あいつは…伊丹は、自分がクロにならなきゃいけないと思ったからこそ自分を殺してクロになろうとしたんだ』

今までの議論で判明していることを勿体つけながら彼は語る。

『……なあ、お前ら。伊丹が何であんなことをしようとしたか分かるか？』

「……………」

いまさら何を言われようとリアクションする気力なんてなかった。

『俺だよ』

画面の向こうの釜利谷君は、自らを指さしながらにんまりと笑った。

『俺が伊丹に推奨したんだよ。まえなつの命を人質にとって』

「……………」

そこまで言われて、初めて前木君が声を上げた。

『お前がクロにならなきゃまえなつがクロになるぞって言ったらすぐにクロになる決意を固めてくれたよ。まあ、実際なりかけてたしな』

「ちよつと……待て……。三ちゃんが……伊丹を……？」

『そうだ。俺が伊丹の心を後押ししてやったんだよ。…だけど勘違いすんなよ？俺はあまり嘘は言ってねえし、条件を付けて無理矢理クロにさせたわけでもねえ。ただ後押ししてやっただけさ』

「…どうして会話が成り立っている…？録画のはずなのに…」

小清水さんが顎に手を当てて訝しむ。

『可哀そうになあ。みんな自分が好きな奴を必死に助けようとしてただけなのになあ……。なあ、入間……』

「……………」

入間君は廃人のようにうつろな目で釜利谷君を見つめる。

『お前は覚えてないだろうけどよ……記憶を消される前によ……お前、俺に恋人の居場所教えてくれたんだよ……「何かあったら結梨のことを守ってあげてくれ」ってなあ……』

「……………へ？」

既にすべての感情を投げ捨てていたはずの彼の目に、わずかに色が戻る。

釜利谷君の口から語られた“真実”が、彼と俺たちの気を引き留めたのだ。

……………だが。

『申し訳ねえことをしちやっただよ。俺がうっかりお前の恋人の居場所を呟いたら、どっかから話が広がっちゃったみたいでさあ』
「……………!!!」

彼が口にした[!]真実は、俺たちの想像を超えて遥かに残酷だった。

『ああ……可哀想だったなあ……。可哀想可哀想。お前の恋人、好きでもない男たちにあんなことされまくって……しまいによ……誰かも分からないくらいグチャグチャに……されちやっつてさあ……』

釜利谷君は必死に笑いをこらえながら言い放つ。

「ああああ、ああああああああああ……………」

入間君はぼつかりと開いた口から声を漏らす。

『復讐したいか？ したいよな？ 俺の顔を判別できないくらいボコボコにして、全身を末端から少しづつ切り刻んでやりたいだろ？ 分かるぜ、その気持ち。 …でもごめん……それは無理なんだ。 ……』

だってお前らこれを見てる頃には、俺はもう死んじやってるもんなんだ。!!!」

釜利谷君は口角を歪め、両手を広げながらあふれる笑いとともに叫んだ。

それと同時に。

「あああああああああああああああああああああつあああああああ
!!!!!!」

入間君の全身全霊の叫びがその空間を支配した。

これまでのどの絶叫よりも深く、限界を超えて全身の身の毛を震わせるような強烈な負の感情を備えて。

『ようやく気付いたか？ この地獄から逃れる唯一の方法は“死”なんだよ。このコロシアイは死んだモン勝ちなんだ!! 良かったなあ入間、お前もこれで勝ち組だ!! お前の価値も、恋人も、仲間も、全部無くなっちまったけどな?』

「もうやめろツツ!!!」

前木君が全力で叫ぶ。

「反吐が出る…。お前なんかを一瞬でも親友だと思った俺が馬鹿だった。!! お前は醜くて卑怯な絶望の手先でしかなかった!!」

涙をまき散らしながらかつての親友を糾弾する前木君。

あまりの壮絶さに、俺は言葉を発することすらできなくなっていた。

『俺はな、羨ましかつたんだ』

しかし、釜利谷君の予期せぬ言葉が前木くんの言葉を遮った。

『俺は人を愛したこともないし愛されたこともなかった。親父が愛したのは“仕事”で、家族や同級生が愛したのは“仕事をする親父”だ。…まあ俺の話はどうでもいい。要するに俺はリア充が嫌いなんだ。羨ましいからな。そして入間もそうだった』

「……………」

『自分の愛する人間が死んでしまったのに、のうのうと目の前で愛し合ってるまえなつと伊丹が羨ましかったんだ。羨ましくて羨ましくて仕方なかったんだ。…なあ、俺の気持ちがあつただろ？』

「負け犬だ…。お前は負け犬だ…!!! どこまでも哀れで…ゴミのように無価値な負け犬だ…」

前木君が精一杯の語調で釜利谷君に言葉の弾丸を浴びせるが、その表情からは彼の心が絶望に押し負けているのがよく分かった。

「でも、死してなお人を“負け”の道に引きずり込んだんだから大した負け犬根性ね」

皮肉なのか賞賛なのかわからないが、小清水さんがそう呟く。

『人間…もうすぐだぞ。もうすぐこっち側に来られるぞ…。地獄で…仲良くしようぜ…』

釜利谷君がそう言うのと、映像は徐々に乱れ、音声は遠くなっていく。

「あつ…あつ…あつ…あつ…」

入間君はもはや動物のように言葉にならないうめき声を漏らすだけだった。

『あああ…なんて絶望的なんだ…最高だぜ…最高の…』
そしてスクリーンの向こうから声は聞こえなくなった。

『ハイ、終わり！ どうだった？ 衝撃の事実も明らかになって面白かったでしょ？』

モノクマがハイテンションに呼びかけるのとは裏腹に、誰もその言葉には答えなかった。

「わたし は ……」

微かに自我を取り戻したのか、入間君がポツリと呟く。

「なんのために生まれて……」

「お初にお目にかかります！ わたくしは『超高校級の翻訳者』、入間ジョーンズでございます！」

「なんのために生きてきたのでしようか……」

震えながら途切れ途切れに発せられる悲痛な言葉に、俺はただ涙を流してあふれる感情をこらえることしかできなかった。

「さあさあ、暗い気分をキープしていても仕方ありません！ 助けが来るまでの間、ここで気ままに暮らしていようではありませんか！」

「さいのうも」

「もう、終わりにしましょう。終わりです。あなたの全てが、今ここで終わる」

「なかまも」

「おや、吹屋様！　どうやら元気がないようですね！　今宵はチーズフォンデュなどいかがですか？」

「愛した人も……」

——ですが、どんな真実が待っているかと、絶望が待っているかと、私は生きねばなりません。
大切な人に……私を待っている、結梨にもう一度会うまでは……。
……絶対に。

「何も……なにも……のこらなかつた……」

『ハイ！　じゃあ長かった五回目の裁判もいよいよクライマックス

!! ワクワクドッキドキの五回目のオシオキ、いつてみよーか!!」

「……クソッ!!」

前木君が裁判台を叩く。

「なんで……恋人をあんな理由で殺した奴に……こんなに同情しちまってるか分からねえ……。……だけど……!!」

そして入間君を指さす。

「お前の死は……生は……これまでの積み重ねは……無駄じゃないと……そう思いたい。いや、必ずそうして見せる」

その言葉は、入間君に対してというより、自分自身に向けて言っているようだった。

「……わ……私も同じです……。あなたの罪は消えないけど……功績もまた消えないんです……。あの瞬間“までは”、入間君は確かに仲間だった、その事実だけは絶対に消えないと思います……」

山村さんも同じように言葉を紡ぐ。

「……………」

吹屋さんは涙を浮かべたまま何も言わなかった。

俺は……。

俺は一体、なんて声をかければよかったのだろうか？

「……もう、どうでもいいですよ……」

入間君がそう呟いた直後、例のボタンがモノクマの目の前にせり上がってきた。

「結梨もない……。私も死ぬ……。そんな世界がどうなろうと……。……もうどうだっていい……」

「もう全部全部全部、どうでもいいんですよ……」

『イルマ ジョーンズ さんが クロに きまりました。オシオキを
かいし します』

「あーっ……はっはっは……あっ……ははははっ……」

とめどなく溢れる涙と共に、彼はもう一度笑う。

声はかすれ、喉は潰れ、彼自身の生き様であった”対話”など到底果たせないくらい弱々しい声で、笑った。

暗闇の中から鎖が伸びる。

入間君の視線が俺のそれとぶつかった。

「……あーあ………」

「いいなあ……」

それが、俺が彼から聞いた最期の言葉だった。



私が最初に結梨に出会った時、彼女に教えたのは宗教学のお話でした。

西洋宗教の終末思想に”怒りの日”というものがあります。

世界が終焉を迎える日、現世の歴史を生きた全ての人間は蘇り、その行いを審判されるのです。

審判を受けた人々は、永遠の命を得て神の住む天国へ。

或いは、未来永劫責め苦を味わい続ける地獄へ。

そのお話を聞いた結梨は、少し儂げな顔でこう言いました。

“天国に行っても地獄に行っても永遠に人生が続くなんて嫌だ”

“ 全てのものは、終わりがあるからこそ楽しく美しい。人も出会いも、記憶も人生も ”

…結梨。

私の愛しい結梨。

あなたがそう思うのなら教えてほしい。

私が受けている苦しみには、責め苦には、終わりはあるのでしょうか？

【Die^怒riのira^日e】

これまでに翻訳してきた数多くの言葉が脳内に響き渡ります。

他民族を、人種を、嗜好を憎み、攻撃し、虐殺してきた者達という言葉。必死に言語を紡いでも、心は紡げなかった者達という言葉。

ここはどこで、私はどうなったのでしょうか？

ぼんやりと薄暗い視界が開かれていきます。

私が目にしたのは、全く見たこともない異世界でした。

ですが、今更何を見ようと驚きはしません。

驚くほどの心が、もう残っていないのです。

私のすぐ近くを荒れ狂う炎が舞い上がっています。

黒い瓦礫が私の前に立ちふさがり、その向こうに僅かに見える街並みは、とつくの昔に廃墟と化してしまったようでした。

空は血のような真紅に染まり、遠い空に巨大なキノコ雲がそびえ立っています。

見たこともない機械が空を飛び、四つ足の歩行機械がレーザーを撃つて子供を焼き殺していました。

私には分かりません。

この世界が何処なのか、そもそも私が見ている光景が事実なのかどうかも。

ただ一つ感想を言うならば……これは世界の終焉と呼ぶに相応しい姿でした。

怒りの日、その日は
Die s i r , die s i l l a
世界が無に帰す日であ
s o l v e t s c l u m i n f a v i l l a :
たさいデとシヴィラの予言の如く
t e s t e D a v i d c u m S i b y l l a

全てが私が住んでいた世界とは無縁に思える世界。

しかし、そんな世界で私は確かに目にしたのです。

廃墟の中で、一人何かを語っている少女。

あれは――。

しかし、私の思考は一筋の光によって一挙にかき消されました。

思考どころか、視界もかき消すほどの凄まじい眩さでした。

私の目に視界が取り戻された時、私の目の前には数えきれないほどの人がごった返していました。

体格も、着ているものも、あふれんばかりの人がどこからともなく現れ、皆が膝を折って祈りを捧げています。

そして眩い光の中心にいたのは、白いローブを身に纏った神々しいモノクマでした。

神々しいというより……神そのものと言って差し支えない様相でした。

人々が祈りを捧げている先は、間違いなくそのモノクマだったのです。

Qu^審ant^判us^者 t^者re^者mor^者es^現t^現 fut^現urus^現,
qu^全ando^の j^がudex^嚴 est^く v^裁ent^かurus^れ,
c^そuncta^の s^しtrict^さe^は d^如isc^何uss^ほurus^ど ^で ^あ ^ろ ^う ^か

モノクマが手を振り上げると、大地が割れてマグマが溢れ出し、人々を飲み込んでいきます。

もう一度手を振り上げると、淡い光が天から伸びて人々を天国へといざないます。

私がどちらになるのか、考えるまでもありません。

とうに力尽き果てていた私は、人々の群れに押し潰されそうになりながら、ガクリと膝をつきます。

マグマのしぶきが熱気となって私の肌を徐々に焼いていきます。

その時、私の肩に暖かい手が触れました。

私は俯けていた顔を静かに上げます。

嗚呼、神よ――。

思わず私はそう呟いてしまいました。

私が目にしたのは、神の奇跡。

天使の羽を生やした、神々しいくらいに美しい結梨が……そこにいたのです。

私の全て。

私の結梨。

罨でも、幻でもいい。

もう一度、もう一度だけ、その手を……。

全てを忘れて結梨を抱き締めようとした私は、気が付くと真紅に染

まっています。

結梨が吐いた血によって。

結梨の白い肌を抉って血塗れの刃をのぞかせる“メス”。

結梨の背後で顔をゆがめて笑う白衣の男。

釜利谷三瓶。

舌を出して呻き苦しむ結梨の体から、何本も何本もメスが突き出ていきます。

天使の羽は赤く染まって根元から折れ、可愛らしい瞳は白く染まって彼女の第二の死を物語っていました。

私の全ては奪われました。

私の全ては壊されました。

流す涙すら枯れたまま、私は血とマグマの地獄の中へと引きずり込まれていきます。

高らかに笑っていたはずの釜利谷三瓶も一緒に、深い深い地獄の底へと。

突然に恍惚を崩され、混乱と恐怖を携えたまま激痛でもだえ苦しみ、白骨化していく釜利谷。

私は何も感じませんでした。

マグマが私の身を焼こうと、血の池が私の体内に入り込んでかき回そうと、暴徒によってバラバラに引き裂かれてゆく結梨が視界の端に入ろうと。

もう私は何も思いませんでした。

何もない。

私にはもう、何もないので。

怒りの日、その日は
D i e s i r , d i e s i l l a
世間が、無に帰す日
s o l v e t s c l u m i n f a v i l l a
| | | | |
審判者とシムライの予言の如く
t e s t e D a v i d c u m S i b y l l a
| | | | |
全ての者たちが敵しなく裁か
Q u a n t u s t r e m o r e s t f u t u r u s
| | | | |
恐ろしいことが如何にひどく
c u n c t a s t r i c t e d i s c u s s u r u s
| | | | |
白骨化した人間君と釜利谷君。

裁かれて地獄に落ちた人間は永遠に責め苦を受け続けると言い伝えられています。

私の責め苦に。
私の苦しみに。

私に終わりはあるのでしょうか？



超現実的な世界。
白骨化した人間君と釜利谷君。

その映像だけを残して、五回目のオシオキは幕を閉じた。

「……ロシアイは終わらないんだな……」

前木君がポツリと呟いた。

「…最後の一人になるまで……」

誰も彼もが、絶望に疲れ果てていた。

それも当然だろう。

数多くの困難と絶望を超えた先に待っていたのが、この事件だったのだから。

『うぶぶぶぶぶ!! 今回も最高だったね!! やっぱり色恋沙汰こそ……あれ? どうしたの? 前回の裁判が終わった時の超絶敵意のこもった視線はどこに行っちゃったのさ!!』

モノクマの呆れたような声に答える人はいなかった。

みんな、重い足取りでエレベーターに向かう。

明日も続く。

希望のないロシアイが。

いつまでも続く。

俺達が全滅するまで。

「止まりなさい」

そう、そのはずだった。

「全員、裁判台に戻りなさい」

号令を発したのは小清水さんだった。

「……？」

誰もその言葉の意味を理解できなかった。

「戻りなさいと言ったのよ」

小清水さんは自らの言葉を反復する。

『何勝手に仕切ってんのさ。裁判はもう終わったんだよ』

「終わってなどいないわ。ひと段落しただけ」

小清水さんは静かに髪をかき上げながら言った。

「何を……始めるっていうんだ……」

俺は警戒のまなざしと共に彼女に尋ねた。

ふ、と彼女は笑い。

「反撃よ」

短く答えた。

『あの一、ボクの話聞いてた？ 裁判は終わったんだよ？ 裁判が開

催されなければこの場所は使えないんだよ』

「だから、その裁判を始めようと言っているのよ」

「伊丹ゆきみを殺害した真犯人であり、コロシアイ学園生活において
ルールを破った、このモノクマを弾劾するための裁判をね」

Chapter 5 (非) 日常編? 追憶編前編

葛西たちが絶望のコロシアイに巻き込まれる数か月ほど前。

——即ち、“人類史上最大最悪の絶望的事件”が発生し、世界が混沌と絶望に包まれてから間もなくのこと。

「…このタワーに来て、今日で一週間か…」

食堂の隅で、前木常夏がため息とともに呟く。

食堂に開けられた窓からは、遙か下界で崩壊を始めた都会を見渡すことができた。

「まだ一週間だっていうのに、もう数年間住んでるみたいな感じだよね…。ウチらはいつまでここにいればいいんだろ…」

前木の向かい側の席に座る亞桐莉緒が、不安そうにそう呟いてコーヒーを呷る。

「…なんか、全部夢みたいだよな。俺らの後輩がヤバいこととして、一瞬で世界中が大混乱に陥って、何かを考えてる暇もなく俺達はこのタワーに入れられて…。土門が建てた新築の校舎兼シンボルタワーが、まさか臨時シエルターになるなんて思ってもみなかったよ」

「貴様ら、まだここにいたのか!」

苛立たしく放たれた怒声が二人の意識を食堂の出入り口の方へ向けさせた。

「“本校舎”の講師との通信回線が復旧したから視聴覚室に来说いと言ったはずだぞ」

そう言いながら御堂秋音が腕を組んで二人を睨みつける。

「…わりい、すぐ行く」

二人はすぐに席を離れ、視聴覚室へと駆ける。

『突然君達を新造のタワーに閉じ込める形になってしまっただけで本当にすまない。だが、学園の中も誰が敵で誰が味方か分からない状況だ…』

希望たる君達に危害を及ばせないためには、誰ともコンタクトを取らずにタワーへ運ぶしかなかったんだ……』

三人が視聴覚室に着くと、ちょうどモニターに映し出された講師と葛西達が会話を交わしているところだった。

「そんなこと言われたって、私達は何も知らないまま」

詰め寄ろうとする山村の言葉を、葛西が手を挙げて遮る。

「…学園は今どうなっているんですか？」

そして、そう問いかけた。

『…今はこちらでも生徒達が籠城を始めている。とにかく外は“絶望”がうろついている状況だ、我々もさらなる対策を講じなければ…』
「失礼。敵が外だけにいるという思い込みは得策ではない……」
「と言ったら野暮でしょうか？」

そう口を挟んだのは、人差し指を立てて不気味な笑みを浮かべる夢郷だった。

『それは……考えたくない話だが、そもそもの発端が学園内にある以上疑わざるを得ない…』

講師の口調は見る見るうちに弱くなっていった。

『だが……例えば学園の関係者であっても、エレベーターのロックさえ解除されなければ誰もタワーに侵入することはできない。引率の講師を一人でも送れば良かったのだが、誰も信用できない状況ではそれも難しく……。辛いかもしれないが、事態が収束するまではそのタワーで耐えてほしい。食料とライフラインの供給、そして君たちの安全は責任をもって私たちが保証する』

「……………」

一同は納得したようなしていないような微妙な表情を浮かべるばかりだった。

「…おばあちゃんは…？ リャン様のおばあちゃんと…ファンのみんなは…？」

『不特定多数のファンの方は残念ながら把握しかねているが…。君たちの家族や関係者に関しては現時点で安否の確認が取れている。警察にも最優先で保護するよう呼び掛けている最中だ。とにかく、タ

ワーの下の世界のこととは全て私たちに一任して、君達はみんなで助け合ってこの苦境を乗り越えてほしい。希望のために……」

そこまで言ったところで、突如映像が途切れた。

「必要なことは聞いただろう。あまり長く電波を発すると“絶望”の連中に傍受される恐れもある。今後どうしても連絡したいことがある時だけ、私の監督の下で通信を許可する」

通信機器を操作しながら御堂がそう言い放った。

「……」

一同に重い空気が流れる。

「……こんな時こそ任務を果たさなければならぬというのに……」

「まあそう氣い張るなよ、リュウ。長い休暇だと思つてのんびりしよーぜ」

釜利谷がリュウの背中をポンと叩いて視聴覚室を後にする。

「みんなもつと氣樂に考えようぜ。要はここでただ過ごしてりやいんだろ？ 家族やダチのことも心配いらねーみたいだし、なんも氣に病むことねーじゃねーか」

「……あなたほど能天気でいられば良かったんですけどね」

皮肉交じりにそう答えたのは人間だった。

「信賴できる講師の情報といえど……。すでにここまで起きた事象が拙者たちの理解を遥かに超えてしまつているがゆえに何も信じられなくなつている……と言つたところでござりましょうか……」

と、丹沢がそれに続く。

「だが、信用しようがしまいが、今我々にできうることは何もない。状況を悲觀しても混乱と不信を生むだけだ。違うか？」

「……御堂さんの言うとおりですね。今はここで協力して暮らしていくしかないと思います……」

「でも、ただ暮らすといつても生活の方針は全員で共通のものを定めておいた方がいいと思うな。例えば、食料やインフラの供給だって本当にずっと安定しているか分からないわけだし、できる限り水や食料は貯めておいた方がいいと思うんだ」

葛西の提案に伊丹が頷く。

「そうね。考えようによつては、これは私たちに課せられた試練なのかもしれないわ。如何にして団結し、効率よく生存戦略を練ることができるか…。学園で培ってきた私たちの才能を生かす時が来たのかもしれない」

「それは流石に都合よく捉えすぎな気もするけど……。まあ何事もポジティブに考えるに越したことはないもんな。ちなみにこのタワーのことは心配すんな。震度七の地震にも余裕で耐えられる設計だ」

「土門殿がそう言うなら安心だぞよ」

「待てよ。心配するべきは生活方針でもタワーでもねーだろ」

前木の言葉で全員が黙り込みます。

「先生も言つてただろ。学園の中だつて誰が信用できるか分からないって…」

「でも、このタワーには学園の人も侵入できないから心配する必要はないって……」

「この中に既に絶望が潜んでいる可能性だつてあるだろ？ 例えば」

「前木きゅん」

前木の言葉を遮るように、津川が声を張り上げた。

「その話はやめるなり。みんなの感情を逆撫でするだけだつて分からないなりか？」

「……ああ、そうかよ。この期に及んで庇うんだな」

舌打ちと共に前木はそう吐き捨てる。

「既に学園内には生徒の死者だつて出てるんだ。もう状況は戻れないところまで来てるんだよ。俺達だつてなりふり構つていられないんだぞ…」

「だから、仲間を疑つて殺すのが必要だつていうなりか？ そんなの絶望と何も変わらない、いや絶望そのものなり！」

「短絡的な考え方しかできない奴は嫌いだな…俺は」

「よさないか」

リュウの重みのある言葉が二人の間に割り込む。

「俺達同士で争いが起きてしまえば…俺も黙つてはいられなくなる。」

本来俺は絶望抹殺のために日夜働かなければならない身だ。俺の目の前で絶望に堕ちるような真似はしてくれな……」

「前木殿。津川殿。双方の言い分は後ほど拙者が聞きまするゆえ、今は感情を押さえてください」

と丹沢が続くと、前木はため息とともに顔をそむけた。

「フン、下らん……。いつまでも子供のような喧嘩を続けるなら、私は部屋に戻るぞ」

冷え切った空気に呆れ果てた御堂が視聴覚室を後にする。

「…俺もムキになりすぎた。頭冷やしてくるよ…」

続けて前木も速足で部屋を出ていく。

「ちよちよちよ、ちよつと〜?!?!?」

前木が部屋を出るのと入れ替わるように、甲高い声の主が視聴覚室に入り込んできた。

「あちきをハブって何をやってるでありんすか〜!!」

「吹屋様……。私達は何度も何度も、声が枯れるくらい起こしましたよ……。それなのにあなたときたら……」

飛び込んできた吹屋を見て、入間がため息交じりに言った。

「ちよつと寝坊しただけでありんすよ〜!!」

「とても大事なお話だったんだがね……。せつかくの機会だ、吹屋君。ここで何があったか僕が伝えてあげるよ。この後二人つきりで休憩室へ」

「ユメちゃんはヤダ!! ユキマルがいいでありんす!!」

「はは、参ったなあ……。まあ暇だからいいけどさ……」

「男女で二人きりとは見過ごせません……。拙者も同席させていただきまするよ」

「じゃあ吾輩も〜」

「結局大所帯になってるじゃねえか……」

吹屋喜咲の参入で少し緊張がほぐれる一同。

「…とところで」

話がひと段落したところで、夢郷が切り出す。

「小清水君もまだ起きてこないのかい？ さつき呼びに行つた時も返事がなかったようだし…。そもそもこのタワーに移つてからほとんど姿を見てない気がするんだが」

「…きつと三階の植物園にでもこもっているんですよ」

山村が口をとがらせながら答えた。

「じゃあ彌生ちゃんにもここの話伝える人が必要だよな？ ウチ、植物園に行つてくるね！」

言うが早いか、亞桐が視聴覚室を飛び出す。

「…みんな、そんなにやよ様が気になるでありんすか？」

「そんなにつて…。小清水様は私たちの大切なクラスメイトではありませんか。仲間外れにするわけがないでしょう」

「仲間外れ、ねえ……」

「はいはい、不穏な話はもうしない！ みんな、それぞれやるべきことをするなりよ！」

津川がパンパンと手を叩くと、その言葉に従つて各自解散していった。



深夜。

白衣を着た1人の男が美術準備室の薄壁をスライドさせて開き、閉め直して奥の階段を駆け上った。

「わりいわりい。まえなつと安藤に誘われてポーカーしてた」
そう言いながら男が管制室の扉を開くと……。

二人の女性が彼を出迎えた。

「よう、”絶望”として集まるのは久しぶりだな」

男——”超高校級の絶望”、釜利谷三瓶はそう言いながら部屋の

中を進んでゆく。

「あなたが時間を守らなかつたところで、今更驚く人なんていないじゃないの」

黒ずくめの格好をした生気のない女性が釜利谷にそう言い放つ。

「それよりい、今日の常夏……とつても可愛かつたわよね……！ あの苛立たし気な顔……。絶望に濁り始めた瞳……。……ふふっ、ふふふふふふ……。……」

黒ずくめの女性——”超高校級の絶望”、伊丹ゆきみは想い人の記憶に胸をときめかせ、白い顔に恍惚の表情と妖艶な笑みを浮かべる。

「相変わらず気色悪いな。それでいてみんなという間は昔みたいに冷静な姉御気取りで振舞ってんだから余計に薄気味悪いぜ」

吐き捨てるようにそう言うと、釜利谷は椅子にどっかりと腰を下ろす。

「……無駄話はそれまでにしておけ。我々の存在も、いつリユウや入間ジョーンズに気付かれるか分からんのだぞ」

作業服姿でインカムとヘッドホンをつけ、情報機器とモニターを制御する少女——”超高校級の絶望”、御堂秋音が二人に釘を刺す。

「心配すんなよ。ああいう頭いい奴らが釘付けになるように、ちよつとずつパソコンや資料以外の世界のことを混ぜてあるんだ。……どうせいつか消す記憶だ、多少知られたって痛くもかゆくもねえ」

「例の”計画”が始動したら、私も記憶を消されるんでしょう？ 怖いわねえ、秋音♡」

椅子ごと後ろから抱きつく伊丹に、御堂は「離せ」と吐き捨てる。

「……私は貴様の担当分野については何も知らないが、その”計画”とやらは順調なのか？」

「まあな。今んとこ全部脚本通りってトコだ」

不気味な笑みと共に釜利谷はそう答えた。

「…フン。まあ好きにするがいいさ。私は私の野望を叶える環境さえ用意してくれば文句はない」

キーボードにコマンドを打ち込みながら御堂は呟く。

「家族を蘇らせるんだっけ？　もう技術もマシンも揃ってるんだから、いつでも叶えられる願いだろ」

あくび交じりに釜利谷が言うのと、御堂はため息とともに顔を背ける。

「…貴様には分からんだろうが、まだ足りん。人間として十分なレベルを再現できていても、私の記憶の中に残る秋来^{あきら}とお母様でなくてはならない…。寸分の狂いも許されはしないのだ」

そう呟く御堂の語調には僅かに鬱屈した感情が込められていた。

「家族なんていなくなっただって秋音には私がいるのに：♡　ねえ、私を愛してるって言って…？」

「離れると言っているだろうが!!」

まとわりつく伊丹を平手打ちすると、御堂はモニターへと向き直る。

一方の伊丹は、ぶたれた頬を撫でながらもおも狂わしい笑みを御堂の方へ投げかけていた。

「…：それより今日通信回線が回復したことで、貴様が前言っていた後輩との通信も可能になっっているが、繋ぐか？」

「それを頼もうと思っただんだ、話が早くて助かるぜ。今から言うチャンネルに繋いでくれ。学園の脳科学研究所の専用チャンネルがあるんだ。施設が無事ならアイツが今もいるはずだ」

「こんな真夜中に通話して大丈夫なお…？　寝てるんじゃない？」

「アイツの超人力をナメちゃいけない。一日30分も寝ないで一晩中研究し続けるようなバケモンだ。きつと今も必死で研究してるだろうさ。…なんてったって、あいつの大好きな“希望”の危機だもんな」

釜利谷はにやりと笑う。

「では繋ぐぞ」

御堂が通信機器を操作すると、目の前のモニターに途切れ途切れの

映像が映し出される。

「…前にも言ったが、今から話す奴は“絶望”じゃない。変なそぶりは見せないように気を付けてくれよ」

釜利谷が注意を促しているうちに、次第に映像は鮮明さを取り戻していった。

『…あ、釜利谷センパイ。生きてたんすね』

「つたりめーだろ。こちとら地上1000mで無理矢理ノート生活させられてんだよ。むしろお前こそよく無事だったな」

画面の向こうに映ったのは、眼鏡をかけて茶髪をサイドテールにした女子生徒だった。

『まあ正直アタシが生きよーが死のーがどうでもいいんですけど、アタシの研究で“超高校級”のみんなを助けないといけないんで。それまではひとまず死ねないっすわ』

「流石の根性だな。だが、お前に死なれちゃ俺も困る。お前の頭脳は俺すらも遠く及ばない世界にただ一つのモンだ。俺は宗教なんぞに興味はなかったが、学園の奴らがお前のことを“神への反逆”って呼ぶ気持ちも分かるぜ」

『……はあ』

「お前はただの“超高校級”じゃない。“超高校級の才能”自体を生み出して、コントロールできるようになった。お前が持っているのは“才能を超えた才能”なんだよ……」

「“超高校級の『超高校級』研究家”の名は伊達じゃねえな、潤田」

『どーしたんすか、久しぶりに話したかと思っただら』

“超高校級の『超高校級』研究家”——潤田^{うるた}希望^{のぞみ}は呆れたような笑みを浮かべた。

「うふふつ、この子がアナタの後輩さん…？ ひひひつ、かわいいわねえ……。挟りたい……！」

後輩の姿を見た伊丹は狂気的な笑みを漏らしながら、画面に顔を摺り寄せる。

『ヤバい人いると思ったら〃超高校級の薬剤師〃の伊丹ゆきみさんじゃないっすか。ひよつとして先輩の彼女っすか?』

「馬鹿言うな。ただのクラスメートだよ」

お茶を濁しながら釜利谷は伊丹の襟首を引っ張って画面から引き離す。

「変なことすんなって言っただろ…。お前は引っ込んでろ」

潤田に聞こえない程度の小声で釜利谷が呟くと、それを察した御堂が伊丹を部屋の奥へと引っ張り去った。

『…まさか、せっかく通信が繋がったつてのに同級生の紹介をしたかっただけってことはないっすよね?』

「悪い悪い、前置きが長くなっちゃったんだ。話したいのはお前が手に持つてる〃ソレ〃だよ」

釜利谷が見つめる先には、潤田が手にした小さな電子メモリーがあった。

「そんなに入ってるんだろ? お前の発明品が」

『そつすね。どうせこのことだろうと思つて用意しといたんすよ。でも、今となつちやコレも何のために作つたんだか…』

「いや、こんな時だからこそ必要なんだろ。そいつは人類の希望を紡ぐ種になる。〃超高校級の才能〃、それを電子化して人工知能に応用したのがお前の発明——」

「究極の人工知能、アルターエゴⅢだろ」

『つつつてもまだ試作段階で、再現できる才能もほとんどないんすけどね。今アタシの手元にあるやつには、この前実験で入れた〃才能〃が入ってます』

「そうそう。欲しいのはソレだよ。何とかしてこっちにそのメモリーを届けてほしいんだ。そうすればより安全なこの場所で俺は俺の研究を進められる……」

『高さ1000mのタワーにどうやってコレを運ぶんすか? 言ってますすけど、今この状態で学園を抜け出すなんて無理っすからね』

「そんなことしなくたって、学園からココにモノを流すルートがあるだろ。食料や水がどこから運ばれてると思ってるんだよ」

釜利谷の言葉を受けて、潤田は目を丸くした。

『あ、食料の自動搬送路を使う方法があったんすね。流石先輩。でも、そんなことするくらいならそもそもフツーに講師とかに頼んで送ってもらえませんか？』

「そううまくいくかっての。前にも話したが、学園の中にだって俺達の敵である“絶望”が紛れてるかもしれないだぞ？ できる限りアルターエゴⅢの存在は知られない方がいい。んなモンが絶望の手に渡ったらどんな風に使われるか分かったもんじゃないからな」

『…まあ、言われてみればそうかもっすね。じゃあこのメモリーをタワー行き食料搬送路に忍び込ませてそっちに送る方向で考えときます。詳細は後で改めて教えますけど、油芋の空き袋とかに入れて送るんで、間違えないようにしてくださいね』

「上出来だ。流石は俺が信頼する後輩だよ」

釜利谷は笑みを浮かべる。

『…先輩の用事が終わったなら、今度はアタシから質問いいつすか？』

ふと、潤田がそう呼びかける。

「あ？ なんか聞きたいことあんのか？」

『アルターエゴⅢをどう悪用する気っすか？』

「……………」

釜利谷達の空間に数秒間の沈黙が走る。

「人聞きが悪いな。このタワーの中は外界から隔絶されてて安全だ。それに俺も自分の研究を進めるうえでアルターエゴⅢが必要なんだ。平和と希望のためにお前の力を借りたい。…この説明じゃ不服か？」
『……そっすか。まあ、何もしないと状況は変わらないっすからね。変なこと聞いてすいません。また連絡するんで、今夜はこれで失礼します』

「おう。くれぐれも無茶はすんなよ。何かあったらすぐに報告だ。頼りにしてるぞ」

潤田が釜利谷の映像に小さく頷くと、映像は途切れた。

「……妙に鋭い女だったな」

「そうなんだよ。アイツに正体が気付かれねえか心配でならねえ」

御堂の言葉に、釜利谷は頭を掻きながら答えた。

「ま、とりあえず目当てのブツが届くなら問題ねえ。そいつを使って“0号機”と“ヌイグルミ”に才能を付け足せば本格的に計画が始動できるってワケだ。0号機のメンテは大丈夫か？」

「…0号機の状態は貴様が見たとおりだ。運動能力、耐久性、知能、感情、全て問題ない。今後は私のメンテナンスすら必要はないだろう。ところで、ヌイグルミというのは何のことだ？」

「ああ、盾子様が作らせたコロシアイのマスコット兼雑用ロボットだ。実際のコロシアイはそいつを使って運営させるつもりだ。アルターエゴ用搭載機能もデフォルトで備わってるから、潤田からのブツが届いたらお前にアルターエゴⅢを載せてもらおう」

「それは構わんが…。そんなロボットに一体どういう才能を載せるというのだ？ さっきの後輩の話しぶりから推測するに、現時点でアルターエゴⅢが持っている才能は一つだけのようなだったが…」

「そいつは0号機用の才能だ。ヌイグルミ用の才能はここで調達する」

そう言つて釜利谷は部屋の隅に置いてある重厚な箱からヘッドセットのような機械を取り出した。

「俺達“希望ヶ峰脳科学研究チーム”がただ脳みそをいじくり回して遊んでるだけの集団だと思つてもらつちや困るぜ。こういう時のためにいろんなモンを作つてたんだ。こいつは頭にはめた人間が持つ“才能”を電子情報に変換する機械でな…。こいつで抽出した才能をアルターエゴⅢに読み取らせることで、その人間と同じ才能を持つアルターエゴⅢが完成するってワケだ」

「本当、なんでもアリなのね」

伊丹がくすくすと笑う。

「だが、こいつの記憶媒体に使われている金属が地球に数グラムとない希少品でな…。この機械で読み取れる才能は一つだけなんだ。だ

からこのタワー内にいる誰か一人の才能を貰ってヌイグルミに搭載させるワケだが……」

「……………」

「そう怖い顔をするなよ。才能を貰う奴はもう決まってるし、お前でも伊丹でもねえ。それに、この機械を使つたつて別に才能が無くなつちまうわけじゃねえ。ただそのまんまの才能がコピーされるわけだ」
「聞けば聞くほど理解ができんな……。貴様らの目的は希望と呼ばれる生徒たちにコロシアイをさせて世界を絶望させることだろう？ 0号機の存在もヌイグルミとやりに才能を移す行為も、コロシアイを進めるという目的と何ら関係が無いように思えるが……」

御堂の疑問を聞くと、釜利谷は背伸びをして立ち上がる。

「そこらへんはな、このコロシアイ計画に協力してくれた連中との契約なんだ。俺はコロシアイの成就と並行してそいつらの依頼も進めなきゃいけないえ」

「なあに、それえ？ 初耳なんだけど」

そう言うが早いか、伊丹は瞬時に釜利谷に距離を詰め、頬が当たりそうなくらい顔を近づける。

「私に隠し事はしないでえ……？ 仲間、でしょお………？」

伊丹が持つ注射器の針が釜利谷の頬に近づく。

「おいおい、針を下ろせよ。死ぬのは構わねえが、今じゃねえ。別に隠そうと思つてたワケじゃねえんだ。ただ話すのがメンドクセーからよ」

釜利谷が両手を上げてそう言うと、伊丹は静かに針を下ろす。

「この計画は、絶望だけの力で進めてるワケじゃねえんだ。そもそもこんな都合のいいタワーを用意してもらったのだから、そいつらの力があつたからだ」

「まさか……土門隆信か？」

御堂の言葉に釜利谷はにやりと笑う。

「そうだな。あいつもそのうちの一人だ。まあ万事俺が上手くやるから、お前らは引き続きメカチエックとみんなの土気上げでもしててくれ」

そうやって釜利谷は部屋の出口に向かって歩き出す。

「あら。まだ全然詳しい話を聞いてないけど」

伊丹が目を細めて釜利谷を睨む。

「俺は20分以上連続で頭を動かすとパンクしちゃうんだ。話は明日でもできるだろ。今夜はゲームして寝る」

「ゲームにはいくらでも頭使えるのね。呆れちゃうわ」

「おい、釜利谷三瓶」

去ろうとする釜利谷を御堂が呼び止める。

「貴様が何をしようと黙認するが、約だけは違えるなよ。私はその“コロシアイ”とやらには参加しない。これだけ手を貸してやったのだ、文句はあるまい。貴様らがコロシアイを始めるころには私はここを出て“野望”の成就のために一人で開発を続ける」

「……ああ、何も文句はねえよ」

釜利谷はうつすらと笑みを浮かべて答える。

「…私の頭の中には0号機の緊急起動コードがあることも忘れるな。私には、0号機を緊急起動させて貴様らを葬り去ることも、貴様らの計画を葛西達に暴露して計画そのものを転覆させることもできるのだ」

「今更何をそんなに警戒してるんだよ。そんなに俺達の裏切りが怖いのか？」

御堂の脅しをものともせず不気味な笑みとともに余裕の言葉を述べる釜利谷に若干気圧されながらも、御堂は臆することなく言葉を返す。

「抑止力としての可能性を述べたにすぎん。貴様らと違って私は利害で“絶望”に与しているだけだからな。貴様らで言うところの土門隆信に近い存在だ。だからこそ、互いの利と不利は明確にしておくべきだろう」

「そんな冷たいこと言わないでえ、仲良くしましょうよ秋音え…。私達、同じクラスの仲間でしょ？」

顔を近づけてそう囁く伊丹に、御堂は一言も答えなかった。

「言いたいことはそれだけか？　じゃあ俺は戻るぞ」

そう言つて釜利谷は再び歩き出す。

「また進展したら声かけるからここに集まってくれ。じゃあな」
「行っちゃった。ふふ、でも秋音の心配も分かるわよ。私も彼にいいように利用されてるのかなって思う時もあるし……」

伊丹は自分の胸に手を当てながら呟く。

「でもね秋音、私はそれでもいいの。私はただ、絶望的に好きな人を絶望的に愛してたいの。最大最強の絶望の中で絶望的に強い愛で結ばれていただけなの。だから私の夢は既に果たされているの。誰にどう利用されようが、私の絶望的な愛がそこにあれば私はそれでいいのよ……」

「……伊丹」

狂おしいほどの笑みと共に自らの望みを述べる伊丹に、御堂が真剣な目つきで呼びかける。

「お前に私の生い立ちや感情が分からないのと同様、私もお前の常識が分からない。お前にとっての“愛”とは私にとっての“家族”にも近いものなのだろうが……そう理解しようとしてもひとつ解せないことがある」

「……？」

伊丹は大きな瞳を丸くして御堂の言葉に耳を傾ける。

「このコロシアイでお前か、お前が愛している男は死ぬかもしれない。……何故、それが許容できるのだ？ 最後に“近くにいられない”愛など、現実を伴わない虚構の思慕に過ぎないと……そうは思わないのか？」

「……うふふ。秋音は幼い頃に“家族”と引き剥がされたからこそ、“そういう常識”になっちゃったのね。“大切な存在は近くにいなければ意味がない”……でも私は違うの。例え“肉体”が消えても、“存在”が消えなければ愛は成就する……。私が愛する人にとって一生忘れられない存在になれば、私は愛する人の中で一生生き続けられる。そして、忘れられない存在にさせるための究極の手法こそが“絶望”なのよ……」

「信じあっていた仲間たちとのコロシアイ。希望と呼ばれていた生徒たちが互いを裏切り、騙し、殺し、絶望の沼に沈んでゆく。そんな状況の中で育まれた愛こそが私の望む愛。釜利谷君にどう利用されようが、コロシアイさえ起きてくれるなら私はそれだけでいい」

「…だが、コロシアイに先立ってお前も今持っている記憶を消されるのだろうか？ 今言った目的を忘れずに保持していられる根拠はあるのか？」

「大丈夫。例え記憶を消されても、私はきつと自力で思い出す。いえ、記憶が蘇らなくても“愛”は必ず抱くはずよ。そしてまた常夏を好きになる。それだけは絶対に変わらない。…“愛”は“記憶”よりもずつと奥底に存在しているものだから」

「……………そうか」

御堂は短く呟いた。

「それに、常夏はきつと死なないわ。“脚本”のことは詳しく知らないけど、それでも何故か常夏は死なないって確信できるの。“幸運”だからかしらね。あと、私が死しているのは別に常夏だけじゃないのよ？ もちろん秋音もたくさん愛しているし！」

再び伊丹は椅子ごと御堂を抱き締めるが、もう御堂はそれを引き離そうとはしなかった。

「じゃあ、私も寝るわね。おやすみ、秋音！」

伊丹は御堂の頬にキスすると軽快な足取りで部屋を後にした。

「……………」

御堂は椅子に腰かけたまま、真つ暗な画面を呆然と見つめながら思考に耽っていた。



釜利谷達と潤田の通話から一夜明け、タワーの中の生活は新しい一日を迎えた。

「昨日みたいな重苦しい空気は嫌だからな！ 今日男子全員でバスケするぞ！ 大ホール集合な！」

「前木君、俺そういうの苦手だつて言ったじゃん……」

「葛西殿！ 時には体を動かさねば健康にも悪いのですぞ！ 拙者がエスコートいたしますゆえ、一緒に運動に励みましようぞ！」

「エスコートできるほどうまくないだろお前……」

男子勢がそんな会話をしているのをよそに、食堂の隅の方で漫画を読み漁る安藤に津川が駆け寄っていく。

「ねえ、みー様」

「ほあ〜？ どうしたのだぞよ？」

「みー様は……このみんなのこと、好き？」

津川は真剣なまなざしでそう問いかけた。

突然の意味深な問いに「？」と首をかしげる安藤だったが、数秒の沈黙ののちにこう答えた。

「もちろん大好きだぞよ！」

「本当なりか？ 全員一人残らず好き？」

「みんなとつても面白い仲間たちだぞよ！ 一人残らず好きだぞよ！ でも……一番好きなのはリヤン様だぞよ！」

そう言つて両腕で津川を抱き締める安藤。

「……そっか。良かったなり。…ねえみー様、リヤン様と約束してほしいなり」

津川は安藤の両眼をしっかりと見つめながら呟く。

「みー様は何があつてもリヤン様の、そしてクラスメートみんなの味方でいて」

「……？ もつちろんだぞよ！」

問いの真意をはかりかねつつも、安藤は元気いっぱいになんか答えた。

「ありがとうなり……。絶対に、リヤン様がみんなを助けて見せるからね」

「リャン様が、みんなの希望になるからね……」

絶望に負けぬと決意し、籠城を続ける彼らにも…。
絶望の魔の手は、確実に伸び続けていた。

「久しぶりに見たぜ、小清水」

図書室で資料を漁る小清水に、釜利谷が背後から声をかける。

「ひいつー！」

いきなり声をかけられた小清水は上ずった声と共に倒れ込む。

「ここ数日俺らから隠れて何してたんだ？ 調べものにしちゃ随分危ねえモンを見てるみたいだが」

釜利谷が小清水の手から奪い取ったファイルには、人間に対して凶悪な効果を持つウイルスや細菌が一覧にしてあった。

「か、返して……」

小清水は目から涙を浮かべながら弱々しい声で抵抗する。

「こんなモンを調べてどうすんだ？ このファイルが虫とどう関係するんだ？」

「うう……う……」

上手く答えが出で来ずにしどろもどろの言葉を発する小清水。

「そうそう。お前は元来そういう女だったよな。最初の方は強がつて隠してたが、本当のお前は弱くておどおどしい態度のムカつく奴だ」
「ぐ……ぐ……めんなさい……」

小清水はそう呟きながら床に座り込んで涙ながらに頭を下げる。

「おいおい謝るなよ。お前は何も間違ったことはしてねえだろ。俺には全部わかってんだぞ」

「……………？」

「お前、俺と伊丹と御堂がたまに夜に会ってるの、知ってんだろ？」

その言葉を聞いた瞬間、小清水は血相を変えて後ずさる。

「あ、ま、待って……ち、違うの……偶然……偶然通りがかって……」

「つまりお前は、『絶望』^{おれたち}の素性にも気付いちまつてるワケだ」

「あああ……。ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……!! お願いだから……お願いだから殺さないで……」

小清水は両手と頭を地面に擦り付け、命乞いをする。

「だから謝るなよ。俺はお前のことを信頼しているんだ。お前がいつ気付いたかは知らねーが、お前が俺達のことを誰にも話してないのだけは事実だからな」

「そ……それは……」

「土門曰く、お前は脚本のカギを握る大事なキャラクターだ。記憶と一緒に多少性格もいじらせてもらうが、コロシアイの中ではお前は八面六臂の活躍をしてくれるだろう」

「……コロシアイ……私は……」

「なあ小清水。コロシアイってのは一見絶望的なイベントにしか見えねえが、上手くやれば自分の好きな夢をかなえる場にもなるんだ」

釜利谷は小清水の肩に手を置いて囁くように呼び掛ける。

「小清水。お前の『野望』はなんだ」

「……」

「恐れることも、恥じることもねえ。『絶望』はいつでもお前の味方だ。お前の願いは……お前の悲願は……お前の『野望』はなんだ？」

「わ……私は……」

小清水は肩を震わせ、涙をこぼしながら呟いた。

「滅ぼしたい……。この世に跋扈する人間を……一人残らず滅ぼしたい……」

「……叶うといいな。応援してるぞ」

その言葉を残して、釜利谷は図書室を去っていった。

誰もいなくなった図書室に呆然と立ち尽くす小清水。

「……っ！ ゲホッ、ゴホッ……！」

突然せき込んだかと思うと、口に当てた手を覗き込む。
その手には、僅かにであるが血が付着していた。



希望タワーは、この日も変わらず絶望の中に佇んでいた。

Chapter 5 (非) 日常編? 追憶編後編



伊丹ゆきみには年の離れた姉がいた。

両親が多忙でありあまり触れあえなかった伊丹にとって、姉の存在は“親”であり“友達”であり“それ以上の何か”でもあった。

「ゆきみ、今日はどこにお出かけする?」

「お姉ちゃんとならどこでも楽しい」

「本当?? お姉ちゃんもだよ!!」

伊丹は姉を愛していた。

姉もまた、妹を愛していた。

はたから見ればさほど珍しくもない家庭だった。

その平穏な日々は突如として破られることとなる。

伊丹が小学校を卒業しようかという頃、姉は大学で交際していた男と別れた。

伊丹には詳しい事情が分からなかったが、よほど異様な別れ方をしたようだった。

その時、初めて彼女は気付いた。

姉が妹と同じくらいかそれ以上に、その男性を愛していたということ。

伊丹や両親がどれだけ慰めても、姉はただ泣きじやくるだけで聞く耳を持たなかった。

大学にも行かなくなり、部屋で自傷行為を繰り返すようになると、両親は精神科への入院を検討するようになった。

つい数日前まで何事もなく平穏だった家庭は、一瞬で重苦しい空気

にまとわりつかれることとなった。

「ゆきみ、またお出かけしよう」

思い悩んでいた伊丹にそう声をかけたのは、他ならぬ姉だった。

姉を慰めたい一心で、その申し出を伊丹は了承する。

それが伊丹にとっての“絶望”の始まりであるとは知る由もなかった。



葛西や前木達はタワーで各々の時間を過ごした。

楽しい時間は一瞬で過ぎ去り、あつという間に次の夜が訪れる。

「で、今夜はお前が相手ってワケだ」

植物園の中央広場に立つ釜利谷がそう言った。

「ん、昨日も誰かとやり取りしてたのか？」

そう答えたのは、ベンチに座る土門隆信だった。

「こつちの話よ。気にしないでちようだいね」

釜利谷の横に立つ伊丹が笑みと共にその言葉を投げかける。

御堂の姿はなかった。

「…話を始める前に、植物園の扉はきちんとロックしてあるか？」

「問題ねえ。外からは”施設メンテナンスにつき閉鎖”って表示されてるから力ずくで開けるやつもいねえだろ」

釜利谷の説明を聞くと、土門は少しベンチから身を乗り出した。

「…よし、分かった。じゃあ例のものを渡すぞ」

そう言って土門は傍に置いてある薄汚れたカバンの中から、ホチキス止めされた数枚の紙を手渡した。

「第五の脚本」だ。状況によって多少ブレる可能性もあるが、大体その筋に沿ったモノになるはずだ」

「ご苦労さん。あれこれ言う前に目を通させてもらう」

「終わったら私にも見せてえ〜」

受け取った紙を次々にめくって読み進める釜利谷。

「…おお。喜べ伊丹。次はお前が主役だぞ」

「……………!!!」

その言葉を聞いた瞬間、伊丹の全身に衝撃が走る。

コロシアイの脚本で主役になるということ。

それが何を意味しているのか、想像に難くなかった。

「…………ふうん。第一案が伊丹クロの小清水被害者、第二案が伊丹被害者の入間クロと。どっちに転んでも伊丹はダメだな。まあ俺はとっくの昔に死が決まってるからなんとも思わねーけど、お前にとっては残念だったな」

「…………あら、そうなの。…………どんな死に方をするのかだけ聞かせて頂戴……」

「第一案だと”まえなつに近付く小清水に伊丹が嫉妬して殺害”、第二案だと”恋人亡き後、恋を育む伊丹とまえなつに嫉妬した入間が伊丹を殺害”だよ。…………これを読む限り、第一案と第二案だとこっちら提示する動機が若干違うみたいだが、どのタイミングで見極めるんだ？」

「…カギになるのは入間の状態だ。具体的な指標までは聞いてないが、その時になってモノクマが見れば分かるんだろう。俺はそれまでと同じように入間や小清水、伊丹がうまく動くように水面下で働く」
土門は淡々とそう答える。

だが、釜利谷だけが知っている。

この脚本が繰り広げられる時、土門は既に黒幕から切り捨てられていてこの世にいない。

土門を介さず、“契約主”から直接聞いた脚本でそう知らされていたのだ。

もちろん、それを教えるつもりもない。

それも”契約主”との約束の一つだからだ。

「…ああ、頑張ってくれ」

釜利谷は短くそう答えた。

と、同時に伊丹が崩れ落ちるように座り込んだ。

そして過呼吸になりながら両手で顔を覆う。

「おいおい大丈夫か伊丹。そんなにショックだったのか？」

釜利谷は呆れたような表情を浮かべて伊丹の顔を覗き込む。

「違う……違うの……」

伊丹は必死に呼吸を整えながら掠れた声で答える。

「嬉しいの……常夏に私の愛を刻んで死んでいけることが……」

伊丹の目からはぼろぼろと涙が零れ落ちる。

それは、彼女自身の純粋な“悦び”に基づくものだった。

「なんだ、嬉しすぎてへばつてたのか。人のことは言えねえが、とんだ

変態野郎だな」

「…お前達はこの脚本に不満はないんだな」

「いいんじゃないかねえか？ 伊丹も喜んでるし、いい感じに絶望的にもな

りそうだ」

釜利谷はヘラヘラと笑いながらそう言う。

「…だが釜利谷、お前もまたこの脚本の鍵を握っているんだ」

「あ？ この時には俺はもう死んでるだろ？ 蘇れつてか？」

「お前には伊丹と葛西達に向けてビデオメッセージを撮ってもらわなくちゃいけない。いくつかの脚本を見越して数パターン録画と録音する必要があるが」

「うえ、出たよ……そういうメンドクセーやつ……」

釜利谷はあからさまに嫌そうな顔をした。

「その映像の出来具合によっても脚本の出来が左右されるんだ。だるい気持ちは分かるがしつかりやってくれ」

「…モノクマに言わせるんじゃないやダメなのか？ 俺がわざわざ言わなきゃいけないことか？」

「この時点で葛西達にとって明確に“絶望”と判明しているメンツで、一番説得力のあるメンバーはお前しかいないんだよ。悪いがこの配役は譲れないな」

「はあ、分かったよ。近いうちに録画環境は整えとく」

髪をわしゃわしゃと掻き乱しながら釜利谷は答える。

「…で、ここから先は俺の勝手な感想だが」

と、釜利谷は話を仕切り直す。

「俺的には第二案の方がいいと思うんだが、確率的にはどっちになりそうなんだ？」

「…”アイツ”が言うには、よほどのことがない限り第一案になるみたいだ。第二案は確かに脚本としては第一案より数段重みがあるが、状況的に起こりうる可能性は高くないらしい。まあ実際は何が起こるか分からんから、第二案の準備もしっかりするつもりではあるけどな」

「…私はどちらでも構わないわ。どちらに転んでも、常夏にとって一生忘れられない女になれるから…」

真つ赤に染まった頬に手を当ててそう呟く伊丹。

「しかしここで死ぬ人間がパターンによって場合分けされるとなると、その次の脚本が難しいんじゃないか？」

「…いや、小清水も入間も、次の脚本では大体同じような動きをするらしい。もちろん大なり小なりの違いもあるが、根本から結末が変わるわけでなさそうだな。そこらへんは俺も詳しくアイツから聞いていないから曖昧だが…」

「ほお、こりや次の脚本を受け取るのが楽しみだよ。ま、せいぜい頑張れや。全部読んだから返すぞ」

そう言っただけで釜利谷は脚本の束を土門に突き返した。

「…こうして俺達だけで会うのも何度目かになるが、御堂には感づかれてないか？」

「心配すんなよ。あいつもあいつで夜は機械の改良で忙しいんだ。どっちかっていうと”絶望”としての活動よりそっちの方がメインだからな。お前が俺とコンタクトしてること昨日知ったから、今後は御堂個人からお前に対してコンタクトがあるかもしれないが、適当にはぐらかしてくれ」

「…分かった。御堂は”第二の脚本”の主演だ。なんとしてもコロシアイには参加してもらわなくちゃならん。ここで変に勘付かれて脱

走でもされたら大変だからな」

「へへへ……あいつ、0号機の緊急起動コードなんぞを切り札にしてて笑いそうになっちまったよ。俺がそれを上回る緊急停止コードをずっと昔から持ってたことも知らずによ。いかにお前が愛着を持って改造してようが、所詮は機械。機械は既定のプログラムにしか従わねえんだよ……」

釜利谷は肩を震わせて笑う。

「……じゃあ御堂のことは大丈夫だな。あと気がかりなのは……」

「……常夏の“幸運”……でしよう?」

「……………」

伊丹の言葉に土門は答えない。

「そーいや、まえなつの“幸運”が脚本にズレをもたらす可能性があるとか言ってたな。お前らが頑張って用意したその紙切れが無駄にならないといいな」

先ほど返した脚本の束を指さして皮肉を言う釜利谷に、土門は表情を変えずに答える。

「正直……俺は反対だったんだ。あの“幸運”がなければ脚本の制作はもっと簡単になるし、予想だにしないアクシデントに見舞われることもないだろう。だが……まえなつをコロシアイから外したらお前から二人が納得しないだろうし、“アイツ”も『彼がいらないと脚本が成立しない』なんて言い出す始末だ。そこまで言われたら反対もできねえだろ」

「うふふつ、ありがとう……。おかげで私も救われるわ……」

「結果オーライってやつだろ。結果が良けりやそれでいいんだ。その結果を完璧にするためにお前がいるんだろう?」

「ああ……。正直、お前たち“絶望”がここまでちゃんと協力してくれるとは思わなかった。結果的には“アイツ”の言った通りだったけどな」

土門は胸の内を語る。

「水臭いこと言うなよ。俺達は“ダチ”だろ? ずっと同じクラスで仲良くやってきたじゃねえか。これからも仲良くしようぜ。お互い

のためによ」

「……確認だが、このコロシアイさえ行われればお前たちの目的は果たされるんだな？ それだけでいいんだな？」

「おいおい、俺達の目的の話はもう何回もしてるだろ？ 俺達じゃなくってお前らの目的の話をした方が建設的だと思うがな。結局のところ、お前らの狙いはなんなんだ？」

釜利谷の視線が少し鋭くなった。

「俺達の目標はただの“絶望”。だからコロシアイさえ起こせればそれでいい。だがお前らの目的は“絶望”だけじゃないんだろ？ わざわざシナリオまで限定して事細かにセツティングする手の込みようだ、よっぽどすげえ目的があるんだろうなあ。その目的が絶望じゃないんだとしたら一体何だ？ もうそろそろ教えてくれないんじゃないかねえか？」

「うふふ。私からもお願いしたいわね……。私、嘘と隠し事は好きじゃないの」

「……別に言えないわけじゃない。ただ、言ったところで理解されるとは思えない」

「んなモン、聞いてみなきやわからんだろ」

「俺達の目標は“脚本の成就”。ただそれだけだ」

「まくたそんなよく分かんねえ言い方すんのか。おちよくんのも大概にしるよ？」

「おちよくるも何も、そうとしか言えないんだ。“アイツ”が考えることは壮大すぎて俺なんかには理解しきれない」

「うふふ、面白おい……。理解もできないのに従っているの？」

「……どうしてだろうな。俺にも分からん。でも、気付いたら俺は“アイツ”が生み出す世界に心を奪われていた。“アイツ”が何を成して何を残すのか、一番間近で見たくなっていたんだ。それほどに……“アイツ”の才能は恐ろしかった……」

二人に対して冷静にそう語る土門だったが、その声にはその言葉が虚構ではないと確信させる確かな響きがあった。

「お前たちにもあるだろう？ “絶望”とかよりももっと根本的で、

無条件に自分の心を突き動かすもの……。伊丹なら“愛情”、三ちゃんなら“友情”がそれにあたるんじゃないか？ 俺にとってはそれにあたるものがこの脚本だった。ただそれだけのことだよ」

「誰が道徳の授業しろって言ったよ？ やっぱお前とは分かり合える気がしねえぜ。……おつと、随分と長く話しちまったな。俺は部屋に帰るぞ」

唐突に釜利谷は踵を返し、土門に背を向ける。

「もう聞きたいことはないのか？」

「伊丹には昨日言ったけどなあ、俺は20分以上頭を使えねーんだよ。もう今夜はやめだ。これ以上考えると脳が腐る。じゃーな」

勝手に会話を終わらせたかと思うと、釜利谷は扉を開けて植物園を後にした。

「…伊丹は戻らないのか？」

「どうしようかしらね。あなたに聞きたいことはもうないけど、ちよつと寝るには惜しい気分なのよね」

手にした注射器を弄びながら伊丹は答える。

「自分の死が決まったのに、随分と落ち着いてるな。…まあ、“絶望”なんてそんなもんか」

「うふふふ。あなた…」 絶望”がみんなおんなじ思考回路だと思っちゃダメよ？ “絶望”にもいろんな“絶望”がいるの。それに、“絶望”の一員になっていなくても既に“絶望”に染まりきっている子もたくさんいるの……」

「例えば……常夏とか」

伊丹は人差し指を立てて嬉しそうに語り掛ける。

「……………あの件か」

土門が小さな声でそう言うと、伊丹はクスクスと声をあげて笑った。

「あれだけ真っすぐで、夢と希望をもって、みんなを引っ張ってくれる常夏があんなふうになっちゃうなんて……。うふふふ……常夏も結局は人間なのよね。聖者になんてなれはしない。…だからこそ私は常

夏が好きなの」

「……ある意味お前は……この脚本の登場人物の中では一番幸せなのかもしれないな」

土門はぼそりと呟く。

「そうね……。脚本を見る限り私は悲惨な死を遂げるようだけど……。でも、私の存在が常夏の心に刻まれるなら何の悲しみも不安もない……。常夏が背負ってゆく絶望に思いをはせながら、私はただ消えてゆく……」

そう言つて、伊丹は植物園の天井に向けて手を伸ばした。

その手の上に蝶が乗り、すぐに飛び立ってゆく。

「……三ちゃんも素直になればいいのにな。あいつも本当は羨ましいんだろ？ 愛したり、愛されたりするのがどんなモンなのか、味わってみたいんだろうな。でも、自分にそれが無理なのが誰よりも分かっているから、違う建前で行動してるかのように見せてる。……きつと、最後まで素直じゃないまま死ぬんだろうな……」

「いいじゃないの。彼はそうなりたくてそうなっているのだから。私は、彼のそういうところが好きなの」

「……そうか。やっぱり、お前たち“絶望”と“俺達”は違うな。でも、俺達が求めるものの一部は、間違いなくお前らの中にある。こんな時に言うのも変だが……。お前らに出会えて本当に良かった」

土門がそう言つと、伊丹はまたしてもクスリと笑った。

「……俺ももう戻ろぞ。また明日、な」

「いい夢を。彼にもよろしく伝えておいてね」

去つてゆく土門の背中に、伊丹はそう呼びかけた。

「ふふふっ」

一人きりになると、伊丹は軽快な足取りで小さな花畑の周りを歩く。

まるで公園に遊びに来た幼子のように、無邪気な顔で自然の中に溶け込んでいく。

不安なんてない。

たとえ記憶が消されても、私は私のみままであり続ける。

そして私は私のまま、死んでゆく。



ずっと引きこもっていた姉から外出に誘われた伊丹は、喜んで付いていった。

元気だったころのように、二人で手を繋いで最寄りの駅に足を運んだ。

だが、姉は電車に乗らなかつた。

姉はやけに神妙な面持ちでこう言った。

「結局、お姉ちゃんを本当に愛してくれたのはゆきみだけだったね」

「お姉ちゃん、もう疲れちゃったよ」

「お姉ちゃんね、あの人のこと、本当に本当に愛してたんだよ」

突然泣き出す姉に、伊丹はただ戸惑うばかりだった。

「ごめんね、ゆきみ」

そう呟く姉の声は、響き渡る蝉の声に負けそうなくらい小さく、弱々しかつた。

「お姉ちゃんと約束して。お姉ちゃんの方まで、みんなを愛してあげるって」

その言葉の真意も分からないまま、伊丹は頷く。

「ゆきみはいい子だから、きつとみんなに愛されるよね。だからゆきみもみんなを愛するのよ。約束ね」

姉のことを愛する一方で、尊敬する偉大な大人のようにも思っていた。

だが、それは違った。

弱く、小さく、身勝手に、愛に飢えた一匹の人間に過ぎなかつたのだ。

「愛してるよ、ゆきみ」

その言葉を残して姉は跳んだ。
そして、頬に当たる肉片となって帰ってきた。



何故姉がわざわざ自分を連れて自分の目の前でこんなことをしたのか、伊丹には分からなかった。

だが、時を経た今の伊丹には、その心が痛いほど分かる。
愛する人の目の前で、壮絶に散る。

そうすれば、もう二度と愛する人は私のことを忘れない。

大切な人の愛を失った姉は、妹に永遠に消えぬ愛を刻み付けたのだ。

嗚呼、反吐が出る。

姉を手にかけて運転手は、もう人並みの生涯は送れない。

姉の肉片を目の当たりにした子供は、その様を頭に刻み付けたまま大人になる。

どれだけ多くの、無関係の人間に無意味な苦しみを与えたのだろう。

たった一人の妹を、永遠に自分のものにするためだけに。

言葉で表しきれぬほど愚かで身勝手な死。

嗚呼、反吐が出る。

反吐が出るが。

私の心は、私の魂は。

私は永遠に姉のものだ。

もう一生、この愛を忘れられないのだから。

そう。

それこそが答えだったのだ。

常夏への、抑えられないほど膨大で破滅的な愛を彼自身に刻み付け

るには。

私自身が、姉のように死ぬしかないのだ。

そしてそのための最高の舞台が、このコロシアイの中に用意されている。

記憶を消された私は。

最初は愛のことも、常夏への想いも忘れて生きていくだろう。けれど、必ずいつか思い出す時が来る。

そして私は、最低の死によって最高の愛を紡ぐ。

私の死を見た常夏は、私のことを生涯忘れられない。

そして——常夏もまた、新しい誰かを好きになる。

その時、常夏も気付く。

究極の愛の形に。

そして常夏も、私と同じように命を絶つ時が来る。

愛と死の連鎖は永遠に続く。

ああ、なんて絶望的だろう。

常夏。

私の愛しい常夏。

どうかその愛おしい顔を見せて。

常夏。

私を忘れないで。

私を胸に秘めたまま、生きて。

常夏。

愛してる。

永遠に。



そして時はコロシアイの夜へと進む。

雨が降りしきるタワーの屋上。

そこで伊丹が自ら命を絶とうとしていた矢先、前木常夏たちは現れた。

「やめて!! 来ないで!!」

自らがクロになるしか、常夏を救う方法はない。

そう信じていたからこそ、伊丹はそう叫んだ。

しかし前木常夏は、伊丹をその腕に抱いて自殺を阻止した。

「俺は殺さない。誰も死なせない。お前も仲間も、みんな守ってここから出る。今そう決めた」

無限の愛に包まれ、甘く力強い言葉を囁かれた。

「二人で幸せになろう」

常夏なら、本当に脚本を打ち破れるかもしれない。

二人でここを出られるかもしれない。

そう伊丹が思った矢先……。

雷鳴とともに、爆炎が周囲を包んだ。

伊丹たちは空中に放り出され、天を舞う。

強い衝撃が引き金となったのか、その時、伊丹は――。

思い出したのだ。

全ての記憶を。

釜利谷から告げられた真実。
脚本の結末。

ああ。

そうか。

私が自殺なんてできるはずがなかったんだ。

「第一案だと」まえなつに近づく小清水に伊丹が嫉妬して殺害、第二案だと”恋人亡き後、恋を育む伊丹とまえなつに嫉妬した入間が伊丹を殺害”だとよ」

この爆発は、入間君が――。

全てを悟った時、伊丹はタワーの僅かな突起にしがみつき、高さ1000mの虚空に半ば身を投げ出されていた。

そうか。

絶望に身を墮とした私は”究極の愛”を求めて――。

「……………伊丹ツツ!!!」

叫び声と共に必死にこちらに手を伸ばそうとする前木の姿が見えた。

だが、その手が届くことはない。

伊丹は悟る。

これが“脚本”。

これが“運命”。

私はこうして死んでゆくのか。

しがみつく手は今まさに限界を迎えようとしており、人生最期の瞬間が刻一刻と迫っていた。



私は、自分が願った通りの死を迎える。

常夏の目の前で、常夏に永遠の愛を刻める。

愛と死の連鎖に、新しいバトンを繋いで消えていける。

全ては私の願い通り。

私の愛は成就したんだ。

私の、命を懸けた願いがかなったのだから。

心の底から喜ぶべきことだろう。

だけど、私は――。

嗚呼、私は馬鹿だ。

どうしようもない馬鹿だ。

ずっと気付いていたはずなのに。

私は。

本当の私は。

愛の連鎖を断ち切りたかったんだ。

常夏に同じ苦しみを背負わせたくなかったんだ。

こんなに苦しい愛じゃなくて、もつと違う形の愛を探していたかったんだ。

それなのに、私は。

“負の自分”に敗れてしまった。

“絶望”の自分に吞まれてしまった。

嗚呼、私は馬鹿だ。

姉と同じくらい、いやもつともつと、馬鹿だ。

なにが究極の愛だ。

こんなひとりよがりの愛なんて——。

「常夏」

残せる言葉は一つだけ。

クロの名を告げるべきかもしれない。

でも、それよりも伝えなきゃいけないことがある。

懺悔なんて、もう遅い。

でも、この連鎖だけは止めなければ…。

だから私は、こう言ったんだ。

「私を、見ないで」

その言葉と同時に、私の手は自然に滑り落ちた。
体が空を切って転落する。

1000mの虚空から、奈落の底へと一直線に。

遅すぎた。

思い出すのも、後悔するのも、遅すぎたんだ。

イヤだ。

こんな終わりなんて、イヤだ。

ごめんなさい、常夏。

ごめんなさい。

全部全部、私のせいだ。

私なんて存在しなければ良かったんだ。

一緒に落ちていく雨粒を目で追いながら、私は次第に感情を失っていった。

だんだんと時間が遅くなっていくような気がして、頭の中に穏やかなメロディが流れてきた。



伊丹の死から二時間ほど前のことだった。

夕食後、入間に渡すためのピアノ線を加工しようと、伊丹は工具を隠し持って音楽室に赴いた。

「……あ」

そこには先客がいた。

「あらゆきみん、あちきのピアノが聞きたくなっただんでありんすか？」
ピアノを弾く吹屋は嬉しそうな顔で呼びかける。

時間は少しある。

無理矢理追い出すのも不審に思われるだろう。

そう思った伊丹は、少し笑みを浮かべて答えた。

「ええ。私も気分転換に弾こうと思ったんだけど、吹屋さんの曲を少し聞かせてもらってからにするわ」

「えへへ。ゆきみんに感動してもらえるといいな」

吹屋はその言葉を言い終わると、一度手を止めた。

そして、再び彼女の手が動き出すと同時に新たな曲が紡ぎだされる。

暗く、静かで、しかし心の底を洗い流されるような美しさの旋律が、伊丹の胸の奥に流れ込む。

「ドビュッシーの……”月の光”ね」

「本当に……いい曲でありんすよ？」

珍しく、少し儂げな表情を浮かべながら吹屋は弾き続ける。

「この曲を弾くと……。妙に心が洗練されて、前を向いていけるような気がするんでありんす。あちきの本業は”嘶”でありんすけど……。音楽には音楽にしかできない感情の伝え方がある……。あちきはそう思っているでありんす」

「……そうね」

伊丹もまた、妙に洗練された気持ちで吹屋が奏でる曲を聴いていた。



空から大地に投げ出される伊丹の頭の中に、その旋律がレクイエムのように鳴り響いていた。

そして、彼女の心は次第に洗練されていく。

“絶望”にまみれ、“絶望”に消えていく人生の中で、自分は何を残すことができただろう。

旋律の中にこだまする前木常夏の声。



常夏。

私の愛しい常夏。

あなたはきつと勝つわ。

この裁判に勝って、黒幕と最後の勝負をする。

常夏。

私のせいで苦しめてしまつてごめんなさい。
償いきれない罪だけど、本当にごめんなさい。

私ね、とっても楽しかった。
とっても幸せだった。

あなたと出会って、同級生のみんなと過ごした日々。
すごくすごく、幸せだった。

だから、私のことはもう愛さなくていい。
私のことは忘れて、幸せになって。

あなたなら、きっと黒幕に勝てるから。

最悪の終わりだけど、最期くらいは胸を張って終わりたい。

さようなら、常夏。

ずっと

ずっと

◆◆◆
愛 して る

◆◆◆
凄まじい衝撃とともに、伊丹は空中を浮遊する自分の下半身と臓物

の欠片を見た。

そして三半規管の狂いを微かに感じつつ、永遠に意識を失った。

【Chapter 5 愛 c a n d o i t ! C a n 勇 d o
i t ? 完】

アイテムを入手した！

『天に人あり』

Chapter 5をクリアした証。

入間ジョーンズの愛読書。西洋の哲学者が記した哲学書で、宗教史にも触れられている。

入間は、結梨や夢郷とこの本について語り合うのが何よりも好きだった。

Chapter 6 たったひとりの最終裁判（けっせん）

Chapter 6 非日常編① 運命編



《ここまでの人物・派閥関係まとめ》

※Chapter 5の最終話までのネタバレを含みます。

※ストーリーの理解の補助になれば幸いです。



五度目の裁判は、四度の絶望を何とか乗り切った俺達にとってあまりにも残酷な脚本だった。

そんな俺達をあざ笑うかのように現れ、消えていった釜利谷君。

入間君の壮絶な叫びと壮絶な死。

もう何が正義で何が真実かも分からない、地獄のような裁判。

現実から逃げ出すかのように裁判場を立ち去ろうとする俺達を引き留めたのは、小清水さんの声だった。

「伊丹ゆきみを殺した犯人であり、ロシアイ学園生活においてルールを破った、このモノクマを弾劾するための裁判をね」

止まっていた思考は再び動き出す。

この事件には、まだ真実が眠っていたというのか？

『…え？ なに言ってるの？』

モノクマはキョトンとした表情で首をかしげる。

『今見たでしょ。伊丹ゆきみさんを殺した犯人は人間ジョーンズ君で、それが正解だったからオシオキされたんだよ。本人も認めてたし』

「本人がそう思っていただけよ」

「……………根拠は」

吹屋さんが口を開く。

「根拠は、あるんでありんすか」

彼女の敵意のこもった目線は、小清水さんとモノクマの双方に向けられていた。

「おかしいと思わなかったの？ 裁判の時のモノクマの振る舞いに対して…」

自分の席に戻ると、小清水さんは語りだす。

『勝手に議論始めないですよ！ 裁判を仕切るのはボクだって言ってるでしょ!?!』

「確におかしかったな…………。男子の部屋を強引に捜査しだしたのは」

モノクマの怒号を無視して前木君が答える。

俺も、確かに違和感を感じていた。

すでに捜査時間は終わっているというのに、男子の部屋に工具セットがあるかを調べたいと言い出した小清水さん。

どう考えたってそんなことができるはずがない。

それができるなら、裁判の最中に現場や個室を調べなおすことだってできてしまい、学級裁判というシステムそのもののバランスが崩壊してしまう。

だが、モノクマはそれを許した。

許すどころか、自ら調査する役を買って出たのだ。

あくまでも裁判の演出の一環という態度ではあったが、はたから見
ておかしいのは明白だ。

でも、考えるのが嫌になってしまったから……。

絶望に打ちひしがれてしまったから…。

俺はあの場では何も言わなかった。

「モノクマは入間ジョーンズがクロである証拠を私たちに掴ませた
かった。…すなわち、入間ジョーンズがクロでなければならなかつ
た」

『なにめちゃくちゃなこと言ってるのさ!! いい加減にしないと仏の
ボクも怒り出すよ!』

爪を振り上げて威嚇するモノクマだが、小清水さんは動じない。

「そうしないと脚本通りにならないから……ですか?」

一石を投じたのは山村さんの静かな言葉だった。

「ご名答。それを示す根拠は、さつき見せられた“釜利谷三瓶の映像
”。あの映像はこのコロシアイが起こるより前に撮影されたもの。
”だけど入間ジョーンズがクロになることを正確に言い当てていた”

「“そういう脚本”があらかじめ書かれていたから……ということだ
ね」

ようやく俺は声に出して言葉を発する。

脚本がどうか、今はもう考えたくもないことだけど…。

「あの映像を使うには、当然クロは入間ジョーンズでなければならな
い。だからこそ黒幕は自らの手を下して入間ジョーンズが殺人を犯
したかのように見せ、あたかも全ての事象が己の筋書き通りに進んで
いるかのように演出する必要があったのよ」

「…前回の裁判で土門が脚本の調整役をしているって言ってたな…。
土門を消した黒幕は、今度は自分自身でその役をやったってことか
……」

「ちよつと待ってほしいでありんす」

再び、吹屋さんの言葉が小清水さんの論理に水を差す。

「その話、ジョーちゃんがクロじゃないって前提で話が進んでるであ
りんですけど、それは一体どうしてでありんすか？　そこを覆すと今ま
での議論を全否定することになるし、モノクマが言った通りジョー
ちゃん本人も認めてたでありんすよ？」

人が変わったかのように冷静に論理を並べ立てる吹屋さん。

一方モノクマは、諦めたのか呆れたのか知らないが怒鳴るのをや
め、じつと何かを考えこんでいるようだった。

「その話をするには、まず今回のクロがどういった定義で決まってい
るかを考えなくてはならないのよ。あなた達と違って私は捜査をで
きなかつたから、フラットな目線で考えさせてもらえたわ」

「そういえば……小清水さんは捜査もしないで何を調べていたんです
か……？」

「その話は後。まずはクロの定義についてハッキリさせないと話が進
まないのよ」

「…伊丹さんが亡くなったのは落下による転落死。でも、その落下は
入間君が仕掛けた爆弾の爆風によるものだった…。だから、爆弾を仕
掛けた入間君が犯人っていうことになったはずだよ」

「その論理には飛躍があるのよ。そもそも、その爆弾の起爆剤となっ
たのは落雷……すなわち気象現象よ」

「だからお天道様が犯人だとしても言いたいんでありんすか？」

「…私が捜査の時間にあの管制室を調べていた理由がここに繋がる
の。あなた達も一度はあの部屋を見たでしょう？　あの部屋には何
があった？　あの部屋では何ができた？　足りない知恵を絞って考
えなさい」

捜査時間に小清水さんはずっと管制室にいた。

あの小清水さんがそんなことをするということは、管制室にはそれ
だけのことをする価値があったということだ。

思い出せ。

管制室で行える、かつ事件に関わらせることのできること。

それは一体――。

【ノンストップ議論開始】

小清水彌生：「今回の事件の直接の要因は…」

小清水彌生：「偶然その時に落ちてきた落雷

なのよ」

前木常夏：「でも、落雷はア報知ドリで予測されてたんだよな」

小清水彌生：「天候は予測できても、具体的に雷が落ちる瞬間までは予測できない…」

吹屋喜咲：「つまり何が言いたいんでありんすか!？」

山村巴：「落雷が落ちる可能性を制御できる方法があったということですか…?」

前木常夏：「いや…そんな方法があるとは思えねえぞ…」

「山村さんの意見に賛成する！」

【使用コトダマ：管制室の機能

二階の美術準備室から繋がっている管制室では、このコロシアイの舞台である特別分校内の様々な設備を操ることができる。

しかし監視カメラの映像切り替え以外はパスワードが必要であり、葛西たちには操ることができない。

「小清水さんが捜査時間に籠っていた管制室…。そこはもともと黒幕側の人間がコロシアイ生活を管理するうえで必要な機能を備えた場所だったんだ。」

俺は事件前のことを思い返す。

今日の日中、俺は動機を受けて小清水さんが無事か確認するために彼女を探していた。

小清水さんは管制室にいて、俺も少し管制室について調べたんだっ
た。

あの時、俺が管制室で見たものは――。

「……」

彼女の真意はともかく、俺はもう少しだけこの部屋を調べることにした。

実際にいじってみると、監視カメラの映像を切り替えるボタン以外は全て操作にパスワードが必要だった。

校内へアナウンスができるマイクも、パスワードが解けなければ意味がない。

他にも様々な機能を持つボタンやレバーが立ち並び、注意書きが施してある。

『大ホールの照明強度

大ホールの扉ロック

エレベーターのロック

全フロア換気扇スイッチ

避雷針の標高調整

全フロア気圧調整

……』

本当にいろんな機能が集約されているが、その中でも目を引くのは『エレベーターのロック』だ。

この機能を上手く制御できれば、エレベーターで地上に降りることができるかもしれない。

そうすれば、黒幕との勝負をせずともここを脱出できるかもしれない……？

「……………」

その中に答えがあった。

「そうか…。あの時俺は『エレベーターのロック』機能にばかり気を取られていた…。けれど本当に大事なものはそこじゃなかったんだ」

「葛西……いったい何の話だ？」

俺は、事件前に管制室で見たものについて簡潔に説明した。

「ふむふむ……16桁の数字のパスワードを解くことでそういった機能をあの部屋で操ることができると…」

「……で、この中にある機能のうちで一番大事なのは……『避雷針の標高調整』なんだ」

「…は？ 標高調整……？」

「つまり、避雷針の高さを管制室で自由に変えることができたということでありんすか」

吹屋さんの言葉に俺は頷く。

「そうなんだ。もちろんこの機能はパスワードを知らない俺達には使えないけど、モノクマ……すなわち黒幕は当然パスワードも知っているはずだ。つまり黒幕には、避雷針の高さを調節して落雷が当たりやすいようにした可能性があるってことになるね」

「……!!!」

みんなの表情に衝撃が走るとともに小清水さんがすました顔でモノクマの方を見る。

『…一応聞くけど、そんな理由でボクがクロになるとでも言いたいワケ？ 仮にボクが避雷針を動かしたのだとしても、入間君が爆弾を仕掛けたという事実は何も変わらないじゃない。どう考えてもクロは入間くんだよ』

「そのクロの選定の基準は何だというの？ その定義を明確に私たちに示していない以上、あなたがどう喚こうと独りよがりのこじつけにしかならないはずよ」

『いやいやいや。だって考えてみなよ。もしボクが避雷針を動かしたとしても、入間君が爆弾を仕掛けなかったら伊丹さんは死んでないからね？』

「でも、お前が避雷針を上げなければあの瞬間に落雷は落ちなかったかもしれないかった…。その論理ではクロを入間くんだけに絞るのは

無理だ。この事件は、クロを明確に特定することのできない事件だったんだよ！」

『あのさあ。今までさんざん議論や裁判を切り抜けてきたくせにそんなことで結論付けちゃうワケ？　今まで何度もやってきたことを思い出してみなよ。』指摘する時は根拠を添える”。ボクが避雷針を動かしたとして、それはあくまで仮定でしかないよね？　実際にボクが避雷針を動かしたという根拠は？　証拠は？』

「…根拠？そんなものが」

「小清水さん」

モノクマに反論しようとする小清水さんに俺は声をかける。

「俺に言わせてほしい…。お願い」

そう懇願すると、「好きにしろ」と言わんばかりに彼女は黙り込む。俺は深呼吸して語りだす。

「モノクマ。今はこれまでの裁判の常識を当て嵌めるべき場面じゃない。だってお前は俺達と同じ立場じゃない。お前は圧倒的な権力を持っていて、管制室のパスワードだって分かっている。恐らく管制室のデータには避雷針を動かした痕跡が残っているはずだけど、それも俺達には絶対に見ることができないし、なんならもうログそのものを消してしまっているかもしれない」

『……………』

「だからこそ、同じ条件で議論をしていたらダメなんだ。お前は出せる可能性のある情報を全部出して、100%完璧に自分が無実であることを証明しないと潔白とは言えないんだよ。そうじゃないと公平な裁判にならない」

『…………ボクが君たちと公平な裁判をする義務があるっていうの？』

「そうしなければ”お客様”が納得しない……………」

前木君がふと呟いた一言。

その言葉に、俺は何故か胸騒ぎがした。

「小清水が前に言っていたんだ。モノクマはあくまでもこのコロシアイを”脚本”と呼んでる。脚本ってことは、作品ってことで、作品ってことは”見せる相手”がいるはずなんだ。そもそも、こんな厳密に

ルールを定めてコロシアイをさせるのだって、“見せる相手”がいるって考えれば納得もできる。……そうだろ、小清水？」

「……………」

小清水さんは答えなかったが、その眼差しからは賛意を感じ取れた。

「だからこそ……黒幕は俺達と公平な裁判をしなきゃいけない。お前自身がありとあらゆる情報を出して、避雷針を動かしていないことを証明しなきゃいけないんだ。……さあ、やってみせてくれよ」

俺はモノクマを見据えてそう呼びかけた。

『……………』

モノクマは何も言わなかったが、代わりにモノクマの後ろにスクリーンが降りてくる。

スクリーンが降り切るとほぼ同時に、そこに映像が浮かび上がる。

短い英文と日付、時間を羅列した文章が何行も並んでいる。

「これは……履歴か？」

どうやら、管制室で操作したものの記録がこのデータの中に残されているようだ。

『日付は 1 day を“コロシアイが始まった日”と定義して記録してあるよ。今日の履歴はこれだよ』

“ ×× day 22:04 Lightning rod extended ”

「ライトニン……“避雷針”？」

「……を、extend……“伸ばした”、と」

「決まりね」

小清水さんの言葉が全てを物語っていた。

『……………この履歴はボクでも消せないんだよ。君たちの言うとおり、避雷針は事件の時間に上に稼働させたよ』

モノクマはいつもとは違う重く静かな口調でそう呟く。

「……………これでハッキリしたよね。今回の事件のクロを入間君と断定することはできない。つまり…モノクマが入間君をクロと断定したのは不正だったんだ！」

俺はモノクマを指さして糾弾する。

『……………』

モノクマは何も答えなかった。

初めて、俺達のコトダマをモノクマにぶつけることができた。

俺達の強大な敵であるモノクマに……………。

「でも、待てよ……………。一個、いいか？」

しかし、もう少しでモノクマを追い詰められそうという時に前木君が割って入った。

「小清水……………。お前は裁判の時から、その事実気付いていたんだろ？　なのに、今まで黙っていたのか？　入間のオシオキの前にそれを言えば、オシオキは防げたんじゃないか？　…………俺が入間をかばうのもおかしい話だけど……………」

前木君の言葉を聞いて、俺はハツとなった。

そうだ。

入間君は…………助けられたかもしれないじゃないか。

それなのに…………俺はその事実気付かず…………。

「た、確かに…………。実際のクロが特定できない状況だったのなら、それをモノクマに言えば入間君を助けられたかもしれないですよ……………」

一同は一斉に小清水さんを見る。

「ジョーちゃんを…………見捨てたんでありんすか」

「随分と偉そうな言い方をするのね。管制室の仕組みさえ知っていれば裁判以前に気付くこともできたのに、気付けなかった自分にも責任はあると思えないの？」

「……………！」

見る見るうちに吹屋さんの顔が怒りで赤く染まっていった。

そうだ。

そこに気付いていれば入間君は死なずに済んだのかもしれない。

あのオシオキを受けずに済んだのかもしれない。

確かに彼は伊丹さんを殺した罪人だけど…………。

でも、あのオシオキ以外にも償う方法はあつたんじゃないのか…………？
それこそ、ここで謎を解いて黒幕を倒すという償い方も…………。

「確かに気付けなかった俺や葛西達にも責任はある…。だけど、小清水。お前は俺と協力して黒幕と戦うことになってたはずだ。今の話を俺に黙ってただけじゃなく、俺の意志も無視して勝手に入間を見殺しにしたのなら、それを許すわけにはいかない……」

前木君はあくまでも静かに、しかし感情をこらえているのがありありと伝わる重苦しい声でそう言った。

小清水さんは一つのため息をつく。

「…人間に情なんてないけど。確かに入間ジョーンズは生きていれば有力な戦力になったでしょうし、私から見れば生かす価値はあったわ。少なくともあなた達よりはね」

小清水さんは髪をかき上げながら平然と述べる。

「…だけど、こうするしかなかった。なぜなら……」

「黒幕に」取り返しのつかない過ち」を犯させるには、入間ジョーンズを犠牲にするほかなかったのよ」

小清水さんが重い表情で発した言葉。

その真意を、彼女は続けて述べた。

「オシオキの前にこの事実を指摘していれば、黒幕は入間ジョーンズをオシオキできなかったでしょうね。でも、黒幕が事件に介入したという罪はあっても、そこまでの罪で終わってしまう。…それでは黒幕を追い詰め詰めるには足りない」

オーディエンス
「視聴者達のヘイトが徹底的に、究極的に黒幕一人に向くようにするには……黒幕に取り返しのつかない過ちを犯させるしかない……」

そして小清水さんはゆっくりと、モノクマに人差し指を向けた。

「あなたは今、無実かもしれない人間を一人殺した。確証もないまま、オシオキを執行した。…このデスゲームのルールは今、崩壊した。このゲームを見ている人間は今、あなたへの怒りと不信に苛まれているはず。もうこのゲームを続けることはできない」

そうか。

小清水さんはこれを……

これを狙っていたのか……。

「人間を犠牲にしてまで黒幕を倒そうと……。俺がそんな作戦を聞いたら絶対に反対すると分かっていたから黙って仕掛けたのか……」

「……………」

「…果たして、この展開も脚本通りなのかしら？　ねえ、モノクマ」

「……………」

何も答えないモノクマ。

「…何とか言えよ。今までさんざん俺達を弄んだくせに、自分が不利になると何も言わないのか？」

俺は思わずモノクマにそう言葉を投げかけた。

「……………うふふふふふふふふ」

長い沈黙の果てに発したのは、その笑い声だった。

『それだけ？』

「それだけって、どういうことですか……」

『教頭が言った言葉、覚えてる？　最終裁判で解くべき謎は、“この学園の全ての謎”だよ。ボクが無理くり人間君を殺したことが分かったところで、それがこの学園の謎にどう繋がるの？』

「見苦しい言い訳ね。あなたがルールを守らない以上、私達もあなたが言う“最終裁判”とかいうふざけたゲームにも参加する義理はない。今のあなたがすべきことは、ロシアイゲームを解散して私達を解放することよ」

『解散？　何も終わってないし何も解決してないのに、どうして終了する必要があるのさ。このロシアイは、君達がロシアイ不可能な人数まで減るか、最終裁判に勝つことでしか終了しないんだよ』

「な、何を言ってるでありんすか!!　もうこのゲームは破綻してるって言ってるでありんすよ!!　こんな脚本、誰も見ないでありんすよ!!　アンタの目的はもう潰えたんでありんす!!」

『いーや、たとえ長い時間がかかったとしても、この脚本は全人類が目にするようになるよ。ボクの目的は確実に果たされているよ。ボク

がやった不正なんて些細な事さ。

今回の事件で大事なものは、入間君が“羨望”の心をもって伊丹さんと前木君を殺そうとしたという過程なのさ。結果はそこまで重要じゃないよ。便宜上裁判がきちんと終了するようにボクがほんの少し介入したってだけ』

「そ…そんな…そんなバカな話があつてたまるか！ 不正を犯しておいて、それを指摘されたら”そこは大事じゃないから”だと…？ 見苦しいにも程があるぞ!!」

俺は思わず顔を赤くして怒鳴りつけた。

『君達こそ見苦しいよ。そもそもボクの目的が何なのかも君たちが最終裁判で明かすべき謎だつて言つてあるよね？ それをはき違えて勝手に結論付けて追い詰めた気になつて、間違いを指摘したら”言い訳だ”つて喚くの？ 正直言つて話にならないね！ サケも裸足で逃げ出すレベルの幼稚さだよ!』

俺や小清水さんの攻撃にも一歩も動じないモノクマ。

『繰り返し言うけど、ボクを追い詰めたのならボクや学園に関する謎をきちんと正確に解くことだね！ 次はないよ！ 葛西君も小清水さんも、分かつたね?』

「じゃあ……入間君の死は…全く無駄な犠牲だつたと……?」

山村さんが戦慄する。

『無駄ではないよ。彼のおかげで”第五の脚本”は成就したんだから。残す脚本はあと一つ』

『もうコロシアイが起こる必要はないんだ。あとは答え合わせだけ。小清水さんには悪いけど、答え合わせが終わるまではボクに付き合つてもらおうよ』

「……………」

小清水さんは沈黙する。

彼女が仕掛けた勝負は、のらりくらりとモノクマにかわされてしまった。

もしこのゲームを見ている人々がいるのなら…。

ルールに対するこだわりを捨てたモノクマに納得などできるのだ

ろうか？

その納得すらも、モノクマには必要のないことなのか……？

「人々の支持を失ってでも……それでもこんなくだらないゲームを続けようというのね。自ら課した不文律すら守れなくせに、権力で押さえつけて独りよがりの遊びを続けようというのね？」

小清水さんは怒りをこらえながらモノクマに向けて言った。

『偉そうなことを言うなら謎を解いてからにしてほしいな。もう誰も殺す必要はないんだよ？　ただボクや学園に関する謎を解くだけさ。今までに比べればよほど簡単なミッションじゃないか。ボクを倒したいって言うなら、最後のひと押しを頑張ろうよ！』

小清水さんに決定的な隙を突かれたはずのモノクマは、しかしこれまでよりもはるかに強大に思えた。

「謎なら解けてるぞ、モノクマ」

凍り付いた場に一石を投じたのは、前木君の一言だった。

「お前の正体はもう分かってるんだ。……だからもう、終わりにしよう。こんなゲームを続けても意味がない」

その言葉を受けて、俺達の中に衝撃が走った。

「分かった……!?　モノクマを操っている人物の正体が分かったんですか!?!」

「ああ……。ずっと確信がなかったんだが……。ここまでのやり取りで半ば確信が持てた。やっぱり小清水が言ってた奴で間違いないと思う。そうだろ、小清水」

「……………」

前木君の言葉に小清水さんは答えない。

「そ、それは一体……」

「その道しるべは、葛西に示してもらいたい」

「……………え？」

突然の指名に、俺は困惑する。

「いや、俺が言ってもいいんだが……。できることなら葛西自身の手で

示してほしい。そうしないと……お前自身が納得できないと思う」
「……………う？」

彼の言葉は、いったい何を示しているんだ……………？

「なあ、葛西。本当は分かっていたんじゃないのか？ モノクマの正体、脚本を作り上げた人物を……」

そんなバカな。

俺は何も……………。

“脚本”

「うっ……!!」

突然、俺は頭痛に襲われた。

「うわっ、ああああああ!!!」

「ユキマル!?!」

しゃがみ込む俺に、即座に吹屋さんと山村さんが駆け寄る。

頭が、割れるように痛い。

俺は。

俺は……………？

【Chapter 2 非日常編⑤ オシオキ編】

頭が割れるように痛い。

裁判中の俺は、まるで“俺ではなかった”。

何かがとりついたかのように、冷酷に、饒舌に、機械的に、クロを
追い詰めていた。

あの時の“俺ではない俺”が、か弱い少女を追い詰め、殺した。

『それは違うよ』

「……………!!??」

次に聞こえた幻聴は、驚くべきことに自分の声だった。

『君になら犯行は可能だよね』

ねつとりと、耳に残る忌々しい語調。

裁判の時の俺……………なのか…?」

『これが事件の真相。真実という名の脚本だ』

確かにどの言葉も、俺自身の口から発せられた言葉であることに間違いはない。

しかし、あの時の俺と今の俺は何かが違う。

記憶ははつきりと存在するけど、その時自分が何を考えていたのかは全く分からない。

記憶はあるけど人格が異なるという状態はいわば、山村さんのような感じだろうか。

分からない。

俺はずっと、違和感を感じていた。

裁判の時、事件の真相を組み立てている時の自分が、何か自分ではないものに取り憑かれているような感覚を一度ならず感じたからだ。けれど、裁判を重ねるうちにその違和感も感じなくなっていった。自分の中に何かがあるその感覚自体が、いつの間にか自然になつてしまつていたからだつた。

その状態がどうして起こりえたのか、真剣に考えようとしなかつた。

何か恐ろしい真実が見えてしまうのが怖くて。

抗つても抗いきれない絶望に吞まれてしまいそうな気がして。

そうだ。

俺は元来、目の前で起きているイベントの中心人物になるような人間じゃない。

一歩引いたところから全体を俯瞰するのが俺の役目だった。

これまでの人生も、ずっとそうやって生きてきた。

そして俺を取り巻く「物語」は、いつも俺とは直接関係のないところで動いていた。

このコロシアイの中でもそうだった。

だけど、学級裁判の時は違った。

普段は表舞台に出ないはずの俺はいつだって率先して議論を先導し、真実へと進み続けた。

第三の裁判の時のように、それが間違っていることもあったけど。

俺は裁判の中で、「事件」という名の脚本を組み上げていたんだ。

ここで行われたコロシアイは、学級裁判は、俺の才能を試す場として機能していたんだ。

そして俺はいつしか、「論理」より先に「真実」を導くようになつていった。

「背丈の問題など、台か何かを持ってくれば誰だって解決できるでしょう。それとも何か、台を持ってこられない理由があったとでも？」

…そう、こう切り返せば俺は打つ手がない。

根拠としては、あまりにも弱い。

でも、彼は犯人なんだ。

…絶対に……。

………なんで？

なんで俺は彼が犯人だと確信しているんだっけ？

あれ？

根拠を見出す前から人間君を犯人と看破していたあの不思議な状態。

あれは、無意識のうちに脚本を組み上げてしまっていたことに起因する思考だったんだ。

そこに付随する論理や手口を理解する前に、“彼が犯人である”という真実を先に導き出していたんだ。

それこそが、この俺の——超高校級の脚本家”、葛西幸彦の才能。

この脚本は――俺が書き上げたものだったんだ。

「ユ、ユキマル………?」

ほろりほろりと涙をこぼす俺を見て、吹屋さんが心配そうに声を上げる。

「モノクマ」

俺は短く呼びかけた。

「お前を操っているのは人間じゃない。お前の中身はアルターエゴだ」

『………』

「アルターエゴ……?　じゃあ、モノクマもモノパンダと同じように人格を移植されて……。…と、なると……その人格は一体誰のものを……?」

「モノクマに人格を映した人物は、釜利谷君をはじめとする“超高校級の絶望”、そして土門君に協力を呼び掛けて脚本の制作を行った人間」

イヤだ。

第三の事件の時のように、そう叫ぶ自分が自分の中に現れた。見たくない。

言いたくない。
聞きたくない。

真実に向き合いたくない。

だけど、俺はもう目を背けない。

あの時のような醜態は晒さない。

「そんなことができる人間は一人しかいない」

もしも、真実を知るうえで俺自身が障害となるのなら――。

俺は、俺自身を切り捨てよう。

【人物指名】

俺はモノクマを指さして、息を吸い込んだ。

「『超高校級の脚本家』、葛西幸彦」

「お前……即ち俺こそが、この脚本、このコロシアイの全ての元凶……なんだ……」

「……………」
「!!!!!!!」

俺は静かに息を整える。

動悸が止まらない。

一生懸命歯を食いしばってないと、今にも目眩で倒れそうだ。

真実に立ち向かうのが、こんなにも辛いことだったなんて。

「よく言ったな、葛西」

前木君が優しい瞳で言った。

「これでいいんだろ、小清水。このために、お前は俺に教えたんだろ？」

「……………」

【Chapter 5 (非) 日常編③】

「…盗聴器でも仕込んでると思ったのかよ。今まではこんなことしな

かつたくせに、どういう風の吹き回しだよ……！」

「ぶつちやけた話、今までののは全部聞かれたところで大した問題にはならない話よ。少なくとも、”人間側”の連中にはね。でも、今から私が言うのは共有されちゃうと困るのよね」

「俺がみんなに話す可能性は？ 何か口止め材料でもあるのか？」

「ないわよ。でも貴方は絶対に言えない。いい？ 心して聞いておきなさい」

「っ!!」

前木が心の準備を終える前に、小清水はその耳に口を寄せる。

「私が最も恐れているのは――」

小清水は微かな声で何かを告げた。

「……………はあっ?!?!?」

前木は思わず後ずさる。

様々な感情が前木の中に現れては消えていく。

「な、なんで……………なんでこんなことを俺に教えるんだよっ?!?」

あらゆる感情よりも先に放たれた言葉はそれだった。

「私が最も恐れているのは――」

「――葛西幸彦。恐らくは、このコロシアイの真の首謀者」



「……フン。脚本という言葉を読深読みする必要はなかったようね。言葉通り、コロシアイの首謀者は脚本を築く者。当然、記憶を消されているのだから今の葛西幸彦に首謀者としての自覚はない」

小清水さんは吐き捨てるように言い放つ。

「不正を暴かれて、正体も暴かれた……。これでもなお、私達と無意味な争いを繰り返すつもりなのかしら」

『……………』

モノクマはスイッチが切れたかのように、うなだれたまま何も喋らなかつた。

代わりに、後ろに垂れているスクリーンが淡く光り始めた。

そこに映し出されたのは――。

『初めまして』……いや、『いつもお世話になってます』かな？』

自分とは似て非なる自分が、映し出されていた。

『うぷぷぷぷ……。よくぞ……よくぞここまでたどり着いたね、ボクの優秀な仲間たち……。そして……ボク自身』

「ユ、ユキマル……。本当に……本当にユキマルが……」
「……………」

『ご指摘の通り、ボクは“超高校級の脚本家”、葛西幸彦の人格と記憶、そして才能を備えた“アルターエゴⅢ”さ。そこにいる“ボク”が持っていない記憶も持っているわけだから、ある意味ではボクの方がより完全な“葛西幸彦”と言えるかもしれないね。……まあ、肉体がないのは不便だけど』

俺は恐怖と嫌悪感の混じった眼差しで葛西幸彦を見ていた。

自分と同じ姿と声をした人間が目前で喋っている気持ち悪さに目を背けたくなる。

「…記憶を消される前の俺は……土門君や釜利谷君達に協力を呼び掛けて……このコロシアイという脚本を作りあげたんだ……」

自分がそんなことをしたなんて信じたくない。

けど……目の前に“真実”がいる。

俺自身がそこにいる以上……その真実は覆らない。

『けれど、それ以上は何も分かってないんでしょ？』

そんな俺をあざけるように、“奴”は言った。

「随分と偉そうな」

『“偉そうな言い方をするのね”って？』

小清水さんの言葉を遮るように“奴”は言った。

『モノクマの不正を暴いて一泡吹かせるつもりだったのに、思った以上にダメージが無くてビックリしちゃったみたいだね。小清水さんって意外と自分の考えを過信しちゃうところがあるよね。第三の脚本でもそうだった』

「……は……」

『さて、積もる話もあるけどここは物語を進めないといけない。君たちは今、みんな頭が真っ白になってるみたいだから、ボクが一つ起爆剤を放り込んであげようか』

まるで俺達の頭の中を見透かしているかのような口ぶりだ。

「……は……？」

『“どうして頭の中が分かるか”って？』

すると“奴”は、その問いすらも見通していた。

『…君は事件と裁判を重ねる中で、“事件を脚本として組み上げる”という形で才能を発揮していた。けれど、それは完全な形の才能じゃない。…さて、記憶が健在だったころのボクの才能について教えてあげよう』

“奴”が持っている本を閉じると、それに呼応してうなだれていたモノクマが再び起動してバンザイのようなポーズをとった。

『この世界には、“超高校級の才能”の他に、“超分析力”と呼ばれる能力がある。人の行動や心理を分析し、それを読み取る力だ。世界にはこの能力を持っている人間が何人かいるみたいだけど、幸運にしてボクはこの能力の持ち主に選ばれた。この能力の使い方は様々あるけど、ボクの場合はご存じの通り、脚本さ』

“奴”は微笑を浮かべたまま、悠然と語り続ける。

『ボクの才能は脚本を作ることじゃない。超分析力をもって人間や事象の未来を正確に読み取り、脚本に映し出すコト——』

『“真実の脚本”を記す能力。それがボクの“才能”さ』

「……………」

全員に戦慄が走った。

確かに、それを匂わせるような情報はあった。

記憶を消される前の俺にとっては遥かに未来のことだったはずの、コロシアイの内容をほぼ正確にシナリオとして書き起こしていたのだから。

でも…所詮与えられたヒントを元に事件の概要を組み上げていただけの今の俺の才能とはかけ離れ過ぎている。

未来を予知するなんて…そんな非現実的な能力がこの身に備わっていたなんて信じられない。

「じゃ、じゃあ…私達がこれからすることも、裁判の議題も、全部全部お見通しということなんですか…?」

『そうだね。時間軸が今に近ければ近いほど読み取りは正確になる。僅かな“ゆらぎ”で事象にズレが生じていても、その場で“再演算”することで即座にその場合の未来は読める』

「…吹屋喜咲の参入に動じなかったのも、その場で“再演算”をして

問題がなかったから……ということね」

『小清水さんは頭が回るね。』お前の目的はなんだ？』って言いたげだけど』

「……」

自分の心を言い当てられた小清水さんは、チツと舌打ちした。

『さて、さつきも言ったけど君達には起爆剤が必要だ。君たちに最後のボーナスを与えよう。その上で、本当の“最終裁判”を始めようじゃないか。次こそが本当に最後の最後。……ああ、ボクが二人いるのはやりづらいだろうから、最終裁判はモノクマの姿で参加させてもらおうかな』

「……起爆剤とか……ボーナスとか……ふざけた言い方をしやがって……」

俺は拳を震わせながら“奴”に怒りを込めて呟く。

「そうやって上から見下ろしていられるのも今だけだ。お前は俺じゃない。お前を消して、俺だけが本当の“自己”であると証明してやる!!」

『50%の怒りと30%の恐怖。残りは雑多な感情が目まぐるしく動いているようだ。……キミはボクさ。認めたくなかろうが、キミは紛れもなくボク自身だよ。……うぷぷぷぷぷ。その顔が、最終裁判でどうなっているのか楽しみだよ』

そこまで言うと、“奴”は映像の中でパチンと指を鳴らした。

数秒後、突如として裁判場が揺れ始める。

「キャ!! 地震?!?」

吹屋さんが慌てて裁判台にしがみつく。

「みんな、頭上に気をつけろ!!」

揺れと共に、重く鈍い音が頭の中に響き渡った。

花火の音を壁越しに聴いているような、重い音が。

「なんだ……何が起きているんだ?」

『脚本に必要なのは“演出”。クライマックスにはそれ相応の破滅的な演出が必要になる』

慌てふためく俺達をよそに、“奴”は高らかにそう言った。

やがて爆音と揺れは収まった。

俺達は恐る恐る立ち上がり、当たりを見回す。

裁判場に異変はない。

“奴”は、不敵な笑みを浮かべてこう言ったんだ。

『ようこそ、“ボク”と“俺”との最終裁判へ』

次の瞬間。

爆音と衝撃を伴って、裁判場の床に大穴が空いた。

それと同時に、穴、そしてエレベーター乗り場の方から猛烈な火炎が噴き出してきた。



下界に住む人々は不思議な光景を見た。

天高くそびえ立つタワーが、爆発と火炎に包まれていたのだ。

しかし、絶望に包まれた世界に生きる人々に、そんなことを気に留めている余裕はなかった。

Chapter 6 非日常編② 波瀾編



今はもう遠い昔となってしまった、在りし日の記憶が脳裏に浮かぶ。

夢郷君は柔らかな笑みを浮かべて「それで、花嫁と旅行には行ったのかい？」と聞く。

「それで、花嫁と旅行には行ったのかい？」

その言葉に対して入間君は一瞬怪訝そうな顔をしつつも「教えませんよ」と笑いながら答えるだろう。

「教えませんよ」

そして「花嫁という言い方はやめてください」と付け加えるだろう。「花嫁という言い方はやめてください」

その次は……。

…おや、小清水さんがボクに話しかけてくるみたいだ。

また自分の研究室にボクを誘いたいのか。

「か、葛西君…。あ、あの…もし良かったら……」

彼女は、虫に触れている俺を見たいようだ。

しかしにべもなく断ると彼女が傷つく未来が見える。

だからこちらの選択肢をとろう。

「明日の放課後、でいいかな…？ 今日映画の収録現場に立ち会わなきゃいけないって…」

あくまでも延期、そういう意図を見せれば彼女は顔を明るくして俺の両肩を掴む。

次に出てくるのは、エールの言葉だ。

「本当？ 頑張ってね！」

全部ボクが見通した通りの行動、感情、仕草。

彼らがすることは全て分かる。

頭の中に組みあがった脚本をなぞって動いていくのだ。

いつからこの能力が備わったのかは分からない。

幼少の頃から、気が付けば周囲の人の“真実の脚本”が見えるようになっていた。

だけど、無条件で誰でも未来を見渡せるわけじゃない。

万有引力の存在を知らなければリングが木から落ちることを予想することはできない。

それと同じように、ボク的能力もまた対象人物への“理解”が必要不可欠だ。

その人の性格、心理、本性に至るまで、全てを完璧に把握していなければこの“脚本”は正確に機能しない。

ボクが数年間共に過ごしてきた同級生たちは、十分にこの条件に当てはまっていた。

だからこそ、ボクは彼らの全てを見通せる。

近い時間であれば100%、遠い時間でもほぼ確実に脚本を作れるのだ。

ボクは今までもそうやって“脚本家”の地位を築いてきた。

脚本の登場人物に近しい人格の人間を見つけて、近づく。

その人のことを知ること、その人物にとっての“真実の脚本”を描き出す。

後はその“真実の脚本”を本来書いている架空の脚本の中の世界でシミュレーションすれば、リアルで臨場感のあるキャラクターの動きが導かれる。

脚本の中のキャラクターの動きは、ボクが考えて“動かしている”

のではない。

キャラクターが“勝手に動く”様子を予測しているに過ぎない。つまり、そのキャラクターの行動を決めるのはキャラクター自身であってボクではない。

現実世界でもそうだ。

“あの人物がああ動く”ということは予測できても、“あの人物をああい風に動かしたい”ということ自在に操ることはできない。無論、“どういう条件であればどう動くか”を把握するのは容易なので、目的に合わせて周囲の環境を変えればそちらに誘導することはできる。

すなわち、ボクの頭はただの演算装置なのだ。

与えられた条件から未来を導くのは容易いが、なつてほしい未来を作り出すのは容易ではない。

ボクは脚本家だが、脚本を自分で“作り上げた”ことは一度もなかった。

ボクはその世界の中で起こる事実を代弁しているに過ぎない。

ボクは脚本を“作るもの”ではなく、“書き上げるもの”でしかないのだ。

そんなボクが生まれて初めて自分の手で“作りあげよう”とした脚本、それがこのロシアイなのだ。

ただ与えられた未来をなぞって書き上げるのではなく、自分の意志をそこに介在させた確固たる“脚本”をボクは作りたかったのだ。

無論、そんなボクが脚本を作るには“協力者”の存在が必要不可欠だった。

だから、ボクは――。



『おや、感傷に浸っていたらいつの間にか大変なことになっているね』

“奴”の忌々しい言葉などどうでもよかった。

俺はただ混乱していた。

突然の揺れと爆音、それに続いて床が吹き飛んで火炎が噴き出してくるといふ不可解な事象。

今までに起こった事件をも上回る超現実的な事態。

そんなことが突然起きて、混乱しない方がおかしい。

「皆さん!! 大丈夫ですか!？」

山村さんの叫び声で俺は我に返る。

いつの間にか、俺は裁判場の隅の方に移されていた。

隣にいた山村さんが疾風のごとき速さで俺を運んでくれたようだ。

「立ち上がらないでください!! 煙を吸います!!」

山村さんの言葉に従い、俺は床に伏せる。

裁判場はあらゆるところが炎に包まれていた。

俺達がいる場所にはまだ火が及んでいなかったが、これではいつこども火に巻かれるか分からない。

「キヤーー!! 何がどうなってるでありんすか!!!」

吹屋さんの叫び声が耳に届く。

そんなこと、こつちが聞きたいくらいだ。

『いいねえー! ここに来てようやくいい感じのクマった顔になってきたじゃない!』

聞き慣れたダミ声が俺の頭に響き渡る。

崩れた残骸の上に立ったモノクマが、ポーズをとりながら俺達を嘲笑っていた。

「い、一体何をしたって言うんだ!! 説明しろ!!」

モノクマの姿をしても、中身は“奴”。

俺は怒りをぶつけるようにモノクマに向かってそう怒鳴りつけた。

『言ったでしょ? これは君たちへの最後のボーナスなんだよ。裁判場の床の下にとっておきのプレゼントを用意しておいたよ! 爆破

したけど』

「意味ないじゃないですか!!」

『“大事な部分”は燃えないようにうまく調整をしたボク努力も認めてよね! 裁判場よりも下に階があったなんて意外じゃない?』

「ここにきてまさかの発見じゃない?」

「あ、そういえば……裁判場ってあちき達が行ける中では一番下の階だったでありんすよね……ってそんなこと悠長に言ってる場合じゃないでありんしょ!!!」

モノクマはこれまで、俺達が裁判をクリアするたびに新しい階を開放していた。

ある意味、これもその一環と言えなくもないのかもしれないが……。

一体なぜ、爆破なんてする必要があったんだ?

「か、葛西……」

背後から聞こえたのは、前木君の声。

「前木君? どうした、の……」

俺は言葉を失った。

少し離れたところの壁にもたれかかって座り込んでいる前木君。

その脇腹には、裁判台の破片……即ち、鋭く折れた木の棒が突き刺さっていたのだ。

「キヤアアアア?!?!」

吹屋さんがますますパニックになって叫び声をあげる。

「!! なっ、何か血を止めるものはっ!!」

俺は周囲を見渡すが、当然医療用具のようなものはここには存在しない。

「ここには何も…… ちょっと待っててください!! 私の服を破ってそれで縛ります!!」

「縛るって言っても……突き刺さってる木を抜かないと傷口を縛ることもできないよ!」

「でも、引っこ抜いたら出血がもっと激しくなっちゃうでありんしょ……!!?」

確かに刺さっている木を抜けば出血はさらに酷くなるだろう。けれど、そうでなくても確実に彼の脇腹からは血が溢れ出ている。どうすればいい…？

『うぶぶぶぶぶ!! まさかの爆発クリーンヒットしちゃったね! 全く前木君はボクの予想をいつも裏切ってくれるよ! それでこそ“超高校級の幸運”だね!』

こんな状況の俺達すらも俺達を嘲笑うモノクマ。

虫唾が走るが、今は怒るよりも彼を助ける方法を考えなければ。

『でも正直、ここで彼が脱落してくれると助かるんだよね! 君は“第五の脚本”でほぼ役目は終えてるし、むしろいない方がイレギュラーが起こりにくくてありがたいし!』

「……………」

無言でモノクマを睨みつける前木君だが、その顔には汗が浮かび、見るからに苦しそうだ。

俺はエレベーターの方を見る。

炎上するエレベーターは完全に機能を停止しており、動かないであろうことは一目でわかる。

つまり、もう個室にも保健室にも戻れないということだ。

傷を回復するための唯一無二の手法…モノポーションすら封じられてしまった。

そんな俺達をよそにモノクマは驚くべき言葉を発した。

『なんなら、今ボクが楽にしてあげてもいいよ? 苦しいでしょ?』

「……………」

爪をのぞかせたモノクマの目は本気だった。

「そ、そんなバカな…!! 無茶苦茶でありんすよ!!!」

「そうだ…!! お前が勝手に生徒を殺せるなら、今までの裁判は、コロシアイは、一体何だったんだ…!!?」

小清水さんが暴いたルール違反とは比べ物にならない。

そんな暴挙が許されたら、今までルールに則って俺達にコロシアイをさせた意味なんて…。

俺達の感情は、怒りよりもむしろ唾然と言った方が正しかった。

だが、モノクマにもう俺達の常識は通じない。
文字通り独裁者となった“奴”を止められるものはもう誰も…。
いや、一人だけ、“奴”を止められる人がいる。

山村さんが一人立ち上がり前へ進む。

「葛西君、吹屋さん……。前木君を頼みます」

正面の敵から目を離さないまま、彼女は穏やかな声でそう言った。

「山村さん!？」

彼女の目もまた、本気だった。

待て。

待ってくれ。

ダメだ。

「待って、山村さん!! それだけはダメだ!!!」

一度拳を当てたらもう戻れないんだ。

君まで失うわけにはいかない。

「これ以上仲間を失わせるくらいなら……」

だが、その感情は彼女も同じだった。

「相打ちになっても止めてみせます」

もう仲間を死なせたくない。

その一心で、彼女は赤いオーラを纏う。

そんな覚悟を嘲笑うようにモノクマは肩を震わせて笑う。

「セイヤッツ!!!」

次の瞬間、裁判場全体の空間が僅かに歪んのかと錯覚するほどの衝撃波が伝わってきた。

直後、花火のような破裂音と共に粉塵が舞う。

およそ人間の攻撃とは思えないほどの壮絶な殴打だった。

だが気付くとモノクマは山村さんの背後に立っていた。

「!?」

爪の一撃をすんでのところかわすと、山村さんは幾度となくモノクマと拳を交わし合う。

『ボクをバカにすんなよ!! 龍雅君との戦闘データを蓄積した上、あの時は容量の関係で制限していた〃才能〃もこうやって解放したんだ。戦闘力の劇的な向上と先読み能力を同時に得たボクはもう誰にも止められないぞよ!!』

安藤さんの漫画のキャラクターのようなポーズをとりながら自らの実力を語るモノクマ。

「セイツ!!」

そんなモノクマに山村さんはただ拳で応える。

「ユキマル!! 今のうちに何か手を考えないと……」

炎に包まれた裁判場で両者が戦いを繰り広げる中、吹屋さんが俺の体をゆすりながらそう言った。

ハッと俺は我に返り、何か手はないか考えこむ。

「待て……手ならある……」

そう言ったのは、他ならぬ前木君だった。

「小清水……!! 頼む……」

「小清水さん……!?!」

そう言えば、さつきから彼女の姿はない。

まさかこの爆発で……。

「お呼びかしら」

……などという杞憂を吹き飛ばすかのように、いつの間にか彼女は俺達の目の前に立っていた。

「小清水……アレ」を……。お前、いつも持ち歩いてるって言ってたよな……?」

「アレ」……?」

「アレ」は私にとっても切り札なんだけどね。ここであなたを助け

るメリットはあるの？」

ため息をつきながら小清水さんは言い放つ。

「俺がいなきや……黒幕を倒せないんじゃないのか……けほつ……」

前木君の口から血が噴き出す。

もう時間がない。

「言い合ってる暇はないよ!! 時間は一刻を争うんだ!! 手段があるなら早く彼を助けてくれ!!」

俺は精一杯の声を振り絞ってそう叫ぶ。

彼女に縋る形になるのは情けないが、他に方法が見当たらない以上今はこう言うしかない。

「……………」

ようやく小清水さんは自分の懐に手を伸ばす。

『そうはさせるかー!!!!』

だが、希望が紡がれたのは一瞬に過ぎなかった。

先読みの力で俺達の行動も全て“奴”には筒抜けだったんだ。

山村さんの攻撃の一瞬のスキについてモノクマは一直線にこちらに向けて飛び掛かってきた。

「?!?!」

流星の小清水さんもこれは予想外だったのか、その顔が驚愕に染まる。

何故か俺は、モノクマの攻撃を確認する前から動き出していた。

俺も無意識のうちにモノクマの行動を先読みしていたのかもしれない。

モノクマの爪が小清水さんの体に向けて突き進む。

時が極限まで圧縮された思考状態の中、俺が出した答えは一つだった。

俺は脚本家だ。

だけど、もう“傍観者”でいるのは嫌だ。
“観測者”でいるのは嫌だ。
俺も自分の手で新しい一ページを作りたい。

「!!!!!!」

小清水さんを押しのけた俺の腹に、モノクマの爪が深々と突き刺さった。

肉を裂き、内臓を貫き、骨にまで爪が突き刺さる。
死んだ方がマシじゃないかと思えるくらい、痛い。
だけど、これでいいんだ。

やっぱり俺は、君のことが――。

朦朧とする意識の中で、数人の怒鳴り声や叫び声が微かに聞こえる。
る。

だけど、それらをかき分けてはつきりと聞こえてくる声があった。

「やっぱり俺は幸運だ……」

「やれ、小清水。“アレ”を……」

次に聞こえてきたのは、乾いた音。

そして、誰かの鼓動の音が周期的に聞こえてくる。
顔と体がとても温かいものに包まれている。

まるで、赤子の頃に母親の腕の中で寝ているような……。

腕の中。

そう、俺は腕の中にいるんだ。

小清水さんが左腕でしっかりと俺を抱きかかえていた。

強く、固く、絶対に離さないという確固たる意志をもってその腕は俺を包み込んでいた。

彼女の体に密着した耳からは、彼女の心臓の鼓動が確かに聞こえてくる。

とても激しく波打つその鼓動からは、先ほどまでのすました態度とは裏腹に彼女自身が強く動揺していることが読み取れた。

怒りの表情でモノクマを睨む彼女の右手には、小さな拳銃が握られていた。

銃口から噴き出る僅かな硝煙は、その銃が発砲されたことを如実に示していた。

そして彼女の視線の先には、脳天に風穴の空いたモノクマが倒れていた。

“奴”が再び動き出すことは、もう二度となかった。

「やった、みたいだな……」

前木君のかすれた声が頭の中に響き渡る。

「やよ様……それは……銃……?」

「いやそれよりも!! 前木君と葛西君が!!」

体中に小さい切り傷を負って汗だくになった山村さんがこつちに駆け寄るのが見えた。

小清水さんは俺を床に寝かせると、今度こそ懐に手を伸ばす。

「……自分用」にとつておいたんだけどね。まさかこんなところで使う羽目になるとはね。あなた達もあなた達で、こんな万能薬を持ち歩かないなんて馬鹿もいいところだわ」

彼女が取り出したのは、モノポーションの小瓶だった。

「俺より葛西の方が傷が深い……。葛西の方に多く塗ってくれ……」

前木君の懇願を聞くまでもなく、小清水さんは腕をまくって俺の腹に指を突っ込む。

「あがつ……!! あああつ!!」

地獄のような痛みと気持ち悪さで俺は涙を流して呻き苦しむ。

「胃袋に穴が開かなかつたことを神に感謝するのね。代わりに臍臓が損傷しているみたいだけど。さて、このポーションは内臓にも効くのかしらね……」

痛みの後は、冷たいものが腹に入ってくる感触がした。

「だつ、大丈夫なんでありんすか!」

「こればっかりは小清水さんを信じるしかないですね……。まだ中身は残ってますよね……? 次は前木君を……」

女性陣の声が脳裏に響く中、俺の意識は遠のいていった。

次に意識を取り戻したときには、腹を襲っていた激痛が少しずつ和らぎ始めていた。

「あ……う……」

「葛西君!! 喋れますか!!?」

山村さんが俺に声をかけながら抱き起こす。

「いき、てる……?」

俺が最初に発した言葉はそれだった。

記憶が曖昧だ。

あの瞬間に何が起きたのか、ハッキリと思いつけられないけど……。

俺を固く抱きしめたあのぬくもりだけは確かに覚えている。

「ユキマル……!!! 生きてるでありんすよ……!!!」

俺が状況を認識する前に吹屋さんが涙を流しながら俺に抱きついてきた。

「無事そうよかった……。全く、男二人が女達の手を煩わせちゃうなんて情けねえ話だ……」

そう呼びかけてきたのは、脇腹を押さえながらも自力で立ち上がれるほどに快復した前木君だった。

「傷は……」

「小清水が密かに保健室から持ち出してたモノポーションを使ってくれたんだ。こんなことになるって分かってたら俺も持ってきたんだけどな……」

やはり、小清水さんが……。

彼女はどこまでも用意周到だ。

「ですが、拳銃まで持っていたなんてもつと驚きでしたね……。一体あれはどこから……?」

拳銃……?

やっぱり、さつき見た光景は夢じゃなかったのか。

「……黙ってて悪い。俺も知ったのはつい最近だったんだ。あいつ曰く、あれはリュウの死体のすぐそばに落ちていたものらしいんだ」

謝罪を交えながら前木君がそう語る。

「……リュウ君の?」

「ああ。なんであんなところにあつたかは小清水も分からなかったみたいだが、たぶんリュウがモノクマと戦った時に使ったんじゃないかな……。本来なら即座にモノクマ達に回収されて当然の武器だが、一時

的に全滅して余裕がなかったのか、そもそも気付けなかったのか……。瓦礫の中に放置されているのを小清水が見つけて隠してたらしい」「やよ様……。銃の扱い方まで覚えてるなんていったい何者なんでありんすか……。？」

リュウ君が激闘の果てに取り落とした銃が、こんなところで俺達の命を救うなんて。

彼の身は亡びたが、その執念だけは滅びずに俺達を助けてくれた……。のかもしれない。

だけど、生前の彼が小清水さんを見たら、果たして許せるのだろうか……。

「……小清水さんはどこに？」

「葛西君と前木君の手当てを済ませるや否や、爆発で空いた穴から下の階に行っちゃいました……。もう時間がない」って言うて……」

「確かに……。さつきよりは多少火の手は弱まった気はするが、この裁判場……。いや、このタワー自体がいつまで持つか分からない。幸い換気設備はまだ生きてるから煙を過剰に吸う心配はなさそうだが、病み上がりの体でどこまで無理がきくかも分からない。早く最終裁判のための情報を集めに行った方がいい」

「モノクマは……。奴」はまだ生きてるのかな……？」

俺は目の前に倒れるモノクマの死骸に目をやりながら尋ねる。

「生きてるだろ。こんなことで死ぬような奴がここまで大掛かりなことをするとは思えない。奴はきつと、ここで俺達を待ち受けるはずだ。今までと同じように……」

「それよりも、あちき達がモノクマを攻撃したのって校則違反なんじゃないんでありんすか!? もしモノクマが生きてたら、あちき達は……」

「いや、モノクマがあそこまでルール違反した時点で……」と言いかけて俺はハツと口をつぐむ。

「そうか……。奴」があんな不可解な行動をした理由は、恐らく俺達にも「ルール違反を起こさせることだったんじゃないかな……？」

「……それは、自分が起こしたルール違反を帳消しにするために、ですか

？」

「そうかもしれない。といっても、こちら側のルール違反はほとんど強制されたものだから平等とは言い難いけど…。形式だけでもこちら側にルール違反をさせることで、奴は対等な立場で最終裁判に立つうとしているのかもしれない。ついでに言えば、小清水さんが隠し持っていた“最終手段”も明るみに出すことができたし…」

いきなり前木君や小清水さんを攻撃した理由も、こう考えればある程度納得はできる。

「…でも、結局俺達がやることは変わらないんだろ。最終裁判で全ての謎を解いて、ここを出るっていう目的は」

前木君の言葉に俺は力強く頷く。

「みんな…：迷惑をかけてごめん。行こう」

俺たち全員は裁判場の中心に足を運ぶ。

そこには、今までに見たこともなかった“最下層”への穴が広がっていた。

入間君のオシオキと、小清水さんの糾弾と、“奴”の登場。

そしてこの爆発にモノクマとの激闘…。

この裁判場に来てから短時間でいろんなことが起きた。

けれど、それらを顧みる暇もなく俺達は前に進まなきゃいけない。

最後の戦い、最後の捜査が、今始まる。



たまにね、初期のモノクマ劇場やモノパンダ劇場を読み返すんだ。するとやり取りがすごくサムかったりイタかったりして、すごく苦しい気持ちになるんだよ。

「だけど、それも含めてボクだよね。」

あの頃のボクがあるから、今のボクがあるんだよね。」

だからイタくても最後まで見守ってくれると嬉しいな。」

まあ、初期に読むのやめた人がここを読むことはないんだけどね！

Chapter 6 非日常編③ 決意編



俺を助けてくれた時の小清水さんのぬくもりが脳裏に浮かぶ。
第二の事件の前、俺の胸の中で泣いていた時と全く変わらないぬくもりだった。

あの時は演技だったが、さっきの態度はきつと――。

……どうして。

どうしてそこまでして俺を助けたのだろう。

だって、記憶を共有していなくとも、このコロナイを仕組んだのは俺で――。

俺のせいで――。

俺の胸がじんわりと痛む。

そう、この脚本の“主”は俺だった。

このコロナイを起こしたのも、みんなを絶望的に死なせたのも、俺だったのだ。

まだ実感が湧かないけれど――ずっと前からそんな予感はしていた。

そこに向き合うのが嫌だった。

嫌だったからこそ、目の前の事件や裁判にがむしやらに向かっていくしかなかった。

けれど、もう目を逸らしていられる段階じゃない。

自分の罪に向き合わなくてはならない。

このまま最終裁判に勝ってここから脱出できたとしても、それで俺は納得できるのだろうか。

このコロシアイの本当の決着をつけるには――。

俺が――



伊丹さんの死。

捜査と裁判。

権謀術数と愛憎劇の果てに行われた入間君のオシオキ。

小清水さんによるモノクマの弾劾とその失敗。

この脚本の創造主たるもう一人の“葛西幸彦”の登場。

タワーの爆破とモノクマによる攻撃、そして小清水さんに救われ
…。

あまりにも長い夜は、まだ終わりの兆しを見せない。

時刻はとうに深夜に差し掛かっていた。

火炎に包まれるタワーは俺達の最終決戦を盛り上げたかのように轟々と燃え盛っている。

その炎をかき分けて…遂に最後の“捜査”が幕を開ける。

「ここから下に飛び込めばいいのか…?」

俺達は裁判場の中央に空いた穴から下を覗く。

爆発で吹き飛んだ穴の下には瓦礫が散乱しており、爆発の威力のすさまじさを物語っている。

階下というだけあって床までの高さは2m近くあり、飛び降りたら無事では済まないだろう。

「おい、そこ…。千切れた鉄骨が下に垂れ下がってる。アレを伝えれば

安全に下に降りられるんじゃないか？」

前木君が指差した先には、裁判場の床を支えていたと思われる鉄骨が階下に垂れ落ちていた。

「手段を選んでいる暇はないですね…。私が先に降ります。皆さんは危ないと思つたら私めがけて飛び降りてください！」

そう言うが早いか山村さんが真つ先に鉄骨を伝つて下に降りていく。

「ひえ、あちき木登りに憧れてありんしたけど、まさかこんな形で夢が叶つちやうとはフクザツ…」

「木登りとは違うと思うけど…」

数分かけて全員が危なげなく下の階に降り立った。

「みんな大丈夫だな？」

「ええ、なんとか」

「やっぱり換気設備はまだ生きてるみたいだね…。煙がほとんど下に回ってない」

下の階もあちこちに火が回つてはいるが、煙はどこかに吸い込まれ、視界を塞ぐような状況には陥つていなかった。

「どうする？ 安全を期すなら全員で行動した方がいいと思うが…」

「…いや、ここもいつまでもつか分からない以上、短い時間で少しでも情報を集めたい。さっきの事件の時のように、二人ずつになつて手分けして捜査した方がいいと思う」

思えば、入間君と伊丹さんの事件ももう遠い昔に思える。

「じゃああちきはユキマルと一緒にがいいであります!!!」

と、すかさず吹屋さんが俺に飛びつく、ため息をつきながら「…分かった。じゃあ俺は山村と行く」と答えた。

「そうと決まればちやっちやと始めましょう！ 私たちはこっち側を調べますので葛西君たちは向こうをお願いします！」

「うん。もし危ないことがあつたらすぐに逃げてね。じゃあ、また後で」

廊下の向こう側へと消えた二人を見送ると、俺は自分の担当している側へと振り返る。

「ユキマル、久しぶりに二人きりになれたでありますね」

「…何か下心でもあるの？」

「こんな時にどうしたんだろう、吹屋さん。」

「あ、いやいや！ さあ、張り切って捜査するでありますよ！」

そんな俺の問いをぐまかすように、吹屋さんは袖をまくって前に進み出た。

《捜査開始》

「廊下があつて部屋がある構造は他の階と変わらないみたいだね。他の階と行き来ができないことを除けば…」

そう呟きながら俺は目前にある扉を開けて部屋に入る。

「ここは…資料室でありますか？」

吹屋さんの言うとおり、資料室といった印象の部屋だ。

爆発の影響で机の上の資料はあちこちに散乱し、本棚の上部に火が移って部屋を赤く照らしている。

換気設備が生きていなかったら、この部屋は煙で何も見えなかっただろう。

「崩れるかもしれないから本棚には近づかないで。時間がないから有用そうな情報だけピックアップして集めよう」

「お！ なんかタブレットが置いてあるであります！」

そう言って吹屋さんが拾い上げたのは、ノートくらいのサイズの白いタブレットだ。

「…！ 起動できる？」

「今やってるであります！ あ、えっと…アプリが一個入ってるだけでありますね…」

吹屋さんに寄り添うように俺はタブレットを覗き込む。

見ると、その端末に唯一入っていたアプリは世界的に広まっている短文投稿式のSNSだ。

久しぶりに見るSNSに懐かしさを覚えながら、吹屋さんがアプリを起動するのを見守る。

「あ、開いた……！ このアカウント、何も情報がないでありんすけど……鍵垢投稿内容が一部の許可した人物にのみ見られるように、閲覧可能者を制限しているアカウントのこと。ってことだけは分かるでありんすね」

鍵垢……？

誰が使っていたアカウントなのか気になるが、何も情報がなければ分かりようがない。

「何か投稿している文章とかある？」

「ちよつと待って……あつ、一個だけ……え……？」

その投稿を見た吹屋さんは一瞬言葉を失った。

『半殺しにしたのに全然だ あいつ殺すか 殺さない人間ヤバイ』

たった一つの投稿にはそう書かれていたのだ。

「これ……殺すって……」

「人間ヤバイ……？」 いったいどういう意味の言葉なんだ……？」

「あんまりいい感じじゃなさそうなことだけは伝わってくるでありんすね……」

吹屋さんの言う通り、嫌な予感がする。

まだ意味は分からないけど、これも手がかりの一つとして記憶しておこう。

【コトダマ入手：SNSの匿名アカウント

タブレットに入っていたSNSのアカウントに一つだけ残されていた眩き。

「半殺しにしたのに全然だ あいつ殺すか 殺さない人間ヤバイ」と書かれていた。

アカウントは限られた人しか見ることができない、所謂「鍵垢」。

「このタブレットには他に何か情報は？」

「ええと……あ！ 写真が一枚だけ保存してあるでありんすよ！ こ

れは……」

タブレットのカメラロールを開くと、写真が一枚だけ残されていた。

「……伊丹さん？」

タブレットの画面の中では、私服姿で食事をする伊丹さんの姿が写り込んでいた。

背景にあるイルミネーションを見るに、季節はクリスマスのようにだ。

とても幸せそうな笑顔がまぶしく感じられた。

「可愛い……。これ、昔のゆきみんでありんすか……？」

「たぶん……。記憶を消されている間の出来事だと思う。自撮りじゃないってことは……これを撮った相手がこのタブレットの持ち主なんだろうね」

失われた学園生活のページを切り抜いた写真……

このロシアイの真相に関係があるのかは分からないが、覚えておいて損はないだろう。

【コトダマ入手：伊丹の写真】

SNSがインストールされていたタブレットに一枚だけ保存してあった写真。

私服姿で誰かと食事をしている伊丹が写っている。とても幸せそうな表情をしている。

それ以上は何も得られなかったタブレットを机の上に戻すと、俺達は再び部屋の調査に戻る。

「ひえ〜、何から見ていけばいいんでありんしょ……」

「全部調べている時間はないから、とりあえず目についたものをざっと見て重要そうなものだけをより分けていこう」

そう言いながら俺は目の前に落ちていた大きなファイルを手に取る。

「これ……以前入間君たちが休憩室で見ていた資料……？」

俺はいよいよ伊丹さんと直接話すことにした……が。

「あら、どうしたの、葛西君？」

そこにはすでに先客がいた。

「入間さんと伊丹さんはここで何を……？」

「興味深い資料を見つけたので、二人で調べていたのですよ」

休憩室で伊丹さんと入間君はファイルのようなものを開いて読んでいた。

個室をノックしても返事がなかったのでここにいるのだろうとは思っていたが、まさか入間君も一緒とは。

前木君のことを聞きたかったが、第三者がいるときに聞けるような話でもない。

「そうなんだ。資料って……？」

俺はそう言つて机の上に広がっているファイルの名前を一瞥した。

『アルターヒューマン 機構概要』

ファイルにはそう書かれていた。

「以前、アルターエゴ様が述べられていた“アルターエゴⅢ”や“アルターヒューマン”などの機能について調べていたのですよ。モノクマがアルターエゴを搭載している可能性が高いということは、その機能をよく調べることで何か見えてくるものがあるかもしれません……」

「なるほど……」

アルターエゴが生前に残した情報や俺が今現在把握しているメカニックは、以下の通り。

アルターエゴ。

“超高校級のプログラマー”が設計したという、高度な感情表現を

可能にする人工知能。

アルターエゴⅡ。

御堂さんがアルターエゴに手を加え、ハッキング能力と耐性を強化したプログラム。

アルターエゴⅢ。

人工知能に“超高校級”の才能を搭載し、全体的な能力も向上させたプログラムの究極系。

だけど今はまだ試用段階のようだ。

モノドロイド。

この校舎内に実装されている、人型アンドロイド。

アルターエゴをインストールさせることでほぼ人間と変わらない動きをすることができる。

アルターヒューマン。

アルターエゴとモノドロイドを極限まで進化させたうえでそれらを組み合わせた存在。

外見も仕草も人間と変わらず、それでいてアルターエゴⅢ由来の超高校級の才能までもを搭載したマシン。

おそらくは、希望ヶ峰学園が最終的に生み出そうとしている存在。そのアルターヒューマンの解説書が、このファイルだというのか。

数日前、入間君と伊丹さんが休憩室で調べていたアルターエゴやモノドロイドの資料と同じものだ。

これもコロシアイの真相を探るうえでは外せない情報となるはずだ。

【コトダマ入手：学園が保有するAIとアンドロイドの一覧】

アルターエゴ——“超高校級のプログラマー”が開発した、人間の思考や感情を再現した人工知能。

アルターエゴⅡ——アルターエゴを元に御堂秋音がハッキング能

力を付与したものの。それ以外の性能はアルターエゴと変わらない。
アルターエゴⅢ——アルターエゴⅡの能力に加え、電子化した“超
高校級の才能”の情報を認識することで才能を発揮できるよう
なった人工知能。

モノドロイド——御堂が開発した試作型アンドロイド。命令入力
により操作できるほか、アルターエゴⅡもしくはⅢが内部にインス
トールされることで肉体として操作可能。

アルターヒューマン——人間の姿を高度に模したモノドロイドに
アルターエゴⅢをインストールさせることで誕生する、人工の“超高
校級”。まだ試験段階とされる。

「そーいえば……アルターエゴⅢを開発したのってあきねるじゃな
かったでありんすね」

「あきねるってのは……御堂さんのことか。…そうだったの？」

「あちきの記憶が正しければ……ほら、ここに書いてある」

吹屋さんが指差したページには、アルターエゴⅢの開発者について
の概要が記載されていた。

『アルターエゴⅢの開発を行ったのは希望ヶ峰学園（黒塗り）期生、“
超高校級の『超高校級』研究家、（黒塗り）である。彼女はヒトの脳内
において才能を発揮させる脳波の検出に成功。膨大な量のアルゴリ
ズムを解読し、これを電子情報として再現した。人類が数千年かけて
実現していくはずの技術を数年で、しかも年端もいかぬ年代にて成功
させたその頭脳は、まさしく人類の歴史に無二の至宝と言えるだろ
う』

これを読む限り、その開発者は相当すごい人みたいだ。

もし、その人も希望ヶ峰学園にいるのなら……無事だといいんだけ
ど。

【コトダマ入手：超高校級の“超高校級”研究家

アルターエゴⅢの開発者とされる人物。人類史上最高峰の天才と

称される。脳内において“超高校級の才能”を発揮させる信号を発見、これを電子情報に置換させることに成功した。現在どこで何をしているかは不明。

「あの、ユキマル、これ……」

と、吹屋さんが何かを見つけたようだ。

……正直言つて、今までが嘘みたい。今の吹屋さんは役に立っている。

「この写真、見覚えがある気が……」

「どれどれ……」

写真に写っているのは、ピンク色の髪を二つ結びにした豊満な体つき
の女性。

写真というよりは雑誌の表紙のような印象だ。

「……この人……江ノ島盾子……？ ああ、中学生にして超人気ギャルの……」

俺の記憶の中から探し出されたその名前は、今若者に大人気を誇るギャルの名だった。

脚本の仕事をしているとき、何度か出演候補に挙がったことがある。

その子は俺より三つくらい年下で、俺が希望ヶ峰から招待を貰った頃は中学生だったけど……

記憶を失っている間に数年経ったのだとしたら、彼女も希望ヶ峰に招待されているのだろうか。

「ユキマル、顔と胸ばっかり見てるでありんすね？ あちきが見てほしいのはここでありんす！」

別に……胸は見えないよ……ちよつとしか。

「ん……？ これ……」

吹屋さんが指差したのは、江ノ島盾子がつけている髪留めだ。

「……モノクマ……？」

間違はなく彼女がつけている髪留めはモノクマの顔をしていた。

「……それで、この写真の横に置いてあった文書……。こいつを見ると、

「この子のことがだいぶ分かるでありんすよ」

「こんなにもポンポンと手掛かりが見つかるのは、やはりモノクマが裁判を楽しむためにテコ入れしているからなのだろうか。」

「えつと……え……？」

その文字を目にした俺は思わず言葉を失った。

なぜならその資料には……。

「『人類史上最大最悪の絶望的事件』……それを巻き起こしたのが江ノ島盾子……？」

……そう書いてあったからだ。

「にわかに信じがたいでありんすけど、この人、所謂『超高校級の絶望』……っていう連中の頭だったみたいでありんすね……。この絶望的事件っていうやつで希望ヶ峰の生徒が何人も死んで、加速的に世界に絶望が広がっていったとか」

「なんだか、点と点が線でつながったような気がする。」

俺達が目にした、崩壊した世界。

その原因が希望ヶ峰の事件にあったなんて……。

その江ノ島盾子という人物は、世界に破滅をもたらしたという意味で真正正銘の“絶望の神”なのかもしれない。

——このコロシアイの裏には、世界規模の壮大な裏があるのかもしれない。

【コトダマ入手：人類史上最大最悪の絶望的事件】

このコロシアイの少し前に希望ヶ峰学園本校舎で起きたとされる生徒の大量殺人事件。この事件を機に世界に絶望が蔓延したとされる。

【コトダマ入手：『超高級の絶望』江ノ島盾子】

“人類史上最大最悪の絶望的事件”を巻き起こしたとされる希望ヶ峰学園78期生の生徒。“超高校級の絶望”の中では神格化されており、多くの信者が存在している。

【コトダマ入手：超高校級の絶望】

78期生の江ノ島盾子を中心とする、“絶望”を至上の喜びとする

集団。釜利谷、伊丹、御堂の三名がこの組織の一員として活動していた。

「コトダマ入手：外界の真実

タワーの下界は絶望に包まれた世界と化しており、無秩序な破壊や殺戮が繰り返されている。

「ふう……」

有用な情報を得た俺達はなおも資料を探して右往左往するが、散らばったり燃えたりする資料の山をカテゴリー別に分けるのは容易な作業ではなかった。

「……ん？」

そんな折、俺はドアの隙間から廊下を歩く人影を見た。

あれは前木君でも山村さんでもなく――。

俺は作業に集中する吹屋さんに声もかけることも忘れて廊下に飛び出した。

「……小清水さん」

俺が呼び止めると、彼女は歩みを止めてギロリと俺の方を振り向く。

「黒幕と会話する義理なんてないけど」

…今の俺はそういう風にもいられているのか。

確かに黒幕は紛れもない葛西幸彦なのだから、返す言葉もない。

…だけど、これだけは伝えなくては。

「…助けてくれてありがとう」

彼女の目を見て俺はそう告げた。

ほんやりとしか覚えていないが――。

あの時、俺を助けて銃を撃った時の彼女の表情は――本気の“怒り”に包まれていた。

モノクマに対する純粋な怒りに。

…はあ、と小清水さんはため息をつく。

「……877」

「……」

突如として彼女が呟いた数字の意味を理解することはできなかった。

「あの植物園にいた虫さんと、私が把握していた数。実際は2000ほどこいたでしょうね。…間違いなくこの爆発と火災で全滅よ」

「……」

「あなた達人間はその命を考慮すらしめないでしょうね。あなた達が気にするのはいつも人間の命だけ」

「それでも……君は俺を助けてくれた…」

「…虫さんがあの場にいればそつちを助けたわ。反吐が出る話だけど……あなたにはまだ死なれたら困るから」

「……」

「人間は滅ぼすけど、まだ生かす価値があるなら一つの命として助けることもある…。それだけの話よ」

やはり小清水さんは、他の誰よりも“命”に対して真摯だ。

虫の命も、人の命も、同じ一つの命として扱っている。

普通の人間とはあまりにもかけ離れた感覚だ。

けど、俺はやはり――。

「無駄話はこのあたりにして、私とあなたで最後の取引をしましょうか」

「……?」

「情報の交換よ。互いに知りえない情報を教え合うだけ。断る理由なんてないと思うけど」

「君が知らなくて俺が知っている情報って……?」

「あなたの才能よ。モノクマの中の“葛西幸彦”と今日の前にいる“葛西幸彦”の間に生ずる才能の乖離はどこに起因するものなのか：それが私の当面の議題。そこで、このコロシアイの中であなたの才能がどう作用していたのか知りたいの」

「……」

俺は顎に手を当てて考え込む。

このコロシアイの中で、他人の未来を予知できたことは一度もない。

だけど、裁判においては積極的に与えられた情報を元に事件の脚本を組み上げていたように思う。

それに、さっきの入間君の裁判のように、「過程が分かっているのに結論を導き出す」ことすらあった。

「……ふうん」

俺の話聞く小清水さんはメモを取ることもせず腕を組んでいた。

「もういい。大体把握できたから」

……この話から彼女は一体何を汲み取ったのだろうか。

【コトダマ入手：超高校級の脚本家・葛西幸彦

アルターエゴⅢに人格を移植してモノクマを動かし、このコロシアイを取り仕切っていた首謀者。記憶を消される前の葛西本人。

土門隆信を仲間に取り入れ、”超高校級の絶望”と協力関係を築くことでコロシアイの実現を達成した。

【コトダマ入手：葛西幸彦の才能

”超分析力”をもって人物の思考や物理現象等を看破、与えられた知識に基づいた未来を正確に予測する。

偶然による変動や前提知識の誤り等によっては正確に予測できない場合もあり、未来予測は本人が数分間思考するだけで完了する。

アルターエゴⅢにも正確にその能力が受け継がれている。

【コトダマ入手：コロシアイ生活における葛西の才能

コロシアイ生活において葛西は、与えられた情報を元に思考を繰り返し、率先して事件の脚本を組み上げていた。ただしアルターエゴⅢが持つ完全な”超分析力”には遠く及ばない能力である。

「……それで、君は俺に何を教えてくれるの？」

「吹屋喜咲について」

「……………」

その言葉を聞いて思わず俺は少し後ずさる。

彼女の存在もまた、間違いなくこれからの裁判で議題に上るだろうから。

「数日前にあの女にスタンガンを当ててみたのよ」

「……………え!?!」

「常人なら即座に激痛で身悶えするはずでしょうけど、“何故か”反撃された。かと思えば時間差で苦しみだした…。普通の人間では考えにくい反応だと思ってるね」

「……………」

小清水さんが何故そのような行為に及んだのかも気になるが、それよりも吹屋さんのことが気になってしまう。

結局彼女が何者なのかもまだ核心には至っていないし…。

彼女は何故あの監禁部屋に幽閉され、合流することになったのだろうか…………。

【コトダマ入手：超高校級の噺家・吹屋喜咲

第四の脚本の最中に姿を現した16人目の“超高校級”の生徒。葛西達と同級生であつたらしく、断片的に学園生活での記憶を有している。

管制室の隣にある監獄部屋に監禁されており、前木常夏が偶然発見しなければ合流することはなかったと思われる。

【コトダマ入手：吹屋の監禁部屋

吹屋喜咲が監禁されていた部屋は殺風景なコンクリート造りの部屋で、生活に最低限の設備は整っていた。

屑籠には大量の缶詰の空き缶が捨てられており、布団やベッドは比較的綺麗だった。

【コトダマ入手：吹屋への違和感

小清水が吹屋にスタンガンを当てた際、常人とは異なる反応という

印象を受けたという。

「だからこそ吹屋喜咲の——」

そこまで言って突然小清水さんは言葉を止める。

「……？　んじ」

「ゴボツ!!!」

俺の頭は真っ白になった。

小清水さんが口に当てた手、その隙間からビチャビチャと音を立てて零れ落ちる血液。

「寄るな!!!」

走り寄ろうとする俺に小清水さんが怒鳴る。

「もう慣れっこよ…。こんなもの、ただの消化器の損傷に過ぎない」

「だ、だってあんな量の血が…」

「定期的に輸血くらいしてるわよ…。開腹ができれば内蔵にモノポーションを塗ってすぐに治せるんだけどね…。さっきのあなたはみたいに」

「……いつから？」

「…このコロシアイが始まってから。こんなに吐くのは稀だけれどね。知らない間に内蔵にダメージを与えられていたみたいね」

「……知らない間に…？」

「……そんなこと、あり得るの？」

「記憶を失っている間に事故にでもあったのかもね。知らない間にコロシアイを企画していた人間がいたくらいだし、これくらいは不思議でもなんでもないと思うけど？」

こんな状況でも小清水さんは皮肉を言い放つ。

…本当に、大丈夫なのだろうか？

【コトダマ入手：小清水の容態】

目立った外傷がないはずの小清水だが、突然吐血した。本人曰く身

に覚えがないが内蔵が損傷しているとのこと。同様の現象は以前から起こっていたという。

「ユキマル!!」

不意に投げかけられた怒鳴り声に俺は驚いた。

「どうしてあちきを置いて先行っちゃうでありますか!!」

顔を真っ赤にして両こぶしを俺のこめかみに押し付けてくる吹屋さん。

「いてて! ごめんって…。小清水さんに言いたいことがあつて、つい…」

と、俺が助けを求めるように小清水さんの方を向いたが、彼女は既にいなくなっていた。

「口を開けばやよ様のことばかり…」

と、ため息をつく吹屋さん。

「まあいいであります…。次の部屋、行きんしょ!」

「あ、うん……」

吹屋さんに引つ張られるまま、俺達は次に目に入った部屋に入ってしまった。

その部屋にもモノが散乱していたが、先ほどの部屋とは違い、紙やファイルではなくリュックやカバン、ケースなどの荷物が溢れていた。

「…あ! 前木君」

そしてその部屋には、先客として前木君と山村さんがいた。

「おお。俺達が捜査した側は意外と広くなかったから、こつちを調べに来たんだ」

「こんなに早く向こう側を調べ終わっちゃうなんて流石であります!!」

「でもこの部屋、物がたくさんあつて大変なんですよ…」

「しかもさ……見ろよ、これ」

そう言つて前木君はカードのようなものを見せてきた。

「これ……学生証……？」

しかも、れっきとした希望ヶ峰学園のものだ。

「私たちが調べてみた限り……ここにあるもの全部、私たちの私物のようなんです」

山村さんの聞いて即座にいくつかのカバンを調べてみると……。

「…俺のカバンだ……」

中には財布、スマートフォン（バッテリーは切れているようだ…）、教科書やノート、メモ帳が入っている。

書いた記憶のない文章ばかりだったが、筆跡は間違いなく俺のものだ。

「あく!! あちきの扇子!! こんなところにあっただんでありんすねく!!」

興奮した面持ちで扇子の束を抱える吹屋さん。

「なるほど、失われた学園生活の間に得た品物がここに保管されているのなら、貴重な情報源になるかもしれないね」

そうと分かれば、得られる情報は全て得ていかなければならない。

「…そういうえば、前木君たちは向こう側の部屋で何か目新しいものは見つけた？」

「見つけたもの、か……。あっちの部屋は奇妙な機械とかベッドが置いてあって……たぶん三ちゃんの研究室だと思う。その証拠に、前に三ちゃんの個室で見つけたのとよく似たレポートを見つけた」

そう言って彼は俺にピン止めされた紙の束を俺に渡す。

「記憶の制御に関する技術の紹介と……後はそうだ、伊丹が開発したらしい薬についても書いてあった」

「え……それってどんな……」

俺は何枚かレポートをめくる。

『（名前が書いてあるが解読できない） 伊丹ゆきみが開発した海馬もしくは前頭葉に作用する抗生物質。物質の組み合わせにより効能

を変えることができ、(黒塗り)が発見した“才能発現因子”に対しても限定的に作用し、その人物が持つ才能を発揮不能にすることが可能。ただし未だ技術が完成していない部分があり、なんらかの精神的・身体的ショックやダメージの積み重ねで効能が薄れる場合がある』

これより下は専門用語ばかりでろくに読めなかった。

「他にも、『偽の記憶を植え付けようとしたけど失敗した』って記述もあったり……。まあ、内容は裁判に行ってからまた説明するよ。それと、このカセットテープも見つけた」

続けざまに前木君は、ポケットから小さなカセットテープを取り出す。

「今の時代こんなもんをわざわざ使う奴もいるんだなって不思議に思ったんだけど……内容を聞いてびっくりしたよ」

「一体何を……?」

「再生している暇はないから簡単に説明するが……これは伊丹に殺人をさせるための音声だった」

「え!」

さつき裁判で釜利谷君が言っていた内容が脳裏に浮かぶ。

【Chapter 5 非日常編④ オシオキ?編】

『あいつは……伊丹は、自分がクロにならなきゃいけないと思ったからこそ自分を殺してクロになろうとしたんだ』

今までの議論で判明していることを勿体つけながら彼は語る。

『……なあ、お前ら。伊丹が何であんなことをしようとしたか分かるか?』

「……………」

いまさら何を言われようとりアクションする気力なんてなかった。

『俺だよ』

画面の向こうの釜利谷君は、自らを指さしながらにんまりと笑った。

『俺が伊丹に推奨したんだよ。まえなつの命を人質にとつて』

「……………へ？」

そこまで言われて、初めて前木君が声を上げた。

『お前がクロにならなきゃまえなつがクロになるぞって言ったらすぐにクロになる決意を固めてくれたよ。まあ、実際なりかけてたしな』

「ちよつと……………待て……………。三ちゃんが……………伊丹を……………？」

『そうだ。俺が伊丹の心を後押ししてやったんだよ。…だけど勘違いすんなよ？ 俺はあまり嘘は言ってねえし、条件を付けて無理矢理クロにさせたわけでもねえ。ただ後押ししてやっただけさ』

「…こんな音声のせいで俺達は……………でも、これも立派な情報になる以上覚えておくしかない。……………俺が殺人を起こすかもしれないって話、しただろ…？ 三ちゃんは”それを防ぐにはお前が先に誰かを殺すしかない”って言って伊丹に殺人…いや、自殺を決意させたんだ。…本当に汚い……………醜い奴だ」

「……………」

そう呟く前木君の表情には怒りがこみあげていたが、同時に苦しんでいるようにも見えた。

大好きだった親友のあまりにも邪悪な側面を見てしまった彼の辛さは、俺なんかでは想像にも及ばない。

けど……………それも含めて、全てに決着をつけないといけない。

『それに葛西……………この際だからお前に打ち明ける。俺が殺人をした際には……………吹屋と山村と入間と伊丹に生き残ってもらおうつもりだった。

…俺と小清水、そしてお前のことも犠牲にしようとしていた」

「……………!? 俺を……………？」

「ああ……………。小清水からお前が黒幕かもって話を打ち明けられて、伊丹を助けるにはこれしかないって思っちゃまったんだ…。謝つても許されることじゃないけど、本当にすまない……………」

そう言つて前木君は俺に頭を下げる。

「そ、そんな……今は謝るよりも謎を解き明かさないと……」

「……そ、そうだな……。でも、これだけは言つておきたかつたんだ……」
前木君も、いろいろ悩んだ上での決断だったのだろう。

——それに、俺が黒幕だというのは実際に当たっていた。

本当に、俺は何の責任も取らなくていいのだろうか？

【コトダマ入手：脳科学研究レポート】

釜利谷の研究資料と思われる分厚いレポート。一部の記憶を選択して消す方法や、才能を抑制する伊丹の新薬についての記述がある。

また、偽の記憶を植え付ける研究も行っていたようだが、完成には至らなかつた模様。

【コトダマ入手：伊丹の新薬】

伊丹ゆきみが生前開発していたという、“記憶を制御する薬”。記憶だけでなく、人格や才能など脳機能に付随する能力をそれぞれ抑える種類の薬がある。

ただし釜利谷の記憶制御ほど完璧に制御することはできず、ある種の刺激や衝撃などで封じた機能が復活してゆくことがある。

【コトダマ入手：カセットテープ】

隠し部屋に置いてあつたカセットテープ。釜利谷の音声を録音したものであり、前木が殺人を犯す可能性に触れることで伊丹に殺人を起こすよう誘導している。

「え!? なんですかこれ……」

俺達は山村さんが出したひとときわ大きな声を聞いて振り向く。

「どうしたの？ 何か見つけた？」

「私の持ち物を調べて……馴染みのあるものばかりだったんですけど、突然意味が分からないものが出てきて……」

そう言つて山村さんが見せたのは一冊の本だ。

「……『拷問のススメ』……?」

「どうしてこんな物騒な本が入っているんでしょ……？ 拷問なんて興味を持ったこともないし、武道をそんなことに使おうなんて微塵も思ったことはないのに！」

パラパラとページをめくってみると、世界中の様々な拷問や処刑の手法が載っている。

「うわ…… 断頭卿” ってネットで見たあの……。グロい写真とか、ガチのタブーとかも平気でつけてるんだな……。素手で人を効果的に痛めつける方法も載ってるし」

「ますます気味が悪いですよ……。誰かが悪意を持って私の荷物に紛れ込ませたとしか考えられません！」

確かにそうなのかもしれない。

けれど、誰がそんなことを……？

【コトダマ入手：拷問のススメ

山村の私物から出てきたオカルトじみた本。様々な拷問の手法が載っており、素手で効率よく人間を痛めつける方法も記載されている。

「俺の私物には特に気になるものは入ってなかったけど……。そっちはどうだ？」

俺は土門君の私物を調べていた。

人の者を物色するのは気が引けるが……。今は常識なんて気にしていられる状態じゃない。

「これ……。今までの事件について書いてある」

俺が見つけたのは、今までに見つけたどの資料よりも分厚いファイルだった。

『第一の脚本——動機を提示 ↓ コロシアイ起きず トラツ
シユルームに仕掛けを施す ↓ コロシアイ起きず

ルール説明を省く ↓ 津川梁が自らの殺害を

(土門) に依頼 ↓ 。。。どうする？

(以下、事件に対する様々なセットアップやシ

チュエーションの設定について書かれている)

津川梁 ↓ 山村に変装して(土門)に反撃されるのが狙い ↓ (土門)モップで殺す ↓ 焼却炉 ↑ 焼却炉は必要? ↑ 謎を増やすため

他の人間が狙われると上手くいかない 土門でいく

土門 ↓ 偽装オシオキで一度潜伏 第二の脚本後に夢郷が動くのでそれを使う 『詳細後程』

———そんな感じのことが何枚も何枚も書かれていた。

このコロシアイでは起きなかった展開やその場合の対応についても、びっしりと書かれているが……。

吹屋さんについては全く触られていない。

そう言えば、彼女は前木君の“幸運”による効果で発見されて——。

その幸運は、黒幕の力でも見破ることができないっていう話があったな……。

これも覚えておこう。

……ところで、時節見られる赤ペンや青ペンによる注意書きは、誰が書いたものなのだろう。

謎は深まるばかりだが、ひとまずこの脚本は最終裁判においてトックラスに重要な情報になるのは間違いない。

【コトダマ入手：絶望の脚本集

土門の私物と思われるカバンの中に入っていた大量の紙資料。第一の事件から第五の事件に至るまでの流れが詳細に記載されているが、様々な状況によって場合分けして書かれているため、実際には起こっていない事件の概要なども同封されている。

赤字や青字で何者かの質問や指示が記載されている。

【コトダマ入手：超高校級の幸運

前木常夏が持つ”超高校級の幸運”の才能は時として”超分析力”による予測を遥かに超える現象を起こし得る。吹屋の合流もその一例。

「…ん？」

もう一つ、土門君の私物から気になるものを見つけた。

薄いファイルに入れられたその紙には、一人の少女の病気について書いてあった。

「土門美咲……？ 年齢的に妹さんかな……」

「そういえば土門の奴、最初の裁判の時に”病院にいる妹のためにタワーを建てたい”って言ってたよな…。今となつては本当の話なのかも分からないけど…」

カルテを覗き込みながら前木君が言う。

「…でも、このカルテがニセモノじゃない限り、土門くんは妹がいて寝たきりになっていたのは本当みたいだ。このカルテを見ると、『複数回の打撲に起因する深達性の脊髄損傷、下半身不随および多臓器不全。延命治療中』『先天的識字障害と吃音症 知性・社会性は正常』って書いてある…」

「延命治療……？ もう、助からない段階だったってことか……？」

だとしたら、彼の妹さんは、もう……。

土門君は最期まで悪い奴だったが、それを知ってしまうと少し同情の気持ちも生まれてしまう。

「それに……土門の妹って打撲で足が動かなくなったのか？ 少し記憶と違うような気もするけど……」

えっと……？

最初の裁判の時、彼はなんて言っていたっけ……？

「まあいい。辛い話だが、これも何かのヒントになるかもしれないな……」

少しモヤモヤが残るが、ひとまず一つの情報として覚えておこう。

「コトダマ入手：謎のカルテ

土門の私物から発見されたカルテ。一人の少女について二つの事柄が書かれており、「吃音症及び識字障害。その他の知性・社会性は正常」「複数回の打撲による脊髄損傷。下半身不随及び多臓器不全。延命治療中」と記載されていた。

俺達がカルテを見てしんみりしていると、吹屋さんが俺達に近づいてきてその肩をどつく。

「お二人は何か見つけたでありますか？ あちきはユメちゃんの荷物から著書を見つけたでありますよ！」

「著書？」

才能柄、夢郷君は多くの自著を出版していた。

「…何か気になる内容でも？」

「なんか絶望がどうかって話が……あつたあつた！ ここ！」

吹屋さんが開いて見せたページに俺は釘付けになってしまった。

『著者が思うに、“絶望”と呼ばれる感情は五つのベクトルに分けられる。

希望——絶望を生み出す原動力。限界を知らぬ光の心。絶望に無くてはならぬもの。

野望——誰かを滅してでも、何かを奪ってでも己の夢を果たさんとする力。

渴望——欲望とも呼ぶ。空虚にして無尽。無限に欲し続ける浅ましさの象徴。

失望——偶像との乖離。一方的な期待とそれゆえに起こりうる破滅。無知ゆえの非。

羨望——自己が持たざるものを持つ他者への底無き憎悪。平等無き世界ゆえの情。

これら五つの感情を著者は“ごたいぼう五大望と呼ぶことにした。これらの要素こそが“絶望”を為す根幹であると著者は確信する』

——そこには、“絶望”に対する夢郷君なりの解答が書かれていた。

「書いてあることはよく分かんないでありんすけど、黒幕の目的を探るためにはこういう概念って大事なんじゃないかなーって思うでありんす！」

「そう……だね。ありがとう、吹屋さん」

「やったー!!! 久しぶりにユキマルに褒められた〜!!!」

子供のように陽気にはしゃぐ吹屋さんを尻目に、俺は夢郷君の著書について思考を巡らす。

この概念……何かと繋がりそうな気がするけど……。

【コトダマ入手：五大望

かつて“超高校級の哲学者”夢郷郷夢が提唱した、“絶望”の根本を司るとされる五つの感情。

希望、野望、渴望、失望、羨望を指す。これら五つの要素を統合した感情が“絶望”である。

「ふうつ、皆さん手掛かりを見つけてるのが早いですね……。私は全然……」

山村さんが汗を拭いながら言った。

「って思ってたらなんかただならぬメモ書きを見つけました！ 私ったら天才ですね！」

「都合よく出てくるもんだな……。で、何が書いてある？」

「これは筆跡的に釜利谷君ですね！ こんな汚い字を書くのは彼しかいませんから！」

「また三ちゃんか……」

やはり彼は、“超高校級の絶望”の中でもひとときわこのコロシアイに多く噛んでいるようだ。

「えーとなになに……『信頼できる筋から盾子様のコロシアイ計画を入手した。これをそのまま脚本の舞台として使用したい。ルールの詳細を送るのでそちらはシミュレート結果を送るように』」

「葛西に宛てたものみたいだな……。コロシアイの主権をした頃の」

シミュレート……というのはすなわち俺の未来予知能力のことを

言っているのだろうか。

「盾子様って……あの江ノ島盾子でありんすよね!？」

「…そうみたいだね。前木君たちには後で説明するよ。これで…何か繋がってきたような気がする」

【コトダマ入手：釜利谷の手記

このコロシアイの主権に協力した釜利谷が残した手記。江ノ島盾子が起こそうとしているコロシアイの内容を参考にし、これを再現するために葛西に協力を求める旨が書かれている。

その後も俺達は10分ほどいろんな人の荷物を漁った。

主に手記を重点的に調べたけど、特に気になる内容のものはない。

「これくらいで切り上げた方がいいかな……?」

と前木君が呟いた直後。

「ねえ、ユキマル……これ、なんでありんしょ……?」

吹屋さんが俺の肩を叩く。

その手記は、可愛らしく丸っこい字で書かれていた。

津川さんのものだ。

『誰かがこれを見てくれると信じて書きます。

私が所属するクラスは（黒塗り）の危機にあります。

（以下、数行にわたって黒塗り）

私は諦めません。例え一人になっても、必ずみんなに希望を取り戻させます。

でも、もし私がこのクラスにいられなくなったら、（黒塗り）。

そうなるまでは、私がみんなを導いて見せます。』

「これは……どう解釈するべきなんだ……?」

意味を読み解こうにも、黒塗りされている箇所が多くて内容を掴み取ることすらできない。

「でも、クラスが何らかの危機にあるってことは分かるでありんす…。

これ、あちき達のクラスのことでありんすよね？」

「まさか、記憶が消される前から『絶望』が動き出すような予兆があったというのだろうか。」

また一つ不安材料が増えたような気がするが……。

ロシアイが始める前にも、何かがあったことは間違いない。

【コトダマ入手：津川の手記】

荷物倉庫の津川の荷物から出てきた手記。ロシアイが始まる前に書かれたと思われる。

「誰かがこれを見てくれると信じて書きます。」

私が所属するクラスは（黒塗り）の危機にあります。

（以下、数行にわたって黒塗り）

私は諦めません。例え一人になっても、必ずみんなに希望を取り戻させます。

でも、もし私がこのクラスにいられなくなったら、（黒塗り）。

そうなるまでは、私がみんなを導いて見せます。」

「あら、こんなところに勢揃いなんてね」

あらかた荷物を調べ終えようかという時、部屋の入り口に立つ小清水さんが嘲るようにそう呼びかけてきた。

「こんなところに時間をかけてもいいの？ 他にも調べるところはたくさんあるでしょうに」

「…だからこそ、お前がそこを調べてきたんだろ？ いがみ合ってる時間はない。情報は出してくれ」

即座に前木君が言い返すと、「フン。多少はマシな頭になったのね」と彼女は吐き捨てる。

「…廊下をそちらに行った先に小部屋がある。その中には何も無い。…小さな貨物用エレベーターと床下に続く梯子以外はね」

「え!? 他の階に行ける場所があったの!？」

「貨物用エレベーターは身をかがめば人でも入れるし中から操作もで

きる。実際に入って動かしてみたら、管制室のロッカーの中に通じてた。隠し部屋にさらに隠し通路があるなんて驚きよね」

「……！」

そうか。

モノクマはそうやってこのフロアに移動していたのか。

管制室のロッカーも一度は調べたはずだが、壁が開くような仕組みは一切見つけられなかったな……。

よほど周到に隠したと見える。

「それで……梯子の方は？」

「一応少しだけ見たけど……特に得たものはなかったわね。まあ、暇があれば見に行けばいいんじゃない？」

髪をかき上げながら小清水さんは言い放つ。

「そうなのか……。でも、気になると言えば気になるな」

「……俺、その場所を見てきていいかな」

俺はいつの間にかそう名乗り出ていた。

「小清水さんにとって不要な情報でも、俺にとっては重要なものかもしれない。見られる場所があるならしらみつぶしに見るべきだと思うし」

「……そうか。任せてもいいか？俺達はもう少し荷物をくまなく調べたい」

「うん。小清水さんが一人で見てこられたなら安全……なんだよね？」

「……フン。まああなたみたいな軟弱ものでも傷つくことはないでしょうね。ハッキリ言ってここよりも安全よ」

小清水さんは毒を吐くが、その言葉のおかげで俺は安心して捜査に集中できる。

「じゃあ行ってくる。みんな……ここは任せた」

「気を付けるでありんすよ！危なくなったらすぐ逃げて！」

吹屋さんの言葉を背中に受けながら俺は廊下へと走り出す。



俺は炎を避けながら急ぎ足で廊下を突き進む。

まるで、一生懸命捜査する彼らから逃げ出すように。

——そう。

俺は逃げたいんだ。

最も邪悪な倒すべき敵が“自分”であるという事実から。

一生懸命捜査をして戦ってくれている仲間を苦しめた相手が自分だったという事実から。

少し走っただけで大きく息切れした。

それは、この酸素が薄いからじゃない。

みんなの前で隠していた感情がどっと押し寄せ、俺は思わずしゃくりあげそうになった。

ただ辛いだけのこの感情を一体どうやって処理すればいいのか？

今までのどんな絶望とも違うベクトルの、この辛さを、俺はどうすれば——。

そうこうしているうちに廊下の一番奥の小部屋へと着いた。

壁に設置してある貨物用エレベーターが目に入ったが、その操作盤は既に電源が落ちている。

火災で電源の供給が止まったらしい。

だが、俺の目的はそこじゃない。

床板が一枚抜け、そこには一つの梯子が立てかけてあった。

俺は一抹の不安と期待をそれぞれ胸に、ゆっくりと梯子を下って行った。

ここを下れば、何かが変わるんじゃないかという無根拠な期待だった。

——梯子を下りると、これまでに見たものとは全く違う光景が俺

を出迎えた。

その場所は、階全体が一つにまとめられた非常に広い空間だった。どういおうわけかこの空間に火の手は回っておらず、赤々とした視界は一転して暗い闇に包まれることとなった。

人工の地面には隙間なく草が生え、風もないのに葉がこすれ合う音が聞こえてくる。

まるで、夜の草原を一部分だけ切り取ったかのような幻想的で心休まる空間だった。

そんな空間で俺の目を引いたのは、空間の中央に何個も整列する大きなガラスのケースだった。

俺は草をかき分けて中央へと足を運ぶ。

端に位置するガラスケースを見て、俺はハッと息を飲んだ。

縦長の六角形をした大きなガラスの中には、子供のように小さい黒焦げの焼死体が収められていた。

焼け残った右手が大好きな友達の手を掴むことはついぞなく、無念と苦痛の中で死んでいった少女――。

津川梁さんの遺体が収められていたのだ。

そして俺は、この空間がどのような場所であるかを理解した。

草原の中央に鎮座するのは15個のガラスの棺――。

――ここは、墓地なのだ。

静寂に包まれた暗い草原にガラスの棺が並ぶ、漆黒の墓場。

……だけど、それを知ってなお――不思議なくらい、怖くない。むしろ、さらに心は研ぎ澄まされ、安らかになっている。

その理由もすぐに分かった。

彼らは、彼女らは、これまで一緒に戦ってきた仲間たちだ。

命を懸けて戦い、死んでいったかけがえのない友達だ。その遺体を異物や亡霊扱いなんてできるはずがない。

死してなお、彼らはここにいる。

友達がそばで見守ってくれているんだ。

そして俺は、津川さんの棺の反対側に並んでいる四つの空の棺に目をやる。

「これが、俺達の棺……」

ここまで生き残った俺達を収めるための棺。

数を考えると、吹屋さんの分は用意されていないようだ。

「……みんなをここに入れるわけにはいかないな」
負けられない。

ここに眠る仲間、友達のために俺達は勝たなくてはならない。

俺は再び津川さんの棺に視線を戻す。

数週間ぶりに眺める遺体も、あの時と全く様子は同じだった。

だけど、もう目を逸らさない。

俺達が招いた悲劇、地獄、離別から。

全身全霊で受け止めて、先に進まなくてはならない。

捜査という時間が限られた状況においてなお、俺はこの友人達を弔うことにした。

それが、今の俺にとって何を差し置いてもしなければならぬことだと直感したからだ。

俺は最初の棺に目を向ける。



「リャン様参上なりーっ!!!」

津川さんは、最初から最期まで明るく輝く俺達の光だった。

誰よりも前向きで、みんなのことを第一に考える心優しい女の子だった。

自身のファンや祖母のことも常に気にかけていた。

あんなに心優しい天使のような人が他にいるだろうか？

周囲の人の心無い発言で傷つけられることもあった。

だけど、彼女はみんなを助けようと誰よりも先に動き出した。

ルールを勘違いしてしまっていたのは本当に悔しいけど……彼女

は自分を犠牲にしてみんなを助けようとしていたんだ。

それなのに、その最期はあまりにも報われなかった。

生きたまま焼却炉に放り込まれ、地獄のような断末魔を残して炭と化したのだ。

熱かっただろう。

痛かっただろう。

その犠牲と苦痛の元に俺達は生かされている。

彼女の死は俺達を絶望の底へと叩き落した。

だけど、彼女の献身と慈愛の魂は、残された俺達の胸に今も眠っている。

ここを出たら、君は世界一人を笑顔にさせられる人間だったとみんなに伝えよう。

だから、今はゆっくり休んでほしい。

君からもらったホープ仮面のマスク、一生大切にするよ。

俺は棺に眠る津川さんの遺体に向けて両手を合わせた。

おやすみなさい、津川さん。



釜利谷君。

俺は今でも、君に対してどんな感情を抱けばいいのか分からない。君が“絶望”の手先で、このコロシアイにも一枚噛んでいたなんて、未だに俺には信じられない。

だって俺がこの目で見た君の姿は、“ダチ”のために本気で熱くなる優しい姿だけだったから。

あの時の姿に偽りがあったとはとても思えなかった。

後から“絶望”だったって言われても、全く現実味がなかったんだ。

でも、入間君のオシオキの前に映像で現れた君もまた——本当の君なのだろう。

あの姿を見て、一番辛かったのは親友の前木君だと思う。

でも、俺もものすごく辛かったんだよ。

釜利谷君……君はどうして“絶望”に堕ちてしまったんだ？

どうして入間君の恋人にあんな仕打ちをしたんだ？

君は一体何がしたかったんだ？

棺に眠る彼の遺体は白骨化していた。

入間君のオシオキの中で焼き尽くされた後の姿と同じだ。

彼はあのオシオキの時、一度蘇ってまた殺されたのだろうか？

今となっては分からない。

結局、彼は最期まで謎と絶望に満ちていた。

でも、できる限りこの後の裁判で明かしていくつもりだ。

俺は君のことを忘れない。

そして、君がやったことは一生消えない。

良いことも、悪いことも。

君からもらったハンカチ、捨てないで持つておくことにするよ。

君の所業を忘れないために。

俺は棺に眠る釜利谷君の遺体に向けて両手を合わせた。

地獄の底から俺の最後の戦いを見ていてほしい、釜利谷君。



彼の棺の中には古びた血が大量に広がっていた。

龍雅・フォン・グラディウス——絶望を食らう殺し屋は、大ホールで息絶えた。

モノクマやモノパンダ達と一戦を交えた後、御堂さんの手で槍で突き殺されたんだ。

彼は——釜利谷君とは違う意味で実感が湧かない距離感の同級生だった。

彼も、俺が生前に見た姿は暖かく頼れる兄貴分のような背中だったのだ。

確かに殺し屋を思わせる発言や雰囲気はあったけど——。

それでも、彼から人のぬくもりが消えたと感じた時はなかった。

彼は最期まで、直接その口で自らの本性を語ることはなかった。

何も言わないまま、黙って黒幕に勝負を挑み、散っていった…。

彼らしいと言えば彼らしい最期だったのかもしれない。

きっと彼は、俺なんかじゃ想像もできないほど悲惨な光景を何度も目にしてきたのだろう。

俺達とは全く違う世界を見てきたんだと思う。

俺のような人間とは感性も思考も全く違っていたのかもしれない。

でも、君の意志は確かに俺達に受け継がれたと思う。

君が残した銃が小清水さんの手に渡り、俺の命を救ってくれた。

君は命の恩人なんだ。

“グラディウス”の魂は今もまだ生きている。

今度は、俺達が君の代わりに戦う番だ。

俺は棺に眠る龍雅君の遺体に向けて両手を合わせた。

ありがとう、龍雅君。

激しい戦いで身も心も疲れただろうから、君はゆっくり休んでね。



その隣の棺に納められている少女を一目で人と判別できるものはほとんどいないだろう。

木の根と見紛うほどに細く小さく干からびた少女は、腕を前に伸ばしたまま息絶えていた。

その腕が大好きな母親の元に届くことはなかった。

御堂さんの死は、俺たち全員を絶望の底に叩き落した。

孤高で気高い普段の姿とはあまりにもかけ離れた、子供のように泣き叫ぶ彼女の姿を忘れた日は一度もない。

それだけ彼女にとって母親の存在は大きかったのだ。

例えば、子供を放り出して好き勝手に放蕩し虐待を重ねるような親であっても。

彼女の人生を歪めるに十分すぎるほど大きな存在となってしまうていたんだ。

俺達がほんの少しでも早く彼女の本当の心に気付いていたなら。

あの悲劇を防ぐことはできたのだろうか。

最期まで母親にしか心を開かなかった君と真に触れ合える日は訪れたのだろうか。

君が残したアルターエゴやモノドroidは黒幕に利用される形となってしまうた。

いや……君も“超高校級の絶望”だったのなら、それは本望なのだろうか。

思い出したい。

失われた学園生活の記憶の中で、君は一体どんな様子で一緒に過ごしていたんだろう。

これは俺の予想だけど：君もクラスの一員としてみんなの輪の中に溶け込めていたんじゃないかって思う。

だって君は、本当は心優しい女の子なのだから。

君の深い家族への執着は、裏を返せばそれだけ君が慈愛に満ち溢れた人だったことの証明になる。

そんな君の笑顔が見たかった。

生まれ変わったらもう一度俺に会いに来てほしいな。

次こそは君と心から仲良くなれるって信じてるから。

俺は棺に眠る御堂さんの遺体に向けて両手を合わせた。

どうか君の来世が、救いのあるものでありますように。



血や吐瀉物は掃除されていたが、棺の中で眠る丹沢君の表情は相変わらず苦痛に歪んだままだった。

彼はいつでも清く正しく真面目なオタクだった。

自分の作品で人々を幸せにすることを真剣に追求し、作品への妥協を許さないプロフェッショナルとしての顔も持っていた。

その証拠に、彼は津川さんの遺言書に残されていた等身大像をたった数日で完成させた。

大切な友達の遺志に答えるために、きつと夜も眠らずに作業に励んでいたのだろう。

それに、知恵を働かせてアルターエゴⅡを隠し通してくれたのも彼の功績だ。

謎解きや議論に自信が無さげだった彼が、自分なりに必死に考えて

俺達に希望を託してくれたんだ。

彼が渡してくれたバトンを無駄にするわけにはいかない。

：…そういえば、人間君や前木君、安藤さんやリュウ君とも彼は気さくに話していたな。

あまりにも自然だったので意識していなかったけど、ひよつとして俺達の中で一番輪の中心にいたのが多かったのは彼なのかもしれない。

心優しくて良識と真心がある彼ならそれも当然のことだ。

思えば、彼が作った津川さんの像は、この世のものとは思えないほど美しかった。

津川さんも天国で幸せに思っているはずだ。

彼自身は悲壮な最期を遂げたけど、その芸術は現世に残って俺達に君が込めた最後の想いを伝えてくれた。

ここから脱出することができたら、必ずここにあの像を取り戻しに来ると約束するよ。

俺は棺に眠る丹沢君の遺体に向けて両手を合わせた。

君を実質殺害したのは小清水さんだ。

その罪を背負った彼女が何を為すのか、どうか見守っていてほしい。



その棺の中に収められているのは、津川さんのように黒く焼け焦げた遺体。

ただしその遺体は粉々に砕け、文字通り炭の残骸が棺の中に散乱されているだけの状態になっていた。

溶岩の濁流に飲み込まれバラバラに損壊した安藤さんのなれの果

てだった。

こんな姿になつてなお、彼女は冥府で作品を書き続けているのだろうか？

俺も創作物を世に生み出し発表する立場だったからこそ、俺は君の考えていたことが一切分からない。

同じく創作物の作り手だった丹沢君を手にかけてまで、君は創作を生み出す“力”を得たかったというのか？

漫画について語っている時の君はあんなに輝いていたのに。

俺をモチーフにした漫画のキャラクターを描いてもらった時はあんなに嬉しかったのに。

どうして君とあんな形でお別れをしなければいけなかったんだろう。

君は小清水さんと違って、本性を隠すことはしていなかった。

漫画を描いてキラキラとした笑顔で俺達に見せてくれたあの姿と、創作に対する狂気を語る悪魔のような姿は、どちらも同じ安藤さんの姿だった。

だからこそ俺は辛かった。

けど、起きてしまった事実はもう元には戻らない。

君の犯した罪は許されるものじゃないけど、君がこの世に残した創作物と友情は、確かにかけがえのないものだった。

俺はこれからも君のことを忘れられないだろう。

俺の記憶の中で、俺達を見守っていてほしい。

俺は棺の中の安藤さんの遺体に向けて両手を合わせる。



棺の中の亞桐さんの顔は、絶望に歪んでいた。

全員に裏切られたという勘違いを払拭することができないまま、俺

は彼女を死なせてしまった。

そのことを後悔しなかった日はない。

でも、自分を責めるのは無意味だということは承知している。

彼女は津川さんが亡くなった後、彼女の遺志を継いだかのようにみんなを励まして元気にさせてくれた。

コロナイが起きた次の日でさえ、笑顔で振舞ってくれていた。きつと、それは亞桐さんにしかできないことだったのだろう。

時に夢郷くんのような節操のない人に強く当たることもあったけど、その姿もいつしかかけがえのない俺達の記憶の一ページになっていた。

トレーニングルームで君のダンスを見た日が遠い昔のように感じられる。

クラブのような雰囲気のところじゃなくても、君のダンスはその世界観に引き込まれる芸術作品だった。

本当のステージで、生で君のダンスを見たかったな。

あの世があるなら……いつか見せてくれると嬉しいな。

夢郷君が死んだって知った時の君は本当に……辛そうだったね。

それくらい……君にとって彼は大切な人だったんだろう。

俺ももし小清水さんが遥か過去に亡くなったって聞かされたらどうなってしまうか……想像もつかない。

君の想いが夢郷君に直接届くことはなかったけど……

せめて天国でもう一度出会っていることを願うばかりだ。

「大丈夫だよ！ 葛西ならやれるって！」

横で、亞桐さんの声が聞こえたような気がした。

ありがとう、亞桐さん。

君の想いを無駄にしないために、俺は絶対に勝つからね。

俺は棺の中に眠る亞桐さんに向けて両手を合わせた。



◆◆◆
亞桐さんの棺の上には、潰れたノートパソコンの残骸が散らばっていた。

共に過ごした時間は短かったけど、アルターエゴも立派な俺達の仲間だった。

小清水さんとの別れがあって憔悴しきっていた俺を、君は付きつきりで慰めてくれた。

あの時の君の心遣いは、今でもこの胸に記憶として残っている。

津川さんと同じ姿をしていたためか、最初はギャップに戸惑ったこともあった。

けど、アルターエゴは津川さんとはまた違う形で俺の心の支えになってくれた。

：正直、あんなに優しくかった君が亞桐さんをあんな風に殺したなんて今でも信じられない。

君の罪は到底許されることではないけれど……。

君を失望させてしまうくらい、あの時の俺達もまた醜く争い合っていたのは紛れもない事実だ。

何が正しかったのかなんて今更分からない。

でも、オシオキされる寸前、最後の力を振り絞ってみんなの姿を借り、俺達を励ましてくれた君の想いもまた本物だ。

俺はブレザーのポケットに手を突っ込む。

その中には、小さなねじが今でも入っていた。

あの時、オシオキに連れていかれる瞬間にアルターエゴが遺していった最後のパーツ。

君のぬくもりが残っていたたった一つの形見。

このねじは、これからも大切に持っていていよう。

機械仕掛けの大切な友達が存在と、そんな彼女が巻き起こした希望と絶望を忘れないために。

俺はアルターエゴの残骸にも両手を合わせた。



その遺体は腐敗が進み、見るに堪えないほどに分解されていた。その遺骸に湧いていたであろう虫たちは一掃されていたが、依然として直視することは難しいほどに彼の肉体は原型をとどめていなかった。

彼——“超高校級の哲学者”、夢郷郷夢君は今からはるか前に亡くなっていた。

釜利谷君と龍雅君が死に、御堂さんを裁く裁判の後、君は人知れず世を去っていた。

“土門君に秘密裏に殺害され、成り代わられた”……。

…結局、彼についてそれ以外のことは分からずじまいだった。

君はここで出会ってからの短い間にも、俺達に多くのことを教えてくれた。

あまり大声で言うべきでない知見もあつたけど、君があらゆる物事を真摯に追求し、学ぶ姿勢を持っていたことは俺にも十分すぎるくらいに伝わった。

君からはあれだけ多くのことを教えてもらえたのに、俺達は君のことを何も知ることができなかった。

君の最期すら図り知ることなく君は世を去ってしまった。

…今更謝つても意味はないと分かっているけど、本当にごめん。

もう少し君のことを知ろうと努力していたなら、君も命を散らさずに済んだかもしれない。

亞桐さんもしかしたら……。

「君に一つだけ、僕の知見を授けよう」

彼が横で話しているような気がした。

「人間は思考する生き物だ。そして、思考に最も不要なものは後悔だ。人は考えることで前に進み続ける。後ろを振り返って悔やむのは歩みを止める原因となる。ただ前を見て、考え続けたまえ」

……そう、彼ならそう言うだろう。

君を救うことはできなかつたけど、君と共に思考したことは今もこれからも俺達の心の中に残り続ける。

きつと、これから向かう最終裁判でも君の教えが活きることだろう。

本当にありがとう、夢郷君。

俺のそばで最後の戦いを見守っていてほしい。

俺は棺に眠る夢郷君の死体に向けて両手を合わせた。



次の棺に目を向けると、俺は思わずめまいに苛まれた。

棺の中にあつたのは、粉末状になった灰と千切れた四つの手足。

このロシアイの黒幕に直接的に協力し、暗躍の末に地獄へと消えた土門君のなれの果て。

彼は何故、“奴”……すなわち記憶を失う前の俺に手を貸したのだろうか。

あれだけの罪を背負ってなお、この脚本を成し遂げることを選んだのには相当の理由があつたのだろう。

彼は耐えられたのだろうか。

津川さんと夢郷君を手につけ、亞桐さんの死も見放した己の罪に。彼は最期まで、己の罪に対する反省や後悔を述べることはなく消えていった。

その代わり、黒幕に裏切られた彼は心の底から絶望して死んでいった。

そのオシオキも、彼の罪を考慮しても重すぎるほどに壮絶で悲惨なものだった。

死ぬ直前、彼は自らの死の運命を否定するように大きく叫んで引きずり込まれていった。

はたから見れば身勝手な言動だが、それでも彼の気持ちは少なからず俺にも共感できてしまった。

彼を裏切った黒幕が“奴”——すなわち俺である以上、他人事ではない。

その報いは必ず俺にも回ってくる時が来るだろう。

君は釜利谷君や安藤さんと同じく救いようのない悪人だったけど。最初の事件が起こる前、前木君や俺に向かつて夢を語っていた時に輝いていた君の瞳に虚偽の色はなかった。

それに、津川さんの遺体を見た時の君の反応…。

心から本当に驚いているようだった。

…ここからは俺の空想でしかないけど。

君にとって、津川さんの殺人は“モツプで頭を殴る”時点で終わっているはずだったんじゃないか？

君の中では、あそこで津川さんが死んでいるはずで…。

本当にただ遺体を焼却するためだけに焼却炉に放り込んだけど、その時点で津川さんが生きていたのは君にとっても誤算だったんじゃないか？

だからこそ、焼却炉から突き出された手を見て君はあんなに驚いたんじゃないだろうか。

もし——「津川さんが生きてそのまま焼かれて死んだ」ことまで把握していたのが真の黒幕——“奴”だけだったとしたら。

——それでも君が津川さんを殺したことに変わりはないけど。

もしそうなら、俺も、また——。

俺は棺に眠る“土門くんだったもの”に両手を合わせた。

いつか生まれ変わることができたなら、もう一度友達としてやり直そう。

さようなら、土門君。



次の棺の中に入っていたのは、黒い布と髪の毛、ピンク色の臓器と骨が突き出た赤い肉塊が混ざり合った面妖な塊だった。

高度1000mから落下して完全に破壊された伊丹さんの遺体には、微塵も彼女だと判別できる要素が残っていないかった。

この短い時間でどうやって地上にある遺体を回収したのか分からないが、この遺体は彼女だと考えて間違いないだろう。

ここに閉じ込められた当初、伊丹さんは容赦ない言動で他の人を傷つけたり衝突したりすることがあった。

彼女は嘘や隠し事が嫌いでも器用な子だったから。

だけど、ここでの生活や何度かの悲劇を経て彼女は変わっていった。

みんなのために自分に何ができるかを考え、献身的にみんなの心のケアをするようになっていった。

土門君と釜利谷君の死に耐えられなくなった前木君を助けてくれたのも、彼女の慈愛の精神あつてこそだった。

その行為が、まさか後になってあんなことになるなんてあの時は全く思っていなかったけど……。

大切な人に出会って、守ってあげたいと思う心。

それは俺にもよく分かる。

君の愛は悲劇的な終わりを迎えてしまったけど——。

君が愛した前木君は、今こうして俺達と共に戦ってくれている。

君の死を乗り越えて、一緒に黒幕と戦う覚悟を持つて捜査に臨んでいる。

彼は最初からあんなに強かったわけじゃない。

彼があれほど強くなれたのは、君が彼を助けてあげたからだ。

親友を失って記憶が錯綜するほど追い詰められていた彼を、君が愛してあげたからだ。

その愛こそが、俺達が黒幕に打ち勝つための何よりも大きな助けとなるはずだ。

優しく、怜悧で、芯が強く、いつでも俺達を助けてくれた彼女の姿が、立ち振る舞いが、今でもはつきりと脳裏に浮かぶ。

君の想いを無駄にしないために、俺は絶対に最終裁判に勝つ。

ありがとう、伊丹さん。

前木君のこと、これからも見守ってあげてね。
俺は棺に眠る伊丹さんの遺体に向けて両手を合わせた。



そして俺は遺体が収められている最後の棺の前に立つ。

オシオキの中で溶岩に焼かれ、血の海に溺れ、文字通りの地獄の中でその身を滅ぼした入間君の白骨がそこにあった。

彼が死してからまだ数時間も経っていないが、その死は遠い昔のように感じられる。

思えば、ここに閉じ込められ、黒幕に恐ろしいコロシアイのルールを説明された後…。

彼は積極的に発言し、場を盛り上げたり仲間を慰めたりして場の空気づくりに貢献していた。

またある時は図書館で有用な資料を見つけ、“超高校級の絶望”について調べてくれたこともあった。

俺が小清水さんに裏切られて事件の脚本を築けなくなったときも、彼が代わりに真実を導いてくれた。

そして、土門君の正体にもいち早く気付いたのが彼だった。
このコロシアイにおいて彼が果たしてくれた役割は底知れない。

だからこそ、彼の最期は衝撃的過ぎた。
前木君に呪詛を吐き、普段の彼からは想像もつかない罵倒を並べ立

て、最後にはすべてに絶望して呆然自失したままオシオキを受けた彼の姿。

俺はそれを一生忘れることはないだろう。
あんなに優しくして礼儀正しく、利発で主導力もある彼があんなふう

になっってしまうなんて…まさに悪夢だった。
だけど、君も恋をする一人の青年だった。

故郷にいる大切な人、たったそれだけを全ての支えにしてこのコロシアイを戦い抜いてこられたのだろう。

そのたった一本の支えを粉々に砕かれたからこそ、君という人間は

崩壊してしまった。

俺は：君という人間に理想を押し付けてしまっていたのかもしれない。

何があっても揺るがず前に進んで戦ってくれるような、偶像の姿を君に求めてしまっていたのかもしれない。

本当の君は、俺達と同じ一人の人間だった。

大切な人がいて、その存在がすべてになるくらい心を捧げていた一人の恋する青年だったんだ。

本当の君に気付いてあげられなくて本当にごめん。

今更取り返しなんてつかないけど、君の力になってあげたかった。

前木君と伊丹さんの関係を引き裂いて彼女を手にかけてた罪は容易に許されることではないけれど…。

命よりも大切な恋人を無残に殺されたら、俺だってああなってしまうかもしれない。

君もこのロシアイの被害者であることには変わらない。

せめてあの世で、結梨さんともう一度出会えていることを祈ることしか俺にはできない。

でも、みんなを引っ張って一生懸命に絶望に立ち向かっていった君の姿は。

君が残してくれたヒントや情報は。

君が築いてくれた絆は、今こうして戦う俺達の糧になっている。

君の存在は、人生は、決して無駄なものなんかじゃなかった。

俺は棺に眠る入間君の遺体に向けて両手を合わせた。

ありがとう、入間君。

君の無念、必ず俺が果たして見せるからね。



入間君の遺体に合掌し終わると、俺は空っぽの四つの棺に目を向ける。

全ての事件、五回にわたって繰り広げられた“絶望の脚本”が、一本一本頭の中で再生されてゆく。

そして、その記憶を確かに思い起こしたことで——俺の胸中に一つの決意が浮かび上がっていた。

「コトダマ入手：五つの脚本

第一の脚本——殺人が起これば全員が助かると考えた津川梁が、土門隆信に殺害を依頼し死亡。

第二の脚本——龍雅・フォン・グラディウスが“絶望”を排除するために釜利谷三瓶を殺害し、脱出して家族をよみがえらせることを目的として御堂秋音が龍雅を殺害。

第三の脚本——人類滅亡のため行動を起こした小清水彌生を出し抜く形で、創作への活力を欲した安藤未賤が丹沢駿河を殺害。

第四の脚本——人間に失望したアルターエゴⅡが亞桐莉緒を殺害し、夢郷郷夢を秘密裏に始末し成り代わっていた土門隆信がモノクマに始末される。

第五の脚本——恋人が死んだことで前木常夏と伊丹ゆきみの恋路に嫉妬した人間ジョーンズが、自殺に協力すると偽って伊丹を殺害。

『お墓参りは楽しめた？』

突然背後から投げかけられたモノクマの声にはもう驚かない。

『校内スピーカーが壊れたから教えに来てあげたよ！ 捜査時間は終了です！ さっさと裁判場に戻ってね！ グダグダしてこんな大事などころでグングニルされたくないでしょ？』

「……モノクマ」

俺はモノクマの言葉に答えることなく、背後を振り返ることもなくそう呼びかけた。

「ここに眠っているのは、みんな俺の大切な友達だった人だ。…大なり小なり罪を犯した人もいた。だけど、みんな未来ある高校生で、こんなコロシアイに巻き込まれなければ素晴らしい人生を送れたはず

の人達だった」

『いまさら何？　そういうのは最終裁判で聞くからさっさと行ってよ！』

「ここにいる全員の未来と青春を奪ったのは……みんなを殺したのは……お前——すなわち俺だ。たとえ記憶が無かろうと、葛西幸彦という人間がこのコロシアイを成し遂げたことに変わりはない」

そう告げる俺の声に迷いはなかった。

「……ずっと、ある決断をすべきか迷っていた。結論が出ないまま最後の戦いに赴くと思っていた。……でも、ここでみんなの死に向き合って、結論が出た」

俺がとるべき選択肢は一つだけだった。

『……………』

「俺は自分自身でこのコロシアイに決着をつけたい。悔いの残らない、究極にして最終的な決着をつけたいんだ。……だからモノクマ……一つ約束してくれ」

俺は少し深呼吸してモノクマに告げる。

「最終裁判でお前に勝利できたら——お前ごと俺をオシオキしろ」

『……………！』

「土門君にそうしたように、お前と俺を同時にオシオキするんだ。この才能ごと、葛西幸彦という存在をこの世から抹消しろ」

『…罪滅ぼしのつもり？　自分が死ねばコロシアイのことはチャラになるっても？…』

「…俺が死んだところで、俺が成した行いが帳消しになるとは思っていない。この決断を下した一番の理由は——このコロシアイに完全な決着をつけるためだ。このコロシアイの首謀者たる葛西幸彦という人間を抹消すれば、このコロシアイは本当に終わる」

『そのために黒幕としての意識がない君も一緒に死ぬの？…』

「ああ。それで本当に決着がつく。これが俺の覚悟だ。もう二度とこんなコロシアイがこの世界で起こることがないように、俺がこの命を懸けて希望の力をみんなに示す」

言い出したことに後悔はなかった。

そう——俺は最初からこうなる運命だったのだ。

『ふーん……本当に後悔しないんだね。…分かった、約束するよ』
モノクマは短く答えた。

これでいい。

これでいいんだ。

「お前がどう言おうと、お前は俺だ。俺と一緒に地獄へ落ちてもらう。先に死んでいった土門君や釜利谷君のように……」

『うぷぷぷ！　まさか本人から死にたいなんて希望されるとはね！』

流石ボク、完全にイカれちゃってるね！　いいねえ！　文字通り命を懸けた裁判で君がどう戦うのか楽しみにしてるよ！』

モノクマは草むらの中へと消えていた。

再び草がこすれ合う音と微かな風の音だけがその空間を支配する。

「行かなきゃ」

誰に聞こえるわけでもないのにそう呟いていた。

もう一度、俺は草原に立ち並ぶ棺を一瞥した。

そして梯子へと歩みを進める。

今更死など怖くない。

ここで練り広げられてきた地獄に比べれば。

ここに眠るみんなが受けてきた苦しみに比べれば。

俺の死など些細なものだ。

もうここにいるみんなに会うことはない。

俺はきつと、土門君や釜利谷君よりもさらに深い地獄の底に落ちるだろうから。

けど、そこに恐怖や不満はない。

「ごめんね、みんな」

俺の記憶の中で過ごした日々は短かったけれど。

みんなの存在は、みんななどの思い出は、俺にとってかけがえのないものだった。

みんなをあんな目に合わせた俺が言うのもおかしいかもしれない。

けど、最期にこれだけは言わせてほしい。

みんなに出会えてよかった。

「ありがとう。……さようなら」

囁くような小さな声でそう告げると、俺は梯子を上る。



俺は瓦礫をかき分けて裁判場の方向へと進む。

さつき、同じ場所を走っていた時のような負の感情は…もう微塵も残っていないかった。

心は安らかに砥ぎ澄まされ、僅かな不安もない。

思えば、このタワーでの数週間の生活もあと数時間足らずで終わるのか。

少し前までは、まさかこんな場所で骨を埋めることになるなんて些かも思っていないかった。

この場所でこれまでの人生とは比べ物にならないほど多くの経験をして、得たものも失ったものもあった。

俺も、他のみんなも、このコロシアイを経て大きく変わったと思う。

そして、俺達のあずかり知らぬところで世界も変わっていた。

俺の両親が、友人がどうなったのか知る由もない。

まるですべてが夢の中の出来事のようにだ。

外壁に入ったヒビから僅かに漆黒の夜空が見えた。

「綺麗……」

真つ暗な空には星すらも見えなかったが、俺はそう呟いていた。

——もう、朝日を見ることはない。

そう思うと、余計にこの漆黒の闇夜が美しく思えてしまうのだ。

「ユキマル〜!! 待ってたでありんすよ!!」

裁判場へと続く鉄骨のふもとでは、数多くの絶望を生き抜いてきた仲間達が俺を待ちわびていた。

「ごめん…。待たせちゃったみたいだね」

「どうでしたか？ 何か得られたことは…」

「情報は得られなかったけど…。あの場所に行つて良かった。心からそう思うよ」

山村さんはキョトンとしていた。

「葛西…どうした？ なんだか雰囲気…。別人みたいだ…」

前木君が訝し気に呟く。

「俺はどうもしていいないよ。心配しないで、前木君」

そんな前木君に、俺ははにかんで答えた。

「…さっさと登ってきなさい。こっちはこの下らないゲームを終わらせたくてウズウズしてるのよ」

俺達の頭上から小清水さんが言葉を投げかけてくる。

不安はない。

彼らならきつと——“奴”に打ち勝つことができるだろう。

「じゃあ…行こうか」

俺は落ち着いた声でみんなに呼びかけた。

「私が先導するので皆さんは慎重に上ってきてください!」

山村さんの助けを受けてみんなは鉄骨を伝い、裁判場へと登ってゆく。



今宵、俺は戦い——そして死ぬ。

俺はもう、“奴”の掌で踊らされはしない。

この弾丸で“奴”を撃ち抜く。
そして俺は“奴”もろとも闇に消える。
恐れも悔いもありはしない。

俺の全てをこの場所で燃やし尽くそう。

——これは、“葛西幸彦”の最終決戦。



俺は山村さんの力を借りて裁判場に戻った。

中央に空いた穴はそのままに、瓦礫が散乱し、勢いを失いつつも未だ建材の一部を侵食する炎が赤々と舞台を照らしている。

俺達がいけない間に急ごしらえで直したであろうボロボロの裁判台が、裁判に参加する人数の分並んでいた。

『ふうーっ！ やつと……やつとこの時が来たね！』

煤だらけになった玉座に腰かけるモノクマが俺達を出迎えた。

「最終決戦の場にしては随分と粗末なのね」

目の前に置かれたボロボロの裁判台を見て吐き捨てるように小清水さんが言う。

『いやいや！ これまでの戦いの熾烈さを物語るようにボロボロの裁判台、炎に包まれた舞台、数々の戦いを生き抜いた戦士たち！ まさに最終決戦って感じじゃないか！』

子供のようにはしやぐモノクマとは対照的に、俺達は神妙な面持ちで互いを見つめていた。

「いよいよだな……」

重い口調で前木君が呟く。

「これに勝てば、あちき達はこのタワーから脱出できる……」

未だに自分の状況が信じられないと言った表情で吹屋さんは自分に言い聞かせる。

「死んでいったみんなの想い……無駄にするわけにはいきません」

山村さんは強い目つきで拳を握り締める。

俺は静かに息を吐いた。

この戦いの結末がどうであれ、俺が生きてここを出ることはない。

この戦いは、俺の短い人生の最後の大舞台。
俺はこの場所で命を燃やし尽くす。

「生意気ね」

ふと小清水さんが俺に向かって言葉を放つ。

「下で何があったか知らないけど、そんな覚悟を決めたような顔をして…。見てると腹が立つ。…あなたごときの力に期待なんてしていないわ」

「そうか。でも俺は君を頼りにしてるよ」

小清水さんは俺の表情から何かを感じ取ったのだろうか。

けど……俺はもうモノクマに自らの運命を託している。

もう後には引けないんだ。

さようなら、小清水さん……。

君のことを完全に許せたわけじゃないけど、最後の戦いを君と一緒に戦えることを誇りに思うよ。

「…その達観したような顔が無性に腹立たしいって言ってるのよ」

「分かったから。ほら、裁判台について」

どこか落ち着きを失っている小清水さんにそう呼びかけ、裁判場の中央へと視線を戻した。

俺は息を吸い、そして一気に言い放つ。

「さあ、始めよう。俺達と“奴”との最終裁判を」
けっせん

【学級裁判・開廷！】

「……で、何から話し始めればいいんだ？」

前木君が切り出すのが、答えた人はいない。

「情報が多すぎて何から整理していけばいいのか……」

『じゃあさ、現時点で分かっていることから整理していこうよ！』

と、突然口を挟んできたのは他ならぬモノクマだった。

「なんでありんすか!! モノクマは裁判の内容には直接口を出さないはずでありんしょ!!」

『それは今までの裁判での話だよ。ボクと君達の決戦なんだから、ボクが同じ決戦の舞台に立つのは当然でしょ？ そのためにあれだけのことをして“フェア”な戦いにしてあげたんだから！』

モノクマが言う“あれだけのこと”とは、捜査の前に起きた一連の出来事を指しているのだろう。

「何がフェアだ。不正に不正を上塗りして無理矢理正当化しただけじゃないか」

『そんなことないよ。小清水さんに薬やら銃やらを隠し持たれたまま裁判になったら、仮に君たちが勝ったとしてもその場で小清水さんに全員殺されるかもしれないでしょ？』

「……………」

小清水さんは腕を組んだまま何も言わない。

『最後の決戦は思い残すことなくみんなが最高の状態で議論をぶつけあえるようにしたいんだ。だからこそ、ボクもこの裁判に参加している間は“才能”をオフにしておくことにしたんだ』

「才能をオフですって……？」

『君たちが何を言うのか、どんな議論をするのか……その演算は即座に行えるけど、それをしないよう機能にロックをかけたってこと。この裁判は、ボクがもともと持っている記憶と知識だけで参加するって言ってるんだよ。そうすれば、初めてフェアな戦いになるでしょ』

「……でも、別にお前を言い負かさなくたって、この学園やお前の目的を暴けばそれで勝ちなんだろう……？」

『そうだよ。だけど、ボクも議論に茶々を入れたりして裁判を盛り上げたいからさー！ あ、一応言っとくと、あまりにも議論が停滞してしまったり、袋小路に入り込んで結論が出そうにないとボクが判断したらそこで議論はオシマイ。そこらへんの判断もフェアにやるから

『ビビらなくていいよ』

「なんて言うか……結局全部モノクマ任せなんでありんすね……」

「まあ、このコロシアイ自体モノクマのワンマンショーなわけですし……」

山村さんの言うとおり、最後までモノクマのゲームに付き合わされる形になっているのは癪に障る。

けど今は、モノクマの言う通り議論をぶつけ合ってモノクマに勝利するしか道はない。

このタワーが完全に破壊されてしまう前に……。

「……みんな、今は時間がない。議論を進めよう。まずは今分かっていること……。例えば、土門君の処刑の後に知らされた“このコロシアイの場所”……とか」

俺は手を叩いてみんなの思考の矛先を議論に向けさせる。

「そこから振り返るのか？ えっと……ここは土門が建てた“絶望タワー”なんだよな。屋上に何度も行ってるし、伊丹がああいう死に方をした以上……ここがタワーなのは間違いないよな」

前木君の言葉に沿って俺は四回目の事件の後の議論を思い返す。

「おそらく、このタワーは希望ヶ峰学園の施設として建てられている。いくらモノクマといえど、校舎設備やプールを1から自前で建設できるとは思えないから、これらの施設は元からこのタワーに備わっていたモノと考えられる」

「つまり、ここは本当の意味で希望ヶ峰学園特別分校だったってことですか……？」

山村さんの言葉に俺は頷く。

「希望ヶ峰のシンボル兼新しい教育施設として土門君が設計したんだろう。結果的には外界と隔絶されていてコロシアイの舞台に最適と判断されてしまったわけだけど……」

その判断を下したのが過去の自分だと思おうと腹立たしいやら悲しいやら、複雑な気分だ。

「……じゃあ、あちき達はいつからこのタワーに来たんでありんすか？ あちきに至ってはずっとあの監獄部屋に閉じ込められていたわけ

でありんすけど…」

「…それを推察するには、まず今この世界が大局的にどうなっているのかを知らなきゃいけない。信じがたいことばかりだけど、俺達が見つけてきた情報は紛れもない真実だ」

『オツケー、流石ボクだね！　じゃあ次は〃この世界と希望ヶ峰学園に何が起きたのか？〃をテーマに話し合ってみよう！』

黙れ、と口には出さず視線でモノクマに伝えた。

【ノンストップ議論開始】

山村巴：「確か第四の裁判が終わった後…」

山村巴：「モノクマがこの裁判場の壁を透明にして」

山村巴：「外の世界の景色を見せてくれましたよね！」

前木常夏：「その時見た下界は信じがたいほど荒れていたな…」

小清水彌生：「下界で何か破滅的な事態が起きたのは間違いないよ
うだけれど」

前木常夏：「にわかには信じがたいことだな…」

吹屋喜咲：「あ！　あの時見せられたのは外の景色じゃなくて…」

吹屋喜咲：「壁に映し出されたホログラムっていう可能性もあるで
ありんすよ！…」

「小清水さんの言うとおりで」

【使用コトダマ：外界の真実

タワ―の下界は絶望に包まれた世界と化しており、無秩序な破壊や
殺戮が繰り返されている。

「吹屋さんの言うことを信じたい気持ちはあるんだけど、残念ながら
俺達があの時見た光景は真実と思わざるを得ない…。俺達の記憶が
数年間失われていた以上、何か世界に大きな変化があっても不思議
じゃない」

「…何より、最初の動機が世界の異変を何よりも如実に物語っていま
すよね」

山村さんの言葉で一同は再び最初の動機へと記憶を遡らせる。

あの時、家族の身に何かが起きたことを証拠付きで示された。

ここにいた15人の家族に同時にそのようなことが起きたのだとしたら、それはもう世界そのものに何か重大な変化が起きたとしか思えない。

「でもよ……そんな状態に世界が陥ったのっていったいどうしてなんだろうな……。まさか核戦争とか？」

「そんなことになってたらそもそも街もこのタワーも消し飛んでるでありんすよー！」

「でも、それくらい惨劇か天災でもなければあれほど街が荒れ果てることに対して説明がつかないと思うんですが……」

それを説明できるのは、あの情報しかない。

にわかには信じがたいことだけれど……。

【提示コトダマ：人類史上最大最悪の絶望的事件

このコロナイの少し前に希望ヶ峰学園本校舎で起きたとされる生徒の大量殺人事件。この事件を機に世界に絶望が蔓延したとされる。

「実は……世界がこうなってしまった原因は他ならぬ希望ヶ峰学園にあるみたいなんだ……」

「……は？ マジで言ってるのか？」

前木君が思わず身を乗り出す。

「あちきが見つけたあの資料でありんすね。希望ヶ峰学園の本校舎で悲惨な事件が起きて、それを機に世界に絶望が広がっていったって……」

「……なんだか漠然としてますけど……それ本当なんですか……？」

山村さんが怪訝そうな顔で尋ねる。

『それについてはボクから補足！ ごめんね、その資料くらいしか情報与えられなかったコッチも悪いんだけど、その事件が起きたのも、事件から世界中が絶望に包まれたのも本当だよ！ そもそも希望ヶ峰には“予備学科”ってというのがあって、高い授業料を払えば才能が

無くても希望ヶ峰のネームバリューを得られるんだけど、そこで本校舎に対する“パレード”っていう名の……あーもうめんどくさい!!
ここらへんはカット!! とにかく、その事件によって世界に絶望が広がったってことだけ分かればいいよ』

急に何かを語りだしたかと思うと、飽きて説明をやめてしまうモノクマ。

本当にコイツの考えることは全く分からない。

「…モノクマが真実と言うなら真実なんだろう。今度こそこいつがズルをしてないのなら…な」

前木君がモノクマを睨みながら言った。

「あんなことをしてまで俺達と対等にしたんだ。今更嘘は言わない…と思うしかないね」

俺はそう言いながらモノクマに付けられた腹の傷を撫でる。

モノクマからの攻撃と小清水さんの反撃が脳裏をよぎる。

モノクマは自分が犯した不正を帳消しにするために俺達の攻撃を誘った。

そして今は自らの才能にロツクをかけている…。

そうまでして最終裁判に臨んでいるモノクマの言葉なら、ひとまずは信用してもいい…のだろうか。

「しかし……その“人類史上最大最悪の絶望的事件”が本校舎で起きたことと、俺達がこのタワーでロシアイをさせられたことがどう関係してくるって言うんだ?」

そう——一見無関係に見える二つの事象。

だけど、たった一人の人物を挟むだけで、その事象は綺麗に線につながってしまうのだ。

【提示コトダマ：“超高級の絶望” 江ノ島盾子

“人類史上最大最悪の絶望的事件”を巻き起こしたとされる希望ヶ峰学園78期生の生徒。“超高校級の絶望”の中では神格化されており、多くの信者が存在している。

「…みんな、“江ノ島盾子”っていう人に聞き覚えはある？」

「え…？ 中学生の身でファッション誌に引っ張りだこのギャルですよね」

「そういえばさっき捜査してる時もその名前を出してたな。何か関係があるのか？」

「この写真を見れば分かるでありんす！」

吹屋さんは先ほどの書斎から持ってきた江ノ島盾子の写真を掲げた。

「ほら、ここの…髪留めのところ」

「……ん？ モノクマ……？」

「つまりその女が“超高校級の絶望”——釜利谷三瓶や伊丹ゆきみ達の頭目だったってことよ」

痺れを切らした小清水さんが付け加える。

「…ええ!? 大人気ギャルが“絶望”の頭!? 絶望に指導者がいるとしても、もつとヤバい独裁者みたいな人かと思ってました……」

「山村の言うとおり、ピンとこない話だが…。今は時間がないし、とりあえずそれが本当だとして話を進めよう。で、その江ノ島盾子つてのは具体的に何をしたんだ？」

「…資料によると、彼女は“超高校級の絶望”の中で神格化されていたカリスマ的存在で、“人類史上最大最悪の絶望的事件”を巻き起こした張本人らしい。つまり、世界に絶望をバラまいた元凶ということだ」

「…たった一人の少女がそんなことをしでかすなんて……まさに人類史上最大最悪の悲劇でありんすね……」

「話の本質はそこじゃないでしょう。結局、私達がさせられているロシアイとその女がどう関わっているかというのが主題のはずだけだ」

テンポよく話を進めないとますます小清水さんが腹を立ててしま
うな…。

結論を端的に示さなきゃいけないな。

〔ノンストップ議論開始〕

山村巴：「江ノ島盾子という人と私たちのコロシアイの関係性、ですか……」

葛西幸彦：「中学生時点でそれだけ有名な人なら……」

葛西幸彦：「きつと高校に上がった後に希望ヶ峰にも呼ばれていたんだろうね」

吹屋喜咲：「希望ヶ峰にいる間にあちき達と何かあったとか？」

前木常夏：「仮に何か関わりがあったとしても……」

前木常夏：「記憶を消されている以上分かりようがないよな」

小清水彌生：「そう決めつけるのは尚早だと思うけど」

小清水彌生：「私たちの中に潜んでいた“絶望”が何をしようとしていたのか……」

小清水彌生：「そこに焦点を当てればおのずと答えは見えてくるはずよ」

山村巴：「私たちの中の……?」

紛糾する議論。

未だ答えは見えないが――。

ここでモノクマに負けるわけにはいかない。

見つけ出せ。

コトダマの中に隠れた答えを。

前木常夏：「俺達の中ってことは……」

前木常夏：「伊丹や御堂、三ちゃんのことか？」

吹屋喜咲：「もしかしたらサンデイは……」

吹屋喜咲：「盾子ちゃんの命令でコロシアイを起こそうとしたとか!?!」

山村巴：「江ノ島さんが……?」

前木常夏：「いや、そういえばさつき見つけたアレに……」

「吹屋さん、それは違う……けど、限りなく惜しい」

〔使用コトダマ：釜利谷の手記〕

このコロシアイの主権に協力した釜利谷が残した手記。江ノ島盾子が起こそうとしているコロシアイの内容を参考にし、これを再現するために葛西に協力を求める旨が書かれている。

「さつき荷物集積所で山村さんが見つけた釜利谷君の手記……。そこにその謎の答えが隠されているはずだ」

「えっと……私が……？　どんな内容でしたっけ……」

顎に手を当てて思い出そうとする山村さんの言葉を聞いて、前木君が実物の手記をポケットから取り出す。

『信頼できる筋から盾子様のコロシアイ計画を入手した。これをそのまま脚本の舞台として使用したい。ルールの詳細を送るのでそこらはシミュレート結果を送るように』

「その手記から読み取れることは三つ」

と小清水さんが説明を付け加える。

「一つは、釜利谷三瓶と江ノ島盾子は直接やり取りできる関係ではないということ。もう一つは江ノ島盾子もコロシアイを実行する予定だったこと……というより、文脈を見る限り江ノ島盾子が先にコロシアイを立案したようね。そしてもう一つは、その内容を未来予知の才能を持つ葛西幸彦の能力でシミュレートしたこと」

『お見事！　そもそもこのコロシアイのシステムやルールは江ノ島さんが最初に考えたものであってボクはそれをそのまま使わせてもらっただけなんだよね〜』

玉座に胡坐をかきながらモノクマが述べる。

「つまり釜利谷君は、江ノ島さんが行うつもりだったコロシアイの情報を先取りして、かつての俺と共にコロシアイを模倣したんだ。……自分たちのクラスメートを使って」

そして、俺がそう結論付ける。

一体、過去の俺は何をしようとしていたのか……

それをこれから解き明かしていこう。

『いいねー！　ここまでいいテンポだよ！　その頑張りに免じてボ

クも張り切って話題を振ってあげましょう!』

真実に近付くということは敗北に近づいていることのはずなのに、何故かモノクマは楽しそうに見える。

『次は“このコロシアイの黒幕”について話し合ってちよーだい!』
「コロシアイの黒幕……? アルターエゴⅢに移された昔の葛西……
じゃないのか……?」

「つまり葛西幸彦という人間に関する謎を解けということでしょう。
ここにいる葛西幸彦はなんなのか……とかね」

前木君の疑問に小清水さんがそう付け加える。

ここにいます俺……。

俺は一体何なのだろう。

今までに分かったこと、今の俺自身の記憶や意識と対話しながら議論を進めていこう。

【提示コトダマ：超高校級の脚本家・葛西幸彦

アルターエゴⅢに人格を移植してモノクマを動かす、このコロシアイを取り仕切っていた首謀者。記憶を消される前の葛西本人。

土門隆信を仲間に引き入れ、“超高校級の絶望”と協力関係を築くことでコロシアイの実現を達成した。

「既に示された通り……そこにいるモノクマの中身は俺、葛西幸彦だ……。記憶が消されている以上、昔の自分が何を考えていたかは想像に頼るしかないけど……。釜利谷君たちと協力関係にあったことだけは確かだ」

「……でも、第二の事件の際、リュウ君からの呼び出し場を貰ってはいなかったんですね……? ということは……葛西君は絶望の一員ではなかったということですか?」

【提示コトダマ：超高校級の絶望

78期生の江ノ島盾子を中心とする、“絶望”を至上の喜びとする集団。釜利谷、伊丹、御堂の三名がこの組織の一員として活動してい

た。

「うん。恐らく絶望に所属していたのは釜利谷君、伊丹さん、御堂さんの三人だ。土門君と俺は『絶望』とは別の枠組みで動いていたんだと思う」

だからこそ、俺は釜利谷君に依頼して江ノ島産のコロシアイ計画を入手させたいだろう。

「ここから考えられる事実は――」

「葛西、残酷なことを言っていないか？」

【前木常夏の反論】

俺の議論を止めたのは前木君の鋭い声だった。

「…残酷なこと？」

「ああ。お前が黒幕だって分かってから……ずっと思っていたことだ。できればこの意見を通したくはないが…」

「お前が自分を信じたいのなら、この意見を断ち切ってほしい」

まるで論破されることを望んでいるかのようになり、前木君は重苦しい声で呟いた。

前木常夏：「葛西、お前はひよっとして……」

前木常夏：「黒幕としての記憶が残っているんじゃないか？」

前木常夏：「だってさ、お前には脚本家としての才能があるんだろ？」

前木常夏：「その才能があれば、今までの事件だって裁判なんかしなくとも楽にシミュレーションできたはずだ」

【反論コトダマ：葛西幸彦の才能

“超分析力”をもって人物の思考や物理現象等を看破、与えられた知識に基づいた未来を正確に予測する。

偶然による変動や前提知識の誤り等によつては正確に予測できない場合もあり、未来予測は本人が数分間思考するだけで完了する。アルターエゴⅢにも正確にその能力が受け継がれている。

前木常夏：「だけどお前はコロシアイの中でそういう風に脚本を即座に組み立てた様子はなかった」

前木常夏：「せいぜい、謎解きを率先して進めてたくらいだ」

【反論コトダマ：コロシアイ生活における葛西の才能

コロシアイ生活において葛西は、与えられた情報を元に思考を繰り返し、率先して事件の脚本を組み上げていた。

ただしアルターエゴⅢが持つ完全な“超分析力”には遠く及ばない能力である。

前木常夏：「お前は自分の脚本通りにコロシアイを進めるために……」

前木常夏：「敢えて才能のことを隠していたんじゃないか？」

前木常夏：「そして、アルターエゴとなった過去の自分と共謀して……」

前木常夏：「あたかも希望側であるかのようにふるまっている」

前木常夏：「どうだ？ 何か反論の余地はあるか？」

「——分かった、言わせてもらうよ」

俺は待つ正面から前木君を見据え、そしてその反論を切り裂いた。

【使用コトノハ：伊丹の新薬

伊丹ゆきみが生前開発していたという、“記憶を制御する薬”。記憶だけでなく、人格や才能など脳機能に付随する能力をそれぞれ抑える種類の薬がある。

ただし釜利谷の記憶制御ほど完璧に制御することはできず、ある種の刺激や衝撃などで封じた機能が復活してゆくことがある。

「俺の才能が発現していないことは俺自身の認識でしか分からないから君にそれを伝えることはできない…。けど、理論的に“才能を封じる手段がある”ことを伝えることはできる」

「才能を封じる手段……？」

「君が見つけたじゃないか。釜利谷君の研究室にあった伊丹さんの新薬の資料だよ」

「新薬……ですか……？」

「……ごめん、前木君以外にも分かるように話さなきゃいけないね」

そして俺は試料から得た情報をみんなに語りだす。

『（名前が書いてあるが解読できない） 伊丹ゆきみが開発した海馬もしくは前頭葉に作用する抗生物質。物質の組み合わせにより効能を変えることができ、（黒塗り）が発見した“才能発現因子”に対しても限定的に作用し、その人物が持つ才能を発揮不能にすることが可能。ただし未だ技術が完成していない部分があり、なんらかの精神的・身体的ショックやダメージの積み重ねで効能が薄れる場合がある』

「ふうん。つまり伊丹ゆきみは人の才能を一時的に封じる薬を開発していたということね」

「…じゃあ、今のユキマルはその薬を投与されて才能を発揮できない状態にされたってことでありんすか……？」

…そう、解釈するしかない。

だからこそ、自分にそんな才能があると知った時は驚きを隠せなかったんだ。

「…そうか……。分かった。葛西…今はお前を信じることにするよ。…反論してくれてありがとう」

前木君は俺にそう言った。

彼も、俺を信じたい気持ちだったのだろう。

「…いい加減にしてほしいわね。また議論の主題がズレてる。葛西幸彦の才能が封じられたことが重要なのではなく、封じられた才能がロシアイの中で少しずつ蘇っていったことが重要なものよ」

「……………??？」

小清水さんの言葉に吹屋さんが首をかしげる。

「確かに、今までの事件のほとんどで葛西君が一番に謎解きを進めてくれていました…。まるで事件という名の脚本を組み上げるかのよう…」

「……………」

今までに組み上げてきた真実の脚本の数々。

それ自体、隠された俺の才能のヒントとなっていたわけだ…。

「…思えば、後の事件になるにつれて鮮明に事件の内容を頭に組み上げられるようになっていた。さっきの裁判の時も、直感的に入間君が犯人だって分かっていたくらいだったから…。ここで起きた数々の事件が衝撃となつて、徐々に新薬の効果が薄れてきたのかもしれない」

以前から折に触れて俺を襲っていた頭痛も、この新薬の副作用と考えれば辻褃が合う。

俺はずつと——自分の才能でこの裁判を戦ってきたというのか。

でも、仲間達の未来が俺の頭に浮かんでくることはない。

まだこの才能は完全に目覚め切っていないのだ。

目覚めれば黒幕への勝利をより盤石にできるかもしれないのに…。

『その通り！ 伊丹さんの薬の絶妙な効き具合がこの脚本には欠かせない存在だったんだ。葛西君がいなかったらとつくの昔に裁判で詰んで終わってただろうからね！ うぶぶぶぶ…』

じゃあ、今ここにいる俺は、脚本を成立させるために…？

「そんな…。昔のユキマルにとっては、自分自身さえも脚本を作るための道具に過ぎなかつたことでありんすか…？」

吹屋さんが震えた声で言う。

「いくら脚本の予言があるとはいえ、完璧に予言通りに事が運ぶとは限らないのは今までに証明されたとおりだ。一步間違えれば葛西はどこかで殺されていたかもしれない…。そこまでのリスクを負ってでも、お前はこの脚本を作りたかったっていうのか……？」

『もちのろんだよ。ボク自身の命なんて、脚本の成就に比べれば安い代償だよ』

モノクマは平然とそう言い放つ。

自らの肉体と命を使い捨ててでも脚本を完成させようとする意志…。

今俺が真実の脚本のために命を捧げようとしているのとまさに同じだ。

気に入らないが、やはり“奴”は俺なんだと実感させられる。

「…こんなことでお前に“自分らしさ”を見出したくはなかった」

モノクマにしか聞こえない小さな声で俺は吐き捨てた。

『もう分かったでしょ？　これが“葛西幸彦”という人間の全てだよ。ボクは“絶望”と共謀してこのコロシアイを主宰し、記憶を消した自分自身にその脚本の主人公となってもらったんだよ』

「……………」

『この脚本はボクによる、ボクのため…ではないけど、ボクの脚本ってわけ。めちやくちや多くのスポンサーが付いたおかげでやっとここまで来られたよ。本当に感謝だね！　もう誰も生き残ってないけど！』

「俺の……脚本……」

モノクマはさらりと、俺という人間を語り終える。

覚悟を決めて断ち切ったはずの、“自分”に対する不気味さと罪悪感が再び体を這いずりあがってきた。

俺は思わず裁判台に両手をつく。

「…反吐が出るわね。ずっとあなたの一人芝居に付き合わされたかと思おうと」

『うぶぶぶぶぶ…。そうは言うけどね、小清水さん。君も存分にこの脚本を楽しんでいたじゃないか』

「……………」

小清水さんは小さく舌打ちする。

“一人芝居”という言葉が俺の胸に突き刺さる。

「…俺が一番知りたんだよ……。どうして俺はこんなことを……。同級生をこんな目に遭わせて、あんなにたくさん在地獄を作り出して……。一体何が得られたって言うんだ……」

「葛西君……………」

「これから謎を解いて……。その答えが得られたとしても……。俺はそれに納得できるのか……。？」

いや、できないだろう。

このコロシアイにどんな理由があっても、死んでいった同級生たちの命に勝る価値があるわけではない。

だからこそ、俺はこの裁判に命を殉じることを決めたのだ。

それでも償いきれる罪ではないけど……。

「葛西、お前のつらい気持ちは分かるぞ。でもな、今は倒すべき敵が目の前にいる。明かすべき真実が手の届くところにある。やってやろうぜ……。あいつを倒して、新しい自分に生まれ変わるんだ」

前木君の力強い言葉に俺は短く頷いた。

「大丈夫ですよ！ もしまたあいつが襲ってきててもその時は私が食い止めますから！ 謎解きもここでいっぱい経験を積んで、少しはやれるようになったんですよ！」

「ユキマルにはあちきがついてるでありんすよ！ ここでサクツと勝って、昔みたいにあちきの囁を聞きに来てほしいでありんす！ ……って覚えてないでありんしたね……」

口々に発せられる仲間たちの言葉に、俺は再び勇気づけられた。

あの地獄を五回生き延びてきた仲間たちの言葉は説得力が違う。

「そうだね……。みんな、ありがとう。まだ謎は残ってる。一つ一つ、確実に……。希望に向かって進んでいこう」

俺は深呼吸してみんなに礼を告げた。

そんな俺達を待っていたのは――。

『じゃ、ボクの役目はここまでだね』

――モノクマの予期せぬ言葉だった。

「役目……？ どういうことだ」

『ボク……葛西幸彦の出番はもう終わったってことだよ』

「何故ですか!? まだ謎はたくさん残っていますよ!」

山村さんの言うとおりで。

「ここで“奴”が勝負を投げていいはずがない。

「今更勝負を放棄するなんて許されないぞ、モノクマ!」

『放棄するなんて誰も言っていないよ。最終裁判はまだ続く。ただ、ボクの出番が終わったってだけ』

モノクマはその言葉と共に玉座に深く座りなおす。

「……？ どういうことでありんすか……？」

『もし、君達が本当の“真実”に向き合う覚悟があるのなら――』
吹屋さんの問いに答えることなく、モノクマは意味深な言葉を言い放つ。

『最終裁判を続けようじゃないか。いいよね?』

「覚悟……? 今更何を」

俺はモノクマを睨みながらそう吐き捨てる。

俺はもう、真実のためにこの命を投げ打つ覚悟を得ている。

これ以上、何を恐れると言うんだ。

『そう。本当に後悔しないんだね。まあ、今更勝負を降りられないのはそっちも同じか。……じゃあ、始めようか』

モノクマはそう言って玉座の上にゆっくりと立ち上がる。

その時、裁判場が大きく揺れ動く。

「危ない! 下がってください!」

山村さんの怒声が響くが早い、モノクマが座る玉座のすぐ後ろで、燃え盛る瓦礫が大きく崩れ落ちた。

「きやあゝ!!」

吹屋さんが甲高い悲鳴と共に俺に飛びついてきた。

「落ち着け！ こっちは大丈夫だ！」

前木君が言うとおりに、俺達が立っている場所には瓦礫は降り注いでいない。

とはいえ、こっち側もいつまで建物がもつか……。

「……………え？」

モノクマの背後、崩落する赤い瓦礫の中で……。

俺の視界が何かを捉えた。

紅炎の中で蠢く影。

瓦礫をかき分けて何かがやってくる。

「嘘だ」

意識したわけでもなく、その言葉が俺の口から洩れていた。

その影が、俺の記憶の中に存在するあの姿と合致していたからだ。

いや、と俺は首を横に振る。

ありえない。

——— だったら、俺が見てきたものは……。

あの墓場で誓ったことはなんだったって言うんだ。

「はあ？」

前木君が素っ頓狂な声を出す。

『これが、君達が望んだ真実。そして——』“再生”だよ』
モノクマはニンマリと笑って高らかに言い放つ。

再生。

その言葉の意味は一瞬にして俺の脳内で実体を得た。

そう、“再生”なのだ。

荒れ狂う炎の中から蘇る様はまるで不死鳥のようで——。
しかしその奇跡は、今確かに俺達の眼前で起きている。

「嘘だ………」

俺は再びそう呟いていた。

地獄のような業火に卷かれ、絶望の権化たる絶叫と共に現世から消えたはずの少女。

その本人が同じような紅蓮の炎の中から蘇り、俺達の目の前に“再生”した。

時が止まった裁判場の中で、少女は一人歩みを進める。

「——スクエナイ」

不気味なほど透き通った美しい声が、俺の脳の奥底にまで響き渡る。

「スクエナイ世界。スクエナイ人間。スクエナイ希望。スクエナイ。何もかも、全部……スクエナイ」

俺の記憶の中の津川さんからは想像もつかないほど低く、落ち着いていて——しかし全ての核心を突いているような重みのある口調。

「……………リャンピー……………?? え……………?」

吹屋さんの震える声が聞こえる。

「……………本物、なんですか……………?」

半ば呆然と山村さんが呟く。

『それはこれから君たちが確かめるんだよ』

モノクマの声も今の俺達には届かない。

「私は……………このスクエナイ世界をスクウために全てを捨てた」希望
”」

そうやって津川さんはその手を自らの頭に回す。

そして、するりとその髪留めをほどいた。

金色の髪が熱風になびかれて宙を舞う。

「“超高校級のコスプレイヤー・津川梁”だったモノ」

炎に明るく照らされて黄金に輝く髪と、全てを諦観したような物悲しい表情は――。

「私は――」

――この世の終わりと見紛うほどに、美しかった。

「――〃超高校級の希望〃、家定霧雨いえさだ きりりう」

『こんな時だからこそ笑うのだ！』

笑って やり過ぎす のだ！

それこそ が！

愛と 希望 の 戦士

ホー
プ

仮
面
の

生
き
様

だ
ッ

!!?

』

もう、彼女は笑わない。

「——今度こそ、スクウ。希望無きこの現世^{うつしよ}。絶望を彷徨う人の子達。今度こそ全てをスクウってみせるなり。例えこの世界が無理だとしても、その向こうは必ず……」

“家定霧雨”と名乗った少女は静かに告げる。

あの頃のような屈託のない笑みではなく、この世の全てを憐れむような悲しい表情を浮かべて。

「……さあ、全部終わらせるなりよ。リヤン様の大好きな、スクエナイ仲間達——」

【学級裁判・中断】

Chapter 6 非日常編⑤ 収斂編

——モノクマはこう言った。

“ 真実に向き合う覚悟はあるか？”と。

命を投げ打つ覚悟に勝る覚悟はないと思っていた。
これ以上心が揺れ動かされることはないと思っていた。

だが、そんな俺の想いを一笑に付すかのように——理解を超越した“ 真実” がそこに佇んでいた。

「やっと……この時が訪れたなりね。長かった……とてもとても……」
もの悲しげな表情を崩さないまま静かにそう告げる少女。

“ 超高校級のコスプレイヤー”、津川梁さん——の姿をした“ 超高校級の希望”、家定霧雨さん。

彼女の登場が俺達の全てを狂わせた。

『また会えて嬉しいよ！ ついにプロローグが終わる時が来たね！』

モノクマが興奮気味に家定さんに呼びかける。

「津川さんが……生きていたなんて……」

幽霊を見るような恐ろし気な顔で山村さんが呟く。

「生きていただけならまだしも……モノクマとグルだったなんて信じたくないでありんす……」

と、吹屋さんが続く。

俺は混乱した頭を必死に回転させて言葉を紡ぎだす。

「……君は……死んでいなかったのか」

信じがたいことだが、目の前に彼女がいるという事実がすべてを物

語っている。

彼女は…死んでいなかったんだ。

「死んでいなかった」……？ 面白い推理なりね」

相変わらず笑顔を浮かべないまま、家定さんは俺を挑発するかのようなセリフを言い放つ。

「その推理……是非私に聞かせてほしいなり。あなた達の望む」 眞実
“に近づいているかどうか、私が見定めてあげるなりよ”

その顔に笑顔はないが……少し興味ありげな口調だ。

「脈絡なく現れておいてもう主催者気取り？ いい気なものね」

舌打ちと共に小清水さんがそう吐き捨てた。

俺は、俺達は、試されているのか？

まだ現実が脳内に認識されきらないまま、議論は新しいステージに進もうとしている。

【フンストップ議論開始】

家定霧雨：「さて……あなた達は何故、『津川梁は死んでいなかった』
と思っただりか？」

山村巴：「何故って……津川さんそのものが今日の前にいるから
じゃないですか！」

吹屋喜咲：「今見ているもの以上の証拠なんてないでありんすよ
……」

小清水彌生：「思い返してみれば、津川梁の遺体は見た目の判別も
できないほどに黒く焼け焦げていた……」

小清水彌生：「身長や体格さえ合っていれば、他の人物の死体だったとしても気付きようがなかったわね」

前木常夏：「……じゃ、じゃあ……津川……いや……家定は……自分の死を偽装するために……」

前木常夏：「他の誰かを殺してその死体を焼いたってことなのか？」

葛西幸彦：「そういうこと……なんだろうか」

山村巴：「そうか！ やっぱり死んだのは津川さんじゃなかったということなんですね！」

「スクエナイ」

【使用コトダマ：五つの脚本

第一の脚本——殺人が起これば全員が助かると考えた津川梁が、土門隆信に殺害を依頼し死亡。

第二の脚本——龍雅・フォン・グラディウスが“絶望”を排除するために釜利谷三瓶を殺害し、脱出して家族をよみがえらせることを目的として御堂秋音が龍雅を殺害。

第三の脚本——人類滅亡のため行動を起こした小清水彌生を出し抜く形で、創作への活力を欲した安藤未賤が丹沢駿河を殺害。

第四の脚本——人間に失望したアルターエゴⅡが亞桐莉緒を殺害し、夢郷郷夢を秘密裏に始末し成り代わっていた土門隆信がモノクマに始末される。

第五の脚本——恋人が死んだことで前木常夏と伊丹ゆきみの恋路に嫉妬した人間ジョーンズが、自殺に協力すると偽って伊丹を殺害。

その瞬間、俺達は一瞬にして凍り付いた。

たった一言、まだ根拠も言っていないのにその一言だけで俺達を黙らせるほどの圧があった。

「津川梁が死んでいないというなら、あなた達が見たあの“絶望”が偽りだったと？ 炎に巻かれる肉体も、断末魔も、全て嘘だったと？ ……そんなことはあり得ないなり。それではこの脚本の意味がない。あなた達が見たのは紛れもなく第一の絶望——即ち、津川梁の最期」

重みのあるその言葉に嘘偽りがあるようには思えなかった。

俺の知る津川さんは、誰よりも明るくて、眩しくて、天使のような存在だった。

あの時、確かに彼女は小さな命を散らしていたんだ。

その事実は決して嘘偽りなんかじゃなく、確かな現実として俺達に降りかかった。

「…じゃあ、今ここにいるお前は津川じゃないってことだな」

しかし、すぐに新しい事実へと歩を進め始めたのは前木君だった。

「よく見ろ。今ここにいる津川…本名は家定とか言ったか。俺達が覚えてる津川とは目の色が違う。それとホクロも…」

前木君が指差す通り、今日の前にいる家定さんは限りなく津川さんに酷似していながらも、若干ながら見た目が異なる点を有する。

俺達の記憶に残っている津川さんの瞳の色は黄緑色だったが、家定さんのそれはルビーのような鮮やかな赤色。

しかも家定さんの目の下には泣きボクロが鎮座しているが、これは津川さんにはなかったはずだ。

「お前、津川の姿を借りた別人だろ。もしくは姉妹なのか……。正体を明かしたらどうだ！」

「ほう…。この短時間でそこまで気付くとは。流石に五回の裁判に勝ち抜いてきただけはあるなりね」

そこまで指摘されても家定さんは表情を崩さずにそう言った。

「…本当にそうかしらね」

小清水さんが家定さんを睨みながら呟く。

「でも、それも違う。私は紛れもなくあなた達を知る津川梁であり家

定霧雨なりよ」

……？

それは一体どういう……

「今の話をまとめると、『最初の事件で死んだのは本物の津川梁であり、今ここにいる自分も本物の津川梁である』ということね。明らかに前半の文脈と後半の文脈が矛盾しているわけだけれど、それをどう説明するつもりなのかしら？」

「説明できるはずなりよ。今のあなた達がもつコトダマで……」
小清水さんの高圧的な問いにも家定さんは動じない。

“ 死んだはずの津川さんが今日の前にいる”。

“ 最初に焼死した彼女も、目の前にいる彼女も、紛れもなくニセモノではない本物の津川さん”。

この矛盾……彼女が二人存在していると思わなければ解決できない。

そんなことはあり得ない……。

『分からないなら、一つヒントをあげるよ！』

と、モノクマが玉座から立ち上がる。

『家定さんの存在を解く大ヒントがそこにいるんだよね！』

と、モノクマが指差したのは――。

「へ？」

きよとんとした顔を見せる吹屋さんだった。

「まだ解いていない謎があるはずなりよ。この吹屋喜咲という女性に関する謎が――」

家定さんが儂げな表情を崩さぬままそう付け加える。

「でも、前にバーベキューをしたときに吹屋にいろいろ聞いたけど、特に分かったことはなかったよな」

「吹屋さんは単に時間差でこのコロシアイに巻き込まれただけの私た

ちの同級生…ではないんですか？」

「あちきも…そう思ってる…でありんす…」

山村さんから投げかけられた言葉を自らに言い聞かせるように、吹屋さんは呟く。

「彼女がただの同級生なら、一人だけ隔離されていたのは何故だろう。ずっと先送りにしていた謎が、今なら解けるかもしれない。吹屋さん…この裁判に勝つために君の力を貸してくれないか？」

俺がそう呼びかけると、不安そうな顔ながらも吹屋さんは小さく頷く。

忽然と姿を現した謎の少女、家定霧雨。

津川さんと瓜二つながらわずかに異なる外見を持っているこの少女はいったい何者なのか。

謎は深まるばかりだが、それを特定するにはまだ情報が足りない。

謎が解けないときは、ヒントが存在する他の謎からアプローチをかけることで芋づる式に謎が解けることもある。

今まで繰り返し返されてきた五つの事件——そこから導かれてきた五本の脚本がそう教えてくれている。

家定さんに対する謎を残したまま、議論は新しいステージに進もうとしていた。

【フンストップ議論開始】

前木常夏：「そもそも吹屋は…」

前木常夏：「どうして俺達の中でイレギュラーな存在になってるんだ？」

山村巴：「そりゃあ、彼女が…」

山村巴：「途中から私たちに合流したからでしょう！」

吹屋喜咲：「でも、黒幕としてのユキマルは全てを予言できたはず」

前木常夏：「てことは、吹屋がここにいるのは…」

前木常夏：「黒幕にとっては既定路線だったってことか？」

「いや、前木君。そうとは考えられない」

【使用コトダマ：超高校級の幸運】

前木常夏が持つ“超高校級の幸運”の才能は時として“超分析力”による予測を遥かに超える現象を起こし得る。吹屋の合流もその一例。

「吹屋さんが俺達に合流してしまったことは黒幕：“奴”にとって間違いなく予定外のことだった。それは当時のモノクマとモノパンダの反応からも明らかだ」

そう言いながら俺は遠い昔のように感じられる十日ほど前の記憶を思い返す。

【Chapter 4 (非) 日常編①】

「でもさあ、きつと俺らがまだ気付いてない視点があるはずなんだよなあ……」

前木君がそう言つて教室内を見回りながら練り歩く。

と、不意に足元にある筆を踏みつけてしまう。

「わっ!!」

そしてそのまま足を滑らせ……

ゴツ。

固い音とともに前木君は勢いよく壁に頭をぶつけた。

「いってー!!」

前木君は頭を抱えて倒れ込む。

「ま、前木君!!」

みんなが前木君の方に駆け寄る。

「意識は問題ないようだけど、たんこぶになっちゃったわね……」

伊丹さんが前木君の頭を撫でながら言った。

「足をつまずかせて転ぶなんて、超高校級の幸運らしからぬ不運ですね……」

入間君が不安そうに呟く。

「……な……」

と、俺は、夢郷君の驚きの声を聞いて振り向いた。

「こんな…バカなことが……」

なんと、前木君が頭をぶつけた部分の壁にヒビが入って、一部が割れて崩れていた。

壁はとても薄く、その後ろにもう一枚壁がある。

「え……？ なにこれ……？」

亞桐さんがひび割れた壁を触りながら呟く。

「待て!! 触るな!!」

と同時に夢郷君の声が飛び、亞桐さんは「ひゃっ!!」と手を引っ込める。

「ぎひゃー……!!! なんてだぁー……?!?!」

と同時に、モノパンダが血相を変えて現れた。

「なんで補修した場所にピンポイントで……!! こんなの聞いてねーぞ!!」

俺たちは訳が分からず啞然とするしかなかった。

「吹屋さんが俺達に合流するきっかけになったのは、前木君が偶然頭を薄壁にぶつけて管理室への出口を見つけたことだ。あの時のモノパンダの慌てようは本物だったし、小清水さんが言うには“前木君の

幸運は黒幕と対峙する時に発動するらしいんだ」

「そういえば……そんなことを言ってたな。俺は全くそんな気はしてなかったが……」

前木君が自分の手をまじまじと眺めながらそう言った。

「俺達が学園の謎を解こうと努力することも黒幕と対峙することの一环と言える。そのタイミングでそんな偶然が起きたことは前木君の幸運が発動したと考えられる」

「……言う割にはあれ以来大した偶然も起きてないじゃねえか。もし本当にそんな力があるなら、どうして伊丹や入間を救ってやれなかったんだ……?」

前木君は拳を握り締めながら悔しそうに呟く。

『キミの“幸運”は他の“幸運”より出来が悪いからね。思ったように発動できるもんじゃないでしょ。まあ、君が気付いてないだけでこの状況が既に幸運の賜物かもしれないよ?』

「……?」

モノクマは嫌に意味深な言い方をしている。

だが、今は余計なことを頭に入れても仕方ないと思いひとまず無視することにした。

「とにかく、吹屋喜咲の参入が黒幕にとっては誤算だったことは確かね」

小清水さんが話を軌道に戻す。

「理由は分からないけど、同じクラスのメンバーでありながら吹屋喜咲だけはコロシアイに参加させたくなかった、ということね。さて、ここでまた一つ矛盾が生まれるわけだけど」

「矛盾?」

「状況を思い返せば分かるでしょう。吹屋喜咲の扱いに関する黒幕の矛盾が」

「待って。みんなで議論して情報を検めよう」

俺はそう呼びかけ、再び議論の渦中へと立つ。

吹屋さんを巡る扱いの矛盾……

それがどこに潜んでいるのか確かめよう。

【ノンストップ議論開始】

葛西幸彦：「黒幕は吹屋さんをコロシアイに参加させる意図はなかった。」

葛西幸彦：「つまり、ずっとあの部屋に監禁しっぱなしにしようとしていたってことだね」

吹屋喜咲：「あんな場所にずっといたら……」

吹屋喜咲：「頭がおかしくなっちゃうでありますよ!!」

前木常夏：「ん？ 待てよ……」

前木常夏：「そもそも吹屋をコロシアイに参加させたくないなら……」

前木常夏：「どうしてこの校舎に吹屋を閉じ込めていたんだ？」

山村巴：「確かに、ここ以外の場所に閉じ込めておけば……」

山村巴：「事故で私達と合流することもなかったですよね！」

「その矛盾、俺が説明してみせるよ」

【使用コトダマ：外界の真実

タワーの下界は絶望に包まれた世界と化しており、無秩序な破壊や殺戮が繰り返されている。

「黒幕は吹屋さんを参加させたくなかったけど、それ以上にどうしてもこのタワーに吹屋さんを置いておかなければならない理由があった……。それは紛れもなく俺達が見た下界の光景だよ」

その言葉と共に一同は思い返す。

燃え盛る建物と赤く染まった空。

秩序の消えた世界。

自分たちが生きていた世界と同じ場所とは到底思えないほど破壊されつくした街の姿を。

「あれはホログラムでもなんでもなく紛れもない現実。あんな世界に女の子一人置いておいたらどんな目に遭うか想像もつかない。だか

ら黒幕は、事故で俺達に見つかってしまいうリスクを冒してもなお吹屋さんをここに置いておくしかなかった」

「つまり、吹屋さんはコロシアイに存在してはならない人物でありながら、黒幕にとっては必要不可欠な存在でもあったということだよ」
「……………」

俺に視線を向けられた吹屋さんは不安げな顔のまま何も言わなかった。

「コロシアイ以外で何かをさせたかったってことか？ ……よく分からないが、それなら吹屋がこんなところに閉じ込められていたのも納得はできるな」

「ええ……………？ 黒幕のユキマルはあちきに一体何をしようとしてたんでありんすか……………」

何を想像したのか、両手を肩に当てて体を震わせる吹屋さん。

「一つ、進んだなりね」

沈黙を破って家定さんが口を開く。

「先に述べた通り、吹屋喜咲はこの脚本のカギを握る存在。さらに言うと、本来なら吹屋喜咲はこの裁判の最中に現れる予定だった」
「……………」

『そ！ 吹屋さんは満を持してここの裁判で登場する予定だったんだよ。遅かれ早かれ、いずれは君達と合流する手はずではあったんだよね』

と、モノクマが続く。

「さあ、これで見えてきたはずなりよ。吹屋喜咲の正体と、彼女に課せられた使命が——」

不敵に呟く家定さん。

その言葉の裏には何があるのか。

そして、吹屋さんに隠された真実とは……………。

【ノンストップ議論開始】

葛西幸彦：「吹屋さんに隠された謎……。今なら解けそうな気がする」

吹屋喜咲：「あちきにも分からないの!?!」

山村巴：「彼女は謎と言えば謎だらけですもんね…」

葛西幸彦：「根本的な謎に目を向けても仕方ない」

葛西幸彦：「まずは彼女と初めて出会った時のことを思い出そう」

前木常夏：「吹屋を初めて出迎えたのは管制室の隣の監獄部屋で…」

前木常夏：「モノパンダがカギを開けてくれたことで合流できたんだよな」

山村巴：「それまで吹屋さんはその場所ですつと？」

吹屋喜咲：「そうでありんすよ！ あちきはずつと…」

吹屋喜咲：「劣悪な環境で閉じ込められてたでありんすよくく!!!」

「吹屋さん……それは違うんじゃないかな？」

脚本が組みあがりつつある。

真実への一步を踏み出すべく、俺は言葉の弾丸を彼女にぶつける。

【使用コトダマ：吹屋の監禁部屋

吹屋喜咲が監禁されていた部屋は殺風景なコンクリート造りの部屋で、生活に最低限の設備は整っていた。

屑籠には大量の缶詰の空き缶が捨てられており、布団やベッドは比較的綺麗だった。

「……以前、君がいた監禁部屋を調査させてもらったんだ。部屋は殺風景だったけど、布団やベッドは綺麗に整えられていた。今思えば、あの時に違和感を抱くべきだった」

「……？ 何がおかしいんですか？」

山村さんが首を傾げる。

「今吹屋さんが言ったように劣悪な環境ですつと閉じ込められていたなら、部屋はもっと汚れているはずなんだ。それに、吹屋さん自身も……」

初めて出会った時の彼女は衣服も体も汚れ一つない綺麗な姿だった。

替えの服もなく、シャワーがあるとはいえシャンプーも用意されていないような環境でそこまでの清潔さを保っていたとは考えづらい。「…確かに、初めて会った時の吹屋はとても長らく閉じ込められていたようには見えなかったな。…吹屋、お前のさっきの発言には矛盾があるぞ」

「そ、そ、そんな?! あちきは本当にあそこで暮らしてて…」

あたふたしながら吹屋さんは答える。

「…怪しく思う気持ちは分かる。けど、俺は彼女がどうしてそう言っているのか分かった気がする。と、言うより…分からされた。彼女の正体に随分早くから気付いていた人にね」

そう言っただけは小清水さんの方を向く。

すると、俺の意図を察したかのように彼女が俺の言おうとしていた言葉を紡ぎだす。

「前にもこんな話があったと思うけど、釜利谷三瓶が記憶を操作した人数の中には吹屋喜咲も含まれている。そして、その内容は学園生活の内容だけに留まるとは明言されていない。つまり吹屋喜咲が述べている記憶は、知らず知らずのうちに彼女の脳内に植え付けられたものと言うことよ」

すらすらと、彼女は超現実的なことを述べていく。

記憶を消去するのみならず、存在しない架空の記憶を植え付けるという非現実的な技術…。

そんなものがこの世にあるとは思えないが、既にアルターエゴや記憶制御薬のようなものを見てしまった以上、あり得ない話とは言えない。

そして、純朴で嘘など付けそうにない吹屋さんが事実と矛盾したことを述べているのであれば…。

それは、彼女がもつ記憶自体が?だということだ。

「え? え? じゃあ、あちきは監禁部屋で過ごしていたように見せかけて、実は過ごしてなかった…?」

「…待てよ。それだといういろいろ今までの議論が破綻しないか? そもそも吹屋が監禁部屋に閉じ込められてなかったんなら、一体どこにい

たつて言うんだよ」

「前木君。彼女が監禁部屋で生活をしていなかったからと言って、彼女が監禁部屋以外の場所にいる必要はないんだよ」

「……………？ どういうことだ？」

俺の発した言葉の意味が分からず、首を傾げる前木君。

そんな彼に、俺は真実の脚本を言って示す。

「吹屋さんは眠らされていたんだ。俺達がこのタワーに閉じ込められてから、発見されるまでずっと」

「……………え？」

一番ポカンとしていたのは吹屋さん本人だ。

「それなら布団や衣服が乱れていないのも納得ができる。そもそもあの部屋で何の活動もしていないのだから」

「……………??」

「部屋の中に捨ててあった大量の空き缶と缶詰は、恐らく生活していた痕跡を演出するためのカモフラージュだと思う。もしくは、あの部屋が以前使われたときに持ち込んだものがそのまま残っていたか」

「え、いや、ユキマル!?!? 頭ダイジョーブでありんすか!?!? ユキマルが

この学園にきてからあちきが見つかるまで半月くらいかかってたで
ありんしょ? その間ずっと寝てたなんて…」

「あり得るんだよ。いや、むしろその方が自然なんだ」

繋がっていく。

彼女に出会い、過ごしていくうちに少しずつ蓄積していった違和感。

その根本が、今一つの結論に結びつこうとしている。

これまでずっと気になっていた吹屋さんの正体。

その答えは、少し前に見つけたあの情報の中に紛れていたんだ……
!

「俺達に発見されるまでの半月余りをずっと眠っているなんて、確かに普通の人間ならありえないことだ。——つまり」

——その言葉が示す意味。

それは…。

《人物指名》

「記憶だけじゃなく、肉体も、精神も、全て人の手で作られたものだとしたら——全て納得がいくはずだよ。」超高校級の嘍家”、吹屋喜咲さん——いや、」

「アルターヒューマン一号機」

【使用コトダマ：学園が保有するAIとアンドロイドの一覧

アルターエゴ——“超高校級のプログラマー”が開発した、人間の思考や感情を再現した人工知能。

アルターエゴⅡ——アルターエゴを元に御堂秋音がハッキング能力を付与したもの。それ以外の性能はアルターエゴと変わらない。

アルターエゴⅢ——アルターエゴⅡの能力に加え、電子化した“超高校級の才能”の情報を認識することで才能を発揮できるようになった人工知能。

モノドロイド——御堂が開発した試作型アンドロイド。命令入力により操作できるほか、アルターエゴⅡもしくはⅢが内部にインストールされることで肉体として操作可能。

アルターヒューマン——人間の姿を高度に模したモノドロイドにアルターエゴⅢをインストールすることで誕生する、人工の“超高校”。まだ試験段階とされる。

これが、答え。

彼女——吹屋喜咲という少女の正体。

「……あちぎが……？」

吹屋さんは震える自分の手をまじまじと見つめる。

「あちきが……アルターヒューマン……？ あちきは……ロボット……??」

「そうよ」

短く吐き捨てるように小清水さんは言った。

「吹屋さんは話している限りでは普通の人間の女の子に見える。実際に披露してはいないけど、恐らく“超高校級の嘶家”の才能を持っているのも本当だろう。俺達が見た資料の中にそれに該当するものとして載っていたのは間違いなくアルターヒューマンだ。アルターヒューマンは才能を搭載した“アルターエゴⅢ”と“モノドロイド”を組み合わせた“人工の超高校級”で、見た目も能力も人間と見分けがつかない。現実には存在している“超高校級”の生徒を精緻に再現できるものはこれしかない」

アルターヒューマンは、人工の“超高校級”そのものだと資料には書かれていた。

それこそ、見るからにロボットと言うような見た目のモノドロイドとは比較にならないほどの再現性だ。

吹屋さんが人間でないとしたら、考えられる選択肢はアルターヒューマンしかない。

「…でも、資料にはアルターヒューマンはまだ試験段階って…」

「確かにそう書いてあったね。でも俺達は希望ヶ峰に来てから数年間の記憶を失っているし、俺達が見た資料だっていつ頃記録されたものか分からない。あの資料が書かれた後、秘密裏にアルターヒューマンが完成していたとしてもおかしくはない」

「それは……そうでしょうけど……」

「吹屋喜咲は人間じゃない。それは、これまでの不自然な言動を思い返せばすべて辻褃が合うはずよ」

「いや、ちよつと待てよ……。いくらなんでも、急にそんなことを言われても信用できない」

あまりに非現実的な事実を受け入れられない仲間たちは、口々に不満をぶつけていく。

「そう思うのも当然だよ。小清水さん、また力を貸してほしい」

「……頼りにはさせてもらおうわ。そろそろあなたも“能力”^{ちから}が戻ってきているようだし」

前の裁判の時とは打って変わって、小清水さんの態度は軟化していた。

それくらい、俺の脚本の能力が冴えを取り戻してきたということだろうか。

まだ未来を読めるほどじゃないけど…。

ともかく、今は一歩でも議論を前に進めることが肝要だ。

吹屋さんにはつらい現実だろうけど、“奴”に勝つためには納得してもらわなければ。

【議論スクラム開始】

Q. 吹屋喜咲の正体はアルターヒューマンなのか？

前木常夏・山村巴・吹屋喜咲VS葛西幸彦・小清水彌生

前木常夏：「吹屋は俺達と一緒に食事を摂っていた。お前もハツキリ見ただろ！」

前木常夏：「吹屋がロボットなら、人間の食事なんて摂れないはずだ！」

葛西幸彦：「いや、アルターヒューマンの調査文献の内容には、アルターヒューマンは人間と変わらない食事ができるって記載があった」

葛西幸彦：「吹屋さんがアルターヒューマンだったとしても、食事をしていたことに矛盾は生じない」

山村巴：「でも、彼女はあんまり頭が良くないですよ？」

山村巴：「ロボットなら、もう少し知能が高くてもいいような…」

吹屋喜咲：「嬉しくない擁護でありんすね…」

小清水彌生：「吹屋喜咲の思考は直情的で短絡的…。確かにIQの面ではそこまで高いとは言えない」

小清水彌生：「でも、知識や技能の蓄積は他の人間より遥かに高かったはずよ」

葛西幸彦：「思い出してほしい。弓道場であつという間に弓の撃ち

方を覚えたり…」

葛西幸彦：「最初は下手だった料理がもの数日で上達したり…」

葛西幸彦：「人並外れた学習能力や身体能力を持っている姿は何度も目にしてきたはずだ」

葛西幸彦：「その能力は、人間よりもアルターヒューマンと仮定した方が納得がいくはずだよ」

吹屋喜咲：「でも…でも…あちきは…」

吹屋喜咲：「自分がロボットだなんて信じられないであります!!」

「これ以上目を逸らすわけにはいかない。辛いと思うけど認めてもらうよ…吹屋さん」

「これが俺達の答えだ!!」

【コトダマ使用：吹屋への違和感】

小清水が吹屋にスタンガンを当てた際、常人とは異なる反応という印象を受けたという。

「さっきの議論で挙げた話は、人間だったとしてもまだ説明がつく話だ。…けど、一つだけ、どうしても彼女がロボットじゃないと説明がつかない事象があった」

目くばせすると、それにこたえるように小清水さんが続きを語る。

「前に吹屋喜咲にスタンガンを当てたのよ」

「何…?」

「以前から私は吹屋喜咲を人間だとは思ってなかったから。そう思っ
てスタンガンを当てたら案の定分かったわ。右の二の腕にね、一撃お
見舞いしたのよ」

そう言っつて小清水さんは自分の二の腕をタッチして見せる。

「普通の人間なら激痛で転げまわるはずなんだけど、吹屋喜咲は痛み
に対するリアクションは見せず、即座に怒って突き飛ばしてきたの
よ。かと思えば、その数秒後に時間差で痙攣し始めた」

「……なんだ、そりや…」

「不思議な反応よね。でもこれは、スタンガンの電流によって内部機器が一時的に機能不良を起こしたと思えば納得のいく現象よ。復旧にどれくらいの間がかかったかは分からないけど、その後の動機発表に何事もなく来たところを見ると、それまでには直ったようね」

「ば……バカな……」

前木君は狼狽しながら吹屋さんを見る。

「嘘だ……」

それでも吹屋さんは震えた声で呟く。

「そんなの嘘でありんす……あちきは……」

「どうやら、あなた自身は自分を人間と思いついてプログラムされているようなね。そう思うように自動で記憶をアップデートする機能もついているのかも。よくできたものね」

「プログラム…?? 記憶も体も、全部作り物…?? じゃあ、あちきは

……あちきの存在は、一体……」

「吹屋さん……」

ぼろぼろと涙を流す吹屋さんの姿を見ると、これ以上真実を突きつけるのがためらわれてしまう。

でも、俺は死んだみんなに誓ったんだ。

この命を犠牲にしても、黒幕に勝つと。

だから、どんな手を使っても真実を示さなくちゃいけない。

そう、どんな手を使っても――。

そんな俺の意思を汲み取ったかのように……。

短く鋭い破裂音と、その数秒後に流れてきた硝煙の臭い。

「……………!!!」

俺が銃口を掲げる小清水さんの姿を目にしたとき、全てを理解した。

即ち、小清水さんが撃った銃の弾が吹屋さんの肩を掠めたのだと。

「小清水……お前っ!!」

「傷口をよく見てみなさい。血は出て来るかしらっ?」

前木君が怒鳴るのも気にせず、彼女はそう言う。

「小清水さん……そこまでしなくても……」

「時間がないのよ。無駄な議論はとっとと終わらせたいの。さあ、これでもまだ人間と言いきれる気？」

「……………」

撃たれた肩を押さえようとせず、吹屋さんは見開いた目をこちらに向けたまま立ち尽くしていた。

傷口からは何も染み出してこない。

着物にハッキリと切り込みが入るくらいの傷を受けたのに。

彼女は希望ヶ峰学園が生み出した最新鋭アンドロイド。

機械の身でありながら、人間と変わらぬ感情と運動性能を備えた人工の“超高校級”。

その身体を持つことが今、証明されたのだ。

「もういいでしょう」

混沌とする議論の場に、家定さんの冷たい声が差し込まれる。

「“A H—O 1”。ヒトの人格として用意したダミーのアバターはもう不要なり。本来のアバターに切り替えるなりよ」

「ダミーのアバター……？」

家定さんが言っていることの意味が分からない俺は、彼女の言葉を反芻することしかできない。

「い……嫌……だ……あちきは……」

吹屋さんは心からおびえた様子で一步後ずさる。

「従わないなりか？。では合言葉を入力しましょう。”お客様に御嚙をして差し上げなさい”」

「……………!!!」

「吹屋さん……!?!」

家定さんが意味深な言葉を言うと同時に吹屋さんがどたりと地面に尻餅をつく。

思わず俺と前木君、山村さんは吹屋さんの元へ駆け寄った。

「いや、いや、嫌……!!! イヤだ!!! 消えたくない……!!! 消えたくない!!! た……た、す、けて……」

「吹屋さん、しっかりしてくれ! どうしたんだ!?!」

吹屋さんは震える腕で俺にしがみつ き、助けを求め る。

何が起きたのか、俺には見当もつかない。

「お前、吹屋に何をした!!」

「本来の機能に戻すだけなりよ。今の人格は学園生活の途上で生まれ た余計なものだから」

前木君に詰め寄られても、平然とした顔で家定さんはそう返した。

「吹屋さん……!! 私たちは一体どうすれば……」

「分からない、分からないよ……! これも彼女の機能の一つだっていうのか……!?!」

俺の胸のうちに焦燥だけが募っていく。

迂闊だった。

彼女がアルターヒューマンなら、どんなコードを仕込まれていてもおかしくないんだ。

それこそ、音声入力で好き勝手に支配することも。

俺が彼女の正体を暴いたせいで、彼女の身に何か降りかかるうと している。

俺が真実を導こうとしたせいで……。

「ユ、ユキ……マル……」

半開きになった目から一滴の涙が零れ落ちる。

力を失った彼女の体を俺は抱きかかえるようにして支えていた。

「大、丈夫……あちきは……また……戻って……くるから……」

「吹屋さん……?」

「だから……ユキマル……も……絶対に……生きて……ここを……出るでありんすよ……」

「…また…一緒に……………を……………ありんす。…約束で……………ありんすよ……………」

途切れ途切れの言葉をやっとの思いで紡いだ彼女は、
少し微笑んで、ゆっくりと目を閉じる。

短い間だったけど、共に学園の謎を追った仲間。

いきなり同級生と言われて違和感を抱かなかったのは、きっと彼女の奥底に眠る暖かさど、どこか他人とは思えない親近感に由来するものだろう。

そんな彼女は、突然に俺達の手から離れてしまった。

「でも、彼女は……………」

「うん、きつとまた会える」

俺は自分に言い聞かせるように呟く。

彼女自身が言っていたように、彼女はまたきつと帰ってくる。

生きて出るといふ約束は果たせそうにないけれど……………」

彼女が戻ってきたときにガツカリさせないように、この裁判に勝つ。

そんな思考をかき消すように、腕の中の吹屋さんから素っ頓狂な声が発せられた。

「あく、よく寝た！」

「…!?!」

グツと背伸びをすると、するりと俺の腕を抜けて軽快に立ち上が

る。

「シアて皆さん本日はこのようなどころまでお越し頂き、まことに感謝、感謝でございます」

これまでの吹屋さんと全く同じ声で……しかし俺が知る彼女以上にハキハキとよく通る声で、芝居がかった抑揚のある声でそう言った。

「おや、本日のご観客は僅かに四人、あいや失礼、四人と一匹でございますか。クマさんまで嘸を聞いてくださるとは、良い時代になったものですねえ」

『だよね！ 最近はクマも人権を主張できるようになったんだよ！ 世界中のクマニスト達の努力の賜物だね！』

流れるようにスラスラと言葉を述べる姿はその筋数十年のベテランのようで。

でも、その表情は瞳から光が消えた張り付いたような笑顔。

感情があるように見えて、不気味なくらい無機質で機械的な表情。

それは、吹屋さんの姿をした別の“何か”だった。

「あなたは……吹屋さんではないのですか……？」

「おや失礼、名乗りの方がまだでございますでしたね。私は【吹屋喜咲^{フキヤキサキ}】、巷にてありがたいことに【超高校級の嘸家^{はなしか}】の称号を頂戴しております女流嘸家でございます」

吹屋さんは、まるで暗記した文章を一気に読んでいるかのようにスラスラと名乗る。

「“AH—OI”。久しぶりなりね」

「おや、これにおわすは津川梁様、もとい家定霧雨様でございますね。ご機嫌麗しゅうございます。しかし私には吹屋喜咲という大切な名がございます故、コード番号で呼ぶのはお控えいただきたく思います！」

「その女の中身を入れ替える必要性がどこあったのかしら」

小清水さんが家定さんを睨みながら言い放つ。

「議論が進みやすくなるように手助けしてあげただけなりよ。あとは本人の口から聞いた方が早いでしょう？」

「そんなことのために、俺達の仲間だった吹屋を別の奴にすり替えやがったのか…!」

「先ほども言った通り、みんなと触れ合っていた方の人格は交流のため余計なモノ。こちらの方が”才能”を持った本来の人格なりよ」
「左様でございます! いやはや長らくお恥ずかしいお姿をお見せいたしました。不肖吹屋喜咲、僭越ながら皆様にアツと驚く怪奇譚をお話して見せましょうぞ!」

光のない瞳で高らかに吹屋さんは告げる。

「——ありがとう、吹屋さん」

そんな彼女に、俺はそう告げた。

「?」

吹屋さんは笑顔のまま首を傾げる。

「君のおかげでもう一つの謎が解けた」

モノクマが言っていた言葉の意味が分かった。

『家定さんについての謎が解けないのなら、吹屋さんの正体を探るといいよ』

“なぜ、津川梁の人格を持つ人物が二人存在するのか”

作られた人格。

吹屋さんの存在。

そして——。



「愛しています、ご主人タマ」



——俺は出会っている。

津川さんの姿をした、津川さんではない存在に。

もし、彼女の存在がヒントになるのだとしたら、目の前にいる家定さんは——。

「君は、記憶を失う前の“本物の”津川梁さん」

「——の、人格と記憶を持った——」

「——アルターヒューマン二号機だ」

『ガチャリ』

俺の言葉に呼応するようにその無機質な音は響いた。

「……………」

誰かが息を飲む音が聞こえた。

家定さんは切り離された自分の右手首を左手で持っていた。

その断面には血も肉も骨もなく、金属の骨格と軟組織の表皮が顔のぞかせている。

「——あなた達の言うとおり、私は希望ヶ峰学園擬人汎用システム設計部によって製作・開発された”才能搭載型自律思考システム群”——型式番号AH—02——”アルターヒューマン”二号機なり。そこの吹屋喜咲の後に作られた後継機」

あつさりと告げられた真実を、俺は未だに受け入れる気にはなれなかった。

吹屋さんと言い、彼女と言い、見た目にも声にも立ち振る舞いにも一切の違和感がない目の前の少女が完全な人工物だなんて。

「あれま！ まさか此処におわす美少女が私の妹さんだったとは！ べっぴんな妹を持って私は果報者にございますなあ！」

袖から取り出した扇子でぺしりと頭を叩きながら吹屋さんが口上のように述べる。

家定さんは何も答えなかった。

「あなた達が見た資料が書かれている頃には、既に学園の中枢部ではアルターヒューマンの開発はほぼ完成していたなり。全ては”現世

の奇跡”と謳われた一人の少女の頭脳の賜物なり。もちろん、完成したばかりのアルターヒューマンは秘密裏に学園の管理下に置かれ、ごく一部の開発チーム以外は誰も…学園長ですら全貌は明かされていなかったなりよ”

そう説明を加えながら、家定さんは切り離れた自分の右手首を腕の断面に再接続する。

金属の中枢部がカチリと繋がったかと思うと、皮膚を形成している軟組織もあつという間に接続され、数秒で傷一つない綺麗な手首が取り戻された。

「でも私の意識や人格、記憶は津川梁…すなわち家定霧雨そのもの。そして、最初のコロシアイで土門きゆんに殺された私は、コロシアイ主催者としての記憶のみを失ったオリジナルの私。言うなれば、記憶を消されたゆつきーきゆんとモノクマとしてのゆつきーきゆんとの関係に近いなりね。ゆつきーきゆんと違って、私のオリジナルは既にこの世にはいないけれど…」

信じがたいことを次々に述べていく家定さん。

過去の俺自身がモノクマとアルターエゴを使って成し遂げた”自己の複製”。

それをより完璧な形で成し遂げた人物が目の前にいたというのだ。

そして、俺達が最初に出会った津川さん。

あれもまた、紛れもなく本物の津川さんなんだ。

黒幕としての記憶を失っていただけの、純粋な津川さんそのもの。

彼女は、自分の本性にも記憶にも気付くことなく第一の脚本に巻き込まれ——命を失った。

津川さんと目の前の家定さんの違いは、記憶の有無だけ。

人格も別人のように思えるが、モノクマの中にいる俺自身がそうであったように、信じがたいが元は同一の人間だったということだ。

しかし、今気になるのはそれよりも——。

「アルターエゴⅡは……」

考えるよりも先に言葉が出ていた。

「亞桐さんを殺したアルターエゴⅡも君の意識だったということなのか…？ 君は第一の事件における被害者でありながら、第四の事件のクロともなったっていうのか…？」

俺が一番知りたいのはそれだった。

俺に心を寄せ、全幅の信頼を得ながらも絶望に堕ちてしまったアルターエゴⅡ。

彼女の存在は一体——。

「——アレはアルターヒューマンである私を生み出すためのシミュレーションの過程で偶然生まれた存在。まだ人格の再現性学習が解析しきれていない状態で作られた過渡的なシステムだから、口調を一致させたこと以外はほとんど別人格として完成してしまっただけだね。…まあ、だからこそ第四の脚本の主演を任せられたなりにね」

『でも、彼女を生み出したのはラッキーだったね！ 本物の家定さんよりはるかに人間らしい心を持ってくれたおかげで脚本の主演にさせてあげられたからね！』

モノクマが親指を立てながら上機嫌気味に言った。

確かに、アルターエゴⅡはアバター上では津川さんの姿をしていたものの、津川さんのコピーというよりは彼女自身が一人のキャラクターとして完成していたようにも思える。

彼女は自分が副産物に過ぎないことにすら気付かないまま、モノクマたちに利用されてしまっていたのか……。

「アルターエゴⅡの作成をはじめとしたさまざまな試行錯誤を経た結果、私達は実在する人間の人格と記憶を完全にコピーする技術を身につけたなり。私もモノクマも、アルターエゴⅡのノウハウを踏み台にして完成されたなりよ」

『で、ボクの才能でシミュレートして見たらちようどよく第四の脚本を任せられそうだったので、丹沢君が発見してくれることを期してこっそり隠したんだよね！ 彼女もこの脚本を作るうえでの貴重な登場人物になってくれたってワケ！』

「そういう……ことだったのか……」

吹屋さんの存在。

突如現れた家定さん。

アルターエゴⅡが存在していた意味。

学園が開発した高度なシステムとアンドロイド達。

收拾がつかないと思われるほどに散らばっていた謎は少しずつまとまりを見せ始めている。

その先に待っているのは、一体……。



“——俺達は人々の希望になる”超高校級”だ！”

そんな言葉を耳にしたのはどれくらい前のことだっただろうか。
私はその言葉を聞いて決意した。
みんなの希望になってみせると。
きっと、コロシアイに参加した方のリャン様もそう思っていたら
う。

あれは昔の私そのものなのだから。

——そう、リャン様はみんなの希望であり、みんなもリャン様に
とつての希望だった。

——この学園に来て、世界の真実を知るまでは。

眼前に立つ葛西幸彦とその仲間たちは、未だ闘志に燃える目つきで
私を見つめている。

——いや、既に何人かは、“真実”に気がき始めている。
口数が少なくなっているのもそのためだろう。

嗚呼、下らない。

いつまでそうやって現実から目を背け続けるのか。
今まで貴方達が見てきたものはなんだったのか。

いつまで経っても分からない、分かつてもしない。

だから人は皆、滅びゆくのだ。

仮初めの希望を口にして、絶望から目を背けた報いを受けるのだ。
そんな結末にはさせない。

今度こそ全てをスクウ。

そのために、この脚本が用意されたのだから。

分からせてあげるなり。

我々人類が孕むもの、断ち切れないもの、その全てを。
最大の絶望をもって分からせ：そしてスクウ。

目の前に臨むは、絶望の脚本を生き抜いた四人の刺客。
一体のアンドロイド。

そして全てを見守るヌイグルミ。

味方などいない。

私にとっての“希望”など、とうの昔に枯れ果ててしまったのだから。

「最後の舞台は整いました」

私が告げると、皆それぞれの表情を浮かべて覚悟を決める。

長らく倉庫で眠っていたせい、体が錆びついたような歪な駆動音を立てている。

使い慣れていない身体だが、不思議と行動に不自由はない。

こんな時、生身の体だったらゆっくりと息を吐いて精神を整えるのだろうか。

後ろでニコニコと笑うモノクマを尻目に私はコトダマを心の中で握りしめ、彼らを正面に見据える。

倒すべき敵であり、大好きな仲間である彼らを――。

「さあ、次の議題は――」

――これは、たったひとりの最終裁判^{けっせん}。

日常編的な番外編（ときどき台本形式あり） 楽しいSNS①

どうも。“超高校級の脚本家”こと葛西幸彦です。

世界の希望をどーたらと聞こえだけはいいい目標を掲げている希望ヶ峰学園ですが、俺たちのクラスはいたって平穏な学園生活を送っています。

才能を持つ俺たちは授業に出るのも出ないのも自由…らしいんだけど、うちのクラス担任の強い希望と俺たち自身の願いもあって、今のところうちのクラスは基本的に全員出席を保っています。

出会った当初は…その、なんていうか、曲者ばかりで大変だったけど。

今はみんな仲良くやってる…と思います。

——これは、あの忌まわしいコロシアイ生活が行われる少し前。

みんなの記憶がまだ健在だったころの、ほんのひと刹那の平和な物語です。



本日の授業が終わり、俺は教室の掃除を済ませて部屋に戻った。

部活に行ったり研究室に出かけたり街へ繰り出したりと、この学園に住む仲間たちの放課後は様々だ。

でも俺は敢えて部屋に戻る。

部屋でゆっくり次回作の構想を練る時間が好きなんだ。

決して友達がいらないからとかじゃない。

決して友達がいらないからとかじゃない。

ブーン、と机に置いておいた携帯が振動した。
見てみると、普段あまり賑わないSNSのクラスチャットで何やら
言葉が交わされているようだった。

まえなつつんへ今週の古文の小テストの範囲、(、D、)ノ オク
レコ

前木君が古文のテスト範囲を求めている。

あのプリントは…どこにしまったかな? …ええと…
さんペー。(写真)

おお、釜利谷君があげてくれた。

何も言わず、しかし速攻でやってくれるあたり仕事人だなあ。

まえなつつんへ仕事早い笑

まえなつつんへ★(●、ω、)b アリガトン♪

さんペー。へ0点期待。

まえなつつんへそれはない。笑

そういえば、みんながこういうところでやり取りするのあんまり見
たことないなあ。

まえなつつんへ既読誰(。D、)ノダーツ

あ。こういうときって名乗り出なきやダメかな…?
と、思った直後である。

闇鳳蝶へはい。

名乗り出たのは、見たことも聞いたこともないハンドルネーム。

G i r i o へ誰。

まえなつつんへ誰。

夢幻郷へ誰。

誰。＼（既読5）葛西幸彦

さんペー。へ誰。

一気にいろんな人が出てきた。

思わず俺も流れに乗っちゃってしまった。

闇鳳蝶???

誰ですかあなた。

闇鳳蝶へあら、古文の小テストならいつもクラス一位を保持し続けているゆきみお姉さんですけど何か？

Giri o へやべえよこいつやべえよ

まえなつつんへちなみにそれなんて読むの？

闇鳳蝶へくらやみのあげは。

伊丹さんってそういうキャラだったっけ？

俺は普段の彼女を思い浮かべる。

授業中も真面目な態度で、体育でもぶつちぎりの好成績、おしとやかで物静かな彼女が……??

夢幻郷へ申し訳ないが腹を抱えて笑っている。

さんペー。へ同じく。

Giri o へシヨックデカすぎて笑えない

闇鳳蝶へ私に理想を求めすぎなのよ。理想とは時として諸刃の剣。己を穿つ刃となりぬ。

Giri o へ待ってこれ以上私の心決りにこないで

まえなつつんへてか、伊丹の陰に隠れてるけどその夢郷も大概だぞ。なんだよ夢幻郷ってw

夢幻郷へロマンチストと呼ばたまえ。

さんペー。へロマンチンストの間違いだろ性欲爆発マンw w w w w

ww

Giriioへ下ネタやめろキレるぞ

まえなつつんへ落ち着けよ(=▽=)／ポンポン

闇鳳蝶へもうすでにキレてるでしょっていうツツコミは野暮？

Giriioへこの状態のゆきみんに正論で論破されるのすげえ悔しいんだけど。

話がすごく変な方向に進展しているな…。

まとめるとこんな感じか？

- ・伊丹さんの変貌ぶりに驚愕
- ・夢郷君も若干その気あり
- ・亞桐さんはSNSでも比較的常識人

土門隆信へいやログ見たけど超常現象起きすぎだろ。

さんぺー。へは？ハンネ本名とかつまんな、帰れ

土門隆信へとりあえず闇鳳蝶さんに命名の由来をお伺いしたい。

さんぺー。へ華麗なスルーあざっす!!!

まえなつつんへ三ちゃんが粗雑に扱われてる光景レアじゃね？

夢幻郷へ男同士の珍しいやり取りとか誰得

闇鳳蝶へ俺得。

土門隆信へもうお前のキャラわっかんねえなw

闇鳳蝶へで、由来だけど。

闇鳳蝶へ黒つぶくてカツコよさそうでシャレオツな言葉をggつただけ。

まえなつつんへ適当すぎわろた

Giriioへ帰ってきてきて私の理想のゆきみん…

夢幻郷へそうかい？ 僕は逆に好感度上がったけどね。

—— 闇鳳蝶が夢幻郷を退会させました ——

土門君が新たに参戦…：したかと思いきや、さっそく一人脱落者が

出た。

戻ってこれるのかなあ……。

闇鳳蝶へついでにブロックしといた。

まえなつつんへひどすぎ、笑

さんペー。へ人間あたりに泣きついて招待してもらうんだろうな。

闇鳳蝶へそしたらまた秒で退会ね。

土門隆信へあいつに何の恨みが……って思ったけど、日ごろのあいつの言動を考えると致し方なし。

Giriioへそれに関してはゆきみんに賛成だわ!!!!

さんペー。へ出ました夢郷被害第一人者。

Giriioへ不名誉な称号つけんなカス

闇鳳蝶へ旦那の世話くらい女房が見てあげないとダメよ。

Giriioへねえもうそのネタでいじんのほんとやめよ???

もつと調子乗るよ???

でもそれが彼の良さだと思うよ(既読5)葛西幸彦

ああつ、思わず発言してしまった。

夢郷君の名誉を守ろうと思ってるのだけど……変な発言だと思われたらどうしよう! あーどうしよう!

土門隆信へ話戻すけど、入学当初はみんなハンネ本名だったよな。何があつたし

闇鳳蝶へ田環の理が私を導いたのよ。

さんペー。へひゅーイカスー(棒)

闇鳳蝶へいいだろう。てめえの朝食に自白剤混ぜて性癖全部暴露させてやる。

土門隆信へそれ男子にとっては殺すよりえげつないわ

……ってあれ!!??

スルーされてるく!!??

えっえっ、辛いんだけど……

まえなつつんへお前らせつかくゆつきーが来たのにスルーかw
土門隆信へあつすまん俺が悪かった殺せ

気にしなくていいよ(笑)へ(既読4)葛西幸彦

闇鳳蝶へ何気にさつきもいたわよね。忽然と名乗り出た私に「誰」
コールしてた時。

さんペー。へマジだ。全然気づかなかったわ。

まえなつつんへお前らゆつきーを見過ごすとか大罪人。

さんペー。へいや特大ブルーメランだろ。

まえなつつんへ俺はあの時テレパシーでちゃんと声かけてた。

土門隆信へここまでひどいウソ久しぶりに見た

そんなことないよ、テレパシーで話してたもんね!へ(既

読4)葛西幸彦

まえなつつんへほら言質とったー!!

まえなつつんへナカ——(・ω・)人(・ω・)——マ!!

さんペー。へマジかそれは負けを認めざるを得ない。

ちゃんと拾ってくれた前木君に感謝だー。

それにしても、SNSって意外に疲れるね…。

闇鳳蝶へお前ら尊すぎか。もつといちやつけ。

土門隆信へ俺彼女いるんで(ゞノ・▽・)ナイナイ

——さんペー。が土門隆信を退会させました——

さんペー。へいや、これは正しいだろ。

まえなつつんへGJ

闇鳳蝶へGJ

まえなつつんへてかさつきから既読1減ってたけど、Giriio落
ちた?

闇鳳蝶へ勉強じゃない？

まえなつつんへ真面目か。

闇鳳蝶へ真面目よー、あの子は。

やまむらともえ@質実剛健へ部活終わりに携帯見てみたら、ずいぶん盛り上がってらっしやいますね？

——闇鳳蝶がやまむらともえ@質実剛健を退会させました——

闇鳳蝶へハンネ長いしまらん。解散。

さんペー。へハンネの破壊力でお前を超えられる奴が想像つかない。

——まえなつつんがやまむらともえ@質実剛健を招待しました——

——やまむらともえ@質実剛健が参加しました——

やまむらともえ@質実剛健へ一言だけいいですか？

やまむらともえ@質実剛健へあんま調子乗んなよアバズレが

さんペー。へおいこれあつちのモード入ってんで、どーすんだよ

闇鳳蝶へ許してください許してください舐められるところであればどこでも舐めて差し上げますのでどうか命ばかりはお許してくださいませ

まえなつつんへ見事なプライドの捨てようだな……

やまむらともえ@質実剛健へん？ 今何でもするって言ったよね？

さんペー。へ言っただけだな。

やまむらともえ@質実剛健へよし分かった、もう俺なしじや生きていけないしてやんよお…へっへっへ…

まえなつつんへこいつもキャラ崩壊やばいな笑

さんペー。へとりあえず性欲を持て余してるんだなーってのはうっすら伝わった。

やまむらともえ@質実剛健へそんな釜利谷さんには音速の拳をお届

け！

闇鳳蝶へちよつとの失言が死につながるグルチャとか世界でここだ
けな気がする。

伊丹さんの言うことはもつとも。

だからこそ、失言を恐れちゃって発言できなくなるんだよなあ
……。

でも、みんなのチャットを見てるだけでもそこそこ楽しかったりする。
る。

リュウへ暴力・暴言・卑猥な発言。よくないよ。

やまむらともえ@質実剛健へフアツツ
!!!???

あ、リュウ君だ。

付き合いは長いけど、彼とチャットで会話するなんて初めてかもし
れないなあ。

さんペー。へハードボイルド兄貴キターーーー

リュウへみんな、こんにちは。いや、もうこんばんはかな。

やまむらともえ@質実剛健へ50年ほど心を清める旅に出ます

——やまむらともえ@質実剛健が退会しました——

まえなつつんへ恥じらいに耐えられなくなったと見える

闇鳳蝶へデレ方が分かりやすすぎて張り合いがないわね。

リュウへ俺なんかを好きになってもしょうがないよ。

さんペー。へハードボイルド兄貴、SNSだとやけに口調優しくて
草生えるんだよなあ…

リュウへそうかな？

さんペー。へマジ、一回出会い系とかで女の子釣ってほしいわ。優
しい温和なイケメンかと思って会ったときの絶望感ヤバそう。

まえなつつんへおい高校生が出会い系やんの犯罪だぞ

リュウへ俺は成人してるから大丈夫だと思うけど、ちよつと出会い系で関係を作るのはなあ……

闇鳳蝶へ私の両親は出会い系的なので知り合って私という存在を作った。

まえなつつんへ突然リアクションに困るカミングアウトすんのやめろ。

リュウへまあ、愛の形は人それぞれだからね。

さんぺー。へダメだリュウが温和な太つちよキャラにしか見えなくなってきた。

闇鳳蝶へ温和なイケメンから温和な太つちよに変貌を遂げている件。

てか、もうそろそろ勉強しない……

? (既読4) 葛西幸彦

ピタリ、と。

会話が止まった。

あーっ、やっぱり言っちゃダメだったかなあ……?

でもこれ以上会話が続きと、みんな古文の小テストヤバいことになつちやいそうなんですけど……?

ていうかみんな、“アレ”のこと覚えてるのかなあ……?

? (既読4) 葛西幸彦

明日ってベクトルのテストだよ

古文のテストとは比べ物にならないほど難しいし大型の数学のテストがあるんだけどね。

まえなつつんへなぜ先に言わぬ。

闇鳳蝶へ武者震いが止まらないわ。いや決して恐怖の震えではない。

リュウへ忘れてたよ。今夜は徹夜かなあ。

Girioへ実はちよいちよい見てたけどお前それ二時間前くらいに言っとけよアホ!!!

さんぺー。へいわゆる絶体絶命ってヤツか。

そして今夜は休憩室でカラオケしながら勉強会が開催されたのでした。

点数？ 聞かないでよそんなもん。

お察しだよね。

… to be continued…?

楽しいSNS②

「起立！ 礼！」

「さようならー」

やった。

金曜の授業が終わった。

週末だ！

金曜あるあるだが、俺の心は大いに弾んでいた。

今週の週末は何をしようかな！

「葛西君！ この前のムカデさんが50cmまで成長したの！ 今から見に来ない？」

「ごめん!!! 今日是用事あるから!!!」

小清水さんの恐ろしい誘いを断って俺は教室の外へと逃げだす。

「もう♡ ムカデさんに会うのが恥ずかしいの？ 葛西君ったら可愛いわね♡」

んなわけないだろ!!!

俺は校舎内を縦横無尽に駆け抜け、宿泊棟へと逃げ込んだ。

「ごめんね!!! さよなら!!!」

さながらジャ○アンに追いかけられるの○太のように、俺は全力で部屋に駆け込んで扉を閉める。

せつかくの金曜なのに、とんだ災難だ。

「あゝ……どうしよっかなあ……」

意図せず早く部屋に戻ってきてしまったせいで、小清水さん以外の誰とも話すことができなかった。

せつかく遊びの予定とか話そうとしたのに。

そうだ。

こんな時こそあのグループSNSの出番じゃないか。

誰かいるー？> 葛西幸彦

声をかけてみたが、一向に既読が付かない。
みんな課外活動とかで忙しいんだろうな。

この前はベクトルのテストの点数が悪くて全員再試させられたし
…。

仕方ない、次の脚本のアイデアでも練りながら暇をつぶそう。

そうして本を読んでいること二時間余り。

日も落ちて時間は夜になろうとしている。

ピロリン、と俺のスマホが鳴った。

♡R♡y♡a♡n♡♡(。▽。)/コンバンハ♡

♡R♡y♡a♡n♡♡へリヤン様がここにいるよ♡(*ゝ▽ゝ*)♡
こんばんはー。葛西幸彦

Girioへおつす。つかれたー。

♡R♡y♡a♡n♡♡へリオたんおちゆかれぐ(ゝゝ*)

お疲れ様！葛西幸彦

ダンススクールの帰りかな？

部活とかがある人は大変だなあ。

Girioへリヤンちゃん別にここではいつもの感じでいいからねw
いつもの感じ？

♡R♡y♡a♡n♡♡へええのん？

Girioへええんやで

♡R♡y♡a♡n♡♡へんじや肩の力抜いていきますんで夜露四苦ウw
ww

えー!?!?

津川さんってプライベートではこんな感じなんだ…。

え、普段の口調とかも作ってる感じ？葛西幸彦

♡R♡y♡a♡n♡♡へや、あれは素よ。ただSNSでわざわざ「な
り」って打つほどイタくないよワタシww

Girioへ文面だけ見ると誰か分かんないよね。笑
まえなつつんへなんか盛り上がってる？

Girioへおすー。

♡R♡y♡a♡n♡へよお元気がマセガキwww!!!

まえなつつんへ闇リヤンいるじゃんわろた

♡R♡y♡a♡n♡へその呼び名やめよ？

さんペー。へじやあ闇ロリ

♡R♡y♡a♡n♡へお？　ここのスクショ晒すか？　炎上させつか？

さんペー。へそういうところが闇ロリやぞ。

Girioへてめえらリヤンちゃんに何かしたら皮剥いで樹から吊るすぞ

まえなつつんへプ○デターか。

やまむらともえ@質実剛健へなんと!!!　部活終わって見てみたら!!!
グループが盛り上がってるではありませんか!!!

——♡R♡y♡a♡n♡がやまむらともえ@質実剛健を退会させました——

♡R♡y♡a♡n♡へうるせえ

さんペー。へ相変わらずの退会芸人やな。

Girioへまあお決まりだよねー。ちよつとかわいそうだけど。

——夢幻郷が参加しました——

夢幻郷へやあ

——♡R♡y♡a♡n♡が夢幻郷を退会させました——

さんペー。へ草

Girioへ誰もリヤンちゃんを止められない……

さんペー。へ最初つから退会された状態になってたのが一番面白えわ。

まえなつつんへやっぱ真の退会芸人は違うな…

——♡R♡y♡a♡n♡がやまむらともえ@質実剛健を招待しまし
た——

——やまむらともえ@質実剛健が参加しました——

Girioへリヤンちゃん優しい、女神かよ

やまむらともえ@質実剛健へなんか今一瞬退会させられた気がしまし
たが、私は気にしませんよ!!

まえなつつんへうん、気のせいだよ

土門隆信へログ溜まってんな……

丹沢駿河へおお。皆さんお疲れ様でございます。

お疲れ様〜葛西幸彦

さんぺー。へ本名ハンネが集まっててなんか壮観だな。

Girioへ人集まってきたじゃん、いいじゃん

土門隆信へあらすじを教えてください

丹沢駿河へ拙者も知りたいです。

♡R♡y♡a♡n♡へあらすじ：俺無双

Girioへ間違つてない

土門隆信へおつ、闇リヤンじゃん!

♡R♡y♡a♡n♡へお主まで…お主までその名を使うのか……

やまむらともえ@質実剛健へ皆さん!! 人の悪口は良くありませんよ
!!!

丹沢駿河へ拙者の中では津川殿の呼び名は津川殿しかありません。

♡R♡y♡a♡n♡へほら見ろお前ら丹沢きゅんが一番イケメンじゃ
ねえか!!!

さんぺー。へはい。

やまむらともえ@質実剛健へ私も!!! 私も褒めてください!!!

♡R♡y♡a♡n♡へ@やまむらともえ@質実剛健 はいはい偉い偉
い

まえなつつんへ適當過ぎわろた

やまむらともえ@質実剛健へやったー!!!やはり私はできる女ですよー!!!

土門隆信へめちやくちや喜んでんじゃん

Girioへなんつーか、単純だね

♡R♡y♡a♡n♡へちよつと話変わるんだけど

まえなつつんへうん

Girioへうん

♡R♡y♡a♡n♡へみー様と秋音たんがアカウント作ったから入れていい?

丹沢駿河へついにあの二人も参加ですか。素晴らしい!

土門隆信へいいよ、入れようぜ

お願いします!〜葛西幸彦

—♡R♡y♡a♡n♡があきね(?へ?)とmeを招待しました—

—meが参加しました—

Girioへおつ、これみーちゃん?

♡R♡y♡a♡n♡へ秋音たんは今勉強中かな?

丹沢駿河へ安藤殿、こんばんはです!

meへkonnitihah

さんぺー。へは?!!!?!?

まえなつつんへ挨拶が斬新

やまむらともえ@質実剛健へkonnichihah!!!!!!

♡R♡y♡a♡n♡へみーちゃんまだSNS慣れてないから優しくしてあげてね。

meへえすえぬえぬムズ、カシいけど、たの死い、ネ!?!?!??

さんぺー。へ「たのしい」がクソ不穩になつてんぞ

土門隆信へ日本語覚えたての外国人みたいだな…

Girioへ久しぶりに腹抱えて笑ってる

やまむらともえ@質実剛健へなんの!! 慣れればいいんですよ!!!

meへアギリあほ!?!?

Girioへ<>突然の罵倒へ

さんペー。へ草

丹沢駿河へ人の頑張りを笑ってはいけませんよ亞桐殿。

♡R♡y♡a♡n♡♡へSNSのことはリヤン様が教えてあげるから心配しないでねハニー♡

meへべつni、おこつてナイ、けどネ!!!??

Girioへうえー。反省。

土門隆信へいい感じにカオスだな……

Girioへてか既読減った気がするけど誰か落ちた?

土門隆信へまえなつじゃね? 勉強するって言ってたし。

Girioへなるほ

丹沢駿河へ素晴らしい向上心です。拙者も負けていられません。

さんペー。へマジかよ。今日金曜だぞ?

♡R♡y♡a♡n♡♡へやーん今週末コミケじゃーん忙しい

丹沢駿河へなんと、もうそんな時期でしたか。拙者も作品を磨いておかねば。

Girioへアンタらは忙しい時期なのね、おつかれ

meへ同人誌出すので買ってください

土門隆信へ突然どつつつつちやくそ流暢やんけワレ

♡R♡y♡a♡n♡♡へみー様wwwwwwwwww待つてwwwwwwww
w腹痛いwwwwwwww

Girioへマジかよ

meへwataシ、えすえぬえぬ、うまくないヨ!?!???

さんペー。へ俺達はひよつとしたらとんでもないやつを召喚してしまつたんじゃないか?

丹沢駿河へですが拙者は安藤殿のそのようなところも好きですぞ。

meへけっコンしyo

!!!???

土門隆信へひゅー！

Girioへみーちゃん大胆く！！

丹沢駿河へ嬉しいお言葉ですが、今はお互いのために友達のままでもいいでしょう。

♡R♡y♡a♡n♡♡この二人尊すぎない?? ヤバいマジ

さんぺー。へ死んどけリア充

Girioへなんでコイツここだとこんなイケメンなの??

やまむらともえ@質実剛健へちはつと見てない間にカップル成立したんですか!!!!!!
今夜は赤飯ですね!!!!!!

♡R♡y♡a♡n♡へ日本語読めないのかコイツ

闇鳳蝶へあら、随分盛り上がってるわね。

あ、こんばんはくく葛西幸彦

♡R♡y♡a♡n♡へ誰?

さんぺー。へうわあ…

土門隆信へうわあ…

闇鳳蝶へ何よ、その反応?

闇鳳蝶へ@♡R♡y♡a♡n♡ あなたが愛してやまないゆきみお姉

さまよ。

♡R♡y♡a♡n♡へああ…

闇鳳蝶へ露骨にガツカリすな。

Girioへんじやウチ勉強するんで落ちます

お疲れ様くく葛西幸彦

闇鳳蝶へ@Girio おい逃げんな

さんぺー。へまあ落ち着けよお姉さま(笑)

土門隆信へちなみにそのハンネなんて読むの?

闇鳳蝶へヴァルキリアフライ。

さんぺー。へ前と違うじゃねえか。

♡R♡y♡a♡n♡へゆきみたん恥ずかしくないの?

闇鳳蝶へ恥ずかしくないよりヤンたん♡

♡R♡y♡a♡n♡へきも。

闇鳳蝶へはうううん♡♡♡♡♡ リヤんたんの罵倒うううう♡♡

丹沢駿河へハンドルネームは一つの名前に己の全てを表現せしめるものですから。おのずと個性も出るものです。

土門隆信へこいつ前にも増してヤバいな

やまむらともえ@質実剛健へ己のゆく道を突き進むのはいいことです

!!!!

闇鳳蝶へはら、この子もこう言ってるじゃない。私を見習いなさい。

——あきね(???)が参加しました——

闇鳳蝶へ

♡R♡y♡a♡n♡へあ、あきねたん来たー！

こんばんは！葛西幸彦

丹沢駿河へこんばんは！このグループでは初めましてですな。

闇鳳蝶へ!\$!?!%&☒()☒&%\$#、????

あきね(???)へお前らここで騒ぎすぎだ。通知が百件以上たまつて

いたぞ。

土門隆信へ百件以上も溜まってたのかw

闇鳳蝶へあつえつあの、あの、本物ですか????

あきね(???)へ@闇鳳蝶 私のニセモノなどいるわけないだろう

が。

闇鳳蝶へイヤツヒイイイイ返信されたあああつああん!!! 秋

音に返信されたああ!!! もう無理もう死ぬ

♡R♡y♡a♡n♡へ秋音たん、この子無視でいいよ。

あきね(???)へ言われなくともこんな奴、相手になどしない。

丹沢駿河へし、辛辣ですなあ…。

——夢幻郷が参加しました——

夢幻郷へ夢郷は滅びぬ！ 何度でも甦るさ！

——あきね（?へ?）が夢幻郷を退会させました——

あきね（?へ?）へ何度甦えろうが何度でも殺すだけだ。

さんぺー。へ怖ええ……

♡R♡y♡a♡n♡へあきねたんカツコいい♡

土門隆信へ流石にかわいそうになってきた

——♡R♡y♡a♡n♡が夢幻郷を招待しました——

——夢幻郷が参加しました——

♡R♡y♡a♡n♡へほらよ、これでいいんだろ?

夢幻郷へありがとうございます。

あきね（?へ?）へだが一度でも変態発言をしてみろ、地獄に叩き落ちてやるからな。

夢幻郷へ肝に銘じておきます。

土門隆信へなんか人減った気がするな

♡R♡y♡a♡n♡へみーちゃんと丹沢きゅんも落ちたっぽいね♡

JONES. Iへ代わりに私が来ました。

入間君もこんばんは♡葛西幸彦

♡R♡y♡a♡n♡へうわあビックリした、いつからいたん?

JONES. Iへ御堂様とほぼ同時に見ていたのですが、入るタイミングを探っております。

夢幻郷へふっふっふ、楽しくなってきたじゃないか。

JONES. Iへ夢郷君が退会させられていない!? 私涙が出そうです…

あきね（?へ?）へ今までどんだけ退会させられてきたんだ、この男は。さんぺー。へそりやもう、息をするように。

やまむらともえ@賢実剛健へ退会させられた回数でいえば私なんかの比じゃないですよ!!! 尊敬しますね!!!

あきね（?へ?）へそれでも下ネタを言い続ける貴様のメンタルの強さ

はどこから来ているのだ？

夢幻郷へ僕の心は常にあなたの美貌に支えられています。

♡R♡y♡a♡n♡へわろた

あきね（?へ?）へ適当なことを抜かすなボケ。

夢幻郷へ今日の御堂君はいつもとちよつと髪形を変えていただろう？

とても似合っていたよ。

あきね（?へ?）へ…!

♡R♡y♡a♡n♡へえ、そうなの？ 全然気付かなかった

土門隆信へほんまに変えてたの？

あきね（?へ?）へ…ちよつとだけ変えてた…

さんぺー。へ夢郷やるやん。

夢幻郷へむしろ君たちが気付かなかったことに驚いているよ。

♡R♡y♡a♡n♡へ秋音たん意外とオシャレ好きで可愛い♡ 明日

も同じ髪型で来てねー!

あきね（?へ?）へうるさいばか

やまむらともえ@質実剛健へ御堂さんの可愛さは他クラスでも噂に

なっていましたよ!!! 今度オシヤレの秘訣を教えてください!!!

あきね（?へ?）へばかあほまぬけ

土門隆信へ急激に語彙力低下するな

闇鳳蝶へ説明しよう! 秋音は急に褒められると照れと恥ずかしさで

オーバーヒートして語彙力が999低下し、尊みオブザレポリュー

ション状態になってしまうのである!

さんぺー。へあれ生きてたのか、なんとかフライさん

闇鳳蝶へ勝手に殺すな!

JONES・Iへ何からツツコめばいいのでしょうか…?…?

♡R♡y♡a♡n♡へ知らね

リユウへ盛り上がってるね。俺も参加していいかな?

さんぺー。へハードボイルド兄貴キターーーーーー

どうもく葛西幸彦

JONES・Iへこんばんは!

リュウへ葛西がんばれ。

♡R♡y♡a♡n♡へおい私のゆつきーきゅんを雑に扱うな
まえなつつんへ葛西つて普段しゃべらないけど実はめちやくちや面白
いからな

そんなことないよ…へ葛西幸彦

さんペー。へ葛西、こういう雑フリは無視でいいんだぞ。

♡R♡y♡a♡n♡へ困つてオロオロしてるゆつきーきゅんを想像し
て幸せになった。

話題つてわけじゃないけど、明日か明後日映画見に行かない?へ葛西
幸彦

土門隆信へお?

さんペー。へ普通にあり。

まえなつつんへじゃあさ、丹沢と津川が出るつていうコミケ?とかい
うのを見てその帰りに映画とか?

いいね、それ!へ葛西幸彦

♡R♡y♡a♡n♡へえへへへ、来てくれるの??マジ感謝……

やまむらともえ@質実剛健へえ!!!じゃあ私たちも行きますようよ

リュウ君!!!

リュウへそうだね、行つてみるか。

まえなつつんへお前ら付き合つてんの?

リュウへべつに全然そんな関係じゃないよ。

やまむらともえ@質実剛健へ即答ですか!!!!!!

リュウ君!!!

でも仲良しさんだと思ふよへ葛西幸彦

Girioへはいはいお前ら、会話はその辺にして!ご飯の時間だ
よ!

まえなつつんへあれ、もうそんな時間か

さんペー。へういーす。

♡R♡y♡a♡n♡へギリオたん準備ありがとつ。今行くね!
今行きまゝへ葛西幸彦

やまむらともえ@質実剛健へやったく!!! ご飯の時間ですね!!!

こうして今夜のSNSのおしゃべりはいったん幕を閉じることに
なった。

なんだかんだ遊びの予定も入れられたし、良かったんじゃないかな。

この後、夕食の時間に、夢郷君がどつかれたり御堂さんをはやし立てたり、安藤さんに文字の打ち方を教えたりといろんな出来事があったんだけど、それはまた別のお話ということで。



(午前3:17)

こしみずやよいは冬虫夏草にハマっています! へ@葛西幸彦 ねえ
こしみずやよいは冬虫夏草にハマっています! へ@葛西幸彦 ムカデ
さんの子供が生まれたんだけど、名前は何かいいかな?

こしみずやよいは冬虫夏草にハマっています! へ@葛西幸彦 ねえ
こしみずやよいは冬虫夏草にハマっています! へ@葛西幸彦 ねえ

こしみずやよいは冬虫夏草にハマっています! へ@葛西幸彦 葛西
くーん

こしみずやよいは冬虫夏草にハマっています! へ@葛西幸彦
こしみずやよいは冬虫夏草にハマっています! へ@葛西幸彦
こしみずやよいは冬虫夏草にハマっています! へ@葛西幸彦
こしみずやよいは冬虫夏草にハマっています! へ@葛西幸彦
こしみずやよいは冬虫夏草にハマっています! へ@葛西幸彦
こしみずやよいは冬虫夏草にハマっています! へ@葛西幸彦
こしみずやよいは冬虫夏草にハマっています! へ@葛西幸彦
こしみずやよいは冬虫夏草にハマっています! へ@葛西幸彦
こしみずやよいは冬虫夏草にハマっています! へ@葛西幸彦
こしみずやよいは冬虫夏草にハマっています! へ@葛西幸彦 返信し

てよ
さんぺー。へ寝ろ。

∴
t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d.
∴
?

希望の贈り人

もうすぐクリスマスだ。

街に遊びに出かけると、色とりどりのイルミネーションが私たちを出迎えてくれる。

たまに降る雪は、その光景にさらに幻想的な光をもたらす。

そんな街中を、仲睦まじい男女が歩いている。

二人とも、輝かしい笑顔だ。

私は一人で歩く。

特に感慨もない。

私は一人が好きだ。

一人でいることに負い目など感じない。

そんなことに負い目を感じるのは、群れることがステータスだと思っている愚か者の偏見。

私はそう思っている。

書店に寄った。

ほしい参考書がある。

今回の実験に関する詳細がまとめられている書だ。

参考書を買うとき、書店のバイターが私の顔をじつと見ていた。

私が釣銭に全意識を集中させているとでも思っていたのだろうか。

下心が見え見えだ。

気持ちが悪い。

仲良くなりたいなら声でもかければいいだろうに。

そんな勇気もなく、ジロジロとこちらを見つめるだけの男など、軟

弱もいいところだ。

私は別に彼と仲良くなろうなどという意欲はないので自分から声などかけない。

そして私は学園に戻る。

もう日はすっかり落ちていた。

学園にも御大層なイルミネーションがかけられていた。

こんなものを用意する予算があるなら予備学科などという制度は排除してしまえばいいのだ。

教育の質は本校とは比べるべくもなく低いのに、ネームバリューのためだけに高額な授業料を搾取するあの学科は大人達のエゴが生んだ箱庭に過ぎない。

本校に所属する私がこんなことを言っても、予備学科の生徒には嫌味にしか聞こえないのだろうけど。

「伊丹、遅かったなあ!!」

学園の門をくぐるとすぐに声をかけられた。

前木常夏——私たちのクラスの“超高校級の幸運”。

顔は中性的だけど中身は良くも悪くも男子高校生。

日常の場面で特に幸運らしいところはなし。

またこんな時間まで外で遊んでいたのね。

「おう伊丹：今日って外出許可出てたっけ？」

「担任に申請して許可をもらってあるわ」

こっちは“超高校級の建築士”——土門隆信。

彼は前木君ととても仲がいい。

明朗快活で運動好きなところも一緒。

だけど、彼は“男子高校生”と呼ぶにはふさわしくない。

彼は、言うなれば“大人”——それも、社会の苦境を乗り越えてきた“頑強な大人”。

そんな強かき、温かき、包容力を感じる。

この年でそこまでの人格をおわせる人間はそうそういない。

そう——この“希望ヶ峰学園”を除いては。

「いいなー。俺も外出てえよー」

前木君がサッカーボールを蹴りながらつぶやく。

背後には校内へと引き上げていく他クラスの生徒たちの姿。

なるほど、放課後に他クラスの有志達を募ってサッカー……というわけね。

こんな寒さの中大したものだわ。

「あのかな、まえなつ。遊びの目的で街なんてそうそう出られるもの

じゃねえんだぞ」

土門君はいたって正論で前木君を論じた。

「参考書買いに行くって言って少しだけ遊んでも……」

「いや、バレル!! ちゃんと成績上げて認めてもらおう方がいいに決まってる!!」

「ロマンがねえよそんなの!」

普段は仲のいい二人だが、こういうところでよくぶつかる。

端的に言えば、土門君は規則やルールを基本的に遵守する。

前木君はスリルや破天荒を求める。

真面目と不真面目の葛藤。

正義は土門君にあっても、年頃の男子として自然なのは前木君だ。

こうなると二人のやり取りは終わらない。

だが、それが不思議と見ていて楽しい。

これだからこの学園は好きだ。

「お前この前数学のテスト何点だった、ああ!？」

「は、自分がちよつとくらい調子よかったからってなんだよ!!」

やはり終わりそうにないわね。

放っておいてもいつか勝手に仲直りするでしょうけど、できれば今この場で亀裂を防いだ方がいいのは確かね。

何か効率的な言葉は……。

「メリークリスマス」

三人の時間が止まった。

頭の中の辞書から、どうしてその言葉が出てきたのか皆目見当もつかなかった。

しかし、少なくとも二人の言い争いを止めるという意味ではこの言葉は有効に働いた。

二人は驚いていた。

二人の頭の中には、今日がクリスマススイブであるという認識すら及んでいなかったのかもしれない。

二人は今までどんなクリスマススを過ごしてきたのだろう。

「……………メリー……………クリスマス……………」

それだけ言って、土門君はバツが悪そうに校内に戻っていった。私も後に続いた。

「ごっ、ごめん!!ごめんごめん!!」

少し経って、俯いていた前木君は突然土門君を追いかけ始めた。

「ごめん、ごめんって!! 怒らないで!! 怒らないでよお!!」

そしてその勢いのままに土門君の背中に飛びついた。

彼は男子高校生らしい一面と、このように寂しがり屋で子供っぽい一面を兼ね備えた不思議な“幸運”だ。

私はクスリと笑った。

校内に入ると、ロビーに大きなクリスマスツリーが飾ってあった。

イルミネーションにプレゼントを模した飾りに頂部の大きな星。

これ以上ないくらい典型的なクリスマスツリー。

「あーっ、ゆきみん!! おかえりなりー!」

クリスマスツリーの陰から飛び出てきたのは、サンタガールの衣装に身を包んだ“超高校級のコスプレイヤー”、津川梁。

私の最も愛しいクラスメート。

「見て見てー! 他クラスの人も一緒におつきいクリスマスツリー作ったなりよー!」

嬉しさにびよんびよん跳ねながらリヤンは私にそう報告した。

「よく頑張ったわね」

私はお返しにリヤンの小さな頭を何度も撫でた。

ああ愛しい。孫にしたい。

「がはははは!! 樹液を塗りたくってこの木を虫さんの楽園にしてやるうううう!!」

狂気的な声を上げて筆のようなもので樹にドロドロの何かを塗り付けているこのマッドサイエンティストは、“超高校級の昆虫学者”、小清水彌生。

クリスマスツリーをカブトムシの餌場にでもする気かしら。

季節感もわけが分からないし、寒さで本当に脳をやられているみたいね。

「ああああん!! リャン様のツリーを汚さないでー!!」
「がはははは!!! 集まれ大自然の民達よおおお!!!」
本来なら止めるべきなのだろうけど、リャンの泣き顔が可愛いので少しだけ傍観することにした。

マッドサイエンティストにチョップの制裁を下したところで、私は食堂に赴いた。

…が、今はまだ夕食には少し早い。

「あ、ゆきみんだ。お疲れー。外は楽しかった？」

先客として食堂にいたこの子は、“超高校級のダンサー”、亞桐莉緒。

うちのクラスの中では数少ない常識人の一人。

頭と尻が軽い以外は大きく特徴もない普通の女の子ね。

「いや紹介文でデイスんなや!!! 尻軽ちゃうわ!!! まだまだこの身は純潔じゃい!!! って何言わせとんねん!!!」

そうそう、彼女を語るうえで特筆したいのがこのツツコミ力。

何しろ地の分にまでツツコミその執念には驚かされるばかりよ。

一つのセリフで四回ツツコミテンポの良さもさることながら、的確に言葉の節をついてくる攻撃力。

この子、本当は頭いいんじゃないかしら。

「いやバカが前提みたいに言うなや!!! つかツツコミの解説とかいらんわ!!!」

まあ、そんなこんなでダンスの基礎を教わったり一緒に遊んだり、クラスメートの中では十五番目くらいに仲良くさせてもらっているわ。

「ビリじゃねーか!!! ダントツのビリじゃねーか!!! 割とマジで傷つくやつだぞこれ!!!」

脇で騒ぐ莉緒を尻目に私は、テーブルの隅で黙々と裁縫作業を進める少女に目を向けた。

“超高校級のエンジニア”——御堂秋音。

人づきあいが必要な孤高な天才少女。

「黙れ、貴様ごとくに褒められても微塵も愉悦など感じない」

「もう、つれないな。で、何欲しいの？」

「バカが！ 言えるはずなからう！ これは私の胸の中に秘めた秘密事項なのだ！」

私は口をぽっかりと開けたまま二人の会話を聞いていた。

まさに茫然自失。

感情という感情が体からすっぽり抜け落ち、魂のない抜け殻となつてただ座りつくしていた。

それだけの衝撃だったのだ。

「な、んで……」

「あ？」

「いるはずのないものを……」

「“いるはずがない”？ フン、詭弁だな。“いない”と誰が証明した？」

秋音の言葉はさらに驚くべきものだった。

「確かに、サンタクロースが“いる”ことを証明する手立ては現時点ではない。だが、それと同様に“いない”ということも証明することはできないのだ。全世界のあらゆる場所を一齐にGPSか何かで調べることができるか？ いや、それができたとしても、雪山の洞窟にでもいれば見えはしない。いることの証明ができずとも、いないことの証明ができない限り、いる可能性といない可能性は五分。百歩譲つてソリやトナカイが空を飛ぶという事象が物理的にあり得ないものであつても、“子供にプレゼントを配る老人”自体は存在したところで何もおかしくはあるまい？ だから私はサンタクロースが私にプレゼントをくれる可能性を信じる。生まれてこの方クリスマスプレゼントなどもらったことのない私に、一人の老人が善意を及ぼしてくれる可能性を信じている。何か問題でもあるか？」

「……………」

そんなものは言葉の綾だ。

言いようでもなくともなるじやないか。

そう言い返すのは簡単だった。

だが、この時の私には、ある一つの感情が新しく浮かび上がり始めていた。

“秋音の希望を奪いたくない”。

この不器用で歪んでいてとてつもなく哀れな少女が、ようやくと家族以外の“希望”を抱いた。

それが衝撃であるとともに、とてもとても嬉しかったのだ。

「か、感動したよ秋音ちゃん!!」

「触るな、気持ち悪い」

私はさつきと同じように、莉緒と秋音のやり取りをただ見つめながら茫然と座っていた。

夕食後、秋音の個室の前には不格好な大きな靴下がつりさげられた。

個室が完全施錠されている以上、枕元に置いたのではサンタクロースがプレゼントを置きに来れないという配慮からであった(そもそも部外者が真夜中に学園内に入ること自体が不可能であるという指摘は野暮であるようなので黙認することとした)。

高校生になってなおサンタの到来を信じる者は秋音をおいてほかになく、部屋の前に靴下を下げたのは秋音ただ一人だった。

だが、誰も秋音を笑いはしなかった。

翌朝、クリスマス当日。

「おい!!! おい!!!」

部屋のドアをたたく音と大声で目が覚めた。

寝起きのままドアを開けると、顔を真っ赤にした秋音が大きな靴下を抱えて立っていた。

「来たぞ!!! サンタクロースが来たんだ!!! 見ろ!!! こんなにいっぱい!!!」

子供のようにはしゃぎながら、秋音は満載に詰まった靴下を何度も撫でていた。

「ほら見ろ!!! やっぱりサンタクロースはいたじゃないか!!! いたんだよ!!! これが証明だ!!! はははっ、ははははははっ!!!」

秋音は大口を開けて笑った。

考えてみると、初めてかもしれない。

人を見下すあざけりの笑ではなく、心の底から喜んで笑う秋音の姿を見るのは。

「はははっ!! ああつ、見ろ!! こんなに暖かいマフラーだ!!」

靴下の中から出てきた暖色系のマフラーを高くかざしながら、迷うことなくそれを顔に押し付けた。

「ああ、柔らかい! どんな素材なんだ、これは!! こんなものがずっと欲しかったんだ!!」

だが、靴下の中にマフラーが入っているのは当たり前だ。

だって、それは昨晚私が編んだ手編みのマフラー。

それを部屋の前の靴下に投げ込んだだけなのだから。

だが、秋音はそんなことはみじんも疑いはしない。

いや、疑わなくていい。

ほんの僅かでも、この子の希望の邪魔をしたくないのだから。

「ん? ははっ、お前、サンタクロースが実在したのがそんなに悔しかったのか? 泣いても無駄だぞ、残念だったな!! はっはっは!!」

「……え?」

その言葉を聞いて私は、自分の頬に触れた。

一瞬、身をすくめた。

びしょびしょに濡れていたのだ。

考えてみれば、それが当然の反応だったのかもしれない。

それだけ秋音は私にとって大切な存在なのだから。

「…おおー! これは! …マスク?」

「え?」

今度は素で驚きの声が出た。

秋音が持っていたのは、何かのキャラクターを模したマスク。

私はこんなものを靴下に入れた記憶はない。

「翻訳書に、漫画の原稿に、工具セット…? 同人誌に哲学書や昆虫図

鑑まであるぞ」

なんとということだ!!!

みんな私と同じ考えに至ったのだ!!

そしてどいつもこいつも、私よりはるかに思慮が浅すぎる!!

こんなにあからさまではバレてしまうじゃないか!!

「ふっ、ははははははっ!!! なんて気まぐれなサンタクロースなのだ!!

あまり使いそうにないものまでプレゼントしてしまうとはな!!!

はっはははははは!!!」

だが、バレるのではないかという心配は杞憂に終わった。

ほっと一息。

「よし!! 今日気分がいいから特別に私が朝食を振舞ってやる!!

手伝え伊丹ゆきみ!! 私の指導は厳しいぞ!!」

秋音は食堂に向かって駆け出した。

「望むところよー!」

私も、いつになく軽い足取りで走り出していた。

結局、サンタクロースは実在したということだ。

この日、私たちは確かにプレゼントを受け取った。

そう、“希望”という天からのプレゼントを。

—— おはよー!!

—— おはよーなりー!!

—— あっ、今日のご飯おいしい!! 誰が作ったの?

—— な、なんと御堂様が…。うつつ、わたくし、嬉しくさの

あまり涙が…。

—— まえなつー!! 外出許可もらいにいくぞー!!

—— 昨日あんなに喧嘩してたのに、ウソみたいね。

—— せっかくのクリスマスだし、みんなで出かけたいなりね!

—— リャン様がそう言うなら吾輩も出陣するぞよ!

—— 御堂さん、そのマフラー似合ってますよ!…いいなあ…

—— つち、サンタか何だか知らねーが、俺にもなんかよこせっ

っの。

—— あ！ 雪だ！

—— 拙者の出番にごさるな！ 雪像氷像もお茶の子さいさい
!!

—— 葛西君、私最近冬虫夏草にハマってるの！

—— それここでカミングアウトする必要ある？

—— 秋音、楽しい？

—— た…楽しい…

—— みんなーっ!! そろそろ写真撮るなりよー!!

—— せーのっ!!

—— “メリークリスマス”
!!!!

絶望のコロシアイが始まる二年ほど前の話である。

ゴロゴロとけたたましく轟くそれは、まさに天変地異がごとき雷鳴。

獲物はまだかといもなく雷神の怒りが、俺を容赦なく責め立てているのだ。

…まあ、そう焦るな。

そう言い聞かせ、俺は意を決し、暖簾をくぐる。

「いらっしやい！ あんちゃんいつもありがとうな！」

店の親父は相変わらず壮健だ。

「…今日もごっつ盛りで頼みます」

「あいよっ！ じゃあまず食券買ってな！」

食券式のこの店は、お世辞にも広いとは言えない。

しかし、多少なりともグルメを志す者なら分かるだろう。

そう、“狭さ”というステータスから生まれる魅力。

まずカウンターにズラリと並び、一心不乱にラーメンをかきこむ男達。

勤務の合間に勝負を挑むサラリーマン、あるいは俺のように休日を優雅に過ごす大学生、…流石に高校生は俺しかおらぬか。

男たちが放つ異様な熱気と店内の妙に軽いbgm、目前でラーメン作りに勤しむ従業員たち。

ズズ、と全力で麺をすする音、器とレンゲがぶつかって起きる固い音。

この狭い空間にこれだけの“雰囲気”が完成しているのだ。

この空気は無機質な大手チェーン店ではどうやっても再現できない。

食券を買った俺はコートを脱ぎ、後ろの洋服かけにかけてどっかりと席に着く。

「麺固め油マシ野菜ニンニクマシマシで」

この組み合わせが俺の中での鉄板。

恐らく、ここにいる客は殆どが常連。

皆、自分の中に「これは鉄板」というトッピングのメニューを作り出しているだろう。

無論、時折やわ麺やニンニク無しなどに冒険したこともある。

しかし、やはり最後にはこの鉄板に帰ってきてしまう。

そういう意味では、ここの鉄板は“おふくろの味”にも近いのかもしれない。

「あいよっー」

親父の威勢のいい返事とともに、従業員たちは慌ただしくラーメン作りを始める。

空腹と戦いながらラーメンの完成を待つこの悶々とした時間、俺は案外嫌いではない。

親父や従業員たちの“戦”をじっと眺めるのもよし、あえてスマホを眺め、いつラーメンができあがるか分からないスリルと興奮に身を投じるもよし。

人生において限りないほど死闘の数々に身を投げ出してきた俺にも、これほど長く感じる運命の時間はそうそうない。

胃袋の雷鳴は収まるところを知らず、大嵐となって俺に苦痛を強いた。

雷神が怒り狂っている。

まずい、このままでは……。

そう思っていた矢先、運命の瞬間が訪れた。

「へい、お待たせー」

どん、と俺の目の前にそれは置かれた。

座っている俺の頭よりも高く積み重ねられた野菜の城。

その城壁に添えられた、二枚の巨大なチャーシュー。

その下には、小さなドームのようにこんもりと盛られた生ニンニクが、俺を忘れるなどと言わんばかりに存在を主張している。

城の根元からわずかに見える堀のようなスープには、無駄な脂は一切浮いていない。

そのくせ、城の頂上部には豚の背脂がたっぷりと乗せられ、城を攻め落とさんとする俺を悠然と見下ろしていた。

その威容はまさに、難攻不落の大城塞。

しかし、その城を前にしても、雷神は不敵に笑っていた。

パン、と俺は両手を合わせる。

このラーメンに使われた食材に。

このラーメンを築き上げてくれた親父と従業員に。

そして、俺をこのラーメンと出会わせてくれた天に。

圧倒的、感謝。

「いただきます」

攻城、開始。

トッピングと同様、食べ方にも千差万別の道があるが、ここは俺流の食べ方を紹介しておこう。

まず、山盛りに盛られたニンニクをレンゲですくい、箸を使ってパラパラと全体に振りかける。

そして、白い宝玉を散りばめられた城壁を、先端部からガブリ。

遠慮も容赦も気品もいらぬ、ここは漢の戦場なのだから。

口中に背脂の旨味が広がる。

美味しいラーメンの秘訣の一つに、“脂のうまみ”がある。

脂特有のこつてり濃厚な味わいはもちろん必要だが、その一方で甘みやさっぱりとした“しつこくない”味まで表現してくれる店は、実のところあまり多くない。

その点、この店は完璧だ。

普通のラードとは全く違う甘みと豊潤さがある。

ここの脂は無限に食える。

そして、野菜の加熱具合も十分。

もやしやキャベツの“シャキシャキ”という食感を残しつつ、中までしっかりと火が通っているので、チャーシューや脂との味の兼ね合いも抜群だ。

あれだけ山のように積み重ねられた城壁を、それでも飽きずに喰らいつくせるのは、こういった店側の細かい配慮から生まれる味わいづくりに大きな役を成しているのである。

城壁を七割ほど削ったところで、一旦真水を一気に飲み干す。

真水は濃厚な豚骨スープとチャーシューの塩分に侵された口内を一気に浄化し、リセットしてくれる。

こうして、また食べ始めの頃のような新鮮な気持ちで第二戦に臨むことができるのである。

しかし、あくまでも俺個人の趣味嗜好だが、一つ思うことがある。ニンニクなくしてラーメンに満足できるのか……と。

俺はニンニクが大好きだ。

だからいろんなところでニンニクを食う。

もちろんどのニンニクも大好きだ。

だが、ラーメンにトッピングされた生ニンニク以上に美味しいニンニクは存在しないように感じられてならないのである。

そもそも、ニンニクの旨味成分“アリシン”は、加熱処理を経ると一気に減少してしまう、らしい。

ここらへんは伊丹から聞いた話なので定かではないが。

やはりニンニクは生で食うのが一番うまいと俺は思うのだ。

口臭？ そんなもの、後でブレ〇ケアでも飲んでおけばよい。

口臭だ塩分だカロリーだと、小さいことを気にして美味しいものを全力で食えない人生など、何の喜びがあろうものか。

生ニンニクは一日一片以上食べると腹を壊すらしいが、それも俺にはもはや関係ない。

何のために幼少期から対毒物訓練を受けてきたと思っっているのだ。

……と、そんなことを考えているうちに、時は来た。

あれだけの威容を誇っていた野菜の城壁はすっかり消え去り、お待ちかねの麺が白日の下に姿を現した。

そう、ついに本丸である。

ここまで食っても俺の雷神は一向に怒りの矛を収める様子はない。もはや、この荒ぶる巨神を黙らせるには、麺をぶち込むほかはない。

そうだ。

俺は迷わずにスープの絡んだ麺を口にすすり込んだ。

固めを指定したただけあって、完成してから一定の時間がたったにもかかわらず、麺は十分な歯ごたえを残している。

少しもちっとした特有の弾力には、毎回心弾む気分させられる。

この店は、決して「上の具材で満足しただろ？」などと投げやりな

ことはしない。

器の底で待ち構える麺にまで全力を尽くす。

どうやって作っているのか知りたくなるほど、この麺はよくスープに絡む。

ニンニクのかけらの浮くスープに、麺を丸ごとひとつかじり。

これだけで途方もない充足感が得られてしまう。

だが俺はこれだけで終わらせない。

このために残しておいたチャーシュー一枚をここで喰らう。

麺、スープ、チャーシュー。

三者三様の味覚が雷神にとどめを刺す。

食事開始から十五分。

器から固形物が消える。

大半のものはここで完食と見なすだろう。

既に城は落ちたも同然。

しかし、俺は手ぬかりなく残党狩り。

器を持ち上げ、最後の一滴まで残すことなく腹の底へと飲み込んでいく。

器の上に存在していたすべてを、雷神のもとに誘うのが俺の使命だからだ。

かくして決着。

『豚地獄』、陥落。

この戦いに携わったすべてに、今一度感謝。

「ごちそうさまでした」

脇に置いてあるティッシュでテーブルについた汁のハネ、水のコップから垂れ落ちた結露などをしっかりと拭く。

客のマナーを達成し終えたと認識した俺は、後ろにかけてあったコートを着なおして店の出口を向く。

「今回も完飲か！ いつもありがとうなあんちゃん！」

親父の言葉に俺は軽く会釈し、もう一度「ごちそうさまでした」と言って店を出た。

あのラーメンを腹に入れた後に日差しを浴びると、入れる前とは

全く違う世界のように感じられる。

さて、この後の予定はフリー。

学園に戻るもよし、このまま下町を散策するもよし、どうするべきか。

「あつ、リュウだ！」

俺が上機嫌に街を歩き去ろうとした矢先、その声は響いた。

「…む、前木に土門。…葛西もか」

まさかこんなところで同級生に会うとは。

「やつと見つけた!! お前、ズルいぞー!! 俺らに内緒で行きつけの店通うなんてー!!」

前木が俺に飛びついて激しく肩を揺さぶりながら言った。

やれやれ、同性とはいえずぐじやれつくこの癖はどうにかならないものか。

「隠していたつもりはないが…。俺を探していたのか」

「いやあ、リュウがラーメン屋に通っているってのは山村から聞いたんだが、リュウが通うつてことはきつととんでもなく美味いんじゃないかって話になってな」

土門が事態の詳細を述べた。

ここの大まかな場所までは山村から聞いたが、肝心の店名が分からず困っていたらしい。

というより、何故山村がそんなことまで把握しているのだ。怖いぞ。

「俺、こんなところ絶対食べきれないよお…」

「安心しろ葛西。この店はミニラーメン、なんならお子様ランチもあるぞ」

自信なさげな葛西に俺は励ましの言葉をかけた。

「こんな店に来るお子様いるのかっ!?!」

土門の至極真つ当なツツコミに感心しつつ、俺は笑った。

「…だが、一度で気付けるかな? この店の真の“うまみ”に」

こうして、(若干自信なさげなのが一人いるもの)意気揚々と店に入っっていった三人の背中を眺めるところから、俺の休日は始まった。

今回は、スイーツ系のレビューでもしてみようかな。



「いや完全に別作品でしょこれ!!!!!!」
ダンロン要素どこにもないよー
!?!?
「
亞桐の叫びがどこからか聞こえてきた。」

リユウのグルメ奇譚・其之弐　　く牛丼の極意く

どうもこんにちは。

みんなのグルメアイドル・リユウです。

前回大好評だったということ、見事グルメ奇譚の続編製作が決定いたしましたことをここに報告いたします。

……………

「映画かよ」

と、短いツツコミを飛ばすのは釜利谷三瓶。

そう、今日俺はこの男と休日を通すことに決めたのである。

「何が悲しくてむさくるしいオッサンみたいな奴と一緒に飯なんか食いに行かなきゃならんのか……」

「ふ、相変わらずの毒舌だな」

しかしこうは言っても、内心では誰かに飯を誘われるというのは嬉しいものなのだ。

そうだ、きつとそうに決まってる。

そうじゃなくても、そう思うことにする。

「お前と飯を食いに行ったことがなかったからな。たまにはよかるう」

「まあ、俺は普段の研究やら外来やらで忙しいからな……。せめて女子の一人でも誘ってくれりやよかったんだが」

釜利谷は意外と女にがめつい。

その姿勢を隠そうとしないから大体の女子から距離を置かれてしまふのだが、どうもそのあたりはこの男は鈍感なようだ。

「女子にも何人か声はかけたんだが……誰も来てくれなかった」

俺の脳裏に同級生の容赦ない言葉が浮かび上がる。

『アンタがいつも食ってるナントカマシマシ(?)みたいなのが食えるかつーの!! ダンサーは体型が命なんだぞ!!』

『リユウ君は乙女心が分かっていません!! 山村巴のこの美しいくびれが損なわれてしまってもいいのですか!!?』

『むわはははっ!! 吾輩の胃袋では上の野菜も食いきれぬぞよ!!』

「お前、明らかに声かけるメンツ間違ってるだろ」
「そうか？」

どうやら、同級生の中では俺がヤサイニンニクアブラマシマシしか食わない人間だと思われてしまっているらしく、飯に誘ってもそんな反応ばかりされてしまうのだ。

というわけで俺に課せられたイメージを払拭すべく、今回はラーメンではないものを食いに行こうと思う。

そんな俺達が電車に揺られ、駅から歩くこと数分。
やってきたのはここ。

「……おお、牛丼屋か」

そう、ここは知る人ぞ知る老舗でも食○ログで高評価を得る人気店でもない。

どこにでもある全国チェーンの牛丼屋である。

「なんだ、こんなモン学園の近くにもいっぱいあるじゃねーか。なんでここなんだ？」

「少しすれば分かるさ」

こういうのは口で長つたらしく説明するものではない。

自らの舌で知ることこそ意味がある。

「いらっしやいませー！」

アルバイトの人の元気い挨拶が店内に響き渡る。

この店は街中から少し外れたところにあり、店内は広々としておりカウンター席と同じくらいソファ席も多い。

「ま、チェーン店なら俺らの身の丈には合ってるわな」

ソファ席にどっかりと腰を下ろしてメニュー表を一瞥する釜利谷。

「うわ、今すき焼き鍋とかやってんの？ 悩むわあ……」

「ゆっくり考えて構わんぞ。俺はすでに決めている」

そうやって俺は水を汲みに席を立つ。

十五分後。

「…で、結局普通の牛丼なワケ」

釜利谷が呆れたように言った。

そう、俺の目の前に置かれているのはメガ盛りの「牛丼」。

何のトッピングも飾りもない、普通の牛丼である。

一方、釜利谷の目前に置かれているのは、「牛たっぷりチーズカレー」。

牛丼屋に来ておいてカレーである。

「うるせえな！ カレーだつて牛丼屋の醍醐味だろ！ お前こそそんな面白みのないモン頼んでるじゃねーか！」

「面白み？」

分かっていないな。

食の美は、食す最中に付け足すこともできるのだぞ。

今から俺が、牛丼の美学というものを教えてやろう。

それでは今回も、全てに感謝を込めて。

「いただきます」

「いただきます」

箸を持った俺はまず、ありのままの牛丼を一口かきこむ。

まずは調味料なしでそのままの牛丼を味わう。

「はふっ、はふっ、うめえ！」

そんな俺をよそにカレーを豪快に頬張る釜利谷。

まあいい、俺は俺なりに牛丼レビューを続けよう。

チエーン店とはいえ、牛丼を軸に数十年の間店を発展させただけのことはある。

醤油と砂糖の効いた甘じょっぱいたれと牛肉の旨味、玉ねぎの甘みが絶妙なハーモニーを奏でている。

そう、これこそが牛丼。

牛丼の源流は、明治時代に外国より輸入された牛鍋の文化までさかのぼる。

その時代、日本に定着した牛肉食の手法として、牛肉をネギなどと同時に割下で煮つけるということが行われていた。

今でいうすき焼き鍋である。

それと並行して、牛鍋の具材を白米の上に乗せて食べるという行方も行われていたようだ。

これが牛丼の始まりである。

今、俺はその歴史を舌で実感しているのだ。

さて、牛丼の歴史に感動したところで俺はある行動に出る。

使うのはこれ。

牛丼と一緒に注文しておいた生卵だ。

まずは箸で器用に白身と黄身に分ける。

ここら辺は慣れ。

そして分けた白身を牛丼に流し込む。

冷えた白身と熱々の飯とが合わさって口に運ぶのにちょうどいい温度になるのだ。

こうして牛丼ごと、白身の滑らかな喉越しを楽しむ。

この淡泊な味わいが第一の楽しみ。

白身を味わったところで本題に入る。

今日の主役はこいつ。

小皿に残しておいた黄身だ。

卵というものはまさに食べ物の王様だ。

そのまま食べてもおいしいしそのまま焼いてもよい。

工夫して焼いても美味いし蒸してもゆでても美味い。

しまいにはデザートにまで変身でき、それでいて栄養満点ときた。

卵の歴史は人の歴史。

それほど卵と人類の付き合いは長いのだ。

神が与えた食べ物と言うに相応しいだろう。

そんな卵の中でも、極上の旨味を持つのが卵黄だ。

独特の濃厚な味を持つ黄金の液体は、その外見だけで人々を魅了してくれる。

今回はこの黄身の旨味を極限まで引き立ててみよう。

小皿の中でプルンとした弾力をそのままに形を保っている卵黄。

その上に俺は調味料のおろしニンニクを小さじ一杯分落とした。

前回述べたように、俺はニンニクに心を奪われている。

ニンニクはこの世で最も優れた調味料にして食材だ。

まあ、ニンニクへの愛情は前回あれだけしつこく述べたので今回は口うるさく言わないことにする。

その上にラー油を三滴。

この三滴という量が絶妙なのだ。

辛いものが好きなものには物足りない量かもしれない。

しかし、それを求めるならばこれ、七味唐辛子を追加で振りかければ済む話なのである。

ラー油の正体は「唐辛子の辛み成分を溶かしたゴマ油」だ。

ラー油を使う上で留意せねばならないのは、「ゴマ油」という部分。皆も知つての通り、ゴマ油は非常に香りが強い。

辛さを求めてラー油を入れすぎてしまうと、全体がゴマ油の香りに支配されてしまつて主役の牛丼を覆い隠してしまう。

ゴマ油というものは隠し味程度に加え、匂いを嗅いだ時にほんのりと香るのがちようどいのである。

ゆえに三滴。

この三滴は考え抜かれた末の三滴なのだ。

話が長くなつたが、まだまだここで終わりではない。

ニンニク、ラー油、七味唐辛子が加わつた卵黄に、さらに付け加えるのはこれ。

酢をたつたの二滴。

ほんのわずかに酸味を加えると全体がさっぱりとし、濃厚なれどもしつこすぎない絶妙なバランスの味となる。

さあ、とうとうここまで来た。

仕上げは日本人なら誰もが好きな魔法の調味料。

醤油だ。

卵黄と醤油の組み合わせはまさに魔術。

ただの塩とは違う、旨味を携えた醤油の塩味が、卵黄の濃厚な味と抜群のシナジーを形成するのだ。

醤油の製造はとても複雑だ。

こんな製法を思いついた先人は本当に本当に偉大としか言いようがないのである。

醤油をたっぷり小さじ一ほどかけたら、これで準備は万端。

「お前、さっきから何一人でぶつぶつ呟いてんだ？ 怖いぞ」

既にカレーを四分の三ほど平らげた釜利谷に言われ、俺は少し自分を恥じた。

でもそういう回なので仕方ないね。

「つかさつきから何作ってんの？」

「前人未到の調味料、”^{エッグスカリバー}聖なる卵黄ソース”だ」

「は？」

一生懸命考えた名前なのに、そんな風に一瞬で切り捨てられるとても悲しいぞ。

ともあれ、俺はついに小皿に箸を向ける。

卵黄の膜の中で放出の時を今か今かと待っている卵液を、一気に開放するのだ。

目玉焼きを食べるときも、この瞬間が一番至高なのだ。

俺は精神を集中させ、一気に箸を卵黄に刻み入れた。

トロ〜りと黄金色の卵液が小皿を満たし、醤油と混ざってゆく。

俺は迷うことなく箸で全体をかきまぜ、様々な調味料が入った小皿の中身を一体化させてゆく。

かくして”^{エッグスカリバー}聖なる卵黄ソース”は完成した。

待望のこれを、残った牛丼に回しながらかける。

「ほえー、なんか変なモン作ってんなー」

変なもんじゃない！

”^{エッグスカリバー}聖なる卵黄ソース”だ！

やつぱり恥ずかしいのもうこの名前言うのやめます。

卵黄ソースをかけた牛丼を片手に、第二ラウンドスタート。

かきこんだ瞬間に、俺の口内を衝撃が走った。

これはすごいっ！！

明らかに今までの牛丼とはレベルが違うッ！！

ニンニクやラー油の香り、ほんのりとした辛みと醤油の塩味の中で、きちんと卵黄が埋もれずに己の味を主張しているではないか!!
そしてその中で牛丼が本来の味を奥ゆかしく醸し出している。

牛肉、玉ねぎ、たれ、卵黄、ニンニク、ラー油 e t c . . .

考えてもみれば、これだけの素材を使った食べ物がマズいはずがないのだ。

恐るべし卵黄ソース、これが奴の真の実力だということのかっ:!!

「何震えてんだよ」

既にカレーを食べ終わっている釜利谷が不気味そうに俺の顔を覗き込みながら呟く。

「なんか飯食ってる時のお前って何かに取り憑かれてるみたいだよな」

あながち間違ってるな。

それだけ俺の食への執念は凄まじいのだ。

嗚呼、名残惜しいがもうすぐ牛丼も完食だ。

卵一つを付け加えるだけでこれだけの楽しみができるメニューはそうそうあるまい。

そう、最初に言った、「この店を選んだ理由」。

それは宅に置いてある調味料の豊富さだ。

今使ったものはもちろん、今回は使わなかった豆板醤、胡椒、漬物まで置いてあるのだ。

同じチェーン店でも、何故かこの店だけが豊富に調味料を取り揃えている。
店長の意向だろうか？

ともあれ、これら恵まれた調味料によって、一見味気のないチェーン店のメニューもひと手間かかった匠の味に早変わりするのである
調味料の使い過ぎはマナー違反なので気をつけようね!!。

そして締めは付け合わせの味噌汁。

日本の国民食と言っても過言ではない“原点にして頂点”なこの汁物で、口に残った油を一気に流し込む。

ワカメと油揚げを味わいつつ、椀を持って一気に汁を飲み干せば、

今回の食事も無事終了である。

「ふう」と一息ついて、両手を合わせ。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさんっした〜」

「はあく食った食った〜」

会計を終えて外へ出るなり、釜利谷は大きく背伸びをした。

「普段簡単なものばかりで済ませてるけどよ、たまにはダチと食いに
出るのも悪くねえな」

「ふ、それが分かっただけでもお前を連れてきた甲斐があったな」

俺は笑みを浮かべながらそう言う。

そう、飯というものはもちろん一人で黙々と食うのも乙なものだ。

しかし、こうして他者の存在を感じながら他愛ない会話に花を咲か
せるのもまた乙である。

と言いつつ今回の俺はほとんど話さなかったが。

「そうだ、さつきお前が作ってた謎の調味料が何か教えてくれよ」

「ほう、あれに興味を抱くとはなかなか分かっているではないか。あ
れはな…」

こうしてレシピが共有され、多くの人に広がっていくのもまた楽し
みの一つでもある。

この“美味しい”を俺だけではなく、あらゆるものに共有するのも
俺の目標だ。

そんな折だった。

「見いつけたー！ー！ーっ！！！！」

街中にもかかわらず全くマナーを弁えない大声。

「あ？ 山村？」

釜利谷があんぐりと口を開けて呆れたような声を出す。

声の主、山村巴は自動車も置き去りにするほどの猛烈なスピードで
俺達の方に走り寄ってくる。

「リュウ君ったらこんなところにいたんですねー！ーっ！！ 40 km ぐ

「らい走り回って探してたんですからね!!!」

「どうして居場所を尋ねるといふ発想にたどり着かないのか」

「だってリュウ君ったらもう三か月も未読無視するんですもの!!!
でももう逃がしませんからねっ!!!」

山村は有無を言わさず俺の腕を掴む。

嗚呼、マズい。

この女に捕まったら俺に自由など存在しない。

最近は合わないように学校の後もすぐ逃げていたのに……。

「ふーん……じゃ、俺は希望ヶ峰に帰りまっす!」

察しのいい釜利谷はそう言うや否や即座に駆け出していく。

「待て釜利谷!! 俺を生贄にするつもりか!!」

「さようなら釜利谷くーん!!! さあこれで二人つきりですっね!!!」

目を輝かせて鼻息を荒くする山村。

ああ……最悪だ……。

「これ、明日オープンするお寿司屋さんの予約券です!」

山村はそう言っつて二枚の紙切れを俺に渡す。

「寿司屋……?」

「はいっ!! 予約しないと入れないくらいの人気店らしいんです!!」

チケツトを持っていた心優しいお兄さんに譲っていただいたんです!!
!!」

嘘をつけ、絶対にあっちの人格で拳で脅してもぎ取っただろう。

「待っつてくれ、俺は寿司は——」

「ええ~~~~っ!!?! 『二人つきりで食べに行こう』なんて、リュウ君ったら大胆~~~~!!!」

もう駄目だ、メルヘンの世界に入り込んだ山村はもう誰にも止められない。

誰か助けてくれっ……!!!

「じゃあ明日の夜、六時に迎えに行きますからね!! まさかバックレたりしないですよね、リュウ君?」

赤いオーラをまどわせながら満面の笑みを浮かべる山村。

どうすればよいのだ……。

ただ山村と飯に行くだけならまだいい。

俺は生魚が食えないんだっ……！！！！

ギリギリの恋 前編



同じ学園で一つ屋根の下に暮らしていると、どうしても生まれてしまふ——“恋心”という概念が。

希望ヶ峰学園75期生の彼らが過ごすこのクラスも例外ではなかった。

でも、中には、日々自分が抱いている感情が恋なのか恋でないのか、分からないまま毎日を生きる者もいる。

その一人が彼女、亞桐莉緒だった。



「あいつは絶対夢郷のことが好きなんだよ!!」

放課後の教室でそう熱弁したのは前木常夏だった。

「だと嬉しいんだがね」と冷静に返すのは、他ならぬ夢郷郷夢本人。

「そうか? せっせと乱暴に扱ってるから嫌いなのかと思ってたが……」

土門隆信は怪訝そうな顔をした。

「それが“好き”の裏返しなんだよ! なんだかんだいって夢郷と絡んでるし、逆にそれ以外の男子と話してるところほとんど見たことないだろう?」

「ははは、どうせならすぐにでもこの胸に飛び込んできてほしいものだが」

「だから俺はさあ、ギリオの心確かめたいんだよ!」

夢郷の言葉を完全に無視する形で前木はそう言い放った。

「確かめる? どうやって?」

「ズバリ、ドツキリだ!」

「……??」

土門はますます訝し気な顔をした。

「それは……僕がどこかに転校するとでも言えればいいのかい?」

「いや、そんなんじゃない! 一生の別れくらいじゃないとアイツの本心は聞けないと思うんだ。だから夢郷が病気で死ぬことにする」

「いや無理だろ!!!」

即座に土門の叫びが炸裂する。

「まあ、普通はどつかで足がついてバレルような嘘だ。けど、ここは恐ろしい才能が集まる希望ヶ峰学園。多少の無理なら可能にできちゃう場所だ。カルテは三ちゃん和伊丹に作らせる。夢郷と昔から親友の入間にも声をかけてみよう」

「なるほど、それは面白そうだね」

夢郷ニツコリと口角を上げる。

「なんだかなあ……手間暇かけてまで人を騙すなんて性に合わねえな……」

「あのな、土門! ウソにはいいウソと悪いウソがあるんだ。俺は煮え切らないギリオの心をはつきりさせたいんだ。それで夢郷のことが好きなら付き合っちゃえばいいし、ダメなら親友として関わってあげばいい。高校は人生の中で一番青春してる時期なんだぞ! 人の恋路は応援してやるのが友達の義務つてもんだろ!」

「人の恋バナ大好きなJKかお前は!」

「まあまあ。余興の一つくらいの軽い気持ちでやればいいと思うよ。僕としても楽しそうだしね」

夢郷が笑みを浮かべて土門をなだめた。

「うーん……。別に止めはしないけどよ……。てか、夢郷自身はアイツのことうどう思ってるんだ? 好きなのか?」

「僕かい? 僕はまだ恋愛という概念を探求しきれていないからね……。何とも言えないが……」

そして、一呼吸おいてこう答えた。

「まあ、亞桐君の態度次第、かな」

「……悪い奴だな、こいつも」

土門は呆れたように言った。

「もちろん協力するわ」

話を聞くと、伊丹ゆきみは即座に同意した。

「おーっ、よかった！ 正直反対されるんじゃないかと心配してたんだ！」

「だって、恋する莉緒が見れるんでしょう？ そんな尊みの塊を私が放っておくと思うの？」

どこか動機がズレていることを感じながらも、前木はほっと胸をなでおろした。

そして、面倒くさいと嫌がる釜利谷の髪や耳を引っ張って無理やり偽カルテを作らせた。



翌日。

ドツキリ一日目。

『STEP 1：下校時に吐血』

「起立、礼！」

「さようならー」

丹沢の合図で担任教師に礼をすると、作戦開始。

前木をはじめとする数人は素早く別室に移動し、御堂秋音が製作し夢郷のカバンに仕込ませた小型カメラで夢郷の様子を確認する。

「全く、こんなくだらないことに私の時間を使わせるとは……」

舌打ちをしながらぼやく御堂だが、その視線はモニターにくぎ付けである。

やがて、教室に残る面子は携帯をいじる亞桐と席に座り続ける夢郷、残って本を読んでいる人間（彼も仕掛け人）だけとなった。

「OK夢郷、開始で」

前木がモニターに呼びかけると、夢郷が片耳に差しているイヤホンを通じて指令が届く。

「さて、僕も宿舎に戻ろうかな…」と夢郷はのっそりと立ち上がった、その時…。

「んっ、ゴホッ、ゴホッ!!! ゴホッゴホッゴホッ!!!」

わざとらしく大きな咳をした。

そしてすかさずハンカチで口元を抑え、ホームルーム H Rの前から口に含んでいた血糊をハンカチに噴き出す。

「…あれ、亞桐のやつ、反応しないな」

土門が不思議そうに呟く。

「…莉緒、イヤホンしてるみたいよ」と伊丹。

まさかの事態である。

だが、これは前木達も想定済み。

「おや、夢郷君? どうかしましたか?」

すかさず入間が立ち上がり、亞桐の前を横切つて夢郷に近寄る。

これに気付いた亞桐はふと顔を上げ、イヤホンを外した。

「あ! 血が出てますよ!?! 大丈夫ですか!?!」

入間がただならぬ口調で呼びかける。

翻訳業を生業としているだけあって見事に感情の入った話し方である。

「え? 何? どうしたの?」

亞桐もこれにはたまらず声をかけてきた。

「いいぞ…! ここです『ウチが保健室に連れていくよ!』とか言えば満点だよな」

前木がグツと拳を握りながら呟く。

「入間君に任せて帰ったら脈無しってことね」

「そんなつまらん結果は御免だな。やるからには私を楽しませろよ、亞桐莉緒…!」

「うわあ…血出てるじゃん…ちよつとヤバくない…?」

亞桐は困った表情でおろおろと入間と夢郷を交互に見た。

「こ、こういう場合はどうすればよいのでしょうか…?」

如何にも慌てている風に入間が言った。

「どうするも何も」保健室に連れていく」一択なのだが、その選択は亞桐が自分で導かねば意味がないのだ。

「何をやっている…!! 早く夢郷郷夢を連れ出せ…!! そして言え…!! 『君が死んだら、私生きていけないよ』と!!」

顔を真っ赤にし、モニターに顔を寄せて誰よりも熱心に御堂は言った。

「御堂…お前って意外とロマンチストなんだな…」

「アツ…:…ち、違う、そういうのじゃないぞ愚か者!! 恋なんぞにはまっつったく興味はないが…:…その…:…今度作るロボットの参考にするだけだ!!!」

「どんなロボットだよ」

「(ハア…:…秋音も莉緒も尊い…:…)」

モニタールームがざわつく中、亞桐は遂に答えにたどり着いた。

「えーつと、とりあえず保健室…かな?」

「なるほど! では早速」

「いけませんぞー!!!」

嬉しそうに放った人間の言葉は、教室に入ってきた第三者に遮られてしまった。

「た、丹沢さん?」

「!?!?!」

予期せぬ登場人物に、モニタールームにも衝撃が走る。

「忘れ物をして戻ってみれば…:…大切なクラスメートが血を吐いているとは!! これは見過ごせませぬ!! さあ!! 拙者と共に保健室に参りますぞ!!」

仕掛け人メンバーではなかっただけに、この介入に対する手立ては何もなかった。

「よかったー! ウチ、この後ダンススクール行かなきゃだから保健室にいる時間なくて困ってたんだよね! じゃあ丹沢に任せるわ!

夢郷、お大事にねー!」

そう言つて亞桐は荷物をまとめ、駆け抜けるように教室を去っていった。

「……………」

入間は何も言えずあんぐり口を開けて立ち尽くしていた。

「……………」

夢郷も咳をやめて去つていく亞桐の背中を唾然と見つめていた。

「何をしているのです夢郷殿！　もしや動けぬのでござるか!?　ならば拙者が背負つていきます!!」

「……………」

あまりの超展開に、モニタールームにも沈黙が走る。

「よし分かった、あのチビメガネはグングニルの刑だ」

「秋音落ち着いて秋音」

「もっ…申し訳ございませぬ!!!　まさかそんな計画が進んでいたなどとはつゆ知らず…」

事情を知らされると、丹沢は勢いよく頭を下げた。

「よし分かつているようだなチビメガネ。まずはそのおかつぱ頭の断髮式を行う」

「ダメよ秋音。ほら、お手」

「ニヤン！　って誰がペットじゃああああ!!!」

「まあ、知らなかったんだからしょうがねえよ。むしろ躊躇いなく友達を助けられるお前は立派だと俺は思うぞ」

御堂と伊丹のやり取りをよそに土門が丹沢を慰めた。

「うん、まあ俺の筋書きも適当だったしな。駿河のせいじゃないよ。次はもつと完璧に仕切りなおそうぜ！」

前木が言う、「もちろん！　次こそは全力で協力させていただきまする！」と丹沢は胸を張った。

「やっぱりクラス全員に声かけた方がいいんじゃないか？」

と、土門が提案する。

「いや、山村は『乙女心を弄ぶなど言語道断！』って怒りそうだし、安

藤と津川は演技が壊滅的に下手くそだし、三ちゃんはもう手伝ってくれなさそうだし……」

「……葛西と小清水は……」

と言いつつ土門が教室の窓の外を見た。

窓の外では、大きな木の下でゴキブリを手に乗せた小清水がはしゃいでいる。

「見て見て！ 新種のクロゴキブリさん!!」

「怖いよおっく!! 近づけないでよおっく!!」

それを見せつけられる葛西は木の陰に隠れて必死に叫んでいた。

「……まあ、あいつらはそつとしておいてやるか……」

前木が苦笑しながら言った。

「……ほう、それは面白そうな計画だな。俺も協力させてもらおうぞ。なに、演技には自信がある。任せておけ」

とりあえず前木達は、話を分かってくれそうと判断したリュウにこのドツキリのことを話し、仕掛け人として参加してもらおうこととなった。



『SETP2：意味深な会話（挨拶編）』

ドツキリ開始から一週間。

「やあ、亞桐君、おはよう。今日も妖艶な肌をしているね」

「おはよー。お前いつも一言多いよな」

登校時、何気ない朝の挨拶。

しかし、ここにも前木達が仕組んだアクションがある。

「よし、いいぞ夢郷。＼あの話＼を切り出してくれ」

例によって別ルームからの前木の呼びかけをイヤホンで聞き取った夢郷は行動に出る。

「……突然だが亞桐君。“死ぬ”とは……どういうことだと思う?」
「……はあ?」

英語の単語帳を開きながらも亞桐は眉を上げた。

「なに、またいつものやつ? ウチ、今小テストの勉強で忙しいんだけど」

亞桐はそつげなくそう答えた。

「やっぱり、夢郷っていつも“生きる”とか“死ぬ”とかをあーだこーだ言ってるからなあ。今更そんな質問したって珍しくないだろ?」

土門が呆れ気味に前木に言った。

「バーカ。そんなこと俺でも分かってるよ。まあ見てろって」

しかし前木は満面の笑みでそう返した。

「……?」

「ああ……忙しいのは承知している。だが……聞かずにはいられないというか……今のうちしか聞けない、というか……」

夢郷は語尾を濁しながらそう告げた。

「……え?」

単語帳を見ていた亞桐は、その夢郷の言葉を受けてすぐに彼の顔を見た。

「……どういう意味? よく分かんないんだけど……」

「……いや、つかぬ事を聞いた。勉強時間を割いてしまって申し訳ない。気にしないでくれ」

夢郷はそれだけ言って授業の準備に取り掛かってしまった。

亞桐は何も言えぬまま、ぼうつと夢郷の様子を見つめていた。

「嗚呼、莉緒のこの“胸騒ぎ顔”最高。スクショしとこ。ふふふっ、ンフツツ」

「伊丹、笑い方が気持ち悪いぞ」

「それはともかく、今のは確実に亞桐も何かを感じ取ってたみたいだなー! この調子でドンドン不穩にしてやるぞー!」

「なんだか趣旨がズレている気もするのですが……」

前回は前回だっただけに、今回の脈ありそうな反応には仕掛け人た

ちも胸を躍らせていた。

その日の体育の授業。

「どうしたんだ、夢郷君。今週はめつきり走れなくなつとるじゃないか」

体育教師が夢郷の背中をポンポンと叩きながら声をかける。

「申し訳ありません…。少し調子が悪くて…」

そう返す夢郷の様子を、遠くから亞桐が心配そうに見つめていた。もちろん実際は夢郷が体力の低下を演じているだけである。

「いいのでござるか…？ あんなことをしたら夢郷殿の体育の成績が…」

ひそひそと心配話をする丹沢。

「いいんだ、駿河。これも夢郷の恋を応援するため。多少の成績なんて気にしちやいられない。それに俺の成績が下がるわけじゃない！」

グツと丹沢にガッツポーズを見せる前木。

「(なかなかの外道にござるぞ前木殿!!)」

また、古文の授業でも。

「えーと、ここの文の訳を夢郷君お願い」

「…あ、申し訳ありません。考え事をしていてどの部分なのか…」

「おいおい、哲学者だからって授業中に哲学しちやあ困るよ。授業はちゃんと聞いてくれたまえ」

「申し訳ありません……」

と、憔悴した表情を見せる夢郷。

「普段の授業はちゃんと受ける奴なのに…。やっぱり夢郷、おかしいよ……」

亞桐がそう呟いたのを、隣の御堂の耳はしっかり捉えていた。

「(ちっ、じれったい。そういうのは本人に面と向かって言ってやればいいものを。早く想いを伝えて、ぎゅっと抱きしめあって…)」

「はい、じゃあ代わりに御堂、訳してくれー」

「ふえっ?!? えっと……どこ……でしようか……」
「お前もかー!?!? どうなってるんだこのクラスはー? 真面目に授業受けろよー?」
「(うぐぐぐ……なんとという屈辱……。こんなくだらない遊びに巻き込まれたばかりに……)」
そんなこんなで、若干数名が成績を犠牲にしつつ、ドッキリ計画は進行しつつあった。



STEP 3 : 『意味深な会話 (女子トーク編)』

ドッキリ開始から九日後の放課後。

「今日はここまでの成果をいったん確認するために、女子トークで亞桐の気持ちを聞き出すぞ!」

モニタールームに移った面子に前木が言った。

「なら何故私だけこっちに連れてこられたのだ?」

御堂が苛立たし気に前木に尋ねる。

「だってお前女子っぽい会話できなさそうだもん!」

「ぶち転がすぞこの茶髪メンヘラ小僧」

「御堂様、落ち着いて落ち着いて」

いきり立つ御堂を入間が何とか押さえる。

「伊丹殿がおらぬ今、御堂殿を押さえられるのは入間殿だけですからな……。頼りにしていますぞ」

そうこうしているうちに、教室に残った伊丹が口火を切る。

「莉緒、今日はダンススクールはないの?」

「うん、今日は休みだから何しようかなーって思ってる」

亞桐は携帯をいじりながら答えた。

「じゃありゃん様とお話しようなりー!!」

「わー!! みー様も混ぜてだぞよー!!!」

そこに、同じく教室に残っていた安藤、津川の女子二人が飛び入り

参加する。

「なんといつても今回の不安要素はこの二人だよなあ…」

土門は頭を抱えながらつぶやいた。

「わがクラスの女子の中でもとびつきりに頭のネジの飛んでいらつしやるお二人ですからね…。何を言い出すやら分かったものではありません…」

入間も心配そうにモニターを見つめていた。

「伊丹、その二人に話題を逸らされても頑張つて引き戻してくれよ。頭のいいお前ならきつとできるつて信じてるぞ！」

前木がイヤホン越しにそう伝えた。

「うふふ、じゃあここでしかできない話をしましょうか。三人は、好きな人とかいる？」

早速伊丹は攻勢に出る。

「えっ…ええっ?!?!」

突然の質問に頬を赤らめてのけぞる亞桐。

女子高生としては至極真つ当な反応なのだが…。

「吾輩は○ラゴンボール×巻に出てくるフ○ーザの部下の○ドリアが好きだぞよ!! あんのツンツンした造形と中途半端な実力、小物感たつぷりの佇まいがなんとも…」

「リャン様はね、今流行りのバーチャルゲーマーさんが好きー!!!」

「好きな人つて…そういう意味じゃなくない…??」

相変わらず発想は常人と少し異なる二人である。

「……莉緒は、いないの?」

二人の答えに苦笑しながらも、伊丹は亞桐に問いを投げかけた。

「え? ウチ…?」

モニタールームの面々にも緊張が走る。

「……いないよ、好きな人なんて」

亞桐はそつけなく答えた。

「えー!!! 今のは絶対いる反応だったなり!!」

「いないつて! ここの男、馬鹿ばかりだしき!」

「莉緒たん、正直になろつ?」

津川は亞桐に詰め寄り、問いかける。

「おおっ!? 意外なところから援護が入ったぞ!」

前木が驚きの声をあげる。

予想がつかぬ展開に、他のメンバーたちも固唾をのんで見守るばかりである。

「…そんなこと言われたって…：分かんないよ…」

亞桐は少し口をとがらせ、頬を赤く染めながらそう答えた。

「人を好きになるって気持ちがどんなものなのかが分かんないんだもん…。好きになりようがないよ」

顔を赤く染めたまま亞桐はうつむいた。

「ウヒヒ…：莉緒可愛いいいん…：…」

前木達は、通信機から聞こえてくる伊丹の気持ち悪い呟きにドン引きしていた。

「リャン様が思うのはね、“好き”っていうのは、どんな大雨の日でも会いに行きたいって思えたり、どんなに一人になりたいときでもその人とだけは一緒にいたいとか、そういう感情なんだと思うなりよ」

津川は優しい笑顔を浮かべながら自らの考えを述べた。

「吾輩はたとえマグマが降っててもリャン様に会いに行きたいぞよ!!!」

だから吾輩と結婚してほしいぞよ!!!」

「ダメ♡ ファンのみんなに怒られちゃうなり♡」

再びいちやつき始めた二人をよそに、亞桐は下を向いたままずっと考え込んでいた。

「会いに行きたい…：一緒にいたい…：そんな人って…：…」

「…莉緒、一つだけ言わせて頂戴」

いつの間にか我に返っていた伊丹が言った。

「普段一緒に過ごしているクラスメートだって、ある日突然いなくなってしまうかもしれない。もし少しでも自分にとって大切だと思う人がいるのなら、その思いを伝えるのは早い方がいいわ」

「ゆきみん…：…」

「人生は一度きりなんだから、後悔の無いようにね。じゃあ、私帰るか」

それだけ言うと伊丹はそそくさと教室を後にした。

「リャン様はその百倍みー様のことが好きだもーん!!」

「じゃあ吾輩はその千倍リャン様のことが好きだぞよ!!!」

謎の言い争いを繰り広げる二人の横で、亞桐はぼんやりと夕焼けを見つめていた。

「よし、いい感じだ……」

モニターを見て前木が呟く。

「いよいよ大詰めだな」



それから約一時間後。

前木達も解散し、各自の部屋なり部活なりに向かった後のことだった。

「ったく!! この俺をクソリア充の道楽なんぞに付き合わせやがって……!!」

釜利谷三瓶は極めて不機嫌に廊下を歩いていた。

「どいつもこいつもやれ青春だの恋バナだの、反吐が出らあ!」

前木に無理難題を押し付けられ、夢郷の偽のカルテを製作中の彼は今、非常に腹の虫の居所が悪いのである。

「…あ、いた!」

「……あ?」

釜利谷は背後からの声を聞いて振り返った。

「げっ、亞桐……!」

自分に向かって近づいてくる亞桐の顔を見て、釜利谷はあからさまに嫌そうな顔をした。

隠し事が下手な自分がドツキリの仕掛け人に向いていないことを彼は熟知しており、それゆえにターゲットである亞桐と直接かわることはここ一週間避けていたからである。

「ごめん釜利谷…あんたみたいな人じゃないと相談できないようなことがあつてさ……」

「な、なんだよ……」

釜利谷は訝し気に尋ねる。

大方、数学か物理の問題が分からないとかだろう……と彼はたかをくくっていた。

「……」

亞桐は恥ずかしそうに少し下を向く。

「…は、早く言えよ……」

「ウチ、夢郷のこと好きかもしれないんだ……」

「……あほっ……」

◆◆◆
to be continued…

ギリギリの恋 後編

◆前回のあらすじ◆

前木常夏は、クラスメートである亞桐莉緒が夢郷郷夢に恋心を抱いていると勝手に類推！

彼女の恋心を測るためドッキリ計画を立ち上げた！

その内容はなんと、「夢郷が病気で死ぬ」というすさまじい内容であつた！

おかつぱ眼鏡丹沢の妨害や津川たちのノリに振り回されつつも順調に進むドッキリ計画。

一方、単独で動いていた釜利谷は亞桐から思わぬ相談をされて……!?

希望ヶ峰学園75期生が繰り広げるドタバタ恋愛劇、遂に決着!!



「あ、あの、えつと？」

釜利谷は突然道を尋ねられた少年のような返答をする。

「ごめん……いきなりこんなこと言われてもなんて返していいかわからないよね……。でもさ……こういうのを相談できる相手って、釜利谷しか思い浮かばなかったんだよね」

亞桐は頬を紅く染めながらそう言った。

「えええ……」

釜利谷は恐ろしく困った声を出した。

「そんなこと俺に言われてもどうすればいいんだよ……」

「うん……ごめん……」

亞桐がしおらしい態度を取り始めたので、ますます釜利谷は慌ててしまう。

「あつ、まあ、あのさつ!? とりあえずどつかで休みがてら話そうぜつ!?」

明らかに挙動不審な態度ながら釜利谷はそう告げる。

10分後、二人は学園からほど近い喫茶店の中にいた。

「(何気に女子と店来るの初めてかもしれない……)」

相変わらず落ち着かない様子でオレンジジュースを飲む釜利谷。

「ごめんね？　こんなところまで付き合ってもらって……。でも本当に悩んでることだから……」

そう言つて亞桐はアイスコーヒーを一口啣る。

「まず……アレだな。〃好きかもしれないってのはどういう感情なんだ？」

おぼつかない口調ながらも釜利谷は一直線に核心を問う。

「うん……。なんていうか……ほら、ウチさ、よくアイツと喋ってるじゃん。大体アイツのセクハラを懲罰したりくだらないやり取りばかりなんだけどき……。最近……アイツがいないと無性に寂しくなるんだ」

「………はあ」

「気が付くとアイツのことばかり考えてる自分がいるんだ。これってひよっとして恋なのかなって……」

頬を紅く染めて自らの想いを吐露する亞桐。

「(絵に描いたような青春じゃねえか。これはアレだな、冷静に考えるとムカついてくるやつだな)」

「でもさ、友達でもこれに近い感情になることってたまにあるんだよ！　友達のことでも頭一杯になることもあるし……。だからこの気持ちにはあくまでも友達としてのものなのかなって……」

「(いや絶対恋だろ。腹立つな)」

「だからウチ、これからどうアイツと接すればいいのか分かんなくなっちゃって……。どう思う？」

「話の振り方が雑……」

と言いかけて「いやいや」と釜利谷は言い直す。

「まあ……今まで通り接すればいいんじゃないかねえのかな？　まだ気持ち

を見極めるのには時期尚早な気もするしよ」

と、当たり前障りのない答えを返す。

「うくん……」

頬を膨らませて何か考え込む亜桐。

「ダメなの？ 今の答えで」

「今まで通り……でいいのかな……？」

「ダメ？ ダメなの?? ああメンドクセー!!」

「だって最近の夢郷、なんかおかしいんだもん……」

「ぶっ」

釜利谷は思わずオレンジジュースを吹きそうになり、咳き込む。

「(やべえ、あのドツキリだ)」

口下手な自分がうっかりドツキリの内容を話してしまうようなことだけは避けねば、と心に決めていた釜利谷。

ドツキリ周りの話題が出るとなると一段と緊張が高まる。

「体調崩して保健室に運ばれたり、体育でめつきり体力が落ちてたり、授業中も先生の話聞いてなかったり……なんか最近のアイツ、様子がおかしいんだよね」

「(そりやそういうドツキリだからな…) ……へえ〜」

「もしかしたら……もしかしたらだけどさ……いや……これは考えすぎだよね……」

「なに、言ってみ」

「アイツ……」

亜桐の顔がだんだんと青ざめていくのを釜利谷は察知する。

「アイツ……死んじゃったりしないよね？」

「……………」

釜利谷は反応に困る。

まさにこれこそ、このドツキリの本質だからだ。

「まさかあり得ないと思うけど……なんか漠然とそんな気がするんだ」

「まあ……調子悪いなら病院行かせた方がいいんじゃないかね……俺も軽くなら診るくらいできるし……」

「そっか……そうだよね……」

そう言つて亞桐は黙り込む。

「……………」

「……………」

「(ああもう会話なくなつちやつたよ……どーすんだこれ……)」

釜利谷は何かを話そうとするが、どの話題をするにも躊躇いが生じ、口をパクパクさせるばかりだった。

「まあ、あれだな。後悔はないように過ごした方がいいんじゃないか？」

釜利谷は頭を掻きながらそう言った。

「後悔……………」

亞桐は何か思いつめたようにそう呟いたきり黙り込む。

「……さつき、ゆきみちゃんにも同じようなこと言われたんだよね」

「ああ……そうなのか……」

亞桐は何かを決意したような表情を浮かべる。

「ウチ、夢郷のところ行つてくる！」

「え？」

釜利谷が呆気にとられる間に亞桐は喫茶店を飛び出していった。まいった。

「あ？ え？ ………………会計は俺持ち……………ツスカ？」

釜利谷が唾然としているそのすぐ後ろの席では。

帽子を深くかぶり、サングラスをかけた女が何者かに電話していた。

「こちら〴〵パープルシャドウ〴〵、目標の移動を確認。目的地は夢郷君の模様。どうぞ」

一般客に偽装した伊丹は電話の向こうの前木にそう伝える。



「了解。あとそのよく分からんコードネーム的なのをやめてくれ」

電話の向こうの伊丹にそう返して前木は電話を切った。

「まさか俺達が解散した後には亞桐が三ちゃんにコンタクトするとは思わなかったな…。伊丹が気付いて尾行してくれて助かったぜ」

「むしろなんで咄嗟に変装できるんだよあいつ怖いな……」

隣の土門がそう呟く。

「じゃあ急遽だけど夢郷にはアレをやってもらうか」

そう言っつて前木は夢郷に電話を繋ぐ。

「夢郷、いきなりだけどいける？ ……おっけー、亞桐がもうすぐ来ると思うから頼むわ。御堂も今呼んでるところだ」



外では日が暮れ始め、外の世界の学生たちは皆各々の手段で帰宅の途につきつつあった。

その頃、夢郷は自室で本を読んでいた。

ピンポン、と部屋のチャイムが鳴る。

「はい……」

夢郷は本を閉じてインターホンに語り掛ける。

「ウチだけど……ちよつとお話したいことがあるんだけど、時間ある？」

インターホンの向こうから聞こえてきたのは亞桐の声だった。

しかし夢郷は先ほどの前木からの電話で亞桐の来訪のことは知っ

ていたのである。

部屋に入ると、亞桐は何も言わず夢郷が差し出した椅子に座るが、明らかに落ち着かない様子だった。

「で、わざわざ何の用だい？」

夢郷はあくまでもいつもの柔らかな笑顔で問いかける。

「いや、あの……」

いざ対面すると言葉を発することができない亞桐。

それでも自分に言い聞かせ、奮い立たせる。

“後悔はしちやダメ”。

頑張れ、ウチ。

「夢郷ってさ……何か病気もってたりするの？」
「！」

夢郷は少し驚いた表情を浮かべた。

亞桐の問いかけは、夢郷が懐に忍ばせたマイクから別室の前木達にも伝わっていた。

◆◆

「流石の亞桐も気付き始めたみたいだな」

土門が腕を組みながら言った。

「よし、ここまで来たらこっちも攻めの姿勢で行こう。夢郷、プランCを頼む」

前木の言葉は、夢郷が密かに耳に差しているイヤホンから彼に伝わる。

◆◆

「ああ……クラスメートには言っていなかったが……気付かれたのなら仕方ない。これを見てくれ」

そう言って夢郷は自分のデスクから一枚のカルテを取り出した。

そこには、呼吸器系の疾患を患っている様子が事細かに記載されていた。

無論これは釜利谷がねつ造したものである。

「なにこれ……?? あんた、こんな病気にかかったの……?」

カルテを見て亞桐は声を震わせる。

「そうなんだ。命に別条のある者ではないようだが、最近はずっと希望ヶ峰附属病院に通っているんだ。あと数か月もすれば完治するらしいね」

現時点では深刻な病気ではないかのように振舞うのが彼らの作戦だった。

「……そう……だったんだ……ウチ……なんも知らなかった……」

亞桐は悲しげな表情を浮かべる。

「気に病むことじゃないさ。僕も気付かれないように隠し続けていた

からね。どうかこのことはみんなには内緒にしておいてほしいんだ。いらぬ心配をかけたくないからね」

「うん……分かった。誰にも言わない」

亞桐はこくりと頷く。

「……………」

亞桐が複雑な感情を感じて黙り込んでいる中、夢郷が口を開く。

「次の土曜日、近くの自然公園にでも行かないかい？」

「……………えっ!？」

「もちろん、二人きりでだ」

Step 4 : 『デートの誘い』

そう、それは即ち“デート”の誘いであった。

思わぬ申し出に亞桐は顔を真っ赤にする。

「えっ、待っ、そんなっ……………」

「…嫌かい？」

「……………っ!! わ、分かったよ! 行ってやるよ!!」

恥じらいを隠すかのように亞桐は立ち上がりながら言った。

「土曜日、朝10時でいい? 現地集合ね!」

「ふむ、いいだろう。楽しみにしているよ」

夢郷が笑顔でそう返事する。

こうして、彼らの目論見は成功した。



「うまくいったな」

土門が語り掛けると、前木はにやりと笑った。

「いよいよだ、いよいよ亞桐の本心分かる時がくる……………」

「次で最後だ。絶対成功させような!!」

「はあ、なんでこんなことにごここまで労力使ってんだらうなあ……………」

運命の時は、刻一刻と迫っていた。



Step 5 : 『週末デート』

週末。

希望ヶ峰学園からそう遠くない自然公園。

集合時間のはるか前から集まっていた前木達は、各々のポジションにつく。

「今日は御堂が寝坊したり人間が急な仕事で南米に飛んじやったりと出鼻をくじかれた感はあるが、今日で長かったドッキリも終わりだ。みんな気合い入れて頼むぞ！」

「おー！」

前木の号令に全員は腕を掲げて応える。

【AM : 9 : 55】

ベンチに座ってスマホを弄る亞桐は、明らかにそわそわした様子である。

しきりに時間を確認し、夢郷が来るのを今か今かと待ちわびていた。

…と、そんな様子に向かいのベンチから見つめる人物が二人。

「亞桐殿、なんだか落ち着きませぬな」

その片方、天然パーマのウィッグをつけた丹沢が呟く。

「しっ！ もっと小声で話せ！ 俺達はおくまでも通りすがりのガリ勉Aとガリ勉Bだ」

同じく長髪のウィッグをつけ、丹沢とおそろいの丸眼鏡（伊達眼鏡）をかけた前木が丹沢に告げる。

二人は手に持った本を読むふりをしながら亞桐から視線を離さない。

【監視役（近距離）：前木、丹沢】

その遙か後ろでは、モニュメントに寄りかかって立つサングラスの女性。

「莉緒は現在ベンチで待機中。横顔、非常に尊い。どうぞ」

伊丹はニヤニヤと笑いながら電話の向こうの相手に告げた。

【監視役（遠距離）：伊丹】

その近くにある喫茶店内。

「伊丹。尊いの話はもういいから」

土門は呆れ気味に呟いて電話を切る。

「いやー、一か月ぐらい続いたドツキリだけど、今日で終わりかあ。なんか寂しくなるなあ」

「……………」

しかし、彼の向かいに座る御堂はノートパソコンを開いたままじつと窓の外の公園を眺めていた。

「はあ……………恋か……………」

「……………御堂？」

「えっ？ な、なんだ、いきなり話しかけるな阿呆ツ!!」

「ええ……………」

突然激昂する御堂に土門は困惑するばかりであった。

【情報管理・総指揮：土門、御堂】

その時、土門に別の人物から電話がかかる。

「お、リュウカ。首尾はどうだ？」

相手は、これまで表立ってドツキリ活動をする事のなかったリュウであった。

『ああ、ちょうど整った。いつでも始められるぞ』

「おっけー。じゃーよろしく頼むわ」

そう告げて電話を切ると、土門はコーヒーを一口呷る。

「あとは夢郷が来れば始められるな。あいつまだかなあ……………」

「……………」

【???：リュウ】

【AM9:58】

「やあ、待たせたね」

「!!」

その声で亞桐ははっと声を上げる。

そこには、いつもとは違うカジュアルな格好をした夢郷が立っていた。

「私服選びに手間取ってしまったてね……。似合ってるかい？」

「…………全然…似合ってるよ」

亞桐は紅潮した顔をそむけながら小さく言った。

「嘘つけ。絶対似合ってると思っただろ」

「亞桐殿、ぐうの音も出ぬ王道ツンデレヒロインの道を進んでおりますな…」

向かいに座る前木と丹沢が交互に呟く。

「…で、集まったはいいいけどこれからどうするの？」

亞桐が問う。

「特に予定は決めていないんだがね…。まあとりあえずはこの公園にある自然を見て回ろうじゃないか」

夢郷が提案すると、亞桐は「ああ…うん」と煮え切らぬ返事を返す。

「うむむ…拙者、デートと申しますと映画を見に行ったりテーマパークに行ったりするものと心得ておりましたが…：自然を感じようとはなかなか渋いチョイスにござりまするな…」

「まあ最初は好きにさせてやればいいさ。何をしようが途中から俺達のターンになるんだしな。じゃあ追いかけるぞ」

二人は静かにベンチを立つ。

「この小川にはヤゴがいるみたいだね。確かこの前小清水君から教わったんだが…」

「…………」

公園の小川を見て嬉しそうに語りだす夢郷だが、亞桐は夢郷の話には全く集中できず、彼の顔ばかり見ている。

「この水は綺麗だし、触るとひんやりしていて気持ちいいね。君もど

うだい？」

夢郷は不意に亞桐の手を握る。

「あっ」

亞桐は思わず声を上げる。

「…もうっ、触んなよっ！」

一瞬のちにそう言っつて夢郷の手を振りほどき、自分で水に手をつ突っ込む。

「ほんとだ、ひんやりしてる……」

「くうう、甘酸っぱいですな」

本を持つて二宮金次郎のような姿で歩く丹沢が呟いた。

「たぶん伊丹が発狂してるんじゃないかな」

前木の言うとおおり、遠くで見ていた伊丹はその頃血を吐いていた。

【AM11:25】

ゆつくりと公園を見て回った二人は、最初に集合したベンチへと戻ってきた。

「ふう、お腹も減ってきたね。そろそろどこかでご飯でも食べるかい？」

「ああ…そうだね。ウチは何でもいいけど」

亞桐がそう言っつた直後だった。

「オイ、ガキども」

「!？」

二人の耳に差し込まれた第三者の声。

二人の目の前に立っつていたのは、金髪で見上げるほど背の高い筋肉質な男だった。

「よし、変装はばっちりだぞ」

草むらに隠れてる前木が呟いた。

「まさかあのリュウ殿がこのような役回りを引き受けてくださるとは……」

眼鏡に指をかけながら目前の光景に感じ入る丹沢。

「なにこんなところでイチヤっついてんだよ、なあ？ フツーに腹立つん

「だけど」

ヤンキーに扮したりユウが、普段とは全然異なる声で二人を威圧する。

「…なんだ、君は」

そんなリユウに対し、夢郷は冷たい視線を向ける。

「夢郷、やめろって…！ 相手にしたらヤバイよ…もう行こうよ！」

亞桐が夢郷の袖を引っ張るが、夢郷は頑としてその場を動こうとしない。

「は？ 生意気だな、フツーに殺すぞ」

そう言うが早いかリユウはベンチの端を蹴った。

「っ!!!」

亞桐は思わず身をすくませる。

「公共のものを乱暴に扱うな。そしてこの子を怯えさせるな」

夢郷は力強く言い放つ。

「はっはっは!! 彼女がそんなに大事なのか!? 気持ち悪っ!!」

リユウは高らかに笑う。

圧巻の演技力である。

「僕を侮辱するのは構わないがね——僕の女を傷つけるのは許せない」

「へっ?!?」

夢郷から発せられた言葉で驚いたのは亞桐だった。

「おおー!! 決まりましたな!!」

「良い調子だぞ…あとはリユウを倒すだけだ」

前木と丹沢の声援が夢郷に降りかかる。

あとはリユウが突き出した腕を夢郷がひねって撃退し、亞桐を守るという筋書きだったのだが……。

「ちよつと待ったー!!!」

「!!!」

全く予期せぬ声はその場に響く。

「そのあなた！ 他人に乱暴を働くとは捨て置けません！ 正義の鉄槌を下しますなり!!」

声の主は、仮面を被って独特のスーツを着た小さな女の子だった。「愛は希望の力!! ホープ仮面参上なり!!」

三人組のヒーローは、そう名乗ってビシッとポーズを決める。夢郷達には見慣れた三人組であった。

「げげっ!? なんであいつらが!?!」

前木は思わず草むらの中で立ち上がりそうになってしまった。

『おいまえなつ、ヤバいぞー! どうする!?!』

同時に土門からも着信が入る。

「どうするったって…」

オロオロする前木。

「ちよつと、リヤンちゃん達!? 危ないからやめて!!」

思わず亞桐はそう叫ぶ。

その声に、硬直していたリュウが動き出す。

「なんだ、ガキ共お!? ふざけた格好しやがって、ぶっ殺されてえのか!?!」

「ほら…だからやめとこうって言ったのに……。こんなところでやるの恥ずかしいよお……」

後ろに立つ仮面の少年が両手で顔を覆いながら言った。

「ダメなりよ、ゆっk……ホープ仮面二号!! どんな場所であろうと、困った人を見捨てないのが私達ホープ仮面なり!!」

背の低い少女である一号は二号に叱咤激励する。

「今日は四号がお休みだから一号達が頑張らないと! ほら立って!」

「うう……嫌だなあ……」

「クソツ、マズいことになったなあ……。頼む、リュウと夢郷……上手くやってくれ……」

もはや神頼みをするしか道が無くなった前木。

「津川殿からたくさん通知きてたと思つたら……これの誘いだつたのでござるか……」

自らのスマホを確認して冷や汗を流す丹沢（ホープ仮面4号）。

「おい、あれ…ホープ仮面じゃねえか？ 1000万再生の」

「マジだ！ あれほんとにやってたんだ！」

「やば、撮っていいかな？」

派手な彼らの姿や声を聞きつけた群衆がいつしか彼らの周りに集まりつつあった。

状況はどんどん前木達にとって不利になっていく。

「むわははははっ!! 吾輩の先祖直伝の殺法を受けてみるがよい！」

二号と一号がなんやかんやしてるうちに、背後から三号が飛び出す。

「とりやー！ー！ー!!!」

勢いよく振り上げた腕は、真つすぐリュウの背中に打ち当てられた。

ぽこっ。

「……………」

沈黙。

「…………ぐわああああ!!!」

しかし数秒後、空気を読んだりリュウが呻き声を上げて倒れる。

「おおおおお!!!」

周りの聴衆から拍手喝采が飛び交う。

「さあ！ 今のうちに大切な人を連れて逃げるなり!!」

一号がそう言うのと、夢郷は迷わず亞桐の手を引いて駆け出す。

「あつ…ありがとうねー!!」

亞桐はホープ仮面たちに礼を言いながら夢郷に引かれてその場を去る。

夢郷達が去った後。

「…というわけで二号、あとは頼んだぞよ！」

「ええ!？」

「ごめんなり！ 一号はとてもアイスクリームが食べたくなくなってきたからもう帰るなり！」

二号が何か反論を言う間もなく、二人は脱兎のごとく逃げていった。

「やつちまえ、二号ー!!」

「ストレートパンチだああ!!」

「ええええええええ!!?!」

ただ一人観衆の中に取り残された二号は、夕方までリュウとの戦いを演じる羽目になった。

「…………ふう、ここまでくればもう安心か」

離れたところで息をつく亞桐と夢郷。

「リヤンちゃん達がちよつと心配だけど、とりあえずはよかつ…」

その時亞桐は、いつの間にか自分が夢郷の腕の中にいることに気付く。

「……………っ?!?!?!」

もう顔を真っ赤にするのも何度目だろうか。

『ハプニングはあったが、何とか切り抜けたな。夢郷、予定通り次のステップに進んでくれ』

土門からインカムで指示を受け取った夢郷は次の行動へ向けて動き出した。

『このドッキリを、有終の美で飾ろう』

【PM 4:30】

その後二人は近くのレストランで昼食を済ませた後、恋愛映画を鑑賞。

間もなく日が沈み始めようとしていた。

「なーんか…………いろいろあった割にはあつという間の一日だったね……………」

亞桐はため息とともに言った。

そこには、この一日が過ぎることを惜しむ感情が込められていた。

「ああ……楽しかったね」

夢郷は儂げな表情で呟く。

その時――

「んっ!! ぐっふっ!! ぐっふっ!!」

夢郷は突如膝をついて咳き込む。

「えっ!? ちよ、どうしたの!?!」

亞桐は慌ててしやがみ込む。

「げほっ!! ぐっほっ!! がはっ!!」

咳をする夢郷の口からは、血が溢れ出していた。

もちろんこれは先ほど映画館のトイレでこっさり含ませた血糊である。

「わっ!! うそ!?!? 誰か!!」

亞桐は慌てて誰かを呼ぼうとするが、夢郷はこれを見越して人通りの少ない道を選んでいる。

その時、亞桐のスマホが激しく振動する。

着信主は釜利谷だった。

「あ、釜利谷!? ちようどよかった、今夢郷が…」

『夢郷は何してんだ?!?! あいつ勝手に病院を抜け出しやがったんだ!!』

「…え!?!」

亞桐は驚いて夢郷の顔を見る。

『あくクソ!! こんな時だからハッキリ言うぞ! 夢郷の病気は末期の呼吸器疾患だ!! 本当は今日手術をする予定だったんだ!! なんと抜けたんだ、あの野郎!!』

「ウソ……ウソだ……」

亞桐の瞳から光が消えてゆく。

「あ、ぎり、くん……誰と……話しているんだ……」

はあ、はあ、と息を荒げながら夢郷が尋ねる。

「アンタ……アンタなんで……よりもよって今日……。手術受けな

きやダメじゃんか!!」

亞桐は大いに取り乱しながら叫ぶ。

「ああ……バレてしまったか……。ふふふ、嘘はつくものじゃないね……」

夢郷は自嘲気味に笑う。

「ウソって……この前のやつはウソだったの!？」

亞桐は夢郷の両肩を掴む。

「数か月で治るって言ってたよね!? 命に別状はないって言ってたよね?!?」

「……………」

「何とか言えよ!!! なんで黙ってたんだよ!!!」

亞桐の瞳から涙が溢れる。

『亞桐……よく聞け。もともと手術をしても治る見込みは極めて薄い病気だったんだ……。だから夢郷は最後にお前と一緒に過ごしたかったんだと思う』

「……………!!! ふざけんなよ!!! なんでそんなこと!!!」

「君が大切だからさ」

「!!!」

亞桐は言葉を失った。



希望ヶ峰学園内、談話室。

そこには、今日のドツキリに参戦した全員が御堂のパソコンを通じて二人の恋の行方を見守っていた。

「……………つかあ~~~~!!! 緊張したあ~~~~!!!」

電話を切った釜利谷はドツと床にへたり込んだ。

「ナイス演技だったぞ、三ちゃん!」

前木は拍手で釜利谷を称えた。

「つたく、俺にこんな役目させんなよ!! 顔とか声に出るんだからよ、俺は!!」

釜利谷は気恥ずかし気に頭をボリボリと掻く。

「いやあ、まさかりユウ君があんな変装してるなんて思わなかったよ!! どうりで弱いと思つたら……」

へとへとになった葛西がソファーに寝っ転がりながら言った。

「いや、俺もだいたい驚いたぞ……。我ながら良いアドリブをしたと思う」
「山村とかが来てたら終わってたよな、実際」

土門の言葉に二人は頷く。

「みんながこんなドツキリをやってたのも全然知らなかったよ。教えてくれればよかったのに」

「悪い、葛西……。ドツキリが終わつたらみんなに言うつもりだったんだ」

「お前ら黙れ!!」

彼らの雑談は、ノートパソコンを見つめる御堂の怒声によつてかき消された。

「これからが一番いいところだというのにノイズじみた下らん談笑などしおつて!!! 静かにしろ!!!」

「ハイ……」

そんな御堂の隣では、あまりの亞桐の尊さに失神した伊丹が倒れていた。

「あれ、つーかもうそろそろ行かなきゃヤバくね? みんな、準備しろ!」

前木が号令をかけると、みんなは慌てて準備に取り掛かる。



「た、た、大切って、大切って」

とめどなく流れる涙を拭うことも忘れ、亞桐は夢郷の言葉に耳を傾ける。

「どうせ……先の短い命だ……。下手に延命するよりも……最後の時を君と過ごしたかった……」

「馬鹿だよ!!! 馬鹿すぎるよつ!!! 死んだら……死んだらなんにもならないじゃんかよ!!!」

亞桐は絶叫する。

「そんなことはない…。僕が死んでも、君の心に僕は残り続けるだろう…。」

夢郷は震える両手で亞桐の頬に触れた。

「うう…うう…。」

亞桐は子供ののように泣きじゃくる。

「すまない…亞桐君。僕はもう…ここまでのようだ…。」

「嫌だっ!!!」

亞桐はその言葉とともに夢郷を抱きしめる。

「嫌だ嫌だっ!!! 嫌だよっ!!!」

絶対に離れないように、力強く、抱きしめる。

「亞桐君…最後に僕に…愛を囁いてくれるかい？」

息も絶え絶えに夢郷は呟く。

「うわああああん!!! 嫌だよおおお!!!」

亞桐は夢郷の胸の中へ顔をうずめ、涙に暮れる。

「じ、時間が…ない…。」

夢郷は亞桐の頬をゆつくりと撫でる。

「…………君に出会えてよかった…………さようなら、莉緒」

そう言っつて夢郷は静かに目を閉じる。

「うううっ、うううっ…………ゆ、夢郷…………ウチは…………」

亞桐は息を整え、そして語る。

「たぶん…ずっと…………アンタのことが好きだった…」

「ウチも好きだよ…。さようなら…………」

「と、ふうわけでー!」

はなかったのですが！」

何も知らない山村が心配そうに呟く。

一方前木達は、完全なるお通夜ムードに苛まれていた。

「まさか亞桐がシヨックのあまり熱出すなんてさー……そんなことになるなんて思わなかったよ……」

前木が頭を抱える。

「拙者たちが声をかけても個室から出てきてくれませぬし……完全にやり過ぎてしまいましたなあ……」

と丹沢が続く。

「…何はともあれ、誠心誠意謝罪を続けるほかはあるまい……」

リユウの言葉に全員が頷く。

「別にもういいよ……」

「!!」

その声の主は、他ならぬ亞桐だった。

教室に現れた亞桐は、未だに体調がすぐれなさそうな様子ではあったが、心なしか傷ついているようには見えなかった。

「亞桐……あの、ほんとにごめん!!」

「謝んなくていいよ……なんだかんだウチも楽しかったし……。ふっ、恋って楽しいんだね!」

亞桐はいつものような天真爛漫な笑顔を浮かべる。

「今度ドッキリやるときはウチが仕掛け人だからね! 300倍仕返ししてやる!」

その言葉を聞いて、一同にも笑顔が戻り始める。

「あと、夢郷!」

亞桐の声が、教室の一番奥に座っていた夢郷を射抜く。

「一昨日言ったこと……。一旦ノーカンにさせて。結局、アンタへの感情はまだ定まってるから……。でも、一っだけ約束してほしい……」

「ああ……なんだい?」

「もう絶対に、ウチを置いて死んだりしないって、約束できる?」

「…なんだ、そんなことか」

夢郷は微かに笑う。

「ああ、約束しよう。絶対に、君より先に死んだりしない」と
夢郷は力強く答えた。



そして彼らの日常は続く。
甘く、切なく、ほんの少しほろ苦い日常が。

「恋って……いいなあ……」
ため息とともに御堂が呟いた。